

転生したはいいが、同僚の腹パンが痛すぎる！

Mr. You78

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

何の変哲もないウルトラシリーズオタクが、大好きなウルトラセブンの登場人物に、いつの間にか憑依転生してしまった!?

幸い、その人物は本編中で死亡する事は無かったが……

「ソガ隊員、すまん!」腹Pan! 「ウッ!」

「アゝアゝアゝアゝアゝアゝゝ→!!」「この声は!」「ソガ隊員ー!!」

作品のヒロインよりも、酷い目に遭う頻度が遙かに高い事で有名な隊員だった!?  
頑張れソガ隊員!

原作知識を駆使して、侵略者達の出落ちを狙え!

セブンの過労死を防げるか否かは、お前の行動にかかっているぞ!

それはそれとして、人の身で出来る事は案外少ないぞ!

遙か宇宙の彼方から、人々の平和を守る為にやってきた正義のヒーロー。

……では、無私なる英雄の背中は一体誰が守るのか?

これはそんなお話。

髑髏の火炎竜 (ピクシブ名『D×3』) 様から素晴らしい挿絵をいただきました!!  
是非とも作品ページからご覧になってください! 見て!

以下、D×3様のピクシブリンクです

<https://www.pixiv.net/users/6666285>

# 目次

ミラクルマンの名を借りて | 2  
僕は知ってるあのことを、秘密だぜ

8

大義なき転生者 (I) | 18

大義なき転生者 (II) | 24

大義なき転生者 (III) | 30

湖の恐怖 | 36

赤のひみつ | 48

マックス号生還せよ! (I) | 58

マックス号生還せよ! (II) | 66

マックス号生還せよ! (III) | 75

マックス号生還せよ! (IV) | 85

マックス号生還せよ! (V) | 92

消された出番 | 104

ビター・ゾーン (I) | 115

ビター・ゾーン (II) | 124

ビター・ゾーン (III) | 134

ビター・ゾーン (IV) | 140

宇宙観測員340、隣人を怪しむ

149

狙えない街 (I) | 160

狙えない街 (II) | 164

狙えない街 (III) | 171

アンドロイド破壊指令 (I) | 181

アンドロイド破壊指令 (II) | 188

アンドロイド破壊指令 (Ⅲ)	193
アンドロイド破壊指令 (Ⅳ)	202
アンドロイド破壊指令 (Ⅴ)	209
アンドロイド破壊指令 (Ⅵ)	218
アンドロイド破壊指令 (Ⅶ)	227
魔の山を飛ばせ (Ⅰ)	234
魔の山を飛ばせ (Ⅱ)	245
友人から愛をこめて	260
むこうから来た男 (Ⅰ)	269
むこうから来た男 (Ⅱ)	279
むこうから来た男 (Ⅲ)	288
ウルトラ警備隊に死ね《前編》(Ⅰ)	

ウルトラ警備隊に死ね《前編》(Ⅱ)	309
ウルトラ警備隊に死ね《前編》(Ⅲ)	320
ウルトラ警備隊に死ね《前編》(Ⅳ)	329
ウルトラ警備隊に死ね《前編》(Ⅴ)	336
ウルトラ警備隊に死ね《前編》(Ⅵ)	346
ウルトラ警備隊に死ね《前編》(Ⅶ)	358
ウルトラ警備隊に死ね《後編》(Ⅰ)	

- 420 ウルトラ警備隊に死ぬ《後編》(VII)
- 407 ウルトラ警備隊に死ぬ《後編》(VI)
- 400 ウルトラ警備隊に死ぬ《後編》(V)
- 394 ウルトラ警備隊に死ぬ《後編》(IV)
- 386 ウルトラ警備隊に死ぬ《後編》(III)
- 377 ウルトラ警備隊に死ぬ《後編》(II)
- 368 ウルトラ警備隊に死ぬ《後編》(I)

- 498 マッハセブン！セブン！セブン！(II)
- 487 マッハセブン！セブン！セブン！(I)
- 473 無闇に光る目
- 464 ウルトラ警備隊に死ぬ《後編》(XI)
- 451 ウルトラ警備隊に死ぬ《後編》(X)
- 439 ウルトラ警備隊に死ぬ《後編》(IX)
- 430 ウルトラ警備隊に死ぬ《後編》(VIII)

Xしないと脱出できない空間 (I)

517

Xしないと脱出できない空間 (II)

528

プロジェクトXを倒せ (I)

542

プロジェクトXを倒せ (II)

554

プロジェクトXを倒せ (III)

561

海底基地を砕け (I)

575

海底基地を砕け (II)

587

海底基地を砕け (III)

599

海底基地を砕け (IV)

609

うたかたの夢、追い求め…

621

昨日搜したミライ (I)

629

昨日搜したミライ (II)

641

昨日搜したミライ (III)

651

零下40度の対決 (I)

663

零下40度の対決 (II)

673

零下40度の対決 (III)

686

零下40度の対決 (IV)

693

零下40度の対決 (V)

703

零下40度の対決 (VI)

714

零下40度の対決 (VII)

724

牧場へ還れ!

735

超兵器R 2号 (I)

750

超兵器R 2号 (II)

761

超兵器R 2号 (III)

771

7000000000キロを吹っ飛ばせ！	(II)	869
7000000000キロを吹っ飛ばせ！	(I)	859
7000000000キロを吹っ飛ばせ！	再防御作戦 (IV)	845
	再防御作戦 (III)	838
	再防御作戦 (II)	829
	再防御作戦 (I)	816
	超兵器R2号 (VII)	803
	超兵器R2号 (VI)	795
	超兵器R2号 (V)	787
	超兵器R2号 (IV)	778

栄光はダンの為に (I)	(III)	881
	ひとりぼっちの異邦人 (I)	901
	ひとりぼっちの異邦人 (II)	911
	ひとりぼっちの異邦人 (III)	925
	ひとりぼっちの異邦人 (IV)	936
	ひとりぼっちの異邦人 (V)	948
	ひとりぼっちの異邦人 (VI)	959
	ひとりぼっちの異邦人 (VII)	972
	ひとりぼっちの異邦人 (VIII)	986
	悪魔の住む鼻	995
	Far among the Gars	1012
	xy	1035



確殺の0. 4秒 (IV)	確殺の0. 4秒 (III)	確殺の0. 4秒 (II)	確殺の0. 4秒 (I)	月世界の饑別	蒸発闘志	侵略するシ者たち (II)	侵略するシ者たち (I)	惑星散歩 (II)	惑星散歩 (I)	必殺の0. 1行	栄光はダンの為に (III)	栄光はダンの為に (II)

1211120111961185116711501142111911011086108410671050

大義ある戦い (II)	大義ある戦い (I)	きいーうえい	まーちとうじえんどおぶびーぐみる	他人の星 (VI)	他人の星 (V)	他人の星 (IV)	他人の星 (III)	他人の星 (II)	他人の星 (I)	盗まれなかったウルトラアイ	確殺の0. 4秒 (VI)	確殺の0. 4秒 (V)

135213421328 131013011284126912641257124412281219

セブン抹殺計画	第三段階	
セブン抹殺計画	第二段階	
セブン抹殺計画	第一段階	
セブンは……		
セブンは……		
セブンは……		
大義ある戦い (IX)		
大義ある戦い (VIII)		
大義ある戦い (VII)		
大義ある戦い (VI)		
大義ある戦い (V)		
大義ある戦い (IV)		
大義ある戦い (III)		

1587157215521526150914881455143514151402139013781366

地球圧殺計画	40%	
地球圧殺計画	50%	
地球圧殺計画	60%	
地球圧殺計画	70%	
地球圧殺計画	any%	
水上での挑戦		
セブン抹殺計画	第四段階	
セブン抹殺計画	第五段階	
セブン抹殺計画	第六段階	
セブン抹殺計画	第七段階	
地球圧殺計画	10%	
地球圧殺計画	20%	
地球圧殺計画	30%	

1854182517991777175617331713170016881672164316251606

ノンマルトの渚 (I)	
ノンマルトの渚 (II)	
ノンマルトの渚 (III)	
ノンマルトの渚 (IV)	
ノンマルトの渚 (V)	
ノンマルトの使者 (I)	
ノンマルトの使者 (II)	
ノンマルトの使者 (III)	
ノンマルトの使者 (IV)	
ノンマルトの使者 (V)	
第四壁面の空夢 (I)	
第四壁面の空夢 (II)	
第四壁面の空夢 (III)	

2098207120252007199719821969195219311923190718941879

脅威の超エンジン (I)	
脅威の超エンジン (II)	
脅威の超エンジン (III)	
脅威の超エンジン (IV)	
脅威の超エンジン (V)	
円盤 "は" 来た	
誰にも言つてはいけないよ	
戦い終わって見上げる空の	
セブン対セブンの激闘 (I)	
セブン対セブンの激闘 (II)	
セブン対セブンの激闘 (III)	
セブン対セブンの激闘 (IV)	
セブン対セブンの激闘 (V)	

2374235923462333231722752244220821912175216121432129

史上最大の終章	史上最大の暗雲	史上最大の誤算	史上最大の侵犯	史上最大の忠告	史上最大の疲弊	史上最大の序章	お前はだあれ？ (II)	お前はだあれ？ (I)	セブン対セブンの激闘 (IX)	セブン対セブンの激闘 (VIII)	セブン対セブンの激闘 (VII)	セブン対セブンの激闘 (VI)

2637261425982579255925442532249724782450242824112394

史上最大の宣戦  
史上最大の葛藤

|  
|

27092675





まるで錨を巻き上げるようにゆっくりと、覚醒していく。

「おい、しつかりしろソガ！ おい！」

「う、うう……」

「良かった！ 生きてるぞ！」

「こいつ！ 心配させやがって！ ……こちらアマギ、ハイドラランジャー2号のサルベージに成功しました」

俺の周りで、やけに嬉しそうな声がある。

騒がしいな、頭が痛いんだから静かにしていてくれないか。

「おい、大丈夫か？ 俺が分かるか？ ん？」

まだ焦点の定まらぬ視界の中に、こちらを覗き込む男の顔が迫ってくる。

意思の強そうなたい眉をこれでもかと下げ、普段からはとても想像できない程に心配げな声を上げる、このエラの張った強面を……

俺はよく知っている。見間違えるはずもない。

「アラシ隊員……?」

「……おまえ、俺の兄貴といつ知り合つたんだ? ……まあいいや、冗談が言えるくらいなら、大したことねえさ」

強面が破顔すると同時に、その上からひよつこりと、鼻筋の通つた、やけに神経質そうなしかめ面が見下ろしてくる。

「おい、人様にさんざん心配かけておいて、それか。見損なつたぞ、ソガ隊員」

「ソガ……?」

「……これは駄目だ、酸素はギリギリ足りていたはずだが……」

「……なんで? なんでアマギ隊員がここに?」

長身の男がため息をつきながら、無言で俺の口へと、酸素吸入器を押し付けてくる。

「間に合つたとは思うんだが、少し記憶の混濁が見られる。アンヌ、すぐにメデイカルチェックができるように準備しておいてくれ」



「わかったわ」

酸素が体中の血管を駆け巡り、脳ミソがフル回転し始めるのを感じるが、それでも現状をサツパリ理解できないぞ。

俺の目の前で、ブルーグレーの制服に身を包んだアマギ隊員が腕時計型のビデオシーバーで、通信をしている。

相手は声からしてもアンヌ隊員だろう。それは分かる。

シートの向こうで計器を確認している巨漢は、フルハシ隊員だ。オレンジ色じゃないし間違いない。

さつきは顔しか見えなかったし、仕方ないだろ。酸素が足りなかったんだよ！

うん、それは分かる。でもね、わけわかんない。

なんでそれが分かるのか、つてのが理解できないんよ。

だって、なぜなら彼らはテレビの登場人物なのであつて俺は……

ソガ隊員 年齢25歳 隊歴3年 九州出身だ。

これが一番わけからん。

まあ、分からないことだらけだが、意識がハッキリしてくるにつれて、一番聞かなきゃならないことを思い出す。

「アマギ隊員、奴は……?」

「ああ、ラフマニーフはお気に召さなかったようだが、シューマンのピアノ協奏曲を流し始めたなら大人しく帰っていったよ。個体によって、好みの周波数があるのかもしれない」

……そうか、それを聞いて安心した。港の避難は間に合ったか。

「しかし、魚雷をレーザーで撃ち抜いて起爆なんて芸当が、よくぞ咄嗟にできたもんだ」  
「いくらハイドランジャーの耐圧殻でもあんな至近距離じゃ自殺行為ですよ。お陰で爆沈したかと思いました」

「そこはほら、アマギ大先生の設計を信じてるからこそ、さ」

「だったら、あの人騒がせな悲鳴を上げるのも我慢して貰いたいもんです」

「まあまあ、ソガ隊員命がけのネコだましが炸裂したお陰で、港は無事なんだから。あとは隊長に絞ってもらえ」

安心したからか、眠くなってきた……次日覚めたらメデイカルセンターかな……  
まるっきり状況が把握できないし、どうしてそうなったか納得すらできないけども、  
一つだけハッキリと理解できる。

オレ、ウルトラ警備隊のソガ隊員になっちまったみたいだ……

僕は知ってるあのことを、秘密だぜ

「ただいま！」

「おかえりなさい、ソガ隊員」

廊下をすれ違いざまに警備の兵士と軽く挨拶を交わす。

「パトロールご苦労様です」

「そちらも基地巡回、ご苦労さん」

ビシッと敬礼しながら俺を出迎える防衛隊員のみなさんは、ほぼ全員が尊敬の眼差しでこちらを見てくる。

そう、相手が誰であれ、朗らかな空気を崩さず、気さくでフレンドリーそれがソガ隊員だ。

パトロール等の割り振られた任務をこなし、合同訓練でも精鋭たるウルトラ警備隊に恥じぬ成績を維持し、こと射撃演習ではトップ。

あれから数週間だが、このソガ隊員のフリはなかなか上手くやれているらしい……今のところは。

それもこれも、全てはこのソガ隊員の肉体が持つ抜群のスペックによるもの。

この広い広い防衛軍極東基地を、端から端までジョギングしても息一つ上がらないとか、前世では決して味わえなかった経験だ。

射撃なんて目を瞑っても当たるんじゃないかと思うくらい楽勝だし、ホークなんかの操縦も頭に叩き込んである。

いやほんと、本人の記憶と能力を引き継げてるのが一番ありがたいね。

肉体だけソガ隊員でほっぽり出されても三日で死んじゃうからね。ホークでパトローとか高所恐怖症一般人のままだと即失神からの墜落コースだ。

そして今日のパトロールは終了、この後は待ちに待った非番。

……何するかって？ そんなの決まってる！

基地内部の自室にたどり着いたら、そのままソファへダイブ!!!!

そして腹の底から絞り出すように一言！

「ひらひら……」

とてもつらい

頭脳と肉体は人類の中でも最高峰に近いものをお渡しされている自覚はある、が……元一般人にいきなり軍隊生活とか、いやーキツイつす。

というか、朝が早すぎて辛い。こちとら三度の飯より寝るのが好きだったのに、5時起床で。

幸い、生活習慣も肉体準拠のようだから、そこまで眠いとかじゃないんだけどね、心がね、眠いんよ。

訓練とパトロールの繰り返しも、なかなかやばい、そろそろボロが出そうで戦々恐々としている。

だが、俺のせいでソガ隊員の勤務評価が下がるのは激しくマズイ。

これまでに分かった事だがどうやら、まだウルトラ警備隊のメンバーは俺〓ソガを含めて5人。

モロボシ・ダンのダの字も見当たらない。

つまり、ウルトラセブン本編開始前ということなんだが……本編開始前で既に心が折れそうなんだわ。

マン兄さんの前にお出しされた並みいる角持ち怪獣達の如くボツキボキなんだわ。そしてなにより……

そんなことを考えながら微睡んでいると、唐突に部屋のコールチャイムが鳴る。いったい誰だ？

「ソガ、私だ。まだ起きているか」

「ハッ！……少々お待ちください」

おっと！まさかのキリヤマ隊長自らいらのご訪問とは……バレたか？

なぜだ!? オレの擬態は完璧だったはず!? なぜバレた!?

慌ててドアロックを解除すると、キリヤマ隊長がにこやかに立っていた。

よかった、まだウルトラガンで撃ち抜かれたり査問会にかけられるわけではなさそう  
だ。

「すまん、パトロール明けに」

「いえ、滅相もない。しかし、どういったご用件で？」

「いやなに最近、射撃場でおまえを見かけないものだから、どうかしたのかと思ってな」

しまったああああああああああああああ

そういえばこの男、ソガ隊員暇さえあれば射撃場で自主練に励んでいた記憶があるが、オレは生憎とそういつたストイックさをこれっぽっちも持ち合わせておりませぬ。

この数週間、スケジュール通りの任務はきちんとなしていたが、それ以外の自由時間には部屋に籠りつきりだったわ。

げに恐ろしきは隊長の観察眼よ、よく見てるんすね上司の鑑かく？

やっぱり絶対この人、途中でダンの正体気付いてるわ。だって最終回でアンヌから衝撃の真実告げられても、「体調悪いなら言ってくれれば……」とかそつち気にしてるもん。

それならそれでダンの不調にも気付いてやってください。お願いします。

「いえ、そのスランプという奴でして……」

「……」

「……腕は鈍っていません、大丈夫です！」



「怖くなったか」

「……」

我々の間に沈黙が落ちる。

「この前の戦いでハイドラランジャーが擱座してから、お前の様子がおかしいとは思っていた」

「……」

「海底で酸素がなくなっていく孤独と焦燥は、分かるつもりだ。……俺も小惑星帯で似たようなことがあった。あの恐怖は経験した者にしかわからない」

「……」

「……そしてそれを恥ずかしいとも、俺は思わん」

「……ッ!？」

隊長はどうやら、海底での恐怖体験が俺の人格を変えてしまったと推測しているようだが、少し違う。

厳密には違うが、それほど間違っていない。

確かに怖い。それは紛れもなく俺の本心だ。

だって、本編が始まったら、侵略者や怪獣とドンパチやらなきやなんねえんだぜ……？

「俺も戦いが始まる度に恐ろしい。お前たち部下が死ぬかもしれない。状況によっては、部下を殺す命令をしなくてはならないかもしれない。そして、その恐怖も、俺は知っている」

「それは……」

「だが、だからこそ私のような者が、隊長をやる意味なのだ、そう信じている」

「意味……?」

「真に恐ろしいのは、この地球を守り切れなかったときだ。私なら、その恐怖を天秤にかけて、お前たちに命令できる」

隊長、そんな事を……

やはり、この人は尊敬できる隊長だ。

「除隊しろ、などとは言わん。お前なら、警備隊に選ばれた意味を、見つけてくれると信

じているぞ」

隊長はそういうと俺の腕を力強く叩き、去っていく。

こういう、本編外でも、部下の精神面に気を配ってたんですね、隊長。

しかし、俺がここに在意味……か……

それは俺も疑問なんだよな、明らかにソガ隊員本人よりもスペックダウンなんだし、原作知識でどうこうしようにも、俺がセブンなわけじゃないから

先回りして侵略を阻止しようなんてしても、絶対に死ぬ。

正直なところ、できる事が限られすぎてるんだよな……ま、限られてるからこそ、より訓練で磨きをかけておくのが大事なのかもしれんが……

隊長はその事を俺に気付かせてくれたのだと思う。

予定を変更して、射撃場へと向かう事になると、メディカルセンターから出てきたア  
ンヌとばったりと出くわす。

「あら、ソガ隊員。……そんなに難しい顔をしてどうしたの？」

「うん……」

「禁煙しすぎて、調子が出ないんじゃない？」

「え、禁煙？」

「違うの？ 前に私が肺に悪いわって言ったから、気にしてくれてるのかと思っただけど……」

……そうか、そういうえば、ソガ隊員は喫煙者だったが、オレは違う。

しまった、気付かないところで既にポロが出ている!!

「あ、ああ、持久走でフルハシ先輩に勝つにはここで差を付けるかと思っただけ」

「いいと思うわ。でも我慢のし過ぎはかえって体に毒よ？」

「気を付けるよ」

ふむ、こんなにかわいいアンヌに、こうして直に心配して貰えるというのは、役得だ。

それだけでも転生した価値があつたかもしれない。

ただ、今日も彼女の髪型はセミロングだ。

やっぱりアンヌはショートの時が一番似合うと思うから、早く別の髪型にしてくれないかな……

とそんなどうでもいい事を考えていたら、ソガ隊員としての俺の記憶が微かな違和感を捉えた。

そういうえば……彼女が入隊してからの約2年間、髪型が変わっているのを見たことが無い……!!

ずつとこの、本編初期のセミロングだったぞ……!?

アンヌといえは髪型がコロコロ変わることでは有名なヒロインだったはずなのに……

……まさか!! この女!?

ダンの気を引くために髪型を変えだしたのか!?

そうだとすれば辻褄が合うが、なんていじらしいんだアンヌ……

結局、その気持ちに報われる事はなかったけれども、と寂しさを覚えた所で、オレに電流走る!!

そうか、俺がアンヌとダンをくつつけてやればいいんじゃないか……?

というかもしかして、セブンが帰らなくてもいいようにできるんじゃないか!?

見つけた、見つけたよ隊長!! 俺がこのウルトラ警備隊にいる意味って奴をさ!!

## 大義なき転生者（Ⅰ）

原作知識を活かしてどう足掻いても、侵略者達の猛攻は止まらないし、セブンの力無くしてこの地球を守り切れるとは思えない。

だが、より良い結果になるよう誘導することくらいは出来るかもしれない！

度重なる戦闘のダメージが蓄積して、最終回ではボロボロの満身創痍で戦う事になるセブン。

結局そのせいで、最後は別れの挨拶も無しで帰っていくことになる。

確かにキングジョーやガンダー、ガッツ星人等、パツと思いつくだけでも苦しい戦いが度々あったし、そしてそのどれもが、セブンやウルトラ警備隊が死力を尽くさねばならない相手ばかりだった。

だが、そういった戦いでの負担を、原作よりたつたほんの僅かでも軽減することができたなら……

セブンの体力を温存させた状態で最終回に突入すれば、パンドンなんぞ一瞬で叩き伏せて、大団円を迎えられるかもしれない。

セブン最後の敵として、ゼットンなんかと同じく強敵ポジションに据えられるパンドンだが、その強さには疑問符がつく。

確かにゴース星人の侵略計画が史上最大規模なのは疑いようがないし、彼らの使用するメカはどれもすべからく高性能だ。だが、こと番犬として連れてきたパンドンの強さはというと……セブンが本調子だったら、あんなに苦戦しなかつたのでは？ というのはフアンの間でもよく取沙汰される。

もし普段のセブンであれば初戦の時点で、アイスラッガーで切り刻んだ後はエメリウム光線なりで追撃していたような場面だ。トドメを刺すエネルギーが無かつたからこそ、改造パンドンとの第二ラウンドが残ってしまったうんじやなからうか。

ということは、ワイドショット一発分、いやせめて不発した分も含めてエメリウム光線二回分のエネルギーさえ捻出できれば、最終回の後半15分が浮くわけで。

最悪、セブンが帰らなければならぬ運命を変える事が出来なかつたとしても、あんなフラフラで生死も分からない帰宅のさせ方だけは回避したい！

自分の推しが、あんなトンカツだが、紅シウウガ天だか分らんような奴にドタマかち割られて、苦悶の声を上げながらのたうち回るところなんて見とうない！！

推しの健康と勝利のためなら、早起きの一つや二つ何するものぞ！

「……俺がやってみせる」

「どうした、えらく気合がはいってるじゃないか」

「ああ、ちよつとした決意表明さ」

……さもありません。

なぜなら、最近頻発している謎の失踪事件について、ウルトラ警備隊が調査に乗り出そうとした矢先、基地のすぐ近くでパトロール中の防衛隊員が襲われたとのこと。

そんなでもってつい先ほど、隊長からポインターで現場に急行するよう命令が下ったわけだ。

……つまり。

「……ん？　なんだ？」

現場の山道に差し掛かったポインターの前へ、黄色いジャンパーを羽織った青年が待ち構えていたかのように立ちふさがる。

——来た。

胸の奥で自分の心臓が、ドクンと一際大きく跳ねたのが分かる。



それはなにも、フルハシ隊員が急ブレーキを踏んだから……なんてことはないはずだ。

こうなることが、俺には分かっていたのだから。

自分は今、どんな顔をしているんだろう……

「コラッ！ 退いた退いた！ ヒッチハイクの相手をしている暇なんかないんだ……早く退かんかッ！ こいつう！」

「ミチヲアケロー！」

緊張しすぎて、すんげえ棒台詞になっちまった。

俺達の警告を無視して、微動だにしない青年。

仕方なく、ポインターのボンネットに搭載されている暴徒鎮圧用の催涙ガスをお見舞いする。

ガスが晴れると青年の姿はなく、尻尾巻いて逃げたと思った俺達（少なくともフルハシ隊員は本気でそう思って笑っていた。どういう神経してるんだ）はポインターを発進させようとする。

しかし、タイヤは地面を空回りするばかりで一向に進まない。

不審に思い下車すれば、いつの間に登ったのか、先ほどの青年がポインターのてっぺんに胡坐をかいて、笑っているではないか！

このヒーロー、さっきの意趣返しのつもりか？ ウルトラ念力の無駄使いも甚だしいな、オイ。

「おいキミ、我々の邪魔をすると、承知しないぞ！」

「邪魔だなんてとんでもない。その逆ですよ、ソガ隊員」

「え!?! どうして僕の名前を!?!」

あつヤベツ、めちやくちや嬉しそうな声出ちやった。もつと不信感強めでいかないとな……

でも許して欲しい。

子供のころ、親父の持ってたレーザーディスクで繰り返し繰り返し、目に焼き付くくらい何度も見た俺のヒーローが目の前に立っているのだ。

しかも（オレの本当の名前ではないとはいえ）自分の名前を呼んでもらえるなんて！

これで声に喜色を混ぜるという方が無理であろう。

俺が無様なニヤケ面を晒している間も、怪しげな青年は、この先に進むのをやめるよう訴えてくるのだが、俺以外は誰も信じない。

後からやってきた警官も、青年の警告をまるで相手にせず、パトカーを進めてしまう。

まあ、オレはこのパトカーが攻撃をくらって消失することも知っているし、肩書も名誉あるウルトラ警備隊員であるので、俺が制止すれば止まるだろうが……

消えるといっても別に死ぬわけじゃなくて、円盤の中に捕まってるだけであり、最後には無事に救出される事も知っている。

そこで、このパトカーが目の前で消失しないと、俺達が怪しい青年を信用する理由も代わりに消失してしまうので……

すまんが地球の平和と今後の展開の為に死んでくれ!!

「危ない！ 行っちゃイカン！」

ピー ピー シュワワア……

「……あれほど言ったのに……」

……ああ合掌（死んでない）

お巡りさんの尊い犠牲は無駄にしない。

俺がきつと、この見ての通りの怪しい風来坊を、五体満足でハッピーエンドに持つていくからな！

## 大義なき転生者（Ⅱ）

とはいえ、第一話で俺がする事は特に無いんですけどもね。

だって、敵の正体も目的も、対抗策まで目の前の男が教えてくれる上に、そのまま倒して人質まで救出してくれると至れり尽くせり。

今回、俺が頑張るポイントとは、とある場面で気絶しない事くらいだ。

しかも、ほぼ完全にオレ自身の趣味の為に、である。

この間にも青年は、異星人が侵略準備の為に数年前から秘かに人類の標本を集めていた事、我々ウルトラ警備隊に嗅ぎ付けられる前に先んじて行動を開始した事なんかをペラペラと親切に教えてくれる。

何でお前がそんな事を知ってるんだって情報のオンパレード。

「君はいつたい何者だ？」

当然の疑問であるが、それに対しこの男。

「ご覧の通りの風来坊ですよ」

いいかいセブン、君はまだ地球の言葉をよく知らないのかもしれないが、風来坊ってのは見て分かる類のものじゃないし、職業とかでもないんだぞ……ああ、コイツはまだ

ウルトラセブンでもなかったか。

仕方ねえな。

「名前は？」

「名前……？」

そうだ、この星で人間の姿をとるからには名前が必要なんだぞ。

恒点観測員340号さんよ。

「……そう、モロボシ・ダンとでもしておきましょう」

とでもしておきましょう!?

そんな偽名ですって言ってるようなもんだぞ!?

ここにるのが、警備隊でも屈指に能気なフルハシ、ソガコンビで助かったな？

代わりにアマギ隊員でもいたら、一発アウトな発言だぞ。

本当に正体を隠す気があるのか、こいつ!?

「危ない！」

ダンの警告で間一髪謎の攻撃から身を隠す俺達。

ナイスだぞ！ クール星人！

おかげでダンへの追及が有耶無耶になった！

クールな援護射撃だぜ！

しかし、どこから攻撃されるか分からなければ、ポインターへの逃走ルートが決めきれない。

透明な円盤つてのはなかなか厄介だ。

む！ 空が一瞬光った！

「あれだー！」

ふたりに方向を教えようと身を乗り出した瞬間、背後の岩がレーザーの着弾で爆発！  
衝撃によつて空中で一回転、そのまま右足を岩肌が強打！

痛つてえええっ!?

そうだった、ここで両隊員が負傷して、代わりにダンがポインターを運転して帰還するんだった。

高揚しすぎて忘れてた！

てか、これ以降もソガ隊員の負傷シーンいっぱいあるんだけど、毎回こんな痛いの!?!  
いつもそこまで痛がらないし、戦闘も続行したりするしで、ここまでとは思って無かった！ ただ単に精神力で我慢してただけかよ！ 警備隊員の鑑か？

勘弁してくれ！

俺を支えながらポインターへ走るダン。

うう、お前は本当にいい奴だな……オレ、ガンバルヨ。

そしてポインターに搭載されたバリアやレーザーを駆使して姿の見えない円盤からの妨害をかくぐり、なんとか基地へ帰還した。

その後は、基地のモニターをジャックしたクール星人の降伏勧告に対して、長官達が突っぱねるのを眺める

「地球人ナンテ、我々カラ見レバ、昆虫ノヨウナモノダ」

どう見ても昆虫のようなのはお前らの方なんだよなあ……

ノミだかクモだか分からん体しやがって。

交渉が決裂した途端、攻撃を開始するクール星人。

見えない円盤に民間人が人質となっている為、迂闊に動けない防衛軍。

「そうだわ……ダン、貴方の地球がピンチに立たされているのよ。何か敵を倒す方法は無いの？」

ここでアンヌがダンに水を向ける。

ダンの正体はM78星雲からやってきた異星人だ。

だからこの台詞はまるっきりの的外れ。

……だが、知らなかった事とは言え、この時アンヌがダンを当事者として、そして同じく地球を愛する同志として、協力を求めたからこそ、ただの恒点観測員に過ぎない彼が、地球の為に戦う決意をしてくれたのかも知れない。

「ひとつだけある!」

「本当か?」

「敵の宇宙船を見えるようにすることだ。あの宇宙船は保護色を使つて姿を隠しているんだ。特殊噴霧装置を利用して、こちらで色を吹き付けてやれば、相手の正体がわかるはずだ」

ダンの提案で、敵の円盤に特殊噴霧装置で色を付ける為、6人全員でウルトラホーク1号に搭乗し出撃する。

俺は足の負傷が響いているので、噴霧装置の発射だけ担当する事になった。アルファ号の操縦はアンヌと隊長がサポートしてくれるから楽だ。

だが、同じく負傷した筈のフルハシ隊員はガンマ号を一人で担当する。到底、同じ人類的タフネスとは思えない。……化け物じゃないのかあの人?

特殊塗料で真っ赤に塗られた円盤に、ホーク1号が空中で三機に分離し、連続攻撃を仕掛ける。





## 大義なき転生者（Ⅲ）

激しい閃光と爆発音で目が覚める。

まだ視界がぼんやりしているが、キャノピーからは墜落したホークを守るように両手を広げて敵へと立ちはだかり、咆哮をあげる銀色の巨大な背中が見えた。

……良かった間に合ったようだ。

旅客機の発進前アナウンスなんかで教わる、耐シヨック姿勢を取っていたのが効いたのか、一瞬意識が飛んだだけで済んだらしい。

やはり撃墜されるのが分かっているかいないかは、大違いだ。

お陰で貴重な推しの戦闘シーンを特等席で見物できる。

墜落したホークにとどめを刺すため、母艦から発進した戦闘ドローンを銀色の右手で叩き落とし、窮地を救ってくれたこのメカニカルなニワトリはウインダム。

オレの大好きな怪獣だ。

こいつの活躍を見たいがために、気絶を回避したのだ！

いけー！ やれー！ ウインダム！

ドローンからの攻撃を顔に食らい、怯むウインダムだったが、もう一度攻撃をしよう

と旋回したドローンに、額からのレーザーショットを浴びせかける！

動きが鈍り、フラフラと低空飛行をするドローンを腕を振り回しながら追いかける姿はとつてもコミカルだ。

そのまま飛びついてもう一機撃墜！

いぞウインダム！

しかし、敵も立て続けに撃墜されて、流石に脅威と見たのか、ドローン達は三機で合体しウインダムの頭部に出力を上げた攻撃を叩き込む。

たまらず痺撃し、うめき声を上げながら膝をつくウインダム。

そのまま発光し、細かい粒子となって消えていく。

形勢不利と見てダンが回収したんだろう。

……ああ、足が自由に動けば援護の一つもできたかもしれないのに……すまん、許せウインダム。

だが、先程の攻撃でエネルギーが尽きたのか、ドローン達もこちらに追撃を仕掛けてはこない。

そうしてできた僅かな隙について、視界の端を赤い何かが飛んでいくのを確認してから、俺は後ろで伸びている隊長たちを起こしにかかるとする。

この後は、母艦に侵入したセブンがアイスラッガーでクール星人を真つ二つにしてか

ら、人質を救出して事件終了！

ほーら、目を覚ましたみんなと外に出れば、捕まっていた人たちが助けを求めて走ってくる。

「あれは何ですか！　なんですかあれは！」

震える警官が指さす方向を見れば、巨大化したセブンがクール星人の円盤を掴んで飛び去って行くところだった。

「いえ、我々にも何が何だか……あの巨人は一体？」

「あ、あの赤い宇宙人が我々を助けてくれたんです！　……し、しかし一体何者なんですか！　彼は！」

「まだ分かりませんが……敵では無いようです」

ステーションV2から赤い巨人と円盤が飛び去った方向の宇宙空間で爆発を確認したとの報告を受け、事件は一件落着だ！

---

その後、作戦室にて。

「いやー、今度の事件になくってはならなかったのは……あの風来坊だな」

「そう言えば彼、どこいったのかしら」

「ここだよ諸君！　……紹介しよう、モロボシ・ダン隊員だ」

無事にウルトラ警備隊6番目の男が着任したが……

これはウルトラ念力で長官を洗脳したのだろうか、それともメビウスのように上層部に自身の正体を打ち明けてから入隊したのだろうか……？

でも直接聞いて藪蛇になる訳にもいかんしな……気になるう〜！

「ダン！ 生きていたのか！ 俺達を守るために囿になって死んだかと思つたぞ」

「えッ!? 見ていたんですかソガ隊員？」

「後ろで誰かが出て行つた気配はしたんだが、体が動かなくなつてな……」

「……ええ、彼に助けてもらったんです」

「彼つて、トサカのある銀色のロボットか？」

「えッ……ああ」

ダン、まだまだ地球に慣れてないから、おちよくなるのが楽しいな。

「きつとあの赤い宇宙人のことだろう」

「そうね、今回の事件の立役者といえば、彼のことを忘れちゃいけないわ」

「結局、奴は一体何者なんでしょうか……」

まあ、我々ウルトラ警備隊としては気になるところだ。

「人々を救い、クール星人の円盤を破壊したところを見るに、我々と敵対する意思は無いと思いたい……」

「ええ、きつとそうですよ！」

「ここぞとばかりに食いついてくるなダン。」

「いつまでも赤い宇宙人つてのも味気ない、名前をつけてやろう」

「そうだな……太陽のように燃える情熱の赤い巨人、レッドマンつてのはどうだ？」

「ダメダメ！ ……あの、あれだ、今後赤い宇宙人が出てきたら紛らわしいでしょう！」

「そうか……」

「当たり前だ！ 性格まで変わっちゃまったらどうするんだ！ それだけは認められないぞフルハシ隊員！ 却下だ却下！ ド却下だ！」

「……そうだわ！ この地球には、平和の為に戦う人が任命される、相応しい役職があるじゃない！ ねえ、隊長」

「……うむ、なるほど。彼こそ我々ウルトラ警備隊7番目の隊員ということか」

「そりゃあいい、今日はせっかく新人が一人増えたんだ、もう一人くらい増えたって構わしねえや！」

「ダンもこんな時期に一人で入隊したんじや、同期が居なくて寂しいだろう」

「同期はいいぞ……ダン！」

「はあ……」

「俺とヒロタのように、切磋琢磨しあってくれよ」

ダン是自己自身と同期にさせられて困惑しているが、もう一つの姿の方も地球人に好意的に受け入れられて嬉しそうではある。

「では、ウルトラ警備隊七番目の仲間、ウルトラセブンということで、どうかな？」

「素敵だわ隊長」

「ちようどラッキーマンバーで縁起がいいや！」

「ウルトラセブン……とてもいいですね気に入りました」

「お前が気に入ってどうするんだ、ダン」

「ああいえ、同期の僕でもいい名前だと思ったんです。きっと彼も喜んでくれるでしょう」

「ハハハ、それならもし今後、彼が出現した場合はこう呼びかけてみるか」

ほほう、こうしてセブンは命名されたのか……

本編ではいきなりセブン呼びだったから、命名の場面に立ち会えて感慨もひとしおだ。

……これからよろしくなウルトラセブン！

## 湖の恐怖

パトロールから帰ってきたフルハシ隊員とダンが、もう一回木曾谷に出撃して行くのを見送る。

なんで他の隊員も志願してるのに、わざわざ帰還した二人を行かせたんですか隊長!!  
労基案件ですよ!

まあ隊長本人が言ってたように、子供の通報だからすぐ帰ってこれるし、その分ポーンで休憩させてやろうとでも思ってたんだろうけども、オレはこの後二人がなかなか休めないことを知っている。

だって木曾谷ってことはエレキング戦なんだもんよ。

……え? ワイアール星人?

ああ、あんなの、俺の出る幕はまるでなかった。

基本的に序盤はセブン無双だから、俺が何かする必要はほとんど無い。

せいぜい、夜に倒れている重傷者を発見したら、警察や救急じゃなくて防衛軍で收容するように進言しただけだ。



こうすりゃあの話は人的被害ゼロだからね。

むしろ、最初の頃はセブンにバンバン活躍して貰って、彼が人類の味方である事を周りにしっかり認識して貰わないといけない。

そういうや前回の事件の後には大量のチルソナイトが手に入って

「これだけの量があれば、構造解析が捗ります！ 開発中の地底戦車の設計に活かせようですよ！」

とかなんとかアマギ隊員が喜んでたっけ。

いや、終わった話はいいんだ。

それよりエレキングだ。

しばらくすると、発見した宇宙船の中で二人が襲われたらしく、その時巻き込まれた少女を保護してフルハシ隊員が帰還する。

聞けば、肝心のダンは少女をフルハシ隊員に託してから行方が分からないんだと。

彼からの通信もなく、もしかすると宇宙人にやられてしまったのでは？ と心配する

面々。

「万が一という事があります。現場へ飛びましょう！」

「待て！ ……ダンがあるいは何かを掴んでいるかもしれない。 ……彼に期待しよう」

隊長、貴方がその多大な期待を寄せるモロボシ・ダンは今頃、大事なウルトラアイを盗まれて右往左往してますよ。

だからどうにかして早めに出撃して、援護してやりたいんだが……

オレが困っていると、メデイカルセンターのアンヌから指令室へ通信が入る。

保護した少女が接触を拒んで治療ができず困っているという。

……しめた！ これだ！

「よし、僕の責任だ。見にいってきます」

「ちよつと待った！ フルハシ隊員はその娘を追いかけたんでしよう？ 怖がられてし

まいますよ。ここは俺が代わりに行ってきます」

「……頼む」

よしよし！ ……覚悟しやがれピット星人！

メデイカルルームに入ると、少女がヒステリックにアンヌへの拒絶を示している。

「やめてツ！ 触らないでツ！」

「……どうしたんだい？ このアンヌ隊員はね、こう見えて我が基地の誇る名医なんだよ。この基地にいる全ての隊員がみんな健康なもの、彼女のおかげなんだよ」

アンヌは褒められて照れくさそうに微笑むが、少女は一向にいう事を聞かない。

「いいの！ 私もう何でもないわ！ この通り元氣よ！ ……触られたくないの、誰に

も」

「……そうか、それなら少し横になっていくといい。……それだけでもだいぶ休まるだろう」

「わがまま言って、ごめんなさいね」

「いいのよ、ゆつくりお休みなさい」

「そうだアンヌ、パラライザーを取って来いって言われたんだ。どこにあるかな」  
「そうなの？ とってくるわ」

二人で優しく少女を寝かしつけて、アンヌにはパラライザーを貸してもらおう。

そうそう、これこれ。

ワイアール星人化した被害者も一撃で麻痺させられる優れた非殺傷武器。

あの場面で咄嗟にこれを使う判断ができるとは、アンヌも流石は精鋭たるウルトラ警備隊だ。

……しかし、女の細腕で使うにはえらい物々しい銃だな。バルタン星人によく効きそうなのを見た目をしている。

「今度の作戦にこれが必要なの？」

「ああそうさ、こうするんだ」

渡されたパラライザーをベッドの上で寝ている少女にすかさず照射！

「アアツ!？」

「ソガ隊員!？」なんてことを！ やめてッ!」

「アンヌ、こういうヒステリックな患者つてのはね、その実すごく痛いのを隠してたりするもんさ。……俺の爺さんも酷い医者嫌いだね、それで死んじまった。殴つてでも病院に引きずつて行けばよかつたと今でも思つてるよ。……さ、早く」

悲鳴を上げるアンヌを宥めて診察を促す。

俺の事を野蛮人を見る目で睨んでくるが、流石は才媛だ、流れるような手つきで診察を進めていく。すると、みるみるうちにその顔色が変わっていくではないか。

「嘘……体温が32.2度しかないのに、代謝が異常な速度で行われている……脈拍も血圧も正常値を計測できないなんて！ まるでトンボかバッタだわ!」

「なに!？」 レントゲンをとって見ろ!」

「キャアツ!」

「アンヌ!？」

シートを跳ね飛ばし、目の前にいたアンヌの首を絞めにかかる少女を、背後からウルトラガンで即座に撃ち殺す。

「そ、そんな……殺してしまったの!？」

「……いや、見ろ!」

俺が指さす先では少女の頭部がみるみる膨れ上がり、大きな複眼を持つ醜い宇宙人の死体となった。

こいつを基地の中に放置しておく、指令室のコンピュータを破壊した上にホーク2号まで盗み出してとやりたい放題されるところだった。

コンピュータの修理に一体誰が駆り出されると思ってるんだ……俺達の仕事を余計に増やす奴は絶対に許さないぞ、このクソアマめ！ ざまあみろ！

「彼女は侵略者だったということ!？」

「それがバレそうになったんで、キミを殺そうとしたんだ……ということは、ダンが危ない!!」

ありがとよ、ピット星人。おかげで出撃の理由がでつち上げられたぜ!

隊長に報告し、ホーク1号での出撃許可を貰う。

木曾谷へ急行する途中で吾妻湖から怪獣が出現したと通報が入る。

よしよし、いいタイムだ。

「怪獣だど? どんな奴だ?」

「ハツ、角を持った白と黒の牛のような怪獣だそうです」

「一体なぜ怪獣が……」

「我々が出撃したからでしょうか?」

「それにしてもはタイミングが妙だ。……もしや湖のダンを殺す為に？」  
「ならばまだ彼は生きています！ 急ぐぞ！」

湖に到着すると、二匹の怪獣が争っている。

よつしや！ エレキングとミクラスの戦闘中に間に合ったぞ！

しかし、ミクラスの周囲は激しく炎上している。エレキングのレーザー攻撃で近づけないようだ。

「なんだ!? 怪獣は二匹いたのか!？」

「いえ、通報ではそんなこと聞いてません！」

「ならば、どちらかは後から現れたのだ」

「どっちも角があつて、牛みたいな怪獣だぜ……?」

同じ牛でも、バッファローとホルスタインだけだな。

「一先ず、通報にあつた白黒模様の方を先に攻撃してみよう」

ホークのレーザーが白黒の怪獣の足元に命中する。

すると雄叫びを上げこちらを向いたエレキングがその独特の形状をした口から三日月型の光線を発射してきた。

初撃は正面からの攻撃だったため、フルハシの巧みな操縦で躲すことが出来たが、奴はまだこちらを狙っている。マズイ、旋回中は隙だらけだ！

しかし、横合いから突っ込んできた謎の怪獣<sup>ミクラス</sup>がエレキングを突き飛ばし、三日月光線は明後日の方向へ飛んでいく。

「隊長、奴らの正体がなんであれ、今のところ、あっちの怪獣は利用できそうですよ」「うむ、利害が一致するうちは共闘といこう。ダンとの通信はまだ回復しないか?」「まだです。もう少しばかり、あのギョロ目と仲良くやる必要があるみたいですね」「よし、いくぞ!」

ミクラスの攻撃に、こちら側が合わせて追撃をする形で疑似的な連携攻撃を行う。お互いの隙を打ち消しあって、打撃とレーザーの波状攻撃を食らわせる。

そうして何度も何度も攻撃を繰り返していくうちに、エレキングの美しかった白磁の体表は、土埃と流れ出た体液で段々と黄色に染まっていくではないか。

着実にダメージを与えられているようで何よりだ。

見るからに弱ってきたエレキングはミクラスに背中を見せて逃げようとする。

そうはさせじとミクラスは追撃を仕掛けるが……

「イカン! 畏だ!」

突進を長い尻尾で迎撃され、そのまま顔を滅多打ちにされるミクラス。

流石のミクラスもこのカウンターはかなり効いたのか、その場でフラフラと棒立ちになっってしまう。

「これはアレが来る！ マズイ！」

「隊長、あのギョロ目がピンチです！ 助けてやりましょう！」

「……よし、あの怪獣を援護する！ 急降下だ！」

「フルハシ隊員、機首を奴の角へ向けてください！」

「よし来た！」

エレキングはグロッキー状態のミクラスにゆっくりとその長い尻尾を巻き付けていく。

必殺の放電攻撃でとどめを刺すつもりだ。

だが、そうはさせるもんか、動きが止まっているのは奴も同じ。

……お前の弱点は知っているぞ！

「(ハッ)だー！」

回転する右のアンテナに狙いを定めてレーザーを叩き込む！

着弾と同時に三日月型のアイデンティティは根元からへし折れ弾け飛ぶ。

絶叫し、ミクラスを放り出して苦しむエレキング。

へへっ！ ウルトラ警備隊一の射撃の腕を見たか！





「助かった……」

アマギ隊員がエレキングの後方を指さすと、その長い尻尾をむんずと掴み、力いっばい引つ張るミクラスの姿が見えた。

「今のうちだ！ 脱出を急げ！」

「これで貸し借り無しってことか……味なマネしやがる」

俺達が命からがらボートに乗り移つたと同時、ミクラスは悲鳴をあげ、もんどりうつて倒れる。よく見れば両腕からプスプスと白煙を吹いていた。掴んでいた尻尾から直接、電流を流し込まれたのだ。

そうして光の粒子になって消えていく……ありがとうミクラス。

「ああッ！ アイツがやられてしまった！」

「後は我々だけだ、来るぞ！ ……撃て！」

ボートから手持ちのウルトラガンで応戦するが、流石にサイズ差がありすぎる。

ダン、早く来てくれ！ 急流すべりしながらじゃ、ろくに回避もできやしない！

このままでは、光線と落石攻撃で沈んでしまう！！

「あッ、ウルトラセブンだ！」

「デュアアアッ！！」

飛行の勢いをそのままにセブンのキックが炸裂！

そのまま連続で殴るわ投げらわ連続攻撃。

アンテナが一本折れているせいか、エレキングの動きは精彩を欠き、まるで反撃が出ない様子。

「セブン！ そいつの尻尾に注意しろー！」

「角が弱点だ！ 角を狙えー！」

「デュワ!!」

左に残ったもう一本のアンテナにエメリウム光線が命中し、完全に動きが止まったところへ、すかさずアイスラッガーでバラバラ！ ナムサン！

うへえ、グロい。回収処理班は大変そうだな。

そのままセブンは河原の宇宙船にエメリウム光線を発射し、円盤は爆散！  
こうしてピット星人の地球侵略は失敗に終わったのだった。

……さて、次こそは頑張りどころだ。

大丈夫かなあ……

## 赤のひみつ

このところは目立った事件もなく

ウルトラ警備隊の司令室には

しばらくぶりの平和な時間が訪れていたのだった。

「うーん……」

「ソガ隊員、眉間にシワなんか作っちゃって、何を悩んでるの?」

「悩み? ……ないない! コイツに限って悩みなんか! いつも能天気ニコニコしてるだけが、ソガ隊員のいいところだぜ、なあ?」

「失敬だな、これでも大真面目に考えてたんです」

「へえ! 今日の晩飯に何を頼むかってんじゃなけりや、ぜひ聞かせて欲しいもんですね、ソガ先生?」

「いいでしょう、そんなに言うなら、みんなにも考えて貰おうじゃないか」

そうすればオレの悩みもちょうど良く解決しそうだ。

「……ウルトラセブンの倒し方について、さ」

より正確には、それをどうやって皆に伝えるか、だが。

すると、たちまち目を三角にして俺へと詰め寄るフルハシとアンヌ。

「酷いわソガ隊員！ そんなこと！」

「そうだけ、今となつてはセブンが俺達人類の味方だつて事は分かりきつてるじゃないか！ それを……」

「まあまあ落ち着きなよ、お二人さん。俺だつてセブンの事を大事な仲間だと思つてる。……だからこそじゃないか」

「……どういう事？」

「例えばねアンヌ、あそこにウルトラアマギがいるだろう？」

机を挟んだ向こう側で、なにかの凶面を睨みながら険しい顔をしているアマギ隊員を指差す。

「どうやら開発は難航しているらしいので、息抜きがてらこちらの話に付き合つて貰おう。」

自分が引き合いに出された事に気付いたのか、顔を上げこちらを一瞥するが、直ぐに視線を下げるアマギ。

……つれないなあ。

「ウルトラアマギは、我が防衛軍の誇る名プランナーだ！ 頭部のスーパーコンピューター

ターでどんな恐ろしい怪獣だって、直ぐさま弱点を見抜き、素晴らしい新兵器でたちどころにやつつけてしまう」

「……やけに褒めるじゃないか、どういう風の吹き回しです?」

「ところが! ぼつたりソガ星人と戦う事になってしまえば、出会い頭の早撃ちで、得意の閃きを得る間もなくやられてしまうという訳だ。……ブオツフオツフオツ」

「……オツ、やるか!? デュワツ」

おどけた俺がピースサインを振りかざすのに合わせ、アマギは真剣な顔で額に指をあてたり、頭頂部で手を合わせたりと構えをとる。

君のそういう、ふだん真面目な癖にわりかしノリは良いところ好きだよ。

でも、ワイドショットの真似を間違えてるのは戴けないな。

アンタがその間違え方すると別のもんが飛び出しちゃうから、色んな意味で危ないんだが?

頼むから気をつけてくれ。

「じゃあ、ウルトラアマギがやられてしまったら、ソガ星人を誰が倒すの」

「うん、そうなると我々としては、ウルトラフルハシを連れてくればいいのさ。そうすればエイヤア! と、たちまち投げ飛ばしてくれる。ソガ星人は腕力勝負でウルトラフルハシに勝てないのが弱点だったわけだ」

「すごいわ、フルハシさん」

「え、そうかい？ エヘヘ……デユワ！ デヤア！」

後輩に持ち上げられてすっかりその気だ。

ちよろい先輩だなあ。

一人だけ不服そうなアマギが異議を申し立てる。

「おい、そりゃあ不公平つてもんだ。フルハシ星人の弱点も教えてくれよ」

「え？ そりゃあ……」

俺はみんなの顔を勿体つけて見渡してから、自分のこめかみを人差し指でゆつくりと三回叩いた。

その意味を理解した途端、三人分の笑い声が響くが、若干名の怒りを買った。

「言いやがったなこのヤロウ……もう許さねえぞ！」

「うげえ、勘弁してくださいよ！」

「食らえ、フルハシバックブリーカーだ！」

「ア、ア、ア、く→！」

本人は手加減してるつもりだろうけど、胸板と二の腕が分厚すぎて普通に苦しいんだが!?

このままでは腹部から爆発して機能停止してしまう！

そんな時、フルハシの肩を叩く何者かがいた。

「ハハハ、そこまでにしておいてやれ。このままじゃあ、ソガが真つ二つになつてしま  
う」

「た、隊長?! 失礼しました!」

「……みなさん、僕は知っていますよ。ウルトラフルハシの弱点は、隊長に頭が上がりな  
いことです」

「……おい、ダン!」

「これは一本取られたな」

再びの笑い声をバックに定例会会から戻ってきた二人が、コーヒー片手に席へ着く。

「しかし、その話は私としても大いに興味がある。ぜひ続けてくれ」

「え? 隊長も?」

「そうだ、セブンが我々ウルトラ警備隊の7番目の隊員だというならば、私の部下も同然  
だ。部下の長所と短所を把握しておくのは、隊長として当然の責務だからな」

なるほど……と頷く面々。

冗談めかしてにこやかに話していた隊長だが、すぐに真剣な顔で続ける。

「……真面目な話、我々のセブンは連戦連勝、向かうところ敵なしだが、いつまでもそれ  
が続くとは限らん。いつか彼でも対処しきれない敵が現れた時、地球を守る最後の砦は



「このウルトラ警備隊だけだ」

「……そうか、それでセブンの倒し方か」

「えッ!？」

「……そういえばダンは聞いてなかったな。さっきのソガの続きじゃないが、今まではウルトラ警備隊がいて、それよりも強い敵が来ると、セブンがやってきてそれを倒してくれた。ところが、セブンを打ち倒すような強大な敵に対して、我々が強いという保証はどこにもない」

「まるで不公平なジャンケンだわ」

「そう、ジャンケンだ! セブンがグーなら我々はチョキでなくてはならないんだ。例えばセブンには勝つ必要がなくとも、セブンが負けた相手にだけは絶対に勝たないといけない」

「そう! それが言いたかったんだよ。流石はウルトラアマギだ」

「ソガ星雲人にしてはいい着眼点じゃないか」

俺達のやりとりをみていた隊長は、コーヒーを飲み干すと続きを促してくる。

「では、どのような策であれば彼を倒せるのかという点さえ分かれば、我々の仮想敵もおのずと見えてくるというわけだな」

「ところが、俺にはセブンが負けるイメージが今一つ浮かばないんです」

そりやそうだ、あれだけ強いセブンが寒さと女に弱いなんて誰が思おうか。

だから、親切な誰かが教えてくれたりしないもんかな〜

……特にえらく物知りなどつかの元風来坊とかがさ。

「……案外、誰かさんみたいに高いところが苦手かもしれんぜ」

「そんなバカな話があるもんか、マツハ7で空を飛び回る相手だぞ。……だいたい、僕だつてホークの操縦くらいできるんだ！　いつたいどんな文句があるつていうんです!?」

「冗談じゃないか、そんなに怒るなよ……」

フルハシゴンはアマギラスにも勝てなかつたようだ。

「そうね……いくらセブンでも頭や胸は攻撃されると痛いんじゃないかしら」

「そんなのは当たり前だろ、吸血鬼も心臓を杭で刺されりや死ぬつてのと同じだ」

「いや、案外悪くない」

しかし、アマギは感心したように頷いている。

……え？　今のが？

アンヌに甘すぎじゃないか？

「ああ、我々はセブンの強力さにばかり目を向けて、彼もまた一人の生命であるという視点が抜け落ちていたかもしれない」

「……なるほどね」

「頭部や胸部といった急所への連続攻撃を食らえば、さしものセブンといえど大きなダメージになるはずだ」

「その時こそ、我々の出番ってわけだ！」

「こりゃあ思いがけずセブン援護の気運を高める事ができたぞ。」

あとは……

「ダンはどう思う？」

「僕ですか？ ……うーん、きつと寒さに弱いのではないのでしょうか」

「いや、それは有り得ない。彼はなんととっても宇宙を渡ってこの地球へとやってきたんだ。零下240度だぞ」

「ひゃあ、俺の故郷、北海道でも、せいぜい零下30度だつてのに」

「宇宙と地球がまったく同じというわけではありません。なんといつても空気が無いのです。寒いとすら感じませんよ。それに常に恒星の近くを通るようなルートを選べるなら、むしろ熱いくらいです」

「……そうか、真空状態では熱交換も起きず、体温の奪われる速度が著しく低いというわけか。それにオゾンのある地球と違って、遮るものが何もなければ太陽光で直に炙られるようなものだ」

「しかしよくそんな事知ってたな、ダン」

「ええまあ……」

……あ、そうなんだ。全然知らなかった。

流石は恒点観測員。

「……確かに、日本アルプスで雪男を退治した時もセブンはやって来なかったな」

「あの時は我々の気化爆弾が強過ぎて、セブンの出る幕が無かっただけでは無いのか？」

「だが生命体であるというならば、高温や低温に弱いというのは十分あり得ますね」

「それなら逆に、そんな高低温を武器にするような生命がいるかしら？」

「……おいおい、南極の地下基地を建設するときも随分と苦戦したのを忘れたのか？」

地球にだってっているんだ、宇宙には冷凍光線や灼熱光線を吐くような怪獣がいてもおかし

かねえぜ……」

「じゃあもし冷凍星人が来たら……」

「その時は火炎銃があるじゃないか！」

「あの火炎銃、射程が無くて頼りないんだよ。ゴビやワイアール星人を焼くならまだし

も、セブンを倒しちまうようなサイズの相手にあれで挑めつていいのか？ それとも冷

凍怪獣はみんな苔に弱いつて言う訳じゃないだろうな」

「それもそうか……」

「いつまた吸血植物が襲って来るとも限らん」

よしよし、なかなかいい具合に話題を誘導できたな。

これで大分インスピレーションを得られただろう。

「よし、ならば私も今度の参謀会議に出席した際は、既存の装備がより過酷な環境でも実戦に耐えうるものであるか、見直しをすすめるように進言しよう」

「僕の方でも耐熱性や特殊環境下での使用を踏まえた改修案を考えてみます」

「……さて、悩みも解消されたし、俺は寝るとするかな」

「あら、もう寝ちやうの？」

「そりやそうだ、なんとたつて、ウルトラソガ唯一の弱点は、……朝に弱い事だからさ」

「じゃあ次に襲ってくるのはバクの怪獣かもしれませんね」

縁起でもないこと言うなよ。

………なんとたつて、そろそろ明日あたりに事件が起きそうな気がするからな。

英気を養っておかないと。

## マックス号生還せよ！（Ⅰ）

マナベ参謀から極秘指令を受け取った俺とアマギは、ダンの運転するポインターで、とある岬まで送ってもらおう。

……さあ、ついにこの日が来てしまったか。

オレの内心を他所に、これといった妨害も受けず、指定の場所へと到着するポインター。

下車した俺達の前で、大海原に悠々とその姿を晒すのは……

「マックス号だ！ あれに乗るんですね」

「うん」

あんなに堂々と停泊してて極秘任務も何もないと思うんだが……

現に帰り道できつちりダンが襲撃されるし、バレバレなんだよな……

「流石は地球防衛軍の誇る新造原子力船だ。カッコいいなあ……僕も一度は乗って見たかったんですよ」

「……ダン、遊覧船じゃないぞ！」

ほれみろ、怒られた。

アマギの奴め、さっそく先輩風吹かせてやがる。

先輩の俺にはタメ口利くくせに、先輩が出来た途端、これだもんな。やっぱり一話にいたのがアマギ隊員じゃなくて良かったなあ、ダン。

俺とフルハシが細かい事を気にしない性質なのを感謝しろよ？

「成功を祈ってます」

「ありがとう！ ……お前も帰りの運転気をつけろよ」

……まあ、言ってもしょうがないか。

ダンというか、セブンは優しすぎるのが長所であつて、欠点だからな。

セブンというよりM78星雲人の性なのかもしれないが……

それにしたつて、元々が戦士では無いセブンは輪をかけて、疑うとか、断るとか、そういう事が苦手なんだろう。

そんなだからペダン星人に裏切られたりするんだぞ。

こんな純粋なセブスが、本編でヤプールなんかと戦わされる事にならなくて本当に良かった。

エースはよく頑張ったよ、うん。

一方マックス号に乗り込んだ俺達二人を、一等船室で待ち受けていたのはタケナカ参謀であった。

俺達は今から、この人の指揮下に入ることになるのだ。

我々を労いながら、マックス号の性能について自慢気に語る参謀。

参謀の中でも、特に気さくで、部下からの人気も高いこの人らしい。

「……参謀、それよりマックス号は一体どこへ向かつてるんですか？」

「地獄だ」

「なんですって!？」

「フツハハハ……いや、場合によっては本当に地獄行きだぞ」

さっきまでの和やかな雰囲気はどこへやら、真に迫った表情で俺達へ説明を始めるタ

ケナカ参謀。

特定の海域で、タンカーや海上保安庁の船が相次いで消息を絶ってしまったという。

何者かの陰謀である線が濃厚であるとして、極秘裏に事件の調査と撃滅の為にこのマックス号が派遣されるというのだ。

そしてまだ何も手掛かりを掴めておらず、危険な任務である為、覚悟してくれと。

……しかし、俺だけは今回の事件の真相を知っている。

そして、先程の参謀のジョークが洒落にならんという事まで知っているのだ。



何せ、ここまでのやりとりは第四話「マックス号応答せよ」の冒頭部分そのままだからだ。

十中八九、ゴドラ星人の仕業に間違いない。

ゴドラ星人は、このマックス号を釣り出す事に成功し、そしてこれからこの船をも捕らえる事で、防衛軍の目をその海域へ釘付けにし、その隙に、捕らえた隊員に化けた工作員が基地へ潜入、爆弾を仕掛ける……という壮大な侵略計画を実行に移してきたのだ。

おまけに、女に化けた別の工作員がダンを襲い、ウルトラアイを盗む事で、セブンの介入すら妨害するという念の入れよう。

……いまごろ、ヒッチハイクされたダンが、エンジンの故障を診てる隙に、レンチでぶん殴られてるところだろうか。

お前、ウルトラアイにキーチェーンとか付けといた方がいいぞホント。

盗られたり無くしたり、し過ぎなんだよ。

俺ですら、家のカギ落としたのまだ一回だけだぞ？

まあ、あつち<sup>基</sup>地<sup>地</sup>方面はほつともなんとかなる（なんであの状況からなんとかなるんだろうか）のでどうでもいいとして、問題はこつち<sup>マックス号</sup>。

なにを隠そうこの俺、今日のこの日の為はずっと、1話の時点から毎晩プランを考え

ていたのだ。

……我々の乗っているマックス号。碌な活躍もしないまま宇宙空間に連れ去られ、乗組員は全員殺された上に、ラストではゴドラ星人もろとも爆弾で木っ端みじんになる残念新造原子力船。

これを俺は、再びこの大海原に浮かべてみせるのだ!!

……いやね、この世界でソガ隊員になってみて初めて、このマックス号を失った事が防衛軍、引いてはウルトラセブンにとつていかに痛手だったかというのを痛感したのさ。

本編を見るだけでは気付けなかった、ゴドラ星人の影響力とその悪辣さを諸君にお教えしようではないか。

とは言え、なにもマックス号に戦力として期待している訳ではない。

しかし、俺はこつちで任務をこなしていて驚いたもんさ。

なぜなら、このマックス号が受け持っている哨戒範囲。

……めっちゃめっちゃ広いのである!!

重ねて言おう、むちゃくちゃ広いのである!!

ざっくり言うとう一隻でなんとウルトラホーク三機分……いや、極東基地半個分。

そもそもホークのレーダーが如何に高性能と言っても、主な任務は迎撃戦闘機である

のだ。

専ら基地のレーダーが主で、パトロールはその補助でしかない。

対して、マックス号は始めから単艦運用前提の設計な上、軽量化なんかを考慮しないでよい分、基地のレーダーとまではいかないが、非常に高性能な物を搭載できる。

しかもさらに、観測用ロケットまで完備。

おまけにホークは二〜三人、酷いときは一人で操縦からレーダー監視までしなくてはならないのに対し、マックス号は数十人の乗組員が交代で専任できる。

さらにさらに、航続距離がまるで違うときたもんだ。スピード命のホークは、飛行機としては桁違いの距離を飛行出来るとは言え、一日中飛んでる訳にもいかず、燃料補給が必要だ。

……ところが、原子力船であるマックス号は一度出港すれば数ヶ月間は余裕で帰ってこない。

こんな船が、関東側の太平洋をゆっくり湧き潰しでもしてんのかってくらい念入りに哨戒している間、ホークやその他のパトロールは別の方面に専念できる。

正直、転生してから今まで、太平洋方面のパトロールなんて行った事がない。

だが、本編では海で事件が起こる度にちよくちよく海上をホークでパトロールしている。

……それはなぜか？

マックス号がないからだよ!!

この船が無くなったから、抜けた穴を埋める為に俺達が空から海のパトロールに駆り出されているんだよっ!!

しかも、さつき言った通りの性能差で、である。

………

嫌じゃ!! パトロール任務が今の数倍になるのは絶対に嫌!!

こんなん、セブンでなくとも過労死するわッ!!

そりゃあ他の艦艇もいるから、単純計算出来ないとはいえ、少なくともマックス号を失ってから数ヶ月は我々の負担が増すのは間違いない。

それだけは避けねば………!

まあ、生き残ったらどつかの戦いで活躍してくれるかもしれないし。

キングジョーとか、ノンマルトとか、セブンは意外と海上戦も多いし……艦砲で援護射撃でもしてくれりゃ儲け物だ。

とにかく、生還して俺……じゃなかった、ダンの代わりに働いてくれ、マックス号!

そしてそれだけではなくもう一つ、今回の計画は俺にとっても大きな試金石となるはずだ。

つまりオレが何らかの影響を与えて原作改変できるのはどこまでなのか？ という疑問をハッキリさせられるかもしれない。

前回、エレキング戦で多少は頑張れた筈だが、大筋はそこまで変わっていない。

ミクラスは負けるし、ホークも撃墜される。

エレキングを倒すのは結局ウルトラセブンだった。

しかし、宇宙で爆破されるマックス号を乗組員も含めて救う事が出来たなら、ウルトラセブンを救うという野望にも希望が持てる。

逆に言うなら、そんな改変すら出来ないなら、運命を変える事なんぞできやしないと  
言う事だ。

……さあ、気合いをいれろ。オレ！

## マックス号生還せよ！（Ⅱ）

「参謀……あと一分でタンカーが消息を絶った、問題の地点です」

「うむ……おいソガ、何をしている。任務中だぞ」

「ハツ……なんでも船酔いが酷いそうで」

「まったく、そんな事でどうする！」

「ハハハ、噂のウルトラ警備隊も、海の上では大した事がないようだな」

俺は今、艦橋にてヘルメットを脱いで座っている。

おまけに耳栓もしてるから、艦長や参謀、アマギ隊員が俺を横目に何か話しているが聞こえない。

……まあ、だいたい何を言っているかは表情で分かるが。

艦長達に馬鹿にされながらこんなことをしているのは、何も本当に船酔いしているからではない。

今日の計画の第一段階として、必要な事だからこうして汚名を被ってまで備えているのだ。

なんといつても、第一段階で重要なのは『気絶しないこと』これに尽きる。

マックス号が宇宙に連れ去られた際、ソガ、アマギ、タケナカ参謀の三人が気絶して  
る間に、他の乗員はゴドラ星人に抵抗したため、全員が宇宙空間に放り出されて殺され  
てしまう。

つまり、それを救う為には艦長以下乗組員に、無抵抗で降伏するよう説得しなければ  
ならないのだが、気絶してしまえばそれも出来ない。

じゃあどうやれば気絶しないで済むか考えた末にたどり着いた答えがこれだ。

戦闘員ではないタケナカ参謀はともかく、いくら鍛えあげられた海の男達とはいえ、  
精鋭であるウルトラ警備隊の二人よりも先に、マックス号の乗員が早く復活、もしくは  
気絶しなかつたならば、そこにヒントがある筈。

マックス号が赤い霧のようなフィールドに襲われた際、激しく振動する船内で、苦し  
そうにしながらも艦長と参謀が目を見開いて周囲の様子に驚く余裕があるのに対し、警  
備隊二人は目を瞑って絶叫していた。

しかも、ソガ隊員は頭を押さえているようにもヘルメットを脱ごうとしているように  
も見える。

そして、俺達と彼らの違いは、ヘルメットの有無だったのでは無いか……と考えたの  
だ。

じゃあ、ヘルメットをしている相手により効きそうな、頭痛を引き起こす攻撃とは

……？

音波ではないか？

普通の音ならむしろ遮断してくれるだろうが、通信機から大音量のノイズを直接流されたり、ヘルメット内で反響させられたりしたら、さしもの精鋭もダウンして仕方あるまい。

そして海の男達は日常的に三半規管が鍛えられてるから、ほんの僅かに音波攻撃に対して耐性があつたのではないか……？

というか、これくらいしか防ぐ手立てが思いつかなかつた。

殆ど山勘みたいなもんだが、外れたらもう乗組員は諦めるしかない。

うう、周囲の視線が痛い……あんたらを助けるためにやってるんだぞ、こっちは！

「エンジンストップ！」

マックス号の主機が段階的に停止していくのを、足元の振動から感じる。

「……なにも起こりそうにないね」

「相手が地球防衛軍と知って、尻尾卷いたんでしよう」

「ハハハハハ……！」

艦内は安堵に包まれ、緊張から解放された反動か、軽口で笑いあう男たち。





「み、みんな……な……」

い、生きて……る？

視界もハッキリしないし、めまいが酷過ぎてまるで起き上がれる気がしないが……

……やった……やったぞ!! 耐えきったぞ!! 見たかゴドラめ!

「さ、参謀……しつかり……」

「その声は……艦長?」

「ソ、ソガ隊員、無事かね……?」

「な、なんとか……」

艦橋は死屍累々だが、俺と艦長以外にも操舵主や航海長など数人はまだ意識があるようだ。

コンソールに縋りつくようにして艦長が通信回路を開こうとする。

「か、各員、損害状況を……」

「待て! 動くなッ!」

「なにつ!」

いつの間にか、艦橋には異形の者達が倒れ伏す我々を見下ろしていた。

長く伸びた頭頂部に並んで鎮座する眼、白い格子状の体組織と赤いチョッキ、間違いなくゴドラ星人だ。

奴らは両手の爪をこちらに向け、野太くザラザラとした耳障りな声で勝利を宣言する。

「この船は、我々ゴドラ星人が占拠した！ 命が惜しかったら降参しろ！」

「誰が降参など……するかッ!!」

「いいのか？ 今は大気ごと反重力フィールドで覆っているが、それを解除すれば外の乗り組み員はもちろん、気密区画以外の奴らも忽ち窒息死だ！ ……安心しろ、今起きている奴も一緒に放り出してやるぞ、寂しくないようにな！ フハハハハ！」

「そんなこと、全員覚悟の上だ！」

「艦長！ 危ない！ ……ウツ!!」

降伏勧告に対して、まともに動かぬ体で睨み返す艦長を、ゴドラ星人の爪から出た光線が襲う！

咄嗟に射線上へ右腕を差し込むと、全身に猛烈な痛みが走り、まるで石になったように右手が硬直する。

いつてええええええええ!!!

これは……筋肉が収縮したまま戻らない？

「ぐ、うう……」

「ソガ隊員！ 大丈夫か！」

「バカめ！　そこで伸びてる二人以外は要らん、全員捨ててこい！」

「ま、待て！　降参する！　降参するから殺さないでくれ！」

「な、何を言うんだ!?!」

「俺も命が惜しいから教えてやる！　お前たちはキリヤマ隊長の恐ろしさを知らないだろう！　……たかだか数人の人質なら、きつと、このマックス号ごとお前たちを吹き飛ばす事を選ぶはずだ！　乗組員が揃ってこそ、このマックス号は初めて価値があるんだ！　頼む！　命だけは！」

「……グフハハハッハッハッ!!　こいつは傑作だ！　命欲しさにそんな重要な情報を喋る奴がウルトラ警備隊の隊員とはな!!」

「……見損なつたぞー！」

ゴドラ星人は用心深い。

こう言っておけば、人質を減らすという判断はしないだろう。

……くそ、それにしても艦長以下周りの視線が痛い。

何度も言うが、アンタたちを助けるためにやってるんだぞ！　こっちは！

小さい声で地球人の恥さらしとか言うな！

「……いいだろう、その生き汚さに免じて、忠告に従ってやろうじゃないか。貴様のせいで地球は我々の手に落ちるのだ！　ワッハッハ！」

満足げに高笑いしながらゴドラ星人達は姿を消す。

アイツら用意周到で用心深い癖に、妙なところでツメが甘いんだよな。そんなだからハサミがきちんと閉じないんだぞ。

「ウルトラ警備隊も地に堕ちたものだ！ 勝手にしろ！ 我々だけでも……！」

「艦長！ 今は雌伏の時です！ 悔しいですが耐えてください！ マックス号からの連絡が途絶えれば、基地のみんながきつと動いてくれるはずです。その時に内外で呼応してこの船を取り返すんです！」

「な、何?！」

「私の事はいくら蔑んで頂いても構わない。しかし、今の状況で動いては無駄死にですよ！ 貴方は部下を犬死させるおつもりですか！」

「……さっきのは演技だったとでも言いたいのか?！」

「信じて頂かなくて結構。しかし、タケナカ参謀は地球防衛に欠かせない人物です。そして、マックス号は海上防衛の要です！ 私はこれらの至宝を無事に基地まで送り届けなければならぬが……私だけではこの船を動かせません」

「……臥薪嘗胆というわけか……」

艦長は俺を睨みつけ悔し気に顔を歪めた後、少しの間逡巡するが……意を決したように艦内放送のスイッチを入れる。

「艦内各員に次ぐ、本艦はゴドラ星人に全面降伏した。総員直ちに武装を解除し、気密区画へ集合せよ。彼らへの反抗は許されない。これは艦長命令である 繰り返し、本艦はゴドラ星人に……」

「艦長……」

降伏の旨を伝え終えた艦長は俺を振り返ると、眉を吊り上げ厳しい眼差しで俺を真正面から見据える。

「……海の男は借りを作らんといいただけだ。貴様は栄光ある防衛海軍に白旗を上げさせたのだという事を忘れるな、ソガ隊員……覚悟は見せてもらおうぞ」

「……ええ、その時までお待ちください」

ひとまず第一関門突破だな。

……右腕動かんけど。

## マックス号生還せよ！（Ⅲ）

ゴドラ星人の指示でマックス号船員はいくつかの気密区画に押し込められ、俺とアマガ、そしてタケナカ参謀だけは一等船室に分けられた。

流石ゴドラ星人、人質の重要度でランク分けしてやがる。

いざとなったら、俺達三人だけ残して他は殺す気満々だ。

二人が起きてきたら、マックス号はゴドラ星人に拿捕され、人質として捕まっている事を伝える。

「ソガ隊員、なんということを！」

「……いや、むしろよくぞやってくれた。私の意識がハッキリしていれば同じようにしたかもしれない」

「えッ？」

「奴らの言によれば、例え断ろうと数人が人質になっていたのは変わらない。それならば一人でも多くの人員を確保するべきだ。」

「そうして全員が揃っていれば、ここを取り返すチャンスがあるかもしれないと思ったんだ」

「……なるほど」

「ソガ隊員の言う通り、このマックス号には精鋭中の精鋭ばかり選抜してある。彼らを一度に失うことは、マックス号一隻だけをくれてやるより遥かに損失だ。船は再び建造できるが、一度失った命は二度と再び戻ることはない」

「では、今は助けを待たしつかないか……」

「基地の仲間を信じて、耐え忍ぶんだ」

ああ良かった。

タケナカ参謀が理解ある人で助かった……

実際、この人の人望のおかげで艦長たちが踏み留まつてるまでであるからな。

すると艦の後尾に微かな衝撃が走る。

「む！　なんだ今のは？」

「まるで何かがドッキングしたような感じでした」

……もう来たのか、早いな。

しばらくすると船室のドアが開いて、バイザーを降ろした宙間装備の隊員が現れる。

顔が見えなくてもすぐ分かる。あの筋骨隆々な体系はフルハシ隊員だ。

「ソガ！　アマギ！　それに参謀も！　」無事だったんですね！」



「……うむ、現在は虜囚の身だがね」

「なんですって？」

「それよりも、ここに来るまで、敵と会わなかったのか？」

「敵？ 誰だいそりやあ？」

「フハハハハハハ！！」

得意げな高笑いと共に、肩を震わせてハサミを振りかざす異形の侵略者が姿を現す。

「それは我々、ゴドラ星人だ！」

「くそうッ！」

「やめたまエー！」

フルハシが腰のウルトラガンに手を伸ばすが、それよりも早く、シャコじみた恐るべきスピードでゴドラ星人のハサミが突きつけられる。

「今更無駄なことだ……なんの為に貴様をこの部屋まで素通ししてやったと思ウ？」

「素通しだと……ハッ!?」

再び艦尾において軽い金属音と衝撃を感知した我々は、フルハシの乗ってきたホーク2号が奪われたのだと悟る。

「貴様の代わりに我々の仲間が向かったトコロだ……今現在、地球防衛軍の注意力は、船の消失した海域に集中している……その隙に、我々は、地球を、征服するダロウ！」

「なんだと!? ……基地の仲間や、ウルトラセブンが許すはずがない!」

「そうだ、この地球には、我々防衛軍だけでなく、頼りになる強力な助っ人がいるんだぞ!」

「ウルトラセブンだト……? ワツハツハツハ! そちらはとつくと対策済みダ。先に潜入していた工作員が既に倒したワ!」

「そんなことできるもんか!」

「いまこの船を助けに来ないことガ、なよりの証拠だとは思わんカ……?」

「そんな、ウルトラセブンが……」

「ウルトラセブンだけではナイ、あと15分もすれば、地球防衛軍は原子の粒となって、吹っ飛んでしまうダロウ!」

ハサミを大きく振り上げ、自らの勝利を宣言するゴドラ星人。

我々に決定的な事実を突きつける!

「地下18階の第二動力室に時限爆弾をセットしたトコロダ……フフフフ……フハハハハハハハハハ!!!」

そう言い残すと、高笑いと共に空間へ溶けるようにして消えていくゴドラ星人。

あーあ、言っちゃった。

どうしてこう、これだけ大掛かりな計画をしておいて、大事な部分を喋ってしまうん

だろうか。

こいつがそのことをバラさなかったら、計画はうまくいったかもしれないのに……いや、そうなったら俺が困るんだけども。

いやまあ、気持ちは分かるけどさ……俺も考えたゲームのシナリオとか、やってもないうちにプレイヤーに話したくて仕方がないもんな。分かるよ。

あと、こいつら組織立って動いているし、計画の為なら、基地と共に殉じる覚悟もあると来た。

多分、テロリストとかああいった類の、自分に酔っちゃうタイプなんだろうな、それも種族単位で。

めっちゃくちゃ士気は高いけど、いざ事を起こすときに興奮しまくって、暴走しちゃう………みたいな。

基本的に全部の行動がツメが甘すぎるんだよお前ら……だからこうして原作改変が楽なんだけども。

「ウルトラセブンも倒されたのか……」

「待て、そんなはずは無い」

隊員達の間には暗い空気が広がりがけるが、参謀が制止する。

「ウルトラセブンが倒されたのなら、我々を生かしておくはずがない。万一の場合に備

えているんだ！ ということは……」

「セブンはまだ健在だ！」

「うむ、冷静に考えるんだ。15分以内にここを脱出して、時限爆弾の事を連絡しなければ、大変な事になる！」

無線が使えないこの状況で、フルハシ隊員がマックス号に搭載されている観測用ロケットを使う事を提案する。

やるやんフルハシ!! バカっぽいとか思ってたてごめんな！

一人乗りのロケットにアマギをのせて射出するという事になり……

「今こそマックス号を取り戻す時です！」

「いや、今はその時ではない」

えええ?! なぜなんです参謀!? 陽動にピツタリでは？

「今は一刻も早くロケットに行かねばならん。他の乗員を救出している時間はないし、騒ぎを大きくして途中で気付かれては元も子もない」

「な、なるほど……」

「俺が必ず基地を救って、助けを呼んでくる！」

「そうだ、それに早打ち名人がその腕じゃあ、まるでアテにならない。お前はここで参謀をお守りしろ」

「……分かった」

「彼らに任せよう……まずは戸口の見張りを倒すんだ！」

……まあ、原作通りでもこの二人に任せていけば成功するし、俺が変に動いたせいで結果が悪いように変わったら意味が無いか……

それにしてもだ。

戸口で騒いで開けさせた後、扉の死角に隠れたもう一人が攻撃するという、どんな作品でも見る古典的な脱出方法に引つかかるとは……

マヌケな奴め、わざわざ扉開けずとも、テレポーテーションができるだろお前たち。

もしかして保護色で隠れてるだけなのか？

そうしてアマギとフルハシは迅速に行動を開始した。

元々ゴドラ達も、閉じ込めている乗員や艦橋、武装制御室等の重要区画を重点的に警備していたせいで、観測ロケットはノーマークであった。

彼らはそれを、巨大なミサイルだと認識していたので、火器管制さえ掌握していれば良いと思いつ込んでいたのだ。

戦う事しか能のない野蛮な地球人が、戦艦にそんなもの<sup>観測用</sup>を積んでいるなんて、ましてやそれで脱出しようなんて理解できなかった。……端的に言うとな奴らは地球人を完全に舐めていた。

気付いた時にはロケットは発射体制に入っており秒読みであったが、間一髪！

制御室に飛び込んだ一匹が、人類よりも遥かに優れた瞬発力で、即座に二人を光線で撃ち抜く。

ゴドラ星人の爪から発射される光線は生体電流を圧縮した衝撃波だ。例えガラス越しであってもロケット内部のアマガミを麻痺させるには充分であった。

この自慢の生得武器を使って、太古の昔から彼らの祖先は獲物を狩り、ゴドラ星の生態系に君臨してきたのだ。

だが、ここでもゴドラ星人は一つミスを犯す。

麻痺して倒れたフルハシを置いて、ロケットの乗員を先に回収しようと、制御室から出てしまったのだ。

こうした部分を、今生のソガは『ツメが甘い』と評しているのだが、それはゴドラ星人の成り立ちに起因する。彼のまったくあずかり知らないことではあるが。

彼らの祖先は元々、ゴドラ星の海底に蠢く無数の、地球で言う甲殻類の一種であったが、幼生期を特定的大海綿動物の中で過ごすという珍しい生態を持っていた。

生物由来の二酸化ケイ素でできた頑丈なゆりかごの中で安全に齢を重ね、その海綿動物よりも大きく成長すると、それを今度は着込むように体へ取り込み、お互いを体組織の一部として利用するという共生関係にあったのだ。

繁殖に関わる特殊な生態を持った彼らが、アリやハチのような社会性を持つのにそうかからなかった。

やがて高度な文明を持つまでに至るのだが、その進化の途中で、兵隊ゴドラ達は海底を闊歩し、見つけた獲物を、地球のテッポウエビなどがそうするように、先の生体電流光線で気絶させ、生きたまま、より上位の、女王蟻のような個体への捧げものとして持ち帰っていた。

……つまり、ゴドラ星人にとつてのごちそうとは、トドメを刺さず、完全に動きを封じた、生殺しの状態の生き物を、そのもだえる姿を肴に貪りつくす……というのが最も愛して止まない、遺伝子に刻まれた作法ということである。

そのせいで地球人の、いやフルハシ・シゲルという男の底力を見誤ってしまった。

腕部に掠っただけで、未だにソガの右腕は十全に動かない。

ましてや、そんな威力の光線を至近距離でそれも体幹にモロに食らった生物が、すぐさま息を吹き返すなど有り得ない。なんなら、威力の減衰した方のアマギ隊員の方が、用心の為に追撃が必要なくらいだろう。

ゴドラは詰めが甘いのではなく、全くもって常識的だったのだ。

ただ、非情に運の悪い事に、そこで倒れていたのが宇宙規模で非常識な男だったといっただけだ。

全身の筋肉が引き攣り、満足に動かないというにも関わらず、フルハシ隊員は最後の力を振り絞って、ロケットの発射レバーを引いた!!

この時、彼を動かしていた原動力はまさしく、《気合》と《根性》というほかない。それはゴドラ星の発達した科学においても、まるで解明できない未知のパワーだった。

ハッチが開き、アマギを乗せたロケットが宇宙空間へ飛び出していく！  
人類反撃の鎗矢が、宇宙的常識外の男の手によって、放たれた瞬間だった。



## マックス号生還せよ！(IV)

極東基地は大わらわであった。

マックス号と共に消息を絶つたはずのアマガイ隊員が観測用ロケットで帰還したのだ。

しかも、救出されたアマガイ隊員の意識は朦朧としており、駆けつけたキリヤマの顔を見るなり、気絶してしまった。

アンヌが急いでメディカルチェックを行うと、全身の筋肉が激しく硬直しており、長時間の緊張状態に晒された事によって体力を著しく消耗してしまっている……との見立てだった。

このような極限状態で、ロケットの侵入コースを設定し、あまつさえ大気圏突入を成功させるなど、常人ではとても考えられない。

ウルトラ警備隊に選抜された男の精神力は、まさしく本物としか言うほかないだろう。

しかしアマガイ隊員の状態から、マックス号が何らかの攻撃を受けた事は明白だったが、肝心のアマガイ隊員が目を覚まさない事には、動きようが無い。

こうして一人用のロケットで彼を送り込んで来たからには、可及的速やかに伝える事

が有るといふ事に違ひないのだから。

アンヌが筋弛緩薬や覚醒剤を投与してアマギの意識を取り戻そうと必死に治療を施すが、間に合うだろうか。

一方その頃、ホーク2号で帰還したフルハシ隊員から発される僅かな違和感を、直感的に捉えたダンは、密かにその後をつけた。

しかし、フルハシ隊員が動力室に怪しげな機械を設置したのを見咎めたまでは良かったが、ゴドラ星人の瞬発力によつて先手を取られ、カプセルの中に閉じ込められてしまふ。

勝ち誇るゴドラ星人からシユワシユワときめの細かい泡のような物が分泌され、その全身を覆つたかと思うと、中からはダんに瓜二つの姿が現れた。

「ハツハツハ、原子炉が爆発するまで、大人しく寝ているんだ、ウルトラセブン！ フツハツハ！」

カプセルを破壊できず、為す術もないダンⅡセブンを見下すように挑発すると、借り物の姿で悠々と原子炉を後にする。

「あと15分で君の体は木っ端みじんさ！ ハツハツハ！」

ゴドラ星人は成長し、サイズが拡張するにつれ、より高度な擬態化能力や飛行など、様々な特殊能力を身につけていく恐ろしい宇宙人だが、この個体のように、目にしただ

けの姿を何種類も使い分けられるようになるには、50m級まで成長する必要がある。た。

……それには数百年の時間を要し、これほどの戦闘力を誇る兵隊ゴドラは母星にも数える程しか居ない。

星を支配する最上位個体の、言わば親衛隊のような存在であり、彼が今回の作戦に投入された事は、ゴドラ星人が如何に地球侵略に重きを置いていたか、その本気度が伺える。

わざわざ、基地の破壊に時限式の爆弾を使ったのも、この貴重な個体が離脱する時間を確保する為であった。

基本的にゴドラ星人は、種の繁栄の為なら個の生命など、いくらでも捨て石にするような精神性を有していたが、そのゴドラ星人という種全体から見ても、このレベルの個体が失われるのは避けたい程の戦力なのである。

作戦失敗時には何を置いても母星に帰還することを、最上位個体から厳命されていた。

そして、地球防衛軍とウルトラセブンが爆破されるのを見届けるといふ重要かつ、非常に榮譽ある任務は、より下位の、しかし優れた擬態能力を持つ程度には成長した中堅個体が引き継ぐことになる。

もちろん成功の暁には、基地と運命を共にすることになるが、その報酬として、目の前で強大な敵が悶え苦しむ最期を特等席で見られるというのだから、ゴドラ的価値観ではお釣りが来るくらいだ。殺到した志願兵の中でも特に優秀な個体が、日頃の恩賞として任務を賜ったという経緯がある。

ダンとしては、助けを求めた防衛隊員が、自分を襲い、ウルトラアイを奪っていった女であると気付いた時の驚きようは無かった。

……最も、この個体が床に落ちていた奇妙な金属部品（ネットレス）を拾い上げなければ、全てが計画通りに進んだかもしれない。

彼らの文化に装飾品という概念は無いため、警備隊の使う武器の一種かと思ったのだ。

咄嗟にダンがそのネットレスに反射させた光線でカプセルを破壊する。

獲物を閉じ込め上位個体に献上する為に改良されたカプセルは、内部からの刺激には一切反応しないが、捕食側がハサミを突き立てた際には、さながら包み焼のパイ生地のように、何の抵抗もなく崩れるようになっていた。

ゴドラ星人とは、宇宙でも稀にみる、侵略と捕食がセットになったグルメな種族なのだ。……武器と食器が同義なのだから。

なんにせよ、アンヌの愛がセブンの窮地を救ったとき、その献身性はアマギの意識と

基地の命運すらも救ってみせた。

「……大変だ、時限爆弾が爆発するウー！」

「何、時限爆弾!? どこにあるんだ！」

「第二動力室の……原子炉の傍！」

慌ててキリヤマが動力室へと駆けつけると、そこではウルトラセブんと、未知の異星人らしき存在が揉み合っている！

それも、なんとあのセブンに対し、格闘戦で優位に立っているではないか！

加勢しようとするキリヤマであったが、それよりも早く頭に響いた不思議な声に、反射的に従うことにした。

《隊長、時限爆弾を早く！》

確かにセブンの指差す方向には、怪しげな装置があった！

間違いない、例の時限爆弾だ！

キリヤマの脳裏に、かつて撃滅した宇宙艦隊の残骸を見分していた時の感想が過ぎる。

いくら異星人の作る物とはいえ、兵器の構造というのは、単純であればあるほど、根っこの構造は、我々のそれとさして変わりがないものなのだ——と。

もはや迷っていても同じこと、直感的にヒューズのような部品を引き抜いた！

点滅の停止した装置を片手に、キリヤマは安堵する。

いつだったか、時限装置も回路の一種に変わりは無いと嘯いていた、今は医療ベッドで寝ている部下を命一杯労ってやろう等と、つい気を抜いたが、背後で悶える気配によつて一気に意識を引き戻される。

油断大敵、セブンがエメリウム光線で救ってくれたと悟った時には、彼はもうすでに次の行動へ移っていた。

ダンへの擬態を訝しんだアンヌを、人質として引きずっていたゴドラ星人の前に飛び出すと、慣れない《腰の武器を使う》という行為にもたつくゴドラ星人をアイスラッガーで牽制する。

セブンの必殺武器を頭部に受け軽傷を負ったゴドラは、ポインターで逃走を図るも、セブンの飛行速度からは逃げきれないと悟るや、母星で受けた圧縮処置を解除して、本来のサイズへ戻り、セブンに格闘戦を挑んだ！

攻防は互角といったところであったが、ゴドラ星人は自身の使命を思い出した。

そうだ、ゴドラ繁栄のため、自分は何としてでも母星に帰還しなければならないのだ。かくなる上は！

ゴドラ星人はここまで成長するに至った自身の肉体に一縷の望みをかけた。

彼らの最も強固な部位は、共生する海綿動物に覆われていない、甲殻による装甲だけ

で構成された背面なのだった。

現にその甲殻の強度は、キック一発でセブンをノックダウンさせ、先程アイスラックガーの一撃すらも弾き返した実績がある。

もうこの個体には他の手段が残されていない中で、一か八かの賭けだった。

セブンに背を向け飛び立つゴドラ星人の背面にエメリウム光線が炸裂する！！

……果たして賭けはセブンの勝利に終わった。

駆け付けたキリヤマとアンヌは人間大に戻ったセブンに満面の笑みで駆け寄る。

今回もまた、絶体絶命の危機を救ってくれたセブンはなんと、地球の言葉を解するということが判明したのだ。

もちろん言いたいことや聞きたいことが山ほどあったが、それらを飲み込み、まず今一番伝えたい事を、万感の思いを込めて、キリヤマは赤いヒーローへと述べる事にした。

「ウルトラセブン、基地は救われた。……ありがとう！」

《隊長、これを私に》

しかし、セブンは一つ頷くと、時間が惜しいとばかりに、キリヤマの持っていた時限爆弾を受け取って宇宙へと飛び去って行った。

そう、事件はまだ終わっていないのだ。

## マックス号生還せよ！（V）

成層圏に浮かぶマックス号の中で俺、フルハシ、タケナカ参謀の三人は助けが来るのを待っていた。フルハシ隊員は光線の影響で苦しそうにしているが、俺と参謀は精神的な疲れで参っているというのが大きい。来るか分からない助けを、敵陣で待ち続けるといのは、思っていた以上に神経をすり減らすみたいだ。

オレはセブンが助けに来る事を知っているが、もしオレの起こしたバタフライエフェクトで失敗したらと思うと……

そんな時、参謀が艦内の異変に気付き、俺の肩を叩く。確かに船内が俄かに騒がしい。この水泡が弾けるような独特の音は、奴らゴドラ星人が、翻訳機を使わず仲間同士で会話する際のいわば地声だ。

まるで何かを叫びあっているような……？　そして、すぐ近くで一際大きな戦闘音が聞こえたと思ったら、待ち構えていた俺達の前に等身大のセブンが転がりこんでくる。

「おッ！　ウルトラセブンだ！」

《マックス号はゴドラ星人に占領された！　早く脱出しよう！》

うわ!!こいつ!?直接脳内に……ッ!!



そうか、なんで声がダンの声そのままなのに隊長達は気付かないんだと思っていたが、テレパシーでの会話だったのか!?

脳内に響く声はボコーダーでも掛かったかのように変声し、普段のダンの声とはまるで印象が違う。

電話越しの音が全然違ったり、普段自分が聞いている声と録音で聞いた声がまるで違ってショックだったり……いや、というより【声】として聞こえてる訳ですらないのか、コレ。伝えたいイメージがそのまま流れ込んでくるというか……

いやいや、そんな場合じゃない!

「まってくれセブン! まだマックス号の乗組員が捕まっている!」

《なんだって!?!》

「右舷だ! きつと右舷に奴らの母艦が張り付いているはずだ、それをなんとか切り離してくれないか? この船は俺達でなんとか取り戻す! 信じてくれセブン!」

《……分かった、任せる。右だな?》

「ああ、左舷は任せろ!」

「よし、酸素ボンベを……あつ!」

「デュエ!」

船室に入ってきたゴドラ星人の喉元に、ハンディショットが深々と突き刺さる。

そのまま目にも止まらぬ速さでセブンが飛び出していく、まるで真つ赤な流星だ。と、ここで重大な事に気付く。

「しまった……武器が無い！」

先程、観測ロケットを飛ばした際に、オイタをし過ぎた俺達はカンカンに怒ったゴドラ母ちゃんにオモチヤウルトラガンを取り上げられてしまった。

流星の奴らといえど、武器も取り上げずに軟禁するのはマズイと懲りたんだろう。

「いや、ここは気密室になっている、という事は……あつた！ 消火斧だ！ ……一本だけだ」

そうか、船なら浸水や火災時に備えて扉を破壊するための消火斧が各所に備えられている！

ゴドラ星人め、さては原始的すぎて、斧が武器だと認識できてないな。もしくは、脅威にはならないと思っているのか。

「フルハシ隊員！」

「……いや、これはお前が持て。銃を手に入れるまでは、斧でもいいから武器をもつてないお前さんなんか、頼りにならん」

「ええっ!? フルハシ隊員はどうするんです……?」

「俺はこの、鍛え上げた鋼の肉体こそが、一番の得物だよ。全身凶器人間さ！ むんッ

！」

そうやって力こぶを見せるフルハシ隊員。

……まあ、確かに本編の活躍を見ても説得力はある。

等身大での艦内戦闘なら、斧を装備した俺より主力というのは、言い過ぎでもなんでもないような気がしてきた。

「では参謀、まずは乗組員を解放します。そのあと、数の暴力で武器を奪い返しませう」

「案内を頼みます、我々の後ろから付いてきてくださいね……参謀、それは？」

「……これかね？ なに護身用さ、ないよりはマシだろう？ ……安心したまえ、先頭は

キミたちに任せるよ」

そうやって、いつの間にか艦長秘蔵のワインを一本拝借している参謀がニヤリと笑う。

……やだこの人、絶対殺る気満々じゃん……！

火炎瓶にでもするおつもりですか……？

本当に戦わないでくださいね！ 貴方にもしもの事があつたら、俺達が隊長に殺されてしまう！

「いぐぞー」

廊下に出ると、そこら中にゴドラ星人の死体が倒れていた。

顔の発光器官が焼き切れていたり、首元や関節部分の甲殻が見事にひしゃげているものばかりだ。セブンがその剛力で力任せにぶつ叩いたせいだろう。

やっぱり人間大の個体じゃあ、セブンの足止めすら出来んか。

ゴドラの死体でセブンの通ったルートが丸わかりだ。面白いな。

「船室はこっちだ！ あのを右に……おい、来るぞ！」

「でりやああああああ!!!」

曲がり角で待ち伏せしていた個体に、姿も見えないうちから走りこんでいたフルハシが身をかがめ、勢いそのままに渾身のタックルをお見舞いする。

自分達に対して突進などという野蛮極まりない方法を探るとは思っていなかったのか、意表を突かれたゴドラ星人は壁に叩きつけられ、倒れこむ。

「やれ、ソガ！」

「うおおおおお貫つたああああ!!」

大きく振りかぶった消防斧を、遠心力その他諸々を乗せ、その頭頂部で仲良く並んだ眼球の直球ド真ん中に振り下ろす！

脳天唐竹割りじゃああああ!!!

会心の一撃!!

決まったああ!!

カツキーーーーーン!

「……ハア!??!」

小気味良い金属音をたてて必殺の斧が弾かれる。

左右に真つ二つに分かれてグロ注意になるはずだったゴドラ星人は、しばらくフラフラと目を回していたが、頭を二、三度振って立ち上がると、呆気にとられる俺に飛び掛かってきた!

地面に引き倒され、マウントを取られる俺。

「大丈夫かソガ! ……あッコイツ! くそ、放しやがれッ!」

加勢しようとしたフルハシの背後の扉が開き、もう一体のゴドラ星人が現れ、そうはさせじと羽交い絞めにする。

うおおっ!? マズイ!

俺に覆いかぶさるゴドラ星人は俺の首元を搔ッ切ろうと、シャキシャキとその鋭利なハサミを開閉させながらじりじりと迫ってくる。



うう、戦わないでとか生意気言っすすみませんでした参謀……

やはり、別人とはいえ、ウルトラマンもない世界線で何度も日本を救ってきただけはある。

ゴドラ星人より参謀の迫力の方が怖かったのは内緒だ。

「さ、参謀……た、助かりました……」

「……ハアハア、いや、いいんだ。昔取った杵柄という奴さ。……それよりフルハシだ  
！」

「このやろう！ 俺様を舐めるなよおおお!!!! エヤア!!」

参謀に助け起こされた俺が、加勢しようと目を向けると

丁度、フルハシ隊員は、ゴドラ星人を一本背負いで床に叩きつけているところだった。俺がまったく敵わなかった相手をたった一人で、である。

「……おい、あの白い管の部分を狙え、今度は仕損じるんじゃないぞ！」  
「ハッ！」

お互いのハサミと拳をボクサーのように構えて、フルハシと隙を伺いあっているゴドラの首元目掛け、背後から白い管状組織を断ち切るように防火斧を振り下ろす！

すると今度も、ガスか何か気体のようなものを勢いよく噴出して、プツリと糸が切れ  
たようにその場へ倒れこむゴドラ星人。

さつきまでの強さは何処へやら、だ。

「やつら、硬い甲羅で身を包んでいるくせに、手足の動きがえらく素早いと思ったが、まさか圧縮空気で動いていたとは……」

「まるで工場のコンプレッサみてえだ！」

「……しかし、よく気付かれましたね」

「ああ、セブンの倒した個体が首からシューシュー音を立てていたんでまさかと思ったが……見ろ、白い部分はガラス繊維だ」

「……ってというと、光ファイバーのような？」

「うむ、生体の一部としては非常に頑丈だが……ここなら我々の武器でもなんとかなりそうだ。次に進むぞ！」

「ハイ！」

弱点さえわかればこちらのものだ。船室を一つずつ開放し、通路にある斧や艦内戦闘用の小銃を手に入れては配っていく。

「おお、無事に生きていたか！ ……この臆病者め！ 随分と待たせてくれたなあ！」

「艦長！ よくぞご無事で……」

「こちらの戦力が整い次第、まずは動力室と艦橋を制圧する。追い詰めた結果、自爆でもされたら敵わんからな」



「……ハッ、参謀！ 我々海兵の力を今こそお見せしましょう！」

それからはもう凄かった。

やはり戦いでものを言うのは、なんといつても数だなど思ったね。

ゴドラ星人の装甲は強固で、艦内用の小口径銃では容易くはじき返されてしまうが、一匹に対し数人がかりで打ち込めば、どれか一発は目玉や発光器、白い管を傷つけ、動きを鈍らせることが出来るし、実際に彼らの練度がそれを可能にした。

そうして弱つたところに消防斧を持った船員がとどめを刺す。

対してゴドラ星人の武器は当たれば猛烈な痛みと痙攣で戦闘不能になるが、それだけだ。

いや、実際に食らった俺とフルハシから、効果を聞いた艦長たちが本当に言ったんだって！ なんだそれだけか……って！

つまり、簡単に言うのと死ななきや安い。

先頭の船員がやられても、その背後から後続隊員が飛び出し、斧だの拳銃だの消火器だの、艦内のありとあらゆる凶器で攻撃を仕掛けてくる。凶器じゃなくていつそ、狂気だ。

それぐらい、自分たちの艦を奪われた海兵達の怒り具合は凄まじかった。彼らの誇りを傷つけられたのがよっぽど、腹に据えかねたらしい。

撃たれても死なないと分かった途端我先にと突撃して袋叩きにしていく船員たちを見て、彼らのバーサーカー具合に俺が引いていると、フルハシが何を当然の事を……といった表情で首を傾げる。

いや、一番のバーサーカーはこの人だった。

とつくに我々のウルトラガンは取り返したのに、自分の分を参謀に渡して、自分は斧を両手持ちして暴れ回っている。

この船に乗ってる奴で頭バーサーカーじゃないのは今や俺だけだ。

もう今日からこの船の名前は狂気度マックス号だ。

そうしよう。

俺の口から乾いた笑いが漏れると同時に、右舷から何かが引きはがされるような金属音が聞こえてくる。

どうやらセブンがやってくれたらしい。

……この艦内の惨状を見て、地球人を嫌にならないでくれるだろうか……なんてか  
んがえていると、艦が大きく揺れる。

……ああ、巨大化したセブンがマックス号を持って地球に帰還してくれているのだな  
……と理解したところで、オレは愕然とした。

……そういやオレ、船を奪還した後、海に戻す方法を何にも考えてなかったわ。

いや、ホーク2号で牽引するとか、なんとか……とりあえず防衛軍の科学力でなんとかなるやろ、としか考えていなかった。

セブンの仕事を減らす為にやったことで、結果的にセブンの仕事を増やすことになるうとは……

ゴドラ星人の事を、まったくやかかく言えないな。

一番詰めが甘かったのはオレでした。

……地球人にはハサミなんて無いんだけどなあ……

## 消された出番

「キリヤマ隊長及び、ウルトラ警備隊に次ぐ。ただいまユシマ博士が南極より到着しました。エアポートに集合してください」

「了解！ いこう」

「……おや、珍しいな」

「どうした？ ソガ？ 腕時計なんか見つめて」

「……いやなに、超音速ジェットでも、遅刻はするんだなと思っただけさ」

「お前の寝坊じゃないんだから」

「うるせえやい」

今日は南極の地下基地から、日本の頭脳とも評されるユシマ博士がやってくる日だ。

極東基地のリーダーを改良するため、視察にカモフラージュしてユシマダイオードを取り付けにくるのだ。

……つつても、既に飛行機内でビラ星人に洗脳されてるけどな。

ウルトラ警備隊からは、その滞在期間中のボディガードとして、フルハシが護衛の任に就くことになっている。うん、納得の采配だ。

例えゴドラ星人が暗殺に来たって、身を挺して守ってくれるだろう。

……もつとも、さしものフルハシといえど、時間停止とかいう最強のチート技の前ではまるで役に立たんのだが。

というわけで今回は、目覚まし時計を一杯買ってきたぞ。

本来の精神の代わりにオレが入ってしまったせいで、今回のソガ隊員はめっちゃめっちゃ朝に弱い。

隊のみんなも知ってるくらいだ。

そんな俺が大量に目覚まし時計を買い込んで、そしてそれを寝ずの番をするフルハシ先輩や、時差ボケに苦しむであろうユシマ博士に好意で貸してやったとしても、そこまで不自然ではあるまい。

ああ、ついでにポインターのの中にも一個忘れてきちゃうかな。

これで準備OKだ。

「……おい、えらく念入りだな。時計屋でも始めるつもりか？」

「いやなに、到着が遅かったもんで、ジェットトの機内時計を確認したら、10分も遅れてやがるのさ。きつと南極からの時差って奴だろう……博士の腕時計も遅れてたらかわいそうだからさ」

「……ハア、さてはあんまり地理の勉強をやってこなかったんだな。南極から、経線に

沿って進むジェットで時差が発生するもんか」

「そうなのか!？」

「そうなの」

「もう、まだ寝ぼけてるんじゃない? そうね、博士に爪の垢を分けてもらえないか、明日聞いてみましょうよ!」

「よせよアンヌ!」

「ハハハ、でも不寝番のフルハシ隊員には有難いでしょう。優しいですねソガ隊員」

……うむ、全然怪しまれてない。

隊員のみんなから見ても自然という事は、ピラ星人にも警戒されてはいないという事だ。

俺のおつむの評価と引き換えに、トラップの設置としてはいい感じ。

まあ、今回もセブン無双だからそんなに頑張るつもりはないけど……念の為にね。

そして翌朝。

「博士、よくお休みになれました?」

「まあね。……でも、疲れていたせいとか、夢ばかり見ていたらしい」

「博士のような優れた科学者ってどんな夢をごらんになるのかしら?」

ソガ隊員に聞かせてあげてくださいいな」

「興味あるなあ、僕も夢を沢山見るんですが、きつと天才の夢とは違うんでしょーねー」  
「いやあ、ごく当たり前のつまらん夢ですよ。……そうだ、昨夜は宇宙人の夢を見たなあ。……地球防衛軍に一人だけ宇宙人がまぎれこんでいてね。そいつが僕の仕事の妨害をするんだよ」

へえ……と頷く俺は、隣でダンが、ギクリと肩を竦めたのを、横目でちらりと確認する。

まだまだ地球人のフリが下手だなあ……ええ？

そう、実は今回の第五話は、ダンが地球人としてのふるまいを矯正する話でもある。

もちろん彼はセブンなので、宇宙的知性や超能力で、宇宙人の仕事をすぐ見破ったりする。

だが、それを根拠に行動してしまうと、周囲と情報の齟齬が発生してしまい、とてもマズイことになる。

……というのを、このユシマ博士を巡るピラ星人との一件で学んだんじゃないだろうか。

この後の話はそういう事態がぐつと減るからな。

だからあえて、今回はあんまり手出しせず、しかし、お手本だけは見せてやろうと思う。

そう、【真相に気付きながらも、それを周囲にさりげなく伝えていく地球人の擬態ムーブ】ってやつをさ!!!

これは自慢じゃないが俺の方に一日の長がある。

おれの捜査……というかヒント出しを見て学ぶのだ、セブンよ。

ついでに牢屋破壊の言い訳も考えないで済むようにしてやるうじやないか。

……その代わり戦闘は任せたからな。思う存分無双しちゃってください。

そうこうしているうちに、ユシマ博士に指名されたダンが、リーダーにユシマダイオードを取り付けると、たちまちショートしてシステムがダウンする。

……ふふふ、正気に戻ったらリーダーの修理は、貴方にバッチリやって貰うから覚悟しとけよ博士！ いや博士悪くないんだけどさ。

リーダーがダウンしたことに、長官はお冠だ。

指令室でお叱りを受ける。

「単なる偶然とは、どうしても思えない節がある。……その場合フルハシ！ ボディガードとして何をやっておったか！」

「ハッ、私の責任であります。……博士、本当に申し訳ありません」

「いや、フルハシ隊員の責任ではありませんよ。私の考えでは……残念なことに、この基地には宇宙人のスパイが入り込んでいるようですね……」



まさに大正解だ。

それを言っているのが宇宙人のスパイ本人でさえなければ、百点満点の名推理だ。

「ダン君、私の手から受け取ったダイオードを、あの時、何かとすり替えたんじゃないませんか？」

「なんですって！ 博士、私がスパイだというのですか!？」

「……お言葉ですが博士、何の証拠があつてそのようなことを？」

「証拠？ レーダーが故障するという、重大なアクシデントが起きているじゃありませんか。……まあ、私はあえて、この中にスパイがいるとは云いませんが……。明らかに私の仕事を妨害しようとする何者かの計画的な犯行であることに、間違いはありませんなあ……」

お前、ついさつきスパイがいるって自分で明言したとこやぞ。

……もつとも、博士もといビラ星人のお仕事（侵）を妨害しようとしている奴は、ここにいます。ごめんなさい。

探偵が得意顔で、こいつが犯人です！ って指さした時に横から。すみません私がやりました！ って出て行きたくない？

などと、ダンを陥れようとしているビラ星人の計画を滅茶滅茶にしておちよくりたいという、非常にしようもない衝動に駆られるが、我慢だ我慢……だめだ、まだだ、まだ

笑うな。

その場はいったん解散となる。

ダンは今頃、博士が何かを企んでいると確信して、後を追い機械室に行つたかな。

「隊長、先程の件ですが……」

「安心しろ、ダンがスパイなどと、誰も思つちやいない」

「ハツ……しかし、博士の言っていたことの半分は本当かもしれませんよ」

「何!？」

「これを見てください」

ガラガラと机に目覚ましをぶちまける。

「この時計達が一体どうした？」

「これは私が、同じ日に購入した、ただの私物ですが……よく見て下さい」

「……二つだけ、二分ほど遅れているな」

「この二つは昨日、私が博士やフルハシ隊員に貸したものです。渡す前はピッタリだったのに、どちらもきっかり二分遅れてるんです! ……そしてこれは外のポインターに忘れていたもので、まるで他のと誤差は無い」

「つまり、ユシマ博士が滞在していた部屋の時計だけ遅れている、と?」

「おかしかったのは博士が乗って来られたジェットの内時計もです……たった数分で

すが、博士の周囲だけ時間が狂っているんです！」

「たったこれだけの事で……スパイは博士の方だとも言いたいのか？」

「いえ、しかし……偶然でしょうか？」

その時、指令室の回線が鳴る。

「こちら機械室のウエノです！ モロボシ隊員がユシマ博士を襲っています！ 応援を  
！」

「なんだと!？」

駆け付けてみれば、通報通りに二人の男が揉み合っている。レンチを武器にしている博士より、どう見ても明らかにダンの方が優勢なのが笑ってしまう。確かにこれは揉み合っているというより、博士がダンに襲われている、だな。

なんとか二人を引きはがしたかと思うと、今度こそダンは腰からウルトラガンを引き抜き、博士へと向けるではないか！

隊長が博士を庇い、アンヌが制止している間に、ダンからウルトラガンをボツシュートだ。危ないからね。

「見たかね諸君、この男は僕を殺そうとまでしたんだ。これではつきりしたでしょう……この男こそ宇宙人なんだ！ スパイなんだ！」

論理の飛躍が過ぎますぜ博士。

「フルハシ、ソガ……ダンを独房に監禁しろ！」

……あちやあ、駄目だったか……

「隊長、違います！ この男の言うことを信じてはいけません！あとで酷い目にあいませよ！」

「ソガ、独房のカギはお前がセットして、くれぐれも目を離すな！」

「……ハッ！」

「宇宙人は博士のほうです！ 離して下さい！」

「ええい、こいつはだいたい重症だなあ……」

「どうして僕のいう事を信じないんですか！」

「……その根拠を、お前さんが示さないからだよ」

「根拠ですって!？」

こうして独房に入れられるダン。

……と、その見張りに立たされる俺。

なんで……？ これじゃあダンがセブンに変身できないじゃないか。

変身の邪魔だからとダンから腹パン食らうのは、もう少し後のはずなんだが……？

俺が首を捻っていると、やがて基地に警報が鳴り響き、宇宙船団の接近をキャッチし

たと告げる。

しめた！ これで離れられるぞ！

折よくビデオシーバーに着信がある。

みると映っているのは隊長の顔だ。

「ソガ！ 何をしている！ 早く上がってこんか！ 出撃だ！」

「ハッ！ ただいま！」

「……ところで、さつき機械室のタイマーが数分だけだが遅れていた。防衛軍の計器が狂っているなどありえんことだ！ 人手が足りらんから、代わりの誰かをやって、直させてこい！」

「……まさか……隊長ッ……!?!」

「奴も勘の鋭いところはいいが、それだけではなく、お前の推理を見習って貰いたいものだ……急げよ？」

……オイオイ、部下の育て方がスパルタ過ぎやしませんか？ 隊長？

成長の為にわざと独房入りってのは、もしも受けるのが俺だった場合は勘弁したい育成法だ。そんなスパルタで育った奴が教えるもんだから、後々レオが泣くことになるんだぞ！

「ソ、ソガ隊員……?！」

「隊長がユシマ博士を見つけてこいってよ！」

「……ありがとう！」

どうやら独房の修理はしなくて済みそうだ。

……俺もさつさとウルトラホークで大空へ進むとするかな！

あとはもう特筆するべきことは何もない。

セブンとウルトラホークの前では、ビラ星人の宇宙船団など相手では無かった。

一機、また一機と墜落し、爆発炎上！

戦場となったホテルの庭園で、巨大化して睨み合うビラ星人とセブンを、煌々と照ら

すように、渦まく炎がうなりをたてて燃える！

……というか、時間停止なんてすげえ武器があるんだから戦闘にも使えばいいのに

……いや、もしかして既に使っているのか!?

確かにそうでも無けりや、直立したウチワエビみたいな、見るからに弱そうなビラ星

人がセブンに攻撃当てられるわけないか……

どうやら、時間停止が使えるのも船団の旗艦に乗ってたボス个体だけみたいだし、

さつさとトドメと行きますか。

最後の一機をレーザーで叩き落とし、セブンが真つ二つにした巨大ビラ星人の真上に

シュート！

どうだ見たか！俺達こそが地球を守る警備隊、その名もウルトラ警備隊だ！

## ビター・ゾーン (I)

「おお、ご苦労さん」

「別に異常はありません」

指令室で通報の確認から戻ったダンとアマギを出迎え、労う。

そうして休憩室へと向かうダンを追いかけてようとすると、フルハシ先輩に腕を掴まれ  
しまう。

「おい、ソガ！ 最近どうした？ ダンにベツタリじゃないか。休憩ぐらい一人でゆっ  
くりさせてやれよ」

「いやあ、その間にさっきのパトロール資料を貰って、報告書を手伝ってやろうと……」

「ソガ……こんな事を言うのもなんだが……あんまり二人の邪魔してやるなよ」

「……ハア？」

フルハシがしばらく言いよどんでいたが、意を決したように小声で、俺の耳元へヒソ  
ヒソと言いつつ。

……え、何のこと？

「当ててやろうか、お前、ダンとアンヌが最近いい感じなのが面白くないんだろ……?」  
「……え!? ちよちよちよ、ちよつと待つて下さいよ! どうしてそうなるんです?」

「悔しいが、確かにダンが来るまでうちの色男といえ、お前かアマギだったもんなあ……片方は生真面目にコンピュータが恋人となりやあ……分かる、分かるぞ」

「待つてください、俺がアンヌに? ……いやないない」

「ウソを吐け! アンヌ隊員と言やあ、この極東基地きつてのマドンナ。300人の隊員の憧れの的だぞ。以前はちよつと芋っぽいなんて言う奴もいたが、最近は特に色気づいちまつて……」

「そりやまあ、急に垢ぬけて、さらに可愛くはまりましたけど……それが誰のせいかは、一目瞭然でしょうに」

「だからこうして、心を鬼にして、かわいそうな誰かさんを引き留めてやつてるんじゃないか。人の恋路を邪魔するなんて、主義に反するが……悪い事は言わん、やめとけつて! お前の為を思つて言つてるんだぞ」

「いや、ですからね、俺としてはダンこそお似合いだと思つてますよ」

「本当か……それにしちゃあ、最近やけにアピールが過ぎるぜ? 医務室の周りをウロチヨロしたり、荷物を持ってやつたり……」

「それは……」



仕方ないじゃないか!

オレは少女に擬態したピット星人を、正体の分からないうちからパラライザーで騙し討ちして麻痺させたり、問答無用で撃ち殺したりしたもんだから、アンヌからの好感度というか、信用度がマイナス方向に振り切ってるんだからさ!

普段は女子供や病人に優しいんだぞっていう面をチョットでも見せておかないと、マジで野蛮人だと思われかねない。

しかも、その好感度上げを短期間にしなくちゃならないってんだから、恋愛シミュレーションの早解きかってくらいハードモードなんだぞ!

別にアンヌとずつとお近づきになりたいんじゃないやなくて、オレとしてはたった一話分だけ信用して貰えればそれでいいんだからさ!

「もしかして……ストオカアの気でもあるのか?」

「失敬だな! だいたいね、僕にはこれでもガールフレンドがいるんです! 滅多なことと言わないで貰いましょうか!」

まだ中身が切り替わってからは電話だけで直接会えてないけど……

そう教えてやると、フルハシはひとしきり驚いた後、今度は俺を酷い女たらしかのような目で見てくる。違うそうじゃない!

なんでオレがこんな不名誉な扱いを受けなきゃいけないんだ……  
それもこれも、全部あのピット星人とかいうクソアマのせいだ！

R1号が完成したら、撃ち込み先として真つ先に提案してやる！覚悟しろ！  
というかそんな事よりダンだ、今見失うとほんとにマズイ！

後ろで通信員が変な電波とか言ってるから、絶対今日だ！

フルハシを振り切って、休憩室へと向かったダンの後を小走りで追う。

途中でアンヌの部屋の近くを通るはずだから、それまでに追いつかねば！

「おおい、ダン。また報告書を手伝ってやるよ」

「ああ、ソガ隊員、いいんですか？ 指令部を離れて」

「いいんだいいんだ、そんなことより後輩育成さ」

すると、遠くからアンヌが悲鳴を上げて、ダンを呼ぶ声がある。

「ダン！ ダン！ 助けて！ 部屋に変な生き物がいるの！」

「なにッ！」

そう言つて、俺達はアンヌの部屋にすつ飛んでいく。

良かった、間に合った……

……でも今さ、確実にアンヌ俺の事スルーしたよね？

ダンと二人で立ってたのに、もう一人にはまるで助けを求めなかったな。

……案外強かな女だ。お呼びじゃないのは分かってるが、そんなに露骨だと、傷つくぞ。

アンヌの私室に飛び込むダン、いやー流石、モテる男は違いますわ。

普通、女性の私室に入るならもうちよつとなんかあるだろ。

彼女の部屋なら関係ないってか……？

……そうだよ、僻みだよ！ 悪かったな！

「……何もないじゃないか」

「変ねエ……」

「……弱虫さん、あんまりびつくりさせないでくれよ」

そういつてアンヌの額を人差し指でつつくダン。

ヒューー！ 見せつけてくれちゃってまあ！

そんな指でコツン、なんて仕草、少女漫画でしか見たことないぞ!?

いかフルハシ、女たらしってのはな、こういう奴の事を言うんだぞ！

「あ、ダン！ あれよ！」

「誰だ！ 出てこい！」

「誰なの!？」

腕に抱きついたアンヌを庇いながら、部屋の隅に蠢く漆黒の何かにじりじりと近づい

ていくダン

「危ないわ、ダン！」

「ライトを貸して」

アンヌに手渡されたライトを翳してみても、部屋その一角だけ、真っ黒いままだ。今度は雑誌を丸めてつついてみると、中へ吸い込まれてしまう。

「サ、騒がないでください……ワタシは、ワタシは……クルシイ！」

「誰なの？」

「ワタシは……ハアハア……ある、遠い都市から……フウフウ……来た、ものダ……」

「どうしたんだ!？」

黒いモヤの中にいるらしい存在は息も絶え絶えといった様子で、事故を起こし重傷を負った事、手当は自分で済ませた事を伝え、このまま傷が癒えるまで、誰も呼ばず、そつとしておいて欲しいと懇願してくる。

その聞こえる声からだけでも伝わってくる痛々しさに、ダンも哀れみを覚えたのか、構えていたウルトラガンをそつと降ろす。

「本当の事を言おう……ワタシは……あんたがたニンゲンが信用できないんだ……怖いんだ！……とでも、怖くてたまらないんだ……」

彼の告白を聞いたダンは、完全に攻撃の意思を失ったのか、黒い存在を安心させるよ

うにウルトラガンを腰に戻し、痛みに苦しむ声にじつと耳を傾ける。

「……アア……痛いなア……」

「かわいいそうに……痛むんだわ」

「うん」

「どこへも行かないで、そこで静かにおやすみなさい」

「ハアア……許してくれますか……？」

「ええ」

「ああ……！ アリガトウ……！」

謎の存在の要望通り、そっとしておいてやる事にしたダンとアン又は、お互いの意思を確認しあうように、深く頷きあつた。

そして……

「あッ!!」

二人同時にしまった！ と声を上げ、まさしく痛恨の極みと言わんばかりに後ろをゆつくりと振り向いた。

そうして、ようやく壁に腕を組んでもたれかかる俺の存在を思い出したのか、何度も頼み込むように手を合わせて懇願してくる。

俺がそろそろ壁とひつつきそうになっていた背中を離して、スタスタと黒い存在へ近

づいて行くのを見て、息をのむ二人。

「ソ、ソガ隊員!？」

「安心しろ、どうかしようってんじやない。隊長達にも黙っておいてやるさ。二人とも、俺を一体どんな奴だと思ってるんだ？」

「ソガ隊員……!？」

「これで俺も共犯だな。……いや、別に仲間外れに放っておかれたからって、拗ねてるわけじゃないぜ？ 呼ばれもしてないのに勝手についてきたのは俺のほうだからな？ ええ？」

「ご、ごめんなさい……!？」

そういつて俺は黒いモヤの前に一本のボトルをドンつと置く。

「そら、水だ」

「アナタは……!？」

「ソガだ。……怪我をしてるってんなら、とにかく水分が要るだろう？ 安心しな、毒なんて入ってないさ……もつとも、この星の水を、お前の体が受け付けるかどうかは、知った事じゃないがね」

「水ダ！ ア、アリガトウ……水質はコッチで調べるカラ……そっちを向いててくれな  
いカ……!？」

「やれやれ、注文の多いお客さんだな」

俺の様子を見て、安心したのか笑顔で頷くダンとアンヌ。

ダンとアンヌとペガツサと、信用を得なけりやイカン相手が多すぎる！

さて、どうしたもんかなあ……

## ビター・ゾーン（Ⅱ）

アンヌの私室で俺達は談笑する。

「アンヌさん、ダンさん。そしてソガさん。ワタシは地球人はもつと恐いものだと思っ  
ていタ。こうして、命をとり止めることができたのは、アンタ方のあたたかい思いやり  
のおかげダ。アリガトウ……」

「君はどこから来たんだ、教えてくれ」

「何も言えナイ。宇宙のある町から来タ、とだけいっておくヨ」

「宇宙人なんだね」

「ハハハ、へりくだるなヨ。地球人だつて立派な宇宙人じゃないか。わが宇宙には、一千  
億の太陽をかかえた銀河系のような島宇宙が、1762億4321万866もあるんだ  
ぜ？」

「へええ……計算したのか？」

「ああ、みんな同じ宇宙に住む仲間同士さ、ハハハ……そのことがアンタ方と付き合つて  
よくわかつたヨ。ホントにいい人なんだなアンタ方は……」

「そんなに褒められちゃあ、地球星人としても悪い気はしないね」



一つの部屋の中で、4人の宇宙人が打ち解け、笑いあう。

「……しかし、皮肉な話だ」

「何が？」

「こんな大きな宇宙の中に、地球とワタシたちの町が、一緒に生きることの出来る場所がないなんて、なんという悲しいことだダロウ……」

「君、何のことだ？」

ダンはその不穏な言動を訝しみ、カップを置いて聞き返す。

だが、影はそれを誤魔化して、不自然に話を逸らす。

「いや何でもナイ。さつき、眠ってしまつて、夢を見たんだ……。ああ、ノドが乾いた

……」

「今あげるわ」

「しかし本当に水をよく飲むな、お前さんは」

そう言いながら、俺達三人は視線を逸らす。彼が来てから何度も繰り返された行為であるから、慣れたものだ。この宇宙人は水を飲むところを見られるのが恥ずかしいらしい。シャイなやつだ。

あの後、救急セットや薬品なんかも提供しようと言つたんだが、それらは全て断つた彼が、その代わりに水だけは沢山くれと受け取るのだから、とりあえず近場の飲料水を

かき集めてきた。

「ああ、我々の体は、内部の水分含有量がとても多くてネ……傷を癒すにも、この空間を生み出すのにも大量に使うんだ……でも、キミが最初にくれた水で、地球の水分も問題無く使えるという事が分かった。沢山使えるおかげで、思っていたより傷の治りが大分早いんだ。重ねて礼を言うヨ、ソガ隊員」

「いやなに、事故で漂着した怪我人には、水を渡すのが鉄則さ。なにせ、生命の源だからな」

「生命の源か……確かに、この宇宙に生きる無数の生命体も、過半数が水分を必要とする……宇宙の約半分くらいは、皆ただの水の集合体なんだな……」

「そうよ、例えみんな顔が違ったって、水でできてるのはみんな一緒なのよ」

ダンとアンヌがしきりに頷いている。

俺としては半分くらいは水が要らないって聞かされて、そっちの方が衝撃なんだけど。

「そっただお前さん、名前は？」

「名前……？」

「いつまでも【お前】じゃあ座りが悪い、俺達ばかり名前と呼ばれてさ」

「しかし……我々の都市ではお互いの生活が見事に管理されているから、そのようなも

のを使わナイ。生活局から割り振られた番号さえあれば、全て事足りるんだヨ」

「じゃあ、その番号は何番なの？」

「そうだね、君たちの言語に照らし合わせると……？ 区画の9ライン……？ 9といったところか」

「でいきゅー？ それじゃあ……ダークだ。真つ黒のダーク。どうだい、かつこいいだろ」

「いいわね、分かりやすく。どうかしら、ダーク？」

「それがこの星でのワタシの認識番号ということか？ 地球人は面白い事を考えるなあ

……じゃあ、そう呼んでくれてかまわナイ」

「良かったなあ……ダーク！」

我ながら安直ではあるが、当人に文句がないならそれでいい。

いつまでも呼称がないと不便なのだ。これが地球人の感性なんだから仕方ない。

「しかし、聞いていれば、随分と先進的な生活なんだなあ。名前が要らないなんて」

「君は、ある都市から来たと言ったね……それはどこなんだ？」

「ねえ、あなたの町の話をして！ 工場はあるの？ 学校は、新聞社は？ 映画や音楽や

テレビは？ ねえダーク……」

「俺達はさ、セブン以外に宇宙人の友達つてのが今まで居なかったんだ。もつと君らの

事を知って、仲良くなりたんだよ」

「……ワタシの町は、君たちの町とはだいぶ違うんだ。もちろん工場はあるさ……想像もできない巨大な工場がネ。そこでなんでもつくるんだ……驚いちやいけない、さつき言った水もそこで全員分を作る。もちろん空気もダ！」

「空気も!？」

「そう全て！ 工場が止まれば数時間内に、全市民は窒息死ダ。われわれの都市は自然の力をひとつもうけていないんだ。……科学が進むということは不便なものダ。君たちも気をつけるがイイ。石斧で獣を追いかけまわした大昔の生活に、あこがれる日がある……その花」

「え？ 花？」

最初は躊躇っていたが、俺達の質問攻めに対して、得意げに話すダークを尻目に、ダンは何かを考えこみながら、うわの空で部屋を歩き回る。

そして、いきなり話しかけられて、慌てて意識をこちらに引き戻す。

ダンの目の前の置いてあった花瓶のことを言っているんだろう。

「その花は、工場でこしらえたんだロウ？」

「そうよ造花よ」

「君たちの科学もどうやら、私たちの都市にだいぶ近づいてきたようダナア……ハハハ

！」

「ハハハ!!」

「……永遠に枯れない花力……私たちの最近のテーマはね、永遠の命ダ！ 君たちの医療は、どんなだい？ さつきソガが無理やり渡してくれた箱は、応急処置用ダロウ？」

「なあに、まだまだそれなりだよ。ま、あと50年もすれば、そうなるかもな」

「ハハハ、随分と自信家じゃないかソガ！ ……そうダナ、あと50年……」

その時、俺達のビデオシーバーが着信を知らせる。

画面のアマギは、かなり深刻そうな顔をしているではないか。

そうか、ついにか……この優しく美しい時間が、このまま永遠に続けば良かったのに

……あの造花のように。

「三人とも！ どこにいるんだ、すぐに来い！」

「どうしたんです？」

「大変なことになったぞ！」

指令室では、謎の電波を受信して、再生していたところだ。

《……こちらはペガッサ市……地球に軌道変更をお願いします。ペガッサ市は、動力系統に重大な故障をきたしました。……宇宙空間都市ペガッサ市の市長室から送信しています。ペガッサ市は今から80時間の間、地球の軌道変更を要請します》

「何だって？ 軌道変更!？」

「チクシヨ、ふざけやがってえ！」

《ペガツサ市の動力系統に重大な故障が起きました。ペガツサ市は、太陽及びその惑星の引力の影響を受け、現在ジグザグに動いていますが、やがて地球の軌道に入ります。したがって、動力系統の修理が終わるまで、地球の軌道変更を要請します……繰り返します……》

そう80時間、たったの80時間だ。

今こそピラ星人の時間停止能力が欲しい。

……どうして、あの素晴らしい力を侵略者なんかが持つて、ペガツサには時間停止技術がないんだ。侵略なんてアホな事に使う暇があったら、今こそペガツサシティの間を、修理が終わるまで消し飛ばして欲しい。

時間よ、止まれ。

ダンはハツとして司令部を飛び出していく。

俺にも行先は分かっている。あの部屋だ。4人の宇宙人が談笑した、ミルクのように甘い空間へ戻っていくのだ。

走り出す俺達の後ろでは、どこかで聞いた覚えのある、とても落ち着いた、確かな知性のきらめきを感じさせるおだやかな声が、声音とは裏腹に無情な事実を繰り返す地球

へ突きつけていた。

「本当のことを言ってくれダーク。君はペガッサから来たんだろ！」

「違う！」

「その声、受信したペガッサの奴の声に、そっくりだ！」

「発声器を使っているのダロウ、そのペガッサ市民も。似たような発声器を使っているダロウ」

「それじゃ、教えてくれ。君はペガッサ市のことは知らないか？」

「知ってイル。名前だけは……ペガッサ星が消滅する前に、脱出したペガッサ星人が、宇宙空間に素晴らしい大都市を建設した。それが、宇宙都市ペガッサ市だ。地球から見ればけしつぶのような大きさだが、都市をつくっている物質の密度は地球の約8万倍だ……」

「大変だアンヌ！ペガッサ市は見かけより8万倍の大きさだ。それが地球とぶつかるんだ！」

「えっ……」

事の重大さに立ち上がったアンヌの足が机をひっくり返し、のみさしのティーカップがガシャンと音を立てて、床に叩きつけられる。

「地球は木っ端微塵に砕けるぞ！」

「何を慌てているんだ……？ 彼らの言うとおり、しばらく地球の軌道を変えてやればいい……ただ、それだけのことじゃないか……？」

「バカを言え！ 地球の軌道をどうして変えるんだ！」

「ナンダツテ!? オイ!? 地球は自分で動けないノカツ!? ……勝手に動いている物の上人間は乗つかてるだけナノカ!? ……それだったら、野蛮な宇宙のほとんどの星と同じじゃないか！」

先程までの余裕はどこへやら、声に焦燥を滲ませて叫ぶと、急に黙りこくってしまうダーク。

こちらから呼びかけても返事が返ってこない。

こうなつては埒が明かないと、ビデオシーバーを構えるダンを制止する。

「やめろ、誰にも言わないって、約束したじゃないか」

「ソガ隊員！ そんな事を言っている場合ではありません！ このままでは地球が！」

「それでみんなを呼んでどうする……？ 銃で脅すのか？」

「それは……」

「ダークの正体がなんであれ、重症人に変わりはない。それより、お前はさっきの事を隊長に知らせて……」

「ですが……証拠を用意しろと言ってくれたのは、ソガ隊員ではありませんか!」



「……ねえ、密度が8万倍といえ、ほとんどブラックホールみたいなものよ。そんな物質が宇宙に本当に浮かんでいたら、光が歪んで、その周囲が見えないはずだわ」

「そうか、星図に乱れがあれば、地球からでも光学望遠鏡や、重力波でも観測できるぞ！」

「……行つてきます！」

ダンが部屋を後にするのを見送ると

そつと、アンヌにお願いをする。

「なあ、アンヌ。頼みがあるんだが……メデイカルセンターからダークの水を取つてきてやつてくれないか……？」

「……この部屋は、私の部屋よ？ 家主を追い払つて何をするつもり？」

「まったく、敵わないな君は……別に変な事をしようつて訳じゃないよ！ ダークと二人つきりで話したいんだ。……男同士でさ」

「……男の人つて、いつもそう。……勝手にしたら！」

ぷりぷり怒ったアンヌが、それでも部屋を出ていつてくれた。

こりゃあ、また好感度がマイナスだ。

参ったね。

## ビター・ゾーン (Ⅲ)

「なあ、おいダーク。聞いてるんだろ？ それともペガッサとの交信を試してて忙しいのか……？ なんとか言ってくれよ」

「……」

「俺はさ、お前のような宇宙人が飛び込んできてくれて、本当に良かったと思ってる。宇宙人ってのは、みんな侵略者ばかりで、地球人と友達になれるのはセブンだけなの？ って小さい頃から思ってた。……でもお前がいてくれたから、ああ、たまたま地球に悪い奴が攻めてくるだけなんだ。そうじゃない宇宙人となら友達になれるかもしれないって、思ってたんだ」

「お前は、俺達の事をいい人だと言ってくれたが……それはダーク、お前の方だよ。文明レベルの遙かに劣る星にやってきて……そいつらと笑い合い、案じる事が出来る……当然てやろうダーク……君は、ペガッサの作業員なんだろう？ 本当は地球を破壊しに来たんだらう？」

「何を言うんだ、ソガ！」

「お、やっと話してくれたな！」

「貴様がソンナ……根拠のないバカな話をするからダ！　ワタシは、ペガツサとは関係ナイ！」

「そうかな？　このタイミングでやってきて……それは無理つてもんだらうよ。ダークの言つてた町つてのはえらく科学が発達してるし……水も空気も作るつて話もペガツサなら納得だ。そりゃあ、星の上にないなら、工場で作るしかないわな」

「そんな星、宇宙にはたくさんアル！」

「最初はどつかの星から、何かを伝える為にやってきたのかと思つたんだが、そりゃもうペガツサから、通告があつたし、その必要もないし……じゃあ、何の為にとなると、なあ？」

「そのペガツサという町が、そんな野蛮な事をする訳がナイ！」

「だから、ペガツサ人だと名乗る訳にはいかない、バレたら宇宙から非難されるから……それにダークよ、それが野蛮だと分かつているなら、なぜもつと野蛮な地球人が、その方法を採らないと思う？」

「フン……地球の科学で、あのペガツサを破壊できるモノカ。お前たち地球人はペガツサ市を作りあげることなどできないダロウ？　作れもしないものをどうやって壊せるというのダ！」

「分かん奴だな……作るのと壊すのだったら壊す方が遥かに簡単だ。だいたい、今の

俺達だって、人間を作るには男と女が必要だが、原始人が石斧でぶっ叩いたら、誰だって死ぬんだ！ お前も！」

「ウルサイ！ 出来もしない事をいうんじゃない！ 不愉快だ！」

「なるほど分かった。ペガツサの人々が脱出しないわけだ。地球を見くびってるんだな！ プライドが高い奴はいつもそうだ！ 自分より下の奴が手を差し伸べると振り払う！」

「手を差し伸べるダト!？」

「そうだ、ダーク。俺はな、ペガツサを救いたいんだよ、本当なんだ！ お前が何星人なのかなんて、どうでもいいんだ。……このままじゃあ、ペガツサか地球、どっちかを破壊しないとどっちかが生き残れない。そんなのもつたいたいだろ？ ペガツサの人が地球に移住して、またペガツサを作り直せばいいじゃないか！ 地球は二度と作れないが、ペガツサは一度作られたものだ、両方の人が生きてさえいれば、再び元の状態に戻る！ お前は計算が得意だろ？ 俺の言ってること分かってくれるだろ……？」

「……ならば、なぜそのペガツサの人々を信じてやろうとしナイ？ 彼らが動力を復帰させる時を待てばいい」

「お前たち自身が信じられない事を、どうやって信じる？ お前が、ここにいてるのはそういう事だろ？ ……協力しようダーク。どっちかを殺すより、どっちも助けた方が

ハッピーエンドじゃないか！ ペガツサと地球人は友達になれる！ 俺達のように！」

「ワタシに一体、何ができるといふのだ？」

「通信機で呼びかけてくれればいい。地球人が信用できなくなつて、同族の話なら聞いてくれるはずだ」

「……ソガ、君の言うように、ペガツサ市の工員という者がいたと仮定して、この状況でそうしないと思うノカ……？」

「じゃ、じゃあ……」

「もしも瀕死の重傷を負うような事故があつたとしたら、彼の通信機が無事な可能性は低いのではナイカ……？ まあ、そんな存在がいたららの話ではアルガ」

「……じゃあ、一緒に来てくれ！ ホークの通信機からなら届くだろう」

「それは……それはデキナイ」

「なぜ!？」

「ワタシは……君たち3人以外の地球人まで信じたわけではナイ。変わらず、ニンゲンが恐ろしい……」

「そんな事言つてる場合か！ 臆病者が！」

「だつたら君たちはどうナンダ！ ペガツサが地球を破壊するからと、脱出しろと言われて、出来るノカ!？」

「できるわけないだろ！ 全人類が一度に脱出するための宇宙船なんて……」  
「そういうことだ」

「……そうか、そうだな。だが、一人でも多く助けると約束する。ありつたけの輸送機を飛ばす。だから……頼む、ダーク！」

「無理だ！ その番号でワタシを呼ぶな！ 君達のような劣った種族が、勝手につけた意味のない名称で呼ぶんじゃない！ 不愉快だ！」

「……あああ、そうかよ！ この頑固もんがあ！ 勝手にしろ！ お前と話しても時間の無駄だ！ 今のでペガッサ人が5人は救えただろうさ！」

「……待テ!!」

「……なんだ」

「……水ダ」

「水だと？」

「生命の源は水ダ、それはきつとペガッサの人々も変わりはない。……輸送機に水をたくさん積んでイケ。もしかしたら、そっちに乗ってくるかもシレン……」

「ダーク……!」

「ダガ、ペガッサ人はある植物しか食べられナイ。その植物はもはや、滅亡した母星以外には……ペガッサの食品工場にしか、無いダロウ……」

「……分かった。植物の種だな？ それを真つ先に運び出すように言おう！」

「地球で育てられるカハ……」

「やってみせるさ、うちにはな、お前たちにも負けない名プランナーがいるんだ！」

「そして輸送機にはダンとアンヌも連れていけ……彼らの言葉なら、届くはずだ」

「……そうか、そうだな。お前は……。……いや、分かった。じゃあなダーク。戻ったら

また会おうぜ！ ほんとは俺は……お前を助けたかったんだ。今度は俺の部屋に來い

よ！ もちろん誰にも言わないからさ！ 絶対だぞ？」

「……そうだな」

## ビター・ゾーン (IV)

部屋を出ると、アンヌがミネラルウォーターを抱えて、扉の前で待っていた。

「アンヌ！ ……戻ってくるのが、ずいぶん遅かったな」

「ええ、水が重くって。 ……そっちは随分と早かったみたいね」

「ああ、ペガッサを救わないとならんからな。じゃあ、行ってくる！」

「待って、私も行くわ！」

「いや、君は残れ！ ……ダークはまだ重症なんだぞ、ドクターが患者をほったらかしてどうする」

「……じゃあ、ペガッサの人たちをお願いね？」

「任せろ！」

指令部に戻ると、ダンがペガッサ人の受け入れを主張しているが。

「ペガッサ市は、予定の時刻に、計画通り、爆破！」

しかし、マナベ参謀の意思は固かった。

「参謀！ 爆破の前にペガッサ市民の避難を勧告しましょう！ こちらから輸送機をありったけ飛ばして、避難民を受け入れるんです！」



「そんなことをして何になる。地球上の人口が倍、いやそれよりもっとになるかもしれないのだぞ。共倒れになる」

「宇宙に都市を建設するような種族です、その科学技術はこの地球防衛軍の戦力を飛躍的に高めてくれるでしょう……いや、それだけではありません。彼らは完全自給自足ということは、地球の食糧問題すら解決してくれるでしょう！」

「なぜそんな事を言い切れる？」

「先程、アンヌの部屋にペガッサから使者が到着したからです。彼らは電波を受け取れなかった事を想定して、自分たちの仲間をメッセンジャーとして、送り込んできたんです！」

「何!? なぜそれをもっと早く報告せんのだ!」

「それが事故で瀕死の状態です……さつきようやく話を聞けたんです! アンヌは現在も彼を治療中です」

「そうか……」

キリヤマ隊長が、俺とダンを交互に見やる。

これは、ダンの情報源も同じということがバレたな。  
後でこつぴどく叱られるが、しょうがない。

まあ、ほとんど嘘だが、半分は本当の事だ。

いや、地球を破壊にきた作員が、それを正直に話すわけがない。俺は、騙されているのだ。

「参謀、彼の言うように、異星人との技術交流は、この地球にとって、得難いものでしょう。合理的な作戦だと、私からも進言いたします」

「……うむ、では爆破準備と同時に進める。ホークは破壊任務に就く1号と輸送機の護衛任務に就く2号に分かれ、出撃！」

「了解！」

ダークの忠告通りに、輸送機にありつたけの水を満載していく。

ペガッサ人の乗るスペースは、人数に合わせて水を減らして確保する。

ようは、これだけ準備してますよというのがアピールできればいいのだ。

ホークと輸送機が出撃、ペガッサ市に向かう。

その途中、指令本部から作戦変更の暗号電文がある。

「爆破は中止せよ……」

「しめた！ペガッサ市の修理は終わったんだ。地球もペガッサ市ももう安全なんだ！」

「違う……ホーク1号に搭載せる爆弾では、ペガッサ市の破壊は不可能なり」

「なんだって!?!」

「新爆弾を搭載した宇宙爆撃艇は、すでに北極基地を発進……」

「ちえつ、オマエさんののは小さいから止めとけ、大きな爆弾を持った奴が今そっちに行くからだつてき……」

「くさるな……我々には任務が残っているんだ……。栄光ある任務が！」

読み上げるキリヤマの顔は晴れやかだ。

「……状況は最悪なり。目標は予定通り、新爆弾で破壊する。ホーク1号はペガッサ市に先づれとして危険を通告し、市民の脱出を援助、後続の輸送機を安全に地球まで誘導せよ」

「うわああい！」

「どうだ、ダン、栄光ある任務だろ！」

「はい、隊長！」

ホーク2号の護衛する輸送船団からホーク1号は先行しペガッサ市住民へ避難勧告を行う。

「ペガッサ市の危険が迫っています、直ちに脱出してください。我々が安全に地球に誘導します。われわれはやむを得ずペガッサ市を破壊します。脱出してください。そして、再び宇宙に大都市を建設する日まで、地球に移住してください。地球はあなたがたを待っています。地球は美しい星です」

ペガッサ市の周囲を高重力に捕まらない範囲で旋回するホーク1号。

しかし応答はない。

「早く脱出してください！ 我々が地球に誘導します！ こちらは水の用意もあります！」

ダンが必死に呼びかけるが、しかし、ペガッサ市からの応答はない。

爆破まで残り25分

「こちらホーク2号！」

「ソガの声だ！」

一号から後方を見やると、巨大輸送機を従えたホーク2号が肉眼で見える。

「ペガッサ市へ、我々は貴方方からの使者を保護しました。D区画のライン9と名乗る市民を、地球ヘメツセンジャーとして送って頂き、感謝します。彼は不時着の事故で瀕死の重傷を負い、死亡しました。」

「……えッ？」

「我々は彼の勇氣ある行動に敬意を表し、その最後の頼みを聞き届けるためにやってきました。彼から、貴方がたが、大量の水分と、特殊な植物を必要とすることは聞いています。一刻も早く、工場から植物のタネと、老人や女子供を脱出させてください。我々は、彼に報いるために、一人でも多くの命を救いたいと考えています。この水の水質が、貴方たちの生命に問題なく使用できることは彼が調べてくれました」

それでも応答がない。

「なぜだ！ 地球人をバカにしているのか！ 宇宙に進出もできない種族が、ペガツサ市を破壊できないとも思っているのか！ そちらの密度が8万倍な事も聞いている！ そのための爆弾だって爆破が可能だと計算結果が出てるんだ！ 彼のお墨付きだってある！ なぜ脱出しない！ 死んでしまっただぞ！」

？ だって構うもんか！

どうして！ どうして誰も応えない……！

俺は、サユリ先生のような悲しい人を作りたくないんだよ！

頼む！ 応えてくれ！

そのとき！

《……地球の方々へ、こちらはペガツサ市の市長》

応えた……!!!

「こちらは、地球防衛軍ウルトラ警備隊のキリヤマ隊長！ ペガツサ市長、どうぞ早く脱出してください！」

《それは順次行っている》

「なんですって！ こちらからは確認できません！」

《我々は貴方方のように、宇宙船を使用しません。空間の転移で、移動するのです。ペ

ガッツサ市には、宇宙船に使えるようなハッチは存在しないのです」

「なるほど……それで……」

《しかし、転移装置を含め、ペガツサ市の全機能が動力機によって支えられています。今、非常用の限られたエネルギーしか使用できません》

「なんだって!?!」

《動力の修理に使っていたエネルギーを転移装置に回しても、全市民の脱出は不可能です。この通信も、エネルギーを消費するため、控えていました》

「そうだったのですか……」

《貴方方の呼びかけは聞こえていました。お願いです。我々の動力が復旧するまで爆破を遅らせてください。ペガツサ市市長としてお願いします》

「それは……」

市長からの通信に言葉を詰まらせるキリヤマ。

ダンが継ぎのように見つめる中、絞り出すように小さく、すまない、と呟く。

「それは、できません……」

《……では、これ以上の通信は無意味です。……最後に、我がペガツサの市民を保護していただき感謝します。さようなら、地球の人たち》

「……アマギ、爆破まではあといくらだ」

「もう5分もありません。爆破艇も、すぐに離れるよう言つて来ています」

「……やむを得ん。……ペガッサ市へ、爆破まであと5分！ 運んできた水はこの宙域にコンテナごと投棄する！ 聞こえているなら難民の為に使って欲しい！」

「……隊長！」

「残念だが地球が生き残るためにはこうするより……」

こうして、ペガッサ市は破壊された。

持ってきた水は全てコンテナごと投棄して、帰路へ着く。

傷心のまま、基地へ戻った俺達は、一言も発さず、アンヌの部屋を目指す。

しかし、ダンのビデオシーバーが無情にも鳴り響く。

……ああ、お前もやっぱり止まってくれないのか。

「ダン！ 大変よ！ ダークが地球を破壊するつて！ 私に、ダンとソガを連れて脱出しろつて！」

「何ッ！」

「アンヌ、お前の部屋に、ダークのいたところに、救急箱は落ちてるか!?!」

「救急箱!?! いいえ、無いわ！」

「……ダン、これを使え！」

「これは？」

「最初に無理やり押し込んだ応急セットに発信機も入れといたんだ。あいつが捨ててなければ、居場所は分かる」

「ソガ隊員……」

「ダークを連れ戻してきてくれ、俺は……会わせる顔がない」

ポインターで走り去っていくダンを見送る。

……今日は疲れた。

とても悲しいことがあった日は、昔から眠るに限るな……

とても勝手な事ではあるが、あとの始末は全部セブンに押し付けて、今日だけはもう、一足早く夢の中へと逃げ込ませてもらう事にする。

アンヌにプレゼントしたのと同じ、詰め合わせのチョコレート缶をまさぐると、底の方に残ったダークチョコレートしかつまめなかった。

大好きなミルクチョコレートばかり食べきってしまったからだろう。

とてもとてもほろ苦い、敗北の味を舌に残したまま、俺はベッドで静かに泣いた。



## 宇宙観測員340、隣人を怪しむ

「しかし嬉しいなあ！ お前の方から誘ってくれるなんて、どういう風の吹き回しだ？」

「いやあ、毎度毎度ソガ隊員にばかり気を遣わせるのも、悪いなと思ったんですよ」

「お、なかなか言うようになったじゃないか！」

「なに、先輩方のおかげです」

「こいつうー！」

非番用の隊員専用車両のハンドルを切りながら、ソガ隊員が笑う。

彼は冗談だと思つて受け流したが、今のは紛れもなく本心だ。

本当に、彼らのおかげだと思つているのだ。

ウルトラ警備隊に所属してからというもの、先輩隊員達が、代わる代わる僕に世話を焼いてくれる。

特に、週に一度の休暇が重なると、誰かが必ず、僕をあらゆる場所に誘い出しては、さまざまなる事を経験させてくれた。

食事、スポーツ、ドライブ、読書、ピクニック……どれもM78星雲ではあまり馴染みがなかった文化ばかりだ。

そもそも、我々の種族では『休暇』という概念が薄い。

我々にとつては、この銀河の平和に貢献することこそが、何よりの喜びであるし、肉体的な消耗も、クリニックに行けばたちまち回復できる。

特に叔母は、その能力がとびきり高く、僕も鼻が高い。

『休暇』というのは、我々のように強靱な種族には不要な事だと思っていた……地球に来るまでは。

この星の食事は、美味しい。特に、誰かと食べるのは最高だ。

食事だけではない、この星の文化は素晴らしい。そのどれもが、自分の内面を見つめなおし、この美しい自然との繋がりを再認識することに繋がる。

星図を作るために、大気圏外から覗いていただけでは、決して得られなかった経験ばかりだ。

そして、それらを行う事で、戦いで消耗した体に、活力が漲ってくるのだ。

実は、この星で得た素晴らしい知識と経験を、恒点観測の報告書とは別に、個人的に纏めているところだ。故郷の仲間達にも、僕の得た感動を少しでも知ってほしい。

文明監視局にこの資料を提出すれば、非常に価値あるものと認められる確信がある。最近、監視員の任に就いた、あの生真面目な後輩も、きっと大喜びしてくれるはずだ。

……と同時に監視局からの嚴重注意は覚悟の上だ。

そしてこの、貴重な時間に誘ってくれるのは、アンヌ隊員が大半を占めるが、次に多いのは、このソガ隊員だった。

しかし……

「おいどうした、今日はお前の見つけた穴場に連れてつてくれるんだろ？」

「え？ ええ、この前の事件の調査の為に、たまたま入っただけなんですけど……これがなかなか、うまいコーヒーを出すんですよ」

「へえー、駅前の喫茶店とは、こりやまたずいぶん洒落た店で張り込んだな」

「見晴らしが丁度よくて……」

あの店のコーヒーを彼にも教えてやりたいというのは本当だ。

しかし……罪悪感とは、こんなにも神経がざわつくものなのか。

明らかに、もう半分の目的を、僕の心が嫌がっている。

今日、彼を連れだしたのは……気になる事を確かめるため。

このソガ隊員という男が一体何者なのかということだ。

「それにしても、怪我はもうすっかりいいんですか？」

「ああ、ドクターの腕がいいからな。……そうそう、そのドクターといえばだ。良かったのか？ 俺なんか誘ってて。今日だって、アンヌとデートが出来たろうに」

「ハハハ、彼女とはそんなんじゃないやありませんよ」

「お似合いだと思っけどな……嫌だぜ？　主治医の嫉妬を買うのは。モルヒネ無しで手術なんてされた日にやあ……」

この男は、やけに僕とアンヌを、夫婦にさせたがっているように感じる。

確かに彼女は慈愛と勇気を兼ね備えた魅力的な女性だと思う。

献身的な博愛の精神は、叔母や無き母を彷彿とさせる。

この姿を取った今なら分かる、地球人の美意識からしても、可愛らしい。

しかし……それだけだ。

彼女は同僚であり、戦友だ。

それを言うなら彼のほうこそお似合いではないか？

なんといつても……彼女は地球人、僕は宇宙人なのだ。

それを……ソガ隊員は本当に気付いていないのだろうか？

だからこそこんなに無邪気に僕たちをくつつけようとしているのか……？

分からない。

彼の言動はどこかおかしい。僕の直感がそう告げるのだ。

本当に地球人なのだろうか？

僕のように、宇宙人が仮の姿を取っているのではないか……？

しかし、間違いない。彼の肉体はまさしく人間だ。

だからと言って安心できない。

僕もこの姿に擬態している時は、念力でホメオスタシスを、地球人の平均値に押さえ込んでいるが……それが出来るのが、僕らだけとは限らない。

ヴィラ星人の件もある。

しかし、それならば、なぜ？

……なぜ、僕に構う？

僕のように、地球を愛したからなのか？

ならばなぜ、僕の正体を知りつつ、僕に正体を明かさない？

それでいて何故、僕に接近する？

……分からない。

「ソガ隊員は……最近、気になる事とか、無いんですか？」

「気になること……そうだなあ……銀のトサカ頭の怪獣ロボットは、元気にしてるかなあ」

ウインダムのことだ！

「その怪獣がどうして？」

「どうしてって、そりゃあ命の恩人だからさ、アイツがいなけりゃ、俺もお前も今頃お陀仏だ。礼の一つも言っても言ってもないもんだよ。」

「お礼……」

「ギョロ目とはいったん、貸し借り無しだからな。あとはあのトサカロボットに借りを返さなきゃ、居心地が悪いのさ」

「……でも、彼らは怪物ですよ？」

「ダン、俺はな……驚くなよ？ あいつらはセブンの子分なんじゃないかって睨んでるんだ」

「えッ！」

「セブンだって、俺達と同じく、四六時中出撃できるわけじゃないんだろう。そんな時、アイツらが、ご主人様の準備が整うまで、時間を稼ぐ。……アイツら、消え方が一緒だったんだよ、きっとセブンのとこに帰って行ったんだ。そのあとセブンが来たから間違いない」

「これだ！」

「一足飛びにほとんど真実を言い当ててしまっている！」

確かに、彼らの姿を見ていたというなら、地球人が真相にたどり着いてもおかしくはない。

しかし果たして、そうだろうか……？

そもそも、僕は彼らの姿を見せるつもりは無かった。

だから確実に孤立無援だと思った時にしか使わなかったのに……早々に彼らの存在がバレてしまった。

しかし、それに気付いていたというなら、何故、僕にその事を伝えるのか……？

その意図が掴めない。

「そうだ、ダン。いつかのキュラソーから来た通り魔、奴の個人用宇宙艇<sup>スペースボート</sup>を爆破するの  
に、支給された小型高性能爆薬を使っちゃったんだってな？」

「ええ、そうしないと逃げられてしまうと思つて」

「……だったらお前さんに、いいものをやろう」

信号待ちの時間を使い、ソガ隊員から手渡されたものは、件の高性能爆薬と同程度の  
大きさのカプセルだった。

「……これは？」

「小型低性能爆薬さ」

「低性能？」

「そう、そいつは何の設定もできない。頭をひねり混んだら5秒後にボカン！ ……いや、ボスン！ 精々、少し強い爆竹程度だ。俺がこの前使つてただろう」

「ああ、盛大に投げまくってましたね……しかし、なぜわざわざそんなものを？」

「……ワルサーP38って知ってるか？」

「いえ……そいつが何か悪さをするんですか？」

「いやいや、銃の名前さ。第二次世界大戦でドイツが作った名銃でな。当時としては革新的な性能を持ち、外観もスタイリッシュ、今でもコレクターには人気の銃さ。とにかくその素晴らしい銃を撃ちまくれたドイツは意気揚々とソ連に踏み込んだ！ どうなったと思う？」

「さ、さあ……？」

世界大戦、アマギ隊員に連れられた図書館の資料で知った。

かつて、大昔にこの星で行われた、同種族間の愚かで凄惨な縄張り争い。

セブンはこの話題が苦手であった。

自身の愛した地球人が、かつてはこのように野蛮な行為を平気で行う種族であったのだと突き付けられるようだったからだ。

しかし、どんなに悲惨で虚しい過去も、過ちから目を背けては前に進むことはできない、というのが、M78星雲で大切にされている信念だ。

現に、そのような成り立ちのおかげか、地球の科学力は兵器分野に関してだけは著しく発展している。

全宇宙で見ても、このように歪な発展の仕方をしているのは地球くらいなものだ。

その為に、外宇宙からの侵略をはね除けられているという側面があるではないか。



言語翻訳機も無く、ようやっと惑星探査に乗り出し始めたような種族が、である。

最近得た知識をかき集めて、地球風に例えるならば、ガレオン船でアメリカ大陸に上陸したコロンプスが、手漕ぎのカヌーに乗ったインディアンからレールガンをぶつ放されるようなものだ。

その為に、地球が宇宙に進出する前に、我々が支配し、銀河の平和を守るのだ、等と嘯く連中が、自分達の乗ってきた船の残骸を提供して、その航海技術をメキメキと伸ばしているのは、皮肉としか言いようがない。

「負けたよ。緻密な機構がウリだったワルサーは、冬將軍の寒さで凍り付いてまともにも動かなかつたんだ。対して、ソ連のトカレフは造りは雑で当たりやあしない。だが、とにかく単純で、頑丈だった……俺達みたいな鉄砲マニアの間じゃあ有名な話さ」

彼はいつもこうしてこの星の歴史や生物のウンチクを話してくれる。

これは、今すぐにでも自室のレポートに書き残したい。

やはり、ソガ隊員との休暇は心が躍る。

「警備隊の装備は全て最新鋭の精密機器、ワルサーP38も真つ青！　そんで、そいつはトカレフさ」

「単純で……頑丈」

「そう、この先どんな場所で戦う事になるかわかりやあしない。切り札のウルトラガン

すら使えないような、極寒や灼熱、未知の空間だつてあるだろう。そんな時はひとまずこいつを投げてみる事だ。こいつが動かなきゃ、どんな装備も役に立たん。弾だつてタダじゃないんだ。温存しとけ。……因みにそいつはタダ同然だ、なんせ、低性能だからな」

なるほど、彼の言いたいことは伝わった。

最低限度の性能も、時には必要であり、それが打開策足り得る可能性があるという事か。

古い物を大切に作る地球人らしい発想だ。

僕を案じて、窮地でも信頼できる武器をくれたのか。

「優しいですね、ソガ隊員」

「……優しい？ 俺が？」

「だから、彼らも必死で助けようとしたんでしよう？」

「……恩を売れば、警備隊の兵器開発に協力してくれるだろうと思っただけだ」

無然とする彼の言いぐさを聞いて、それは違う、と心の中で反論する。

確かにそう思った思いも無かつたではないだろうが……

あの日、あの部屋で大いに笑い、通信機で喉を枯らし、翌朝、真つ赤な目で遅刻した

この愛すべき地球人の真意が、そのように打算にまみれた物であるはずがない。

なぜそんな大事な事を忘れていたんだ。

猜疑心によって、心の中の第三の瞳が曇っていたのだろう。

やはり、慣れないことはするものではない。

僕は一体何を考えていたのか。

この素晴らしい友情を疑うなんて。

僕の勧めたコーヒーを、旨いと喜び、自分の頼んだガトオシヨコラなるケーキを分けてくれるこの戦友が、一体何者かなんて関係ないのだ。

彼は、彼なのだから。

——後日、四次元空間に迷い込んだダンは、ウルトラアイによる変身を封じられ、咄嗟に怪獣カプセルをしようとした。

しかしその間際、この日の言葉が頭を過ぎり、その贈り物を代わりに投げた事によって、この四次元空間の『なにもおこらない』という特性を把握した。

かけがえのない仲間を失うところであつたと安堵し、戦友の助言に感謝すると同時に、再び疑心が鎌首を擡げ、頭を抱える事になる。

## 狙えない街（Ⅰ）

「はい、こちらウルトラ警備隊……ええ、それで？ ……えッ!？」

何気なく電話に出た所で、己の失策を悟った。

そして受話器を置くと、今度はビデオシーバーを起動する。

先程の電話の内容を伝えるために、パトロール中の隊員を呼び出さなければならないからだ。

なんて損な役回りだろうか。……いや、これは失策に対する罰なのだ。

ビデオシーバーに目的の人物が応答する。

「はい、こちらアンヌ。ダンは今運転中よ。……そんな顔してどうしたの？ ソガ隊員」

「ああ、用があるのは君で、その……実はなアンヌ……君の、おじさんが……」

般若心経の流れる境内で、尊敬すべき男の葬儀が、しめやかに執り行われる。参列者は多く、故人が如何に立派な人物であったかを伺わせた。

それはそうだ、俺の同僚の叔父は、日本民間航空きつての名パイロットだったのだから。

だが、彼の操縦する便は、最後のフライトで、地面に対して垂直に着陸した。

300名の乗客と共に。

……葬式は、嫌いだ。

黒いネクタイに締められた首元が、先程からしきりに痒い。

俺は式場から一足先に先礼させてもらって、境内の一松を背に、何をするでもなく、参列者の話を聞いていた、列車の衝突事故だの、タンカーが爆発しただの……

どれも北川町在住者の暗い話ばかり。

嫌気のさして来たところへ、喪主の女性が感極まって号泣しながら飛び出してきた。

その後ろを、泣き崩れる叔母を案じたアンヌが、追いかけてそつと寄り添う。

自分だって尊敬していた叔父を亡くしたのだ、辛いだろうに、気丈に振舞っているのがいじらしい。

やがて落ち着いた未亡人を見送り、彼女は茫然と立ち尽くしていた。

そんなアンヌを見かねてか、喪服に身を包んだダンが駆け寄り、言葉をかけているのをどこか遠い景色のように感じる。

彼らが話している様を見るのは好きだ。……でも、今は全く心が躍らない。

やがて、突然ダンに背を向け、声もなく涙を流し始めた彼女を前に、どうすればいいのかわからないといった様子だったが……意を決したように頷くと、そつとその肩を抱きよせた。

今度こそアンヌは、その大きな胸の中で、人目も憚らず声をあげて、泣いた。

また、救えなかったのか。俺は。

……救えなかった。

「あああああ!!! ……ハッ……ハッ……またか……」

飛び起きると、寝汗でじつとりと張り付いたシャツが重い。

また、あの夢だ。

間違いなく悪夢だ。

……だが、夢だ。今はまだ。

こんな夢を見る原因は分かっている。

気になって仕方がないのだ。

アンヌにさり気無く禁煙の良さをアピールしたり、自販機のタバコは質が良くないだ

の吹き込むだけでは、意味が無いんじゃないか？

俺自身、薄々そう思っているからだ。

……だが、決心はついた。

「やっぱり……我慢は体に毒だな……！」

例え夢でも、俺達のアンヌを泣かせやがって……！

もう許さねえ、最短距離でぶん殴る！

見てろよ、ちやぶ台野郎……！

お前らの計画、滅茶滅茶にしてやるからな……！

## 狙えない街（Ⅱ）

「それにしても、なんだって急に北川町なんだ？ そりゃあ、パトロール先は任意とはいえ……珍しく推すじやないか」

「知っていますか先輩、この街にはね、アンヌの甥っ子が住んでるんですよ」

「そりゃ本当かい！ 知らなかったなあ……ははん、分かったぞ。お前の事だ、ポイントを見せてやろつてか」

「彼の運が良ければね……」

「まったく、子供好きな奴だ」

「それに北川町は工場が多くて治安も悪い。そこでこのポイントで巡回すれば」  
「血の気の多い奴も大人しくなる。なるほど、考えてんだなあ」

「駅前でいったん停めてください」

決心した次の日は、なんの因果かフルハシ隊員との組み合わせだった。

彼は誤魔化しが効きやすくて助かる。

この為にポイントのダッシュボードに仕込みも万全。

「コーヒーとタバコ、買ってきますよ。」



「おお、ありがとう」

「メビウスでいいですか？」

「……ハア？ 何が？」

「……あ、マイセンか！」

「……何言つてんのか、さっぱりだ。おかしな奴め、早くコレ買ってこい！」

「はあ……」

折角こつちから振つてあげたのに、なんで通じないんだ。

俺にはフルハシの好きな銘柄は分かん。

もういいや同じパツケージので。

「はいタバコ、お釣りですよ」

「サンキュ、ここで一服してこうや」

「ええ!? 僕、禁煙中なんですよ？」

「だからさ、可哀そうな後輩に、煙の臭いを嗅がせてやろうってんじゃないか」

「余計に吸いたくなつて辛いですよ……指令室に帰つてからゆつくり吸えばいいじゃないですか、我慢してくださいよ」

「つつてもこれから運転なんだぞ？」

「それならダツシユボードに残つてるのを、吸いきつてからにしてください、チラチラ見

えて、我慢が効かないんですよ」

「あ、本当だ。こりや面目ない」

こんな狭い車内で二人つきりなのに、よりによってこの人に発狂されたら、どう足掻いても死ぬ。俺が。

だから、ここで買ったタバコを、人がいっぱいいる指令室まで温存する必要があったんですね。

ようし、指令室までは順調だ。

胸ポケットから煙草を取り出すフルハシ隊員から目を離さず……

「ソガ、北川町で暴力事件があったそうだが、出くわさなかったか？」

「え？ あ、ハイ隊長！」

「そうか、お前たちの方では特に変わった様子は見られなかったか……」

「ハイ特に異常は……あッ！」

しまった！

ちよつと目を離れた際に、よりによってダンがコーヒーをフルハシに渡そうとしている!!

そのフルハシはというと、もう完全に目が据わっているではないか！

おいバカ、やめろ！

「さ、どうぞ」

「ダン！ 危ない！」

「どおりやあああああああ!!!」

フルハシが雄叫びとともに立ち上がり、自分の座っていた椅子を、無防備なダン目掛けて振り下ろす！

咄嗟に割って入り、ダンを突き飛ばす事には成功するが、振り下ろされた椅子は俺の右腕に命中!! いったあーい！

今、人体からしちやいけない音がしたね。

……あ、コレだめかも。

「アゝアゝアゝアゝアゝアゝゝ→!!!」

「ソガ!?!」

「フルハシ隊員！ 気でも狂ったんですか!!」

「うわあああああくあwせdrftgyふじこーp!!」

「やめないか！」

机の上の物を滅茶滅茶に弾き飛ばしながら、暴れまわるフルハシ。

通信員が五人がかりで一斉に押さえ込みにかかるが、奇声をあげるとそれを苦も無く弾き飛ばしてしまう。

「ダン、俺はいい！ 先輩をツ……ア、ア、ツ！」

「フルハシさん！」

「フルハシ！ やめないか！」

「U g y a a a a a a a a a a a a a a a a o o o o o o o o o o o o o o !!  
!!!」

ダンが羽交い絞めにしたフルハシの顔面に、キリヤマ隊長が渾身の右フックを叩き込む！ 僅かに怯んだ隙を見て、今度は7人がかりで机に押し付ける。

その頭を、アマギが少し離れたところから、丸めた凶面でおっかなびっくり叩いているのを、俺は床で悶えながらただ見上げていた。

お前、俺が暴れた時は真っ先に飛び掛かってくるくせに……というかそれ……やたらいい音するけど、ホントに紙製……？

「フルハシ！ どうしたんだ!!」

「アイエエエエエエエエエエエ……ハッ、うーん」

「フルハシさん!?!」

叫び声が始まり止むと、今度は急に意識を失い、糸の切れた人形のようにバツタリ倒れこんでしまった。

「おかしなやつだ……」

「ソガ隊員！ 大丈夫ですか！」

「ア、ア、く→!!」

「おい揺らすな、こりゃあ折れてるんじゃないか？ ……お前も骨折くらいで泣くんじやないよ」

「まるでキチガイ病院だ……アンヌ、すぐに来てくれ」

「うう……フルハシ隊員、一体どうして……タバコに火をつけたと思っただけに急に暴れるなんて……いてえ、いてえよお」

「タバコ……？ これか」

キリヤマが見つけた吸い殻を、ダンが拾い上げ、嗅ぐ。

「……くさい」

「そりゃあ、タバコなんだから臭いのは当たり前だろ」

「いや……違う」

ダンがそのタバコを灰皿の上でねじると、灰や葉っぱに交じって、赤い結晶体のようなものが落ちる。

「コレですよ！」

「アマギ、これを化学班に回せ」

「ハイ！」

「ソガ隊員、このタバコをどこで手に入れたんです！」

「北川町の……駅前の、自販機だよ……イツ！ アンヌ、もう少し優しく……」

「我慢して、早撃ちが泣くわよ」

もう泣いてんだよ！

「何者かが、毒タバコを使って、我々ウルトラ警備隊に攻撃を仕掛けてきたということか」

「フルハシ隊員とソガ隊員を狙うなんて……」

「優秀な隊員を一気に二名も戦闘不能にするとは、恐ろしい手練れだ」

あ、ごめん。半分は俺のミスなんです。

もうちよつとうまくいくはずだったんです……

隠れ家を見つけてアパートごと爆撃して……でもまさかこんな事になるなんて……

なんかもう……いいいや……腕痛すぎて、どうでもいい。

マジで痛い。

すまんみんな、あとはまかせた。

……いやマジで許さんからな、ちやぶ台野郎！

## 狙えない街（Ⅲ）

ダンとアンヌが北川町のタバコ自動販売機へ急行すると。

「売り切れか……」

「遅かったわね」

「それでもないさ、今にタバコを入れに来る奴がいる。そいつが来るまで張り込むんだ！」

ダンとアンヌが、自販機を見下ろせる駅前喫茶店の窓際席を確保した頃。

基地では赤い結晶体の分析結果が出ていた。

「宇宙ステーションV3の隊員が、ワイ星探検をしたときに持ち帰った、宇宙ケシの実がありました……あれとよく似たモノです。もちろん地球上には存在しません」

この成分は、他人が全て敵だらけであるという幻覚を見せ、人間の理性や感情を失わせるという効果があるらしい。

報告をするカネダ分析員は身震いした。

「それをタバコに仕込むとは……恐ろしい事を考えたもんです。人類の約半分くらいは、タバコを吸っているんですからね」

張り込む二人は、怪しまれないように頼んだコーヒーを飲みながら、アマギからの報告を聞いている。

「誰でも使う日用品に毒を仕込み、ばらまく。ウルトラ警備隊の隊員であつても、そういった物まで注意できないからね」

「独特の匂いや味のする毒を気付かれないように、このコーヒーみたいな、香りや苦みのより強い食品に混ぜるといふのは、地球でも宇宙でも同じなのね」

「実に恐ろしい奴だ……見ろ、来たぞ」

全身黒ずくめの怪しい男が、バンから降りて、自販機にタバコを補充していくのを、真剣な表情で見つめる二人。

やがて補充を終えた男のバンを追跡する。

ダンを追跡中のタクシーの中で、基地へタバコの差し押さえと使用禁止令発令を提案しながら、ある匂いを記憶の中で探っていた。

タバコや、宇宙ケシのような臭みとはもうひとつ別の、微かな甘い香り。

工場街には似つかわしくない、甘ったるい残り香を漂わせて、バンは夕暮れに差し掛かる下町の、舗装の満足にされていない、ぬかるみだらけの道を進んでいく。

やがて男は、びつちりと着込んだ黒スーツとはまるで正反対の、うらぶれた二階建てのボロアパートへと入っていった。



基地への連絡員としてアンヌを残し、ダンはウルトラガンを構え、ほの暗いアパートの廊下へ単身潜入するのだった。

物が雑多に置かれた廊下では、野良猫がマタタビを嗅いだように転げ回っていたが、突然の乱入者に驚いて、走り去っていく。

満足に日の差し込まない廊下を突きあたりまで進んだところで、突然開いた扉の中へ引きこまれるダン。

「おッ!」

「ようこそウルトラセブン。我々は君の来るのを待っていたのだ。」

「なに!」

部屋の中では、くらくらするような甘ったるい芳香が充満しており、差し込んだ西日を反射して、その極彩色に彩られた肢体を、つやつやと輝かせながら、上辺だけは紳士的な言葉を投げ掛ける宇宙人を見て、ダンは己の推測が確信となった事を理解した。

メトロン星人だ!

銀河でも有数の支配圏を持ち、非常に狡猾であると知られる彼らの放つ香りを、セブンはかつて嗅いだことがあった。

もつとも、目の前の個体は例え夕日の下でなくても分かるくらいに赤々と色づいており、これほどまでに熟れた個体が、支配圏以外に姿を見せるとは。

以前までメトロン星人と言えばオレンジ色、という認識が一般的だったのに。

彼らという種族が、「奴ら」から解放されてからもう数百年、ようやくかつての勢力を取り戻したという事なのか。

「歓迎するぞ。なんなら、アンヌ隊員も呼んだらどうだい？」

まるで敵意を見せる様子もなく、地球人のよく使う小さなテーブルがぽつんと置かれた部屋に、自然に腰を下ろすメトロン星人につられ、セブンも警戒しつつ、勧められるがままに、その対面へとあぐらをかいた。

「君たちの計画は全て暴露された。おとなしく降伏しろ！」

「ハツハツハツ、言いがかりはよしてくれ。我々の実験はまだ十分に終わっちゃいない」

「実験……?」

「そうだ。赤い結晶体が人類の頭脳にどのような効力を与えるのか、それを調べるためにきたのだ。……教えてやろう。我々は人類が互いにルールを守り、信頼しあつて生きていることに目をつけたのだ。そう、銀河で危惧されている、あの地球人がだ」

「危惧だと?」

「そう、危惧だ。このように野蛮な種族が、これほど発達した兵器とその攻撃性を抱えて銀河に進出してくるのを、みな恐れている。だから、地球を侵略してそうさせまいと主張する種族もいるという事だ。……だが、地球を壊滅させるのに暴力をふるう必要はな

い。人間同士の信頼感を無くすればいい。そうすれば、団結しあう事もなく、宇宙へ進出できないまま、やがて自滅していく。どうだ？ いい考えだろう」

「そうして、地球人も奴隷にするのか?! 彼らのように」

「奴隷? ……冗談はよしてくれ、彼らは喜んで働いている、自分から。きちんと報酬も与えているよ? 甘い蜜を吸っているのは彼らの方さ、文字通りね。奴隷ではなく、大事な仲間と言って貰おうか」

「貴様達のように、フェロモンで幻覚を見せて操るのを、仲間とは言わん! あれは侵略という!」

「おっと、人の星のやり方に口出ししないでもらうか。宇宙の法でもご法度だろうか?」

彼らメトロン星人はメトロン星を原産地とする、結実種だ。

かつてはその実が非常に甘く美味であったために、あらゆる種族に狙われた。

そこで彼らは、生物の脳を惑わし、幻覚を見せる香りを出すように進化し、その実を守った。だが、やがてその香りで自分たちを狙ってきた種族を逆に支配し、侵略を行うようになってしまう。それも、武力ではなく、相手からそう望んで、従うように仕向けるのだ。

彼らの支配圏では、そうして降した種族を自分たちの世話や、資金源の栽培を行わせる労働力として、奴隷のように働かせ、自分たちは貴族階級のように暮らしている。

「お前たちだって、かつては虐げられた側だろうに！」

「おっと、それは聞き捨てならないな。我々は虐げられたのではない、あの方に庇護して貰っていたのだ。それをお前たちが……おかげでこうして、自分達で身を守らねばならない」

「同族を生贄として捧げて得た平和など、まやかしだ！ あれはまぎれもなく搾取だ！

お前たちがこの地球でやろうとしていることも！」

「地球の権利書に一体だれがサインしたというんだい？ ウルトラセブン、君か？」

……我々は、ルールに乗っ取って、この遅れた星を庇護してやろうというのだよ」

「そうはさせん、地球にはウルトラ警備隊がいるんだ！」

セブンはそう告げると、メトロン星人は立ち上がり、背後の襖を開け放った。

そこには仕舞われた布団ではなく、先進的な宇宙船の乗り込み口が開いていた。

「……ウルトラ警備隊？ ……恐いのはウルトラセブン、君だけだ。……だから、君には

宇宙へ帰ってもらう。邪魔だからな。ハハハハハハ！！」

そういつて笑うメトロンを追いかけるダン。

メトロンは奥へと逃げ込み、その部屋の両方の扉が閉まる。

先程の部屋とは比べ物にならない密度で充填されたフェロモンの甘い香りに、セブンは自身が畏に嵌った事を悟る。

それはさながらウツボカズラに滑り落ちたアリのものがくように、ダンに成す術はなかった。

ウルトラアイで変身しようとする理性を、メトロン星人の為に何もするべきでは無いという幻覚が、甘く溶かし込んでいく。

夕日に赤く照らされたアパートが真つ二つに裂け、中からはメトロン星人が惑星間を移動する際につかう双胴のさやが姿を現した。

アパートを見張っていたアンヌの通報で、本部からウルトラホーク一号がキリヤマ、アマギ、そして昏睡から覚めたフルハシを乗せ、夕焼けをバックに飛び立つ。

「うん、中にはダンがいるんだな!? よし了解! 隊長!」

「威嚇射撃だ! 逃がすな! 地上に追い込め!」

ホークからのミサイル攻撃を、その双胴を二つに分離し、回避するメトロンのさや。

驚くホークを、二機で挟み、その後ろをとったかと思うと、短距離用のフラッシュボルトを叩き込んでくる。

「今攻撃してこなかった方を追え!」

「え、ケツに付いた奴はいいんですか!」

「我々にドッグファイトを仕掛けてきたという事は、そちらにダンはいない。もう片方が気を引いて、逃げ去るつもりだ!」

「仲間を誘拐しようつたってそうはいくか！ 了解！」

片方からの攻撃は、装甲をあてに一切気にせず、攻撃すらししないで逃走していくもう一機の宇宙船に狙いをつける。

「しかし隊長、どうします？ ダンが乗ってるなんて……」

「撃ち落とす」

「ええ!!」

「……アマギ、奴らの宇宙船はジェットでは無いな？」

「はい、くっ付いていた状態と今の状態で進行方向がバラバラです」

「ならば反重力式という事だ、外殻を小破させて軟着陸させる！」

「了解！」

「くれぐれも中心部には当てるなよ？」

「ちくしょう、ソガがいればなあ……こんな時になにやってるんだアイツは」

「フルハシさんがぶん殴るからですよ」

「撃て！」

ホークの攻撃が掠り、外殻に亀裂が入った部分から出火するメトロ艇。

外気が流れ込み、新鮮な空気がダンの思考を洗い流す。

「デュワ!!」

もはや操縦不能のサヤを棄て、工場街に並び立つた真つ赤な二人の宇宙人を、沈みゆく太陽が見守っていた。

対峙した宇宙人は互いの距離を両側から走り込み、凄まじいスピードで一気に詰める  
と、跳び上がり、空中で交叉！

しかし、セブンに手ごたえはない。

振り返ると、メトロン星人が走り去っていく。

至近距離でフェロモンを嗅いだセブンは、先程までの残り香も含めて距離感を僅かに  
狂わされたのだ！

セブンには見向きもせず、一目散に走り去るメトロン星人！

咄嗟にアイスラッガーを投げるも、念力の集中を乱され、命中しない。

心を落ち着け精神を統一したセブンは、今度こそ、メトロンの姿を捉え、空中でアイ  
スラッガーを反転させる！

正中線を切り裂かれ、くす玉のように落下するメトロン星人。

辺りにむせ返るほど濃厚な甘い匂いがまき散らされる。

セブンは追撃としてエメリウム光線を放つが、狙いがうまく定まらない。

虚空中で爆発したように見えるが、メトロン星人の残骸は見当たらず、セブンは搜索を  
あきらめた。

如何に動物とは違う身体構造のメトロン星人とはいえ、あのように割れて中身をまき散らせば、縫合でもしない限り、一日ともたないことは分かり切っていたからだ。

空中では、ウルトラホークがもう一機の敵を撃墜し、エンジン音を勝鬨代わりに響かせていた。

メトロン星人の地球侵略計画はこうして終わったのです。

最後の最後までセブンを惑わし続けた恐るべき宇宙人にとどめを刺さなくて良いのかですって？

でもご安心下さい。

我々人類が如何に優しいとはいえ、わざわざ侵略者を助けてやるほど、心の余裕はありません。

そんなお人よしなんて、いるはずないのですから……



## アンドロイド破壊指令（I）

ある、風の強い夜のこと。

「しかしソガ、右腕は大丈夫なのか？」

「アンヌがうまくやってくれましたよ、まだちよいとした拍子に痛みますけどね。……それにしても驚いたもんです、普通なら再起不能の大けがですよ」

「ふん、大げさな。大の男が、それもウルトラ警備隊員ともあろう奴が、ヒビが入ったくらいでビービー泣きやがって」

「あんたが馬鹿力でぶん殴ったからでしょうが！ だいたい、その時先輩だっておねんねしてたでしょうに。誰に聞いたんですか、まったく」

「いいじゃねえか、こうしてパトロールにも出られるようになったんだからさ。文句はメトロン星人に……ハッ!？」

ライトに人影が照らし出され、フルハシが咄嗟にブレーキを踏む。

金髪の女性がポインターの前に躍り出てきたのだ。

その女性は悪びれもせず、カツカツとハイヒールを響かせながら、ポインターの運転席に座るフルハシに語り掛ける。

「ウルトラ警備隊の方ですね。」

「そうですね……？」

「あのーモロボシ隊員では。」

「おれ……？」

ゆつくりこちらを振り向いたフルハシは、その顔に似合わないウインクを一つ。

人違いをいい事に、そのままダンのフリを押し通そうというのだ。

美人をからかってやろうというのが運の尽き……

止めてやってもいいが……別にフルハシ隊員だし、いいか。

何されても死にそうにないしな、この人。

さっきの仕返しだ。そうしないと話が進まないんだからしょうがない。

この女を撃ち抜く口実のために死んでくれ。

「……そ、モロボシ・ダン」

「お会いしたかったです。」

「えッ？ あ、は……これは……」

フルハシが澄ました顔でそう答えると、金髪の美女は、その無機質なガラス細工のよ  
うな顔でにつこりと微笑み、片手を差し出し、握手を求めてくる。

まさかの展開に虚を突かれたフルハシは、慌てて手袋を外してそれに応じようとする

が……

「おいフ……ダン、あんまり手汗の滲んだ手で、ご婦人の手を汚すもんじゃないぜ」

「な、なんだと!？」

「なんだとはなんだ、なんだとは？ ソガ先輩に向かつて？ ハンドル握りっぱなしで、べたべただろ？」

「こいつ……覚えてろよ」

武士の情けだ、素手は回避してやろうじゃないか。

感謝してくれ？

ほっそりとした白磁のような指を、そのまま左手で握りこんだ途端。

「ウワアアアアアアグギギギギギ!!!」

「こいつ……痛ッ!!」

電流を流され悶絶するフルハシにこれ幸いと、ウルトラガンで撃ち抜こうとするが、鋭い右手の痛みに思わず銃を取り落としてしまう。

くそ！

完治してないのがこんなところで仇になるなんて!？

拾い上げて発砲するがもう遅い。

女は最小限の動きで首を傾けると、レーザーを躲し、走り去っていく。

「待て！ くそ……フルハシ隊員！」

「うぐあぁ……が……ち……くしよう」

ほんと頑丈だなこの人、絶対アンタの一族、電撃耐性かなんか持つてるだろ？

ネロンガの電撃受けても……って、アレはアラシか。

あんたら怪力といい電撃耐性といい、前世はキングゴングか何か？

フルハシは何かを主張するように握りしめた右手を突き出してくるが……

そんなことより治療だ治療！

ポインターをかつとばす。

ここでアンドロイドゼロワンを破壊できなかったのは痛恨の極みだ。

今となっては、フルハシが女からむしり取ったブローチだけが手がかりか……

アンヌの治療で一命を取り留めたフルハシは、高圧電流による火傷を負った右手に包

帯を巻いて、隊長に怒られていた。

これでも原作より、特殊手袋一枚分隔てて軽くなってるんだから感謝して、ホラ。

「もはやショック死つてとこだったんだぞ」

「面目ありません……女だと思って、つい油断してしまつて……」

「ウルトラ警備隊員としては、少しうかつだったな。相手は始めから殺意を持っていた

んだからな」

「僕の身代わりにやられたようなもんだな……すみません」

そういつてフルハシに頭を下げるダン。

「いやあ、今度会ったら絶対、タダじゃおかねえから……」

「それにしても一体何者なんだろう？ ……その大胆な手口といい、タダの女じゃなさそうだ……それに問題は、なぜ、モロボシダンを狙ったかだ」

気まずそうに目線を下げるダン。

そりやそうだな。

セブンを人間態のうちに殺そうとしたんですとか言えないもんな、仕方ない。

「恐らく、新入りのダンが、我々の中でもっとも与しやすいと見たんでしよう」

「ふむ、隊歴の差か……私を除けば、お前が一番年長なんだぞフルハシ！」

「は、はあ……」

「フルハシ隊員が死ななかつたところから見て、捕縛目的だったのではないでしょうか？ ダンを捕まえて、拷問にかけるつもりだったのでは」

「じゃあ、半病人のソガ隊員が反撃してくると思わなかつた敵は、捕縛を一度諦めて逃げたというわけですね」

「そうだ、現に我々の戦力は減ってしまったからな。あながち失敗という訳でもない。だが、敵もまさか、捕獲対象に装備をはぎ取られるとは思わなかつたらうよ」

「隊歴最年長の面目躍如ですね！」

「お、おう……」

「もしも俺なら、死んでたかもしれないね」

あんまりフルハシばかり虐めてやるのも可哀そうだ、チョットは功績を主張してやろう。

というか、ダンの身代わりとか、一等勲章ものだ。

俺にはとでもできないぞ働きをやってみせて、偉いぞフルハシ隊員。

セブンを殺すつもりの電撃を浴びて生きてるつてのは、この人の正体が宇宙人か、さもなければゼロワンがポンコツだったかだ。

誇っていいぞ。

「隊長。その問題のブローチの文字解読ができました」

「そうか。それで？」

「ア・ン・ド・ロ・イ・ド・ゼロ・指令……」

「アンドロイドゼロ指令？ ……一体なんだろう？」

「隊長、僕にその女を追わせてください」

「いやあ、俺も行くよ」

「おい、その体じゃ無理だ」

名誉挽回に慌てるフルハシの肩を、安心させるようにポンと叩く。

「俺が行くよ。あの顔は忘れん……」

「よし、2人で追っかける。ついでに、アンドロイドゼロ指令が、どんな指令なのか探るんだ」

## アンドロイド破壊指令（Ⅱ）

昨日、俺とフルハシが襲われた地点の近くへポインターでやって来た。

団地の広場を縦横無尽に駆け回り、武器のおもちやで遊ぶ子供たち。

彼らが得意気に振り回す銃は、まるで本物だ。とてもおもちやとは思えない。

ふと子供たちを見ると、みんな同じワッペンを付けている。

おもちやにも同じマーク。

そしてそれは、あのブローチにあったマークと同じデザインなのであった。

「どこで買ったの、これ？」

「おもちやじいさんだよ！」

「おもちやじいさん？ そのワッペンも？」

「そうだよ、おもちやを買うとオマケに付けてくれるんだ」

「あそこにいるよ、ほら！」

子供の指した方向、リヤカーでおもちやを売る老人の姿があった。

「さ、今度はこのジェット機が空を飛ぶよ……さあさあ、ワシのおもちやは買って損がないねえ……」



彼は子供たちの目の前で、おもちゃのデモンストレーションをしている。

今度はおもちゃの戦闘機が、なんとジェットを吹いて飛行するではないか！

我々が老人に近づこうとすると、おもちゃは急に失速し、俺達の足元へ落下した。

ダンが拾い上げた戦闘機にも、さっきのワッペンと同じマーク。

「いやいや、どうも、ありがとう……」

「待て！」

「……何かな？」

自称おもちゃじいさんが、ダンから半ばひったくるようにして戦闘機を受け取ろうとするが、それを制止する。

我々の間に走る緊張感。

「……すごいおもちゃじゃないか！ めちゃめちゃよくできてるな！ アンタが作った

のかい？ じいさん！」

「あ、ああ……そうかも知れないね、返しとくれ」

「いや待ってくれ！ これを俺にも売ってくれ！」

「ええっ!？」

声を揃えて驚くダンとおもちゃじいさん。

「ソガ隊員？」

「いや、ダン。おまえこれが欲しくないのか？　だって、短時間とはいえ、飛ぶんだぞ!?」  
「い、いや……」

「それにこの銃！　見ろ！　俺はな鉄砲マニアなんだ！　俺の部屋のモデルガンなんか目じゃないぜ！　なあおい、じいさん。いくらだ？」

「ご、ごひやくえん……かな……?」

「そんなに安くていいのか!?　……ああそうか、あんまり高いとみんな買えないもんな。あんたいい人だなあ！　じいさん！」

笑顔で肩を組むと、じいさんは嫌そうにしている。

「大人には売れないよ……」

「え?　そういうなよ……銃も買うから！　おい！　戦車の模型もあるじゃないか！

これも500円でいいのか!」

「おじさん、大人なのにずるいよー!」

「ああもう、おじさんが買ってあげるから、文句言わないの！　じいさん、これでみんなの分も売ってくれ!」

「わーい!!」

「ああうん、そうだね……」

「ここからここまでぜんぶちようだい!」

全財産と引き換えに、リヤカーの商品、ここからここまで全部お買い上げ！

いやーやってみたいよね、これがほんとの大人買い。

警備隊の高給取りを舐めちやいかんよ。

「サア、今日はおしまいに、しようかな……」

「おじいさん！ 待ってくれ！」

「なんだい？ もうないよ！」

「……ワッペン、くれないのか……？」

「ワッペン……あれは……子供専用だよ」

「いや、こういうのはプレミアが付くんだよ！ 買ったんだからくれよお！ 甥っ子と

遊ぶ時着けたいんだよお！」

「アンタが……つけるの？」

「そうだけど？」

「……じゃあ、枕の横に置くくらい大事にしてくれたら、あげてもいいよお」

「本当！ やったぜ！」

「そんなに気に入ったなら、さっきの戦闘機、机の上に飾って宣伝しておくれ」

「うん！ するする！ 絶対みんな気に入る……隊長に怒られるかなあ？ ダン、どう

思う？」

「……はあ」

逃げるように、立ち去るおもちゃじいさん。

空になったリヤカーで、カランコロんと大急ぎで立ち去っていく。

軽そうだなあ……

「……行つたか」

「ソガ隊員、跡をつけましょう」

「いや、いい。すぐ帰ろう」

「そんな……任務を忘れたんです？」

「おいおい、本当に俺がおもちゃで遊びたくて仕方ないんだと思ってるのか？」

「まさか……!？」

「急ごう、アマギにこのおもちゃで、遊んでもらわなきゃならん」

## アンドロイド破壊指令（Ⅲ）

作戦室では、キリヤマ隊長がライターを付けたり消したりしながら、イライラと何かを待っている。

別に俺がおもちゃを抱えて帰ってきたから怒ってるんじゃないと思いたい。

……違うよね、隊長？

そこへ、分析の終わったアマギが戻ってきた。

「間違いありません。これらもあのブローチも、全て同じ宇宙金属です」

「やっぱりそうか……」

「それだけじゃないぞ。このワッペンにはな、ある種の周波だけを受けつける、特殊な装置がしてあるんだ」

「なに、受信装置？」

「ええ、この部分が受信機になっているようです」

「ワッペン型の、小型受信機……」

「それに、もっとおかしなのはこっちです！」

「銃や模型も何かあるのか？」

「まるで分解できませんから、確かなことは言えませんが……これらは本物とまるきり同じつくりになってるんです！」

「まるきり同じだと？ どういうことだ？」

「弾の出ないおもちゃの銃に、ライフリングや、排莖口がどうして要るんだ？ おまけに弾倉まで別になってる！ それに模型は……この造りなら、動力さえ仕込めば、本当に動き出すぞ！」

「なぜ、それが分かるのに分解できない？」

「なにか、ロツクのようなものがかかっている……こちらからの干渉を受け付けないんです！ 一応、破壊することはできますが……少しでも内部が見えるような傷を負うと、自爆してしまふんです」

「ますます分かります……」

「じゃあつまり……こいつら全部、ラジコンってことか？」

「ラジコン？」

「そりやそうだろう、受信機をついたオモチャっていうと……なあ？」

「先輩、案外いい線いってるかもしれませぬ。……ある日一斉に動き出すオモチャ達！」

「つまりアンドロイド0指令とは……しかし、そんな事が可能なのか？」

「今の地球の技術では、到底不可能なのは、間違いありません」

「……よし、その老人が、もはやただの地球人で無いのは明白だ！ ……ダン、ソガ、奴を追い。内容がなんであれ、なんとしてもアンドロイド0指令を破壊せよ！」

「了解！」

ウルトラ警備隊が、なぞのオモチャに警戒態勢を敷いた頃。

要注意人物となった、おもちゃじいさんと名乗る男のアジトでは、ベレー帽を被った老人が、蛾のたかる古びたランプの明かりを頼りに、チエス盤に向き合っていた。

「よし……これもよし……」

何事かを呟きながら、ルークの駒を動かす。

しかし、よくよく見ると、盤上はまるでゲームの体を成していない。

だが、それでいい。何も問題はない。

なぜなら、これはチエスのゲームではなく、ある兵器群の図面であり、地球侵略の計画図であり、そしてなにより、それを書き込んでいる老人の正体が、銀河最高の知能を持つ、チブル星人であるからだ。

彼らの知能と記憶力があれば、この銀河の辺境の星の、低俗なお遊びの棋譜にすらも、複数の意味を持たせ、暗号的な独自言語を作り上げることが出来る。

ただのチエス盤を、高度な設計図でありながら、スケジュール帳とメモ書きにするな

どという芸当は、彼からすれば造作もない事なのである。

チブル星人は銀河で最も有名な種族の筆頭だった。

もしも——そんな事は不可能であるが——全銀河でアンケートを取ったとするならば、最も賢い種族と言えば？　といった設問で、上位三位のどこかには入っただろう。そしてそれは決して間違いではない。

仮に全知全能の存在が居れば、自身の次に「全知」へ最も限りなく近い存在はチブル星人であると答えたはずだからだ。

だが……と同時に、先程のアンケート結果で、チブル星人と答えた99%の者が、間違えた回答をしているのは明白だった。

彼らの思い浮かべるチブル星人とは、チブル星人では、無い。

彼ら種族は銀河で最も高名でありながら、銀河中で最も勘違いされやすい種族だと言えるだろう。

それは一体どういうことか？

まずそもそもの勘違いとして、チブル星などという星は無い。

もちろんの事、星図に「チブル星」として記載されて、そう認識されている地点、というか物体はある。

だがそれは、岩石で構成された一般的な天体でもなければ、ペガッサ市のような建造



物でもない。

巷でチブル星人などと呼ばれている、ただの神経細胞が、その軸索を互いに絡め合わせ、接続し、寄り集まって天体サイズにまで膨れ上がった巨大な集合体が、ただそこに浮かんでいるだけだ。

ここまでくれば分かるだろう。

チブル星人とは、個人の名前であり、星の名前であり、銀河に浮かぶ巨大な脳髓の名称なのだ。

今現在も、チブル星の中心部では思考の刺激により活性化されたニューロンが増殖し、思考し、さらに増殖というサイクルを繰り返している。

銀河で認識されているチブル星人という種族は、このニューロンの一断片にしか過ぎないのだ。

もつとも、始末の悪い事に、この神経細胞一つですら、銀河にあまねくほとんどの種族よりも賢いのであるから、その勘違いが一向に是正される気配がないのも当然と言えるだろう。

非常に賢明なチブル星が、これ幸いと現状維持を決めこんでいる、というのも一因か。彼らは、いや彼は、むしろ賢いがゆえに、他種族との過度な干渉をしないことにしてきた。

知能レベルのあまりに大きな隔たりが、双方に大きな認識のズレと、それに伴う多大なストレスをもたらすことを分かっていたからだ。

だが、それはそれとして、銀河では度々、このチブル星人だと思われている神経細胞が独立して動いているのを見かける。それはなぜかというところ、チブル星人が、銀河の破壊を遅らせるために、ただの細胞を住人だと偽って派遣しているにすぎない。

彼は溢れるほどの知性からくる穏やかで、理性的な性格をしていた。

では……侵略者の参謀として恐れられているチブル星人とはいったい……？

何億何万という思考を全細胞で同時に行っているならば、中には一つくらいは、他種族の支配という結論に至るモノもある。そして、それが容易い事も。

本来思考とはあらゆる可能性を模索することであるから、その結論に至るのは何も不思議ではないが……たまに発想を切り替えられず、その一つの思考に取りつかれる細胞がある。

そんな細胞がいては思考の邪魔なので、全ニューロンの蠢動によって、その細胞は体表からはじき出されるのだ。

……つまるところ、この小屋の中で計画を練っているチブル細胞は狂っており……医学的に言くと、ガンであった。

「トドメは……これだー」

チブルのガン細胞が、白のクイーンで、盤上にとまった蛾を、昆虫標本のようにすりつぶす。

その意味だけは、チブル星人でなくとも読み取れたかもしれない。

彼の手で書きなぐられたその文字は……【地球陥落】

「さて、そろそろ出掛けるかな」

チブル細胞は昼間の男を思い出していた。

目の輝き、表情の変化、声のトーン。そのどれもが、本気でオモチャとして欲しがっている事を示していたが、それでも彼の頭脳はもう一つの可能性を懸念していた。

証拠品を手に入れるための演技という可能性を。

地球人があれほどの擬態を行える可能性は限りなく低い……ゼロではない。

であるならば、何事にも最善を尽くし、出来ることはすべてやるべきだ……もうこれ以上時間はかけられない。

たった一晩では、あのオモチャの謎を解明出来ないはず。なにせ自爆機構を仕込んである。

……そしてもしも、あの男が見た目通りの馬鹿だったならば、机の上の戦闘機が、飛び立って隊員達を皆殺しにするだろう。

こちらの準備は終わった、やはり今夜こそが決行の時。

老人が戸棚を開く。そこにはフルハシを襲った美女によく似た人形が仕舞われていた。

機動音と共に人工皮膚に通電され、人形の顔は人間と変わらない生気を宿す。

彼女はアンドロイドだったのだ。

「アンドロイドゼロ指令、今夜発令する」

「はい。」

「そのためにモロボシダンの動きを封じなければならん。それがおまえの役目だ。おまえはそのために作られた」

「わかっております。」

「二度と失敗は許されんぞ。何としてでも、モロボシダンを……」

「エム地点に誘い込みます。」

夜間パトロール中のダンとソガのポインターの前に、再び以前のような手口で現われるアンドロイド。

「あの女だ！」

ポインターを降りてそれを追いかける俺達。

しかし、ハイヒールを履いているというのに、鍛え上げられた精鋭を遥かに上回るス

ピードで逃げ去っていく。

「ちくしよう、なんて逃げ足の速い女だ」

「あれは人間じゃない」

そりゃあ、ハイヒール履いてあんな速度で爆走できるのは人間じゃないな。

むしろポインタで追いかけていけないといけない速度だ。

そんな彼女を俺達が見失わないのは、あちらが付かず離れずの距離をキープしているからに他ならない。

そうして俺達の視界の端で、デパートへと消えるアンドロイド。

「誘い込むつもりか……」

「明らかな罠ですね……」

「それなら食い破ってやるまでだ！」

「虎穴に入らずんば虎子を得ず、ですか！」

「ああ！」

本部に通信を入れた後、ウルトラガンを構え、静まる館内を搜索する。

……と、その時、館内放送が響き渡る！

《お客さまにお知らせします。午前零時の時報とともに、アンドロイドゼロ指令が発令されます。あとしばらくお待ちください》

## アンドロイド破壊指令（Ⅳ）

《お客さまにお知らせします。午前零時の時報とともに、アンドロイドゼロ指令が発令されます。あとしばらくお待ちください》

デパート二階の服飾売り場。

マネキンの立ち並ぶ異質な空間。

昼間は多くの女性客で賑わうだろうが、ひとたび照明が落ちれば、もはや別世界だ。

ドレスを着飾った不気味な人形たちの間を、ゆっくりとすすむ俺達。

背後に気配を感じ振り向くと……

「ヒェア!! ……なんでい、マネキンか」

「落ち着け」

マネキンが倒れてきて小さく悲鳴を上げてしまった。

ダンすら呆れて、ため口効いてきやがった。

まったく驚かせやがってコイツ……つて

「んな訳あるか!」

構えたウルトラガンの引き金を引くと、マネキンの頭部にレーザーが命中!!

ぐらりと倒れたマネキンは。勢いよくその頭を床に叩きつける。

ガシヤアアアアン!!

砕けた頭部から、ただのマネキンでは到底必要ないであろう、よくわからない電子部品を飛び散らせ、アンドロイドが沈黙する。

「ハハハハハハ!! やったぞ!! その顔は忘れんと言ったろうが!! ウオオオオオ!!」  
「すごい……やりましたね、ソガ隊員!」

いよつしやあああああ!!

腹パン回避いいいい!!

思わずガツポーズしてしまうが許して欲しい。

気絶するような威力の腹パンなんぞ食らってられるかってんだ!

原作ではこの後、俺達二人は迫り来るオモチャ兵器と、このアンドロイド01に追いつめられ、絶体絶命に陥る。

隣にソガがいるから変身できないと悩むダンは、あろう事か仲間に腹パンして気絶させるという力技に出る!

正体バレを防ぐ為に仲間に腹パン入れるヒーローなんて、セブンくらいのもんだろう……いや、いるかも知れないが、あまりにも酷い。

それで今回はこのアンドロイド01の早期破壊を狙っていたのだ。

コイツさえいなければ、セブンに変身するまでもなく、俺が腹パンされる必要もないというわけだな！

だいたいこっちは、タイミングすら分かってんのに、避けも身構えもせず食らえなんて無茶いな。

後はおもちや軍団だけだ。ガハハ、勝ったな、風呂入ってくる。

再び流れる館内放送。

《お客さまにお知らせします。午前零時の時報とともに、アンドロイドゼロ指令が発令されます。あとしばらくお待ちください》

「何?」

「アンドロイドは今、破壊したぞ?」

まだ諦めてないのか……?」

確かにおもちゃを装備した子供の軍隊が本命だもんな。

まあそりやそうか。

三階のおもちや売り場へと進む。

《お客さまにお知らせします。午前零時の時報とともに、アンドロイドゼロ指令が発令されます。あとしばらくお待ちください》



「貴様は何者だ？アンドロイドゼロ指令とは何だ？」

「お答えしよう」

暗闇に向かって吠ええると、ライトアップと共に姿を現わす、おもちゃじいさんとアンドロイド。

なに？ もう一体いたのか？

もしかして……さっきのただのマネキンか？

ぬか喜び……？

いや、よく見るとジジイの横にいるのは単なるマネキンの顔をしている。ゼロワンなら起動時は人間のような顔をしているからな。

ただのハッターか……さもなくてより低性能のプロトタイプか。

「アンドロイドゼロ指令、簡単に言う就先ず、催眠周波を子供たちに送って催眠状態に置く。それからあのおもちや、実は本物なんだ。機能は止めてあるがね」

知ってる。

「そのためにワッペンを……」

「さよう、あのワッペンは子供たちに催眠周波を与え、おもちゃを実戦用の武器に切り替える役目をするんだ」

「そんなことが出来ると思っているのか」

「出来るね。見ていたまえ……午前零時の時報とともに、子供たちのおもちゃが一斉に凶器になるんだ。私のばら撒いたおもちゃがな……催眠状態に置かれた子供たちは、私の思い通りに操ることが出来る。子供たちが持つ最新鋭の武器は、地球上のいかなる武器よりも強力だ。まして地球の大人たちは、子供には武器は向けはしないだろう。だから子供たちは、何の苦勞もなく、ごく平和的に、東京を、日本を、いや全世界をたちまち占領してしまう、というわけだ！」

なんと恐ろしい計画だ……ここで俺達に邪魔さえされなければな。

「どうです、おわかりかな？ ゼロ指令の内容が……」

「ふん！ ばかばかしいや！ おもちやが本物に……死ぬッ！」

まるで相手にしていないフリをして、会話の途中からの不意打ちを決める！

しかし、ウルトラガンから放たれたレーザーは、おもちやじいさんの眼前で、横から差し出された真っ白いマネキンの手に防がれる。

ばかな、完全に決まったと思っただのに……！

「このアンドロイド00の性能を見くびっていたようだな」

「ダブルオー……だと……!?!」

「さよう、貴様ら程度には潜入暗殺用のゼロワンで十分だと思っていたが……やはり、こやつを起動させることになるとは」

「何!? 暗殺用!？」

「ダブルオーは初めから純然たる戦闘用として、設計してある。おかげで、人間への擬態機能は後回しさ」

「……ハツタリめ!」

「では、納得させてあげよう。……ダブルオー」

「ハイ、オトウサマ。」

アンドロイド00がカギのようなデバイスを取り出し、それを右耳に差し込む。

「チェンジ!」

「スイツチオン! ワン、ツー、スリー! ゴー!」

おもちゃじいさんの号令に合わせ、そのカギを捻りこむと、マネキンの外装が碎け散り、その真の姿が露になる。

骸骨のようにつるりとした頭はクリアパーツに覆われ、内部の機械部品が丸見えになっていた。そしてその眼窩では、ランプか、もしくは複眼のような瞳が、怪しい光をたたえ、無表情な不気味さに拍車をかける。

そして最も特徴的なのはそのメカニカルなボディ! 正中線を境として、左右で赤と

青のツートンカラーに分かれた四肢は、まるで人体模型を彷彿とさせた。

マネキンの時には、確かに存在していた豊かな胸部は弾け飛び、その跡地では、リング状のクリアパーツに囲まれたファンのような部品が、激しく音をたててスパークしているのではないか。

まさしく、光渦巻く稲妻回路の悪魔が、そこに屹立していた。

おもちゃじいさんは、にやりと口ひげを歪ませて笑う。

「今度の相手は、ダブルオーで、どうだ？」

……こんなの、知らない。

## アンドロイド破壊指令（V）

レッドアンドブルーに塗り分けられた、武骨なアンドロイドが、真っ青な左の手のひらをこちらに向ける。

「……マズイ！ 来るぞ！」

「ワン！ ツー！ スリー！ 撃て！」

「伏せてッ！」

隣のジジイがカウントダウンを開始すると、アンドロイドの胸のファンが急激に回転し、バチバチと不穏な音を立てた。

ダンが俺に覆いかぶさるように押し倒すと同時、ダブルオーが広げた指の先端から、5条の電撃が俺達の頭上を通り過ぎていく。

「どうだい、この腕橈骨筋から上腕二頭筋に続くエレガントなカーブ……そう、ゼロワンの左腕だ！ ちゃあんとダブルオーに付けておいたよ！ どうだい!? 電撃でどうだい！」

電撃から逃げるように陳列棚の蔭へ身を隠す俺達の耳に、さらなる脅威が聞こえてくる。それは、キュラキュラと履帯の擦れる音をしていた。

「それからこのおもちゃ、見覚えはないかい？ お前さんらが買って、部屋に飾ってあるの

と同じもんだ。この戦場にあつらえたようにピツタリだろう？ どうだ!? 砲撃で、どうだ!」

ずらりと砲身を並べたおもちゃの陸戦隊が、一斉に攻撃を開始した。

聞こえてくる戦車の歌声。

轟音を上げて吹き飛ばされる商品棚。

俺達はたまらず逃げ出し、シヨーウインドウの影から敵を窺う。

「理論的にはね、セブンも倒せるはずなんだ。……試してみようか! どうだ、ええ?

爆撃でどうだ!」

「おいおい、戦闘機が来たぞ!」

「何か投下したッ!」

「散れ!」

戦車隊の頭上から、甲高いエンジンを響かせて戦闘爆撃隊が空襲だ!

聞こえてくる悪魔の叫び、双発マシンの轟く爆音。

機銃掃射に床が砕け、投下された爆弾が、おもちゃとは思えない威力で爆ぜる。

「ううん……硝煙のニオイだあ……! ハッハッハ!」

爆炎を切り裂いて、戦車が、戦闘機が、ブリキのロボットが、俺達の退路を塞ぐように包囲網をじりじりと狭めてくる。

聞こえてくる破滅の足音。

……いや待て、あのロボットのオモチャは本物になったとしても、あの進み方と攻撃方法なら同士討ちするだろ。

アイツラだけ実用性がまるで無いぞ!?

「どうだ! どうだ! ワシの作ったオモチャで、どおうだああ!」

「あのジジイ……ふざけやがってえ! くらえ!」

腰からカプセル状の爆薬を取り出し、先端部分を捻りこみ、爆破をセットして投擲する。

かつきり5秒後に、小さな破裂音。

ロボット達が軒並み転倒して、バタバタと藻掻いている。

ようし! カモフラージュの為とはいえ、構造もオモチャ準拠なのが災いしたな!

今投げたのは、低性能爆薬。

威力はほんの威嚇程度にしかないが、どんな雑な使い方しても誤作動しない単純構造と、安さがウリだ。

これをわざわざアマギに頼み込んで作ってもらった。そう、あのアマギに、爆薬を、だ。

トラウマ持ちに酷い事させるって……? いやいや、こういう小さいものから慣れ

てってもらおうという俺の親心さ、少なくともスパイナーで荒療治する隊長のスパルタよりはマシだと思う。

爆薬の煙を煙幕代わりに、ロボット達が塞いでいた道を走り抜ける。

戦車の砲塔が回転してこつちを追尾するが、もう遅い。

俺は隣のテーブルに隠れた後だ。

再びの猛攻。

とても顔を出して狙える余裕なんてない。

そういうときこそ、こいつの出番だ！

「もってけ、ドロボー！」

低性能爆薬をひとつかみ分、発射音のする方向へ放り投げる。

立て続けの破裂音と、爆破音。

ああそうだ、傷がついたら自爆するんだつたな、このオモチャたちは。

いくら宇宙金属といっても、所詮はオモチャサイズ。小型化したということはその厚さも薄いという事だ。たとえ威力は低くても、損傷くらは与えられる。

ヒビさえ入れれば、あとは勝手に連鎖爆発してくれるなんて、まったく楽でいいね。

しかし、作ってもらった爆薬が、こんなに役に立つとは思わなかった。

元はダンにプレゼントして使ってもらおうと考えてたものだ。



イカルス星人の四次元空間で、カプセル怪獣が一匹どつか行ってしまうのを、何とか出来るかと思って渡そうと思っている。

そして方が一、今後ダンがカプセル怪獣を投げるところを誰かに見られても、俺の渡した爆弾を日頃からポイポイ投げてれば、咄嗟に誤魔化しが効くんじやないかという狙いもある。

だから大きさに拘って貰ったんだが……牽制目的でばらまくのに丁度いい。

これ、正式採用して貰おうかな。

しかし爆発を生き残った大半の戦車達が、こちらへ距離を詰めてくる。

ええい、流石は戦車だ、頑丈だな！

「……だったら、ここうだー！」

今度は爆薬を、戦車隊の真ん中ではなく、その隣の陳列棚の足元へ滑らせる。

すると5秒後に、ド派手な音と共に戦車隊へと倒れこむ棚。

よっしやあ！ 一網打尽！ オモチャ相手に、いちいち銃で狙ってられるかってんだ

！

そうだ、ダンはどうしてる……!?

「ほらほら、戦闘機ばかり見てていいの？ やれ、ダブルオー！」

「ワン、ツー、スリー！ ジ・エンド！」

「うおおっ！」

老人の合図で、ダブルオーはバツテンを作るように両腕をクロスさせた。

胸の回路が激しく点滅し、電流と火花がその体を奔る。

カート数台分の距離を軽々とジャンプしたダブルオーは、そのまま白熱した両腕を、クロスチョップの要領で振り下ろす！

物陰から戦闘機隊を撃ち落としていたダンは、間一髪のところまで床を転がり回避できたが、反撃をする暇もなく、逃げの一手。

見れば、先程までダンが背にしていたエレベーターの扉は、とろけたバターのようになり、容易く溶断され、その余波で周囲の商品が爆発する。

なんて威力だ！

「くそ！ 戦闘用なんぞ作りやがって！」

「ワシはな、一年も前からこの地球で計画を進めていたんだよ……見ていないとでも思ったのか？ 貴様らの戦いぶりを！ ……ワシはいつも最善を尽くしてきたし、できることは全てやった……それだけのことだ！ なのに決まって 馬鹿どもには 理解されない……！ 誰からも！ 自分からすらも！」

「何をぐちゃぐちゃと……！」

「やれ、ダブルオー！ 足枷のついているうちに、モロボシダン抹殺するんだ！」

「させるかー！」

小型爆薬を老人目掛けて投げつけるが、くるりと振りかえったダブルオーに容易く腕で弾かれてしまう。

「残念だったな、ダブルオーはワシが命じなくても、主人の脅威となる攻撃は自動で取り除くように自己判断プログラムを組んである……うひゃあ！ あしが！」

ところがコロコロと転がった爆薬が、チブル星人の足元で小さく爆ぜる。

せいぜい火傷程度だろうが、ぴよんぴよん飛び跳ねる姿は滑稽だな。

「ダブルオー！ もっと完璧に守らんかー！」

「ゴメンナサイ、オトウサマ、ツギハ、マモリマス。」

「次だと……？ だったらこれで……どうだい！」

今度は起動した爆薬を数個一気に掴んで投げる。

俺にだって、どこに飛ぶか分からんのだ！

弾き飛ばしてしまつては、どこに転がるか分かるまい！

……と思つたら。

「ハツハツハ！ ダブルオーは学習する！ ……そして、そのような軌道を計算するな  
ど、造作もない事だあ！」

空中に散らばつた全ての爆薬を、目にも止まらぬスピードで掴むダブルオー。



「すまん、後は……たのん……ウツ！ ガクツ」

「ソガ隊員！ 気絶したのか……」

どうだみたか！ 腹パンされる前に、気絶してやるぞ！

あのチブル星人め、さつきさらつと俺の事を足枷呼びわりしやがったよな……？

敵も味方も、さんざん俺をお荷物扱いして！ だったら、お望み通りこつちから退場

してやる！

フハハ、なんとも言う方がいい。

オレは今日のために、こつそりプロテクターまで仕込んで来てるんだぞ。

分かってて、わざわざ痛い思いをした奴が、一体どこにいるってんだ!?

こんなことなら、足にも巻いとけば良かった……

頼む、ダン、気付かないでくれ……!

脚が痛すぎて、脱力の演技すらキツイから……! 速く！ 変身して!

「しめた！ いまだ！ ……デユワツ!!」

仲間が気絶したつてのに、しめた！ じゃねーよ!

## アンドロイド破壊指令（Ⅵ）

「ウルトラセブンを迎え撃て！」

照明の落ちたデパートの売り場で、二つの影が激突した。

セブンが、マシンガンのようなスピードで繰り出す真つ赤な拳を、これまた真紅の右腕で、ダブルオーが弾き返していく。

「デュワツ！」

「ブハハ、ダブルオーの弾道計算は伊達ではない！　そして、パワーも！　ピット星人のペットを易々と投げ飛ばす貴様に、競り負けないように、あつらえてある！」

右手で攻撃を防ぎながら、左指がセブンの顔面を狙う！

指先から五本の電撃が、断続的に発射され、彼の氣勢を削ぐ。

セブンのパンチがマシンガンなら、こちらはさながら電撃機関砲、このまま接近戦は分が悪い。

ならばと、いったん距離を取ったセブンが、拳を握り込んだ腕を後ろに引き、もう片腕を胸の前で水平に構えた。

額のビームランプにエネルギーが集中する。

エメリウム光線だ！

……………しかし。

「無駄だ。ワン！ ツー！ スリー！ 展開！」

ダブルオーの胸部がバチバチとスパークし、輝く光のフィールドが、アンドロイドと老人を覆うように展開される。

セブンの額から飛び出した光条は、目も眩むような閃光と共に、寸分の狂いもなく直進するが、フィールドに触れた途端、何事も無かったかのように霧散した。

「デュエツ！」

「……………ワシは、いつも最善を尽くし、出来ることは全てやるというのが、科学者としての信条だね。君のためにこの電磁偏向フィールドを搭載しておいたんだ……………おっと、出力を上げてても無駄だよ。このフィールドにはね、ベクトルを持つて進むあらゆるエネルギー粒子を、全て拡散させる効果がある」

「ジユオ!？」

「今度はこちらの番だ。ダブルオー！ チブルラインショット準備」

「ハイ、オトウサマ。ワン、ツー、スリー！」

「撃て！」

ダブルオーが突きだした右拳の上から、広げた左手を重ねるように添える。

胸の回路に稲妻が奔り、溜め込んだエネルギーが拳から発射された。プラズマ火球を指先の電撃が包み込むと、ライフル弾のように螺旋を描いて直進する！

前転で回避したセブンであったが、かすつてもいないのに、背中をチリチリと焼かれる感覚がある。なんとという威力だろうか。

もはや背後の空間は、壁すらぶち抜かれ、全ての区画を繋ぐ大穴を穿たれていた。仄かに漂うオゾンの匂い。

だが、セブンとてやられてばかりではない。前転の勢いを利用して、脳天の必殺武器を投げ放つ！

「ダアッー！」

爆煙渦巻く空間を、切り裂き進むアイスラッガー！

「おやおや、今度はブーメラン遊びか？ 貴様もよくよくオモチャが好きと見える。

……遊んでおやり」

「デュツ！」

「イカガイタシマスカ？ オトウサマ。」

「返して差し上げなさい。レディーの嗜みだ」

「ハイ、オトウサマ。」

ダブルオーは右手でキャッチしたアイスラッガーを、何の感慨も無く、力任せに投げ



返す。

持ち主が自分の武器で傷付くことは無かったが、アイスラッグの脳波コントロールに精神を集中した一瞬の隙を、ダブルオーが群青の左手で素早く咎める。

電撃にたじろぐセブン。

「ブハハ！ ダブルオーを改良した甲斐があったというものだ！」

「……ダアツ！」

「おおつと残念、ワシをどうこうしようとしても、ダブルオーの反射速度を超える範囲には離れないようにしてある。残念だったねえ……」

……やべえ、気絶した振りしてる場合じゃねえ。

なんだあのアンドロイド、ゼロワンと性能違いすぎるだろ……！！

セブンに変身しさえすれば楽勝だと思ってたのに、これじゃ話が違う!!

俺か？ 俺が腹パンを嫌がってゼロワンを破壊してしまったからか……？

だから戦闘用を起動させる判断をさせたしまったのか!?

俺は、なんてことを……

セブンとがっぷり四つに組み合うダブルオー。

戦闘の余波で燃え上がった炎に照らされる、機械仕掛けの悪魔の顔を、絶望しながら見つめていると、ある違和感を感じた。

この場面は……おかしい。

いやこんな存在、原作には居なかったが、そうではない。

むしろ、ある意味、この戦場が原作に沿っているが故の、違和感。

そうだ、あのシーンを見ているときには、まるで気付かなかった。ただの演出として気にも留めていなかったが、今ここに、登場人物として立ったが故の違和感。

どうして『アレ』が作動しない？

いや、答えは簡単だ。ここはチブル星人の用意した舞台。制御を切っているのだらう。

問題は、どうしてそんな手間をかけたのか。

……作動すると、都合が悪いから……？

賭けてみる、価値はある。

「さて、そろそろお別れの挨拶をするんだダブルオー。ブローアップだ！」

「リョウカイ、ブローアップシマス。……ワン、ツ、スリー！ ゴー！」

「ブローアップ！」

老人が承認コードを発すると、紫の光を放つダブルオーが、各部の装甲を展開する。そして露わになったのは、ぎらりと覗く鉛色の殺意。

無数の銃身が、組み合せて身動きの取れないセブンにゼロ距離で突き付けられる。

「言つたろう？　いつも最善を尽くし、出来ることは全てやったと……さよならだ、ウルトラセブン」

「デュワ!!」

「逆恨み？　……そうさ、たった一つの故郷を追放された細胞の……逆恨みだ！　逆恨みの何処が悪い!!　ワシに言つてみるお!!」

「……じゃあ、俺が教えてやるよ!」

「なんだ、この音は!?　……そこか!」

床に転がっていたオモチャのトランペットを力いっばい吹き鳴らし、こちらに注意を向ける。

「何をしているダブルオー!　ワシを守れ!」

「ハイ、オトウサマ。」

「セブン!　アイストラッガーだ!」

「ダアーツ!」

セブンを放り出し、主人のカバーに入るアンドロイド。

マークの外れたセブンから、銀色のブーメランが解き放たれるが、またしてもそれを力強く右手で掴む!

今だ!

俺は爆破をセットしたカプセルを老人目がけて投げつける！

……しかし、無情にも、そのカプセルはダブルオーの洗練された左手に握り込まれてしまった。

「ばかめ！ 左手では掴めないとも思ったか?！」

「馬鹿はそつちだ、頭でつかち」

「なに?！」

「さん、に、いちー！」

盛大な音と閃光を撒き散らして大爆発するダブルオーの左拳。

今投げたのは高性能爆薬の方だ。真正銘の隠し玉。

奴さん、俺の投げる爆竹の威力を学習して、わざわざ握り込みやがった。

キュラソ星人の小型宇宙艇すら破壊する、野蛮な人類自慢の爆薬をそんな扱いすればどうなるか。

ボロボロに碎け、内部の機構を曝け出す左腕。

「マズイ!?!」

「こいつでトドメだ!」

「フィールド展開！ ワンツースリー——！」

電子エンジンの光が煌めき、究極の盾を展開したアンドロイド。

……動きを、止めたな？

俺は必殺のウルトラガンを叩き込んだ。

悪魔の機械が仁王立ちする、天井に。

「シャワーは乙女の嗜みだぜ、お嬢さん」

「まさか、やめろ！」

「ガガガガガガガガガガガガガガ!!」

スプリングラーの配管が破裂し、頭上から大量の水が細かく霧雨のように降り注ぐ。

胸の回路がスパークし、放電のショックで電流火花が体を奔る。

そこへ響く、ハンドショットの風切るメロデー。

セブンの光線が着弾した胸部の装甲はめくれあがり、小さな爆発を断続的に奏でた後は、陳列棚へ倒れこみ今度こそ沈黙するダブルオー。

「完璧すぎるのも困りもんだ……勉強ばかりしてるからこうなる。アマギが見たら怒られるぞ? 設計に遊びが足りない、つてな」

「……くそっ！」

「待てっ……痛ッ！」

形勢不利とみて階段へ逃げ去る老人を追いかけようとするが、足の痛みでそれどころではない。

あとはセブンに任せるか。

俺が息をついたその時、階段から響く最期の指令。

「Cモード起動だダブルオー！ アンドロイド破壊指令！」

「リリリリヨ、ウカ、イ、シーモモモモモモモモモモモモモモモモ」

「えっ」

俺が最後に見たのは、部屋の真ん中で、カウントダウンと共にスパークし、どんどん白熱していくアンドロイドの残骸と、横合いから突っ込んできた真っ赤な流星の力強い腕が、俺の腹に吸い込まれる所だった。

## アンドロイド破壊指令 (VII)

「おのれ……おのれおのれおのれえ……！」

上階で巻き起こる、とてつもない爆発の衝撃で、デパートが揺れ、天井からパラパラとコンクリート片が落ちてくる。

だが、それをまるで意に介さず、重力装置で吹き抜けをゆつくりと降下しながら、チブル細胞は怨嗟の声を吐き出していった。

あの惑星調査用の擬態スーツはどうに解除した。

脚部を損傷した状態で階段を駆け下りるなんてタイムロスも甚だしい。

だいたい、耐久性に難があまりすぎる。

やはり所詮は、テレキネシスしか能のない脆弱な種族が作ったモノだ、こんなことから一から自作しておけばよかった。

強奪したスーツに、そんな逆恨みも甚だしい恨み節を吐き捨てたところで、返す返すも憎々しいのは、先程の地球人だ。

せっかくウルトラセブンを抹殺出来るどころだったのに、余計な邪魔をしてくれた。あんなまぐれ当たりの攻撃で勝ち誇るなど、下等生物の分際で到底許されることではな

い。

しかし……今頃はダブルオーの自爆でセブンもろとも分子の粒になっている事だろう。

いい気味だ。

セブンさえ排除できれば、あとは午前零時のアンドロイドゼロ指令を遂行するのみ。指令発令まで残り15分。ゼロワンとダブルオーなど、この頭脳さえ無事ならば、いくらでも造り出せる。

あんなに役に立たないなら、ゼロワンにも、初めから自爆特攻でも命じておけば良かった……と考えていたチブル細胞が、一階のドアから脱出しようとする、ちょうどいま、このデパートに入ってこようとする人影があるではないか！

その三人は忌々しいブルージェーの皮を身にまとい、ふざけたデザインの頭蓋をしていた。

間違いない、ウルトラ警備隊員だ。

しかし、チブル細胞に前進をやめる気はさらさら無かった。

チブル星人は戦闘が苦手であるが、それはあくまで他の宇宙人と比べてという話であり、所詮は人類などという脆弱な種族、アンドロイドが居なくたって相手では無い。

彼らチブル細胞が手足のように使う三本の軸索の先端から、神経伝達物質を流し込ん



でやれば、たちまちどんな生物も戦闘不能になる。限界量の脳内麻薬を一気に注入されるようなものだからだ。

そして、彼らの核を守る細胞体は、チブルタイトで構成されていた。思考する鉱石、それが彼の正体なのである。

チブルタイトは物理的衝撃に滅法強いという特性をもっており、例えウルトラセブンの剛力で殴りつけられたとしても、びくともしなかつたであろう事は、すでに計算結果が出ている。

もつとも、セブンには……いや、今は目の前の脅威を突破せねば!

チブル細胞の加速された思考回路が先頭の隊員の特徴を捉える。右手に包帯という医療用の布を巻いていた。しめた! あれはゼロワンが攻撃した隊員に違いない! 先程は役立たずと罵っておきながら、今度はよくぞやったと掌を返すチブル細胞であったが、あいにくと軸索の先端には、爪のような突起が付いているだけだ。

そのまま重力制御の速度を上げたチブル星人は、軸索を振り上げて一番近くの哀れな負傷兵へ飛び掛かった。こいつを捕獲して人質にすれば、二人程度制圧するのは容易いことだ。なにせ軸索はおあつらえ向きに三本ある。突入コースよし!

「ん? 奥から何か出てくるぞ?」

「フルハシ、注意しろ!」

「うわ、なんだこの化けもの！」

入射角よし、方位修正完了、対象の身長体重、予測値の入力完了、最適攻撃軌道算出。標的の反応速度に平均値以上を検出、若干の上方修正、誤差、許容範囲内。

彼我の戦力分析、完遂、算出結果、対象の昏倒確率97.68%!

右腕の動かないフルハシ隊員の大まかなスペックを算出して、左腕一本の可動域ではどう足掻いても軸索を一本防ぐのが精いっぱいであり、人間の筋力では、自身の頭蓋を叩き割ることは到底できない事を割り出した。

おまけに三人の位置関係すらも正確に入力し、彼らが腰に備えた銃の死角を完全に突いた完璧な攻撃だった。

チブル星人の頭脳はこうした一瞬の攻防にすらも応用できる。

知性とはまさしく、すべてを支配する力なのだ!

巨大なタコのような化け物に襲われたフルハシは、咄嗟に残った左腕で、敵の振りかぶった触手を掴むことしかできなかった。

それは、チブル細胞が行ったシミュレーション通りの行動であり、ルートも、スピードも、誤差は僅か100万分の一にも満たないものであった。

だが、ただ一つ。

パワーだけが誤算だった。

「でええりやあああああ!!!」

「う y q 「ベ z k f。 0 | f !?」

「撃て!」

フルハシは左手一本に万力のような力を込めて化け物を引き寄せると、巴投げの要領でそれを放り投げた。

地面へ強かに叩きつけられる宇宙人。そこへすかさず、二本の光線が無慈悲に追い打ちをかけた。

チブルタイトは物理的な衝撃には強かったが、鉱石としては融点が非常に低いという欠点があったのだった。

シユワシユワと発泡スチロールのように溶けていくガン細胞。

こうして文字通り、彼の恐ろしい計画は泡と消えたのだった。

「隊員最年長の面目躍如ですね、フルハシ隊員」

「今の怪物は一体……」

「そいつが今回の事件の首魁ですよ、隊長」

「……ダン!」

「ソガ、大丈夫なのか!?!」

デパートから、気絶したソガを抱えたダンが姿を現す。

「安心してください、気絶しているだけです」

「中で何があつた？」

「アンドロイドとオモチャの軍団に襲われて……自分はセブンに先に助けて貰ったんですが、ソガ隊員は足を撃たれて気絶していたみたいで……セブンが助け出してくれました」

「こいつう、またグースカ寝てやがったのか」

「おい、起きろソガ」

「う、うう……」

「いやいや、名誉の負傷ですから、大事にしてあげてください」

「あ、ああ……？ ダン……？」

「ソガ、大丈夫か？」

「あ、隊長……おいダン、あの時どこにいたんだ、目が覚めたらセブンが負けそうだったんだぞ」

「先に助けて貰ったんですよ。……彼が言っていましたよ、ありがとうつて伝えておいてくれて」

「……礼を言うのはこっちの……ウツ!!」

慌ててダンの腕を素早く叩き、降ろして貰うと、排水こつ……うつ！ オエツ！

「おぼろろrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrr」

「ソガ！ どうした!？」

「おいおい、情けねえ奴だな……」

いや、言いたい事はたくさんあるし、生き残ったのはいいが……とにかくこれだけは

声を大にして言いたい。

同僚の腹パンが痛すぎる！

## 魔の山を飛ばせ（Ⅰ）

「ソガ隊員、何を黙り込んでんですか？」

「どうもね……ヤな予感がするんだよ」

朗らかに俺の様子を窺ってくるダン。

なんて能天気な笑顔なんだ。

どうにかして、ダンにも警戒を促さないで。

ううむ……あ、そうだ。

「……ダン、今日はどういう日だか知ってるか？」

「……さあ？」

「13日の金曜日……何か一大事が起きそうな気がするんだよ」

「一大事って？」

「……つまり、一大事さ」

「……ハツハツハツハツハ!!」

いや、笑いごとじゃないんだってば！

駄目だ、具体例が思いつかず、例の構文で締めくくってしまったのがマズかったか。

俺達は今、ホーク三号で岩見山の調査に向かっているとこらだ。

岩見山では最近、立て続けに変死体が発見されている。

それも、若者ばかりが既に26名！

遺体に死因を特定できるようなものはなく、怪事件としてウルトラ警備隊にお鉢が回ってきたという訳だ。

……まあ、怪事件も何も、ワイルド星人が、生命カメラで若いエネルギーを奪っているからなので、我々が出張るべき案件なのは間違いないんだが。

そして、今日のオレは普段以上に気を張っている自覚がある。

そりゃあ、ダンも心配してくるだろうが……

今日の一大事は、本当に一大事だ。

なにせダンが死んでしまうんだから。

今から行う調査中に件のカメラによって生命エネルギーを奪い取られてしまうダン。

11話目の冒頭にして、早くも主人公が死亡するという急展開を迎えるウルトラセブン。

残りの38話はどうすんだって感じた。

この後、なんかかんやあって、無事に復活するのはオレにも分かっているんだが、ダンの肉体が一度死ぬのは間違いない。

……これはセブンにとって相当に負担だったのではないか？

よりによって仮の姿の状態でも命を固定化されて、数時間はずっと死体そのままだったんだから。

かなりキツイと思う。

なにせ、人間で例えると、心臓移植の大手術を行うようなもんだ。相当に消耗したのは間違いない。

その証拠に、復活直後のナース戦では、全然本調子じゃないもんな、セブン。

ポール星人前だというのに、ビームランプ点灯してたのは、ナースが強かったんじゃないかって、病み上がりだったからでは……？

でなければ、セブンがあんなお目目ぐるぐる作戦なんかにはやられる訳が無い。宇宙広しと言えど、引っ掛かるのはピット星人くらいだ……そうだよな、ダン？　そうだと  
言ってくれ！

俺の計画としては、今回のダン死亡はなんとしても阻止せねばならん。

最良なのは素早くワイルド星人をサーチアンドデストロイ。

最悪でも俺が身代わりになって、フィルムに入る事になるだろう。

これしかない。

大丈夫だ、絶対アマギが何とかしてくれる。



……とはいえ、自分から仮死状態になりに行くのはかなり覚悟がいる。

そりゃあ、黙りこくってしまっても文句言わないで欲しい。

今はホークから降りて、放射線量測定装置で火山の地表を探っているとかなんだが

……

「ソガ隊員、さつきから変ですよ、きよろきよろして……そこはもう、さつき僕が調べましたところじゃ、ありませんか」

「ああ、そうだな……」

こんな調査に意味が無い事は分かっている。身が入らないのは許してくれ。

というか、全然見当たらないな、ワイルド星人。

「……さつきから僕の後を追い回して、こんなに広いのに効率が悪いですよ。手分けしましょう。あつちを見てきてくださいソガ隊員」

「こんなところで別行動するやつがあるか。死亡フラグだぞ！」

「ソガ隊員こそ、さつきから気もそぞろじゃないですか、真面目にやってください」

「真面目にやっただよこつちは！」

おっと、すまん、つい。

気がたつてるからさ。

「それは嘘です、さつきからガイガーが鳴りっぱなしですよ？」

「え？ あ、ほんとだ……」

「まだお腹が痛いなら……危ない！」

「うお、ちょー！」

俺の顔を心配そうに振り返ったダンが、血相を変え、咄嗟にこちらを突き飛ばす。

何かのシャッター音が聞こえると同時、彼は腕を突き出した姿勢そのまま硬直し、ゆっくりとこちらへ倒れこんでくる。

俺の上へ覆いかぶさるダンの体は、鉛のように重く、それでいて、ぐにやりと不気味なほど脱力しきっていた。

……おい。

待て待て。

嘘……だろ？

そんな、わけ……ないよな？

「ダン、ダン……？ ……おい」

こんなに密着しているというのに、彼の体から鼓動をまったく感じない。……虚ろな瞳が、とても冷たかった。

「……ツダアアアアンツツ!!!」

俺の叫びが、虚しく木霊した。

白いシートに覆われたベッドを囲んで、三人の医師が首を振る。

その意味するところは一つ。

彼は、モロボシ・ダンは、死んだ。

「ウワァ、ア、ア、ア、ア、ア、ア、アアア……!!」

情けなくて、涙が止まらない。

「隊長ッ、申し訳ありません……、じ、自分がついていながらッ……ううッ……ダンは

……俺なんかを庇って……俺は……悔しいっ……!!」

「モロボシダンは、地球防衛軍の誇る勇者。今、彼の死が隊員たちに知れたら、みんなの

士気に影響する。このことは今度の事件が解決するまで、内密にしておく……」

隊長が、必死に感情を押し殺した声で、俺達に告げるが、まるで遠くで喋っているよ

うに感じる。

オレは……無力だ……また、失敗した……

背中越しにフルハシとアマギが鼻をすすっているのが聞こえる……。

すまない、みんな。オレが、守るつもりだったのに……

「君たちの気持ちはよくわかる。しかし、悲しんでいる場合ではない！ ……ダンがやられるほどの相手だ。敵は次にどんな手段を使うかもしれない……。これ以上犠牲者を出しては、ダンの死を無駄にしたことになる。我々ウルトラ警備隊の手で、必ず敵を倒すんだ！」

「……はい！」

「いいか、これはダンの弔い合戦だ！」

そうだ、こうなってしまうては、もはや奴からカメラを取り返すしかない。

隊長の言うとおりだ。いったい何を泣いているんだ、オレは。

他の三人よりも、この先を知っているオレこそが、頑張らないといけないじゃないか。

彼らの方がショックは遥かに大きんだぞ。

「隊長!! ……自分がご案内します！ 岩見山へ！」

「待てソガ隊員！ それなら是非、貴方に渡したいものがある。こつちだ」

「アマギ……？」

三人でアマギについて行くと、そこは特科武器庫であった。

両腕で大事そうに抱えた重火器を俺に手渡してくるアマギ隊員。

こちらを見つめるその瞳には、普段の沈着で理知的なきらめきを飲み込んでしまうほどの、強い怒りと、悲しみの炎が渦を巻いていた。

「ついこの間完成したばかりの新作だ」

「これは……!」

「エレクトロHガンさ」

「ついに完成したか……!」

「アマギ、なんだいこの大物は?」

「かつてのニードルS80を、さらに改修したものです。簡単に言ってしまうえば、撃ち出した飛翔体の表面電子を励起して、プラズマ化させて叩きつける事ができます」

え、ただのロケット砲じゃなかったのコレ!?

「すごいもんを作ったな……」

「理論自体は考えていたんですが……決め手はコレですよ」

「あっ!?!」

そういつてアマギは、武器庫の奥で嚴重に保管されていたケースを引っ張り出す。

中から出てきたのは、大型拳銃に分類されるであろうサイズの、クリーム色をした奇妙な武器。

こ、この銃は……!」

「そう、ペガッサの工作員が落としていったものだ。やはり、彼らの科学力は驚くべきものだったよ」

「そんなにすごい代物なのか？」

「すごいなんてものじゃない。さっきの理論を完全に確立してるんだ。悔しいが、今の人類の技術では、このサイズが限界だ。それを、片手で撃てる大きさにまで……しかも、弾の補充が要らない」

「なに、リロードが？」

「ええ……ウルトラガンですらエネルギーのチャージが必要なのに……この銃にはそれが無い。まったく解明できていないんです。つくづく、ペガッサ市を破壊できたのが奇跡に思えてきました」

「だが……威力は同じなんだな？」

「ハイ！ ……だからソガ隊員、このエレクトロHガンを君に託す。僕の銃で、絶対にダンの仇を討つてくれ！」

「……任せろ！」

アマギの真剣な瞳をまっすぐ見返して強く頷く。

すると、今度は隊長が、アマギの手からペガッサガンを受け取る。

「アマギ、すまんがこれは私が借りるぞ」

「隊長？」

「ソガがこのような重火器を装備するのであれば、その取り回しをカバーする役目が必

要だ。同等の威力の拳銃があるというならば、使わない手はない」

「解禁……されるんですね？」

「少なくとも、今回の相手はダンを殺すような相手だ。……我々も持ち得る最大火力をぶつける必要がある！」

「だったら俺はこれだあ！」

武器庫を物色していたフルハシは、壁から、これまた大型の火器を選び取った。

それは、基地警備の一般隊員に配備されている、二本の銃身を持つ大型のショットガンであった。

一般隊員の装備と侮るなかれ、純粹な威力という点では、ウルトラガンすら上回る。

射程と重量、そして弾薬の問題で、野戦装備に不向きというだけであった。

「ホライゾンショットか……すまないフルハシ隊員、もう少し時間があれば……。その改良型熱線砲はまだ試作段階で……」

「いいんだいいんだ！ 忍び寄ってきた奴に、一先ずこいつをぶつ放す！ 弾が切れたらウルトラガン、それでも駄目なら、首をねじ切つてやるまでよ！ 俺達のダンをよくも……絶対に許さねえ！」

そういつてフルハシは、涙で真つ赤に晴れた目を、怒りにぎらつかせた。

その形相は、背中から蒸気が立ち上っているのを幻視するほど。

今、その憎悪と殺意を全身から最も激しく放っていたのは彼であったが、秘めたる思いの強さに関しては、この部屋にいる四人全員が一致していた。

「……そうだ、アンヌには……う。」

「……いや、やめておこう。彼女とて警備隊の一員。決して侮るわけではないが……我々の中で、彼と最も交流が深かったのもやはりアンヌだ。そのシヨックは我々の比ではないはず。……ともすれば、ダンの仇を前に無茶をせんとも限らん。彼女は戦士であると同時に我々の生命線だ。失うわけにはいかん」

「では、我々の手で、必ず」

「ああー！」

三人の復讐鬼が、基地を飛び立った。



## 魔の山を飛ばせ（Ⅱ）

岩見山で調査をしていると、折よく警察から通報が入った。

こんな事もあるうかと、山狩りの協力を頼んであったのさ。

三合目の洞窟から異様な唸り声がするという。

「噴火で出来た風穴ですから、風の通りぬける音かと思っただんですが……今までこんなこと、なかったものですから……」

「よし、入ってみよう」

警官二人を仲間に加え、5人で中を搜索する。

ヘルメットのライトを頼りに、暗がりを進んでいくと、

どこかからシャッター音が聞こえ、最後尾の警官がバツタリと倒れる。

あの時のダンとそっくりだ。

奴がもう近くにいます！

「おい、木下？ どうした？」

「しっかりしろ！ おい！」

「あ、危ない！」

岩陰できらりとなにかが反射したのを見つけ、皆に警告する。

隊長とフルハシは流石の反射神経だったが、残った警官は咄嗟に動けず、また一人やられてしまった。

「あそこだー！」

「撃てー！」

現状の警備隊が持つ、携行火器としての最高火力が一斉に火を噴き、猛然と攻撃を加えた。その凄まじさは、火成岩でできた堅く黒い岩盤が、みるみるうちに削られていき、洞窟の形を変えてしまうほど。全貌が分からぬ事件の主犯を、既にここで撃ち殺す勢いの反撃が、彼らの怒りを物語っていた。

犯人が盾にしていた巨大な岩石も、もはやギリギリ這いつくばってようやく隠れる程度にしか残ってはいない。

「撃ち方やめー！」

俺達が固唾をのんで見守る中、岩陰から、放り投げられた衣服を隠れ蓑のにして、毛皮に覆われた野人が姿を現し、威嚇の咆哮を上げる。

しかし、我々が再攻撃を行う前に素早く姿を消してしまった。

いや、これでいい。

俺の目的のモノは、その岩陰に放棄されているからだ。

野人が隠れていた場所を見ると、半裸の地球人の死体と、銀色をした大型の銃のような装置。

生命カメラがそこにはあった！

「やっぱりそうか……隊長、敵は宇宙人ですよ！ 彼を殺して、人間に化けていたんだ」  
「ソガはこのまま洞窟を見張れ。俺とフルハシはいったん本部に戻る……これの謎を調べる」

基地に戻ったキリヤマとフルハシの前で、回収した装置の分析結果を報告するアマギ。

スクリーンに映し出された映像の中で、もがき苦しむ人間達のようなネガ。

その中に特徴的なヘルメットを被った影を発見した二人は、口々にダンの名を叫び呼びかけるが、向こう側からの反応はない。

「どういうことなんだ？ これは……？」

「ハッ、ダンを始め、被害者たちの生命が肉体を離れて、みんなフィルムの中、つまり異次元空間で生きているのです」

「すると、死んではいけないということか？」

「そうです。しかし……どうやってこのフィルムの生命体を元の肉体に戻すか……」

これは非常に困難なことです……」

「アマギ隊員、ダンを助けてくれ！ ……助けてくれ！頼む！」

「うん！」

戦友の蘇生を決意するアマギに、ビデオシーバーでそれを聞いていたオレは、ふとした疑問を投げかける。

「アマギ、生命エネルギーがその銃の中で保管されているという事は……死体にも一度シャッターを押すと、そこへ生命が注入されて元に戻るんじゃないか？」

「そんな都合の良い造りをしていきますかね……？」

「だが、引き金一つで魂を抜き取ってしまうなら、それを戻すのも引き金一つで出来て、おかしくないだろう？ そのモルモットに試し撃ちしてみてくれ」

「うーん……」

デモンストレーションの為に、アマギが持ってきた檻の中で、魂を抜かれ微動だにしないモルモット。

半信半疑の彼がそこへもう一度シャッターを押すと……

「き、消えた!?!」

「なにッ!?!」

「死体は一体どこへ行ったんだ……!?!」

「し、死体ももしかしてフィルムの中なんじゃないか？」

「なんて恐ろしいカメラだ……いや、まてよ……？」

僅かなヒントに対し、アマギの瞳に確かな知性のきらめきが灯るのを見て取ったオレは、ビデオシーバーのスピーカーをそっと切る。

今度はこつちのお仕事だな。

エレクトロHガンを構えながら、唸り声の止まない洞窟の奥へと、慎重に足を進めていく。

しばらくすると、毛むくじやらの野人が、唐突にその姿を現した。

「待ってくれ！ 撃たないでくれ！ ……我々ワイルド星人は地球を侵略しない。ただ少しばかり人類の若い生命が欲しいだけだ。我々の民族はみな老衰し滅び去ろうとしている。どうしても若い命が欲しいのだ」

「そんな勝手な！」

「わかっている！ だが、地球人に頼んでも我々の気持ちはわかってももらえないだろう……」

「だから、人間の命を奪ったというのか!？」

「わかってくれ！ 我々には若い新鮮な生命が必要なのだ……あのフィルムを返してくれ！」

「俺達人類に合意を求める努力はしなかったくせに、そちらの都合は分かってくれだど!? バカにしているのか!」

「ち、違う! 例え協力を依頼したところで、君達がそのような事を許すはずがないと思っただんだ……実際にそうだろう?」

「いや、この地球には、死刑囚や安楽死を望む人たちだっている。そういつた人間のエネルギーなら提供できるかも知れんのに、そちらの勝手な思い込みで対話をやめたんだ! 紛れもなくお前たちの怠慢だ!」

「それでは駄目だ! そのように汚れたエネルギーでは長くもたない。やはり健全な若者の生命でなくては!」

「なんだと!? 自分たちの存亡がかかっているのに、随分と贅沢なことだな……ええ!?」  
思ってた以上にふぎけるなコイツら。

自分の都合ばかりじゃないか。なにが滅び去ろうとしているのだ……返してくれ!」  
「頼む、返してくれ! 私の星で皆が待っているのだ……返してくれ!」

「俺達の星から、そんな高級品を持ち去っておいて、見返りもなしか!」 つくづく人類を舐め腐っているようだなワイルド星は……! 対価も払わず返せなどと、盗人猛々しいにもほどがあると思わんのか!!! 何が返せだ! お前が返せ!」

「う、ぐ……対価と言ったな? では取引としよう。我が星の技術を提供する。その見

返りとして、あのフィルムを貰う……どうだ？ この際、最初の一回は君達の言う犯罪者でも構わない。頼む！ 我々には、話し合いをしている時間がないのだ！」

「……ほう、ようやく分かってきたようだな。そうだ、妥協するのは俺達じゃない、てめえらだ……隊長、お聞きの通りです」

ワイルド星人の態度が変わった事を確認した俺は、ビデオシーバーのスピーカーを再びONにする。

マイクだけは切らずにそのままにしておいたんだ。

さっきの会話は指令室に筒抜けってこと。

「よくやったソガ、だが我々は……」

「隊長！ アマギの部屋に、あの銀の容器に入ったモノがあったでしょう。きつと奴らの言うフィルムとは、おそらくアレのことです。あの銀の容器を岩見山の洞窟まで持って来て下さい……カメラと一緒に。お返ししてやらなくては」

「……そうか、お前の言いたいことはよく分かった。ではワイルド星人に、洞窟の入り口で待っている、と伝えろ。お礼をしなくてはならんからな」

隊長が何か言いかけたが、それに被せる様に、オレは捲し立てた。だが、隊長は、自分の話を遮られたというのに、ニヤリと笑って許してくれる。なんて心が広いんだろうか。モニターの向こうで、ワイルド星人への言伝を話す隊長は、しきりに首をさすって

洗うジェスチャーをしていた……おおこわ。

ホーク1号が取引材料を乗せてやってくる。

隊長とフルハシ隊員が降りてくるのを、洞窟の入り口で待っている俺とワイルド星人。

銀のフィルムケースを持つ隊長がワイルド星人に近づくのを尻目に、オレはカメラをフルハシから受け取る。

「止まれ！ この情報が欲しかったら、フィルムをよこすのだ！ ……私は戦いを好まない。さあ、よこすのだ！」

「これを渡したら、地球から出て行ってくれるか？」

「約束する」

確かに交換されるケース。受け取ったワイルド星人は喜色満面でそれを開けるが、しかし、フィルムケースの中身は空っぽだった。

「うろうろう！ 騙したなあ！ この野蠻人めえ！」

「野蠻はお前だ！ このビッグフットが！」

「なんだと！」

「……ハイ、チーズ」

「あ」



カシヤツ

驚愕の表情で固まるワイルド星人はその場にドウツと倒れ伏した。

「でかしたぞソガ！ フルハシ、肉体も確保だ。このまま捕虜にする」

「ハイ！」

フルハシが地面に倒れるその巨体を抱えたところで、山が揺れ出し、金属をひっかくような耳障りな雄叫びが聞こえてくる。

くそ、やつぱり自立起動しやがったか！ 間違いない、ナースの声だ。主人の危機に、

激昂して山から飛び出してきたのだ。

俺達がホークへ戻ると同時に、岩見山の山頂が噴火し金色の竜がその姿を現した。

空中で激しく身をくねらせるナース。

だがな……お前のご主人様はこつちが押さえてあるんだぞ！

細身の体になかなか狙いが付けられないが、周囲で急旋回を繰り返すと、奴はこちらを追尾して、段々と体の向きが定まってくる。

「撃てー！」

ホークのミサイル攻撃が尾部に着弾！

損傷箇所から猛烈な勢いで火花を吹き出しながら、徐々に高度を下げていくナース。

重力制御に異常をきたしたのか、竜形態での高度を維持できないようだ。つまり、次はより安定した円盤形態をとってくるはず。

「やったあ！」

「よし、着陸だ」

「待つて下さい、ダンを殺した奴らにしては手ごたえがありません、何か隠し玉があるはずです」

「確かにソガの言う通りです、このまま空爆でトドメを！」

「……ふむ、捕虜は既に一名。……もはや他の乗務員を確保する必要もない……か。よし、二人ともβ号とγ号に移れ！ 操縦はα号から私がやる、レーザーとミサイルの同時発射で仕留めるぞ！」

「了解！」

俺達が各機に分散したところで、やはりナースはとぐろを巻き、円盤形態へと移行していた。

これで地上戦を挑んでいたら、逆に制空権を取られ、下部からのレーザーで追い立てられていただろう。

だが、お前の攻撃は下にしか……何!?

トドメを刺そうと急降下をかけたホークの攻撃を、もうもうと土煙をあげ、まるで

ジェット噴射のような勢いで急浮上することによって躲すナース。やられたフリだったのか!?

マズイ、上を取られた!

フリスビーのように旋回したナースは、ホークの真上でとぐろを解き、投網の要領で獲物に巻き付いた!

巨体に巻き付かれ、徐々に高度を下げるホーク、締め上げられた機体の各所が軋む! マズイ! このままじゃナースじゃなくて俺達がバラバラになっちゃう!

「アッ アッ アッ アッ アッ ー→!!」

「ソガー! フルハシ! 分離だ!」

「りよ、了解!」

バラバラ……? そうか!

隊長の号令に慌ててレバーを倒す。

一足先に逆噴射をかけたα号が機体の後ろへ引き抜かれ、ナースの拘束の中に残された大きな翼が、背骨を失いぽっきりと折れた。

金色の竜に搭載された自律回路は、自身の勝ちを確信するが、真つ二つになった翼は地面に激突することなく、そのままふわりと浮かび上がるではないか。

分離したβ号とγ号がV T O Lを作動させたのだ!

「危ないところでした、隊長」

「お前たちもまだまだだな。……よし、今度はこちらからだ。私の指示通りに動け、考えがある！」

散会して、三位一体の攻撃を仕掛ける我々に向かって、ナースはその喉奥に隠された5つの銃口から、レーザーをバルカンのように連射してくる!!

お前！ そんな攻撃してなかっただろ！

「……やはりな、奴は顔を向けるだけであらゆる方向へ対応できる。速度の円盤形態と、射角の攻撃形態、状況に応じて使い分けるとは……」

「隊長、分かってたんですか？」

「いや、ただのカンだ。姿を使い分けるからには意味がある。……だが、それはこのホーク1号とて同じこと！」

隊長の号令の下、フルハシの駆るγ号が斜め上から袈裟懸けの攻撃を掛ける。

振り返り、それを追いかけてかけようとするナースの鼻先を黄色く小さい影が掠めるようにして横切った。

「ソガ、急上昇！」

β号がその小さな機体の旋回力をフルに活かして、ナースの周囲を衛星のようにぐるりと回る。

だが、どれだけ小さな旋回範囲であったとしても、フレキシブルな関節の動きには適わない。

後を追跡する金色の頭部が、ついにその姿を捉え、喉奥に隠されたパイプオルガンから、猛烈な咆哮をお見舞いしようとするが……

「っつちだー！」

キリヤマの放ったレーザーが、機先を制する。そうしてα号は、そのまま矢のような鋭さで、ナースの懐に飛び込んだかと思うと、細長い機体で竜の体の隙間を縫った。銀の針が金色の糸を潜る。まるで常識外の機動によって生まれた隙を、ナースの電子頭脳は見逃さなかった。攻撃を最優先に切り替えられた思考回路は、眼前の敵を撃ち落とす絶好のチャンスにその首を伸ばし……

設定された攻撃開始地点に辿り着けずにフリーズした。

再計算、座標異常。

速度低下、機体バランス変更不能。

ナースの柔軟な躰は、硬く硬く玉結びにされてしまっていた。体をくねらせる事ができず、今度こそ本当に地に墜ちる竜。

「各機、ありつたけの爆弾を、結び目の中心に叩き込め！ 投下！」

動けないナースに、三方向から爆弾が投下される。特に、三機中最大のペイロードを

誇るγ号が織りなす爆破のカーテンは、細長い体を余すことなく覆い隠してしまおうど。

結び目の隙間に飛び込んだ5000ポンド級のバンカーバスターが立て続けに弾け、その衝撃を逃がしきることが出来ずに、宇宙竜の金色の体はバラバラに吹き飛んでしまったのだった。

「やったーッ!! やりましたね二人とも!」

「ああ、そうだ。しかし……」

「ソガ、敵を倒しても、ダンの奴は戻ってこない……」

その時、ホークの通信モニターに入電がある。

そこには仕事をやりおり終えた漢<sup>アマギ</sup>の顔と……

「ダン!?!」

「キリヤマ隊長、被害者は全員、無事フィルムの中から救出しました」

「おかげで命を取り留めることができました。アマギ隊員、まさに命の恩人です。……

ありがとう!」

「このやろう……よくも俺に心配かけやがってえ……! ダン!」

「無事でよかった。命は自分だけの一度きりのもんだ。そう容易く宇宙人なんかをやつてたまるか、なあ!」

「ハハハハハハ!!」

……案外、そうで無いかもしれませんよ、隊長？

夕日に向かって帰路につくホークの中で、そうひとりごちるオレであった。

## 友人から愛をこめて

俺がポインターでパトロールから帰ってくると、駐車場の前で、私服で突っ立ってるアンヌを見かけた。

「どうやら誰かを待っているらしい。」

「誰かって？ ……そりゃあきつと、誰かさ。」

「おうアンヌ、おめかしして、今からデートかい？」

「もう、冷やかすのはやめて、そんなんじゃないわ。今からデパートに服を買いに行くの。ダンには荷物を持ってもらっただけよ」

「一言もダンとは言っていないんだが……？」

「……んもう！ ソガ隊員のいじわる！」

叩くな叩くな、ごめんて。

しかし、こうやって冷やかす事で、二人の仲が、隊員公認であると知らしめるのは大事な事だ。

外堀を埋める、もとい外堀が自分から埋まってく状態。

オレの一番の目的はセブンの健康だが、この二人をくつつけるのも、密かなサブミッ



シヨンなのだから。

セブンはただでさえ、正体を隠さなくてはならないというストレスを日頃から溜めまくっているのだから、それを少しでも彼女との交流で癒してもらわねば……

え？ 親密になるほど正体バレのリスクが倍増してストレスだって？

うるさいよ！ だいたいな、推しとかそんな概念すら知らなかった幼少期からずっと推してきたヒーローとヒロインのカップリングを、40年越しに、公式から、真つ向否定されたオレの気持ちがあつたか？

！  
推しヒーローが銀河レベルの浮気性だったかもしれない可能性を示唆されたオレの

正ヒロインだと思っていた推しを、負けヒロインにされたオレの気持ちがあ！ 分かるか？……!?

ゼロ！ てめえのことだよ！ この不貞の子め！ 母親はいつたい誰なんだよ！

ウルトラの息子とウルトラのヤンデレの物語を制作するんだしたら、ついでにウルトラの義理の従姉のプロフィールも早く公開して！ 公式！

いやね、なにもずっとアンヌに操を立てて、独り身で一生を過ごせって言う訳じゃない。

セブンには幸せになって欲しいから、家庭を持つのは大変結構！

だが、時期が問題なんだよ……！

えつーと、ゼロが5900歳で、セブンが1万7千歳だから……だいたい一万歳の時の子か。

ゼロが高I換算らしいから一万は……25歳くらい？

恒点観測員がエリート文官ならば、ウルトラの大学院は出てるだろうから……あ、社会人なりたてくらいいの時のお子さんかあくお盛んですね……じゃねえ！

最悪の場合、新婚ホヤホヤの妊婦を故郷に残して、異国でアバンチュール繰り広げるんじゃないよ！ 森鷗外かテメエは！

……ハアハア、いや失礼、取り乱したな。

だが、ダンはまだたく悪びれていないし、おそらく未婚だ。地球から帰還して、アンの面影を持つブルー族とでも結婚したんだろ。

そうだ、そうに違いない。

つまり人類が生存権を宇宙に移すくらい進出するのは、こつから6000年くらいかかるって事だ。遠いなあ……

まあ、怪獣を見るオキ君の反応的に、今でいう恐竜みたいな扱いだし、下手すりやもつとかもな、ハハ。

この宇宙では、ウルトラマンゼロが地球人とのハーフになるかもしれんが、すまん、許

せ。

それでもお前ならなんとかしてくれて……はずだ。信じているぞ（同僚の）息子よ。「それで隊員用車両か、どこまで行くんだ？」

「いつだったかの事件で、売り場が壊滅しちゃったデパートがあったでしょ？ あそこが新装オープンしたからバーゲン中なのよ」

え、あそこ?! 相当ボロボロだったけど、そういやもうそんなに経つのかあ……

実は転生して驚いたんだが、本編で映像化されてないようなオレの知らない事件もちよくちよく起きるから、一話一話の間隔もバラバラで、腹の痛みがもう随分前のことのように感じる。

まさか赤ん坊のお守をしながら戦わされる羽目になるとは……あの宇宙人め、布袋さんみたいな耳たぶしやがって。

「そういや、ドレス着たマネキンが山ほどいたか……やっぱりアンヌも乙女だなあ」

「……あら、違うわよ？ ダンの服よ？」

「えッ?! ダンのの？」

「そりゃあ、私の服もちよつとは見るけれど……知らない？ 彼の服、ほとんど私が見繕ってあげたんだから」

「そうなの!?!」

「初めて会った時の服装覚えてる？ ダンだったら、私服があれ一着しか持ってなかったんですって！ 休暇にあの服で出かけようとするから、そんなのおよしなさいって止めたら……ウフフ、彼、隊服を着てきたのよ！ 信じられる？」

きやらきやらと笑うアンヌに、心の中でグツジョブと親指を立てながら、あのクソダサイ黄色のジャンパー姿を思い出ししていた。……道理であれ以降、別人かっくら私服のセンスがいいわけだ。

別人だったか。

「それにしても……服なあ」

「……服が、どうしたの？」

「いやなに……宇宙人は服着るのかなと思ってさ」

「ああ、そういうこと」

「うん、少なくとも腕時計の事は理解していた訳だし、装飾という文化がある奴もいるんだと思うが……服着てる奴が居なかったような気がしてな」

「そうねえ……あれは全部宇宙服なんじゃない？ メトロン星人なんて、カラフルなアストロノーツみたいに見えるわ。他もみんなそうなのよ」

「だが、宇宙服にケロイドができるか？」

「それもそうねえ……」

人間と見た目が変わらない奴は別として、後々、シャプレー星人とか、ゴース星人とか、明らかに服着てる奴がいるにも関わらず、今のところ出てくる奴はどうも違うような……裸なのか？

「……そもそも、服を着る必要が無いんじゃないかしら」

「とうとうと？」

「私たちの服だつて、今でこそファッションだけれど、もとは防具であつて、毛や鱗の延長線なの。サルの際は全身を毛で覆っていたけれど、それを失つたから、古代人は代わりに服を着て、外傷や温度変化から身を守つたと考えられているわ。でも、彼ら宇宙人の皮膚はそんな必要が無いくらいに強靱で、温度調節の必要もない。そもそも服飾の文化が発達しようがないんじゃないかしら？」

「うーん、実にドクターらしい見解だな……そうか、服を着る必要がない……」

そういえば、人間そっくりの身体構造のワイルド星人だつて毛むくじやらだつたな。毛皮を失つた脆弱な種族だからこそその文化……か。

「……じゃあさ、セブンもアレ、やつぱり裸なんだろうか？」

「ぷっ！……ちよつと！ ソガ隊員、セクハラよ、それ？」

ぷりぷり怒るアンヌだが、吹き出したつてことは、お前もそう思つてたんだろ。

まあいいわ、許してあげると寛大な心を見せてくれたアンヌは今度も真剣な顔で考え

てくれた。

「……やっぱり、セブンこそ宇宙服だと思うわ」

「なぜです？ ドクター？」

「だって、それにしては体の凹凸が少なすぎるもの。それに胸や肩の銀の部分、どう見たってプロテクターよ。顔もヘルメットや仮面の類でしょう、きつと。……なんたつて、頭に武器がついてるんですからね」

「なるほど、思った以上にドクター的な意見だった……」

「そーいやヘソもツメもアレもないしな……そう言われてみれば、納得できる気もする。」

「そういうソガ隊員は、どう思うの？」

「俺は裸だと思っうね！ いっただったか、セブンが寒がりだ、なんて話をしてたが、それつて、太陽に近い熱い星出身だからなんじやないかと思っうわけさ、ほら、地球だって、赤道直下の人々は、肌が黒い」

「ウフフ、セブンが赤いのは日焼けしてわけね」

「それで、頭と上半身は防具で覆うが、それ以外は丸出し、なんて地球にもいるだろ？ ほら、テレビでよく見るナントカ族って奴さ。なんたつて、頭にブーメラン付けてるんだ、どっかの狩猟部族に、居てもおかしくないだろ？ 耳にわっかつけたりしてさ」

「まあ、そうねえ……アハハ！」

「……二人とも、そんなに楽しそうに、いったい何の話をしてるんです？ 僕も混ぜてくださいよ」

……あ、ご本人登場だ。

「もうね、聞いてよダン、ソガ隊員ったら、セブンは裸だ、未開の部族出身だ！ なんて言うのよ！」

「……えッ？」

「だってそうだろう、体にあんなボディペイントして、頭の上にブーメランだかナイフだか、アブナイ凶器をのっけてるんだぞ？ 宇宙の辺境、ナントカ族かも知れん」

「……頭に武器を装備しているのは、野蛮なんですか……？」

「いや、野蛮っていうか……包丁を頭に括り付けてるようなもんどぞ？」

「……」

「ねえダン、あなたはと思う？」

「え、いやそれは……セ、セブンにもプライバシーがあるはずだから……」

「もう、どうして貴方が照れちゃうの？ ダンったら、照れ屋さんなんだから！」

「い、行こう、バーゲンがはじまってしまっようよ！」

「ウフフ、そうね」

「がんばれよーアンヌ」

「アンヌが頑張る？ 何をです……？」

首を傾げるダンを尻目に、俺とアンヌは顔を見合わせ……

「狙いのモノを、ゲットできるように、さ」

「はあ……」

「さ、行きましょ」

天然なダンの腕を、ぐいっと引きよせルンルン気分で歩いていくアンヌが、こつそり振り返って俺にウインクする。

よし、計画は順調なように安心安心……

だが、それからしばらくの間、セブンがアイスラッガーの使用を躊躇っているように見えたのは、オレの気のせいだと思いたいところだ。

……ごめんで。



## むこうから来た男（I）

鳴り響くサイレン。

群青にそまる宇宙のような、青い警告ランプがしきりに点滅する。

「接近する宇宙船に告ぐ、貴船は地球圏を侵犯している。目的を述べよ」

「応答が無く、コースを変更しない場合は、当方は攻撃を加える準備がある、応答せよ！」

「……駄目です隊長、あらゆる周波数帯に返事がありません！」

「……出ました！ 進路から逆算して、あの宇宙船はシリウス銀河から来たものと思われます！」

「シリウス……おい石黒、そういえばシリウス星系第8番惑星の名は」

「……アイロス星です……」

ステーションV3の宇宙パトロールを率いるクラタの脳裏に、2年前、自身の取り逃した宇宙船が蘇る。

当時の月面基地から、採掘資源をまんまと盗み出し、部下を次々に撃墜しながら悠々と逃げ去っていった怨敵の姿。

「野郎、あの時預けた首を返してもらおうぞ……！ 出撃！」

「こちら宇宙ステーションV3、地球時間24時06分、正体不明の宇宙船が侵入、当方のパトロール隊と戦闘状態に突入！」

ステーション内にスクランブルが発令された。

出撃ハッチの天窓から外をクラタは、憎き円盤の姿を見咎め、敵の正体に確信を持った。

ブースターロケットで、漆黒の空へと高く高く飛び出した3機のステーションホークは宇宙船の進路を塞ぎ、最後の警告を行う。

……しかし、宇宙船が返事としてよこしたのは、レーザーの先制攻撃だった。

敵の円盤はステーションホークが衝突回避の為に舵を切った瞬間を狙ったのだ！

交戦距離圏内に入る前に、あっという間に2機が撃墜されてしまう。

「野郎……！」

切り返したクラタはミサイルを立て続けに発射するが、円盤はビクともしない。

思い起こされるあの時の光景。

しかし、以前と違う点が一つだけある。

あの時は、どれだけ損傷を与えようとも、外宇宙へと飛び出していく円盤に追いつけるしかなかった。

だが、今度の進路はまるきり反対、敵のむかう、あの青い青い地球には、奴がいる……

奴が！

「宇宙ステーションV3より防衛基地へ……」

「緊急事態発生！」

「ステーションホーク3機、帰還せず……」

アイロス円盤に追撃をかけるクラタ機も消息不明となった。

ステーションV3からの警告を受けた極東基地、その参謀室にて。

マナベ参謀の対面に出頭しているのは、沈痛な面持ちのキリヤマであった。

「キリヤマ、参りました」

「ステーションのパトロール機が……撃破された」

「は、聞きました」

「隊長のクラタ君は、君の友人だったはずだな」

「はい、士官学校以来の親友で、……優秀なやつでした……」

報告を聞いたキリヤマはホーク1号に対空警戒を命じ、作戦室でひとり、悪友の無事を願っていた。

(……あいつはきつと生きている……生きているに違いない……)

パトロール中のウルトラホーク1号が、満身創痍で飛行するのがやつとといった様子の機体を発見したのは早朝のことであった。

「こちらウルトラ警備隊。応答せよ、応答せよ」

「ふん！ 応答せよ？ ……通信機なんて、とつくの昔にイカレちまったよ！ ……うるさいトンボめ」

アイロス円盤との追撃戦で各所に被弾したステーションホークは、電気系統の一部をやられ、無線の送信機能すらも喪失してしまっていた。

もつとも、これだけの損傷でありながら、致命傷は一つも食らっていない。フルハシとアマギは、ステーションホークの乗務員が相当な飛行センスを持っていることを見て取り、舌を巻いた。

一体どんな奴だと、並走しコクピットから視認したステーションのパイロットは、気障つたらしく敬礼を飛ばしてくる。これは相当な強者だ。

《こちらホーク1号から指令室、ステーションホークを発見。奴さんボロボロだあ、どう

やら通信機もいかれてるらしい》

「はいこちらソガ、送信ができなくても、受信が無事なら大丈夫です。あちらへ、この極東基地へ寄港するよう伝えて下さい。夜通し戦っていたなら、整備と補給が必要でしょうから」

《了解。ステーションホーク、いったん極東基地へ。長時間の戦闘で弾切れでしょう。エスコートします》

「フルハシ先輩、敵を追ってきたステーションホークが居るといふ事は、敵も近くにいます。注意してください」

《とはいっても、他の機影は見当たらないぞ？》

「そのあたりは山が険しいですから、谷間で待ち伏せしているかもしれませんよ？ 俺達だって、一回それでやられてるんですからね」

《そうはいつでもなあ……》

《おい、右下を見ろ！ ……うわッ!!》

「おいどうした!？」

《クソッ！ 谷間からの攻撃だ！ お前が変な事を言うからだぞッ!》

人をフラグ製造機みたいに言うな！

「ホーク！ ホーク！ 無事か！」

《それどころじゃない！ ステーションホーク！ こちらに任せて帰投せよ！》

《あのパイロット、なんて血の気の多い奴だ！ むちゃくちゃだぞ！》

《ええい、ミサイルじゃ埒があかない……ああ!!》

《マズイ、あの損傷で、今度食らったらお陀仏だぞ！ 射線に割り込むんだ！》

《よしきたッ！ ぐあっ！》

「フルハシ！ アマギ！」

《ちきしょう……》

《不時着だ！》

「くそッ……やられたか……」

やはり駄目か……なんて手強い相手だ。

基地の廊下を、泥と煤に塗れた傷だらけの男が下を向いて歩いている。

だがふと、ボロボロのブーツがその歩みを止めた。

彼の視界に、天井のライトを反射する、綺麗な革靴の先が差し込まれたからだった。

クラタが顔を上げると、目の前には、かつて自分をV3へ左遷する決断を下した男が、

あの時と変わらず、シワひとつない参謀服を着て立っていた。

バツが悪そうに会釈するクラタ。

彼は、マナベという参謀がどうにも苦手であった。

2年前、アイロス星人の円盤を深追いした際に、道づれにしてしまった部下たちは、自分を含めて皆、彼の教え子だったのだから……

「無事だったか……」

「また一人で戻りました、今度は月へでも放り出しますか……」

言葉少なく終わったこの再会に、助け船を出す青年がいた。

彼は重苦しい空気を払拭するようにハキハキとした口調で告げる。

「ウルトラ警備隊のモロボシです。お迎えに来ました」

ダンに連れられ、指令室へ姿を現したのは、白い白いマフラーを土埃で汚したステーションV3の攻撃隊長、クラタ。

そしてそれを誰よりも心待ちにしていたのは……奴だった。

「……クラタ！……この悪党！」

「おう、モグラめ、元気か？」

がっしりと握手を交わす旧友<sup>クラタとキリヤマ</sup>達。

「元気そうじゃないか……おい、何しに来たんだ？」

「宇宙船を追ってきたんだ……」

「宇宙船か……アイロス星人の」

「そうだ奴は来た……奴は部下の仇だ！」

「一緒に収容された彼は？」

「脱出のショックで、半身不随だ。もう乳母車にも乗れやせんだろう……」

それは、彼の大切な部下達が、実質的に全滅したことを表していた。

「俺だけじゃない、出迎えのパトロール機もやられた！」

「隊長！ それは、ホーク1号です」

「フルハシとアマギか……」

「不時着飛行で墜落していったから、死んじゃおらんだろう……。もつともアイロス星人に捕まったら最期だが……」

「隊長、救出に行きますか？」

「宇宙船は燃料を切らしている。場所は秩父山中だ！」

「よし、わかった」

「奴は俺に任せろ！」

「地上の侵略者は警備隊の管轄だ……君はリングでも食べながら、休養していてくれ」

キリヤマが、部下の仇と逸るクラタを抑えていた頃、アイロス星人の円盤の中では、捕



らえられ、生体構造解析装置に収容されたフルハシとアマギが転写にかけられていた。やがて、装置から、全く同じ構成をしたアイロス星人が姿を現す。

アイロス星人は、はつきりとした姿を持たない。

言わば、意思をもった炭素原子の集合体であった。

彼らは、母星に住む様々な生物の姿を借り、状況に応じて使い分けながら発展してきた。それは生物も無機物をも問わず、この円盤すらも、たくさんのアイロス星人が一体化した模造品。予備の金属原子さえ確保されていれば、どのような損傷を負っても、エネルギーの続く限り複製と交換を繰り返すことで、まったくの無傷を装うことが可能であった。しかも、円盤そのものが彼らの肉体と同じであるため、生命がその手足を動かすように、滑らかに円盤を操ることが出来た。その常識外の機動性と耐久力をもって、クラタの追撃すらも、何度となく振り切ってきたのである。だが、どれだけ見かけには無傷であっても、変形を繰り返せば消耗する。彼らはその肉体を構成する炭素を欲していた。

クラタの2年越しに醸造された執念からくる、執拗な追撃に長時間晒され続けた彼らは、文字通りのガス欠に陥っていたのだ。

その為には、地球の良質な純度の高い炭素の塊が要る。その手足として、現地の生物のサンプルが手に入ったのは行幸だった。

対象の分子構造さえ解析できれば、異星の生命体であっても、まったく変わらない組成で姿を真似ることが出来る。

2年前もこうして、捕まえた月基地の隊員に化けて、保管してあった石炭類を山ほど持ち帰ったのだった。

彼らは、この地球が宇宙開拓時代でもなければ『シエイプシフター』などと呼ばれてきたことだろう。

「二人ともよく聞け！ ナンバー74指令。地球防衛軍基地の固形燃料を奪い帰れ」  
模造された男達が、黒い尖兵として放たれた。

## むこうから来た男（Ⅱ）

修理されたホーク1号で、アマギとフルハシが帰ってきた。

墜落のシヨックか、指令室ではやたらとぼんやりした様子を見せていた二人であったが、挨拶もそこそこに部屋を辞すると、一直線に燃料保管庫へ向かっていった。

あつた、固形燃料だ！

なんと芳しいコークスの香り。

地球人は宇宙でも指折りの愚かな種族だが、この物質を精練する技術だけは褒めてやってもいい。

地表の炭素生成物をほとんど採りつくしたアイロス星人は、この地球に大量に貯蓄されている高純度の炭素燃料に目を付けた。このたった一箱だけで、優に8光年は飛び続けられるだろう。これだから地球はやめられない。

だが、さつさと運び出そうとする彼らを見咎める者がいた。

「二人とも待て」

それはウルトラ警備隊のモロボシ・ダンであった。

いいところを邪魔されては敵わないと、腰のウルトラガン・コピーを引き抜き、即座

に発砲する。

慌てて物陰に隠れるダン。

しかし。

「残念だったな、アイロス星人」

背後の扉から躍り出たクラタの手元で、オートマチックハイパワーモデルが火を噴いた！

8ミリ口径から発射された弾丸は、寸分の狂いもなく、二人の両手両足に一発ずつ命中中。

その場に倒れこむフルハシとアマギ。

そこへ駆け寄ってくるキリヤマは、クラタを怒鳴り飛ばした。

「サウス、この大馬鹿者！ 火気厳禁の燃料庫で、発砲するやつがあるか！」

「火気厳禁……？ そんな悠長なことを言つとる場合か、先に引き金を引いたのはキサマの部下だぞ。怒鳴る相手を間違えるな、モグラ」

「まあまあ、お二人さん、後にしましょう。……それにしても一発も外さないとは、やりますね」

「ふん、謙遜するな臆病ガンマン……しかし、見ろ、奴らを」

クラタの指差す床では、痛みに悶えるでもなく、両手両足の銃創から、一滴の血も零

さない二人の姿があった。

やがて、ボロボロと崩れ去り、コールタールのような人型の燃えカスだけを残して、消え去ってしまおう。

「偽物です」

「お前が、二人が一切瞬きをしない、などと言い出した時は、またぞろおかしなことをと  
思ったが……」

「モロボシ……ダン……やるな」

「貴方にお返ししますよ、クラタさん」

「それにしてもこいつら、さっきの様子を見る限り……」

「燃料を奪いに来たんです！ この分では、フルハシ隊員とアマギ隊員は……」

「よし、燃料はやろう。その代わり、フルハシとアマギをすぐ返せと発信を！」

やがて、こちらの提案に対して、敵からの返信があった。

30分以内に燃料を渡さない場合は、部下の命は保証しない。交換現場では指示に従うように……と

「まるで、脅迫状ですね」

「攻撃しよう！」

クラタの苛烈な提案に、考え込むキリヤマ。

「……交換に応じよう」

「みすみす逃がすのか！」

「……部下の命にはかえられん」

「俺の復讐はどうなる！ ……部下を皆殺しにされたようなもんだぞ！」

「立場が逆ならどうする？ ……部下を見殺しにするか!？」

「燃料を与えてみる。犠牲者は2人じゃすまなくなるぞ！」

「侵略はしないといつている！」

「約束など守る相手じゃない！」

「攻撃するだけが、指揮官の務めでもあるまい！」

「なんだとお！」

「隊長！ ……時間がありません！」

作戦室に重苦しい沈黙が落ちる。

普段のキリヤマは、心の中に常にこの悪友を飼って戦ってきた。

自分にはあと一歩足りない苛烈さと果断……そして、無謀。

それをキリヤマは、眼前の男の後ろ姿から借りて、今日まで恐ろしい侵略者を撃滅してきたのだ。

保守と革新、お互いがお互いを時には抑え、時には支えていた、あの時のように。

……だが、今のクラタは、復讐鬼だ。

怒りに燃えるクラタのその瞳に、慎重な自分の姿が今も揺らめているのか、はつきりと確信の持てない中で、今は……今だけは。

「固形燃料をパラシュート詰めにして、ホーク3号に積んでくれ。交換には、俺が行く！」

「ひとりでか……」

「ソガよ、ダンよ！ ……あとは頼んだぞ」

「……キリヤマよ！」

指令室を後にするキリヤマの背中を、戦友が呼び止める。

「……死ぬな」

旧友は決して振り返ることなく、ホークの発進口へと駆けて行った。

隊長がホーク3号で出撃してから数分後、落ち着きなく指令室をウロウロとするクラタ隊長の姿がそこにはあった。

せつかくカツコよくキメて送り出したのに、これじゃ動物園の熊だ。

台無しだよ。

しやーねえなあ……

「クラタさん、最近僕は禁煙をはじめましてね、最初のうちはこれが辛いなのって……」

「あ？　それがどうした、俺は吸うのをやめんぞ」

「……なんにしてもガマンするのは、体に悪いそうですよ？」

「ん？　……それもそうだな。よし、ちよつと行つてくるかあ……」

机の上のヘルメットをとろうと、クラタの伸ばした右手の先で、狙いすましたかのように入話器が鳴る。

キリヤマ隊長からの入電だ。

「こちらホーク3号、キリヤマだ。異常ないか？」

俺は、こちらを見たまま固まるクラタと顔を見合わせて……

「はい！　異常ありません！」

元気にハキハキと答える俺の後ろを、ニヤリと笑ったクラタが駆けて行つた。

そうして指令室を後にして、発射口へ向かうエレベーターに飛び乗ったクラタに背後から声がかかる。

「隊長、あわててどちらへ？」



聞き覚えのある恩師の声に、振り返った彼の目には、マナベのカーキ色の背広が映った。

どこへも何もこのエレベーターは……

クラタは悪戯を咎められた子供のようになり、ヘルメットを叩きながら押し黙る。

「この下は、ホークの発進場だが……？ それも鍵がないと入れない！」

「え、鍵っ？」

もちろんそんなモノは持っていない。

という事は誰かの許しが無ければ入れないという事。

どうすればいいのか、思考を巡らせるクラタの前で、黙って鍵を差し出すマナベ参謀。

「……キリヤマを守ってもらいたい、やつは、いい友人を持って幸せだ」

微笑を交わしあった二人の男達は、それ以上を必要としなかった。

受け取ったカギを握りしめ、万感の思いを込めて頭を下げる。

「……ありがとうございます！」

クラタが居なくなり、俺一人となった作戦室に、ダンが慌てて飛び込んできた。

「ソガ隊員！クラタ隊長が出動しましたよ！」

「あつ、そう」

えーつと、こっちはダメで、これは遠いな……こっちは途中までハイウェイが使えて

……

「僕たちはどうするんです?」

「うん……そうだなあ」

うん、やっぱりこのルートがいいな。よし!

「そろそろ出かけようか」

「はいっ!」

《固形燃料を落とせ! 固形燃料を落とせ!》

「よし、わかった」

円盤からの指示通りに、パラシュート投下される固形燃料。

それを、宇宙船から伸びてきたマジックハンドが回収する。

《部下を渡す! 着陸せよ!》

「よし、わかった」

誘導どおりに着陸コースをとるキリヤマのホーク3号。

……しかし、アイロス円盤から送られたのは人質ではなく、凄まじいロケットバルカ

ンの攻撃だった！

すんでのところで、急上昇で躲すキリヤマ。

だが、無防備に低空飛行の背後を晒す事までは避けられない！

狙いをつけた円盤は、3号が旋回に入るその瞬間を待っていた！

アイロス円盤を揺らす、けたたましい爆発！

一体どこから!?

ホーク1号で駆け付けたクラタの援護射撃は、見事にキリヤマの命を救ったのである。

窮地を脱した3号に平行飛行する1号

「キリヤマ……、久しぶりに組んでやるか」

「よし……よかろう」

キリヤマのハンドサインを皮切りに、洗練された曲芸飛行でアイロス円盤に攻撃を仕掛けるウルトラホーク。

かつて太陽系を騒がせた、双頭の悪魔がふたたび蘇った瞬間だった！

## むこうから来た男（Ⅲ）

シークレットハイウェイをかつ飛ばし、ポインターで駆けつけた俺達は、頭上で繰り広げられる死闘に圧倒されつつ、アイロス円盤に忍び寄っていた。

アイロス円盤は上部を分離させ、小型攻撃艇とすることで、より高い機動力を駆使して、ウルトラホーク二機とやりあっている。

正直、あの二人のコンビに追い回されてもやられないってのは相当だな。やっぱりアイロス星人は円盤も強い。

空中では、三機のジェット機が、まるで生きているかのように縦横無尽に空を駆け、常識外の軌道を描いていた。あれでは鳥だ。とてもジェットがやって良い機動じゃない。銀の翼が空を切り裂き、風がうなる。

おっと、見とれてる場合じゃなかった。フルハシとアマギを救出せねば！

だが、近づく俺達に向かって、円盤の主砲から攻撃が飛ぶ。

見つかっちまったか……

岩陰から様子を窺うと、反対側から伸びたマジックハンドが何かの容器のような物をこっそり置くのを見てとった。

あ、ははん……

なるほど、やっぱりそうか。

上で飛び回ってる攻撃艇は、隊長達の目を引きつけるための囷。

本命はアレだ。

確か、あの中に巨大なアイロス星人が入っている。

……というかアイロス星人かどうかは甚だ疑問だが。

ぶっちゃけ、セブンのカプセル怪獣みたいなもんなんじゃないかと俺は睨んでいる。

あの円盤の中にはアイロス星人がいて、後で出て来るでつかいのはアイロス星獣なん  
じやなからうか。

きつとそうに違いない。

……さて問題はだ。

円盤の置いたカプセルについて、俺が決めあぐねていると、上空の攻撃艇が再び円盤  
と合体しに帰ってきた。

カプセルを無事に置けたから、囷の必要が無くなったのだろうな。

ジェットを噴かして逃げようとする円盤に二人の隊長から攻撃が飛ぶ。

これではらくは離陸できないはず。

「ダン、スモーク弾だ！」

「了解！」

ふたりにウルトラガンにアタッチメントを付け、スモーク弾を円盤への直線上に発射する。

朦々と立ち込める煙に、視界が遮られた。

「よしいくぞー！」

そう言つて俺はダンを突入させ……俺はその後に続いて岩場を飛び出した。

そこへなんと円盤がロケットをめくら撃ちしてくるではないか！

爆ぜる岩場、ダンは上手く走り抜けたようだが、その後を付いていっていれば確実に被弾していたところだ。

カンのいい星人め。

しかし、甘かったな！

「ウ、ウワァー！ やられたー！」

「ソガ隊員ー！」

「ダン！ お前は先に行つて、二人を助けろ！ 円盤を中から破壊するんだー！ 俺は

ここから援護する！」

「了解！」

煙の中からダンの元気な声が聞こえる。

煙で見えないなら、わざわざ俺が突っ込む必要はナシ！

俺は円盤への直線コースではなく、回り込むように移動していたのだ！

悪いが二人の救出はボイコットさせてもらうぜ。

……あ、なんか煙の中から微かにデユワツて聞こえた気がする。デユワツて。

円盤突入はセブンに任せ、オレはオレのやるべき事をやる。

それは……てめえをじっくりウエルダンに焼き殺す事だよアイロス星人！！

「ハッハッハ！ 手も足も出まい！ なんせカプセルの中だからなー」

岩場にひっそりと置かれた、ランタンのようなカプセルに、ウルトラガンで光線を浴びせかける。

セブンを倒すなら、ダンの状態を狙うのが一番いい。

だったらこちらにも怪獣が動き出す前に少しでもダメージを稼ぐのだ！

……え？ ヒーローが変身する前に攻撃するのは御法度？ 残念！ ヒーローは

こつちだ、怪獣め！

オレが気にするのはただ一つ、この攻撃に意味が有るか、無いからだ。

この後、アイロス円盤がこのカプセルにレーザーのようなものを浴びせると、カプセルが爆発して巨大なアイロス星人が飛び出してきたような記憶がある。

そのレーザーが、カプセルを起動させる専用のエネルギーなのか、はたまた単なる攻

撃なのか、オレには判断がつかないというのが問題で……

カプセルを破壊すると出てきてしまうなら、うかつに爆破もできんし、ウルトラガンの光線で逆にエネルギーを与えてしまつていたら、本末転倒。

……だが、上を飛んでる隊長達や俺達の目から逸らすように置いたという事は、あんまり迂闊に攻撃されたくないんじゃないかと踏んだわけだ。

一か八か、どうせ出てきても展開は本編と変わらないんだ、自由にやらせて貰うぞ！  
やらない後悔より、やつて後悔する派なんだよ、オレは！

「うおおお食らええええー」

カプセルは身じろぎもせず、悲鳴も上げないもんだから、効果の程がさっぱり分からないが、さつきから俺の隠れている岩場に、攻撃がめちやくちや飛んでくる。

という事は……効いてる効いてる。

反撃できない悪者を一方的に蹴るのは楽しいなあ……！

オレが心を鬼にして、アイロス星人をデストロイしているのには訳がある。

コイツ、セブンがワイドショット使わざるを得ない程の強豪怪獣なのだ。

ワイドショットはセブンの最大威力の必殺技。

その消耗エネルギーは、エメリウム光線の比ではないはず。

次はキングジョーが控えてるつてのに、こんな序盤に撃たせてたまるか！





なぜなら！

「ダァーッ！」

アイロス星人の背後から、紅い朱い、赤い巨人の力強い腕が、羽ばたく翼をガツシリと掴んで、その動きをとめる。

今だ、みんな撃ちまくれ！

俺達の攻撃なんぞまるで意に介さず、アイロス星人はセブンを投げ飛ばすと、そちらにターゲットを移し、咆哮をあげた。

2体の巨人に揺さぶられ、地が叫ぶ。

セブンに突撃したアイロス星人は、鋭い牙を真つ赤な腹に突き立てながら、彼を締め付ける翼から高圧電流を流して、セブンを苦しめる。

俺達は、その無防備な背中に、ウルトラガンの光線を3人がかりで雨あられと浴びせるが、ちつとも気を逸らすことが出来ない。

プロレスラー同士の白熱する試合に、安物のエアガンで茶々を入れている気分だ。

いや、それでも構わない、体力ゲージがたった1ドットでも削れるならば、それはセブンの戦いを1秒でも早く終わらせることに繋がる。ましてやこれはゲームじゃない、どんな小さな傷だって、血を流し、皮膚が引き攣るといふ事は、すなわち、セブンが攻撃する為の隙を作れる可能性があるという事だ！

1%の希望をつかみ取る為に、俺達はエネルギーの許す限り攻撃を加え続けた。

対してアイロス星人は、口から可燃性の粘液を弾丸のように飛ばし、射線を巧みに誘導する事で、セブンを岩陰に封じ込める。

山肌が爆発し、歓喜の雄叫びを上げるアイロス星人。

セブンはその一瞬の隙をつき、身を乗り出して額から強力な磁力線の束を撃ち放つ。

……しかし。

「あの野郎、セブンのビームを白刃取りしやがった!？」

「なんて出鱈目なパワーだ!？」

地上でセブン達が苦戦する中、空ではまったく逆の構図で空中戦が繰り広げられていた。巧みに二機の機動をコントロールし、まるで追い込み漁のような挟み撃ちを仕掛ける悪党コンビ。

狂ったようにバレルロールを繰り返す、型破りなホーク1号の追撃から身を隠そうと、雲の中へ逃げ込む円盤。

その進路上、白い煙幕の切れ間から、ひよっこりと顔を出したホーク3号が、教本通りの見事なヘッドオン!

「おい、そつちへ行つたぞ、モグラ。ぼんやりして逃がすんじゃないぞ」

「まったく、なにをサボっているんだ、サウス。尻拭いは御免被る」

「なにい？ だったらどつちの攻撃が痛いか、そのドンガメに聞いてやろう！」

「ふむ、同時攻撃か。ならば、俺が撃ち落としてしまっても、恨み言を吐くなよ！」

上へ下へと撃ち据えられるアイロス円盤は盛大に黒煙を噴き上げていた。

本来ならば、この時点でもまだ互角の戦いを繰り広げている筈なのだが、ソガの余計な一言によつて、セブンが脱出の際にエメリウム熱線でコントロールドームをぐるりと薙ぎ払つて来たために、現在、内部が大火災に見舞われているのだ。

ただでさえ、銀河に悪名を轟かせるこの名コンビに、腹痛を抱えた状態で太刀打ちできよう筈もなかった。

そんな事は露知らず、地上のセブンは立膝をつき、今度は後頭部に両手を添えていた。対して、翼を突き出し、徐々にその場で回転してゆくアイロス星人。両者が思い思いの準備動作を整え、激突に備える。そしてついに、セブンが野蛮な包丁アイスラッガーを解き放つた！

だが、高速回転するアイロス星人の翼に当たったアイスラッガーは、硬質な音を立てて弾き返されてしまった！

今まで、当たりさえすれば、あらゆる敵にダメージを与えてきた、セブンの必殺武器が真正面から敗れた瞬間であった。

……これだ、これでこそアイロス星人だ。

奴は、強い。

今までオレは、弱点をついたり、緻密な計画を頓挫させたりして、今まで何とかやってきたが、このアイロス星人に、そんな小手先は通用しない。

ただ純粹に、強い。恐ろしく単純で、なんと質が悪い事だろう。明確な弱点が無い分、なんならあのキングジョーよりも厄介だ。

そんな強大な相手に、俺達人間のような矮小な存在が出来ることは……ただひとつ。力の限り、ぶち当たる事だけだ!!

「二人とも、コレを使うぞ!」

「これは……SMJ弾じゃないか!」

「3つも!? そうか、コイツなら……!」

これはかつての原子弾を改良したSMJ弾。地球防衛軍の歩兵が個人で携行できる最大威力のミサイルだ。SMJとはSavage. Mighy. Jokerの略で、威力はなんと、基地の原子炉の100万分の1。作成にかかるコストと、あまりの火力に、本来なら使用に隊長クラスの権限許可を必要とする、文字通りの切り札だ。

それを3つ、特科兵器庫にあつた分をかき集めてきた。今使ったら、今度配備されるのが一体いつになるかは分からないが……俺はこのあと、より強力なライトンR30が開発されるのを知っている。

だつたら使いどころは今、ここしかない!

「奴の回転が止まったら、叩き込もう」

「目を狙った方がいいでしょう」

カセット式のミサイルをウルトラガンにセットしてから、ヘルメットのバイザーを降ろし、その瞬間を待ち構える俺達。

やがてアイロス星人がゆっくりとその動きを止め、勝ち誇るように翼を開いた。今だ  
!

「撃てー」

強烈な閃光と爆熱が、アイロス星人の左目で炸裂し、奴に絶叫を上げさせる。

悶え苦しみ、その左側を大きく抉られた顔面を、ようやくこちらへ向けた敵は、残った片方の瞳で、地上の俺達を今度こそ睨み据えた。

さつきはこいつを星人じゃなくて怪獣だ、なんて言ったが、前言を撤回しよう。

激しい憎悪に黄色く燃える眼差しから、敵意と殺意をハッキリと感じ取ったオレは、理解したのだ。

やはりお前も、怒りと憎しみと……知性と感情を持った存在なのだな、と。

今までの狡猾な戦術を投げ捨てて、ただ怒りの赴くままに口から爆発液を乱射するアイロス星人。

苛烈な猛攻に、身を隠した岩陰から顔を出すことも敵わないが、それでいい。

今の奴は怒りに我を忘れ、冷静さを失っている。

攻撃にさらされ続ける俺達を守るため、セブンが右腕からラインビームを発射し、半実体化した鎖が、アイロス星人の右翼を絡めとって引つ張り上げる。

セブンの剛力と、アイロス星人の怪力が拮抗し、その動きが止まる。そこへ……

「俺の部下に何をやるッ！」

「部下の仇だッ！」

空にはばたく二枚の翼。

怒りに燃えていたのは、アイロス星人だけではなかった。

右方と左方から撃ち降ろされたビームは、蒼い碧い空にV字を描き、その接合部分は寸分たがわず同タイミングで着弾し、アイロス星人の残った右目を焼いた。

視界を失い、悲痛な声を上げるアイロス。

それを見ていたアマギが叫ぶ。

「上だ……セブン！ 奴は上からの攻撃に弱いぞおー！」

「……ジュワ！」

セブンは意を決したように頷くと、右足を後ろに引いてタメを作り、全身のバネを活かして、力いっぱい跳び上がった！ レッド族の恵まれた筋力によつて稼ぎ出されたその高さは、なんと垂直距離にしておよそ地上700メートル！

しかし、これだけでは、あのダイヤモンドのように固い、敵の頭蓋を叩き割るにはまだ足りない。

セブンの脳裏に思い起こされるのは、先程のアイロス星人の姿。

掛け声ひとつ上げたかと思うと、そのまま空中で身をよじり、念力によって自身の体を錐のように回転させた。セブンの技巧を凝らした技が、その赤い体をかぎぐるまのように変えたのだ。

力と技の風車が回る！

「アエエエエエエエエー！」

錐揉み状態で落下し、右足で一撃！

踏み込んだ反動で跳び上がり、左足でさらにもう一撃！

セブンの両足から伝わった衝撃は、アイロス星人の強固な頭蓋を浸透し、その内部で守られていた爆液嚢をズタズタに粉碎した！

ばきりと劈開した脳天から火花を散らし、断末魔の叫びをあげながらゆっくり後ろに倒れると、そのまま内部から爆散するアイロス星人。

……俺達は、勝つたのだ……あの強敵に……

「クラタ……いい腕だ。ハッハッハ……まだまだ、捨てたもんじゃないな」

「やあ……おまえこそ……」



白い白い雲の上から地上を見下ろし、轟々と燃え盛る円盤とアイロス星人の死体の傍で、こちらを見上げる深紅の巨人を眺めたクラタは、ぽつりとつぶやいた。

「……部下たちに、見せてやりたかった」

セブンが、足元ではしやぐ俺達3人に対して、2本の指を立てる。

それはまさしく、勝利のVサインであった。

## ウルトラ警備隊に死ね 《前編》（I）

「逃げろ！ 小鹿のように速く！」

炎に燃える客室から、夜の海が揺らめいて見える。

「今はこれが精いっぱいだ！ でも、必ず君を……！」

凄まじい爆音と共に、意識が途切れた。

「起きて……ねえ、起きて」

どこか遠くで、聞き覚えのある声が聞こえる。

自分をよぶその声が、ほかでもない自身の口から発されていると理解すると同時に、私の意識が、沈黙の海からズルズルと引き上げられていくのを感じる。

まるで錨を巻き上げるようにゆっくりと、ゆっくりと……私は目覚めた。

まだ焦点の定まらぬ視界の中に、こちらを覗き込む女の顔が迫ってくる。

ブルーの瞳に好奇心をこれでもかと溢れさせ、淡いプラチナブロンドの毛先を遊ばせ

たまま、小さく微笑みを湛えた口元……

この顔を、私はよく知っている。

……見間違えるはずもない。

「ワタシ……?」

「ええ、そうよ。お目覚めはいかが?　ワ・タ・シ」

「……キヤアア!!」

「ウフフフ、あんまりに悪戯が過ぎたみたいね」

そう言つて笑う自分の姿は、悪戯の成功した時の自分と、全く同じ笑い方をしていた。  
……まるで鏡写しのようにそっくりだ。左に出来るべくぼまで含めて。

「アナタは……いったい、アナタはだあれ……?」

「ワタシはワタシよ、ドロシー……ドロシーアンダーソン」

ドロシー・アンダーソン。

そう、この謎の空間で恐怖の体験をしている女性こそ、ワシントン基地の誇る若き才媛、ドロシー・アンダーソン博士なのである。

だが、今は記憶が混濁しており、彼女の頭脳をもつてしても、今の状況がまるで分らない。そんな中、たった一つだけ確信を持って言える事があったために、博士は目の前で意地悪く微笑む自分自身にNoを突きつけてやることにした。

「……それは嘘ね。ワタシは、誰かを驚かしたり、怖がらせたりするのが、アナタほど好きじゃないもの」

「残念、もう少し怖がってくれると思ったのに」

つまらなさそうに肩を竦め、手元の端末を確認する自称ドロシー。

言葉ほど悔しがつているようには見えず、本当にただの冗談程度だったらしい。

「でも、嘔吐きはアナタも同じよ、ドロシー。驚かせたり、怖がらせるのが、苦手ですつて? ……よくもそんな事を言えたものだワ。……散々、アタシたちの心に恐怖を植え付けていったくせに」

「恐怖? ……ワタシが?」

「しらばっくれても駄目よ。三か月前、アタシ達のところへ、侵略兵器を送り込んできたのは、アナタ達じゃないの」

「三か月前……侵略……まさか?」

「そうよ、教えてあげる。アタシはね……アナタ達地球人が、偵察ロケットを送り込んだ、ペダン星から来たのよ!!」

「そうか!」

今のやり取りで、記憶野がかなり刺激されたのか、何があつたのかを、臆気ながらも思い出してきた。

確かに三か月前、ワシントン基地では暗黒星雲にあるペダン星に一つの観測ロケットを打ち上げた。

光の届かない暗黒の星に、生命がいるはずがないと思い、測量のために新型機を飛ばしたのだが……それは大きな間違いであった。あの日、観測ロケットはブラックホールに突入するかと思われた瞬間、宇宙の闇をまるでカーテンか何かのようにするりと抜けて、暗幕の向こう側に隠されていた未知の世界のデータを、その性能を遺憾なく発揮して収集し、回線がパンクしそうになるくらい纏めて地球に送信してきた。

なんと暗黒の星ペダンは、光が届かないのではなく、光を逃がさないようにしていた。ただだったのである。

ダークマターを機織りのように扱い、暗闇の絹糸によつて、巨大な一種のダイソン球を形成していたのだ！

ダイソン球とは、かつてとある学者が提唱した仮説の一つで、進んだ宇宙文明は、恒星をぐるりと囲む生存圏で構成され、その光と熱のエネルギーを余すことなく使用できるようにしているだろう。というものである。

銀河系サイズの人工コロニーとも言え、分かりやすいだろうか。

そのコロニーの壁が、金属や岩石では無く、たまさか闇のヴェールで構成されていたために、地球の観測ロケットは何にも邪魔される事無く、その内部へすっぽりと入り込

んでしまったのだった。

「ち、違うわ！ あれは事故だったのよ！」

「ふん、口ではなんとでも言えるワ。興味のない場所に、人は見向きもしないもの。アタシ達の星を侵略しようと、舌なめずりしていたんでしよう！」

「ワシントン基地では、あれから謝罪の無電を送り続けているじゃない。ワタシ達はあれが届いていないのかと……」

「地球では、どんな悪い事をしようが、謝ればそれですむと言うの？ ……そうはいかないわヨ、だからアタシ達はやってきたの。卑怯な地球人に騙されない為に！」

……そうか、ここ数週間、ワシントン基地の職員が相次いで謎の失踪を遂げていたのは、やはり彼女らペダン星人の仕業だったのね。

ドロシーは一連の事件が、二つの惑星間での悲しいすれ違いによって引き起こされたのだと確信した。

その対策の為に、二ホンの防衛センターで秘密裏の対策会議を開催する予定であったが……出航時に正体不明の襲撃を受けたのを思い出した。そうか、あの時に自分は捕まってしまったんだ。せつかく彼が逃がしてくれたのに……

「……へえ、対策会議。ほらやつぱり。アタシ達をどうやって攻撃するか、作戦をたてようってわけネ？」

なぜそれを!?

「地球人は顔では平和主義者のようなフリをして、平気で嘘をつく。その手にはのらないワ。さつきから、あなたをブレインストリーミングにかけているの。どんな悪人も、頭の中までは、嘘をつけないんですからね」

ようやくドロシーは、自分の頭に輪っかのような装置が乗っかっている事に気付いた。

目の前のペダン星人は、手元の端末をしきりに目で追っている。

……ああ、なんてこと。この装置でワタシの思考を読んでいるんだわ!

だが、とドロシーは思った。

これはむしろ都合なのではないかと。

彼女の言う通り、思考の中で完璧な嘘を吐く事はできない。……しかし、それが何だと言うのだ? 嘘をつく必要など、自分には何一つないのだから。

むしろ潔白を証明するいい機会ではないだろうか。自分を通して、地球人がいかに平和を愛し、信頼と思いやりに溢れた種族であるかを、この疑り深い宇宙の友に知ってもらうえば良いだけではないか!

こうなったら、地球とペダン星の為に、思い切り天真爛漫な少女を演じきってみせよう!

そう、きっと彼が助けてくれるに違いないのだから。

ワタシはその時を信じて待つだけよ。

……問題は、このような記述が、さつきから手元の端末に駄々洩れている事をまるで気にしない、この地球人の女の感性の方だ。

ドロシー・アンダーソンという博士はその知性と比例するかのようには、自分自身が思うよりもさらに6割増しで、演じる必要などまるでないくらいには、お人好しで、天真爛漫にすぎる女性なのであった。

頭を抱える技術主任のストーリーミング画面には、炎上する船室で、拳銃を片手にこちらを振り返る、サングラスの地球人男性の映像が映っていた……



## ウルトラ警備隊に死ね《前編》(II)

船の上で、サングラスをかけた男が、葉巻を吸っている。

豪華客船のデッキに腰掛け優雅に寛ぐ男を見て、一体誰が思うだろうか。

彼が任務に失敗したエージェントだ、などと。

彼はマーヴィン・ウィツプ。

祖国アメリカの為に、世界をまたにかける超凄腕の諜報員である。

彼は人が嫌がるどんな汚い仕事であっても、それらを進んで引き受け、ミッションのことごとくをクリアして来た男だ。

秘密裏に、社会のゴミ共をきれいに一掃していく彼を、人は尊敬と畏怖をこめて、ダーティウィツプ処刑鞭と呼んだ。

そんなマーヴィンであるが、たった一つ、他の誰にも譲らず、どんなミッションよりも最優先で受ける仕事がある。

それは、ワシントン基地の才女、ドロシー・アンダーソンの護衛任務であった。

彼女と彼は長い付き合いだった。まだお互いがこのように類い稀な才能を発揮するとも知らず、彼女がまだエレメンタリスクールにすら通っていない頃から、何かと世話

を焼いてきてやったものである。

そんな彼女に危険が迫っていると、ワシントン基地から依頼の打診があつたのはつい数週間前。ドロシーの周囲で、謎の失踪が相次いでおり、秘密裏にニホンの基地に移送するといふものだ。

そして、二つ返事でそれを受けたマーヴィンに、ボガード参謀は声を潜めて呟いた。今回の敵は宇宙人かも知れない、と。

そうしてアベックの旅行者に成り済ました二人は、ニホン行きの客船に乗り込んだのだが……その旅程が丁度中間に差し掛かった頃、襲撃をうけた。

彼女のとつていた船室が焼け出され、廊下には何人もの男達が銃を構えて待ち受けていたのだ。

マーヴィンは彼らを抑え、その場からドロシーを逃がそうとした……そうして、奴等を全員、物言わぬ血袋に変えてから、彼女の後を追ったが、ドロシーは忽然と姿を消してしまった。奴らの死体と共に。

マーヴィンは初めて任務に失敗したのだ。

……だが、彼はまだ諦めてはいなかった。

通信機も、身分証明書も。燃え残った部屋からは見つからなかったが、それでもこうして、焦ってパニックになるどころか、逆にテラスでリラックスした姿を見せているの

も、全ては彼女を取り戻すため。

奴らの狙いが彼女を殺すだけならば、あのように手の込んだ真似をする必要もない。……そして、散々自分が鉛玉を撃ち込んでやった下手人どもが、血痕一つ残さず消え失せたとすれば、奴らの仲間はまだこの船にいる。

マーヴインは釣りが趣味であった。

だから、今日も釣り糸を垂らす事にした。

彼は今、この大海原で一世一代の勝負を待っているのだ。

今まで沢山の大物を釣り上げてきた彼であったが、そういえばエイリアン<sup>キ</sup>フィッシュ<sup>ボ</sup>はまだだったな……と。

葉巻を旨そうに吸いながらひとりごちる、イキのいいエビに向けて、テラスの岩影から真つ黒い銃口が、ぎらりと狙いをつけていた。

その頃、技術主任は辟易していた。

このドロシーとかいう地球人の女が、あまりにも……

「ねえ、これは？　これはなんて読むの!？」

「……それは『おうごん』よ」

「ありがとう!　……黄金の城塞……ああ!　エメラルドの城みたいなものね!」

この調子だ。

このお姫様は、天真爛漫な女性どころではなかった。これでは夢見る少女だ。

ブレインストリーミングは対象の脳が活性化しているほど、より深く詳細に思考を探索することが出来る。

なので、対象と話す事が任務の一つではあるのだが……

彼女はとある理由から、早々にギブアップして、母星の幼児用識字本を読ませていた。……原文で。

渡されたそれを嬉々として翻訳しながら、好奇心に目を輝かせるドロシーを見て、彼女は呆れると同時に……羨ましいな、とも思っていた。

自分とて、任務でも無ければ、こんな装置に頼らずに、異星の言語を自力で解き明かしたい。

彼らの文化や……この星の自然を、早く楽しみたくて仕方がない。

さつきからこのドロシーの思い出にある景色の、なんと美しい事か！

母星では、自然物が担う筈の循環機構もほとんど解き明かされ、次々と人工物に置き換わって久しい。

保存の為に残された僅かな自然は、たまに取れる休暇の保養地として、短時間だけ堪能できるばかり。

この星のように、住宅地に樹木性の植物が等間隔で植わっているなんて、なんと贅沢なスペースの使い方だろうか！

もつとも、この光景を見たいがために、潜入作戦群の技術主任なんて役に収まっているのだから、自分も十分に役得である自覚はあるのだが……

いったい、いつからだろう。ペダンが灰色の合理主義と軍国主義に染まってしまったのは……そう憂う彼女は母星では珍しく、芸術と文化を特に愛する気性を有していた。

だが、絶えず防衛戦争に明け暮れるペダン星において、そんな悠長な趣味が許されようはずが無く……彼女が軍に入隊したのも、最新鋭の研究設備と潤沢な資金を備えているのが、軍のセントラルタワーだったからに他ならない。そこで持ち前の知的好奇心と、対象物への鋭い観察眼を活かし、非常に完成度の高い変装技術を発揮したところその腕を買われ、異星への特殊潜入作戦群の技術士官として、様々な星について行くことになったのだ。

そこで戦士達が戦利品として持ち帰ってくる品々のなんと素晴らしい事！

それらが作成されるに至る背景や、その用途から推察される民族性などに思いを馳せる事は、十分に彼女の荒んだ知的好奇心を満たしていた。

なので、こんな状況にも関わらず、目の前で識字用の絵本を、きらきらとした目で読

破している大きな幼女アンダーソンの気持ちも分からなくもない。

だが、自分は任務中であるのに、こうも楽し気な姿を見せつけられると……

「ねえちよつと！ さつきからアナタの思考に、荒唐無稽なノイズが度々混ざるんだけど……やめてくれないかしら？ なんなの、これ!？」

「え、ノイズ……？ いったいなんの事？」

「ああもう……これよ！」

技術主任が、地球言語と同時翻訳された端末の画面をイライラした様子で見せつける。

そこにはブリキ（おそらく地球製の特殊合金と思われる）でできたサイボーグが、雨で錆びて動けない（地球の酸性雨にそんなに即効性のある腐食作用があるわけがない）ので油を差してやるだの、乾燥した植物の残骸を集めて作成した人形が知性を欲して、脳ミソがほしい！ とのたまい出すだの。

挙句の果てにはエメラルドの城ときたものだ！ 装飾品ならいざ知らず、あんなに加工性の悪い鉱石で街ひとつ作るなどと、効率が悪いにもほどがある。非常に論理的思考を持つ目の前の女性（彼女の知性が、地球人の中でも飛びぬけたものであるのは、先程までの会話から疑いようはない）の考えることではとても思えない。

ところがドロシーは目を見開いたかと思うと、こちらに熱烈に推し進めてくるではな

いか！

「ああ！ コレね！ これはね、マービィがワタシに読み聞かせてくれた、お気に入りの作品なの！ ねえ、アナタも読んでみて！ 絶対面白いから！」

「な、なんですって!? こんな幼稚な話が? ……だいたい読めたっていったって……」

「大丈夫！ この話なら何度も読んだから、頭の中に全部入っているわ！ 一言一句！」

「……ハア、呆れた。これじゃベダニウムクッキーね……」

「クッキー……?」

「優秀な性能の、無駄遣いという意味よ……!」

かつてペダニウムエンジンを設計した天才は、潤沢な熱量でクッキーを存分に焼き上げる為に開発したのだ、という笑い話は、今なお語り継がれている。

銃声と共に、サングラスの男がもたれ掛かっていた手すりも弾ける。

しかし、すでにそこにマーヴィンの姿はなく、体を翻した状態から、彼の右手の大物が低い唸り声を上げた！

利き腕から盛大に血しぶきが上がり、狙撃ライフルを取り落とす襲撃者。

デツキのプールサイドを走り抜けるマーヴィンに、ビジネスマン風の男たちの構えたサブマシンガンから雨あられと弾丸が降り注ぐ。水と、砕けたチエアの白い飛沫がマー

ヴィンの姿を一瞬隠したかと思うと、その向こうから、再び響く轟音！ 男達の頭上に括り付けてあった救命道具のタンクが、落下先の二人を押しつぶし、本来とはまるで真逆の仕事を果たした。

救命用具の逆襲から、命からがら逃げのびた男の胸に風穴が開き、もんどりうって倒れこんだ先で、プール水を真つ赤に染めていく。

……なるほど、宇宙人も血の色は変わらんらしい。

マーヴィンは敵が多い。普段であれば、犯罪者の報復や、敵対組織の工作を疑うところでは有るが……男達の人種はバラバラ。

黒人、白人、メガネをかけたアジア系に、あろうことかターバンを巻いたエスニックな奴まで。

奴さん、あんまりにも節操がないとは思わんのかね？

仮装。パーティかと言いたくなる格好の宇宙人へ鉛玉で脳天ブチ抜き、もう一人。

ここまですれば、流石に偽装の意味もないと思つてか、ようやくエイリアンらしい服装の兵士が二人、マーヴィンの行く手を塞ぐように躍り出た。

光線銃から眩い光が発射される。人間の体組織など、一発で原子崩壊させてしまう威力だが、当たらなければどうという事もない。

来客用に纏めて用意されていたワイングラスを、給水所を走り抜ける、マラソンラン



ナーのようにひったくると、マーヴインはそれを宇宙人へ力いっぱい投げつけた。

両者の間に引かれた真つ赤で芳醇なカーテンは、きらめく光線をあたりに拡散させながら、重たい金属の殺意だけでは通行許可を出した。

ブルーのバイザーのど真ん中から蜘蛛の巣のようにヒビを入れ、その場に倒れるエイリアン。

ヘルメットの中がいったいどうなっているのか、想像もしたくない。

狼狽えるもう一人の懐へ一気に踏み込んだマーヴインは、掬いあげるようにして渾身のアツパーカットをお見舞いした。

手すりの向こう側へ全身を躍らせ、そのまま落下していく兵士。

ドボンとひねりのない水音を背中に聞きながら、マーヴインは最初に撃った男の元へゆっくりと近づいた。

右腕が弾け飛び、血をだらだらと流しながら、浅い呼吸を繰り返す黒人の男。

彼は恐怖に怯えながらも、自分の落としたライフルと、マーヴインの顔を交互に見やっただ。

マーヴインが口を開く。

「おおっと。考えはわかつてる。俺がもう六発撃ったかまだ五発か……実は言うところ、こつちもつい夢中になって、数えるのを忘れちゃったんだ。でもこいつはマグナム4

4つて言つて、かつて地球で一番強力な拳銃だったんだ。お前のドタマなんて一発で消し飛ばぜ？」

その脅しに、床へ倒れた男は息をのむ。

マーヴィンの言う銃が、先程、仲間のヘルメットを叩き割つたのを見ていたからだ。

「楽にあの世まで逝けるんだ。運が良けりやなあ。さあどうする？ その口でドロシーの居場所を吐くか……俺の相棒にキスするか」

もはや自分は助からない事を悟つたペダンのエージェントは、それでも最後まで任務に準ずる覚悟を決めた。

仲間の情報を喋るだど？ 笑わせるな。そんな恥を晒すくらいなら……自分は、誇り

高きペダンの戦士だ！

「どうせハツタリだろ……コンチクシヨウ！」

悪態を吐き捨てると、残つた左腕で床のライフルに手を伸ばす！

だがそれよりも、マーヴィンの右手でマグナムが吠える方が速い。

腹部に大穴を開けて沈黙するペダン星人。……即死だった。

「……チツ」

舌打ちを残して、マーヴィンは後ろを振り返る。

コウベ・ポートはすぐそこだ。

ただ……

素直に下船するわけにはいかない。

船に乗った時とは違い、パスポートを奪われた今の彼は、ペダン星人の変装した地球人と何ら変わりはないのだから。

マーヴィンの目は、宇宙人をひき潰したタンクが口を開き、アクアリングの装備が一式、顔を覗かせているのを捉えた。

## ウルトラ警備隊に死ね 《前編》（Ⅲ）

真剣な顔で作戦室に帰ってきた隊長が、参謀から下された指令を、俺達に伝える。

「フルハシ、ソガ、モロボシの3名は直ちに六甲に出動し、防衛センターの警護に当たれ！」

「六甲……？　っていうと、さっきの」

「うむ、私もずいぶんとヤキが回ったらしい。今回ばかりは君達の陳情が正しかったという事だ」

「いったい、どういうことですか？」

「先程連絡のあった、空港で射殺されたカナダからの旅行者。彼を含めて、神戸で殺害された外国人は全て、身分を偽装した防衛軍科学班の研究チーフだったそうだ」

「なんですって!？」

「3か月前、地球の打ち上げた観測ロケットを兵器と勘違いしたペダン星は、その報復として、宣戦布告を行ってきたらしい。そして、その対策の為に今週、六甲山の防衛センターで防衛会議を開くことになっていた……」

「しかし、もう3人やられてしまった……と」

さつきまでこの作戦室では、神戸の外国人殺人事件について、我々は動かなくてもいいのかという話をしていた。

結局、殺人事件は刑事の領分であって、我々の仕事は地球を守ることだ！ と隊長に突っぱねられてしまったが……

犯人が宇宙人なら、我々の出番となる。

「うむ、そして我々にはセンターの防衛だけでなく、要人警護の任もある」

「要人……？ 一体誰を？」

「この人と一緒に、防衛センターへ向かうんだ」

隊長が見せた写真には、青い目をした金髪美女が、伏し目がちに写っている。

机の鶴の写真を見て、驚嘆の声を上げる隊員達。

「こいつあ、どえらい美人だ！」

「……なんてこった！ この人はアンダーソン博士じゃないですか!？」

「なんだ、知ってるのかアマギ」

「知ってるも何も、ドロシー・アンダーソン博士といえは、ワシントン基地の頭脳とまで呼ばれる天才ですよ！ 件の観測ロケットも、彼女が主導となつてプロジェクトを成功させたんですから」

「確かに聞いた事があるわね。私なんかより、もっと沢山の飛び級を重ねて、あつという

間にチーフになったんですって。すごいわあ……」

「へえ……こんなべつぴんがねえ……？」

「先輩、鼻の下伸びてますよ」

「う、うるせえな！」

「ああ羨ましいなあ……おいダン、俺と変わってくれよ」

「え、そんな……僕の決めることでは……」

「もう、アマギ隊員まで……フケツ！」

「ち、違う。僕は純粹に学術的興味が……」

「お前たち、いい加減にしないか！ アイドルの追っかけじゃないんだぞ！」

「「ハイ……」」

隊長が雷を落としてつつ、もう一枚の写真を差し出した。

そこにはサンングラスをかけた怪しげなスーツの男が写っている。

「隊長、この男は……？」

「博士は現在、この男に命を狙われている可能性がある。参謀が仰るには、おそらくペダ

ン星人ではないか、との事だ」

「……おいおい、人間そっくりだぞ！」

そりゃそうだ。人間なんだもん。

まあ、ただの人間かと言われればそうとも言えないかも知れないが……

なんせ、アマギの上背に、フルハシの胸板を兼ね備えたような巨漢だ。

いいなあ、外人は。どいつもこいつもスタイルが良くってさ！

こんな奴に取っ組み合いを挑むのは、是非ともご免被りたい。

……あ、そうだ。

「となると……隊長、今回の作戦について、お願いしたい事が……」

「ほう、ようやく何かする前に、私の顔を窺ってくれる気になったか？ 相当懲りたと見えるな、ハツハツハ！」

「あーえつと……ハハ……そのー……ハイ」

ああ、隊長の視線が痛い！

何度も謝りますんで、逆立ち基地一周は勘弁してください!!

ううっ、思い出すだけで……胃酸が……

「分かってくればいい。それで、何だ？」

「ハイ、実は……」

こうして、フルハシ、ソガ、モロボシの3隊員は、シークレットハイウェイ、ルート9を六甲山へと向かった！

基地からの直通トンネルを抜けたら、そこはもう六甲山。長時間のドライブに疲れた

であろうドロシーの慰安も兼ねて、神戸の港街を見下ろす。

ああ、懐かしい光景だ……

「あの街のどこかに、ペダン星人が潜んでいるのか……」

「アンダーソンさん。安心していてください。我々が必ず締め上げてやります」  
「今度の事件は、ワシントン基地の責任です」

「なーに、地球はひとつですよ！　ワシントン基地も極東基地もありませんよ」

その時、ダンの第六感が、危険を察知した！

「あつ！　危ない！」

銃声と共に、ポインターのボンネットに火花が散る。

ダンが彼女を咄嗟に引き寄せていなければ、確実にドロシーに命中していた。

……チツ、ダンめ余計な事を。

ああいや、ここで偽ドロシーが死んだら、本物が帰って来なくて詰むんだ。

グツジヨブだぞ、ダン！

襲撃の失敗を悟り、車で走り去っていくサングラスのペダン星人……もといマーヴィン捜査官。

ダンが追いかけてしようとするが、間に合わない。

ん？　というか、なんで下の道路から？　射線通らないだろ……え、もしかして今の



狙撃、あその岩に跳弾させたの!?

……化け物かよ、アイツ。

「アンダーソンさん。あなたを撃とうとしたんだ!」

「ダン! 防衛センターに急ごう!」

こうして襲撃を受けつつ、嚴重警備の(何回検問通らせる気だよ!) 六甲山防衛センターに着いた我々。

うわあ……ほんとに国際会議場が六甲山に建つてら……

ん? てことはこの世界の宝ヶ池には、何が建つてるんだ? ……気になるから、今度の休暇では、こつちの世界でも聖地巡礼といくか。

俺の疑問を余所に、我々一向は防衛センターの研究所長であるツチダ博士に挨拶することになった。

「やあ……さつき、キリヤマ隊長から連絡がありましたよ」

「よろしく!」

「こちらこそ……ウルトラ警備隊が来てくれたら、怖いものなしだ!」

俺達を笑顔で迎えつつ、殺害されてしまった三人の尊い仲間たちを悼むツチダ博士。

そのかたき討ちと言わんばかりに、防衛会議の開催を固く誓う。

「……博士、ワシントン基地のドロシー・アンダーソンさんです!」

「おお、ドロシーさん。お待ちしていました」

「ドクターツチダ！」

「いやあ、無事でよかった。貴女は今回の会議の中心人物ですからね」

「ドクター、会議は大丈夫ですか？ ……ペダン星人は、我々の動きを知っています」

「明朝、南極の科学基地から2名の仲間が到着します。そうすれば、会議は予定通り、開かれますよ」

「南極から……？」

「なあに今度は大丈夫」「ああー!! そうだ博士！ さつき隊長から連絡があったと仰いましたね！」

危ない、それ以上は言わせないぞ博士！

機密をペラペラ喋るんじゃないよ、まったく！

目の前のドロシーが偽物で、スパイだったらとか思わんのか！

……思わんわな、そりゃあ。

「ん、ああ、君がソガ隊員か。ご注文のモノも、しっかり届いているよ。第四倉庫に収めてある」

「ありがとうございます、博士。ドロシーさん、来てください！ 貴方に見せたいものがあるんだ！」

「え？　ちよ、ちよつとお待ちになつて……！」

ドロシーの腕を引つ張り、ツチダ博士の研究室から引きはがす。

これ以上の情報収集を許してたまるか！

俺の勢いに飲まれ、釈然としない様子で、ガムを噛みながら着いてくるドロシー。

おいおい、お行儀が悪いね。キミは。

「アンダーソンさん、それ……ブラックガム、好きなんですか？」

「え？　ええ……」

「いやあ、実は僕はなかなかのロングスリーパーでね、日中眠くて眠くて……」

「は、はあ……？」

「おいしそうですねー！　それ！」

「……あの……要りますか？」

「えー！　ホントに!!　いやーなんだか悪いなあ！　いただきます！」

モグモグ！　モグモグモグも！　くつちやくつちやプウ……ぱちん！　クッ

チャツクつチャ……

「あの……ソガさん？」

「え!!?　(クチャア……)　なんへす!!?　(ミツチミツチ)　ほいひいれすね！　ホへ！」

「あの、少しお行儀が……いえ……なんでも……ハア」

いやはや、美人は嫌そうな顔しても絵になるねー！

残念だったな、ペダン星人。

俺の目が黒いうちは、ガムの暗号通信なんてさせないぞ……？

俺だって本当は嫌いなブラックガムを、我慢して噛みまくってるんだから、おあいこだな！

そうこうしてるうちに第四倉庫へ到着。

……おお！ 俺の注文通りの秘密兵器がそこにはあつた！

「い、コレは……!?!」

ふっふっふ、お前用のリーサルウェポンで、さつさと前半の出番をすっ飛ばしてやるぞ！

覚悟しろ、キングジョーめ！

## ウルトラ警備隊に死ね《前編》(IV)

倉庫では、今まさに搬入作業が行われている真つ最中であつた。

かの英雄は、どつしりとした重厚感のあるボディを、レーダー波を吸収する真つ黒なステルス塗料で染め上げ、出撃の時に備えている。

彼の足は、車輪と履帯で構成されており、速度と走破性を両立したハーフトラック仕様。

そして何よりも目を引くのが、車両の先端部分に鎮座する白銀の巨大な螺旋。

何物をも眼前に立ち塞がる事を良しとせず、ただ一筋に、あらゆるものを穿ち抜くために屹立した異形の剣が、その切っ先で日光をきらりと反射させていた。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

時は、数時間前の作戦室に遡る。

「……なに、マグマライザーを？」

俺のお願いを聞いた隊長は、訝し気だ。

要人警護に、つい先日ロールアウトしたばかりの地底戦車を引つ張り出そうというのだから、さもありなん。

しかし俺は、この日の為に用意した、万全の理論武装を展開する。

「はい、敵の狙いが防衛会議を妨害する事ならば、一人ずつ参加者を殺して回るより、集まったところを、その会場ごと物理的に叩き潰せばよいのです。私がペダン星人なら、防衛センターに怪獣を差し向けますね」

「……なるほど、センターを襲う怪獣への抑えとして、最新鋭の地底戦車を使つてやろうという訳だな？」

「そうです、空からの敵はホークでなんとかなるとして、会場が六甲山から動けない以上、地底からの攻撃にはまったくの無防備です。その点、マグマライザーなら、グランドソナーによる警戒が可能かと。……それにアマギ、確かあの戦車は地下数千メートルの圧力にだって耐えるんだろ？」

俺が水を向けると、アマギは自信たっぷり頷く。

自分の設計した兵器が早速の定番を貰えそうってんで、少しだけ嬉しそうだ。

「ええ、もう一度車体の構造を見直して、耐熱性も、耐シヨック機能も、当初の予定から、二割増しに余裕を待たせてあります」

「だったら、警備隊の所有する兵器の中で、現状最も防御力に秀でているってことだ。例え火を吐く大怪獣が現れても、ホークが到着するまでの殿ぐらいは、十分に務まると思います。……なんなら、いざという時には、博士たちを収容して、地中に逃げ込んでや

りますよー！」

「……ふむ、なかなか悪くない提案だ。それに、新兵器をいきなり実戦で地底に潜らせるよりも、地上で走行テストがてら、慣らし運転してやるくらいが良いかもしれんな……よかろう！ お前たちが向こうへ着くころには、届けておいてやる」

「……ありがとうございます!!」

・ ・ ・ ・ ・

俺は、漆黒に輝くマグマライザーの車体をしげしげと眺めつつ、何度も頷くのをやめられない。

ああ、実に頼りがいのあるフォルム。すばらしい……まるで地球防衛の精神が形になったような！

これを完成させる為に、わざわざアンヌに嫌われてまで、ピット星人を悪即斬しては破壊工作を防いだり、ユシマ博士を馬車馬の如く働かせたりして、アマギの貴重な時間リソースを、コイツのプロジェクトに集中させてきたのだ。

たまに、奴のパトロールを交代してやつたりと、眠い体を無理やり動かしてきたのも、すべてはこの地底戦車をキングジョー戦で使う為！

こうして土壇場に間に合ったのなら、頑張つて来た甲斐があらうというもの。

本編ではいつ完成してたのかさっぱり言及されて無かったけど、ダンが死んだとき

に、激おこ警備隊が三原山にコイツでカチコミかけなかったところを見るに、少なくとも、あの時点ではまだ完成してなかったんじゃないかな。

本編での初登場が2話分先だから、オレの地道な頑張りが無かったら、最悪間に合っ  
て無かった可能性がある。よくやったぞ、オレ!

「あのー……ソガ隊員? これはいつたい? アタシに見せたいのはコレですか?」

「そう! そうです! これぞ地球防衛軍の誇る新型戦車、マグマライザーです! い  
かがですか、アンダーソン博士!」

俺が万感の思いを込めて、努力の日々を噛み締めていると、置いてけぼりにされたと  
感じたのか、偽ドロシーが声をかけてくる。

うん、忘れてたわけじゃないよ。

俺も、君にプレゼンしたくて、たまらないからさ。

「いかがと言われましても……武装は何を搭載しているんですか?」

「レーザーが撃てます!」

「まあ、すごい! 他には?」

「レーザーが撃てます!」

「……ええ、そうなんです。ちゃんと聞こえていましたよ? 他の武装は?」

「レーザーが撃てます!」



「……」

満面の笑みで言い放つ俺に反比例するように、どんどん顔が怖くなっていくスパイドロシー。

「……あの、ソガ隊員……アタシをバカにしていますね……?」

「とんでもない! むしろ、博士は見て分からないんですか……?」

「はあ? 何がかしら?」

「このマグマライザーには、レーザー以外必要ないんです! だってほら! 見て!

コレが! あるでしょう!」

「その掘削機が何か?」

「ドリルですよ! ド! リ! ル! はあくやっぱり女性には分かんないかな?」

このロマン! ドリルさえあれば、たくさんの武装なんて要らないんです! この凝縮された漢らしさ! ドリルは浪漫の塊なんです! 全世界の男の子の夢なんですよ!

「おわかり!」

「……」

「おお、怖い怖い。」

とつくに零下240度の視線だ。

美人の蔑んだ眼はゾクゾクするなあ……!」

いやいや、オレにそんなシユミは無いんだってば。

「……敵がきたらどうするおつもりですか？」

「そりゃあもう！ きまっていますよ！ どんな敵だろうと、このドリルでブチ抜いてやるんです！ 螺旋に不可能はありません！」

「フ……効くとよろしいですね」

あ……今、鼻で笑ったね？

もう完全にバカを見る目だ。

だが、それでいい。

それでこそ、このマグマライザーを見せた価値がある。

見た目で判断して、バカを見るのはお前の方だペダン星人。

今は存分にオレとマグマライザーを侮れ！ そしてせいぜい間違った情報を持って帰るがいい。

それでもって、間違いが判明した時にはもう遅いのだ！ 怒った上司に処刑される！ もちろんドロシーを返却した後でな！

完全に興味を失った顔で、ガムを取り出し静かに噛み始める女スパイを尻目に、オレは再び、頼もしき英雄を見上げる。

お前の輝かしい戦績の数々に、ついにキングジョー撃退を追加する時がきたのだ！

や  
っ  
て  
や  
ろ  
う  
ぜ  
、  
マ  
グ  
マ  
ラ  
イ  
ザ  
ー  
！

## ウルトラ警備隊に死ね 《前編》(V)

防衛センターを臨むテラスに腰掛けながら、ドロシーアンダーソンに扮した技術主任は憤っていた。

……さつきから何なのだ、この男達は！

口を開けば、やれドリルだの、食事だのと！ 鬱陶しい事この上ない！

読書をするフリをしつつ、ガムを噛んで胸元のブローチ型発信機から暗号通信を行う。

しかし、その間も両側を挟んだ男たちが口々に語りかけてきて、無視をし続けるのもげんなりしてきたところだ。こんなことならば、わざわざ自分がスパイをやらずとも良かったのではないかと、思ってしまう。

そもそも今回、彼女がドロシー役として抜擢されたのも、元々顔立ちや背格好が似ていた、というのも都合ではあったが、なによりドロシーアンダーソンの知能指数が思ったよりも高かったから、という点に起因する。

捕まえた彼女の知識量と頭の回転の速さは、地球人としてだけでなく、並みのペダンスターをも僅かに凌ぐ程である、と見なされた。……生まれたての子供から、前線で戦う

戦士階級に至るまで、常に高等教育を施されてきた、この種族全員がプロエンジニアと言つても差し支えない、一般ペダン星人よりも、である！

そのような女性に化けるのであれば、それ相応の知性を持った人物でなくてはならなかった。なぜなら、敵地に潜入するうえで、防衛センター所属の研究者と行う会話は勿論、それ以外の場所でも、咄嗟に学術的な見識を問われる場面、というのは充分に想定されてしかるべきシチュエーションだからだ。なによりも、その応答を全て、いったん地球人レベルにまで下げて行かう、といった高等技術が要求されるのである。

高度な専門知識を前提とするような分野の会話を、相手の理解度、知識量を推し量りつつ、違和感のないレベルに落とし込む、などという芸当は、並大抵の理解度ではできない。

それが出来る。というのが、この技術主任の強みであった。強い好奇心に裏打ちされた、相手を理解し、歩み寄ろうとする姿勢こそが、より精度の高い擬態と、会話のコントロールを可能にしている。

他の種族（というか自分より知能の劣る者）を見下しがちなペダン星人に置いては、非常に得難いスキルと気質であった。

彼女は母星で折り紙つきの変わり者だったと言えるだろう。

だが、程度の低い者に合わせるといっても限度というものがある。

こんな知性のカケラもない低俗な会話ばかりされるなら……いやいや、この任務を仰せつかったお陰で、地球の自然に直に触れる機会を得られたのだから、贅沢を言つてはいけない。

……まったく、この二人はもう少しマトモに仕事をしようという気がないのか？

あのモロボシ隊員のように、常に紳士的な態度で臨めとは言わないが、少しは見習つて欲しい。

先程、その頼もしい腕で自身の命を救つた地球人に視線をやると、今も真面目に周囲に目を光らせている。そのままじつと見つめていると、流石に向こうもこちらの視線に気付いたのか、顔をこちらに向けた。しばし目が合う二人。

彼は不思議そうな表情で首を傾げるが、その様子すらもチャーミングだ。

まあ、地球人には彼のような者もいると分かつただけでも良しとしようではないか。

……そうだ、地球人と言えば、ドクターツチダもなかなか信用の置けそうな人物だ。ドロシーの記憶の中で見た通りの、物腰柔らかで、知的な男性。地球人がみな、彼のような人間ばかりであれば……

いや、だめだ。どんなに大人しく見えたとしても、ペダン星を悪者扱いするのは、やはりいただけない。

何が尊い仲間達だ、そっちが先に仕掛けてきたんじゃないの。

もうすっかり被害者面なんて、ふてぶてしいにも程がある。

ペダン星を守る為に、揺らぎかけた決意をもう一度固め、再び彼女は思考する。

南極からということ、海路か空路しかない。立て続けに空港で暗殺された上で今回も空路、とは考えにくいので海路だろう。そして、表向きドロシーの輸送は成功しているとはいえ、あんなに自信満々で同じ手段を使うだろうか？ それも2名同時に。

……おそらく、海底を進む船があるのだ。ドロシーの記憶にもあつたため、間違いのない。地球人も流石に潜航技術くらいはあるらしい。

であるならば、ルートはここ……このポイントを通る可能性が高いかしら。

地球人も愚かね。この方法だけは、我々の前で最も選択してはいけなかつたのに……ペダンのスパイは、導き出した答えを早速送信する。

隣でソガがドリルドリルとやけにうるさいが、静かにしてくれないだろうか。

いかに骨伝導式とは言え、耳元でそう騒がれると、混線しないか心配になってしまう。精神安定の為に、はやくどっか行ってくれないかしら、この狂人。

彼女がしばらく耐え忍んでいると、胸元のブローチが微細に振動を伝えてきた。なんと！ 同じく地上に潜入している同志からの通信サインだ！

どうやら、何かしらの連絡事項があるらしい。

このタイミングで何かと訝しむが、丁度、目の前の隊員達の腕でも通信機が鳴る。

「ハイ、こちらだん」

「大変だ！ アーサー号が何者かに襲われている！」

「え、アーサー号!?!」

「残りのチーフを乗せて南極から到着するはずだった、原子力潜水艦だ！ 我々はハイドラランジャーで救援に向かう！」

「そうか！ このことか！」

やはり自分の見立ては間違っていないなかったらしい。

「分かりました。我々もすぐそちらへ合流します」

「ダン、フルハシ先輩、俺は一応、センターの防衛に残ります」

「分かった！ ……となると、彼女、どうする？」

「そういう事ならば、ワタシも連れて行ってください。仲間が心配です」

ようやくこの頭のおかしい男から離れられる!!

ポインターが波止場に着くと、キリヤマ、アマギ、アンヌの3人が、暗い顔でハイドラランジャーから降りてくるところであった。

「遅かった……我々が現場に駆けつけた時には、アーサー号はもう、すでに海の藻屑と



なって消えていたんだ。……乗組員は残念だったが、奴の進言通り、影武者を乗せておいたのが不幸中の幸いだったな」

「ソガの奴ア、普段は大胆な癖に、妙なところで臆病者だからなあ」

「用心深いと言つてやりましょうよ、少なくとも事件が解決するまで、チーフは南極基地を出なくて済む」

「隊長、アーサー号のことを知っているのはごく一部のものだけです。敵はどこで情報をキャッチしたのでしょうか？」

「うむ……これは本格的に、スパイがいる線が濃厚になってきたな」

「スパイがいるならアンダーソン博士の安全も、まだちゃんと確保できたとは言えないわね……」

「ん？ おい、二人とも。アンダーソンさんは一緒じゃなかったんですか？」

「あん？ ポインターで待っているように……ありや、居ない」

「……彼女が危ない！」

その頃、ポインターを抜け出した偽ドロシーは、ブローチの着信を頼りに、仲間との接触を図ろうとしていた。

すぐ近くに通信機を持った仲間が居るはずなのだ。

その割には、えらく単調な符牒の繰り返しなのが引つかかったが……  
それだけ緊急を要するという事だろう。

……まさか、ついにキングジョーを出撃させるのか！

防衛センターをあのを戦艦で破壊するならば、退避の連絡が来てもおかしくはない。

そう考えながら堤防を歩いていると、目の前で海に向かって棒のような物を構えている怪しい男と出会ってしまった。

あのサングラス、忘れもしない。ドロシーの記憶に何度も出てくるマービイとかいう男である。

まずい、逃げなくては……いや、ワタシの顔はドロシーなのだ。本物か分からない以上、そう易々と殺されたりは……

ペダン星人のスパイが逡巡している隙に、マーヴインは手にした手首のスナップを利かせ、釣竿をまるで鞭のようにふるった！

「キヤアアア!!!」

甲高い悲鳴を上げて逃げ出す、偽ドロシー。

そこに駆けつけた隊員たちがマーヴインを取り囲む。

「遂に正体を現わしたな！ペダン星人！」

飛びかかるアマギはともかく、あのフルハシすらも軽々といなした事で、こやつ只者

ではない、と全員の緊張感が高まる中、後ろから響く水音。

まるで誰かが飛び込んだかのような……

「ドロシーの服だわ！」

波間にたゆたうブランドもののコート

アンヌの言うとおりに、先程までドロシーが着用していたもので間違いない。

「この野郎！……ボクを誰だと思ってるんだ？」

男を取り囲む警備隊員。

マーヴィンは、自分に向かって銃を構えるアマギを怒鳴りつける。

「このマヌケ野郎、犯人を逃がしてしまったじゃないか！」

「えっ……犯人？」

「あの女こそ宇宙人のスパイだ。仲間を殺した犯人だ」

「アンダーソンが？ 君はいったい誰だ？」

「ワシントン基地の依頼で、ドロシー・アンダーソンを日本まで護衛してきた秘密諜報員

です」

「秘密諜報員？」

「そうです。しかし船の中で、本物のドロシーは、何者かに誘拐されてしまった……」

「しかし、彼女がスパイだという証拠は？」

ダンに問われたマーヴィンはブローチを差し出す。それはドロシーがずっとつけていたもの。

さつきふるった釣り竿によつて、一瞬のうちに奪っていたのだ！

そのブローチを分解すると、内部にはいくつかの部品が。

マーヴィンが、船の上で倒したペダン星人達から奪つたものと、ほぼ同じものである。

これを使つて、マーヴィンは偽物のドロシーを誘き出したのだ。

「これです。発信機です」

「アーサー号の情報は彼女がこのブローチを使つて……」

「ペダン星人がアンダーソンに化けていたんだ。何か変わったことはありませんでした

？」

マーヴィンに問われたダンは、護衛中のドロシーの行動を思い出す。

（そういえば、彼女いつもガムを噛んでいた。噛む音が通信の暗号に使われていたんだ。

それに気がつかないなんて、なんてウカツな……）

「なぜ、そのことを早く連絡してくれなかつたんです？」

「身分証明書もパスポートも盗まれてしまい、自分を証明する物がないんです……私は

アメリカの諜報員です。自分の力で、宇宙人を始末したかった……」

「それで本物のドロシー・アンダーソンは？」

「わかりません。殺されているかもしれない……」

事ここに至っては、本物を生かしておく必要もない。

これまでなんとか、その事を考えないようにしてきたマーヴインであったが、彼の顔が初めて不安に陰った。

「万事休すか……」

キリヤマ隊長から連絡を受けたツチダ博士が、ため息を吐くと、センターの警報がけたたましく鳴り響く！

レーダーが飛来する物体を捉えたからだ。

センターの空で、黄金に輝く四つの塊。

まるで物理法則など無視するかのように、フワフワと浮かんでいたそれらは、やがて一所に集まると、積み木の如く組みあがり、人々が呆気にとられている内に一体の巨大な人型を形成したではないか。

これこそ、ペダン星が誇る最新鋭の強襲宇宙戦艦キングジョーのコンバットモードなのだ。

《グワッシ……グワッシ……》

不気味な駆動音と共に、金色の巨人が、ついに制止不能の行進を開始した！

## ウルトラ警備隊に死ね 《前編》 (VI)

防衛センターに向けて、謎の巨大ロボットが、その二本の足で大地を踏みしめ、ゆっくりと前進を開始する。

おそらくは、つま先から頭のとっぺんまで、余すところなく金属で構成されているであろうその巨体は、片足を一步進めるだけで、あたりを揺らし、道路に亀裂を生じさせることで、自身が呆れるほどに重たい重量物である事を物語っていた。

センターの指令室で、我に返った防衛隊員がスイッチを押すと、基地を囲むように各所に配置し隠されていた、無数の自動砲台群がせり上がり、照準を黄金の巨人へと向ける。

《移動中の大型歩行機械に警告する。ただちに停止せよ！ 前進を止めない場合、攻撃行動と見なし、全ての戦闘力をもって、攻撃破砕射撃を実施する！》

防衛軍の最後通告すらも無視し、歩みを進めるロボット。もはや、目的は明白だ。

ペダン星人が、防衛センターを破壊しようと、恐るべき兵器を差し向けてきたのだ！

「目標の前進速度に変化なし」

「第二次防衛線の射程圏内に入りました」

「目標、なおも進行中！」

「……全火力、射撃開始。全力をもって、目標を阻止、撃滅せよ！」

全砲台が一齐に火を噴いた。

ありつたけの鉄と火薬で、この招かれざる会議参加者に、門前払いを叩きつける！

だが、それをまるで意に介さず、一歩たりとも緩慢な歩みを止めようとしない巨大メカ。金色に輝くスーツに身を包んだこの闖入者は、たまげる程に面の皮が厚かったのだ。まさしく鉄面皮というほかない。

「ウルトラ警備隊！ ウルトラ警備隊！ 応答願います！」

「こちらキリヤマ」

「防衛センターに、巨大なロボットが！」

「なんですって!?!」

ツチダ博士の切羽詰まった声が、敵の強さを物語る。

SOSを受けた警備隊だったが、神戸港から六甲山までは、いかなポイントと云えど時間がかかる。

このままではセンターが！

その時、四番倉庫のシャッターを突き破り、黒鉄の門番が悠然と姿を現した！

ドリルの付け根から黄色いレーザーを発射し、ロボットへの攻撃に参加するマグマラ

イザー！

履帯で荒地地をかき分けて、敵へ猛然と向かっていく！

「おお！ ソガ隊員……！ 応援が来るまで、なんとか頑張ってください！ このセンチターが踏みつぶされたら、会議は疎か、超兵器の開発すら出来なくなってしまう！」

「お任せ下さい、ツチダ博士。……さ、あなたは早く退避を！」

来やがったなキングジョー……

吠え面かかせてやるぞ！

「くらえ！ レーザーが撃てます！」

《グワツシ……グワツシ……？》

「いいぞ、砲台でマグマライザーを援護するんだ！」

「ノロマめ、避けてみる！」

「遅い遅い！ 目をつぶってても当たるぞ！」

新兵器の登場に沸き立つ防衛センチターの指揮所。

僅かに氣勢を取り戻したかに見えたが、それも最初のみ。

マグマライザーの放つレーザーすらも、金色の装甲にまったくダメージを与えられないのを目の当たりして、困惑のざわめきが広がっていく。

地球の兵器ではまったく歯がたたないというのか……？



「レーザーが撃てます！」

《グワツシ……グワツシ……!》

「無傷だ……! ちくしょう、主砲が効かない！」

「……駄目だ、あの金色の装甲を破るのは無理だ……!」

「回避しないのは……その必要が無いからだ！」

……まあ、そうね。

俺だって、いくらマグマライザーでも、キングジョーに勝てるなんざ、これっぽちも思っちゃいない。

ドリル……? 普通の怪獣ならいざ知らず、コイツ相手に歯が立つかどうか。

……でもな、このマグマライザーは、そんじよそこらの地底戦車とは一味違う!

そうだ、もつと近づいてこい……!

レーザーも効かないとなると、このマグマに残された武装は先端のドリルしかない。そんなモノはもはや脅威でも何でもないのだ。当たる前に踏みつぶせば良いのだから。

今ごろコクピットでは、ペダニウムにそんな攻撃が通用するはずがないと、高笑いし

ているんだろう。

だが、その油断が命取りになると教えてやろうじゃないか。

もう少し……そう、その池の隣！

装甲の硬さを誇示するように、地球人の無駄なあがきを嘲笑いながら歩き続けるキングシヨアの姿を、照準で捉える。

俺はレーザーの照射モードを切り替えると、先程まで愚直に狙っていた腹部から、そのまま下へ下へと視線を下げる。

今度こそ本命だ。

狙うは奴の右足……のさらに下！

ここだ、くらえ！

「レーザーが撃てますー！」

今度は白い霧のように拡散した短距離レーザーが、今しがた片足を振り上げ、軸足一本となったばかりのキングシヨアを支える地面に向けて照射される。

脚部を狙った攻撃は外れてしまったかと思われたが……

突如、地表が爆ぜ飛び、先程までは姿かたちも無かった大穴が、ぽっかりと口をあける。

《グワッシ……グワッ!?》

黄金の彫像が、ぐらりとその巨体をかたむけた。

ドシャアアアアン!!

響き渡る轟音。

片足を上げた体勢のまま、くるぶし一つ分下にストーンと落下したキングジョーは、そのままバランスを崩して盛大に転倒した。

小規模な地震を起こし、濛々と立ち上がる土煙。

「よっしやあああああ!! ざまあみさらせ、キングジョー!!!」

無敵のスーパーロボットが、地に倒れ伏すのを見て取り、指揮所でも同じように大歓声が発する。

ふっふっふ! このマグマライザーは、よくある地底戦車と同じように、普通にドリルだけで掘り進むわけではない。

超振動レーザーで岩盤を、微粒子レベルの砂状にまで分解した後には吹き飛ばし、積もった大量の柔らかい砂をドリルでかき分けて道を進む。そういう設計思想の機体なのだ!

この超振動レーザーには、ペガッサの作業員が、かつて地球を破壊するためにぶち込

んだ、地殻爆弾を分析して得られた技術が、存分にフィードバックされている……らしい。

メビウスの小説版の中でG U Y Sのアライソ整備長が言っていたんだから間違いない。完成がここまでずれ込んだのも、全ては異星の超技術を解析して、組み込むためであつて……いやほんと、アマギ最高。愛してる。

アライソのおやつさん曰く、人類初のメテオールの威力を見たか！

地球人をなめるなよペダン星人、どんなハイテクヘラクレスも二本の脚で地面を歩いている以上、落とし穴には敵うまい。人類つてのはな、縄文時代からずうっと、こうして穴を掘つては、力じや敵わない猛獣を突き落として、生き残つてきたんだ。

蛮族の石斧を甘く見たツケを払え！

……ダーク、元気にしてるかなあ……

《グワツシ……グワツシ……》

濛々と立ち込める土煙が晴れて、その姿が露となった鋼鉄のゴリアテは、両手をついて呆然としているように見えた。

その様を見て、防衛隊員達は歓喜の声をあげるが、引き起こした犯人であるソガの顔までは晴れなかった。

作戦が半分失敗した事を悟ったからである。

「……うーん、前に倒れちゃったか……」

この一見無敵に見えるキングジョーにも弱点はある。それは本物のドロシーが開発するライトンR30爆弾で破壊されるという事と……【仰向けに倒れると自力で起き上がれない】という事だ。

ぶつちやけ、ライトン爆弾が完成しない事には、オレにできる事なんて、こうしてスつ転がして時間を稼ぐことくらいだったんだが……ワンチャン後ろに倒れてくれれば、そのまま諦めて帰ってくれないかと思っていた。

もうちよつと岩盤破壊の範囲を絞って、かかとだけ踏み外させるとか出来たらよかったです……そこまで器用な事はできない。

ええい、こうなったらプランBだ！ 徹底的に嫌がらせしてやるぞ！

引き倒されたキングジョーは、あらかじめ設定されたプロセスに従って、その身を起こそうとするが、池から流れ込んだ水で段差がぬかるみとなってしまい、ズルズルと滑っている。

身を起こした後に、左脚部に力をこめて、泥の中の右足を引き抜こうとするが……

「レーザーが撃てます！」

左足も膝から泥へ沈んでいく。

再びバランスを崩して、前方へ倒れこんでしまうため、慌てて両手をつくも……

「レーザーが撃てます！」

瞬間的に岸を崩され、そのままズブリと両腕を突き刺してしまう。

そうこうしている間にも、自動砲台から雨あられと弾が飛ぶ。

「頭です！ 下がった頭部を狙うんです！」

「火力をロボットの頭部へ集中！」

罪人のように諸手について、こうべを垂れるキングジョーの頭部で、次々と爆発が起こる。まったくダメージもなく、表情を変えないこの様を、オレはどこかで見たことがある。まるで汎用人型決戦兵器のアニメに出てくる怪物だ。

だが、あのアニメと違う点は、バリアに阻まれ攻撃が届かないのではなく、当たっても装甲が硬すぎて効かない、という点。

例えば損傷が期待できなくても構わない。ロボットである以上、全身が精密機械の塊であることに変わりはないのだから。

もしかしたら、コンピューターに接触不良を起こさせて、この後のセブンの戦いを有利に進められるかも知れない。

そして、頭が下がった今なら、超振動レーザーが届く！

狙うはその、ガラスだかプラスチックだか、よく分からんピカピカ光る電子部品！

「レーザーが撃てます！」

《グワッシ……グワッシ……》

……あ、やっぱり効かないっすか。

なんでや！ 金属でも鉱石でも、地中に埋まつてる構成成分に変わりは無いだろうに

！

もういい！ 体を全部地中に埋めてやる！

マグマライザーは、超振動波レーザーが撃てるんだぞ！

「レーザーが撃てます！ レーザーが撃てますッ！ レーザーが撃てますうううッ

!!!」

……だめだ、腰のテトラポットみたいな出っ張りがつつかえて、これ以上沈まん。

あの謎部分はもしやこの為に……!?

ペダン星人は落とし穴作戦を予期していた……!?

んな訳ないか。

まあいい、お前は今、小人の国にやって来たガリバーだ。

せいぜいハラスメント攻撃に後悔するがいい。

そして願わくば帰ってくれ、頼むから。

だが、そんな俺の願いも虚しく、キングジョーの胸が怪しく煌めく。

ペダンエンジンが最大出力で稼働し、モーターのような駆動音が、キングジョーの低

く重たい唸り声を辺りに響かせる。

胸部の主機が稼ぎ出した、その驚くべきパワーが余すことなく全身へと伝達され、勢いよく両手を泥中から引き抜いた！

上半身を起こしたキングジョーの瞳がスパークすると、両目に光の粒子が凝縮され、やがて臨界に達すると同時に解き放たれる！

これぞまさしく、キングジョーに搭載された主砲、粒子兵装デストレイ！

おぞましい光の奔流が、辺り一面を薙ぎ払った！

「ぐわっー」

たったの一撃で砲台の半分以上が消し飛び、至近弾を食らっただけで、マグマライザーの車体を揺らす。

そうして敵が怯んだのを確認すると、今度は掲げた両手を、杭打機のように何度も何度も地面に叩きつけるではないか！

凄まじい馬力から繰り出されるマウントチョップの連打は、まるで地震のような衝撃を誘発し、たったそれだけで地中の配線のいくつかを破壊した。そしてその被害者として、短距離レーザーの射程内まで近づいた地底戦車も例外ではない。重たい車体が浮き上がるほどの振動を何度も食らい、存分に揺さぶられるソガ。

彼が軽く目を回している間に、キングジョーは素早く次の行動に移った。



今のは、ほんの地ならしにすぎない。これから行う脱出プロセスの単なる前準備。背面にずらりと並んだ緊急用のロケットブースターが、凄まじい勢いで噴射され、その巨体をゆつくりと、サルベージしていくではないか！

それはまるで、ロケットの打ち上げの如く。噴射を受けた地面は大きく抉れこんでしまっただけだ。

ソガが頭を捻り、一生懸命に施した戒めを、機械仕掛けの巨神は、その膨大な出力からなる完全な力技で、易々と突破してしまったのだった。

「そんなのアリかよ……無茶苦茶だ……」

ふらふらと頭を揺らすソガの眼前に、黄金に輝く手のひらが、冷たく迫る。

## ウルトラ警備隊に死ね 《前編》 (VII)

キングジョーが万力のように力強い3本指で、マグマライザーもむんずと掴んで、持ち上げる。

コックピットからドアップで見える敵の顔は、どこかとぼけたような愛嬌を感じさせるが、その中身は紛れもなく悪魔の兵器であった。

つぶらな瞳に、再び光が集まっていく。

回避不能の至近距離から、必殺の光線を直当てする気なのだ！

そんなもの食らったら、例えマグマの装甲でも一たまりもない。

「こんなところで……死んでたまるかア!!」

俺は掴んだレバーを、力いっぱい後進側へ引き倒す。

逆噴射をかけながら、先端のドリルと機体側面の削岩カッターが逆回転し、ギヤリギヤリと不快な金属音を大音量で奏でた！

チルソナイト合金製のドリル達といえど、キングジョーのペダニウム装甲には全く歯が立たず、表面を削り取る事さえできなかつたが、たった三本しかない彼の指を滑らせる事には成功する。



のである。

だが、それが一体何だというのだろうか？

横転して成す術のない地底戦車に、ゆっくりと近づくと近づく巨大な影。

黄金の魔神は今度こそ、この忌々しい黒い機体を粉々に粉碎するべく、片足を大きく持ち上げた。

地下数千メートルの圧力に耐えるマグマライザーと言えど、キングジョーの全体重と、ペダニウムエンジンの最大出力が生み出す強力無比なストンピングの前では、ハンマーを振り下ろされるダイヤモンドとそう変わりはない。

漆黒の機体は今まさに棺桶と化そうとしていた。

最悪の光景を想像し、思わず目を背けるツチダ博士。

……しかし、そうはならなかった。

その時、天空から舞い降りた、真っ赤に燃える太陽の化身が、黄金に輝く巨神の頭部めがけて、錐揉み落下の威力を乗せた強烈なキックをお見舞いしたからである！

「ダアアアーツ！」

《グワツシ！》

さしものキングジョーも、これにはたまらず、もんどりうつて倒れこむ。

空中で一回転し、その場に着地したセブンは、足元に転がるマグマライザーを両手で

大事そうに抱え上げると、センターの影にそっと退避させた。

……危機一髪。セブンはひしゃげた戦車を見て胸をなでおろす。

彼が時間を稼いでくれたおかげで、通常飛行でもなんとか間に合ったらしい。

だが、改めて戦場を見渡したセブンは、自分の判断が間違っていたのではないかと後悔した。大地は抉れ、至る所で火の手が上がり、マグマライザーはボロボロだ。

敵がセブンの予想を遥かに超えて強大であったという事に他ならない。

こんなことならば、ウルトラテレポートを使つてでも、即座に駆け付けるべきだった……彼を過信してしまつたばかりに、危うく大切な友人を失つてしまうところだったのだから。

しかし、そう自省するセブンの耳が、何かの噴射音を捉える。見れば、打ち倒したはずのロボットが、背中のブースターを点火させ、今まさに起き上がろうとしているところであった。

なんとという事だろう、あのアイロス星人すら破った技を食らつてピンピンしているなんて！ 死体が再び起き上がってくるかのような、恐ろしい光景を前に、セブンは先程の思いを撤回した。

……いや、だめだ。テレポートを使つてしまつては、とんでもない消耗を強いられる。切り札であるワイドショットを撃つことはおろか、念力を使用した様々な応用技すらも

封じられてしまいうだろう。

そうなつては使用できる技など、エネルギー効率が良い、全ての技の基本となる二種類のエメリウム光線と、アイスラッガーくらいしか残されていない。それも、ただ投げつけるだけで、念力によって複雑な軌道を描く事すらままならないはずだ。

そんな消耗した状態で、このように恐ろしい敵と戦わざるを得ないなんて、考えただけでゾツとする。

セブンは、この地球防衛という困難な使命を、ウルトラ警備隊の頼もしい仲間達と分かちあえる事に対し、心の中で改めて感謝した。その暖かな思いによって、セブンは眼前の敵に対する恐怖心を払拭し、闘争心を奮い立たせる！

躍りかかって、チョップを繰り返そうとするが、両腕でガードされてしまった上に、その勢いまかせに跳ね飛ばされてしまう。まるで大人と子供だ。

そんなセブんに興味を失ったのか、再び防衛センターを破壊するべく進みだす、ペダン星人の侵略ロボット。

そうはさせせじと組みついたセブンは、胸元目掛け、手刀で水平切りを打ち込むが、2、3歩たたらを踏ませるだけで、たいしたダメージがあるとは到底思えない。

そこへ現着するポインター。隊員達が降車すると、センターの前ではセブンと謎のロボットの戦いが、もう始まっているではないか！

「キリヤマ隊長！」

「おお、ツチダ博士！ ご無事でしたか！」

「はい、ソガ隊員がマグマライザーで落とし穴を掘って、なんとか時間を稼いでくれましたが……ハッキリ言って、あのロボットは無敵です！ 我々には打つ手がない！」

「無敵ですって？」

「……あれを、ご覧なさい」

ツチダ博士の指差す先では、ウルトラセブンが腰だめに拳を握りこみ、独特の構えをとっていた。

あの額から繰り出す素晴らしい光線で、敵を撃滅してしまうつもりなのだ！

見守る警備隊の面々は、次の瞬間、ロボットが大爆発する様を想像し、思わず口元が緩む。

この時セブンは、チブル星人のアンドロイドとの戦いを思い出していた。パワー自慢のロボット相手に無闇な肉弾戦を挑んでは、持久戦に持ち込まれ、疲れを知らぬ彼らにスタミナ勝負で勝つことは出来ない。

まずは遠距離戦で相手の出方を見る！

セブンの額から、エメリウム粒子を変換した熱線が発射された。

それは間違いなくロボットの正中線を捉えたかに思えたが……

爆発どころか、エネルギーを全身に発散され、逆に吸収されてしまったようにすら見える。

熱線は確かに命中したはずだ。周囲の池に、さざ波が広がるほどの衝撃が発生したのだから間違いない。だが、水面で揺れるロボットの虚像とは裏腹に、本体は小揺るぎもない。

バリアを張ったでも、腕で防御したでもなく、ただ突っ立って、胸元で平然と受け止めて見せたのだ！

「ウルトラセブンの超兵器が通用しないなんて……恐るべきロボットだ……！」

普段は冷静沈着なあのキリヤマ隊長でさえ、思わずたじろいでしまう。

これまでセブンの勇姿を眩しく見ていた人類にとって、それほどまでに衝撃的な光景であった。

しかし、真正面でその姿を見ていたセブンには、また違った事実が見えていた。

なるほど……胸か！

先程のエメリウム光線は、確かに奴の胸部に一度吸い込まれてから、全身に拡散していったように思う。

そういえば、あのアンドロイドも弱点は胸の回路だったはず。

やはり、重要な回路やエンジンを搭載するならば、大きくスペースを確保できる胸か



頭に搭載することになるのだろう。ならば……狙うはあの、光を放つ電子部品だ！

セブンは意を決して、敵の懐に飛び込み、金色の装甲に唯一覆われていない胸や頭部の透明なパーツに目掛けて、マシンガンのようにパンチを打ち込んだ。このロボットは、あのアンドロイドのように素早い動きが出来ないらしい。かつては全て防がれてしまったが、今度ばかりはその攻撃が全弾命中する！

……だが無情にも、セブンの剛力ですら、その部分を叩き割る事は出来なかった。

それもそのはず、セブンが知る由もないことであるが、キングジョーの風防は、ウルトニウムとのコランダムで作成された特注品だったのである。

そもそも、この無敵戦艦が建造されることになったのも、このパーツの原料として、上記のコランダム……言わばウルトニウムルビーやペダニウムサファイアの人工精製技術が確立されたからという経緯がある。

ペダニウムエンジンは、光エネルギーを吸収して、圧倒的な最大出力と、常識外のエネルギー効率とを叩きだす、まさに魔法の釜であったが……その代償として、一定水準以上の光量が必要とし、密閉された暗室などでは本来の半分程度の出力しか出ない、というのが兵器転用するうえでの致命的な欠陥であった。

遮光ができないという事は、最重要の機関室を装甲で覆い隠す事が出来ないという意味であり……通常の強化ガラスやプラスチックで覆ってしまったては、せつかくの全身ペ

ダニウム装甲がまるで意味をなさない。

硬度と靱性を兼ね備えた宇宙ルビーとサファイアを多重構造で重ね合わせるといって、ブレイクスルーがなければ、このキングジョー級戦艦『キングジョー』が、大地に立つなど永久になかったであろうことは、間違いない。

キングジョーの胸奥で、ベダニウムエンジンが七色の光をきらめかせ、セブンの体を放り投げる。

膝立ちになった赤い巨人を追い詰め、上段から拳をハンマーのように振り下ろすが、なんとかそれを両手で受け止めるセブン。

だが、このままでは押し切られる！

今度は柔良く剛を制するため、フルハシ直伝の一本背負いを決めようとするが……

金属の塊でできた体はまったく浮き上がる気配を見せず、セブンが何度力をこめてもビクともしない！

「奴は重いのだよ！……呆れ返るほど重いのだよ！」

まるで山でも背負っている気分だ……やがてセブンのスタミナが切れるのを見計らって、今度はその重さを武器に、倒れた敵へボディープレスをしかけるキングジョー。地面を転がって回避するセブン！

あわやプレス機にかけられるところであった……

……しかし、これから一体どうすれば！

ウルトラセブン危うし！

ウルトラ警備隊の前に突然姿を現した、恐るべきスーパーロボットの正体は何か？  
セブンは果たして勝てるだろうか？

勝て、ウルトラセブン！

頑張れ、我らのヒーロー！

## ウルトラ警備隊に死ね 《後編》(I)

ロボットに背負い投げをかけようとして、逆に倒れてしまったセブンを見て、アンヌが悲痛に叫ぶ。

「奴は重いのよ！……呆れ返るほど重いのよ！」

セブンをプレスにかけてまっ平にしてしまおうと、のしかかりを目論んだロボットであつたが、すんでのところでセブンに攻撃を躲され、のそのそと体を起こす。

それを見ていた警備隊の一人が、ハツとした表情で呟いた。

「……重い？……そうか！」

「おい、どうしたつてんだよ？ アマギ」

「隊長、僕にポインターを貸してください。考えがあります！」

「あのロボットの攻略法が分かったのか……？ 言ってみろ」

「はい、セブんに足払いをするように呼び掛けるんです。ポインターのスピーカーで」

「なに、足払い？ 転ばせるというのか！ あのロボットを」

「ハ、ペダマン星人の侵略ロボットは、恐るべき重装甲で守られています……それこそが奴の泣き所でもあるんです。見て下さい、あの動きを！」

彼の言う通り、今まさにセブンとロボットが、双方の態勢を立て直しているところであつた。

「あのロボットは、人体を模して造られている割に、その手足の可動範囲には明らかな制限があります。さながら、甲冑を着込んだ人間のように！」

言われてみれば、その差は明白だつた。セブンが軽やかに後転しつつ、即座に立ち上がつて構えをとるのに対し、ロボットは両手をついて、今ようやく膝を立てたばかり。動きの緩慢さが目立つ。

「ソガ隊員が、落とし穴によって時間を稼ぐことが出来たという事は、つまりあのロボットは、転倒に対してまるきり弱いという事です。中世の重騎士は、一度転ぶと自力で起き上がる事が出来なかつたと聞きますが……奴の構造を見る限り、あれでは仰向けに倒れたら、二度と再び立ち上がる事は出来ないでしょう！」

アマギの観察眼は、二体の巨人が組み合う様を見て、ロボットの構造的欠陥を大まかに見抜いていたのだ。

そして、ソガ隊員の活躍によって、その仮説は半分ほど証明されている。

……しかし。

「……駄目だアマギ隊員。奴の背中にはロケットが束になつていて、凄まじい威力のジェットで、体を起こしてしまふんだ。私はさつき、それを見ていた……間違いない」

「チクショウ！ やっこさん、自分の弱点は、こっちに言われなくても、よおく分かっているってわけか！」

「もしかして、あのクレーターがその噴射跡ですか、博士？　なんてすごい大ききなの……！」

戦いを始めから見ていたツチダ博士によつて、驚異的なメカニズムが明かされる。

折角の作戦も通用しないのだと。

……だがそれに対し、当のアマギだけは、じつと押し黙っていた。

それは仮説を否定されたからではない。その証拠に、大きなクレーターを見つめる瞳には、諦めの色が一切見えないではないか。

冷静に、新たな情報を吟味し、計算していたのだ。

「……いえ大丈夫、いけます。むしろ安心しました。奴らが対策をとっているなら、当たりと言えるでしょう……そしてその方法は、そう何度も使える手ではない」

「どういう事だい？　アマギ君」

「あの巨体を、ジェット噴射だけで持ち上げるといふ事は、相当なエネルギーが必要になるはずです。なにせあの重さだ……あと何回、起き上がり小法師でいられるかな？」

「……そうか！　それで奴はずっと、セブンの上を取ろうとばかりしているんだな!？」

「いったん寝技に持ち込んじまえば、そんな心配はいらない！」

「じゃあこっちは、逆に何度もジェットを噴かせて、燃料切れに追い込んでしまおうということね？」

「……古来より、堅牢な城塞を墮とすなら、兵糧攻めと相場はきまっている……よし、行け！」

「了解！」

キリヤマがポインターに向けて顎でしゃくると、我が意を得たりとばかりにアマギが飛び出していく。

そしてウルトラガンを抜いた隊長は、残りの二名へ向けても指示を出す。

「フルハシ、アンヌ。我々は散開して、アマギを援護する。……閃光弾でもなんでもいい、とにかく奴の気を逸らすんだ！ なんとしてでも、ポインターへ近づけさせるな！ 行くぞ！」

「了解！」

走り去り、どんどん小さくなっていくブルーグレーの背中を見送り、マーヴィンは肩を竦めた。

ウルトラ警備隊……宇宙人のスパイをまんまと逃がし、とんだマヌケ野郎ばかりだと思っていたが……

このような、一見無謀な作戦に、素面で命を懸けるなんて。

「クレイジー……」

「……私だ。今からウルトラ警備隊が、セブンに作戦を伝えに行く……生き残っている砲台を総動員して、あのロボットへ攻撃を仕掛けてくれ。破壊光線の的にするだけいい。彼らを死なせてはならない！」

「ミスターツチダ……日本人は皆こうなのですか……？」

「いいえ……人種は関係ありません。この会議は地球を防衛するために開かれます。ならば、その参加者はみな、本気で地球を守ろうとするからこそ、資格がある。それだけの事です」

「そうですか……」

通信機に向かって、整備チームの編成を叫ぶツチダ博士。科学者たる身でありながら、彼もまた、一歩も引かず、この場で自分にできる戦いを見つけようとしていた。

その様子を見て、普段はサングラスに隠されているマーヴイン捜査官の茶色い瞳が、穏やかな光を湛え、眩しそうに細められる。

「ではその護衛が、一人だけ招待状を貰っていないとなれば、ドロシーに恥をかかせる事になりますね……！」

そう言つて異国のエージェントは、短く自嘲ぎみに笑つたかと思うと、懐から発煙筒を取り出し、それを招待状代わりに握りしめ、紛糾する会議の輪に加わっていった……



アンヌが、キリヤマが、フルハシが、散らばった瓦礫と瓦礫の間を転々としながら、手にしたウルトラガンや閃光弾、果ては手榴弾での肉薄攻撃を行う。

ツチダ博士率いる研究スタッフ達が、一つでも多くの砲台を蘇えらせようと、電気系統の修理に走る。

マーヴィンが、握りしめた発煙筒を振りかざしながら、地球最強の豆鉄砲を乱射する。発煙筒からモクモクと立ち上る赤い煙は、無敵の巨人から見れば、余りにも小さな反撃の狼煙だったが、紛れもなくこれが、今の彼らに出来る精いっぱいであった。

……ああ愚かなり、地球人。

これが、理性のない野生怪獣相手であれば、光や音、不快感に釣られ、なんらかの反応を見せたかもしれない。

だがこのキングジョーは、恐ろしいモンスターであると同時に、優秀な兵器なのだ。コックピットで失笑が漏れる。

彼らの行動が全て、陽動目的であることは明白。

もはや見え見えの挑発しか、とるべき選択肢のない地球人の姿は、滑稽を通り越して、哀れですらあった。

その蛮勇に対し、せめてもの礼儀として、唯一、おもちゃの中では火力の有りそうな砲台群に向けて、主砲で応射しておく。

どんな小さな反抗の芽も、残さず摘み取っておくに越したことはない。

脅威を完全に取り払ってから、再びセンターを破壊するべく前進する弩級戦艦。

後ろから甲高い金属音が響くが、おおかた、あのM78星雲人が、実体剣を投げつけてきたのだろう。

背面装甲ならば薄いとでも思ったのか？ ……ばかめ、このキングジョーに死角などない！

司令官が、艦を取り囲む有象無象に対して下した判断は……無視。

当たり前だ。ペダン星を脅かしうる兵器を、開発できるかもしれない工廠を、完膚なきまでに叩き潰す事こそが、作戦目標なのだから。

地球人共の花火を楽しんでいる暇などない。

無情な事に、ウルトラ警備隊決死の攻撃をもつてしても、スーパーロボットの注意を引くことは叶わなかった。

……ただ、本人たちの迷惑とは裏腹に、ある一つの絶大な効果を生んだ。

あまりに支離滅裂な攻撃は、ロボットの足元を走り抜けていく四角い車両すらも、破れかぶれの陽動の一つなのだ、用心深いペダン星人に誤認させたのである！

アイスラッガーを弾き返されたセブンは、もはや一刻の猶予もないと、全力の飛び蹴りをかます為、今まさに走りこもうとしていた。

そんな時、金色の巨神の足元から、ひよっこりと、見慣れた銀の車が顔を出したのを見て、さしものセブンも我が目を疑った。

……なぜこんな戦場のど真ん中に、ポインターが!?

しかも、眼前の敵には目もくれず、一直線に自分の方へと向かって来るではないか。スピーカーで何事かを叫んでいる。これは……張り上げすぎて裏返ってしまっているが、間違いなくアマギ隊員の声だ!

「セブーン! 奴に正面から挑んではダメだ! 脚だ! 脚を狙って引き倒すんだ!」

「……ジュワッ!」

……なるほど、僕に助言をしようというのか。

動きが遅い敵の近くに立って、ウルトラチョップ主体の、素早い立ち回りで手数を稼ぐ算段だったが……それは間違いだったらしい。

それにしても、引き倒せとはどういう事だ?

確かに奴の重心は高く、足元を崩せば倒せなくはないだろうが……もう一度、ジェツトで起き上がられてしまうのでは……?

セブンは少しの間、そう逡巡したが……大きく頷きを返すと、姿勢をめいっばい低くし、侵略ロボットの右膝に向けて、渾身のタックルをお見舞いするべく地を蹴った。

あのアマギ隊員のいう事に、間違いなどあるものか！　今までも……そしてこれからも！

そうして、仲間を信じる事に決めたセブンは、真つ赤な砲弾となつて、怪物の膝裏に全身でぶち当たつた！

ぐらり……と、合体ロボットの金字塔が、ゆつくりと巨体を傾いでいく。

これが、キングジョーにとっては、この地球における、都合三度目の耐震試験であつた。

## ウルトラ警備隊に死ね 《後編》(II)

「損害状況知らせ！」

「ペダニウムエンジン、稼働に問題ナシ、ただし、機体内部に0.7%程度のダメージを認む」

「なんだとー！」

キングジョーのコックピットでは、旧式戦闘服に身を包んだペダン星人が、苦虫を噛み潰していた。

腹部パーツへ收容された母艦が、そのまま艦橋代わりになっているため、例えばキングジョーがどのような態勢をとろうが、反重力ジャイロによって操縦室は常に水平を保つ構造になっている。なので転倒によって、乗員が目回してしまおうという事はないのだが……座席に座っている男の不満は、また別の部分にあった。

彼こそ、銀河系方面作戦群を率いる司令官であり、このキングジョーの艦長であり……究極機神の生みの親の一人であるのだ。

まだペダン星が、有り余る金属資源を満足に使用できず、大部分を生体部品で補うしか無かった頃の産物である旧式戦闘服は、それを着込む彼が、歴戦の勇士だという、何

よりの証左であった。それも叩き上げの。

そんな彼は、先程の攻撃が、キングジョーにもたらした効果があまりに大きく、自分の試算を狂わされているのが我慢ならなかったのだ。

「……やはり重力制御機構の不備か？」

「ええ、今の攻撃に対しても、軽減率はわずか9割程度に留まっています。復元に使用する推進剤の必要量も、当初想定されていた以上の消耗率ですし……概算では、あと数回の転倒にしか耐えられません」

「……ええい、往生際の悪い種族だ！ 忌々しい！ 環境数値の入力誤差が、これほどの影響だとは……」

キングジョーの姿勢制御は、分離時の反重力推進を活用して、どのような攻撃、反動にも逆方向のベクトルを入力する事で直立不動を保つという、艦長肝入りのシステムによつてなされていた。

この機構は、理論上あらゆる環境下での格闘攻撃を可能にする、素晴らしい方式だったのだが……半面、非常に緻密なデータ入力を前提としていた。

このキングジョーはなんともまだ、試作段階である。既に2星系の制圧作戦に実戦投入され、目覚ましい戦果を上げたために、量産も決定してはいるが……姉妹艦が多数の星で実地試験の真っ最中なのだから、データ不足も致し方あるまい。

今回はこの数週間で得られた地球環境の予測値を仮入力して、作戦に当たったが、それでも実測値との差は如何ともし難いようだ。

もつとも、ほとんどの星はキングジョーの装甲と火力に成す術がないと分かると、即座に降伏を選択できる賢明な星ばかりだったので、このように生き汚い種族と戦わされたのが不幸ともいえる。

キングジョーはハード的にもソフト的にも、地球重力下での戦闘にとことん不慣れであつた。

「……仕方あるまい。撤退準備に移れ」

「よろしいのですか……？ まだ作戦目標は健在ですが……」

「作戦目標……？ 何をいつている。キングジョーの陸上での実地稼働試験は成功だ。主砲の威力が想定以上だったために、試験に使う敵戦力をうっかり壊滅させてしまったので、今から前線基地に帰還するのだぞ？ 今回得られたデータを再入力し、万全を期したところで……ようやく作戦開始だ。……そういえば試験場にM78星雲人が乱入するという事故もあつたしな」

「ははあ……なるほど」

恐らくこのまま戦えば、あの兵器工廠はいずれ粉砕できるだろう……だが、少なくともキングジョーも補給と整備の為に、母星へと帰還せねばなくなる可能性がある。

装甲に傷ひとつ付けられないような技術後進惑星の拠点を潰しに行ったものの、転びまくって推進剤を浪費しました……と言うのと、あくまでデータ取りの実験のつもりが、片手間に敵を壊滅させてしまいました……では、どちらが新兵器の報告書として読みたいか？

艦長の対面で恭しく頭を下げた副官も、同じく旧式戦闘服。彼の思惑など、わざわざ説明せずとも理解できるくらいには付き合いが長い。

セブンとウルトラ警備隊が固唾をのんで見守る中、仰向けになったペダン星人の侵略ロボットは、手足をピツタリと揃え、即座に四つのパーツに分離すると、あつけにとられる地球人たちを置いて、空の彼方へ消えて行った……

セブンは後を追跡するか迷ったが、なによりも先に、大切な仲間たちの無事を確認したいと、ダンの姿に戻る事にする。

……それを差し引いても、彼はひどく疲れていたのだ。間違いなく激闘であったと言えるだろう。

こうして、無敵のスーパーロボットによる襲撃の第一幕は、用心深いペダン星人側の妥協によって、辛くも痛み分けとなったのだ……



とある部屋の中で、二人の女性が静かに読書をしていた。読書と言っても、本では無く電子端末だったが。

画面に散らばる文字を、蒼い瞳で追う彼女らは、二人ともまったく同じ顔をしていたが、片方だけは、口の中で忙しなくガムを噛んでいたのも、全くの無音という訳でもなかった。

そんな沈黙を先に破ったのは、行儀の良さそうな……つまり、地球人のドロシーアンダーソン博士の方である。彼女は、端末から顔を上げると、何も含んでいない口を開いた。

「……ねえ、ひとつ聞いても良いかしら?」

「なあに、ドロシー?」

「さつきから、誰とお話しているの?」

ドロシーの問いかけに、行儀の悪い方……つまり同じ顔をしたペダン星人が固まる。

「……いやねドロシー……アタシは誰とも会話なんかしてないわ。今ようやくアナタと喋りだしたところよ?」

「本当に? アナタが帰ってきてから、ずっと噛んでいるそのガム。咀嚼音に一定のり

ズムと強弱があるわ。その法則性は言語パターンによく似ているから……ワタシ、お話の邪魔しちやいけなと思うって、ずっと黙っていたのよ？ それなのにアナタったら、喋りどおしなんですもの……ようやくアナタの母星に、地球人は危険なんかじゃないって、伝えてくれる気になったのね？ ねえ、仲間外れになんかしらないで、ワタシにも教えて？ 貴方の星の言語なの？」

「……いいえ、違うわ。お好きに喋ってどうぞ。ご遠慮なく」

「……あらそう！」

明らかかな嘘で、にべもなく断られたドロシーは、ムスツとした顔で不満を露にするが、それもつかの間、再び笑顔になって、ずっと気になっていた質問を投げかけた。

「ねえ、アナタのお名前は、一体なんて言うの？ 地球人では発音できなかつたりするかしらっ？」

「……名前ですって？ アタシの？」

「ええ、そうよ。ずっと気になっていたんだから」

「……呆れたわ。アナタ、自分がどんな目に遭わされているか忘れてるんじゃないかって？」

「でも、それは悲しい誤解のせい。アナタとワタシは、もうとっくにお友達じゃないの！」

「お、おともつ……!? ……ハア、ぜつたい教えてやらない。なにせオトモダチなんかじゃないですからね」

「じゃあなんて呼べって言うの!」

呼称が分からないのでは、会話のしようがないではないか。

だが、悔しがるドロシーに、フンと鼻を鳴らし、意地悪く告げるペダン星人。

「好きにしたら?」

「……じゃあドロシーね!」

「は?」

「あなたが最初に言ったんですものね、ゴメンナサイ。忘れていたわ。ドロシー?」

「アナタねえ! ……もういいわよ、そうよ、アタシはドロシー。ドロシーアンダーソン。これで満足?」

意趣返しがあまくいったのでコロコロと笑うドロシー。アンダーソン。

それを呆れ返った表情で、だが、どこか満更でもなさそうに苦笑するドロシー。ペダンは、心の中でそろそろ彼女につっけんどんにしないでいいだろうと考えていた。

なにせ、地球と敵対する必要はもはやないのだから。……あのM78星雲人の出現が、彼女にそう思わせ始めていた。

あの時水中へ逃げ込んだ彼女は、小型酸素ボンベを使い、その場でじっと息を潜めていたのだ。

その後、キングジョーの襲撃に対応するため、ウルトラ警備隊は六甲山へ向かっていったが……

なんと、逃がしたスパイを探すという名目でその場に残ったモロボシ隊員が、メガネ型のデバイスを使って、セブンの姿に変身するのを目撃した。

あまりの驚きに、あやうく溺れかけたが……ある意味で納得した。

あの隊員だけは、やけに紳士的だったりしたのも、正体がM78星雲人ならば不思議でも何でもない。

彼らは全宇宙で最もお人よしで、お節焼きの変人集団なのだから。

やっぱり、地球の男もペダン星と大差ないのね。

少々残念ではあるが、この事実には、また違った趣がある。

M78星雲人が地球人の味方をしているという事は、彼らに侵略の意図が本当にならないのではないか……？

光の国の住人は、頭に光の粒子でも詰め込んだかのような種族——どうしてあんなのが、ペダン星より優れた科学力を有しているのか理解できない——で、他者の言葉をすぐに信用する悪癖がある。

だが、彼らは純粹であるが、馬鹿ではない。

一定期間、地球に滞在し、生活に溶け込んでいるという事は、地球人がどのような感情を有しているかくらい流石に見抜けているだろう。

宇宙警備隊は他者への侵略を許さない。ましてや加担するなど、絶対にありえない。

どんなに有難迷惑で、一部の種族から蛇蝎の如く嫌われていようが、その彼らから見ても、この一点だけは全宇宙から信用されている。大人も子供も、悪人からバクテリアに至るまで、全ての知的生命体が知っている、ゆるぎない宇宙の真理であった。

であるならば、あの赤いM78……この地球ではウルトラセブンと呼ばれているらしい彼が、守護する地球とは、信頼に値する星なのでは……？

技術主任の心は、暖かで幸せな、輝かしい選択へ傾きつつあった。

## ウルトラ警備隊に死ね 《後編》（Ⅲ）

「そうだわドロシー、ねえ、全部読んだかしら？ 他の惑星人が、地球の創作物に対してどんな感想を抱くのか、とても興味があるわ」

「感想？ ええ読んだけど……」

おそらく彼女が言っているのは、脳内に完全記憶していた御伽噺の事だ。

あまりにも不自然な描写が多すぎるが、まあ子供の無頼を慰めるには、あれくらいで丁度よいのかもしれない。

「ブリキ・サイボーグがその性能を活かして、敵のミュータントをバラバラにしてしまうシーンは良かったわ。あと、植物性廃棄物人形が立てる戦術も、あの世界の中ではそれなりだったんじゃないかしら。彼らの部隊の中で、最も賢明だったのは、愚者を自認する人形、というのの中々に哲学的な訓示を含んでいるわね。」

「うんうん、他には？」

「あーその、こう言っただけだけど……あの肉食性大型哺乳類の存在は必要だったのかしら？ 敵司令官の持つデバイスの使用可能回数は3回で、一度目はサイボーグ、二度目は人形、今度はずいと思ったら、その二人が毒性昆虫に完全な耐性を持っている

のは……物語として、どうなの？」

「でもその後、ウインキーズを追っ払ったじゃない」

「捕虜になっていたエメラルド城の兵士たちは、元々が弱卒だった訳でしょう？　ブリ

キ・サイボーグの性能なら、十分に対処可能だったのではないかしら」

なんなら、彼女の密かなお気に入りキャラクターの活躍シーンを、もう一つ増やしてくれば良かったのに。ブリキ・サイボーグの大立ち回り……

実はドロシーが大騒ぎするだろうから言わないが、彼女の脳内にあった、映像作品の方も、こっそりと見た。あちらでもブリキアックスと、廃棄物頭脳は大活躍であったが……正直、主人公のペットの方がよほど優秀だった。だいたいどちらも四つ足の肉食哺乳類という点で、アイデンティティが被っている。

しかし、技術主任が率直な感想を述べると、ドロシーはため息を一つついて、さらに非常に腹ださしさを煽る顔でこういった。

「……まだまだね」

「なんですって？」

「臆病ライオンこそが、あの旅のキーパーソンだというのに……ペダン星との友好条約が締結した後で、ワタシがみっちり教えてあげる」

「……遠慮しておくわ。今後、創作の話も禁止」

「そんな！　ねえ怒らないで……ただでさえ科学分野の質問を禁止されたのに、その上、好きな作品について語るのも駄目だなんて、ワタシにどうしろって言うの……？」

そう、実はドロシーはかなり早い段階で科学分野に関する質問を、技術主任から禁止されている。

敵勢力の技術レベルを探るスパイの容疑を掛けられたいの？　という技術主任の言葉を守っているドロシーだったが、実情としては彼女の質問攻めにペダン側が辟易していたからである。

なにせ……と、ここでドロシーのブレイクストーリーミッシングを追っていた技術主任は、ある数式に目が止まった。

彼女の脳内には、こういった化学式が無数に散らばっているが……ほとんどは地球の物理影響下での分子のふるまいを基にしているため、あまり馴染みのないものが多い。

だが、稀に技術主任にとっても、どこかで引つ掛かりを覚えたり、逆に驚かされてしまうような知識が含まれている。

それらをサルベージし、地球側と友好を結ぶ際のメリット、と報告する材料として使おうと考えているのだ。

その数式も、そんな貴重な化学式の一つであった。技術主任もどこかで見たような……とても既視感がある。だが、判然としない。おそらく式が構想段階で、未完成だか



らではないか？

「ねえドロシー……この数式は何？ アナタの研究中のアイデアかしら？」

「どれのこと……？ ああ！ これね。そうよ、放射能をもつと平和利用できないかと思つて……それは金属加工に活かせないかと考案中の式だわ」

現在、地球上で放射能は武器やエネルギーとして、あらゆる場面で使用されているが……その残留物も問題視されている。そこで、そういった汚染物質を、平和的に利用できないか？ というのが、彼女の本来の研究テーマであった。

その概要を軽く聞いただけで、技術主任の頭でピースが嵌つていく。モヤモヤしていたのが一気に晴れ、思わず嬉しそうな声が漏れた。既視感があるのも納得だ。

「……ああ！ なるほど！ ライントーン工法ね！」

「ライ……トーン？」

「正確には『境界面周波調整法』の事よ」

技術主任は、まだぼかんとしたドロシーの顔にクスリとさせられながら、優秀な後輩へ得意げに話し始めた。

「金属境界面が持つ固有の周波数に、同調する放射線を浴びせて、その状態を不安的にさせてしまう加工技術なの。これが発見されてから、ペダン星の発展は飛躍的に高まったわ。アタシたちの星で産出されるペダニウムはね、非常に高い剛性を持つだけでなく、

化学的な安定性も驚く程に優秀な金属なの。でもその分、通常の方法では折り曲げる事は疎か、満足に精製加工も出来ないという事で、ずっと死蔵されてきた……でもこの方式で、まるで世界が変わった！ ライントーン30。どんな子供でも、歴史と化学で一番最初に習う数字よ。たいていの超硬物質に効く魔法の言葉。アナタの式だと……ほらこの部分に数値を代入してみて？」

「……すごいわ！ 温度上昇をほとんどさせる事無く、チタンの加工をこんなに容易く……えつと……この理想値に最も近い物質は……」

「……チ、タン？ ……これか……ふーん、確かにペダニウムによく似た挙動をするみたいだけど……地球の物質って、どれもこれもこんなに脆いのね？ これじゃあ発展が遅いのも納得だわ」

「最外殻電子が閉殻だから……化合物の生成に必要なエネルギー……センターのイオンディスプレイならギリギリ足りるかしら？ うーん……微量すぎる……」

こんな調子で、ひとつたび科学の話をするると、双方が白熱してしまい……後で冷静になった技術主任が頭を抱える事になるのだ。だから禁止した。

顔は同じでも、自身の感性が少しズレた彼女たちは不思議と相性がよく……地球風の言い回しをするなら、たまたま『馬が合った』のだろう。

そういうえば、自分にもそろそろ姪ができるのだった。

姪が成長すればこのような会話をするのだろうか……

ぶつぶつと計算に没頭するドロシーの頭脳は今、激しく活性化し、ストリーミング速度も先程までの比ではない。

こんな初歩的な知識でこれだけの結果が得られるなら、しばらくは時間が稼げそうだと、ほくそ笑む技術主任の耳に暗号通信が飛び込み、次なる指令が下った。

——再び地上に赴き、M78星雲人と接触せよ——

隊長から、基地の防備とペダン星人の搜索に当たるよう、警備隊に命令が下った。

マグマライザーから救出された俺は、目を覚ますと早速その足で進言に向かう。

「……ソガ！ 大丈夫なのか？ 高度50メートルから、パラシュートも無しに垂直落下したのと同じなんだぞ!？」

「それについては、自分が一番びっくりしてるんです……アマガのエアバッグはすごいですね！ あとコックピットの周りも衝撃吸収材でパンパンにしてあるとか……いや、助かりました」

「だめよ、寝ていなくちゃ!」

「いや、アンヌ。呑気に寝てる場合じゃないよ。なにせ俺どころか、セブンが手も足も出なかつたんだろ？ そんな相手は素早く見つけて先手を取るのが、なにより先決だ」

「なにか、心辺りがありそうな口ぶりだな……？ 今回もお前の推理を聞かせてくれ」

「はい、隊長！ 海軍に協力を要請してください。あれから、この西の海にも、マックス号のような原子船がいくつか配備されていたはずですよ。その他の艦艇も総動員して、海底をしらみつぶしにするんです！」

「なに？ 海底だと？」

「……はい、敵が隠れているのは、恐らく海です。あれほど大きなロボットを、例えば分割しても山に隠せば必ず人目に付きます。その証拠に、偽物のドロシーは海へ逃げ込んだそうじゃありませんか。空港に着いた代表にはスパイで狙撃したくせに、アーサー号はあのロボットで撃沈したというのも、奴らの潜伏先が海だという可能性を示唆しています」

「ふむ、なるほど……」

「ロボットが飛び去った方角を計算して、神戸港からその直線上をなぞれば……」

「敵が再度襲撃をかけてきても、早期に発見できる、と……よし！ 我々が空と地上からセンターを監視する間、海を見張ってもらおうよう頼んでみるか。回線を繋げ！」

一戦目は失敗した。だから勝負はこの二戦目だ……しかし……

海軍へ捜索手順を打ち合わせに行くため、白い海軍制服をイソイソと着こむ俺は、ただ決断を迷っていた。

だが、俺の逡巡を余所に、各警備隊員が各々の持ち場を見張る中、ダンには神戸ポートタワーから、波止場を歩くドロシーの姿を見つけるのだった！

## ウルトラ警備隊に死ね 《後編》（Ⅳ）

暮れなずむ神戸の波止場で、男女が夕日をバックに見つめ合う。

映画やドラマでよく見るロマンチックな光景だったが、たった一つ、常とは異なる点がある。それは見つめ合う二人の正体が、紛れもなく宇宙人同士であるという事だ……

「さすがはペダン星人だ。我々をまんまと罠に陥れるとは……」

「ウルトラ警備隊に、宇宙人がいるとは、知らなかったわ……ウルトラセブン、どう？」

「アタシたちの味方にならない？ ……地球ははずれ、アタシたちのモノだわ……その方が、身のためよ？」

「断る！ ……ぼくは、地球の平和を守るために働くんだ」

「地球が平和なら、他の星はどうなってもいいというの？」

「地球人は、ペダン星を侵略するつもりはないんだ……あのロケットは、単なる観測ロケットだったんだ！」

「観測？ フン、いかにも立派な名目だわ。でも、何のための観測なの？ ……それは、いずれ自分たちが利用するために、やっていること。その手には、のらないわ！」

「そうじゃない！ 我々地球防衛軍の本当の目的は、宇宙全体の平和なのだ！」

「そう考えているのは、ウルトラセブン、あなただけよ」

「なに……?」

「人間は、ずるくて、よくばりで、とんだ食わせ者だわ。その証拠に、防衛センターでは、ペダン星人を攻撃するために、ひそかに武器を作っている」

「それは、お前達が地球の平和を乱すからだ」

「それは、こつちのいうことよ!」

ドロシーの見せた剣幕に、思わずたじろぐダン。

先程まではどこか、用意されたお題目を喋っているかのような余裕を見せていたが、今この瞬間、彼女は確かに自分自身の言葉で話しているようだった。彼女の抱く不満や怒りが、テレパシーを使うまでもなく伝わってくる。

「他人の家を覗いたり、石を投げたりするのは、ルールに反することだわ!」

「……なるほど、地球人も確かに悪かった。こうしよう、僕は今度の事件を平和に解決したい。ウルトラ警備隊はペダン星人と戦うための武器の研究を中止する。その代わりに、ペダン星人も地球から退却して欲しい!」

「宇宙人同士の約束ね」

「そうだ!」

「わかったわ、あなたを信じることにする」

無言でうなづくダン。

「アタシたちの誠意の印として、本物のアタシ。つまり、ドロシー・アンダーソンを返すわ」

ウルトラセブンの不介入どころか、停戦協定の足掛かりとなりそうな協力まで取り付ける事ができた。

上々の成果に、技術主任は意気揚々と引き上げて行つた。

あとは、自分が纏めた報告を提出するだけだ。

「ハツハツハ！　そうかよくやった！」

司令官は、スパイとして潜入している、技術主任から提出された報告書に目を通しながら、それをもたらしした副官の報告を上機嫌で聞いていた。

流星はジーアンダ技術開発棟の主席。

素晴らしい成果だ。

M78星人を油断させただけでなく、地球人の動きを止める工作を完了し、その上、この惑星の独自調査結果まで！



レポートに添付されている画像には豊かな自然と芸術。それに優れた実弾兵器の数々が記載されていた。

地球の実弾兵器は、射線を特定され難く、威力の高すぎる光線銃よりも時として潜入工作に適していると、実働部隊の戦士達からも報告が上がっている。

既に何名かは、鹵獲したライフルを使いこなし、作戦に当たっているようだ。

なるほど、この星の技術から得るものも、それなり以上。

なにより……

「こんな美しい星ははじめて見た！ 必ず手に入れて見せるぞ！」

「では攻撃の開始の指令を出します」

去っていく副官の背中を見つめて、司令官はもう一度、報告書の写真に視線を落とす。た。

これを纏めた技術主任と同じくらい、実はこの司令官も芸術を好んでいる。征圧した星々の民芸品、たいていは壺のような土器が中心だが……それらを密かにコレクションしているくらいだ。

だが、その自慢のコレクションよりもさらに、今の彼が、背中からクレーンを伸ばす程に求めていたのは……輝かしい功績であった。

なぜならその理由は、彼が『男』だったからに他ならない。

最近はその傾向が薄れてきたとは言え、かつてのペダン星、彼が軍に入隊した頃などはまさに、まだまだ非常に強烈な『女性中心社会』の真つ最中であった。

軍や政府、研究機関の重要なポストは軒並み女性が席巻し、どうしたって遺伝的に優秀な頭脳で、星の方針について議論を重ねている間、男はその体力を活かして、前線や労働で文字通り女の手足となって働く。

それが昔ながらのペダン星だ。

彼が今、一方面軍の司令官等という、一昔前ではとても考えられない地位に収まっているのも、ひとえに時代と、彼自身の並大抵ではない努力のおかげであった。

『男のくせに生意気な』と、どんなに後ろ指をさされようが、あの日、戦火に倒れる戦友に誓ったのだ。「自分が軍のトップに立って、いつかこの星を変えてみせる！」と。

……そしていま、あと少しでペダン星初の『男性総司令官』に手が届くという所まで来た。

その為には、このキングジョーの華々しい戦果が必要となる。

今更、こんな遅れた星と同盟を結んだ所で、功績と認められよう筈がない。

長年小康状態の続くナツクル戦線を終息させるくらいでなければ、彼の望む椅子には届かないだろう。

だが、あのM78星雲人を無傷で打ち倒し、手土産に保養地となる美しい星を、大量

の奴隷と共に手に入れたならば……？

彼ももう80歳半ば、いくらペダンの優れた医療水準で引き上げられた平均寿命でも、もう折り返し地点。そろそろ男盛りに陰りが見え始める頃だ。この作戦が、最後のチャンスかもしれない。

彼は焦る気持ちを抑え、艦長席に飾つてあるデバイスの記録映像を再生した。部隊全員が揃う、最後の夜に撮影した、出撃前夜の笑顔。

……待っている、戦友達。

土砂降りのように降り注ぐ攻撃の中へ、前線兵士が湯水の如く突入させられる、暗い日々は終わった。

あの時、お前の望んだ光景は、きっとあの虹の向こう側にある。

俺達のキングジョーが、鋼鉄の腕で、黄金に輝く未来を掴み取るのだ！

## ウルトラ警備隊に死ね 《後編》(V)

自分の上司である副司令官からの返答に、技術主任は己の失敗を悟った。

——ドロシー・アンダーソンの記憶を抹消し、地球側へ引き渡せ——

ドロシーを返却するのに、わざわざ記憶処理を施す必要はない。むしろ今の状態そのままで帰した方が、ペダン星と地球を繋ぐ架け橋として、活躍してくれる筈なのだ。

だが、そうではないとなると……

技術主任は、司令官が地球側を油断させ、キングジョーで奇襲をかけるつもりなのを理解し、失望した。

少し野心の強い傾向があるとは言え、戦闘車両の改良開発を声高に叫び、牽引しているのは、前線兵士の消耗を抑える為だと聞いていた。無駄な戦闘を減らす方針の司令官は、意外にも自分の趣味へ理解を示し、自然や文化の重要性を分かってくくれる人だと、そう思っていたのに……

最新鋭の装備を前線の兵士へ優先的に回す、部下思いの優秀な指揮官という評価も、裏をかえせば、これ見よがしに旧式装備で軍歴を見せびらかし、過去の栄光に縋る頭の固い老害とも言えるじゃないか。

ここまで、彼女が無意識に、しかし心のどこかで確かに感じていた違和感が、鎌首をもたげる。

自分達は、防衛戦争しかしないのだと、侵略行為ではなく、これは母星を守るための尊い示威行動なのだ、必死に言い聞かせてきた。

あの時の作戦も、あの戦闘も……実は防衛に託けた、ただの侵略だったのでは？ 今まで、どうにかそれを考えないようにしてきたが……事ここに至って、決定的な裏切り行為を平然と行う命令に、彼女が信じていたベダン軍の理想が脆く崩れさっていく。

自分達の星が平和なら、他の星はどうなってもいいというの!?

彼女の耳に、他でもない自分自身の言葉が、何度も何度も繰り返される。

「ずるくて……欲張りで……とんだ食わせ者なのは、アタシ達の方じゃないの……」

宇宙人同士の約束だと、嬉しそうに頷くモロボシ隊員の純真な笑顔が、無垢な瞳が、彼女の心を苛んだ。

自らの命の恩人を、彼女は自分の口で、ペテンにかけてしまったのだ。

いや、それどころか、アタシを信じて、必死に停戦を呼びかけたであろう彼自身の顔にも、泥を塗ったはず。

一度失った信頼が、再び修復される事は絶対に無い。

ペダン星の裏切りが分かった瞬間。彼は烈火の如く怒り狂い、卑怯な裏切り者として、自分を決して許さないだろう……あの暖かな声を、二度と聞く事は出来ないのか、自分分は。

もはやペテン師は一度嘘をついたが最後、嘘を重ねていくしかないのだ……小さな誤解から、ずっと魔法使いのフリをし続けた、あの奇術師のように……

元より、単なる組織の一構成員でしかない自分には、酷い二枚舌の片棒を担ぐしか道はない。

折角築き上げた、ささやかで貴重な友情を、自らの手で跡形もなく消し去る為、技術主任はアンダーソンの待つ部屋の扉を開けた。

「あら、おかえりなさい！ ……ねえ、どうして、アナタはそんなに泣いているの……？」

マーヴィンは、異人館の近くに併設された教会に足を運んでいた。

彼が奪ったブローチが、何らかの信号をキャッチしたからだ。

敵も、このブローチをマーヴインが奪った事に気付いているはず。

であるならば……これは彼を名指した挑戦状に他ならない。

反応が強くなる方角に向けて歩いてみると、この教会にたどり着いたという訳だ。

ここに……敵が……

マーヴインは油断なく銃を構えると、教会の扉をそつと開いた。

「……よく来たわね、マーヴイン・ウィップ。我々はお前の来るのを待っていたのよ」

「なに!? お前は!」

ステンドグラスを背に立つ彼女は、マーヴイン捜査官の良く知る顔をしていた。だが、そんなまやかしは通用しない。不敵に笑う女に、即座に銃を突きつけるエージェン  
ト。

しかし明確な殺意を向けられた彼女は、その銃口が恐ろしくともなんともない、と  
いった様子で、ふんと小さく鼻で笑うと、冷たい眼差しで吐き捨てた。

それは本物のドロシーアンダーソンならば、絶対にしないであろう、他者を完全に  
下した表情。

「……これだから地球人は。すぐに暴力をふるう事しか、考えない」

「なんとでも言え、エイリアン……なぜ俺をここへ呼んだ? 殺されにきたのか?」

「あら、ずいぶん言いようね。アタシは、アナタたちの大事なものを、ただ返しにきただけなのに……?」

彼女が指し示した方では、長椅子をベッド代わりにして、全く同じ顔の女性が、目を閉じて横たわっていた。

「ドロシー!」

マーヴィンは一瞬、敵の罠である可能性も忘れ、彼女の元へ駆け寄った。

すぐに秘密の探査装置で、本物のドロシーの居場所も確認する。

彼女の肩には、特殊なマイクロチップが埋め込んであって、護衛からは位置が特定できるとなっていた。

今回はその電波も遮断され、本来の役目を果たす事は無かったが……この距離ならば、本人確認には使える。

最も、彼女の腕をもぎ取って偽物に移植されたのならば意味はない……マーヴィンとしては、ちらとでも考えたくはない事だ、そんな可能性。

「ドロシー! しつかりするんだ、ドロシー!」

「今は眠っているだけ。モロボシ隊員から聞いていない? アタシ達の交換条件を」

「それは……」

確かに報告はあったが……まさか本当だったとは……



「じゃあ、用事はこれでおしまい。……せいぜい、彼女を大事にする事ね。アナタがドロシーの魔法使いなんでしょう？　ねえ、マービィ？」

「なっ!？」

「アナタ達が、本当に彼女の言うとおりの、愛に溢れた種族ならば……ドロシーともう一度お話するなんて、きつとすぐにできるわ。……じゃあね、魔法使いさん」

「……待てー!」

マーヴィンとすれ違い様に、ドロシーしか使わないはずの愛称を気安く呼び、皮肉っぽい言葉をかけるペダン星人のスパイ。

教会の出口に向かってゆっくりと歩いていく彼女を、マーヴィンが鋭く呼び止めた。

「……礼は、言わないぞ。彼女が恐ろしい目に逢ったことに変わりはない」

「そう」

「お前達の仲間を大勢殺した事についても、謝らない。人殺しは、お前達もだからだ。再び俺の前にペダン星人が現れる事があれば、その時は警告無しで、即座に撃ち殺す。命乞いすらさせないぞ、仲間の仇め」

「……そう」

「だが……ドロシーを生きて返してくれた事だけは、きつと覚えておく。俺の本当に欲しかったものを、お前はくれたのだ。だから、これから何があっても、お前だけは、殺

ささい……名は？」

「……」

彼女は背中へ投げかけられる、マーヴィンの言葉の数々を、ただの一度も振り返らず、じつと聞いていた。

しかし、最後の質問には、答える気が無いのか、そのまま教会を出て行くと、そつと……扉を閉めた。

「……さようなら、もう一人のアタシ」

## ウルトラ警備隊に死ね《後編》(VI)

防衛センターに集まったウルトラ警備隊の前で、スーツ姿のダンが、ツチダ博士に頼み込んでいた。

ペダン星人に提示された交換条件を。

「えっ…研究を中止しろだって…?」

「そうです、そうすれば、ペダン星人も地球から退却すると証言しています」

「……ダン、お前、ペダン星人に会ったのか?」

「あの女が現れて、僕に誓ったんです」

「あの女って、アンダーソンのことか?」

「そうです」

懸命に停戦を呼び掛けるダン……騙されているとも知らずに。

それに対し、フルハシが率直な感想を述べる。こういうとき、遠慮せず真っ先に、歯に衣着せぬ物言いを出来るのが、彼の強みであった。

「けっ、あんなスパイの言うことが信じられるか」

「本当です、宇宙人同士……いや、地球人とペダン星人の約束として、そのことを協議し

てきたんです！」

皆の間に、気まずい沈黙が流れる……見かねたアンヌがダンに助け舟を出すかのよう  
に続く。

「もし本当なら、最高にいいわ！ ……私たちが欲しいのは、平和なんですもの！」

「やったじゃないか、ダン！ 惑星間戦争をすんでの所で回避できたんだ。これは大手  
柄だぞ！ なあ、みんな？」

俺が全員の顔を見渡しながら、呼びかけるものの、まるで熱を失った様子で、こちら  
に背を向けるアマギ。

「その言葉が真実ならな……」

「みんな、何を疑っているんだ！ ……まず、相手を信じることです！ そうでなければ  
……人間は、永遠に平和を掴むことなんかできっこないんだ！」

煮え切らない態度の仲間達に、いらだちを募らせるように、語気を強めるダン。

彼は、人間が平和を願う心の強さを、誰よりも信じていた。そう、それは人間達以上  
に……

だからペダン星人の提案にのつたのだ。しかしこれでは……ダンは、自分が人間に、  
あまりに高い理想を抱きすぎていたのかもしれないと、そう思ったところで……彼の肩  
を叩くものがあった。

「まあまあ、そう怒るなよ、ダン。俺達地球人は、今まで沢山の宇宙人に騙されて来たんだ。今更そう易々と、攻撃してきた奴を信用できないってのも、仕方ないぜ。全員が全員、すぐに割り切れる訳じゃない」

「それは！……いえ、僕も熱くなりすぎました……ソガ隊員のいう事にも一理ある。怒鳴つてごめんなさい、アマギ隊員」

「い、いや……俺はどうもネクラな性分だからさ……悪かったよ」

少し冷静になった両者が、ぎこちなくも、お互いの失言を訂正しあつた。

だが、なんの証拠もなしに侵略者の言葉を信用するなんて……空気は依然として固いまま。

そこへ、マーヴィン捜査官が扉を開ける。隣には見覚えのあるプラチナブロンドの美女。

なんという事だ、あの女性は……！

「お、アンダーソン！ マーヴィン、これは……？」

「本物のドロシー・アンダーソンです。ペダン星人は約束を守つた……ダンの言うことは、本当です」

「アンダーソンさん、あなたは……今までどこに？」

「彼女は疲れています。少し休ませてください」

「……さ、いきましょ」

どこかブーツとした様子のドロシーを、アンヌが優しく病室へ案内する。

彼女達へついて、部屋を出て行こうとするマーヴィン捜査官に、自然な流れで声をかけるソガ。

「いやあ、良かったですね、マーヴィン捜査官！ 彼女を見つけ出すなんて、流石はワシントン基地のエージェントだ」

「いえ、ペダン星人が、ボクを呼びつけて、彼女を引き渡してきたんです」

「え、そうなんですか……？」

「……何か、問題でも？」

突然立ち止まったソガを、マーヴィンは訝し気に振り返る。

ソガ隊員は何事かを悩んでいるようだったが、ついに質問を始めた。

「先程、あなたは本物のドロシー・アンダーソンと断言されましたが……何を根拠に？」  
「これです。彼女の体内には発信機が埋めてあります」

「え？ あ、そうなんだ……じゃあ肉体は本物として……心は？」

「心？」

「ええ……かつて、ユシマ博士が洗脳されて、あやうく基地が壊滅する寸前になりました……彼女とはもう喋りましたか？」

「いえ、まだ一度も……シヨックでぼんやりしているようなのです」

「じゃあ、早く確かめた方がいい」

ソガに不安を煽られたマーヴィンは、アンヌとソガが見守る病室で、ドロシーに語りかける。

「ドロシー……僕が分かるかい？」

「ううん、アナタは一体誰なの？ ……それに、ここはどこ？ ねえトト、ここはカンザスじゃないみたいよ……？ そうだわ、トトがいない！ おじさん、トトがいないの、一緒に探してくれない……？」

「……おお、なんとということだ……！ ああ、ドロシー!!」

「アンダーソンさんは記憶を完全に失っているわ……ペダン星人に、記憶を消されているのよ！」

アンヌが即座にドロシーを寝かしつけ、脳波の状態を探った。

どうやら、単なる記憶消去よりも、さらに複雑な処理がなされているらしい。

アンヌ曰く、強力な暗示によって、元のドロシーとは別の人格で、記憶ごと上書きされてしまっているとの事。

今の彼女は、ドロシーはドロシーでも、ワシントン基地の才媛ドロシー・アンダーソンでは無く、カンザスに住む12歳のドロシー・ゲイルなのである。

物語のカギを握る天才科学者は、ペダン星人の恐ろしい催眠により、自分がとある御伽噺の登場人物、ドロシーという幼い少女なのだと、思い込まされているのだった！

「隊長、沖合を搜索していた駆逐艦が、海底を航行する巨大な金属反応を検知！」

「……ついに来たか……」

「停船命令に従わなかったため、爆雷による攻撃を試みたものの、無傷で突破された模様。これより追撃をかけると言っています」

海域を捜査中だった軍艦から、センターへ緊急入電が入る。

アンダーソンの記憶が消されていると報告があつてからまだ数分。

それでも、危惧していた通りの事態になつてしまった。

キリヤマは、女性科学者の病室に待機させていた部下を呼び出す。

「はい、こちらソガ」

「ソガ、アンダーソンの調子はどうだ？」

画面に映る隊長は、むずかしい顔をしている。



きつと、ドロシーの知恵を借りたいような事態が起きたのだ。

注文通り、ビデオシーバーに映る隊長へ、病室の様子を見せるが……芳しくはない。

「だめです……今、アンヌがショック療法を試していますが……時間がかかりそうです」

「……そうか」

「隊長、あのロボットが発見されたんですね……？」

「ああ、やはりペダン星人は我々を油断させるためだけに……アンダーソンを返したのか……」

「なら……そのツ……」

「どうした、珍しく歯切れが悪いな」

隊長に進言しようとして、思わず言いよどむ。

オレは、事ここに至っても、まだ決断できずにいた。

……全艦艇を集結させて、波状攻撃を執行しましょう！

そう言うだけなのに……

もはや、あのキングジョーを倒せるのはライトンR30爆弾だけだ。そしてその設計図はドロシーの頭の中だけにある以上、俺達に出来るのは時間稼ぎだけ。

海上のキングジョーに落とし穴は通用しないし、本編の二戦目では、普通に起き上がっていた。

おそらく何らかの対策をしたのだろう。

だから、間断なく攻撃を仕掛けて、こちらへの反撃を誘発させる……という方法しかない。

こちらの攻撃はまるきり効かないのに、だ。

だが、攻撃が効かないから大人しく戦力を温存する。というのも……

この15話において、セブンは今までにないくらいの時間、キングジョーと格闘する事になる。

それまでは変身からせいぜい2、3分で決着がついていたのに、多分10分くらいは戦っていた。

その時間だって、全ての戦闘を映した訳ではないから、あくまで番組の中では10分くらいしか無かっただけで、それ以上の長時間である可能性の方が高い。なにせドロシーが目覚まして、新兵器を作り上げるまでの時間だぞ？ 尺の都合で圧縮されているだけで、本当は数時間だったかもしれない。それも、あのキングジョーを相手にだ。

だから、今回の戦いはセブンの中でも1、2を争うくらい消耗した戦いのハズ。なにせ平成版で、キングジョーにトラウマがあると、ダンが認めているくらいだからな。

だがそんな激戦も、結局はただの時間稼ぎでしかなく、セブンにしか使えない技や能力が必要だったわけでもなんでもない。ただ、神戸への上陸を阻止するために、キング

ジョーの巨体と組み付く事ができるサイズが、彼一人しかいなかったというに過ぎないのだ。攻撃が効かないのは、セブンも人類も同じなのだから。

ならば海上で、無数の戦艦によって取り囲み、神戸への到着を少しでも遅らせる事ができれば……セブンの戦う時間を大幅に減らせるのでは……？ どの攻撃も等しく効かないという事は逆に、キングジョーの的になるだけならば、セブン以外にも十分仕事ができるのだ。

でも……果たして本当にそれでいいのか？

セブンはキングジョーにどれだけ殴られようが、撃たれようが、そこで死ぬことはない。

だが……あのロボットの進路に立ち塞がった戦艦は……確実に沈む。

尽く破壊され、全員死ぬだろう。間違いない。

俺達ウルトラ警備隊はまだいい。原作と大きく違う行動をとらない限り、受ける被害も原作と同じ結果を生み、負傷はしても、最悪死にはしないはずだ。

警備隊の装備はマグマライザーでなくとも、ホークですら凄まじい堅牢さを誇るし、肉体も人類の最高峰だからな。

だが……他の防衛隊員はそうではない。メタ的な言い方をすると、モブに当たる彼らは、近くで何かが爆発するだけで容易く吹き飛び、ボロ雑巾のように死ぬ。そこにキャ

ラ補正なんて微塵もなく、本編でも一般隊員はどんどん死ぬ。

地球防衛軍は、ウルトラシリーズの中でもトップクラスの戦果を誇るが……戦死者数もトップクラスなのだ。同じくらいの犠牲によって、あの輝かしい戦果は打ち立てられている。

そして、本編のキングジョー戦に、海軍の艦艇なんか一つも参加していない。

と言う事は……俺の一言で、原作にはなかった余計な戦死者が増えるという事だ。

ウルトラセブンの消耗を抑えたいというのは、結局オレ一人のエゴでしかなく……セブンを守るためなら、他の隊員の命はどれだけ散らしてもいいのか？ ……セブン本人だって、そんな事、これっぽっちも望んじやいないはずだ。分かっている。

でも……オレは……例えば悪魔に魂を売り渡してでも、彼を助けたい。

だが、それを貫き通す覚悟も……ない。

俺がビデオシーバーの前で押し黙っていると、隊長がまなじりを吊り上げ、低い声で俺を呼ぶ。

「……ソガ、お前の言いかけた作戦を、当ててやろう。……付近の海域にいる全艦艇を集結し、進路上を塞ぐように陣を敷く。そうだな……？」

「た、隊長……」

流石は隊長だ。オレが言わずとも、次にやるべき事が分かっている。だが……

「そして、お前の悩む理由も、私には手に取るようにお見通しだ、あまり見くびるなよ？ 攻撃が効かないなら、ただの時間稼ぎにしかならない。そんな作戦に付き合わせられない、といったところか。……どうだ、当たり前だろう？」

「……」

凶星をさされたオレが、二の句を告げないでいると、隊長は大きく息を吸い込んで、凄まじい剣幕で怒鳴った。

「あまつたれるんじゃないっ!!」

「す、すみ……」

「これが通信越しだった事を幸運に思うがいい！ そうでなければ今頃……殴り飛ばしていたところだ！ バカにするのも大概にしろ！ 我々地球防衛軍の使命を、一体何と心得るか、キサマ！」

「使命……」

「我々は、防衛軍だ。攻撃軍じゃない！ 地球を守る盾なのだ！ 盾の役目は、守るべきものの為に、代わりに傷つき、その体を削りながら、例え最後には断ち割れてしまったとしても、その後ろにいる者に一つも攻撃を通さないというのが、仕事なのだ！ 盾が

自分の傷を嘆いてどうする!? そこに攻撃が効く効かないなど、まるで関係ない、常に人々の前に立つのが、変わるものか! それを……キサマは侮辱したのだぞ! ウルトラ警備隊の覚悟を、鼻で笑ったのだ! 今、この作戦に従事してくれている全将兵に……恥ずかしいと思わんのかツ!!」

「……申し訳、ありませんッ……!」

「泣くな! 臆病者は一人で家に帰れ! キサマはなんだ? ウルトラ警備隊なのか?

それとも単なる臆病者なのか?」

「う、ウルトラ警備隊の、ソガ隊員であります……!」

「ならば戦え! 戦って戦って……戦い抜いて! 最後の最後まで地球を守って……そして死ぬ! 我々地球防衛軍の命によって、たった一分一秒でも敵を押しとどめられたのならば……それは一人でも多くの市民が、逃げられる時間を稼ぎ出すことになるのだ! いいか、ソガ。我々人間の持つ本当の武器は、勇気だ! 真実の勇気とは、怖いと思ひ、それでもなお危険に立ち向かい、行動できることだ! キサマも名誉あるウルトラ警備隊員であるなら、武器を持って!」

「ハイ!」

「……それと、お前はもう一つ思い違いをしているぞ、ソガ」

「お、思い違いでありますか……?」

「そうだ、これから全海兵に……そして、お前たちウルトラ警備隊に死ねと命じるのは、キサマなどでは決してない。……私だ！ このキリヤマだっ！ 常にこの私の責任と義務であつて、キサマのような未熟者がいちいち思い悩む事ではないッ！ わかつたか！？」

「りよ、了解！ 了解しましたッ！」

涙にぼやける画面の向こうで、キリヤマ隊長が全隊員に向けて、命を懸けると命令を下す。

「ウルトラ警備隊………出動スタンバイ！」

## ウルトラ警備隊に死ね 《後編》（VII）

ヘッドセットを付けた数人の通信員が、各々に割り振られた艦と、ひっきりなしにやりとりをしていた。刻一刻と変わっていく戦況。

まずは、始めにロボットを発見した駆逐艦が、そのまま全速力で、魚雷を垂れ流しながら追いつき、もう一隻、敵の行く手を阻むように合流した艦も、直当てする勢いで機雷と爆雷を敷設していく。

「このまま前方の僚艦と、挟み撃ちにするそうです」

「……あ！ 敵艦発砲！ たちかぜ被弾！」

「どの船からも、たちかぜの爆沈を目視したとの報告が……」

「後方の駆逐艦にも至近弾！ 大破、機関部損傷、行きあし止まります！」

「はたかぜより入電、『ワレ、航行フノウ。二ノ矢ヲツガエヨ』繰り返す『二ノ矢ヲツガエヨ』」

「最寄りの艦はどれだ!? このままでは見失ってしまうぞ！」

「……いえ、まだです！ 海上保安庁の巡視艇が、単独で追跡を継続中！ 位置情報、更新されます」



「攻撃に参加できる装備が無かったのが幸いしたか……そのまま追跡を続行、脅威と見なされる行動は慎めと送れ」

センターの指令室では、次々と舞い込む凶報に、通信員達が浮足立っていた。

その中心でキリヤマは、じつと海図を見つめる。

巡視艇の送信する情報によって、敵のロボットの位置が光点として指し示され、それは着実に神戸港へと近づいてくる。

「重巡クリント、護衛艦あさぎり、どちらも直進コースでは、このまま振り切られます！」  
「……え、なんだって？ 本当か！ ……キリヤマ隊長、ガウエイン号が頭を抑えられます！ す！ 是非にと！」

「許可する。……ただし、くれぐれも私怨に走るな、と伝えろ」

「ガウエイン号、会敵と共に、魚雷全門発射！ ……全弾命中！ 対象の速度、依然変化ナシ……」

岩陰に身を隠していた潜水艦が、ゆらりと浮上し、六本の発射管から一斉に魚雷を撃ち出す。

だが、最強の戦車であり、究極の戦艦でもあるキングジョーは、潜水艦としても、無敵であった。

水中ですさまじい爆発が起こるが、それでもキングジョーの進路は、少しも変えるこ

とが出来ないのである。

「……おい、ガウエイン号、何やってる！ 回頭しろ！ 聞こえないのか！ おい！」

「どうした、このままでは正面から衝突してしまうぞ！」

「……だめです、返答はただ『王ノ仇ヲトレ、健闘ヲ祈ル』……もう、回避間に合いませんー！」

「馬鹿が……」

敵を示す光点と、味方の潜水艦を示す光点が、海図上でほぼ同じ速度で急接近し……  
そしてびつたりと重なった。

そこで光点は立ち止まり、まだ動かない。

「巡視艇が『すごい水柱が上がったが、敵を撃沈できたのか』と聞いてます」

「……ッ」

一回り小さいとはいえ、ほぼ同サイズの物体と海中で正面衝突したのだ。まだ報告でしか敵を知らない者ならば、淡い期待を抱いても仕方ない。

……しかし、キリヤマはあの時、間近でハッキリと敵の戦いを見ていたために、そんな楽観的な感想は、とても抱けなかった……やはり奴の恐ろしさは、自分の目で見たものにしか、わかるまい。

「あ、巡視艇より再び入電……『返答不要、敵の健在を視認した』……映像きます」

モニターに荒い映像が映し出される。……そこには、海上へひよつこりと上半身を出したペダン星人の侵略ロボットの姿があった。奴の頭にはへこみすらない。ガウエイン号は無駄死だったのか……？

この時、キングジョーの方でも、この地点へ向けて集結する、無数の反応をリーダーに捉えていた。

脚が付く深さまで到達したこともあり、多少の進行速度は犠牲にして、効率的に反撃を行えるよう、直立して進軍することにした。

いくらキングジョーにダメージがないとは言え、先程のように無茶な質量攻撃をなんども食らえば、水中で固定されていない巡航形態では、その運動エネルギーを相殺するため、せつかくの加速を0にもどされてしまう。それならば、周囲へ反撃を行いながら、二本の脚でゆつくりと歩いていった方が、結果的には早く、そして安全だと判断したのだ。

今このキングジョーの作戦目標は、宇宙船団の停泊地を確保すること……それよりも重要なのが、この星に駐在している宇宙警備隊員を素早く始末する事だったので、彼が出てきた後に、余計な茶々をいれられるくらいならば……と司令官は考えていた。

敵の被害が増大すれば、すぐにあの巨人を引きずり出せるだろう、とも。

キングジョーをすさまじい爆炎が包む。追いついた後続艦が、ついに攻撃を開始した

のだ！

濛々と立ち込める白煙の中で、びかりと何かが煌めく。次の瞬間、巡洋艦の右舷から、火柱が上がり、艦上を炎が駆け巡った。

キングジョーの光線によって、次々に撃沈される艦艇達。しかし、その後から後から、大小さまざまな艦種が戦列に加わり、包囲網を決して綻ばせない。

再び一筋の光線が水面を薙ぎ払い、一瞬にして沸騰し泡立った海水が、水蒸気爆発を起こして吹き上がる。

「艦長！ スクリューがやられました！ 速力低下！」

「左舷の消火追いつきません！」

「もはやこれまでか……ミサイルを撃ち尽くすまで沈んではならん！」

「ああつ！ 奴がこつちを向いて……！」

警報の鳴り響く戦艦で、対空監視員が金切り声を上げる。

速度の落ちた大物に、トドメを刺そうと、敵が顔をこちらに向け、なんの感情もない双眸に光を集めた。あの光線を至近距離で食らえば、例え戦艦の装甲であっても、たちまち爆発四散、乗員が退避する間もないだろう。

乗組員が死を覚悟したその時、ロボットの顔を猛烈な爆発が襲った！ 炎に視界がふさがれ、デストレイのロックオンが妨害される。光線が外れ、命を拾った艦の真上を、

低空飛行する銀色の翼が猛スピードで駆け抜け、遅れてやってきた甲高い独特な轟音に指揮所が震えた。

間違いない、ウルトラホークだ！ 警備隊の航空支援が間に合ったぞ！

「フルハシ隊員、顔です！ 奴の顔に攻撃を当て続けて、センサーを妨害するんです！ 戦艦は足が遅い。一度奴の標的になったら、逃げきれません！」

「よしきた！ 俺達が頭上でブンブン飛び回って、キリキリ舞いさせたらうってか！

……見とけよお！」

「そう簡単に、死なせてなるもんか……！」

フルハシの駆る、後続のホーク3号が、円盤翼にも似た独特の機体形状によって齎される、低速での機動性と安定性を活かし、ロボットの前で八の字を描くように、間断なくミサイルの雨を降らした。

このような激しく重力の掛かる操縦は、パイロットの負担になるため、本来なら敬遠されがちであるが、フルハシ隊員の鍛え上げられた肉体は、それだけで、最新鋭のパイロットスーツに勝るとも劣らない耐G性能を有していたのである。彼にはクラタ程の類まれな飛行センスはなかったが、この強みを活かしながら、好んで急旋回や宙返りといった曲芸飛行を行う癖があり、それは回避を両立しながら敵の注意を引くという素晴らしい効果を生んでいた。この一点においては、紛れもなく彼は防衛軍内のトップエー

スであり、キリヤマが彼を、超音速のホーク一号のメインパイロットへ、頻繁に指名する理由であった。

そうして、敵の視線が3号に向き、回避行動に移らざるを得なくなると、今度は即座に1号が、優れた加速性能でカットに入る。デルタ翼の稼ぎ出すスピードは、例え正面からの突入コースであったとしても、キングジョーの射撃管制システムでは、その姿を捉える事が出来なかつた。元々、空中戦は分離状態で対向する設計思想のため、直立形態では対地攻撃を主眼としていたのが、災いしたのである。

ホーク二機が連携し、ミサイルで目隠しをする事によって、海軍の被害は激減した。そうしてやっと戦況が落ち着いた所で、翻弄される敵の姿を、水中から息を潜めてじつと見つめる者がいる。

神戸港に係留されていたハイドランジャーに乗って、遅れて主戦場に到着したアマギの頭脳は、魚雷による攻撃もそこに、敵をじつくりと観察する事で、ある一つの結論を導き出そうとしていた。

それは先の戦いで、巨人の足元をポインターで駆け抜け、だれよりも間近でその威容を見たアマギだからこそ、気付けたかもしれない違和感。

「……隊長、全ての艦艇に、奴の脚部へ砲撃を集中するように伝達してください。できれば膝か……股関節でも構いません」

「なに、脚？」

「はい、あのロボットの構造はおかしい……関節が見当たりません。より正確には、継ぎ目がないんです！ 以前の戦いで、自分は敵を中世の鎧騎士に見立てましたが……どんな甲冑も、関節部にはその可動域を確保するために、鋌を打ったり、隙間があいているはずですよ。でも奴は膝裏すらも、僅かな蛇腹があるだけで、装甲でびつたりと覆われています。あのロボットは装甲板を継ぎ接ぎしたのでなく、四つの大きなパーツをそのまま鑄造したのか、さもなければ金属塊を削り出して造られたとしか考えられません！ 道理で頑丈なはずだ……」

いくら強靱な装甲板を鍛造したところで、それらを繋ぎ止めている部分は、どうしても構造的に弱くなる。衝撃によってネジやビスが緩み、弾け飛んでしまえば、そこからバラバラになってしまうのだ。

しかし、打ち抜きの鑄物や、一つの塊から造られた一体成形であるならば、そういう危険性とは無縁である。あのロボットが四つのパーツに分離するのは、鑄物の中に後から部品を詰めて、最後に組み合わせる事で、外から見える穴をびつたり塞いでしまうためなのではないか……？

「待て、それでは何故、奴は動けるのだ？ それではセブンと格闘するどころか、歩くことすらままならんではないか」

「ええ、ですのでここからは推論になるんですが……敵は何らかの方法で、金属を瞬間的に柔らかくして、それこそ人間の皮膚のように、柔軟性を持たせているのではないのでしょうか？ 剛性と粘り強さを併せ持つ金属を、正面から粉碎するのは、非常に困難です！」

「なんだと?! ……では、どれだけ攻撃を集中しようと、それでは無駄ではないか！」  
「いいえ、逆です隊長！ 数発攻撃を加えただけでは意味がありませんが、そこで諦めてしまおうこそ、敵の思う壺です。例えどんなに柔らかくなつたとしても、金属である以上、何度も曲げたり叩いたりすれば、分子にズレが生じ、歪みがたまつていく一方になります。……そして、柔らかいという事は、内部に伝わる衝撃を全て殺しきる事は出来ないという事です！ 奴の膝関節を疲労骨折させてやるんですよ！」

どのような小さなダメージであっても、完全にゼロには出来ない以上、それを積み重ねる事で、確かな効果を得られる事もある。それこそ、岩をも穿つ雨垂れのように。

「そうか、ただでさえ重たい体を支えるのに精一杯だったところへ、ソガの落とし穴とセブンの足払いで、目に見えないダメージが蓄積しているかもしれない……よし全艦、奴の右膝へ砲撃を集中せよ！」

「キリヤマ隊長、そういう事でしたら、徹甲弾を使用した方がよろしいでしょう。炸薬の爆発力で広範囲を攻撃する榴弾より、弾体の持つ運動エネルギーをそのままぶつける徹



甲弾の方が、ハンマーとしての役割に適しています」

「……ありがとうございます。各艦！ 弾種は徹甲弾を装填し、ミサイルでの攻撃は、敵上半身への牽制に使い！ 奴も地球くんだりまで長旅で、さぞ疲れていることだろう。ここらで一つ、かつけの検査にかけてやれっ！」

海上に浮かぶ全砲門が唸りをあげて、たった一人の遠征軍へ、一斉に健康診断を開始した。

## ウルトラ警備隊に死ね 《後編》（Ⅷ）

次々と着弾する攻撃。今までは目くらまし程度にしか効果がないと思われていた砲撃が、あの歩く無敵要塞を攻略するためのカギとなるかもしれない、と聞かされた砲術科要員は雄叫びを上げて奮起した。大艦巨砲主義の遺物と蔑まれた旧式戦艦や巡洋艦が、その巨大な砲口で、何度も何度も咆哮を轟かせる。その後ろから、二隻のマックス級原子船が、無数の対艦ミサイルを垂直発射しながら、最新鋭の艦載主砲を焔めかせた。彼らが搭載していたのは、小型原子炉から得られる潤沢な電力を湯水のように使い、そのまま威力へ変換する電磁投射砲……つまり、レールガン。顎が外れる程バカ高い燃費を代償に、凄まじい長射程と貫徹力を実現したこの砲は、敵の膝小僧を散々に打ち据えるという今回の用途に、まさしくうってつけだったのである。

健康を破壊する事しか頭にない、害意の塊のような執拗な検査に、ロボットは顔色一つ変えなかったが、その内部では、また違った様相を呈していた。

「右脚部損傷、7%に達しようとしています！ 動力伝達率、さらに低下！」

「……ええい、さつきからこんな旧時代の舟を相手に、何をやっているのだ！」

「それが……どうやら燃焼残留物が装甲表面に付着し、メインカメラとペダニウムエン

ジンの出力に影響が出ていますようです」

「なんだと!? 原始人め……実弾兵器など使いおつて! いったい、いつの時代だ!?

……そんな汚れなど、さっさと洗い流せ! 水ならそこら中にあるだろうが!」

「なにぶん、設定外の行動ですから、どうにもうまくいかず……」

「なぜあの宇宙警備隊員はさっさと現れない! ……地球人共が全滅しても、構わないと言うんだなツ!」

「こんなことならば、当初の予定にあった通り、膝の増加装甲を増やすべきであったと司令官は歯噛みした。

ライントーンアクチエートは関節部の装甲に柔軟性を持たせる事で、不慮の攻撃でも関節を破壊されないという利点があったが、金属疲労が溜まりやすく、このようにに拗に攻撃されては、通常の可動式関節を強化フィルムで覆っているのと大差は無かった。実際に後年設計された簡易量産型では、費用対効果から廃止され、全てを装甲で覆っているのは、初期ロットの試作品数台が生産されたのみに留まるのだが……今の彼には知るよしもない。

……と同時に、もう一つの面でも、試作の一機目であるという悲哀を痛感する。歩兵の武器に至るまで、全てが粒子兵装に置き換わって久しいペダン星では、実弾兵器など、古代の遺物に等しかったため、設計時にはまるで想定していなかったのだ……煤によつ

て、風防が汚れるなんて。

そして、キングジョーにはあらゆる動作プログラムが設定されていたが……水浴びをするなどという行為は、もちろんプログラムされていなかった。

おかげで、不自然に海中に没しては、からだを揺すったり、顔を覆ったり……不慣れな入浴を衆人環視の真つただ中で晒す、という辱めを受けることになる。

はじめは謎の行動に戸惑っていた海軍だったが、次第に敵の意図を理解し始めた。

「おい……まさか……奴ら、窓が曇ってこつちが見えないんじゃないか……？」

「そんな馬鹿なことあるわけ……おい、火器管制。ミサイルで奴の頭部と胸の窓を狙え！　そこが敵の目だ！」

各艦艇から報告を受けたキリヤマも、思わず耳を疑ったが……すぐに指示を飛ばす。

「淡路の基地と、紀伊方面に展開した部隊に長距離ミサイルの支援を要請しろ！　クル星人に使った特殊噴霧装置を、ミサイルの弾頭に据え付けるんだ！」

人類は、強大な外敵に対して、とことん底意地が悪かった。

「イーチ……ニーイ……イーチ……ニーイ……」

「アンヌさん、まだ彼女の意識は……」

「……駄目だわ。ここからどうしても先に進めないの」

センターの病室では、ドロシーの記憶を取り戻すため、アンヌが必死に暗示を解こうと、あらゆるショック療法を試していた。だが、彼女の見つめる先の画面では、望ましい波形は示されていない。治療によって、ドロシーの脳波がノンレム睡眠に近い状態に引き寄せられて安定していたのが、一定時間を置くと、再びレム睡眠……いわゆる夢を見ている状態と同じ脳波になってしまう。陳述記憶、つまり見聞きした事柄が定着するのは、ノンレム睡眠時であるため、この状態で彼女の記憶を呼び覚まさないといけないのだが……ドロシーは未だに白昼夢の中に留まっていた。

隣で心配そうに見ていたマーヴェインが堪えかねたように質問する。

「……私は精神医学には詳しく無いのですが……彼女の容態は、そんなに悪いのですか？」

「いえ、彼女に掛かっている暗示の種類は特定できました。あともう少しです。ただ、この安定状態まではなんとか漕ぎ着けられたんですけど……最後のピース、この催眠を除するキーワードが分からないんです……」

「キーワード？」

「ええ、このタイプの暗示は、なにかパスワードのような言葉や動作で、記憶そのものをロツクする方式なんです。その力ギさえ知っていれば、かけるのも解くのも簡単な代わりに、キーワードが何か分からないと、通常の暗示よりとても強固な効果を發揮してしまふ……催眠術者が手を叩いたり、数を数えたりして、暗示を解くのを見たことがありますか？」

確かに言われてみれば、マーヴィンもたまに見るテレビで、そういったシーンを見たことがある。たいていはヤラセの大法螺吹きによるエンターテインメントだと思っていたが……優秀なドクターである彼女が大真面目に言うのだから、あれもわりかし真実に基づいた描写だったのだろう。

一部の精神病治療に使われる催眠療法も、こういったものなのだろうか？　催眠術など、まるで魔法の一種のような……

ここまで考えて、マーヴィンの脳裏で電撃のようにひらめきが走った。

思い起こされるのは、彼女を連れてきたあの冷酷な表情をしたペダンの女……彼女はなんと言っていた？

すぐに彼女と話せるだろうと言っていなかったか……？　彼女の記憶が消され、ロボットが強襲してきた以上、あれも単なる嘘だと断じていたが……彼女だけは嘘を吐いていないとしたら……？

あの女は、自分をなんと呼んだか……!?

「アンヌさん、さっきの安定状態を、もう一度お願いできますか……? 試してみたい事があるんです」

「心当たりが、あるんですね……!」

アンヌによつて、もう一度、脳波安定状態、いわゆるパスワードの入力待機状態となるドロシー。

そこへ、枕元へ膝をついたマーヴィンが、優しく語り掛ける・

「ドロシー、ドロシー……聞こえるかい? 僕だよ、マービィだよ……」

「マービィ……? オズだいまおうの、でしの……?」

「そうさ、君だけの魔法使いだよ……」

虚ろな目で中空を見つめるドロシーが、ぼんやりとはあるものの、返事をする。

本来ノンレム状態の人間が、会話をするなどありえない。先程まで微動だにしなければ彼女の様子に、アンヌは息をのむ。

そしてマーヴィンは、かつてお互いがまだ小さかった頃、せがむ彼女の前で、魔法使いの弟子と名乗り、ごっこ遊びに興じていたのを思い出していた。

その遊びの中で、彼女が特にお気に入りだったシーン……

「まほうつかいさん、ワタシ、おうちにかえりたいの」

「じゃあ、とっておきの魔法を教えてあげる。目を閉じて……君の大切な人たちを思い出して……」

「めをとじて……たいせつなひとを……」

「そして、踵を三回打ち鳴らすんだ……いくよ？ セーの……ワン、ツー、スリー！」

マーヴィンのカウントに合わせ、彼女がベッドの上で、踵を三回打ち鳴らしたかと思うと、ブルーの瞳が、ゆっくりと開かれていく……

「起きて、ドロシー。さあ、起きて……」

「マー……ビィ……？」

「……ああ！ おかえり！ おかえりドロシーッ！」

「……ねえ、どうして、アナタはそんなに泣いているの……う？」

先程まで中空で固定されていた視線が、マーヴィンの顔を捉え、不思議そうに首を傾げた。

そんな彼女を、思わず抱きすくめるマーヴィン。

「ワタシね……なんだか不思議な夢をみていたわ……そこではアナタは小さな黒犬で……エメラルドのサングラスをしているの……」

「うん、うん……良かった……本当に良かった……っ！」

まだ催眠の影響で完全に覚醒できていないのか、マーヴィンの頭を撫でながら、夢見



心地でぼんやり語り始めるドロシー。

「ねえ、聞いて？ この夢ときたら、本当におかしくってね……？ 臆病なカカシを、恐ろしいライオンが叱り飛ばしているの……あんまり怖くてワタシ、震えてしまって……これじゃあ、あべこべよ。この組み合わせだと、残ったブリキ男がデユラハンのようになってしまうわ……あら、そういうえぼどうして彼は怒られていたんだっけ……？」

「いいんだ、いいんだよドロシー……あんまり無理をするんじゃない。いまは休もう！」  
「ううん……あと少しで……そうだわ、やっぱりおかしな夢。ワタシを攫った、西の悪い魔女がね？ 突然泣き出してしまって……」

そこまで言った彼女は、ハツとして身を起こす。

その変化は劇的であった。

先程までの夢見がちな少女は消え失せ、そこには理性と知性の輝きをハッキリと双眸に宿した、ワシントン基地の頭脳たる、一人の天才女性科学者がいた。

ドロシーは使命感に満ちた顔で、彼らに問いかける。

「キングジョーは……あのロボットはどうなりましたか!？」

「ペダン星人のロボットなら、神戸港に向かっています。今、みんなで足止めしているとよろよー！」

「こうしてはいられない！ すぐに行かなくては！」

「待つんだドロシー！　いったいどこへ！」  
「もちろん、会議を開催するのよ……ワタシ達の防衛会議を、いま、ここで！」

## ウルトラ警備隊に死ね《後編》(IX)

「くそっ！ 駄目だ……もうミサイルが弾切れだ」

「なんだって！ お前もか!? 俺は燃料がそろそろ切れそうだけ……チクショウ！」

長時間の戦闘によって、遂にホークの弾薬と燃料に限界が来ていた。

攻撃の要である艦艇から、キングジョーの気を引くためには、ウルトラホークをもつてしても、温存を一切考えない、苛烈な挑発が必要だったからである。

そして、僅かに航空支援の手が緩んだ効果は、想像以上に劇的であった。

密度の薄くなった白煙を切り裂いて、破壊光線がぐるりと海面を薙ぎ払う。

「護衛艦こんごう、あさぎり爆沈！ ゼノン号大破！ 浸水止まりません！」

「原子船イーストウッド、機関停止！ これ以上の戦闘続行は不可能です！」

「敵艦主砲の斉射3連を受け、イリノイ轟沈！ 爆発の影響で重巡キーロフ中破……えっ？ なにッ、ウダロイが持ち上げられている？ 各艦ランダム回避！ 回避だッ！」

「……くそッ！ 戦艦ケンタッキー、飛来したウダロイと衝突し、沈没……」

黄金の輝きを誇った体は、いまや真っ黒なススと、赤い特殊着色剤で、汚らしくまだ

らに染め上げられてしまっていたが、それでも低下した性能は全体の僅か数パーセント。ホークの支援が無ければ、海軍だけで太刀打ちできないのは明白だった。

「駄目だ、こうなったら翼で視界を塞ぐだけでも……」

「上空のウルトラホーク、聞こえるか！ 貴方は撤退してくれ！」

「こちらウルトラ警備隊のソガ！ 何言ってるんだ、レーザーでまだやれる！」

「無理をしてそちらまで撃墜されては意味が無い！ どうせアレに上陸されたら、後は陸軍の奴らと警備隊だけが頼りなんだ……ソガ隊員、あんたも同郷やったら分かるやろ

！ あの神戸の港は、俺らの誇りや！ こんな木偶人形に……みすみす踏み荒らされて、たまるかいい！」

「……よう言うたっ！ そんでこそ海の漢や！」

「今の誰や!? 『はつゆき』か?! やるやんけ！」

「せやせや！ 東京もんは、はよ帰れ！」

「おまえ普段、東京モンなんて言わへんやろ！ かつこつけすんな！」

強情に居残ろうとするソガに向けて、下の軍艦から、一斉に啖呵の対空砲火が飛ぶ。

彼らはオーブンチャンネルで堂々と軽口を叩き合い、大声で笑いあった。

死の恐怖を笑い飛ばし、空飛ぶ気障野郎の背中を押すために。

「ソガ隊員、彼らの言う通りだ。我々は一度引こう！ 脚部への攻撃は十分だ！」

「でも、アマギ！ まだ奴は歩いてる！」

「大丈夫です、足がほんの少し上がらなくなれば、それでいいんです。たったそれだけで、奴は神戸の堤防を踏み越える事が出来なくなる。歩行状態で上陸できないとなると……」

「そうか！ 分離するしなくなる！」

「そうです！ そして今度こそ、接合部の断面に、ありつただけの攻撃を加えてやるんです！」

「だったら、そのチャンスに攻撃できるよう、俺たちや戻るぞ！ ソガ！」

「……すみません皆さん……あとは、頼みます！ 今度は地上で戦おう！」

神戸港に向けて、飛び去って行く2機のウルトラホーク。

アマギのハイドラランジャーも、潜航深度が足りない為に、帰投していく。

「いったか……」

「各員、もうひと踏ん張りだぞ！ 我々の港は、我々自身の手で守り抜くんだ！」

駆逐艦が木の葉のように吹き散らされる中、一隻のミサイル艦が、敵の進行方向へ回り込むと、機関を停止し、艦首をロボットへ向ける。

「おい、なんのつもりだ！ オヤジ、年寄りの冷や水はよせ！」

「……どいつもこいつも、麦飯ばっか食うとる若造どもめ！ ほんまの脚気の検査なん

て、受けた事あらへんやろが！ 船乗りとしても、軍医としても、研修医以下や！」  
「なんやて!？」

「ひよっこはそこでよう見とれ！ 機関最大船速！ 装備が変わろうが船が変わろうが、ワシら魚雷艇乗りの戦い方は変わらへん！ お前らも三田つ子の意地見せたらんかい！」

そう叫ぶと、時代遅れの老艦長は、一切攻撃を行うことなく、艦をただ一直線に走らせた。

発砲炎すら見せない小ぶりの船体は、煙と汚れに塗れたキングジョーのカメラをかくぐり、発見を大きく遅らせる事になった。

接近する艦影に気付き、慌ててデストレイが発射される。海面が爆発し、濛々と立ち上る水蒸気。あえなく撃沈されたかに思えたが、それを切り裂いてあらわになるミサイル艦の勇姿！ 外部こそ炎に包まれたものの、機関や操舵装置といった中枢部はまだ無事だったのだ。そして、頑固な老艦長の率いる猛者たちの魂は、その勢いを少しも衰えさせることなく、飛沫を上げて、なおも突撃を敢行した！ 巨人の膝に目掛け、真正面から激突！

「全門、つてえええッ！」

主砲、副砲、魚雷にミサイル、対空機銃まで。

すべての兵装が、至近距離から一斉に解き放たれた。

本来曲がるべき向きとは全くの逆方向から、思いつきり殴りつけられたキングジョーの膝は、確かに異音を響かせて、大きく後ろに弾き飛ばされる。

海底の泥に足をとられて、そのまま前に倒れこむペダン星人の侵略ロボット。

血筋に九鬼の流れを汲み、六甲山の麓ですくすくと育まれ、瀬戸内海の荒潮に揉まれて磨かれ続けた老兵達の意地と矜持は、異邦の侵略者の脚を、確かに掬って見せたのである。

なんとか転覆を免れた艦の中で、満足げな高笑いを響かせる老人たちの目には、こちらに向けて伸ばされる無機質な金色の三本指が、しっかりと見据えられていた……

防衛センターの研究所で、新爆弾の設計を急ぐツチダ博士。その隣の指揮所からは、第一次防衛ラインが突破されたため、キリヤマ隊長が飛び出してくる。

「ツチダ博士。兵器はまだできませんか？」

「ドロシー・アンダーソンの協力が、どうしても必要です。記憶はまだ、蘇らないのです

か？」

「今アンヌ隊員が、シヨック療法を行っている最中で……」

「我々の武器では、到底あのロボットを破壊することはできません。ドロシー・アンダーソンなら、何か掴んでいるかもしれない……」

隊長とて、博士の邪魔をしてまでこんな問答をしても、意味が無いのは分かっている。しかし、部下たちを死地に追いやり、自分一人だけ後方で命令を飛ばすなど、キリヤマにとつては拷問に等しかった。さりとして、新兵器が完成した時に、それを届ける人員も必要で、海軍との中継も行わなくてはならない以上、この場を動くことは出来ない。

はやく、現場へ急行する口実が欲しい。もはや、キリヤマの胸中はその思いでいっぱいだった。

……そんな時だ、天使によって、福音が齎されたのは。

「隊長。ドロシー・アンダーソンが正常に戻りました！」

「えっ……そうかつ！」

思わず喜色満面といった様子で、ツチダ博士を振り返るキリヤマ。

胸を撫でおろした隊長と博士の待つ部屋へドロシー・アンダーソンとマーヴィン捜査官が入ってくる。

「アンダーソンさん。待ちましたよ」



「白衣をください」

先程までの様子が嘘のように、生き活きとした顔のドロシー・アンダーソン。

彼女が白衣を纏うときには、年頃の女性という面は消え失せ、人類最高峰の頭脳を持つ、科学者としての要素以外は全て削ぎ落される、というのはワシントン基地で知らぬ者がいない程。マーヴィンが優しい目目をサングラスで隠し、冷酷な殺戮者としてのペルソナを被るように、彼女は白衣を着る事で、完全に仕事のスイッチを切り替えられる人種であった。

「ペダン星人が使っている、特殊な金属は、ライトンR30を使用した弾丸で、破壊できるはず。ドクターツチダ、さあ始めましょう」

「ああー」

ドロシーの手元のノートを覗き込んだ博士は、一瞬でそこに書いてある数式の異様さを理解した。

「この式が、ライトンR30ですか？ 素晴らしい……！」

「これは、ある一人のペダン星人から教わった、彼らが使っている金属加工法に、ワタシが手を加えたものです。おそらくあのロボットを作るのにも、使用されていると思われる。地球の物質で、この数式を再現するためには、この施設が必要不可欠なのです。ドクターツチダ、たしかセンターには、本来の会議で話される予定だった、超兵器の試

作へ使う為に、少量のラドンが、備蓄されていたはずですね？」

「ええ、ありますとも。この数式であるならば……少し待って下さい……大丈夫、一発分ならギリギリ足りるはずですよ。しかし、どうやって、この式に当てはまる化合物の状態にするのです？」

ラドンの化合物については、まだあまり研究が進んでおらず、ツチダ博士ですらも、今回はどのような形で加工するのか、分からない。……だが、その作成法は既に、ドロシーの脳内で、何度もシミュレートされていたのだった。

「イオンディスプレイと、粒子加速器の、使用許可を下さい。それで電荷を調整します」

「分かりました。どうぞご遠慮なく、全ての設備を使ってやって下さい。そういう事なら、電子縮退炉にも、火を入れておきましょう。あれは立ち上げに時間がかかりますからね」

「ありがとう、ドクターツチダ」

(ドロシー……アナタなら、ワタシの記憶を完全に消去もできたはず……でも、そうせずに帰したのは……一体なぜ……？　ワタシに、こうして欲しかったからなの……？　本当に？　アナタの心が、分からないわ……ドロシー)

記憶を取り戻したドロシー・アンダーソンは、スーパーロボットを破壊すべく、新爆

弾の製造に取り掛かった！

住民が避難を終えた神戸港から、ダンは金色の破壊者を睨みつけていた。

海軍の艦艇を破壊し、街を破壊し、今もはしけを持ち上げ、岸辺の工場へ投げつけた所だ。

腕を上下させて勝ち誇る敵に向け、再度の猛攻撃が岸辺から飛ぶ。

敵の予想進路が神戸と分かった時点で、民間の船は全て出払っており、その代わりに無数の軍艦が波止場を埋め尽くし、浮き砲台となっていた。

攻撃にさらされ、光線で反撃を行うロボットは、僅かに右足を引き摺っているようにも見える。

あの恐るべき侵略兵器に対し、地球人達は一步も引かずに攻撃を加え続け、ついには、目に見える程の損傷を与えることに成功したのだ！

煤けた顔に、血糊の如く塗料を塗りたくられ、びっこを引く巨人の姿は、まさしく人類の不拔の精神が、ペダン星人の傲慢な科学に屈することなく、その鼻を明かしたのだという何よりの証拠だった。

自分ですら、攻撃が効かないと、絶望してしまった相手に対して、である！  
なんと尊いのだ、彼らは！

ダンはそこに、宇宙警備隊の信念にも通ずる、確かな輝きを見た。

彼らはしつかりと、鋼のごとき熱い覚悟を見せたのだ。ならば、今度は自分の番だ！  
あれならば……少しでも力の削がれた状態ならば、あとはぼくの力でも、なんとかするかもしれない……！

先程、通信でドロシー・アンダーソンが新兵器の開発を開始したと、連絡があつたばかり。

それが一体、どれだけ時間のかかる事なのかは分からないが……それまでの時間くらいは、なんとしても押しとどめて見せる。……なによりも、自分には共に戦う仲間がいるのだから！

「デュワツ！」

波止場に真っ赤な巨人が姿を現した！

「おお！ 見ろ！ ウルトラセブンだ！ 俺達には、あのウルトラセブンがついているぞッ！ 総員怯むな！ 撃て撃て！ 撃ちまくれ！」

「ようやく現れたか……待っていたぞ、ウルトラセブン！ このキングジョーの、輝かしい勲章の一つとなれッ！」

「ダアッ！」

《グワッシ……グワッシ……》

セブンの突進に耐える為、キングジョーが両腕を高々と掲げる。この姿勢こそが、キングジョーのファイティングポーズであった。なぜなら、反重力式姿勢制御の、もつともニュートラルな状態として設定されているのが、このポーズだからであり、デストレイの発射反動を打ち消すための射撃姿勢でもあったからだ。この態勢であれば、重心を前のめりに保つことが容易となり、なおかつ同サイズの敵には、そのまま腕を振り下ろして、即座に反撃に移る事が出来る。実に理に適った設計なのであった。

さらなる利点として、被弾時は、腕を上下させる事で重心を調整し、振動式のジャイロスコープのように、反重力ベクトルの入力方向を測定することも出来る。敵からの攻撃が予想される場合は常に、ベクトル計算の誤差が最も少なくなるこのポーズをとる事で、耐シヨック姿勢としていたのだ。

一戦目のデータを反映した、キングジョーの改良された制御機構は、ひたすらに頑丈だった。その強力さといったら、躍りかかったセブンが、逆に跳ね飛ばされてしまう程。これが、本来予定されていた、キングジョーのカタログスペック。敵の攻撃に微動だにしない、恐ろしいメカニカルモンスターの姿なのだ。

これですら、防衛軍の攻撃によって、出力が落とされた状態だというのだから、尋常

なものではない。光の国を敵に回しかねない判断を下したペダン司令の自信は、何一つ間違っていないのだ。

だが、一戦目の経験を活かしてきたのは、なにもキングジョーだけではなかった。それはセブンも同じこと。

(いいか、ダン。柔道で大事なものは、いかに相手を崩すかだ。その点、この技はいいぞ。なにせ最小の力で、どんな相手にもデカい効果が出せるんだ！ 上手くキメるには、ちよいとコツがいるけどな……)

正面から組み付いたセブンは、敵の丸太のように太い脚と脚の間に、自分の足を深く滑りこませたかと思うと、左足を絡ませ、小内刈り、より正確に言えば小外掛けを繰り返した！

右足を膝から救い上げられ、大きく後ろへ倒れこむキングジョー。

双方が雪辱を果たすために、両雄相打つ神戸港での第二ラウンドは、まだ始まったばかりであつた。

## ウルトラ警備隊に死ね 《後編》(X)

神戸の港を巨人たちが揺らす。

倒れこんだキングジョーのマウントをとろうとするが、すさまじい膂力によつて突き飛ばされてしまうセブン。

そして、後ろに転がって勢いを相殺しつつ、距離をとつたセブンは、目を疑う事になる。

完全に仰向けになった訳ではないとはいえ、なんとキングジョーが、ジェットすら吹かさず、そのまま起き上がってくるではないか！

これにはセブンも内心で舌打ちをした気分であった。おそろくなにか再調整を施したのであろう、さもなくば、海水の浮力を利用したのか。どちらにせよ、以前の戦いのように、転ばせたからといってそのまま大人しく帰ってくれる気はなさそうだ。

……だが、だからと言って、この戦い方を止めてやるつもりもない！

上段からのチョップで、後ろ方向に衝撃を加えると、それに反発するかのように胸を張ろうとするキングジョー。ところがセブンは待っていたと言わんばかりに左腕でその体を引き寄せると、腹に渾身の膝蹴りを叩き込む。セブンの引つ張る力に対して逆の

ベクトル、つまり背中方向へ重力を操った瞬間に、強力な押し込みを食らったキングジョーは再び倒れこみ、堤防の倉庫に座り込む形となる。

セブンは以前の戦いで、敵が攻撃に対して、反対向きの重力をぶつけて相殺しているのを、その手ごたえから感じていた。ならばそれを逆に利用し、振り子の原理を使う事で、この巨体に揺さぶりをかける事にしたのだ。

いつだったか、ツリガネとかいう巨大な金属の塊である楽器を、幼い僧侶だか戦士だかが、指一本で動かした、という地球の逸話を、ソガが語ってくれた気がする。セブンの脳裏では、その時の得意げな彼の顔が思い起こされていたのである。

子供の小さな力ですら、共振を利用すれば、重量物を揺さぶることが出来る。いわんやセブンの剛力ならば、たったの3プロセスでそれが可能だった。

ただひたすらに、上を、上を。

防衛センターの戦いでは、このロボットの懐に潜り込もうとした結果、逆にマウントをとられ、その重さを存分に武器にされてしまった。だが、同じ失敗を二度と繰り返さないために、今度の戦いでは、徹底的に上を取り返す事を、セブンは意識している。

ウエイト差ではどう足掻いたって勝てない以上、少しでも有利をとるために、普段は平均40m程度に留めている巨大化も、今回ばかりは、限界ギリギリの50m強まで上背を伸ばすことで、なんとか対抗しようとしていた。



敵軍にとって、あのロボットが車両なのか船舶に相当するのかは分からないが、関係ない。

こうなったら、船も戦車も、ひとひねりだッ！

とことんまでやってやるぞ！

「ダアア!!」

気炎を吐いて、一回り大きい長身で覆いかぶさるセブンの体を、しかして表情をまるく変える事無く、片手一本で吹っ飛ばすキングジョー。

大の字で海面に没する深紅のファイター。

いつもより大柄になったセブンすらをも、寄せ付けない強さ。

なんとというパワー！ 恐ろしい威力！

だが……間違いない。

弱くなっている！

身一つで、ロボットと格闘したセブンだからこそ、ひしひしと感じる敵の弱体化。

一度目の戦いするときよりも、感じる圧力が確実に減じていた。

やはり片足が不自由なためか、踏ん張りがきかず、その驚異的なパワーを、奴は十二分に発揮できないでいるのだ！

海中で倒れるセブンを、そのまま沈めてやろうと、猛然と追撃をかけたキングジョーを襲う爆発、爆発、爆発！

敵ともつれ合うセブンへの誤射を防ぐため、じつと息を潜めていた埠頭の軍艦たちは、二体の巨人同士が離れるこの瞬間を、虎視眈々と待っていたのである！

猛烈な炎と煙によつてキングジョーのセンサーが攪乱される。

この隙にセブンは水中から身を起こし、態勢を立て直すことが出来た。

しかし……

「構わんツ！ このまま正面にデストレイ一斉射ツ！」

「デユアツ!? オオツ！」

煙の向こうに薄つすらと見える陰に向けて、光線をめくら撃ちするキングジョー

サイズの小さな軍艦を、ロックオンせずに撃ち抜くのは困難だが、眼前で直立しているであろう同サイズの物体に対しては、もはやそのような精密射撃は必要ないのだ。

腰や肩に光線が命中し、肌を焼かれる感覚に苦悶の声を上げるセブン。

だが、こんな痛みがなんだというのか……？

彼らの味わつた痛みと恐怖に比べれば、どうという事はない！

つい先刻まで通信で戦況を聞いていたセブンは、知っている。この光線の威力も、本来のそれより随分と落ち込んでいるという事を。

開戦当初は、行く手を阻む軍艦の艦種や大小に関わらず、たった一発の射撃で尽く沈めて見せた破壊光線だったが、沖合での海軍との死闘が佳境に差し掛かった頃には、戦艦を撃破するのに三発も必要とするようになっていた。

時間稼ぎなどと、とんでもない！ 彼らの作戦は、そのたった一つしかない大切な命と引き換えで、着実に敵の力を削ぎ落しているじゃないかっ！

彼らがいなかったら、この三倍の威力の光線が、自分を焼いていたのかと考えると、セブンは背筋の凍る思いがした。

---

防衛センターで、今まさに、一人の女性科学者が、歓喜の声を上げる。

「できた……出来ました！ これで問題なく作動するはずですよ。ドクターー！」

「おお！ あの宇宙人の兵器を撃滅する武器が、ついに完成したのですね、博士！」

アンダーソンの精製した特殊な放射性物質を、ツチダ博士の設計した新型爆弾の弾頭へセットし、ついにライトンR30爆弾が誕生したのだ！

「はい、キリヤマ隊長。この弾丸は、弾頭から発生した放射能を、装甲表面へ照射するこ

とで、金属の剛性を無効化してしまいます。着弾の瞬間、あのロボットの体は、スズより脆く、なるのです」

「そうして、装甲を突破したあと、弾体後部に隠された新型爆薬が、遅延信管によつて爆発し、敵の最重要区画を滅茶滅茶に破壊します」

「よくもそんな威力の新兵器を、こんな短時間で……」

「弾丸そのものは、ドクターが、あらかじめ作つてくれてありましたから、ワタシは、弾頭に使う、ラドンの化合に、集中するだけでよかったです」

「いえ私だけでは、最後の最後で敵を突破する方法がわかりませんでした。アンダーソンさん、あなたの協力が無ければとても……」

ジェラルミンケースに収められた試作品を、大事そうに抱えるキリヤマ。

これで、みんなの命を救う事が出来る。

「それでは、行つてまいります！」

「……待つて下さい、キリヤマ隊長」

「アンダーソンさん、まだ何か……？」

「……どうか、ワタシも連れて行つてくさいませんか。あのロボットの……キングジョーの最期を見届ける、責任があります」

「……いいでしょう。では我々と共に！」

「ハイー！」

センターに横付けしたポインターと、マーヴェインのエージェントカーに、新兵器と共に、乗り込む一同。

グネグネとした六甲山の山道を駆け下りていく車列。

新爆弾を運ぶ緊張で、ガチガチに固まって安全運転する新人隊員に、もどかしく思いながらも、キリヤマが優しく諭す。

「キミ、急いで」

「は、ハッ！ では、失礼させていただきますッ！」

尊敬する隊長に、直接声をかけて貰った嬉しきで、半ば裏返った声の青年隊員がポタンを押すと、ポインターは車体下部からホバーを吹かせ、ふわりと空に舞い上がった。すかさずそれに続くマーヴェイン車。

ドロシーの願いを、目的の場所へ届けるために、銀の靴が、蒼い空を駆けていく。

セブンとキングジョーの激闘は、一進一退。

どうしてもセブンが、やや押され気味ではあるものの、原作よりは多少マシに推移している……ように見える。

「またセブンが離れたぞー！」

「撃てー！ 撃てー！」

本編時では弾き飛ばされた際の隙をカバーできず、キングジョーに馬乗りされていたが、今は防衛軍の援護射撃でセブンの姿を隠す事で、なんとかその事態だけは避けられている。

その分、破壊光線による被害が出てしまっているが……

「……だめだ！ 奴め、そろそろ煙幕があろうがなななな、気にせず撃ってくるようになってきたぞー！」

「やつぱり、あんなに大きな体を持つセブンの姿は、完全に隠せない……そして分離する気配も見せない！」

「それはそうだ、我々の前で分離したら、ハチの巢にされるのが、敵も分かっているんだ」  
石炭を乗せたはしけを、100万馬力で持ち上げたキングジョーは、それをまるで盾のように掲げて砲撃を防ぎながら、セブンに向かって突進する。

堅い船底で殴り飛ばされたセブンが膝をつき、そこへ目掛けてハンマーのように船を

振り下ろすキングジョー。

そうはさせじと、海軍のタイミングを合わせた集中砲火によって、先端が割れ砕け、リーチが短くなった得物が空を切る。

「新兵器は、まだ来ないのか！」

焦れる我々の耳に飛び込む、聞きなれたブレーキ音。

銀色の車体が、光を反射して、普段より一層輝いて見える。

おお、ポインターの到着だ！ 間に合ったか！

下車した隊長が、大事に抱えたアタツシケースを開き、新型爆弾ライトンR30を取り出した。

慎重なツチダ博士が、俺達に念を押してくる。

「この爆弾の効力は、はっきりいってまだ未知数だ。できるだけ至近距離で撃ってください」

「了解！」

受け取った爆弾を、コンバットジープに懸架されたバスーカに込める。両手にズシリと、弾丸が持つ重量以上の重みを感じた。

「……装填完了」

「よし、弾丸はこれ一発だけだ。撃ち損じたらおしまいだぞ！」

「……わかっていきます。俺に……俺に撃たせてください」

砲撃手として志願する臆病者の顔を、真正面から見据える隊長。

彼の使命感に満ちた瞳を、まんじりともせずに見つめ返す。

「……行け！」

隊長は、射手を代われとは、言わなかった。

「やはり、マニピュレーターで武器を保持する戦術は、近接戦闘において効果的なようですね」

「野蛮人の戦い方も、たまには参考になるではないか……だが、小舟ではだめだ」

「リーチが増大しても、武器そのものの耐久性がキングジョーの腕部以下では……殴った方が早いですか？」

「いや、丁度良いものが、浮かんでいるではないか。次は……アレだ」

キングジョーはいったん、深紅の巨人から興味を失ったかのように、ぐるりと向きを変えた。



セブンは少しだけ戸惑ったが、敵が足元の駆逐艦に手を伸ばしたのを見て、慌てて割って入った。

艦橋を掴む左手へ向けて、何度もチョップを連打し、全体重をかけ、艦が持ち上がるのをなんとか押しとどめようとするが……

「そおれ、今だ振り回せ！ ペダンエンジン全開！」

キングジョーは自分の体自体を回転軸とし、全身の駆動系をフルパワーで稼働させた。すさまじい馬力に遠心力を追加して、組み付くセブンを振り切ったあと、態勢を崩したセブン目掛けて、横合いからバットのように駆逐艦をフルスイング！

さしものセブンも強烈な衝撃に、もんどりうってダウンし、振り回された艦からは、無数の海兵が悲鳴を上げながら、ばらばらと空中へ投げ出されていく。

それだけでも目を覆いたくなる惨状だったが、艦内はもつと悲惨であった。

重要区画で立っていた船員たちは、いきなりのことに備える間もなく、セブンと激突した際の衝撃で、軒並み壁面に叩きつけられ、ただの真つ赤なシミになってしまった。

いや、その方が幸せだったかもしれない。その地獄のような光景を見ずにすんだのだから。座っていたか、たまたま何かに捕まる事が出来た者は、例え即死は免れたとしても、もはや虫の息でしかない。

そんな、警報ランプの点滅する艦橋で、僅かに呻く者がいた。

「かん……ちよう……！」

駆逐艦ゆきかぜの副長である。

敬愛する上官は、先程咄嗟に自分を庇って、操舵輪へ頭から突っ込んでいった。

艦長がクツシヨンになったお陰で、艦橋でただ一人、彼だけは、即死することを免れたのだ。

もし息子が居れば、お前のような男に育てたかつたと、身寄りもおらず、ただ尖っていただけの未熟な自分を、時に厳しくも、確かな優しきで、ここまで引つ張ってくれた艦長。

こんど娘が20歳になる、彼女が生まれたときに酒を買ったが、娘も妻も下戸なのだと、だから一緒に飲んでくれと、気恥ずかしそうに笑っていたじゃありませんか。

もう一人の父親とも言うべき彼の瞳は、今やしとどに流れる血に染まり、ただの曇つたルビーのように、虚ろな光を投げ返すのみ。

胸の奥で、めらめらと憎悪の炎が燃え上がり、まだ僅かに動く首を回すと、窓から、あの機械仕掛けの悪魔と目が合ってしまった。

奴の無機質で冷たい顔は、俺から愛してやまない父を奪っておきながら、まったく感情らしい感情を、ひとつも見せやしない。

何の感慨もなく、ただ平然とそこに突っ立っているだけだ。

「お前たち、さえ……こな……ければ……！」

横倒しになった艦からは、波間に光を反射し、碧く煌めく海面が見えた。

そうか、奴は今この船を持ち上げているのか。

ということは……俺達の真下に、ウルトラセブンがいるのだろう。

あの冷血な怪物はきつと、この船の硬い艦底で、これから彼を、散々に打ち据えてしまうつもりなのだ。

俺達の船で？ 俺達の魂で……？

そんなこと……そんな屈辱的なことが、許されるのか!?

この神戸を守る為に、共に戦ってくれた戦友に対して、そのような仕打ちの片棒を担がされるなんて……断じてあってはならない……!

そんなことの為に、俺達の……艦長の誇りを……使わせてなるものかッ!

「……思い通りには……させんツ!!」

赤く染まる視界の中で青年は、嚴重に保護されたレバーに向かって、ボロボロの右腕を伸ばした。

## ウルトラ警備隊に死ね 《後編》(XI)

その時、二体の巨人は、何が起きたか咄嗟に理解できなかった。

キングジョーの持ち上げていた軍艦が、突如として、中心部から引き裂けるように爆散したからだ。

今まさにセブン目掛けて振り下ろそうと、高々と掲げていた鈍器が、至近距離でいきなり勝手に大爆発してしまったキングジョーとしては、たまったものではない。例によって、その無敵の装甲は傷ひとつ付かなかつたが、流石に軍艦一つまるまる吹き飛ばす爆発の持つエネルギーは、片足に故障を抱えた状態で踏ん張り切れるものでは無かつた。

そのまま仰向けで、海面へと投げ出される黄金の肉体。巨大な重量物の没した海面は、真つ白な飛沫を激しく噴き上げ、体積によってかき分けられた海水が、小規模な津波すら引き起こす。

その様子を、セブンは半ば呆然に近い様子で眺めていた。

火災が起きていた訳でもなく、味方に砲撃されたわけでもない。直前まで、あの駆逐艦に爆発する兆しは見られなかった。衝突のショックでエンジンがイカレてしまった

としても、あんな吹き飛び方はしないはず。……間違いない、あの艦は自爆したのだ。

自爆したという事は、まだあの駆逐艦の中に無事な人間がいたという事であり、その誰かが、そう決断したという事。もはや瀕死の重傷だっただろうが、確かに生きていたのだ！ ……なぜ？ どうしてあのタイミングで、そんな選択が出来る？

もしやそれは………ぼくを、助ける為か？

船を吹き飛ばした乗組員の思惑を、そう悟ったセブンは、愕然とした。

他者の為に命すらも投げ打つ事が出来る、美しい自己犠牲の精神。この星で最初に人間に魅せられた、きらめく宇宙の真理ではあったものの、よもやその対象に自分になつてしまふなんて……。ほんの少しの怪我や病気で、すぐに死んでしまふ人間の命はあまりに儂い。そしてそんな彼らの命は、たった一つしかないのだ。その人間が、ぼくを！ 悲しさに胸が張り裂けそうになる。

銀河に住む数多の生命は、こんなにも他人を思いやれる美しい心を持つのに………どうして………どうして、彼らが死ななくてはならない？ どうしてこの宇宙からは………争いがなくならないんだ!!

セブンの真つ赤な拳が、怒りと、悔しきで、固く強く、握りしめられる。

こんなにも、敵が憎いと思つたのは初めてだ。彼らだって、本気でそう望めば、平和を模索する事もできたろうに！ 僕が……僕が、彼らの仲を、ちゃんと取り持つてやれ

なかつたばかりに！

だがその時、自らの不甲斐なさと、ともすれば激しい憎悪に飲み込まれそうだったセブンの心に、清流のごとく微かに流れ込んでくるものがある。

彼の超人的な聴力が捉えたそれは、自分を呼ぶ、誰かの声。

呼ばれるままに顔を向けると、そこに見えるのは、津波をかき分け、飛沫をあげて、恐れず堤防を突き進む、コンバットジープの姿。そしてそれに乗っているのは……彼の大好きな、ウルトラ警備隊の仲間達！

彼らは、巨大な敵に向けて、果敢に接近していくジープの上で、口々に何かを叫んでいる。

この距離と轟音では、流石にセブンの耳でも詳しく聞き取れないが……彼らが何の策もなく、敵に突撃していくはずがない。聞かなくなつて分かる。きつと新兵器が完成したのだ！ あの大筒の中に、人類の叡智の結晶が装填されているに違いない！

だったら、自分がやるべき事は、ひとつ！

セブンは、気合いを入れると、まだ海中でもがく敵のロボットを強引に引き起こし、後ろから羽交い締めにした。一度目の戦いではきつと、重たいキングジョーを持ち上げる事なんてできなかつただろうが、海水の浮力と……そして何より、セブンの発する、凄まじい怒りのエネルギーが、普段の何倍もの力を、彼に与えていた！

ジープで行けるギリギリの近くまで接近した警備隊員達は、セブンがこちらに向けてキングジョーを固定してくれるのを見て、攻撃の瞬間は今しかない、奮起する。

だが、たった一発しかない弾丸で、最大の効果を発揮しなくてはならない。そして、敵の設計図は、例えばアマギの脳にも、入ってはいないのだ。いったいどこを狙えばいいのか？ 本来であれば、射手は考えてしまう場面。

しかし今、スコープ越しにロボットの姿を捉えた狙撃手の目に、迷いは一切無かった。なぜなら彼には、偉大な先達がいたからだ。たった一度きりしかない攻撃に、お手下があるなんて、なんと贅沢な事かと、自分とまったく同じ顔の、だが中身はまるきり正反対の英雄に、誰にも聞こえない小さな声で呟くソガ。

「……ありがとう、ソガ隊員」

狙うのは腹部と胸部のパーツの接合部！ 奴の上半身と下半身を繋ぐ、正中線のド真ん中！

「撃てー！」

ハンドルを握るフルハシの号令で、アマギが支えるバズーカの引き金を引くソガ。

恐れ知らずの警備隊のジープから、怒れるセブンに締め上げられるキングジョーに向けて、人類の叡智が結集した、退魔のステイレットが鋭く飛んでいく。

金色に輝く腹に着弾したライトンR30爆弾は、目覚ましい効果を発揮した。弾頭の

先端で漏斗状に成型された放射性物質は、ペダニウム合金の弱点である放射線を、錐のように発生させながら、グニャグニャになった金属の中を突き進む。そして、針の先端が、装甲内部に達した時、その腹に隠されていた新型爆薬が、まるで筋肉注射のように押し込まれた。

そうしてコントロールルームに飛び込んだ薬剤は、しかしてほんの数量で致死に至る、紛れもない劇薬なのである！

事態を理解できず呆気にとられる乗組員を、跡形も残さず消し飛ばし、機体各部に向けて延ばされた、動力パイプを伝って、その爆発の衝撃を余すところなく全身まで行き渡らせた。

血管が一気に沸騰し、ビクンと痙攣するキングジョー。

全ての機能と、動作プログラムが強制的にシャットダウンし、何の入力もされていない最もニュートラルな状態、すなわち建造時の姿勢である、気を付けの姿勢をとったキングジョーは、両手両足を体にぴったりとくっつけたまま、後ろの海へと倒れこんだ！各部の装甲から火花を吹き出し、大爆発を起こす超弩級戦艦。

歓喜の声に包まれ、皆が満面の笑みを浮かべて、隣の者と顔を見合わせた。

だが、そんな彼らの前に、ふわりと浮かび上がる円盤の影。

「駄目だ！ 宇宙船団の攻撃は一時中止しよう！」



キングジョーから脱出するペダン円盤。内部に丸々収められていた宇宙船は、キングジョーとのやりとりは通信のみで、動力パイプとは接合されず、ペダニウム装甲で覆われていたために、なんとか無事だったのだ。

このまま彼らを逃がしては、今回の教訓から、今度はキングジョーにもっと強力な改良を加えて、再び地球へやってくるだろう。

そうなれば、今度は膝を壊すどころか、新兵器すら効かなくなるかもしれない。彼らに二度と、この地球の大地を踏ませてなるものか！

そう決意したセブンは、両の腕を、胸の前でピッタリとL字に構え、逃げる円盤に狙いをつけた。

正面戦闘用に作られた、ビームを無効化してしまう無敵の要塞であるキングジョーには、恐らく効かなかったかもしれないが、長距離飛行やワープ航法を組み込まねばならない宇宙船ならばあるいは……やってみるしかない！

ワイドショット。それは、セブンが持つ技の中で最大威力、真正正銘の必殺技。

普段は体内に蓄えた膨大な太陽エネルギーを、額のビームランプでいったんエネルギー粒子へ変換し、あらゆる形状や威力に調整して、効率よく消費しているが、この技を撃つのに、そんなまどろっこしい事は一切ない。

ただ、幅の広い蛇口から、これまた凄まじい勢いの水圧で、プールの水を垂れ流すが

ごとく、太陽エネルギーを無変換で、そのまま丸ごと叩きつける！

恒星の持つ光と熱を、直接味わうなど、無事で済むはずがない。ただ単純であるがゆえに、強い。太陽に突っ込んで、生きていられる生物などいるはずがないからだ。

その代償として、エネルギーの消耗度合いも半端でないが、そんな事を気にする余裕も手心も、今のセブンには一切なかった。

深紅に輝くセブンの腕から発射された極太の光線が、円盤全体を包み込み、反重力ノズルやイオンジェネレーターを焼き切っていく。

「……ああっ！」

それを岸辺で見ていたドロシーが、小さな声をあげて、思わず駆け寄ろうとするが、横から差し出されたマーヴィンの太い腕が、彼女を制す。

ゆっくりとかぶりを振るエージェントの様子から、もはやセブンを止められない……いや止めてはならないのだ、と悟るドロシー。

彼女は青い瞳から一粒だけ、ガラスのように美しい涙を流すと、白煙を上げてゆっくり海へ墜落していく円盤の姿を、一度も目をそらさずに脳裏へと焼き付けた。彼女の記憶力は、その光景を一生忘れないだろう。

墜落先のキングジョーと共に、大爆発を起こして海中へ没するペダン星人の宇宙船。

歓喜に震える神戸の港で、たったひとり、小さく呟いた。

「さようなら、もう一人のワタシ……」

夕暮れに紅く染まる神戸港。それは血の色にも似た暖かな輝きで、戦士達の帰還を出迎えた。

我々は、この美しい街を、人々の営みを、ついに守り抜いたのだ。

キリヤマ隊長の腕で二回のコール音を鳴らすビデオシーバー。

画面の向こうのマナベ参謀に、やり遂げた漢の顔で、隊長はおだやかに戦果を告げる。「はい、こちらキリヤマ……。参謀、ペダン星人のスーパーロボットは、ついに撃滅しました」

「ご苦労。なお、宇宙ステーションから入電があり、敵の宇宙船団は、途中から引き返したようだ。多分、諸君の活躍に恐れをなしたのだろう」

約束された地球の平和に、ほっと胸を撫でおろし、笑いあう一同。  
そこへ、決然としたドロシーが、反省を述べる。

「今度のペダン星の事件は、ワタシたち地球も責任があります。これから観測ロケットを打ち上げるときには、充分注意しなければ……」

「うむ……」

ドロシーの語る教訓に、笑顔でうなづくキリヤマ隊長。

彼らの耳に、こちらへよびかける、大声が聞こえた。

「おおいー！ おおいー！」

一同が振り向くと、夕陽の中を、手を振りながら駆け寄る男の影……ダンだ！

愛する仲間達の元へと帰ってくる彼の笑顔は、まるでセブンのように赤く煌めいていた。

〈終劇〉

## 無闇に光る目

ある日、警備隊の食堂にて

「……………どうしたんです、先輩？ 今日はいくらも匙の進みが遅いじゃないですか。まだおかわり二杯目なんて」

「うん……………」

キングジョーとの激闘を終えて、ようやく平常運転に戻りつつある警備隊基地。

……………え？ アンノン？

ああ、彼にはなんとか誤解を解いて帰って貰ったよ。

俺が必死に土下座しても半信半疑だったのに、セブンの取り成しですんなり帰っていったのは、ちよつとむかついたが……………なんか原作以上に、セブンの説得に熱が入ったのは、あながち気のせいではないだろう。

岩石で構成された体を持つアンノンは、文字通り巖のごとく頑迷で頭が固いが、ペダン星人と違って、虎眼石のように高潔だ。セブンの言葉を信じて、筋肉代わりの硫黄ゴムほどじゃあないが、それなりに柔軟な対応を見せてくれた。

sondemotter 束の間の平和を謳歌する今日は、フルハシ隊員と昼食のタイミングが一

緒だったの、そのまま同じテーブルだ。

でも、彼の様子がおかしい……いつもはアツと言う間に、カレーを3杯ペロリと平らげてしまうのに……

まさか……また宇宙人と入れ替わってる!?

……いや、ちゃんと瞬きしてるな。

じゃあ、この前の輸送任務失敗を気にして……いや、蜂を操ってた黒い奴を倒して、隊長から褒められてたはずだ。

だったら……なんだ?

「……うん、やつぱりお前だ。お前しかいない。なあソガ、俺の悩みというやつを、一つ聞いちゃくれないか」

「ほう、悩み。……ま、ええでしょう。なにせ、年中悩みの無さそうな能天気、俺の唯一の取り柄らしいんでね」

「古い話を蒸し返すなよ。それでだな……ソガ、お前……超能力って、信じるか?」  
「……ハア?」

「なあ頼むよ、こっちは真剣なんだ。こんな話、アマギは取り合っちゃくれないし、アン又に関われて、精神病棟にぶち込まれちゃかなわん! その点お前は、なんだか怪しげな魔術だか占いだかに、ドツプリはまっつたじゃないか?」

「ああ……ね」

確かにソガ隊員は、原作でも星占術だの迷信だのをよく気にする男だ。

もちろんこの世界の私室にも、オカルトグッズがいっぱいあって、オレも仲間の説得が面倒な時は、これ幸いと利用させて貰っているが……

「真面目な悩みなら、隊長に相談したらいいじゃないですか」

「お前、正気か？ 万一知られでもしたら『栄光あるウルトラ警備隊員が、オカルトなどと、不拔けた事を抜かすんじゃない！』と、こうだ！ お前みたいにド突かれるのは御免だぜ」

いや、意外とあの人、その手の話大好物なんだけどな……まあしようが無い。鬼の隊長が、占い信じてるなんて、それこそ信じられんわな。

可哀想だし、付き合っただけじゃあないか。

「ええもちろん。といいますかね、我々が日夜相手にしてるのは何ですか？ エイリアンですよ、宇宙人！ 一昔前じゃUFOなんて、超能力と同じオカルト扱いだったんですから、なんで超能力だけは否定しなきゃならんのか？ これがわからない」

「いやあ、宇宙人はいいんだよ。俺達をよく分からない科学だか、生態だかをしてるんだからさ。でもな？ 人間の、同じ体のつくりをした奴が、やれサイコキネシスだテレパシーだ！ どうやって出すんだ、そんなもん」

「ははあ」

そういつて、顔の目の前にスプーンをもつて行き……ふんつ、と寄り目で睨みつけては、おどけて見せる。

なるほど、言いたいことは分かる。じゃあアマギですら納得できるような、科学的こじつけを聞かせてやろうじゃないか！

「サイコキネシス、ありやあ、まやかしです。手品のトリックみたいなもんなんで、この際省きますが……予知夢やサイコメトリー。これは強ち不可能じゃない」

「なにい？」

「人間の脳っていうのはね、普段はほんの数%しか使用していないんです。でもね、たまにその活用範囲が凄く高い奴が居る。アマギを見てご覧なさいよ、あれが俺達と同じ脳味噌を同じ分だけ使つてるように見えますか？」

「いや……確かにあれは違う人間だ」

「そしてね先輩、デジャヴつて聞いた事あります？ ふとした拍子に、『あ、この場面見たことあるぞ』つてなるアレ」

「ああ！ それなら俺もわかるぞ！ でもそんなのは気のせいさ」

「ところがそうじゃない。あれはね、ちゃんと見たことがあるんです。……過去にね」

「未来の事を、どうして昨日見れるんだい」



「先輩、この食堂を見てください」

そういつて、防衛軍の食堂を見渡す俺達。

たくさんさんの隊員達が食事をしている。

「今日、ここで誰と誰が、何を食べていたか。明日全部覚えてられますか？」

「無茶言うなよ。俺はな、明日の献立表すら覚えられないんだぞ」

「でもね！ 覚えてるんですねコレが！ 俺達は忘れてしまったと思いつ込んでいるが、脳にはちゃんど記憶されているんです。ただ、それを引き出す事ができない！ これが上手いのが、ドロシーアンダーソンのような、瞬間記憶保持者ですよ」

「ははあ、なるほど」

「瞬間記憶は、超能力じゃ、ありませんか？」

「……お前の言いたい事が、読めてきたぜ。結局のところ、人間の能力の延長線上だつてわけか。でもそれで、どうして未来がわかる？」

「ここからですよ……あすこに、ウエノ隊員とヨシダ隊員がいるでしょう？」

少し離れた席で、長距離通信員のヨシダと、予備通信員兼警邏員のウエノが、面を突き合わせて一心不乱に井を掻き込んでいる。同期の彼らは、職務的にたまたま昼休憩のシフトが同じなのだ。

「ああ、いるな。今日も仲良く食ってるが……ありやあ、親子井か？」

「では当ててあげましょう……明日の彼らは天井を食う！」

「なんでえ？」

「超能力的に言うのと、俺の味噌汁がそう予言したからです。うーん、この豆腐とワカメの相が……種明かしをすると、彼らは毎週同じサイクルで井を食うからです。親子井の次にカツ丼を食うと、卵綴じが被る」

「お前そりゃあ、推理と言うのであつて予言じゃ……ああ！」

「そう！　意識か無意識か、結局はその違いなんです。昨日より前の記憶が、ふとした拍子に浮かんできて、それを材料に、脳が勝手にこれからの事を推理する。でも理由は分からない。じゃあそうか、これが予知夢という奴か。いかがです？　これならアマギも首を縦に振るはずですよ」

俺がでつち上げを堂々と言いつつ、フルハシは得心いった顔で何度も頷く。

「おおそうか！　じゃあ……お前がいつも未来予知を使つてる訳じゃあ無いんだな！」  
「ブフォツ!!」

「うわっ！　汚えなあ……」

「ゲホツゲホツ……人が茶を飲んでる時に、変な事いわんで下さい！」

「確かに未来予知ができる訳じゃあ、なさそうだ……」

アンタ、そんなこと思つてたんなら、本人に聞くなよ！

「だったら本命だ……実はな、お前ともう一人……超能力者に疑わしい男がいる」

「……ああ、ダンか」

「やつぱり！ お前もそう思ってたか！」

まあ、あからさまに怪しいもんなアイツ……やつぱりフルハシにすら疑問視されてたのか……良かった。もしもの為に理論武装しといて。さて……

「実はな……奴がおかしな事を言い出す前に、それが分かる時がある……ダンの目が、キラリつと光るんだ！」

「ンブフオツ!!」

「おい！ バツチイなあ……」

「エホツエホツ！ 人がねえ！ 味噌汁飲んでる時にねえっ！ あかん、豆腐が鼻に入った……」

いやいや、確かにダンが人間態で超能力使う時、目が光ったりする描写があるけど……

あれ見えてんのかよっ！ 聞いてねえよ！

視聴者に分かりやすくするためじゃなかったのか!?

「最初は、奴の瞳が青く見えたような気がして、アラ？ 光の加減かしら？ と思っただがなあ……最近確信したよ。チラつと星が瞬くみたいに光が反射するんだ。すると

向こうに何か見える、変な音がするといいやがる……透視でも使ってるんじゃないかね」

「あー、可視領域と可聴領域って知ってます？」

「カシ……課長？」

「人間が見たり聞いたりできる、光や音の範囲の事です。赤外線や紫外線ってのは、人間の目に見えないが、ヒラヒラ飛んでるチョウチョなんかは、逆にこの紫外線しか見えない。我々とは、全く違う世界が見えてるんです」

「そうなのかい？」

「そして音、モスキート音ってあるでしょう？ 蚊の羽音みたいな高い音の周波数は、歳をとるとどんどん聞こえなくなってくる……」

「そんな話、聞いた事無かったぜ……」

「ところがね、たまーにこれが感じられる人間がいるらしいんですね！」

「そんなの、眉唾ものじゃないか？」

「でも、逆を考えてみて下さい。世の中には色が見えない人間もいる。現にウエノはあんなに優秀なのに、緑と赤のランプが咄嗟に見分けられなくて、パイロット試験に落ちた。でも、彼と我々の世界がどう違うのか、言葉で説明できますか？」

「ううん……」

「感じる世界が違うと言うことは、それが見えない者からは理解できない。それが持つ者と持たざる者の差なんですよ」

「つまりダンの奴あ、人よりちよびツと目と耳がいいだけって事か？」

「かれの光彩が突然変異でもしてるんじゃないですか？ のどちんこ二つに裂けてる奴いるでしょ。あれとおんなじ」

「へえ、珍しい奴がいたもんだ！」

「なにを他人事みたいに笑ってるんです。俺から言わせればね、フルハシ先輩の方がずっと超人ですよ」

「俺え？」

自分を指さし素っ頓狂な声を上げるフルハシ。

「ホークであれだけグルグル回って、ピンピンしてるのは、明らかに人間の限界を超えます。いくらハーネスが付いてるからって、隣で立ってる我々の身にもなってくださいよ！ 何回、視界が真っ黒になったか！」

「分かった分かった、次からは気をつけるよ……」

「電撃を浴びても生きてるようなアンドロイドの言うことは、信じられませんね！」

「……へへへ、俺は無敵のアンドロイドか、いいね、気にいったぞ！」

「いや別に褒めたわけじゃ……」

アンタは念力なしでも、指一本でスプーン曲げくらい簡単にできるだろうが。そつちの肉体のほうが、よっぽど超能力だつての。

しかし、フルハシは、嬉し気な顔を再び引き締めると、疑問点を質問する

「……で、その説の化学的根拠は、どこにいったら読めるんだい」

「……先輩、そうやってすぐに裏付けでオカルトを否定しようつてのは、科学教徒の悪いところですよ」

「科学教だとお？」

「そうです、科学を信奉するのでもいいですけどもね、あんまり傾倒しすぎると、狂信者のソレとおなじです。物理的にありえない事は、全部まやかしだ！ と決めつけるのと、神の教えに載っていない事はすべて悪魔のささやきだ！ と言ひ張るのと、どう違うつていふんです？」

「時々、お前はわけのわからん事をのたまひ出すからなあ……難しくつて、俺にやあサツパリだ」

「簡単に言うとな、科学で解明できない事柄は、そこに存在しないんじゃないやなくて、確かにそこにあるんだけども、まだ人間にはその世界が見えるくらいまで、発達してないだけかも知れん、という事です。超能力つてのはね、なにも人知を超えた能力だけじゃなくて、超スゴイ能力の略かもしれないんです」

「はあ……なるほどねえー」

その顔、絶対分かってないだろ。

……でも安心してくれ、オレも分かってねえからさ。

フルハシを煙に巻けたみたいなので、すっかり冷めてしまった食事を再開する。

「そもそも率いてるのが精神的超人の隊長だし、アンヌはなんでも癒してしまおうし、アマギは頭アマギだし、俺はこんなにも眉目秀丽！ ウルトラ警備隊に、超能力者じゃない人なんて一人もいませんよ」

「まったくくだ！ 言われてみりゃあ、お前みてえな馬鹿が、どうして入隊できたか分からんくらいの超能力集団だ！」

「先輩にだけは、言われたくないんですけどもね」

「……ま、いいや！ いくらダンがおかしな事を言おうが、とにかくウルトラ警備隊に、宇宙人が紛れてるわけじゃないって分かって一安心だ！」

「ングウ!？」

しまった！ 息が詰まるッ！

「……ゴクン！ アッアッアッアッアッアッ、く!?」

「おい！ なんだよいきなり、うるせえな！」

あんまりにヤバイ事を大声で言うもんだから、慌てて丸呑みしちゃったじゃないか！

フライ定食のメインを、楽しみに最後までとっておいたんだぞ！

それを一つも噛まないで……のどごしで味わうものじゃねえんだよ！

「こつちのセリフだ！ 返せよ！ 俺のクリームコロッケ！」

「なんのことだよ、言いがかりも大概にしやがれ！」

「へえ、そんな事言っついていいんですか……？ 催眠にかけてやるぞ？」

「な、なんだよ……出来るもんならやって見ろ！」

「あなたはだんだん、俺に昼飯代を奢りたくなーる……奢りたくなーる……」

「……なる訳ねえだろ、馬鹿」

「効かなかったか……」

「ちよつとお二人さん、食べながら騒ぐと、お行儀が悪いですよ」

お盆にハヤシライスに乗せた好青年が、苦笑しながらそう注意してきた。

「オッ！ 来やがったな、宇宙人！」

「えッ!?!」

フルハシの指摘に、驚愕の表情で固まるダン。

「……どうして、それを……!?!」

時間が消され、俺とフルハシはゆっ……くりと顔を見合わせた。

「ハッハッハッハッハ!!」



「なにを笑っているんです!？」

「いやあ、やるなあ! ダン、どうした? 今日はえらくノリがいいじゃねえか!」

「今な、ウルトラ警備隊はもはや超能力者集団だという話をしていたのさ」

「なんだ、そういうこと……良かった」

ほつとした顔で胸を撫でおろしたダンが、フルハシの隣に座る。

「そういうこと! ダン、お前が宇宙人だとすると、さしずめソガは未来人で、俺は不死身の改造人間だな! へっへっへ!」

「ハ、ハハ……」

フルハシの冗談に、苦笑いを返すしかない二人。

「そうだよ、この中じゃあ、この人が一番純粋な超能力者に近いじゃん。げに恐ろしきは野生のカンよ。」

「それでさ、俺の催眠術を先輩に仕掛けてるんだが、一向に効きやしない」

「へん、俺様の肉体に、お前のへ口へ口催眠が効くかよ」

「じゃあぼくが、本当の超能力というのをお見せしましょう」

「いやそれはマズイ! やめろダン! 念力の無駄遣いだぞ!」

「フルハシ隊員は、これから僕のパトロールを交代したくなりますよ」

「そんなわけねえだろう」

「本当に？ それはそうとフルハシ隊員……カレー、もう一杯いかがですか？ 奢りますよ？」

「んっ!? ウムムム……」

「……しかも、カツまで付きます」

「う、うグググ……アーしまったー！ 今更暗示が効いて来やがったーッ！ 俺が、こんな催眠術に負けるわけがっ……ワタシハ、ダンノ、パトロールヲ、コウタイシマス」

「ハハハハハハ！」

「いやー、ダンには敵わないな、流石は本場の宇宙人だ。ハハハ！」

「ええ、そうでしょう！ ハハハハハ！ ……え？」

因みに次の日、ウエノとヨシダは、ちらし寿司をかつ食らっていた。

明日はひな祭りだったのだ。

## マッハセブン!セブン!セブン! (I)

「いいか、次郎君の救出は、1分の無駄も許されない。だからまず、地底1000mまでしやにむに潜る! あとは、平行移動しながら事故現場に接近する」

「ハイ!」

地下1000mの坑内に、一人の若者が生き埋めになった。だが、さらに落盤の恐れがあるため現場に近づくことすらできず、事態はまったく絶望視された。そこで炭鉱側では、落盤事故の原因に不審な点があることなどからウルトラ警備隊に連絡。生き埋めになった次郎の救出と事故の調査を依頼した。知らせを受けたウルトラ警備隊では、直ちにキリヤマ隊長以下、隊員たちが現場に急行、事故の究明にあたったのである。

炭鉱事務所前の広場に駐機された、巨大なマグマライザーを背に、キリヤマ隊長の訓示を受ける警備隊のメンバー。

「それともうひとつ大事なことは、謎の地震源を探ることだ。地底はいわば未知の世界だ。何が潜んでいるかわからん。十分注意して行動してくれ……行けっ!」

「ハイ!」

指示を受け、マグマライザーに乗り込む、ダン、アマギ、アンヌ、そして俺の4人。

落盤事故なんだからと、最初っから運んできておいて良かった。

今回は巨大怪獣戦もないもんだから、フルハシ以外の全員で、大型輸送機に載って来たのさ。

俺達が生きてから、もっかいマグマライザーを要請するなんて、時間の無駄だからな。

「マグマライザー、スタンバイOK」

「よし、発進！」

エンジンの重々しい響きと共に、ゆっくりと動き出す頼もしい巨体。

さあ、地球の果てまでアクセル踏んで、若い命へGO!GO!GO!

「ジェットドリル、超振動確認！」

「削岩開始！」

超振動波を利用したジェットドリルが、土をどんどん掘り返していく。

硬い岩盤地層に到達したら、削岩レーザーの出番だ。

ブラックボディのマグマ号、みんな見てくれ底力ってな!

「しかし今回の事件に、二号機の建造が間に合って良かったよ」

「二号機は、お前が派手にぶっ壊してしまっただけだから。車軸を丸々交換する手間を考えたら、造りかけのもう一台を完成させた方が、手っ取り早いくらいさ」

「もともとこいつが量産予定で、助かったというわけか」

「そりゃあそうですよ。なにせあのキングジョオを、たった一台で引き留めたんですからね、防衛軍もマグマライザーの性能に熱を上げるはずです。追加の予算が下りたのも、ソガ隊員のおかげですから、トントンでしょう」

「こいつの助けになれたってんなら、俺も怖い目に遭った甲斐があるぜ」

「ソガ隊員は本当にマグマが好きね」

「俺とこいつは、既に一度、一蓮托生の仲だからな。立派な相棒だよ」

「生みの親は俺だけだな」

「だからアマギにも感謝してるって! なにせ、我々の命の恩人だからな!」

「がりがりと地底を掘り進んで、どんどん地球の中心へ進んでいくマグマライザー。」

「深度が深くなるにつれて、機体へかかる圧力も増していくが、まるでびくともしない頑強さ。」

「なかなかいい調子だ。」

「深度600m。進路に異常ありませんか?」

「進路に異常なし」

「了解……前方、花崗岩地帯」

「前方障害爆破!」

地上で地底ソナーを確認するキリヤマ隊長の誘導で、軌道を修正しながら、硬い岩盤はレーザー砲で破壊して、スピードを緩めることなく、順調に掘進む。

マグマライザーが潜って行く先では、一人の青年が、籠の中のハツカネズミを気にかけていた。

いつの間にか漏れ出た地下水が、ネズミの籠に垂れており、水滴に打たれたチュウ吉が、その冷たさに悲鳴を上げたからだ。

「炭鉱の中で溺死しちゃあ、つまらねえもんなあ……」

赤い籠をそつと移動してやる青年の名は、薩摩次郎。

落盤事故の際、本来は逃げられたはずの所を、ペットのチュウ吉が置き去りになっているのを見捨てられず、崩れた坑道にたつた一人取り残されてしまっていた。

ペットとはいえ、ネズミ一匹のために、大事な命を危険にさらすなんて、人は彼を大馬鹿者と評するだろう。

でもそんな事は次郎にとってちつとも関係ない。ネズミだろうが人間だろうが、この地球で生きてる大切な命に違いはないじゃないか。

彼は、呆れるほどに純粹で、渓谷の様に深い博愛精神と、山脈のように気高い自己犠牲を秘めていた。

だからこそ、地球は救われる事になったのだ。

「俺はミラクルマンだ。そう簡単にはくたばらんぞ……なあ、チュウ吉」

そうカラ元気で笑いかける青年の顔は、なんとモロボシ・ダンと瓜二つではないか！  
何を隠そう、この薩摩次郎青年こそ、ウルトラセブンが地球にやってきて初めて出会った地球人なのだ！

鉢山仲間のミズキと二人で登山に行った際、突然の地震いで、滑落した次郎。

彼の腰は、上に行くミズキとザイルで繋がっており、ミズキはなんとかそれを引っ張り上げようとしたが、収まらぬ地震でアンカーも抜けてしまい、このままでは次郎だけでなく、彼まで道連れになってしまう。

そこで次郎は迷いなく自分のザイルを切り、200mの谷底へ落ちる事を選択した。

そのとき現場に居合わせたセブンが助けなければ、確実に死んでいただろう。

彼の勇敢な行動と精神に深く感銘を受けたセブンは、次郎の姿と魂をモデルにして、モロボシ・ダンという地球人態を手に入れたのである。

この事故から生還を果たした次郎は、気絶していた本人も含めて、セブンの活躍など預かり知らなかった為に、仲間内では、不死身のミラクルマンと渾名されている。

彼がネズミの為に命を懸けるような男でなければ、万単位の寿命を持つM78星雲人から見て、換算20日程度も生きられぬような小さな地球人の為に、セブンが体を張るような事も無かったはずだ。

彼を笑う事は、セブンを笑うも同じ。

だからこそ、たった一人の大馬鹿者の為に、鉱山の仲間と、ウルトラ警備隊が総力を挙げて救出作戦を行う事も、何一つ間違つた行為ではないのである！

命に貴賤など有りはしない！

徐々に濃度を上げる火山ガスに目が霞んでくる次郎。

地下水で目を清め、なんとか視界を確保する。

「くそお、見えねえよ……！ 助けてくれるなら、早いところ頼むぜ……」

苦し気に呻く次郎の声は、マグマライザーで不安げに眉を寄せるダンの耳にも、まだ届かない。

「深度1000m」

「よし、水平移動。北西15度に進路」

「了解」

誘導に従つて北西に進路をとり、しばらく進むと、ぽつかりと開いた地底空間に出たマグマライザー。

「火山帯の風穴じゃないのか？ アンヌ、進路は？」

「北西に伸びています」

「いよし！ 都合がいいや、最大速度で突っ切ろう！」



「了解!」

掘り進まなくていいならば、最高時速の100キロで突っ走ることが出来る。

セブンやホークみたいにマッハとまではいかないが、それでも地底潜航時の4倍だ。走り出したら後には引けぬ。

とばせ正義の警備隊!

「次郎君……がんばれよ……!」

「ダン……」

決然とした顔で、操縦席のアクセルペダルを全開に踏むダンへ、オレは改めて尊敬の念を抱く。

自分と同じ顔の薩摩次郎が救出されて、ひよっこり対面でもしたら、正体がバレてしまうのではないかと、そういった事はいつさい考えないんだな。お前って奴は。

原作には、崩れた坑道内で薩摩次郎の姿を、パイプ越しにダンが透視し、やつぱりあの青年だ、彼は僕の分身だ、と呟くシーンがある。

この話を見ていた子供のオレは「だから僕が直接に彼を助けに行くわけにはいかない。どうしよう」という話が展開するのだと思っていた。

ところが、その後が続くダンのセリフはオレの予想を裏切り、「なんとしても助け出さねば!」だった。

当時からひねくれ者だったオレは、この時に彼の精神性って奴に感心したね。だからセブンはヒーローなのだ……と。オレにはとてもできない。

ここまでノンストップで、軽快に地底をかつ飛ばしていたマグマだったが、ついにその足を止める時が来る。

「前方に障害物」

「よし、ぶっ飛ばそう」

削岩レーザー砲を発射するが、ビクともしない岩盤。

「レーザーでもダメか……」

（いや、これはただの岩石ではないぞ……ひよつとすると謎の地震源……？）

「マグマライザー、どうしたんだ!？」

「岩盤とは別の、謎の障害物に阻まれたようです。あともうちよつとなのに……」

アンヌがそう悔しがったその時、通信機の向こうが俄かに騒がしくなる。

しばらくすると、隊長の焦った声が聞こえてきた。

「緊急事態発生! 事故現場の空気口が塞がった! ……いいか、ガスの発生を考えると、せいぜいあと30分だ。アマギ、マグマライザーにはMS爆弾が積んであったはずだな? 不自然な障害物があるなら、それで吹き飛ばしてみろ。とにかく現場へ急行するんだ!」

その時、地底空間に響く謎の音。

「ゴウンゴウンと、大きな重機でも動かしているような……」

「なんだ……あの音は?」

「しまった!ワナだ!」

マグマライザーの後方に金属壁が下りてきて、がっしりと退路を断たれる。

「こちらアンヌ、本部応答願います、本部応答願います……!」

「遮断装置がしてあるんだ」

「せつかくここまで来たのに……」

アンヌとダンが、それぞれ手元の腕時計を見るが、最新鋭のタイマーも、地上からの補正電波を受信できず、てんで狂ってしまったている。この場所は不穏な電磁波が渦巻いているのだ!

「こうなったら、隊長の言う通り、前方を爆破して突き進むしかない!」

「しかし、こんな場所で使うつもりか? 下手をすると全員ふつとぶぞ!」

「なあに、心配するな。あのキングジョーですら壊せなかつたんだぞ! もうちつと

は、自分の設計を信用しろって!」

まったく、アマギの爆発物恐怖症は、軽減されたとはいえ、完全克服まではあと少しばかりかかるみたいだな。

「ダン、手伝うよ」

「ではソガ隊員はあっちへ、僕がこつちを！」

「タイマーには余裕を持たせろよ？ 急がば回れだ」

「分かりました！」

前方の金属壁へ爆弾をセットし、マグマライザーへ戻ってくる俺達。

後部ハッチの扉を閉めた後、轟音と共に機体が揺さぶられるが、流星はマグマだ、なんともないぜ！

濛々と立ち込める土煙に状況がわからないが、グランドソナーは前方の障害がなくなったことを示していた。アマギがアクセルを踏み前進！

「あともう少しで、目的地点よ！」

次郎は、かすれた視界に、突如として銀色の三角錐が差し込まれたのを見て、ついに自分の最期を悟った。

天使つてのは、どうやら俺達炭鋏夫みたいにドリルで壁を突き破って地獄まで来るらしい。

ずいぶんと荒くたいお迎えだぜ……輝く羽も生えてねえじゃねえか……えらく地味な天使がいたもんだ。

「次郎君！」

ダンが駆け寄り、助け起こすと、微かにうめき声が聞こえる! 間に合ったのだ!

「お前も、よく頑張ったな」

「チチュウ!」

俺は赤い籠を引つ掴み、また輝かしい活躍をしたマグマライザーを振り返る。

「ダン、あとは地上の空間へ……」

想定を遥かに上回るほど順調に進んだ地底旅行へ、思わずクスツと笑みがこぼれる。

「脱出するだけだ!」

地上GO!GO!GO!

# マツハセブン！セブン！セブン！（Ⅱ）

U—TOMは激怒した。

必ず、かの邪知暴虐の徒を除かなければならぬと決意した。

U—TOMには生命がわからぬ。

U—TOMは、Ultimum Mining Territory Observation Machinery探掘基地の領域監視装置である。

通信用警笛を吹き、歩行型インターフェースと働いて暮らしてきた。

けれども侵入者に対しては、人一倍に敏感であった。

外縁部の探掘者移動用トンネルに、所属不明の車両が侵入してきたため、隔壁を閉じて進行を阻もうとしたが、強力な爆発物によって、隔壁を爆破され、その先の貯蔵プラント周辺までの侵入を許してしまった。

このような事は第一級スク립トにも載っていない。

さらに侵入者は、そこから元来た経路を辿って、領域外へ脱出しようとしている！

長年休眠状態だった基地も、最近ようやく稼働を再開したのに、これは重大なコード違反だ！

U—TOMは侵入者排除プロセスに則って、直ちにドメインツリーを参照し、直近の

インターフェースを差し向けた。

そして、基地全体に対し、無制限反逆者抑圧態勢を発令するのであった……

Unlimited-Traitor-Oppress-Mode

マグマライザーの車内で、アンヌが薩摩次郎青年の応急処理を行っていた。

備え付けの酸素吸入器や、緊急用のカンフル剤でなんとか一命は取り留めたものの

……やはり限度がある。

マグマライザーは戦闘車両であって、救急車ではないのだ。

「だめだわ……アナタには地上の病室で、もっと細かい治療が必要みたい」

「おいおい……あんまり見くびってくれなさんな。もうすつかり元気だぜ」

「いいえ、ちゃんとした検査をしないと、このまま失明してしまう可能性だって、あるのよっ。」

「そいつは参ったねえ……」

これ以上眼球に刺激が入らないように、薬剤をしみこませたタオルで目隠しをされた青年は、まるで堪えていないように嘯く。

なるほど、確かにこれはミラクルマンだ。

「ところで、チュウ吉は？」

「安心なさい、ちゃんとビタミン剤を注射しておいたわ。もつとも、ネズミ用の薬品は積んでないから、有り合わせの治療しかできないけれど……」

「本当かい？ ウルトラ警備隊のドクターを、よもやこんな女医さんが、とは思ったが……腕は確からしいや」

「失礼ね、女だからって侮ると、痛い目をみるわよ？」

「それもそうだな。いや、気分を害したなら悪かったよ……ハハハ……」

そういつて空威張りをする青年の顔は、煤と泥にまみれ、真つ黒に汚れていたが、先程からアンヌはなぜだか、猛烈な既視感を覚えて仕方がない。

こんな 益体も無い憎まれ口を叩くような知り合いは、フルハシ隊員くらいしか居なかつたはずだが……

彼の荒っぽい言動を紡ぐ声も、今では火山ガスの影響ですつかりしやがれてしまつているが……その奥に、どこか心惹かれる響きがある。

おかしい、自分の好みは、もつと誠実で紳士的な人のハズだ。それこそ……

「アンヌ、彼の容態は？」

「ダン！ ええ、命に別状はないけれど、欲を言えばもつと精密な検査を受けさせてあげたいところなの。このままじゃあ、どんな後遺症が残るか分からないし……」



「そうか……」

「その声、さつき俺を抱えてくれた天使さんだな? ……ありがとよ、助かったぜ」

「……次郎君、よく頑張ったね! キミが生きていて、本当に良かった!」

「おいおい、まさか泣いてんのか? 感激屋だなあ……」

簡易ベッドに横たわる次郎の手を、感極まった顔で握るダン。

その様子に釣られて、思わず瞳を潤ませるアンヌだったが、先程までの違和感の正体に気付いた。

そうか、この男はどこかダンに似ているのだ!

まるで中身は別人だが……本心から他者を思いやれる優しい性根は変わらない。

そういつた部分が、てんで言動の違う彼らを、根つこの部分で想起させるのだろう。

この世には、自分と同じ顔の人間が3人いるとは言うが……かたや粗野な炭鉱夫、かたや紳士な警備隊員。こんなにも正反対な二人が似ているとは、運命と言うのはなんと数奇なものだと、アンヌは一人感心していた。

「おい、そろそろさつきの壁のところだぞ!」

「分かりました。アンヌ、彼の体を固定してやってくれ。もう一度爆弾で吹き飛ばすが、さつきみたいな衝撃じゃ、体に障るといかん」

「分かったわ。 ……チュウ吉君もね」

「さすがは女医さんだ、言われなくても分かかってやがるぜ」

「行くぞ、ダン」

「はい！」

彼を尻目に、ソガとダンが再びMS爆弾をセットしに、後部ハッチから車外へ出る。キツチリ二つをセットし、さてマグマへ戻るかといったところで……

「あ、危ない！」

「え？ ウ×ツツ!!」

ダンが、俺の腹を思い切り突き飛ばす。もんどりうつて車内へ倒れこむ俺。

「いつてえ……ハツ！ ダン！ おいダン！」

身を起こして、すぐに車外へ出ようとしたが、ダンがハッチを外から閉めてしまった。

閉まっていく扉の僅かな隙間から、最後にチラツと見えたのは、岩陰からこちらへ迫る銀色の人型。

「ダアアアアアンツ!!」

響く轟音。

体を固定もせずにつっ立っていた俺は、案の定ずっこけて、そこらじゅうを散々にぶつけまくる羽目になった。

「ソガ隊員！ どうしたの！ ダンは!？」

「やろう、俺を車内へ突き飛ばして一人だけ外に残りやがった! ユートムを食い止めようとして……!」

「ユートム?」

「あ、いや……早くダンを助けないと! アマギイーンツ!!」

三人でマグマライザーから下車して、ダンを探すが、全く見当たらない。

ユートムすらいないぞ? 爆弾で吹っ飛んでしまったのか?

「オツ! ……おい見ろ!」

アマギはダンの代わりに、不思議な光の差し込む穴が、壁にぽっかりと開いているのを見つけた。

この地底1000mに光源なんて……

三人で覗き込むと、まるでピーカーとレゴブロックで作ったみたいなの、独創的なデザインの建造物がわんさか立っている。

「これが謎の地震源か……」

「宇宙人の侵略基地かもしれない……」

「じゃ、ダンは?」

「おそらく、この中に……」

「探さなきゃ」



が、うまく舌がまわらんっ!

そんな俺を庇うように、アマギとアンヌが前に出て、ウルトラ・ガンで応戦する。

二人のショットがボディに何発か命中するが、それをまるで気にせず前進してくるロボット達。

それじゃだめだ! こいつらのボディは頑強だ!

原作でも、ソガが早撃ちで、心臓に当たる部分が続けざまに三発も撃った(しかも全弾同じ場所に弾していた!)のに、てんで効かなかったからな。

だが、そんな状況でも、この男ならやってくれるはずだ。

原作でも、敵の構造を咄嗟に見抜いたのは……お前だ! アマギ!

「そうか……! くっえ!」

十字に組んだ左腕を銃架にして、狙い澄ましたアマギのスペシャルな光線が頭部に命中すると、やはり今度もロボットの動きは止まり、スパークを伴いながら、段階的に崩れ落ちる。

「アンヌ、顔だ! 透明な部分を狙え!」

「了解!」

アンヌが素早く銃を構え、顔面を撃ち抜く。

大ぶりなパラライザーすら早撃ちしてみせる彼女は、射撃の腕も案外悪くはない。

残る一体を昏倒させて、なんとか襲撃を乗り切った。

「すまん……いきなりやられて不甲斐ない……」

「いやあ、お前が咄嗟に一体倒してくれていたからこそ、敵の弱点が分かったんだ」

「大丈夫なの？ ソガ隊員？」

「ああ……ゴドラの麻痺電流に比べればなんて事ないさ……なるべく食らいたくはないがね」

こいつらもしかして、暴徒鎮圧用とかそういう用途なのかな？

スタンガンで昏倒させて、トドメを刺す用のハンマーなのか？

「もしかして、これがさっきソガ隊員の言っていた、ユートムなの？」

「ユートムだつて？」

Unknown | Trap | Object | Monster

「あ、ああ……未確認歩行型物体系怪 獣の略さ。未確認飛行物体がUFOなら、キングジョーみたいな兵器はなんと呼べばいいか考えてたのがつい……もつとも、こいつ等は小さくて沢山いるみたいだから、モンスター怪というよりは、モブ集団かもな」

「なるほど……なかなかいい案だな」

「ねえ、そんな事より、ダンよ！ 彼を探さなくっちゃ！」

まあ、そうだ、

オレとしても早くこの話題から離れたい。

「よし、MS爆弾をとってこよう」

「えッ!? 破壊するの?」

「当たり前だ、あの基地を残して、これ以上帰り道を妨害されちゃかなわん。第一、地震の原因は取り除かないと!」

「そうか……そうだな」

本当は後からじっくり基地を制圧して、ユートム関連の技術をパクリたかつたんだが……

そもそも、彼らの基地が一体何なのか、劇中でまったく示唆されないから、それも含めて調査しなかった。

もしもノンマルトの基地だったら事だし……まあ、今となつては無人っぽいからその可能性は低いけど。

仕方ない、次郎を収容して余裕があるとはいえ、彼に早く治療を受けさせないといけないのは変わらない。

アマギの言う通り、基地を放置して追手を差し向けられちゃ、敵わんからな。

だが、ダンがいると思われる中枢部への道のりは、思っていたほど簡単ではなかった。なぜなら入り組んだ基地に対して、俺達はマップを持っていないからである!

原作ではすんなり進んでたから、完全に盲点だった……

そんな我々がどうやって進んでいるかというところ……

「おそろく……あつちだ。天井の配管が合流しているし、壁のコンソールもこっちの道にしかない。メインはこの道だ」

「確かに、ユートムもあつちに歩いて行くわ」

なるべく警備の嚴重そうな方へ、当たりをつけて進んでいるだけだ。

アマギが言うには、例え無人基地とはいえ、重要施設の設計というのは、いつの時代もそう大きくは変わらないらしい。

アマギナビゲーションに従っていけば、どんどんユートムとの遭遇率も高くなっていくような気がするのです、これで合ってるはずだ。しかし……

「こんなに警戒が嚴重じゃ、思うように進めやしない……」

「ダンはどこに行っちゃたの？」

「ソ。コ。ノ。フ。タ。リ。ト。マ。リ。ナ。サ。イ。」

曲がり角で後ろから来たユートムに見つかった！ 俺とアンヌに向けて攻撃してくるロボット。

アマギは死角になっているから、俺がなんとかせねば！

でもね、この肉体は射撃の能手。相手が一体なら問題はない。

「ダン……」



「こんなにユートムがうじゃうじゃいるなんて……彼はまだ生きているだろうか……」  
 「当たり前だ! ダンがそう易々とくたばるもんか。あの薩摩次郎とか言う男がミラクルマンなら、モロボシダンはウルトラマンさ! そうだろ!」  
 「うん!」

その頃、その問題のウルトラマンは熱処理加工機にかけられていた。

U—TOMの歩行型インターフェースに搭載されている粒子銃は、あくまで反逆者の鎮圧用であり、殺傷能力は低かった。なので、ここに運んできたのだ。

爆発のショックで活動を休止したこの侵入者は、通常の生命体以上のエネルギーを内包していたので、暴走した歩行型インターフェースの熱処理プロトコルを適用する判断を下したのである。

彼らの設計時には、地球にこんな熱量の高い生命はいなかったために、今現在、ウルトラセブンは、自分達と同じ、ロボットだと思われていたのだった。

(ここはどこだ……? 熱い! ぼくを焼き殺す気だな……)

インターフェースが加工機のスイッチを入れると、あまりの熱さに、気絶していたダンが目を覚ます

(畜生、殺されてたまるか! 早くウルトラアイを……しめたッ!)

ダンがもがくと、右腕だけがすっぽぬけて自由になる。

この加工機は、インターフェース用だったので、彼らのパイプのように太い腕を規準に設計されていた。

手錠を最小状態にまで閉めたとして、ダンの握り拳よりも太いサイズまでしか閉まらなかったのだ！

なにせ、彼らの右手は銃になっていたので、これでも充分すぎるぐらいなのだが……端的に言って、U-TOMは馬鹿だった。そりゃあそうだ。単なる警備機構に、そこまで高い判断能力は必要ないのだから。彼らは太古の昔、とある種族が奴隷たちを監視させるために作った、メンテナンス用の暴力装置にすぎない。

ダンを拘束し、処刑するに当たって、U-TOMはあまりに旧式すぎた。そもそも光線銃を撃つたり、人間大で融合炉のようなエネルギーを内包する種族と交戦するなど、最初から想定されていなかったのだ。なにせ彼らの現役だったころの地球上に、そんなものは居なかった。いるとすれば、それは彼らを設計した主人達のみであり……今となっては、彼らの判断を是正する存在は、既にこの禁断の惑星から、姿を消してしまっていた……

U-TOMのプログラミングの甘さに助けられたダンは運が良かった。流石はミラクルマン。

最も、手枷からは磁力で固定する機能も付いていたので、左腕はビデオシーバーが

くつついて離れない!

だが、変身さえしてしまえば……

(ない!?)

胸を探ると、そこにあるハズのウルトラアイがない!

首を回すと、近くの机に、ヘルメットやウルトラガンと一緒に無造作に置いてあるのが見えた。

(しまった……このままでは死ぬぞ!)

余談ではあるが、U—T O Mは、侵入者の武装を解除する際、このインターフェースは体に固定されていない追加パーツがやたらと多いなど、チェックリストを何度も確認する羽目になったものである。

(クソツ……せめて左手も抜ければ……さてよ、磁力? そうだ!)

ダンはある事を思い出し、ベルトのバックルについたスイッチを入れた。

これは以前、アマギが全員のバックルに施した磁力装置。

M S爆弾を投下兵器に転用する過程で、副次的に出来たものらしいが……ペアになっている特殊クリップをつけておけば、ある程度の大きさまでのものなら、引き寄せられるという優れもの。

ただし、クリップは一つしかないため、みんなは専らウルトラガンを取り落としても

拾えるように設定していた。

そんな中、特徴的な選択をした者もいる。アマギは十徳ナイフじみた万能ツールセツト、隊長は手榴弾。

それでもちろんダンは……

「デュワツ!!」

磁場の働きで、ふわふわと浮遊してきたウルトラアイを引つ掴み、ウルトラセブンに変身する!

レッド族特有の剛力で、残った戒めも軽々と弾き飛ばすセブン。

慌ててU-TOMがスタンビームを発射するが、もう遅い!

旧式の警備ロボットの速度では、到底その姿を捉えることなどできない。

セブンのいない処刑台の上を、粒子光線が跳ねる!

ようやく敵の姿をまともに認めたセブンは驚いた。

なんと! またロボットか!? しかもあの輝きは……間違いない! チルソナイト

と宇宙コランダムじゃないか!

つまり、敵の装甲は非常に頑強ということ。度重なる機械人形との戦いは、どれもセブンをして苦戦の連続。このロボットも例に漏れず、強敵に違いない!

様子見の肉弾戦という選択肢をきっぱり捨てて、両手の二本指を当てた額から、強力

な磁力線を発射し、いきなりロボットの体をひと薙ぎするセブン。

ハッキリ言ってしまうと、この時セブンは、敵を買いかぶっていた。もしもこれが、薩摩次郎を助ける前であつたならば、迷わずワイドショットで焼き払っていたところだ。

最大火力で障害をさっさと排除して、直ぐに彼の元へ飛んで行つただろう。

つくづく邪魔されたのが、帰り道で本当に良かった。焦りと不安で、冷静な判断が出来なかつたに違いないだろうから。

「デューワー！」

しかしなんという事だろう！ 胴体に命中したにも関わらず、ビクともしない！ キングジョオのように、無敵の装甲なのか!?

そして、セブンの光線を受け止めつつ、右手の粒子銃で反撃するロボット。ただし、こちらのスタンビームも、セブンの肉体に対しては蚊ほども効き目が無い。

ただ、この反撃に驚いたセブンが、少しばかり顔を跳ね上げる事にはなつた。すると、額から照射され続けていたエメリウム光線もそのまま上へ……

ガタン、ゴトン。

拍子抜けするほど簡単に、ロボットは機能を停止してしまつた。

「くそ！ 十字路で待ち伏せなんて！」

「アンヌ、危ない！」

「キヤアツ！」

しかし、アンヌをスタンビームが襲う事は無かった。

そのまましばらく微動だにしなければならなかったユートムは、彼女に向けて構えていた銃を降ろし、ゆっくりと地面に倒れ伏す。

そしてその後ろに立っていたのは……

「ダン！」

「アンヌ、みんな！ 無事か!？」

「こっちのセリフだぜ！」

「信じてたよ！」

お互いの無事を喜ぶメンバー。

ダンの誘導で中心部へと案内された俺達は、そこへMS爆弾を張り付けていく。タイマーはしっかりと最大設定の30分。

マグマライザーへ戻って、そこから地上に戻るとなると、これでも急がないといけな

いくらいだ。

「走れ走れ!」

俺達が全力で走れば、ユートム達の足では到底追いつけない。

前方の部隊をなぎ倒し、マグマライザーへ直帰する。

「アマギ、アンヌ、マグマのエンジンをかけて来てくれ!」

「ソガ、お前は どうするんだ?」

「なんとかコイツを運び込めないか、試してみる」

そう言っ て俺は、足元に転がった機体を蹴り上げる。

最初に俺達を襲ってきたユートムの一体だ。

「すまんが、ダン。手伝ってくれ!」

「わかりました。せーの!」

「おっつも……ッ!! ふぬぬぬぬ……!!」

なんだコイツ! 重すぎて、2人がかりでも持ち上げるので精一杯だ!

「だ、だめだ……やっぱり諦めるしか……!」

その時、機体が少しだけ軽くなる。

これなら、なんとか歩けなくはない。

なんだ?

「おいおい、ウルトラ警備隊も……案外、貧弱だなあ！」

「お前！ 薩摩次郎!？」

「次郎君！ 寝てなくていいのかい!？」

「あんたがたを呼び戻して来てくれて、かわいい女医さんに頼まれたんでな」

「け、怪我人に手伝わせるわけには……」

「なんだか知らねえが、このブリキ缶が、アンタにとって大事なもんなだろう……?」

「チュウ吉の礼だ」

「……お前は本当に、ミラクルマンだよ。……感謝する!」

こうして、俺達はユートムの残骸を一体だけ回収して、地上へと脱出できたのであった。

背後で盛大に爆発する地底都市。

——ウルトラ警備隊の活躍で、ふたりの尊い命が救われました。それにしても、あの巨大な地底都市。あれは、一体何だったのでしょうか……?」

宇宙人の侵略基地だったのでしょうか。いやもしかすると、我々地球人よりも遙かに昔から地球に住んでいる、地底人類の文化都市だったのかもしれないのです……

……U—TOMは赤熱した。



## Xしないと脱出できない空間（I）

ついにこの日が来てしまったか……

誠に憂鬱極まりない。

「ハア……」

思わず、隣のアマギと溜息のタイミングが被る。

俺達は今、上空数千メートルの訓練機の中。

このところ目立った事件もなく、月一の特別訓練を珍しく万全の状態のできる（ダ  
ンが来てからは、毎回誰か……たいてい俺が負傷中なので、全員揃うのは初）ときた。

すると、なんと隊長が落下傘による空挺降下の訓練をすとい出すではないか。

また……余計な事を……！

いや、ウルトラ警備隊は特殊部隊だから、スカイダイビングも必要なんだと思う。  
思うけどさ……本編でもそんな機会なかったじゃんか！ 余計な事を……！

だもんで、訓練機の中で俺達は暗い顔しながら揺れている、という訳だ。

まず、アマギは高所恐怖症。これは原作通りで、本来はこのシーンで項垂れているの  
は彼だけだ。

それでオレも……高所恐怖症。いや、俺の記憶は、これを楽しいものだと思識している。たまにダイビングやバンジーを進んでやるような気チガ……いや失礼、奇特な方がいらつしやるが、どうやら原作ソガもその類だったようだ。

だが、オレの心は嫌がつている。体はワクワクして仕方ないのに、なんとも不思議な感覚だなあ。

……隊長！俺はつい最近、地上50mから垂直落下した経験にトラウマがあるので、今回は免除という事に……なりませんかそうですか……

だから心を無にして、体に身を任せればいい分、アマギよりはマシ……なんだが、憂鬱なのはフリーフォールが怖いからだけじゃない。

今回は……俺とアマギが、それよりもっと酷い目に遭う回だから……

この訓練中に俺達二人だけが、ベル星人の謎空間に捕らえられてしまい、なんとか救出されるといふ流れなんだが……底なし沼に陥るわ、ダニだの、クモだの最悪だ！

……え？ そんなに嫌なら落下のタイミングを遅らせればいい？ そうもいかない。俺達がたまたま引つ掛かったお陰で、地球に潜むベル星人を倒すチャンスが到来するんだから！ オレがそれをスルーした結果、ここ一番の大事な場面で、ホークを丸ごと拉致でもされちゃ、そつちの方が一大事だ。

我々二人の災難で、恐ろしい宇宙人を排除できるなら安いもんだ。一応、どれだけ酷

い目に遭っても死にはしないし……

「俺に続け、行くぞ！」

「はいっ！」

ああ、もう始まつちやった……

アンヌもよくあんな嬉々としてダイブ出来るよなあ……あ、なんか恋人とスカイダイビングする外人多いし、あれか？ 空中デートか？ いいなあお前らは……

だめだ、もうフルハシが落ちた。俺達の番だ。

「さあ……」

「ううっ！」

「アマギ隊員どうした!？」（知ってるけど）

「キミ……お先にどうぞ」

「いやいやどうぞどうぞ」

元はと言えば、お前がすんなり行かないから、落下のタイミングがズレてソガが巻き込まれるんだぞ！

だから何がどうあっても、アマギには地獄のダイビングに付き合っつて貰う！ 俺が怖いからだ！

一人で行けるか、あんなトコ！ お前も道づれだあ！







ダニイ！ 何をするだアーツ！」

沼の中にも巨大なダニやヒルが潜んでいるらしく、半狂乱で暴れるソガ。

アマギが腰のポーチからロープを取り出し、なんとか彼を救出する。

「ハア……ハア……酷い目に遭った……ちくしょう、泣いていいか？ 泣くわ……ううっ……」

「だがソガ、お前のお陰で、木々の切れ間が見つかった。通信してみよう！ アマギより本部へ！ アマギより本部へ！」

しばらく呼びかけると、繋がったらしい。

シーバーから聞こえる、待ちわびた上官の声。

「キリヤマだ。二人とも今までどこごろついていたんだ。2時間も空を散歩してたなんて言い訳は、許さんぞ！」

隊長の口調は厳しいが、彼の怒った声すらもが、こんなに嬉しいなんて！

思わず笑みを浮かべて、返事も忘れてお互いの顔を見合わせる。

「おい！ アマギ、ソガ、聞いているのか」

「はい隊長、我々のいるここは一体どこなんです？」

「寝ぼけたことを言うな！ それはこっちの台詞だ。現在地を知らせろ！」

「とおっしゃられても、我々にもよくわからないです……」





ベル星人は、自分の造り出した餌場で、二人の地球人が藻掻き苦しむのを、満足げに眺めていた。

彼はこの星に来てから、まだ数百年と少しではあるが、自らが当たりを引いたという自覚があった。

彼らベル星人は、メスと交尾を終えたオスは、大量の卵塊を抱え、他の惑星へ飛翔する。

そうしないと、まだ番いの居ない獰猛なメスに、大事な卵を破壊されてしまうからだ。そして、居付いた惑星で巣を作り、そこで卵の世話をしながら、一生を過ごす。もちろん、卵や生まれた幼虫の世話をする親が死んでしまつてはいけないため、それまでの食糧を確保する必要がある。

そんな父親の主食とはズバリ……美味しい美味しいグモンガだ。

奴らの体に口吻を刺し込み、ちゆるちゆる啜る体液の、なんと美味しいこと！

グモンガは雑食なので、居付いた惑星の生物がどんな生態であつても、サイズさえ揃

えてやれば、肉でも植物でも、その巨大な口でバリバリと貪り、体内で勝手に美味しいジューズへと変換してくれる。

この異空間は、卵の揺り籠であると同時に、養殖場なのだ！

最も、こんな偏食家になるのは成虫になつてからで、幼虫の間はグモンガだろうが何だろうが、とりあえず飛びついて体液を吸る。はやく大きくなるためには贅沢など言つていられない。そうしないと、逆にグモンガに食べられてしまうのだから。あれだけ沢山ある卵も、無事に成虫になれるのは僅か一握り。この厳しい生存競争を生き抜いてこそ、次代のベル星人に相応しい個体と言えるだろう。

その点、この惑星の生物は非常に都合が良い。

地球人の血が相当に旨いのか、幼虫もグモンガも、他の生物とは食いつきがまるで違うのだ。子供達など、人間の声をすっかり覚えてしまつて、それが聞こえると真っ先に飛びついてしまう程。

そうして、奴らを食べて育つたグモンガの体液が、実に濃厚でありながら、弾ける程に芳醇な香りで……また格別なのである！

ベル星人本人としても、すっかりこの味に魅了されていた。

かつては特定の海域で巣を張つていれば、大量の海藻と共に、纏まつた量の地球人が、木でできたサナギに包まれて定期的にやってきたものだが……最近では彼らもようや

く成虫になったのか、鉄の羽で飛ぶようになった。そうすると、より美味しいグモンガジューズを作る為に、彼も餌場を空中に移す事にしたのだ。こうすると、迷い込む生物の割合を、ぐっと地球人へ傾けることが出来る。まあ、そのぶん量が足りないのです、たまには海で巨大な魚も確保するのだが……

たかだか数年に一度、たった数百人（腐るほどいる彼らの、僅か数パーセントにも満たないささやかな量！）だけ拝借して満足するなんて、自分はなんと謙虚で平和的なのだろうか。この星を侵略しようなどと言う傲慢な連中にも、少しは自分を見習って欲しいものだ。

ともあれ、今度の獲物も随分とイキがいい。グモンガや子供たちも、さぞ食いであらう。

……ただ、奴らはすごい毒針を持っているので、何匹か子供がやられてしまった。まったく許せない事だ！

こうなったら仕方がない。定期的に姿を見せて、奴らが毒針を撃てなくなるまで弱らせてやるしかあるまいて。

ああ、腹が減った……

ベル星人は、一仕事終えた後に、でっぷりと太った美味しいグモンガを啜る様を想像し、羽と口吻を思わずりりり、と震わせた。

## Xしないと脱出できない空間（Ⅱ）

パラシュートを木々の間にテントのように張って、ダニ除けにして、中で休憩する俺達。

「さあ、これを食べて元気を出すんだー」

ヘルメットから非常食を取り出すアマギ。

防衛軍謹製の糖衣チョコレートだ。おいしい……

でも、その泥だらけの手袋では、渡してこないで欲しい。ぼっちいから。

「アマギ……、お前は落ち着いているな……」

「お前ほどじゃないさ。あんな事があつたのに、よくも耐えられる」

「俺は、みんなが助けてくれると信じてる……いや、分かっているから……」

「いくら仲間を信じていてもだ……俺は、つくづく遭難したのが、お前と一緒に良かったと思っっているよ」

「本当か？」

「ああ、こんな時だから言ってしまうが……ソガ隊員と一緒にだからこそ、僕もこんなに落ち着いていられる……アンタなら……」

「サバイバルなら、隊長やフルハシ先輩の方が頼りになると思うがね」

「いやあ、そうじゃない……心の持ちようの話さ。確かに彼らの方がなんとかしてくれるかもしれんが……気が張り詰めて、先に参ってしまったよ。僕はね……あの時、敬語なんかいらぬ、ただのソガでいい、って言ってくれたアンタを、尊敬しているんだ……」

「……何の話だ？」

「ふん、覚えてないのか？ 僕は飛び級に次ぐ飛び級だったから、入隊時期がズレてしまったせいで、同期が同じく飛び級組のアンヌしかいなくて……彼女とも接し方がうまく分からずに、馴染めなかった。そこへアンタが……軍隊じゃ年功序列で疲れるだろう、年もそう変わらぬ、俺に対してだけは、お互い遠慮なく、兄弟みたいに仲良くやろうって……そう言ってくれたんじゃないか。ソガにとってはどうでもいい事かもしれないが、当時の俺にとっては大事な事だったんだ……感謝しているんだよ……」

「そうか……」

「そうだったのか……いやほんとに記憶にない。」

「……だが、アマギが嘘を言っているのでもないだろう。」

このナイーブな新入りコンピューター野郎を、どうにかしてやれんものかと、ずいぶん気にかけていた記憶の方は、しつかりあるからだ。

多分、その時のソガにとっては、自分に対する敬語やなんかなんて、いらぬと言っ

たのを本当に忘れてしまうくらい、なんてことない自然な事だったんだろうなあ……

「まったく、本人の方が覚えてないなんざ、呆れちまって、感動が醒めてしまったよ。こんな奴の言葉を、有難がっていたなんてな」

「ハハハ……悪かったよ。お前みたいに立派なおつむをしてないんだ。お前がホームシックでビービー泣きだしたら、思い出したかもしれないが」

「言ったなあ、こいつ！ ……ハハハ！」

「ハハハ……シツ！ ……なんだこの音は？」

「また奴が来たのか？ 俺達をおちよくりやがって……い！」

俺達がウルトラガンを構えて、テントを飛び出し、外を見上げると……

そこには真つ青な天体が浮かんでいる……

「あれは………月？」

「月じゃない………地球だ………」

「どうだった？」

「だめです！」

「霧はどこにも発生していませんわ」

捜索から帰還したダンとアンヌが首を振る。

やはりソガの言う通り、地球上ではない異空間に……

「隊長、アマギ隊員です」

「はい、本部」

「隊長、我々のいるところは地球ではありません……」

「なに！」

「どうも、ある空間に引つかかっているんです。脱出不可能です。救援願います！」

「おそらくこの空間は、成層圏のどこかにあります！ 上空に地球の日本列島が見えるんです！」

「おい、アマギ！ ソガ！ どうしたんだ？」

それを後ろで聞いていたマナベ参謀が、何かに思い至る。

「疑似空間だ、キリヤマ！」

「疑似空間？」

「2年前、私がワシントン基地に勤務してる時、一度現われたことがある。大気圏内に不思議な空間をつくり、獲物を狙うんだ！」

通信機ごしに不快な鈴の音が聞こえてくる……

「なんだ、あの音は？」

「ベル星人に間違いない。あの鈴の音は、脳波を狂わせる恐ろしい力を持っているんだ！」

「二人を早く助けなければ！」

「それは非常に難しい。2年前、擬似空間に捕まった旅客機を救出するために、200名の隊員が出動したが、発見することさえできなかった」

「擬似空間を突き止めることは、不可能だとおっしゃるんですか？」

「残念だが、その通りだ。アンヌ隊員……」

通信機ごしですら、頭痛を引き起こすベル星人の怪音波に、思わず顔をしかめるマナベ参謀。

「ボガード参謀のご兄弟も、その時に……見つけたのは、血だらけの衣服だけだ……」

「そんな……！」

「死なないと脱出できない空間……」



通信を終え、テントに戻った我々は、再び聞こえた鈴の音に、周囲を警戒する。

なにやらもぞもぞ動く地面を注意深く見ていると……下から巨大な蜘蛛型の化け物が姿を現した！ グモンガだ！

鼻から塩素やアンモニアの混ざった緑色のガスを噴出しながら、俺達に襲い掛かるグモンガ。

とつさにヘルメットのバイザーを下げて、防毒マスクにすると、ウルトラガンで撃退しようとして……啞然とする。

……弾が出ない！

そうだ、訓練用にエネルギーはいつもの半分しか入れていないのか！

貴重な弾を、ベル星人を追い払うのに使ってしまった！

「ソガ！ スパイダーだ！」

「よし分かった！」

別にアマギは今更、敵の見たままを言ったわけではない。俺は慌ててテントに戻り、組み立てておいたバーチカルショットガン、別名『スパイダー』を取り上げる。

「おもっ……」

かつて作成されたスパイダーショットを参考に、基地警備用のショットガンを熱線砲

ヘリファインしたこのスパイダーは、個人で携行するには重すぎる。アマギの頭脳をもつてしても、熱核融合炉の小型化が、ギリギリのサイズになってしまったからだ。そういう意味では、兵器としてはまだ試作段階と言えよう。

この武器が、どうしてここへ持ち込まれていたかと言うと……サイズ比に対しての高密度重量から、まさしく文字通りの重しとして、アマギの荷物に入っていたのだ。

実は今回の訓練をするに当たって、極東基地にはアマギの八頭身体格に合うサイズのハーネスがついたパラシュートは無かったので、ワシントン基地からわざわざ取り寄せたという経緯がある。

すると今度は落下傘の形状がキノコ型ではなく、細長いラムエアタイプだったもので……ひとりだけ風に流されて別の地点に降下してしまわないよう、安定性を増すための重しに、このスパイダーが丁度良かったという訳だ。

ありがとうアマギ、お前がヒョロガリのつぽでなければ、弾切れで死んでいたぞ。

「そがあー！ はやくうううう！」

「伏せろアマギ！」

俺はただでさえ重たいスパイダーの射撃反動を抑えるために、木にもたれるようにして体を預け、しっかりと固定してから狙いをつける。ターゲットは、アマギに覆いかぶさるように立ち上がる、奴の眉間！

ありがとうソガ、正しい射撃姿勢をオレに教えてくれて……狙撃の名手は伊達ではない。

熱線が額に命中し、小爆発を起こして倒れ伏すグモンガ。断末魔代わりに毒ガスを噴射しながら絶命する。

死体の下からアマギを救出し、彼の手を引きながら森を出る。毒ガスに汚染されてしまったので、どっちみちあの仮拠点は放棄せざるを得ない。

とにかくさっきの場所から遠ざかろうとしていると、ビデオシーバーに着信がある。「ホーク1号よりアマギへ、聞こえたらビデオシーバーの発信を続ける。ビーコンで逆探知して、場所を突き止める」

「おい、隊長の声だ！」

「うまく我々を探知してくれよ……！」

それならば、電波が途切れないように、開けた場所にいかねば……

「アマギイ！」「ソガ隊員ー！」「どこにいるんだー！」



助けようと近づいた三人に、ガスを噴いて威嚇する巨大グモ。

バイザー降ろして防御する三人。

「たすけてエエエエエエ！」

「隊長、この怪物は僕に任せて、アマギ隊員とソガ隊員を！」

「よしー！」

怪物をダンに任せ、二人に絡みついたスフランをレーザーで焼き切っていく。

「さ、早くー！」

「早くウルトラホークへ！ あとは自分が！」

「頼むぞー！」

「う……ジュア！！」

ダンは飛び掛かってきたグモンガを投げ飛ばすと、奴の開いた大きな口内に目掛けて、ウルトラガンの引き金を引いた！

隊長とアンヌに肩を支えられ、這う這うの体で逃げ出す二人の背中を見送ったダンの耳に、不快な音波が叩きつけられる！

獲物を逃がしてなるものかと、ベル星人が襲ってきたのだ！

このままでは変身できない……！ かくなる上は！

ダンは気力を振り絞ると、ウルトラレポートで奴の背後に回り、そこでようやく変

身できた。

しかし、大幅にエネルギーを消耗してしまふ。

自分と同サイズの敵の出現に、ベル星人も戸惑ったが、得意の怪音波を浴びせかけ、セブンすらも苦しめる。頭を抑え身動きのとれないセブンを、コオロギのように優れた脚力で、散々に蹴りまわすベル星人。

……しかし徐々に音波に慣れてきたセブンは、即座に立ち上がって飛び蹴りで迎撃すると、今度は逆に足固めを食らわせる！

これにはベル星人もたまらず、隙を見て空へと飛翔し逃走するしかない。

逃がすものかとセブンの放ったアイスラッガーを、硬い外骨格で弾き返すと、壮絶な空中戦が始まった！

雲の中へ逃げ込み、セブンを振り切ったと星人が安心したところへ、まわりこんだセブンが前方からのヘッドオン！ キリヤマ仕込みの空戦の妙は、ただの捕食者にすぎないベル星人には無いものであった。

そのまま足を掴んでグルグルとその場で回転するが、それが最高速度に達する前に、ベル星人自慢のキックで逃げられてしまふ。

回つてもなんとかならないとは!?! 恐ろしい奴！

それもそのはず、彼にだって父親としての意地がある。

ここで死んでしまつては、いったい誰が卵の面倒を見るというのか！

セブンもベル星人も、お互いに必死であつた。

だが、逃げる星人を追うセブンの、銀色に輝く双肩には、この地球に住む、全ての生命の平和という、重大な使命が背負われているのだ！ その決意は、ベル星人が卵に注ぐ熱意よりも、はるかに堅く重い！

彼がその両腕をピツタリと合わせると、リング状のスパイラル光線が発射される。

光線が背中に着弾し、臀部の呼吸管をことごとく破壊されてしまつたベル星人は、傷口から煙を吹きながら、卵のある大きな沼へと、ふらふら落下していく。

着水し、退くに退けなくなつた星人を、セブンは執拗に水面へ沈め、気門の塞がつた彼を弱らせていった。硬い外骨格をもつベル星人に勝つには、こうするしかなかつたのだ。

だが、これも因果応報。ベル星人は、愛する子供の為とはいえ、この地球で何千何百と言ふ人々を、その手にかけてきた、紛れもない悪魔なのだから。

「あ、森が消えていくわ！」

「脱出だ！」

ホークに戻つた俺達の前で、どんどん森が消えていく……セブンがやつてくれたんだな。

「隊長、ダンがまだです！探してきます！」

「あぶない！もう間に合わん！」

「でもダンを見捨てるわけには……」

「あれを見ろ！」

端からどンドン消滅していく疑似空間。このままではホークが離陸できないまま一緒に消滅してしまう！

「位置につけ！……いくぞ！」

まあまあアンヌ、ダンは大丈夫だからさ……それより俺達の傷見てくれない？ さつきから痛くてたまないんだけど……寄生虫とか病気とか……オレ嫌だぜ？

「疑似空間を作り出すなんて恐るべき宇宙人だ……こんな言葉を知っているか？ 神なき知恵は、知恵ある悪魔をつくることなり……どんな優れた科学力を持っていても、奴は悪魔でしかないんだ！」

二人の部下を救う事ができた代わりに、ダンを見失った隊長は悔し気に呟く。

そんな時、通信機から、彼の訓示に答える者がいた。この声は……！

「隊長！ 知恵ある悪魔から地球を守る我々の任務は、非常に重大だという訳ですね……？」

「ダン！ どこにいるの？」



「ベータ号です」

「……みんな無事だったんだ！ 良かった……良かった……ッ！」

満願の笑みのキリヤマ隊長と、ほっとした表情のアンヌ。

ついでに緊張の糸が切れて、腰が抜ける俺達。

——こうしてアマギとソガにとつて恐怖の数時間が終わりを告げた。しかし、広大な空の上についてまた擬似空間が張り巡らせるかもしれない。なにしろベル星人は、知恵ある悪魔なのですから……

## プロジェクトXを倒せ（Ⅰ）

月面、アペニン山脈……5000mの山々が連なる。

その麓に、『雨の海』がある。浩蕩たる玄武岩の平野。

その一角に、地球防衛軍の、月面基地があつた。

某年某日その秘境において、一つの防衛計画が始まつた……

プロジェクト・ブルー『地球防御バリアー』

男達の、怒号が響いていた。

「そつちに行つたぞー！」

「こちらB班！ 警邏中の隊員2名が負傷！ うち一名は重体です！」

各セクターに現れた、謎の侵入者に、負傷者が続出。

それでも、守らねば、ならなかつた。

この計画は、地球30億全人類の命を覆う、唯一の、傘だつた。

警備リーダーは、ペダン事変中、機体を放り投げられても、センターを守り抜いた男。

隊員たちと、突撃を、繰り返した。

バリアーを貼るため、命を懸けた男達。

プロジェクト・ブルー。

これは語り継がれる、壮絶な、物語である……

「基地全域に緊急事態発令、コンディションレッド！」

「セクションの各班長とは、まだ繋がらないか？」

計画の護衛の為に、ウルトラ警備隊から派遣された、二名の隊員が、険しい表情で、指示を飛ばす。

「くそッ……駄目です、通信回線を切られました！」

「ソガ、どうする。俺達は完全に分断されてしまったぞ」

アマギが、言った。

月面基地の所々で翻る、全身肌色の異形達。

「アマギ、奴らの狙いは、きつとプロジェクトブルーの妨害だ。だったら、どれだけ広範囲の侵入であろうと、目的地は最深部の、計画に関する集積機材群のはず！」

「待ち伏せをしようと言っただな！」

メインの通信を遮断された今、月面と地球では、やり取りに大きなタイムラグがある。

本部の指示を、仰いでいる暇は、無かった。

現場判断で、やるしか、ない。

「俺がここの皆を率いて、集積所の手前で奴らを食い止める。お前はその間に、孤軍奮闘している各班をかき集めて、突撃隊を結成するんだ」

「分かった、直ぐに行く！」

「俺達が金床で、お前たちはハンマーだ！ 頼むぞ、アマギ！ DからF班は俺に続け！

急いでバリケードを作るぞ！」

ソガの一喝が響き渡った。

集積所前にバリケードを築き、迎撃部隊は激しく抵抗した。

敵は、透明化能力を持っており、基地中に散らばった彼らを追い回すのは困難を極める。

そこで、目的地と思われる部屋に、唯一続く一本道で待ち受け、銃弾のカーテンを作ったのだ。

これなら、ステルスだろうが、関係ない。間断なく打ち続けければ、突撃する敵に、弾は当たるとだ。

しかし、基地の全方面から襲撃してきた敵を、一か所に集めるといふ事は、それだけ激しい攻撃に晒されることになる。

敵も味方も、折り重なるように、倒れていく。

「こいつら全員、まるで判を押したように死んでいきやがる！ 気味が悪いぜ！」

「攻撃のタイミングも揃っている……中々手強いな」

「おい、あんなケツ星人にビビってるのか!? ……いいかみんな、俺が手本を見せてやる。 おーい尻頭！ 便座には頭から座るのか？ 死んだお仲間の頭から垂れてるのは、さては血でなくうんこだろ！ 下痢気味のくそつたれめ！ 悔しかったら殺してみろ！」

ソガが発した、品性などまるで皆無の挑発に、憤激した宇宙人が、徒党を組んで突入する。

そこへすかさず、ソガが小型爆薬をまき散らした！

「今だ！ 射手！」

動きの止まった集団に、固定式機関銃弾が雨あられと降り注ぐ。

沸き立つ、守備隊。敵はどうやら挑発に弱い。相当に自尊心の高い種族のようだ。

だがいくら、地の利があっても、数の上では劣勢、このままでは……

そこへ！ 敵の背後を襲う、弾、弾、弾！

「迎撃隊を死なせるな！ 全班突撃イ!!」

騎兵隊の到着だ！ 最良のタイミングで、敵の後背へ奇襲をかけるアマギ。

教本に記載される程に見事な、挟み撃ちの図式であった。

「一人も逃がすな！ 追え追え！ ソガ、俺達は出口へ先回りしよう！」

「いや、待てよ……アマギ、こっちだ！」

ふいにソガが、その場に残った者達で、集積所を調べようと提案する。

一人も通さなかつたはずなのに、何故……？

隊員総出で機材をチェックにかけると、ひとつだけ、リストにない物体がある。

ブルーII波偏光ミラーの傍らにそと置かれた、一見ツボのようにも見えるそれは

……

「時限爆弾だ!？」

「しまった……敵は一定距離内にある鏡面間も移動できるんだ……やられた……解体しない」と！

アマギが、爆弾の解体作業にかかろうとするが……

「ハア……ハア……！」

「どうしたアマギ！ しっかりしろ！」

「駄目だア！ 僕には……やっぱり僕には出来ないッ！ 許してくれ……許して、くれえッ……！」

脂汗をだらだらと滝のように流しながら、荒い呼吸と掠れた悲鳴を吐き出すと、傍ら

のソガに縋りつくアマギ。

彼は幼少期に見た爆発事故のせいで、爆弾に対する心理的障害を乗り越える事が出来ないでいた。

その恐怖は爆発の威力に比例し、目の前の爆弾は、アマギがざっと見ただけでも、この基地どころか、月を丸ごと吹き飛ばす威力がある。彼にはそれが、分かってしまったのだ。

手先が震えて、精密作業など、まともに出来そうに無かった。

そんな半狂乱のアマギの両肩を、がっしりと掴んだ者がいる。

「……分かった、代われ。爆弾に触るのは俺がやるッ！」

「ソ、ソガ……」

「だが、馬鹿な俺には、コイツの仕組みがまったく分からん。隣で指示を出すのだけは……アマギ、お前だ……お前の力が、必要なんだッ!!」

「……ああッ！ 分かった！」

漢達の戦いは続いた。

「了解。隊長、月の基地のアマギからです。ミヤベ計画の機材に、爆薬を仕掛けている宇宙人らしき者を発見。追跡したが消えてしまったそうです」

「フルハシ、アマギとソガにいつそう注意するよう言っておいてくれ」

「何かが起こりつつある……そんな気がしますね」

「うむ、そうなんだ……」

「隊長……ソガが、ミヤベ博士の身にも、何か危険が迫っているのではと言ってきています。相変わらず心配性な奴だ」

「……しかし、敵がプロジェクトブルーを妨害しようとしているならば、中心人物であるミヤベ博士を狙う可能性は高い……ダンとアンヌはウルトラホーク3号でパトロール出発！」

「了解！」

---

「プロジェクト・ブルー、どこまで出来上がっているのか、それが知りたい……」

「それは言えない……死んでも言えんぞ！」



「大抵はこの自白電波で、正気を無くして喋りだすのだが……さすがミヤベ博士……作戦を変えよう」

ウルトラ警備隊の懸念通り、ミヤベ邸の地下では、バド星人が、地球人の強情さに、思わす唸っていた。

彼こそは、大シヤラクサイ銀河バド大帝国第46億飛んで5代皇帝バドー一世その人なのである。

「おい、ウルトラ警備隊が近づいているぞ」

「なんだと？ ならば急げ！ おい！ そのお前！」

「ふん、言われずとも分かっているわ」

バドー皇帝から、敵の接近の報告を受けたバドー一世は、帝王御自ら、ミヤベ博士を尋問し、効果が無いと分かると、傍にいたバドー大帝に、ミヤベ博士の妻であるグレイス女史を襲わせるように命じた。

地球人の女一人を怖がらせるために、皇帝直々の御出陣であらせられるとは、なんとたる光栄！ グレイス何某は、身に余る程の榮譽に、咽び泣いて喜ぶべきであろう。

なにせ、究極の美とも言える宇宙の帝王のご尊顔を、間近で拝する事ができるのだから……

もつとも、そのクローンの、ではあるが。

大銀河皇帝バドーは、かつて全宇宙の頂点に君臨していた。

当時の宇宙に、バド星人に敵うものなど一人もいなかった。太陽風の中を自由に渡る昴のように、銀河の隅々まで飛びまわり、バド文明はその全てを、皇帝の欲しいままにした。

この時のバドーにとって、銀河など、一握の砂に等しかつたのである。

しかし、そうして権力の頂点に立ち、真の栄華を極めた時、皇帝は……乱心した。

自分以外の全てが、この帝王の玉座を狙っているのではないか、という恐怖に執り付かれたのだ。

手始めは他の種族であった。馬の首星雲の、緑あふれる豊かな草原を駆け回る有翼一角獣も、おとめ座に並び立つ、美しい摩天楼も、全てが等しく灰燼に帰した。もちろんこの時、太陽系にも襲来し、冥王星の文明を星ごと破壊しつくしていった。当時の地球は惑星ですらなく、まだ単なるマントルプルームでしかなかった。難を逃れる事が出来たに過ぎない。

そうして他種族を皆殺しにした後、皇帝の猜疑心は、遂に同族へと牙を剥いた。

腹心に自身の精巧なクローンを作らせるよう命じ、少しでも反抗的な態度を見せる者がいれば、それらを次々に粛清し、残った役職へは、自分のクローンをどんどん挿げ替えて行く。

先代は言うに及ばず、民衆、役人、皇太子に皇后、側室に乳母まで、全て殺した！

そして最後に、これだけ貢献したのだから、自分だけは助かるだろうと考えていた哀れな側近を処刑して、バド帝国は名実ともに、バドのバドによるバドの為のバドー人の帝国となった。

頭の窪みはバドのしるし、この世を虚無に染める者。

この全宇宙に、立つのはこの自分ただ一人！

ほの暗い愉悦とちっぽけな虚栄心こそが、バドの願いであり狂気であった。

なまじ、皇帝が多才かつ優秀であったがために、帝国は問題なく機能してしまったのが、全宇宙にとって不運なこと。各分野のエキスパートには及ばないが、器用貧乏どころか、器用大帝王だったのだ、バドは。

他者に何かを委ね、頼るなど、無能な弱者たる何よりの証左！ 全てを自分一人で司り、掌握してこそ真の王者よ！ 最近、偉そうに銀の髭を蓄えて威厳を演出している生意気な若造や、恐れ多くも自称皇帝を名乗る尻の青いクソガキ共が随分と騒がしくしているが、そんなものは雑魚にすぎないのである。

今はなぜか領土が小さくなってしまったが、若者を見守るのも年長者の風格というものは。何れは全て、朕のこの手で虚無に沈むのだから、多少の無礼は目をつぶってやろうではないか。

皇帝も御年46憶飛んで24万歳。そろそろ丸くなってきたかもしれぬな。

今やバド銀河の中枢に鎮座された、遺伝子プールこそが、このバドの玉座なのだ。

これがある限り、帝王は永遠に不滅。最近、他種族の肅清が失敗するようになってきたが、なあと気にすることはない……

奴らがワシの頭部を模した、あの冒流的な臀部で、日々踏みつけにするといい侮辱的な行為も、最近ではようやく、所詮は虫けらの児戯にすぎないと捨て置く事ができるようになった。

ああ、一刻も早くあのような阿呆共に、この皇帝の威光を知らしめてやらねば……！  
吾らが常に、一糸纏わぬ裸体を晒し続けているのも、そのため。

この究極の肉体美こそ、宇宙の神秘、銀河の至宝！

これを布切れで隠してしまうなど、全宇宙の損失に他ならない。

この皇帝が、いったい誰に憚ることがあろうか？

あのようにマントなどに頼って威厳を演出せねばならない若造共のなんと浅ましき事。真の帝王は、その身から発する圧倒的風格こそが、唯一の衣服であり装飾なのだ。

ああ……いつ見ても素晴らしい……

鑑面に写る自身の頭部が描く、魅惑の曲線美にバドが見惚れていると、下品な赤色の男が乱入してきた。

なんだコイツは！　　いっちょ前に巨大化など、この帝王の猿真似をしくさつてからに！

こうなったら吾輩直々に、バド帝室に代々伝わる宇宙レスリングの妙技を見せつけてやる！

覚悟せよ無礼者が！

こうして、セブンとミヤベ博士の地球へ対する深い愛と使命感によつて、地球はバド星人の魔の手から逃れる事に成功した。

余談として、バドー大帝がこの時見せた、投石や命乞いからの奇襲、凶器攻撃など、宇宙の帝王の名に恥じる戦法の数々は、また一段と彼の品格を貶める事になるのだが……そんな事は些細な事だ。

なにせバドー第46億飛んで5代皇帝は、他種族からの醜聞など一切気にはしないし、なにより他の勢力にも、もはや凋落の一途を辿る没落帝国で、耄碌した老人が垂れ流す戯言など、構ってやる暇などないのだから……

## プロジエクトXを倒せ（Ⅱ）

道に迷ったラリーの女学生が、山中で謎の発光によって道を踏み外し、立ち往生していた。

「ねえ、さっき光ったの何だったんだろ？」

「稲妻よ！ 山の中で多いのよ」

「でも光っただけで音は無かったわ……」

「アラ？ これ見て！」

彼女たちは、車のヘッドライトの下に、真っ赤な石が転がっているのを見つけた。

それが、一体なんであるか、彼女たちはまったく知る由もない。

その時突然！ 地面が揺れ、山中に謎の叫び声が響き渡った……！

---

「隊長、観測所からの報告が入りました、震源地はアオサワ山岳地帯です」

「同じ場所だ……」

警備隊では、この頃頻発する、局発性地震を追っていた。

徐々に規模が大きくなっていく地震、報告ではなんとマグニチュード6.5! 流石に看過できず、タケナカ参謀も唸る。

「キリヤマ隊長、今度のは大きいな……これはうっかりできないぞ。データをもう一度検討しよう」

「ソガ、ダン。イワムラ博士のところへ行ってこい」

「ええッ!? もういつペン行くんですか? ……だめですよ! なあ、ダン?」

「カンニンしてくださいよ。隊長の命令なら、宇宙の果てだろうと、地獄の果てだろうと、喜んですつ飛びますが……イワムラ博士のところだけは……」

俺とダンは、ついさつきイワムラ博士のラボに迎えに行つて、門前払いを食らったばかりなのだ。

旧知の仲とは言え、あのヤマオカ長官をクン付けで、急用があるならそつちから来い! ……と言いつつようなお人だぜ? そりゃあ、この極東基地の地下建設にバリバリ協力してたつてんだから、あの態度も納得だけどき……

なにより、怒鳴り声がうるせえんだわ……もう二度と会いたくない。

そこへ、フルハシとアンヌが作戦室に戻ってきた。

ナイスタイムिंगだ!

「隊長！ フルハシ隊員が適任です！」

「イワムラ博士？ ……と、とtttとんでもない！」

「そ……そうだ。アンヌ隊員が最適任です！」

「ええっ？」

もうイワムラ博士がどんな人か、新入りのダン以外は大体知ってるから、みんなであらい回しだ。

……てか、おいアマギ……なに一人だけわろてんねん！

お前はいいよなあ!? 博士のお気に入りだもんなあ!?

マグマライザーの共同開発で、随分可愛がってもらったそうじゃねえか！

というかお前が行けよ！ なあにが、『彼の頭脳を、研究以外に使うなど、けしからん

！』だよ！

それは俺も同意するけどさ……だからって、所用でアマギを寄越すと逆に怒られるって、何なんだ！

一人だけ安全圏だからって、面白そうにニヤニヤ笑いやがって……俺は絶対行かねえぞ！ 前世のボス、つまり研究室の教授を思い出すからホント苦手なんだよ、あの手合い……

「頼むよ。アンヌ隊員……」



「ええ、いいわ……ねっ、ダン！」

だよなあ！ アンヌならそう言ってくれと思うってた！

ダンと一緒になら、たとえ何処だろうと、デートみたいなもんだしな、君たち。

いつてらっしやーい。

ところが、博士は一足早く、山岳地帯に行ってしまったという。バイタリティーがすげえなあ……

今度はそこにフルハシを加え、アオサワ山岳地帯に向かった三人。山道の途中で立ち往生していた、ラリーの女学生二人を拾って、イワムラ博士の借り上げたコテージに運よく転がり込む事になる。

地球防衛軍の協力者でもある博士は、この群発地震が、宇宙からの侵略者によるものではないかと、いち早く察知して動き出していたのだ。

「やあ、早かったですなあ」

「アツ、サカキさん！」

「ん……？ お前たちはサカキを知ってるのか！ この男はワシの右腕だ。若いが優秀な科学者だ」

「そうでしよう。博士の助手が務まるくらいなら、もう何だつて務まりますよう……」  
「フン！ ……ウム？ なんだこれは……？ どうしたんだ？」

フルハシの皮肉に臍を曲げかけた博士であつたが、そこで女学生達の持つていた赤い鉱石に気付く。

「ひ、拾つたんです……」

「拾つた……？ ……サカキ、これを見ろ！」

「……ハッ！ 先生ッ……！」

「そうだ……ウルトニウムだ！」

「ええ、これは大変なことになりますよ！」

博士やサカキが言うに、ウルトニウムとは地球の中心を形作っている中心点、つまり核を構成する物質であり、そうそう地上に転がっているものではないとの事。

恐らく地下深くから、誰かが運び出したに違いない！

このまま大量のウルトニウムを掘り出されてしまうと、核を失った地球はバラバラになつてしまう!!

至急、マグマライザーが空輸され、フルハシ、アマギそしてダンの三人は、地下へと調査に乗り出した！

ドリルの付け根から、超振動レーザーを霧のように噴射し、地層を爆破すると、ぽっかり空いた空洞へ突入していくマグマライザー。

どうやら俺の相棒は、今日も元気に活躍しているようだ……

え？俺は何してるかって？

大型輸送機の駐機作業だよ……

元々、多目的支援機の3号として設計されたこの輸送機、安定性とペイロードを重視し過ぎた結果、全長40？弱と1号と大差ないくらいの大物になってしまい、余りに機動性が無いってなもので、設計はそのまま、半分以下に小型化したホーク3号を、普段は偵察機兼、支援機として使っているという経緯がある。

そして、途中からは完全に戦闘を度外視して組み直されたこの輸送機……離着陸にかかる手間が半端ないのだ。

積み荷を降ろしたコンテナのハッチを閉めて、エレベーターを上げた後に、ジャッキ

アップの足を格納し、そんで機体内に戻ってきたコンテナを固定して……一人できせん  
な!! こんな作業!

そりゃあ搬入作業なんて複数人前提だからこうもなろう……アンヌ、助けて……  
そうだ、アンヌの所へ行かないと!

俺がコテージに着くと、女学生二人組しかいない。

イワムラ博士はいずこ?

え? 助手の落とし物を渡したら、血相変えて出て行った?

しまった! もうそんなトコ!?

## プロジェクトXを倒せ（Ⅲ）

その頃、イワムラ博士の影が人外のものであった事に気付いたアンヌは、それを指摘したサカキに連れられ、コテージを脱出し、山道を歩いていった。

「長い間一緒にいた私でさえ、やっと気がついたのだから……」

「イワムラ博士が宇宙人だったなんて……」

「隊員たちはワナに落ちたんだ！」

「サカキいいいいいい！」

マグマライザーの潜航地点である岩場にやって来たサカキとアンヌに、後ろからイワムラ博士の怒号が響く。

「近寄らないで！ 撃つわよ！」

「サカキ、これはなんだ？」

アンヌの警告も一切無視して、女学生から受け取った謎の基盤を見せながら、助手を問い詰める博士。

「サカキ、君は一体何者だ？ これは地球の金属ではないぞ？」

「し、知らない……これは私のものではない！」

「じゃあ、捨てていいんだなっ!」

博士が基盤を放り投げようとする、イワムラの手から強引にそれを奪うサカキ。

「フウツハツハツハ……とうとう見つけたか! ……ふんッ!」

金属盤を胸にあてると、突如巻き起こる小爆発。

煙の中から、煌びやかな衣装に身を包んだ、昆虫めいた顔の宇宙人が姿を現した!

「暗黒星雲の惑星、シャプレー星人だ!」

「やはり、そうだったか……」

そう、この宇宙人こそ、銀河を一度更地に戻したと悪名高い、シャプレー星人なのだ!

かつて、全宇宙が一つの帝国だった頃、その頂点に座する皇帝が乱心し、他の種族を皆殺しにしていった事がある。ただその際に、そこに住んでいた人民が居なくなれば、当然、領土を維持するための人員が大量に必要となる。営みがなければ、国とは呼べぬのだから。

そこで皇帝の望みを叶えつつ、国土を支える策として、家臣達は人工生命体を国民の代替とする事を考えた。それがこのシャプレー人だ。シャプレイとは、古代バド共用語で『隷属する者』……バド帝国は社会性昆虫をベースに、決して主人に逆らわず、勤勉で頑強な種族を、この宇宙へ新たに作り出す事に成功したのだった!

はじめは単に農民や労働者として使役されていた彼らは、原型となった生物由来の怪力と俊敏性、そして口から可燃性の高い蟻酸を吐く以外には、飛行や巨大化といった特殊な能力を持っていなかったが、放っておけば勝手に増え、その全てが、呆れるほどの忠誠心と奉仕意欲を燃やしていた。生まれながらにして理想の軍隊だったのだ。

粛清される他種族が増えるにつれ、その粛清部隊の手駒としても運用されるようになるのに、そう時間はかからなかった。

バド帝国の暗黒時代は非常に長かったが、バド星人が直接手を下していたのは初期の初期だけであり、あとは全ての他種族が死に絶え（少なくとも帝王個人からはそのように見え）、猜疑の牙が自種族に向くまで、ずっとこのシャプレー人が、数多の星を真つ黒で荒涼とした死の星へと変えては、次々とそこに入植していったのだ……虐殺は彼らの手によって齎されていた期間の方が、圧倒的に長い。

種族が死に絶え、語り継ぐ人もなく、吹きすさぶ粛清の嵐の中で、逸れ散らばる星々の名は忘れられても、このシャプレー人の悪行だけは数々の文献に残されていた。

……ただし、この時の彼らがバド帝国の手先として動いていたのは間違いないので、多くの文献で、シャプレー星人とバド星人を混同して伝えてしまっていたが。

そうして帝国の内部でも粛清が巻き起こり、シャプレー計画を主導し、監督していた家臣が処刑された時、シャプレー人は虐殺を繰り返す日々から解放された。バド家臣団

は、事を円滑に進める為、この計画と現状を、正しく皇帝へ奏上していなかったのである。なにせ絶対に反対されるであろう事が分かり切っていたので。

そして、シャプレー人達の方も、万が一の反逆を防ぐため、ほんの100年も生きられぬ超短命な種族としてデザインされていたので、自分たちのルーツなど、あつという間に忘れてしまった。

ある時期を境に、双方共に認識の外となった両者は、まったく別々の道を辿る事となる。長い長い時の中で、銀河の端々に取り残されたシャプレー人は、各惑星での生活基盤が整うと、やがて有り余る奉仕精神を持って余し、新たな主人を求めてさらに散らばっていった。品種改良の時点で女王を削除された彼らにとって、解放とは拷問と同義であり、奉仕こそが至上の喜び、存在意義だったのだ！

あらゆる他種族を自分らの売りに上位に置き、雇われ、奉仕する。ハウスキーパーから傭兵まで、仕事を求める彼らの売り込みは凄まじく、例えば曰く付きの種族であつたとしても、シャプレー星人を雇い入れる決断をした種族は少なくない。なにせ、彼らを作らせた皇帝がそうだったように、シャプレー星人達もまた、仕事を選ばずなんでも遂行したからだ。それも命令一つで、恐ろしく意欲的に。

そしてシャプレー星人の適応力は、その文化性にも顕著に表れていた。彼らが雇用されるに当たって、元から持つてはおらず、唯一熱心に磨いた技能がある。それが変装技



術だ。その場に溶け込み、同僚として認められる為に、まずはその集団、組織に定められた衣服を喜んで着用し、そしてやがて姿すらも揃える事が出来る様に進化した。彼らの着用する特殊なスーツは、光を屈折させ、あらゆる外見をとることが可能であった。

その巧みな潜入技術を買われ、とある星人に雇われていたのが、このサカキと名乗っていたシャプレー星人。クライアントの意向通りに情報を収集し、つい最近、新たな要望に沿ってウルトニウムを採掘し始めた。もつとも採掘作戦開始当初は、採掘用の怪獣が、大量のウルトニウム反応に誘われ、想定外の地点に向かつてしまうハプニングがあったが……クライアントは喜んでいたので良しとしよう。

「でも、さつきイワムラ博士の影が……」

「フウツハツハツハ……あれは簡単な催眠術だ。アンヌ、キミの影を見てごらん」

アンヌは先程、イワムラ博士の影が異星人の形をしていたが為に、サカキの嘘を信じる事になった。だがシャプレーに言われるがままに、アンヌが自分の影へ目を向けると、彼女の影もまた異形のモノへと変わっていた。

この影は、彼が今までに仕えた事のある、他の惑星人達の姿を模して用意していた偽物だ。

「わかったかね……？ フンッ！」

「あ、危ない！」

アンヌが目を離れた一瞬の隙をついて、上方の岩場へと飛び移り、有利な位置から、手にした光線銃による攻撃を仕掛けるシャプレー星人。

彼女も即座にウルトラガンで反撃しようとしたが、狙いが定まらない！

イワムラ博士が咄嗟に押し倒したお陰で、なんとか逃れたが……次はないだろう。

だが、その場へひっそりと近づくと影があつた。

……ソガだ！

「なんとか間に合つたか……」

全速力で走ってきたので、息を整える必要があつたが、崖上の藪にいる俺の事を、まだシャプレー星人は認識していない。

ここからでは、岩が邪魔でうまく狙えないが……アンヌが奴の姿勢を崩してくれさえすれば射線が通るはず！

しかし、横合いから彼女らのやり取りを見ていた俺は、首を傾げる。

なぜアンヌはすぐに反撃しないんだ……？ 疑問に思い、崖の方を窺う。

岩場の影にちらりと見えたシャプレーの姿を見て、俺は驚いた。なんと奴の姿が前後にブレて見えるではないか！

……そうか、虚像だな!?

影の形を変えられるという事は、周囲の光を自由に操れるという事！ その技術を応用して、オーロラや蜃気楼のように、自分の姿をダブらせて、彼女の目を欺こうとしていたのかっ！

アンヌの角度からでは、岩場のどの高さに敵の急所があるのか、確信が持てないという事になる……だが、残念だったな！ 横からでは本物が丸見えだぞ！ 俺の場所から見た時、偽物は中空に浮いて見える！

「アンヌ、目を狙え！」

「ええ！」

アンヌの放ったレーザーは、一番手前に見える敵の、巨大な複眼を撃ち抜いた。攻撃は虚像を素通りし、その後ろにいた本物の星人の胸元を焼く。

それが丁度、虚像を作り出す変身プローチの場所であったのは、偶然なのか、それとも必然か。

致命傷とはいかずとも、伝わる熱に思わず星人は身をよじる。

それだけ見えれば十分だツ！

ソガの手元から本命の光線が発射され、今度こそ宇宙人の目を焼いた。体内から発火し、火達磨になりながら落下するシャプレー星人。

だが、彼の生命力と任務に対する忠誠心は本物だった。

炎の中で上げる断末魔は、配下の怪獣に無差別攻撃の指令を出していたのだ！

シャプレー星人は、奉仕精神と勤勉さから、常に根っからの被雇用者であったために、雇われる側の心理というものも、よくよく弁えていた。どのような指示であれば配下が動きやすいか？ この仕事には如何様な技能が必要となるのか？ それは適材適所という概念を知り尽くした、優秀かつ最良の現場指揮官。彼らは宇宙でも有数の傭兵であると同時に、銀河屈指の、怪獣使いだったのである！

「ギラドラアアス!! ギラドラアアスツ!!」

主人の死に呼応するかのように、山を切り裂き、岩石と金属がひっかき砕けるような、独特の雄叫びを上げながら、怪獣ギラドラスが出現した！

太く巨大な牙と角を、真っ赤に光らせながら、手足のないツチノコのような胴体をズリズリとセイウチの如く引き摺り、飼い主の仇を討たんと、逃げるソガ達を追うギラドラス。

彼が咆哮をあげ、ひとたびその角を輝かせると、たちまち辺りには暗雲が立ち込め、太陽をすっぽり覆い隠してしまう。体表の各所で深紅に煌めく結晶体には、惑星の運行すらも左右する恐ろしい力の一端が取り込まれていた。ギラドラスは天候を操ることが出来るのだ！

「デユワツ!!」

そんな時、地底からマグマライザーを抱えたセブンが飛び出して来る。ギラドラスの暴走で、機能停止に追い込まれた地底戦車だったが、セブンの働きでなんとかドロドロのマグマに没する事だけは避けられたようだ。

手にした仲間達を安全圏に降ろすと、そのまま怪獣に格闘を仕掛けるセブン。

純粋なパワーでは、互角といったところか。しかし……強敵を前に、ギラドラスの牙が妖しく光る!

墨でも垂らしたかのような黒雲から、激しい雷雨がセブンの背中を襲った! 足元を次々に地割れが奔り、正面のギラドラスからは竜巻の如き強風が叩きつけられる。ありとあらゆる異常気象が、我らのヒーローの身に降りかかろうとしていたのだった。

ギラドラスを相手にするという事はすなわち、気まぐれな地球、大自然の驚異にたった一人で立ち向かうのと変わらない!

嵐の中で、思うように身動きの取れないセブンは、ギラドラスの巨体から繰り出される尻尾や体当たりを躲すことが出来ないでいた。そしてそんな彼にとって、事態はさらに最悪の方向へ移り変わっていく。

戦いを見守るソガ達の前で、チラチラと舞う風花……大気中に白いモノが混じりはじめた。雪だ!

「それだけはマズイ！」

セブンは寒さに弱いつてのに、こんな時期に吹雪なんぞ呼ばれてたまるか！  
確か、ギラドラスの天候操作は、牙と角の力だったはず！

「アンヌ、セブンを援護するぞ！ 牙を狙え！」

「分かったわ！」

俺達の攻撃が、右の牙に命中するが、まるで堪えた様子がない。

そんな時、俺のヘルメットに拳骨が落ちる

「アッ、アッ、!!？」

「ばああつかもおん！ なにをやつとるかあつ！」

「痛つてえなあもう！ あにすんですか……ちくせう」

「それはワシの言うことじゃわい！ お前さんのその、ほつそい目ん玉かつぽじつてよう見んか！ 奴の牙はウルトニウムじゃ！ あの鉱石は光線や電波の発振媒体としても、非常に優秀な性質を持つておる。そんなちやちいレーザーが効くものか！」

「何ですつて!!？」

そうかアイツ、ウルトニウムを取り込んで、自分の強化に使つてるのか！ まるでミノウミウシじゃないか。

クソツ！ こんな事ならエレクトロHガンでも担いでくりや良かった……いや、あれ抱

えて山道は流石にキツイ……

このままセブンが吹雪の中で戦うのを、指を啜えて見ているしか無いのか？

いったいどうすれば……

「喝ッ！ お前さん、なあにを惚けとるか」

「いや、効かないって言ったの博士じゃないっすか」

「フン、わしを誰だと思っとる！ ……コレじゃ、コレ！」

「そ、それは……!!？」

「サカキさんの変身ブローチ！」

なるほど、焼死体から？ぎ取っておいたのか……でも、それが何だっけ言うんです？

「これはな、ただの変装道具ではない。もしそうなら、なぜポケットなんぞに出し入れする必要がある？ これはな……恐らくあの怪獣のコントロール装置でもあるんじゃないや

よ！ 奴のウルトニウムで出来た牙と角は、そのまま高性能な受信器という訳じゃ！」

「ええっ!? コント……マジ!!」

「いいか見とれ！ ここをこうして……いや、こつちかな？ ええい分からのう……

おお、これが！ うーむ……難しいな……ああもう、黙ってわしの言う事を聞かんか！

「このポンコツ！」

博士が基盤をメチャクチャに操作すると、途端にギラドラスはあっちへフラフラ、

こつちへヨタヨタ。まるで盆踊りでも踊っているようだ。奴の牙からは、稲妻や嵐に混じって花吹雪まで出る始末、どうなってるのそれ？

次から次へと四方八方に攻撃が飛んで、まったく危険極まりない。あんたのカミナリじゃないんだぞ！

「博士、それを地面に！ ソガ隊員、爆弾よ！」

「ええい、いるかこんなもんっ！」

「そらっ！ みんな伏せろ！」

博士の叩きつけた基盤に、小型爆薬をたくさん挟み込んで、放り捨てる。

小さな爆発音に、目玉クリップだかプルタブだかよく分からん、アンテナめいた部品が弾け飛んだ！

するとたちまちギラドラスは悲鳴を上げ、白目を剥いて口角から泡を噴く。

「今よウルトラセブン！ 断つのよ！」

「ジューワッ！」

気合い一閃、セブンのアイスラッガーがギラドラスの首を刎ね飛ばした！

断面からは血液の代わりとして、ルビーのように真っ赤なウルトニウムがザラザラとあふれ出る。

わーい、宝の山だ！ ……まあ人類にはまだ精練技術が無いから、宝の持ち腐れなん



ですけども。

セブンが暗雲を切り払い、戻った青空に綺麗な虹が掛かる。光のアーチを潜って飛んでいく真つ赤なヒーロー。

マグマライザーの無事を確かめたアンヌが、ビデオシーバーで連絡を取る。

「隊長、ウルトラセブンの働きで怪獣を倒し、宇宙人の侵略は終わりました」

「よかった……マグマライザーはどうした？ ……無線が通じないんだ」

「はい、こちらフルハシ……、マグマライザーも無事、ウルトラセブンによって、助け……  
られたらしいです」

「何だ！ ……らしいです、とは！」

「残念ながら気を失ってましたので、面目ありません……」

「いやいや、みんな無事で何よりだ、すぐ、帰還せよ」

「はい、了解！」

「ただし、フルハシは……、イワムラ博士のボデーガード兼助手として残れ」

「ええーっ?!」

「しかし、博士の助手に成りすまして潜入するなんて、まったく、ふてえ野郎でしたね！」  
「そうだな……」

コテージから機材を撤収させながら、フルハシがぼやく。

それに対し、イワムラは窓の外をぼんやり見ながら、生返事を返した。

あの時……マグマライザーに乗ろうとした自分を、なぜサカキは止めたのだろうか……

？

博士が地底の様子から、なにか巨大な生物の蠢動を嗅ぎ取ってしまうのを恐れたから

？

どうせ隊員を地底戦車ごと、溶岩に沈めてしまうつもりだったなら、あのまま一緒に始末しておけばよかったものを……

「いやあ、しかし大荷物なあ！ 敵ながら、よくまあ働いたもんですよ！ アイツも！」

「ああ……本当に優秀な、右腕だったんじゃないよ……」

そう呟く老人は、女学生達の乗るラリー車のテールライトが、コテージからどんどん走り去っていくのを、しばし窓から見送っていた。

## 海底基地を砕け（I）

夜の闇に沈む海、月明かりの下を行く貨物船、第3黒潮丸。

「船長、よく星が流れますね……」

「ふむ……流れ星にはいろいろ不吉な物語があるよ……嫌なことが起きなきや良いが……」

甲板で休憩中のウダガワ船長は、胸騒ぎを覚えて仕方が無かった。

こんな夜はいつだって、なにか起きてきた。あの時もそうだ。刑事の兄や姪の力オリが失踪した夜も、自分が乗っていた響が触雷してしまったあの日の前日も、こんな夜だった……

根拠なんてないが、これがベテランのカンという奴だ。あまり当たって欲しくはないが……

「船長、船長……あれは何でしょう？」

船員が指さす先では、黒潮丸の進路上で、水面が沸き立つように激しく揺れていた。錯覚かとも思ったが……

「な、なんだアレは!？」

海面から、大きな鉄の塊がニュツと立ち上がったかと思うと、船を襲う轟音と閃光！  
激しく炎上する黒潮丸。

電信を使い、丘に残してきた家族へ、最期の言葉を伝える船長は、炎の向こうにいつかの光景を幻視した。

なんて恐ろしい事だ！ 緊急電話が繋がるかは分からない。だが、これだけは、伝えなくては……！

「大和だ……大和を見た！ 誰もこの海へきちやいかん！ 誰も……！」

必死に叫ぶ老人の眼前で、あの巨大な三連装砲が、月明かりの下で真っ赤な炎を噴き上げた。

---

作戦室に入ってきたタケナカ参謀の表情は優れない。

「北九州地区からの報告によりますと、第3黒潮丸が行方不明。海洋保安部で搜索中とのことです」

「どうもおかしいな……最近の海難事故は……」

「隊長！ またSOSです！」

「なにっ！」

「南鳥島、北北西113キロの地点です」

「アマギ。すぐに調査に出発！」

「ハイッ」

アマギが快速のホーク3号で偵察へ赴く間、ダンとアンヌはポインターで第三黒潮丸関係者の元へ、事情聴取に向かったのだった。

だが、どちらの成果もあまり芳しくはなかった。

「ご苦労。どうだった？」

「はい、黒潮丸船長のご遺族に会って参りました」

「何か事情はわかったかね？」

「は、沈没直前……海上からの緊急電話によりますと、戦艦大和らしい姿が海上に現われたと言つて、電話が切れたそうです」

「なに、戦艦大和が現われた？」

そんなはずはない、大和は確かに沈んだはずだ。それがどうして……

キリヤマとタケナカが訝し気に顔を見合わせる。

釈然としない表情で、帰還したアマギの結果報告を聞く二人。

「SOS受信後、少なくとも30分以内に発信地点に到着しているんですが……」

「ダメか？」

「はい。遭難地点には、油も破片も見当たりません」

とても普通の遭難とは思えない。もしや何者かの攻撃では……？

「跡形もないというのは、どうもおかしい……参謀、徹底して調査してみる必要があると思われませんが」

そんな折、タケナカ宛にパリ本部から電文が届く。

「……地中海や大西洋で行方不明の船舶が続出しているが、極東ではどうかと言ってきた」

「タケナカ参謀。極東海域の嚴重な調査が望まれますが……」

「うむ……早速、キリヤマ隊長にご苦勞願おうか！」

「はい！」

「唯一の手がかりは、黒潮丸の船長の電話だ。大和を見たという……」

「では、搜索は、徳之島付近から始めてみましょう。フルハシ、アマギ、ハイドラランジャーで出発！」

本来であれば、戦艦大和は激戦の果てに、今も徳之島沖で、永い永い眠りについているはず……だった。

「隊長、大和が見当たりませんッ!!」

「なにっ! 大和がない!? 水深は? ソナーに変化はないか!」

ハイドランジャーの計器に異常はない

ならば一体、沈んでいる筈の大和は、どこへ行ってしまったのか……?

だが、ハイドランジャーの搜索は無駄では無かった。

目を皿のようにしていたフルハシは、巨大な大和の残骸の代わりに、海底をひっそりと航行する、ヒトデ型の物体を発見した!

「隊長、奇妙なヒトデ型の物体を発見。金属反応があります!」

「よし、追跡しろ!」

フルハシは謎の物体を追うが、ハイドランジャーに気付いた敵は、凄まじいキャビテーションを引き起こし、計器を存分に狂わせてしまう!

「どこ行きやがったんだあ……? ハイドランジャー2号、ハイドランジャー2号!」

「はい、こちらアマギ!」

「ヒトデの化け物を見つけた。追跡中だ。気をつけてくれ」

「了解!」

巨大ヒトデを見失ったフルハシは、悔しさを滲ませながら、2号艇へ注意喚起した。だが、そんな彼らを嘲笑うかのようには、アマギのハイドランジャーへ忍び寄る異形の影。

進行方向を選ばぬ異様な機動力と、五つの先端から放たれる強力なバブルパルスによって翻弄され、機体を襲う衝撃に耐えきれず、やがてアマギは失神してしまう。

2号艇が消息を断ったことで、ついに事態は一刻を争うと判断したキリヤマは、後の指揮をタケナカに託し、自ら出撃することを決意する。

「フルハシ、2号艇応答なし！ 大至急連絡をとってくれ。こちらはホーク1号で海上捜査をする！」

「了解！」

作戦目標は、既に大和の捜索から、謎のヒトデ型円盤の追跡へと変わっていた！ 海と空の二面から探せば、きっと敵を追い詰めることができる。

この時、キリヤマの判断は間違っていないなかった。……ただあまりにも的確に、相手にとって最も望ましくない行動をとってしまったが為に、敵へ次なる手札を切らせる決断を迫る事となってしまう。

「何?! 怪物が海に潜った? で、場所は? 下田港だな、了解！」  
伊豆下田から届く事件の通報!

謎の巨大物体が、伊豆半島の港に現れた!

「参謀！」

「よし、ダンにはホーク3号で出動スタンバイ！ ソガ、アンヌはポインターで住民の救援



にあたれ！」

「はいー！」

「キリヤマ隊長、伊豆に怪物が出た。すぐ帰投してください！」

徳之島へ出動した、キリヤマ隊長のホーク1号へ、作戦室の参謀から、応援要請が届く。

もしも敵が本当に大和であった場合、3号とポインターだけでは心もとないと言わざるを得ない。

今から引き返したとて、ハイドランジャーでは到底間に合わないが、音速を超える1号ならば、救援には十分なはず。

「了解……ハイドランジャー1号」

「はい、こちら1号……2号艇がまだ、見つかりません……」

「そうか……フルハシ、伊豆で事件だ！」

「はい……ですが隊長！ アマギが……」

「……よし、俺は帰投する……あとは頼むぞ！ ……いいな！」

踵を返してとんぼ返りしていくキリヤマのホーク。

だが、敵はそれをこそ待っていた！

「うわあああああつ!!」

今度はフルハシがキャビテーションパルスの餌食となってしまう！

このヒトデ型の円盤は、ミミー星人の宇宙船。母星が陸地のほとんどない海洋惑星である彼らは、潜水艇こそが、地球人における車のようなもの。いかに防衛軍のハイドランジャーが高性能とは言え、生まれたときから水中で過ごしてきた宇宙人に対しては、流石に一歩及ばなかつたのである。

こうして、ミミー星人の巧みな陽動分断作戦で、ウルトラ警備隊のうち、二名があつたという間に虜囚の身となつてしまつたのだつた……

下田港に再び姿を現した謎の怪物体。

全身を真っ黒な鉄錆と海藻に覆われ、所々が不気味に歪んだソレは、その異容を余すところなく堂々と、白昼の漁港へ晒していた。

どれほど変わり果てた姿になつたとしても、その物体の持つ独特のシルエツトは、もはや隠しようがないほどに、その正体を地球人に対してまざまざと見せつける。

日光をギラギラと反射してそそり立つ鉄塊は、紛れもない大戦艦、それも超弩級の

……なんとも恐ろしい幽霊船だ！

これぞまさしく、海底に散らばる沈没船のパーツを寄り集めて作られた超兵器、アイアンロックス！

ミミー星人は、地球の海に沈む無限の鉄資源に目を付けたのだ！

ミミー星では元々、海底に沈む岩石や、巨大動物の骨等を住居とすることで、多くのウニやヒトデのような棘皮人達が発展してきた。その際大いに役に立ったのが、とある群生固着生物だ。固着生物とは、フジツボや牡蠣のように、岩や船底にくっついて生活する生き物たちの事で、ミミー星人は、この固着生物の一種を、住居用の接着剤として利用してきた。

この便利な生きた建材は、接着対象を選ばず、それ自体が一定の強度を持ったために、どんなに重く堅い材料を使ったとしても、巨大な建造物をどんな場所にも自由に建てるこ  
とが出来た。

ミミー星人はほんの90センチ程度しかない小さな種族だったので、身を隠すための住処を強固に造ることが出来なければ、とてもあの厳しい生存競争を勝ち抜く事はできなかつただろう。

やがて彼らは、このミミックカルサイトを、住居の偽装だけでなく、兵器にも転用することで、材料さえあれば、即席の巨大兵器を現地で簡単に作る事が出来ると気付いた。

どんなガラクタの山も、ミミー星人の手に掛ければ、あつという間に宝の山だ。

その点、この地球という星は素晴らしい。母星ほどでは無いが、7割近くが海水で覆われている上に、手ごろな金属がゴロゴロと転がっている。第二の資源惑星として、必ず手に入れて見せるぞ！

ギギギ……と、金属の軋む不快な音を響かせて、巨大な砲塔が展開する。

ミミー星人の威力を示すため、ついに海底の亡霊が地上へと攻撃を開始したのだった！

艦砲射撃の降り注ぐ中、ついにポインターが港に現着する。

一足先に飛来していたダンのホーク三号へ、全身に搭載した無数の砲塔から、激しい対空砲火を浴びせているのが見える。

「あれだ！ アンヌ、ウルトラミサー……」

「ソガ隊員、どうしたの!? ウルトラミサーでダンを援護するんでしょう？ 発射準備完了よ！」

「おい、あれ……なんかおかしくないか？ アイツってあんなにデカかったか……!?」

おいおいおい、なんか俺の知ってるアイアンロックスと違うぞ？

まずぱっと見からして違う。いくらデカイ砲塔がアイデンティティのアイアンロックスとは言え、あんなにハリネズミみたいに全身くまなくついてたか……？ それで、それら大砲を乗せてる船体の形がぜんぜん違う。

……俺の記憶と比べて、異様に横幅がデカイような……？

嫌な予感がする。

「アーン、双眼鏡貸してくれ！」

拭えない違和感に、奴をよくよく見てみると……な、なんだこりやあ!!

大和本体を、左右から挟み込むように、船がそのまま横に繋がって1、2、3………双胴船どころか三胴船じゃねえか!

艦橋部分なんか、増築に増築を重ねて違法建築みたいになってやがる……これじゃあ大和じゃなくて扶桑だよ!!

黒潮丸の船長も、よく間違えなかったもんだ……

双眼鏡で、まったく覚えのない追加パーツ部分の、船首に当たる部分を見たとき、オレの嫌な予感はず信へと変わる。

錆びてボロボロの中心部より、比較的新しく見えるその舳先には、かすれて読みにく

くなつてはいたが、白い塗料でこう書かれていた。

『 T D F 』

なんてこつた……

奴ら……神戸でキングジョーが沈めた戦艦を拾いやがつた!?

## 海底基地を砕け（Ⅱ）

「やってくれやがったな……！ 参謀！ 参謀、大変です！」

「どうしたソガ！」

「敵は戦艦大和の残骸をサルベージして、軍艦島にしてしまいました！ しかも、ベースは大和の船体でも、その上から地球防衛軍の戦艦を張り付けて、装甲や武装を強化してあります！」

「なんだと!? 防衛海軍の!? ……という事はまさか！」

「対ペダン作戦で沈んだ……艦艇達だと思われませ……！」

「なんですって！ 本当ですか、ソガ隊員！」

「ああそうだ……あの右舷側の切っ先は間違いない、ゼノン号だ！ 見間違えるもんか！」

「な、なんとという事を……」

通信機の向こうで、ダンが絶句しているのが分かる。

俺だつてまさかこんな事になるとは……クソッ！ 完全にオレのミスだ！

ちよつと考えれば分かりそうなものだったのに、どうやってキングジョーを退けるか

ばかり考えて、コイツの存在を忘れていた……

アイアンロックスといえ大和という固定観念から、こうなる可能性を無意識に除外してしまっていたんだ……奴にここまでの拡張性があつたなんて！

「許さない……絶対に許さんぞ！」

「おい、どうしたダン！ 無茶はやめろ！」

「ソガ隊員、ダンを援護しないと！」

「無茶いうなアンヌ！ いくらポインターって言ったって、大和の主砲を食らったら、周囲の地形ごと、跡形もなくなってしまうかも知れないんだぞ！ どうやって車と戦艦がやり合えるってんだ！」

「そんな……ダン、やめて！」

原作より激しい対空砲火に、攻めあぐねていたダンが、突然無茶な攻撃を繰り返し始めた。

アイツ……頭に血が上ってやがる！

「こうなったらやるしかない！ アンヌ、ウルトラミサイル、発射！」

「ハイ！」

ポインターの後部から展開したロケットランチャーが火を噴くが、アイアンロックスに対しては焼け石に水。



高角砲や装甲版をいくら吹き飛ばしても、次から次へとせりあがってくる。？いても？いても変化がない……まるで鉄の玉ねぎだ。

それでも俺達の茶々入れを煩わしく思ったのか、アイアンボックスはぐるりとこちらへ艦首を向けると、無数の砲台群で埠頭に激しく艦砲射撃を行ってきた！

「キャアア!!」

「ア、ア、ア、→!!!」

「アンヌー！ ソガ隊員！ ……くそつ！ 冷静になれ……ダン……」

至近弾の爆風ですら、ポインターが押し返される程の威力！ バリアが無かったら、今頃ミンチだぞ……

……いや、まてよ？ 本当にそうか？

もしあれが本物の大和の主砲だったら、こんな漁港、一発で全部吹き飛ばはずだ……ところろが、弾の当たった家屋は確かに吹き飛び炎上するものの、かろうじて原型はとどめている。

もしかして、奴の武装は、戦艦の主砲そのままでは……ない？

敵はいったい、何を撃っているんだ……？

冷静になってみると、さつきから奴の攻撃が見える。それがそもそもおかしいじゃないか。

てつきり曳光弾かと思っていたが……それにしても弾速が若干遅い。

第一、一度沈んだ船の弾薬が無事なはずはないし、いくら大和が頑丈とは言え、海底で錆び付いた砲身が、発射時の爆圧に耐えられるはずがない！

そうか、分かったぞ！ さてはミミー星人め……砲塔の中身を全部、ロケット砲に改造しやがったな？

砲身内で炸薬を爆発させ、その圧力で弾を撃ち出す大砲と違って、弾自体に推進力のあるロケット弾なら、砲身の強度はそこまで必要ない。ならばどうして砲塔をそのまま流用しているかと言うと……きつとあの長い砲身を、ある程度の狙いをつけるため、レール代わりにしているんだ。ロケット弾は命中精度が悪いからな。

そしてロケット砲のもう一つの欠点は……同じ大きさなら、砲弾よりも威力が明らかに低いことだ！

重たい砲弾で押しつぶされたら、ポインターのバリアも意味はないが、爆風を弾くだけでいいのなら、電磁バリアでも十分耐えられる！

ダンのホーク3号を追う対空砲のすぐ目の前を、俺はボンネットのレーザー砲で、薙ぎ払うようにして狙う。

徐々に加速していくロケット弾は、射出直後が最も遅い。こうすることで、飛び出したロケットを撃ち落としてやろうってわけさ！

運よくレーザーに引つかかったロケット弾が爆発し、後続の弾へどんどん誘爆していき。

ひとたび破片が飛び散れば、それが障害となつて、発射を阻む壁となつたのだ。まるで大気圏外で人類の宇宙進出を阻むデブリ帯のように……

「みんな、よく持ちこたえた！ いまから私の攻撃を援護せよ！」

「隊長！」

アイアンロックスの背後の空に、銀色の三角形がきらりと光る。

みるみるうちにそれは大きくなって、隊長の駆るホーク一号が、現場に駆け付けた事を知らせてくれた。

海域に到達したキリヤマは、海面スレスレの低空飛行で敵の死角に侵入したかと思うと、迎撃砲台の描く無数の火線にまったく怯むことなく、雷撃機のように敵へ向けて一直線に突入し、腹に抱えた大量のミサイルを、至近距離からこれでもかとお見舞いした！

後部の砲台群が吹き飛び、新たな砲がせりあがるまで、一瞬だけ無防備になるアイアンロックス。

艦とぶつかる寸前に急上昇したキリヤマは、今度はその隙をついて、敵の後部でひらりと宙返り、背面飛行のまま、急降下爆撃を仕掛けた！ ホークの投下した爆弾が、大

和の巨大な煙突にホールインワン！

特徴的な円筒を、木っ端みじんに吹き飛ばす！

「やったッ！」

「いや、まだだ！」

隊長機の後ろを、左右にせり出した甲板上に設置された砲台が狙う、

原作では、巧みな操縦技術によつて、一度は巨艦を沈黙させた隊長の攻撃も、三倍以上の耐久力へと強化されたアイアンロックスには、致命傷とまではいかなかった！

「なんてふてぶてしい奴なんだ……！」

下田港でウルトラ警備隊が激闘を繰り広げている頃、作戦室にパリ本部から通信が入る。

怪物は、アイアンロックスと呼ばれ、沈没した戦艦などの、海底の無限の鉄屑を利用した、強烈な爆弾ロボットとわかった。欧州各国の基地が狙われ、静止して15分後に爆発することが知られたが、敵の本拠地はわからなかった……

「なんですつて?! 爆弾ロボット?!」

「ああ、なんでも沿岸都市を丸々吹き飛ばす威力だそうさ。概算したが、爆発半径に富士山も入っている。この極東基地が地下施設とは言え、どんな影響があるかもわからん。ましてや、日本に現れたアイアンは、その他の地域のものより三倍以上の大きさを誇る

のだ。爆発の威力もどうなるか分かったもんじやない」

「なんとしてもここで撃滅せねば！」

「自爆までしようというのか……あの姿で！」

「ダン！ 突出し過ぎだ！ 戻れ！」

「ウオオオオオオオオオオ！！！」

今度は隊長の制止も聞かず、回避をかなぐり捨てて一心不乱に攻撃を繰り返すダン。敵の中央部に鎮座する、巨大な艦橋へ肉薄するが……その扶桑のごとき歪な艦橋すらも、各所に対空機銃の張り巡らされた、防御塔だったのだ！

「アッ！ ダン！」

「ダアアアアアン！！」

「バカ！ やめろアンヌ！ 今バリアから出たら、体がバラバラに千切れ飛んでしまうぞー！」

ダンがハチの巣にされる様を見ていたアンヌが、悲痛な叫びを上げる。黒煙を上げて海上へ墜落していくホーク3号。アマギとフルハシは消息不明、ダンは撃墜され、残る戦力は強行軍のホーク1号と小さな小さなポイントターだけ。万事休すか！

「デュアアアア！！」

その時、海面がピカッと瞬いたかと思うと、海の中から真っ赤な巨人が飛び出して来

た！

怒りの炎をその身に宿した、地球の守護者、ウルトラセブンだ！

「ハツハツハツハ……来たかセブン。キミは、我々の力を知らなすぎる……」

「なにッ？」

なんとセブンの脳内に敵が語り掛けて来るではないか。

それもこの声から滲み出る余裕……セブンが現れたというのに、狼狽えるどころか、まるで待ち構えていたかのような……

「我々は、海底に眠るこの豊富な資源……それも、地球人が利用していないものをいただくだけだ……」

「なんだッ……!?!」

「総攻撃で、ミミー星人の威力を見せてやる!!」

そう、ミミー星人はこの時を待っていたのだ！

ウルトラセブンが、アイアンロックスに勝負を仕掛けるこの時を！

アイアンの全砲門が一斉に火を噴き、セブンの体に真っ赤な炎の大輪を咲かせる。

さしものヒーローも、これほど膨大な鉄量を一度にぶつけられては、たまらない。

思わず海面に膝をつき、一瞬意識を飛ばしてしまふ。

それは、致命的な隙を晒す事になった！

「デュオオッ！」

「しまったッ！ セブンが捕らえられたッ！」

アイアンロックスの各部分から、無数の錨が射出され、セブンの両手両足、胴体から首に至るまで、雁字搦めにしてしまう！

「オイオイオイオイ！ 鎖が多すぎる!! そんなん反則や！」

本編では、手枷足枷の付いた鎖に捕らわれたが、結局は一本の鎖に過ぎず、苦戦はしたものの、最終的に飛び上がったセブンが猛烈に回ればなんとかなった……だが、これでは空中で回転してねじ切るところか、身動き一つすらできない！

危うしセブン！

「くそー… だめだ！ 鎖が硬すぎる……それに狙いがつけられん！」

ソガは、今回の戦いにおいて、この鎖を破壊する事こそが、自身の役割だと任じていた。しかし、あまりに予想外の展開に、半ばパニックに陥ってしまったのだ。

ウルトラミサイルを打ち込んでも、鎖のたわみによって衝撃をいなされてしまい、効果が薄い。かといってレーザーでは、頑丈な鎖を焼き切る為に照射し続けなくてはならず、巨大なセブンが少し身じろぎしたただけで跳ね回る鎖の一点を狙い続けるのは、いかなソガと言えど至難の業であった。それに、そうしている間にも、アイアンロックスカらロケット攻撃が雨あられと飛び、セブンの体を打ち据える。破壊できたのはほんの数

本で、これではまったく焼け石に水だ。そうこうしている間にミサイルが尽きてしま  
う。

「隊長！ セブンを助けなくては！」

「駄目だ！ 元々偵察目的の出撃だったんだ……満足な爆装はしていない！ あとはこ  
ちらもレーザーだけだ！」

「そんな……キャアアア!!」

「アッ アッ アッ アッ アッ アッ →!!!」

「アンヌ！ ソガ！」

直撃弾を食らい、派手に吹き飛ばされ、逆さまに横転してしまうポインター。

電磁バリアは二人の命を守り切ったが、これではもう攻撃に参加することは出来ない  
だろう……

「アンヌ、アンヌ！ 駄目か………クソッ！ いったい、どうしろってんだよ！」  
気絶したアンヌを揺さぶるのをやめ、ハンドルを殴りつけるソガ。

オレのせいだ……オレが余計な事をしたからこうなったんだ……オレがきちんと予  
想していなかったばかりに……！

こんなところで……！



その時！ アイアンロックスの後背で爆発が巻き起こる！

な、なんだ？ 隊長のミサイルは弾切れのはずだ……いったい誰の攻撃だ!?

飛来したミサイルと思しき攻撃の排気煙の軌道を辿って、双眼鏡で海上を確認した俺は驚愕した。

そんな……まさか!?

鋭角を基調とした、さながらイージス艦の如きシンプルで先進的なフォルム。ピラミッドのような独特の形状をした艦橋。

槍のような舳先で波を切り裂き、美しく輝く白磁の船体を、沈みゆく夕日で真っ赤に染めながら、見せつける様に、大海原へ悠々とその姿を晒すあの艦は……間違いはない。

あれは……!!

「対艦ミサイル、初弾全弾命中。敵、損害軽微なれど、攻撃の効果を確認ものなり」

「よろしい！ そのままミサイルによる牽制射を続行！ 砲戦距離まで接近したのち、新兵器による肉薄攻撃を試みるぞ！ 本艦はこれより作戦海域に突入する！ 機関最大船速！」

「機関、最大船速！」

「諸君、前回は風船のように浮かべられて不覚をとったが……海の上では依然として、こ

のマックス号こそが、無敵の大戦艦なのだという事を、あの不屈き者に教えてやれ！  
……マックス号、交戦せよ！」

「戦闘開始!!」

## 海底基地を砕け（Ⅲ）

「マックス号、マックス号！ 応答せよ！」

「こちらマックス号だ。その声は……どうやら無事だったらしいな、臆病ガンマン！ 間に合って何よりだ！」

「来てくれてありがとうございます……本当に！」

「なんの、海の男は借りを作らんと言っただろうが。それに……姉妹艦があのような強敵に対し、一矢報いて華々しく散っていったと言うのに、ネームシップだけが全面降伏したなどと、不名誉極まる！」

「う……」

「我々海軍をここまでコケにするのは、貴様を置いて他にはおるまいと思っていたが……今回の敵だけはどうしても看過できんツ！ 沈没船をなんの断りもなく回収するに飽き足らず、あのような出来損ないのガラクタに仕立てあげるなぞ……先の英霊の、いや、海に生きる者達全てに対する最大級の冒瀆だ！ 断じて許さんツ！」

さもありません。自分の船を占拠された怒りだけで、あの恐ろしい異星人達を一匹残らず叩きだしてしまう程に誇り高い海の漢が、戦友たちの墓標を勝手に弄繰り回されて、

怒り狂わない訳が無かった。

「艦長、まもなく主砲の射程圏内に入ります」

「よし、あの悪逆非道な墓荒らし共に、自分達がどれほど大きな墓穴を掘ったか、その身に思い知らせてやるのだ！ 撃ちイ方、用意ッ！」

「撃ち方ー用意!!」

「……ッてえーっ！」

マックス号の電磁投射砲が青白く煌めき、敵の砲台群を吹き飛ばす。アイアンロックスは慌てて後部甲板の砲を新たな敵へと指向するが、その数は決して多くない。原作時点からして、アイアンロックスの砲配置は、そのほぼ全てが前面へ同時に火力を投射できるとな造りになっていたので、背後からの攻撃には比較的無防備であったのだ。

それに加えて今回は、左右に大和より一回り小さな艦を、成金趣味な装飾品のようにゴテゴテと貼り付けていたために、巨大な大和の主砲を後部へうまく展開する事が出来ず、急に現れたマックス号の相手をするのは、申し訳程度に増設された後部副砲ばかりであった。

とは言え、その副砲一つでも、元が常識外れに巨大な大和の主砲と比べて、の話であつて、通常の戦艦主砲と何ら遜色ない大きさである。そしてその脇を固める連装砲や単双

砲達も、全てが巡洋艦や駆逐艦の主砲だったのだから、それらが織りなす火線の激しさは、単艦に対しては過剰ともいえる物だ。

そんな出迎えを受けたマックス号はと言うと……

「……ふん、ド素人め。敵は船の造り方と言うものを、まるで理解しておらんようだな、艦長」

「まあそういつてやるな、所詮は思いあがつた逆賊だ。泥棒風情に戦艦の建造技術を期待する方が、酷と言うもの。だからこそ、あのような暴挙に出るしかないのだろうよ。我々のような……誇りというものが、まるで無いのだ、奴らには」

「ハハハ、それはその通りでしたな。おいお前たち、今日はあの海賊共に、海での戦い方というのがどういう物か、特別に見せてやれ！ 嫌と言う程な！」

「Aye aye! sir!」

最新鋭の快速艦と、超弩級の老朽艦による壮絶な砲戦の火蓋が、恐れを知らぬ海兵達の気迫の籠った返答を合図として、たったいま切られた！

バラック要塞から乱れ撃たれる猛烈な迎撃ロケットの嵐を、マックス号は巧みな操艦でかいくぐり、飛来する直撃弾は各所に搭載された近接防御火器で撃ち落とす。亡霊船から旨うちされる攻撃に対して、時には電磁防壁と分厚い装甲で弾き返しながら、新造戦艦自慢の主砲や副砲で、ひとつひとつ的確に相手の反撃手段を奪っていくマックス

号。

縦横無尽に海を駆けるその勇姿は、これまでの鬱憤を晴らすが如く目覚ましいもので、あつという間に彼我の距離を縮めていく。

この状況も設計思想の違いからくる当然の帰結。母星のすべてが海中に没しているミミー星人には、海上艦の建設理由もなければ、そのノウハウもない。だからこそ、ロボロの沈没船を、ただ巨大な装甲板として使うだけに留め、使い捨てる特攻兵器に仕立て上げたのだ。

いくら巨大でもアイアンロックスは所詮、単なる自走爆弾でしかなく、砲撃能力など、爆破までの時間を稼ぐためのオマケのようなものだった。飛び回る敵に対して常に艦首を向け、全力攻撃を行う事がなよりの証拠。このロボットにミミー星人が期待し、仕込んだプログラムは、移動し、攻撃し、自爆する事。たったそれだけの簡素で粗末なものだったので、この広大な海を守護する為に建造され、単艦運用前提のマックス号の砲撃性能とは、はじめから比べるまでもないのである。

そして……

「目標、敵右舷構成艦後部！ ライトンR30魚雷、発射準備！ 侵略者の手先として骸を晒すなど……その姿は忍びん。……砲雷長！」

「任せて下さい艦長……あの艦の構造は、我々が一番よく知っています！」

「うむ、タイミングは一任する。貴様の手で、ゼノン号を眠らせてやれ……」

「了解！」

「敵艦、有効射程に捉えました！」

「操舵！ ブン回せえ！」

「……ライトンR30魚雷、発射！」

「本当の海戦とは……こうやるのだあ！」

必殺の距離に近づいたマックス号の発射管から、きらりと煌めく銀の銚が二本、暮れなずむ海に真つ白な雷跡を曳きながら、アイアンロックスの持つ三つの胴のうち、最右舷を構成する姉妹艦のバイタルパート目掛け、一直線に飛び出していく。

科学の錐で出来た切っ先によつて、分厚い鋼鉄をポロポロに粉碎しながら、弾薬庫に飛び込んだ最新魚雷は、その威力を遺憾なく発揮し、敵の右半身を粉みじんに吹き飛ばした！

接合部から丸ごとボロリともげ、艦中央部から腐り堕ちるかのように海へ没してく右舷。

「魚雷命中！ 敵艦大破！」

「面舵いっぱい！ 急速離脱！」

そして、そこが鎖の基部ごとバラバラに吹き飛んだと同時に、セブンの左腕も解放さ

れた。

左腕が自由になったという事は！

「ジユワツ!!」

ピンと伸ばした指先を、まだ満足に動かない右肘にピツタリとつけ、強引に巨大な？字を作ったセブンは、そこから強力な切り札を解き放った！

右腕全体から放たれたワイドショットが、巻き付いた鉄をドロドロに焼き切つていき、ついに敵の左舷に命中！ 主砲も甲板も艦橋も、極太の光の奔流が全て等しく貫いて、各所の弾薬を一気に巻き込み猛烈に爆発四散！

「やったあー！」

「いや、爆発の向こうをよく見ろ、ソガ！」

ついにアイアンロックスは、船体の3分の2を一度に失う事となった！

……だが、上空のキリヤマ隊長が冷静に敵を俯瞰すると、敵本体は海上に鎮座したまま依然健在。

セブンの下半身に巻き付いた錨は、本体部から射出されていたために、まだ完全な脱出も出来ていない！

敵主砲によるダメージと、ワイドショットの消耗で、埠頭に膝をつくセブン。

「ええい、なんというダメージコントロールだ……化け物め……」



「艦長！ 敵の姿に騙されてはいけません！ 確かに船の形をしてはいますが……その正体はどちらかという巨大大戦車のようなものです！ そうでなければ、船が信地旋回なんてするはずがありません！」

「復元能力どころか、喫水線を狙つても、沈没させる事は土台無理という事か……！」

ソガの読み通り、アイアンロックスの移動方法は、無秩序に増築へ増築を重ねた違法建築の大重量を支える為、巨大履帯のついた基底部で海底を這いずり回るというもの。そこから竜骨のように頑丈な脚でジャッキアップして海上へ本体を浮上させるアイアンロックスは、船としては反則級の、無尽蔵な耐久力を有していた。どれだけ表面の砲塔が吹き飛ばされようが、最終的に、中心部の自爆機構さえ生きていればそれで構わない。

あのキングジョーでさえ、突き詰めれば精密機器の塊であり、それらを保護する為に、偏執的ともいえる無敵の防御力で、全ての攻撃を無効化する必要があった。だが、今回はその逆。

移動し、攻撃し、自爆する。たったそれだけの単純で明瞭な命令をこなすには、複雑な回路や機材などまったく必要なく、どれだけ攻撃されようがお構いなし。腹に抱えた小さな核爆弾以外にバイタルパート等存在するはずもなく、全身の構造物全てが、何重にも重ねた単なる装甲版にすぎない。アイアンロックスはその名の通り、最期に行う核

爆発の瞬間まで、ただひたすらに頑丈であった。

「ソガ、爆破まで残り七分だ！ ポインターは立て直せないか！」

「だめです、ホバーがイカレて……」

「そうか……」

上空のキリヤマが逡巡する。我々に残された手段は少ない。自分は下部のハンガーでポインターを抱えて部下だけでも退避させるべきか？ それともこのホークで……

その時、マックス号の艦長は、艦内放送をオンにして、力強くマイクを握った。

「……総員傾聴！」

「傾聴——！」

水を打ったような静寂に包まれる指揮所。

艦内各所で全ての乗組員が、艦内スピーカーへ真剣な顔で向き合い、艦長の言葉を待つ。

「……諸君、我々は一度死んだ！ あの時、あそこで今も戦っている赤い巨人がいなければ、今頃は全員仲良く、この夜空に輝く無数の星々の仲間入りをしていたはずだ。それが今こうして、汚名を濯ぐ機会を万全の状態で迎える事ができたのは何故か？ ……彼が、縁もゆかりもないこの星を守る為に、その体を張って戦う決意をしてくれたからに他ならない！」

「艦長……」

漢の眼差しの先で、彼らの戦友、命の恩人が……もがき、苦しんでいた。

彼を置いて逃げるなど……とても出来ない相談だ。

「海の漢ならば！ 星屑よりも海の藻屑となる事を選べ！ 本艦はこれより、敵艦に向けて全力突撃を敢行するッ！ 地球防衛軍は戦友を決して見捨てない！ それが例え、何処とも知れぬ他の惑星から来た宇宙人であつても、この地球の平和を守る同志である事になんら変わりはない！ 今こそ恩を返す時ぞ！ 各員奮戦せよ！ 我々の手で、あの遙かなる友人を……ウルトラセブンを救うのだ！」

「Aye! aye! sir!」

一撃離脱戦法の後、距離をとる為大きく迂回していたマックス号が、再び船首をあの憎き侵略者の手先へと向ける。

マックス号の艦内で、決然とした表情で持ち場につく船員達には聞こえぬよう、ひっそりと抑えた声で、副官が艦長の耳に囁いた。

「ですが艦長、ライトンR30魚雷はもうありません。いくら錆びついたとはいえ、大和の重装甲を如何にして撃滅するのですか？ ……残念ながら、当艦の主砲及びその他の兵装は、敵の空間装甲に対して効き目が薄いと言わざるを得ません。マックス号は砕氷艦ではないのです……勝算はあるのですか？」

「……勝算はあるとも、副長。私とて、彼我の戦力差は重々承知している。その上で、それを覆すアドバンテージ足り得るものがあるではないか。……我々にだけあつて、奴らには無いもの。……それは、誇りと、海戦の技術と……あともう一つある」

「あともう一つ……？　それは一体なんですか？　艦長？」

訝しむ副官に向けて、艦長はニヤリと口の端を吊り上げ、こう言い放った。

「……歴史さ」

## 海底基地を砕け (IV)

「歴史……なるほど！ 取舵一杯！ 敵艦の左舷に回り込め！ ……これでよろしいでしょうか、艦長？」

「優秀な部下を持って幸せ者だ……ヨーソロー！」

艦長の自信に満ち溢れた言葉を聞いた副長は、ハッと顔を上げると、即座に行動に移した。

「敵が沈没船をサルベージするというならば、それも良し。ただし、我々の大切な大和を、あのように扱うとはいいい度胸だ。罰当たりも甚だしい。もはや天罰が下るまでまっではおれん、我々がその報いを受けさせる！」

外様のミミー星人は、自分たちの吊り上げたこの大鉄塊が、どれほど有名な船で、どれだけ神聖視されていたのか、全く知る由もない。彼らにとつて、ソレはタダの鉄くずらに過ぎなかつたから。だからこそ、この大和がどういつた軌跡を辿り、如何にして沈んだのか、あらゆる媒体で事細かに書き記されて人々に記憶されているなどと、一切思いも寄らなかつたのだ。

かつて、大和の姉妹艦であつた戦艦武蔵は、魚雷や爆弾を全身に50発以上被弾と言

う猛攻に晒されながら、10時間近く持ち堪えるという驚異的なタフネスを見せつけた。それは分厚い装甲、計算された各種の防御設計、そして艦内に、隔壁で区切られた無数の注排出区画を持つ事による、最新のダメージコントロール機能の賜物であった。

相手の指揮官は、大和型が発揮する、この恐ろしいまでの粘り強さを嫌い、一番艦である大和を攻撃する際には、ほぼ全ての攻撃を片舷にのみ集中することで、これらの機構を無効化した。教訓を生かした攻撃によって、その巨体を大きく傾斜させて、ついに沈没せしめる事が出来たと言う。

この大和が沈んだ際の戦いは、様々な記録が残されているが、その最も少ない記録でさえ、10発以上の魚雷を食らったのは確実とある。ましてや、内一本を除いて全てが、左舷に集中していたという事は……この残骸の修復箇所もまた、左舷に集中しているという事に他ならない。

ミミー星人が見つけた時には、海底で三つに分かれた、左側に無数の大穴が開いた状態で放置されていたこの船は、逆を言えばそれ以外はまだ十分に使えるぐらいに原型を残していたために、その巨大さから、機体のベースとして目を付けられることとなった。

そして今、アイアンボックス左舷の大穴は、海兵達の読み通り、その他の艦艇から寄せ集めたあらゆる鋼材で補強されていたのだ。例えばその補修に使われた装甲が、まだあまり錆びてもない防衛軍艦艇から？ぎ取ったものだったとしても、生物由来の接着剤

で、年代も材質もまったく違う装甲のパッチワークで塞がれた古傷は、構造的に脆い明らかな泣き所ではないのだった。

「我が艦の持ちうる全火力を、敵左舷中央部の一点に集中！ どてつ腹に風穴を開けてやれ！ All weapons free！」

「All weapons free！」

少なくともミミー星人は、大和という戦艦をベースにしたこのアイアンロックスだけは、それを作った二ホン<sup>大和</sup>という国の軍隊にぶつけるべきではなかった。

本来、兵器の弱点箇所というものは、敵に対して絶対に秘匿されて然る最高軍事機密であり……それが事もあろうに戦う以前、いや、建造されるよりずっと前から敵へ知れ渡っているなど、欠陥兵器の烙印を押されても仕方のない事なのである。

魚雷が、砲弾が、ミサイルが、マックス号から解き放たれたあらゆる兵装が、アイアンの左舷に向けて飛んでいく。爆発と共に、次々吹き飛び千切れる砲台群。

さしもの亡霊艦も、これを脅威と見たか、最大火力を投射できるように艦首をマックス号へと向けようと、ギシギシと不快な金属音に巨躯を軋ませながら、旋回にかかる。

だが、そうはさせてなるものかと、今度は立ち上がったセブンが、残った気力を振り絞り、自分の胴体に巻き付いた一等太い錨をむんずと掴み、力いっぱい踏ん張った。

総排水量64,000トン、最大速度27ノットを叩きだす大和の、化け物じみたター

ピンを、100万馬力を謡うセブンが、太く逞しい真つ赤な剛腕で引き留める！、

常識外の力比べに、双方の動きが止まり、アイアンボックスは、振り向きかけた中途半端な状態で、その陰気な横面を晒すことになった。仕方なく左舷の砲台だけで応戦するアイアン。

「ハハハ、見ろ！ 敵の方から横腹を見せてくれたぞ！ 誘っているんじゃないか、おい！」

「全弾ここに撃ち尽くして構わん！ 後の事など気にするな！ 回避行動より、精密射撃に重点を置け！ エンジンストップ！」

双方足を止めての殴り合いなど、海戦においてはそうそう発生しない珍事であったが、命中弾は数えるまでもなく、圧倒的大差であった。

「固定目標相手に狭叉もとれんのか、あの阿保は！」

「いきり立つなよ砲雷長、敵の練度が低いのは、良い事だ。中身まで熟達の大和乗員であつたならと考えてみる……」

「……そうだな、俺達は幸運だ、航海長。あんなばかでかい標的艦へ、実弾で思う存分射撃訓練が出来るのだから……」

「見ろ、まるで敵の弾が避けていくようだ。……俺達には、先人たちの加護がついているぞ！」



やがて一際大きな爆発が起こり、濛々と立ち込める爆炎の向こう、中央部に深々と穴を穿たれた海底戦車の姿があった。ついにその装甲を引きはがしたのだ!

外側の大穴に関しては、最新素材で入念に塞いだミミー星人も、流石に内部の隔壁まで完全修復しようとはしなかった。もとより水上艦としての運用などするつもりが無かったのだから、当然といえは当然だ。むしろ、予備の砲塔や弾薬を収納するスペースに丁度良いとさえ思っていた位なのだから。海底の違法建築家は、内装工事においても、杜撰極まる三流設計士だったのである。

だがいくら弱点といえど、そこは文字通り腐つても大和。

「……艦長……魚雷、ミサイル。共に残弾ナシ! 主砲塔も連続使用で加熱過剰です!

これ以上の発砲は危険です!」

「くそっ!……(う)まできて……!」

砲雷長の報告に、艦橋要員の顔が曇る。

だが、艦長は未だに口の端へ余裕を湛えたまま表情を崩さない。

艦長はトントんと軽く足踏みしながら、暗い顔の部下を励ました。

「何を言っている砲雷長、魚雷ならまだあるではないか。……それも防衛軍で最も高価で、最大級の威力のモノがな」

「ま、まさか……!」

「だから言っただろう、全力突撃だ……とな」

驚愕に染まる船員達の表情など露知らず、上空援護を行っていたキリヤマから通信が入る。

「マックス号、どうしたのです？ 先程から攻撃の手が止まっています……弾切れですか！」

「安心めされよキリヤマ隊長。なに、あの不調法者へ、古式ゆかしい、由緒ある海戦の作法というものを、叩き込んで差し上げようと思ひましてな」

「まさか、衝角戦闘を仕掛けるおつもりですか！」

「いかにも！ あれだけ念入りに下拵えしたのです。本艦の鋭さならば、さぞ深々と突き刺さる事でしょう！……総員、退艦！」

「そ、総員退艦準備——」

「自動操縦で突っ込ませた後、主砲の動力バッテリーを熱暴走させ、内部から吹き飛ばす算段です。エスコートして下さるか？ キリヤマ隊長」

「……喜んでお受けする！」

全船員が迅速に下船へ移る中、副長だけが、その場を微動だにせず、艦長を睨みつけていた。

「どうした副長、総員退艦だ。……復唱せよ」

「如何に自動化されたマックス号が、従来艦の半分以下の員数で運用可能な新鋭艦といえど、主砲の過加熱による自爆攻撃など、プログラミングされておりません。一体誰が、そのタイミングを操作するのです?」

「……やれやれ、私は不幸者だな。あのような巨艦、それもあの大和を撃沈せしめるなど、戦功甚大、最大級の誉れだぞ? それを一人占めする機会を……誰に譲るというのか?」

「嘘を仰いますな! 御神体にも等しい大和を、もう一度沈めねばならぬなど……手柄と喜ぶ海兵が一体どこにいるというのです! それも、命と引き換えになど……」

「……何か勘違いしているようだが……私は決して死ぬつもりはない」

「ならば自分もお供いたします! 別に死なぬのであれば、ご相伴に預かっても構わないでしょう!」

「……分かん奴だな……一人というのが良いのだよ」

「それは……!」

まだ言い募ろうとする副長を制し、艦長は決然と言い放った。

「なにせ私専用のポートは、大きさの割に一人用なのだ。貴様がいると足手纏いでしかない。……分かったか?」

「……なるほど、そうですか。では準備をして参ります……ご武運を」

敬礼を交わした副長が、艦橋を後にし、やがて脱出用の内火艇がマックス号から離脱していく。そちらへの攻撃から盾になるように最大出力でエンジンを作動させた快速戦艦は、敵からの猛攻をもともせず、ただ愚直に前へ前へと進んでいった。

「まったく、気分が悪い事だ……許せ大和よ。そして……お前も……」

だが、どれほど胸糞が悪い任務であつても、この落とし前だけは、ウルトラ警備隊や、ましてあの巨大な戦友につけさせるわけにはいかない。我々海軍の手によつてこそ、再びこの墓標を海へ還し、鎮魂の祈りを捧げるのだ！

操舵輪を撫でる艦長の脳裏に、今は亡きかつての師の言葉が過ぎる。

近づけば近づく程に、敵の弾は逸れ、こちらの狙いはよく定まる、と。

アイアンロックス左舷にて大口を開ける深傷へ、マックス号の鋭い切っ先が全速力で刺し込まれ、メリメリと甲高い金属音を叫びつつ、艦前方に配置されたレールガンが、敵艦中央部へ到達する。

「さ……らば大和よ……永遠に！」

白熱した大容量の主砲動力が弾け飛び、扶桑の如き艦橋構造物を、その基底部まるごと、猛烈な爆圧で真下から突き上げた！

「なんとという事だ……我々の自走要塞から、通信が途絶えたぞ！」

「なに、あの鉄量を吹き飛ばしたというのか！ この短時間で？」

「こうしてはおれん……今にウルトラセブンがこちらへ飛んでくるぞ！」

「……退却だ。資源惑星の候補は他にもある。よもや地球人がこれほどとは……」

アイアンロックスの自爆でセブンを抹殺し、悠々と資源回収を行うつもりだったミミー星人は、想定外の事に大慌て。

ハイドラランジャーを拘束していたトラクタービームを解除し、一目散に離脱していく。しかし、催眠音波で強制的に昏睡させられていたフルハシとアマギが、効果の切れた途端に目を覚ました。

彼らの目の前で、ヒトデ型の円盤が上空へ逃げ去っていくではないか！

先程、泡攻撃で酷い目にあわされたばかり、今度はこちらからお返しだ！

浮上した二隻のハイドラランジャーから、同時に対空ミサイルが放たれ、ミミー円盤を粉々に粉碎した！

水中では、攻防一体のキャビテーションバブルで、無敵を誇るミミー潜航艇も、一度空中に飛び出してしまえば、キャビテーション防御もできず、ただの円盤と変わりはない。まさか水中で三次元移動もできないような原始的な潜水艦が、魚雷だけでなく陸上

にも空中にも対応できる超高性能ミサイルを搭載していたとは……

水中以外で運用する兵器の開発センスが壊滅的だったミミー星人達は、最後の瞬間、地球の歴史をもつと学ぶべきだったと後悔した。もともと彼らは、もう二度と己の無知を反省できないのだ……。

「やったーッ！　ざまあ見ろ、このミミッチイ星人が！」

マックス号の引き起こした爆発によって、艦橋を引っこ抜かれたアイアンロックスが誘爆し、夜の海で茶毘に臥されていく……

「やりましたね、艦長！　マックス号のおかげです！　命を助けられました……我々も！　セブンも！」

「それはなによりですソガ隊員……副長以下全乗組員も、侵略者を無事撃退できたことを光栄に思います」

「その声は……副長？　艦長はどうなさったのです？」

「艦長は……主砲爆破の為、艦内へ残られました」

「……は？　なんて？　……嘘でしょ？　自動操縦ですよね」

「航行に関してはその通りですが……そのような想定外の攻撃は、プログラミングされておりません」

「そんな、そんな……事って……嘘やろ……あんたが死んだら……なんにも、ならへんやんけ……っ！　クソがあ!!」

駄目なのか!?

やっぱり……運命を変えるには……誰かの犠牲が必要なのか……?

「おい、敵を撃滅したというのに。なにをしょげかえっているのだ！　もっと喜ばんか！」

「そ、その声は……」

この野太い汽笛のようなバリトンは……ッ！

「艦長！　ご無事でしたか……!」

「まったく、勝手に殺すんじゃない!」

「それは、そうですが……でもどうやって?」

「こつちだ、まだマックス号の後ろに浮かんでいるから見えるはずだ。むろん、そのうち沈むので、早く回収して貰いたいものだが……」

双眼鏡で言われた通り、月明かりを頼りに海上を見渡すと……

あ!? あれは……観測ロケット! 観測ロケットじゃないか!

そ、そうか、あれを脱出ポット代わりに、爆発の瞬間、後部甲板から飛び出したのか……

「馴染みの艦長は軒並み海へ還ってしまった……ここで私まで死んだら、一体だが、この広い海を守るといふのだ……?」

「艦長……」

「もつとも、しばらくは諸君ら警備隊が我々の穴を埋めてくれると信じているぞ。如何かな、キリヤマ隊長? 我々の海域に部下をよこしてはくれませんか?」

「ハツハツハ! もちろんですとも。その時はソガ、お前が行くんだ」

「え、ええ……そうさせていただきます……」

「む、いかん……そろそろ沈む……酸素が尽きるまでに回収を頼むぞ……!」

超常的な聴力で、それを盗み聞きしていた真つ赤な戦士が、月明かりに照らされながら、ぎぶぎぶと嬉しそうに海の中へ入っていった……



## うたかたの夢、追い求め：

「うう……さ、む、いー！」

「ようこそ、レディ。我々は君の来るのを、待っていたのだ。さあ、そのお洒落なコートを預かろう」

「あらこれはこれはごく親切に、相変わらずそういうところだけは紳士的ね」

「やあ、先に始めさせてもらっているヨ。ささ、キミもはやく、こっちに來て暖まりたま  
エ」

「ええと、そうね。まずは二人とも、今日はお招きいただき、どうもありがとうございます」

「いやなに、この辺境の地で、寄る辺なく身を寄せ合う我々だ。たまにはこういつた催しも風情があると思つてね。地球人はこの時期、帰省と称して、故郷に帰るのだそうだ。人間にも帰巢本能があるとはな……。だが、我々はそうもいかなだろう？」

「アナタ……よくも彼の前で、そんな事が言えたわね……？」

「おや、何かいけなかつたかな？」

「アアもう、やめろやめ口。もういいんだ、コイツはそういう奴サ。キミの優しさは有難く受け取っておくが、今ではすっかり慣れたものだ。腫れ物に触るように扱われるより

はずつといい……それより早く入れよ、これはあったかいゾ！」

「そう……それじゃあ失礼して……ああああ……あったかい……」

「ふふふ、キミもどうやら、コタツトラップの餌食のようだな」

「コレにかなう奴なんて、いくら宇宙広しと言えど、そういるまい」

「そうねえ……ねえアナタのそれ、なかなかいいわね。似合っているわよ」

「そうか？ どうやらハンテンという衣服らしい。龍リウに貸してもらったんだヨ。キミも借りればいい」

「もちろんみんなの分まで用意しているとも。さあどうぞ、お嬢さん」

「ええありがとう。まあステキ、しかもあったかあい……それにしても龍……アナタ、随分と染まったわねえ……」

「ふふふ、隅から隅まで見渡して、随分と興味津々な子猫ちゃんだ……そんなに私の部屋が物珍しいかね？」

「ええ……アタシも異星の文化には、それなりに興味あるけど……ここまで揃えるとは……アナタもやるじゃない」

「地球では、郷に入れば郷に従え、と言うんだそうだ。我々のような異邦の民へ、土着の風習に問答無用で従えとは、なかなか傲慢な地球人らしい言い草だとは思わんかね？」

「その割に、まんざらでもなさそうだがナ……」

「……ねえねえ、あのドアに飾ってあったあれは？」

「それはシメナワき、この時期限定の民芸装飾品だよ」

「じゃあ……それも？」

「ほう。君にもカガミモチの良さが分かるとは、なかなかセンスがいいな」

「……なに、モチ？　すると、さつきから我物顔でスペースを占有しているそれハ、さつきキミが食わせてくれた、あのデンブン質の塊かい？」

「そうだと。気付かなかったのか？」

「まさか食品を飾っているナンテ……理解に苦しム」

「ねえねえ、カガミつて、mirrorの事でしよう？　どのへんが？　全然写らないわ

よ」

「それハ……ただ円形だからではナイカ？　そこまで深い意味があるとは思えない」

「……ハツハツハツハ！！」

「なにがおかしいんだ？」

「全く君たちは……まだまだだな。いくぶんこの星に馴染んで来たとはいえ、やはり風流と言うものが、まるで分かっちゃいない」

「ふーりゆー、ですつて……？」

「そうとも！　これはね、彼らがよくやる見立てという奴さ。水面に映る月を表してい

るのだよ。大小のモチの間に水面、つまり鏡を挟んでいると考えるのさ。どうだ、なかなか洒落ているだろう?」

「……そう」

「ふーむ……それほどの文献に載ってイル? 私も読みたい」

「……はあ、やはりまるで駄目だ。これぐらい、調べずとも読み取れるくらいでなければ、付き合いきれん」

「……もうコイツは放っておきましょう。それより、アナタさつきモチを食べたとか言っていたけど、あの海藻以外も食べられるようになったの?」

「アア、我々の医学をもつてすれば、この程度の肉體改造は造作もない。ただ、必要に迫られなかっただけだ。いまではあの植物は高級な嗜好品だよ」

「それはよかったわ! なんでも明日は、オセチなる風土料理を龍が作ってくれるんでしょう? あなた一人だけ別のモノを食べるのは、心苦しいと思っていたのよ」

「キミは優しいね……ただ、今でもあまり動物性蛋白を積極的に摂取しようとは思えないな。食べ過ぎるとそれこそ、下してしまうからね。その点、モチはいい。植物由来のデンプン質で、カロリーを効率よく摂取できる。粘性が高いのも我々好みだ」

「その医療設備を提供してやった私に対しても、もう少しばかり感謝の念を表明してくれたって、良いのだよ……?」

「その点については、本当にありがたく思っていてイル……だが……キミのその居丈高な態度だけは、どうにかならないのか？」

「君のような皮肉屋に言われる筋合いは無いなあ……」

「……はーあ、ずいぶんと仲のよろしい事ね……」

「おやおや、まるで君の瞳はサファイアのように美しいと思っていたが……本当に眼窩へガラス玉を入れているのかね、フロイラインン？」

「……仲がいいと言えば、彼女に声を掛けなくて良かったのか？ ああいや、もちろんあつちの文通相手のほうじゃナイ。姦しくて仕方ないからナ」

「もしかしてララの事？ もちろんお誘いはしたけど……彼女来るか分からないわよ？」

あんまり興味ないんじゃないかしら、こういうの。今日だって、ずっとジムに籠りっぱなしだと思おうわ」

「いやはや、後藤君もよくやるね。もつとも、いくら鍛えたところで、外骨格に覆われた彼女の筋肉が、これ以上。パンプアップするとは思えないのだが……」

「知らないわ、そんな事あのコに聞いてよ。筋繊維の事に関してだけは、今じゃアタシ達の中で、一番造詣が深くなってるじゃない……」

「やはりレディというよりは……単なる戦士だな」

「地球でハ、彼女のような人種を、アマゾネスと呼ぶらしいゾ？ なんでも戦士階級の女

性個体だけで構成され、戦闘民族らしい」

「彼女にピツタリじゃないか！」

「アツハツハツハツハツハツハツ！」

「……呆れた。なんて失礼な男どもなのかしら。覚えてなさいよ？　もし今日あのコが

来たら言いつけてやるんだから」

「ララが気にするとは思えないガ」

「そうかしら？　あれで結構、一途な乙女なのよ？　……まあその……このまえ銭湯の

洗い場で、右肩の火傷跡をウツトリしながら指でなぞってたのは……ちよつとアタシも

引いたけど……」

「オオウ……」

「奴のどこがそんなにいいんだか……まったく理解に苦しむよ、彼女も……キミもネ」

「ちよ、ちよつと！　冗談じゃないわ！　やめてよね！」

「……ほらほら、あんまり騒ぐもんじゃない。さあさあどいたどいた、年越しそばが茹で

上がったよ。コタツを揺らすと、ツユが零れてしまっじゃないか……」

「ありがとう、龍……しかし、ソバ……か。地球人は本当にデンプンが好きだナア……」

「ちよつと！　話を逸らすんじゃないわよ！　こつち向きなさい！　それともそのテン

ブラを横取りされたの!？」

「すまない、それは、できない。……おや、また誰力来たようダ」

「……ははあ、さてはアイツだろう。今度も私が出るよ。なにせ、家主だからな」

「助かる。どうにも一度入ると、二度と再び立ち上がる事が出来ないのは、コタツの欠点ダ」

「じゃあついでにミカンとつてきて、そしたら大人しくしてあげるわ」

「はいはい仰せのままにマドモゼル……」

「なア、賭けをしようじゃないか。誰が来たと思う？ こちらが勝ったら、そのコタツの下で足を蹴るのをやめてもらう。キミが勝ったら……次にミカンをとりに行く時は、こちらが立とう」

「のったわ。じゃあそうね、アタシは……」

「……ようこそ……我々は、君の来るのを待っていたのだ」

「ふあああああう」

「あら、大きなあくびだこと、ソガ隊員。相変わらず寝坊助さんなんだから……寝ぐせ、ついでるわよ?」

「え? アンヌか、おはよう。まいったなあ……これから冴子さんと初詣なのに……」

「うらやましいわあ……」

「キミもダンと行って来いよ」

「でも彼、今日は珍しくまだ起きてこないのよ……どんな夢を見ているのかしら……ねえ、ソガ隊員は、いい初夢を見られた?」

「そうだなあ……あんまりよく覚えてないんだけど……少なくともナスビは居たような気がするんだ……多分」

「そうなの? 良かったじゃない、縁起がいいわ! ……だったらどうしてそんなに難しそうな顔をしているの?」

「うん……なんとなくワルナスビだったような……これもナスビに入るのかなあ?」

「ウフフ、新年早々おかしな人ね……ああそうそう、忘れるところだったわ。ソガ隊員、あけましておめでとうございませう」

「こちらこそ……明けましておめでとうございませう。今年もどうぞ、よろしく願います!」



## 昨日搜したミライ (I)

鎖をじゃらじゃらと引き摺ったダンプに、追いまわされる一人の男。青い神秘的な衣装に身を包んだ彼の名は、ヤスイ。

「誰かあ！ 助けてくれえええ！」

逃げる、逃げる、ひたすら逃げる男。

「はわああああ！ なにすんだああああ!!」

追われる。この男、罪を犯したわけでもないのに、何故に追われるのか？

ダンプを躲し、命からがら逃げだした占い師風の男は、ふらふらと反対車線の道路上へ躍り出る。

そこへ通りかかったパトロール中のポインター、尋常ではない様子で倒れこんだ男性を、下車して即座に助け起こすキリヤマとフルハシ。

「どうしたんだ！ おい！」

「マル……サン……」

「えっ！ マルサンって何のことだ？」

「マル、サン……倉庫……バクハツ！」

「なに、マルサン倉庫が爆発するというのか……!」

そこへ再びダンプカーが襲ってきた。

「うわあああ! 殺されるうう!」

「危ない!」

ダンプの助手席から、すれ違いざま投げられたナイフは、男の太ももに突き刺さり、絶叫を上げさせる。

そのまま走り去っていく大型車。

ポインターで追跡するが、途中で見失ってしまう。

とりあえずキリヤマ隊長はヤスイと名乗るこの男性を保護して、基地で治療を受けさせることにした……

---

メデイカルセンターにて、怪我の手当てが終わったヤスイは水晶玉を覗き込んでいた。

「何をやっているんだ?」

「占っているのです……この玉で。未来を映しているんですよ……」

「ホントにその玉に映るのか?」

フルハシやアマギが胡散臭そうな視線を投げかける中、目を見開くヤスイ。水晶玉に映し出される光景は、真つ赤に燃え上がり、粉々に吹き飛ぶ倉庫街。そして、その中で凶弾に倒れるスーツ姿の男の顔は、ヤスイを救ってくれた恩人の顔をしていた。

「……マルサン倉庫……爆発！ ……間違いない。やっぱりマルサン倉庫だ」

「本当に爆発するんだな？」

「私の予言は外れたことはありません。その時にですね……。隊長さんもお怪我をしますよ……。気をつけた方がいい……」

「おい！ デタラメを言うと、承知せんぞ！」

隊長を脅していると思ったフルハシが、掴みかかる。

「私はね、これを商売にして生きているんですからね。なんでしたら、見てあげましょうか？ 運勢を……」

「ふん！ お断りだねえ！」

そこに、ウエノ通信員が報告を持ってきた。

「マルサン倉庫一带には別に異常はないそうです」

「ほれ見ろ！ どうりでインチキくさいと思ったよ」

「ハツハツハ……」

「待て！」

アマギやフルハシ、アンヌがホツとした様子で笑う中、神妙な面持ちのキリヤマ隊長。  
「私は、ヤスイ君が見たものを信ずる。……いや、信じてみたい」

「隊長!？」

「これは命令だ。マルサン倉庫一帯を徹底的に調査するんだ。時限装置はないか、地雷を埋めた形跡はないか、念には念を入れて洗うんだ。いいか、マルサン倉庫は地球防衛軍の動脈だ。敵に指一本触れさせちゃならない！」

「私も賛成です隊長、火のないところに煙は立たぬといえますからね……第一、ただの一般人が、どうして倉庫にカモフラージュした防衛軍の施設を知っているんです？ 嘘にしちゃあ、的を射すぎている」

「ソガ、お前まで……」

こうして、マルサン倉庫の徹底調査が行われた。

マルサン倉庫。外見は普通の倉庫だが、これはあくまでもカモフラージュのため。この倉庫の地下には地球防衛軍の超兵器開発基地があり、惑星間長距離ミサイルなどの開発が行われている。まさに地球防衛軍の動脈なのだ。

……幸いなことに、爆発物らしい物は発見されなかった。

調査が徒労に終わった隊員たちが、疲れた様子でヤスイのもとへ帰ってくる。

「君もずいぶん人騒がせな奴だなあ！」

「すると、異常なしで……？」

「決まってるじゃないか！ 隊長を見る、ピンピンしてる」

「……そうですなえ」

確かに、不安げに腕を組むキリヤマに傷はない。予言の中で彼は腕を撃たれていたはずだが……

「命を狙われているっていうのも、どうやら怪しくなってきたぜ……」

「とんでもない……！ 私は本当に狙われているんですよ？ 宇宙人にですよ！」

「おい、今度は宇宙人か……？」

「まあまあ、そんなにいじめるなよ、アマギ。ナイフを投げられたのは確実なんだし、倉庫が爆発しないとまだ決まったわけじゃない」

「そうですよね！」

「あんたもそう、嬉しそうにするんじゃないよ……」

ソガに窘められたヤスイが、しょんぼりと顔を伏せると、その先で水晶玉がまた違った光景を映し出す。

「……あ！ 空飛ぶ円盤だ！ 富士見ヶ原に降りた！」

「おい、いい加減にしろよ！」

「本当に見えたんですよ……」

「どうも気になるな……」

再び、ヤスイの予言にしたがって、富士見ヶ原一帯の大掛かりな捜索が行われた。だが、円盤らしい影さえ発見できず、すべてが徒労に終わったのである。

参謀室に集まる隊員たち。

「まったく異常なしだな……」

「はあ、空陸両面作戦でしたが、なんら異常は……」

「キリヤマ君、今度の二度にわたる捜索は、まったく君らしくないぞ……科学的裏付けがなされておらん！」

「……非常に、気になったものですから……」

「そりゃあ、人間の予知能力を信ずるのもいい……だが、それにも限度というものがある！」

「はあ、しかし……」

マナベ参謀の怒りももつともだ。だが、どうにも納得がいかない様子のキリヤマ隊長。

「皆さん、信じてください。わたしや本当に見たんですよ！」

「わかった、わかった、わかったよ」

とつくにフルハシはまるで信用しちやいない。

オオカミ少年を見る目だ。

「まあ、待て……君の協力には感謝する。今日のところはひとまず、引き取ってくれないか？」

「隊長さん！ わたしや宇宙人に狙われているんですよ？ それでも帰れつて……っ？」

「……」

「倉庫は必ず爆発します！ 円盤は必ず来るんですよ！」

「もう、止せよ……」

アマギがうんざりした様子で止める。

「いいえ！ 今日がダメなら明日……そうだ、明日を捜せばいいんですよ！」

「もうちよつとその予言もなんとかならないのか？ 爆発がいつだ、とかどんな方法で

？ とか……そうすりゃあ、探しようもある」

「そう言われましても……自由に見れるわけじゃないんです、そう簡単にいかないんで

すよお……そこまで詳しく分かったら、苦労しませんって……あ、そうだ！ 夜だ！  
そういうや予言の光景は夜だった！ 夜に爆発します！ 昼間に探したって、ありやしま  
せん！」

「そうそう、そういうのそういうの！ 夜ね、夜……うんうん」

「ソガ……夜間警備なら、とつくに昨日、捜したさ……」

「……君は私が責任を持つて守る。だから、安心して帰れたまえ」

「そうおっしやらずに、置いてくださいよお……わたしやねえ……心配なんですよう  
……助けて下さいよお!!」

苦渋の決断を下すキリヤマ。

こうして可哀想なヤスイ老人は、意気消沈した様子で、帰らされてしまった……

参謀室。

スーツ姿でマナベに休暇願を提出するキリヤマ隊長。

「……一日だけ、休暇をください」

「んむ……どうするつもりだ？」

「あの男を信じたついでに、あの男が言っていた明日を捜してみます」

「頑固だな……相変わらず。……これを持っていけ」



苦笑したマナベは、観念した様子で、引出しから拳銃を取り出す。

参謀の好意を有難く受け取るキリヤマ隊長。

「……拝借します！」

そのころ、モロボシダン隊員は、一週間の宇宙パトロールを終えて帰還した。

「明日を捜しに……?」

「ええ、隊長は責任感が強くていらつしやるから……放っておけなかつたんだわ、きつと」

「その予言者のために、やれマルサン倉庫だ円盤だつて、いいように扱われたよ……」

「でも隊長はまだ信じているわ。だから休暇をとつたのよ」

「鬼の隊長も、心霊現象にだけは、弱かつたつてわけだ」

「うん……」

「ダン、どこに行くの?」

「隊長を捜してきます」

アマギとアンヌに、笑顔で答えるダン。

探す……、キリヤマ隊長はあてどもなく、探し回る……明日は一体どこにあるのか?

ヤスイは一体どこに消えてしまったのか？

夕暮れの中を、男が一人、さまよっていた。

やがてとつぷり暮れた夜の中、ヤスイは、アパートから離れた公園を、びくびくと怯えながら逃げ回っていた。

警備隊の隊長からは、アパートから一步も出るなど言われていたが、そのアパートの周りを例のダンブが徘徊しているのだ。従いたいのには山々だが、そもそも帰れないんじゃない、家に籠りようがない。

だいたいあの隊員も隊員だ。あんなに信じてくれるような素振りを見せたなら、そのまま銀色の車でアパートまで送って行ってくれりやあいいのに……

やがて、女のすすり泣く声が聞こえてくる……訝しんだヤスイが柱の影を覗き込むと、うずくまって泣いている女を見つけた。

「どうしたんです？ 具合でも悪いんですか？」

自分が命の危機に瀕しているというのに、不用心に女へ声をかけるヤスイ。もしや彼女も宇宙人に追われて……？

なにせ彼は、困っている人がいたら、手を差し伸べないと気が済まない、筋金入りのお人よしだったのだ。この性格のせいでどれほど苦労してきた事か……優れた予知の才能があるにも関わらず、場末の胡散臭い占い師に身をやつしているのも、その為だ。

……でも、やめない。

自分がこんな不思議な能力を持って生まれたのは、なにか意味がある事だと信じて生きてきたからだ。人知を超えた大いなる力には、誰かを助けるための、大いなる責任が伴うのだから……

「ねえ、もしもし……」

声をかけられて顔を上げる女。鼻は窪み、青白い眼球はぎよろりと飛び出し、鼻下の人中は尖った山になっていた！ この人間とは真逆の恐ろしい鉄面皮！ 間違いなく宇宙人だ！

「ぎやああああああああ！」

夜の闇に、ヤスイの絶叫が木霊する。

一目散に逃げだしたヤスイは、明かりを求めて、ガソリンスタンドに飛び込んだ。

「大変だ、う、宇宙人！ 宇宙人だよおおお!!」

帽子を被った店員の背中に縋りつき、必死に助けを求めるヤスイ。

かれの懇願に振り向いた店員の顔は……

「ヒッ、ヒャ……ワアアアあ嗚呼嗚呼アアあああ!!」

目をつぶってスタンドの待合室を飛び出そうとしたヤスイは……たった一つしかない出口で、ドンツと誰かにぶつかり、尻もちをついた……

心を覆いつくす絶望に、へなへなと倒れ込んだ彼が、恐る恐る目を開け……  
ゆっくりと視線を上げた先には……ニヤニヤと意地悪く笑う顔。

そ、そんな……

「アンタらにとつては多分、明日の未来だろうが……オレにとつては、昨日よりずっと  
……ずっと前の出来事なのさ……ッ！」

構えたウルトラガンの銃口が、夜の闇を切り裂いた！

## 昨日搜したミライ (II)

「アア！ ……ウツ……」

レーザーを食らった胸を掻きむしり、スタンド店員に変装した宇宙人がその場へ倒れ伏す。

「そ、そ……ソガさああん!!」

「ヤスイさん……怖い思いをさせて、本当にごめんなさい……でも、これでアナタの訴えは証明されました！ もう大丈夫、我々がついでます！」

「信じて……信じていましたよおお……きつと、きつと助けてくれるってえ……」

「ええ、オレも信じていましたよ……アナタの事を」

ソガに縋りついて泣きじゃくるヤスイを安心させるように、その背中を優しく叩く。そうしていると、外から気迫の籠った雄叫びと、絹を裂くような叫び声が聞こえてくる。

「ドオリヤアア!!」

「キヤアアアア!!」

「ひいッ！ ……なんです、今の悲鳴？」

「……お、やってるやってる。なあに、大丈夫ですよ」

怖がるヤスイを腰にぶら下げて、声の方へ歩いて行くと、大の字で伸びているシャドー星人と、バツの悪そうなフルハシがいた。

「やあ、そつちも上手くいったみたいで。流石ですね、先輩」

「上手くもなにも……なんでい、さっきの声。よく見りやあコイツ、女じゃねえか。不細工な面しやがって……そうと気付かずに、思いつきり顔を殴りとばしちまった。かああ、気分悪いぜ」

「ハハハ、侵略者に男も女もあるもんですか。ぶち殺されないだけ、先輩に感謝するべきですよ。あつちの奴は問答無用でハチの巣ですからね」

「お前のそういうところが、たまにおっかなくなるよ……」

「あ、あなたは……フルハシさん……?」

「あーその……悪かったよ、あんたを嘔吐き呼びわりして……これで勘弁してくれや」

「ととと、とんでもない! こうして来てくださっただけで、わたしや嬉しくって……」

「おいおい、泣くなよオッサン……」

なにせ……原作において、このヤスイ老人をポインターでほっぽり出したのは、紛れもなくこのソガと、フルハシの2名なのだ。

でも今回は、その張本人であるソガ隊員からして、彼を心から信じてるところか、こ

の先の展開まで自分で予言できるくらいだし、その俺が説得すれば、先輩だつて半信半疑ながらも付いてきてくれる。

「私なんかの予言を、信じて頂いて……」

「勘違いしてくれなさんな。オッサンの予知なんかより、そのソガ隊員の方が、ずっとスゴイ推理をするんだぜ？ ……あんたもあんたで、その見てくれがいけねえな。もちつと説得力のある恰好をしてくれねえとさあ……」

「へえ……そりゃあ、すごい！ 見直しましたよ、ソガさん」

「ああいや、オレのはちよつとこう、ズルといいますが……オレはね、貴方をこそ、尊敬してるんですよ、ヤスイさん」

「へえ、わたし？」

このヤスイという老人、言動はいかにも胡散臭げで、口の軽い小心者だが、その性根は本当に立派な男なのだ。

シャドー星人に捕まった先の基地で、強烈な洗脳装置にかけられ、もがき苦しみながらも、潜入した警備隊員に大声で敵の待ち伏せを知らせようとするくらい、熱いものを秘めている。それも一度は自分を見捨てた警備隊に、だ！

しかも、その後のガブラとの戦いでも、あんな近くで巨人が戦っている場から逃げずに、最後までセブンに予知した助言を与え続け、彼の窮地を救ったのである。

そのせいで円盤が爆発した余波に巻き込まれて、予知能力を全て失ってしまうが……いくら能力があつたとて、彼はただの民間人なのに、なんて勇気があるんだろうか。第一、未来が分かるという事は、危険察知能力が極めて高いという事。どんな光景が見えようが、そんなのは警備隊とセブンに任せて、自分は首を突つ込まず、家で震えていれば良かったんだ。……でも、彼はそうしなかつた。

こんなに素晴らしい人へ、指一本でも触れさせてなるもんかい！

囀捜査に使ってしまったのすら、申し訳ないくらいだ。ほんとごめんねヤスイさん。こうでもしないと、敵が姿を見せないんだもん。あんたを守るためにはしょうがないんや……

そうこうしていると、近くに停まっていたタクシーが、大きなダンプカーたる正体を現して、一目散に逃げて行った。

「てめ逃がすかこのやろう！」

ダンプのタイヤを狙撃して、コントロールを失った車体は空き地に突つ込んで横転する。

「よっしゃ、任せろ！ お前は基地に連絡だ！」

「お願いします。……本部、本部！」



夜のマルサン倉庫。

捜索中のキリヤマ隊長は、何者かの気配を感じ、拳銃を構える。彼の後ろをつけてきていたのは……

「……ダンじゃないか！」

「隊長！」

「どうしてこんなところへ？」

「隊長と一緒に、明日を捜したくなりましてね」

「そうか……聞いてきたのか……」

ソガ以外にも理解者がいたかと、嬉しそうに顔を綻ばせるキリヤマ隊長。

「ヤスイ君がどこにもいないんだ……無事でいてくれるといいが……」

「大丈夫ですよ。ソガ隊員達がついています」

「うん、そうあってほしい……私は古いタイプの人間かもしれないが、人間の予知能力、靈感といったものを無視できないタチでな……」

その時、隊長のビデオシーバーが鳴る。

「はいこちらキリヤマ」

「隊長！ ヤスイ氏を襲っていた宇宙人一名を射殺、もう一人を拘束いたしました！ 奴らの乗っていた車はもぬけの殻でしたが……ヤスイ氏は無事です！」

「なに！ 本当か！ ……よくやった……よくやってくれた！」

「すでにアマギとアンヌがホークでそつちに向かっています！ 隊長も気を付けてくだ

さいー！」

「よし分かった……！」

「……ハッ!?」

ソガからの連絡を聞きながら、辺りに蠢く妖しげな気配に気付くダン。

「どうした？」

「人の気配がします……隊長！ どうやら予言は的中ですよ！」

「なに……あ、あれは!?」

その時、空から倉庫目掛けて飛来する三つの火の玉、危ない！

「あれだ、やれアンヌ！」

「了解、レーザー発射！」

駆け付けたホークが素早くレーザーとミサイルを発射し、3つのうち2つを空中で爆発させる！

ただし、残る1個は惜しくも着弾し、地上の倉庫部分を激しく炎上させてしまった！  
「いかん！ すぐに消火せねば！」

今はまだ偽装した地上部分の被害だけで済んでいるが、このまま火災を放置すれば、

地下の施設にも燃え広がってしまった！

慌てて飛び出そうとしたキリヤマの脳裏に、ちらりと過ぎる、男の忠告。

『その時にですね……隊長さんもお怪我をしますよ……気をつけた方がいい……』

「……ハッ!？」

嫌な予感に、ぐつと踏みとどまったキリヤマの鼻先を、無数の銃弾が横切っていく。

あのまま飛び出していたら、今頃は射撃の餌食になっていただろう。

「ヤスイ君……ええい、そこか!」

「ウウツ!!」

「隊長!」

キリヤマの自動拳銃が火を噴いて、物陰に隠れた敵の体にお返しの鉛玉をお見舞いした!

それを見ていたダンも、火線の先へウルトラガンで応戦する。

一人、また一人と倒れていくが、敵は巧妙に姿を隠した上に、明らかに数が多い。

ジリ貧になるのは避けようもなく、ついにキリヤマの弾が切れてしまった!

エネルギー式の光線銃と比べて、実弾拳銃は射線が見えにくい分、夜戦には有利であつたが、継戦能力は比べるまでもなかつたのである。

するとキリヤマは徐に、スーツの下に隠されていたベルトのバックルをぶちりとむし

り取った。

「隊長、いったい何を？」

「ダン、私が合図したら、後ろの物陰へ走るんだ。くれぐれも敵に姿を晒してはならん。いいな！」

「了解！」

「それっ、今だ！」

言うやいなや、キリヤマは自決用に持ち歩いていた手榴弾を、少し長めに起爆設定して、敵がいると思われる方向へ放り投げた。

「何か飛んできたぞ！」

「手榴弾だ！ 散れ！」

自分達の傍へ、何かがポトリと落ちるのを、耳聴く聞きつけたシャドー星人達の動きは速かった。

爆弾を後ろに蹴飛ばすと、蜘蛛の子を散らすように物陰から飛び出していく。

そして、その散り散りになった状況すらも利用して、敵が先ほどまで隠れていた物陰へ2方向から突撃したのだ。

母星で厳しい戦闘訓練を受けた革命戦士ガブラ<sup>戦</sup>・カー<sup>の</sup>ノ<sup>子</sup>達は、不測の事態すらも捨て身の攻撃に転じてしまうほどに、高い判断力と士気を備えていた。

奇襲、闇討ち、騙し討ち、味方を盾にしての一斉突撃なんでもござれ。敵を殺すためならば、どのような手段もお構いなし。自分の死すら恐れぬ攻撃性これこそが、宇宙ゲリラと恐れられる、シャドー星人戦闘部隊の練度なのだ。

しかし、敵がいたであろう場所へ殺到した彼らは、首を傾げることになる。

「もらった! ……いない!」

「どこへいったのだ! ……ん? なんだこれは」

一人の戦士が消火栓へヘルトのようなもので巻きつけられた、六角形の平べったい物質を発見する。

そこには『PDF・U・G』と書かれており、中心部から広がる青い3つの矢印で構成された紋様が刻まれていた。その物体の上部では、なにかのランプがゆっくり点滅しているのではないか。それこそ極東基地所属ウルトラ警備隊の専用エンブレム。PはPacific<sup>環太平洋</sup>の意であつたが……Prowess<sup>武勇</sup>のPでもある。このバックルこそ、勇猛果敢なシャドー戦闘部隊の戦士達へ、歴戦のキリヤマからのささやかな贈り物だったのだ!

戦士の一人が、踵へ何かがあたつた事に気付き、足元を見やると……そこには先程蹴り飛ばしたはずの手榴弾が……

「なっ!」

ズガアアアン!!

バックルに仕込まれた磁力誘引装置へ、ころころと引き戻されたキリヤマの切り札が、シャドー星人達を纏めて吹き飛ばした。

運よく味方の影となり助かった戦士もいたが、その体表へ、破損した消火栓から勢いよく吹き出した水飛沫が降り注ぐ。無数の水滴が、その透明な輪郭で月夜を反射し、まるでスパンコールの様にきらきらと美しく輝いて、闇の中へその姿を浮かび上がらせていった。

次々とウルトラガンで敵を撃ち抜き、尊敬の眼差しでキリヤマを振り返るダン。

「やりましたね……隊長!」

「敵が姿を隠しゲリラ戦を仕掛けてくるといふのなら……こちらもそれを逆手にとつて、ゲリラを仕掛け返してやるだけだ。今回少数なのはこちらだったのだからな」

「貴方は……実に恐ろしい人だ……貴方が隊長で本当に良かった!」

「お褒めに預かり光栄だ。さ、行くぞ!」

ダンと笑顔を交わしたキリヤマは、敵の持っていた光線銃を拾い上げると、残敵を蹴散らしながら、倉庫の消火装置を作動させる為、炎の中へと、その身を躍らせていくのだった……

## 昨日搜したミライ (Ⅲ)

メデイカルセンターで、アンヌに軽い火傷を治療してもらう隊長。

そこへヤスイを連れてやってきたフルハシとソガ。

「隊長、ただいま戻りました！」

「た、隊長さん！ やっぱりお怪我を？」

「いやヤスイ君、何も心配することはない。軽いものだ。むしろキミの忠告がなかったら、もつと酷い事になっていただろう……礼を言うよ。そして無事でよかった……本当に！」

「いやいや、そんなとんでもない！ 私の方こそ、こんなに頼れる部下の方々をつけて頂けて……おかげで命が助かりました！」

ガーゼを当てた隊長の顔を見て、予言が当たってしまったかと氣遣うヤスイ。  
彼に対しキリヤマは、穏やかに敬礼で返した。

「隊長、申し訳ありませんでした」

「何もフルハシがあやまることはない」

「いえ、ソガが強引に引き止めなかったら、そのまま帰っていたところでしたよ。我々は

隊長を笑っていたんですから……」

「ふっ……そうだろうと思っただよ……」

「ああもう、そんな顔をなさらないで……そりゃ、寿命が縮むくらい怖い思いはしましたが……わたしやこの通りピンピンしてます。それで良いじゃありませんか……」

「いや、私の判断が甘かった……」

「いえ！ 追い出した我々の責任です」

「殺されるから助けてくれと頼んでいた……それを私は断った……窮鳥懐に入れば猟師も殺さず……それなのに私は……懐に入った窮鳥を……みすみす死のジャングルに、追いやつてしまう所だったんだ！」

「隊長さん……」

「同じ轍は踏まん！ こうなったら、ヤスイ君の安全の為に、あの敵を一人残らず倒さなくては！」

そこにアマギが、変な装置を抱えて部屋に入つて来た。

「ダン、これでいいかい？」

「うん！ ……隊長、これはこの部分から放射線を出して、見えない敵でも見ることが出来ます！」

ダンの発案で、ワイルド星人の放射線カメラを改良して、透明な敵に対する対抗策に



したのさ。

今回のシャドー星人は、地下に円盤を隠しているから、空から噴霧装置で塗料を撒いても、あんまり意味ないしな。

流石はダンだ。自分の魂すらも捉えて見せたカメラを、こんな風に転用してしまうなんて。

「やつらの秘密基地を、これで突きとめてやりますよ！」

「でも、それ一台だけで、あの広い富士見ヶ原を探すのか……」

「……そういえば、捕虜を一人捕らえたのだったな？ 奴から何か情報を聞き出せないか？」

「はあ、それが……どんなに尋問しても、頑として口を割ろうとしませんで……ヤスイさんの助言で、気絶中に口の中を改めておいて良かったですよ。危うく服毒自決されるどころでした！ 恐ろしい奴らです！」

「そうか……」

俺も捕虜から何か吐かせようと思ったが、やっぱり宇宙ゲリラシャドー星人の名は伊達では無かった。お土産の意味があんまり無くってガツカリだ。

仕方ない、地道に探すしかないのか……

「あのお……よろしければもう一度、私に彼女を見させてやっては、くれませんかでしょう

かねえ……?」

「え? 虫も殺せなさそうなヤスイさんが? 拷問とか出来るんですか?」

「ええ……今なら何か分かりそうな気がするんです……なんとなくですけど……」

「はあ……」

凶悪殺人犯もかくやといった様相で、嚴重に拘束されたシャドーの女戦士に面会するヤスイ。警備隊が固唾を飲んで見守る中、目を瞑って彼女の頭に手を翳すと、何やらぶつぶつ呟いていく。

「うんうん……なになに……シャイン星との革命戦争で、この地球が橋頭保として丁度良い……この辺境から、油断したシャイン人へ、後ろから逆撃を……なんて恐ろしい奴らだ……地下に円盤を隠して……誰か、地図を!」

ヤスイの要求通り、富士見ヶ原一帯の地図が広げられると、彼はその一点を指し示した!

度重なる生命の危機に、生存本能を激しく刺激されたヤスイの第六感は、この短時間で著しい覚醒を遂げていた。もはや予知夢どころではなく、テレパスの域へ片足を突っ込んでいたのだ。これでも脳波を弄られていた原作程の覚醒ではないのだから、彼の持つ潜在能力は本場に計り知れないものだった。

「よし……、フルハシはここに残って、ヤスイ君を守ってくれ……みんな、俺に付いて来

いー。」

富士見ヶ原山中のうち、ヤスイの指し示した地点にポインターで到着した警備隊一行。

アマギが進み出て放射線スコープを構えると……

「隊長、いました！ 敵の歩哨です！ 以前の搜索時同様、自分の姿が見えていないと思つて油断しています！」

「よし、どこにいる……？！」

「あの木の影に一人！」

「あそこですね、行つてきます！」

「気をつけろよ……ダン！」

音もなく忍び寄つたダンが、アマギの誘導に従つて、木にもたれていた歩哨へ後ろから襲いかかり、まずはその武器を奪う！ 無手となつてしまった歩哨だったが、木の下を潜り肉弾戦を仕掛けてくるが……

スマートな見た目に似合わず、あの怪力のブラコ星人とすら生身で競り合う腕力を発

揮し、隊の中でも、フルハシと1、2を争う格闘能力を有する、精鋭モロボシ隊員の敵ではなかった。

シャドーの崇める戦神ゼガンは言っていたのだ……ここで死ぬ定めだと……

見張りを打ち倒し、敵地下基地へ潜入した警備隊は、獅子奮迅の大活躍。無防備な警邏を真正面から急襲し、通路での挟み撃ちも咄嗟に役割を分担して対処していくメンバー達。

確かにシャドー星人は、恐ろしい攻撃性と高い士気をその身に宿していたが……逆に自分たちが攻撃されると弱かった。敵を翻弄し、隙を晒した重要施設を、こちらの任意のタイミングで襲撃する。イニシアチブが自由にとれる遊撃戦を主体としていた彼らは、拠点防衛がとことん苦手だったのである。

「急ぎましょう！ 気付かれて円盤が飛び立たないうちに！」

「ああ……ここで根絶やしにしてやる！」

「……ハッ！ いけない！ 行っちゃダメだ……！」

「や、ヤスイさん？ 突然どうしたんです？」

基地のベッドで正座していた男が、唐突に叫び出す。

「……フルハシさん、後生です。今からあのヒコーキで飛んで行つて下さい。みなさんが……セブンが危ない！」

「な、なんだつて……？」

「あなたが未だに私を信じ切っていない事は、重々承知しております。その上で、どうか頼みます！ あの時セブンがいなけりや、わたしや死んでいたでしょう……私の恩人を助けてくださいよお！ 今は、あなただけが頼りなんです！」

「セブン？ あんたセブンに会つたことがあるのかい……？ そんな筈はないし……それに、今の俺の任務は、あんたの護衛だよ」

「私の事は大丈夫。あいつらは、天然光の中でしか姿を消せません。この基地の隊員さん達が十分に守つてくれます。そんな事より、セブンを……ソガさんや隊長さんを、救うんです！ あなたの手で！」

「……みんなを……」

血気迫るヤスイの訴えに、少しばかり逡巡したフルハシだったが……

「いよし！ 分かつた！ 俺はどうすりやいいい！」

「円盤です……円盤を攻撃なさい。何があつても、どんな光景でも、円盤だけをただひたすら一直線に撃つんです！ ……いいですね？」

「円盤だな？ ……任せろ！」

警備隊が宇宙船の隔壁内へ突入した直後、地響きを上げて崩れ落ちる基地！

先行していた三人をそのまま上空へ連れ去りながら、カメラを持った二名を置き去りにすることで、戦力の分断を図ったのだ！

「あつ、しまったー！」

「ダアアアンー！」

「アマギーツー！」

瓦礫に埋もれ、気を失ったアマギを余所に、ダンはウルトラセブンに変身し、敵の円盤を追跡する！

「デユワツ！！」

セブンの剛腕が、円盤の外壁へ水平チョップを叩き込み、飛行能力を奪ってそのまま軟着陸させた。

大きな足跡をたてて歩み寄るセブンに向けて、もうもうと煙を噴き上げる円盤から、シャドー星人の降伏宣言が聞こえてくる。

「降伏する……これ以上乱暴しないでくれ！」

敵の宣言を信じ、セブンが歩みを止めて頷くと……その足元から爆発と共に、銀色の異形が、巨体をうねらせセブンに躍りかかった！

口から猛毒の涎をだらだらと滴らせながら、シャドー星の誇る生物兵器、合成獣ガブラがセブンに迫る！

シャドー人は、異なる生物を融合させ、兵器に適した新たな生命体を造り出す技術に長けていた。

母星に生息する唇脚網の生命力と毒性を、食肉目の巨体と狂暴性に付与した……地球で言うムカデとライオンのキメラとも言うべきこの戦士は、持ち前のフィジカルで、セブンと互角の格闘戦を繰り広げる！

黄金に輝かたてがみを振り乱し、馬乗りになったセブンへ銀の尻尾を叩きつけ、そのまま盛大に振り落とすガブラ。肉弾戦では分が悪いと悟ったセブンは、しかし敵の甲殻が節目で連結されている事を見て取ると、素早く解き放ったアイスラッガーを、ウルトラ念力で巧みに誘導すると、その首筋を正確に跳ね飛ばした！

地面をごろりと転がるガブラの頭部。

崩れ落ちた敵の切り札を尻目に、今度こそ円盤へのっしのっしと近づくとセブン。

「待ってくれ！ 今度は本当に降伏する。三人を返すから許してくれ！」

円盤から解放された警備隊のメンバーを、セブンは巨大な両の掌で大事に掬い上げると、テレパシーで無事を確認する。

《怪我はないか？》

「ああ、ソガとアンヌが気絶してしまつたが……ひとまずは無事だ！　だが……油断大敵だぞ、セブン！　奴らがそう易々と降伏するとは思えん！」

その時！　隊長の懸念通り、ガブラの頭部が起き上がり、反重力飛行でセブンの首筋を狙つて飛びついてきた！

「あつ！　セブン危ない！」

「デュオツ!？」

敵の奇襲を間一髪躲したセブンであつたが、ガブラの首は執念深く彼をつけ狙う。

警備隊の三人を慮つて、満足な回避も迎撃もできないセブンは、その牙を紙一重で躲すので精一杯だ！

そこへ、甲高いエンジン音を轟かせて、フルハシの駆るホーク一号が飛び込んだ！

「あツ！　本場にセブンが苦戦してやがるツ!？　コイツ……！」

戦友の周囲を飛び回る、復讐鬼の首を撃ち落とそうとしたフルハシだったが、彼の脳



裏に閃くヤスイの言葉……！

「お前の正体は……こっちか！」

フルハシの投下した爆弾が、寸分たがわずシャドー円盤に突き刺さり、跡形もなく吹き飛ばした！

途端に制御を失い、その場へぼとりと落下するガブラの生首。

こうして、執念深い侵略者の計画は、昨日の事となったのである……

「おい、出たかい？ 俺の運勢……」

「ダメです……」

基地の一室で、水晶玉を覗き込むフルハシは、その強面をぐんにやりと歪ませて、滑稽としか言いようがない。

「頼むよ……今度は信じるからさあ」

「ダメです……死相が出ちまっています……」

「なんだってえええ？」

「飛行機……数字の3に気をつけなさい……せいぜいお母さまを大切になさる事です

……」

「お、おい……縁起でもない!」

その後、ビビったフルハシがホーク3号を隅々まで点検したら、自爆装置のタイマーが遅れてたのを見つけて、感心していた。すっかりヤスイ信者だ。手の平マグマライザーかよ。

ふううん自爆装置ねえ……と思って聞き流そうとしたら……いやいや、マズイマズイマズイ!

予言のせいで危うくフルハシが死ぬところだ。

そうか……ピラ星人の円盤群との空中戦で、気付かないうちに時間停止を食らっていたのが、彼の明暗を分けたのか……

人間万事塞翁が馬、どんな事が助けになるか分かったもんじやない……

自爆装置が正しく機能したら、例えセブンがカナン星人を倒しても、フルハシが機体のコントロールを取り戻す前に、木っ端微塵になってしまう!

今後、あんまり彼の予知に頼るのはやめておこうと心に刻みながら、俺はホークの自爆装置をこっそり遅らせておくのだった……

## 零下40度の対決（I）

不吉な雲の流れが、地球防衛軍の上空をみるみる暗くしていった。

それはあの恐ろしい事件の前兆でもあったのだ。絶対零度の死の世界が、やがて……パトロール中のポインター。

運転席にはダンはあまりの猛吹雪に、寒そうに眉を顰める。

やがてポインターのホバーも止まり、雪の中で立ち往生してしまう。

（これはただの吹雪ではない。いったい何がこの異常寒波を……う？）

---

作戦室に戻ってきたアマギ。

彼の防寒服やヘルメットには、びつしりと雪と霜が貼りつき、真っ白に染め上げていた。

たった数十分、周辺調査に出かけただけで、これだ。

「基地を中心としたこの一帯は、冷凍室のような異常寒波に包まれているんです」

「異常寒波？」

「隊長。富士測候所に、問い合わせてみたんですが……」

言葉を切り、首を横に振るフルハシ。

いくら真冬とは言え、先程から急激に気温が低下し、日本ではありえない程の猛吹雪に見舞われてしまっていた。それも基地周辺のみ……

「原因不明の異常寒波か……アマギ、表の気温は？」

「零下112度！」

「冗談じゃないぜ！ わが故郷北海道だって、せいぜい零下40度だったのに……」

そう答えるフルハシだったが、アンヌの淹れたコーヒー一口含むと、その温かさに考えを改めた。

「……まあ、零下112度の寒波ゾーンに包まれたからといって、そうビクビクすることはねえさ。地下18階の動力室では、原子炉が赤々と燃えているんだ。人類の科学、万歳だよ！」

お前も飲めとばかりに差し出されたコーヒーを、ごくりと飲み干し、白い吐息と共に、絞り出すように感想を口するアマギ。

「……うまい！」

最高の一杯へ彼らが舌鼓を打っていると、作戦室に無線が入る。近場のアンヌが応答

すると、そこにはしかめっ面のダン。

「こちら、作戦室……あ、ダン！」

「隊長、ポインターがエンストです。いったい、この寒波は……？」

「よし、ポインターを捨てていい。すぐ基地に戻れ」

「……はい」

了解の返事をしたものの、窓の外を見やると、言葉を失うダン。

今まで、隊長の指示には2つ返事で従ってきたダンが、珍しく躊躇っているではないか。

あのイワムラ博士の所へ行けと言われた時でも、こんなに嫌そうな顔をしなかった。

「どうしたんだ？ ……ダン？」

「ダン、暖かいコーヒーがあるわよ。早く帰ってらっしゃいよ……」

「ああ……」

そんな時、ダンの映るビデオシーバーの画面に、横合いからひよっこりと顔を出す者がいた。

眉尻を下げたダンの顔ですら、ずいぶん控え目な……いや、爽やかな笑顔と言っても過言ではない程、露骨に顔を歪めた、助手席のソガ隊員だ。

「どうしたんだ？ ……じゃありませんよ！ 我々を生鮮肉かなんかと勘違いしてらっ

しやるんですか、隊長！ 外はいつたい何度だと思ってるんです？」

「先程の報告では、零下112度だそうだが……」

「零下112度!? そんなバナナで釘が打てるどころの騒ぎじゃない！ 宇宙食じゃ

ないんだから、そんな中を生身で歩いたら、フリーズドライになっちゃいますよう……」

「ええい、うるさい奴だな……だいたい、お前が無理やり付いて行つたんじやないか。後

からつべこべ言うんじゃない！ アマギ特製の防寒着があるだろうが！」

「そこをなんとか！ 後生です隊長、ホークで回収をお願いしますよ……出来ればコー

ヒーの出前付きで」

「少しは自分の力で、できる限り頑張ってみようとは思わんのか？ ……仕方のない奴

め、今から行くから、そこで待つてろ！ 私直々に修正してやる！」

「それでいいから、早いところお願いします……こんなところでかき氷にされるくらいだつ

たら、鉄拳制裁の方がずっとマシです！」

「……そんなにか……」

ソガの言い草に呆れた隊長が、シーバーを切ろうとした時、いきなり下から突き上げるような衝撃に基地が揺れた！

誰も立っていられない程の地震、床に転がるコーヒーカップ。あつという間に停電し、真つ暗な闇へ包まれる作戦室。揺れが収まると、キリヤマはライターの明かりを頼

りに、すぐさま動力室へ確認をとる。

通信機の間こうからは、ムカイ動力班長の困惑しきった声が聞こえてくる。

「作戦室より動力室へ……いったい、何が起こったんだ！」

「原子炉がやられました！」

「なにッ!? 原子炉がやられた!? 原因は何だ？」

「何がなんだか、わかりません……!」

「何がなんだかわからんじゃ、さっぱりわからんじゃないか! すぐ調べて、連絡してく

れ! フルハシ、アマギ。地下に降りて原因の調査!」

突然の事態に、軽いパニック状態の作戦室。まるでハチの巣を突いた様な騒ぎだっ

た。

---

「突然切れてしまいました……いったい、何があったんでしょう……?」

「さあ、何がなんだか分からん……」

ポインターの中で首を傾げる俺達。

といつてもまあ、オレは知ってるんだけど……

今頃、基地の動力ケーブルがガンダーに襲われて、全機能が麻痺っちまつてる頃合いだ。

あーあ、こうなる前にホークで回収して欲しかったんだが……ままならんね。

「しようがねえ、こうなったら隊長の仰る通り、ウルトラ越冬隊員になるしかねえや……ダン、お前はポインターで待つてろ。せつかく定員分あるんだ、防寒具も二枚重ねにしとけ」

「えッ!? そんな、僕も行きますよ!」

「扉開ける前から、そんなガタガタ震えてるような筋金入りの寒がりを、こんな吹雪の中で歩かせられるかっての。さあ基地についた、振り返ったらお前がい……なんてのは、嫌だぜ?」

「いや、しかし……」

「まあ任せろって! 先輩の北海道育ちの前にやとても自慢できないが……山陰のベしやべしや雪で何回転んだと思ってるんだ。ジイサンバアサンの家が木造でさ……これがまた、正月に寒いなのって! 俺が暑がりなの、知ってるだろ?」

「ソガ隊員……」

「俺が助けを呼んでくる。お前は絶対動くんじゃないぞ!」

このために、雪がちらついたと思つた瞬間、無理言つて同行したんだ。このために



…

ウルトラセブンにも弱点があった。光の国M78星雲から来た彼は、普通の人間以上に寒さに弱かったのだ。

おまけに雪の中で失神して、ウルトラアイを落とす大ポカをやらかす始末。苦手な極寒環境で、延々探し物をする羽目になったセブンは、エネルギーがすつからかんになり、これ以降、他のウルトラマン同様に変身時間に制限がつくようになってしまう。

そんな事、させてられるかっての。

いやまあ、零下112度、ひいては最終時点で140度とか、別にセブンでなくても大体の生物が弱点なんだが……普通の人間以上に寒さに弱いんだから、珍しく俺の方がダんに勝ってるわけだ。

人間がウルトラマンに勝てるなんて、そんなチャンス滅多にないぜ？

うおお、今日から番組タイトルはウルトラソガだ！ 頑張れ、俺！

ウオオオオ……さっぶ。

非常灯で赤々と変わった視界の中、鉄火場のような様相を呈した動力室で、ムカイ班長が矢継ぎ早に檄を飛ばしていた。

調査の為に降りてきたフルハシとアマギ。

動力室の壁面にはぼつかりと大穴が開いており、動力ケーブルがズタズタに引き千切られてしまっていた。

「こつち来て！ 足元、気をつけるよ……ライト右回せ！」

「ムカイ班長！ これはいったい……？」

「見てください！ この基地の心臓部をグサリと一突きだ！ 人間なら即死です！」

「やっぱり、爆破されたんですか？」

「爆破じゃありませんよ。ドリルのようなもので、突き破られたんです！」

ムカイ班長の説明で、事態が想像以上に深刻であると分かったアマギは、作戦室からの確認の電話へ、困り果てた様子で損害を告げる。

「ハイハイい……はい！ アマギ隊員！ キリヤマ隊長からです！」

「アマギです……ハッ、被害は想像以上に大きいです……ハッ、この調子じゃ当分回復の見込みは……」

「何!?! 見込みが立たん？ 地下ケーブルはこの基地の命だぞ。全力で復旧作業に取りかかれ！」

ムカイ率いる動力班が復旧作業に取り掛かろうとした時、フルハシとアマギは、隔壁に開いた謎の大穴を調べていた。



やらコイツです!」

「この下にいるのか!」

「はっ、冷凍光線を吐き続けて、とても近寄れません!!」

動力室からの悲鳴に近い救援要請に、長官が唸る。

「マグマライザーは?」

「はっ、シャッターが開かないんです。原子炉と地下ケーブルが復旧しない限り、ホークそのほかの超兵器も使用不能です」

「うむ……すると素手で戦うより、方法はないというのか……」

「隊長! 武器を! 特科兵器庫からアレを持って来て下さい! 備え付けの火炎銃では、歯が立ちません!」

「わかった! 直ぐに行く! なんとか持ちこたえろ! アンヌ、ウエニシ、ヨシダ、ウ

エノ! ついて来い!」

「ハッ!」

## 零下40度の対決（Ⅱ）

「くそッ……このままじゃあ動力炉がカチカチの製氷室になっちまうぞ！」

「火炎銃の炎も消してしまふなんて……なんて奴だ！」

隔壁に開いた穴から、我が物顔で冷凍ガスを噴射する怪獣。

みるみる温度計の針が下がっていき、あつという間に零下90度。

地下だというのに、これでは外と変わりはない。

このままこの無法者に、基地全体が氷河時代へ沈められてしまうのか……？

「待たせたな！ 総員！ 全てのライトを奴の顔へ向ける！」

「みんな、どいて！」

おおっ！ 来たぞ！ 隊長達の増援だ！

動力室に飛び込んできたキリヤマとアンヌは、耐熱スーツを着込んでおり、何か巨大な樽状の物体を背負っていた。怪獣の潜む穴の前へ進み出た彼らは、細長い銃身をライトに照らされた巨顔目掛けてきつちりと構える。その銃身の根元には……背負子から伸びたチューブが接続されていた。

「全員、バイザーを降ろして、宙間装備だ！ それ以外の者は退避せよ！ ……放射開始

！」

その瞬間、キリヤマの号令とともに、暗闇に沈む地下動力炉へ、真昼がもたらされた。二人の構えた火炎放射器から、目も眩むような紅蓮の焰が噴射され、闇に潜む敵の姿を、煌々と照らし上げたのだ！

渦まく炎がうなりをたてて、燃える……燃える!!

『力。力。ロロロロロロロロロロロロロロロ!?!』

それもただの火炎ではない、放物線を描いた閃光は、怪獣の顔面に着弾すると、ネバつくように燃え広がり、硬い表皮をドロドロに焼け爛らせた。

これぞ、防衛軍が密かに心血を注いでいた新兵器、高性能火炎放射器ストラグル700の威力！

かつて凶悪脱獄殺人囚を引き渡した、キュラソー連邦との間で交わされた司法取引には、両星間のささやかな貿易条項も、試験的にだが盛り込まれていたのだ。

その輸入品の一部には、彼らの唾液腺から採取される、特殊な可燃性増粘剤の元となる粉末も、微量ながら含まれていた。

それらと防衛軍謹製ナフサを混合した、このキュラソナパームは、表面温度にしておよそ摂氏700度以上！

これでも通常のナパームより火力や範囲は落ちるものの、それを補って余りある保管

性と即応性を有し、非常に扱い易いという利点があった。

でろりと張り付いた灼熱の涎が、怪獣の顔をあつと言う間に火達磨に変え、その分厚い面の皮を真つ黒に焼き焦がしながら、奴の周囲から急速に酸素を奪っていく。

矮小な人類から齎された思わぬ反撃に、驚愕と苦悶の声を上げる怪物は、大いに怯み、敵をガスで牽制することも忘れ、顔の炎を消そうと躍起になっていた。

「フルハシ隊員！ これを！」

その隙をみて、後ろでナフサタンクを支えていたウエノとヨシダが、二人がかりでもう一つの武器を抱えて走ってくるではないか。フルハシが両手で受け取ったそれは……バーチカルショット、その名もスパイダー！

「よっしゃ、任せろ！」

一人ではとても満足に扱えない試作兵器の非常識な超重量を、これまた常識外の筋力でねじ伏せたフルハシは、まるで普通のマシンガンでも構えるような気軽さで、アンヌとキリヤマの間へ並び立つ。

彼はそのどっしりとした安定感で、暴れる怪獣へゆっくりと狙いを付けた。顔面を焼くのは二人に任せ、彼が慎重に狙うのは……細長い触覚の先でぎよろりと突き出た巨大な眼!!

デンデンむしむし、かたつむり……お前の目玉は……そこにある!!

「これでも食らいやがれッ!!」

フルハシが引き金を引くと、銃口から極太の熱線が一直線に照射され、怪獣の頭頂部を掠る。思つた以上の反動だが、さりとて慌てず、この猛烈なじやじや馬を抑え込んだフルハシが、射線を薙ぐように修正していくと……ついに？き出しの眼球へ、小型融合炉の膨大な熱量が直撃！

かつて、年の離れた兄から、火炎放射のコツをよくよく聞いていたのが、功を奏したのかも知れない。撫でまわすように照射されるスパイダーの熱線が、怪物の片目を散々に炙り倒す。一瞬で白くぶくぶくと沸き立つ水分。沸騰した眼球が内側から弾け飛び、巨大な敵へ、この世の物とは思えぬほど恐ろしい絶叫を上げさせた!!

恐れ知らずの警備隊が放った、闘志の炎の猛攻に、たまらず穴の中を引き返していく怪獣。<sup>ガンダー</sup>

「どんなもんですか!」

「いやあ……助かったあ……なかなかやるじゃねえか、アンヌ!」

「うふふ、まあね」

増粘剤のタンクを背負い、体に巻き付けたホースを解きながら、ガッツポーズのように放射器を構えて得意げな顔を見せるアンヌ。この場にもしもソガ隊員がいれば、まるでサトミ隊員のような、と評したかもしれない。



「班長！ 鬼のいぬ間だ！」

「よし、酸素充填と換気作業にかかれえ！ その後に復旧作業に取り掛かる！」

こうして、怪獣の襲来で中断していた復旧作業が再開された。

だが、怪獣もタダで逃げ帰ったわけではない。撃退されるまでの間、傍若無人に吐きまくった冷凍光線と、外部に繋がるトンネルとのせいで、動力炉の気温は一気に下がってしまっていた。

「……零下40度!?!」

「あれだけ豪勢に焚火を焚いて、ようやく北海道並みたあ……恐れ入ったね……」  
基地の復旧は、まだまだ始まったばかりだ……

（基地はどうなっているだろうか……。それに、ソガ隊員は無事なんだろうか？）

だが、ポインターの中で寒さに凍えるダンに、それを確認する術はなかった。

半ば雪に埋もれたポインターから外を透視しても、辺りは一面白銀の世界……

いくら警備隊のスーツが特殊環境下を想定されていると言っても、限度がある。

車の中で、上下ともに特殊サウナスーツともいえる防寒着を着込んでも、まだ寒い

だ。

さつきは強がつてああ言ったものの……ソガ隊員に付いて行かなくて、正解だったかもしれない……これでは彼の足を引っ張っていた事は確実だ。

こうしているだけでも、徐々に体温が奪われていくのが分かる……

やがてダンの意識が遠のき……眼前に、煌々と輝く太陽が現われた……熱と光を欲するダンの心が幻覚を見せたのか？

しかし、太陽の真つ赤に輝く炎の中へ、異形の影が揺らめき、甲高い不快な声で語り掛けてくるではないか。

「光ノ国ガ恋シイダロウネ、うるとらせぶん！ デモ、自業自得ト言ウモノダ。M78星雲ニハ、冬ガ無イ。寒イ思イヲ、スルガイイ、うるとらせぶん！」

「誰だ、お前は？」

「地球ヲ、凍ラセル為ニ来タ、ぼーる星人ダ。我々ハ、コレマデニモ、2度バカリ、地球ヲ氷詰メニ、シテヤツタ。今度ハ、3度目ノ、氷河時代ト、言ウ訳ダ」

「氷河時代？」

「地球上ノ、生キトシ生ケル者ガ、全テ、氷ノ中ニ閉ジ込メラレテ、シマウノダ。うるとらせぶん！ 勿論、才前サンモ一緒ダ！ ツイデニ言ツテオクガ、地球防衛軍トヤラヲ、マズ手始メニ、凍ラセテヤツタ！」

「なにー！」

「アイツラガ、オルト、何かト邪魔ダカラナ……ハツハツハツハ!!」

高笑いをするポール星人のシルエットが遠のき、ハツと我にかえるダン。

「幻覚か……? 幻覚を利用して姿を現わすとは……ポール星人め! ……そうだ、基地が危ない……!」

左胸のポケットをまさぐるダン。

ウルトラアイを取り出して、変身しようとするが……

ぐつとそれを思いとどまる。

気になるのはさっきのポール星人達の様子だ。

言葉の上では、余裕綽々といった雰囲気であったが……彼のテレパシーは微かな違和感を捉えていた。

後半の部分で、その自信満々で尊大な態度の裏に、ちらちらと見え隠れする、確かな焦燥と苛立ちを、ダンは感じ取っていたのだ。

もしや……基地は氷漬けになんかかっておらず、奴らはハツタリをかましているだけなんじゃないのか?

うん……きつとそうに違いない。そもそも彼らが、あんな奴らに屈服するとは思えない。

ここで自分が挑発に乗って変身してしまう事こそ、敵の思う壺なのではないか……？  
正直なところ……：ダンは今までの戦いで、人類の底力というモノを、これでもかと言う程に見せつけられていたため……ある種、過大評価とも言えるくらい、仲間たちの実力を高く高く見積もってしまったている節があった。

それが良いか悪いかは別として、少なくともダンが自分で思っていた以上に、ウルトラ警備隊を信じ切ってしまったのだ。

もつとも、今のダンは寒さで酷く消耗し、正常な判断力を失っていただけでなく、精神的にも弱り切っていた。この極限状態において、そんな常とは違う精神状態だったのだ……彼の信じる地球人像という、妄執的とも言える理想に、縋りついてしまったのだ。  
ポール星人の侵略計画は、彼らが想定していた以上に、ウルトラセブンへよく刺さり、彼を肉体的にも精神的にも追い詰めていた。

ところが……あまりにもよく効き過ぎたが為に、彼が普段は決して見せないような……心の奥底にある、ある種の弱さとも言うべき認識の齟齬を、氷上で行うワカサギ釣りの下準備の様に穿ち抜き、ずるりと？き出しにしまったのだ！

元々ポール星人達の考えていた計画はこうだ。まずはモロポシダンが孤立する瞬間を狙って、異常寒波を巻き起こし、仲間と分断した上で寒さという弱点で追い詰める。と同時に、冷凍怪獣ガンダーにより、防衛軍基地を一突き！ 仲間の動きを封じながら、

セブンの心の拠り所を先に潰すことによって、精神的な揺さぶりをかける。

すると、散々に判断力が鈍った状態で、セブンは仲間を救うために、不利な戦場で戦う事を選択するはず。あとは簡単、エネルギーを消耗し、弱り切った状態のセブンなど、ガンダーの敵では無い。真正面から叩き伏せればいい。

もしも奴がエネルギーの回復の為に、宇宙へ飛び出していけば、その隙に基地へトドメを刺し、他の地域に転戦するだけだ。わざわざガンダーをぶつけなくとも、全滅した仲間たちの骸の前で、絶望と後悔に打ちひしがれるセブンの心を、粉々に打ち砕いてやれば、生きた屍と変わらない。無敵の肉体を持つM78星人には、精神攻撃こそが最もよく効くのではないかと、ポール星人は睨んでいたのだ。

……ところが、蓋を開けてみれば、キャンデーの様に甘い甘いセブンの心を突き進むと、その根底で仲間達への絶対的な信頼という、弱点と呼んでもいいのかすら判断に困る、黄金に輝く情弱の片鱗を見せつけられる事になるなんて……これにはポール星人もすつかり呆れ果ててしまった。まさかこれほどまでに甘ちゃんだったとは……

「うるとらせぶん！ 才前ノ太陽えねるぎーハ、アト30分モスレバ、空ツポニナル。地球ガ、才前ノ墓場ニナルノダ！ サゾカシ、本望ダロウ！ ……ハツハツハツハ！」

「お前たちこそ、人間をあまり舐めない方がいい！」

「………本当ニ、変身シナクテ、良イノカ？ 後悔スル事ニナルゾ？ ソノ鉄ノ棺桶ガ、ソ

ンナニ、好キカ！」

「無駄だ、今にきつと、ソガ隊員が助けを呼んで来てくれる……」

「ソウカ……コノ男カ！　コノ男ガ、才前ニソンナ、甘ツチヨロイ夢ヲ、見セテイルノダナ？」

「……待て、何をする気だ？」

「ユケ！　がんばーヨ！　コノ地球人ヲ、ずたずたニ、踏ミ潰シテシマエ!!」

「……やめろっ!!」

雪の中を、一歩、また一歩と突き進むソガ。

アマギが改良した防寒服は、裏地に特殊な工夫を施して、さながらサウナスーツのような効果を發揮していた。そして、こんなこともあるのかと沢山忍ばせておいたベンジンカイロ。手袋も三枚重ね。

いやはや、こんだけやつてもまだ寒く感じるんだから、マイナス140℃ってのはヤベえわ……

そりやもう、こんな中を歩かされちゃあ、セブんだろうが地球人だろうが、凍死してしまうわな……

「づづ……さぶさぶさぶッ！」











第一、射角の広さや射程の問題を置いておけば、ミクラスの吐くバツファフレイムの方が余程、火力に優れていたし、それこそ純粋な破壊力と言う点では、あの新入りこそが、彼ら四匹の中で最も凄まじい光線を放つ。まあ、それを主人は少々持て余しきみではあったが。

そして、彼らの中で唯一、遠距離攻撃を持たぬアギラについて言及すれば……彼は肉體こそ早く成熟し、既に一端の戦士として遜色ないとはいえ、やはりついこの間、卵から孵ったばかり——勿論、ウインダムや主人の主観的時間感覚において——の赤子と変わらないのだ。

今は頼りなくとも、やがて数々の戦いを経て、より成熟するに足る時間さえあれば……もはや距離など無価値にするほどの俊敏性と脚力を獲得するだろう事は、彼の勇敢な母親の戦いぶりを見れば、明らかである。

そんな訳で、ウインダムは自分の遠距離攻撃手段にさして重きをおいて居なかったし、また、彼の主人が思い描く確かな戦略性の中で、自身が最後方に配置されるのを、あまり歓迎していたとは言えなかった。他の面々を見渡した上で、足りない部分を補えるのが自分しかない為に、その役割に甘んじていたに過ぎないのである。

彼が、真に誇らしく思い、主人を支える仲間達の中で唯一保有し、彼の主人に対して最も貢献できると考えていたのは……鋼鉄の如き強度を誇る、金属細胞で構成された、

輝く強靱なメタルボディであった。

お互いの遠距離攻撃が、どちらも相手に対して、牽制程度以上の意味を成さない事を理解した両者は、勇ましく雄叫びを上げて、雪原の真ん中で激しく激突した！

ガンダーのタツクルが、ウインダムを大きく仰け反らせ、今度はその体勢を引き戻す勢いで放たれた鉄兜によるヘッドバッドが、ガンダーのぶよぶよした鼻面に炸裂する。だが、それに臆した様子を見せず、ガンダーは突っ張りのような連続パンチと、鋭い爪による連続引つ掻きを繰り返してくるではないか。

なんと手強い……

敵の拳の応酬を、半分は体で受け止め、半分はいなしつつ、ウインダムは先程から、自身の動きが普段に比べて今ひとつ鈍い、と感じていた。恐らく、この極寒環境の中で、血液代わりの不凍液が、白く濁ってきているのだろう。……だが、それだけだ。

やはりウインダムは、この場において選出されたのが自分であってよかつたと、心の底から安堵した。おそらく、この敵を真正面から叩き伏せるには、自身は少々パワー負けである感を否めず、ミクラスやあの新入りのような怪力無双こそが適当であり、もし実際に彼らをぶつけたならば、ガンダーを肉弾戦で上回った筈だ。彼ら四匹の中で、最も距離格闘に秀でているのがミクラスであるのは、誰も文句のつけようの無い事であつたし、彼の吐くバツファフレイムに、この敵が耐えられるかどうか非常に怪しい。

……ただ、ミクラスがどれほど哺乳類として破格の恒温性を持つており、極寒においても短時間ならば、全く問題ない戦闘能力を發揮できるのだとしても……彼はやはり、有機生命体なのだ。彼らのような生き物は、そこに大小の差はあれど、生命の維持にくばくかの熱と酸素を必要とするのは変わらず、ウインダムの様に、それらに対して徹底的に節制であり続けられる訳ではない。我慢できるのと、必要ない、の間には雲泥の差が存在し……ウインダムは後者であった。

蛋白質によらぬ無機質な彼の肉体は、自身の生存にそれらを殆ど必要とはしないが為に、極寒であろうが灼熱であろうが、さらに言えば、そこが水中や宇宙空間のように、真空であろうが高濃度の放射線に満ち満ちていようが、全くもつて関係は無かった。どのような場面であっても、多少の差異はあれど常と変わらぬ実力を發揮し続ける事ができた。

山をも砕く怪力も、目にも止まらぬ敏捷性や、馬鹿げた火力の光線も、そのどれもこれも半端にしか持ち合わせていない彼が、それでも尚、己こそが、主人を支える忠実なしもべたる最先鋒として、最も相応しいと自負して止まない理由は、この究極的な汎用性と頑丈さにあった。

彼はどれだけ過酷な環境に突然放り込まれて、何度となく黴られたのだとしても、その傷から一滴の血も流さず、電子頭脳が活動を停止するその瞬間まで、忠実に敵を足止

めし続けるだろう。疲れを知らぬ鋼の肉体は、こと持久戦において、無類のタフネスを誇り、致命的な攻撃を受けない限りは、直接のダメージ以外で倒れることが無い。

もしも彼をバテさせようと思つたのなら、電子頭脳のリミッターが外れた状態で、完全フルパワーの最大出力で稼働させ続け、駆動系や回路に金属疲労や熱暴走を起こさせる位しか方法は無い。そして、心配するまでも無く、そんな事態はまず起こり得ないのだ。

すこしでも長く時間を稼ぎつつ、自分の硬さと重さを武器とするため、ウインダムが大きくジャンプし、ガンダーへ飛びつこうとする。それを認めた敵は、今度はそのまま上空へふわりと逃げると、雪に埋もれるウインダムを尻目に、その背後へ悠々と着地した。

なんとという事だ！ 飛べるのか!?! この怪獣は!?!

まさかこれ程までに硬い甲殻を持つ怪獣は、地底怪獣に違いないと踏んでいたウインダムは、驚愕と共に嘆息した。眼下で倒れるウインダムを睥睨する敵の両目には、確かな侮蔑が浮かんでおり、地を這うしかない者への明らかな嘲笑を含めつつ、その怪獣は得意げな雄叫びを上げた。

『力。力。ロロロロロロロロロロ!!』

……前言撤回だ。この環境、ではなく……この怪獣の相手として相応しいのは、自分

を置いて他にはないと理解した。先程、ガンダーはミクラスに勝てないと思ったが……奴が飛べるのならば、話は別。いや逆だ。

ミクラスはガンダーに勝てない。絶対に。

彼の真価は、敵が同じ土俵に立ってこそ発揮されるのであり、ひとたび飛ばれてしまえば、得意の突進どころか、吐き出す炎も当たるまい。彼の放つ攻撃は、そのどれもが眼前の敵を倒すに相応しい威力を持つていたが……当たらないのならば、意味はない。飛行能力を有する敵とミクラスは、致命的に相性が悪かった。

飛行で翻弄され続け、寒さの中で徐々に体温を奪われていき、やがて力尽きてしまわず。自慢の毛皮を雪でべつとりと濡らしたミクラスが、この悪魔に廻り倒される様を想像し、ウインダムはその光景の恐ろしさに身震いした。やはり、ここに立っていたのが自分で良かった！ 他の二匹など論外だ。変温動物である彼らは、戦場に現れた瞬間に、瞼を閉じて眠りこけ始めるだろう。

前回の戦いでは、常と異なり自分を起用しなかった主人へ、どうしてそこで己ではないのか！ と、少なくとも不満を抱いたものだが……自分がただただ愚かだったと言わざるを得ない。主人は……彼が絶対の忠誠を捧げ、敬愛してやまない彼の上司は、確かな慧眼と深謀遠慮を以って、今回の襲撃を予め見越していたに違いない！ そして、この絶望的な状況を打開し得る唯一の駒として、自分を温存し、あの頼りない地球人への

救援として、この身を駆け付けさせたのか！

なんとという英断！　なんとという策謀！

やはり我が主人に相応しい男は、この全宇宙を見渡したとしても、彼をおいて他にいない！

——これは彼の主人にも言える事だったが、その従者も、大概にして妄信的であつた



## 零下40度の対決 (IV)

雪に埋もれるウインダムが、身を起こそうと膝立ちになるが、そうは問屋が卸さない。ガンダーは、この妙にぺかぺかした敵の背後をとつて、動きを封じてやるために、積もつた雪を跳ね飛ばして急接近すると、その背中へのしかかろうとした。

しかし、ウインダムは腰から上をぐるりと一回転させると、驚愕に染まったガンダーの顔目掛けて、額から至近距離でレーザーショットを叩き込んだ！ 通常の生物とは関節の構造が異なるウインダムであれば、このような芸当も可能であつた。思わぬ奇襲に、流石のガンダーも意表を突かれ、喉元を強かに焦がされる。

してやったりと、高らかに雄叫びを上げるウインダムを睨みつけるガンダーの双眸には、ブリザードの様に激しい怒りと、つららのように鋭く冷やかな殺意が込められていた……そう先程、地下でフルハシ達に焼き払われたはずの顔面と左目は、もうすっかり元の形を取り戻してしまっている。ウインダムはそもそも、この怪物が人類に手酷い逆撃を食らつた事など知りもしなかつたので、何ら不思議には思わなかつたが……その程度には、先のダメージを回復してしまつていたのである。

G a s t r o p o d a   p u l m o n a t a ……末端チブル細胞を一片、かの星から引

き抜いてきて、この怪獸を見せつけければ、そう答えたかも知れない。ガストロポ<sup>腹</sup>ード<sup>足</sup>・プルモナ<sup>有</sup>ータ<sup>肺</sup>つまりポール星人の支配圏一帯に広く分布する陸生貝類のうち、最も大型で知られるこのガンダーという種は、体組織のほとんどが、水分とそれを包む粘液の膜、そして、その間を補強する少量の纖維質で構成されていた。

地球産のマイマイと大きく違う点は……：それらが全て凍っている事。ガンダーは、本来は不定形な自分の体を、あつという間に凍結させる事で、強度も形状も自在に操る事ができる。ただの水と侮るなかれ、纖維を含んだ氷と言うのは、衝撃に対して防弾ガラスのような強度を誇り、さらに周りが氷点下でさえあれば、そこへ水をかけるだけで簡単に補修が効く。ガンダーは全身がパイクリート材で出来た、氷の彫像なのだ。

例えどのような損傷を負おうとも、即座に傷が凍りつき、体液の流出を防ぐ。そうして、あとはゆつくりと周囲の水分と冷気を吸い取って、じわじわと再生していくだけだ。そんなガンダーにとっては、この一面の雪原と猛吹雪の全てが、肉体のスペアパーツといつても過言ではない。

自身のホームグラウンドたる、超低温環境化では、無敵の——もつとも、同系統能力の究極系とも言えるグローザ星人系人ほどの不死性と即効性はないが——再生力を持つガンダーを倒そうと思つたら、一度にその生命を脅かしえる攻撃をぶつけるしかなく、即死級の攻撃以外はほぼ無傷と言つて差し支えなかつた。

そして、この怪獣が恐ろしいのは、なにも生命力だけの話ではない。

ガンダーは、柔軟性に富んだ自身の腕部を、根元から螺子を巻くように捻ってタメを作ると、ウインダムの胸部装甲目掛けて、思いつき突き出し、振り抜いた！ 限界まで引き絞られた弾性の力が解放され、バネ仕掛けのように勢いよく飛び出し、拳の先端に配置された四つの鋭い爪が、ウインダムの胸を抉り、盛大に火花をまき散らす！

余りの威力に、胸の奥に格納された油圧パイプまで圧迫され、口の端から漏出した真つ白いオイルを泡のように吐き出すウインダム。これぞ、伝家の宝刀コークスクリューパンチ！

ガンダーは、地中を掘り進む際、まず口から吐いた冷却ガスで、岩石内部の水分子を凍結、膨張させる。そうして構造が脆くなったところへ、先程のように回転させたドリルパンチをお見舞いして、どんなに硬い岩盤でも粉々に粉碎してしまうのだ！

その掘削作業は、霜柱を踏むより容易く、空き巣の使うガラスカッターのように静かだ。だが、それを攻撃に転用すれば、どんなに凄まじい破壊力を弾き出すかなど、もはや語るまでもない。

ウインダムの鳩尾へ、次々に降り注ぐ拳と爪の嵐！ このままこの白銀の戦士は、巨大な蝸牛に打ち倒されてしまうのだろうか……？

否！ 断じて否！

勢いに乗るガンダーの横面へ、猛烈な右フックが叩きこまれた。ウインダムが自身の手首から先を激しく回転させながら、敵の頬を張り倒したのだ！……コークスクリューパンチ？ ドリルブロー？ 上等だ。それができるのが、お前だけとは思わない事だ！

ウインダムは、物理的なダメージに強い。ガンダーからの猛攻の中で、痛みに怯まず反撃の糸口を掴んだのは、頑丈さと、不屈の忠誠心を兼ね備えたウインダムだからこそ。ガンダーがこれまで狩って来た有機生命体とは、一味も二味も違うのである。

この尋常ならざる耐久性を持つウインダムにとって、非常に不愉快極まりないのは、狡猾な円盤にレーザー砲等の精密射撃で、弱点であるビームランプを正確に撃ち抜かれる事と、磁力や電波による攻撃だけだ。

前者については、そういった相手へ唯一対抗できるのもまた、現状ウインダムだけである。渋々ながらも自分がやるしかない。対空戦闘はアギラが成長するまで、引き受けざるを得ないだろう。そして後者については、大切な仲間であり最大の好敵手たるミクラスに、ほとんど効果を及ぼさないので、まったく心配していなかった。

……ああいや、一応はもう一つあった。自分やミクラス……というより有機生命だろうが機械生命だろうが、等しく抗う術なく致命的なのが、高圧電流による攻撃なのだが……それについて考慮する必要は全く無い。なぜなら、電流攻撃に対しては、なにより

も彼らの主人が、生命体としてありえない程に、その手の攻撃に強い耐性を持っているからだ。

とにかく、普段からそんな飛行円盤の相手ばかりさせられているウインダムにとって、この手の怪獣と正面から持久戦を繰り広げる方が、ずっと気が楽というものだった。むしろ相手にとって不足なし、もはや冷気もドリルもなんするものぞ！

銀世界のど真ん中で、ガンダーが繰り出す、コルク抜きのように鋭い拳と、これまたウインダムの放つ、旋盤の如き危険さを孕んだ拳が、何度も激しくぶつかり合って、氷屑と火花を散らす。

一合、二合と何度か打ち合っていていくうちに、どうやらこの怪獣は、なぜか左側への攻撃と、その迎撃に問題を抱えているらしい事に気付いたウインダム。彼の電子頭脳が、敵の行動予測と反応結果のデータを擦り合わせ、導き出した答えは、左目がよく見えていないという事だ。なぜかは知らないが、これは使える。

冷静に敵の死角へ回り込むような立ち回りを心がけるようにしてやれば、随分と与しやすい。あと、もうしばらくは時間が稼げそうだと、内心でほくそ笑むウインダムは、ふとあの地球人に思いを馳せた。

彼はもう脱出できただろうか？ 主人の為にも早く救援をよこして欲しいところなのだが……どうして彼はああも足が遅いのか。不整地走破能力を向上させる為に、下半身を履帯に換装した方が良いのでは？ ……まあ、あの豆鉄砲を腰から抜いて、こちらへ加勢しよう等と考えなかつただけマシなのかも知れないが。

なにせ……こうしている間にも、死角からの攻撃に対して、敵の反応は徐々に良くなつてきている。どうやら左側の視界に関する敵側の問題は、そろそろ解決の兆を見せ始めているようだ。ならばこちら側の問題も早いところ解決して欲しいものだが……  
そう考えるウインダムの眼前で、ガンダーの左目が、眼柄ごとこちらへギョロリと向いた。

防衛軍基地では、必死に動力ケーブルその他の復旧作業が行われていた。

だが、あともう少しという所で、寒さに倒れる隊員がチラホラと出始める。

「キンジョウ！ 寝るな！ 目をあける！ もう少しでメディカルセンターだぞ……」

そんな彼らが運び込まれた先では、アンヌと、元軍医のアラキ隊員達が、ベッドや毛布の間を縫うように動き回って、必死に低体温症の措置を続けているではないか。

やっとこさたどり着いたメディカルセンターの中すらも、外と変わらぬ寒さ。とつくに暖房器具は止まってしまっていた。

もはや、患者に満足な治療ができず、医務室を飛び出し、作戦室に飛び込んでくるアラキ隊員。

「長官！ 300名の全隊員を、基地から退避させてください」

「退避？」

「そうです。基地内部の気温は零下90度。このままでは全員凍死してしまいます！」

「隊員の命が危険だというのか？」

「はっ……医者として、とても責任がもてません。お願いします、すぐ退避命令を……

！」

「……」

「長官！」

「……基地を見捨てることは、地球を見捨てることと同じだ。我々は地球を守る義務がある。退却はできません！」

長官とて、苦渋の決断だ。苦々しい表情からも、それがありありと伝わってくる。

だが、アラキ隊員は、それを意図的に無視した。いや、しなければならなかった。

彼は、軍人の前に、一人の医者である。

ヤマオカ長官の判断は、防衛長官としては至極真つ当なものだ。だが、アラキ隊員の主張とて、メデイカルセンターの医師として、引き下がるわけにはいかないのだ。

「いいえ、もうガマンができません。長官、隊長。隊員が……どうなつてもいいと仰るんですか？ 全員ここで、討死にしろとおっしゃるんですか？……！」

「アラキ隊員！ 君には、長官の気持ちが変わらないのか？」

「わかりません！ ……わかりたくありません！ 使命よりも人命です。人間一人の命は、地球よりも重いって、隊長はいつも私たち隊員に……」

アラキ隊員の反論に、キリヤマは口を開きかけ……それでもその先を紡ぐ事が出来なかった。確かに、常日頃から口にしていた信念を、翻す訳にはいかなかったからだ。アラキ隊員の敬意と期待を、裏切る訳にはいかなかった。そして、その言葉を自分に授けてくれたのは……アラキから目を逸らすキリヤマ。

その様子を、隣でヤマオカは重く受け止めた。ヤマオカに、口を嚙んで板挟みになつた部下の気持ち分からない筈がなかった。そしてなにより、かつて自分がその部下を叱咤激励した際の言葉が、今なお彼の、そしてさらに現場の隊員達の心へと受け継がれ、刻まれているのだと確認した以上、よりによつて己が吐いた唾を？むような真似は、到底出来なかった。

「……キリヤマ隊長……アラキ隊員の言う通りだ。……地球防衛軍の隊員も一個の人



間。人間の命は何より大切だ……だが、退却はせん！」

「長官……」

「これより、イハカサ作戦の発動を承認する！」

「や、ヤマオカ長官……！」

長官が、その作戦名を告げた時、キリヤマの表情は劇的に変化した。

だが、周囲で聞いていた隊員達は、それが何を意味するのか分からず、一瞬の空白ができてしまう。

「イハカサ作戦……？」

「隊長、長官……失礼ながら、それは一体、どのような……？」

「内容としては、簡単だ。……予備電源を起動する」

「予備電源ですって!?! そんなものがこの基地に存在するとは寡聞にして存じません！」

「一体どこに……」

「富士山頂だ」

「なんですって!?!」

地下基地は、高い堅牢さと隠匿性を保持できる代わりに、地下であるからこそ、その代償として増改築が非常に困難であった。新たな設備をこさえようと思えば、凄まじい労力と時間を要するのは当然の事。であれば、予備電源なるものが、設計当初に存在し

なければ、それを秘密裏に作り上げる事は出来ないはずだ。

驚くアラキ他隊員であったが……なるほど、地上施設ならば、増築の幅がある。だが、そんな物は、地下の秘密基地の意義を大きく揺るがすものだ。動力すらも他に頼らず、全てを自給自足に地下で完結させたのは、敵の侵入経路を最小限度に絞る為であり、連結した地上設備が増えれば増える程、脆弱性は増す。

「そうだ、故に今まで秘匿され、一度使ってしまったては、二度とは使えぬ手だ。それに、建設に着手したばかりで、現段階では、予定の半分程も出力を確保できん。……だが、隊員達の命の前で、背に腹は代えられん。こういう時の為の、備えであり、予備だ。そうだな、キリヤマ隊長？」

「はっ……まさに、長官の英断へ、全隊員に変わって敬意と感謝を……」

「問題は、この予備電源で、一体どこまでの事が成しえるか、だが……」

作戦室でヤマオカが低く唸ったその時、凍える室内に飛び込んできた者がいた。

「……隊長！ 3号です……ホーク三号を、飛ばして下さい……！」

「……そ、ソガ！ お前……！」

「自分が、行きます。行かせて下さい」

凍り付いた防寒服を脱ぎ捨てて、ソガが入り口に立っていた。

## 零下40度の対決（V）

思わず駆け寄ったキリヤマが、ふらつくソガの肩を支える

「ソガ！……ダンはどうした？　一緒ではないのか？」

「ええ、奴は酷い低体温症です。ポインターに置いてきました……ダンを回収する為にも3号を……」

「待て、ソガ。ここへ来るまでに聞いたかも知れんが、基地の動力がストップして使えない。今から富士山頂の地熱発電所を起動するところだ」

「だからですよ……隊長……1号も2号も、発進には二子山をスライドさせて、発射台までジャッキアップする必要がありますが、3号は二重ゲートさえ開いてしまえば、そのまま発進できますから……」

1号と2号の発進口は、基地直上の二子山にカモフラージュされており、敵の攻撃に晒されても、分厚い岩石の蓋によつて保護されるといふ利点があつたが、それらのエレベーターを起動するには莫大なエネルギーを必要とする。

対して、3号の発進口は基地真横にある崖の、滝の裏に隠されていて、ゲートの開放に必要な電力も、先の方法に比べれば、圧倒的に少なくて済む。これだけならば、出力

の不安な予備動力でも、十分に可能であるはずだ。

なんならソガはこのとき、それが叶わないのであれば、爆裂ボルトでゲート扉を吹き飛ばしたって構わないとさえ思っていた。

「なるほど、そうか！ ……だったら、私が行こう、お前は帰ってきたばかりじゃないか」「いいえ隊長。今の人員で手が空いているのも、また私でしょう。私には……先輩のように、澆測と修理を行う体力もなければ、アマギのような器用さで配線できる訳でもない。アン又がいなけりや凍死する奴がきつと出るし、この状況で指令部から隊長を欠くなんてもつての外です！ 私に出来るのはね隊長……敵の最も脆弱で、一番突かれたくないポイントを、素早く正確に撃ち抜く事だけなんですよ！」

「ソガ……」

「私には何かを作ったり直したりする事よりも、何かをブチ壊す事しかできませんし、その方が性にあっています。あの怪獣に、今こそ攻撃を加えるチャンスなんです！」

「なにッ!? 怪獣と言ったか？ 外にいるのか!？」

……そうか、リーダーも通信機も止まっているから、隊長達はガンダーが暴れている事すら気付いてないのか。これは先に説明すべきだったな。

「そうです、基地の外では、二匹の怪獣が争っているんです」

「なに、二匹も!? それはもしか……片方はカタツムリのように飛び出た目をしていな

かったか？」

「そうです！」

「地下で我々が撃退した奴だ！ やはり生きていたのか……よくぞ無事に戻った、ソガ！」

「いえ、隊長……銀のロボットみたいな怪獣が、私を逃がしてくれました……一度ならず二度までも……もうアイツは紛れもなく命の恩人です！ 私は奴に、大きな借りがある！」

「……行かせてやれ、キリヤマ隊長」

「ヤマオカ長官！」

「男が二度も命を救われた以上、余人がしゃしゃり出て、その借りを返す機会を止める権利は、持ち合わせておらん。……ソガ隊員、例え怪獣と言えども、地球防衛の志を同じくするならば、もはや戦友も同じだ。急いで救援に向かう事」

「……拝命いたします！ 長官！」

その時、基地の非常灯が瞬き、作戦室が真っ赤に染まる。富士山頂に隠された予備電源が、今までに蓄えた電力を供給し始めたのだ！

「隊長、得られた電力は動力室、メディカルセンター、そして3号の発進口へ優先的に回し、復旧作業に当たらせよ。手漉きの整備班は3号の発進準備！」

「……了解！」

「会議でのキミの献策のおかげだ、キリヤマ隊長。我々は、この窮地において、その戦力を完全に喪失することを免れた」

「ハッ……一部の部下が、しきりに言い立てるものですから……」

キリヤマは、先程ホークの発進口へ駆けていった部下の背中を思い出す。

（基地の警備計画を見直していたんですがね、隊長？　そもそもゴドラ星人やユシマ博士の時みたいに工員を送り込まれた時、動力室は一つで大丈夫でしょうか？　超兵器も出動不能。リーダーも動かない……スチームもストップ。一発心臓部を破壊されると、さすがの科学基地も脆いもんです……）

まさか奴の懸念通りになるとは……それもこんなに早く。せめて、もう少し後であれば、地熱発電所も十全にその機能を発揮したろうに……

とはいえ、備えが一部とはいえ間に合ったのもまた事実。あまりそういった類の予想は、当たって欲しくないのだが……

「部下の意見を容れるのも、また指揮官の務めであり功績だ……地球防衛長官として、直々に礼を言う」

「では奴には今度、私からお言葉を伝えさせて頂きます」

だがそれは、この難事が全て解決してからだ……

「ソガ隊員、本当に全部換装してしまっただけ……?」

「ああ、勿論。それもありがたかったけど。外部ポッドも、ハンガーラッチも全部埋まるくらいに。どうせすぐ近くに全部落としてくるんだ、機動性なんかまるつきり考えなくていいぞ」

「分かりました、とにかく限界まで搭載してみます!」

「ああそれと……俺が出て行ったら一号にも同種の装備を頼む。出来る範囲でいいから。……ケーブルはムカイ班長や先輩達がきつと直してくれる。その時にドタバタするよりいいだろう?」

「そりやそうだ。だったらやれるだけ、やっておきましょう。ソガ隊員も、お気をつけて」

「……ありがとう」

出撃準備が整うまで、暖かいコーヒートスチームで、寒さを凌ぐ。

……早く、早く。あいつらが待ってるんだ……

彼らにも、この暖かさを存分に味あわせてやらないと。

「換装完了！ いつでも行けます！ Both Gate Open！ Both Gate Open！」

「作業員退避！ Quickly！ Quickly！」

「20 seconds before！」

「Both Gate Open！ Both Gate Open！」

二重扉開放の合図と共に、第三ゲートが上へ上へと開いていき……

視線の先では、すっかり凍り付いた滝が、まるでクリスタルの壁のように立ちはだかる。

「これよりレーザーで氷塊を強制排除する！ 総員耐ショック……All out！」

俺が発射レバーを引くと、機首から発射された光の筋が、凍てついた滝を粉々に吹き飛ばした！

「フォースゲートオープン！」

「Pull the throttle！ Pull the throttle！」

「進路クリア、発進どうぞ！」

「ウルトラホーク3号、発進！」

輝くダイヤモンドダストの中へ、銀の翼が飛翔する。

小回りの良さを活かして、ぐるりと基地の後方へ旋回すれば、そこでは二頭の巨獣が、



雌雄を決する為に、大激闘を繰り広げていた。

しかし、銀色の騎士は、今や生きた氷像に踏みつけられ、必死にレーザーを乱射して抵抗しているが明らかに劣勢だ。

お前……俺のウインダムに、よくもやってくれたな!?

「こいつを食らえ!! ナメクジ野郎!」

翼の根元に二段重ねで設置された、三連装ロケットポッドが立て続けに火を噴いて、空母の飛行甲板のように四角く広いガンダーの背中へ、ソガの怒りを存分にぶち撒けた。

計12門が叩きだす小型支援機とは思えぬ瞬間火力が、敵の背面を抉り、痛みでその巨体を仰け反らせる。

敵の足元から転がるように脱出したウインダムが見たものは、轟々と燃え盛る炎を背負い、消火しようと雪の中を転げまわる、ガンダーの姿。

「おい、何を勝手に寝っ転がってやがるんだ、クソ雑魚ナメクジ……ここは富士山じゃねえ……カチカチ山だ!」

仰向けになったガンダーの上空を、ホーク三号が素早く通り過ぎる。その機体からは燃料タンクのような何かが、無数にばら撒かれており……怪獣の腹に落下した途端、大きく炸裂したかと思うと、辺り一面を炎の絨毯で覆いつくした!

「どうだナパーム弾の味は？　五臓六腑に染み渡るだろうが、ええ？　心配するな、限界まで積んで来てあるぞ……お前の為にな！」

ホーク三号は、確かに小ぶりで、よく偵察用に用いられるが……ミサイル攻撃を主眼に設計された、爆撃機体でもある。

そのペイロードに、ありつたけのナパーム弾を詰め込んで来た。それも、保管性と取り回しを重視した、歩兵用のキュラソナパームじゃなくて、火力至上主義の防衛軍が開発した真正正銘の機載用ナパーム爆頭をだ。

熱量なんと摂氏1300℃以上！

ナパームは親油性のあるゲル状燃料なので、生体表面に一度くっ付いたら水では消火できない。こんなものを人間に使うのは言語道断だが、相手が侵略者の怪獣なら話は別だ。火達磨になったガンダーの背中へもう一度、焼夷ミサイルを撃ち込んでやる。どうだ明くなつたろう。

投下された熱と光の死の二重奏はガンダーにとって地獄の黙示録であった。ソガの暖かい心遣いで、炎の毛布を優しくかけられた怪獣の背中では、自慢の殻がドロドロに融解してしまっている。ガンダーの殻は、内臓を保護する具足であると同時に、翼——より正確に言うと、絶対零度下での無重力現象を利用した反重力器官——の役割を果たしていた。だが、例によってポールクリート……つまり宇宙パイクリートの凍結効果で

その形状を保っていたために、超高温に晒された今、元の水分に戻ってしまふのだ。

「ナパームの匂いは格別だ」

真つ黒に燃え上がって、塩をかけられたナメクジのように溶けるガンダーを見て、ソガは勝利を確信するが……焼けただれた皮膚が、ナパームゲルと共に崩れ落ち、その下から随分と体積の小さくなった怪獣が、それでも死に絶える事無く弱弱しく立ち上がったのを見て、驚愕と共に舌打ちした。

「つち、マジか……グローザムかよ……」

さもありません。彼は、ガンダーがここまで高い生命力と再生能力を有している事を、知らなかったのだ。だが、例えナパームが弾切れでも、ウインダムと共闘すれば……ウインダムはどこだ？

ソガが見渡すと、銀色の忠臣は、ガンダーから背を向けて、少し離れた地点に屈みこんでいた。よく見れば、真つ白な雪を、両手でかき分けているではないか。

「FUUUUUUUUUUUUUUUUUUUUU!!」

ウインダムが空を仰ぎ、高らかに宣言する。

彼が掘り返したのは……自分と同じ色をした四角い箱。

あれは……ダンの乗ったポインターだ！

「そうか……お前は本当に忠義者だな……」

だが哀しいかな、オレには隊長のような、タッチ・アンド・ゴーでポインターを引つけて回収する操縦テクは流石にない。

V T O L 飛行で垂直着陸すると、下部ハンガーを開放して、ポインターを回収する。そこへ迫るガンダーの影！ せっかくここまで弱らせたウルトラセブンを持ち逃げされては、今までの計画が台無しだ。ポール星人の命令で、冷凍光線を猛烈に噴射しつつ、戦闘機ごとセブンを踏みつぶしてやろうと幽鬼の如き気迫で這いずってくる。

だが、そのような無礼を、この忠犬が許すはずもなかった。ひしゃげた関節を軋ませながら、なんとかこの軟体動物を押しとどめようと、自重を活かしてプレスにかける。切っても切っても再生する敵には、細胞を押しつぶしてしまうのが最も有効だ。それには少々、ウインダムは細身すぎたが。

ロボットの所でジタバタと藻掻くガンダーは、それでも使命を全うする為、めいいっぱい首を伸ばし、ホークへ冷凍ガスを何度も何度も浴びせかける。

しかし、ウルトラホークのエンジンはそのような攻撃で凍り付いたり、しない！ 悔しがるガンダーの雄叫びを後に残し、垂直離脱して、一目散に基地へと帰還していくホーク3号。ウインダムは、ついにやり遂げたのだ。

「FUUUUUUUUUUUUUUUUU!!!」

非常電源で、及第点の治療行為が可能となったメデイカルセンターへ、ダンの肩を支えたソガが入ってくる。

「アラキ隊員……！」

「ソガ隊員！ モロボシ隊員！」

「……ダン！」

「アンヌ、ダンを頼む。奴に暖かいコーヒーとスチームを……」

ダンを、アンヌに預けると、そのまま床にドウツと倒れこむソガ。

「ソガ隊員！」

「酷い低体温症だ……アンヌ隊員、すぐに二人を！」

「はい！」

メデイカルセンターもまた、戦場であった。

## 零下40度の対決（VI）

メデイカルセンターで、アラキとアンヌが懸命に治療を行っていた。温めた輸液を、ゆっくりと注射し、脇の下などの関節部分を中心に湯婆を挟んでいく。

その方法は、酷く迂遠で、即効性とはほど遠い物であったが、その慎重な取り扱いこそが、ダンとソガに必要な措置であった。低体温症に対して、即時の加温は有効的ではあるものの、それはあくまで軽度までの話。二人のような中度以降の凍傷患者に対しては、慌てて手足の末端を急速に暖めてしまうと、冷たい血液が心臓や脳へ一気に流れてウオームショックを引き起こし、逆に危険だからだ。

厄介なのは、この段階に至ると、神経系すらも麻痺した事で自覚症状が薄く、素人判断でストーブやスチーム等に手を翳して暖をとり、温かいコーヒーを飲むだけで、大丈夫だと認識してしまう事だ。まさしくホークで出撃する前の、ソガの様に。

この状態では専門的で繊細な治療こそが必要であり、措置を間違えると、重篤な後遺症が残る場合すらあるのだ。もっとも、基地の電源がダウンしては、そういった治療自体が行えず、予備電源が無ければ消極的再加温しか選択肢がない。応急処置が間に合わなければ、二人は命を落としていた可能性すらあったのだから、丁度彼らの帰還と

同時に、センターの稼働準備が整ったのは行幸だった。アンヌとアラキのお陰で、二人はなんとか後遺症もなく命を取り留める事ができそうだ。応急処置が一段落し、額を拭うアラキへ、手拭いを渡しながらアンヌが労う。

「アラキ隊員、ありがとうございます」

「なんの、君こそいい腕だ。この状況で、あれほど鮮やかに点滴が打てる医師は、そういう」

「でも、アラキ隊員があの時長官に進言して下さいさらなかったら……今頃間に合っていないかったかも知れませんわ」

「そのお陰で彼らを助ける事が出来たというならば、私も長官に睨まれた甲斐があらうというものだ。特に……このソガ隊員には、借りがある。大きな借りが。死なせる訳にはいかない」

「借り……？ ああ、そう言えば、アラキ隊員のお兄様は」

「そうだ、あの時彼が止めてくれなかったら、兄達は今頃、宇宙の海で氷漬けになっていただろう。あれは、間違いなく、そういう男だ」

人命第一の弟に対して、全く真逆の考えを有していた兄とは、長らく反りが合わなかったのだが……彼と関わる中で、あれにも多少、心境の変化というものがあつたらしい。そういう点でも、アラキは心の中でソガに深く感謝していた。その恩を返す事

が出来たのならば、最高司令官に啖呵を切るなど、なにを悔いる事があるうか。

その時、基地内の非常灯が、明るい通常灯に切り替わった。周囲の廊下から、暖房が低く唸り始める音がする。建物全体が鳴動する様は、基地という巨大な生き物がまるで長い冬眠から息を吹き返したようにも感じられた。

地下のムカイ班長率いる動力班が、ついに成し遂げたに違いない！

やがて、医務室のドアが開き、アマギとフルハシが駆けこんでくる。

「動力が回復したぞー！」

「ついにやったのねー！」

「治療で疲れてるところ悪いがアンヌ、出撃だー！」

「分かったわ。……でも……」

彼女は優秀なドクターであると同時に、ウルトラ警備隊の戦闘員でもある。

ソガとダンが倒れた今、彼女に招集がかかるのもまた必然と言えよう。

アンヌは、ベッドのダンを見下ろし、しばし逡巡した。

「ここは大丈夫。行ってきなさい」

「……了解！ 二人をお願いしますー！」

頷いた天使は白衣を脱ぎ棄てて、ブルーグレーの戦装束で駆けだしていく。

基地は再び復活した。



……さあ、ガンダーとの決戦だ！

スライドした二子山から飛び立ったホーク1号と、駐機状態からそのまま垂直離陸した3号は、吹雪の中で揉み合う、二頭の巨獣の姿を認めた。

「あれか、ソガの言っていた銀の怪獣と言うのは」

「なるほど、確かにトサカがついてやがらあ……」

「いかに怪獣と言えど、我々の仲間を救った以上、明確に味方に間違いない。これより我々は、あの怪獣を援護する！」

「しかし隊長、援護と言っても……」

「なに、いつもとやる事は変わらん。あの怪獣を、ウルトラセブンに見立てて、敵を挟み撃ちにしてやれ」

「そいつあ分かりやすくっていいや、了解！」

背後のホークからレーザーが飛び、ガンダーの背中に突き刺さる。新たな敵の出現に、伸ばした首をぐるりと回転させ、胡乱な視線をよこすガンダー。

「アッ！ 見て下さい隊長！ 我々が焼いたはずの顔や目が！」

「ふむ、敵は恐ろしい再生力を有しているようだな……よし、アンヌ、アマギ！　ホーク1号を三つに分けて戦おう」

「ハイ！」

「カルテット作戦、開始!!」

フルハシの駆る3号が、敵の眼前を挑発するように横切り、怪獣の注意を引く。そうして視線から離れた隙に、三機に分離した1号が、美しい編隊を組んで、敵へと襲い掛かった。計四機の機首から立て続けに照射されたレーザーの時間差攻撃で、避ける事も、また迎撃することもできず、翻弄されるガンダー。

彼の殻は、先程のソガの猛攻によるダメージから回復しきっておらず、満足な飛行能力が得られない。タイマン勝負には圧倒的に強いガンダーも、複数の……それも高速で飛び回る戦闘機に囲まれると、流石に対処に困るようだ。

そこへ、レーザーを乱射しながら、ウインダムが突撃する！

もはや技も何もないただの体当たりで、吹っ飛ばされるガンダー。

濛々と舞い上がる雪を切り裂いて、仰向けになった腹へ、再び上空からふりそそぐレーザーの雨！

いかに個として強力であろうと、群の力には及ばない。氷の水素結合よりも強固で、きらりと澄み切った結束。それこそが人類の、地球を愛する者たちの『絆』がもたらす

力であった。

「……ハッ！　ここは？」

「モロボシ隊員、気が付いたかね」

「あなたは……アラキ隊員……」

「おそらくポイントターが雪に埋まって、かまくらのように断熱効果を発揮したのが良かったんだろう……意識が戻って良かった」

「コーヒーを、下さい……」

「今の君に、カフェインは良くない。……これを、お飲みなさい」

アラキが差し出したのはホットココア。上体を支えられながら飲むそれは、さながらソーマの如く。じんわりとした熱と、やわらかな甘みが、喉を通って、ダンの体を芯から暖めていくように感じられた。

……ああ、なんと……なんとあたたかくて……

「おいしい……」

「さあ、もっと飲んで、ゆっくりと……そうだ。そして、もう一度横になるんだ、今は安

静に……」

「アラキ隊員、あの怪獣は、どうなりましたか？」

「いま、隊長達が戦っているとも。安心したまえ、基地の機能は復活した」

「……駄目だ、こうしてはいられない。行かないと！」

ベッドから降りようとするダンを、アラキが押しとどめる。

「動いちゃいかん！ 今の君の肉体に必要なのは、熱と休息と絶対安静だ！ 戦闘なんて以ての外だ！」

「いいえ、外で仲間が戦っているんです。僕の大切なみんなが！ ソガ隊員は僕を助けてくれた、他の隊員は凍えながら基地を修理した！ そして彼は……そんな時、僕はただ車の中で寝てただけではありませんか！ 今度は僕の番です！ 行かせてください！」

「駄目だ、絶対ダメだ……！ いくら回復したとはいえ、完治した確証が無い以上、医者としての責任がある！」

アラキは自分の処置に自信があつた。こうして会話が出来るならば、恐らく最も危険な状態を脱したと言える。しかし、凍傷患者は絶対安静、それは揺るぎない事実である。彼の瞳には自分の患者である以上、何人も逃がさぬという決意がにじみ出ている。それを見たダンは大しく引き下がる。

「……そうですね……では、ココアをもう一杯いただけませんか……?」

「ああそうだ、そうしなさい。それが一番……」

「ありがとうアラキ隊員。貴方は素晴らしい名医だ。でも……僕の体には、そのココアだけでは足りないようです!」

「アツ! こら待ちたまえ! モロボシ隊員!」

そう、熱だ。魂を焼き焦がす程のあつい熱! 情熱の炎こそが、今こそ彼には必要だったのだ!

後を追ってセンターを飛び出したアラキであったが、もはや廊下のどこを見渡しても、モロボシ隊員の姿は無かった……

「デユワ!!」

白い雪原に、真っ赤な戦士が姿を現す。

本来のフルパワーとは程遠いが、まったくゼロという訳でもない。一戦こなす程度には、エネルギーが辛うじて残されていたのだ。

ガンダーの姿を見咎めたセブンは、決着をつけるべく、必殺技を構えようとして……

その射線上を塞ぐように現れた、銀色の背中に戸惑った。

一体、なぜ……？

セブンの脳裏に、彼の仲間の感情が、テレパシーとして伝わってくる。

ここは自分に任せて、早く太陽の近くまで飛んでくれと、自分はまだ戦えるからと、そう必死に伝える彼の体は、装甲がめくれ上がり、関節がひしゃげて酷い有り様だった。

だが、その瞳のランプは煌々と闘志の輝きを放っており、主人がのんびりと日光浴をするくらいの時間は稼いで見せると豪語した。そう、彼らと一緒にならば、そんな事は容易いと。……戦友と共に戦えば、不可能はありはしないとも。

……なにより、最も付き合いの長いこの忠臣が、主人に向けてこんな事をのたまうのは初めての事だった。

『邪魔だから早く行け』などという台詞を、よもや彼の口から聞くことになるなんて。

「……ジュワツ!!」

頷いたセブンが飛び立ち、立ち込める暗雲を突破していく。

「アツ! セブンが空へ! やっぱり、寒さに弱いってのは本当だったのか!」

「……セブンは逃げてしまったんでしようか?」

「ウルトラセブンがそんな事するはず無いわ! きつと策があるのよ!」

「そうだ、我々に出来る事は、彼を信じる事だ! 決して諦めてはいけない。諦めずに戦

えば、必ず勝機は見えるはずだ！ それに……」

「それに、なんです？ 隊長？」

「セブンが帰ってくる前に、あの怪獣を打ち倒して、彼を驚かせてやろうじゃないか。我々の手で！」

「……はい！」

「各機、俺に続け！」

## 零下40度の対決（Ⅶ）

γ号から投下されたナパームの炎が、ずるりと表皮から剥がれ落ちるのを見て、アマギが叫ぶ。

「隊長、ナパームゲルが滑り落ちるなど、普通では考えられない事ですー！」

「……なにつ！ ナパームを満載した3号で焼き殺せないと聞いて、ただの生き物では無いと考えていたが……あの怪獣はいつたい……」

「もしや……奴の体はそれそのものが、巨大な氷塊なのではないでしょうか？ 油性燃料が付着しないとすると、そこに油分が存在しないとしか考えられません！ 奴の体が氷……つまり水分の塊なら、あれを蒸発させるとすると、相当に困難でしょう」

「そうか、見た目通りのデンデンムシって訳か！ ……てえことはだ、アマギ。あの時の気化爆弾が効くんじやないのか？ アルプスの雪男みたいに吹っ飛ばしてやれ！」

「よし、やってみましょう！」

巨大な翼でぐるりと旋回したアマギが、今度はまた別の爆弾を投下する。それは乾燥気化爆弾。かつて使用された強力乾燥ミサイルの原理を応用し、ブリーブ現象による蒸気雲爆発を引き起こすよう改良された爆弾だ。弾殻が砕け、辺りに気化した火薬の霧を



振り撒いた。そして……爆発。

破片や炎によらず、純粹な爆圧のみで広範囲を攻撃する事を目的に設計された爆弾が、ガンダーを、彼の存在していた空間ごと吹き飛ばした。その副次効果として、彼の体表から大量の水分が一挙に蒸発し、霧散する。

これでも、モデルにした兵器と比べれば、生物への加害効果としては穏やかなものだ。それこそ、巨大な怪獣を一瞬で粉末へ変えてしまうような兵器、あまりに危険すぎて、使道に困る代物としか言いようがない。もつとも、今はその火力こそが欲しかった。

だが、流石と言うべきか、元々が凍結し、乾燥しきつていると言っても過言ではない。ガンダーには、十全な効果を発揮したとは言い難い。これが通常の生物であれば粉々になつていたであろうに……

「なんて奴だ！ まだ生きてやがる！ 化け物め！」

「くそ、駄目か……」

「待て！ いい、それでいい……」

「一体何がいいんです、隊長！」

思った効果が得られず、悪態をつく部下達を、冷静に宥めたキリヤマは、次なる科学実験を発表する。

「フルハシとアンヌは奴の顔を炙れ！」

「といつても隊長、3号のナパームは、ソガの奴が全部使いこんじまって……」

「まだ残っているものがあるだろう。照明弾を直接照準して撃ち込んでやるんだ。アン又は白リン弾で敵の視界を塞げ！」

「なるほど、こいつを焼夷弾の代わりですか！ 了解！」

3号から打ち出された光球が、ガンダーの飛び出た目玉の根元に引つかかり、ぬらりとした鼻先をテルミットの炎で煌々と照らす。突然の強い閃光に驚いたガンダーは、その光るパラシユートを掴まんで取り除こうとするが……そこへ今度はすかさず、アンの放った閃光発煙弾が、異形の姿を覆い隠すように、白リンのペールをさつと被せた。

隙を生じぬ反復攻撃の前に、冷凍ガスで反撃する事も忘れ、苦し気に呻くガンダー。

「みろ、傷の治りが明らかに遅い。……やはり、奴には脱水と乾燥こそが、いっとう良く効くのだ」

「す、すい……」

今や、怪獣の立っていた場所だけが、白いキャンバスから切り取られたように、地表の色を覗かせていた。気化爆弾は、ガンダー自身の水分を吹き散らす事は出来なかつたが、その周囲の空間に対しては別だ。今、あの怪獣を取り巻く大気中からは、一瞬で水分が消し飛ばされ、長時間続く燃焼ガスの熱量は、吹き荒れる吹雪からガンダーを隔離する壁の役割を果たしていた。そこへ、照明弾や五酸化二リンの煙が持つ、強力な脱水

作用と継続的な焼夷効果でもって、敵へ重篤な化学火傷を引き起こしたのだ。

「よく分かりましたね、隊長」

「なに、簡単な事だ。雪だるまを吹雪の夜に外へ出しておけば、次の朝には大きくなっていく。それと同じに過ぎん。タネが割れてしまえば、どうという事はない」

「よし、では攻撃を続けましょう！」

「待て、深入りは禁物だぞ！」

再び、爆撃コースに入ったアマギのγ号だったが、ガンダーとてやられてばかりではない。体を丸めて、柔らかい顔面を隠そうと……いや、違う！ これは大ジャンプの予備動作だ！ ガンダーの柔軟な足は、それをバネのように使うことで、多少無理な態勢からでも、ダイナミックな奇襲を仕掛けることが出来たのだ。

初見ではとても気付かないような、間合いを外した体当たり。γ号の機動性ではとても避けきれないだろう。だからこそ、ガンダーはあの青くて大きい鳥を狙ったのだ。それが四羽の中で一番、曲がるのが下手だと見抜いていたから。

しかし、この攻撃に散々晒されていた者からすれば、その意図は丸わかりであった。鋼鉄の腕が、辛うじて敵のつま先を掴む。もんどりうって雪の中へ倒れこむ二体の怪物。狡猾な罠を見破られ、悔し気に藻掻くガンダーへ、起き上がったウインダムがレーザーショットで追撃をかけようとするが……額から発射された光条は、冷たい大気の中

をしばらく進んだかと思うと、吹雪に舞うようにするりと解け、弱弱しく霧散する。

「アツ！ ロボットがもうガス欠だ！」

「見て、彼の体を！ ……あんなになるまで戦ってくれたんだわ……地球のために……」

「これ以上頼る訳にはいかん！ もう一度だ！ 今度は慎重に行くぞ！」

「了解！」

まずキリヤマのα号から発射されたナパームミサイルが、ガンダーの体を捉え、紅蓮のドレスで飾り立てる。その向こうから陽炎のように突入したγ号が気化爆弾で、燃え盛る空気もろとも水分を吹き飛ばし、ガンダーの内部へ爆風のダメージを浸透させていく。

そうしてヒビの入った敵の翼を、β号のレーザーが穿ち抜き、深いクレバスのような傷穴を刻み込んだ！

「フルハシ隊員、3号がナパーム装備だったという事は、当然周囲への延焼をコントロールする為に、消火弾も搭載されていたはずです！」

「それがどうしたってんだ、アマギ？」

「消火弾の主成分は塩化アンモニウムや炭酸ナトリウム……つまり、塩です！」

「なるほどそうかい！ ……俺あな、ナメクジが大っ嫌いなんだよ！ 食らいやがれっ！」

怪獣の傷口へ、3号から丹念に揉み込まれた塩分は、結晶から水分を奪ってその傷口が塞がるのを防いだけでなく、どんどん奥へ奥へと浸透していく。

熱と光、そこへ新たに乾燥と衝撃を加えた、決意と破壊の四重奏は、ガンダーのユーフォニアムのような悲鳴と、不可思議なアンサンブルを織りなし、氷でできた彼の背中をばつくりと裂開させてしまった！

怒りと憎しみを慟哭の様に叫びつつ、大きなダメージによって動きが止まる怪獣。

その様を見ていたウインダムは、何かに気付いたようにハッと空を見上げると、大きく頷いてから、元の体積の半分以下、すっかり小さくなってしまった仇敵の背中を抱きすくめる。

彼もまた満身創痍であったが、敵が逃げられないようにホールドすると、あえて力で押さえ込むのではなく、全身の駆動系をシャットダウンし、関節を完全にロックした。

腕だけではなく全身が鋼鉄の枷となったウインダムから逃れようと、ガンダーは必死で首や手足をぐぐつと伸ばすが……

そこへ、天空から黒雲を切り裂いて、真つ赤な隕石が、一直線に降ってきた。

「ダアアアアアアアッ!!」

その勢いは凄まじく、ガンダーは自分に何が起こったのかすら、まったく理解できなかった事だろう。太陽の光を存分に帯びて、ギラギラと赤熱したギロチンの刃は、哀れ

な怪獣へ一切の痛みを覚えさせる事無く、彼の差し出した首筋を一刀の下に断ち切ったのである。

雪原に零れ落ちる二本の腕と、大きな首。銀の断頭台から解放された胴体は、まるで落とし物を捜すかのように、よたよたと歩いていつて……ドウつと倒れこんだ。

さしもの再生能力も、生命活動を停止した後にもまで働かない。

彼の生は、本人の全く与り知らないうちに、あつさりと終わりを告げたのだった。

シユーシユーと、全身から濛々と湯気を立ち上らせ、凄まじい熱量を放つセブンの足元で、白い雪が溶けていく。

「うるとらせぶん！ ドウヤラ、我々ぼーる星人ノ、負ケラシイ。第3水河時代ハ、諦メル事ニスル。シカシ、我々が敗北シタノハ、せぶん、君ニ対シテハ無イ……。ソ奴ラノ、忍耐ダ！ 戦士ノ持ツ、使命感ダ！ ソノ事ヲ、ヨク知ツテ置クガイイ、ハツハツ……」

テレパシーで黙ってそれを聞くセブンの顔はどこか晴れやかだ。彼らの言葉の端々から、傷ついた自尊心を、なんとか取り繕おうとする必死さが、ほんの少しだけ伝わってきたからだ。

「我々ハ、君本人ハ、然シテ恐ロシク無ク、ソノ周囲ノ者達コソ、真ニ警戒スルベキダト、学ンダ。ソノ恐ロシイ地球人達ニ、タッタヒトツノ、切り札ヲ、使ワセタダケデモ、満

足ダ！ ハツハツハツハツ！」

自身があれだけ貶められたというのに、セブンはこれっぽっちも気にしなかった。……なにせあの傲岸不遜なポール星人に、こんなにも悔し気な顔をさせたのは、何を隠そう、セブンの大好きな彼らなのだ！ もはや彼は、苦し紛れの負け惜しみを聞く事すら、誇らしい気持ちでいっぱいだった。

「コノ星ハ、暫ク駄目ダ。他ヲ当タルト、シヨウ」

「割りニ合ワナイト、思ツテイタノダ」

地球の衛星軌道上で、氷塊がむくりと起き上がる。それは、隕石に擬態した、もう一匹のガンダーだった。宇宙には、土星の輪にあるような、氷の塊が無数にある。成層圏に氷が一つ二つ浮かんでいても、何ら不思議は無かった。こうしてステーションの目を誤魔化して、彼らは地球圏までやって来たのだ。

そのガンダーの内部で、これまた無数の生命体が、次の方針を話し合う。

学名 *Leucogandaridium polledoxum* は吸虫の属の一つで、陸生貝類を中間宿主とし、それを操る事で有名な寄生虫だった。ロイコガンダリデイウ

ム ポルドクサム——以下ポール星人と呼称する——は、体長僅か30 cm程度の生命体で、非常に珍しい生活環をしている。

ポール星人の生活環とは、スポロシストの時期を、ガンダーという軟体動物の体内で過ごし、宿主の体内で十分に繁殖した後、宿主の怪獣を星のマントル深くまで強制的に掘り進めさせ、その殻を地熱で溶かして外に脱出する、というもの。そう、ポール星人の最終宿主は……惑星なのだ。

怪獣に寄生している時期は超低温を好み、星へ寄生する段階になると、マグマの灼熱を好むという両極端な温度帯に、彼らは生息している。

彼らにとつては、ガンダーこそが、揺りかごであり、街であり、宇宙船であり……結婚式場だ。その大きさ、豪華さこそが、彼らにとつての最大の関心事である。雌雄同体のガンダーは、食べれば食べる程に巨大化するという特性を有していたので、彼らの餌場選びこそ、将来の幸せな結婚生活を約束すると言つていい。

特に、地球という星が、まだノンマルトと呼称されていた頃なぞ、なんとかザウルスや、マンモスとかいう怪獣がうようよ生息していたので、非常に都合だったのだ。だが、今はもう地球のどこにも彼らの姿はなく、地球人を食べるしかないのだが……数は多いが少々小さい。ガンダーの腹を満たすには、どれほど確保しなければならいのか、気が遠くなりそうだった。



とにかく、ポール星人達も今度の失敗を受けて、しばらく地球を餌場にするような事はないはずだ。少なくとも、あのニンゲンとかいう種族がいるうちは。

しかし……と、リーダー格の個体は小さく唸る。基地の図面の代金を、一体どうやって払おうか。やはり物的な収穫が無かった以上、情報には情報に対価とするしかないな……彼らは地球を名残惜しそうに見つめながら、ガンダー号を次の餌場へ向かわせるのだった……

立ち込めていた暗雲が晴れて行き、ポール星人の退却を確信するセブン。

彼は隣に立つ満身創痍の部下を振り向くと、その肩を叩き、ウインダム of 献身を心の底から労った。

敬愛する主人からの言葉に、銀の怪獣は嬉しそうに身震いすると、光の粒子となって、カプセルの中へ戻っていく。しかし、手ひどくやられたものだ。これではスクラップ寸前じゃないか。よく無事だったものだ。今度出撃が可能になるまで、一体どれだけ時間がかかるだろう……いくらそれが必要な事だったとはいえ、本当にすまない事をした。

これ以上、手強い宇宙人が続けざまに攻めて来ない事を銀河の星々へ祈ったセブン

は、一先ず基地に戻る事にした。なにせアラキ隊員がお冠のはずだ。ああ、彼に一体な  
んと説明しようか……基地を飛び出したところで2号の格納庫へ引き返した事にすれ  
ば、疑われずに済むだろうか……？

そう悩む彼の顔は、満面の笑みで彩られていた。

これからダンは、基地で彼らを出迎える役目があるのだから。勇敢で、忍耐強い、自  
慢の友人たちを……

こうして、地球防衛軍とウルトラセブンにとって魔の時は去り、地上には再び平和が  
戻った。科学力を誇る地下秘密基地にも弱点があったように、我らがウルトラセブンに  
も思わざるアキレス腱があったのです。

しかし、セブンの地球防衛の決意は、少しもひるむことはありません……

## 牧場へ還れ!

「どうアマギ隊員? 順調? 例のスパークなんかは」

「ありがとうアンヌ……まあまあつてところかな。尤も、それをモデルにしただけの廉価版だけだね」

「図面や計算機と格闘するアマギに、アンヌがコーヒーを渡す。

「また何か新しい新兵器を考えているようだ。」

「……ソガの調子はどうだい?」

「大事をとってあと二、三日も安静にしてれば、アラキ隊員も許してくれると思うけど……どうして?」

「……いい、いやなに、奴の持ち帰った鉱石を使わせて貰うにも、無断という訳にいかないじゃないか……」

「コーヒーを飲む干すと、挙動不審な様子で、図面に顔を埋めてしまうアマギ。」

「露骨に視線を逸らした彼の、拙い照れ隠しをクスクス笑うと、アンヌは空いたカップにお代わりを注いだ。」

「優しいのね」

「……いやいや！ とんでもない、逆だよ逆！ いつまでこうして自分の研究に没頭してられるのかと、心配してただけさ」

「あら？ そうなの？」

「奴が起きてると、いっつも自分の欲しいものを作ってくれて、ごちゃごちゃ煩く注文を付けてきやがる……そう、あそこで呑気に休憩してるアイツを含めてね」

「……ああ」

アンヌが先程渡したカップを傾けながら、何かのレポートを書き込んでいるダンを見る。

「別に拾ってきた資材や、思いついた理論を好き勝手に持ち込んでくるのはいい。けど、とっかかりさえ渡せば、それを勝手に形にしてくれると思うてんだ。やれ放射線カメラだ爆弾だ……奴らは僕の事を、魔法使いか何かと勘違いしてるんじゃないかね？ 僕の本職は……あくまで単なるプランナーなんだぜ？」

「アハハハハ！ それは確かに二人も悪いけど……アマギ隊員だって悪いわよ。そのまま作っちゃうんだもの。素直に出来ませんって言えばいいのに」

「それは……僕の矜持が許さないよ！ ……だって、作れるんだから！ 理論上は！」

まるで処置ナシといった風に肩を竦め、匙を投げるアンヌ。

「いやいや、いくら貴重とは言え、使えるかも知れないとか言う理由で、手当たり次第に

未知の宇宙植物や惑星鉱物を、お土産気分であげられたい身にもなってくれよ！ 奴らが宇宙パトロールに行く度に、分析室が博物館になっちゃう！ 木彫りの熊じゃないんだからさ！」

「それは……実際に役に立ったんだから何とも言えないわ……貴方達三人のコレクション趣味のお陰で、私とルリコが助かったようなものですもの」

「そこに僕を入れないでくれよ……河原の石を持ち帰って喜ぶ少年じゃない」

以前、彼女とその友人にブラコ星人が植え付けた、赤い胞子を除去する為には、土星の放射線 $\alpha 73$ が必要だったが……その鉱石が分析室に死蔵されていたのは幸運以外の何物でもなかった。

もともと、その存在に直ぐ思い至り、即座に発掘して見せたのは、なんだかんだ言いつつ、アマギがそれらを几帳面に管理保管していたからに他ならない。

彼はつくづく生真面目で凝り性な男であった。

「それに、メディカルセンターも助かっているのも事実だわ……宇宙ケシを分けてくれたり……栽培したスフランから採取した造血剤や抗凝固剤なんて、すごい効果なのよ？」

「へえ……そうなのかい。それは……まあやめさせる訳にはいかないな……」

「この前、フルハシ隊員のお母様が来られた時だって家畜用の……あ、そうそう！ あの

時と言えね！」

こうして話が飛ぶようになったアンヌは、もう完全におしゃべりモードだ。

あまり普段はそういった面を見せないとはいえ、彼女も年頃の女性という事だろうが……もはやアマギとしては、苦笑いしつつ、曖昧に頷くしかない。彼もまた、この手の状況への対処が、致命的に下手なのだ。

「これは、あの時の旅客機の乗務員から聞いたって、叔父さんが教えてくれた話なんだけどね……実は北極で、角の生えた牛みたいな怪物が……」

まるで素知らぬフリをしながら、アンヌが楽しそうに語る北極での目撃情報を、超人的な聴力で盗み聞きしていたダンは、あの日の戦いを思い返していた……

ポール星人の恐るべき挑戦より、遡ることさらに少し前。

そう……海の果てに浮かんだ氷上における、彼の予想以上の働きを……

北極圏で、旅客機と防衛軍の戦闘機が正面衝突するという事件について、フルハシがホーク3号が調査に赴いた。しかしその3号すらも、何者かから強制的にコントロールを奪われ、同じく操縦不能に陥った旅客機とあわや正面衝突寸前！

民間機を救う為、ホークの自爆装置を作動させたは良いものの。脱出装置すらも作動

せず、もはや爆死を待つのみとなったフルハシ。

彼の救助として、1号で急行したダンは、北極で奇妙な灯台を見つけた。

なにか怪しげな七色の光線を発し、オーロラ状に輝く電波帯を作り出している灯台。それを訝しんだダンは、コントロールを奪われる前に、近くに着陸する事を選んだ。

「また一機、地球防衛軍のパトロール機が近づいている」

「北極はいまや、我らカナン星人のものだということを思い知らせてやる!」

この時、ダンは預かり知らぬ事であったが、灯台に偽装されたロケットの内部では、カナン星人達が、絶対的な勝利を確信していた。

彼女らは、地球に挑戦状を叩きつけるに際し、この北極に目を付けたのだ。

彼ら地球人は、この巨大な氷塊に到達する為に、必ず飛行機や船といった乗り物を使わなくてはならない。

では、それらを狂わせ自在に操れる彼女達の技術があれば、この北極へ増援を送り込む事など、もはや不可能である。この地に彼女たちのロケットがある限り、北極は完全に孤立する。

……しかし、北極なんぞ占拠したところで何の意味が……?

そう、そこにこそ彼女らの恐ろしい戦略があった。

北極には一つ、防衛軍の航空基地がある。それも非常に特別な基地が。

北極基地とは……何を隠そう、宇宙爆撃艇の発着基地だ！

かの爆撃艇に搭載された爆弾の破壊力は、地球より8万倍もの密度を誇るあのペガツサシテイを粉々に粉砕したものであり、それを地球に使えばどうなるか？ 想像するな  
ど容易い事だ。

勿論の事、そういった事態にならないよう、地殻と接地しない為にこそ、この海の上に浮かぶ氷塊を空母の如く利用し、その発着場としているのだが……今やそれが完全に裏目に出ってしまった。

カナン星人は、この恐ろしい威力の爆弾を抑え、人質にすることで、地球防衛軍に交渉を持ちかけるつもりであった。かつて彼女達の領空を、断り一つで通過しようとした無礼な都市が、どのような末路を辿ったか、彼女らは最後まで見届けていたのである！

この北極の特殊な環境も、天然の要塞として機能する。ハチのような社会性昆虫から進化した彼女らは、いまやすっかり退化した翅の名残として、胸部の筋肉が非常に発達していた。それを激しく収縮させる事で、潤沢な熱量を獲得できる彼女らは、この北極圏でもなんら活動に支障はない。しかし地球人はそうではないのだから、もはや勝ったも同然。

あとは一連の事件が彼女らによるものであると宣言し、惑星破壊兵器を手中に収められ、青ざめる地球人達に、ただ降伏を迫るだけで良いのだ！



なんと労力の少ない侵略だろうか。そびえ立つ塔の中で、彼女らの高笑いが響く。

「あの灯台が怪しい……」

そんな恐ろしい計画が進行しているとは露知らず、ダンはフルハシを救うべく行動を開始した。とは言え、今からあの灯台に突入するのでは間に合わないし……何よりも、現在の気温は零下40度。変身するのはなるべく避けたい寒さであった。

「頼んだぞ……ウイ……」

カプセル怪獣に破壊させようと思ったダンは、しかしそれを思いとどまる。

もちろん彼らを使う方針は変わらないのだが……果たしてウインダムで良いのか？

ウインダムはダンが最も高い頻度で使用する怪獣である。それは彼の持つ圧倒的な汎用性にある。戦う場所を選ばないという強みは勿論の事……セブンが一番彼について評価していたのは、エネルギー効率の良さと、それに伴う回転率の高さである。

通常、カプセル怪獣は一度使用すると、再使用が可能となるまで、エネルギーチャージに数か月ほどの時間が掛かる。

しかもそれは、ただ再構築と分解回収にかかる費用のようなものであり……彼らが傷つき消耗すると、その期間はさらに伸びる。

この生体保護カプセルはもともと、要救護者や無害な野生生物を保護、捕獲する為に開発されたもので、いったんエネルギー粒子に変換し収容した生命体を、癒したり、生

命維持を行う機能がある。

それにもエネルギーを消耗するのだが……もちろんの事、中の生命体の状態により、消費するエネルギー量も変わってくる。例えば、一番の新入りの彼なんかは、非常に大食漢な上、呆れる程に偏食家なので、維持費だけで相当なものだ。ところが、ウインダムはそもそも食事らしい食事が必要なく、エネルギーを変換することなくそのまま取り込むだけで良いので、非常に燃費が良い。

その上、傷ついた場合でも、血管や神経といった複雑な細胞構造とは無縁なので、治療……というか修理に近い修復過程にも、他の面々より少ないエネルギーで即座に行える。なので、他の怪獣達より、再出撃にかかる期間が圧倒的に短くて済んだのである。

そういった理由で、困ったらとりあえずウインダム、彼がチャージ中ならミクラス、さらに繰り上がってアギラ……という感覚でホイホイ使用していたのだが……

そんな彼にも少し思うところがあった。かつてのソガ隊員の言葉である。

(そう、この先どんな場所で戦う事になるかわかりやあしない。切り札のウルトラガンすら使えないような、極寒や灼熱、未知の空間だってあるだろう)

「単純で……頑丈」

ウインダムはダンにとって、ソガの爆弾の如く使いやすい切り札だったが……逆に彼にしか行けないような場面の為に、温存しておくべきなのは？

むしろ……この程度の寒さであれば、ミクラスの方が強いのでは……?・

奇しくも、現在のダンは四つ全ての手札をいつでも切れる状態にあった。

かつてのピット星人のペット……エレキングとか言ったか。奴との戦闘で受けた傷

から、ついこの間復帰したばかりなのだ、ミクラスが。

あの時、強力な電撃を受けたのが両腕のみで良かった。あれがもし、全身で食らっていたら、今のこの瞬間に間に合っていないなかっただろう事は、ダンにも予想がついた。その時は恐らく選択の余地などなかったのだが……

「よし、頼むぞ! ミクラス!」

そうだ、ソガ隊員も言っていたじゃないか、精密機器は寒さに弱いと……

その少し後に、これより遙かに厳しい極寒地獄に精密機器ウイндаムを叩き込む事になろうとは、このとき予想すらしていなかったモロボシ・ダンは、いかなる運命の悪戯か、結果的に最良の選択肢を引き当てた。

「GRAAAAAAAAAAAAA!!」

雄牛の如き勇ましい咆哮と共に、鋭い角を振りかざした怪物が、爆炎の中から出現する。荒い鼻息だけで周囲の雪を吹き散らすその様は、猛り狂った闘牛よりも豪快だ。彼は、久々の出番で、大好きなご主人様が、他でもない自分を頼ってくれたという事実があまりにも嬉しくて、興奮度合いが最高潮に達していた。

ミクラスの全身がすさまじい熱量を発し、白い蒸気を濛々と立ち上らせる。

圧倒的な筋肉量と、分厚く堅い脂肪、そして自慢の、ふさふさとした豊かな毛皮のコート。それらは彼の身を守る鎧であると同時に、生物としては破格の発熱量と断熱効果を彼に齎していた。北極だろうがなんのその。むしろちよつと涼しくていい気分なくらいだ。なんなら、彼がそこに存在し続ける事で、北極の氷が解けるといった環境破壊を心配した方がいいかもしれないが……

それも杞憂と言うものだ。なにせ、ミクラスの真骨頂とは……瞬間的な爆発力。

ウインダムが持久走選手なら、ミクラスは短距離走。巨大な質量と運動エネルギーが織りなす純粋な破壊力は、相手が何者であつても粉碎する。

ソガが知る別時間軸の戦いにおいても、エレキングやガンダーといった、自らよりずっと大きな相手を軽々投げ飛ばし、電気や冷気の介在しない純粋な肉弾戦では常に優位に立っていたミクラス。その相手として今回選ばれたのは……ほつそりとした力ナイン星人の灯台ロケット。

すつかり勝った気でいた彼女らは大慌て。なんとかさせねばと赤や黄色、青色と様々な効果と周波数を持つ電波光線をオーロラのように乱れ撃つが……

「GRA? GRA! GRAAAAAAAAAA!!」

そのどれもがミクラスには効かない。本来これほどに強力な電波は、例え機械でなくとも有害に違いなく、脳機能が麻痺したり混乱してもおかしくはない攻撃なのだが……あいにくと、ミクラスのおつむはそんなに複雑な……失礼。その手の攻撃に対して、思考回路を乱される隙もない程に、非常に強固で頑丈な造りをしていた。

とはいえ、どんな石頭でも攻撃されれば不快には違いなく。ミクラスはますます吠え立て、猛り、燃え上がった。これはまさしく名誉挽回のチャンス! もっとも彼はそんな言葉を知らなかったが、目の前を敵を倒せば、ご主人サマがととても喜んでくれるだろう事は分かっていたのだ。

ぐぐつと体を屈め、全ての角が敵に向くように前傾姿勢をとると、後ろ肢を激しく蹴りたて、積もった雪を掻き散らすミクラス。

「た、退却……!」

明らかな突進の予備動作に対し、カナン星人のロケットは偽装部分をパージして、慌ててロケットに点火し、噴射準備に入った。それを見たミクラスの頭にカツと血が上り、視界が赤く染まっていく。

もしかして、あいつ……にげるきか?

戦士の勝負から、背を向けて逃げる等、言語道断。そのような行為は、誇りを踏みに

じり、決意を嘲る事だ。彼に対する侮辱にはかならない。敵前逃亡と言う度し難い行動に、ミクラスは怒り狂った。

「GRAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」

振じれた角を振り立て、巨大な肉塊が、激しく雪をまき散らし、蒸気機関車の如く猛進する。怒れる猛牛の突撃が、今まさに飛び立とうとしていたロケットの横つ腹を思いつき殴りつけた!

横倒しになった状態で、さりとて発射中止も叶わなかったロケットは、そのまま発射され、激突の衝撃も合わさって凄まじい勢いで地を滑り、氷塊にぶつかって空中に投げ出された後は、青空に弧を描いてぐわんぐわんと不自然な軌道で暴れ回る。

八の字で狂ったようにダンスを踊るその胴体には、深々と大きな亀裂が走っており……そう亀裂! ヒビだ! あのカナン星人のロケットが!?

ハニカム構造の優れた断熱性と耐衝撃性を備えたカナン星人のロケットは、宇宙でも有数の剛性を備えているので有名であり、例えばゼブンの光線でも、ワイドショットでもなければ即座に破壊するのは困難を極める代物だというのに……

それを、ただの突進一発で、<sup>質量</sup>純粹な物理的破壊力のみで押し切ってしまったのだ、我らの雄牛は。これぞ、<sup>質量</sup>筋肉と<sup>速度</sup>筋肉が叩き出す圧倒的なパワー! 暴力こそが力と言わんばかりの怪力無双!

衝撃によって電子機器もなにもかもがめっちゃめっちゃになったロケットは、やがて北極の冷たい海に沈んでいった。こうして、カナン星人の恐ろしい野望は、誰にも知られぬまま、あぶくの様に消え去ったのだ。

北極に響く勝鬨の声。

「GRAAAAAAAAAAAAAA!!」

「……え、ねえ、ダン！ ダンってば！」

「ん？ なんだいアンヌ？ ミクラスがどうしたって？」

「聞いているの？ 名前よ！ 名前！」

「名前……？ 誰の？」

あの時のダンとしては、単なる威力偵察のつもりであったのに、あんな一瞬で勝負を決めてしまうとは……思いがけぬ活躍に、すっかり意識を飛ばしていたダンは、アンヌの呼びかけでようやく現実へ引き戻された。

「だ・か・ら！ この前のロケットとか、ギョロ目の角怪獣の名前よ！ セブン以外にも、人知れず地球の為に戦ってくれているんだわ、きつと。それで彼らをなんて呼ぶか決め

ましょって言ったら……アマガイ隊員だったら、ウルトラエイトとウルトラナインでいいだろって！ それはセブンの名前であって、怪獣に付けるのは何か違うというか……第一、芸が無いと思わない？」

「う、うーん。まあそうだね……そうだ、ソガ隊員は？」

妙に鋭い彼ならあるいは……

「それは……筋肉怪獣フルハシゴンとロボット怪獣アマガイラスですって」

「え!? ふ、フルハ……ハハハハ!!」

「もう、みんな真面目に考えてあげてよ! ……もう、ウフフフ」

男共のいい加減さに、ぷりぷり怒っていたアンヌも、笑い続けるダンに釣られてやがて笑い出す。

「ははは……はあおかしい……ふう……ミクラスだ」

「え？」

「だからミクラスさ。その角怪獣の名前だよ。ほら、次郎君の渾名にミラクルマンってあっただろう？ だったら彼はミラクルモンス。それをもじってミクラスさ」

「ミクラス……ふふ、なんだか可愛い響きね。ステキ。やっぱリアナタ、なかなかセンスあるんじゃない？ ダン」

「そうかい？ それは良かった……じゃあ今日から彼はミクラスだ！」



「私も早く会ってみたいわあ……」

不細工なのに、妙に愛嬌があるとフルハシ隊員が評する怪獣について、思いを巡らすアンヌは、気をよくしたダンにその後に関かされた

ウイーンと動いてダムダム走る

とかいう命名理由に対し、引き攣る笑顔でただ一言……ユニークね、と返すのが精いっぱいであったという。

## 超兵器R2号（I）

ポール星人の挑戦から、はや一週間。

俺が目覚めた時には戦いは既に終わっており、ただ猛禽の如く鋭い目つきのアラキ隊員が、決して逃がすまいと待ち構えていただけであった。

なんでもあの後、意識を取り戻したダンにひっかけられて、まんまと逃走されたそうだな。だからって、俺で雪辱を果たそうとしないで欲しい。そろそろ体が鈍っちゃまいそうだよ……

メデイカルセンターでぼんやりしていると、例の問題児が顔を出した。

「ソガ隊員、どうですか？」

「どうしたもこうしたもあるか、お前のせいだぞ。よく顔を出せたもんだよ」

俺がちらりと部屋の隅へ視線をやると、アラキ隊員が凄まじい形相でダンを睨みつけた後、鼻を鳴らして背中を向けるところだった。……おおこわ。

バツの悪そうな顔でペコペコしてる目の前の男は、とても正義のヒーローとは思えない程に情けない。叱られた悪ガキもかくやといった様子だ。1万7千歳も年上なのに、頭が上がりらんらしい。

「それで、怒れる軍医殿に出くわすリスクを冒してまで、どうしたってんだ」

「いえその……お見舞いに、コレを……」

「……あ？　なんだこりゃ？」

ダンがヒソヒソ声で俺に手渡してきたのは、単なる枯れ枝だ。

「本当はパトロールの帰りに、花を摘んでくるつもりだったんですけど、まだ全然咲いてなくて……で、パトロール先の公園で出会った子が、コレをくれたんですよ。いやあ、良かった」

「それで枝って……お前……」

「違う違う、その裏ですよ裏！」

「うらあ？　……あ、こいつあ……」

ひっくり返してみると、枝の先つちよに何やら鈴なりにくつついているではないか。それは細長い柄の先に小さい房のようなものが揺れていた。

ああ、オレはこれ見たことあるぞ……

「いやあ、うどんげの花って言うんですね、ソレ。僕がこのほ……こつちの方に来た時もソレによく似た花が林いっぱいに垂れ下がって咲いていて、すごく幻想的だなと思ったものです。あれ以来、ずっと見たことが無かったんですが……まさか珍しい花だったとは」

「……は、ハツハツハツハツハ！」

「何がおかしいんです？」

「あのなあ……ダン。確かにこれは優曇華の花つて呼ばれちやいるが……卵だよ。カゲロウつて虫の卵なの。日本語つて難しいよなあ？ 本当に華なのは、伝説上でな……」

「えッ?! 卵?! コレが?」

俺の指摘に驚くダン。宇宙人からしても、変な形なんだな。確かに昔の人からすれば、こんなもんが枝や葉つばに付いてたら花だと思つても不思議ではない。

オレも、実物が中学校の窓ガラスに引っ付いてるのを見てなきや、知らなかつただろうな。

「そう。まあこの時期つて事は、中身はとっくに出て行つた後のを、その子が大切に保管してたんだろうさ。子供にとつちや、確かに宝物だろうよ。それをお前さんに気前良くくれたとは……いいもん貰つたなあ……ダン」

「は、はあ……そうだったのか……」

「でもあいにくと、ここには置いておけないぞ。虫の卵なんて、アンヌに気味悪がつて捨てられちまう。お前の部屋に飾つとけよ。珍しい物には違いないしな……はっはっは」  
「そうします……そうか、あの花じゃなかつたのか……」

「お前が見たのはきつとスズランとか……ガマの穂かな？ 今度、植物園に連れてつて

やるよ。確か、本当に優曇華つて別名の植物もあつたんじゃないかなあ……日本にあるか知らんけど」

しかし、見舞いに花とはかわいい奴め、おまけに天然と来た。こういうところが憎めないんだよな……そりゃアンヌもコロつといっちゃまう訳だ。

「じゃあ、今度の休みを楽しみにしておきます。……あ、もう行かなきゃ」

「なんだ、帰ってきたばかりだろ？ ゆっくりしてけよ。アラキ隊員にココア淹れてもらうか？」

「勘弁してくださいよ……なんだか作戦室で発表があるらしいんです。見られなくて残念ですね、ソガ隊員」

「へえ、アマギがまたなんか面白いもん作ったのかな」

「地球防衛に関する事だそうですから、きつとそうですよ」

へえ……悩んでた新型弾かな？ それとも俺の渡したお土産の方か……？  
楽しみだなあ……

---

地球防衛国際委員会のセガワ博士、宇宙生物学の第一人者マエノ博士らをメインス

タツフとして、この防衛軍基地内の秘密工場で、今、恐怖の破壊兵器が完成しようとしていた。それは惑星攻撃用の超兵器R-1号である

作戦室ではアマギが得意そうに広げたR-1号の図面を前に盛り上がる警備隊の面々。

しかし防衛兵器と聞き、プロジェクトブルームのようなバリア装置を思い浮かべていたダンにとつて、それがまさか惑星間弾道ミサイルであるというのは、まさしく青天の霹靂であった。

「新型水爆8千個の爆発力だつて……？」

「しかもこれは実験用だぞ！」

「すごいわあ……ねえダン！」

「いよいよ発射するそうだよ」

はしやぐフルハシたちを尻目に、たった一人、浮かない表情のダン。

「ダン、これで地球の防衛は完璧だなあ……地球を侵略しようとする惑星なんか、ボタンひとつで木っ端微塵だあ！ 我々は、ボタンの上に指をかけて、侵略しようとする奴を待つておればいいんだ！」

「それよりも地球に超兵器があることを知らせるのよ」

「そうかあ、そうすれば侵略してこなくなる！」

「そうよ！ 使わなくても、超兵器があるだけで平和が守れるんだわあ……」

アンヌも、二度と戦いをせずに済むと聞き、ようやく平穏な日々が約束されたのだと安堵する。

戦いに勝つ事よりも、そもそも戦い自体が起こらないこそが、真の平和なのだから。

「しかし、地球防衛会議がペダン星人に邪魔されてから、ずいぶんと遅れたもんだなあ」「いやあ、これでも早い方ですよ、フルハシ隊員。イトウ博士とグリーン博士が、あのと き身代わりに沈んだアーサー号への吊いだと、寝食を惜しんで協力したそうですから……」

ペダン事変の際、南極基地から防衛会議に出席する筈だった二名の博士は、影武者を乗せたアーサー号が襲撃された事により、間一髪で命を拾っていた。しかし、未だにその事を酷く悔やんでおり、あの時に暗殺された他のチーフ達の間まで、自分たちが頑張るのだと言って憚らなかった。

ツチダとアンダーソンが心配するほど熱心に計画へ打ち込む兩名の心の中には、あの戦いで死んでいった兵士達の尊い犠牲を、なんとしても無駄にしないという強い決意があったのである。

あの時に、この兵器があれば……もつと犠牲は少なくて済んだだろうに……

その後悔と哀しみこそが、彼らの頭脳の動力源であった。

「それに、マルサン倉庫の被害が少なくて済んだのも良かったですね。もしあそこが爆破されていたら、きつと春先までズレ込んだでしょう」

「そんなにか！ いやあ、まったくヤスイのおっさんには頭が上がらんね。ウルトラ勲章がもう一個いるんじゃないか？」

「あの時は隊長が、燃え盛る火の海に駆け込んで、即座に鎮火されましたものね。流石ですわ隊長」

「待て、それは違う。君達二人が、敵の遊星爆弾をほとんど撃墜してくれたおかげだ。皆の勝利だ。それに、ダンも私と一緒によく戦ってくれた……どうした、ダン？ 具合でも悪いのか？」

「……」

「どうしたの、ダン？」

満面の笑みで語り合う仲間達を尻目に、ただ一人、その熱量を共有できずにいた男の顔は、酷く苦々し気で……

先程までの無邪気な青年は、今やまるで老人のように深い皺を眉間に刻み、磐のように黙りこくってしまっていた。



「じゃーん！ ソガ隊員。いいものを見せてあげる」

「お、なんだいなんだい？ いいものって？」

メデイカルセンターに帰ってきたアンヌが、悪戯っ子のように頬を紅潮させながら、もったいぶって後ろ手に隠していた何かを、俺に見せびらかす。

「見てみて！ かわいいでしょう！ 二人が凍傷で倒れたって聞いて、ルリコがくれたのよ。あの病室は殺風景だからって。これでソガ隊員も退屈しないでしょう？」

「もう明日には退室するけどな。へえ、リスかい？ 君等は揃いも揃って、俺を楽しませようとまあ……いい友人を持って嬉しいねえ……」

……ん？ 待てよ？ リス？

なんか見覚えがあるぞ、コイツ……？

「……そうだ、アンヌ。発表って何だったんだ？」

「え？ ああ、それがね……」

その時、センターのドアが開いて、フルハシに組み付かれたダンが、無理やり室内へと引き摺りこまれてくる。

「バカ！ よさないか！」

「放してくださいッ！」

「どうしたの!？」

「参謀へ実験の中止を……地球を守るためなら、何をしてもいいのですかッ!」

酷い剣幕で声を荒げたダンを、フルハシが珍しく真剣な顔をして、父親が子供に言い聞かせるような穏やかな声で諭す。

「忘れるなダン、地球は狙われているんだ。今の我々の力では守りきれないような、強大な侵略者がきつと現れる。その時のために……」

「超兵器が必要なんですね?」

「決まっているじゃないか!」

「侵略者は、超兵器に対抗して、もっと強烈な破壊兵器を作りますよ!」

「我々は、それよりも強力な兵器をまた作ればいいじゃないか!」

フルハシの言葉に、目を背けるダン。

彼の視線の先では、一匹のリスが、何も知らず、罪のない顔で、ただただ滑車を必死に回していた。

真つすぐ進んでも進んでも、後ろから後ろから、また次の道が降りてくる。それをまったく疑問に思わず、リスは滑車を回し続ける。それが自分の使命だとも言うように……

ダンは宇宙の闇のように暗く深い瞳でそれを見ながら、絞り出すように、呟いた。

「……それは、血を吐きながら続ける……悲しいマラソンですよ……」

……がたり。

三人の目が物音の方へ向く。

そこには、幽鬼のように歪んだ顔で、男がよろよろと病人の如き格好で立ち上がっていた。

「お、おい……まさか……発表って……R1号の事だったのか……？」

「そ、そうよ……知っていたの？ ソガ隊員？」

「……そんな！ ポール星人の挑戦から、まだ一週間も経ってないじゃないか!？」

「だからこそじゃないか！ 基地が甚大な被害を被った今だからこそ、地球の力を見せつけて、敵を牽制するんじゃないか！ クソツ、完成があと一週間早けりゃあ……」

「あ……ア……」

「ソガ隊員？」



## 超兵器R2号(Ⅱ)

参謀室にて、タケナカ参謀とキリヤマ隊長の前で二人の博士が今回の計画について最終確認を行っていた。

「で、実験はどこでするんですか？」

「ギエロン星を選びました」

「えっ、ギエロン星？」

「ええ、シャルル星座の第7惑星。あの星でしたら、地球への影響は全くありません……

それに、生物もいません」

「生物がないというのは、確実なんですか？」

「ええ、大丈夫です。実験場所を選ぶのに6ヶ月もかかって検討したんです」

ペダン事変以来、観測ロケットの類は打ち上げられておらず、それまでに収集されたデータを基に、さらに有人飛行の観測機を飛ばして、選定した。つまり、現在の人類が有人飛行で到達できる範囲からしか候補を選べないという事だ。そんな限られた条件の中で、マエノ博士は最善を尽くしたと言える。

彼女の提出したデータを見た参謀は勿論、セガワ博士すらも、そこに一片の疑いを持

たなかった。なにせ、惑星表面の鉱石サンプルを採取し、星の裏側まで回り込んで、機械的にも肉眼でも確認したのだから。

ギエロン星に観測機へ反応を返す生命体はおらず、地表サンプルからは微生物すら見つからなかった。現在の人類が外宇宙の惑星に出来る、全ての方法を試したとすら言えるだろう。そもそも、水分が一滴も存在しない事が分かっている惑星に、そこまでの手間を割いたというのが、彼女の真摯さと生真面目さを物語っている。

第一、全ての生命が、その生存に水分を絶対に必要とするという事は、地球上の誰だって知っている常識なのだから。必要のない調査を最後まで行った彼女の執念は、もはや常軌を逸していたと言っている。それほどまでに、ペダン事変以降における科学技術部は慎重に慎重を重ねていた。

「我々は、ついに超兵器を持ったということ宇宙の侵略者たちに知らせるといことも目的の一つなんだ」

「実験が成功すれば、ギエロン星は宇宙から姿を消すでしょう……」  
これが、ソガの絶叫から遡って48時間前の、会話である。

「待て！ ソガ！」

「待ってソガ隊員！ アナタまで一体どうしちゃったっていうの？」

「駄目だ！ R 1号を撃っちゃいけないんだ！ それだけは!!」

アンヌの制止を振り切って、作戦室に転がり込んでくるソガ。

「隊長！ 今すぐR 1号の発射を中止して下さい！ 訳は後で話します！ 今は俺を信じて下さい！」

「どうしたんだ？」

「隊長！ コイツラさつきから変なんですよ！ 実験を中止しろとかなんとか……」

その後ろから、ダンを引き摺りながら、フルハシが怒りの形相で追って来る。

「お願いです隊長！ あれだけは撃ってはなりません！ 地球はもう言い訳できなくな

る！」

「……おいソガ、そんなに真っ青な顔で何言ってるんだ。まだ寒いのか？」

「アマギ！ 今はふざけてる場合じゃない！ R 1号は……」

「お前が寝言を言ってももう遅い。たった今、発射したばかりだぞ？」

「……な、なんだって……？」

「お、おい！ しっかりしろ！」

アマギの言葉を聞いて、その場に力なく崩れ落ちるソガ。

常にはない様子の彼を心配し、隊長達が助け起こす。

「もう！ 無理するからよ！ やつぱりまだ治ってなかったんだわ！」

「……いいや、違う。違うよアンヌ……体はすこぶる元気さ……体はね……」

「おい、大丈夫か？ ……死人みたいだぞ？」

「まさか、侵略者が妨害を仕掛けて来るのか……？」

「いえ、違います参謀……そうじゃない、そうだったらどんなに良かったか……」

「宇宙震を観測！」

直後にウエノが叫んだ報告によって、ソガが小さく呟いた声は誰にも聞かれる事はなかった。

ギエロン星を見張っていた観測艇から齎される、実験成功の報。その喜色に満ちた声が、ソガの心を何度も何度も突き刺した。

「成功！ 大成功です。成功です！ 巨大な炎が吹き上がり、ギエロン星は完全に粉砕されました」

「やった！」

「……参謀！」

「うん、信じられない破壊力だ。これでR2号が完成すれば地球の防衛は完璧だ」

「完璧なものか……」



「ソガ隊員……?」

暗い顔の二名を残して、喜びに沸き立つ作戦室

ダンの顔を見上げるソガの顔には、痛々しい程の悔しさと虚しさが交ぜになつていて……それはまるで許しを請う罪人のようでもあった。

だがそれも、次の報告を聞くまでの僅かな間でしかなく、ダンはその幻であったかとも思つた程だ。観測艇の通信でハツとしたソガは、次の瞬間にはコンソールへしがみつく様にして、マイクを握っていた。

「レーダーがギエロン星の破片と思われる影をキャッチしました」

「観測艇！ 回避しろ！ 衝突するぞ！ 観測艇！」

彼らの声を背にひとり、踵を返して作戦室を後にするダン。

他の面々は、恐慌したソガを宥めるのに必死であったが、アンだけは彼を追いかけ行つた。

「ダン！ どこに行くの?」

「……宇宙パトロールの時間だよ」

アン又へ冷たく突き放すように告げて、苛々とした様子でHOOKの発射場へ向かうダン。

怒っているのか、悲しんでいるのか。どちらにせよ、彼が実験の成功を喜んでいない

という事だけは明白であった。

(どうして……? どうしてアナタは私達と、同じ喜びを分かち合ってくれないの……  
ダン)

普段より小さく見える男の背中を見送る彼女の頭の中で、先程の言葉と表情が思い起こされた。

『それは、血を吐きながら続ける……悲しいマラソンですよ……』

---

「こちら宇宙観測艇8号! こちら宇宙観測艇8号! 緊急情報、緊急情報! ギエロン星から、ギエロン星から攻撃を受け……」

「観測艇8号! 観測艇8号!」

「どうしたんだ?」

俄かに緊張が高まる作戦室。

「おい、何があつたんだ! 応答せよ!」

「こ、こちら宇宙観測艇8号、ギエロン星から、何者かが地球方面へ……飛び去つて……」

「巨大な鳥が……」

「……鳥？　そう言ったな今？」

「そんなバカなことありません。ギエロン星には生物は住んではいません！」

マエノ博士が驚愕の表情で断言する。だが、その声の震えには、僅かに不安の響きが含まれているのを、彼女自身、否定しきる事ができなかった。現に、その言葉をへ被せるように、計器を見張っていたウエノが声を上げる。

「隊長、奇妙な物体をキャッチしました」

「何だろうか？　普通の宇宙船じゃないぞ……」

「方角は？」

「ギエロン星のあった方角からまっすぐ地球に向かっています」

やはり、観測艇の見間違えではないのか？　即座に通信を開始するキリヤマ。

「ホーク1号、ホーク1号！　こちら作戦室。応答せよ！　応答せよ！」

「こちらホーク1号」

「ギエロン星のあった方角から、まっすぐ地球に向かっていている飛行物体があるんだ。調査してくれ！」

「了解、調査します」

「何だろう……その飛行物体というのは……」

ホークの操縦桿を握りながら訝しむフルハシの隣で、ダンは激しく後悔していた。

あの実験のことだ。深い深い宇宙の気配の中で、セブンとして、ダンとして、彼は自らの行動を縛ってしまった事を恥じた。

あの時、確かに自分は……地球人ではなく宇宙人なのだと、彼らの問題に口出しをすべきではない、いや、その権利はないのだと……迷ってしまった。発表の場であれば、まだ間に合ったかもしれないのに……

(僕は、絶対にR-1号の実験を妨害するべきだった……本当に地球を愛していたのなら、地球防衛という目的のために……それができたのは僕だけだったのに……)

あんなにも地球人と仲間になる事を望んでおきながら……やっぱり所詮は部外者でしかないのだと、彼らと自分は違う立場なのだと、自らの手で線を引いてしまったのだ。そのことに今更になって気付いてしまったセブン。もう……遅いというのに。

だが、そのやり場のない感情を整理する間もダンには与えられ無かった。なぜなら、目的の物体がすぐそこまで迫って来ていたからである。

はたして彼らの目前に現れたソレは……まさに巨大な鳥であった。漆黒の空を、二枚の翼で羽ばたき、ホークとほぼ同等のスピードで宇宙を飛んでいる！ まっすぐ地球へ向かって！

「ホーク1号より作戦室へ。発見しました」

「宇宙船か？」

「いや生物です。巨大な!」

「なに? 生物……生物だつてツ?」

「そんなバカな!」

作戦室で博士が叫ぶ。そんな事實は認められない。いや、認めたくは無かつた……

しかしそうも言つていられない。即座に気持ちを切り替えたダン。宙返りして、追撃戦をしかけるホーク1号。だが、観測艇に攻撃してきたという事であつたが、追いつがるホークには微塵も興味を示さない怪獣。試しに注意を引こうと攻撃をしてみても……硬い表皮でその全てを弾き返してしまう。

「恐ろしい奴だ……ロケット弾じゃだめだ!」

「いえ、見ていて下さい! 隕石と正面衝突します!」

その時ちようど、怪獣の進行方向からほぼ同サイズの隕石が流れてきた。これ幸いと様子を見ていた二人であつたが……激突に勝利したのは、怪獣の方であつた。

怪獣の、刃物のように鋭利で硬い頭頂部にぶつかった岩石は、バツクリと二つに分かれてしまったのだ。

ロケット弾を弾き返し、自分と同サイズの質量にぶつかつてもビクともしない、恐ろしく強力な怪獣が、脇目も振らず、まっすぐ地球へと迫つて来ているのだ。

それも、先程地球が粉々に消し飛ばしてしまつたギエロン星から……

その生き物の目的が、一体なんであるかなど、もはや火を見るよりも明らかであつた。

## 超兵器R2号(Ⅲ)

「信じられません。ギエロン星は温度270度、酸素0.6%。金星とよく似た、燃えな  
い焦熱地獄です。そんなところに生物が住めるはずがありません」

「しかし、そこに生物はいた。しかも超兵器R1号の爆発のショックで変異したんだ」  
「……あたくしの責任です。ギエロン星を実験場に選んだのは、あたくしです……」

「私たち全員も賛成した。あなたひとりの責任じゃない」

「でも……」

「自分をいじめるのはやめたまえ」

自責の念に駆られるマエノ女史を、セガワ委員長が慰める。

しかし、今やそのような責任問題どころでは無かった。

「隊長、新型ミサイルをホーク2号に取り付けました」

「では……失礼」

軌道上でこの生物を撃滅するため、キリヤマが2号で迎撃に出る。

V3から発進したクラタ達とも合流するが、その激しい攻撃を涼しい顔でやり過ぐす

ギエロン星の怪獣。

さらにその上、プロジェクトブルーの電磁バリアすらも、真正面から突き破って強行突破するという離れ業を見せつけた巨鳥は、ついに、憎き仇共が跋扈する、地球の大地へと降りたつたのである！

『タツケテエエエエエ!!』

人類の愚かさと傲慢さによつて、故郷を破壊された復讐鬼の雄叫びが、月夜の廃墟に木霊する。

ギエロン星獣はその血走つた眼で、ゆつくりと辺りを睥睨した。ここが、奴らの住まう楽園かと……今から己が焦土と化すべき地獄かと……

いや、それとも本当は……？

そこへ、アマギの乗つたホーク3号が飛来する。ぴよこぴよこと地面を跳ね回り、小首を傾げる怪獣を、なんとかここで殺しつくしてしまうべく、3号は腹の弾倉を大きく開け放ち、乾燥気化爆弾をありつた投下した。

連鎖する爆縮が、哀れな鳥を包み込み蒸し焼きにしてから、その四肢を衝撃波でバラバラに引きちぎつた！ 大小の肉片となり果てて、朽ちた教会へ四散するギエロン星獣。



「やりました隊長！ 地上にて怪獣を撃破確認！ 呆気ない最後でした……」

「そうか、これまでのダメージが蓄積していたんだろう」

「待って下さい！ アマギ、油断するな。その怪獣の死体を、しばらく見張っておくんだ！」

「なに言ってるんだソガ？ 見張るも何も、バラバラだぞ」

「今に分かる！」

「はあ……」

通信を聞いていたソガが割り込み、死体を見張れと声高に主張する。

血気迫る彼の声に、アマギは渋々辺りを旋回して、肉片に怪しい動きがないか監視する事にした。

……しかし

「おい、何が今に分かるだ。ピクリともせんじやないか」

「な、なんだって……？」

「もう30分も飛び続けてるが、流石にこれ以上は勘弁してくれ！ 今日のお前はおかしいぞ？ ……アマギ、帰投する！」

アマギが腹立たし気に通信を切り上げた向こう側で、ソガの顔は困惑に満ち満ちていた。

「なぜ、再生しないんだ……?」

確か本編においてギエロン星獣は、3号に吹き飛ばされた後、バラバラの状態から復活したはず。それも夜中のうちに。

それが今回はピクリともしないなんて……おかしい。

原作よりも激しい攻撃で再生力を使い果たしていた……?」

確かにこの後、セブンに頸動脈を切られて死ぬくらいだから、再生力が有限であるのは間違いないんだが……本当にそうなのか?」

あの時と今とで、一体何が違うんだ……?」

ソガが暗い表情で首を捻る中、作戦室へフルハシとダンまでもが帰還する。

念のために、帰り道でもう一度確認をお願いしておいたのだ。

「隊長、やはり死体は死体のまま。ソガの杞憂ですよ」

「うむ……しかし、おかしいな……どうも」

「ええ、超兵器R1号の爆発でも死ななかつた奴です」

「うむ……」

とはいえ、流石にあれだけの攻撃を食らい続けてきた生物が、地球に降り立った途端、こんなにアツサリと死んでしまうだろうか?」

ダンとキリヤマも、どこか納得のいかない様子で唸る。

死体を見張れと言うソガの主張を黙認したのも、まだ何かあるにはないかと、しきりに胸騒ぎがしたからだ。

「宇宙を飛行してきて、エネルギーを使い果たしたのかもしれない……」

「そうですよ、きつと!」

絞り出すように呟くソガにアマギが同調する。

もつとも、両者の表情は対極的であつたが。

「隊長、被害を最小限度に食い止めることができ、何よりだった」

「いやあ、これからどんな強力な侵略者が来るかもわからん。一日も早くR2号を完成させなきゃ……。理論的にはさらに強力な超兵器、R3号、R4号の製造も可能だ……」

「あ、あんたは……」

セガワ委員長の言葉に、ソガが弾かれたように顔をあげ、今にも噛みつきそうな勢いで睨みつける。普段の温厚さからは想像できない彼の顔に、周囲も思わずたじろぐ程に。

「な、なんだね……ソガ隊員……? やはり威力が中途半端だったのが、そんなに気に入らないのかね?」

「まったく違います！ 結局のところ……我々の実験に、被害者を出してしまつた事について、なにも反省はないんですか？ 彼は……彼は被爆者なんですよ？」

「だが！ 直前まで本当に、生命の痕跡は何も無かつたのだよ？ 当然ながら、あの星で実験を行う事は、観測艇からあらゆる周波数帯で発信していた！ あれはきつと……岩石が放射能によつてアンノン星人のような疑似生命に変異したとしか考えられん！ ギエロン星に先住する生命体は居なかつたんだよ」

ソガの指摘に、セガワ委員長は沈痛な面持ちで視線を下げる。しかし、この計画に携わつた全ての人間の切実な思いを知っている彼としても、そのまま引き下がる訳にはいかなかつた。

「そんな事は関係ない！ どつちにしろ、R1号があつた化け物を生み出した事には変りないじゃないですか！」

「それは……それは詭弁だ。こうなる事など、誰にも予想できなかった……確かに、予測を外した事は、科学者たる私のミスだ。何度でも謝罪する。だが……我々以上の力を持つ外敵から身を守るのに、力は必要だ」

「セガワさん、それこそ詭弁だ！ 真の平和とは……他者を脅かす事なく、それを成し遂げなくてはならないんじゃないんですか？ だからこそ、難しいんじゃないやありませんか……？ 我々は、地球防衛軍であつて……このままでは宇宙攻撃軍になってしまう！」

「……やめないか、ソガ」

キリヤマの制止に振り返ったソガの瞳には、やりきれない思いが渦巻いていた。

彼とて、セガワ委員長だけを責めたつて、何かが解決するわけではないと察していた。だが、それを飲み込める程には、彼の精神は成熟しきつているわけでも無かったのである。

「……いつか自分達に向けられるかも知れない武器を持つている相手と、猜疑心や打算抜きで、友情を育む事ができると本当に思いますか？ 隊長……？」

「それを取り越えてこそその絆だ……真の友情とは、そういうものだ。……それに、例え僅かな打算があつたとして、その一点だけを瑕疵と言ひ張り、一切を友誼と認めないのか？ ……それこそあまりにも、狭量なのではないか……？」

キリヤマの眼差しには、若さを責める色も、妥協を諭す響きも無かつた。そこにはただ、疑問を投げかける一人の男がいるだけだつた。

「……失礼しました。私が熱くなりすぎたようです、セガワ博士……私は、これにて！」  
バツの悪そうな顔で、その視線から顔を逸らしたソガは、振り返らずに一方的に謝罪を捲し立てると、足早に作戦室を後にした。その後ろ姿を、とても寂し気な表情で見送る仲間達。

脅威を退けた喜びの熱は、先程までが嘘のように、もはや冷め切つてしまつていた。

## 超兵器R2号（Ⅳ）

結論から言うと、ソガの懸念は正しかった。

朝方に、怪獣の死体を回収するべく接近した地上班が、完全復活した怪獣の逆襲を受ける事となってしまったのである。

非戦闘員を回避させるため、そしてなにより、翼を持つこの恐ろしい敵を市街地へ飛び立たせないために、次々と戦車や装甲車が増援として到着し、激しい攻撃を加えていく。

だが、復活した怪獣の外皮は、以前にも増してさらに強固になっており、どのような攻撃も全く寄せ付けない。それに怪獣は、口から黄色い灰のような有毒ガスを猛烈に噴射して、それに撒かれた隊員達が、血反吐を吐いてバタバタと倒れていく。

だからと言って、このまま撤退するわけにもいかない。少なくとも、自分たちが怪獣に攻撃を加える脅威であり続ける限り、敵もまた、この地上に釘付けになっているのだから。

しかし、いくら防毒マスクを装備しても、地上攻撃だけでは限界があった。

「だめです！　もう我々の武器では一切歯が立ちません！」

「第3から第7中隊、応答ナシ！」

「第8、第9中隊被害甚大！ 部隊損耗率60%！」

「私の火力損耗は甚大で、これ以上の射撃の継続は難しい状況です！」

次々と舞い込む凶報、かつての悲劇を彷彿とさせるやり取りの数々に、キリヤマの表情は苦しいものへとなっていく。

「スワ班及びトリヤマ班は、負傷者を回収し、第二次防衛線まで後退せよ！ イナガキ班はこれを援護！ 撃滅では無く遅滞戦闘へ移行せよ！」

「了解！」

爆炎と灰が充満する戦場で、一人の青年将校が、傷ついた戦友を背負って、走っていた。彼は部隊の中でも特に小心者で、同期から散々に揶揄われていたが、今だけはその勇気を奮いたたせ、口から血を流す友人を救うべく、自らも傷だらけになりながらも、荒地をただひた走っていた。

「お、おいおい……もうちつと優しくしてくれや……ゲホツゲホツ……」

「大丈夫か！ しつかりしろ、カジ！」

「まったく……お前は本当に……何かを運ぶのが、下手だなあ……神戸でお前に運ばれたって言う、新型爆弾の気持ちだが、分かった、ぜ……」

「喋るな！ 喋るんじゃない！ 体力を温存するんだ！ わたしが、きつと助けてやる

からな……」

「お前みたいなドジに、俺が助けられちゃうなんて……随分とヤキがまわったもんだぜ……」

「頑張れ！ 息子君が生まれるんだろう！ 彼女を悲しませるつもりか……！」

どうして、なぜ彼がこんなに苦しまねばならない？

いつも自分を揶揄いつつも、何かと世話を焼いてくれた不器用な彼が……なぜ！

あの悪魔のような怪物が来なければ、こんなことには、ならなかったのに！

どうして……どうして宇宙はこの星を……わたしたちを放っておいてくれないんだ

……！！

どうして……どうして……！！

いったいどうすれば地球は平和になるっていうんだっ……！！

……この日、青年は、人々の平穏と、友の笑顔の為に、その果てしない使命に対して、自らの人生を捧げる事を固く堅く決意した。

……同時に、その先に待ち受ける困難さも、また深く深く理解し、そびえ立つ理不尽へ対して、心の底から慟哭したのだった。



もはや地上攻撃で時間を稼ぐ事は不可能と見たキリヤマは、ホークの準備が整った為に、敵の飛行を誘発するのを承知で、出撃を決断する。

「参謀、大変なことになりました。ホーク1号、3号に大型ミサイルを取り付けましたが……全力でやってみます」

「隊長、ギエロン星獣が東京に侵入します！」

「なにー！」

「キリヤマ隊長、頼む」

「ハッ……アンヌ、ソガ、君達はここへ残って連絡をとれ。……出動！」

駆け付けたホークの攻撃に、ギエロン星獣は歩みを止め、銀色の翼を憎々し気に睨みつける。

旋回を繰り返し、懸架した大型ミサイルを雨あられと叩きつけていく二機。

しかし、攻撃にさらされる度にその皮膚はよりいっそう固く、強靱に進化して、どれもまったく通用しない。

お返しとばかりに、ホーク目掛けて黄色いガスを吐き散らすギエロン星獣。

機体のガイガーカウンターが身悶えるように暴れ狂い、機外に渦巻く猛烈な放射線量の存在を主張した。

「放射能だ……」

「……ええ、ギエロン星を爆破したR1号の放射能です」

「大変なことになるぞ、今に……」

怪獣が死の灰をまき散らしていると報告を受けた作戦室では、タケナカが痛恨の極みと言わんばかりの表情で、セガワ委員に語り掛ける。

「セガワさん、エライことになった……R1号の放射能で、東京が危険です」

「何もかも、あたくしの責任です……」

「そうだ、我々委員の……」

「今はそんなことを言っている時じゃない。責任は私にも……」

「風に乗って、放射能の灰は広がっています。東京が危険です！……警報を出してく

ださいー！」

悪化していく状況に、業を煮やした隊長が参謀へ進言する。

もはや付近の避難だけでは間に合わない。

そして、自責の念に駆られたセガワもまた、参謀へ打開策を進言する。

「タケナカ参謀！……この危機を救うものは、超兵器R2号だけです」

「でもR2号を使って、さらに巨大な生物に変化したら……」

「マエノ君、このままでも東京は危険なのだ。私はR2号の破壊力に賭けてみたい……」

時間が欲しい……R2号さえ完成すれば……」

「バカヤロー!!」

「そ、ソガ隊員……」

「さつきから黙って聞いてりや……この期に及んでまだ懲りひんのか! アンタは!」

「何を言うんだね!」

「放射能で生まれた怪獣に、さらなる核兵器をぶつけて解決するって、本気で思ってるのか……!? あんたそれでも科学者か!? 奴に餌を与えてより強大にするだけだつてのが……どうして分からないんだ!!」

「だが、そうなる前に爆発の威力で細胞を一片残らず吹き飛ばせば……」

「お前ほんまにアホなんやな! そんな威力のモン、地球で使うたら、どうなる思てんねん!!」

「そ、それは……」

「やめて！ やめて下さい！」

今度こそセガワ氏の胸倉を掴み上げて、怒鳴り散らすソガ。

アンヌやマエノの制止も全く耳に入らない様子で、博士に詰め寄る。

「暴力にさらに強い暴力をぶつけて、それで解決できひんかったら、さらに上から殴りつけて解決する……そんな脳筋思考で、よう科学者名乗れたなアンタ！ 純粋な火力が駄目やったら、もっと別のアプローチを搜すとか、そういうんが……あんたの役目とちゃうんか!!」

「……」

「科学ってのは……力を得るためのもんやない……人間の科学は！ 人間を幸せにするためにあるやって……そう教えてくれたんは……」

「ソガ隊員……」

「ただひたすらに威力ばかり追い求めて、もう星も破壊できるのに、これ以上何を望むんですか？ 今度は銀河ですか？ 宇宙を破壊しますか？ そんな意味の無い視野狭窄じゃなくて……もっと別の選択肢を用意するための科学じゃないですか……人間の可能性を広げる事こそが！ 科学の役目だったんじゃないんですか!! あんたがやろうとしていることは……人類の未来を狭める事だって、どうして気付かないんですか……ッ！」

セガワの恰幅の良い体に縋りつき、力なくへたりこんだソガからは、小さな嗚咽が漏れ聞こえてくる。

彼が感情のままに言い放った暴言の数々は、途中から涙声で震えてしまっていた。

うずくまる青年に対して、セガワはただ一言、すまない、と呟いた。

「……君の言う通りだ。私は……私は忘れていた……科学がこういうものであったかを……」

「委員長……」

「私が……全て間違っていた……どうしても、この計画が過ちであったのだと認めたくなくて……マエノ君！」

「は、はい！」

「観測艇からの情報に何かヒントがあるかもしれない……超兵器を使わずに、あの怪獣を攻略するヒントが！」

「セガワさん……」

羞恥に歪んだセガワの瞳は、眼鏡が白く反射して、窺い知る事は出来なかつたが……それでも、この男が地球を愛し、本気で平和について悩んでいたという事に、嘘偽りは無い筈だった。

ただいつの間にか、それを追い求める心が曇ってしまっただけだ。そして今、そ

ここには地球防衛の可能性を模索する、一人の科学者が、立っていた。

「人間の科学が、人間を幸せにするためにあるのなら……私は、きっとそれを見つける為にいるのだ……」

## 超兵器R2号 (V)

ホークが空爆によって怪獣の気を引いて、なんとか進行を押しとどめている間、作戦室ではどうにか糸口を見つけようと、二人の科学者が目を皿のようにしてデータを浚っていた。

そんな時だ、マエノリツコ女史の口から、か細く悲鳴のような啜きが漏れたのは。

「そ、そんな事って……あ……あ……あ……」

「マエノさん、どうしたんです？」

「やっぱりあたくしが……あたくしが浅はかだったんです……許して……許して下さい……皆さん！……ああ!!」

何らかの真実に気付いてしまったらしい彼女は、その場で泣き崩れてしまう。すつかり打ちひしがれた様子のマエノ女史をソガが助け起こすと、その美貌を後悔の涙でぐしゃぐしゃに歪めた博士が、ひとつのデータを見せつけた。

「マエノさん！ 一体何が分かったんです！ 泣いてる場合じゃありません！ しつかりしてください！」

「失礼、取り乱しました……見て下さいまし、これを！」

「……観測艇8号が送って来た……ギエロン星の破片データ？」

「それも、地殻やマントルに相当する、より深部にあったと思われるものです……」

「それが、一体なんだというのです？」

「この組成は、決して岩石の類ではなく、むしろ有機的な……一部のアメーバが休眠時に作り出すシスト……いわゆる殻や防御膜のような物質のそれと非常に酷似しています！」

涙を拭った博士から、衝撃の事実が告げられた。それに真っ先に反応したのはタケナカだった。彼はずつと、あの怪獣が6か月以上もの調査の間、星のどこへ潜んでいたのか引つ掛かっていたからだ。

「なんだって?! それじゃあつまり、我々がギエロン星だと思っていたのは……」

「はい、あの生物の作り出した殻の上に、周囲を漂っていた岩石が付着しただけの……言わば、星そのものが、ひとつの生命だったんです! あそこで暴れている、あの怪獣こそが! きつとギエロン星本来の姿だったのですわ!」

「ギエロン星獣……」

「あの生物は、宇宙の片隅で、ただすやすやと眠っていただけだったのに……愚かにもあたくし達人類が、わざわざ彼の揺り籠を破壊して、その安寧とした眠りから叩き起こしてしまっただけです! あたくし達が……ごめんなさい……ごめんなさい……!」



再び涙を流して項垂れるマエノ博士。その仮説は、作戦室の面々からしてみれば、十分に驚愕の極みであったが……それを見つめるソガにしてみれば、大した感慨を引き起こすものではなんら無かった。

その顔にはありありと『そんな情報が今更なんになるといふのか?』という感情が浮かんでいたが、辛うじてそれを口にする事を踏みとどまった。十分に打ちのめされているであろう彼女に、さらなる追い打ちをかけるのは、配慮に欠ける彼をして、流石に憚られたからである。それほどまでに、マエノ博士の取り乱し様は痛々しいものだった。(だが……アメーバ? なるほどな、確かに原作でも、飛び散った黄色い液体が寄り集まって再生してた……怪獣の体はあくまで硬い入れ物であって、中身のあれが本体というわけか……)

ソガは未だに、昨夜の時点でギエロン星獣が復活しなかったという点が腑に落ちていなかった。あれさえなければ、こうまで迷惑をずらされる事もなかっただろうに……まさか死んだふり? だが、あれほどに怒り狂ったギエロン星獣がそんなに悠長な手を使うだろうか……?

疑問と共に、画面上の戦闘を観察するソガ。後退した地上班が、望遠レンズで撮影し続けているリアルタイムの戦闘記録は、どこか懐かしい気分にさせる。

まるで、ウルトラセブンの本編を見ているような……

だが、その光景に感じる微かな違和感。

なぜだろう……心なしか迫力に欠け、色味も少し足りないような……

その時ふと、彼の脳裏に、昨日の同僚の言葉が過ぎった。

『本当は。パトロールの帰りに、花を摘んでくるつもりだったんですけど、まだ全然咲いてなくて……』

そんなはずはない、だってギエロン星獣とセブンの戦いは、その悲惨さとはまるで正反対な程に、賑やかなBGMをバックに、一面の黄色く美しい花畑の中で、皮肉な程に幻想的な……

『ポール星人の挑戦から、まだ一週間も経ってないじゃないか』

ソガは、見つめる画面の中に占める黄色の割合が、怪獣の吐く死の灰だけであり、それを吐き出す彼もまた、記憶の中よりも随分と大人しいのだという事に、はじめて気付いた。

「……そうか！ 温度だ！」

ソガの発した言葉が、奇しくも、隣のセガワ博士と被る。

「隊長！ 冷凍弾はありませんか！ 降雨弾でもいいです！」

「火災鎮火用に数発はあるはずだが……」

「私からも提案しよう。キリヤマ隊長、是非使ってみて下さい。あの怪獣が、灼熱のギエ

ロン星そのものだと言うのなら、低温環境に対応できない可能性が高い！」

「……やってみましょう！」

1号から発射された人工雲が、ざあざあと怪獣の躰を濡らし、3号の冷凍弾が怪獣表面を一気に凍結させた！

薄い氷は、怪獣の身震いで容易く割砕かれてしまうが、その動きは、先程よりも格段に鈍い！

「やはり……例え我々の常識外の生態をしているとしても、それが生物である限り、適した温度環境というのはどうしても存在する……まして、もともと恒星近くを公転していたと言うならば、地球の気温ですらも、彼にとつてみれば真冬の極寒と変わらないだろう。一週間前の、この基地のような！」

なるほど、夜中に再生しなかったのは……しなかったのではなく、出来なかったんだ。原作では雪解けも済んで、温かい春先の出来事だったから、夜であっても辛うじて再生できたけど……この世界では実験があまりにも早く起きてしまったから、日が昇るまでは活動できなかつたんだ！

確かに、原作でもこの世界でも、夜間のギエロン星獣の動きは大人しい。まさか、こいつがセブンよりも寒がりだったとはな……

「し、しかし。それほどまでに熱量が必要だというのなら。なぜあの怪獣は一番近い恒

星や他の惑星を無視してわざわざ地球へ……？ 復讐の為に？ それほどの知能があるというのですか？ それに、宇宙は地球なんかよりずっと極寒です！」

アマギの疑問に対して、セガワ博士は沈痛な面持ちで、絞り出すように答えた。

「……放射能だよ」

「え？」

「あの怪獣は、放射能を食って、その再生力を得ているに違いない。宇宙で体の表面が凍り付いても、さらに無数に降り注ぐ太陽風から放射能を吸収して、常に再生しながら飛行していたんだ！」

「そんな力技で!?!」

アマギが呆れかえるが、セガワ博士が真に痛恨であったのはその次の仮説であった。

「いきなり宇宙空間に放り出されて、生存に放射能の吸収が急務となった怪獣は、少しでもその燃料が豊富な空間を辿り、飛び続けた……通常、宇宙空間に偏在する放射線量に大きく差が無いと仮定すれば、彼の飛び出した空間にはたった一筋だけ、残存放射能が異様に濃いラインがあつたはずだ……」

「……まさかッ！ R1号の軌跡!?!」

「我々の超兵器が……彼をこの星へ招待したのだ……あの怪獣に知能があらうと無からうと、宇宙にギエロン星獣が生まれた以上、あれが地球に降り立ったのは必然でしかな

い……」

「そんな……」

彼らのやり取りを背に、作戦室を後にしようとするソガ。

「ソガ隊員！ どこへ行くの？」

「2号に冷凍弾を満載して、奴を氷漬けにできないか試すのさ。隊長達の機体には、元々そんなに積んであるわけじゃない」

「でもまだ本調子じゃ……」

「……あの怪獣は！ あの怪獣だけは、人類が落とし前をつけなきゃならないんだ。このまま手をこまねいていたら、今にセブンが出てきて、きつとあの怪獣を倒してしまうだろう……彼にそんな事をさせる訳にはいかないんだよ！」

「なぜ？ セブンだって私達の仲間じゃないの？」

「でも彼は宇宙人だ。今回の事件は、完全に人類の落ち度なんだぞ……？ 俺達が失敗しました、代わりになんとかしてください、で済むものか！ 自分の力でケツも拭けないような星が、彼にいったいどんな顔で仲間だと言うんだよ？ そんな事で胸をはって、堂々と彼と肩を並べられるのか？」

「ソガ隊員……」

「ギエロン星獣だけは、セブンに頼らず、地球の力だけで倒さなきゃいけない。それが、

取り返しのつかない事をした俺達が、唯一できる贖罪なんだよ。それができなきゃ、宇宙に向かって、なんて言い訳するってんだ！」

## 超兵器R2号 (VI)

ソガの出で行った作戦室で、セガワ博士が電子計算機に何かの数式を入力していた。次々と結果が弾きだされていく。

「セガワ委員長、それは？」

「はい参謀……計算をしております……あの怪獣の全身を一気に凍結するためには、どうすればいいのかを……」

「一気に凍結……？」

「そうです。どれだけ端を凍らせたところで、その再生力を上回る速度で内部まで凍結できない限り、またいたちごっこになつてしまいます……それこそ、宇宙空間であの怪獣が置かれていた状況と何一つ変わらない……」

やがて、計算機がひとつの結論を導いた。

「やはり……」

「どうだった？」

「ホーク2号に搭載できる冷凍弾では、あの怪獣の全身を覆うのは……到底、不可能です……」

「そんな！ 間違いではありませんか！」

セガワの口から告げられた残酷な真実に、アンヌが悲痛な叫びをあげる。

せつかくのソガ隊員の覚悟が、無駄になってしまふなんて。そんな事は到底信じられない。

しかし、アンヌの冷静な部分が、電子計算機の嚴重な計算結果であるならば、容易く間違いなど起こりようがないとも納得してしまつていた。

「委員長……それに必要な冷凍弾の量は？」

「ざつと……ウルトラホーク4機分……」

「4機……」

今から隊長達を呼び戻しても、到底足りない投射量。

「……量だけは、確保できます。恐らくは」

「しかし、それを同時にぶつける手段など……今から輸送機を爆撃機に換装するのでは、間に合わない！」

そう、重要なのは、その膨大な量を、同時に叩きつけなければならぬという事。

例えウルトラホークが4機あろうと、それで解決する訳ではないのだ。

だがセガワ委員は、ハッキリと胸を張って、参謀に進言した。

「あります。今のこの基地にたった一つだけ、その手段が！」



「なに？」

「……R2号を使います」

「なんだって!？」

今度こそ、タケナカ達は仰天した。まさか、舌の根も乾かぬうちに……？

「勘違いしないで頂きたいのは、決して私が、R2号の計画に拘っているわけではないという事です。あれを、惑星破壊兵器ではなく……ただの巨大な冷凍ミサイルとして、あの怪獣に撃ちこみます。そしてそれを、あのシリーズの最期の仕事とさせて頂きたい」

「博士！ それは！」

「……いいんだ、マエノ君。彼が気付かせてくれた。……毒の花を枯らすのに、ただ根っこを焼いてしまうだけが手段ではない。二酸化炭素の固定剤をやさしく振りかけてやってもいい。一つの問題に対して、あらゆる方向から、多様な手段を採れるという事が、人類の強み、科学の意味なのだ……私は思い出したんだ……」

「セガワ博士……」

憑き物が落ちたように、決意と使命に満ちたセガワの穏やかな瞳に、マエノ女史はかつての尊敬する上司の姿を幻視した。まだ駆け出しの頃に勤めていたロケットセンターで、怪獣を宇宙に還す為に、自らの研究に必要な月ロケットを惜しげもなく提供した、敬愛する恩師。今の自分を形作ったとも言える偉大な科学者の姿が、セガワ博士の

姿にダブって見えた。

「我々には、あの怪物を産み落とした親としての責任がある。自らの失点を拭う為には、相応の代償を払わねばならない。今更勝手な事では有るが……私は、R2号を単なる通常の迎撃兵器として使い捨て、計画の終止符を打つ事で、その償いとさせて貰いたいんだ……その調整の為には、君の力が必要だマエノ君。手を貸してくれないか……？」

「……はい、喜んで！」

「参謀、いかがでしょうか？ 我々に、傲慢の汚名を雪ぐ最後のチャンスを与えては下さいませんでしょうか……？」

「……よろしい。直ちに取り掛かってくれ！」

「……そうですか、R2号を……」

「そうだ、発射準備が整うまで、あと10分……いや、7分でいい！ 時間を稼いで欲しいんだ、ソガ隊員！」

「……先程までの暴言を許してくださいセガワさん。今のあなたは……オレがかつて憧れた、まごう事無き『立派な博士』の一員だ！」

ソガの駆るホーク2号が、大きく旋回して、ギエロン星獣へと冷凍弾を撃ちこんでいく。

宇宙空間では潤沢に吸収できた放射線も、地表ではほとんどがオゾン層に遮られてしまう為に、ギエロン星獣が体を動かす為には、体内に蓄えたR1号の放射性物質を燃料として、膨大な熱量を確保しなくてはならなかった。核融合に近いエネルギーを消費する増殖再生は、ただでさえ極寒の地球環境下で効率が落ちていたところへ、冷凍弾の効果によって、原子核の活動が抑制されてしまい、思うように暴れ回る事が出来ずにいたのである。

だがついに、空中を飛び回る敵に業を煮やしたギエロン星獣は、次なる奥の手を繰り出してくるではないか！

体の前面で揃えた二枚の翼を、電極版のように利用して、体内で発生した凄まじい電圧をさらに圧縮することで、リング状の光線として発射したのだ！

地味な見た目に反し、そこに秘められた威力は凄まじく、一発でホーク1号を撃墜してしまう。なにせ、このリング光線は、セブンの右腕すら破壊してしまう恐るべき武器なのである。

ソガのホーク2号は大気圏内での旋回力の低さから、非常に大回りで怪獣を遠巻きにしなくてはならないのが幸いし、リング光線の餌食にならずに済んだが……逆に、現状

での足止め性能は、冷凍弾を満載している事を差し引いても、3機の中で最も低いと言わざるを得なかった。

元々、宇宙空間でのワープ航法による長距離高速移動と、巡航距離の長さを主眼に置かれた2号は、直接の戦闘力はどうしても低くならざるを得ず、非常に控えめなサイズの弾倉に、めいいつぱい詰め込んだ冷凍弾も、もはや枯渇寸前。本来はこういつた役回りは3号の得意とするところであり……その3号は、そろそろ燃料が切れるところであつた。

あと、もう少しなのに……

不時着したホーク1号から脱出したキリヤマ、フルハシ、ダンの3人は、なんとか地上から敵の注意を引くべく風上へと移動するが……ギエロン星獣が新たに吐き出した灰によって、分断されてしまう。フルハシの制止を振り切つて、黄色い煙幕の向こう側へ消えていくダン。

「あー！ ダン！ 無茶するな！ ダアアアン！」

「……ちくしょう……やっぱり駄目なのか……う？」

重たい操縦桿を力いっぱい引き上げるソガの眼下では、今まさにギエロン星獣が羽ばたきをはじめ、飛び立とうとする寸前だった。敵をここへ釘付けにしないといけないのに、もはや警備隊に残された戦力は、それに見合つた脅威を、怪獣へ与える事が出来な

いのだ。このままでは……

黄色い灰の渦巻く荒野で、ダンは胸元からウルトラアイを取り出し、セブンに変身しようとしてそれを正眼に構え……

(……あの怪獣は！ あの怪獣だけは、人類が落とし前をつけなきゃならないんだ。このまま手をこまねいていたら、今にセブンが出てきて、きつとあの怪獣を倒してしまうだろう……彼にそんな事をさせる訳にはいかないんだよ！)

(ギエロン星獣だけは、セブンに頼らず、地球の力だけで倒さなきゃいけない。それが、取り返しのつかない事をした俺達だ、唯一できる贖罪なんだよ……)

「どうして……どうしてそんな事を言うんです！ ソガ隊員！ 僕だつて……僕だつて、ウルトラ警備隊なんですよ……！」

……セブンは、ダンは、この時はじめて、変身して戦う事へ対し、葛藤した。

彼の戦友が決然と言い放った啖呵は、セブンとして、銀河の平和に寄与するものとして、尊重すべき崇高な意志であった。確かに、あの時はつきりと一線を引いてしまった部外者の自分が、今更のこのこ出て行って、あの哀れな怪獣を倒したところで、それは彼らから贖罪の機会を永遠に取り上げる事になってしまう。

だが、ここで敵を逃がしては、大勢の人が死ぬ。

いくら今回の事件が、人類自ら引き起こしてしまった悲劇なのだとしても、その対価として、罪の無い人々の命が無残に磨り潰されて良いという事にはならないのだ。そんな事を見逃してしまつたら……ダンは自分を永遠に許すことができないだろう……御大層な大義の為に、愛する人々を見捨てるくらいであつたら……死んだ方がマシだ。

そして二律背反の中で、彼が悩みに悩んで出した答えは……ただの屁理屈めいた言い訳を用意する事だつた。

なんて卑怯で、幼稚で……姑息な事だろう！ だがそれでも、それがセブンとして、ダンとして、今の彼が出来る精一杯の妥協と、譲歩であつたのだ。

その煌めく意地を張り通すには、今の人類は弱小に過ぎ……かといつて、その愚かさを切つて捨てるには、あまりにも、愛おし過ぎた。

「……頼んだぞー！」

ダンは、腰のケースから、緑色のカプセルを取り出して、空へ放り投げる。

猛烈な爆炎を伴つた黄金の輝きが、死の灰が舞い散る空を虹のように覆いつくした。

## 超兵器R 2号 (VII)

今まさに飛び立とうとするギエロン星獣の背中へ、金色に煌めく炎のような光線が命中し、その巨体を吹き飛ばす。

羽ばたきを邪魔された復讐鬼が、一体何事かと振り向くと、黄色い放射能の霧を引き裂いて、爬虫類とも哺乳類ともつかぬ四つん這いの化け物めいた獣が、のっそりとその姿を現した。

頭の後ろに向かつて伸びた二本角、口の端からざらりと覗く大きな犬歯。がっしりと力強い四肢で大地を踏みしめ、悠然と歩む怪獣の頭上では、先程の光線の残光が大気中の塵に反射して、まるで金色の虹を背負っているかのようだった。

『GAPYOOOOOOOOOSU!!』

低音と高音が絡み合う独特の唸り声で巨鳥を威嚇する怪獣。新たな脅威の登場は、その場にいたほぼ全ての者にとって予想外の事であった。呆然とするフルハシの隣で、驚愕の表情のまま、ぼつりと眩くキリヤマ。

「あれは……まさか、パゴス……!?!」

「隊長! あれは怪獣をご存じなのですか!?!」

「……ああ、マナベ参謀に見せて頂いた資料とそっくりだ……そうか、ギエロン星獣の吐く放射能を求めて、再び地表に現れたのか!」

「マズイ事になったぞ……」

学名パゴストータス。ウランをはじめとした放射性物質を常食する原始動物であり、幾度か地上に姿を見せた事があった。恐らく先程の光線は分子構造破壊光線だろう。ただでさえ危険なギエロン星獣がいるというのに、そこへ加えてパゴスまで! これが人類への罰だとしても言うのだろうか……?」

しかし、キリヤマ達の不安を余所に、パゴスはただひたすらにギエロン星獣目掛けて前進していく、まるで相手をするのは自分だと言わんばかりに!

今ここで、いったい何が起こっているというのだ……!?!

「パゴス! なんとかその怪獣を足止めするんだ! R2号の発射まで、何としても飛ばしてはイカン!」



荒野の中で一人、パゴスの背に向かって、ダンが叫ぶ。

そう、このパゴスは野生個体ではなく、彼の4番目の仲間なのであった!

そもそもこのパゴスこそ、セブンが地球へ降り立つ要因の一つとなった怪獣だ。あの日、大気圏外から、黄金の虹という異常気象を観測したセブンは訝しんだ。そしてその原因を探るため、一度地表へ降り立ったのである。その時たまたま、このパゴスが引き起こした地震によって、薩摩次郎が滑落していく現場に遭遇し、モロボシ・ダンが誕生したという経緯があつた。

地中で傷つきパニックとなり、地表へ飛び出して暴れる寸前だったこの個体を鎮めるため、セブンは予備に持ってきていたカプセルの中へ保護したのである。そして落ち着いたパゴスは、クール星人に追い立てられ、侵略計画に利用される寸前の所を、穩便に助けて貰った恩を返す為、彼に力を貸すことを了承したのであった。

とはいえ、彼の放つ破壊光線の威力は凄まじいの一言に尽き、あまりに危険過ぎて今まで使いどころがまったく無かつた。それこそ異次元空間や、放射能汚染区域といった、完全に隔離された拓けた場所でもなければ、敵の引き起こす被害より、彼の攻撃による二次災害へこそ、注意しなければならぬのだから。

だが、いまこの瞬間ほど、彼を仲間に取り入れていて良かったと思つた事はない。元々がウランを主食とする彼にとって、R1号の放射したラドンも同じくウラン系列に

属する……言わばデザートのようなもの。死の灰が充満する、生命にとって地獄のような環境も、食べ放題のバイキングと変わらない。なんなら普段より力を発揮できる状況だ。

そして何より……彼だけは真正正銘、地球で生まれ、地球で育った生き物だ。その点にこそ、この戦いにおいて最大の意味がある。

ギエロン星獣の復讐は、ある種正当なものであり、身勝手に故郷を追われた生物が、人類にその反撃をしたとしても、余人がそれを邪魔立てする権利など、本来はない。

だが、彼の撒き散らす放射能の灰は、その対象者である人類だけでなく、地球に住まうほとんどの動植物にとっても有害だ。そこに存在する、全ての生きとし生ける者を、無差別に、そしてすべからず平等に殺してしまう！

人類にも、R1号の事について何も知らない人々だっている。いや、その割合の方がずっと多いはずだ。今回の事件に対しなんら罪の無いそれらの命までも奪おうとしてしまった時点で、ギエロン星獣もまた、同罪だ。

もはや、人類と星獣の争いではなく……地球と、ギエロン星の問題になってしまったのだ。

であるならば……地球出身の彼<sup>バグス</sup>だけは、この戦いに介入する資格を、最低限有しているはず。部外者ではなく当事者として、そこへ立つ権利と条件を満たしているのだ、こ

の古代生物は！

ソガが、地球の力だけで倒さなければいけないと言うのなら、ダンは、地底怪獣だって地球の一員だと突っぱねる事にしたのだ。

それがこじつけの、単なる揚げ足取りでしかない事は、ダンにも分かっている。本能のまま暴れ回る怪獣を、好きなタイミングで、理性的に戦わせるなど、ウルトラセブンにしか出来ない事だ。だがそれでも、その助力すらも認められないというならば……あの時に一步引いてしまった自分は、どのように罪滅ぼしすれば良いと言うのだ。贖罪の機会を取り上げないで欲しいと願っているのは、人類だけではないのだから……

『GAPYOOOOOOOOOOSSU!!』

『タツケテエエエエ！』

ギエロン星獣のリング光線が、パゴスに向けて発射される。対する巨獣は、亀の甲羅のように固い背中のお骨板で、それを弾き返しながら、被弾をものともせず突撃するではないか。パゴスの動きは非常に鈍重であったが、それを補って余りある重装甲と高火力で武装していた。

カプセル怪獣の中で、前衛を張るミクラスとパゴスは、両者共にまさしく重戦車と評するに相応しいパワーファイターであったが、ミクラスがチャリオットなら、パゴスはタンクだ！

一歩一歩着実に接近したパゴスが首を伸ばし、巨鳥の翼に牙をたてる。すると生物同士のぶつかり合いとは思えぬ程に硬質な金属音が響き渡った。ギエロン星獣の翼は、見た目の通りの刃物なのだ！ のろまな鈍亀を嘲笑うかのように、ギエロン星獣が刀の鑢のように鋭い翼の角度を調整し、太陽光を反射してパゴスの目を至近距離から灼いていく。

これにはたまらず怯むパゴス。首を竦めた骨董品に向け、ギエロンは追撃とばかりに死の灰を噴射した。黄色い霧が、巨亀の姿を覆い隠してしまう。

『タツケテエエエエッ！』

勝利を確信し、喉も裂けよと雄叫びを上げるギエロン星獣。……だが、霧の向こうで、何かが、バチバチと不穏な音を立てて、黄金に光り輝いていく……それなんだ？ この掃除機のような、いやもはやジェット機のような轟音は？

それは、パゴスが猛烈な肺活量で、周囲の灰を吸い込んでいく呼吸音だった。大気中や地表から、すっかり黄色が消え失せ、ハッキリと露になった古代獣の額には、電光を纏った金色の螺旋が、死神を穿たんと鋭く渦を巻いていた。分子構造破壊光線をドリルのように収束して、パゴスは自身が持つ最大威力の武器、分子螺旋掘削光線を解き放つた！

『GAPYOOOOOOOOOSU!!』

光の円錐が、大気中を掘り進み、ギエロン星獣の右翼を、根元から分断する！

もともとがアメーバ集合体のような、流体状の原生生物であったギエロン星獣の肉体は、衝撃や爆圧といった瞬間的な外力に対しては、表面がまるでダイラタンシーのように硬化し、悍ましいくらいに耐久性を発揮する。例えばバラバラの肉塊になったとしても、その硬化した表面がカサブタのように働いて、一定以下の質量へ分散することを防ぎ、時間が経てばやがて寄り集まり、また一つの生命のようにふるまう事が出来た。

しかし、全ての攻撃に対して無敵という訳では無く、ゆつくりと恒常的に力が加わり続けるような……例えば引きちぎるといった方法に対しては脆弱性を露呈してしまい、また損傷面が保護されずに、本体であるアメーバが流出してしまうという弱点があった。

ましてや、物理的な衝撃力でなく、分子構造そのものを崩壊させて破壊してしまうパゴスの光線に対しては、流石に無力と言わざるを得ない。

傷口から血飛沫のように噴き出したアメーバが、地球のあまりに冷たい気温に耐えきれず、瞬時に白く結晶化し、まるで雪か羽毛のように固まって、風に舞い上げられていく。その様は、実状とはまるで正反対の美しさを醸し出し……場違いな程に耽美で、幻想的でしたらあった。

『タ……ケテ……ッ！』

ホーク2号から発射され続けていた降雨弾が、ギエロンの体力を奪っていく。

人工雨の雫が、星獣の血走った眼から滴り落ちて、灰を溶かしこんだ黄色い川へと混ざる時、その水面に1本の矢が映りこんだ。

ついに超兵器R2号が、人類の懺悔と祈りを込めて、痛みを苦しむ哀れな犠牲者に、再びの眠りを齎すために飛来したのだ。

怪獣の胸に突き刺さった破魔矢が、その燃え上がる怒りを鎮める為に作動する。白と銀の輝きが、水蒸気のベールを吐き出して、ギエロン星獣をすっぽりと覆いつくした。

一陣の風によって、煙のカーテンがサツと引かれた時、二体の怪獣はどこにもおらずそこにはただ、冷たい死の抱擁を受け入れた、悲しい氷の彫刻がひとつ鎮座しているだけだった。

「……………やった……………やったぞーッ!!」

「あの怪獣を倒したんだ……………! 我々の手で……………!」

喜びを爆発させる現地の隊員や作戦室の面々。

それを通信で聞きながら、ダンは手元のカプセルを何度も何度も労った。

「よくやった……………ありがとう、パゴス」

ただでさえ多大なエネルギーを消費するパゴスのカプセルは、直前にあれだけ灰を食べたにも関わらず、残量がほぼゼロに等しくなっていた。これが満タンになるのは、いったいいつになるのだろうか。その時には……地球は平和になっているのだろうか……？

ダンの頭上で、ホーク2号がエンジン音を響かせて飛んでいく。今あの機体の中で、彼はどんな顔をしているんだろう……

---

基地に併設された、ロケット発射場の傍に、その碑文はある。

【人類の浅慮と科学の傲慢のために死んだ犠牲者の魂 ここに眠る】

ソガは石碑を見下ろしながら、懺悔の言葉を口にした。

「許してくれ……人類の平和のため、やむなくお前を殺したんだ。オレを許してくれ……」

全ての生命を脅かす、悍ましい外敵を撃退したというのに、その顔は暗い。

それは、あの悲劇を止められたかもしれないのに、叶わなかったという後悔からだ。

彼がいくら、その先の展開を全て知っていると見えど……やはり一人の人間でしか無

かった。

だが、それでも思わざるを得ないのだ、たればに縋る弱い生き物。それが人間だ。(……オレは、絶対にR1号の実験を阻止するつもりだった……本当にウルトラセブンを愛していたのなら……彼を助けるといふ目的のために……それができたのはオレだけだったのに……)

その時、ソガの見つめる碑文に、影が差した。顔を上げると、これまた複雑そうな表情の同僚が立っている。

「ソガ隊員も、ここへ来ていたんですね」

「まあ、な……ちよつとばかし、自分の無力さを再確認していたところさ……お前は？」  
「彼に……これをもと……」

そう言うと、ダンを持つていた一本の枯れ枝を、そつと墓標へ手向けた。

「……なるほど、アイツは来た時期が悪かったなあ……」

「この辺りが花畑になるのももう少し後になりますから……彼が地球の美しさを知るまでは、これで我慢して貰うしかありません」

「……なあ、ダン。平和つてのは……その優曇華の華みたいなものだとは思わねえか？」  
「うどんげの？」

興味深そうに振り返ったダンの瞳に促され、ソガはまるで愚痴を吐くかのように続け



た。

「それが美しいものであると、みんなが知っているのに……実物は誰も見たことが無い。それがあってのはいつも御伽噺の中だけで……ようやく見つけたと思つたら、実態はまったく別の物だった……どうだ、そっくりだろう？ ……その花を、人類は何時になつたら見られるのかねえ……！」

拾い上げた小石を、鬱憤を晴らすように無造作に放り捨てるソガ。

だが、別に質問でもなんでも無いその弱音に、生真面目に応えてしまうのが、モロボシ・ダンという青年であつた。

「……凶鑑を広げて……まずは知ろうとする事ですよ」

「知る……？」

「そうです。それがどんな物であるか……または、何がそれと違うのか。知っていないくは探せはしません。僕のように、花だと思つて卵を捜してしまふかもしれない……地球防衛だつてそうじゃありませんか。他の惑星と友達になるにしても、怪獣を倒すにしても、まずは相手がどんな存在で、何を思っているのか……それを知らなければ、握手する事も、頬を張ることも出来やしない。違いますか？」

「それが宇宙のどこにも無いって事を知つてしまつたら、どうする？ 絵にかいた餅なんじゃないか？」

「別にいいじゃありませんか。本当に大事なものは、相手を理解しようという気持ち。平和を望む心なんです。相手に歩み寄る事こそが、平和へ一歩踏み出すことなんです……そうではなくては、そこで立ち止まってしまう……」

「走るなど言ったり、止まるなど言ったり……忙しい奴だなあ、おい」

「ははは、確かに！」

そんな軽口で、ようやく笑顔が戻ってきた二人。

どちらともなく、慰霊碑を後にするため、基地の方へ歩き出す。

「平和を望む心、か……まるで虹の卵だな」

「え？ 虹の卵？」

「いや、こつちの話さ……」

「そう言わず、教えてくださいよ、今度は何の虫なんです？」

「そう言われてもな……お前が見たっていう花が、何の花か分かったっただけさ」

「え、本当ですか!？」

「ああ多分な、でも、残念ながら……植物園に行っても見れんだろうなあ……」

「そうなんですか……」

むしろ図鑑を開いた方が早いかもしれんぞと言ったソガは、ふと立ち止まると、振り返って一言だけ呟いた。

「それより先に、優曇華の華に咲いて貰いたいね、オレは」

## 再防御作戦（Ⅰ）

作戦室に入ってきたソガが、きよろきよろと周囲を見渡す。

「どうやら誰かを探しているらしい。」

「……あれ？ アマギは？」

「ここにはいないわ。なんだか最近、ラボに籠りつきりだそうよ」

「ふーん、そうか。研究に行き詰ってんのかな」

「ええ……ちよつと元気がなさそうなの。ソガ隊員、差し入れがてら、様子を見てきてあげてくれない？」

「オツケー、まったく世話が焼ける奴だ」

もうそろそろスパイナーを運ばなきゃならんって言うのに、こんなところで倒れられちゃかなわんからな。

コーヒーとチョコレート缶を持って行ってやろう。

ああなんて素晴らしい先輩だろうか。

彼の個人ラボに辿り着くと、暗い室内で、小さな電灯を頼りに何かをいじくり回しているアマギがいた。

いつもは齧りつくように凶面を引いている割に、今日はなんだかぼんやりしているよ  
うだ……アンヌの言う通り、普段と様子が違うぞ？ どうした、宇宙人と入れ替わつて  
るのか？

「ようアマギ、差し入れだ！ 糖分足りてないんじゃないか？ ……ご苦労さん」  
「……………」

「おいおい、元気が無いな。」

……………ははーん、成程。

「なんだ？ この前の新兵器エイトの出来栄えが、そんなに不満か？」

「……………ああそうだ、せっかくアンヌが危険を顧みず罔になって、あの宇宙人を誘い出して  
くれたのに……僕のエイト連装砲は、数基がかりで溪谷に集中砲火しても、奴に傷ひと  
つ付けられなかった……失敗作だよあれは……」

「おいおい、いくら威力があっても精神体に効果がないのは当たり前だろ？ 幽霊みた  
いな奴とは相性が悪かっただけじゃないか」

いやほんと、あれは相手が悪かった。

「いやそれだけじゃない……この前のアレだって……」

「あー……あれはなんとというか、ダンがロボットに過剰反応しすぎなんだと思うぜ？

奴はあの手のに、いい顔はせんだろ……気にすんなよ！」

「そうかな……」

確かについこの間お披露目した作品も、あんまり評価されなかったというか……：ダンが珍しく批判的だった。それを気にしているのか？

あれはアイツの個人的なトラウマによるものだから、気にしなくていいのに……

「……ソガ、君は何も感じないか？」

「何を？」

「仕事の事さ！ 我々ウルトラ警備隊がどんなに頑張っても……セブンさえいればいいんじゃないか……？」

「ブフオツ!! ゲホツ! ゲホツ!!」

思わず飲みかけていたコーヒを吹き出してしまったところだった。

「オイオイ、こりやそうとう重症だな……どうしてこう、頭脳担当はどいつもこいつもナイーブな奴ばっかりなんだ！」

「僕がどんな新兵器を作っても、たいてい役にたたんじゃないか！」

「馬鹿いうなよ……ウルトラガンが何人の侵略者を撃退してきたと思ってるんだ……これを作ったのは、確かお前なんだろう？ すげえじゃねえか！」

そう、オレもびつくりしたが、なんと防衛軍の全隊員が携行しているウルトラガン。これの設計案は、もともとアマギが提出したものらしい。その功績と頭脳を買われて、

警備隊入りしたのだ、この男は。

「だがそれも……再現しようとしたマルス133の数%程度の出力しかない……到底あの人には敵わないんだ、僕は……」

「そりゃあ仕方ない。マルスはレーザーの発振器に、なんとかっていう青い鉱石が必要なんだろう？ 拾えた破片が二つだけだったから、二丁しかないって聞いたぞ？」

「そうだ」

「じゃあやつぱり、特別な素材もなしに量産できるコイツの方がよっぽど凄いや！ 1

33回打てばマルスと変わらんぜ」

「……」

それでも顔が晴れないアマギ。こりや根深いな。

次の戦闘でセブン来てくれとか叫び出さなきゃいいが……

「……あの時、見たんだ僕は」

「何を？」

アマギは何かを言うべきか否か逡巡しているようだったが、やがて俺の顔を一瞥すると、耐えかねたようにぽつりと漏らした。

「R2号の冷気の向こうで、あのパゴスが消えるところをさ……あれは……ウインダムとかいうロボット怪獣の消え方とよく似ていた……」

「あー……」

「隊長や参謀たち上層部は、あのパゴスをたまたま現れた野生の怪獣だと思って……いや、あえて分かっていないフリをしているのかも知れんが……間違いなく、セブンの仲間だよあれは……」

「そうか、あの時アマギはホーク3号に乗っていたから、上空からパゴスの出現と消失の瞬間を見ていたのか……彼の観察眼なら、カプセル怪獣の共通点を見抜くのは容易いだろうな。」

「我々は結局、ウルトラセブンに事態を収束して貰ったんだ、愚かな失敗の後始末を……僕たちが余計な事をしなければ、あんな悲劇は起きずに済んだんだ……違うかい？」

「あの時だけだ。あの失敗をバネにして、次に活かせばいいんだよ！」

「僕は、新兵器を開発することが、平和への道だと思っていた……けどそれは……違ったんだ……地球防衛軍なんていらんやないか……？」

いじっていたパーツをそう言って放り出してしまふアマギ。だが、それは違うぞ！

「おいおい、地球防衛軍が居なかったら、キングジョーはどうなってたんだ？ アイアンロックスやガンダーだってそうさ！ それにあの時、俺達がアイロス星人の目にSMJ弾を撃ちこまなかったら、セブンは奴にやられてたかも知れない。持ちつ持たれつだよ！」



「そうかな……僕はウルトラセブンさえいれば、充分だと思うんだ……」

……やれやれ、言葉だけじゃ足りないようだ。

R1号の事はアマギにとって相当にシヨックだったらしい。

警備隊も、この世界じゃ原作よりずいぶん頑張ってるんだけどなあ……むしろそのせいもあるのか。

セブンが居なくても大丈夫なようにと、どんどん兵器を開発してきた結果があれだったから、今までの反動で心がポツキリ折れてしまったと……

さてどうしたものか……

そんな時、ビデオシーバーに着信が。

こんな時になんだよまつたく……

「大変だ、ソガー！ 旭沼に女が倒れていると通報があつたんだが……どうやらお前の後輩の婚約者らしいぞ！」

……あ、そうだった……今日は通信員のノガワが、フィアンセを連れて長期休暇の挨拶に来るんだつた……

ツ。というか、そのためにアマギを探してたのに……今回は役に立ちそうもないなコイツ。

捕まえた地球防衛軍の隊員を、サイボーグへ改造して工作員にするというのが、ボー

グ星人の策略だ。

せつかく先手が取れるかと思ってたのに……アテが外れたな……

しょうがない、アマギを励ますのは後回しにして、今はボーグ星人の相手だ！

ノガワ隊員の搜索は、何の手がかりも発見できないまま打ち切られたが、その後、アサヒ沼を含めた第33地区をはじめ、その他の地区にも何ら変わった事件は起こらなかった。

そしてノガワはMIAとして処理される事となる寸前……ひよっこりと基地へ姿を現したのだ。

「ノガワ！ 貴様、心配かけやがって、どこほつつき歩いてたんだ……」

どこか芝居がかったソガを無感動な顔で眺めるノガワ。

「婚約者を放りばなしで何をしてるんだ、防衛隊員の風上にも置けない奴だな……！」

「まあまあ、待て……。とにかく無事に帰ってきたんだ……」

沼に車ごと転落して死んだと思った後輩が、無事に帰って来た興奮からか、不自然な程に嬉しがるソガを、キリヤマが宥める。

「ノガワ君、今日はゆっくり休みたまえ」

隊長の気遣いに、無言で一礼して退室するノガワ。

普段とはまるで違う、どこか無機質な彼の様子を見て、ダンは訝しむ。

（あいつ……まるで死人のようだ……）

周囲はそれを、事故による一時的な精神性ショックのせいだと思っっているらしい。

「チクショー、思いきりとちめてやろうと思つたのに……奴を部屋に案内してきます」

「一眠りしてから、気の済むまで締め上げてやるんだな」

「もちろんですよ！」

「ハツハツハツハ」

「……ちよつと、見てきます」

「待てよダン！」

病み上がりの後輩が心配なのか、ソガがお人よしを發揮してついでに行つたが、胸騒ぎのしたダンは二人の後を追つた。

すると……

「ウツツツ……」

保安室の中へ二人が消えたと思つたら、ソガのくぐもつた悲鳴が聞こえてくるではないか！

慌てて飛び込んだダンが見たのは、床に倒れ伏す保安部員達とソガ。

「ソガ隊員！ 何があつたんです！」

ウルトラガンンを抜いたソガは、腹部を抑えて失神していた。ソガの早撃ちよりも素早い攻撃とは……

そしてその他四人の保安部員も、辛うじて死んではいないものの、腕が折れたり重傷だ。そしてその誰もが一撃の下に昏倒させられていた。

ダンが目を離して、僅か一分にも満たない間に、五人の精鋭を叩き伏せたのか！

基地に警報が鳴り響く!!

「隊長、ノガワ隊員を探してください。様子がおかしいんです！」

集まった警備隊が、ノガワを搜索するも、途中で見失つてしまう。

ダンの透視もまるで役に立たない。なんと高度な光学迷彩だろうか！

彼らがノガワを再び見つけたのは、周波復調室。

「あつ、あそこだ……」

「様子がおかしいな……」

「何か、仕掛けているようです」

「隊長、僕が見てきます」

変電装置に小型の円形物体を仕掛けているノガワの前に、立ちはだかるダン。

しかし、ダンに見咎められたというのに、男は余裕を崩さない

「ノガワ隊員！」

「……フツフツフツ……騒ぐのは止めたまえ。午前6時、この基地が、勤務交代の隊員でいっぱいになるときが、地球防衛基地の最期なのだ。地球はあと数時間で、我々ボーグ星人のものになるのだ！」

「なにッ！」

血相を変えたダンが、素早く組み付こうとするが、それをまるで赤子の手を捻るように軽くないなしたノガワ。

それどころか、隊でもフルハシとトップを競う格闘の実力者であるダンを、簡単に締め上げて、機械に押し付けると、真っ向から叩きのめしてしまおうではないか！

とても人体から発せられるとは思えぬ程に、重く硬質な打撃音を響かせて、さながらデンプシロールのように、両の拳でダンの顔面を散々に殴りつけるノガワ。ハンマーで殴りつけられたかのような衝撃が、ダンの脳を揺さぶった。

「ふたりともやめろ！ やめないか！」

「ぐっ……デヤッ！ デュ！ ジュオッ！」

キリヤマがマイクで叫んだ制止もまったく意に介さず、今度はダンも本気で殴りかかった！ それこそ、人間態時に出せるフルパワー、つまり、通常の間人では内臓が破

裂してもおかしくはない威力のダイナマントパンチが炸裂する！

ところが、帰ってきたのは、まるで岩か鋼を殴ったかのような手ごたえだけで、ノガワは涼しい顔でビクともしない。明らかに人間離れた相手に、ダンは半ばウルトラセブンとしての戦い方、つまり、怪獣を本気で殺すつもりでかかったにも関わらず、この人間の皮を被った化け物にまったく歯が立たないという事実で戦慄した。

「ダアー!?!」

片手であえなく投げ飛ばされてしまうダン。

そうしてダウン寸前の彼の首を、ぐぐつと力任せに持ち上げるノガワ。

いかん！ このままではダンが撲殺されてしまう！

「仕方がない……ショックガンでノガワを！」

「あの揉み合う二人にですか!?! ダンを傷つけずにそんな芸当が出来るのは、ソガくらいですよ……!」

「くっ……」

肝心な時にいない射撃の名手の顔が、焦る隊員達の脳裏に浮かぶ。

しかし、そこでアマギは思い至ったのだ、ここが何の部屋であるかを。

そうだ……ここならアレが待機状態で置いてある！

あのバカが強請った玩具を充電していたのは、この部屋だ!!

「頼む！ ダンを助けてくれ……！」

慌てたアマギが祈るように、何かの起動スイッチを押した。

「う、ううっ……」

くらくらと焦点の定まらないダンの目の前で、ノガワの拳が高々と振りあがる。まるで撃鉄のように……

そしてそのハンマーが振り下ろされようとした瞬間。

「グワーツー！」

突然、ノガワの右手に光弾が命中し、弾かれたように痙攣する。

いったい何事かと二人が視線を向けると……

「ソ。コ。ノ。フ。タ。リ。ト。マ。リ。ナ。サ。イ。」

朦朧とするダンの視界には、ピーピーと甲高い電子音でかなり立てる銀色の機人が、丸太のように太い腕を振り回しながら、どしんどしんと重たい足音を響かせて、こちら

へ向かって来るのが見えた。



## 再防衛作戦（Ⅱ）

遡る事、数カ月前……作戦室にて。

「なんだ、もう次の作品が出来たのか？」

「えらく早いな……随分と、はりきってるじゃねえか」

「まあね。……とはいえ、今回は、かねてより考案していたリバイバル品ですがね」

ついこの間、新型爆弾を発表したばかりのアマギが、またしても新兵器をひっさげて説明会を開いていた。

「これぞ、800mmシンクロトロン連装砲です！」

「お前が言ってた、なんちやらエイトの量産品って奴か？」

「スパークエイト、ね」

「そう、一発一発が、怪獣の体組織を原子崩壊させてしまう程の火力を秘めた、あの兵器を再現するべく、スペシウムから抽出したエネルギーを、粒子加速器によつて7テラボルトまで……」

「分かった分かった。とにかくすげえ威力なんだろう？」

「……まあ、そうです」

頭痛がしそうなフルハシに、慌てて解説を遮られたアマギは、非常に不服そうだったが、そのまま次の解説へと移る。

「前回発表した磁力吸着式MS投下爆弾は、爆破指向面を対象に接着しなくては、充分に發揮できなかったMS爆弾の威力を、磁力吸着式にすることで、投下兵器に転用できました。しかし、磁力を利用しては、キングジョーのようなU-TOM兵器や、停泊中の大型UFOに対しては有効ですが、有機生命体には適しているとは言えません」

「……はあ」

講義を聞いているフルハシとソガが、目を瞬かせたり、頭を振って、なんとか眠気を飛ばそうと努力していたが、それを知ってか知らずか、ますますアマギの口は一層滑りをよくしていく。

「それを、この800mmシンクロトロン連装砲は磁力吸着式MS爆弾の欠点を……」

「なあ……分かった！ 名前を付けよう！」

「……はい？」

ついに我慢できなくなったフルハシが、唐突に切り込んだ。

いきなりの提案に首を傾げる面々。

「俺の頭じゃあ、これ以上はもう覚えられん！ もっと分かりやすい名前にしてくれや

！」

「そりゃあいい！」

「ようし……アマギが作った七つ目の新兵器、磁石爆弾という事で……MS爆弾改め、マグネチックセブン！ どうだい！ セブンにあやかって強そうだろう？」

「先輩……天才ですね！ じゃあこっちはエイト連装砲！ シンプルイズベスト！」

「勝手にしてくれ……」

フルハシとソガのノリについて行けず、呆れたアマギが訂正を放棄したために、彼の怒濤のような解説が一旦止まった。

するとその隙に、アンヌが先ほどから気になっていた疑問をぶつける。

「ねえ、そこに立っているロボットって、あの時の……」

「ん？ ああそうさ。地下から持ち帰ったU-TOMだよ」

「やっぱり……それがどうして？」

「ああ、改造したんだ」

「ええっ!？」

驚くメンバーを尻目に、次の作品を説明し始めるアマギ。

「メイン回路が焼き切れていたから、解析しても確な情報が得られなかったんで、適当に転がしていたんだが……そこのバカがさ」

「だって、ボディは丸々無事なんだから、勿体ないだろ！」

「とまあ、こんな調子に五月蠅かったんでね。折よくワイルド星との捕虜交換で手に入れた技術に、電子頭脳に関するモノがあったから、試験的に搭載してみたんだ」

「へえ……でもよ、こんなブリキ缶にどんな仕事させるんだ？ 荷物持ちか？」

「元々がどうやら警備用みたいでしたから、そのまま基地内の巡回警備でも、と」

ふうん、と興味なさげに頷くフルハシ。彼は目の前のロボットが地下基地で動いているのを見たことが無いために、いまいち想像がつかないらしい。

対して、今度は興味深そうにキリヤマが質問した。

「アマギ、この動力はどうなっている？」

「は、それが相当に単純化されていたようで……バッテリー式になります。基地の変圧器なら、充分に対応可能でした」

「それは僥倖だ。で、稼働時間は？」

「およそ30分、全力稼働時間は10分程でしょうか」

「うむ……10分か……」

無念そうに唸るキリヤマ。彼としては、この兵器を前線に投入できれば、隊員の死傷率を少しでも下げられると期待したのだが、なかなかそうもいかないらしい。

「定期的な充電が必要になりますから、今のところは、どうしても基地内での運用になりますね」

「なんでい、ロボットのくせに体力のねえやつ……」

「ヨ。ロ。シ。ク。オ。ネ。カ。イ。シ。マ。ス。」

「うわっ！　なんか喋ったぞコイツ!？」

ロボットが突然、電子音と共に発光したため、フルハシが慌てて飛び退く。

「ええ、何らかの言語パターンを発しているようなんですが……時代も星系もまるきり別ですから……その上、どうやら圧縮言語混じりだから、始末が悪い。目下、人工声帯を開発中です」

「言葉も分からないんじや、警備の意味があるのか……?」

「確かにちよつとでも人手は欲しいけれど……この子で大丈夫かしら?」

「まあまあ先輩もアンヌも……そのうちアップグレードするんだろ、な?」

「……つまり、コレをさらに改良するんですか?」

今まで黙って聞いていたダンが、ようやく発言する。

その顔は苦虫をかみつぶしたようで、R1号の時ほどではないにせよ、彼がこの鉄塊を歓迎していないのは明らかだった。

「敵の兵器だったのに……それを基地の中で歩かせるなんて……暴走して反逆でもしたら、どうするんです?」

「その可能性は低い……と言いたいが、より安心させるなら、彼の弱点は俺達全員が既に

知っているという事さ。ほら、この頭部の発光器。ここが制御系の中枢と直結したままにしてあるんだ」

「コイツは素早くともなんともないし、遠距離戦では致死性も無い。こんな見え見えの弱点なんか、知ってさえいれば俺でなくとも、防衛軍の一般隊員ならすぐに撃ちぬけるという寸法よ」

アマギとソガは、構造的な欠陥をあえて残す事で、万一の際も鎮圧が簡易と主張する。それを聞かされた面々は、それなら警備員としても頼りない事この上ないとも思ったが……言わないで置いた。

なぜならダンが、それ以上に批判的だったので、わざわざ言う必要が無かったのだ。

「それでも……コレは充電の度に、動力室や電気室をウロウロするんでしょう？」

「むしろそこを重点的に見回って欲しいからな」

「僕は……反対です。そんなよく分からないロボットに基地の心臓部を警備させるなんて……」

「そうか……」

アマギとソガが肩を落とす。

尤も、ソガはともかくアマギにとつては、あくまでオマケのような物だったので、大してショックでは無かった。この時点では。

彼にすれば新兵器エイトこそ、長年にわたり構想を温めていた自信作だったのだから。

そんなわけで、運用コストを疑問視された事と、一部の猛烈な反対により、警備ロボットの導入は見送られる事となった。

せつかく作つたのに棄てるなんて勿体ない、というソガの泣き落としに近い主張によつて、廃棄処分を辛うじて免れたロボット。彼は変電設備のある周波復調室にて、待機状態で放置される事となった。

……そして、今。

「キ。チ。ナ。イ。テ。ノ。シ。ト。ウ。ハ。キ。ン。ソ。ク。シ。コ。ウ。テ。ス  
。」「うおおーっ!」

電子音で何事かをわめき散らす、得体の知れぬロボットが乱入してきた為に、ノガワは失神したダンよりも、そちらを新たな脅威として襲いかかった!

まるで泥の中で藻掻いているかのように緩慢な動きのロボットに対し、ノガワは強化された脚力であつという間に距離を詰めると、大きく常人離れしたパンチ力でロボット

を散々に打ち据えた！

先ほどとは比べ物にならない轟音が響き渡る。

なにせ文字通りの金属塊を、皮下に移植されたボーグメタルをメリケンサック代わりにした上で、ジャケットにカモフラージュした強化外骨格のパワーにより、重機並みの馬力で殴りつけているのだ。

鉄工場もかくやと言うべき騒音が発生するが……しかしロボットは小揺るぎもしない！

そこで繰り広げられているのは、奇しくも先程と全く同じ光景だった。

全力で殴りつける側がダンからノガワへ、それを微動だにせず腹で受け止めるのが、ノガワからロボットへ変わったただけだ。

「テ。イ。コ。ウ。ヲ。カ。ク。ニ。ン。」

「ぐっ……」

「チ。ン。ア。ツ。カ。イ。シ。」

煩わしそうなロボットが左手の鉄球を裏拳の如く、まるで蚊を払うかのように軽く振るだけで、ノガワの体が腹を中心に、くの字に折れ曲がり、そのまま横へすつ飛んでいく。

肺の空気が押し出され、地面に這い蹲るしかないノガワに対して、今度は至近距離か



ら右手のスタンビームが乱射される。

いかに強化されたとは言え、マイクロチップからの電気信号によって全身を制御している、簡易サイボーグ止まりのノガワには、電流で強制的に筋弛緩させられては、為す術はない。

あつという間に脱力、失神し、駆けつけた警備隊メンバーによって、ダン共々、メデイカルセンターへ運ばれるのであつた。

## 再防御作戦（Ⅲ）

メデイカルセンターで、ダン、ノガワ両隊員の様子を見守る警備隊メンバー。

ダンの診察を手伝いつつ、心配そうな顔で後輩の寝顔を見つめるアマギを、白衣のア  
ンヌが優しく宥める。

「大丈夫、すぐに意識は回復するわ……」

「うん……」

その傍らでは、キリヤマ隊長とキタムラ博士が、ノガワのレントゲン写真を見つつ、彼  
の状態を確認していた。

「ノガワ隊員は、完全ではありませんが……サイボーグになっています」

「サイボーグ？」

「それから彼を操っていたのは、脳の中に仕掛けられた催眠プレートですなえ……」

ノガワは側頭部、こめかみの辺りに小さな金属板が埋め込まれていた。

ここが受信機になっており、どこかにある敵の本拠地から、遠隔で傀儡のように操ら  
れていたのである。

「ノガワ隊員は、もう元の人間には帰れないのでしょうか……？」

「いやあ、なんとかなるでしょう……アンヌ隊員、手術の用意を！」  
「はー！」

キタムラ博士は、宇宙医学の権威であり、かなりの自信家でもある事である。かつて、とある天才的科学家の下で助手を務めた経験を持ち、常に冷静で、どんな常識外の事態にも動じない。

既に故人となった、かの恩師の下で東奔西走した日々で、そんなものは見慣れてしまったからだ。火星の化け物や、疑似空間に比べれば、いくら中身が宇宙合金でも、所詮はインプラント化された人間であり、摘出など地球の外科手術の延長線だ。彼の優秀さに裏打ちされた樂觀さは、その場の皆に希望を与えた。

とはいえ、この短時間で大規模手術ができる訳では無いので、今は電波遮蔽網のシートで頭部を覆い、催眠プレートに電磁ショックを与える事で、一時的に支配を弱める事だけだ。彼の脳波に影響が出ないよう、細心の注意を払いつつ、準備が進められていく。そしてそれと並行して、基地内にノガワが仕掛けたプレート爆弾の搜索と解除も行われた。ノガワが持ち込んだ爆弾は計10個。

これが各所で一齐に起爆すれば、極東基地はひとたまりもないのだ。隊員達を総動員して、基地が風潰しにされていく。

ハチの巣を突いたような騒ぎの基地を余所に、メデイカルセンターで苦し気に呻くノガワ。

朦朧とする意識の中で、何かを懸命に伝えようとする。

「う……ううつ……ア、アサ……アサヒ……」

「あさひ……？ 旭沼か……！」

「隊長！」

「キタムラ博士、彼をお願いします。……アンヌ！」

ホーク1号で出撃していく隊長とアンヌ。

旭沼の上空。

度重なる搜索では何の異変も感知出来なかったが……あるいは……

「アンヌ、熱ミサイル発射準備！」

ホークの下部から、気化爆弾の持続力をより高めた大型ミサイルが投下される。

ぐつぐつと煮立った旭沼は、一瞬にして干上がり、何億何千の微生物や魚類の命と引き換えに、敵の宇宙船が姿を現した。

「攻撃開始！」

急旋回したホークから、泥に埋もれた宇宙船へ、ミサイルが滝のように降り注ぐ。

しかし敵の円盤は、ただでさえ硬いボーグメタルで装甲化されているだけでなく、まるで兜を模したような独特の形状から来る避弾経始にも優れ、全ての攻撃を弾き返してしまう。

このままでは埒が明かないと、業を煮やしたキリヤマはついに、虎の子の使用に踏み切った！

「マグネチックセブン投下！」

爆弾倉が開き、パラシュート付きの新兵器が投下される。

昆虫のような脚の先が磁力吸盤になっており、ゆっくりと降下して機体表面に密着するマグネチックセブン。

「爆破！」

アンヌがレバーを引くと同時に、全ての爆弾が、一斉にエネルギーを噴射する。

装甲の隙間から、猛烈な爆風を注入され、内側からパイがはち切れるように膨らみ、支柱を猛烈に吹き上げるボーグ星人の宇宙船。

攻撃は成功だ！ あとは基地の爆弾だが……

メデイカルセンターでは、フルハシとアマギが冷や汗をかいていた。

「ちくしょう……あと10分しかない……」

「あと一個はどこにいったんだ……?」

プレート弾が一つだけ発見されていない。

このままでは……

「……ご兩人、お探しのモノはコイツかい?」

「……ソガ! お前ようやく目を覚ましやがって……それは!」

「最後のプレート弾!」

ひよっこりと顔を出したソガが、得意げに差し出したのは、全く見つからなかった残りの一個!

「ダンのくるぶしに引っ付いてましたぜ、灯台元暗しって奴?」

「そうか、あの揉み合いの一瞬で……」

「ノガワ、恐ろしい奴だぜ……」

ようやく10個全てを回収し終え、安堵のため息を吐く隊員達。

そこへ突然、自動ドアを開いて何者かが入って来る。

隊長達が帰ってきたのかと振り返ると……銀の衣装に身を包んだ、全く見覚えの無い女が突っ立っていた。

誰何をする暇もなく、手にしたブローチから眩い閃光を放ち、ソガ達やキタムラ博士を気絶させて、ノガワの眠るベッドに近づくと謎の女。

「もはや作戦は失敗だ。……しかし、お前は裏切った」

作戦が頓挫し、たった一人退却する前に、裏切者であるノガワを抹殺する事が、このボグ星人の目的だった。

光学迷彩を駆使すれば、爆弾の搜索で混乱した警備の隙を突くなど、造作もない事。裏切り者を抹殺し、プレート弾を再起動してばら撒くのも、また簡単だろう。

女がフラッシュブローチの出力を、速射モードから照射モードへ切り替えて、ノガワの頭部へ向けて掲げる。

だがそこへ間一髪、ブローチに突き刺さるレーザーの光！

気絶から回復したダンが、狸寝入りをやめて、ベッドの中からウルトラガンでの奇襲を仕掛けたのだ！

手持ち武器を破壊され、即座に逃走を選択するボグ星人。

例え相手がウルトラセブンでも、屋外で心臓部分の空中元素固定装置を作動させて、巨大化すればまだ勝ち目はある！

踵を返したボグ星人は、メデイカルセンターから飛び出そうとして……開いた自動ドアの向こうで何かにぶつかり、たたらを踏んで部屋に押し戻された。

「シ。ン。ニ。ユ。ウ。シ。ヤ。ハ。ツ。ケ。ン。」  
一体なにが邪魔を……



## 再防御作戦（Ⅳ）

元々、U—TOMの歩行インターフェースだったロボットは、光学カメラや、サーモセンサーだけではなく、そこそこの範囲を持つ金属探知機も搭載されていたのである。

それは基地内を巡回する同型機の位置関係を把握したり、地中の金属鉱石を発見する為に活用していた物で、この新たな職場ではおよそ発揮される事がないはずの機能であった。

そんな探知機で、自身と同程度の金属反応が、凄まじいスピードで基地内を移動しているのを検知したユートム。彼は電子頭脳をフルに働かせ、侵入経路からおおよその最終目的地を即座に割り出すと、先回りする為に、その太く短い肢でえつちらおつちら懸命に歩いてきたのだ。

……そう、先回り。

まあそのような目論見も、彼の速度では到底叶わず、決定的な瞬間には立ち会えなかったものの、星人の退路を断つという事には、なんとか間に合ったのである！

「くらえー！」

「ト。マ。リ。ナ。サ。イ。」

前門のロボット、後門のダン。二人の右手から、レーザーとビームが星人に向けて同時に発射された！　しかし……

「フッフッフ……」

「なにっ!？」

挟み撃ちで放たれた光線は、ボグ星人の躰で反射し、まったくダメージを与えられない！

不敵に笑う女が擬装プログラムを解除すると、中から現れたのは、銀色に輝く甲冑と見紛う、全身義体の戦闘用サイボーグの威容！

簡易サイボーグであるノガワと違い、全身を強固なボグメタルで覆っているだけでなく、装甲表面にスペルゲンコーティングを施したボグ星人には、光線による攻撃などなんの効果も及ぼせないのだ！

「ダァー！」

ウルトラガンが効かないと分かるやいなや、ダンは銃を投げ捨てボグ星人の背中へ飛び掛かる。

ところが全体重を乗せてみても、銀色のサイボーグはビクともしないどころか、即座に振り返った星人に両腕を掴まれてしまう。

先程のノガワとは比べ物にならない膂力に圧倒され、じりじりと後退するダン。

背後からユートムが、関節を狙ってスタンビームを何発も浴びせかけるが、それをまるで気にしたそぶりも見せず、非力な敵を嘲笑うボーグ星人。

敵の攻撃が予想より遙かに貧弱であると気付き、余裕綽々の彼女は、形勢逆転とばかりに、ダンの腕をがっしりと掴み、逃げられないように固定すると、苦悶に歪む彼の顔を至近距離で覗き込んだ。

まるで兜のつばのようにせり出した部分に、光が集まっていく……

「フッフッフ……」

「くそっ！」

頭部からの光線で、自分の額を撃ち抜いてトドメを刺すつもりなのだと察したダンは、咄嗟に首をよじって光線を回避しようとする……してしまった。

「フツ……何をしている……?」

「なに? ……しまった!」

勝ち誇ったように嘲笑をこぼす星人の言葉に、遅ればせながら敵の真意に気付いたダンは。

「そうだ、後ろにはみんなが倒れているのに! 本能的に避けてしまった!」

気付いた時にはもう遅い。星人の頭頂部から鼻先にかけての正中線から、白い光が放射され一点に収束すると、光の三角形がダンの頬をかすめるように形成されていく。そ

の頂点から、凝縮された光の束が目にも止まらぬ速さで発射された！

ヘッドビームの狙う先、それは……気を失った隊員達ではなく、机の上にまとめて置かれた、10個の回収済プレート弾！これを直接起爆する事で、自分もろとも基地を吹き飛ばす最後の自爆攻撃だ！

全てに終わりを告げるべく、破滅の光条が空間を切り裂き直進し……

着弾の寸前、横合いから金と銀に装飾された太く逞しい腕がぬつと差し出され、ビームの行く手を遮った！

ユートムに搭載された電子頭脳は、可変式機械竜の機体制御すら行う演算機能を持っていた。優れた弾道計算で星人の狙いを看破すると、巨大な右手を咄嗟に突き出す事で、今度ばかりは神がかり的な先回りを成功させたのだ！

収束したビームの威力は凄まじく、バチバチと火花を上げて、ユートムの重装甲を易々と焼ききっていく。だが、丸太のように太い彼の腕を貫通する事までは叶わず、星人の命を賭した逆転策は完全に防がれてしまったのである！

「……いつ……デユアアア!!」

「ウグッ！」

完全に虚を突かれたボーグ星人の隙を突き、ダンは自分の足を敵の股下へ深く滑りこませたかと思うと、フルハシ直伝の小外掛けを繰り出した！

キングジョーすら引き倒した匠の技に、態勢を崩して投げ出されるボーグ星人。

だがキングジョーであればかなりの時間を稼げたであろう投げ技を、床を一回転する事で、即座に立ち上がり、態勢を整えたサイボーグ。まさに恐るべき技術力と感嘆するべきであつたが……ダンの方が一枚上手であつた。

なぜなら星人が投げ出された先には……

「テ。イ。コ。ウ。カ。ク。ニ。ン。ハ。イ。シ。ヨ。シ。マ。ス。」

ユートムの左腕が、ボーグ星人の蛇腹状の腹部に深々と突き刺さる！

メゴオツ、とけたたましい破碎音と共に、星人の前面装甲が陥没し、めりこんだ鉄球の痕がそのまま残された。

押し出された電解質が泡立ち、白い人工血液を口から吐き出すボーグ星人。

生体反応の多かつたノガワは、有機生命体と認識された為に、辛うじて手加減をされていたのだが、完全義体のボーグ星人は熱反応の大きさから、ユートムからは同一存在と見なされた。今度こそ出力全開のフルパワー！

まさしく、重装ロボットをスクラップにかけるつもりでの全力攻撃を叩き込み、サイボーグの中枢部をめちやめちやに破壊したのだ！

たつたの一撃で、元素固定機や加速装置といった補助システムが機能不全に陥り、壁際へ吹き飛ばされたサイボーグ。僅かに怯んだ星人が、今度は自慢の光線を放とうとす

るが……そうはさせじと、ユートムが右手の銃床で、上段から思い切り殴りかかった。光線を受け止めた事で、もはや使い物にならなく無った右腕など、彼にとつては単なる鈍器でしかないのだ。

お互いの繊細なビーム発射器が、激しくぶつかり合い、ぐにやぐにやにひん曲がつていく。

ロボットの自身を全く省みない攻撃に、追い詰められるボーグ星人だが、腐つても彼女は戦闘サイボーグ。例えいくつかの機能がなくなっても、戦闘力は未だ衰えてはいない！

両腕に電磁スクリーンを展開し、最大出力でそれを振り下ろすと、敵ロボットの硬く分厚い重装チルソナイト合金製のボディを、段ボールでも引き裂くように容易く破り捨てていくではないか。

なにかのコードが千切れ、謎の歯車が弾け飛ぶ。

ユートムが新たな動力経路を算出する僅かな時間で、今度は祈るように硬く組みしめた両手を、先程のお返しとばかりに、透明な顔面へ叩きつけるボーグ星人。

装甲の重量と、駆動系の限界まで引き出した凄まじいパワーで繰り出されたヘビーパンチは、宇宙コランダムの風防を杭打機の如く破砕した！

細かいヒビがユートムの顔面を蜘蛛の巣のように走り、彼の視界を妨害していく。

互いの持ちうる性能を最大限に引き出しながら、相手を完全に破壊し尽くすべく、狭い医務室で死闘を繰り広げる最新鋭サイボーグと古代のロボット。

鈍色の塊が最小限の動きで揉み合う様は、一見地味なようであるが、飛び交う拳の一発が、通常の人間が喰らえば即死級の威力を秘めているのは、飛び散る火花やオイルの飛沫を見れば一目瞭然。

ロボットの背後から、彼を援護しようとしたダンが、点滴の支柱を刺叉代わりに、ボグ星人の腕を押さえにかかると、2度ほどサイボーグの攻撃を弾き返しただけで、支柱はぐにやりと鉛細工のように折れ曲がり、衝撃で痺れた腕が、握力を無くして取り落としてしまう。

「ウツ!? くそっ……!」

両者の存在意義をかけた戦闘機械のぶつかり合いに、いかなダンとは言え、人間態のままでは入り込む隙も無いのだ。

「フッフッフ……ハアツハツハア……!」

「ハ。イ。シ。ヨ。ハ。イ。シ。ヨ。」

自身の性能を存分に発揮できる好敵手を得て、僅かに残された戦士としての精神が昂ぶり、ハスキーボイスで獯猛に啗う、機械仕掛けのアマゾネス。

それを全く歯牙にもかけず、ただ黙々と使命を遂行しようとするイモータルガーディ

アン。

対照的な両者だが、戦闘方法は単純明快。馬力と装甲にあかせたド突き合い。煙や火花を吹き散らし、両手のメイスで、西洋甲冑の関節を滅多打ちにしていくユートム。ヘルムが凹み、肩がひしやげ、優美な芸術品が見るも無残に変わっていく。いつた<sup>ガ</sup>誰<sup>ワツ</sup>の姿<sup>隊</sup>を見て学習したのか、繰り出されていく冷酷無比の連続攻撃！ 狂ったピストンの如きハンマーパンチが、何度も何度も鋼を叩く！

それでもまだ、こんな旧式機に負けてなるものかと闘志を燃やしたボーグ星人は、可動範囲の狭まった腕部の高周波ブレードを振り回し、収束不全の拡散ビームを乱射して激しく抵抗を行った。宇宙の騎士が死に物狂いで繰り出す矢継ぎ早の攻撃が、ブリキ玩具の装甲をボロボロに破壊して、内部構造をズタズタに掻きまわす。警備隊のエンブレムが貼り直された胸部装甲は、とつくの昔に役割を放棄しており、ネジと油で出来た臓物を辺り一面にぶちまけていく。

そんな金属と金属の耐久試験は、それから永遠に続くかと思われたが……やがて唐突に終わりを告げる。

「キ。ケ。ン。キ。ケ。ン。ハ。ツ。テ。リ。ー。サ。ン。リ。ヨ。ウ。テ。イ。カ。」

ユートムの動きが急に鈍ったかと思うと、狂気のデンプシーロールが中断される。そ



の隙を見逃すボーグ星人ではなく、狙いすました一撃が、ロボットの顔面を叩き割り、脳天をもの見事に粉碎した!!

「キ。タ。タ。タ。イ。タ。メ。ー。ジジジジ g g g g g g g g g g」

全身から盛大にスパークと爆炎を吹き出して、ついに損傷が許容範囲を超えたユートムが機能を停止してしまふ。だがしかし、彼の欠陥だらけの脚部構造は、しかして後ろに倒れる事だけは許さなかつた。

前のめりに倒れ込んだロボットは、最期の意地とばかりに超重量でボーグ星人を引き倒す。

尻もちをついて、壁に背を預ける形で座り込んだ星人は、ようやく厄介な敵を倒したと安堵し、顔を上げ……仇敵の背後に、彼女が見たのは、怒れる6人の男達。

ユートムがサイボーグを抑えている間に、ダンが気絶した仲間を起して回っていたのだ。

そこには、宇宙船が爆破された事で、洗脳電波から解放されたノガワ隊員も含まれている。

彼らは機械仕掛けの隊員が、死に物狂いで稼いだ貴重な時間を使って、全員で重たい鉄製の医療用ベッドを抱え上げると、ぎらつく瞳で仲間の仇を睨みつけているではないか。

ダンとキタムラ博士、ソガとアマギが両側を支え、その後ろでフルハシとノガワが今か今かと待ち構えている。

彼らの陣形を見て、敵の意図と、自らの末路を悟った星人は体を動かそうとするが、自分の倍以上も重量のある寸胴が重しとなつて、身動きが取れない。

悔しそうに舌打ちをすると、最後のあがきとして頭部のひしゃげた発射口をきらりと煌めかせるが……彼らの方が早い！

「せーのっ!!」

急ごしらえの破城槌は、甲冑人間のヘルムを医務室の壁との間でぺしゃんこに押し潰し、一枚の金属板のようになつてしまつた。

恐るべきサイボーグ作戦は、こうして幕を閉じたのだ。

「よし……こんなもんかな」

「サイ。イ。キ。ト。ウ。カ。ク。ニ。ン。」

配線を弄っていたアマギが、ひと段落したのかスイッチを入れると、電子音と共に口ポットが起き上がる。

「電子頭脳のバックアップを、腰にも作つといて良かったな」

「ああ……だが、ほとんどを地球製のパーツで代替したから、性能が2割以上も落ちてしまったよ……」

「いいじゃねえか、生き返つたならそれでさあ！」

「本当ですよ、今回の戦いの立役者は彼ですからね！ 良かった……本当に」

無事に復旧したロボットを取り囲み、にこやかに笑うメンバー達。

特にダンが浮かべる安堵の表情は格別だ。

「おいどうした、ダン。……僕は反対です！ そんなわけの分からないロボットに！  
じゃなかったのか？」

「テ。ク。ヒ。ニ。ト。リ。ル。ヲ。ト。ウ。サ。イ。テ。ス。カ。ウ。ラ。ヤ。マ  
。シ。イ。」

「やめてくださいよソガ隊員……お前もごめんよ」

バツの悪そうなダンが、素直に頭を下げる。

「ふうん……出力が落ちたって事は……今度からはメデイカルセンターの壁を穴だらけにしたりはしないのね？」

「メ。ン。ホ。ク。ナ。イ。テ。ス。」

「おいおい、アンヌ。そりやないぜ」

「そうだよ！ 彼が居なかったらどうなっていたか！ アンヌは彼の活躍を見ていなかったからだよ！ 本当にすごかったんだ！」

「……うふふ、もうすっかり彼のファンね。……分かったわ。みんなが無事なのは、確かにこの子のお陰だもの。偉かったわ……ええつと……ねえアマギ隊員、この子、なんていうの？」

「え？」

「なにつて……ユートムだろ？」

笑顔でロボットの頭部を撫でたアンヌが、皆を振り返るが、全員ポカンとしたままだ。「違うわ。それってロボット兵器の総称なんでしょ？ ポインターを車って呼んでるのと同じじゃないの。ソガ隊員は、ペットにイヌとかネコって名前をつけるの？」

「ああ、そうか……そうなるのか……」

「正式な型番はUT-009だな」

「……んもう！ そうじゃなくて！ この子だけの名前よ！」

「うーん……そうだ！」

首を捻ったソガが、我が意を得たりと手を叩く。

「名付けて！ 『セブンがいなくても基地くらいは俺達で守れるんだ君1号』略してセブ  
ンガー！ どうだ！ いいだろう？」

「……………」

「なんだいみんな、その目は……………」

当人は本心から素晴らしいと思っているのだが、周囲の同意が得られそうに無いのは分かった。

「まあまあ、いつもいつもみんなばかり名付け親になって、ずるいじゃありませんか。偶には僕にも考えさせてくださいよ！」

「あら、ダン。あなたはこの前、怪獣達に名前を付けたばかりじゃない」

「え？ あ、いやあれは元々というか……………そう、あれでハマっちゃったんだよ！」

「そうなの……………？」

咳ばらいをしたダンが、アマギに向き直る。

「ねえアマギ隊員。確認なんですけど、この前の新兵器エイトの出来は、不満だったんですよね？」

「蒸し返すなよお……………まあ、そうだ。あれは僕にとってはまだ失敗作だな」

「だったら丁度いい！ では……………アマギ隊員の八番目の成功作は彼と言う事になります。そして……………彼が我々ウルトラ警備隊の仲間として相応しい働きをした事は、もはや疑いようもないわけです！ ……そうですよね？ 隊長？」

「ははあ……………ダン。キミの考えが分かったぞ。いいじゃないか、私も許可する」

「ありがとうございます！　では……今日から君はウルトラ警備隊八番目の隊員、  
ユーエイト118！　略してユートだ！　よろしく、ユート！」

「ア。ン。チ。ヨ。ク。テ。ス。ネ。」

「彼も気に入ったって！　とつても素敵な名前じゃない。良かったわねえ……ユート  
！」

「ソ。ウ。カ。モ。シ。レ。マ。セ。ン。ネ。」

「だったらノガワに、今度の結婚式には、機械の座る席もあるのか、ちゃんと聞いておかな  
なきゃならんなあ……」

「ハツハツハ!!」

本日をもって、ウルトラ警備隊はメンバーを一人増やす事と相成ったのだった。

70000000キロを吹っ飛ばせ！（I）

高性能火薬、スパイナー。その威力はニトログリセリンの数百倍。だが、地球防衛軍の実験場に運ぶ途中、何者かによって襲撃されてしまった。そこでウルトラ警備隊に、スパイナー運搬の特別命令が下った！

「空は避けた方がいいと思います。ホークとはいえども安全とはいえません」

そう言いつつ、ホーク1号の写真を降ろすダン。

俺達は今、作戦室でスパイナーの移送作戦を話し合っていた。

「私も同感だ。敵に狙われていて、しかも運ぶものが爆発物である以上、より安全度の高い方法を選ぶべきだ」

「……海底なら安全だなあ」

マナベ参謀の意見を聞き、フルハシがハイドラランジャーの写真を手に取る。

「しかし、海路でここまでではいいとしても、ここから実験場までの距離をどうする？」

「そうか……」

「いい手はないのかね？」

「……あります！」

バン！ と力強く机を叩き、人差し指を高々と掲げたダンが得意げに言い放った。  
「グッドアイデアです！」

モロボシダンの言うグッドアイデア……。

それは、ラリーに紛れ込んでスパイナーを運ぶ秘密作戦だった。

トランクには厳重にシヨック止めされたスパイナーのカプセルが仕込まれている。  
まさに走るダイナマイトである。点検も慎重だ。

ラリー服に着替え、スパイナー移送特別作戦用に詭えた擬装ラリー車に乗り込む、  
ダンとアマギ。

見た目は完全に、いすずのベレットだが、中身はほとんどポインターだ。

そして出場ナンバーはもちろん……7番!!

なのだが……

『グッドアイデアです！』



……じゃねえーよ!

全然グッドじゃねえから!!

妨害の予想される爆発物を運ぶために、一般ラリーに紛れ込むとか正気か? 頭イカ

レてんだろ!?

正直この回冒頭のダンは、前回のノガワに頭をどつかれまくった後遺症で、知能指数が幼児並みに低下してしまっただと言われても納得せざるを得ないくらいヒドイ。

遊園地でコーヒーカープのハンドルを握りながらブンドドするのは、まだ辛うじて可愛げがあると擁護もできるが……映画館内で、自分の頭と同じくらいにデカいせんべいを、バリバリ貪りながらラリー映画を見ているシーンはほんとひどい。

地球人がいくら宇宙のマナーを知らない野蛮人とはいえ、映画館でそんなマナー違反はする奴はいないぞ……もしいたらそいつは間違いなく宇宙人だ。ウルトラガンで射殺されても文句は言えまい。

そんでそれに感化されて、そのまま警備隊の作戦にちゃっかり取り入れやがったのは、もはや処置ナシだ。公私混同もいいところ。

アンヌとのデートが楽し過ぎて、頭の中お花畑だったんだろくなきつと……おーい帰って来ーい。

というかアンヌもそれでいいのか? お前の彼氏なんだからしつかり手綱握つとい

てくれ！ ……ああ、こつちも駄目だ。せんべい齧ってる……恋は盲目と言うが、銀河レベルのバカツプルここに極まれりか……

だめだ、今回は残りの四人で……いや、アマギは爆弾にブルってるから三人でなんとかするしかない！

と氣を引き締めてはいたものの……

「そりやそうだよなあ……」

「なにがだ？」

「……いやなに、天下の地球防衛軍が、馬鹿正直にラリーへ参加なんぞするわけないか、と思ひまして」

「ソガ、声が大きいぞ」

「これは失礼……しかし、豪勢なもんだ……」

右も左も防衛軍、防衛軍。

あそこでエンストしてる3号車も防衛軍。

目の前でダンとアマギに指示してるチエツカーも防衛軍。

それで応援客も、私服姿の我々警備隊含めて、みーんな地球防衛軍!!

要は、まるまるラリーを買い上げて、隅から隅まで諜報部員のエージェントで固めてあるのだ、この試合。それを知らぬはダンとアマギ、そして、のこのこ一般参加してき

た1号車のキル星人だけという訳さ。

なんちゆう茶番だ。かわいそうに……

ラリーの最後で、敵を欺く前にはまず……と嘯くキリヤマ隊長だが、ここまで壮大なペテンにかけていたとは思わなんだ。まあ普通に考えて、一般人に被害が出るかも知れないような作戦に、この人とマナベ参謀がゴーサイン出すわけないんだよなあ……!

どうして気付かなかつたんだ、オレ。

だからこそ、ダンとアマギに、試合中の発砲許可も出ている訳だ。近づいてくる奴はみんな敵だからな。

「どうしたのソガ隊員。珍しく神妙な顔して」

「……自分の演技力がどこまで通用するかと思つてね」

「そんなに堅くならなくなつていいのよ! 私たちは、ダン達を最後まで応援すればいい。簡単じゃない」

「……ご自慢の彼氏が出来レースで優勝するのが確定してるからな。……お気楽でいいね」

「なによもう! 僻んでるの!?!」

「彼氏是否定せんのかい」

怒るのか惚気るのかどつちかにしてくれアンヌ……いや、今はバカツプルを呪つて不

機嫌なんだと思つて貰つた方がいいか。なんせ、心中穏やかでは居られないのは確かなんだし……つまるところ、ダンとアマギの車は、敵を炙りだす為の罠で、本物のスパイナーは、原作通りに俺達のジープにポンと積んである。……そして、それを知ってるのは隊長や参謀達だけ。俺はなまじ原作知識があるせいで、気が気じゃないよ……ケツの下で爆薬暖めるなんて知つたら、アンヌもフルハシもどんな顔するんだろうか。

リア充爆発しろ！　なんて、口が裂けても言えやしない。アマギがダンに道連れされるならまだしも、俺達もアンヌの自爆に巻き込まれる恐れがあるのだから。人を呪わば穴二つとは言え……おお、くわばらくわばら。

現実逃避のために、そんな益体もない事を考えていると、向こうの方で大爆発が起こる。別にリア充<sup>ダ</sup>が爆発したのではなく、おおかたキル星人の人間爆弾を、ダンがブルズアイしたんだろう。今頃、西部劇並みの銃裁きを見せてくれている筈だ。

それにしてもキル星人……オートバイで自爆特攻とか地雷とか、やつてる事が地球のテロリストと大して変わんないってのも、謎なんだよなコイツら。そのくせ出してくるのは恐竜戦車だし……

人間態と怪獣で、戦力に差がありすぎる。どうなつとるんだいったい……

俺が双眼鏡で眺める先で、地雷探知機を取り付けた3号車が、強引に7号車を追い越していった……

「だめだ、地雷原がバレた！ しかもターゲットの7号車とは別の車だ！」

「……地球人め、本当にレースで爆薬を仕掛けるのが普通なのか!？」

部下が、地球人の文化を知るために仕入れてきた、レースに関する映像作品……荒唐無稽なジョークの類かと思っていたが……一般車両ですら地雷探知機を装備しているとなると……流石は地球人、銀河系一の野蠻さと噂されるだけはあるな。

「後続車に戦車が紛れていたりしないか？」

「クリームの塊で反撃されるぞ、気をつけろ！」

「……ともかく、その先頭車は見せしめだ。鹵獲した噴進弾で破壊しろ」

「了解！」

工作部隊長が指示すると、岩陰に隠れたキル星人がロケット弾で3号車を吹き飛ばした。

ふむ、なかなか良い威力ではないか。外宇宙への進出もままならぬ種族とは言え、こゝと火薬に関する技術だけは侮れない。これは、あのスパイナーという爆薬への期待も一層高まるうというものだ。部隊長はサングラスの奥で、真つ黒な目を三日月のように細

めた。

彼らキル星人は、ヒューマノイドタイプの宇宙人であり、黒目の割合が非常に多い事を除けば、外見上でも地球人とさしたる違いは無い。そんな彼らの侵略部隊は、他の種族とは一風変わっており……常に現地の武器を使用する事になっている。

これは彼らの気風によるものと、技術的な面の二つ、理由があった。

元々、キル星人は領土の拡大にあまり興味がない。彼らが他星に侵攻するのは、その名の通り、虐殺と、略奪が目的であつて……新たな土地を支配し、統治する気がまるでないのだ。彼らにとって、糧とは他者から奪う物であり、決して自らで育み、蓄えるものではなかつた。生粋の狩猟民族であるキル星人は……いわば宇宙規模の騎馬民族なのである。

そんなわけで、彼らには固有の『文化』がほとんどなく、行く先々で勝手気ままに消費するだけ消費して、星が瘦せたら次へ行く、の繰り返し。満ちる事など決してない。装備や戦法、軍規も収穫も、方面軍で内容はバラバラだ。そんなキル星人が唯一、種族単位で誇れるのは、恐ろしいまでの即応性と、遠距離伝送技術の二つ。

即応性は、そのまま彼らの成り立ちによるもの。着の身着のまま放り出されようが、どんな武器も瞬時に用途を理解し、使いこなすことが出来る天賦の才能を、種族のほぼ全員が持っていた。そうでなくては生き残れなかつたとも言えるが……とにかく、有り

合わせの武器を作ったり、敵から奪って振り回す事にかけては、宇宙一とも言える能力を持つていたのが、この種族だった。

そして、そんな狂暴な彼らが後天的に獲得してしまったもう一つの長所が……遠距離伝送装置、いわゆる星間テレポルト。それがいつだったのか、もはや彼ら自身も覚えてなどいないが、ある時、とある星を襲って入手したのがこの技術。どんなに刹那的な彼らと言えど、この技術がいかに有用で……かつ、自分達にピッタリのモノであるかというのは分かつたらしい。

このテレポルト装置さえあれば、大きく遅い宇宙船すら必要ない。アレは燃料と、航行中の余分な食料の確保が必要であるから、キル星人にとってあまり良い手段とは言えなかったところへ、コレだ。ますます彼らは勢いづいた。これがあれば、どんなに防御を固めた星にも一瞬で、気付かない内に乗り込むことができるのだから。

地球にキル星人が侵入出来たのも、この方法だったればこそ。現在の地球はプロジェクトブルーによって、過半数を電磁バリアで覆われおり、並大抵の方法では侵入出来ないようになっていた。

ついこの間も、ステーションV2の追撃部隊を端から蠟人形に変えて、全滅させてしまいう程に恐ろしい暗黒星雲人の群れが、揃ってバリアに突っ込んで一斉に枯れ果てたばかりだ。

このバリアを正面から突破しようとするならば、凄まじい再生能力や防御力で相殺したり、僅かな隙間を通れるような変形能力が必要不可欠である。かといって、バリアの無いV1方面から侵攻しようとする、アステロイドベルトの隙間を無補給で長期間潜り抜け、太陽風の嵐をかき分けて進む必要がある。

そんな過酷な航海が生身で耐えられるはずもなく、生存能力を高めた身体改造を施したり、特殊な食物で食いつなぐ必要があった。用心棒の怪獣を連れて来る等もつての外。

V2やV3方面が侵略ルートとして最も多く採用されるのは、それなりの訳があるのだ。

だが、キル星人には関係ない。だって丸々ワープで無視できるから。なんて素晴らしいんだろうか長距離ワープ。電送機万歳！

もつとも、この方法にも欠点はある。あまりに巨大な質量は転送できないといった制約がいくつもあるが……彼らの特性上、それは十分に無視できるものばかりだった。なにせ究極的には、体一つ送る事さえできれば、あとはどうにでもなるのが、キル星人。

……そして、その点この地球と言う星は、キル星人にとって宝の山だったのである。



# 70000000キロを吹っ飛ばせ！（Ⅱ）

爆発音にかけつけたダンとアマギの7号車。

先程強引に先行した3号車が大破炎上しているではないか。

「敵の狙いは僕たちだったんですよ。そこで僕たちを追い抜いたばかりに……」

「身代わりになったのか……」

そう、身代わりになったのだ。

ただし、それも覚悟の上で露払いに名乗り出たエージェント達の事を、彼ら二人はま  
だ知らない。

そこへ襲いかかるキル星人のマシガン！

降り注ぐ銃弾をかくぐり、二人は素早く岩陰に逃げ込むと、ヘルメットで現在位置  
を偽装するという機転で、敵の背後に回り込む。

ダンに撃たれると、赤い光に包まれて消える星人の死体。

生命反応が消失した事で、電送機の子機ごと回収されていたのだ。

ダンが岩場に戻ると、アマギが大量の脂汗を流しながら、小鹿のようにブルブルと震  
えているではないか。

「アマギ隊員っ！」

「恐いんだ……、恐いんだよお!! ……小学校のころな、近くの花火工場が爆発して、家も人間もバラバラだったんだ。それで降ダメさ、足がすくむんだ」

アマギの脳裏で、あの時の光景がフラッシュバックする。最近は少しだけマシになったかと思つたが、やはり駄目だ。火薬や爆発物への恐怖心だけは……どうしても……

「隊長はそれを知ってる。それなのにわざと俺を選んだんだ！」

「そんなことはありません。爆発物を運ぶんです。僕だつて恐い……しかし、これは任務なんです。ウルトラ警備隊の任務なんですよ！ アマギ隊員」

心情を吐露するアマギに対し、ダンは穏やかな微笑を浮かべながら優しく諭す。

その瞳には、とても20歳そこそこの若造とは思えない程に深い慈愛と、信念の光が込められていた。

このモロボシ・ダンという男は、時々こんな顔をする。

明らかに自分より年下のハズなのに、時として、あの隊長よりも年長者なのではないかとすら錯覚してしまう程に、思慮と包容力に富んだ眼差しで、こちらの心を真正面から見つめてくるのだ。

それがアマギには一層辛く、もどかしくつて羨ましくて……そして、どうしようもない程に眩しかった。

この大樹のような後輩に、気を抜けばすぐ寄りかかってしまいそうになる心を律するのが、どれほど大変で……そして、その隠者の如き瞳で見守ってくれるのが、どれほど頼もしいか……純真な彼は気付いていないのだろう。

「さあ、行きましょう！」

まだ、ラリーは始まったばかりだった。

うーん、参ったなあ……

本当に困ったぞ。

「おいソガ、どうした黙り込んでしまった？」

なんというか、すっかり忘れてたんだよなあ……

そりやもう、この世界に来てからどれくらいだ？

元々、記憶力にはあまり自信が無かったが、流石にそろそろ、細かい部分を忘れて来る頃合いだ。だいたい、この話は恐竜戦車のインパクトが強過ぎるんだよ。

だからさ、忘れてても仕方ないよ。

楽器の練習なんてさ。

「どうしたの？ 弾かないの？」

「……いまね……悩んでるの、曲を。……ちよい待って」

もうすっかり日も落ちて、俺達は四人で焚火を囲んでキャンプの構え。

そこで先程、隊長にホイと渡された弦楽器が問題なのよ。ぶつちやけると楽器に偽装したマシガンだ。仕込み杖ならぬ、仕込み銃。

なんとというかカモフラージュに命かけてます感がすごい。別にここまでせんでも……と思わなくもないが、そんな事はいいんだよ。

重要なのはこれが普通に楽器としてちゃんと使える事だ。

そんでもって原作のソガは、このなんだかよく分からない異国情緒溢れる民族楽器（名前だけは知ってるぞ。マンドリンって言うんだぜコレ。柑橘みたいな名前だな）で見事に一曲披露している。なんて多彩な男だろうか。

……の、だ、が!!

オレは生まれてこの方、弦楽器なんぞ弾いた事が無い!!

自信を持つて得意だと言い張れるのは、カスタネットくらいだ。それも、フラメンコ的な格好いい奴じゃなくて、赤と青のアレ。

そう、お遊戯会で園児が叩いてるアレだよ。ハイ、みなさん、せーの、うんたん、うんたん。

……どうすんのこれ。

あの、隊長?　せめてリコーダー型ピストルとか、ピアノ型バズーカとかになりませんか?　ギターも弾いた事ない楽器音痴にこんなもん渡さないで欲しい。

オレは!　ピアノを習っていたのに、五線譜が読めない男だぞ!

コードって何?　巻き取る奴?

和音?　タツチすると鳴くカードか?

もういい!　こうなったら歌って誤魔化せ!　楽器は適当にじやかじやかしてお茶

を濁す!　こうなりやヤケだ!　もう知らん!

「ワントウー……スリフォワントウー……レッツゴーセブーン♪　ててーてー♪」

「「「???」」」

「アターツク!　ザ・ホークミツソール　ファイターアール　セブーン♪」

「……すまんソガ、それは……なんだ?」

「……ウルトラ警備隊とセブンの応援歌ですが?　何か?」

あ、でもこの曲、よく考えたら間奏ばかりじゃないか!　選曲ミスった。

「そ、そうか……」

「なんで英語なんだ?」

「かつこいいからです!　でも次は日本語の曲にしますね」

「お、おう……」

「ぼーくはしいってゝる♪ あのゝこ、と、をゝ♪」

頼む!! 早く来てくれダン、アマギ……間が持たねえ!!

ダンとアマギが、夜の暗闇に、一号車の男を追い詰める。

ウルトラガンを手にして藪の中を進んでいくと……どこからか聞こえてくる怪しいメロディー。

「そっちか!？」

逸るアマギは、音のする方向へどんどんと進んでいった。

だんだんと明瞭になる歌声。

いや、この声どこかで……?」

「おい、ソガ。ホークはマツハ7なんて出ねえぞ?」

「だから言っちゃいけないでしょーが! シーですよ、シート!」

「でもその方が子供ウケはしやすいかもね。他にはないの?」

「え? 他あ? えっと……ゼイセイイ♪ ゼアザツリー♪ インザフォーレスト♪」

なんだこれは？

「ソガ……？ それにみんな!?」

「……アマギ！ ダン！」

やけに嬉しそうなソガを脇に置いて、キリヤマが怪訝な顔で二人に尋ねる。

「いったい、何があつたんだ？」

「は、1号車を追い詰めたんです」

「1号車……？」

「この辺に逃げ込んだんです」

二人が状況を説明した途端、キリヤマの表情が怒りへと変わった。

「バカ！ なぜ車を離れた!?!」

慌ててラリー車へ戻ると……案の定、トランクに時限爆弾をセットされた後。

下手人は俺のマンドリンマシガン（語呂がいいな）で討ち取ったものの、時限爆弾を解除しない事には進めない。

「隊長！ 交代させてください。これ以上の走行は耐えられません!」

真つ青な顔で訴えるアマギに対し、隊長はにべもなく言い放った。

「アマギ……お前がやれ」

「隊長……」

「アマギ隊員は疲れています」

「命令だ！」

ダンが庇おうとするも、隊長はそれすらも切り捨てた。弱々しく爆弾に向かおうとするアマギ。

「……で、できません！」

パン！！

アマギの言葉が言い終わるか否かのノータイムで平手打ちを繰り出すと、たった一言だけ言い残して、その場を立ち去るキリヤマ隊長の背中。

「時間がない、早くやれ」

残されたアマギは、仕方なく爆弾解体に取り掛かるしかない。

それでも、半ばまで進めたところで、手が震えて勧められなくなる。

「だ、だめだあ……」

情けない声で振りかえるアマギ。

後ろでライトを支えるダンはゆっくりと首をふる。

ならばと隣の男へ視線をやるが、そちらもすっかりと組んだ腕を外さない。

「そが……いつかの月面みたい……」

「……あの時、確かに触っていたのは俺だったが、お前だって最後まで俺に指示を出し続



けた。ついこの間だって、俺達がぶっ倒れてる間に、プレート弾を回収しただろうが。出来るよ……お前は」

「僕たちが、ついていきます」

二人に励まされ、観念したように爆弾へ向き合う名プランナー。

見守る側まで、ぐつと息を止めてしまうような極度の緊張の中で、ついに……ついに漢はある部品を引き抜いた！

それと同時に、カチカチと煩いカウントダウンがぱたりと止む。

「……成功、成功したんですよ！ アマギ隊員！」

「……う、うん……うん！」

あの日からずっと、凄惨な爆発現場に心を囚われていた少年は、仲間の見守る中で、まさに今この瞬間！ 紛れもない自分自身の手で、爆弾を止めたのだ。目の前で静かになったタイマーと対照的に、アマギは自分の中で、何かの時がようやく動き出したのを、確かに感じていた。

「……どうやら时限爆弾は不発らしい」

「地球人にも、肝の据わった奴がいるみたいですね、部隊長」

「そのようだな。まったく手のかかることだ」

こうなれば、明日が最後のチャンス。虎の子のヘリで空襲するしかないか。できれば移動要塞で殴りこむというのは、最終手段としたいものだ。

なにせ、その移動要塞を破壊し得る兵器だからこそ、こうして手に入れようとしているのだから、

彼らは、地球に潜入した後、情報収集を開始した。

戦闘員の武器に関しては、腐るほど手に入ったので、出来れば巨大な機動戦力となるものを欲したので。なにせ、この星には光の巨人が住んでいるようなので、その対抗手段を探したのである。

そして彼らは見つけたのだ。永久凍土の中に眠っていた過去の遺物を。

……それは、サイボーグ化された巨大な生物だった。

かつてこの星の支配を目論んだ何者かが居たのだろう。当時の地球を闊歩していた巨大生物、つまり恐竜を捕獲し、生体兵器に仕立て上げたのだ。

ところが、先に氷河期が来てしまったせいで、その者達は侵略を諦めて帰ってしまったらしい。それでこの作りかけのサイボーグ恐竜はそのまま打ち捨てられ、氷の中で今の今まで眠っていた……というのが、発見したキル星人の見立てである。

そしてこの怪獣は氷漬けだったために、保存状態は良好で、あのウルトラセブンにぶつける事を想定しても、申し分ないパワーと耐久力を持つていた。

だが惜しむらくは……このタンギラザウルスが造りかけの未完成品だと言う点。装甲の取り付けが間に合わず、内部構造が丸見えだった長い首は、短く切り詰めるとしても、一番大事な後ろ足がまったく手つかずだ。これではせつかくのこの巨体を支えることが出来ない!!

泣く泣く、この怪獣は見なかった事にした。

だが、キル星人達は一つの知見を得た。この地球、今まで何度も何度も侵略されていく。という事は……探せばどこかにこんな、他の星人の廃棄品が残っているのではないか? と。

結果、その予想は大当たり。

少し前に自分達と似たような事を試した連中がいたらしいではないか。

彼らは海中で沢山の廃材を集めてリサイクル兵器を何個も作って自爆特攻させていたとのこと。

そして、地球人は海の中をあまり自由に探せない。であるならば……?

本隊から、水中探索装備（もちろんこれも略奪品だ）を取り寄せて探してみれば……あつた!!

おそらくこれがそうだろう!!

だが……見つけたそれは、またしても未完成品。

ミミー星人とやらは、この巨大な履帯のついた土台の上に、これまた巨大な砲台群を乗せるつもりだったらしいが……艦装がまったく済んでいないではないか!! もう少し完成してから負けてくれれば良かったものを……

土台だけあっても、上に載せる戦艦がなければ、ただの巨大なキャタピラだ。申し訳程度の3連砲だけでは少しばかり火力が物足りない。

……と、ここで部隊の全員がほぼ同時に同じ結論に至ったのだ。

載せるものなら、すでにあるじゃないか……と。

こうして、キル星人の移動要塞、白亜戦艦ダイナタンクが完成したのだった!!

# 70000000キロを吹っ飛ばせ！（Ⅲ）

「実験場まであと1000キロよ」

「うん、もう大丈夫だ」

「油断するな。奴らはしつこい」

翌朝、最後のルート確認にも余念がない警備隊。

ラリー車の点検もバッチリだ！

「それにしても、なぜ邪魔をするんでしょうね。スパイナーの運搬を……」

「わからん。ただ、奴らが実験を恐れていることは確かだ。ソガ、お前の予感通りになる

やもしれん」

「出来れば準備が無駄になって欲しいですがね……」

「出発します！」

「……疲れたろう、フルハシと代われ」

「よし、選手交代だ」

エンジンを整備中のアマギの肩を叩き、キリヤマは彼を労いつつ交代を支持する。

帽子を深くかぶり直し、やる気十分のフルハシ。彼も、後輩の頑張りに触発された一

人である。

だが……

「隊長！ 任務を遂行させてください！」

アマギは昨日と打って変わって、決然とした表情で言い切る。

使命に燃える漢の顔が、そこにはあつた。

「……うむ！」

部下の成長を確信し、満面の笑みでうなづくキリヤマ隊長。

「さあ、出発しようぜ！」

最期の直線をひた走る偽装ラリー車。そこへ、上空から2機のヘリコプターが近づいてくる……。

ヘリから投下された物体が、車の屋根に磁力の力でへばり付き、その動きを止めた。

マグネチッククセブンの残骸を再利用した土台から、ピンク色の気球が膨らみ、ラリー車をフルトン回収するべく空へと誘拐した。

車内でダンは、ウルトラアイのしまつてある胸元へ手をやるが、隣へ視線をやると、それを思いとどまる。

(アマギ隊員がいてはウルトラセブンにもなれない……)

……とか、今頃思ってたろうな。

おいダンよ、オレは知ってるんだぞ、お前が腹<sup>最</sup>パン<sup>終</sup>という手段<sup>奥義</sup>を持つてる事を!

流石に命の恩人には躊躇<sup>躊躇</sup>われるか。おい、キャラ差別だぞ。この扱いの差に断固抗議するぞ。

オレが呑気に眺めていると、ラリー車のサイドミラーからレーザー砲が発射される。たちまち一機撃墜。エンジンが爆発して、凄まじい爆発を起こすヘリコプター。アマギがやったのだ。

立ち上る火柱を見る彼の顔には、爆発に対する恐怖など、もはや一片も見受けられない。

ラリー車に反撃手段があるとわかり、そそくさと逃げて行くもう一機。

「ソガ。気球を撃て!」

「はい」

即答した俺は、躊躇なく引き金を引く。

気球が破裂し。そのまま落下するラリー車。

「キャラ!! ダン!!」

だが、ホバーが作動してふんわりと地面に着地すると、何事もなかったかのように走

り出す。

その様子を見て、後ろの二人が胸を撫でおろしていた。中身がジエネリックポインターだと知ってなけりや、そんな反応にもなるわな。

原作だとソガも気球撃つのめっちゃ躊躇ってたし。

さてと、あとの問題は恐竜戦車だ……

「任務、無事完了しました」

「〔苦勞〕」

マナベが二人を労う後ろで、作業員がスパイナーを回収しようと走りよってくる。

心得たとばかりにトランクを開けるダンとアマギだが……

しかし、作業員は二人のラリー車をスルーして、隊長達の乗って来たジープへ向かっていく。

シートをめくると、その下には本物のスパイナー。これはどうした事かと顔を見合わせる、ラリー選手達。

困惑する二人にキリヤマはしたり顔で言い放った。

「敵を欺く前に、まず……」

「それじゃあ隊長、僕の臆病を……?」



キリヤマは、アマギの恐怖症を克服させるために、わざとこんな回りくどい真似をしたのだ。

現代人の感性を有するソガは、後ろでなんとも言えない顔をしていたが、アマギとしては、隊長の厳しくも暖かい優しさに感銘を受けていた。

「ありがとうございました!!」

昭和的な師弟愛にほっこりしつつ、オレがその対象になるのは勘弁したいなど思ったところで、早速スパイナーの実験が行われることになった。

「準備完了しました!」

「これより秒読みに入ります」

皆が固唾を呑んで見守る中、スパイナーのセットされた土塁から、大量の土砂をかき分けて、巨大な爬虫類が姿を現した!

『グオオオオ!!』

「何だツ!？」

「恐竜です!」

地中から現れた恐竜は、咆哮を上げると、両目から光線を発射した!

実験場近くの崖が爆発し、退避途中の作業員たちが転落していく。

「ホンダ！ オザキ！ どうした！ 応答せよ！」

「よし、やつつけてやる」

「待て！ 恐竜はスパイナーを啜えているぞ！」

「ええ、そのスパイナーを撃ち抜いて起爆しましょう」

「駄目だ！ 今爆発されたら、二人が危ない！」

「隊長、僕が行きます、援護してください！」

「ダン、待て!!」

あ、そっかあ……そういやそういう展開だったな……

そうこうしていると、敵が前進を開始し、その全容が明らかとなる。

なんと恐竜の下半身は……巨大な戦車となっていたのだ!!

「恐竜タンクです！」

「どうやら、やつらの動く要塞らしい……」

「スパイナーの実験を恐れるわけだあ……」

そう、これぞキル星人の最終兵器恐竜戦車だ。

奴らの使う武器は、どれも地球人と大差ないものばかりだが、この恐竜戦車だけはヤ

バイ。マジでヤバイ。

男の子が好きなものは? 恐竜!!

男の子が好きなものは? 戦車!!

じゃあうまいものに、うまいもんぶつこんだら、そりやうまいやろ! みたいなゴリ押しを超えた何かの、ふざけた思考で生み出されたと思えない見た目をした、怪獣界のカツカレーとも言うべき恐竜戦車だが……

初見のインパクトもさることながら、実力の方も相応にヤバかったりする。

スパイナーや作業員を人質にされ、全力の発揮できないセブンを、戦車砲で追い立てたり、尻尾で何度も滅多打ちにしたり、拳銃の果てには倒れたセブンの左腕を、戦車の重量で思いつき轢いていたり、やりたい放題暴れまくるのだ、コイツは!!

俺の今回の目的は、スパイナーの実験を成功させることでは無く、この特盛のロコモコ井を跡形もなく吹き飛ばす事だ!!

その為にこつそりと準備もしておいたのさ!

飛び出していったダン目掛け、恐竜戦車の両目からビームが飛び、再び地面が爆発する。

「あ、今のは多分ダンを狙ったんです!」

「一人で飛び出すからだ!!」

「くそお……行きましよう、フルハシ隊員!」



実験場の対爆トーチカの中であんぐりと口を開けるソガ。彼が絶句している間にも、恐竜タンクが実験場へ迫るが……地面が爆発し、地中から巨大で真っ赤な背中が現れたかと思うと、ド級兵器の姿を覆い隠した。

土砂に埋もれて気絶していたダンが、意識を取り戻してセブンに変身したのだ!

「デュアアア!!」

『グオオオオ!!』

セブンの姿を認めた恐竜戦車は、超信地旋回で彼に背中を向ける。

逃げるつもりかと、踏み込んだセブンだが……それはフェイク。

ぐるりと回転した勢いのまま、極太の尻尾が、セブンの側頭部を捉えた!

こん棒で殴り飛ばされたような衝撃に、地面を転がるセブン。

そこへ追撃をかけようと恐竜戦車が迫る。

セブンは回避しようと後退するが……戦車の足元に、気絶した作業員達が倒れているのを、彼の超人的な視力が捉えた。

こうなつては、セブンに選択肢はない。二人を助ける為に、真っ赤な全身に太陽の力を漲らせ、敵の巨体を押しとどめるべく戦車に突撃する!!

姿勢を下げて、筋肉のバネをフルに活かしたセブンが、必死に敵を押し返す。深紅のパワーファイターが、渾身の力で拮抗状態を作り出した。そんな眼前の戦士に目掛け、

身長60m、体重7万トンの巨体で、何もかも全てもろとも轢き潰してしまおうと、エンジン出力を増していく恐竜戦車。その姿はまさしく、ジュラ紀から蘇ったジャガーノート!! 無限軌道が唸りをたてて、濛々と土煙を舞い上げる。

「見ろー! あそこだー!」

そんな常識外の力比べの足元へ、場違いにも躍り出る一両の車。アマギとフルハシの乗ったラリー車だ。

アマギがハンドドルを切ると、ウルトラカーは大地を蹴つて、巨人たちの戦場へとドリフトで滑り込んだ!

助手席からフルハシが飛び出すと、辺りには凄まじい轟音が響いている。それは巨大戦車が地面を抉る音なのか、それとも赤い巨人の筋肉が軋む音なのかは分からないが、なんと壮絶な戦いだろうか!!

あれほどスマートなセブンが、超重量の敵を徐々に押し返していくのを見て、フルハシは思わず舌を巻く。散々に筋力を自慢している自分でも、流石に戦車を押し返すのはいかないな……と。

こりゃあ、ソガが昨晚に歌っていた100万馬力もあながち嘘じゃないらしい。ただ、歌詞の通りにひと捻りと行くには、相手の戦車が大きすぎるようだが。

ともかく、警備隊一の怪力無双は、軽い自信喪失に陥りながらも、倒れていた作業員

達の首根っこを引っ掴むと、ラリー車の後部座席に彼らを素早く放り込んだ。人間である彼には、成人男性2人を担ぎ上げて全力疾走するのが限界だったのである。

フルハシが飛び乗ったかの確認もそこに、アクセルをベタ踏みするアマギ。ギャリギャリと砂利を跳ね飛ばしながら、巨神達の股下を離脱していくラリー車の背中。

「デユ……デユワツ!!」

仲間たちが離れて行ったのを見たセブンは、恐竜の喉元へ膝蹴りをお見舞いする。

だが、恐竜戦車は上体を大きく仰け反らせながらも、カウンターとして、戦車部分の三連主砲を至近距離から撃ちこんだ。セブンの躰で、特大のロケット弾が爆ぜる。

これにはたまらず、大きく後ろへ吹き飛ぶセブン。凄まじい火力だ!!

今度は倒れ伏したセブンに、両目のダイナソアビームで追撃しようと殺意の視線を向けたところで……

横合いから、飛んできた砲弾が、恐竜の鼻先を強かに殴りつけた!

ビームは大きく横へ逸れ、追撃は失敗だ。

「一体なんだ!」

ダイナタンクの車長、キル星人のリーダーが叫ぶと、通信手が素早く状況を把握した。「戦車です……戦車が数台向かってきます!!」

「なんだとっ!!」

恐竜戦車を爆発が襲う。そう、ソガが用意していたのは、何も地雷だけではなかったのである。

「くらえ!! 敵車両に命中!」

ハツハツハ!! 地雷を回避して油断したな、恐竜戦車め! ……言っただろうが、新兵器の実験の為に、マグマライザーを持って来たって!

どうだ見ろ! これが無線操縦戦車群だ!!

マグマライザーを指揮車両として、数台の無人戦車を操る実験を、そのスパイナ―試験にかこつけてやってしまいましたしょうって持ちこんであるのだ!!

無線操縦で、戦車隊が地雷原を避けられるかどうかの試験だったわけさ。

恐竜戦車はいくらサイズが常識外とはいえ、砲塔の代わりに恐竜を乗っけただけの戦車だ。しかも、主砲は固定式だから、戦車の中でも、駆逐戦車や自走砲に近い!!

攻撃の為に正面を向かないといけないなら、数でぐるっと取り囲んで、攪乱してやるまでよ!!

戦車ゲ―で鍛えた、自走砲いじめの手際を見よ!!

「えつと……2号車をこつちで、8号車をあつちに回して、撃て! あ、まだ装填中? オートローダーおつそいな……あ、違う! お前はそつちじゃない! え? 4号車なんでそこいんの? あ、発射ボタン誤爆した……」





これ！俺がやりたかったのは！！

流星は隊長！俺に出来ない事を平然とやってのけるッ！そこに痺れる憧れるッ

！  
ねえ今<sup>N</sup>どんな気持<sup>K</sup>ち？  
ねえねえ今<sup>N</sup>どんな気持<sup>K</sup>ち!?

「おのれ下等民族がッ!!」

キル星人のリーダーは、要塞内部で怒り狂っていた。

元々、限られた物資しか敵地に持ち込めないキル星人にとつて、重量比的にとんでもない爆破効率を叩きだすスパイナーは、喉から手が出る程に魅力的な兵器だった。その試作品を破壊、もしくは強奪し、設計図の奪取の際、障害になりそうな警備隊やセブンにほどほどの痛手を与えて撤退するつもりであったが……もう決めた、地球人は皆殺しだあ!!

「四肢を八つ裂きにして、首は鉄鍋に放り込み、胴は大地に打ち捨て、鳥に腸を食わせてやるわッ!!」

恐竜戦車の装甲に対し、無人戦車の攻撃はほとんど損害を与えられないのだが、攻撃されれば反撃したくなるのが心というもの。機体へのダメージではなく、搭乗員達の敵愾心を巧妙に稼ぐ事で、キリヤマ達は見事に本命から目を逸らす事に成功したのだ。

「ダァー!!」

『グオオオ!?』

そこへ、態勢を立て直したセブンが、死角から恐竜戦車の背中へ飛び乗った!

散々に暴れ狂い、セブンを振り落とそうとするダイナタンク。

しかし頭部に何度も何度もチョップを叩き込まれ、遂にくわえたスパイナーを取り落とす。

これ幸いとスパイナーへ手を伸ばすセブンだったが……恐竜が大きく身を起し、跳ね飛ばされてしまった!!

そして、超信地旋回で素早く後ろを向くと、よろめくセブンに向けて全力攻撃を敢行する!!

三連主砲と、目からのダイナソアビーム、そして……スパイナーをくわえていた為に、今まで使えなかった、最大武器である口からのタンギラーブラスト!!

「ジュアアアアツ!!!」

大きく吹き飛び、地面に大の字で倒れて動かないセブン。完全にダウン状態だ。

敵が動けないのを確認すると、まるで今にもウイリー走行でもしそうなくらいに勢いよく、突進を開始する恐竜タンク。

まさに大重量をそのまま使って、セブンを轢き殺してしまうつもりなのだ!

「マズイ！」

「火力を奴の足回りに集中して、なんとか進路を妨害するんだ！」

「だめだ！　だめだ！」

「砲撃が、弾かれてしまったぞ」

「装甲、非貫通」

無人戦車の攻撃では、とても敵を止められない！

危うしセブン！

「ソガ！　アレを狙え！」

「アマギ!?!」

この人手が足りない時に、今までどこ行ってたんだ!?

彼が指さす方向では、何かが猛烈なスピードで、恐竜戦車へ向かっていくではないか。

あれは……偽装ラリー車？

「危ない！　誰が乗ってるんだ！」

「フルハシ隊員だ」

「撃って、まさかアレをか!?!」

「そうだ、大丈夫だ。僕たちを信じろ！」

信じろってお前……駄目だ、完全覚醒して、顔つきがもはや別人だ。これが漫画だっ

たら一人だけ劇画調になってやがる……

俺が絶句していると、ラリー車から人影がバツッと飛び出して地面を転がるのが見えた。

おい、あれどう見ても1000キロ以上でてるよな？ そんな車から飛び降りるなんて、正気の沙汰じゃない。化け物かよあの人……

「ソガ！」

「分かった！ 隊長、全車両の砲塔のみ、コントロールを俺へ！」

「任せた！」

バリアを展開し、半自動操縦で恐竜戦車の履帯に突っ走っていくラリー車。気付いた敵が、慌てて目ビームを乱射するが、粒子兵装ではバリアを破れない。あのバリアを破るには砲弾が必要だが……もう固定射角の懐に潜り込んだ後だ。遅かったな！

「今だ！ やれ、ソガ！」

「全砲門……撃て!!」

敵をぐるりと取り囲んだ戦車から、一斉に砲弾が飛び出し、寸分の狂いもなく、まさに踏みつぶされる瞬間のラリー車を爆破した。そう、確かにあの車には、スパイナーは積まれていなかった。だが、それは決して爆薬が積まれていなかったのではなく……不安定なスパイナーより安定性と確実性が高く、その代わりに爆発力で大きく劣るスペリ

ウム爆弾が、ダミーとして搭載されていたのだ。

でなければ、単なるハリボテで、メンテナンスを担うアマギの観察眼を騙せる訳が無い。キリヤマは例えハツタリであろうとも、細かい部分でも手を抜く人物では無かった。

そして今や車両に乗っている爆発物はそれだけではなく、もう一つプラスされたものがある。それは……アマギが即席で着発式に回路を挿げ替えた、キル星人の時限爆弾。

これらの爆薬が、恐竜戦車の足元で、一度に爆発すればどうなるか。答えは彼らの目の前にあった。

その全身を吹き飛ばすにはまったく火力不足ではあったが、履帯を構成する金属板を一枚だけ弾き飛ばせばいいとなれば、逆に過剰な威力。

つまるところ、ダイナタンクの足に転用された、アイアンロックスのベース部分は、海中の浮力も込みで設計されていたので、そのサポートが受けられない地上で、サイボーグ恐竜の大重量を支えるのは……少々無理があったという事だ。

陸上戦艦ではなく、海中戦車として使っていれば、このような攻撃に晒される事もなかったらうに……

片方の履帯が千切れ飛び、倒れたセブンの手前で大きくスリップする恐竜戦車。間一髪、セブンの左腕を掠めるように通過していく大重量。地面にくつきりと刻まれた轍の

深さが、突撃の威力を物語っていた。こんな攻撃を食らえば、いかなセブンの肉体と言えど、酷い後遺症が残っていたに違いない。

真横をなにか巨大で重たいものが滑っていった衝撃で、目を覚ましたセブンは、ハツとしたように起き上がると、右手で掴んだスパイナーのカプセルを、敵の戦車部分へ滑りこませる。

そして、指先からウルトラショットを車体下部へ目掛けて撃ちこむと、装甲と地面との間で跳弾した光線が、スパイナーに誘爆した!!

瞬間、激しい爆音と共に、紅蓮の炎が吹き上がり、7万トンもの大質量を、跡形もなく木っ端みじんに吹き飛ばしてしまった!! キル星人の追い求めた新型火薬の実験は、恐ろしい標的艦を吹き飛ばす事で、その威力を証明してみせたのだった。

「ダン! おい!! ダン!!」

戦闘後、土に埋まったダンを、駆け寄った警備隊の仲間達が掘り起こす、

真っ先に駆け付けたアマギが、目を覚ましたダンの手を、力強く握って、晴れやかな笑顔を見せた。

アマギへ小さく頷きを返すダンの心は、自身を心配する仲間達の思いを受け取って、

じんわりと暖かくなっていく。

担架で運ばれながら、ダンは内心で独り言ちた。

（ウルトラ警備隊の任務は厳しい、大きな勇気とたゆまぬ努力が必要だ。アマギ隊員も立派に任務を遂行した。これからも恐ろしい敵は次々と現れるだろう……だが、われわれがウルトラ警備隊魂を持ちつづける限り、地球の平和は守られるに違いない……）



## ひとりぼっちの異邦人（I）

喫茶店の中、ホットコーヒーの香りを楽しみつつ、彼女はふう……と吐息を漏らした。

「面白かったわねえ……さっきの映画」

「え、マジ！……本当？」

「ええ、本当よ」

「別に気を使わなかったっていいんだよ……？ 今更言うのもなんだけどさ」

「だって、ソガ君の見たい映画が良いわって、あたしが言ったのよ？」

うん、そうだ。

それで冗談交じりに『本当に見たい映画』を指さしたら、「じゃあそれを見ましようよ！」と喜び勇んで入っていくくんどもん……我ながら、デートで見るラインナップかどうかは、かなり微妙なラインだと思う……

「別に、ロマンスがあるわけでもないし……思いつきし低俗だし……」

「……あのねえ、ソガ君！ 何か勘違いしていらっしやるようですけど。あたしの事、四六時中シエイクスピアばかり読んでる女か何かだと思つてない？」

「い、いやあ！ そうじゃないよ！ 赤毛のアンも読んでるよな！ うん」

「ハア……呆れた。そもそも、最初に盛り上がったのが、何の本についてだったか忘れたの？」

「もちろん覚えてるとも！ ジュールベルヌの……」

「海底2万里!!」

二人の声が揃い、どちらともなく笑いあう。

「……だからね、あたしだって、ああいったSF作品を大いに楽しむ素養は持ち合わせているつもりよ？ ウエルズも好きだし」

「原文で読破しちゃうくらいにはね」

そう言つて、優雅にカツプを傾ける彼女は、南部冴子さん。京南大学の英文科二年生で……ソガ隊員のフィアンセだ。

今日はそんなサエコさんと久しぶりのデートであり……さつきまで見ていた映画の感想会というわけ。

「まあ、そんなら良かった。ぼくの趣味に付き合わせた挙句、退屈させちゃ悪いと思つてたからさ……」

「むしろ意外と言えば、ソガ君の方よ。あんなの、いつもお仕事で嫌と言う程見ているでしょう？ それこそ危ない目に遭つたことだつて……嫌いになつたりしないの？ 今日のなんて特に……タイトル通りにたつくさん怪獣が出ていたけど」

「……怪獣を？ 嫌いに？ ないない。もしそうなら、今の俺はこうなってないね」

「警備隊の仕事も、好きが高じてって事？」

「うーん……まあ部分的に……というかそれにね、実は怪獣よりも、人類の活躍を観に行ってる節がある」

「確かに今日の映画は、人間も頑張っていたわね！ 宇宙人の月基地を破壊して怪獣達の洗脳を解いたり……そういうえば、主人公達の乗っていたロケットって、ソガ君達がいとも使ってる戦闘機にそっくりね」

「それは偶然だよ……多分」

いや案外、防衛軍がプロパガンダ的に出資しているのか……？ まさかな。

だが……そうか、本来のソガ隊員は、怪獣嫌いだろうなあ……怪獣映画まで嫌いかどうかは知らんけど。

「ねえ……ねえってば、ソガ君！」

「……ん？ 何？」

「またそうやって難しい顔して、失礼しちゃうわ。そんなにあたしとのデートがお嫌なのかしら？」

「いや違う違う違う!! そうじゃないよ！」

「だったら……どうして最近、そんな複雑そうな顔をするの……？」

「いや、あー……その……ぼくなんぞが、こんな幸せを享受していいもんかなと、時々不安になるのさ……こんなかわいい彼女とさ……」

「マア！ お上手ね」

ちよつぱり頬を染めるサエコさん。言葉とは裏腹に、まんざらでも無いようなので、ひとまず誤魔化せたようだ。

そして、そんな彼女を見て、さらに罪悪感が増す。まったくもって悪循環だ。……いかなあ……

そう、罪悪感。

恐らくこれは罪悪感なのだろうと思う。誰かを騙した時に感じる、じくじくした胸の疼きが罪悪感でなくて何だと言うのか。オレにとって、彼女と過ごす時間は、間違いない待ち遠しく心地よい物であると同時に……オレの心を激しく苛んで止まないのだ。

先程の言葉も含め、今この瞬間も、オレは彼女を騙し続けている。

なにせオレは……事実として『ソガではない』のだから……

なにを今更と思うだろう。というか、騙しているという点では、サエコさんだけでなく、警備隊のみんなも同じだ。……だが、彼らに対しては特にこれといって、思うところはない。

本当に、これっぽっちも悪いと思っていないんだよ。本心から。

多分、彼らとは友人であり、仲間である以前に……同僚だからだろう。つまるところ、『地球の平和の為に戦う同志』であつて、オレが本気で侵略者を叩きだす計画を練つていゝるうちは、なにもやましい事はなく、もしも隊長達に『俺の中身がソガ隊員とは別人』だとバレてしまった場合でも、「それがどうした！」と胸を張つて言い切れる自信があるね。

そりゃあ、一人の戦闘員として見た時は、原作のソガ隊員より遙かにスペックダウンだから、糾弾されても仕方ないが、原作知識を使った先回りでトントン、なんならこれまでの成果をもつて僅かにプラスと言つても、少しくらいは許されるはずだ。それぐらゐは頑張つてきたという自負がある。

そして、悪いと思つていないのは、別に他人に対してだけではなく……ソガ隊員本人についてもまったく同じことだ。彼の元の意識だか魂だかは知らないが、この体をいままで動かしていたソガが今どうなつてゐるのかは、全く分からない。入れ替わつただけか、はたまた上から塗りつぶしてしまつたのか……だがどうあつても彼に申し訳ないという気持ちはそんなにない。

だつて、オレがこの体に入つてしまつたのは、オレのせいでもなんでもなく、いつの間にかこうなつちやつてたんだから、仕方ないだろ!! というのが、オレの偽らざる主張だ。その上で、自分の出来る範囲でなんとか地球とセブンの為に戦つて来たんだか

ら、感謝して欲しいくらい……というのは果たして傲慢か？

むしろ、あのソガ隊員とかいうナイスガイの化身なら、「俺に出来ない形でダンを救ってくれてありがとう」と感謝の言葉さえ述べてくれるんじゃないか、という淡い予感がある。自分を正当化する為の勝手な妄想かもしれないが。いや……「俺の体なんだから、せめてもう少しうまく使えんのか」くらいは言うかも知れん。

とにかく、我ながら随分と破綻した性格をしているという自覚はある……だが悪いと思えないんだから仕方ないじゃないか。

オレが真に申し訳ないと思うのは、オレの計画で余計に巻き込まれたり、手が届かなくて命を落とした人々に対してだけだ。それにしたつて、オレの未熟さ故の申し訳無さであつて、ソガという身分を偽っている事とはなんら関係が無いのだ。オレは侵略者と戦うという職務に対してまっこと忠実であるので、誰にも非難される謂れは無い。

だが……だが、彼女だけは違う。

彼女にとつて大事なものは、『地球を守るウルトラ警備隊員』ではなく『ソガという一人の男』なのだ。

自らの生活を共にする、生涯の伴侶としてソガを見初めたのであつて……彼女が愛したのは、残念ながらオレでは無い。ソガなんだよ。

なのに、中身は別人でしたなんて……これが、ひどい裏切り以外のなんだつて言うん

だ？

……かといって、彼女に対して不誠実だからと、勝手に二人の関係を終わらせてしまう権利も無い。

俺達が原作における最終回、ゴース星人の侵略を跳ね除けた時……オレの精神と、俺の肉体は果たしてどうなるのか？ このままソガとしての人生を過ごすのか、それともまた精神だけ分離して元のソガの人格が戻って来るのか……オレにはさっぱり分からない。

だから、もしもソガの意識が戻って来た時に、彼の体と、社会的地位と人間関係をそっくりそのまま返せるようにしておく責任があるのだ、オレには。

そういう訳で……彼女とのデートだって……きちんとかなさなくてはならない。オレがポカをやってサエコさんに振られたら、どうやってソガに土下座するんだ！ その時オレは、そこに存在しているかどうかも分からないのに……？

そして……そんな事を考えながらデートするというのも、相手の女性に対して不誠実極まりない。かといって、心の底から彼女との時間を満喫するというのも憚られるとうか……それはそれでどうなんだ？

「そろそろ……行くうか」

「ええ、まだまだ時間はあるんですもの。遊びつくさなきや勿体ないわ」

「それでは、お手をどうぞ……お嬢様？」

「もうウフフ……随分と気障なナイト様ですこと」

おどけて俺が差し出した腕を、これまたお上品に掴むサエコさん。

そりやお嬢様ではないにせよ、彼女もれっきとした名門大学のお嬢様には違いないのだ。

案外、彼女は俺がこういう芝居がかつた仕草で対応するのを喜んでくれる。

この時代からすると、相当なひょうきん者に見えるんだろうな。

そして、こんなにかわいい彼女の笑顔を見る権利を、僅かな間とは言え、彼から奪ってしまっているという一点においては、ソガに対して本当に申し訳ないと思う。心から。

「防衛軍一のプレイボーイを捕まえて気障とはなんだい、気障とは」

「シャイボーイの間違いじゃなくって？」

「言つたな……コイツう！」

素晴らしい。見事なバカツプルだ。

そしてとても楽しい……そう、楽しいんだよ。残念ながら、な。

だが、悲しいかな……他人の彼女だ。サエコさんは俺を見つつ、オレを見てはいない。

「……ねえソガ君……悩みがあるんじゃない……？」



「え…………？」

「さつきはああ言ったけれど、貴方があたしを楽しませようとしてくれるのは、分かっているつもり。でも…………あたしの顔を見る度にそんな辛そうな顔されたら…………ね」

「…………」

「あたしには言えない事？　もしかしてお仕事の…………」

そうして顔を伏せるサエコさん。

…………ああ、物憂げな顔もいいね、とても様になってるよ。

だからこそ胸が痛いんだ。

「サエコさん、ボクは…………僕はね…………その…………ウルトラ警備隊だろうか？　君も知つての

とおり、危険な仕事だ。何かあるか分からない。怪我や…………いや、それだけじゃない。

もしかしたら、君を危険な目に遭わせてしまうかもしれない。それがね…………怖いんだよ

…………」

「ソガ君…………」

そう、これもまた本心だ。相手が大切な存在であればこそ、ウルトラ警備隊という職業は枷になる。

ソガは、この事について、どう思っていたんだろうか…………？

今度、ノガワやイシグロ隊員に聞いてみてもいいかも知れないな…………

俺の腕の中で、サエコさんが顔を上げる。眉が上がって、ちよっぴり怒ってるかも知れない。彼女の瞳は何時だって半円を描いて、にこやかに見えるから、分らないんだ。「あんまり見くびらないで、ウルトラ警備隊の妻になる覚悟は……とつくに出来ているのよ」

「……そう。そうか、それは……失礼したよ。ごめん」

俺を見返す彼女の瞳は、とてもとても真つすぐで……

「……ねえソガ君、次はアレに乗りましょうよ!」

「よーし、目を回しても知らないぞ! 警備隊の妻に相應しいか花嫁試験だ!」

今は……今だけは、少しくらいこの時間を甘受しても罰は当たらない。

「アハハ!! アハハ!!」

「ちよ、ちよつと! 回しすぎ……ソガ君……ううっ!」

「あ、ヤバ!! ……ごめん!!」

宇宙人だろうが地球人だろうが、デート中に浮かれポンチになるのは銀河共通だと分かっちゃったよ。

ダンの事笑えないなあ……

## ひとりぼっちの異邦人（Ⅱ）

「いくらなんでも、はしやぎすぎだわ……」

「反省いたします……」

「うむ、よろしい」

遊園地でしこたま遊んだ後、彼女を車で大学に送る。

なんでも部活の用事があるらしい。

日曜日の午後にご苦労な事だ。バイタリテイーの塊か？

「……ごめんなさいね、送り迎えに使ってしまつて……」

「いいんだ。メツシー君でもアツシー君でも、好きなように使つてくれよ。俺の手が空

いてる日限定だけでも」

「なあに？ メツシーやらアツシーつて。新しい怪獣？」

「……アシスタントのアツシー君か、召使いのメツシー君」

「あらやだ、あたしが天下の警備隊員を侍らせて、女王様気取りつて事？」

「そんな、滅相もございません、陛下。……ボクチャンしが無いトランプの兵隊なの」

「……よろしい！ 誰ぞ今すぐこの者の首を刎ねい！」



「ハア……そこで婚約者の方が大事と言えない辺りが、ソガ君なのよ。そう思わない？

イチノミヤさん」

「今のは僕もどうかと思うね」

「……朴念仁で悪かったな。」

くすくすんと、わざとらしい泣き真似をしながら去っていくサエコさん。彼女が用事を済ますまで暇になってしまった……哀れソガ。

「……君たちは、どちらも僕の得難い友人に違い無いが……二人同時に会うと、胸焼けがしそうだ。なんとかならないか？」

「じゃあ、俺の暇潰しに付き合っつて貰おうか。余が満足すれば、考えてやらんこともない」

「どうせ元から僕に用事があつたんだろ。よく言えたな」

車から降りて、二人で石畳の構内をゆらゆらと彷徨う。

誰もいないキャンパスに、さくさくと雪を踏む音だけが響き、やがてイチノミヤが、白い吐息と共に、ポツリと呟いた。

「……どうせなら僕の研究室に来ないか。紅茶くらいは出そう。今日も寒いからな」

「お、そりゃいいな。是非ともご相伴に預かろう。しかし、お前が紅茶党だったとは……アマギはいつもコーヒーばかり飲んでるから、研究者という人種はコーヒー党しかい

ないのかと思つていたよ」

「そうか彼が……なに、僕だつて強いて言えばの話さ。……キミはどうなんだ、ソガ？」  
「俺はどつちでも構わん。なんせ、違いの分からない男だからな。インスタントばかり飲んでるよ」

「……淹れてやろうという気が萎える言いぐさは、やめて欲しいものだ」  
顔をしかめて落胆の声を発するイチノミヤ。

「そこまで気を使わなくていいって事で言つたんだけどなあ……」

「え、なに？ そんなに本格的なの？ ダージリンとか？」

「いや、恐らく卒業生の誰かが置いて行つたものだが……いつの、そして何という茶葉かすら分からない」

「その言い方は、飲んでやろうという気が萎えるから止せ……」

「ハツハツハ……」

とりあえず、こんな軽口が言い合えるくらいの仲にはなつた。

彼と出会つてからどれくらいになるかなあ……転生してきて直後くらいに、京南大学について調べまくつて、イチノミヤという学生が、入学したばかりなのにもう論文を発表しているのを見つけたのだ。

そして、まだ研究室入りしていない彼の下へ、「この論文を書いたのは誰だあ！」と突

撃をかましたのである。

プロテ星人より先に唾つけとこうと急いだおかげで、なんとか間に合った。ほぼタツチの差で向こうも接触してきたようだが……ここで重要なのは、地球人にも、自分を認めてくれる存在がいると彼が知る事だ。

このイチノミヤ、アマギやアンダーソンに勝るとも劣らない天才青年で、理論だけとはいえ、宇宙人すら認めるくらいの完成度を持つテレポーション技術を、この年で確立してしまうくらいの頭脳を持つ。

ところが彼は、天才であるが故に周囲から理解されず、そのあまりにオーバーテクノロジーすぎる電送技術を学者達から否定されてしまった事で、完全な人間不信に陥っている。

そこへ、彼の頭脳に目をつけたプロテ星人に付け込まれ、奴に騙されて利用されてしまう……というのが原作の流れ。

問題は……このプロテ星人が強過ぎて、セブンだけでは倒せないという点だ。

原作のセブンは実体のある幻覚に翻弄されて、全く相手にならなかった。じゃあ、どうやって倒したかと言えば……星人の裏切りを知ったイチノミヤが、最後の最後で、自分の命を掛けた妨害によって、星人の本体を巻き込んで死ぬのだ。心の底から嫌って軽蔑していた地球の為に。

そんな結末……認められるか。

「そら、ティーカップもよりどりみどりだ。好きに使ってくれよ」

「なんでも置いていくな、卒業生……」

イチノミヤによつて、くすんだ磁器に芳しい液体が注がれていく。

彼の手つきに感心しながら、何気なく見渡した研究室は、きちんと整理されており、彼の理路整然とした脳内を伺わせた。そんな中で、一角だけ周囲と違う雰囲気のある場所がある。鉢植えや水槽に、緑色の観葉植物が繁茂しているではないか。

「なあイチノミヤ。生物学は専門外だろ？ ……実験に使うのか？」

「ん？ ああそれは、僕の趣味のスペースだ」

「趣味がガーデニングとは……てかこれ、全部アロエか？ アロエ好きなのか？」

「……ハハハ、違う違う。それは別にアロエを育てているんじゃない。いや、植わっているのはキミの言う通り、アロエで正解だとも」

「どういうこと？」

「よくみてくらん」

首を傾げる俺に対し、彼は水槽の側面、アロエが植わっている土を指さした。

「これは……あ、土の中に何かいる！ 虫の幼虫か？」

「セミだ」



「セミイ!? セミ飼ってるのか、お前!」

「そうさ、小学生以来の趣味だ」

「年季入ってんなあ……」

イチノミヤは事も無げに言い放つが、そもそもセミの幼虫って飼えるものだったのか?  
?

成虫の方はよく聞かすが……幼虫の方って……

「セミが、好きなのか?」

「好きさ……時にソガ。セミの寿命は知っているか?」

「え? 確か、幼虫時代が5年だか7年で……成虫は7日だっけ?」

「ハズレ……それは俗説だよ。成虫でも平均一か月は生きるし、幼虫は5年以下で出て来る場合もある」

「え、そうなの?」

「もつとも……正式には知られていないがね……世の中では、ソガの言った事が本当さ。今はまだ」

椅子に深く腰掛けたイチノミヤは、遠い目をした。

「むかし……凶鑑にセミが土から出てきて1週間しか生きないと書いてあつて、父に聞いた事がある。本当なのかって……だつて、あんまりに可哀そうじゃないか。ずっと暗

い土の中で何年も過ごし、してようやく出てこれたのに……たったそれだけの命……」

「親父さんはなんて？」

「じゃあ確かめてみなさい、と言ったよ」

「確かめるってお前……どうやって」

「二人でセミを山ほど掴まえて、背中に墨で番号を描いては逃がしたよ。そしてまた捕まえる」

「え、それマジでやったのか……？」

一回野に放したセミをもう一度捕まえられる確率って、どんくらいなの？

考えただけで気が遠くなる……

「今から思えば、男手ひとつで僕を育てるのも大変だったろうに……よく付き合ってくれたもんさ。でも、結果的に、捕まえたセミの背中に、4週間も前に書いたはずの番号が書いてあったんだ。……あの時は父の方が驚いていたね」

「子供を納得させるつもりで付き合ったら、俗説がひっくり返っちゃったもんな……」

「あの時僕は、世の中で信じられている真実というものが、突き詰めればそうではない可能性がある、という事を知ったのさ。ハッハッハ、常識を疑う嫌な子供だね……あれ以来、セミの飼育にすっかりハマってしまったというわけさ」

「イチノミヤ少年のルーツが聞けて、俺は面白いぞ？ ……いい親父さんだったな」

「僕のような男こそが、何かを成し遂げるのだと父は言ってくれたものだが……せめてこの入学式を見せてやりたかったよ」

「……」

彼の父が、大学の入学直前に亡くなったのは、いつだったかに聞いている。彼は特待生の奨学金で授業料を免除されながら、ここに通っているのだ。

「あのセミの幼虫はね、僕なんだ。どんな事があつても暗闇でじいっと黙つて耐え忍び、いつか大空をはばたく時を待っている……実際に飼育してみると、それが如何に大変か。それこそ僕なんぞに捕まつて、こんな水槽に入れられたと思つたら、次の日には突然死んでしまう奴もいるし、そろそろ羽化直前かなと思つていたら、冬虫夏草にやられていたり……」

そういつて彼は、飼育行為を自嘲する。確かに、セミたちからすれば、勝手に掘り返されて文句の一つも言いたくなるかもしれない。

「でも、中にはあの夏空で、僕はここにいるぞと大声で叫び回る権利を勝ち取つた奴もいる。彼らの声を聴くと……頑張れたんだ。まだ見ぬ誰かが、いつか僕と歌を歌つてくれるはずだ……とね。そして、君や教授とついに会つた」

「よせよ……照れるじゃないか。俺はお前さんと共鳴できる程おつむがよろしくない。実際に歌つてやっているのは、アマギだろ」

俺は、アマギから預かった資料をイチノミヤに渡す。軍事機密に関する事は話せないが、それ以外の技術に関しては、彼らの間でやり取りをしているらしい。既に彼は、ウルトラ警備隊の研究顧問として内内定を貰っている状態だ。そのうち、イワムラ博士にも紹介するつもりである。

そして今日渡したのは、アマギから彼への挑戦状であり、救援要請といったところか。「だが、学会で散々に貶された僕の論文を、実際に見つけてくれたのは君だ……なんだこれは？」この回路は……すごいな、コンピュータの言語を音声に変換するのか、これの何が問題なんだい？ 彼に僕の助言が必要とは思えない」

「馬鹿に信じて貰って嬉しいかね？ ……なんか、搭載するスペースに対してデカくなりすぎるんだと。ここに描いてある範囲にこの部品を納めて、かつ動力はこっちから引かないといけない……らしい」

「なるほど、この宿題は中々に手強いな……それと、本当に馬鹿なら、あそこまで真剣に信じられるもんか。運用や問題点まで、きちんと理解できる程度に読み込んで貰った相手なら、充分に評価者足り得る」

俺は実際にあの電送機が動いてる所を見てるからなあ……信じるという点ではプロテ星人より勝っていたわけか。

「……なあソガ」

「なんだ？」

「ウルトラ警備隊や防衛軍は……現状、宇宙人に対してどんな方針でいるんだ？ 君達個人は、ペガッサ人との交流経験があると聞いたが……組織としての見解は？」

「なぜそんな事が気になる？」

「それは……科学者の卵としては、外宇宙との技術交換等に対して、将来の職場に賛成の余地があるかどうか、聞いておいて然るべきではないかな？」

「広報部が仕事してるだろ」

「キミの口から……聞きたいんだ」

イチノミヤの真剣な瞳が俺を見据えた。

もちろん、彼が本当に聞きたい事は分かっているんだ。敬愛する教授が宇宙人である事が、警備隊員である俺にバレた時、どうなるか……イチノミヤは、プロテ星人であるニワ教授が、平和的な異星人だと思っている。

「これはオフレコにして欲しいが……正式に発表されているキュラソ連邦とだけじゃなく……ワイルド星とも交流があるんだ。ペダン星とアンノン星とは相互不可侵条約を締結しようという動きもある。まあ、双方ともに返事が来るかは怪しいがね。というか……地球に半分帰化した宇宙人というのは、結構いる」

「なに！ 本当か！」

「地球防衛軍の装備が、やけに先進的だと思った事は無いか？」

「つまり……今までも身分を明かして技術提供を行った宇宙人の協力者がいる……と？」

そこまでしつかり明言は出来んのだなあ……というか、そういった人々がどうしているか、オレも全然把握してないし。俺が黙っていると、これ以上は守秘義務に抵触すると悟ったイチノミヤが、ため息をついて追及の目を止めてくれた。彼としても、下手に藪を突いて俺から反撃されると困る立場でもあるしな。

俺だけが一方的に痛くもない腹の探り合いをした事に、ちよつとだけ後ろめたさを感じて、窓辺から外を見た。

大学通りの向こう側に見える空き地で、子供達が元気に駆け回る声が聞こえる。

「今の地球は、なんとか宇宙社会に進出しようとしている真つ最中なんだよ……見ろイチノミヤ……お前もあんな風に、空に向かい両手を広げて、鳥や雲を掴もうとした事があつただろ……あれが地球だ。お前が羽化を待つセミだと言うなら、人類は宇宙と言う夢に、伸ばした指が届くと信じている、無垢な子供の段階なのさ……俺達の科学力はあまりに歪で、拙い」

「……」

「俺達には、お前のような人材が必要なんだ。凶鑑を広げて、宇宙の何処かには、地球よ

りもつときれいな花が咲いているの、と聞く子供に、じゃあ一緒に確かめてご覧、と言  
えるような奴が」

「ソガ……」

窓枠に持たれていた体を起こし、俺は懐から封筒を取り出した。

今日の目的は、これを彼に渡す事でもある。

「お前に、渡しておくよ……」

「なんだい？ これは」

「それはな……」

研究室の扉が勢いよく開いて、大きな音をたてた。

見れば戸口で血相を変えたサエコさんが立っている。

「二人とも……ここにいたの……」

「ナンブ君！」

「サエコさん！ どうしたんだ！」

「その……いえ、なんでもないの……見間違いだと思うわ……」

なるほど、やっぱり今日だったか。

「あの、イチノミヤさん、お隣の部屋は……？」

「教授の書斎だ。僕の机も置いてある」

「そう、そうなの……じゃあやっぱり気のせいね。間違えて入ってしまった……」  
「……そうか、機材が沢山光っていただろう？」

「え、ええ……やっぱりそうでしたの……ごめんなさい、理系の研究棟はあんまり覗かないものですから……」

「用事は終わったの？」

「ええ、バツチリよ、お待たせしたわね……帰りましょう、ソガ君」

ああ、目的は果たしたし、帰るとするか。



## ひとりぼっちの異邦人 (Ⅲ)

果てしなき宇宙の謎を求めて、今日も幾多の人工衛星が地球の周りを回っている。この年、日本のある大学が教育機関としては史上初めての科学観測衛星の打ち上げに成功した。

「この衛星の打ち上げをリードした京南大学物理学科の偉業は、各界から高く評価され、一介の私立大学に過ぎなかった京南大学の名は、一躍世論の注目を集めている。……どうだ、おい！ ……見たか、これ。すごいじゃないか！」

科学雑誌を高らかに朗読し、それをまるで自分の手柄であるかのように喜ぶソガ。

絡まれたフルハシはと言うと、非常に鬱陶しそうで、雑誌で顔を隠し、完全に拒絶の態勢だ。ところがその雑誌を押しつけてまで、ニヤケ顔で追撃をかけるソガ。

「うるさいなあ、すごいのはわかってるよ」

「チツチツチ、わかってないねえ……」

しかめ面のフルハシに、アンヌが堪えかねたように笑い声を漏らした。

「フフフ……フルハシ隊員、わかってあげなさいよ！ ねえ、ソガくん！」

「ソガクン……？ ソガ君とはなんだ！ 君とは、ソガ君とは！ もうお忘れかもし

れませんが、僕の方が君よりも入隊は先であつてねえ……」

先輩に対してその舐めた態度はなんだと、自分を棚に上げて詰め寄ろうとするが……途中ではたと気付く。

「えっ……もしかして、キミわかつてんの？」

「ナンブ・サエコさん……京南大学英文科二年生！……ウフツ、ウフフツ……！」

「エへへへ……」

すつくと立ちあがつたかと思うと、誰その名前を諳んじて、得意げな顔をするアンヌ。はたしてアンヌの情報は確かだったようで、ソガとヒミツを共有し、二人だけで笑い声をあげる。

「チツ、ヘンな笑い声出すなよ!!……で、何なの、そのサエコさんって……？」

一度はムツとして雑誌の陰に顔を隠したフルハシだったが……好奇心には負けたのか、ニコツと顔を出して、興味深々といった様子で尋ねる。

「未来のソガ夫人。ねー！ ソガクン！」

「おい、ソガ！……ホントか！ おい……」

照れ隠しに下手な口笛を吹くソガ。今世の彼は本当に楽器の才能が無い。

「10日前に婚約したんですって」

「……チキシヨー」

あいつばかり……と悔しがるフルハシを尻目に。眉間に眉を寄せて、我関せずといった様子のアマギへ向かうソガ。

「おい見たか、京南大学だぜ」

「それは、あまり自慢できんな……」

「どうして？ イチノミヤの大学だぞ？」

「そいつが今、司令部で問題になってるんだ」

「えっ、サエコさんが？」

慌てふためく、ソガをアマギが小突いた。

「バカ！ イチノミヤのほうがだよ！」

---

帰還したダンが、参謀室でキリヤマとタケナカに報告していた。

「秘密調査部からの資料です」

「うむ……それで二ワ教授のことは？」

「やはり、偽者でした」

「するとスパイか……」

懸念した通り、事態は深刻であった。

タケナカはソファに座り込み、タバコに火をつける。

「そうだとして、いったいどこの国の？ それにあの科学衛星は何のために打ち上げたんでしょう？」

「そこだよ。第一あれは地球の科学力を遥かに超えている」

「もしくは……宇宙人では？」

「この際、衛星の内部も調査してみますか？」

「こいつが大学の教材用という名目だけに、ちよつと厄介だなあ……」

軍が確たる証拠も無しに権力を振りかざして、教育機関の機材を接収するなど、文民統制崩壊の誹りを免れぬ。

これが相手の意図した事であるならば、非情にデリケートな部分を実いてくることこの上ない。

なんと狡猾な策であろうか……

---

平日の京南大学、その構内にて。

「きたわよ！ ソガ君！」

二階から、ソガとサエコが見つめる先で、イチノミヤとニワ教授が、何事かを語らいながら研究棟を出て行く。

「サエコさん、僕と一緒にイチノミヤを助け出してもらいたいんだが……」

「助けるって……?」

「君が日曜日に見たという怪物の影……、ニワ教授のもうひとつの姿かもしれないんだ……」

「えっ……」

彼女の顔には、そんなまさか……という驚愕と、やっぱり……という納得の色が混ざり合っていた。

「イチノミヤは利用されているんだ。宇宙人に……正門にウルトラ警備隊の車が止まっている。そこまでイチノミヤを連れ出してもらいたいんだ。あとはダンがよくしてくれるだろう。その間に、俺が教授の研究室を探る」

「そんな事でいいなら、喜んで。イチノミヤさんには……とても親切にしてもらったんですもの」

「キミを巻き込んでしまつて……すまない」

「この前も言つたでしょう? あたしは……ウルトラ警備隊の妻になるのよ」

頼もしき婚約者に頷きを返して、俺達は別々の方向へ歩き出した。

構内を一人歩くイチノミヤの隣を、サエコの運転する車が並走する。

「イチノミヤさん、お話があります」

「ナンブ君か、今は教授の頼まれごとを済ませなきゃならなくてね……悪いがそんな暇はない」

「その、教授の事です」

「そう言えば、イチノミヤは素直に車に乗って来た。本当に教授を尊敬しているらしい。」

彼を助手席に乗せたサエコが単刀直入に切り込んだ。

「信じていただけないかもしれませんが、ニワ教授は宇宙人かもしれないんです」

「それで、僕をどこへ……?」

「ある人に頼まれて、あなたを連れ出すように言われたんです」

「……ソガか……止めてくれ、ナンブ君」

「正門に同僚のモロボシさんが来ています……ほら、ソガ君から聞いた事あるでしょう?」

「止めてくれと言ったんだ! 聞けないと言うなら……」

普段の温厚さからは想像できない程に激昂したイチノミヤは、横から運転するサエコ

のハンドルをつかみ、強引にアクセルを吹かす。

「は、離して……!」

スピードを上げ、ポインターで待機するダンの目前を素通りしていく真つ赤なスポーツカー。

裏手の墓地まで走った車は、イチノミヤが勝手に急ブレーキを踏んだ事で、ようやく止まった。

「教授が宇宙人だということを、なぜ知ってる!？」

「なんですって! それじゃあなたは……!」

「教授が宇宙人なら、どうだというんだ」

イチノミヤとサエコの視線が交叉する。

「だったら……教授は侵略者じゃないの? ペガツサやキュラソーの人達のように、お友達になれるかもしれないの? 本当に?」

「ハツハツハ、教授は違う。彼は僕の電送移動機を作ってくれた。地球の学者が見向きもしなかった電送移動の理論を、あの宇宙人だけは認めてくれたんだ! ソガもアマギも、地球の科学で実現するのはあと数十年はかかると言ったが、教授と僕は、もう既に作り上げたんだ! 実物を!」

「それならなおさら、彼らに身分を明かして、協力すればいいじゃない!」

「君たちに何がわかる? ……僕は、もはや君達以外の人間を信じちゃあいない。ウルトラ警備隊が話のわかる組織という事くらい、あいつを見れば分かる。だが、上層部までそうだといい切れるか? 教授が捕まった後、酷い拷問や、解剖を受けないと誰が保証できる? 奴はあくまで隊員であつて、長官でも参謀でもなんでもない! ……今の地球で宇宙人といえば、すぐ侵略者だ。残念ながら、この星での真実とは、より大勢から見える側面の名称でしかないという事を、僕は知っている、知っているんだ! 僕にとつて大切な人くらい、自分で選ぶさ! もういいから、僕たちの事は放つておいてくれ!」

イチノミヤは、サエコの制止を振り切り、ポインターが到着する前に姿を消した。

「あれ? おかしいな、机の下がスイッチじゃなかったっけ?」

ニワ教授の研究室で、ブツブツと独り言を呟くソガ。

本来ならニワ教授を問い詰めて、連行するのが彼に課せられた任務なのだが……教授が黒である事は確かめるまでもなく知っている上、連行など土台無理な話なので、ソガは最初から電送機を破壊するのが目的だった。

だが、当てが外れたらしい……

「無駄な事はおよしなさい、ソガ隊員。それは認証の無い者では、反応しないように作つ



てあります」

突然、背後からかけられた声に、振り向くソガ。

そこには白衣に身を包んだ初老の教授が、穏やかな笑みを湛えて立っていた。まるで、最初からそこに存在していたかのような佇まいで。

まったく物音も無かつたのに……どうやら時間切れらしい。

「いやすみません教授、イチノミヤがあんまり自慢するもんで、つい気になって……」

「下手な誤魔化しは無用です。天下のウルトラ警備隊が、単なる泥棒をするもんですか……私に御用なのでしょう？」

下卑た笑みを浮かべて悪あがきを試みるソガに対し、少しばかり呆れた様子で肩をすくめるニワ教授。

すると、ソガの顔からは、先程までの薄っぺらい笑みが立ち所に消え失せ、堂に入った様子で口の端を吊り上げた。

「感づかれたのならば、話はしやすい。ニワ教授とは仮の名……シリウス系第7惑星のプロト星人というのが、貴様の正体だろう」

「……で、私がそのプロテス星人であるという証拠は？」

「貴様が打ち上げた科学衛星から、プロト星に送った超音波を逆探知したのが、最初のきっかけ……。宇宙人でもない限り、地球防衛軍の秘密基地などには、用はないはず

だ」

「なるほど……で、私とその宇宙人だったら……？」

「しばらく眠ってもらおう……と言いたいが、貴方には効きそうに無いので降参……死ね！」

ソガは降参するフリをして、後ろ手に隠したウルトラガンで奇襲をかけた。教授の顔面に乱射するが、弾は当たってもまったく通用しない。

まるで、光線が端から吸い込まれていくような、形容し難い手応えだ。

光線銃が通用しない等、常人であれば驚愕に値する光景なのだが……それを見せつけられたソガはと言えば、やっぱりな、とても言いたげな、どこか達観した表情でため息をついた。

流石は精鋭、肝が据わっている事だと感心した教授は、すっかり観念した様子のソガ隊員へ、見せつけるようにブイサインを突き出した。

それは決して挑発の意味ではなく……

「次は私の番だね……」

「ヴヴッ!!」

たちまち教授の指先から、2本の光線が発射され、ソガの胸を貫いた。

悶絶し、床に倒れ込む背広の隊員。

気絶した侵入者を跨いで、ニワ教授は机の下のスイッチを操作する。

書斎の本棚がぐるりと回転し、その向こうに、謎の機械が光を放つ、隠し部屋が出現した！

教授が、ソガの胸ポケットを弄ると、案の定、発信機が仕込んであるではないか。

用意周到な事だと笑みをもらした教授が力を込めると、彼の手の内で、小さな機械がバキリと音を立てて粉碎されるのだった……。

## ひとりぼっちの異邦人（Ⅳ）

ニワ教授の研究室を何者かがノックする。

「誰だ？」

「イチノミヤです」

教授がドアを開けると、焦った顔のイチノミヤが息せき切った様子で話し始める。

「教授、すぐ出発しましょう。ウルトラ警備隊が追ってきます！」

「わかってます。宇宙船は30分後に出発します」

「迎えが来るんですね！ そうか……とうとう来たか！」

勝手知つたる様子で隣の隠し部屋へ移動すると、電送機の前で嬉しげに両手を広げるイチノミヤ。

「アツハツハ……！ これで地球を脱出できる……ハツハツハ……僕たちが行った後、この電送装置や科学衛星はどうするんです。置いていくんですか？」

「もちろん、破壊していくよ。……ただ、あの衛星だけは持つていくがね……」

「あんなもの、2人でいくらでも作れるじゃありませんか……」

口調から、彼があの衛星を心底どうでも良いと考えているのが分かる。イチノミヤに

とつては、恩師との輝かしい未来以上に大切なもの等、もはや存在しないのだ。

しかし、ニワ教授からすれば、まったくの逆であった。

「そうはいかん……あの中には地球防衛軍の各国の秘密基地を観測した戦略資料が収められているねえ……」

「えっ!!? それじゃ、あの衛星は……」

「さよう、科学観測衛星というのは表向き。実は、地球侵略のためのスパイ衛星だ。君の協力で、その目的も完了した。あれだけの資料が、プロテ星に持ち込まれば、地球を侵略するなど、赤子の手をひねるようなものだ」

教授からすれば、なんとという事も無い事実の吐露であつたのだが、それを聞いたイチノミヤの変貌ぶりは劇的だった。

先程まで喜色に満ちあふれていた顔は、呆然を通り越し、今や絶望の谷へ突き落とされた直後と言える程、硬直しきつている。

「あなたは、僕の知識をそんなことのために……」

「何を驚いているんだ。君があればほど軽蔑していた地球だ。どうなろうと知ったことではないだろう?」

「地球を……!」

「何をするっ!?!」

ニワ教授に掴みかかるイチノミヤ。

二人は本棚の回転扉を突き破り、揉み合いながら書齋へ逆戻りする。

「教授、衛星は渡せません！」

「これはまた……」

乱れた白衣の襟を正しつつ、やれやれといった表情のニワ教授。

「あれほど地球を脱出したがつていた男が、今度はその地球を命がけで守ろうというのか！ いやはや……地球人というのは、まったくわからん生物だ……」

「お願いです、さつき言ったことはウソだと言つてください……あなたは侵略者なんかじゃない！ 僕がただひとり信じるのできた……優れた宇宙人の科学者だ！」

イチノミヤは、教授の足に縋り付き、幼子のように懇願した。この宇宙で、いまやたった一人信じられる、第二の父とも言える人物が、悪魔のような侵略者だなんて、そんな事、認められよう筈が無かったのに……

「イチノミヤ君。君の能力は私も欲しいとは思うが……やむを得んな」

「……教授！」

他ならぬ、教授本人からハッキリと告げられた、悲しいまでに揺るがぬ訣別であった。湧き上がる悲しみと怒りのまま、イチノミヤが教授を突き飛ばすと、老教授は机の下に倒れ込んだ。

スツクと人影が立ち上がった時、もはやそこには慣れ親しんだ白衣の紳士は居らず、異形の宇宙人だけが、妖しく発光する巨大な目玉で、ただイチノミヤを睥睨していた。

半透明なヒレに飾られた顔からは、今や何の感情を読み取る事も出来ず、ざらりとした彼の肌が、電灯の下でぼんやりと浮かび上がる。

初めて見る教授の正体に戦く彼の背後で、戸口に金属製のシャッターが下りて、逃げ道は完全に閉ざされてしまった。

枯れ枝のようだった恩師の腕は、見る影も無いほど、おぞましく隆起して、イチノミヤの首を締め付けた。

哀れな青年は、遠退く意識の中で、彼の大好きなニワ教授は、もう二度と戻ってこないのだと、遅ればせながら理解した。

ちようどその時、シャッターをウルトラガンのバーナーアタッチメントで焼き切り、ダンが研究室に転がり込んでくる。

失神したイチノミヤを放りだし、電送機で逃走を図るプロテ星人の姿を確認するや、すぐさまウルトラアイで変身する。

まさか相手がセブンだとは思っていなかったプロテ星人は、僅かにたじろぐ。室内では不利と見たか、窓ガラスを突き破って逃げる星人とそれを追うセブン。

巨大化したセブンとプロテ星人の死闘が始まった。

……しかし……

「ハツハツハツハ。いつまでも私の抜け殻と戦っているがいい……」

割れた窓ガラスを伝って、赤い液体が逆再生のように人型を作ると、それは白衣を着た二ワ教授の姿をとった。外でセブンが戦っているのは、言わば質量を持った残像であり、本体はまんまと部屋へ舞い戻ってきたのだ。

もはやセブンなど、相手にする価値も無いとばかりに、悠々と電送機に入る教授。そこへ、意識を取り戻したイチノミヤが近づいてくる。なるほど大方、ようやく力の差を理解して、もう一度我々と手を組む気になったのだろう。所詮は自分の利益ばかり追求する地球人か。まあ彼ほどの逸材なら、助手として連れて行ってやるのも吝かではない。

「イチノミヤ君。やはり私の星に来たいのか？」

「残念ながら教授……二人同時では再生不能ですよ」

「なにッ!？」

言うや否や、電送移動機へ飛びかかるイチノミヤ。

まさかの行動に、教授が止める間もなく始動する電送移動機。

この電送機は、二つ以上の生命を認識できるようにはなっていないかったのだ。

分解された彼らは、小さな電子の粒となって混ざり合い、何処とも知れぬ、宇宙の闇



の中へと解けて行つた……

「かが……えい……より……へ……」

ズルズルと引き上げられていく感覚。

まるで錨を巻き上げるようにゆつくりと、覚醒していく。

「ごぼりごぼりと、意識が泡となって体を包み……」

「(ハ)は……」

気が付くと、ソガは全身が椅子のような機械に縛り付けられていた。

首を回すと、白衣の男の背中が見える。

「科学衛星より宇宙船へ。到着予定時間を繰り上げてもらいたい。地球防衛軍が35分後にここに来る」

「了解。準光速に切り替え、25分内に到着する」

教授の肩越しに、モニター画面に映った宇宙船が見える。どうやら仲間と連絡を取っているらしい。

「貴様、何をしているんだ！」

「……お目覚めかな、ソガ隊員？」

「今の宇宙船は何だ」

「この衛星を持ち去るためにやって来る、我がプロテス星の宇宙船です」

教授は講義でもするかのようになり、様々な機材で彩られた空間の中を歩き回り、勿体つけて喋り出す。

「何！……すると、ここは……」

「地上3万6千キロ上空に静止している、科学観測衛星の中です。……あなたをここにお連れしたのは他でもない、地球防衛軍の到着時間が知りたかったからです」

「バカな、そんな秘密事項をベラベラしゃべるとでも思ってるのか！」

「ところが、もうすっかりうかがいました」

「なに？」

ソガが驚愕の表情で教授を見つめる。

そして教授は彼の疑問に答えるため、次の台詞を紡ごうと口を開き……

「……………くくつ……………くつくつ……………ふっはっはっは!!」

漏れてきたのは押し殺した笑いだけであり、やがて堪えかねたように嘖き出した。

「なんだ、何がおかしい!!」

「っはっは……はあ……大いに笑わせて頂きました。いや、失敬。アナタの顔が、あまりに滑稽だったものですから」

「なんだと!」

「……もう白々しい猿芝居はお止めなさい。流石にそこまで行くと、失笑を禁じえません」

「どういう意味だ……?」

今度こそ、ソガの顔が困惑に満ちる。なぜか酷く嫌な予感がしてならない。

彼の額には冷や汗がじつとりと溢れていた。

「いやはや、アナタ方地球人は、時としてイチノミヤ君のような秀才を輩出しては、我々でも驚くような能力を発揮するのに……なんといいっても、脳機能において我々プロテス人との間に、純然たる差が歴然と存在するという事実には、私としても同情を禁じ得ないのです」

「……つまり我々が馬鹿だと言いたいのか?」

「いいえ、むしろ感心しているのです。それほどまでに限られた記憶野で、よくぞあれだけの発展を成し遂げられたものだとね……ソガ隊員、アナタはこれまで随分と上手くやって来たようですが……一つ、重大な事を忘れてしまっている」

「俺が? 忘れている? ……何を?」

そう聞き返すソガの声は、か細く震えていた。嫌だ、聞きたくない。

「お忘れのようなので、もう一度、教えて差し上げましょう。あなたがお掛けになつていらつしやる椅子は、ただの安楽椅子ではありません。記憶探知器と申しましてな、あなたの……記憶をひとつ残らず引き出す役目を果たしてくれました……ここまで言えば、お分かりかな？」

「まさか……」

真つ青な顔で呻くソガの耳元へ、そつと口を寄せると、教授は優しく囁いた。  
出来の悪い生徒を諭すような、穏やかな口調で。

「そのまさかなのです、ソガ隊員……いや、ミサト・ユウ君」

教授が最後にぼそりと呟いた名前。ソガもニワも、そんな人物と面識などない筈であるにも関わらず、その名が齎した効果は劇的だった。

弾かれたように顔を上げたソガの眼は、これでもかと驚愕に見開かれており、顔面からは汗が滝のように噴出した。歯の根も合わぬ程小刻みに震える顎が、ガチガチと不協和音を奏でていた。まさしく恐怖の顔だった。それは、今まで見せた事のないものだ。死への恐怖とはまた別の、足元が崩れていくような、明らかな失態を悟った者の顔だつ

た。

「おお！ その顔！ ……ようやく、ありのままの感情を見せて頂けましたね」

「なぜ……その名前を……」

「ですから先程、もうすっかりうかがいました、と言った筈です。……いやア、私もまったくもって仰天してしまいましたよ。こんな事が起こりえるとは……やはり宇宙は広い！」

「やめ……やめろ……」

「アナタにはどれだけ感謝しても足りない程です。しかし……我ながら迂闊でしたな、イチノミヤがあのような行動に出るとは……彼はとつくに地球を見限っていると思いつ込んでいたので、気が緩んでいたのでしょう。お恥ずかしい。しかし……」

教授は、もはや焦点の定まっていないソガの顔を覗き込むと、にんまりと笑う。

それは書齋で見せたものとは全く別種の笑みだった。それまでは、隠者が愚者を見下すような色が多分に含まれていたのに……今では、新しい玩具を興味深々で弄ぶ幼子のようだ。そう、虫籠の中を見つめる、無垢で残酷な瞳。

「アナタが教えてくれたところによると……ウルトラセブンは私の抜け殻に対して、決定打を有していないようだ……どうやら、敵を過大評価し過ぎていたと言わざるを得ませんなあ？」





## ひとりぼっちの異邦人（V）

電送機にて、地球へ舞い戻ったニワは、腹の底から湧き上がる衝動を宥めつつ、表情を取り繕うのに必死だった。

多元宇宙論。母星でも、存在だけは確実と言われていた理論だが、移動どころか、観測すら不可能な他次元の証明等、到底不可能と目されていた。……それが、こんな形で実証されようとは！ 思いも寄らぬ拾い物だった。笑いが止まらぬのも無理はないというもの。

しかも、あの男の知識はまさしく宝の山。じっくりと検分する事は出来なかったが、恐らく光の国の弱点や、この宇宙に秘された未知なる強大な力の数々を、あの男は知っているに違いない。

それを手に入れたとなれば……プロテスがこの銀河に君臨するのはもはや疑いようもなく明らかだった。

まさに僥倖。ブルー計画が完成してしまった時はどうしたものかと思っていたが、自分にもようやく運が向いてきたらしい。プロテス星のスパイとして、数年前からこの地球に潜伏していたニワは、いざ帰還しようと思った矢先、脱出ルートを巨大な電磁バリ



アで覆われてしまった為に、宇宙船での飛翔を断念せざるを得なかったのだ。

そして、どうにか他の方法が無いかと血眼になっていた時に……あの原石を見つけたのだった。

電送機を始めとするテレポーション技術は、宇宙で見ればそれなりに普及しているものの、性能はまさに千差万別。プロテス星でも研究されていたが、宇宙船での航海を超えるような信頼性を得られず、結局は外貨を稼ぐための高価な輸出品でしかなかった。

あれは長距離を移動する事に特化した為に、転送できる質量が僅かしかないという欠陥品だった。おまけに一方通行で、着の身着のまま遠方に行つてどうするとかいうのか。

まあ、同一星系内で使うなら特に問題は無いが、それならば移動手段の性能を上げた方がよほど効率的だ。それが判らぬ愚かな種族用の、詐欺に近い商品。

それが、ニワにとっての電送機へ対する認識だったのだが……まさかその機械に、自身の進退を預ける事になろうとは……

対応する分解器と再生器を別々に用意し、二組を逆に組み合わせる事で、二点間を繋ぐゲートとする。しかも、短距離用として。そうする事で、一時に送る質量の制限を限りなく引き上げる事が出来たのだが……：……そのような非効率的な発想、地球人でしか持ち得ないものだ。電送機を作れるくらいに技術が発達している種族なら、そんな手段はま

ず切つて捨てる。

そしてそんな手段を夢想する者には、それを実現可能な能力はない……はずだった。それを、あのイチノミヤという地球人は、完璧に設計してしまつたのである。それも、地球上の物質で可能な物をだ。

唯一の問題は、それらを必要な部品の形へと加工する手段が、まだ地球上には存在し得ない事だった。工作機械の発展度合いまでは、イチノミヤも考慮していなかつたのである。

もつとも、ニワが円盤で持ち込んだ機材を使えば、造作もない事だったのは、言うまでもない。こうして彼の信頼を勝ち取つた後、その電送機の片割れを人工衛星に搭載し、宇宙へと打ち上げた。研究用として正式に打診すれば、防衛軍の指定した通りの日時とコースで打ち上げを行う事で、衛星は電磁バリアのごく僅かな隙間を縫つて脱出する事ができるのだ。

バリアの外に、電送機の中継地点として衛星を置き、そこへ集めた資料を集積した後、母星からの円盤によって回収される……というのが、ニワの描いた脱出計画の全容だった。

本当にイチノミヤを手駒に加える事が出来て良かった。彼の考案した方式でなければ、プロテス人であるニワを転送するなんて到底出来なかつただろう。なぜなら……

ノックの音が、ニワの思考を現実へ引き戻した。

「誰だ？」

「イチノミヤです」

教授がドアを開けると、焦った顔のイチノミヤが息せき切った様子で話し始める。

「教授、すぐ出発しましょう。ウルトラ警備隊が追ってきます！」

「わかつてます。宇宙船は25分後に出発します」

「迎えが来るんですね！ そうか……どうとう来たか！」

勝手知ったる様子で隣の隠し部屋へ移動しようとするイチノミヤ。

その腕を、皺だらけの手が掴んだ。ニワだ。

「教授……？」

「イチノミヤ君。……本当にそれでいいのかね？」

「どういう事です？」

「私には……今の君が、心の底からそれを望んでいるようには、思えない」

「そんな！ 僕は貴方と一緒に宇宙へ……！」

「大切な友人を置き去りにしてかね？」

「それは……」

目を逸らすイチノミヤを見つめるニワ教授の顔は、どこまでも人格者であった。

「出会った頃の君ならば、私は喜んで連れていったらう。だが……今の君には……私以外にも理解者が存在するのだろうか？ この星に！ もはや君は、ひとりぼっちの地球人ではないのだ。であるなら、君の未来を丸ごと連れ去ってしまう事など、私にはとても出来ない」

「教授……」

「それに……焦らずとも、今生の別れと言う訳でもあるまい」

「えっ？ では……」

「いつかまたこの地球へ来ます。その時にもう一度、君と一緒に来たいというのなら……今度こそ私の故郷を案内しようではありませんか」

「そうか……わかりました、教授！」

正直なところ、ニワからすれば、イチノミヤはほとんど用済み同然だった。脱出に必要な電送機を作り上げ、ソガと言う、大いなる火種を手にした彼の前では、骨と脂身しか残っていないようなモノだ。

とにかく、破壊を齎す可能性のあるこの青年を、事が済むまで出来るだけ遠ざけておく、というのが自身の最期の瞬間を見たニワの決断だった。

この男さえいなければ、自分は悠々と有用な情報を持ち帰って、さらには抜け殻がそのままセブンを倒してしまうかもしれない。万に一つの敗北条件すら、見逃す気はな

い。

「では……教授がお帰りになるまで、この机をしばしお借りしますね」

「……なんだね？ それは？」

寂し気なイチノミヤは、名残惜しそうに背を向けると、窓際まで歩いて行った。そして懐から小さな桐の箱を取り出すと、机の引き出しへ大事そうにしまい込み、余人に開けられぬようしっかりと施錠した。

「ええ、ソガが渡してくれたんです。今度、極東基地を見学させてくれるって……マップと、基地への仮許可証ですよ。これがあれば、一般人でも特別な区画だけ入れるらしいんですが……教授のお供をするなら、無用の長物なので、彼に返そうと思っていたんです」

「許可証……」

「ですが……考えが変わりました。僕はこの星で、もう少しでも僕を捜してみます。ここに入れておけば、もう僕以外には絶対開けられませんから、安心です。そして……ありがとうございます、教授。ここまでこれたのは貴方のお陰です」

「ああ、しばしのお別れだ」

「お元気で……！」

がっしりと握手を交わし、イチノミヤは退出しようとする。その背に向かって、教授

はこつそりとVサインを構え……再び、室内にノックの音が転がった。

ドアノブに手を伸ばしかけていたイチノミヤが、思わず後ずさり、困惑の表情で振り返つて、部屋の主へ判断を仰ぐ。その時にはもう、白衣の老紳士は、後ろ手に手を組んで、何食わぬ顔で頷きを返していた。

ごくりと喉を鳴らした若き学生が、慎重に扉を開けると……そこには、ブルーグレーの制服に身を包んだ男が、ヘルメット姿で立つていた。彼の口から出た言葉は、声音こそ優しかったものの……表情はどこか堅く、いかめしさすら感じるものだった。

「やあ、ウルトラ警備隊のモロボシです。イチノミヤ君、ニワ教授はいらっしゃるかな？」

「え、えつと……」

「ええ、ここにおりますとも。どうぞ、中へ。……ではイチノミヤ君、また明日会おう。なに、心配はいらないさ」

突然の来訪に、教授は鷹揚に頷くと、余裕綽々といった様子で、招かれざる客人を部屋へと招待した。

そして、それとは入れ違いになるように、おろおろするイチノミヤを半ば強引に押し出して、教授は扉にカギをかけるのだった。

来客用のソファに腰かける二人。

ニワ教授は物理学の権威としての態度をまったく崩そうとはしなかったが……その身分が巧妙に情報操作されたものだと言うのは分かっている。

ダンはイチノミヤを安心させるために装っていた、僅かばかりの穏やかさすらなくなり捨てて、厳しい口調で詰問を開始した。

「ニワ教授、単刀直入に聞きます、ソガ隊員はどこです？」

「はて、なんの事でしょうな……」

「しらを切つても無駄だ。彼の第一発信機の信号は、この部屋で途絶えた。だが、第二発信機の信号は、遙か上空の人工衛星から繋がっている。これがどういう事か、説明してもらおうぞ！」

これでもニワは、優秀な科学者であると同時に、卓越した腕を持つスパイだ。なに？ という愚かしい驚愕は呑み込んで、一切表情を変えなかった。

表面上は、話の見えない好好爺が、ただ困惑しているという風を装いきったのだ。

だが、その内心では優秀な頭脳をフルに回転させて、自らのミスを洗い出していた。発信機がもう一つあった？ そんな筈はない。念入りに体を改めたし、なにより彼の記憶の中にも、そんなものは無かった筈だ。

だが、あの男ならあるいは……？

ニワは、ソガ隊員の偏執的なまでの臆病さと意地の悪さを知ってしまったているが為

に、彼の評価をもう一段くり上げようと思ったところで……一瞬、全身が急速に熱を帯びたのを感じた。まるで陽光の下へ引きずり出されたかのように。

それを知覚し、ぴくりと眉を吊り上げ、不快そうに顔を歪める教授。

まさにこの瞬間、脳裏に思い起こしていた光景……ソガ隊員の身体検査の場面を、目の前で勝ち誇る若造に、テレパシーで盗み見られたのだ、と言う事を理解したのである。心を読まれる感覚が、あのように度し難い心地であるというのは、長きを生きる二ワにとつても初めて得た知見と言えるだろう。

純真無垢で知られる光の国の住人が、このような手管を使うとは思ってもいなかった。ので、今のは完全に不意打ちであった。

まさかこれほど見事に引つ掛けられるとはな。あまりに巧妙な手際を見せられ、教授は手放しで眼前の敵を称賛した。

「そうか、やはりそういう事か……」

「ハツハツハ！ 流石はモロボシ隊員……いや、ウルトラセブン。超能力を使う者が相手では、鈍い地球人のようにはいきませんか。……これはお見事」

「そうだ、僕に嘘は通用しない。先程の青年のようにはいかないぞ！ ……さあ、貴様の企みはもはや暴露された。これ以上のあがきは止める。ソガ隊員を解放して、大人しく降伏するんだ！」



「降伏ですと……?」

「そうだ、今ならまだ間に合う。投降して、罪を償うんだ。不法入国とソガ隊員への暴行以外はまだ未遂じゃないか。あの様子なら、嘆願書はきつとイチノミヤ君が書いてくれるだろう。ソガ隊員の件も、正当防衛と言えなくもない。被害者である彼に許しを請えば……ッ!」

「ハッハッハッハッハッハ!!」

言い募るダンを、ニワは一笑に伏した。そこには半ば、自嘲的な意味合いも含まれていただろう。自分に一杯食わせた男が、よもやこんな奴だとは。

仮にもスパイである敵に対し、この期に及んで自首を勧めるなど、まさしく噴飯ものだった。

「……そう考えているのは……ウルトラセブン、キミだけだ」

「なにッ!」

「これだけ長く地球に潜伏して、まだそんな事が言えるのか? どうやらキミにとって、地球人というのにはわからん生物らしい……少なくとも、あの男が、私を許すはずがない」

「貴様が一体、彼の何を知っているというんだ。ソガ隊員は、情け深い男だ」

「ハッハッハッ! 傑作だ!」

不機嫌そうに眉間の皺をより深くしていく。ダンを尻目に、ニワは腹を抱えて思い切り体を反らし、ソファに沈み込むと、心底おかしそうな声でひとしきり笑った後……ぐいっと上体を起こし、ダンの顔を至近距離からねめつけた。

「キミは……あの男の本質を、勘違いしているようだ」

## ひとりぼっちの異邦人 (VI)

「なに？」

「確かに身内に対して、最大限に心を砕いているのは認めよう。しかし、それは決して博愛故の行動ではなく、あくまで自分の好ましい相手に、自分が好ましいと考えた結果を押し付けているだけ。一度、自身とは相容れぬと決めた相手に対して、彼は躊躇など一切しない……猜疑と打算、そして迫害こそが、彼の本質であって、自らの欲求を満たしたいというエゴに過ぎないのだよ」

目を剥くダンに、反論の隙も与えず、なおも教授は言い募る。

「睨まないでくれ、決して彼を特別に貶める意図はありません。猜疑と迫害、それは生存に必要な要素であって、地球人の最も得意とするものだ。故に、彼は至極真つ当に人間らしいとも言える。……いや、地球人だけではない、私を含む、この宇宙に生きとし生ける殆ど全ての知性体の本質が、そこに集約されると言つて良い！ 君たちを除いて！」

ソガも自分も、宇宙の総意と等しくあると言いつつ、ニワは眼前の青年に指を突きつけた。

「この宇宙においては、君たちこそが異質なのだ、M78星人。この辺境の星でただひとり、君だけが、思い違いをしている！　いくら肩入れしたところで、地球と、宇宙が相容れる事など永遠に無いのです」

「違う！　それはお前の一方的な決めつけだ、プロト星人。例え今は違っていても、生命は自らを律し、気付き、学ぶ事が出来る。この広大な宇宙の闇の中で、藻掻き、彷徨う人々はいつか真の意味で、愛の尊さと、生きる喜びを知る日がきつとくる！」

「そう信じているなら、何故君は彼らに正体を明かさない？　いずれ手を取り合うべき友に、隠し事をしている君が、それを言うのかね？」

「なにっ!？」

底意地の悪い笑みで、ダンを挑発する教授。

「私なぞ、イチノミヤ君に信頼の証として、宇宙人であると早い段階で告げました。その上で、彼と協力してきたんです」

「だが、貴様が侵略を企むスパイであるとは伏せているだろう！」

「ええもちろん、信頼を得る上では、後ろめたい事実でありますからね……そして、君が隠しているのも、後ろめたいからでは？」

「僕は、光の国から来た強大な存在としてでなく、地球を愛するただの人間として、彼らと友達になりたかったただだ。貴様とは真逆だ！　プロト星人！」

「フフツ……」

ニワは、熱意を持って言い張るダンを冷笑した。

「何を笑っている！」

「まさか地球でも、その名で呼ばれるとは思いませんでした……そうだ、私も驚いたのですが、まさか君が恒点観測員だったとはね……」

「……なぜそれを？」

「さてねエ……一つ気になったのは、もし貴方が我々の星系を調査した時に、報告書にはなんと明記するのか、という事です。」

ニワがこの質問を投げかけた時、二人の間には先程までとは別種の緊張が走った。

明らかに話をはぐらかされたにも関わらず、対するダンの表情も、神妙な物になっている。

彼の口について出たのは、非常に堅苦しい調子の言葉だった。

「それは……やはり私は、星図にプロト星と記入する事になるだろう」

「我々の種族の成り立ちを知った上で……？」

「……そうだ。でなければ、この役目は果たせない。そして、地球の星図にも君たちの星は確かにその名で載っている。私もそれがなぜかは知らないが……」

「……」

ダンの返答を聞いた教授は一瞬黙り込んだ後、堰を切ったように再び笑い始めた。心底愉快だと言った様子であったが、そこには自棄のようなモノが微かに混じっているようにも見える。もはや笑い飛ばすしかない、と言った風な。

それを見たダンは、痛ましげな表情で顔を歪める。

「君たちが……それを不満に思うのなら、それこそ暴力的な手段で訴えるべきでは無かった！ 僕たちの仲間として銀河連邦へ……」

「いや結構！ これで良い、これが今の宇宙社会なのだよウルトラセブン。君が思う程、宇宙は成熟してはいないという事が、君自身の言葉で語られた事にこそ、私は自分の理論の正しさを見ました。どんな生物も、自分に直接的な被害が無い事ならば、無関心でいられるのです！ それが真理だ！ であるならば、私も君達に遠慮する道理も一切無いと言おう事！」

「何をやる気だ！」

教授の理知的な瞳は、今や三日月のように弧を描いて、乾いた口の端から歯ぐきが見えるくらいに満面の笑みで、ダンの耳元に囁いた。

「いやいや、そう恐れる事は無いのです。貴方にとつても理のある取引をしようというだけの話ですとも」

「取引だと!？」

「ええそうです、私が大人しく撤退する代わりに、見逃していただくと言うだけの事……そしてその対価として、セブン、君も知らないような重大な秘密を教えてください」と言う事なのです」

「話が見えないぞ、プロト星人！」

もはや二ワにとって、セブンの掲げる正義に揺さぶりをかけるといふ段階は過ぎ去った。

特大の爆弾を落として、このお節介な半端者の動揺を誘い、心に隙を作るのだ。

「あの、ソガ隊員は君達にある嘘をついている。それも……とても重大なね」

「なに？ ソガ隊員が……？」

「そう、君が信頼を寄せるあの男は、酷い嘘吐きなのだよ……君が隠している正体なんぞよりも、よっぽど大きな秘密を抱えて欺いているのです……おお、その様子では、心当たりがあるようだ……どうです、それを教えて差し上げましょう……」

「教える……だと？」

「ええ、私が苦し紛れのハツタリで言っているのではないと言う事は、テレパシーを使う貴方なら分かるはずだ。私の自信は、確かな根拠に基づいていて、これから本当の事を言おうとしているのだと言う事が！」

「は……」

「ん?」

ニワが優しくに囁く間、ダンは顔を伏せ、その表情は窺い知れなかったが、教授は彼が誘いに乗ってくる事を確信していた。それこそ、テレパスの前で嘘が通用しないのは、ダンが言った事であり、教授が下手な誤魔化しをしないというのは彼自身の発言によつて担保されているのだから。

そして、あれほど信頼していた相手の抱える秘密がなんであるか……知りたくない筈がないのだから……

「ハッハッハッハッハッハ!!」

ダンは、一切の疑問を差し挟む余地もない程、破顔していた。

友の裏切りを聞かされたばかりとは思えぬ程に清々しく、まさに大笑、春の日差しのように爽やかな声であった。

これまで散々つばら嘲笑されてきた意趣返しとでも言いたげに、教授をすっかりほっぽり出して、心の赴くままに、笑い続けている。

ソファの対面に座る教授は、酷く気分を害したように座り込み、眉間に深谷の如き皺を作つて、無礼な男が落ち着くのを待つていた。

「ソガ隊員のヒミツだつて? ……ハハハ! 僕がそれに気付かないとでも思つていたのか? 彼が何かを隠している事くらい、貴様に言われるまでもなく、先刻承知だ」



「……しかし、その内容までも知っている訳ではないでしょう……でなければ、そんな風に笑っていられるはずがない。その内容こそが、重要であるとは思いませんか」

「そうとも、それは知らない……だが……わざわざ彼が言ってもいけない事を、なぜ僕が聞く必要があるんだ？」

「なに？」

さも当然と言った様子で、ダンが聞き返した言葉……というよりその態度は、二ワを驚かせるには充分であつた。

「別にそれを知りたくないわけじゃないが……友達のリミッツを、共通の友人からならまだしも、なぜ敵である貴様から教えて貰わなければならぬんだ？ 僕はそれほど落ちぶれちゃいない。ソガ隊員がそれを打ち明けてくれるまで、待つていればいいだけじゃないか」

「あの男がそれを話す事は一生無いだろう！ これは誓つて言えますよ！」

「だつたら猶更、聞くべきではないし、聞こうとも思わない！ お前は……取引を持ちかける相手を、間違つたんだ！」

ダンが机の下で、何か小さな物を親指で弾いた。それは弧を描いて教授の眼前に飛んでいく。

二ワの優れた動体視力と構造解析知識は、それがえらく粗雑な造りの爆発力プセルで

ある事を見抜いた。

ダンがサツと後ろへ飛び退る。そして……きっかり5秒後に爆発音。

次の瞬間、棚の影から飛び出す赤い戦士。ダンは今の一瞬でウルトラアイを装着していたのだ。

そしてそれは敵も同じこと。爆炎の向こうに、巨大な瞳と、濃紺のシルエットが浮かび上がる。

青い輝きが、ヒヒの如き身のこなしで窓ガラスを突き破り、赤い流星もそれを追って、広い屋外へ飛び出した。

と同時に、セブンの目の前で、みるみるうちにプロテ星人の姿が大きく、組みあがっていく……

彼らは元々、とある種族達が、共同で創造した人工生命体の試作品だった。ある種族にとつては、衰えていく自分たちの、次なる肉体として。そしてもう一方は単なる労働力の確保を目的として。

だが、如何に遺伝子配列を基にしたとは言え、人工生命では彼らの精神の器足り得なかった。純粹に相性が悪かったというのと、自意識があまりに大きすぎた。そして、こんなものは失敗作だと、共同研究者であるもう片方の種族へ押し付けた。

片方は研究結果が丸々手に入り、大いに喜んだが……彼らが奴隷としてあまり相応し

くないというのは、直ぐに分かった。遺伝子サンプルの大半を担った種族が戦闘向き  
の種族で無かった為に、その体格は貧相の一言につき……長らく戦争状態であり、元々優  
秀な怪獣兵器を擁していたこの種族からは、特に戦力としては見なされなかった。

この試作人造生命を量産するよりも、黒い体表と黄金の角を持つ強力な怪獣を育成し  
た方が、ずっと効率的だったからだ。

そのため、捕虜収容所の監督などをさせていたのだが……その扱いを是とするには、  
彼ら人造生命の頭脳は優秀に過ぎた。

結局、試験場であつた星まるごと離反して、さつさと独立してしまつたのだ。

彼らが長けていたのはその諜報の手際であり……監督していた捕虜達から得た情報  
と、その解放を餌に根回しをして、敵国の大規模な反撃作戦の混乱に乗じ、母星が鎮圧  
どころの騒ぎでなくなっている間に、うやむやのまま独立を主張してしまつた。

試験惑星をプロテスと改め、ひとつの種族として立ち上がった彼らは、今までひた隠  
していた爪を一斉に？き出しにした。

彼らの肉体は、人工生命なだけあつて拡張性に優れ、ブロック状の共通規格でデザイ  
ンされた細胞によって構成されていた。

この細胞を自由に付け足し組み替える事で、どんどんと彼らは自分の肉体を改造して  
いった。当初は遺伝子由来のほっそりとしたシルエットだった腕部も、格闘戦向きにこ

つごとつと筋肉の隆起した、ゴリラのような太く逞しいモノへと変わっており、薄い灰色だった体表は、細胞が極限まで圧縮され、ヒトデのごとき濃紺のざらついた装甲へと変化していた。

その上で、同一座標上に常に予備の細胞を内包する事で、いくらでも変形が可能であった。

彼らにとつてみれば、巨大化も変身もお手の物。予備パーツの許す限り、幼児の積み木遊びの如き容易さで、瞬時に体を変形させては、状況に応じた行動が出来る。

唯一の欠点として、見かけの数百倍の情報量を内包しているが為に、通常の電送技術では転送可能制限に引っかかってしまうというものがあるが……イチノミヤ式の電送機が、それすらも解決してくれた。

もはやこの宇宙において無敵なのだ、プロテス星人は。

拳を構えるセブンに向けて、かかって来いとでも告げるように指を鳴らすプロテ星人。

星人の頭頂部で怪しく明滅する、半透明なヒレ目掛け突撃したセブンは、目の前で敵の姿がかき消えた事に困惑し、たたらを踏む。

その背後から、腕部だけ実体化した剛腕が、セブンの無防備な後頭部を強打！

もんどりうってピラミッド状の校舎へ倒れこむセブン。

明日の朝、いったいどれだけの教授と生徒が、頭を抱える事になるだろうか。

だが、それらを全てかき集めた所で、イチノミヤ一人の頭脳に敵わないのだから、地球人と言うのは本当に個体差が激しいものだ。

夜闇の中で、プロテ星人が嗤う。セブンも透視光線で敵の位置を割り出そうとするが、すぐに見失ってしまった。

敵は、僅かに空間位相をズラす事で、その座標に半分存在しているが、半分存在していない状態を疑似的に作り出しているのだ。

この技術で、細胞を大量に同一座標へ保持しているプロテ星人は、これを本体にも適用する事で、反則的な回避手段として用いることが出来た。通常の生物にはとても出来ない芸当だ。これも、人造生物ならではの戦法と言える。

セブンを取り巻く無数の幻影。星空に浮かんだ星人の奇怪な顔が、愚かな宇宙人を嘲笑う。

ぼんやりと浮かび上がった敵に向けて、エメリウム光線を放つも、まったくの素通りだ。

背後から殴りかかってきた個体に目掛け、今度はアイストラッカー!!

怒りの籠った斬撃は、見事に星人の頭部を胴体から切り離したが、なんと信じられな

い事に、そのままの状態で嗤っている!!

真つ赤な切り口をセブンへ見せつけるように、空中に浮かんだ生首と、頭部を失った胴体が、ケタケタと揺れ動いているのだ!

変幻自在なプロテ星人に対し、セブンは完全に攻めあぐねていた。

「ソガくー……ん! ソガくー……ん!」

真つ暗な構内を、女が必死に叫びながら走っていた。

婚約者が戻って来ず、友人も去り、彼らと呼んでくると言い残したソガの同僚も、誰一人姿を見せない。

業を煮やしたサエコは、ソガの名を呼びつつ大学へ向かったのだが……なんと外で巨大な宇宙人が戦い始めてしまった!

いけない! 早く彼らを見つけて逃げなくては! おそらくニワ教授の書齋にいないのだから!

サエコの世話になっっているプロイセン教授の書齋は、向かいのピラミッド校舎にあったのだが……それが見るも無残に押し潰されるのを見た。完全に明かりが落ちていた

ので、本当に良かったと思う。

それでも明日のゼミは確実に中止ね……

差し迫った危機に、恐怖が麻痺してしまったのか、そんな事を頭の片隅で思った時だ。

「彼をお探しかね……?」

「誰ッ!!」

サエコの振り向いた先、照明が落ちた真つ暗な廊下。コツ……コツ……と革靴がゆつくりとコンクリートを踏む音だけが反響する。

やがて、ポケットに手をつ突っ込んだ、白衣姿の教授が、食堂にでも向かうような気軽さで、月明かりの下へ歩み出てきた。

## ひとりぼっちの異邦人（VII）

「あ、あなたは……」

「どうしたね、ナンブ・サエコさん……ここは危ないよ、こつちへ来たまえ」

サエコの右足は、白衣姿のニワ教授から遠ざかるように、一歩引いた。

「こ、こないで……」

「なぜだね？」

「貴方は……宇宙人なんでしょう！ 知っているのよ！ 外でセブンと戦っているのも

お仲間なんでしょう！」

「フッフッフ……そうか、君は知っているのか……ならば話が早い。私と一緒に来て頂こうか。ソガ隊員を、探しているのでしょうか？」

「ソガ君を……どうしたの！」

教授がゆつくりと足を進めるごとに、サエコが後退し、その差は縮まる事は無い。

だがそれも、相手にまだそうする気が無いだけで、そんな距離はもはや何の意味も無い事を、サエコも理解していた。

「彼の知識は私も驚く素晴らしいものでね。母星にご招待させて頂こうと思ったまで。」



せつかくだから、君も一緒に如何かとね」

ニワにとつて、この女自体にそれ程価値がある訳では無い。だが、ソガに対する人質としては充分すぎる程に機能すると踏んでいた。

連れ去った後に、情報を死守しようと舌を噛み切られでもすると厄介だ。いくら記憶探査機を使うといつても、できるだけ、協力的であるのに越した事はない。

そして対するサエコとしても、事情を殆ど理解していないとは言え、この宇宙人の腹積もりくらいは分かっていた。

「誰が行くもんですか……！」

サエコはバッグから小さな丸っこい機械を取り出すと、すぐさまピンを抜いて、さながら手榴弾のように敵の顔面目掛けて投げつけた。

それはピリリりと、けたたましい音を発しながら、教授の胸に当たると、深緑色のガスを噴射し始める。

彼女が投げつけたのは、ソガが密かに持たせていた特別製の防犯ブザー。ただのブザーではなく、ポインターのボンネットに搭載されているモノと、ほぼ同じ催涙ガスを噴射するという、一般人にプレゼントするには規定スレスレの代物であった。

相手がただの人間であれば、これだけで完全に無力化できてしまう程に強力な煙幕が、教授の姿を一瞬で覆いつくした。……しかし。

「……そんなッ……!」

それを何でもない事のように、薄ら笑いを浮かべた白衣姿が煙の向こうに浮かび上がる。大音量でがなり立てるブザーを、無感動に踏みつぶし、じわりじわりとサエコを追い詰めていくニワ。

「気丈な事だ。……私も手荒な真似はしたくない。君の意思で、こちらに来てくれた方が、彼の心象的にも良いのだが」

「見くびらないで! あたしは……」

「なぜそうも強情なのかね? セブンが勝つのを待っているのか? ……いいとも、見たまえ。アレが、私に勝てると思うのかな?」

ニワが指さす窓の向こうでは、無数の分身と赤い巨人が、チェーンビームを打ち合っている。

僅かな隙を見つけ、セブンがL字を組もうとするも、それを嘲笑うように、闇の中を異形の影が蠢いている。

プロテ星人は、いわばブロックの入った巨大な異次元バケツを背負っているようなもの。

次から次へと、その場で分身を作っては、それを仕舞い込み、また取り出す事で、変幻自在にセブンを翻弄しているのだ。

「多少は知恵を付けたようでも、所詮は猿真似だ。どれだけ強力な武器があろうと、それでは私の抜け殻には勝てん。あのままエネルギーの切れた所を、一斉に囲んでしまえば……どうする？ 君が大人しく来てくれれば、セブンを虐めるのも止めてあげましよう」

「いいえ、どんな時でも、彼らは絶対に諦めないわ、きつと……セブンも、ソガ君も！」  
「ふむ、随分と彼に入れ込んでいるようですが……なんと哀れな」

「哀れですって!？」

思わず語気を強めたサエコの目に、教授の笑みが、三日月のように映った。

「さよう、教えてあげましょうか。君の婚約者は……」

宇宙と大地が触れ合う境界線の遙か彼方。

ウルトラホーク2号に乗り込んだキリヤマ達の前で、人工衛星が円盤に持ち去られていく。

ソガからの信号が途絶えた事で、やはり衛星が黒だと判断し、出撃していたのだ。

だが、円盤はホークの亜音速すらも追い越す凄まじいスピードで飛び去って行くではないか。

「今撃てば、衛星ごと木っ端微塵だ」

「とても追いつけんな……」

「全速力で追え！ 必ず捕まえてやる！」

ダンの報告では、あの中にソガがいるのだ。

しかし、もうそろそろで地球圏を脱出してしまおう！

時間が無い！

「そ、そんな……」

「驚いただろう。時間旅行など、我がプロテスではさほど珍しくもないが、君達にとってみれば、夢のまた夢。つまり、彼からすれば、我々はみな、原始人のようなものなのだ。分かり合えると思うのかね？」

「でも……それでもソガ君は、あたしたちと……ずっと……」

教授の口から知らされた真実に、足元が崩れ去るような心地のサエコ。

信じがたい話を聞いて、頭が混乱する彼女へ向けて、さらにニワは畳みかける。

「随分と自信過剰ではないか。あの男にとつて君は、ただの通りすがりに過ぎない。私と同じく、イチノミヤ君へ近づく為に、少しばかり利用してみただけなのだ。認めなさい。偽物の為に、これ以上意地を張る必要なんて有りはしないだろうに……君の愛する男は、もうどこにもいないのだ。どこにも」

「……そう……そうだったの……」

がくりと項垂れ、壁にもたれる女へと、一歩ずつ足を進める教授。

彼の耳が、微かな声を捉えた。

「それで……ようやく合点がいったわ……あの人ったら。急に軟派な文学青年になってしまふんだもの……」

「分かったかな？ では……」

「……ですけれど！」

サエコは細めた瞳に涙を浮かべながら、意地の悪い笑みを浮かべた老人を、キツと睨んだ。

「お生憎様！ そんな事は、貴方に言われるまでもなく、気付いていたわ！ 女のカンよ……彼が別人になってしまった事くらい……そう、あたしは……そうよ、彼の顔に惚れたの！ だからそんな事は関係ないのよ！」

「強がりはやめたまえ。瞳孔が縮瞳と散瞳を繰り返し、呼吸が荒くなっている。君が動揺しているのは明らかだ。例え僅かな違和感と疑惑があったとしても、それが確信に変わってしまった時、もはや以前と同じではいられまい」

何かが割れる大きな音がする。

サエコの白い指が、コンパクトを教授に投げつけた音だった。

鏡が割れ、小さなガラスの破片に、サエコの涙が反射した。

「分かった風な事を言つて！ 貴方こそ……貴方こそ何も理解できていないわ！ 女は……女はね！ そんな事はどうでもいいくらい、誰かを愛する事ができるのよ！ 女は港なんてふざけた言葉があるけれど、そんな言葉が出来るくらい……男の帰る最後のよすがなのよ！ 偽物ですつて……？ 冗談言わないで！ そりゃああたしは、昨日まで何も知らないで、ただあの人がこの手が届くと思つてたような馬鹿でしょうとも！ 滑稽でしょうよ！ でもね、相手が自分の事を大事に想つてくれているかくらい……分かるわよ！ そんな事であの人を裏切つたりするもんですか!! あたしはね……ウルトラ警備隊の妻なのよ!!」

恐怖に荒く息を吐き、肩を上下させ、震える足で、それでもなお、前を見据えたサエコは、カバンを大きく振りかぶつてみせる。それ以上近づいたら、これでひつぱたいてやると言わんばかりに。

教授はその、呆れる程に愚かしく無様な姿を見て、深く深くため息をついた。洗脳の第一歩として、心を手折るのが最も早いと思つたが、これほどまでに低能では、会話にならないと分かつたのだ。

まるで興が削がれたような、空虚な気持ちで呟く教授。

「たかだか偽りで塗り固めた関係の為に、こつとも無謀に振舞えるとは……いやはや、地球

人というのはまったくわからん生物だ」

「それで結構よ!! あたしの愛するあの人は、たとえウルトラ警備隊だろうと、未来人だろうと……ソガ君はソガ君じゃない!!」

「よくぞ言った! サエコ君!!」

その時! 廊下の曲がり角から飛び出して来た影が、二人の間に割って入った!

ジャケツト姿の青年が、その手に握っていた粉状のなにかを、ニワ教授へ向けて、思いつきりぶちまける!

「な、なんだこれは!?!」

イチノミヤに妙な粒子を至近距離で投げつけられた教授が、激しくむせる。

別にどうという訳でもないが、たまらなく不快だ!

眼がチカチカして、煙幕の向こうが見通せない!

「貴方のお嫌いな火星の砂ですよ、教授! だから僕だって、配慮していたのに……ッ!

サエコ君、こっちだ!」

呆然としていたサエコの腕を掴んで、イチノミヤが走り出す。

イチノミヤは、自分が特定の研究を行っている時、教授が絶対に研究室へ立ち寄らない事に気付いていた。

そのサイクルと、教授の普段の言動から、おおよその原因を察していたイチノミヤは、

その実験を行う時は、必ずニワの不在時にするようにしていたのである。

そんな暗黙の了解と信頼関係が出来上がるぐらいの時間は、共に過ごしていた筈だった。

筈だったのに……

「イチノミヤアツ!!」

「ぐあつ!」

「イチノミヤさん!」

咳込む教授の立てた二本指から、二筋の光が発射される。

光線が青年の肩口を掠り、倒れこむジャケットの大きな背中。

「ふう……君までがこんな……実に愚かだ。揃いも揃って……」

肩を抑えて蹲るイチノミヤと、それを庇うサエコ。怒りと嗜虐をない交ぜに、引き撃った笑みを浮かべる教授の足音が、長い廊下に響き渡る。月明かりの下に照らされた彼の顔は、もはや人格者の仮面などとうに剥がれ落ちてしまっていた。

弱者達が自分を見上げるその表情に、えもいわれぬ愉悦を感じながらニワは口の端を醜く歪ませて……

窓ガラスを突き破り、黄色い半物質の鎖が、教授の白衣を絡めとる。

「何ッ!」



「デユアアアア!!」

気合い一閃、セブンが力いっぱい引き戻したラインビームの鎖の先では、教授が慣性の力を?身に受けて、くの字に折れ曲がっていた。まさに見事な一本釣り!

ソガから、「イチノミヤから目を離すな」と言い含められていたダンは、超人的な聴力で、一瞬の警報と喧騒を聞きつけていたのだ!

真つ赤な指が、老人を握りしめる。

『捕まえたぞ! プロト星人!』

「……捕まえただと? やはり君はいつまでも思い違いをしている」

『なんだと!』

「キミには私は倒せんよ……ハッハッハ……」

セブンが握りしめた両手の拳の中で、教授の姿がボロボロと煉瓦のごとく崩れていく。

サエコに迫っていた彼もまた、抜け殻だったのだ……

「フン、いつまでも私の抜け殻と戦っているがいい……」

誰も居なくなつた書齋に、ニワ教授の姿が組みあがる。

ソガの人質を用意するという事には失敗したが、そんなものはおまけに過ぎない。うまくいけば儲けものといった程度。

むしろ、セブンの気を引いて、巨大分身の攻撃チャンスが作れたくらいだ。

全て……全てが、ニワの計画通り、予定調和なのである。

あとはイチノミヤにも邪魔されず、さつさと電送機で……

「おっと、忘れるところでした」

教授は机の認証キーを開いて、引き出しから行きがけの駄賃とばかりに、桐の箱を取り出して、ポケットに突っ込んだ。極東基地の認証コードまで手に入るとは、まさに僥倖。なに、最初さえ突破してしまえば、後はどうとでもなる。

教授の頭は、とうに地球など陥落させたものとして扱っていた。

目下一番の興味は、ソガの知識を使って、どのように宇宙へ進出するかであつて……無限大に広がる、輝かしい栄光に、思わず微笑を浮かべながら、電送機のスイッチを入れる教授。

しかし、ふと感じる違和感。

いつもならば、即座に転送が始まるのだが……まるで機械の読み込みに時間がかかっているような……

やがて足先から細胞の解けていく感覚が昇ってくるものの、やはりどこかが違う……なんだ、何が起きている？

そして訝しむ教授は、やがて自分のポケットが激しく熱を帯びている事に気付く。

「……まさか!？」

彼が桐の箱を開くと、そこには認証コードも簡易マップも無く、その代わりとして少量の土と共に、何か小さな生物が、びっしりと箱を埋め尽くし、うごうごと蠢いていた。もぞもぞ、もぞもぞ。

「ハ、これは……ッ!」

慄く教授が身を反らし、傾いた箱から、2、3匹のナニカがぼとりと床に転がった。

突如として外界に放り出されて、慌てふためく哀れなその生命は……虫だ。虫の幼虫だ。

明かりに目が眩み、緩慢な動きで爪を振り上げる、たくさんセミの幼虫達が、小さな箱に詰まっていた。

慌てて機械を止めようとするも、もう遅い。

彼は、大いなる全能感に浸っていた為に、緊急停止のチャンスを完全に逃してしまっていた。

そして、極めつけに不幸だったのは、ニワの頭脳が、この極限状態においてもその優

秀さを遺憾なく發揮してしまつた事。

故に彼は、この一人用の電送機に、無数の生命と同時に押し込められた自身の末路がどういふものか、正確に一つも余す事無く、最後の最期まで理解してしまつたのだ。

「や、やめ……」

指先が、ツメが、目が、口吻が、電光に吞まれ、ブロックのように崩れては消え、崩れては消え……

そして、それらは細かい光の粒となつて、全てが一つに混じり合い、解けていく……

セブンと対峙していた、巨大な星人の躰が、唐突に動きを止めたかと思うと、バリバリと雷を纏つて発光し、溶けるように消えていくのを見て、サエコに支えられたイチノミヤは、自分の恩師が、最後の選択を間違えた事を悟り、静かに顔を伏せた。

「残念ながら教授……再生不能ですよ……」

待つてくれ、このままでは私は……いやだ、わたしはわわわしたしはわたとしハわたしはワタシハ……



## ひとりぼっちの異邦人（Ⅷ）

構内に、チャイムが鳴り響く

「……………ここにいたのか」

大学の屋上で、飛び立つ鳩の群れを見送る青年の背中。

ソガは、イチノミヤの座るベンチに歩み寄った。

「いやあ、教授の事をふと……………」

「……………死んだとは限らんだろ？ 実際、どうなんだ？」

「装置が過負荷でショートしてしまつた以上は……………教授の意識を乗せた電波が、どこへ飛んでいったかも分からない。もつとも、どこか遠くの磁気嵐か、はたまた人類には想像もつかない事象に巻き込まれて、何かの拍子に再生される可能性も無くはないが……………それはもはや、元の教授かどうかとも保証できないし、それが起きるのが僕たちのいる空間や時間軸と同じとも限らない」

「あの装置を直したら、逆探知とか出来ないのか？」

「駄目だな。最も重要な部品が全て焼き切れている。……………外側なんか、ただの置物みたいなもんさ。あれを直せるのは、教授だけだ」

「……じゃあ、どっかで電送機を作って、またひよこり出て来るかもしれんぞ？」

「でも僕たちが……お互いに、どうしようもなく裏切り合ってしまった事は変わらんさ」  
イチノミヤの声が、もの悲しげに沈んでいく。

いくら侵略者の仮面であろうと、彼にとつてはやはり、恩師だったのだ。

「……今回は、お前の機転に助けられた。間違いない恩人だよ、イチノミヤ。ありがとう」

「いや……」

今までずっと、空を虚ろに見上げていたイチノミヤが、首を回してソガの方を向く。

「僕のほうこそ、君に礼を言わねばならないだろう……君が、僕の為にいろいろ動いていたのは、分かっているとも」

「渡した手紙……結局読んだのか？」

「……読んだ」

ソガは、もしも自分が失敗した時に備えて、直前にイチノミヤに手紙を渡していたのだった。何か迷う事があれば、これを読めと。

「あれさあ、一応……三枚綴りだったろ？ どこまで読んだ……？」

「最初の一行だけ読んで……あとは破いて捨てた」

「ええっ！ 一行だけ!? ……マジで？」

『二人で機械に入るのは、頼むからやめてくれ』……僕にはそれで充分さ。充分だったんだよ……君を信じるのにはね』

「そ、そう……」

ソガは、長い間触れ合ったこの友が、原作通りの死に方をするのがどうしても見過ごせなかった。

だから、そんな事になるくらいならと、殆ど全てを書き記して、彼に渡していたのだ。かなり荒唐無稽な話の自覚はあったので、彼が信じられるように、証拠となる事実を3段階に分けてはいたが。……その中には当然、自身がどういう存在なのか、という部分も含まれている。

てつきりそれを熟読した上で、イチノミヤは教授への試験を用意したのだと思っていたが……まさか一行目だけでそれを決意したとは……

「そんなに不服か？ それとも全部読んで欲しかったのか？」

「い、いや、読まなかったならいいんだ、それに越した事は無い。うん」

ソガは信じられないといった面持ちで親友を見返すが、イチノミヤにしてみれば、なんとという事もない。ソガは結論だけ最初に書いたつもりらしいが、その一文だけでかなりの情報が読み取れるのだ。

そもそも、電送機が一人用で、そこに複数の生命体が入り込むとエラーとなるなんて、



製作者以外に知っているはずがない。そして、装置には不慮の事故を防ぐ為に薄いフィルムが張られている。

まさしく装置を誤作動させようと思ったら、人間大の生き物が飛び乗るか、使用者が故意に持ち込むかの二択しかないのである。もしもイチノミヤが教授を止めようとするなら、手紙に書いてある通りの方法を選んだだろう。

それをズバリ言い当てているという時点で、彼が何らかの方法で未来を予知しているという事が、イチノミヤからは分かるのだ。

未来予知の超能力を持っているのか？ はたまた未来からやって来たのか？ 実は彼もまた宇宙人と知り合いで、そちらから何かの情報を得る機会があったのか？

もしくは、あの真つ赤な巨人の正体が……？

なんにせよだ。

「ソガ、君は……」

……最初から全て知っていたんじゃないか？

ソガのぼかんとした顔を見て、言いかけた言葉を飲み込む。

この性格だ。そんなのは、おそらくあの手紙に書いてあっただろう事くらい、想像に難くない。

そして、それを読まないという決断を下したのは他ならぬ自分自身で……一度捨てた

チャンスを、自分で聞き返すのは、フェアではないと思ひ直したのだ。

知っていたのなら、教授と親しくなる前に、どうして止めてくれなかったんだ、という憤りが無いと言えば？になる。

だが、知り合つた当時にそんな事を言つても、自分はそれを信じようとしなかっただろうというのも、また確信があり……ソガがそれをしなかった弁明も、きつとあの紙には書いただろうから……そしてなにより、それと同じくらい……

わざわざ自分を助ける為に、この男は随分と長い間奔走してくれたのだという事実だけは、誰が何を言おうと変わりはないのだから。

だからこそ、あの時彼を信じる事にした。

教授は彼の『頭脳』を欲してくれたものの……ソガは『イチノミヤ』を欲してくれた。それだけの違いだ。

そして人間には、その僅かな違いこそが最も重要なのだと言う事が、恩師には分からなかったのだろう。

それがただ……切ない。

「まあ、そんなに落ち込むなよ。お前にピッタリの人を紹介してやるからさあ！ めちゃめちゃカミナリジジイだけ……境遇も殆ど同じようなもんだし、お前なら上手くやれるだろうからさ。あ、でも、俺は一緒に行かないぞ。行くときはアマギと一緒に行

「けよな」

「ソガ……」

「なんだ？」

「……ありがとう」

告げられた友は、なんとも言えない顔をして、頭を掻く。

その表情を見ると、やはり最後まで読んでおくべきだったかという気持ちだが、すこしずつ沸き上がってくるので、イチノミヤは苦笑した。

なかなか、彼女のようにはいかないか……

あの時、目の前で抜け殻が激しくスパークし、崩壊していくのをみたセブンの行動は早かった。

即座に念力を集中して、ウルトラレポートを発動する。

ともすればワイドショット以上の消耗を強いられる危険な技だが、友の危機の前では、一瞬の躊躇もない。

彼の肉体がエネルギーへと変換され、まるで深紅の矢のように、凄まじい速度で闇夜へ向けて飛び立っていく。

紅蓮の鳥となったセブンは、ウルトラホーク2号を追い越し、プロテス円盤が持ち去ろうとしていた人工衛星を、両手でガツシリと掴んで奪い返すと、即座に地球へ向けて切り返した。

テレポートでエネルギーを使い果たし、後は飛行しか出来ないセブンに対し、今度は円盤の方が全速力で追い縋る。

だが、この宙域にはもう一機の飛行物体があるのだ。

「宇宙船の野郎……戻ってきやがったなあ！」

「今だ、撃て！」

ホーク2号の機首から放たれたレーザーが、プロト星人の円盤を貫く。

スパイの回収部隊は爆発四散！

銀と赤の嚆矢が、甲高い音で青い星へと還っていく……

大学に降り立ったセブンは、少しふらつきながらも、抱えていた人工衛星をそつと置いた。

縮小化すると、鋼鉄製のドアを蹴破つて、電気椅子に捕らえられていたソガを救出する。

「セブン!!」

『怪我はないか』

「俺はいい! サエコさんは!? イチノミヤは!?」

『大丈夫だ』

赤い宇宙人に肩を支えられながら、人工衛星から這い出て来る男の下へ、女が駆けて来る。

涙を流しながら、力強く抱き合う二人。

「ソガ君! ソガ君!!」

「サエコさん!! 良かった!! 本当に良かった……」

自分の失敗のせいで、彼女に被害が及ぶと思った時、ソガはもはや冷静ではいられなかった。半狂乱で叫んだ喉は枯れ、すっかり声がしわがれている。

「プロテ星人に何かされなかったかい?」

「ええ……イチノミヤさんとセブンが助けてくれたわ」

「良かった……ありがとうセブン!!」

礼を言われた宇宙人は、何か言いたげに逡巡しているようにも見えたが、結局は何も聞く事はなく、無言のまままで飛び去って行った。

「……サエコさん、本当にごめん。俺のせいで君を巻き込んでしまった……」

「いいの、いいのよ……あたしたち、またこうやって生きて触れ合える。それでいいじゃない」

「……ああ、そうだね……サエコさん……愛してる」

「あたしも……例えばソガ君が誰であろうと……愛しているわ、心から」

「……えっ?」

そつと離れたサエコは涙を拭い、微笑を湛えたまま振り返った。

彼女の口元を、昇ってきた朝日が照らす。

「待ってるわ」

白んでいく空に、たなびく彼女の髪がとても美しくて。

ああ、そうか……今、ようやく分かった気がする。

そしてごめん、サエコさん。今はまだ全部言えないけど……

でも、これだけはハッキリ言える。

心の底から君を……愛しています。

## 悪魔の住む鼻

「釣れないなあ……」

「釣れませんかえ……」

男三人、湖畔に椅子を並べて垂らした糸はピクリともしない。

「イカンな……これじゃ女性陣にどやされちまうぞ。」

「当たり前だ、素人がいきなり釣れるかよ」

「いやー海釣りでも釣り堀でもそれなりに釣れたから、自信あつたんだがなあ……淡水だと違うのかねえ？」

「なんせ一般人が怪獣釣り上げるような世界だ、普通の魚くらい楽勝だと思つてたのに……」

「僕は、こうして糸を垂らして湖を見つめてるだけでも、楽しいですよ」

「お前はいいよなあ、自然派でさ。……でもな？ それだとアンヌに呆れられちまうぞ。困るだろ？」

「それは参りましたね……」

「ふん、大見得切るからだよ。だいたい何だ、いきなりピクニックつて……」

隣でブツブツぼやいてるのは、見るからにインドア派のアマギだ。何でピクニクかだつて？ ……お前の為だよ！

どうして俺達が釣りなんてしてると言うのだ……

先日、宇宙細菌ダリーに、カオリという女子大生が感染してしまった。

いかな電磁バリアも、対宇宙船想定でしかなく、網目が広すぎて寄生虫の微細な卵までは防げなかった訳だ。

今度、ミヤベ博士に言つて、プラズマクラスター機能も搭載して貰わなきゃ。

それで、体内に巣食ったダリーに吸血されたカオリの血液型が非常に珍しかった為に、輸血要因として同じ血液型のアマギが病院へ……てな展開だったわけ。

いかに頭脳担当だろうが、あのスパルタ隊長がアマギをあまり前線に出さないのも納得だ。

アールエイチマイナスのAB型なんか、負傷して大出血しようものなら、アンヌが居ても危ないくらいだからなあ。

でまあ、ダリーに操られたカオリちゃんに吸血されたり、その後、吸血時の後遺症で



基地の中でも操られたりと散々な目に遭ったにも関わらず、優しいアマギは昏睡するカオリをなんとか助けられないかと、周囲に懇願したのだ。

僕の血が必要なら、いくらでも使って下さいとまで言って、キタムラ博士に頼み込む姿は、流石のオレでも涙を禁じえなかったね。

それが、宇宙一のお人好しの心を揺さぶらない筈が無く、セブンはマイクロ化して、眠りこける彼女の鼻へ突入。

肺に巢食ったダリーを倒すべく、人体という未知のエリアでの戦いに臨んだのだ。

確か白血球に襲われたり、縮小化のせいで光線の出力が落ちたりで大分苦戦してた気がする。キタムラ博士達が抗生物質を打ち込まなかったら、危なかったんじゃないだろうか。

やっぱ名医だわあの人。未知の寄生虫に打つ手なしという状況に、まるで別人のような顔つきになってたけど。

そして後日、アンヌの看護の下、なんやかんや快方に向かうカオリを見舞いに言った時、彼女が呟いた。

「あのう……お会いしましたわ。どこかで……？」

アンヌ曰く、事件当時の記憶が無いと聞いてはいたが、アマギの顔だけは見覚えがあったようだ。

二人仲良く催眠状態で深夜のメリーゴーランドに乗った仲だもんな……  
そんな彼女の問いに、なんとこの男は言ったのだ。

「さあ……」

優しい笑顔で、とぼけるアマギ。

いやいや！ さあ……じゃないよ！

どんだけ聖人なんだよコイツ!!

彼女の為に、恐ろしい記憶はそつとしておいてやろうという気持ちは分かる。

だが！ アマギだって少しくらい報われてもいいじゃないか!!

「ああ実はですね、カオリさん。このアマギ隊員が……もごもご!! もがもが!!」

「……??」

やめろダン！ 放せ！

「ソガ隊員、本人があえて言わない事を、他の誰かが勝手に話すのは、やっぱりいけない事ですよ」

「だがなあ！ あれじゃアマギがあんまりだろ！」

「それでもです」

ダンに阻止され、結局その日はそのまま帰る事に……

んで、このモヤモヤを休日に愚痴っていたら……

「じゃあソガくん、みんなでピクニックしましょ！」

「えッ？ ピクニック？」

「そうよ！ そのカオリさん、花が好きなんでしょ？ お花畑のあるキャンプ場に、アマ

ギさんと一緒に誘うのよ！」

「サエコさん……天才か？」

いつそアンヌとダンも誘って一石三鳥トリプルデートじゃあああああ!!!

「アンヌさん、流石の包丁さばきね……いつもメスを使つてらつしやるからかしら？」

「アハハ、違うわよ。そんなじゃないわ。ニンジンの方がずっと硬いもの」

「あの……剥いたレタスはどうしましょう？」

「あら、もうそんなに出来たの？ じゃあカオリちゃん、ピーマンお願いできる？」

「はい！」

おっとりとした娘が、緑色の籠を抱えてニコニコと洗い場へ持つていく。

「カオリちゃん……もうすっかり元気なのねえ……ソガ君から聞いた時は、なんて恐ろしい目にとまったけど、良かったわ」

「ええ、だから彼女のリハビリの為にも、丁度いいタイミングだったの。私からもお礼を言わせて、サエコさん。貴方がソガ隊員に提案してくれたんでしよう？」

「ううん、あたしなんて……」

「こんなによく出来たひとがフィアンセなんて、ソガ隊員も幸せ者よねー？ 彼、最近変わったと思っていたけど、納得だわ」

「え？ アンヌさんから見てもそうなの!? ……それって、いつ頃から？」

「うーん、そうねえ……最近って言っても結構前かしら……ああそうだわ、それこそセブンが現れるようになってからよ。突然タバコも止めだして……健康に気を使ったのかとおもったけれど、そういう事だったのねえ……」

「お二人とも、何をお話されていますの……？」

怪訝そうなカオリに、二人は顔を見合わせた。

そして、我が意を得たりとニヤリ笑うサエコ。

「そりやもう、女が集まってする話なんて……ねえ？ 一つしかないでしょ？」

「え？」

「こ・い・バ・ナよ、恋バナ！」

「……コイバナって……なんですか？ アンヌさんご存じ？」

「さあ……？」

「恋愛の話よ！ 略して恋バナ！ この前ソガ君が言ってたの。面白いでしょ？」

「本当に略語を考えるのが好きねえ、ソガ隊員……」

呆れつつも、やはり何時の時代も興味の対象は一気に声が色めきだつた。

「ねね、カオリちゃん！ 貴方は気になる人とか、いないの？」

「ええっ！ そんな事……その……」

健康的な頬を赤らめて、恥ずかし気に俯くカオリ。

もじもじと小さな声で、なにかを呟く。

「その……こんな事、恥ずかしいのですけれど……夢の中で、なんだかとても素敵な人と出会ったような気がして……」

「あー！ それってもしかしてアマ……も……も……!! もがもが!!」

「ちよつとサエコさん！ こっちー！」

強引にサエコを引き寄せたアンヌは、彼女にそつと耳打ちする。

「あんまり強引に彼女の記憶を刺激したくはないの。出来るだけ、自然な形で徐々に思い出した方が、負担が少ないのよ」

「そ、そうなのね？ ごめんなさい……」

「ううん、私も初めに言っておくべきだったわ、こちらこそごめんなさい」

「……ハッ！ いけない私ったら……あ、あの！ 私はその……そう言った方はまだ

……お二人はどうなんですの？ アンヌさんとか！

夢見心地で顔を真っ赤にしたカオリが振り向き、照れ隠しにアンヌへと矛先を向けた。

突然の奇襲に、すっかり慌てた女医は、完全に虚を突かれ、口を滑らした。

「えっ！ 私!!? ううん、違うわ、ダンとはまだそんなんじゃないよなくて！」

「え？ モロボシさん？」

「やっぱり……」

「確かに……モロボシさんは紳士的で素敵ですものね」

「だから違うってば！ もう！」

失態に気付いたがもう遅い。なんとか事態を納めねばと焦るアンヌは、目を細めて生暖かい視線を自分へ送る元凶に、八つ当たり気味に逆襲した。

「そういうサエコさんはどうなの!?! 愛しのソガクンとはどうなの!?!」

「よくぞ聞いてくれました！ この前ソガ君つたらね……! 服を買いにいったのに、試着しても全部似合ってるしか言わなくて……」

水を得た魚のように喋りだしたサエコの姿に、アンヌは己の失策を悟った。

「…………ふあ、ふあ…………ぶへつくしゅ!!」

「うわあ！ 魚が逃げるだろが！」

「すまん、鼻がムズムズして……やっぱこの時期はいかんなあ。花畑も近いし……」

「あれ？ ソガ隊員って、アレルギーでしたか？」

「ん？ ああいやその、染み付いた癖とかなんというか……気を付けろよ、ダン。花粉症ってのはな、例えば去年まで大丈夫だったとしても、いつ発症するかわからんだ。一度なってしまうと、地獄だぞ、あれは」

「……はあ」

というか、せつかく釣りでぼんやりしてるんだ。

こっちからもコンピュータ野郎に水を向けてやらねば。

「そうだ、あー時にアマギよ。さっきからだんまりだが……最近、何か気になる事はないのか？」

「何を突然……」

「ソガ隊員！ 露骨すぎますよ！」

「だって仕方ないだろ！ これがメインなんだから！」

「気になる事か……そういえば、一つある。この前の事件からちよつと思うところがあつて……」

「「おおっ！」」

これは思わぬ収穫だ！ まさかアマギからこうもすんなり引き出せるとは！！

「それでそれで？ 何が気になる!!」

「……鼻だ」

「……は？」

何言つとるんだコイツ……？

……あ、そうか！ なるほど！

「あーあー成程、確かになあ！ 鼻も大事だよなあ！ やつぱりこう、シユツと鼻筋が通ってた方がいいとかあるもんな！ いや、逆に少しぺちやつとしてたり、獅子ツパナの方が可愛かったりという例もあるわけだし、お前の好みで選ぶのがいいと思うぜ、うん」

俺はねー今は一番サエコさんの鼻が好きだよ。なんちて。

「お前は……さつきから一体何の話をしてるんだ？」

「何っってお前……鼻の話だろうがあ！」

「……バカ、俺が言ってるのは、セブンの鼻だよ！」

「ハアアアアアアアッ!?!」

なにか凄く哀れな生き物を見る目で、アマギがこちらを蔑んでくる。

てめえ、湖にブチ込むぞ。



「そういえばセブンには鼻が無いが、彼はニオイを感じる事が出来るのかという事が気がかりだね。いや、匂いだけじゃない、そこから連想されるのは、あの口で何を食っているんだろうという事が疑問で仕方なくてな。宇宙にもダリーのような未知の細菌が潜んでいると分かったが……例えばセブンには、奴も感染できないんじゃないか？ むしろ、ああいった感染症を防ぐ為に鼻も口も塞いでいるとするなら、何を摂取しているのだろうと思ってるね」

「……頭のいい奴つてのは、馬鹿だな。」

「お前に言われたくはない」

そんな事、気になった事もないわ。

「……多分、太陽光とかだろ」

「なに？」

「人間の鼻が口の上に付いてるのは、食べ物腐ってたり毒じゃないかを調べるセンサーの役割だったからだ、って説を読んだことがある。じゃあ鼻がねえのは、口でモノを食べる必要がないのさ。……いつだったかの極寒地獄で戦った時に、セブンは一度どこかに飛び去ってから、すげえ熱量で降ってきたって言ってたじゃねえか。あれって多分、太陽まで飛んで行って、熱だか光だかのエネルギーを補給してきたんじゃないか？ ギエロン星獣が、本来は苦手な極寒の宇宙を、無限に降り注ぐ放射能を食いつないで

飛べるつてのと同じだ。太陽光を食べるなら、宇宙を飛んでも寒くはあるまい」

「ふむ、太陽エネルギーか……となると、寒さに弱いという仮説にも、一定の信憑性が生まれてくるな。……彼の鎧が太陽光をエネルギーに変換できるような真性半導体で構成されているとすると、極低温化では逆に絶縁体のように電気抵抗が増して、変換効率がゼロになってしまう……」

うん、アマギが何を言っているのかは分からないが、セブンが太陽エネルギーで動いているのは間違いない。

その証拠に、ダンが急に我関せずと言った様子で、釣りに集中するフリをさせた。

……おい、魚を回収した後、餌もつけずに糸を垂らすな。

「となると……やはり彼はロボットなのだろうか？」

「んなわけねえだろ。ロボットが痛がつたりするもんか。ユートを見てみろよ、お前に撃たれても悲鳴一つ上げずにぶっ倒れたじゃないか」

「……あんまり蒸し返すなよ！」

「いいや、一生言つてやるね。せつかくカオリちゃんのと吐く神経ガスを無効化して大活躍かと思ったら、後ろからお前がヌツと出てきて、ウルトラガンで弱点にピピピーだもんよ。地下での初対面時はあんなに外したのに、操られてる時の方が腕がいいつてのは、どういう事だ？ 人の気も知らないで……」

「なんだ!? やるか!」

「てめえこそ、河童の餌にしてやるぞ!」

「……ハツハツハ!! これが、喧嘩するほどなんとやら、という奴ですか」

「ほっとけ!!」

くるとコチラに向き直ったダンが、やれやれと言った様子で溜息をついた。

「アマギ隊員。おそらくですが、セブンは匂いを感じますよ。そうでなければ、ウイルス星の毒ガスで苦しんだり、メトロン星人のフェロモンで惑わされたりしません」

「え? メトロンのフェロモンって……毒タバコの事?」

「ああいえ、違います。僕も奴らのアジトに踏み込んで知ったんですが、果実が熟すような甘ったるい匂いがするんですよ、奴らは」

「ええっ!? そうなの!? マジかあ……」

「そういえば、ソガ隊員はあの時寝込んでいましたっけ……そんなに悔しがることですか?」

「そりやそうだろ! 例えば恐竜図鑑に『エビの味がする』って書いてある生き物がいたら、本当にそうなのか食べてみたいと思うだろ? それと同じだよ!!」

「……頭の悪い奴ってのは、馬鹿だな。」

「あれ？ おかしいな？」

「どうしたの？ ダン？」

「ライターがガス欠だ……」

「マッチがあるだろ、ほれ」

「ありがとうございます」

どうやらバーベキュー用の火を起そうと苦戦しているらしい。

見かねて手渡したマッチを取り出しては、ペキペキと押し折っていくダン。

……あのさあ……

「貸してみろ……ほれ」

「わあ、すごいですね」

「すごいですね、じゃなくて天下のウルトラ警備隊がマッチも擦れなくてどうする」

「いやあ、火をつけるというのが、慣れなくて……」

……そうかお前の場合、いつもは額から熱線チリチリで一瞬だもんな。悪かったよ。

「あれ？ おかしいな？」

「どうしたの？ ソガ君？」

「炭に火がつかない……」

「おい、ノロマめ。炭を炙ってどうする。ちよつと退け」

アマギがため息交じりに新聞紙をクシャリと丸め、炭をパパパつと竈状に組み直し、  
どんどん火を付けていく。

うーん……ベル星人の時も思ったが、実はアマギってこういう時に意外と頼りになる。

お前もしかして、キャンプ好きだろ。

「天下のウルトラ警備隊が、火起こしも出来んでどうする。……こりや中止した野外訓練をもつかいしなきやならんな」

「わあ、すごいアマギさん。もう火が付きましたのね」

「いえカオリさん、ここから炭の中にしっかり移ってからが本番ですよ」

まあ、いいや。結果オーライって事で。

「ソガ君、実はキャンプした事無いの？」

「あるけど、火の起こし方なんてスマ……ああいう物知りに聞けばすぐ分かるから、いちいち覚えてないよ」

「ふーん……そうねえ、ソガ君達が使ってるビデオシーバーがもつと身近になれば、あたし達でもキャンプの時になんでもアマギさんに聞けるんだけれど」

「ああ、そうだな多分あと……いやどれくらいかかるだろかねー」

オレがとぼけると、サエコさんが肩を竦める。危ねえ危ねえ……

ビデオ通話なんて50年もしない内に実用化されますよ、なんて言つてノストラダムスになる予定はないのだから。

第一、スマホの走りみたいなのが既に実用化されてるこの世界で、それが民生用に降りてくるのがいつになるかなんて、オレには予想も出来ないのだから……サエコさんはあれから少し、こんな風に試すような言動が増えた。

ああは言つてくれたものの、好奇心は抑えきれんらしい。

……と言ふか彼女、一体どこまで知つてるんだろうか……？ もどかしいなあ……

「んー！ このお肉美味しいですねー！」

「……ダン、お前が食つてるそれ、まだ生焼けだぞ」

「えッ？ こんなに美味しいのに……？」

「ダン、こつちはちゃんと焼けてるワ。ホラ、あーん」

「本当だ……もつと美味しい……」

「モロボシさんつて、案外お惚けさんなんですね」

「アイツはいつもあんな感じだよ」

「……あらこのお肉、本当に美味しいわ！」

「フルハシさんが、実家から貰つてきてくれたのよ」

「フルハシさんつて、みなさんの先輩だつて言う？」

「そうです。誘ったんですが、用事があるらしくて……残念だなあ」

「歯医者予約でも入ってたんじゃない？」

「なんでも妹さんの友達が、アフリカへ飛ぶのを見送りに行かなきゃなららしい」

「ナツちゃんて言うんですって……ウフフ」

「先輩の事なんかいいよ！ さあ食べよう！」

「いくらなんでも、そんな言い方、酷いですよおソガ隊員」

ダン、お前がそれを言うのか。

## F a r a m o n g t h e G a r a x y

「ふっ……！ ほっ……！ ソガ隊員！ こ、これは……どちらに置けばよろしいでしょうか！」

「おおーう、こつちだこつち！ ご苦労さん。手伝おうか？」

「いえ、滅相ありませんっ！」

腕を上げて、箱を抱えた男を迎える。

隣を歩く彼はひいこら言いながら、指定の場所によたよたと歩いて行く。

「思ったより早かったな……ちゃんと落とさず持つてこれた？」

「失敬な！ いくらソガ隊員でも聞き捨てなりませんぞ！ 子供のお使いじやあるまい

しー」

福耳を揺すりながら、ぷりぷり怒った青年将校が、ドスンと荷物を降ろして腰に手を当てる。

……ん？ ドスン……？

「なあトリピー……それちよつと開けてみてくれるか？」

「はあ、早速配るのですか？ そんなにせかせか急がなくてもですね……あっ!？」



「そうきたかあ〜」

彼が蓋を開けると……そこには、富士の麓から汲み上げた天然水が大量に瓶詰めされていた。

嘩然とする青年の顔を見てみると、笑いが込み上げて来てしまうからいけない。

「これが缶バツジに見えるかね？ トリピー？ ……く、くつくつく……」

「道理で重いと思つた……」

「いつひつひつひつひつ!!」

「ええい！ そんなに笑う事もないでしょうに!!」

「いやいや、悪い。でもさ、これはもう一種の才能だよトリピー……ま、いや。丁度喉が渴いてたんだ。お前も一本飲めよ」

「ハア……なんで途中で気付かなかつたのワタシは……」

きゅぽんと栓を抜いた瓶を傾け、ごくごくと飲み干す水の上手いこと!!

俺はちびつこに配る缶バツジの補充をお願いしたのに……よりによってこんな重たいモンをえんやこらと運んで来たんだから、なんとというか。

今日の俺は、広報課主催の駐屯地イベント、フレンドシップフェスティバルを手伝いに警備隊から出向して来ている。

警備隊がそんな事も手伝うのかと思つたが、隊長直々のご命令だから仕方あるま

い。

というか、お前の作戦は金を買って仕方ないんだから、少しは自分で稼いでい……とか言われた。

確かに俺の献策は、原作には無かった場所に原作に無かった兵器をドカドカ投入してゴリ押ししてる訳だから、どうにも予算を食う。それは認めよう。

でもなあ……いや、ヤナガワ参謀が頭を抱えてる姿を見せられちゃ、俺としても嫌とは言えないんだけどさ。

スミマセンでした参謀。貴方が1話からめつきり姿を見せないのは、まさか予算獲得に奔走していたからだなんて、知らなかったんです……

そりゃそうだよな。ウルトラホークを一回飛ばすにも、どえらい莫大な金がかかる。資金面をなんとかする人がいなけりゃ、すぐに我々の今年度の予算はゼロ。

……そんな事態は何としても回避せねばならない。ホークが飛ばなきゃ、予算どころか来年度がそもそも無くなっちゃうからだ。

それとこれとがどう関係あるんだと思えば、こういったイベントで地域住民の理解を得る事も、予算獲得の重要な要素なんだそう……もうヤナガワ参謀に足向けて寝られないよ……

そんなわけで、お前も何かイベントの為に考えろと言われたので、提案したのがこの

缶バッジだ。

ウルトラホークや防衛軍のマークをプリントした缶バッジでも配れば、それなりに子供ウケするかなと思っただよ。

一個あたりも安上がりだし。

でも、缶バッジの生産が盛んになったのはもう少し後のようで、普通に業者への委託金が発生して怒られた。

『お前の脳ミソは金を投入せんと回らんようになってるのか、デパートの屋上で踊つてろ』つてのは酷い。

子供たちへの浸透効果は高く見込めるので、案自体は通ったのがまた質が悪いとか散々な言われようだった。

またヤナガワ参謀が頭を抱えていた。

予算を獲得するために予算を使い込む男とか、血を吐きながら続ける悲しいマラソンとか、流石に泣いた。

特に後者。ダン、あの時と全く同じ顔で言うのはヤメてくれ。

そんなオレの哀しみの詰まった缶バッジは飛ぶように売れ、投資した予算だけはギリギリ回収できそうだ。

このまま作戦室のみんなを見返してやるぞ!!

「よし、せっかくトリピーが持つて来てくれた訳だから、この水もこっちのブースで売ろう！」

「あの、ソガ隊員……いつもお世話になってる身空で大変言いにくいのですが……いい加減そのトリピーというのはちよつと……」

「え!?! ダメなの!?!」

「駄目といいますが、響きがあまりに軽いいいいますか……ソガ隊員のせいで、部隊内でもワタシをそう呼ぶものが増えてきています……もうちよつとどうにかありませんでしょうかあー！」

もじもじと指を交叉させながら、訴え掛けて来る。

「いいじゃないか、渾名で呼んで貰えるつてのはな……それだけ仲が深まったという証だ。いや俺もね？ トリピーがどうしても嫌ってんなら止めるよ？ でもさ、憧れないか……？」

「憧れるつて……なにを？」

「例えばキリヤマ隊長とクラタ隊長を見てみる？ 久しぶりに顔を合わせりや、お互いをモグラ、サウスと呼び合う仲だ。なんかこう……そういうのいいだろ？」

「でもピーというのは……」

「お前は知らないかもしれんが、あのタケナカ参謀ですら、同期をサコつち呼ばわりだ

ぞ、サコっち」

「サコっち!? あのタケナカ参謀が!」

「そうだ、未だに再会するとその名で呼ぶらしい」

「へ、へえええ……」

口をあんどぐりと開け、信じられないと言った様子の後輩隊員に、畳みかける。

「いくつになつても、襟を開いて若い時の渾名で呼びあえるような戦友こそ、得難いものだと俺は思つてる。だからこそ、俺はお前をトリピーと呼ぶわけさ……お前がいつか出世して、周囲から肩書で呼ばれるような人物になつても、俺達の間には、トリピー、ソガ、で通じるわけだよ。浪漫を感じないか……?」

「いやいや、ワタシが出世なんて……そんな事……」

「いやー! お前は絶対に出世するね! そしていつか、トリピーが大切な後輩や部下を得た時にも、こんな風に親しみを込めて渾名で呼べるような強い絆で結ばれて欲しいと思う訳だ。」

「そ、ソガだい!い!ん!ん!」

「ソガでいいって言つてるだろ?」

「ア!ナダがぞんなにワタジのことを!おもつでツ!! いでくだぎつだな!ん!! ぶじょうドリヤ!マ!ん!が!ん!げ!ぎ!い!だ!ち!ま!ち!だ!あ!あ!あ!あ!……」

「こんな事で泣くなよ……」

こんな適当こいただけで感動されるとは思わなかった……なんか罪悪感ハンパないな……ハンカチやるよ……

「だからな？ 午後の組合長さん達との座談会も、お前なら出来る！ 頑張れよな！」

俺がそういうと、ハンカチでぐしゃぐしゃに泣いていた彼は、真つ青な顔で振り向いた。

まるで長い間、油をさし忘れたブリキ人形みたいな動きだった。ほんまおもしろいなコイツ。

「ワタシが……？ 座談会？」

「ヤナガワ参謀から聞いてないの……？」

「ブルブルブルブル!!」

「……あー、その……頑張れ？」

なるほど参謀……貴方も存外スバルタ人間のようで……

「そ、ソガ隊員……いいやソガさん？ あのー午後からの役目交代しません……？」

「俺はいいけど……その前に、あれをみてみる」

「あれはえーつと……ゆーはち？」

俺が指さした先では、小型発電機に繋がれたユートが、子供たちと戯れている。

「こつち！ こつちむいて！」

「すげーぴかぴかじゃーん！」

「らいだーきつく！ らいだーきつく！」

「だっせー！」

「あしみじかい」

「はなくそつけてやろー」

「チャックさがそーぜ！ チャック！」

「ス。ク。ラ。ツ。フ。ニ。ス。ル。ソ。ク。ソ。カ。キ。」

「なにいつてるかわかんない！」

「おーおー、ユートは子供たちに囲まれ大人気で楽しそうだ。頭から蒸気吹き出す機能なんてあったんだな、アイツ。」

「あと数十分もすれば、ヤツはバッテリー切れで充電に入る。するとどうなると思う？」

「……どうなるんです……？」

「ユートの充電が終わるまで、ちびっこ怪獣共の餌はお前だ。トリピー」

「……さて、スピーチの内容を考えてきまーす」

「なんて分かりやすい……」

「回れ右した後輩を見送っていると、後ろから笑い声が聞こえてきた。」

「ハハハハハ！面白えな、あのひと！」

「……ん？ちよつと君、ここ準備中だよ？」

いつの間にやら、高校生くらいの青年が、ブースのパイプ椅子にどっかり座り込んでいた。

こんな田舎じゃなかなか見ないド派手な髪型をしているが、ニヤリと笑った顔はどうもらしいイケメンだ。

「お、丁度いいや！アンタ、防衛軍のひと？」

「防衛軍のつて……この服見ればわかるだろ！」

因みに今の俺は普段の制服だ。ここでは俺自身も展示なのだ。

「ああやつぱり？それつてウルトラ警備隊の服であつてた!!？へえ、ホントにこんな地味な色着てたんだなあ……」

「地味つてお前ね……」

青年は物珍しそうに俺の服やヘルメットをしげしげと眺めては、「触っていいか？」とか「バイザー降りるんだコレ……降ろしてみていいか？」とか言いながら、こつちが許可もしていないのにベタベタ触つて来る。

「あのねえ……」

「あ、そうだ！聞きてえんだが、モロボシダン隊員つてのは、どいつだ？」



「あ?」

「モロボシダンだよ! ……知らないの?」

「いや知ってるよ! てか、お前は俺を知らないの……?」

「知らないけど。なあ、どこにいるんだ?」

あーはいはい、ダンね。そーだねアイツは一般人からもすげー人気だね。

今日だけで似たような質問を三回はされたよ。

「残念だったな、ダンは休みだ」

「マジかよッ!? チツ、つたくしよーがねーな……じゃあアンヌは? アンヌ隊員はど

こだよ?」

「お前……あーはいはい、アンヌ目当てね。わかるわかる。お年頃だもんね、そりや俺みてえなおっさんより、キレイなネーちゃん見たいわな。最初にダン目当てかと思わせといて、下心隠す作戦ね。レンタルビデオ屋でエッチな作品と一緒に、全然興味ない映画も一緒に借りて、それを上に置くやつね。言っとくけど、あれバレーバレーらしいよ?」

「だあああ!? ちつげーよ! そんなんじゃねーし!」

「なんか焦ってるのがマジっぽくてウケる」

「あーもう、なんだこのオッサン!」

推定不良高校生はガシガシと頭をかくと、ため息と共に、肩を竦めて首を振った。

「まったく、ウルトラ警備隊のイベントなのに、ウルトラ警備隊はいねーのかよ……」

「おい、嫌みで言ってるのか？ それとも本気で言ってるのか？ どっちなんだ？」

「あん？ どーゆーこったよ？」

「こ・こ・に・い・る・だ・ろ・う・が!!」

「え？ アンタも警備隊なの？」

「ウルトラ警備隊のイベントに来て、俺の顔知らねえのかよ……さてはお前、警備隊にわ

かか〜？」

「ニワカってなんだ？ 糊のコト……？」

「ウルトラマンセブンとか言っちゃやうカンジ？」

「あ×あ×ん×?!」

むちやくちやガンつけてくるじゃん……こわ。

やれやれ、これはしつかりと教えてやらねばな……警備隊における、真の男前が誰かという事を！

「あのねえ、防衛軍きつてのスナイパー、宇宙一のナイスガイである、このソガ隊員を知らないとは……お里が知れると言うもんよ！」

「ええっ!? ソガ!? アンタがあソガなのか?!?!」

「なんだ知ってんじやん……どのソガかは知らないけど、多分そのソガだと思うよ」

「すげー……これが本物のソガかあ……想像してたより、なんかフツーだな……」

「……あとさ、もうちと口の利き方に気をつけような、坊主？」

俺がソガだと分かると、途端に相好を崩して肩を組んでくる不良。

「おっと、ワリイワリイ……俺ってば物心ついた時から修行ばっかしてたから、あんまりニホンゴつての？ よくわかんなくてさ！ ゴメンな？」

「修行とかつて、最初にそういう部分から矯正するもんなんじやないの？」

「そうなのか？ レ……俺に稽古つけてくれた奴は、特に気にしなかつたけど？」

「師匠からしてそれじゃあしようがねえか……とりあえず語尾に、です、ますを付けろ。ずっとマシになるから」

「そうなのかます？」

「そうでございますか、だ！」

「そうでございますですよ？」

「……うん、もういいよ……ごめんな？ そうだよな、いきなり敬語は無理だよな。日本語はウルトラ難しいもんな……俺も気にしない事にするよ」

「助かるでございまする！」

「コイツ……これで大丈夫なのか？」

「そうだ！ なあなあ、アンタが本当にソガなら、アレ見せてくれよ！ 早撃ち！」

「ほう……よかろう坊主。見せてやろうじやないか」

「あのさ、さつきから坊主坊主って、俺には立派な名前があるんだよ！ 禿じやねえ！」

「じゃあお前さん、名前はなんて言うんだ」

「俺はぜ……あー、そのえつと……レイト！ そう、ここはレイトとでもしておくか！

よろしくなソガ！」

「うん……よろしくな？ レイト？」

レイトを引っ張ってきたのは射的屋台だ。まあお祭りだからね。こういうのもある。

ここで華麗に早撃ちを……と思った所で、先客がいるではないか。

「どうしたのボク？」

「かいじゅーとれなかつたのお……」

小さな男の子が涙を拭いながら指さした柵には、怪獣のソフビ人形が。

あーそりや無理だわ。だってあれ景品じゃなくて、賑やかして置いてあるだけの人形だ。

こういうのは、積み上げたお菓子とかを崩して取るのが相場であつて、あんな大きな人形にコルク弾当てたところでビクともしない。……というのは、流星にまだ分かんないか……

スタッフも止めたらしいが、そのまま挑戦して今に至ると。まあ、残念賞の菓子袋は貰えるから泣き止んでね。

一見落着かと思いきや、隣のレイトがそうもいかんらしい。

「待て！ おまえその顔は何だ！ その目は何だ！ その涙は何だ！ 男がそう簡単に泣いてんじゃねえ!!」

「だって……ぼくには出来ないよお……」

「簡単に挫ける自分を恥ずかしいと思わねえのか!?!」

「……」

「お前、こんな小さな子に何言ってるんだ?」

「……やる」

「え?」

「もっかいやる!」

レイトの励ましが功を奏したのか、決意の眼差しで、屋台に再チャレンジする男の子。いやでも、もっかいやるって言ったってなあ……

ぱひゅん、ぱひゅん、ぱひゅん……

「びえええええええ!!」

「やっぱ駄目かあ……」

「当たり前やろ」

後ろ髪をガシガシと搔くレイト。

こいつもしかしてアホなんちゃうか……？

「しゃーねーなー！ おつちゃん！ 俺にもそれ、やらせてくれよー！」

言うや否や、レイトは渡されたコルク弾を握りしめると、銃を断って精神を集中しだす……

ん？ 銃を断って？

「おおっ！ こんこだあー！」

レイトの両の親指が、凄まじい勢いでコルク弾を撃ち出していき、怪獣の腹部を正確に撃ち抜ぬいていくではないか。

一発一発が、とてもコルクとは思えない音を立てる度、大きく後退していく人形。そして……

「これで……フィンツシユだああああ!!」

柵から落下するソフビ!! 喜ぶ男の子!!

「どうだ見たかあ!!」

「あほか」

「いってえー！」

「射的で指弾使う奴がいるかよ。ルールは守れ、ルールを」

「駄目なのかよ!!」

ダメです。

「チツ……おいお前! 隣の亀の怪獣でいいよな?」

「え?」

今度はきちんと、手渡された銃を使い、亀型の怪獣を倒すレイト。

なるほど! あの人形は元々前傾姿勢でバランスが悪い上に、尻尾が短い! 全弾を頭部に集中すれば、正攻法でも唯一倒せる人形だ!

だが……

「へっ、2万年早いぜ! ……ホラよ」

「亀じゃない……」

「わがまま言うな!」

「ハツハツハ……!!」

「何がおかしい!」

「謎の風来坊レイト……確かにお前の射的の腕は大したもんさ、ただし!! ……日本じゃあ二番目だ」

「なんだと? じゃあ一番は誰だ!」

「チツチツチ……退きな」

えつと……角度はこんなもんかな？

「おい、コルクだけ並べてどうするつもりだ？」

「……こうするのさ！」

まずは一発！ 放たれた弾丸は黒い蜥蜴の怪獣の頭部を掠って、そのまま後ろへ抜けていく。

「野郎！ いきなり外しやがった！」

しかしそれに構わず銃口を机の上のコルクに押し付け装填すると、そのまま続けて二発目！

またしても弾丸は怪獣の後ろへと抜け、二連続で外れたと思われたその時！

人形が大きく前へ傾いた！

背後の壁に跳弾した一発目が、後頭部を直撃したのだ！

「跳弾だど!?!」

レイトの動体視力がその信じられない光景を捉えた時、ソガは既に最後の弾丸を放っていた。

続けざまに放たれたコルクは、全て背後の壁に跳ね返って、トカゲ怪獣の後頭部を殴りつけた！



「弾は前からより、後ろから食らうに限るぜ、怪獸さん」

「フツ……決まった。」

「ほーら、これでどうだいボク？」

「角……」

「は？」

「角の奴が欲しかったの……」

俺とレイトが振り返ると、棚の中段に鎮座する古代怪獸の人形！

三日月のような角を雄々しく振り立て、丸太のように太く、蛇のように長い尻尾と、先程の怪獸達よりもがっしりとした両足で棚を踏みしめ、山のように揺るぎ無い安定感を放っていた。

あ、だめだわ。

「さっきの跳弾でなんとかしろよ！」

「角が邪魔で後ろの壁が狙えないんだよ！」

「じゃあどーすんだよ!？」

「かくなる上は……こーすんだよ！」

俺は、男の子から亀と蜥蜴の人形を引き取り、ダン！つと机に置き直した！

両雄相打つ!!

「おっちゃん!!」

「は、はい!!」

「……二体返すから、そいつと交換してくんない?」

「うわぁー……ずつりいー……」

「これがオトナの力だぁぁぁあ!!!」

「ボク、それで良かった?」

「うん!! おじちゃん達ありがとう!!」

「お、おじ……」

「諦めろ、お前はどうか考えてもこの子より年上だ……」

「リョウジ君! こんなところにいたのかい!!」

怪獣のソフビを抱きしめてホクホク顔の男の子を、後ろから誰かが抱きかかえた。

お父さんかな? ……つて。

「トリピーじゃん」

「あれ? ソガさん?」

「え? 息子? トリピー結婚してたっけ?」

「いやいや、親友の子ですよ……母親と逸れてしまったみたいでして、さつき迷子セン

ターに……コラ! 駄目じゃないか!」

「まあまあ、いいじゃねえか」

「いいじゃねえかって……キミはどちらさま？」

「俺はレイト！ よろしくな！ トリピー！」

トリピーが目をパチクリさせていると、彼の福福しい頬を、怪獣の角が押し返す。

「みてみてー、とつてもらったんだよ。がおー」

「あ痛たた！ へええ、そうなのかい？ カッコいいねえ……えつとーなんだっけなー

……そう、ゴメラ！」

「ちがうよー」

トリピーにだっこされながら遠ざかっていく男の子の背中。

彼が振り向いて、その手に持った怪獣を大きく振る。

大きく手を振り返すレイトの瞳には、どこか憧憬にも似た輝きが宿っているように見

えた。

「……ああいうの、いいよな」

「そうなのか？」

「俺、いろいろあつて、ガキの頃の記憶が無くつてき……」

「それは……大変だったな……」

「おい、しみりすんなよ！ 今は頼りになるダチとか、その……家族、とか？ いるか

ら！ 宇宙一幸せだぜ！」

「良かったー安心したわー……」

そーいうの似合わないしな！

「なあレイト」

「なんだ？」

「もうちよつと楽しんでいくか？」

「なんだ？ ソガが案内してくれんのか？」

「お前がどーしてもっていうならな。とりあえず昼だから屋台でなんか……あ、焼き鳥とか食べる？」

「ぐふつつ……!!」

「どうした!？」

「いや、なんでもねえ……腹が振れただけだ」

「重症じゃねえか……」

お、そーうだ。

「ホラ、これやるよ」

「あん？ なんだこれ」

「今日のパンフレットだよ。ウルトラ警備隊のヒミツも載ってるから、ダンとアンヌ以

外も勉強しやがれ」

「ヒミツって……そんな事書いていいのかよ！」

「書いていいことしか書いてねえよ」

「それじゃヒミツじゃねえじゃねえか」

だが、そうもいつてられないように……

「あーいたー！」

「ソガたーいんみつけー！」

俺の周りにわらわらと子供達が集まって来るではないか！

ハッ……！ まさか……！！

「ハ。ッ。テ。リ。ー。サ。ン。リ。ヨ。ウ。セ。ロ。」

「しまったっ……！！」

倒れ伏す機械仕掛けの戦友の姿に戦慄するが、もう遅い。

「こつち！ こつちむいて！」

「すげーくつぼろぼろじゃーん！」

「らいだーきつく！ らいだーきつく！」

「だっせー！」

「あしみじかーい」



## 栄光はダンの為に (I)

「只今、参謀室から野戦訓練の計画が発表された。明朝6時を期して、星ヶ原一帯で作戦行動に入る」

作戦室にて、部下たちに訓示を通達するキリヤマ隊長。

彼が星ヶ原一帯のマップを示すと、そこには無数の戦車群が描かれている。

「目標になる戦車隊は、マグマライザーでリモートコントロールされることになってい  
る。たとえ訓練ではあっても気持ちを引き締め、実践のつもりで行動するように、以上  
！」

「はい！」

「ダン、ちよつと来てくれ……」

残された四人は、久しぶりの野戦訓練に盛り上がった。

「いよーし！ 野戦なんて久しぶりだなあ！」

「おい、コッチの方の腕は確かい？」

「うーん、仕上げをしておく必要があるそうだよ」

ライフルを構えるジェスチャーで、アマギに尋ねるフルハシ。

聞かれた名プランナーとしては、最近研究室に籠りっぱなしで、自信なさげに首を傾げた。

「どうやら二人は連れ立って野外射撃場へと行くようだ。はりきってるなあ……」

「だけど、どうして思い出したかのように野戦訓練なんかするのかしら？」

「そうだなあ……きつと、この前の恐竜タンクみたいな重量級兵器が攻めて来る事を想定して、対戦車戦闘技術を高めておく為だろう……」

もしくは、より安価な歩兵用装備でも、怪獣を足止めできるような戦術を考案する為か……

---

屋外射撃場で、射撃訓練中のフルハシとアマギ。

そこへ突如、大きな笑い声が響きわたった。

「アツハツハツハツハハ……！ そんな撃ち方で、敵が倒せるんですか？」

土手で高笑いしていた青年が挑戦的な笑みを浮かべて近寄ってくる。

「ここは防衛軍の敷地なのだから、この男もまた防衛軍関係者なのだろうか……」

「何い……？」



「ちよつと失礼……」

睨むフルハシを気にも留めず、アマギから受け取ったライフルで即座に命中させる謎の青年。

「2発下さい」

こんなものは当然だと言った顔で、次は続けざまに二発発射。

一発はクレ―射的に、もう一発は上空へ……

顔を見合わせるフルハシとアマギの間に、真つ黒なカラスの死体が落下してきた。

「フツハツハツハツハ……」

渋面の二人に構わず、笑い続ける青年は真顔に戻ると強烈な自己紹介を始めるのだつた。

「アオキです、よろしく……」

「君たちに預けることになったアオキ君だ。明日の野戦では充分揉んでやってくれ」

「よろしくお願ひいたします」

「近い将来、ウルトラ警備隊の一員として活躍するかもしれない男だ、頼んだぞ……」

「はあ……よろしく……」

俺は、マナベ参謀に紹介された男へ、そうして引き撃った笑みを返すのが精いっぱいだった。だが、それも致し方なからう。

なんせあのアオキ隊員が訓練生としてやって来てしまったのだ。

漏れ出そうになる内心を抑えつつ、必死に表情を取り繕おうとはするが、これがなかなかうまくいかない。結果として、引き撃ったような変な笑顔になっちゃった。

このアオキ隊員……実は俺がウルトラシリーズで一、二を争う程嫌いな人間なのだ。ウルトラセブンだけで言うなら堂々のトップ。

なんなら、あのカジ参謀よりも……と言ったら、今の俺の努力が少しは伝わると思う。

カジ参謀は、行き過ぎた思想と固定観念に囚われて暴走してしまっただが、最後まで本気で地球を守ろうとしていたという一点だけは、認めてやってもいい。

ところがこのアオキは……自分の栄達こそが第一で、他の隊員の事なんか二の次だ。

防衛軍の本分を忘れて、敵を出世の為に利用しよう等と……引き合いに出した俺が言うのもなんだが、カジ参謀と比べるのも烏滸がましい。防衛軍の風上にも置けない奴なのだ!!

コイツのせいで、今回の話は被害甚大。今ここで射殺しないだけ、感謝して欲しいくらいだぜ。

しかもそんな腐った根性で、エリートである自分の方が、なんぞ得体の知れぬ元風来

坊であるダンよりもウルトラ警備隊として相応しいか思っているのが、一番腹が立つ！

いや、きちんと教育されたエリートと、素性の分からない者だったら、明らかに相応しいのは前者な筈なんだけど、両者の中身を知っているオレからすると、もう論じる気にもなれない程の明確なんだよな。

……とはいえ、ここは冷静になろう。

ソガ隊員は誰にだってフレンドリーなナイスガイなのだ。その評判を貶める訳にはいかぬ。

握手の為に右手を差し出す。なんて偉いんだろうかオレは……

ところが、アオキはじつとこちらを見つめるばかり。

「どうした？」

「いえ、これがあのソガ隊員の顔かと思まして」

「どのソガかは知らないけど、多分そのソガだと思うよ」

「お噂はかねがね……なにせ、私の先輩になる方ですから」

「俺がお前の先輩？ ハハハ！ よせよ、鬼が笑うぜ」

「……よろしくお願ひします」

真面目な顔のアオキは、その場で敬礼を返した。

そこへフルハシとアマギが帰ってくる。

「あ、君たち。紹介する者がいるんだ」

これ幸いと、アンヌと通信機の調整へ戻らせてもらおうぜ。

後ろでは、二人がすげえ顔をしている事だろう。

「ねえ……あのアオキ隊員って、なんだかヤな感じ。参謀に紹介されてる時なんて、あたしの方を見ようとしたわ」

「まあ、そういつてやるな。よく言うだろ？ 弱い犬程なんとやら……てさ」

「アラ、ソガ隊員がそんな風に言うの、珍しいじゃない」

「俺達の大事な仲間を、女風情がと見下す奴なんて、たかが知れてるってこと」

その時、突如鳴り響く警報！

国籍不明機が上空へ侵入との報告だ。

直ちに出勤しようとする俺達へ、待ったをかけるアオキ。

「たかが一機や二機の敵機なら、私ひとりです。任しといて下さい！」

血気盛んなアオキの申し出を受け、参謀が了承する。マナベ参謀に付き添いを命じられたフルハシの顔といったら……。

伊豆上空を巡回する国籍不明機には黄色い豹がペイントされ、紅白の吹き流しが取り

付けられていた。

コックピットでは、にこやかなキリヤマとダンの姿。

「間もなくやつて来るだろう、実力もさることながら、大変な自信家だそうだ。遠慮しないで揉んでやれ」

「ハッ！」

「おい、来たぞ……」

すれ違いざまに交差する、二機の地球防衛軍支援戦闘機ウルトラ・ガード。

国籍不明機の吹流しを見て、フルハシは事の全貌を悟った。

どうりでマナベ参謀があんな意見具申をすんなり通したはずだ。

訓練生の腕前を試す為に仕組まれた模擬戦だったとは。

「ハハッ、そうだったのか。吹き流しをつけた敵機は初めてだな？ アオキ。相手はダ

ンだ、気楽にやれ……」

ところが、白鳥のペイントされたアオキ機からは模擬弾ではなく、実弾が発射された！

咄嗟に躲したダンの機体を掠るように飛んでいき、吹き流しが見事に撃ち抜かれ、風に飛んでいく。

「おい！ 無茶をするな！」

フルハシの注意も意に介さず、今度はピツタリと敵へ食らいつくアオキ。

二機の操縦が一步でも間違えば、あわや接触大惨事となる翼スレスレの危険飛行だ。

そうして急旋回から、まるで体当たりのような急降下。そして、ヘッドオンからの実弾射撃。

もちろん、アオキとて本気で直撃を狙っているわけではない。どれもダンが回避すれば十分に回避できるギリギリを見極めたコース。

いかにアオキの技量が高いかの証明ではあったが、ダンが避け損なう事など露程も配慮されてはいなかった。

それは、およそ模擬戦で行われるような機動ではなく、『ウルトラ警備隊なら、これくらい避けてみせろ』と言わんばかりの明確な挑発行為だった。

「貴様、気でも狂ったのか!」

「フルハシさん、あれは敵機です。撃ち落としても当然ではありませんか!」  
「何だつて!?! 貴様には、あの吹き流しが見えなかったのか!」

「手心を加えろつていうんですか。私たちは敵機の侵入を告げられて出てきたのですよ。そんな馴れ合いの訓練でお茶を濁して、何の役に立つんです!」

「引き返せ!」

参謀室で談笑するキリヤマ、ダン、そしてマナベ。

フルハシが気を揉んだ先程の激戦も、この二人にしてみれば、活きの良い跳ねっ返りだな、といった様子であった。流石に肝が据わっている。

「アオキ君、紹介しよう。キリヤマ隊長とモロボシダン隊員だ」

握手を求めるダン、それに渋々ながら応じるアオキ……。

「なかなか、やるじゃないか」

「よろしくお願いいたします」

「危うく殺されるところだったぞ」

「ホントは、ウルトラ警備隊の欠員が、2名できるところでした」

「アオキ君……」

キリヤマが放った、場を和ませるつもりのジョークに、不謹慎な返しをするアオキ。

これには先程まで微笑んでいたダンも、眉根に皺を寄せる。

「フハツハツ……ダン、こういうハリキリ男だ……頼んだぞ……」

「はい……」

作戦室では、先日から引き続き、震度計が怪しげな動きをキャッチしていた。

「おかしいな？ 震源地は、南東10キロ以内の地点なんだが……」

「10キロ以内つていえば、第28地区じゃないか……。星ヶ原一帯だぜ！」  
それを聞き、いち早く行動に移ろうとするアオキと、その腕を掴む。

「アオキ、勝手な行動は許さないぞ！ 僕と一緒に。……ちよつと調査してきます」  
「待て待て、俺もついてくぞ。なあ？ お前には期待してるからなアオキ」

そもそもダンは、アオキから目の敵にされてるからな。

一緒に行つて、厳しく押さえ込もうとしても火に油だ。

その点、ソガ隊員は正規のルートで入隊したエリートだから、ダンよりは当たりがまだマシだろう。

ところが、俺の方をチラツと見たアオキは、えらく煙たそうな顔をしていた。

……なんで？

---

ポインターで星ヶ原に着いた俺達は調査を開始する。

「アオキ、レーダー探知機をセットしてくれ」

グラッドソナーに何かが反応する。地中に何者かが潜んでいるのかもしれない。

「こつちに向かつてくるな……。ちよつと待っていてくれ」

（今だ、ダンより早く事件をキャッチできる）



車外に出たダンを出し抜き、ポインターのアクセルを踏むアオキ。

「おい、アオキ！ 何してる！」

「なんですかソガさん？ こんなところで下車して何になるというんです？ あの丘の向こうを早く調べなければ、逃げられてしまうかもしれない」

丘の手前で停車し、降りるアオキの肩を掴む。

「おい！ ダン进行待て！」

「放してください！ それとも怖気づいたんですか？ やはり噂通りなんです。ウルトラ警備隊にこんな臆病者がいるなんて……そんな消極的な行動しかとれないなんて、貴方に防衛軍としてのプライドは無いんですか？」

「ああ？ ねえよそんなもん」

「だったら貴方と話すことなんかありません！」

「おい待て！ ……ウツツ!!」

何か腹にスゴイ衝撃を食らった気がして、俺の意識はそのまま闇に沈んでいった……

その後、気絶して転がるソガと、ポインターで丘の向こうへミサイル攻撃を加えるアオキという光景を目にしたダンは、咄嗟に何が起こったのかを把握しかねた。

アオキを問い詰めると、『何者かの攻撃を受けた。ソガは恐怖に駆られて突然失神したのだろう。あの丘の向こうが怪しい。』などと不明瞭な返答が帰って来たので、さらに首を傾げる事となる。

格納庫にて。

マグマライザーの操縦席で点検に余念のないナカニシ隊員。

彼は明日の野外訓練で、指揮車であるマグマライザーのパイロットに任命されていた。

なにやら不穏な噂が聞こえてくるが、参謀会議で下った採決は、野戦計画は実行するというもの。

上には上の考えがあろうのだろうし、防衛軍程巨大な組織の中で決まった事は、簡単に覆らないのだという事も理解していた。

ナカニシは、自分の晴れ舞台が無くならなかった安堵と、少々の不安をない交ぜにしながら、マグマの最終チェックを終えた。

そこにやってきたアオキ。

ナカニシにとって、アオキは士官学校時代からの先輩だ。

歳は彼の方が上だったが、アオキは飛び級を重ねた秀才で、卒業時も主席であった。

お互いの配属先が分かれた後も、模擬戦や技術交流でそれなりに顔を合わせていた。新兵から、ウルトラ警備隊の候補生にまで上り詰めたアオキは、彼ら一般隊員にとつてはヒーローであり、目標であつた。

「調子はどうだい？」

「あつ、上々ですよ……それよりアオキさん、明日は頑張ってくださいよお」  
 「殊勲賞はきつと取つて見せるからな。そう思え！」

「なあに、あなたたちには負けませんよ、ハッハッハ……」

作業が終わり、操縦席を後にするナカニシ隊員。

彼の背中を見送ると、アオキはポケットから発信機を取り出す。

(この発信装置で、敵はマグマを襲ってくるかもしれない。それを叩き潰すんだ)  
 彼は、後輩の乗るマグマを、敵を釣りだす為の囷に使う事にしたのだ……

翌日、野外演習当日。

星ヶ原の荒野を、マグマライザーがひた走っていた。

ナカニシとオグラの二名の一般隊員が、コックピットで気を張っている。

訓練とは言え、周囲に不審な動きアリと細心の注意を払うように通達があつたためだ。

そのマグマライザーの進行方向で、地面が不自然に盛り上がり……

土砂をかき分け、謎の地底戦車が姿を現した!!

不意打ちを受け、思わず絶叫するナカニシ達。

まるでトンネルボーリングマシンのような、円筒状の先端部分を持つ地底戦車は、マグマライザーのコクピットへ即座にフラッシュを浴びせかけ、乗員を失神させる。

完全に動きを止めたマグマライザー。

やがて、地底戦車から、異形の宇宙人が降りてくる。

まるでレースのドレスのようなひだを纏った彼らこそ、プラチク星人。

地球を第二の穀倉地帯とするべく、強襲揚陸用のスペースタンクで地球を包むブルーバリアに穴をあけ、密かに防衛軍の隙を伺っていたのだ!

優秀なスパイが命と引き換えに手に入れたという触れ込みの情報は、法外な値段であつたが、防衛軍が大規模な演習を計画しているというのは間違いなかつたようだ。

その演習の標的とするためか、見つけてくれと言わんばかりの反応を垂れ流しながら、敵の戦車が接近してきたので、こうして鹵獲してやろうという腹積もりなのである。

スペースタンクから敵の戦車に突入したプラチク星人は、近くで見る敵の戦車が、思いがけず高性能である事に驚きつつ、これを用いて油断した防衛軍に奇襲を仕掛ける様子を想像して、下咽頭を震わせた。

持ち前の怪力で、マグマライザーの昇降扉を引きはがし、難無く車内へ侵入すると、コックピットと思われる方向へ後肢を進め、次の隔壁を開き……

開け放った扉の向こう側に、銃を構えた人影が笑みを浮かべて待ち受けていたので仰天した。

「よう、プラスチック野郎。残念だったな？」

「サ。ン。ネ。ン。タ。ツ。タ。ナ。」

「ギユピイイイイイイッ!？」

## 栄光はダンの為に（Ⅱ）

「食らえー！」

「セ。イ。ア。ツ。カ。イ。シ。」

ソガの構えたパラライザー、そしてユートの両手首に装備されたターボ・パラライズ  
プラスチックが一斉に煌めいた！

目もくらむような閃光と共に、麻痺光線がプラスチック星人の躰を打ち据える。

完全に不意を突かれた星人は、あまりの不快感に大顎をすり合わせ、甲高い叫び声を  
上げた。

「ギュピイイイイイイ！！」

しかし、あのワイアール怪人すら一撃で昏倒させた光線を何発も食らったというの  
に、少しひるむだけで一向に大人しくなる様子がない。

それどころか、こちらの攻撃が致命傷にならない事を悟ると、口からプラスチック液  
の霧を噴射してきた！

「うわっー！」

慌ててユートを盾に身を隠す。

念のためにバイザーを下ろしといて正解だった……こんな霧、一息でも吸い込もうものなら、プラスチックの膜が気管にへばりついて、たちまち窒息死だ。

しかし誤算だった。こんなにもパラライザーの効きが悪いとは……

プラチク星人はやたら可燃性が高く、ウルトラガンで撃つたら車内が大炎上不可避なので、こうするしかなかったのだ。まさか敵の弱点が裏目にでるとは……

プラチク液で俺達を牽制した敵は、くると背を向けて、一目散に逃げだそうとする。車外に出て巨大化しようという腹積もりだな？ そうはさせるか！

「やれっ！ U—8—！」

「ツ。イ。ケ。キ。 ツ。イ。ケ。キ。」

ユートの体の表面から、パリパリと硬化したプラスチック片が剥がれ落ち、金と銀で彩られた左腕が敵の背中を睨む。

奴らの吐くプラスチック液は、生身の人間が食らえばカチカチに固められてしまう即死級の攻撃だが、呼吸の必要もないユートにとっては、内側から馬力で突破すれば良いだけの話だった。なんなら、防錆コーティングを重ね掛けしてもらったようなものだ。

そして……

「チ。エ。ー。ン。ア。ー。ム。」

ユートが不可解な電子音を奏でると、前腕部に装備されていたブラスタが後ろへス

ライドし収納される。そして次の瞬間、ジャキリとシリンダーの回るような音がしたかと思うと、彼の左手首が轟音と共に爆ぜ、葉莖のようなものを排出した。爆圧によつて彼の左手……つまり高密度のチルソナイト鉄球が敵の背中へと射出されたのだ！

スキンケアの礼として、ユートが差し出した奇抜な握手は、タラップに足を掛けようとしていたプラチク星人の肩を強かに打ち据え、大きく態勢を崩させることに成功する。

ユートの腕から伸びた鎖が、ジャラジャラと床を擦りながら巻き取られていき、再び彼の手首を回収すると、今度は両の腕を振り上げながら、倒れこんだ星人目掛け猛然と突撃を開始した。

「ハ。イ。シ。ヨ。ハ。イ。シ。ヨ。」

やつとこのような形状の右手を、手首の先から回転させて星人目掛けて突き出すユート。パワーアームがゴリゴリと敵の胸を穿つ。

そして今度は強烈な左フック！ 星人のわき腹が鉄球で凹む。

現在のユートは、以前の重戦闘サイボーグとの戦を経て、損傷の激しかった右腕部を、接近戦用のより頑丈なものへと換装されていた。

そして、低下した遠距離能力を補う為に、前腕部にパラライザーを二門ずつ増設された上に、左手の破壊力を活かすための射出機構も組み込まれていたのだ。



強化された恐ろしい連撃が、次々と星人の胴へ振り下ろされていく。その容赦のなきは、いつかのノガワ隊員を彷彿とさせるものだった。

しかし、対する星人の方はというと、あの時のダンのように一方的に殴られるばかりではなかった！

鉤爪のついた指が、ユートの腕に食い込み、キィキィと耳障りな擦過音を響かせつつ、マシンパワーと拮抗する。

そして、信じられない事に、徐々に押し返そうとしているではないか!?

「な、なに!？」

そ、そうか！ コイツ、発火性が高すぎて雑魚っぽく思ってただけで、純粹な肉弾戦じゃあ、あの力自慢なセブンと互角に殴り合つて、疲労困憊になるまで追い込むパワーと持久力があるんだった！

俺が後ろから撃ちまくってるパラライザーも一向に効かないし、めちやくちや強敵じゃねえか!!

やつぱり、いくつかユートの部品を地球製のパーツに替えたから、元々よりも出力が下がってるのも響いてるのか？

「おいおい冗談だろ、負けるなU—8！」

「ム。チ。ヤ。イ。ウ。ナ。」

ソガが驚くのも無理はない。その恐るべきパワーの秘密はプラチク星人の特殊な身体構造にあつた。

そもそも、プラチク星人は巨大な節足動物であり、パラライザーで麻痺する主要な神経束は、硬い外骨格に守られている。

その上、体表から滲みだした高分子が疑似筋肉のように周囲を覆っているのだ。

いかに即効性の高い麻痺光線と云えど、それが作用する神経が肉体の奥深くに防御されているならば、効きが悪いのも当然であつた。

そして、この疑似筋肉を構成するプラチクポリマーは、発火性が高いという弱点はあるものの、非常に優れた可変性を持つ。ポリマーの性質を変える事で、表面は絶縁体でありながら、その内部は電位差によつて流動性を持たせるといった芸当も出来たのである。つまり、全身が強化ゴムで覆われた導電性高分子アクチユエータの塊と言つてもよい。

そして、この素晴らしい物質を、プラチク星人は体内の共生菌の働きによつて、無限に精製出来るのだ！

プラチク星人はこの共生菌のおかげで、硬い外骨格を持つ生物でありながら、そのナフシのように細長い体にプラスチック製の筋肉を張り付ける事で、内骨格のように応用し、まさに両者のいいところりをしたようなもの。

この加工性の極めて高い物質のおかげで、プラチク星は埋蔵資源へほとんど依存することなく発展する事ができた。いまや地表の全てが、彼らの生み出すプラスチックの都市で覆われているといっても過言ではない。

それに反比例するように、主食である纖維質植物の栽培に使える土壌が減ってしまった為に、こうして侵略行為に手を染めるしかないというのも、皮肉な話ではあったが。

とにかく、こと接近戦においては、昆虫由来のタフネスと、工業製品の如きパワーを發揮するのが、プラチク星人という種族であった。

「ギユピイイイイイイ!!」

「カ。ネ。ン。コ。ミ。カ。チ。ヨ。ウ。シ。ニ。ノ。ル。ナ。ヨ。」

「いかん、押されてる!」

さつきから、ユートが必死に殴りつけてるというのに、まったく堪えた様子の無いプラチク星人。

このままでは時間の問題だ……燃える以外の弱点は無いのか……!?

ユートの右手が敵を掴もうとするも、レースのようなヒダが揺れるだけだ。

……待てよ? そうか! あのヒダか!

あのヒダが梱包材のように衝撃を吸収してしまうから、ユートが思いつきり殴りつけてもダメージが少ないんだ!

プラチク星人の胴体は、モサモサした半透明のひらひらに覆われている。原作ではあのヒラヒラがエメリウム光線で一気に燃え上がって一瞬で骨になるんだが、なぜそんな燃えやすい物を付けているのか……？

きつと物理的な防御力がめちやくちや高いからだ！ そりやセブンに真つ向からタイマン仕掛ける訳だよ！ いくら殴られても死なない自信があつたんだな！

ということとは……弱点はヒラヒラが付いてない部分だ！

「ユート、ボディをいくら殴つてもダメだ！ 頭だ！ 頭を狙え！」

「リ。ヨ。ウ。カ。イ。」

ソガの言葉を聞くやいなや、ユートの左腕が再び重々しいリロード音を響かせて、星人の顔面を殴った瞬間、さらに至近距離から爆砕アツパーを解き放った！

下顎からかち上げられたプラチクは、流星に堪えたのかヨロヨロと後退する。

「ホ。シ。カ。ミ。エ。ル。セ。」

そして、ユートは、そのまま振り上げた左腕を、ぐるんと一振り！ 敵の顔面に反射して、後方に飛んで行った鉄球は、その勢いに引かれるまま、今度は大きく弧を描いて、星人の巨大な複眼の並ぶ脳天に直撃した！

「ギユピエツ！」

プラチク星人は、節足動物であるがゆえに、脱皮によって成長する。その時、彼らは

非常に珍しい事に、その脱皮殻を完全には脱ぎ捨てず、肉体に付着したままにしておく。こうしておくことで、外敵に襲われた際、古い皮が身代わりになり、偽装や防御になるのだ。

これは、彼らの祖先が脆弱なただの昆虫に過ぎなかつた頃からの本能であり習慣だつた。この優れた防衛術によつて、貧弱な幼虫の間を乗り切つた後は、共生菌の作り出す高分子液で外敵を捕食する……というのが、彼らの生存戦略だつたのだ。

その名残は、今なお彼らの服飾文化として根付いており、齢を重ねた個体になればなるほど、このミノが立派となり、権力の象徴となる。

もちろんの事、このミノが齎す防衛効果も依然として健在であり、ソガが咄嗟に見抜いた特性は、当たらずとも遠からずと言つたところであつた。

流石のプラチク星人も、視界を確保する為に、頭部の脱皮殻だけは早々に脱ぎ捨ててしまふからである。

「ギ……ギユギ……」

モーニングスターの一撃で、頑丈な頭の殻がかち割れ、黄色い体液を流す星人の顔を、巨大なペンチのような右手が掴む。

「ア。ン。リ。ミ。テ。ツ。ト。モ。ー。ト。イ。コ。ウ。」

右手首のモーターが、回転の過加熱によつて灼け付き、白熱していた。

突如として手首が展開したかと思うと、四枚のラジエーターが蒸気と共に展開する。  
「コ。レ。ヨ。リ。キ。ヨ。ウ。セ。イ。ハ。イ。ネ。ツ。キ。コ。ウ。ヲ。サ。ト。ウ。シ。マ。ス。」

高まる熱気が右手に集中し、空気が蜃気楼のように歪んでいく。

ジャキリと響くは断罪の叫び！

廃熱をそのまま敵へとぶつける、これぞ溶断破碎強制排気転用武装プラズマクラスター！

「ユ。ー。ト。イ。ン。ハ。ク。ト。」

「ギユピイイイイイイ!!」

凄まじい熱と衝撃が、ユートの右手首から噴射され、プラチク星人の内部構造を尽く破壊した。

びくりと震えた後、だらりと垂れ下がる敵の前肢は、それがいわゆる擬死の類でない事でありありと示している。

「サ。ー。マ。ル。エ。ン。ト。」

「お前……こんな事できたのか……」

「オ。チ。ヤ。ノ。コ。サ。イ。サ。イ。」

とりあえず、チリチリになるだけで発火しなくてよかったよ……

「変だな、マグマは実弾を使ってくるじゃないか」

「非常事態が起こったんじゃないの？」

野戦訓練が始まった時、フルハシとアンヌは、目前の光景に首を傾げるしかなかった。マグマライザーによって無線操縦された戦車から、次々に砲撃を仕掛けて来るのが、明らかに爆発によって吹き上がる土砂の量が、模擬弾のそれではない。

「隊長、作戦計画を変更して、隊員をこのまま後退させて下さい」

「何だって？」

「隊長！戦車が実弾を使って攻撃してきます！」

「実弾？」

「はい、第一前線では、数人の軽傷者が出ているようです」

「マグマが何者かに奪われたんだ！」

「実戦体制に切り替えるんだ、前線に指令を伝えろ！ 様子を見つつ、徐々に後退せよとなー！」

幸いにして、無人戦車の狙いは甘く、誰もいないところへばかり弾が落ちるのは、まっ

たく幸運としか言いようが無かった。それでも、避難による転倒や吹き飛んだ礫による怪我人が続々発生し、徐々に後退する防衛軍。

そこへ、後方部隊の担当だったアマギが、息せき切って走って来る。

「隊長！」

「なんだ!?!」

「所属不明の戦車が現れて攻撃を開始してきました！」

突如として、砂丘をかき分け、謎のホバー戦車が現れ、陣地に攻撃を開始する。

そこは、マグマライザーからの攻撃に追い立てられ、隊員達が退避するはずだったエリアだ。

もしも、前方の無人戦車隊の攻撃がさらに苛烈であったならば、早急に陣地転換を行つた結果、そこへ多くの隊員が伏せていたであろう。

キリヤマが、後退を遅らせるように指示していたのが幸いした。

「畜生……我々の野戦訓練を逆用した奴がいるんだ」

「あれが敵の正体だ」

「チツキシヨウ……挟み撃ちかあ！」

「地球防衛軍を骨抜きにしようというつもりなんだ！」

しかし、奇襲による被害がほぼ無かったとはいえ、前方の虎、後門の狼。



マグマ率いる戦車隊か、謎の高性能戦車か、どちらかを突破せねば、じり貧になるのは明らかだった。

「隊長、マグマを奪回して高原から脱出しましょう！ それ以外に方法はありません……」

それならば、少なくとも元は自分達の装備であるマグマライザー側の方がまだ御しやすい。ダンの提案に、アオキが即座に反応する。

「私にやらせて下さい！ 侵略者が誰であろうと、必ず倒してみせます！」

「キサマ、思い上がるな！」

「隊長……」

フルハシに窘められても気にせずキリヤマへ言い募るアオキ。

キリヤマ隊長は、血気盛んな新人の顔を真正面から見据え、まんじりともせず言い放った。

「……まあ、待て……」

「ま、待てですって……ッ!?!」

この状況でなにを悠長な!?

まさかこの隊長まで臆病風に吹かれたのではあるまいか？

アオキは今にも叫び出しそうになった。

憧れのウルトラ警備隊の候補生にまで上り詰め、喜んだのもつかの間。

厳しい訓練を積み重ねた自分を差し置いて、いつの間にもやら新隊員に収まっていたのは、どこの馬の骨とも知れぬ元民間人。

マナベ参謀に掛け合っても、素性は不明の一点張り。彼を捻じ込んだヤマオカ長官ならば何らかの事情を知っている可能性もあったが、流星にアオキと言えどそこまでの伝手は無かった。

そうして不満が燻っていたところへ、聞こえてきたのがあの噂だ。

曰く、ウルトラ警備隊にはとびきりの臆病者がいるらしい。

宇宙人に降伏を迫られた際には真つ先に白旗を上げ、少しでも甘い顔を見せた異星人にはすぐへりくだり、あげく任務の最中に声を上げて泣き喚く。

おまけに自慢の射撃の腕も、肝心な時に負傷して寝てばかりいるせいでろくに發揮できないと言うではないか。

先の話題に挙げた新人隊員も、クール星人の侵攻時以降は特に目立った活躍も無いくせに、なまじパトロールばかりしているせいで市民には顔が売れチャホヤされているらしい。

とどのつまり、自分は人気取りのプロパガンダ要員に、先を越されたのだ。

そんな者達ばかりが名誉あるウルトラ警備隊へ選ばれて、それでは自分達はいつたい

なんだと言うのか？

彼らが栄光の中で不当な喝采を浴びている間、泥にまみれ、血のにじむ砂を噛んだ俺達はいったい何だ？

奴らがピカピカの最新鋭機で飛び回っている間、履帯の付いた鉄の棺桶の中でボロ雑巾のように死ぬ隊員達は、なんだというのか!?

アオキには、到底受け入れられない事だった。

そして極めつけは、よりによって自分のお目付け役があのだんと!?

あの顔が少しハンサムなだけである、ポツと出の売名隊員を、よもやこの自分に宛がおう等と！ まさしく噴飯モノであった。

見返してやる……!!

その為には、ダン以上の鮮烈な戦果が必要な筈であった。

まさに今、防衛軍壊滅の危機を救うと言うのは、またとないチャンスなのだ！

マグマが奪われたという以上、ナカニシはもう死んでしまったのかも知れない。

アイツほどの男が何の抵抗もせずに殺されるとは思わず、救援が間に合わなかったのは痛恨の極みだ。

だが、知己を犠牲にした以上、もうアオキは止まれなかった。

もはやキリヤマの命令すらも無視して駆けだそうとした、その時！

「……アツ!? 見ろ! マグマが回頭していくぞ!」

「謎の戦車に向かつていくじゃないか! どういう事だ……?」

今までこちらへ散発的な攻撃を繰り返していた無人戦車の砲塔が、ぐるりと別の方向を向いたかと思うと、先程までのやる気の無さが嘘のように苛烈な砲撃を加え始めたのだ。

爆炎に追い立てられるホバー戦車。

あつげにとられる隊員達のビデオシーバーが一斉に鳴る。

「……おいおい、演技にしては変わり身が遅いじゃないかソガ。そんなに私に不満があつたのか?」

「隊長、冗談よして下さいよ。むしろ、例えばフリでも真剣にやらんか! ……と怒られるんじゃないかと、こっちはヒヤヒヤしながら手を抜いてたんですから」

「ど、どういう事だ、こりゃあ……?」

未だに理解が追いついていないフルハシを、しかめっ面のアマギが諭す。

「つまり、隊長とソガに一杯食わされたってことですよ。敵も……我々も!」

「ツはツはツは! 悪いなアマギ。……でも、食わせ者は俺だけじゃないぞ?」

「なんだって? どういう事だ?」

困惑するアマギを余所に、ソガは真面目な顔に戻ってキリヤマへ報告した。

「隊長、やっぱりアオキの仕掛けた発信機を頼りに、敵の宇宙人がマグマを鹵獲しようとして乗り込んできました！ 危うく蠟人形にされるところでしたよ！」

「なんだって!？」

全員の視線が一齐にアオキへ集中する。

「キサマ……どういう事だツ!？」

「ち、違います……じ、自分は……」

「フルハシ隊員、そいつのいう事に耳を傾けてはなりません！ おそらくユシマ博士やノガワのように、なんらかの催眠にかけられて操られているんです！ 今までのウルトラ警備隊に相応しくない言動の数々も、全部宇宙人にやらされていたんですよ！」

「ええッ!？」

ソガの名推理に、アオキとフルハシの声が重なる。

「次は何をするか分かりません！ 早く!！」

「そういうことだったのかあ……!！」

「違います！ 自分は宇宙人となんか……!！」

「今、楽にしてやるからなあツ!!！」

「うぐうつ!！」

遠慮を知らぬフルハシが全力で放った強烈な善意のストレートが、アオキの腹に深々

と突き刺さった。

## 栄光はダンの為に (Ⅲ)

「通りでヤな野郎だと思ってたんだ。宇宙人の仕業だったなんてな」

「かわいそうに……」

「ダン、お前はアオキを安全な場所へ運べ」

「分かりました」

伸びた新人をダンが担いで走っていくのを見送りつつ、キリヤマは次の指令を飛ばす。

「アンヌ、フルハシはこの場にいる前衛班を率いてマグマの援護。アマギ、私と一緒に来い！」

「了解！」

プラチク星人のスペースタンクに目掛け、猛進していく戦車隊を援護するべく、隊員達が攻撃を開始する。

ところが……

「ギューピイイイイイイイ!!」

「アッ!? 隊長! 巨大な宇宙人が現れました!」

「何ッ?」

巨大化したプラチク星人が、防衛軍の前に立ちはだかり、元気に砲撃を仕掛ける無人戦車を鷲掴みにすると、もう一両の戦車に叩きつけて破壊してしまおう!

満足そうな鳴き声をあげる巨大昆虫。おまけに大きくなつた体を活かして、プラスチック液をこれでもかと吐き出した。

「総員下がれ! 各自バイザーや防毒マスクを装着せよ! マスクの無い隊員は呼吸を止めて速やかに退避するんだ! 奴の霧を吸い込んだら固められてしまふぞ!」

ソガからの報告を聞いていたキリヤマは、敵の攻撃に防御手段を持たない隊員を下がらせる事にした。

これ以上、無駄に犠牲者を増やす訳にはいかない。

だが、逃げようとする一般隊員達の進行方向で、無数の爆発が起きる。

スペースタンクからの砲撃だ!

逃げ場を失い窮した隊員達へ、肩を揺らした星人がゆっくりと近づいて行く。

「総員、あの侵略者を撃て!」

全方向からプラチク星人に攻撃が飛ぶものの、殆どの者はマシンガン装備であつた為に、物理的な防御力の高いプラチク星人には大した脅威にもならない。

幾人かの隊員が放つた対戦車ロケットや、アンヌ達のウルトラガンは、着弾した部分



のヒダを燃やすという一定の効果も上げたものの、熱量が足りず、ヒダがすぐに焼け落ちてそれ以上に燃え広がる事は無かった。

「ギューピイイイイイイイ!!」

「うわああ!!」

最も人数の多い場所へ向けて、プラチク星人が毒液を吐きかけようとしたその時!

「ダアアアアアア!!」

横合いから飛び出してきたセブンのタックルが炸裂し、フワフワした異形の昆虫を吹き飛ばした!

悲鳴を上げて、地面を転がるプラチク星人。

泥だらけの星人に追撃を仕掛けようと、セブンが頭頂部の武器に手を伸ばそうとする  
と……

「ギューピ!! ギューピイ!! ギューンギューイ……」

なんと地に伏した星人が、ジェスチャーも交えて必死に懇願してきたのだ。

大人しく撤退するから見逃してくれという命乞いを受け、光の巨人は大きく頷くと、星人に背を向け空へ飛び立とうと……

「セブン! 危ない!!」

「ジュオツ!!」

アンヌの叫び声に反応し、咄嗟に飛び退くセブン。

僅かな差で、先程まで彼がいた場所に、大量のプラスチック液が降り注いだ。

擬態や擬死で敵を欺き油断を誘うのは、プラチク星人が昆虫だった頃からの得意技である。

いかにテレパシーの使えるセブンと言えど、彼らの強い生存本能と希薄な懺悔意識を読み切る事は出来なかった。

ところがウルトラ警備隊は騙せなかった。

大事な後輩を洗脳し、侵略の尖兵に使う等という卑劣な作戦を使う敵が、どんな手を使ってくるか分かったものではないと、気を張っていたのだ。

アンヌの呼びかけが無ければ、そのまま全身を固められていたかもしれない。

しかし、咄嗟に飛びのいたとはいえ、完全には避けられず、手足を固められてしまうセブン

「デユワアツ……!」

「野郎……アオキどころかセブンまで……もう許さねえぞ! 食らいやがれ!」

特に根っからの後輩思いで、凄まじい熱血漢であるこの男の怒りは尋常ではなかった。

射程が短く先程まで使えなかった大筒を、力強く構えると、乾いた大地をしつかりと

踏みしめる。

フルハシのスパイダーから、極太の熱線が飛び出し、今なお硬化液を吐き出す敵の口に一直線！

「ギユガアアアアア!!」

「どうだ見たか!」

吐き出していた液体に熱線が引火し、喉を焼かれてのたうち回るプラチク星人。

その隙にセブンはビームランブから熱エネルギーを変換し、手足の戒めを解くことが出来た。

今度こそ、と構える彼の後ろから、恐ろしい怪力が彼を撃ち倒した!

仲間の危機に、もう一匹のプラチク星人が巨大化して飛び出してきたのだ!

「あつ!? セブンの方にもう一匹行っちゃったぞ!」

「くっ……我々が不甲斐ないばかりに……」

「ナカニシ、オグラ! 次からは絶対に奴を見失わないようにするぞ!」

「了解!」

「イ。ウ。ハ。ヤ。ス。シ。」

「頼むぞユート、無人戦車の動きはお前にかかっているんだからな!」

「マ。イ。ツ。タ。ナ。」

マグマライザー対スペースタンクの戦いは、少々旗色が悪かった。

なにせ同じ地底戦車と云えど、性能がまるで違ったのだ。

両者共に戦車という括りではあるものの、攻撃方向は機首の向いた先へと限定されており、どちらかと言えば自走砲や駆逐戦車に近い。

となると、旋回速度がモノをいうのだが……マグマライザーが鈍重な履帯機動なのに對し、スペースタンクはホバー移動だったのだ。

その速度差は比べるまでもなく、機首をこちらへ向けたまま、ぐるぐると外周を旋回するスペースタンクに對して、マグマライザーは翻弄されるばかり。

ユートが操縦する無人戦車の援護がなければ、とても勝負にはならなかっただろう。8番目の隊員は、マグマライザーの潤沢な動力に繋がれ、その演算能力で無数の戦車を同時に操っていた。しかし、あまりに四角四面な攻撃は読みやすいのか、未だに決定打は与えられず、一両、また一両と破壊されていく無人戦車。

流石に戦車まで燃えやすいプラスチック製ではないようで、実弾では大したダメージが与えられていない。

「捕まえた！　　」だあー！

だが、無人戦車の包圍網によって生まれた一瞬の隙をつき、ソガの狙いすましたレー

ザーが飛ぶ。

それはスペースタンクのだ真ん中に直撃するが……

「ま、また弾かれた!？」

「くそっ! やっぱりだめか!」

これであつた。

敵は機首に装備された大型の共振変圧器によって生じた掘削フィールドを、バリアのように使つて、レーザーを弾いてしまうのだ。

電磁バリアにすら穴をあけるビームラムは、傘状に展開すればそれ自体が強力な防衛手段に転用できるのである。

おまけにあの兵器は兵員輸送車としての機能も兼ねている。

少しでも攻撃の手を緩めれば、新たな巨大化宇宙人が戦場に出て行つてしまう。

彼らはこの難敵に、予想以上の苦戦を強いられていた……

二匹目の星人と、セブンが格闘している隙に、起き上がった一匹目は、複眼をぎらつかせ、自分をこんな目に遭わせた敵を、鉤爪で引き裂いてやろうと辺りを見分する。

喉を焼かれ、もうプラスチック液は吐けないが、依然として残された怪力と巨体こそが、一番の武器であつた。

わざわざ固めてしまわなくとも、あのように小さな種族は、踏みつぶしてしまえば一瞬だ。

殺意の視線をめぐらせたプラチク星人は、銀色の四角い箱が、自分にレーザーを浴びせかけてくるのに気付いた。

野性的な敏捷性で、それを素早く躲す昆虫型宇宙人。

彼らはその外皮が異常に燃えやすいという特性を持つ為に、この手の熱量をもった粒子攻撃には滅法弱かった。

だが、それをよくよく自覚してもいたので、そういった攻撃には特に気を払い、避けるようにしていたのである。

幸いな事に、彼らの動体視力と機動性は、それらを行うのに充分だった。

先程のように隙を突かれさえしなければ、正面からそういった攻撃を食らう事はまずないし、突き出した複眼と触覚は、背後に關してもそれなりの視野を確保していた。

かつての祖先は古着を着込んでまで散々っぱら飛行型の天敵から身を隠していたのだ。プラチク星人達は、自分達に死角はないのだと思っていた。

生意気な鉄の箱を、思い切り踏みつぶしてやろうと近づく星人。

レーザーを乱射しながら後退するポインター。

しかし、巨人の歩幅の方が、バック速度より僅かに速い！

このまま巨大な足にプレスされてしまうのか!?

「今だ!」

ハンドルを握るキリヤマが、鋭く号令を発する。

その瞬間、星人を取り囲むように掘られていた塹壕から、アマギの率いる幾人もの隊員達が一斉に姿を現し、手にしたホース銃から猛烈な炎を吹き出した!

野外戦闘訓練の一環として持ち込まれていた、キュラソナパームの一斉放射である! プラチク星人は怒りに我を忘れた上、自身の身体能力を過信した為、囿のポインターにまんまとおびき出され、用意されていた対戦車塹壕のど真ん中に出てしまったのだ! 甲高い断末魔が響き渡り、純白のレースをあしらった豪華なドレスを、目の覚めるような紅蓮に衣装替えた宇宙人は、それを死に装束に選んだ。

「キリヤマ隊長達が、敵を塹壕に誘い込んで焼き殺す事に成功したようです!」

「……流石だな、そうかその手があった!」

「ソガ隊員?」

戦況を確認していた通信手のオグラの報告に、俺はあの縦横無尽に横滑りするスペースタンクを捕まえる手を思いつく。

「ナカニシ! 半時計周りに超信地旋回!」

「了解！」

こちらに機首を向けたタンク目掛け、レーザーを乱射……しているように見せかけて、奴の足元の地面に超振動レーザーを撃つ、先程まで敵のいた地面が、続け様に爆発し、大量の砂を巻き上げる。

「ユート！ あの粉塵の中へ残った無人戦車を並べて突っ込ませろ！ 時計周りとは時計周りに同じ数だ！」

「カ。ッ。テ。ン。」

マグマライザーの攻撃をホバー機動で躲していくスペースタンク、しかし……  
「ビンゴォー！」

砂の煙幕の中を走ってきた無人戦車と衝突し、動きを止めるホバークラフト。

その反対側から突っ込んできた残りの戦車が敵をサンドイッチし、完全に機動を封じた。

「今だ！ アクセル全開！ 突っ込めえ!!!」

「うおおッ!!」

ナカニシがレバーを思いっきり引き倒すと、マグマライザーのエンジンが唸りを上げて敵へ突進する。

「ジェットドリル最大出力!!」



「回転開始!! 耐ショック!!」

スペーススタンクの凹部へ目掛け、銀の円錐が勢いよく挿し込まれた!

ギヤリギヤリと不快な音を立て、逆回転する掘削機と掘削機が互いを削り取ろうと火花を散らす。

「うわあああ!!」

「怯むな! そのまま後ろの崖に押し付けろ!」

「防衛軍魂を舐めるなよおお!!」

「ム。チ。ヤ。ク。チ。ヤ。タ。」

スパークによって眩んだ眼を閉じ、一心不乱に突撃を敢行する隊員達。

スペーススタンクにとって不運だったのは形状差。

同じ掘削機ではあるものの、こちら側は突き詰めればフィールド発生装置という精密機械であり、対するマグマのジェットドリルは武骨なただの金属塊。

そしてそれを支える両者の足回りは……大地を踏みしめるマグマライザーの履帯と、スペーススタンクのホバー。

もしも相撲を取った時、どちらの踏ん張りがより利くか、という部分に関して、プラチク星人側は、絶望的に不利だった。

そんな状況、ハナから想定していないのだから、当然だ。人類は彼らの想定を超え、愚

かしい程に野蛮だったのである。

全速力で岩肌へ叩きつけられたスペースタンク。メリメリツとけたたましい轟音と共に、ドリルの先端が敵の掘削装置もろとも装甲を突き破り、深々と挿し込まれる。

「もういい！ 後退だ後退！！ バックしろ、爆発するぞ！」

「はいッ！！」

煙を燻らせ、火花を散らすタンクの残骸に、ソガの放ったレーザーが何度も突き刺さり、ついにトドメを刺した。

爆発炎上するスペースタンク！

「やったーッツ！！」

それに気をとられた巨大プラチクの隙について、セブンは念力を集中して、敵の巨体を大きく投げ飛ばし、地面に叩きつける！

「ギユペエー！」

「デユワ！！」

最大威力のエメリウム光線が命中！

磁力線の発する強力な熱量が、プラチク星人の体を、スチールウールが燃烧するように一気に燃え上がらせた！

たちまち骨をさらけ出すプラチク星人。

こうして野外訓練は、急遽野外実戦に変わり、無事成功を収めたのだった。

「アオキ！ しつかりしろアオキ！」

「あ、アナタは……ダンさん……」

アオキが覚醒した時、まず目に入ったのは、自分を見つめるモロボシ・ダンの笑顔だった。

「よかった……元に戻ったんだな!？」

「ダンさん、自分は……」

「いいんだ……むしろすまなかった。気付いてやれなくて……僕が気付いてやるべきだったんだ、僕が……」

「ダンさん……」

自分の無事を心から喜び、そして無念そうに眉を下げるモロボシ隊員の表情を見て、アオキは何も言えなくなった。

感情がぐちゃぐちゃにかき混ぜられて、彼の顔がまともに見れなかったのだ。

「ダアアアン！」

「ソガ隊員！」

「どうだアオキは？」

「ええ、すっかり意識を取り戻したようです。みんなを呼んでできます！」  
走っていくダンの後ろ姿を見るアオキの顔は歪んでいた。

困惑、怒り、羞恥、羨望、後悔……

それにしてもまったく、見れば見る程、出て来る度にヒーローの足を引っ張りそうな顔をしやがって。

「あんなに酷い態度をとったのに……」

「見たかアオキ、ああいう無私の精神こそ、警備隊に求められるものだ。誰かの為に戦い、誰かの無事を祈る……それが俺達の信念だ」

「ソガさん……私は……私は宇宙人に操られていた訳ではありません……私のための栄光が欲しかった。ソガさん……私はあの時、林の中で見たんです……」

「ほう？」

「そのことさえ……報告しとけば……許して下さい……」

アオキは、ソガを昏倒させた後、プラチク星人の宇宙船を目撃していたのだった。

「……知ってるよ、それくらい」

「えッ？」

「だいたいな、素面であんな事しておいて、どうするつもりだったんだ？ 天下の防衛軍が、事もあるうに敵性宇宙人の片棒を担ぐような真似しやがって……どう考えても軍法

会議モノだろうか？　もしもマグマが本当に奪われていたら、何十人という隊員が犠牲になったところだぞ？　その時、お前を推薦したマナベ参謀の顔に泥を塗るとか考えなかつたのか？」

「……も、申し訳ありません……自分が……愚かでした……」

その時、彼らの背後で、何者かが音も無く立ち上がる。

擬死を解いたプラチク星人だ！

ポリマー性の疑似筋肉が焼け落ちようと、中身の神経節が辛うじて無事だったのである。

ナナフシのような本性を現した敵の姿は、まるで骨だけで立ち上がった幽鬼のようであつた！

「危ない！」

それに気づいたアオキが、ソガを押しつけ敵を撃とうとするが……

「ギギギギギギギギ……ガツ!!」

「なっ……」

そちらを一瞥もせず、ウルトラガンを背面撃ちするソガ。

彼がノールックで放つた光線は、寸分たがわずプラチク星人の頭部に命中し、敵にトドメを刺した。

崩れ落ちるプラチク骨格。

「悪いな、お前に償いの機会は無い」

「ソガ隊員……」

アオキを見つめるソガの目は、随分と冷ややかなものであった。

噂に聞いた彼の性格とはまるで……

「ここには今のお前の為の栄光なんてどこにもない。お前は俺にプライドが無いのかと言ったが、俺はそんな下らんプライドで戦う奴が反吐が出る程嫌いだ。そういう奴は変な理屈で自分勝手に手段を選ぶわ、人の邪魔をするわで碌な事しねえ……俺にあるのは意地だけだ。例えばどんな汚い手段だろうが、名声が地に堕ちようが、自分の大切な人が幸せならそれでいい。他の奴がどうなるうが知った事か。オレもお前も、同じくらいのクソ野郎だが、唯一違う点はそこだ」

アオキの胸倉を掴み、ソガは怒りに燃える瞳で彼を睨みつけた。

「地球を守りながら栄光も欲しいだあ？ そんな片手間で侵略者が倒せるかボケ！ 警備隊舐めとんちやうぞ？ 自分の手柄になるような戦い方しとる時点で、必死さが足らんのじゃー！」

「うっー！」

感情をぶちまけるだけぶちまけて、アオキを放り出すと、ソガは彼の顔から視線を外

し、別の方角を向いた。

「もしも栄光があるというなら……誰に頼まれたわけでもなく、知らない誰かの為に戦える筋金入りのお人好し……」

アオキの見上げるソガの目は、眩しそうに細められ、いったい何を見ているのか……「自分の栄光をその他大勢に切り売りしちまう、幸福の王子みたいな馬鹿野郎にこそ、俺の分の栄光は捧げると決めてある。悪いがためえにくれてやる分はねえよ」

「ソガ隊員……」

「悔しかつたら、カンフーでも覚えてから出直してくるんだな」

遠くから、仲間を引き連れた馬鹿野郎が、自分達を呼ぶ声が聞こえてきた。







## 惑星散歩（Ⅰ）

やあ、ぼくアギラ！

今日はパパのお仕事が終わったら、たいよーの近くまでピクニックに連れてってもらうんだ！

みんなで、ポカポカひなたぼっこするの！

……と思っただけ……

「V2からの緊急連絡です。未確認飛行物体が地球に接近警戒を要す。アステロイドベルトから外れた小惑星と推測される」

「そんな星屑なんか、大気圏突入で燃え尽きてしまいますよー！」

「でも一応、パトロールは強化しよう」

「はっ……。フルハシ、ダン、アマギ。これより、24時間のパトロールにつけ！」

えっと……にじゅーよじかんって、ちきゅうの時計だとどれくらいだっけ？

いーち、にー、さーん……えー!? 針が二回回っちゃったよ!? これから一日中

……ってコト？

そんなあ……ピクニックがあ……マナベさんぼーとたいちよーのいちわるう……

ひなたぼっこは無くなっちゃったけど、うるとらはーくで夜のお空をビューンっておさんぽだ！

とつてもはやいから、すき！

「お客さん、来そうもねえな……」

「おい、あ、あれは……？」

アマギたーいんが何か見つけたみたい。

わあ、おっきな島だねー！

……あれ？　ここっってお空の上じゃなかったっけ？

「島だー！」

「こちらフルハシ、飛んでくる島を発見！」

「なんですって？」

「島が飛んでくるんだ！」

そうなんだよ、アンヌおねえちゃん！　お空の上なのに島がびゅーんって！

「島が？　バカなこと言うな」

「いや、確かに島です。本当なんです、隊長」

うわーん、たいちよーのばかばか！　なんで信じてくれないのー？　バカって言った方がバカなんだぞー！

「衝突するぞー！」

島から変な光が！

うわあああああ!!!　まぶしい!!

すいこまれるうううう!!

---

うううん……ここは……あれ？　ボクたちどうなったんだっけ？

みんな気絶しちやってたの……？

ねえパパ！　おきてー！　おきてー！

「う、うう……ハッ！　フルハシ隊員！　アマギ隊員！」

「うっ……ああ……」

よかったーみんな大丈夫そうみたい。

「……ここはどこだ!?!」

「昨日飛んでいた島ですよ」

「へっ? ……よし、行ってみよう!」

パパたちはこの島に降りて、おさんぼする事にしてみた。

うええ、ぶつきみー

「まるで鬼ヶ島だな……」

ゴツゴツした岩だらけで、まわりはみーんな霧に囲まれて何も見えないや。

うーん、こんなに霧だらけだと、ミン兄ちゃんを思い出すなあ……

あのね、ミン兄ちゃんは今はパゴじいの使つてるおうちに、少し前まで住んでた家族なの。

元々のおうちは、バンデルセーけーって所にあつたらしいんだけど、そこが住みにくくなつちやつたから、脱出して宇宙をふわふわしてた所を、パパに拾われたんだって。

ボクはよく可愛がってもらつたから、すごく好きだつたんだけど、せーかくが真逆のダム兄とはよくケンカしてたっけ。

『全くつかみどころのない奴だ』ってダム兄がゆつてた。

ミン兄ちゃんは霧の体の怪獣なんだから、掴めないのは当たり前なのにねー。ヘンなの。

そうそう! ぼくたちのおうちを繋げてお話したり、たたかいのれんしゅーをしたり、少しだけ外を見れたり出来るようにしてくれたのも、ミン兄ちゃんなんだ! すご

いでしょ！

でも、地球に来るちよつと前に、居心地の良さそうなおうちを見つけたから、そこでボク達とは一旦お別れしたんだ。

ミン兄ちゃんも元々、たたかいが得意でも好きでもなかったから、みんなも引き留めちゃ悪いと思つて、笑顔でさよならしたんだけど……ダム兄もすぐく寂しそうにしてた。あんなにケンカしてたのね。

懐かしいなあ……元気にしてるかな、ミンテイオス兄ちゃん……  
そんな事を考えてたら、突然ピーピーガーガーすぐくうるさい！

うあああ！ なになに？ 何の音!?

「本部へ連絡不能です」

なーんだ、パパのつーしんきが、壊れてた音みたいだね。

でも変だなあ……なんでだろ？

「あれを見ろ」

フルハシおじさんの指差した先には、ヘンな建物がいっぱい……

「ここは地球じゃないんじゃないのか？」

「いや、地球らしいぞ……」

「それも日本ですよ。ほら」

パパはそうゆって別の方を指差した。

あ！ 青と白のおつきいお山だ。

ぼく知ってるよ！ ふじさん！

「何だ、地球防衛軍のすぐそばじゃないか……」

「ほんとだ！」

「……待てよ？ そいじゃあ、ありやあ……？」

「……宇宙前衛基地」

さつと身を隠すパパ達。

そうすると、パパの手元で何かが光った。

あ、これ！ この前パパが、ほーくにごーでおさんぼした時に、アマギたーいんにお土産で持っていった石だ！

ぼくたちから見るとすぐキラキラしてるんだけど、ニンゲンさんからはただの石ころに見えるみたいで、アマギたーいん喜んでくれなかったの。残念だったなー

「これは地球のものではありません。……恐らくV2から連絡してきた小惑星ですよ」

「じゃあ、アステロイドベルトから来たってわけか……」

「ええ、散歩する惑星です」

「冗談言ってる場合じゃないぞ。侵略基地だったらどうする？」

「……ようし、それじゃ、あのへんてこりんな建物に、殴り込みだ！」  
ええ!?! いくらフルハシおじさんでも、建物叩いたら、おててケガしちやわない？

へんな基地にはだーれも居なかった。なーんだ。留守か。

扉をパパとフルハシおじさんがいくら引つ張つても開かなかつたのに、みんなが別の場所を見に行こうとしたら、ぷしゅーって開いたの。

きつと寂しがりやの基地なんだね。

「無人基地ですな……」

「電波で操縦されているんだ」

中には見たこともない機械がいっぱいあって、ボクにはなんだかよくわかないや。

「相当、強力な電磁波が発信されているな……」

そうなの？ どーりで今日はみくらすやパゴ爺だけじゃなくて、ダム兄までねぼすけさんだと思つてた。

それから、基地の中をじつと見ていたアマギたーいんが、ひとつの機械を指さした。

「あれだ！ ……これがメインの機械だ！」

「こいつが島の心臓か……」

すげいすげい！ さつすがアマギたーいん！



かしこくつてエライ!

たくさんお勉強したんだね。

ぼくはお勉強していると眠くなっちゃうからニガテだけどね、えへへ。

「止められますか……?」

「俺にもわからん……やってみよう」

その時、基地の扉がぷしゅーって閉まつちやつた!?

三人で押してもビクともしない。

フルハシおじさんが、おててに唾をぺっぺつとして(ばっちいからよくないと思う)思いつきり体当たりしたけど、全然だめだった。

「アイテテ……」

「大丈夫ですか!」

「だいじょーぶ? 痛いので飛んでけます?」

でも、肩でタツクルするなら、唾をぺっぺつってする必要はあったのかなあ?

その頃、小惑星から発信される、出力およそ数億万キロの怪電磁波のために、通信網が大混乱。

被害はエレクトロニクス諸機械にまで及んだため、地球防衛軍では触角であるレ-

ダーやウルトラホークも使用不能に陥っていた。

一方キリヤマ隊長は、ダン、フルハシ、アマギ隊員が、昨夜消息を絶つたのは、怪電磁波を発する小惑星に関係があるものと断定。

3 隊員の救出と小惑星の調査に赴いたのである。

しかし、ポインターとはある一点から前にすすむ事ができない！

「何か、見えない壁にぶつかつたみたいだ」

キリヤマが石ころを投げると、空中で硬質な音を立てて跳ねってくる。

「電磁バリアだ……ソガ、レーザー光線発射！」

ポインターのレーザーも折れ曲がる不可視のバリア！

アンヌが双眼鏡で覗くと、島には不時着したホーク1号が確認できたが、バリアに阻まれてコチラからは手出しが出来ない！

「このままの進行方向で基地に近づいてくると……」

「危険だ。妨害電波でミサイルも使えないとなると、残るは……」

「新兵器、キリー」

「うむ、あれなら逆に、妨害電波にくらいついてゆく……」

「しかし、あの惑星にはダンたちが！」

マナベは断腸の思いで決断する。

「現在、この基地は麻痺状態にある。あの怪電波のためだ。いつまでも放っておくわけにはいかん」

「小惑星の移動速度から計算して、あと53分でこの基地に……」

「53分か……。ここまで待とう、あと20分だ。これから中に入れるわけにはいかん」  
地図上に最終防衛ラインが示された。

「畜生、ホークさえ飛ばしたらなあ……」

「キリー発射準備！」

基地のドアを開けるために、パパとおじさんが台座になって、アマギたーいんが天井の機械を操作する。

アマギたーいんの背が高くて助かったね。

「しっかし、なんで敵は島なんぞ送ってきたんだらうな……うー」

「それは……おそらく地球圏を覆う電磁バリアや大気圏を抜けるためでしょう……岩石がいくら削れても、この基地さえ大気圏内に到達できれば良いんです。ただの小惑星だと、V2からの偽装にもなりますし……」

「おおい！ まだか!?!」

フルハシおじさん苦しそう。肩も痛いし15分以上も同じ態勢で支えるなんて、ニン

ゲンなら辛くて当たり前だ。

まだ涼しい顔のパパがスゴイだけだ。

「さつきからずつとこの島、移動し続けていますよ。もしかすると、この惑星自体が時限爆弾になっているのかもしれない」

「なんだって?! ……おい早くしろよ!」

邪魔しちやだめだよ、アマギたーいんはしゅーちゅーしてるの!

「おい、なぜ時限爆弾だと思うんだ?」

「地球防衛基地に接近しているからですよ。侵略目的がなければ、無人基地を送り込む必要もありませんしね」

パパが今思い出しているのは、アイアンロックスだ。

あの時は鉄のカタマリで爆弾を守っていたけど、今回は石で出来たアイアンロックスってコトだね!

あれ? じゃあ……ロックスロックス?

「なるほど、そのことは本部でも気が付いているんだらうな」

「もちろんですよ。直径一キロです。どこからでも見えますよ……」

「……とすると、なぜ攻撃してこないんだ?」

「恐らく、我々のことを気遣っているんでしょう……」

「アマギ！早く何とかしろよ。味方ミサイルの攻撃目標にされるなんて、けっして名誉なことじゃねえからなあ！」

「わかった！ これだあ！」

ドアが突然開いてみんなが外に転がり出る。

みんな！ 急いで！

無事にほーくいちごーまで帰ってはきたんだけど……

「頼むから、かかってくれよお……」

シーン……エンジンが動かない……。ガーンだ。

「強力な電磁波が狂わしているんだ！」

フルハシおじさんがレバーを引っ張っていると、どしゅーうって音がする！

やった！ エンジンがかかった……んじやないや、別の音だ。

うわうわ、下からどんどんスゴイ音が聞こえてくるよ!!

「地下に動力室でもあるみたいですね」

「何かが始動を始めたんだ」

「早くここを抜け出さなくては……」

でもでも、ほーくのエンジンは止まったまま。

「あの強力な電磁波を止める必要がある」

「よし！」

「ダン？」

「止めてきます」

「よし、俺も行くぞ！」

やった、アマギターいんならすぐに機械をとめてくれるね！

「いや、ひとりでやります。もしダメならこれで爆破しますよ」

爆弾を取り出すパパ。そっか、壊しちゃえばいいんだ！

「すぐ、飛び立てるようにしておいて下さい」

「……うん。気をつけていけよ」

二人とも心配そうだけど大丈夫、パパはなんとたつてウルトラセブンなんだよ！

でも、パパが自信満々で飛び出した途端、すごい地震がぐらぐら揺れる。

わわわ！ 怪獣だ！！

パパ！ 変身して！

「デユワ！」

シーン……

おっかしいな？

「デユワッ！！」

パパがもう一回変身しようとしても何も起きない。

なんでなんでー!?

「強力な電磁波の為だ!」

そ、そっか! ウルトラアイも機械だから、ほーくやダム兄みたいにおねんねしてるんだ!

あ、あ……ダメダメ! そっちは二人のいるほーくの方だよ!

そっちいつちやだめー!

向こうの岩場から、敵の怪獣にドガガガと攻撃が飛ぶ

あの音はえれるろろえーちがんの音だ!

アマギたーいんとフルハシおじさんがほーくから降りて、怪獣をやっつけようとしてるんだ!

がんばれー!

なのに怪獣には全然効いてないみたい……そのまま進んで……あつ!

ほーくが蹴飛ばされちゃった……!!

二人は逃げたみたいだけど、怪獣が追っていく!

ぜったいぜっめいのピンチ!!

「あつ、危ない!」

パパ！ ぼくがいるよ！ ぼくを使って！！

「アギラ、頼むぞー！」

『AGRAAAAAAAAAA』

よーし、がんばるぞー！！

!!!!!!!



## 惑星散歩（Ⅱ）

こらー！ アマギたーいんとフルハシおじさんをいぢめるなー！

ぼくは敵の怪獣に向かって飛び掛かる。

馬乗りになって、押さえ込んでやるんだ！

う、うわっ！ コイツ、すぐ力が強いぞ!?

すぐに振り落とされちゃった……

長い首を掴んだりもしてみただけど、ぜんぜんダメ。

うーん……ぼくにも、ミクラスみたいな腕力があればなあ……

でも、四つん這いじゃあ、ぼくみたいに素早く動けないはずだ！

後ろにまわって……痛い!?

今のは……そうか尻尾だ!? 首だけじゃなくて、尻尾も長いなんてズルいぞー！

ぼくが叩かれた頭を抑えている間に、敵がこつちを向いてにらみつけて来る。

うう……なに考えてるかぜんぜん分かんない、ヘンな目だ……

なんかすぐくブキミ……

だめだめ！ こんな事で怖がってちゃ！

お返しにぼくも頭のヒレをパタパタ動かして、あいてをいかくしてやる!

どうだ! ぼくは大きいんだぞー! 強いんだぞー! ぱたぱた……

あれえー!? なんて怖がつてくれないのー!?

一方その頃、ダンは妨害電波の発生源を停止するべく、先程まで閉じ込められていた敵の基地に戻ってきていた。

彼とて元は恒点観測員であるので、こういった宙間航行物の簡単な制御くらいはある程度出来る。

しかし……

「……駄目だ」

ダイヤルを回して再設定を試みたのだが、何度やっても入力が初期化され、新たな命令を受け付けない。

本星からの電波コントロール以外の介入方法をシャットアウトしてあるのだろう。

「よー」

もはや操作は出来ないと悟ったダンは、腰のポーチからライターサイズの小型時限爆

弾……ではなく、普段から使っているカプセル状の低性能爆薬を取り出した。

それらを、アマギが触ろうとしていた、主要パーツと思われる基盤やヒューズのような部品達の隙間へ差し込んで……起爆。

小さな爆発音がする度に、なんだかよく分からない部品が吹き飛んでいく。

これをただひたすらに繰り返すダン。

大事そうな部分や、爆破によって新たに出来た隙間にどんどんと爆薬を差し込んで5秒起爆を叩き込む。

ダンの乱暴な解体作業が進むにつれ、メイン機器だけでなく、周囲の機械群からも異音とスパークが断続して発生し、着実に誤作動を引き起こしている事が分かる。

「あともう少しだ……！」

シューシューと火花を吹き出し始めたメイン装置を放置して、くるりと振りかえると、今度はアマギが最初に覗き込んでいた機械を見据えるダン。

「ダーー!!」

途中で拾っておいた石を、大きく振りかぶって全力投球！ 機械を覆っていた透明なパーツが、ガラスのようにひび割れ、無残に砕け落ちる。

そうして出来た大穴に、無慈悲に投げ込まれる小型爆薬の束。

きっかり5秒後に、連続して発生した爆圧が、保護されていた繊細なパーツ群を襲う。

機器の内部が真っ黒に煤けて、黒煙を吹き出す様を確認すると、ダンは満を持して腰のウルトラガンを抜き放ち、部屋の奥に鎮座する機械群に向かって引き金を引いてみた。

狙い通りモニターを焼き切っていく光線！ やった！ ついにウルトラガンが使えるくらいに電波が減じたのだ！

こうなれば後は、手当たり次第に破壊していくだけだ。

とにかく重要そうな部分に目掛け、発砲！ 発砲！ 発砲！

「そろそろだな……」

始めは小さかった爆発が、どんどんと連鎖していき、基地の終焉を示唆するようになったところで、ダンは満足し、至る所から火花の吹き出す部屋を後にした。

忌々しい隔壁扉の外で、ウルトラアイを取り出そうと胸に手を伸ばしたところで……突然、彼の背後から、一際大きな爆風がダンの体を吹き飛ばし、その意識を刈り取ってしまった……！

---

「いけっ！ そこだ！ ……ああいかん！ 奴の尻尾に気を付けろ！」

「あきら まけるな なぐれ なぐれ」

「……ええい、なんじゃ騒がしいのう……おかげで目が覚めてしもうたわい」

「おお、パゴス殿！ アギラが戦っているのです！ 貴方も応援してください！」

「なんじゃと!? アギ坊がか!？」

起き抜けのパゴスが、寝ぼけ眼をこすると、確かにアギラが敵と戦っているではないか！

しかし、見るからに劣勢だ。まず体格からして二倍以上もある相手にアギラをぶつけるなんて……

「こんな時にアギ坊だけ戦わせて、わしらの飼いヌシは何しとるんじゃ？ 阿呆なのか

……？」

「ええい！ 主殿を愚弄するな！ 不意の爆発によつて気絶しておられるのだ！」

「ごすじん あかくないとき よわい」

「なんじゃ、結局肝心な時に役に立たんのは同じではないか……情けない……」

状況を聞いて微妙な顔をするパゴスであったが、不意に彼の鼻が懐かしい匂いを捉えた。

「くんくん……うむう？ なんじゃこの匂いは？ はて……？ どこかで嗅いだ事が或

るような、無いような……さしてどこで嗅いだんじやつたか……」

「ご老公、いかがなされた？　もしやあの敵について何か知っておられるのですか!？」  
「そのようなんじやが、随分昔にどこかで……？　うーむ……思い出せん……ちよいと待っておれ」

「じじい　はやく　しろ　あきら　まける」

「年寄りを急かすな急かすな……慌てるマグラは貰いが少ない」

深く考え込んだパゴスは、おおつ！　と顔を上げると、ポンと手を打った。

「そうじや、思い出したぞい！　あやつはリガロドンじや！　いやあ懐かしいのう」

「リガロドン？　何奴です？」

「わしがまだ童であった頃、この地球にいた恐竜の一種じやよ」

「なんと、恐竜!?!　……しかし、主殿に見せて頂いた恐竜のデータにはそのような種族、

載っておりませんでしたか……」

ウインダムが首を傾げると、パゴスはさもありませんと頷きを返す。

「そりやそうじや。ある時、マンダス星人とか名乗る奴らがやって来てな？　その時、地表にいた恐竜を一匹残らず誘拐してしまったんじやよ！　まだ小さかったわしは、怖くて山の中でブルブル震えておったから助かったという訳じや……あの日以来、タンギラザウルスもリガロドンも全く見ておらんから、記録に無くても不思議ではないのう」

しみじみと語るパゴス。

「なるほど……しかし、ご老公が子供の頃にいた恐竜となると……宇宙空間で随分と長生きな事です」

「そう、わしもそこが不思議なんじゃ！ わしのようにウランを食っておるわけでも無く、奴らは普通の草食恐竜で、寿命もそんなに長くは無かった筈なんじゃが……」

二匹の言葉をぼんやりと聞いていたミクラスが、ふと首を傾げると、しきりに鼻をひくつかせ始めた。

「どうした？ ミクラス？」

「パゴじい うそつき あいつ くさの におい しない」

「なんじゃと!? ……すんすん、そう言われてみれば……」

「あいつの くち てつの におい する」

「なに……？ 本当だ!? 奴の体内から大きな金属反応がするぞ！」

目の各種センサーを光らせたウインダムが驚愕する。なんと敵の怪獣が、生物とは思えない熱量を発しているのだ。

「そうか！ それで合点がいったわい！ 奴ら、攫った恐竜を改造して、中身をメカニズムとそっくり取り換えちゃうたんじゃ！」

「なんですと!?! では、あれは……サイボーグ怪獣なのですね！ まずいぞ、スピード型のアギラとは致命的に相性が悪い！」

「アギラは機動力で相手を翻弄し、手数で勝負する軽戦士だ。しかし、痛みには怯みもしないロボット相手では、多少の攻撃を重ねた所で、まったく効果が無い。」

「アギラー！ そいつの正体はサイボーグだー！ 見た目に騙されてはいかーん！」

「……え？ さいぼーぐって……中身はロボットなんだよね？」

「じゃあそれって……ダム兄みたいに、いつもれーせー……ってコト？」

「それだけではないぞい！ そやつはミクラスのように恐れ知らずで、わしなんぞよりもずっと凶太い！ そやつ相手にお主の得意な威嚇やフェイントは効かん！」

「ええっー!? そんなやつ、どうやってたたかえばいいのさー!?」

「あぎら はしれ！ はしりまわれ！」

走り回る？

「おまえ よわい！ そいつ たおす むり！」

ひどいやミクラス……

「でも そいつ おそい！ おまえ つかまえる むり！」

「そうか！ ミクラスの言う通りだ！ 我らの役目はあくまで時間稼ぎ！ 主殿が目を覚まされるまで、お前がやらなければならないのさ！」

なるほど！ フルハシおじさんとアマギたーいんから、コイツを引き離せば、それ

でいいんだ！



確かにこんな奴、ぼくが勝てなくてもパパがすぐにやっつけてくれるもんね！

やーい、こつちだぞー！ おしりフリフリく

つかまえてみるー！

ひっさつ！ すなかけこうげき すなかけこうげき！

いしもなげちやえ！

やーい、おにさんこちら、あつかんべー！

……うーん、こうして挑発してばっかりだと、なんだかソガくんみたいでやだな……

「いけつ！ そこだ！ やっちまえー……ああやつぱり、さつきからアイツ、逃げてばかりじゃねえか？」

「おそらく敵を倒せないと悟るや、陽動に努める事にしたんでしよう。彼我の戦力差を冷静に分析できるとは、なんて頭のいい怪獣だ……」

「褒めてる場合か！ せつかく飛び出して来たのに、なんだかいまいち頼りねえなあ

……よし！ ちよつくら援護してやろうぜ！」

「ええつ？ おそらくあの怪獣は、僕らを助ける為に出てきたんですよ？」

「だったら猶更だ。見ろよ、あいつ。眠たそうな目しやがって……まるでソガみてえだ。あんなとぼけた顔の奴に助けられてばかりとあっちゃ、フルハシ様の名が泣くぜ！」

「ちよつと、フルハシ隊員！ ……ああもう！」

二人のエレクトロHガンが続けざまに火を噴いて、敵の背中に派手な爆発を引き起こす。

四足の敵は、どしどしと方向を転換して、小さな標的に次のターゲットを見定めた。

「へへっ、お前の敵は、ソガラだけじゃねえんだぜ！ こつちだこつち！」

「ソガラ……？」

「寝ぼけ顔で逃げ足だけは速いから、アイツはソガラだ！」

「ハハハ！ そりゃあ、あの怪物に失礼ですよ。さ、あつちの岩場が良さそうです」

あつ！ ふたりの方へ行っちゃった……待つて待つてー！

「ええい、あのニンゲン達め、余計な事を……！」

「いや、これは案外使えるかもしれんぞい」

「という……？」

パゴスは髭を撫でると、ニヤリと笑ってアギラに指示を飛ばす。

「アギ坊！ 奴の背中を突いたら、今度はまた一目散に逃げるんじゃない！ あのちっこい

奴らと反対の方にじゃぞ？　そうしてあの小さいのとお主で、挟み撃ちにしてやるのを繰り返すんじゃない？」

そっか！　それなら二人がまた攻撃してくれらるって事だね！

でも、そんなにうまくいくかなあ……？

「大丈夫じゃ！　ロボット怪獣の弱点は、頭が固くて融通が効かん事じゃからのう……ふえっふえっふえ」

「ご老公、私の顔が何か面白いので……？」

味方怪獣の意図をアマギが見抜いて、何度も敵の背後を取り合う事で、相手に方向転換を余儀なくさせるという戦術が功を奏し始めた頃。

二人のビデオシーバーに通信が入る。

「こちら本部。こちら本部」

「こちらフルハシ！」

妨害電波が無くなったのだ！　ダンがやってくれたに違いない！

「フルハシ、なぜ早く脱出せん？」

「ホークがやられました。早くこの惑星を攻撃してください」  
「なんだと!？」

「この惑星自体が時限爆弾になっています。それに怪獣は滅法強い。早く粉碎しないと防衛基地が危ないです。隊長、我々に構わず、早くミサイルを！」

いくら攻撃を繰り返しても、敵にダメージは見られず、双方ともに時間を稼いでいるだけだ。

そして時間を稼いだ結果、この島が防衛基地に到達して、得をするのは残念ながら、敵の方であった。

「……参謀！」

部下の決死の覚悟に、思わず二の句を継げず、顔を歪めるキリヤマ。

二人の指揮官は、ほんの一瞬躊躇したものの、やがて断腸の思いで決断を下すのであった。

「……攻撃用意！」

仰角を上げる、キリーミサイル。

---

よーし！ 次もこつちの番だ！

と思つたら……

いったーい！ そうだ尻尾だ！

コイツには尻尾があるのを忘れてた！

太い尻尾が僕の体に巻き付いて、すごい力で岩に叩きつけてくる。

痛っ！

「ああっ！ アギラ危ない！ おお主よ！ 寝ているのですか！」

「はよう起きんか！ このスカポンタン！」

「ごすじん！ はやく！」

何度も何度も尻尾が僕を叩く。

痛い！ 痛いよ！ パパ！

助けて！ パパー！！

「デユワアツ!!!」

ううっ……頭がチカチカする……

でも後ろで何かがたたかっている音がするよ……？

ちらつと見える赤いあし……パパだあ!!

助けにきてくれたんだね！ パパ遅いよお！

作戦室のスクリーンに敵のメカニズム怪獣リッガーと格闘するセブンの姿が映る。

よかったよかった、ダンは間に合ったみたいだな。

「キリー発射、待て！」

「救出してきます！」

「急げ！」

ホーク三号でみんなの救出へ向かう俺達。

リッガーと揉み合うセブンを尻目に、島へと機体を着陸させる。

するとエレクトロHガンを担いだフルハシとアマギが走って来た。

「隊長ー！」

「ダンは？」

「爆破に行つたまま、戻りません！」

「よし、手分けして探すぞ！」

目の前で戦つてますよとは言えないので、適当に言い訳を考えておかないとな……

アギラと同様、リッガーの長い尾に苦戦するセブン。

サイボーグ怪獣は伊達では無く、凄まじい打たれ強さを発揮し、セブンの剛力で何度

殴りつけてもなかなかダメージを与えられない。

しかも、重量と大出力にあかせた突進で、セブンを転がすと、その体にのしかかり、右肩にがぶりと噛み付くリッガー。

「デュアツ……！」

苦悶の声を上げるセブン。

うう……そんな、パパでも敵わないなんて……強すぎるよ……

「あぎらー!!」

育ての親が苦戦する様に、心が折れかけたアギラの耳に、家族からの叱咤が飛ぶ。

「たてー！ いけー！ つけー！」

う、うおおおお……!!

傷だらけの怪獣は、仲間の声に勇気を奮い立たせ、最後の力を振り絞って立ち上がる  
と、自慢の一本角を敵に向かって構え、全速力で駆け出した!

ぼくのパパを……いぢめるなああああ!!!

アギラの全身全霊を込めた体当たりが、リッガーの巨体を跳ね飛ばす。

そうしてできた一瞬の隙について、セブンはすかさず頭頂部に装備してある、伝家の  
宝刀を抜き放ったのだった!!

ごろりと転がるリッガーの首。

『本当によくやった……ありがとうアギラ』

えへへ……褒められちゃった。

『もどれ、アギラ』

嬉しそうにヒレを動かす怪獣が、光の中へと消えていく。

仲間の成長に対し、満足げに頷くセブン。

だが、彼は地面に転がる敵の首が、未だに目から光を発し、口を開閉しているのを見て取った。

『なるほど、これがサブコントロール装置になっているのか!』

リッガーの首を抱え上げると、即座に飛び立つ。

「ダンは見つかったか?」

「いません」

「あつちに崖崩れの跡がありました。もしかしたら爆発のショックで、島から滑落したのかも……」

「いかん、爆発するぞ! 引き揚げろ!」

「でも、ダンが……」

「……時間が無いんだ!」



「大丈夫だアンヌ。こんだけ探して居ないって事は、ダンとは別ルートで島から脱出して  
るに違いない！」

「いくぞー！」

やがて島が、セブンの抱えた怪獣の頭部に誘導され、空へと飛び立っていく……  
こうして、地球防衛軍の危機は回避されたのだった。

「……しかし、破壊されたβ号の残骸を脱出艇に使うとは……悪運の強い奴だ」

「それも、セブんに回収して貰わなければ、どうなっていたか分かりませんけれどね」

「今回は、我々全員、危なかったなあ」

ダンとアマギとフルハシが、メデイカルセンターでチェックを受けている。

「いやあ、あの時はもうダメかと思っただぜ！ ソガラに感謝だ！」

「ソガラ……？」

「あの怪獣の名前だとき。眠そうでソガみたいだからって……」

「な？ いいだろ？」

「う、うーん……あんまり気に入らないみたいですけど……」

「何が？」

なんとも言えない顔をしたダンが、苦言を呈す。

フルハシは首を傾げているが、それにアマギが同調した。

「そうそう、あんなに頭の良い怪獣を、よりによつてソガなんかと一緒にするのはかわいそうですよ。あんな馬鹿と。なんたつて、我々の命の恩人なんですから」

「そうかあ？」

「確かに、今回の立役者はアマギ隊員とあの怪獣でしたね……それならいつそ、以前のアマギラスから取つて、アギラというのはどうでしょう？」

「えっ!？」

「おお！ そいつあいいいや！ 良かったな、アマギ……くくく」

「僕もアギラが、アマギ隊員のように賢く育つてくれると嬉しいですねえ……」

「ダン、お前はいつたい何を言つてるんだ……」

この時は冗談だと思つていたが、後日、防衛軍のドキュメントに例の怪獣が『アギラ』として登録されているのを発見し、なんとも言えない顔になったアマギであった。

## 侵略するシ者たち (I)

それはちようど、もう春先だというのにまだうつすら肌寒い日のこと。

地球防衛軍パリ本部から、秘密書類が極秘のうちに運ばれてきた。

海底を行く大型潜水艦S号と、その護衛であるハイドランジャー2隻。

S号の艦内ではマナベとキリヤマが、張り詰めた顔で上陸を待っている。

「キリヤマさん、パリ本部からテレタイプが入りました」

「いや、どうも」

船員から報告を受け取るキリヤマ。

「どうかしたか？」

「セイロン島の北方30海里で、謎の爆発が4件あったそうです」

「我々も十分注意しよう」

セイロン島方面のルートは、本作戦のダミールートの一つであったはずだ。

交信マイクをとるキリヤマ隊長。

「こちらS号。ハイドランジャー、警備状況を報告せよ」

「こちらハイドランジャー1号、異常なし」

「こちらハイドランジャー2号、異常なし」

ハイドランジャーに乗るソガとダンからの応答も、これといった変化はない。

「了解」

「異常無いようだな」

「間もなく基地ですね……」

「伊豆半島沖に浮上して、そこからヘリコプターを使おう」

今はただ、このまま無事に任務が終了する事を祈るばかりであったが……

一方、防衛基地周辺では、奇怪な事故が頻々と起こっていた。

メディカルセンターで、アンヌが顔色の悪い男の脈を取り、首を横に振る。

そこにフルハシとアマギが、またしても黒ずくめの男を担ぎこんできた。

「アンヌ、頼む」

「え……また？」

「こつちもか……」

「死んだわ……」

「いきなり車の前に飛び込んできたんです」

隣の防衛隊員が、先客の説明をする。

最近になって続々と、防衛軍の車の前へ謎の男達が飛び込んでくるのだ。

訝し気な表情のフルハシ。そこに突然、担ぎ込んだ男がフルハシの首元へ腕を伸ばして襲いかかる！

咄嗟にシヨックガンで男を撃つアマギ。

「死んでるわ……」

「えっ!? シヨック銃で撃つたんだぜ……? 死ぬなんておかしいよ」

「9人目よ、もう……」

「どういう事なんだいこりやあ……」

「どの死体も、身元を確認するものが何も無いのよ」

アマギは、死体を触っていた手を嗅ぐと、部屋に薄つすらと漂う匂いが、意外と嗅ぎなれたものである事に気が付いた。

「ホルマリンの臭いがする……これが決め手だ!」

「よし、病院の方をあたってみよう」

フルハシはポインターで調査に向かうのだった。

それとは入れ違いに、マナベ参謀一行が、ヘリで基地に到着した。埃を払う暇もなく、すぐさま地下14階層へ。

極東基地の誇る機密文書庫に、運んできたマイクロチップを保管するためだ。

特殊合金製の金庫は、赤外線センサーや、3万ボルトの高圧電流が流れる鉄格子に守られ、そこへ辿りつくまでには3段階もの認証を必要とする。

そのキーとなる照合銃は、マナベしか持つてはいない。

この非常に嚴重な文書庫を突破する事は、不可能に近いのだ。

ここへ正攻法で侵入しようとするものなど……まさに愚の骨頂。

であるにも関わらず……

深夜、基地の外周で警報機が鳴る。

「待て、止まらんと撃つぞー！」

一般隊員の警告も聞かず、気密区画へ通じる通路へと侵入しようとする謎の男。

やむなく隊員達は男を射殺するが……

これで謎の死体は10体になってしまった……

「何!? 病院から盗まれた死体?」

フルハシからの無線連絡を受けたキリヤマは、胡乱げに眉を潜めた。

「教材に使う、解剖用の死体だったそうなんですが……死体漕から何者かに盗まれて、調査中らしいんです」

「10体も……」

「もともと身元の不明な人たちですから、警察でも探しようがないらしく……隊長、これはウラに何かありそうですね」

「分かった……おい、死体をもう一度、調べ直すんだ!」

死体を再び検分するキタムラ博士とウルトラ警備隊。

「別に改造された痕もありませんね……」

「じゃあ、サイボーグでもないわけですね?」

「今のところ、普通の死体です」

あのキタムラ博士が言うのだから、間違いはないはずだ。

ところがどっこい、それが独りでに動き回るといふのだから、明らかに普通ではない。

「しかし、いったい誰が、彼らを蘇生させて送り込んだんでしょうね?」

「それだ。ただのイタズラとも思えん……」

「こんなに嚴重な警備網の中で何をしようというんだ。……大体、地球防衛軍を甘く見

てますよ！」

おかしいなあ〜なんだかやだなあ……

「とにかく彼らが、何か目的をもって送り込まれたとすれば、今にきつと動き出す……。ダン、この死体を見張るんだ。絶対目を離すな！」

「はい」

良かった、命じられたのがダンで。

俺、こういうのダメなんだよね。

「ダン、お前にとっておきのおまじないを教えてやろう」

「おまじない?」

「いいか、変な気配を感じたら、椅子に飛び乗って突き出したケツを激しく叩きながらこっぴど叫ぶんだ。『びつくりするほどユートピア! びつくりするほどユートピア!』これだ。できるだけ白目を剥いてアホ面でやるんだぞ」

「……は?」

「霊と言うものはな? 重苦しく死の気配の充満した陰気な場所を好むとされている。

……つまり、その真逆である馬鹿馬鹿しい空気や生気の漲った人物を見ると、呆れて逃げて行くと言われているんだ」

「は、はあ……?」



そんな訳の分からない事を、真剣な表情で伝えて来るソガを見て、ダンは、謎の死体に囲まれて精神をすり減らしたソガの頭がついに恐怖でおかしくなったのかと心底心配になったが……一瞬だけ、それらの言動を大真面目に実践している彼の姿を想像したら、込み上げてきた笑いが止まらなくなった。

「く、くくく……ハッハッハッハ!! なるほど、確かに死体を見張るのは気分の滅入る任務ですからね、少しでも僕を笑わせてやろうという事ですか！ ソガ隊員らしいや。絶対やりませんけど」

「そう、それだ笑いだ。心霊現象には笑いが最も効果的なんだ。いいか、忘れるなよ？ びつくりするほどユートピアだぞ？」

「ぐふふつ……わかりましたから！ 親切心は受け取っておきますから！ 絶対やりませんけど」

大丈夫かなあ……？

そうして迎えた、13日の金曜日、午前1時である。

ダンが見張る死体に変化はないが、部屋の中で何かが蠢く。そう、影だ……死体の影だけがゆつ……くりと動きだす。

ひとつ、ふた一つ……。徐々に増えていく影……。

不気味な気配を感じるダン。

(何か変だ……)

作戦室のドアが開く。

しかし、そこには誰もいない……。

おや？ といった表情で顔を見合わせる隊長とアマギ。

そして同じころ、メデイカルセンターのドアも開く。

誰かが入ってきたのだと思って、アンヌが顔を上げるが、そこには誰も居ない……医務室にはアンヌ一人だけだ。

何かが首筋を撫でる感触……急激に気温が下がったような……そして……

アンヌに向かって影が動いた。

「キヤアアアッ!!」

駆けつけるキリヤマ隊長とアマギ。

「どうした!」

「か、影が……」

しかし、異常はみられない。

「自分の影でも見たんだろう？」

「……ドアが開いて、影が入ってきたのよ……」

「作戦室のドアも開きましたね……？」

トウルルルルル、トウルルルルル、トウルルルルル

死体置き場の電話が鳴った。

「ダン、応答せよ。死体は異常ないか？」

「死体は異常ありませんが……、何かおかしいです。隊長のほうはどうですか？」

「どうも様子がおかしいんだ……。引き続き、警戒を頼む」

その時、キリヤマ隊長の手首を誰かがそつと撫ぜたような気がした。

妙な気配を感じるキリヤマは知らず知らずの内に、ぞわりと総身の鳥肌が立っていたことに、遅ればせながら気付いた。

「ん……？ 誰かいる……気のせいかな……？」

「ホルマリンの臭いだ」

「何だか、気味が悪いわ……」

怖いなー……なんかやだなー……って、その時思ったんですよ。

え？ お前は誰って？

こっちはね、機密書庫を警戒中のフルハシとソガ。

「はっ、こちらフルハシ」

「気をつける。何者かが、暗躍を始めたらしい」

「えっ、どんな奴です？」

「それがはつきりせん……。ただ、気配がするだけだ」

「心配ご無用。ドアには指一本触れさせやしません！」

頼もしい返事を返し通信を切ったフルハシが、げんなりした顔で隣を窺う。

「なーみよーほーれんげきよー……」

「……おいソガ、さつきからブツブツ鬱陶しいのはどうにかならねえのか!？」

「先輩！ 俺はねえ、出来る事はとりあえずなんでもやっておくタイプなんですよ！」

「だからってお前……真面目にやる気があるのか……?」

首から数珠を下げたソガが、消臭スプレーとウルトラガンを十字に組んで振り返った。

南国の土産物屋で見る、なんだかよく分からない木彫りの置物達が、全身からぶら下げられ、互いにぶつかり合ってジャラジャラと音を立てる。

まるでモアイ像で出来たラメラーマーだ。

書庫の入り口に悪霊退散のお札が勝手にベタベタ張り付けられているのを見て、フルハシはいよいよ後輩の気が触れてしまったのだと確信した。



「盗まれたマイクロフィルムには、世界の地球防衛軍秘密基地の所在地が明記されているんだ。侵略者の手に落ちれば、彼らは直ちに攻撃を仕掛けてくる。キリヤマ隊長、何としてもフィルムを取り返さねば！」

「はい、只今、防衛基地一帯に非常警戒網を張らせています」

その時、廊下の向こう側からピーピーガーガー電子音ががり立てながら、この階層を特別に巡回中だったユートが歩いてくる。

「イジヨウ ナシ イジヨウ ナシ リ。カ。イ。フ。ノ。ウ。」

なんとか定型文だけは喋れるようになったU-8も、今度の敵に対しては、センサーがまるきり役に立たなかったようだ。

「敵は影です。影の正体を突き止めない限り、追っても無駄でしょう」

「じゃ、手も足も出せんという訳か……。しかし何とかしなければ……」

「影か……」

（そうだ、死体収容室で、確かに影が動いた……!）

胸騒ぎに従って、ダンはモルグへと急いだ。

（そうだ念力だ……。誰かが念力で死体を操っているんだ!）

死体から立ち昇る無数の影に、思わずセブンに変身するダン。

白い霧の中から、死者の幻影達が、蠟のように真っ白な指を伸ばして襲い掛かる!

煙が晴れると、セブンは小さな人形のようにされてしまった。いた。

死者をも操る敵の念力によって、縮小化されてしまったのだ。

そのままコップに閉じ込められてしまう。

コップの内側表面には、サイコフィールドが張られていて、セブンの巨大化や念力を完全に封じ込めてしまっていた。

その波長は、まるでセブンの為には逃えたかのようにであり、即席で作ったにしてはやかに堅牢な檻となっていた。

セブンに興味を失ったかのようにその場を後にする影たち……。

囚われの赤い小人はなんとか、弱弱しい出力しか出ないエメリウム光線で柵を撃ち、火災を発生させる。

けたたましく響き渡る火災警報。

「あー！ 火がー！」

「消火器だ、早く消火しろ！」

「ダンは!? ダンがいないわ! ダアン！」

「うおおお待ってろダン! 今助けるぞおおお！」

俺は出来るだけ摺り足で、塩と消臭スプレーをまき散らしながら部屋の中を爆走する。

「いのちをだいじに！ いのちをだいじに！ くそ、どこだアアアン！」

あ、今なんか蹴飛ばした気がするぞ。ヨシ！ 謎コップ排除完了！

俺も消火しなきゃ……

炎が消えると、床に倒れているダンを、みんなで助け起こす。

「隊長、奴らに襲われました……」

「奴ら？」

「ええ、死体の男たちです」

「えっ？」

皆が死体の様子を見るが、変わりはない。

「奴ら、死んだままだぞ！」

「念力で死者を操っている者がいます」

「念力？」

「ええ、一種のテレキネシスで……」

「テレキネシス……？」

「死者の霊を遠隔操作しているんです」

「ごめんなダン、念力とかテレキネシスとか言われても、人類にはいまいちピンとこないんだわ。」



「そうだ。テープが伝送されてしまう！」

しかし、作戦室に戻るも一足遅かった。

皆が作戦室を後にした時に、機密情報が送信された跡がある。

それを逆探知して、送信先に向かうウルトラ警備隊。

「よし、奴らが動き出す前に叩くんだ。ダンとアンヌは残って警備を固めてくれ。俺たちはK地区を調べる。直ちに出動！」

しかし、目的の場所に向かうと、そこにあつたのは廃墟のような建物だけ。

「隊長、地下室らしいものもありません……」

「電波は確かにここでキャッチされているのか？」

「はい、間違いありません」

「計器ひとつない、というのはおかしい……」

キリヤマが訝しんでいると、遠くからソガの絶叫が聞こえてくる。

「アマギイー！ あれはなんだー!？」

彼の指差す方を見れば、廃墟の上に何かの機材が……

「受信アンテナですよ!! 奴ら、ここで一旦中継した電波をさらに上空に送ってキャッ

チしているんです」

「敵は空か？」

「恐らく、宇宙……」

「今頃、攻撃準備を……」

「うむ、世界中の防衛基地が奴らの目標だ」

敵の居場所と目的が判明した。隊長は、ビデオシーバーでダンを呼び出す。

「ダン、宇宙に飛んでくれ！ 奴らの侵略基地は宇宙なんだ、受信場所を突き止めろ！」

「了解。アンヌ、後を頼む」

ホーク2号で宇宙へ向かうダン。

「あれだ！ ホーク2号、宇宙ステーション発見！」

しかし、ステーションからのビームで、2号は撃墜されてしまう……

一足遅く地球を飛び出した後続のホーク1号では、四人の男達が不安げな顔をしていった。

「隊長、すごい爆発音をキャッチしました」

「そうか……」

接近するホーク1号を迎撃する為、大型ミサイルを発射する宇宙ステーション。

その時、ミサイルに上方から光線が襲いかかった!!

セブンのワイド・ショットだ!

たちまち粉碎されるミサイル。

そのままぐるりと旋回して、宇宙ステーションに向かうセブン。

ところが、ステーション各所に装備された砲塔から、ストップレーザーを同時に浴びたセブンは、動きを止められ、ステーションから出てきた小型円盤に拉致されてしまう。

手足を拘束され、身動きの取れないセブンを嘲笑うかのように、彼の銀色の頬を掠めて、再び大型ミサイルが発射される。

それをなす術もなく見送るセブン。

「前方に飛行物体。すごいスピードです」

「ミサイルだ!」

「迎撃しろ!」

フルハシとソガがレバーを引くと、下部に懸架された連装砲身が続げざまに火を噴いた!

シンクロトロン砲によって、粉碎されるミサイル。

ミサイルの爆炎の向こうに見えたのは……

「あつ……セブンが！」

宇宙ステーションの中央部につるされたコップ状のカプセルに、なんとセブンが閉じ込められているではないか！

「よし、援護しよう！」

「ハッ！」

ホークの進路を阻むように、小型円盤の編隊が飛び出してくる。

小型といっても、母艦たるステーションと比べての話であつて、一機一機が、セブンの腕や足をそれぞれ拘束できる程に巨大で堅牢な代物だ。

それが四機、一斉に機首のフラッシュカロネードを煌めかせた！

粒子キャニスターが爆ぜ、宇宙の夜が、眼も眩む閃光によって塗りつぶされる。

だが、フルハシの駆るウルトラホークは、濃密な対空弾幕の僅かな隙間を縫って、縦横無尽に漆黒の空を走り抜けた。

その上、単なる回避行動かと思っていたら、ひらりと旋回してもう敵機の直上だ。たまらんね。

「食らえ！」

俺がミサイルの発射レバーを引くと、木っ端みじんに吹き取ぶ敵の円盤。

「お見事！ 流星は名人だあ」

「あれだけお膳立てされりやあ、俺でなくても命中しますつて！」

「おっと、お前にや簡単すぎたかい？」

「気を抜くな、どうやら今度はそうもいかんぞ！」

こちらの武装が充分に脅威足り得ると分かったらしい敵は、編隊を組み直し、今度は一機ずつ交代に攻撃を行う事で、隙を無くしてきた。

こうなると、先程のように撃墜するのは難しい。

フルハシも回避に専念せざるを得ないが……

「いかん、このままではセブンが連れ去られてしまう！」

隊長が敵の意図を素早く看破した。敵はこちらを撃墜するのではなく、進路上に弾幕を形成して、ステーションが逃げる時間を稼ごうとしているのだ！

「円盤は無視して、ステーションを追え！ 空戦の誘いに乗ったように見せかけて引きつけた後、一気に引き離すんだ！」

「それだと追いかけて挟み撃ちになりませんか？」

「大丈夫、敵の武装は射程が短い。一度差がつくと、ホークの足については来られないはずだ！」

「言つたなアマギ！ 信じるからな!？」

「いようし！ いったちよ俺様の腕前を、枯れ尾花共に見せてやらあ！」

ミサイルを盛大にばら撒いて、敵に回避行動を余儀なくさせる。スラストターに無理難題を強いられるのはこちらも同じことだが、お互いの攻撃が交錯し、本来なら仕切り直しとなるどころへ……

「ユーレイにや足もないのに、付いてこれるかっつての!」

意地の悪い笑みを浮かべたフルハシが、スロットルレバーを押し込んでとつておきのオーグメントブースターを焚いた。

加速し、敵のステーションに追いつがるホーク。

背後で円盤達が慌てて引き返してくるがもはや射程外だ。

「ソガ! 重力計によると、ステーションの中心部から、カプセルを覆うように特殊な力場が発生しているらしい。きっとあの部分がフィールド発生装置だ!」

「オツケイ! 正体見たりっ!」

「外すんじゃないぞソガ先生!」

「おそらく最接近時に、敵は迎撃してくるだろう。それを躲してから撃ち込むんだ!」  
「了解!」

フルハシが機体をステーションの背後へびつたりと付けた時、2号とセブンを撃墜した蒼いレーザーが、1号を三機目のスコアにしようとして撃ちかかって来た!

銀色の翼が翻り、すんでの所で躲す。

回避行動で僅かに距離の縮まったホークへ、後ろの円盤群から追撃が飛ぶ。迸る閃光、爆ぜる粒子。

しかしそのどれもが、彼の狙いを逸らす事は出来なかった。

「……アーメン！」

狙いすました機首レーザーが、ステーションの中心部に命中！

カプセルが脱落し、自由の身となるセブン。

少しでも距離を離そうとするステーションの背中を、セブンの構えた真つ赤なL字が捉えた。

怒りに燃える巨人の腕から放たれた極太の太陽光が、宇宙ステーションの装甲を融解し、エンジンに致命傷を与えた！

巨大な爆炎を噴き上げ、サルガツソーへ墜落していくステーション。

ワイドショットを受けてもまだ原型を留めているとは、なんて堅牢な船だろうか。だが、あれではもはや棺桶以外の何物でもない。

恐るべき侵略計画は、こうして盛大な宇宙葬と相成ったのである。

「隊長、危ないところでしたねえ……」

「機密室からフィルムを盗み出すなんて、まったく恐ろしい奴らだよ」

「いくらガードが完璧な基地だからといって、シヤドウマンまでは防げませんからね」

「ハッハッハッハ……！」

笑いながら作戦室に入る。

「見ろ！」

「うおっ！」

アマギが指さす方向に、巨大な影が！

壁に映った影に向かって銃を抜くソガ……

「ソガ！ 自分の影だよ……！」

「えっ？ あっ……ああ」

「馬鹿だなあ！ コイツう！」

「いやあ、まいったなあ」

恥ずかしそうに頭を掻くソガ。

「ハッハッハッハ……！」

そこに駆け寄るのは……。

「隊長！」

「ダン！ いつのまに……？ こいつう！」



「心配かけやがってえ！」

トウルルルルル、トウルルルルル、トウルルルルル

電話が鳴った。

皆から小突かれつつ電話をとるダンの顔は、ソガに負けない程くらい惚けた顔であった。

## 侵略するシ者たち（Ⅱ）

地球軌道上から遠く離れた宙域に、一隻のステルス船が停泊していた。

船内では、青白い陽炎のようなエネルギー体がモニターを見つめている。

「捕獲プラットフォームからの通信、途絶しました」

「ふむ、駄目だったか……データは？」

「ただ今、解析中です」

やがて、巨大プラットフォームから発信されたデータの解析が終わり、その結果をリーダー格と思しき個体が精査する。

プラットフォームが破壊されてしまった為に、全ての情報が得られた訳では無い。

だが、それまでに送られたデータが、彼らの目的に対し不十分な物であったかと言うと……

続いて響いた歓喜の音が、その答えを如実に表していた。

「素晴らしい！ 検体の作製に最低限必要な情報は揃っている！ 諸君、作戦は十分に成功したと言えるだろう！」

「やりましたね！」

「うむ……欲を言えば、ウルトラセブンの肉体を確保するのが最も望ましかったのだが……よもや地球人の兵器があれ程とはな。ひとまず、この結果で良しとしようではないか」

無限とも言える銀河の歴史を紐解いた時、バドー大帝や暗黒皇帝といった者を初めとして、かつてこの宇宙に覇を唱えた強大な個人や種族というのは複数存在する。

だが、そういった存在はやがて、ある者は凋落し、またある者は敗北の末に、歴史の表舞台から姿を消していった。盛者必衰の理からは、逃れられなかつたのだ。

しかし……その歴史の中にあつて、銀河の支配者という座から、自らの意志で身を引いた者がいる。

その存在は、宇宙の深みを映したような群青の不滅と言うべき肉体に、強大なサイキックエネルギーを宿し、たとえ何星系も離れた場所でも、何億何千という生命体を同時に支配下に置く事すら可能であつたという。

それほどまでに凄まじい力を持った彼が、なぜ突如として姿を消したのかは、未だに謎に包まれているが……一説によれば、自身の後継者を欲しての行動だとも言われている。

なぜなら、その存在は姿を消す直前に、自身の力を宿した因子を、ありとあらゆる方法で、銀河中にバラ撒いたからだ。

故に、この宇宙には彼の影響を、大小様々に受け継いだ種族が存在する。

円盤の中で、作戦の成功にほくそ笑むユリー星人は、そういった種族の中でも、かの存在の力を、特に色濃く受け継いだ者のひとつであった。

因子によって齎された力は、受け継いだ者によって様々な形で発現する。

強靱な肉体であつたり、高度な工学技術であつたり、はたまた他者を支配する特殊な素質であつたり……ユリー星人はその力を、強大なサイキックパワーという、かつての存在を彷彿とさせる形で手に入れたのである。

惑星外からでも、死者の精神エネルギーを操つて、自由に手先とするネクロマンシーを持つ種族など、広い宇宙を探してもそうは居ない。

故に、かの者が伝承通りに優秀な後継者を欲したと言うのなら、それは自分達の事に相違ないと思つてもいる。

だが、強すぎる力の代償もまた大きかった。

受け継いだ精神エネルギーに対して、彼らの肉体は脆弱すぎたのだ。

代を重ねる毎に、強力になっていくサイキックパワーに反比例するかのようには、肉体的にはどんどんと痩せ細るユリー星人。

そうして今では、彼らは肉体と言う器を捨て去つて、完全な精神体だけの種族となつたのだ。

寿命等も克服し、良い事尽くめではあったものの……物理的な干渉力を失ったと言う点だけは如何ともし難かった。

いちいち念動力で物体を動かすのは、得られる効果に対して消耗が激しすぎる。

そのため、普段は死体や、自意識の希薄な生物の体に乗っ取る事で、仮初めの肉体としてるのが、ユーリー星系での文化だった。

だが、最近になり惑星間戦争が激化するにつれ、それでは事足りなくなってきたのである。

巨大な怪獣や、意識を持たない無人兵器に対して、サイコメトリーのみで対抗するのは、前述の通り消耗が激しい。かといって、仮初めの肉体では、得意のサイキックが使えない。

物理的な手段で侵略されたとして、彼らが完全に死ぬ事は無いだろうが……生存圏を追い出され、弱ったところへ同じく精神的な攻撃を受けてはたまったものではない。

宇宙には精神攻撃の得意な種族もたくさんいるのだ。

ヴァルキューレ星系など、いつ攻めてくるか分かったものではない。

そこで、彼らはひとつの手段を思いついた。

自分達の器に相応しい肉体を、自身の手で造ってしまえば良いのである。

宇宙では人造生命の技術など探せばいくらでも実例が存在するし、データの閲覧だけ

ならば、エネルギー体のユーリー星人にはそう難しい事ではないのだ。

クローン生成技術があつという間にものにして、次はこのホムンクルス達へ、かの存在から受け継いだ『因子』を埋め込んだ……

が、立ち所に崩壊していくホムンクルス。

因子が強烈すぎて、並の肉体では拒絶反応に耐えられない。

ならばと、次はサンプルの肉体強度をどんどんと強靱なものへ引き上げていき……何かの怪獣を試した所で、ようやく因子に耐えられる検体を見つけた。

しかし、今度はそれほどまでに肉体派の怪獣では……あまりに知能がお粗末で乗り移った後にサイキックを使いこなせないか、破壊衝動を抑えられないといった欠点が露呈する。

怪獣のように強靱な肉体でありながら、超能力を使いこなせる程に理性的……

そんな都合の良い検体など……銀河広しと言えど答えはもはや一つしか考えられなかった。

『M78星雲人』

光の国の住人ならばあるいは……しかし、銀河警備隊の隊員を捕まえて細胞を採取するなど、正気の沙汰ではないし、なにより今の時点で、宇宙の正義を敵に回すのは流石に不味い。

この計画が成功しさえすれば、彼らなどもはや敵ではないのだが……

そんな時、耳寄りな情報を手に入れた。

銀河警備隊の管轄外の星系において、M78星人が目撃されたというのだ！

この絶好のチャンス逃す手はあるまい。

そう、ウルトラ警備隊基地に侵入し、マイクロチップを盗み出したのも、全てはウルトラセブンをおびき出すための餌でしかなく、彼らの目的は地球ではなくセブンの肉体だったのだ！

マイクロチップの情報？ 警備隊基地の全容？

そんなもの、新たな肉体が完成すれば、どうとでもなる。

せいぜいが、ウルトラセブンの人間態時モロホシ・ダンにおけるパーソナルデータが手に入れば儲けものといったところか。

ウルトラ警備隊の身体情報を優先して送信したのもそのため。他の機密など、ユリー星人からすればオマケ以下でしかなかった。

セブンの遺伝子情報をスキャンしつつ、生データを送信する為に時間を稼ぐという仕事を、捕獲プラットフォームは十全に果たしてくれた。

そのために、特別堅牢に造ったのだが……よもや最大出力の光線で力任せに破壊されてしまうとは。

「しかし、それでこそ検体に相応しいというものだ」

実験の成功を確信し、ユーリー星人のリーダーは笑う。

『ウルトラレイブラッド計画』

レイブラッド因子をウルトラセブンの肉体、及びそのクローンへ移植し、最強の生命を創造する計画。

エネルギー効率や光線技の制御など、レイブラッドの無尽蔵なサイキックパワーでどうともなるのだから、検体としては、シルバー族よりも肉体的にさらに強靱なレッド族こそが最も望ましい。

そして運の良い事に、ウルトラセブンの四肢は真つ赤に輝いて、自身が純粋なレッド族である事をこれでもかと主張していた。

まさに僥倖。

あとは無尽蔵のエネルギーを制御しやすいように、内包した虚数銀河へのアクセスデバイスを胸に埋め込んでやればよい。

ユーリー星人のサイキックパワーであらゆる環境を再現できる研究設備でなら、通常では困難を極める手術も容易にできる。

「では……プロジェクトを本格始動する。検体の担当官を選出し、今回得られた精神モデルをインストールさせる」



「これは……あの地球人ですか」

「いずれ実地試験は地球で行うだろう。であればその際に地球へ潜伏しやすい方が都合が良い。その点、この個体は医学知識に精通しているようだから、不安定な検体を任せるとはうってつけだ。担当官用にクローン体も生成しておくのだぞ」

「は、かしこまりました」

「それに……子が親を思う気持ちというのは、下手な洗脳よりも強固だ。検体には担当官を母親だと刷り込ませるのだ。万が一にも裏切りはすまい」

「完璧な計画です」

「ふふふ……完成が楽しみだよ」

星人がゆらゆらと揺れる腕を伸ばし、蜃気楼のような指で、ラベルに書かれた名前をなぞる。

『Ultra-Rayblood / type: Include Null GALAXY』

カプセルの中で、禁断の命が産声を挙げようとしていた……

## 蒸発闘志

俺がパトロールから帰ってくると、作戦室のドアの前にはソワソワと挙動不審な長身の男。

何かの書類を抱えたまま、意を決して入室しようとするも、直前でがっくりと項垂れて引き返すばかり。

何やってんだアイツ……

「アマギじゃないか。こんなところでウロウロしてどうしたんだ？ 邪魔だぞ」

「あ！ ソガア！」

俺の顔を見て、まさに喜色満面といった様子で駆け寄ってくる。

アマギが俺を見つけて嬉しそうにするなんて、明日はウルトラランスでも降ってくるんじゃないだろうか。

普段は鬱陶しそうにするくせに。

「おい、なんだよその反応は……やけに珍しいじゃないか」

「そんな事はない！ ああ……丁度良かった！ 待ってたんだよ！」

こいつあクセエー！

面倒事を押しつけられる匂いがプンプンするゼエー！

と思っていたら……

「この書類をな？ ダンに渡して欲しいんだ。奴に頼まれてた分析結果だ」

「え？ そんな事？ ……自分でさっさと渡せばいいじゃん」

「いやあー！ 僕なんかよりも、お前がずっと適任だよ！ 頼んだぞ！」

書類を押しつけて、そそくさと退散するアマギ。

あいつら喧嘩でもしたのか……？

まあ、俺もパトロールの引き継ぎがあるから、ついでに紙渡すくらい別にいいけどさ

……

作戦室に入ると……いたいた。

近寄ってもこちらに全く気付かず、やけにしかめ面で、虚空を見つめて微動だにしないダン。

考え事か？

肩を叩くと、のっそりと此方を向く。

「おいダン。これをアマギがお前に渡してくれさせてさ」

「ああ……ソガ隊員……そこに置いておいて下さい……」

どうした？ 妙に覇気が無いな……？

まさか、もうエネルギーが枯渇してきているのか……！

かなりダメージを軽減出来てると思っただが、それは俺の思い込みだったとか!?

「ダン、体の具合が悪いのか!? それならそうと、なぜハッキリ言ってくれなかったんだ!」

「い、いえ……体はすこぶる好調ですよ……体は……」

「だったらどうしてそう元気が無いんだ? ……おや? それは……?」

ダンの手で、金属片のような何かがキラリと光る。

覗きこんで見ると、それは認識番号3番が刻まれたドツグタグであった。

「ああ……キャプテン・マキノの時の……」

「ええ……」

「どうした? 彼を救えなかったのを気にしてるのか? 言っちゃ悪いが、あれはマ

キノ隊長の自業自得じゃないか」

「確かに彼の行動は、許されない行いだっただもしれません……しかし、復讐されて当然だとは……」

「そりやそうかもしれんがな。いつまで悔やんでも仕方ねえぞ」

「……」

認識票N03に視線を落とすダン。

……ははあ、なるほど。

資料を渡すのは建前で、お前が元氣付けて来いって事か。

こういうのはアンヌに任せろよ……どうして俺なんぞに丸投げするかねえ……恨むぞアマギ。

「なんか悩んでるのか？ 言ってみろよ」

「ソガ隊員は……何も感じませんか？」

「何を？」

「仕事の事です。人類には……ウルトラセブンなんていらぬのではありませんか……？」

「ブフオツ!! ゲホツ!! ゲホツ!!」

思わず飲みかけていたコーヒを吹き出してしまふところだった。

「いやいや、お前が言うんかい！」

「最近のセブンは……敵にしてやられてばかりではありませんか」

「おいおい、セブンが居なかつたら、キングジョーはどうなつてたんだ？ ゴドラ星人やエレキングだつてそうさ！ それにあの時、セブンが来てくれなかつたら、そもそも地球は今頃クール星人のものだぞ？ 持ちつ持たれつだよ！」

「そうでしょうか……僕はウルトラ警備隊さえいれば、充分だと思えてなりません……」

いや、むしろ邪魔なのでは？ この間のダンカンの時だって……危うくセブンはみんなを殺してしまうところでした!!」

「ダンカン……仕方ないじゃん。操られてたんだから」

「いいえ違います。ダンカン達は元々、バンデラス太陽系の宇宙乱流から逃げて来た、いわば難民でした。それがなまじセブンを手中に収める事が出来たばかりに、あのような凶行を……そもそも地球にウルトラセブンを居なければ、彼らは暴力に訴える事も無かったかもしれない！ フルハシ隊員が洗脳装置を破壊してくれたから良かったようなもの……そうで無かったとしたら……」

そう言つて震える両手で頭を抱えるダン。

……あー……本人的にはとにかくそこが一番ツライ訳か。

「ダン、これは隊長から聞いたんだがな？ セブンの放ったアイスラッガーが、俺を抱えた隊長に当たる直前、不自然な軌道で直角に上へ曲がついていったんだと」

「……」

「セブンのあの武器は、飛ばした後にどんな動きも自由自在だ。いつだったかアマギが脳波で操っているんだろうって分析してたが……そんな武器なら、例えの小さくたって地面に蹲る警備隊の皆をそのまま、なます切りにしていくなんて造作もないわけだ

よ」

「ええ……そうですわね」

「そこで隊長は確信したんだと。セブンは敵の洗脳に必死で抗っているに違いないって。最初にエメリウム光線を足元の車に当てたり、隣のビルを叩き壊し始めたのも、元々は俺達への攻撃だったのをなんとか逸らそうとした結果なんだなってさ」

「それは……」

「そりゃあ俺だつて、意識の無い間に自分がエレキングみたいになる所だったと聞かされりゃあ、ビックリしたよ？ 胴体が泣き別れになるのは御免被りたいが……あの時セブンは、例え敵に操られていても、深層心理で俺達を傷つけないようになんとか戦っていたんだよ！ それを……そんな風に言つてやるなよ」

「し、しかし……例えそうだったとしても、今後は逆に他の宇宙人が彼を目的として地球にやつて来るかもしれない……そうなたた時……セブンは地球に留まり続ける事で、巻き込んでしまうかも知れないんですよ!! 僕はそれが……恐ろしい……。そうなる前に、彼は地球を去るべきなんじゃないか？ そう思えてならないんです……」

もしかしてこれ……俺が頑張りすぎたからか？

原作よりもセブんに負担を掛けないようにしてきたが、それが却つて自分が居なくても人類はやつていけると錯覚させてしまった？

それとも俺の知らない内に、バタフライエフェクトで精神的ダメージを負うような場

面が増えた？

とにかく、今のダンはセブンという異物がこのままここにいても良いのかという点に悩んでいるようだ。

それは勘違いも甚だしいので即刻考え直して欲しいんだが……

俺が頭を掻いてると、折よくアンヌとフルハシが作戦室に入って来るではないか！

良かった！ 頼もしい援軍の到着だ！

「おーい二人とも、ちよつと来てくれ〜！ ダンがさ……」

俺が事情を説明すると……

「おいダン！ 何言ってるんだ！ セブンが居なけりや、俺なんてとつくに三号と一緒に木っ端微塵、島ごとキリーミサイルで木っ端微塵、マックス号で木っ端微塵と陸海空で粉微塵だ!! おふくろなんて今頃涙も涸れ果ててミイラみたいになっちまつてるよ！ 葬式といやあマグマライザーで埋葬されそうにもなったしなあ……」

「そうよダン！ 私も貴方も随分と彼に命を助けて貰っておいて、今更彼に出て行けだなんて、そんなのつて無いわ！」

「それは確かにそうかもしれないけどねアンヌ……最近のセブンは敵に太刀打ち出来なくなつて来ているような気がしてならないんだ。この認識票の事件だつてそうさ。アマガ隊員が放射線カメラで敵の位置を教えてあげなかったら、セブンはやられてしまつ



ていたかもしれない……それどころか、侵略者達はセブンを倒す為により恐ろしい作戦や兵器を持つてくるだろう。セブン自身が、R1号のように地球へ災いを齎す事になるかも知れないんだ！」

「そんな時こそ俺達警備隊の出番じゃねえか！俺はようやくこの前の事件で、セブんに少しばかり恩返しが出来たかもしれないねえと思つてたのに、横から水を差される筋合いはねえんだ！ダン、これ以上言うならいくらお前でも怒るぞ！……だいたい、いくら最近黒星が増えたからつて、そもそも俺やお前に恐竜戦車を押し返すなんて事が出来るか？ええ？」

「フルハシ隊員の言う通りだわ！彼には彼にしか出来ない素晴らしい事が沢山あるんですもの！ 私たちにセブンが必要ないなんてそんな考え……あんまりにも寂しいじゃない！」

「それは……」

視線を下げたダンに、肩を怒らせたフルハシと、頬を膨らませたアンヌが詰め寄る中

……

「あ、そつか！分かった！」

「おい、こつちは真面目な話をしてるつてのに素っ頓狂な声あげやがつて……なんだよ？何が分かつたつてんだソガ？」

「いや、このままじゃ平行線だな……と思つてたんですが、一旦会話から弾き出されるとその原因が分かりました！ 二人に選手交代して貰つて良かったですよ」

「はあ？」

「二人はこれまでの事を言つていて、ダンはこれからの事を言つて……それに加えてダン、お前はセブンを暴力装置か何かだと勘違いしているな？」

「どういう事です？」

訝し気な彼はひとまず置いといて、セブン過激派の地球人二人に向き直る。

「アンヌ……の答えは分かり切つているから、ここは先輩に聞きましょう。もし今後、セブンが戦いに傷ついて二度と怪獣と組み合えないような体に……それこそ俺達人間と変わらない大ききさになつてしまつたとしみましょう。そうなつたらもう、セブンは地球に必要ありませんか？」

「なんだつて！ そんな事あつてたまるかい！」

「もしもの話ですつてば」

「……そんな事は考えたくもねえが……もしそうなつちまつたとして、その時は是非うちの基地に彼をお呼びしてだな……まずはアンヌの治療を受けさせてやらなきゃ！」

その間は俺達がキツチリと地球を守る。どうだ？」

「そうね、私達の医療が彼に適応できるのかは分からないけれど……なんとしてでも彼

に出来る限りの治療をして見せるわ。それに例え後遺症で戦えなくなつたとしても、今度こそ彼にはゆつくり休んで貰うのよ。それこそ地球の音楽や自然、美味しい食べ物を楽しんでもらつて、これまでの感謝と労いをするのはどうかしら？」

「いいねえ!! 実は俺も、いつかセブンを行きつけのカレー屋に連れて行ってみたいと思つてたんだ。ほらダン、お前がうまいうまいと三杯もおかわりしたあの店だよ!」

「つまりこういう事だ」

「その、話が見えませんか……」

まあ、本人からしたら地球人の感覚がよく分からんのかももしれんが……M78星雲人、みんな生真面目だしな。

「極論を言うとセブンが今後、戦力になろうがなるまいが、そんな事は関係なく地球に必要つてコトだ。俺達が好きなのは怪獣を倒してくれる無敵の巨人だからじゃなくて、ウルトラセブンというあの個人が好きなんだよ! 分かる?」

「あ、そつかあ! そうだな……」

「確かに彼の素晴らしい点は、能力だけではないわね。そんなものは彼の魅力の一つに過ぎないわ」

「能力ではなく、人格を評価している……という事ですか?」

「言語化するとそうなるかな……」

「あまり彼と接する機会が無くても、確かに私達とセブンの間には絆があつて……：そこが友情なのよ」

アンヌの言葉を聞いたダンが、ハツとしたように顔を上げるが、直ぐに頭を振つて思ひ直したように眉根を寄せる。

「ですがそれは警備隊として、ではなく個人的な感情なのでは……？ それは僕としても……：地球人とセブンの間にはその……：友情が、あると確信しています。彼は明らかに地球と、人類を愛している。心から！そして今となつてはこの星から離れたくはないと思つている事も！しかし……：だからこそ彼の存在自体が地球にとって害を齎す可能性が出た時には……：それを決して望みはしないでしよう。例え警備隊のように親しい人達が悲しむと分かつていても、自分から……：そんな事は僕だつて……：望んではいません。とても、寂しいですからね……：しかし……」

「いや、それが間違いだよダン。セブンはな、そこに存在するだけで有益だ。これからの地球全体にとって必要なんだよ！」

「どうしてそう言い切れるんです？」

「彼が、遠い星からやってきた宇宙人で戦友だからだ」

「……：どういふ事？」

さつきと言つてる事が変わらないぞという視線を三人から浴びるが、これはもう確信

を持って言える。

「この先、宇宙人の侵略が無くなって、地球が平和になったらどうなると思う?」

「どうって……平和ならいいじゃないか」

「……まさか、人間同士で戦争になるという事?」

「いやいや、少し前ならそうだったかもしれないが、外宇宙の侵略を跳ね除けた後だからこそだ。俺達はもうそうなりつつある」

「そうか、宇宙進出……」

「ゴ名答!」

もうこの世界ではホーク2号が太陽系を周回し、近隣の惑星へ探検隊を送っているのだ。それこそキャプテンマキノが率いたワイ星探検隊のような。

いずれこの世界線の地球は、50年もしないうちに外宇宙へ乗り出すだろう。

「ところがだ、我が地球が宇宙社会にのこのこ出て行った時に、知り合いはいかほどか? いやもう顔と名前を知ってる相手は嫌程いるが……どいつもこいつも余所の星を侵略しようとするような奴らばかりだぞ? 地球と友好的な条約を結んだ相手なんて、

キュラソ連邦とワイルド星間共同体と……あとあのお洒落なサンダル履いてる人達くらいだろ?」

「確かに言われてみれば……少ないわね……」

個人単位で友好的な星人はもう少しいるだろうが、この広い宇宙で種族単位の友好国が片手で取まる程って……

「しかもだ、そのキュラソーともまだ全然お互いの文化とか浸透してないし、地球人とそれ以外の種族じゃ価値観が違い過ぎて、まだまだ相互理解には程遠い。ワイルド星と住人の受け入れしてみろ？ そこらじゆうで喧嘩するぞ、きつと」

「まあ……なあ……あんまり上手くやる自信は……ねえなあ……」

「その上、我々地球は明らかな後進国な訳で、宇宙的な常識とかルールとか、なーんも知らんわけ。着の身着のまま、外国とか下手すりやアマゾンのジャングルにほっぽり出されるようなもんよ？ 言葉も碌に通じないのに」

「それは……とても不安ね……」

これからの未来図を想像したのか、二人の顔が暗くなる。

「ところがだ！ 俺達にはセブンがいる！ 先の見えない航海に、たった一人でも水先案内人がいるとなつた時、どれだけ心強いか！ しかもその案内人はとびきり親切で、お互いにお互いを大切に思いあっている。それがどれだけ幸運で得難い事かは……もう言わなくても分かるだろ？」

「宇宙の水先案内人……」

「俺達が何か宇宙的なルールを破りそうになった時、セブンならそれを正してくれるだ

ろう。逆に、他の惑星人が地球人とは信頼できるのかと疑惑の目を向けてきた時、彼は地球がどういう星かをきつと説明してくれる……少なくともアンノン星のように、俺達へ懐疑的な星との衝突は避けられるんじゃないか？」

「確かに……」

「そして、そのセブンにそっぽを向かれない為にも、地球人は宇宙に対して誠実であろうとし続けるはずさ……誰かがR3号を作ろうと言いつても、セブンを怒らせる気かと諫める事ができる。どうだい？ セブンが強かろうがなかろうが、関係ないだろ？ ただ友達に対して誠実であれ。実に簡単な事じゃないか」

「そうか、我々人類が迷った時に、ただ頭の中でアイツの顔を思い浮かべて、顔向けできる事かどうか考えりやいって訳か。そいつあ分かりやすくていいや」

「そうね、いつか侵略なんて無しに、宇宙へ地球が仲間入りする……なんて幸せなのかしら……それに……」

「それに？」

アンヌがキラキラとした目でこちらを振り返った。

「セブンの故郷にも、いつか行ってみたいわ」

「……そうか、セブンの生まれた星か……」

「あんなに優しい心の持ち主が生まれた星よ？ きつと素晴らしい人達ばかりだわ……」

そうそう、セブンのご家族にも挨拶しなくっちゃー！」

「息子さんにいつも大変お世話になっておりますってか？」

「いいじゃないですか。真面目な話、人類が外宇宙に到達できるようになった暁には、真つ先に使者を送るべきはあの星でしょうからね」

「どんな星なのかしら……セブンの体のように光輝いてるのかも」

「太陽みたいな星だったら、熱くてかなわねえけどな！」

「先輩だったら汗だくになりながら、セブン行きつけのモケケピロピロ屋でおかわりしてそうですね」

「なんだいその……モケケピロピロってのは？」

「んー……タキオン粒子と太陽光のオゾンソテー、シーピンを添えて……みたいなの？」

「ハツハツハツハ!!」

振り返ると、ダンが大笑いしている。

その頬に、なにかキラリと輝くものがあった。

「ダン……お前……泣いてるのか……？」

「いやなに、人類がいつかウルトラセブンと肩を並べて宇宙を飛んでる姿を想像したら……そんな日が来るなら……なんて幸せな事だろうか……って」

「お前は本当に、純粹だな……」



「そうよ、ダン。貴方はそうして前向きに、未来を信じて笑っている時が一番ステキよ。だから寂しくて後ろ向きな考えは今日でお終い。いい?」

「そうだね……アンヌ」

涙を拭ったダンが、穏やかに笑う。

「そうだ、もしも宇宙へ使者を送るような時が来たら……それこそダン。貴方のような人が相応しいわね」

「おお、そうだ! ダンなら安心して地球人の代表を任せられる! 悔しいが俺やソガでは地球人は馬鹿だと舐められかねんからなあ……」

「ちよつと先輩! まあ……一先ずダンとアンヌをセットで送り出しときや間違いはないでしょう。地球人は思いやりのある種族だと分かって貰わなきゃな」

「僕が、地球人の、代表……?」

ダンの頬をつつ……と水滴が伝った。

「ああもう! お前はその感激屋な所を直さなきゃならねえかもしれねえ……チリ紙取ってきてやるよ、ハハハ!」

「ウフフ……コーヒー淹れてくるわね……」

二人がクスクス笑いながら離れて行く。

この調子ならとりあえず大丈夫そうだな、と俺もその場を後にしようとした所で、背

中に声が掛かった。

「ソガ隊員」

「なんだ……?」

「もしも……もしも僕が地球からの使者をやるような事があつたら……その時は一緒に来てくれますか?」

「お前なあ……そこはアンヌを誘うところだろ」

「ハハハ、僕だつてそうしたいのは山々ですが、彼女は女性ですから。……過酷な航海に付き合わせるのは気が引けます」

「俺なら過酷な旅に連れ回してもいいってか?」

「くくく……そういう事です」

「まったく、言うじゃねえか。コイツ……」

うんまあ……悪い気は、しないかな。

## 月世界の餞別

「隊長、ホークの故障の原因が、今わかりましたよ」

「ハツハツハ……私にもわかったよ……」

探査用の宇宙服に身を包んだダンとキリヤマは、月面基地の廃墟の中で朗らかに笑みを交わす。

月面基地が謎の怪獣に襲われ壊滅した為に、その調査へ来たのだ。

極東基地からはダンとキリヤマ。ステーションV3からはクラタとその部下であるシラハマ。

月面基地は地球を覆う電磁バリアの発生源だ。ここが再建できなくては、地球は侵略者に対して無防備になってしまう！

その調査任務を任されるに相応しい、まさに選りすぐりの四人。

だが、キリヤマ達の乗っていたホーク1号は、謎のトラブルに見舞われ遅れていた。

力を合わせ、窮地を脱した二人は、先に到着していたV3の二人に合流したのだが

……

顔を合わせてすぐの事である。

二人は素早く銃を抜き、クラタ隊長の後ろに立っていたシラハマ隊員に銃を向けた。「うっ……!?!」

「ハハハ！……さあ、手を上げてもらいましょうか？」

なんと、シラハマは既に殺されており、ザンパ星人が成り代わっていたのだ！

3年前、キリヤマとクラタが壊滅させたヘルメス星系の宇宙艦隊。その生き残りが、二人への復讐の機会を虎視眈々と狙っていたのである！

ホーク1号を遠隔妨害し、二人を亡き者にしたと思つたザンパ星人は、残るクラタを抹殺しようと正体を現したのだが、そこにキリヤマ達が追いついてきてしまったので、慌ててクラタを脅し、何も無い風を装っていたのだつた。

しかし、ザンパ星人はダンとキリヤマの結束力と観察眼を見誤っていた。

破れかぶれのシラハマは、身を翻して抵抗を試みるも、キリヤマのウルトラガンが、目にも止まらぬ早業で火を噴いて、星人が両手に構えた銃と遠隔装置を弾き落とす。

そこへすかさず、ダンのレエザア銃がザンパ星人の眉間を直撃！

怨嗟の声を上げながら、ザンパ星人は息絶えた。

彼の復讐は終わったのか……？

いやまだだ、確か基地を襲つた怪獣がいたはずだ！

その時、廃墟が凄まじい地鳴りで崩れ出す。

三人が外へ出ると、山脈の向こうから、深緑の悍ましい肉塊が、ぶるぶるとその身を引き摺りながら這い出し出てくるところであった。

月怪獣ペテロだ！

ペテロは元々、先程のザンパ星人が航海に連れていたペットであり相棒だった。そして艦が爆発する際に、命からがら脱出してからは、辺境でたった一人になってしまったザンパ星人の唯一の家族となった。

掌よりも小さく、愛玩用の大人しい軟体生物だったペテロは、この三年間ずっと月の裏に隠れ住み、凍った川を啜り、月の砂を舐めて育つ事で、徐々に大きく膨れ上がっていった。

そしてなにより、ザンパ星人の深い深い怨みの感情と、狂った執念こそが、ペテロを恐ろしい殺人兵器へと仕立て上げてしまったのだ！

もはや愛くるしかったかつての姿はどこにも無く、ただ主人の仇を討つ為に地球人を皆殺しにする事だけを刷り込まれた哀しきモンスター。

月面基地の防衛設備はここ数カ月でかなり増強されていたものの、地球人への憎悪でぶよぶよと肥え太ったペテロを押し留めるには足りなかった。

かつてソガとアマギの指揮の下で、バド星人と激戦を繰り広げた多くの隊員達も、非戦闘員を逃がす為に最期まで抵抗し、護衛として地球へ脱出した数人以外は全滅してし

まっっている。

「あいつだ、あいつが基地を……」

妖しく光る単眼から光弾を発射し、探査車を破壊したペテロは、ドクンドクンと全身を脈動させながら、駐機されているステーションホークへと向かう。

金属製の物体は、尽く破壊しつくすように調教されているのだ。

「クラタ！ ホークが危ないぞ！」

「生きていたら、また逢おうぜ！」

「よしー！」

しかし、宇宙服を着ながら月面の険しい山道を走るのは困難を極める。

誰もがホークへ辿りつけぬまま、ついにペテロが光弾の射程に銀の翼を捉えた。

このままでは危ない！

「デュワツ!!」

赤き戦士が躍動して、不気味な肉の塊へ殴りかかった！

重々しい殴打の音が、月面の薄い大気に木霊する。

しかし、分厚い皮膚に覆われたペテロの体は、柔軟でありながら芯が硬く、まるで砂袋を殴りつけているかのような感触だった。

セブンですらも、拳を痛めてしまいかねない程の耐久性。

ペテロの表皮は、ナマコの如き適応性を發揮して、殴りつけられれば殴りつけられる程に、より硬く、より弾力を増していくのだ。

攻めあぐねて距離をとったセブンに対して、今度はペテロのこぶから大量の体液が噴出する。金属すらも溶かしてしまう溶解液だ！しかし、恐ろしいのはその毒性よりも、吹き出す勢いの強さ。

保水力に優れたペテロの細胞は、そのどれもが伸縮性を持っていて、さながら全身が筋肉の塊である。

そのペテロが、ポンプのように自らの肉体を絞り上げて吐き出す溶解液は、物理的な破砕力だけでも山脈を削る程のパワーがあるのだ。

おまけに月の夜は零下180度。吹き出した飛沫が瞬時に凍り付いて、微細な研磨剤としてセブンの肉体を削っていく。

『デユア……！』

「どうした、セブンの野郎……今日はやけに動きが鈍いじゃないか！」

ステーションホークに辿り着いたクラタの眼前で、大いに苦戦するセブン。

その動きはかつてアイロス星人との戦いで見た時よりも随分と精彩を欠いていた。

その眩きに、キリヤマの脳裏で閃くものがあつた。

「そうか、熱だ！ 熱が足りんのだ！」

「なに、熱う?」

「そうだ! セブンはあの強力無比な肉体を行使する代償として、膨大な熱と光を要するんだ! この月の夜には、そのどちらもが足らん! 彼は今、氷山の山頂で戦っているようなものだ!」

「野郎……素っ裸で宇宙なんぞに出て来る馬鹿があるか!」

無敵のウルトラセブンは零下180度の月の夜には敵わなかった。

しかしクラタは、ヘルメットを投げ捨てると、不敵な笑みを浮かべて操縦桿を握る。

「だが、そうと聞いたなら簡単だ。やる事はひとつしかない」

「待て、何をする気だ!」

「こうするのさ!」

ブースターを思いきり吹かして離陸したステーションホークは、目の前で冷却ガスを噴射しながらセブんに覆いかぶさる肉袋に、ありったけのミサイルをお見舞いした。

ペテロの表皮には傷ひとつ付かなかったが、その爆炎の中をかくぐり、セブンのわき腹を舐めるように真つ赤な山脈スレスレを低空飛行で駆け抜けた。

ミサイルの爆発と、ブースターでセブンを炙ってやろうというのだ。

なんと乱暴な策であろうか!

「無茶をするな!」



「お前はやらんのか!? だったら黙って見てるんだな!」

「くそ……………」

クラタの発破に、キリヤマがほぞを噛む。

往路でシラハマの妨害に遭った為、ホークの燃料は僅かしかない。

まだ合流していないダンを待ったためにも、戦闘機動はできないのだ。

「頼むセブン……………起きてくれ!」

せめてもの悪あがきとして、ありったけの照明弾を打ち上げるキリヤマ。

火薬とテルミットの輝きが、荒涼とした月の大地に緑と赤の霊峰を照らし上げる。

だが哀しいかな、それらの炎は宇宙のエネルギーを内包してはいなかったが為に、戦

士の肉体を支える事など到底叶わなかった。

……………さりとて、まるきり無駄と言うわけでも無い!

例え僅かな輝きだとしても、二人が起こしたその明滅は、セブンから孤独と言う闇を

打ち払い、凍り付いた思考をほんの一瞬溶かしたのだ!

セブンは薄れゆく意識の中で、残された力を振り絞って集中する。

そうして探り当てた微かな銀河の気配を、ウルトラ念力で手繰り寄せた!

「……………隕石だ……………」

セブンの隣に小惑星が飛来し、轟々と燃え盛る。

迸る宇宙のエネルギーと熱が、セブンの全身へと漲ってゆく……！

『ダアーツ!!』

そうして満ち満ちた煌めく光。

もはやエメリウムへ変換している暇はない。

そのまま両腕で巨大なL字を組んでから、一気に敵の眼球へ叩き付けた！

闇と冷気の怪物は、膨大な太陽の力に打ち勝つ事などできなかつた。

皮膚と肉が弾け飛び、跡形も無く爆発四散！

ザンパ星人の復讐劇は、こうして終わりを告げたのだ……

月面を後にしたキリヤマ達は、クラタの先導でステーションV3に寄港していた。

ザンパ星人の遠隔装置によって、往き道に失った燃料や酸素の補給を行う為だ。

整備が完了するまでの時間、士官室で旧交を温めるクラタとキリヤマ。

「まさかお前をこの部屋に呼ぶ日が来るとはな……おい、どうだ一杯？」

「おいおい、こっちはまだ帰り道の途中だぞ」

「そんなものは、モロボシにでも運転させておけ」

「奴に示しがつかんよ……俺はこれで充分だ。すまん」

「……ふん、相変わらずつまらん奴め」

懐から取り出した煙草に火をつけて、一服はじめたキリヤマ。

それを呆れたように一瞥したクラタは、誰に憚るでもなく自分のグラスへ琥珀色の液体を注ぐと、それを一息に呷った。

「お前のような規律の鬼が上官では、部下も羽目を外せまい。同情するよ」

「何を言ってる。私はこれでも部下へ理解のある隊長で通っているんだ。作戦室での彼らを見たら、怒鳴りつけるのはお前の方さ」

「言ってるモグラめ……その割には、人質が参謀だけでは足りんような冷血人間だと思われているそうじゃありませんか、キリヤマさんよ？」

「ハハハ、これは失念していたよ。しかし、悪名の半分はお前のせいでもあるんだぞ、クラタさん？」

「マックス号諸共吹き飛ばしかねんとは、傑作だったな……あの臆病者め、俺達の事をよく分かってやがる」

そう言つて、愉快そうに笑い合う二人。

だが、ひとしきり肩を揺すつたクラタは、徐々に眉間に皺を寄せ、憎々しげな声を絞り出した。

「ザンパ星人め……生き残りがいたとは……」

「あれは激戦だった……我々として、出撃した時はあれほど仲間がいたのに、帰ってきたのは二人だけだったじゃないか。向こうにも俺達のように運のいい奴がいても可笑しくはない」

「お前の部下は、二人だけでやったと思ってるらしいがな……」

遠い目をしながら、キリヤマは煙草の煙を吸い込んだ。

あの時は、二度と煙を吸うのは御免だと思ったのに……

「シラハマ君や月面基地の皆には悪い事をしたな……我々の因縁に巻き込んだようなモノだ」

「チクシヨウ……シラハマなんぞに化ける暇があったら、俺の寝込みを襲って成り代われば良かったものを！ ……そうすれば、返り討ちにしてやれたんだ、意気地無しめ……」

「クラタ……」

ガンツと、底の分厚い杯が机に叩きつけられる。

結局のところ、彼が不満なのはそこなのだろう。

クラタが先程から傾けているグラスも、シラハマへの吊い酒であり、キリヤマとて付き合つてやりたいのは山々だった。

「キリヤマ……折り入って、頼みがある」

「なんだ、藪から棒に」

「キサマのところの部下を……俺にくれ」

「なに！ 部下をくれだど？」

流石のキリヤマも、これには驚いた。

なに、丸ごとよこせと言うわけじゃない——クラタは自嘲するように笑って続けた。「俺の部下は……すぐにあっちへ行ってしまう。俺がどれだけ技を叩きこんでやつても、ちつとも根付かん」

「それは……」

「ところがお前のところはどうか。地獄に放り込んでもピンピンして帰ってくるじゃないか。これではあんまり不公平だとは思わんか？ ええ？」

キリヤマとて、クラタがなんと呼ばれているか知っている。死神、部下殺し……彼の下のついた隊員は須く死に、たった一人帰ってくる男……

それは、彼の迎撃任務が激戦に次ぐ激戦であり、常人ならば死ぬような場所で、技量が桁外れなこの男だけが篩にかけられただけの事。

V3は最も侵略に使われやすい宙域を見張る要衝であり、損耗率はV1やV2の比ではない。

マナベ参謀も決して懲罰としてこの男をここへやったのではなく、このような過酷な

任務を課せられるのが、クラタより他にいなかったからだ。

そして、ここへ補充される隊員達もまた、それを重々承知の上で志願してくるような猛者ばかり。

出撃の度に誰か欠けるような激戦区は、防衛軍で最も苛烈なこの男にしか治められない。

故にクラタとて、自分がなんと呼ばれようがどこ吹く風、気にした事など無いだろう。

だが……

「誰も彼もが、俺の教えを墓場に持つて行ってしまおう……これではおちおち、奴らに逢いにゆく事もできん」

クラタは死なないのではなく……死ねないのだ。

部下が先に逝ってしまうから、地上に警戒を促す伝令役を隊長自らやらねばならぬ。

そして、この方面を空白にしてしまう意味をよくよく分かっているからこそ、彼は泥水を啜ってでもボロボロの機体で這いずって帰ってくるだけに過ぎない。

「部下か……誰の事を言っているんだ？」

「俺の後を任せられるのは……モロボシ・ダンに他ならない」

「……だろうな……」

キリヤマは煙を吐き出し瞑目する。

どのような絶望的状况からでも必ず五体満足で帰ってくる驚異の生存力。僅かな違和感すら逃さない観察眼と第六感。

そして何より、溢れんばかりの使命感と勇氣！

彼の全てが、クラタの欲する条件と合致している。

しかし……

「とはいえ、奴は上層部キサマのお気に入りで。俺も贅沢は言わんよ……ソガだ。ソガをよこせ」

「ソガか……」

「あの臆病がいいのさ……俺の部下達は、腕だけならばキサマのところなんぞより余程上だ。しかし、どいつもこいつも自分の身を顧みる臆病さが足りん……その点、奴はい。ぐうたらな癖に、敵に対しては本当に底意地が悪い……実に俺好みだ」

「酷い評だ。奴に聞かせてやりたい」

悪たれのクラタは、くつくつと喉を鳴らすと、今度こそ真剣な顔でキリヤマの顔を覗き込んだ。

「なんでもいい、お前の慎重さを俺によこせ！フルハシでもいい！ウルトラ警備隊は全員が死地から帰ってくる超人だ。その悪運を少しくらいはこっちに分ける！どうだ!？」

「……」

クラタはあえて言わなかったが、死ぬときは機体ごと爆散するので、ドクターやエンジニアはいらんとでも考えているのだろう。

キリヤマは頬に旧友の視線が突き刺さるのをひしひしと感じながら、たつぷりと煙草の煙を吸い込み、吐き出す。

そして灰皿へそれを押し付けると、ようやくクラタに向き直り、彼に負けず劣らず真剣な顔で毅然と言い放った。

「駄目だ」

「なに！」

「お前には……やらん」

「俺が、こんなに頭を下げてもか……！」

「やらん！ やらんと言ったらやらん！」

漢達は眉尻を上げて、相手を射殺さんばかりに睨みあった。

お互いの眼差しを真正面から受け止めて、それでも尚、一步も引き下がらぬという気迫で、双方無言のまま、時間だけが流れる。

チクタクと、ただ時計の針だけが部屋で動いていた。

……だがそれも、グラスの氷がカラリと澄んだ音で崩れるまで。



やがてクラタは、ニツと口の端を吊り上げて、結露したガラスへ琥珀を注ぐと、それをぐいと飲み下した。

「……ふ、冗談に決まっているだろうが。何をそんなに真剣になつてゐる。だから相変わらず、つまらん奴だと言うんだ」

「クラタ……すまんな」

「だいたい俺が、あんな泣き言を吐くと思つたか」

「鬼の霍乱とも言ううじやないか」

「馬鹿言え……」

戦友の氣遣いに甘える事にしたキリヤマは、憎まれ口の応酬で忸怩たる内心を包み隠した。

「例え本氣だつたとしても……奴らに、この水は合わんよ」

「宇宙に水の酸いも甘いもあるもんかい」

「モグラにはモグラの穴倉があるように……狼の気持ちは狼にしか分らんものさ」

「けツ……俺はどうせ一匹狼だよ！」

「そうじゃない……最後まで聞け」

本當にこの男は狼によく似ている。誤解を受けやすい事も含めて。

「狩りの上手いやマネコは、モグラとオオカミ、どちらがより近いと思う」

「オオカミに決まってる」

「違う、オオカミは社会性の獣だ。獲物を群れで吠え立て、追い込んで殺す。同族同士の鉄の結束があるのだ。ところがヤマネコは暗闇に一匹で息を潜めて、眼を爛々と光らせながら、ただ敵をじいつと待つ」

「……しかしモグラは狩りをしないだろうが」

「モグラの狩りはな、トンネルを巡回しつつ、間抜けなミミズの尻尾が坑に滑り落ちてくるのを、手ぐすね引いて待っているのさ……ヤマネコを群狼の中へ放り込んでも果たして役に立つかな？」

「……ふん」

不服そうに鼻を鳴らしたクラタは、灰皿から燻る吸い殻を奪い取り、それを啜えて目を細める。

「ヤマネコは穴倉で窮屈じゃないのか」

「モグラは盲目さ故に、坑をネズミが間借りしようが、他の動物が跨ごうが、気にせんよ。狭いと言うなら、私が穴熊になれば良いだけのことさ……」

「そうか……」

しばらく二人の漢達は、気怠い体を背もたれに預けながら、煙草をくゆらせた。

これ以上空気を汚すと、イシグロにどやされるな……とクラタが零す。

酸素の貴重なステーションで、煙草は許されざる贅沢なのだ。

尤も、生え抜きのパイロット達へ生真面目にそれを指摘するのはごく一部だったが。

「……我ながら下手な冗談だった。そもそも煙を吸わんような不健全な奴らなど、こっちから願ひ下げだ」

「クラタ……折り入って頼みがある」

「こちらの頼みは断つておいて、勝手な奴め。……なんだ？」

「以前、巣穴に狼が一匹迷い込んで来てな……残念ながら、モグラやヤマネコでは奴の遠吠えに依えてやる事が出来なかつた……だが、キサマならば或いは……」

「体良くはみ出し者を押し付けようつて訳か……いいだろう。どうせウチは掃き溜めだ。何日持つかは保証せんぞ」

「かまわん、思う存分扱いてやってくれ……マナベ教官の秘蔵つ子だ」

「そうか、あの人の……名は？」

「アオキという」

「承つた。……今度はせいぜい死なないように、俺の後ろを飛ばせるとしよう。付いて来られるのならばな……」

「助かる」

二人は視線を合わさず、壁の時計だけを見て、短い談合を終えた。

あの男を見た時に、少しだけ感じた懐かしさ。それはきつとあの人も同じものを感じたに違いない。

ならば、彼はこちらの水が合うのではないか。

一方では芽吹かぬ種も、土を替えれば育つ事もあるだろう。逆もまた然り。

キリヤマは、生きる為に敵を殺すが、クラタは殺す為に生きる。そういう漢なのだ、これは。

二つは同じように見えて、全く別のモノであり、そしてやはり同じ穴の貉。

だからこそ、それでこそ良いのだ。俺達は。

キリヤマは、ふうつと紫煙を吐き出すと、空のグラスを手元に引き寄せ、自ら琥珀の酒をそこに注いだ。

「呑まないんじゃないのか？」

「私が呑むわけじゃない……これはシラハマ君が呑むのさ。俺には……ダンがいるからな」

「……そうか……すまん」

二人の漢は、静かに杯を傾けた。

# 確殺の0. 4秒 (I)

「頼む！ この通りだ！ 優勝させて下さいお願いします！」

「……なにをしている？」

今、オレが何してるのかって……？

見りや分かるだろ？

☆DO☆GE☆ZA☆

土下座だよドゲザ。

頭を地に擦り付けて絶賛、ゲザッてる真っ最中だよ！

「……巫山戯るな！ 貴様……事もあろうに、このおれに対して、よくもそんな恥知らずな真似が出来たな！」

そんでオレの後頭部を怒鳴りつけているのは、同期のヒロタだ。顔を上げると、非常に蔑んだ目でこちらを見てくる。

まるでゴミでも見るような眼差し。

「何とでも言うがいい。射撃大会で、俺がお前に勝てると思うか？ いや、無理だね。賭けてもいい。だからこうして頭を下げてるんじゃないか！」

「貴様ア……!!」

「頼む! 俺はウルトラ警備隊でやらなければならない事が、まだまだ沢山あるんだ!」  
「それがなんだと言う!」

「射撃大会優勝者に与えられるのが、トロフィーだけではない事くらい、お前も知っているだろう……?」

「……ッ!」

足に縋りついたオレから目を逸らすヒロタ。

「大丈夫だ! お前の事も併せて言っておくから……! というか、俺がウルトラ警備隊に行けば、自動的に枠が埋まってお前は晴れて参謀本部継続だ。どっちにとつても悪い話じゃない。WIN-WINじゃないか! ……痛ッ!」

そう言うと、ヒロタの顔にサツと赤みが差し、俺を引きはがすように足を蹴り上げる。吊り上がった眼で、俺を睨む彼は、怒りで小刻みに震えていた。

「前々から、最近のお前は本当に気色が悪いと思っていたが……ついそこまで堕ちたか! 八百長の相談などと……このままお前と同じ部屋にいたら本当に撃ち殺してしまえそうだ! 失せろ! 今すぐおれの前から消え失せろ!」

部屋から叩き出されたオレの眼前で、ドアが凄まじい勢いで閉められた。

中からガチャリと鍵の閉まる音が聞こえる。完全拒否の構え。

……ふう、こうなつてしまつたか。

まあいい。ある意味予定通りだ。

どつちに転んでも良かったが、出来れば双方ともに理解しあつたうえで……と言うのが望ましかつたんだがなあ……

オレがソガに憑依してしまつた為に、原作には無かつた友好関係が築けたのがイチノミヤなら、原作以上に仲が険悪となつてしまつたのが、このヒロタだ。

ソガの同期である彼は、射撃大会で優勝を争う程のライバルであり……その激しい對抗心に付け込まれ、敵の宇宙人に利用されてしまう。

その彼をなんとかしようと思つて、憑依後にそれとなく接触して原作以上に仲良くしようとしていたんだが……これがあんまり上手くいかなかつた。

なんというか、射撃の腕で張り合いさえしなければいいと思つていたのが甘かつたみたいで、その……性格面がそもそも反対というか、反りが合わないと言うか……

オレが下手に出れば下手に出る程、苦々しい顔をするんだな、これが。

かといつてマウントとろうとしても反感買うだけだし、対抗心を刺激するだけで意味がないしで……

ホント気難しくつて嫌になる。

これならイワムラ博士のご機嫌とりの方がよつほど簡単だつた。

なんなんだお前は……ホントなんなんだ!?

それで大した手応えのないまま、ついに射撃大会を迎えてしまったというワケ。

こうなつたらもう、『どうしようもなく情けない奴』として奴の対抗心そのものを萎えさせるしかない!

ここまでやれば、悪魔に魂売つてでも勝ちたい! とは流石に思わないだろう。

そもそも謙遜でも作戦でもなんでもなく、オレが憑依してしまつたせいで、ソガスベックは原作よりも落ちているから、ぶつちやけ普通にやってもヒロタが優勝する。

下がり幅にごく僅かしか影響がない為に、普段の任務ではそこまで支障がないだけで、原作時点でも僅差で争つてたヒロタには絶対負ける!

じゃあなんでこんな事してるかと言うと、普通にやつて勝つた結果を、ペガ星人に『私のおかげだ』とか言われたいためだ。

扱いやすい駒として、ヒロタに目を付けられる事をそもそも避けたいので、『こいつのライバルがこれではつけ入る隙がありませんわ』とペガ星人すら呆れさせる為にやつて  
いるのだ!

ハハハ! どうだ見たかペガ星人! 貴様の作戦なんぞお見通しじゃボケエ!

引きこもりは大人しく母星に引きこもつてろ下さい。

さ、明日は射撃大会だし、さっさと寝よう!



「リヒター博士を連れて来たぞ」

『そうか、でかした』

ペガ星人は催眠によって自らの手駒とした隊員に対し、鷹揚に頷いた。

最低限、リヒター博士を暗殺出来れば御の字と思っただけのもの、生け捕りに出来ればそれはそれで使い道がある。

なにせ、こちらには催眠装置があるのだ。

気圧の関係で宇宙船から自由に歩けないペガ星人にとって、有力な手駒が増えるのは喜ばしいことであった。

『さて……』

リヒター博士の頭には袋が被されてぐったりとしている。

ペガ星人は、悪魔の笑みを浮かべながら、地面へ投げ出された背広の男にじり寄った。

地球防衛軍、部隊対抗射撃大会。

ウルトラ警備隊の代表は、ソガ。

次々と標的を打ち抜き、点数が出る。

「うわあ、999点だあ……」

「ヒロタ隊員と同点よ」

ヒロタと点数の並んだソガは、同点決勝を行うこととなった。

決勝の先攻はヒロタ。

クレー射撃の標的を拳銃で打ち抜くと、くるりと銃を回して、銃口に息を吹きかけるヒロタ。

まさに余裕の笑み。

後攻、ソガ。

じつと構えて標的が飛んでくるのを待ち受け……まさに発砲の瞬間。

何かに足を取られ態勢を崩すソガ！

標的は、むなしく空のかなたへ……

ヒロタの優勝が決まった。

「ここ一番でミスるなんて、お前らしくないじゃないか！」

「残念だわ……。優勝祝いの準備までしてたのに……」

「いやあ、すまん。なぜミスったか、自分でもわからないんだ」

「まあ勝負は水モンだ。来年を目指せばいいさ」

「そうですよ」

ソガを取り囲んで、口々に励ます警備隊の面々。

そこへ優勝トロフィーを持ったヒロタが近づいてきた。

「すまん、ソガ。勝ちを譲ってもらって……」

「いやあ、あれが俺の実力さ。優勝おめでとう」

「ありがとう。この優勝カップになりかわって礼を言うよ。おかげでウルトラ警備隊のような殺風景なところに行かずに済んだからな……。ハッハッハ！……じゃあ失敬」

「やな感じ……。いくら参謀本部のエリートだからって、人間的には最低よ！」

勝ち誇り去っていくヒロタの背中に向かって、あつかんべーをするアンヌ。

「あれでも根はいい奴なんだ……。ただ、俺たちの友情を邪魔しているのは……。これさ  
……」

じつと、手の中の拳銃を見つめるソガ。

手の中の拳銃を見つめる男。

自らの私室にて、物思いにふけるヒロタ。

(確かに、最後のミスは奴らしくない……いや、これこそが俺達の実力差なのだ。いったい何を悩んでいるんだ。これでおれはまだ、参謀本部に居られる……それでいいじゃないか)

すると、どこからともなく男の声がするではないか。

『優勝おめでとう、ヒロタ君』

「お前は夕べの……！」

『君の望み通り、勝たせてあげたよ……』

「じゃあ、俺が勝ったのはお前が……」

『そう……夕べ君は、優勝できるなら友達を裏切っても、魂を悪魔に売ってもいいと言っただ……』

「俺はそう言った。お前は、俺の何が欲しいのだ？」

『それは今夜……。では、また……』

おれは一体、誰に魂を売ってしまったのだろうか……？

ヒロタの部屋の電話が鳴った。

後日、参謀室にて。

射撃大会で上位に進出した隊員達が集められていた。ソガ、ヒロタ、ミナミ、スズキの4人である。

「諸君を呼んだのは他でもない。実は、世界的な宇宙ロケット研究家であるゼムラー教授が今日、ベルリン空港で、何者かに射殺されたのだ」

「犯人の手がかりは？」

「今のところ、全然なしだ。しかしこの事件は、単なる殺人事件としては考えられない。……というのも、地球防衛軍は目下、秘密裏に人工太陽の研究を続けているが、殺された博士や教授たちは、皆この計画に従事していたんだ」

「人工太陽計画……」

参謀室に、緊迫の空気が張り詰める。

「ところで、この計画の最高責任者であるリヒター博士が、来週中にも日本を訪れることになっている。犯人たちは、当然狙ってくるだろう。なにしろ、計画の青写真はすべて、リヒター博士の頭の中に、収められているんだからな」

「君たちの任務は、博士の安全を守ることにある。射撃大会で上位入賞した腕をフルに活用してもらいたい」

隊長の言葉に、意味ありげなアイコンタクトを交わす二人……

羽田空港へ秘密裏に到着したりヒター博士。

博士を出迎え、護衛に入る隊員達。

一位のヒロタと三位のミナミは博士とともに1号車、二位のソガと四位のスズキは2号車に乗り込んだ。

空港を後に基地へ向かう2台。

しかし、その車列へ強引に割り込んでくるダンプカー！

敵は待ち伏せしていたのだ！

「行くぞー！」

車を降車し、ダンプカーに向かう2号車の二人。

マシンガンの連射音が荒野に響き渡り、スズキがうめき声を上げながらドウつと倒れる。

死角まで走りこんだソガは一撃で敵を倒す。

見ると、1号車のドアは開け放たれ、同様に襲ってきたダンプカーには敵が倒れている。

走り寄り、後部座席を覗き込むが……そこには、頭を打ち抜かれた博士の無残な姿。

「博士！ 博士……しまった！」

任務は失敗だ。

「ヒロタは……？？」

ヒロタとミナミ隊員の姿がない。

「ヒロタアアア!!」

ヒロタを探すソガ。

その時、ダンプカーの影からソガを狙う拳銃が……

「あっ……！」

気付いた時には、時すでに遅く、凶弾はソガをも襲った。

腹を撃たれたソガは、意識が薄れる中で、敵へと撃ち返し、逃げてゆく男の後姿を見

ていた……

## 確殺の0.4秒（Ⅱ）

「アアアアアアアアアア……なんだ夢か」

まったく、変な夢を見たせいで体がだるい。

今日は射撃大会だったのに、よりによって最悪の目覚めだ。

「ソガ隊員、あまり顔色が良くないですね？ 隈が出来ますよ。大丈夫ですか？」

「ああ、ダン。あんまりよく寝付けなかったみたいでな。でもまあ、大丈夫だよ」

「アンヌも張り切って宴会の準備をしていますから、頑張ってくださいね！」

「ハハハ、だから優勝は無理だったば……」

なんならそれより大事な事があるんだよなあ……

射撃大会予選、5秒のカウントの後、ホールの中にブザー音が鳴り響く！

俺はヨシダ隊員と向かい合って、ビームライフルを撃ちあっていた。

「あっちゃあ……流石ですねソガ隊員。今朝は調子が悪そうだったとモロボシさんが心配していましたから、自分にもチャンスがあるかと思ったんですが……」



「いやいや、オレもまさかヨシダ隊員と当たるとは思わなくて、ヒヤツとしたよ」  
「まったく、今年はもう少し上に行けるかと思っていたのに、自分のくじ運の悪さが恨めしいですよ」

にこやかに握手を交わし、対戦相手を交代する俺達。

もちろん胸を撃ち抜かれたヨシダは無事だ。

ビームライフルと言っても、人型兵器を一撃で撃破して、戦艦並みの攻撃力を持っているのか！と仮面の赤い人が驚くアレじゃない。

現実世界にもある、れっきとした競技用の銃だ。

赤外線とかで当たったか分かる銃の玩具あるだろ？

あれのもっとしつかりした奴さ。

左胸につけた警備隊マークのワツペンに、小さい受光部が仕込んであって、ウルトラガン型のライフルから出たキセノン光が当たると、秒数や部位を判定するって仕組み。

まずはこのビームライフルで早撃ちの対人競技を行い、勝ち上がった者で次のステージだ。

ただでさえ競技者が多いのに、競技項目も沢山あるんだから、これくらいやらないと時間も弾薬消費も馬鹿にならないからね。

早撃ちを二回戦やれば、あつという間に競技者は4分の1。

次はまたしてもビームライフルの狙撃競技。

今度は10m先の的に立射姿勢から60発を撃って、点数を競う。

これは瞬発力も要求される早撃ちよりは、ずっと得意だ。

ノロマなオレでも、しっかりと狙って撃てば、原作ソガの狙撃能力をそのまま活かせるからな。

こんな感じであらゆるシチュエーションの競技を1日がかりでやっていくのだ。

野外の実銃射撃場に進めるのは、上位のほんの一握りというわけさ。

ヤナガワ参謀は今日も節約に余念がない。

いくら寝不足気味とは言え、ソガスベックにかかれば余裕余裕！

あつという間に、最高得点で本戦出場を決め込み、トントン拍子で進んでいく。

さて、あとはヒロタとの決勝が待っている……

ヒロタの私室をノックする音がある。

「どつどつ……」

訪れたのは、ソガだった。

「何しに来たんだ？」

「実は、君に聞きたいことがあってね」

「……どんなことだ？」

ポケットに手をつ突っ込むと、ソガから目を逸らし背を向けるヒロタ。

「なあヒロタ……お前何か俺に隠していることがあるんじゃないのか？」

「隠す……？ バカをいえ」

「しかし、お前の態度はどうもいつもと違うようだ。なあ、ヒロタ……俺たちは同期生じゃないか……何か悩んでいることがあったら、素直に話してくれないか？」

「うるさい、貴様に話すことなど、何もない……さあ、出てっくれ！」

聞く耳をもたずにソガを拒絶するヒロタ。

「仕方がない……、じゃあ俺の方から言おう……あの時、俺を撃つたのはお前だろう」

「なにい？」

「いや、俺だけじゃない……お前は、あの男たちとグルになって、ミナミ、スズキの両隊員も殺したんだ！」

「フフ……、悪い冗談はよせよ。何を証拠に、そんな言い掛かりを付けるんだ」

「証拠は……、その顔の傷だ！ その傷は……俺に撃たれてできたものだ」

素早く銃を抜くヒロタ。しかし、ソガの方は既に拳銃をヒロタの体へ押し当てていた。

「……銃を捨てろ！ さ、早く！」

ソガは、ヒロタを牽制しつつ、連絡をとろうと室内電話の受話器を耳に当てた。「ウルトラ警備隊を頼む……もしもし、もしもし!? ウツ!!」

しかし、受話器から謎の音波が発され、昏倒してしまふ。

部屋にヒロタの笑い声が響き渡った……

## 確殺の0.4秒(Ⅲ)

「おはようございますソガ隊員。昨日は残念でしたね……」

「いやあ、ヒロタには勝てないと分かっていたからな。オレからしたら上々の結果さ」

「はあ……？ まあ、例え入賞を逃したとしたって、ウルトラ警備隊で一番射撃が上手いのがソガ隊員という事には、変わりありませんものね」

「そうそう！ 祝勝会を楽しみにしてるぜ？」

「……ハハハ、なるほど祝勝会ですか。ソガ隊員は前向きだなあ……い！」

ダンと共に作戦室へ入室すると、みんなが暖かい眼差しを向けて来る。優勝を逃したのがなんだって言うんだ。

今のオレは、そんな物よりずっと大切なものを、沢山持っているのさ。

……その時、作戦室の電話が鳴る。

「ソガです」

「キリヤマだ。ソガ、直ちに司令部へ来てくれ」

「ハッ！」

「なんだらう？」

「とにかく急げ、残念会は後回しだ！」

フルハシに急かされるまま、オレは退室する。

きつと、参謀の部屋には、オレを含めた射撃大会の上位入賞者が集められている筈だ。  
……きつと、成功させてみせるさ。

深夜、男が眠りについた部屋。

既に明かりは落とされ、真つ暗な闇の中で、規則正しい寝息が聞こえるだけの静寂。

その闇の中で、ベッドからヌツ……と影が起き上がる。

人影は、暗闇の中をひたりひたりと歩き、柵の上に飾られた拳銃を一丁取り上げるではないか。

そして再び動き出すと、壁に掛けられた背広の近くで歩みを止めた。

胸元のホルスターから、迷いの無い手つきで大ぶりの銃を抜き出すと、そこへ先程の拳銃をすつと忍ばせる。

そうして人影は、ゆつくりとした足取りで、ベッドへ戻ると、布団を被り、再び規則正しい寝息を立て始めるのであった……

羽田空港へ秘密裏に到着したりヒター博士。

博士を出迎え、護衛に入る隊員達。

偶数位の隊員は博士と共に1号車へ、奇数位の隊員は2号車へ乗り込んだ。

空港を後に基地に向かう2台。

しかし、その車列へ強引に割り込んでくるダンプカー！

敵は待ち伏せしていたのだ！

「行くぞー！」

車を降車し、ダンプカーに向かう2号車の二人。

マシンガンの連射音が荒野に響き渡り、スズキがうめき声を上げながらドウつと倒れる。

死角まで走りこんだおれは一撃で敵を倒す。

見ると、1号車のドアは開け放たれ、同様に襲ってきたダンプカーには敵が倒れている。

走り寄り、後部座席を覗き込むが……そこには、後部座席で昏倒している博士の姿。





「……あつ、気分はどう?」

「ここは……」

「基地のメデイカルセンターだ。お前つて奴は、ホントに運のいい奴だな。敵にやられていながら、トドメを刺されずに助かったなんて」

「俺の命が何だ……。俺は任務に失敗したんだ。彼らを死なせてしまったんだ……」

沈痛な面持ちで項垂れるソガ。

「ところで、ヒロタは……?」

「参謀室で、緊急対策会議中です」

「じゃあ、奴も無事だったのか……」

「ええ、スパイのミナミ隊員と相打ちだったようですが、幸い軽傷です」

「ミナミ隊員がスパイ……?」

「どうかしたんですか?」

フンとそれを鼻で笑ったソガは、ベットから降りる。

「ソガ隊員、無理しちゃダメよ!」

「ソガ! どこ行くんだ」

アマギ達の制止も聞かずに、参謀室へ向かうソガ。

そこでは、マナベ参謀、キリヤマ隊長、フルハシ、ヒロタの4人が協議を行っていた。

「おっ！ ソガ君！」

「隊長！ ミナミ隊員がスパイだったという証拠は見つかったんですか？」

「いや、今の所……ヒロタ君の証言が、唯一の手がかりなんだが」

「ヒロタ、本当に間違いないんだな……？」

「残念ながら、事実だ。奴は、俺がトラックと応戦中に博士を……いや博士だけじゃない、この俺まで殺そうとしたんだ」

いけしやあしやあと、嘘の説明をするヒロタ。

「しかし、俺が現場に戻った時には、お前の姿は見えなかったが？」

「もう一人の犯人を追っていたが、途中で見失ってしまったってね……」

ヒロタはソガから視線をはずし、頬のキズに手をやる。

彼の左頬には、顎から耳元にかけて赤い擦過創が出来ていた。

トラックのボンネットに跳弾した弾が掠ったのだ。

「殺された博士は、変装した諜報部員だそうだ」

フルハシの言葉に、重々しく頷くソガ。

「本物のリヒター博士は、明日到着するそうだ。ウルトラ警備隊も全力で博士を守る」

「では、失礼します」

そのまま退室しようとするヒロタ。

しかし、その腕をソガが掴む。

「何だ？」

「なあヒロタ……お前何か俺に隠していることがあるんじゃないのか？」

「隠す……？ バカをいえ」

「しかし、お前の態度はどうもいつもと違うようだ。なあ、ヒロタ……俺たちは同期生じゃないか……何か悩んでいることがあったら、素直に話してくれないか？」

「うるさい、貴様に話すことなど、何もない……さあ、離してくれ！」

「ソガ、どうしたんだ？」

怪訝そうな顔の隊長達を振り返り、オレはヒロタを追求する。

原作のソガが犯した失敗は、ヒロタを一对一の個室で問い詰めた事だ。

これだけ他の面子がいる前でなら、音波攻撃にやられたりはしない！

「仕方がありませんね……じゃあ俺の方から言おう……あの時、俺を撃つたのはお前だろう、ヒロタ」

「なにい？」

「いや、俺だけじゃない……お前は、あの男たちとグルになって、ミナミ隊員とりヒター博士も殺したんだ！」

「おいソガ、悪い冗談はよせよ。何を証拠に、そんな言い掛かりを付けるんだ」

「証拠は……その顔の傷です！　その傷は……俺に撃たれてできたものだ！　そうだろうヒロタ！」

「なにッ!?!」

オレが宣言と共に指を突きつけると、司令部の空気が凍りついた。

皆の視線がオレに集中する。

……なんだ？　どうした？

「ククククク……ハッハッハッハッハ!!」

「何だ？　何がおかしい!?!」

「皆さん、聞きましたか？　今の奴の言葉を！」

「どういう事だ?」

余裕のヒロタを見て、疑問符を浮かべて困惑するオレに向かって、隊長が厳めしい顔で詰め寄ってくる。

「どういう事だはこちらの台詞だ！　なぜキサマがヒロタ君の顔に傷を付けられるんだ!?!」

「なぜって……奴と相打ちになったからで……」

「万一の事を考え、護衛チームは全員シヨックガン装備にしようと言ったのはお前じゃないか!」

「な、なんですって?」

何の事だ? 全員シヨックガン装備? しかもそれをオレが言った……?

隊長は何を言っているんだ……?

「リヒター博士の影武者は頭を撃ち抜かれていたし、シヨックガンではこのような擦過創は出来ない! キサマは実弾銃を隠し持っていたのか!」

「し、しかしオレが博士のもとに辿り着いた時には既に……」

「辿り着いただつてえ? おめえは何をいつているんだ?」

「ダン、来てくれ。ソガの様子がおかしいんだ。今からメデイカルセンターへ連行する」  
「ち、違います! こいつなんです! ヒロタこそが敵のスパイで……」

「やはり……錯乱状態のようです」

そこへ、ダンがやって来てフルハシと共に俺の両脇を固めようとしてくる。

「待てダン! ヒロタは射撃大会で優勝する為に、敵と取引したんだ! 催眠で利用されているんだ!」

「一体何を言っているんですかソガ隊員! そんなわけないでしょう!」

「こいつあ重症だな……」

「それに二号車はダンプに分断されたんですよ! その隙に……」

「だからお前とミナミが犯人なんだろうが! 一号車に乗っていたんだから!」

「は？」

オレが一号車……？

「なんで？ 一位のヒロタが一号車で、オレは二位だから二号車ですよ？」

「ハア？ ……おめえは四位だっただろうが！」

「射撃大会で優勝したのは、アオキ隊員じゃないですか！」

「な………に………？」

アオキが優勝……？ なんだそれは、知らないぞ。

「彼はそのまま人事権を使ってV3に行ってしまったから、繰り上がって二位のミナミ隊員と四位のソガ隊員が博士の護衛、三位と五位のヒロタさんとスズキ隊員が後詰って班分けだったでしょう？ しっかりしてください！」

「分かりましたか？ やはり彼も敵の催眠下にあるようですね……」

「……連れていけ！」

「ハッ！」

そんな……オレが……四位……？

## 確殺の0. 4秒 (IV)

「大丈夫よソガ隊員。ドロシーやアオキ隊員の時の教訓を活かして、キタムラ博士とアマギ隊員が催眠覚醒装置を作っておいてくれたのよ」

「待てアンス、俺は……」

長大な顕微鏡のようなものを、俺の顔へ被せてくるアンス。

画面の中には、極彩色の世界が映し出され、模様が様々なパターンで変化していく……

ぐるぐると目まぐるしく回転する視界、眺めていると激しい頭痛に襲われた。

まるで脳ミソをガンガン殴られるような……でも、なぜか目が離せない……うう……気分が……悪い……

そうしていると、やがて、脳裏にいくつかの光景が浮かんできた……これはいつたい……やめてくれ……

どんどんオレの意識は遠のいて……

「……ハッ！　ここは……」

『ようこそ、ソガ隊員』

気が付くとオレは、四肢を拘束され、怪しげな回転装置に繋がれていた。

目の前では、青い毛をふさふさと生やした鳥のような異形が、真つ黒な瞳でこちらを見上げていた。

「き、貴様は……!？」

『アルファケンタウリ第13番惑星に住む、ペガ星人だ……』

「ペガ星人……それがオレに何の用だ？」

『ソガ隊員……君には私の虜になってもらう……人工太陽開発計画を妨害するためにな』

「何ッ!？」

ソガが藻掻いても、拘束は頑強でちつとも外れやしない。

『君は、ヒロタ君に勝つためには、どんな事でもしたいと思っているのだろうか？　どうだ、私に協力すれば、君を望み通り勝たせてあげようじゃないか。あれだけ懇願していたんだからね』





難色を示すキリヤマ。

コンマ0・1秒を争う護衛任務であるからこそ、より威力のあるウルトラガンではなく、実弾拳銃を装備する予定なのだ。

狭い車内から早撃ちを行うのであれば、銃身は短く、信頼性のある拳銃こそが適任だった。

「そのための人員厳選ではありませんか。射撃大会上位入賞者で固める意味が、そこそこそあります」

「ふむ……なるほど。今回の護衛のみならず、今後も見据えた積極的な策という事か。キリヤマ隊長、ソガ隊員の献策を取り入れてみよう」

「ありがとうございます!!」

羽田空港へ秘密裏に到着したりヒター博士。

博士を出迎え、護衛に入る隊員達。

一位のアオキは宇宙に行ってしまった為、繰り上がって2位のミナミと4位のソガは博士と共に1号車へ、3位のヒロタと5位のスズキは2号車へ乗り込んだ。

空港を後に基地に向かう2台。

しかし、その車列へ強引に割り込んでくるダンプカー！  
敵は待ち伏せしていたのだ！

「ソガ隊員は博士を！」

リヒター博士をソガに託すと、車を降車しダンプカーに向かうミナミ隊員。  
それを確認したオレは、隣のリヒター博士をショックガンで気絶させると、胸のホルスターから銃を引き抜いて、彼の頭に向けて引き金を……

「アアアアアアアアアアアアアアアアア……やめてくれ！ やめてくれえええええええ  
!!!」

「ソガ隊員！ ソガ隊員！」

頭を装置の下から引き抜き、だらだらと汗を流したソガは、ベッドの上で勢いよく上体を起した。

荒々しい息を吐き、肩を上下させる彼を、アンヌが心配そうに見やる。

「何か思い出したのね……?」

「思い出す……? ああ、そうさ……思い出した……俺は……オレは……なんてことを……」

「ソガ隊員、一体何があったというの……?」

「やめろ! やめてくれアンヌ! ……違う! そんな筈じゃなかったんだ!」

「あ! 待ってソガ隊員!」

しばし頭を抱えていたのもつかの間、弾かれたようにメデイカルセンターを飛び出したソガ。

慌ててアンヌが後を追いかけてやろうとするが、大きな覚醒装置を抱えていた彼女は僅かに出遅れてしまった。

そんな……ペガ星人の標的が……オレだったなんて!

じゃあ、つまり……今回スパイだったのはヒロタではなく……

オレは……この手で博士の影武者やミナミ隊員を……

そんなはずはない!!

きつと何かの間違いだ!!

私室に飛び込んだソガは、後ろ手に鍵を閉めた。

一歩遅れたアンヌが、扉を叩き、懸命に彼の名を呼ぶ声とする。

ソガは数秒の間、扉にもたれ掛かり、その場で息を整えていたが……やがて意を決した表情で、壁に吊るされた背広の方へと歩いて行く。

襲撃当時に自分が来ていた服だ。

恐る恐る……震える手つきで胸元をまさぐると……重たく冷たい感触が指先に触れた。

いやだ、みたくない。

それでも、その本心に反して、彼の指がジャケットの胸元から引き抜いたのは……ずしりと硬い、一丁の武骨な拳銃であった。

黒光りするソレは、確かな手ごたえと共に、ソガの手にじつくりと馴染んで……

あまりにもしつかりとした造りのソレを見た瞬間。

彼は、あの時、あの場所で何が起こっていたのかを、今度こそ正確に、全て理解してしまつた。

「は、はは……」

膝から崩れ落ちた男の口は、震えながら吊り上がっていき……力無く空気が漏れ出すのを止めようとはしなかつた。

もう彼には、そんな氣力がなかつたのだ。



## 確殺の0.4秒 (V)

「ソガ隊員！ 開けて！ ソガ隊員！」

「ソガ！ 何をしているんだ！ 開けろ！ ソガ！ 開け……ソガア！」

ドンドンと、必死に扉を叩きながら、中へと呼びかけるアンヌとヒロタ。

中で異様な笑い声を発したかと思うと、数分間も閉じこもったまま出てこないソガを心配しての事だ。

マスターキーを取りに行ったダンがそろそろ帰ってくるかと思つた時分……中で門の開く音がしたかと思うと、唐突に岩戸が開け放たれた。

「やあ……心配かけたな、二人とも。泣くなよ、アンヌ」

「ソガ隊員……良かったわ、無事で……本当に……!!」

「ソガ、その態度は何だ！ アンヌ隊員はな、中で貴様が馬鹿なマネでもしているんじゃないかと……!!」

「なるほどな……悪かったよ……本当に」

「ううん、いいの。いいのよソガ隊員……何かショックな事を思い出させてしまったのね？」

「……これから先は、おれが聞こう。極秘任務に関する事だからな……歩けるか？ 正気に戻ったならば、お前を連れて行かなければならん」

「ああ……頼むよヒロタ」

ヒロタに連れられ、とぼとぼと歩いて行くソガ。

彼らが尋問室の方へ歩いて行くのを、アンヌは涙を拭って見送った。

後部座席に、気を失ったソガを乗せて、夜の荒野を走るヒロタ。

その上空から巨大な円盤が、車を迎えるかのように着陸してくるのではないか。

円盤に向かって、ヘッドライトの点滅でサインを送るヒロタ。

円盤の下部がエレベーターのように開いて、車を取り込んでいく。

「う、うは……」

手足を拘束されたソガの目の前には、憎たらしく嘴を撫でつけるペガ星人と……その隣にはヒロタの姿があった。

『久方ぶりだね、ソガ隊員』

「ペガ星人！ ……ヒロタ！ ……これはどういう事だ!？」



『どういふ事だと言つてもね。君のように特殊催眠術で、我々の命令どおりに働く地球人は沢山いて、このヒロタ君もその一人だというだけだ』

「な、何!？」

『つまるどころ、君達はお互いにお互いを出し抜こうとして、共倒れしたという事だ。実に滑稽だね』

ペガ星人と一緒に笑つて笑うヒロタを見て、齒噛みするソガ。

「ペガ星人……なぜそうまでして、人工太陽計画を妨害しようとする!」

『人工太陽が計画通りに完成すると、我々の本隊が地球に侵入するコースを塞いでしまふので……邪魔なのだよ』

「……待て、そもそも地球の気圧に耐えられない種族が、なぜ地球を欲するのだ?」

『地球を欲する……? 自惚れるな。別に我々はこの星が欲しいのではない。太陽系方面軍の前線集積基地として、この地点が丁度都合の良いだけだ。我々にとっては、遠征軍の単なる中継地点に過ぎない』

「なにいい!？」

驚愕に目を見開いたソガの前で、星図のホログラムが展開していく。

『移住するには不便な星だが、軍事基地の中で過ごす分にはテラフォーミングも必要ない……我々の銀河から地球を挟んで逆側、リブラシグマにあるブラキウム星団、そこに』



「うるさいな……少し黙っててくれ……」

背広を着たソガは、アマギを窘めるとそのまま前を向いて微動だにしない。

「今日のソガ隊員は、まるで別人みたいですよ」

「宇宙人に操られていたのが、よほど堪えたんだろう……もしくは……」

何かの紙切れに目を落とし、意味ありげに頷きあうダンとアマギ。

やがて山間部に差し掛かると、ヒロタは急にアクセルを踏んで先行するポインターを強引に追い抜き、どンドンと進んでいく。

「おいヒロタ、どうしたんだ!？」

「へっへっへっへっへ……」

訝しんだ後部座席のフルハシが尋ねると、ヒロタは怪しく笑い……返事をする代わりに彼の肩へ鉛弾をぶち込んだ。

「グアッ!! アアッ……!」

「オオ……! ミスターフルハシ!」

悶えるフルハシと、懸命に止血しようとするリヒター博士。

二人の様子を満足げに嘲笑いつつ、ヒロタは煙幕を噴射しながらトンネルへと消えていく。

スピードを上げて追いかけるポインターだが、トンネルを抜けると2号車の姿はな

かった……

「車が消えましたよ！」

「トンネルの中にはいなかった……」

「奴ら、シークレットロードを作っていたんですね……戻りましょう！」

「よせ！」

その時、ダンの腕をソガが横合いから掴む！

「手を離すんだ！」

「なんですって……！」

「ソガ!？」

「人工太陽は、ペガ星人の円盤が地球に侵入するコースを塞いでしまう。ペガ星人のために人工太陽計画をつぶしてしまうのだ……」

「それじゃ、お前は……」

「そうだ……俺はペガ星人のために……うがあああ!!」

暴れるソガ。

「やめてください、ソガ隊員！」

アマギのあて身とダンのパンチがソガの首筋と腹部をそれぞれ直撃した……。

あっけなく気絶するソガ。

「やっぱり、このメモの通りでしたね……」

「……うん、急ごう」

超音波探知機でシークレットロードを探し当て、ヒロタを追うポインター。

「うるさい奴らだ……」

追い縋るポインターを妨害するため、手榴弾を窓から投げ落とすヒロタ。

山道は大爆発と共に崩れ、大量の土砂へ突っ込んでしまうポインター。

そして衝突の衝撃で、ダンとアマギは気絶してしまうが……

逆に我にかえった者がいる。

ソガだ。

「俺は何をしようとしていたんだ……？ そうだ、今までペガ星人の催眠術に……」

ダンを押しのけ、運転席に座るソガ。

「よし……行く先は、わかっているんだ！」

ポインターのホバーを起動して、ヒロタの後を追う。

先回りに成功したソガは。やって来た2号車のタイヤをウルトラガンで狙撃し、車を止める事に成功する。

後部座席からリヒター博士を引き摺り出し、逃げるヒロタ。

「ヒロター！」

「動くなソガ！博士の命はないぞ！」

博士の頭に拳銃を突きつけ人質とするヒロタ。

「ヒロタ、お前はペガ星人の催眠術にかかっているんだ。目を覚ませ、覚ますんだ！」  
「ふん、だまされるもんか！」

「だまされているのはお前の方だ！ さあ！ その拳銃を捨てろ！」

「断る！ ……どうしても博士を助けるつもりなら、俺と勝負しろ！」  
「勝負!？」

ソガの言葉には耳を貸さず、一方的に条件を突きつけていくヒロタ。  
もはや彼は止まらない。

「……今から5つ数える。数え終わったら撃つ！ いいな！」

「いいだろう！ 勝負はいつものやり方か!？」

「そうだ！ ……ひとつ……ふたつ……」

もはや説得を諦め、ホルスターに手を添えるソガ。

「みつつ……よつつ……」

風が虚しく二人の間に吹きすさぶ。

「いつつ!!」

2つの銃声が、荒野に木霊する。

やがて……胸を押さえ、どさりと荒野に倒れ伏したのは……ソガであった。

## 確殺の0.4秒（VI）

「リヒター博士を連れて来たぞ」

『そうか、でかした』

ペガ星人は催眠によって自らの手駒としたヒロタ隊員に対し、鷹揚に頷いた。

最低限、リヒター博士を暗殺出来れば御の字と思つてはいたものの、生け捕りに出来ればそれはそれで使い道がある。

なにせ、こちらには催眠装置があるのだ。

気圧の関係で宇宙船から自由に出歩けないペガ星人にとって、有力な手駒が増えるのは喜ばしいことであつた。

『やっ……』

リヒター博士の頭には袋が被されてぐったりとしている。

ペガ星人は、悪魔の笑みを浮かべながら、地面へ投げ出された背広の男ににじり寄つた。



『無いとは思うが、二度も影武者に騙されては困るからな……なあに、計画を喋らせさえすれば、すぐに本人かどうか……グツ!』

ペガ星人が袋をはぎ取ると同時、その青い毛に包まれた喉元へ、力強く拳銃が突きつけられた。

「おっと失礼、でもその必要は無くなったぜ?」

『バ、馬鹿な! お、お前は……!?!』

「ご懸念通り、二度目の影武者だ……残念だったな、引きこもりのカス野郎」

なんと、袋を被って床に転がされていた男は、リヒター博士では無かったのである。

「ソガ隊員……推参!」

『し、死んだ筈では……! これはどういう事だ、ヒロター!』

「確かにおれは、コイツを撃った後、貴様にそう報告したな……しかし……」

「なんせ俺は不死身のソガ隊員でね……こういう事さ」

ソガはニヤリと笑うと、星人へ拳銃を突きつけたまま、穴が開いたジャケットの左胸をペろりと捲った。

背広の下では、なにやら基盤めいたブローチが銀色の金属光沢を放っており、その中心部分へ、くにやりと変形した鉛玉が見事にへばりついているではないか。

「ウルトラガンでも焼き切れない、シャプレーメタル製のブローチさ……多分鉛玉より

は硬いだろうと思つて、胸元に忍ばせておいたんだ。まあ、賭けではあつたが……」

『そ、そんな小さな金属片で、だと!』

「小さい……? いいや、充分に大きいね。ヒロタがここを外す訳がない」

普段、競技で使つてる警備隊のワツペンが、この半分程度なんだからな。

「貴様へ報告した後、博士を立たせようと後ろを向いたおれの背中を、悠々とシヨックガンで撃ちやがったんだコイツは……この卑怯者め」

「試合に負けて勝負に勝つてね。……油断大敵、私の好きな戦法です」

「どんだけ負けようが、最後に勝ちやいいんだよ、勝ちやあな。」

正面から勝てない相手へ、真面目に挑むなんて馬鹿馬鹿しいや。

死んだフリ、騙し討ち、なんでもござれ。

汚名挽回……私の苦手な言葉です。

『しかし、そんな仕込みをする暇は無かつたはずだ……! 傷心のお前がヒロタにここへ連れて来られた後は、ずっと私の制御下に……』

「だからその直前に仕込んだんじゃないか」

「なにつ! ではあの時既にお前は、おれも操られている事を見抜いていたのか!? な

ぜ!」

「知りたいか? だったら教えてやろう……こいつを殺した後でな!」

『ま……待て!』

ソガは、ぐりぐりと喉元へ押し込んでいたりボルバーを、見えやすいようにペガ星人の眼前へ持っていき……その眉間に向かってゆっくりと、しかし確実に引き金を絞っていった。

徐々に撃鉄が上がっていく……

『や、やめ……!』

Z B A A A N N G !!

激しい銃声が船内に響き渡り、硝煙が立ち上った。

そして、恐怖で腰の砕けた星人が、力なく床へとへたり込むが……生きている。

彼の黒い顔面には、傷ひとつ無かったが……その嘴の根元がガチガチと煩く打ち鳴らされ続けてはいた。

「……ハッハッハ!! どうだ良く出来てるだろう? 宇宙人でも見抜けないとは、流石おもちやじいさんが丹精込めて作っただけはある!!」

「おもちやじいさん……?」

「これはな、チブル星人が作ったオモチャだよ。部屋に戻って確かめてみると、俺のホルスターには、こいつがすり替わってやがったんだ」

もつとも、特別な信号を受信すれば、忽ちロックが外れて本物に早変わりするが……

その鍵が外れる時はもう永久に来ない。

口。どれだけ引き金を引こうが、出るのは音と煙だけ……実弾が飛び出すアクセントゼ

「だからな、いくら催眠状態だろうが、これを本物だと信じ込んでいた俺には博士を殺すことなんかできない。……あの銃撃戦の最中、俺一人だけが、玩具を必死に振り回してたという訳さ……どうだ、笑えるだろう？」

「それでトドメを刺したのは自分とは別の……おれだと気付いたわけか」

「そうだ。だからさっきの決闘でお前が死なずにすんだのも、これのお陰であって、早撃ちの結果がどうだったかは分らんぞ？」

「……ほざけ」

『地球人が……コケにしおってえええ!!』

呆然とした様子で、ソガの告白を聞いていたペガ星人は、怒りに身を震わせながら起き上がった、自衛用の光線発射機能のついたコンソールへ手を伸ばす。

しかし、それを黙って見ているヒロタではなく、激昂した鳥人の横面を思い切り銃床で殴りつけると、ふさふさとした胸倉を掴み上げ、嘴の隙間へと黒光りする筒の先端をガチャリと捻じ込んだ。

「何を勘違いしているか知らんが、戦場で玩具を振り回すような阿呆は、奴一人だけだ。

それとも……おれの銃が本物かどうか……貴様の脳天を吹き飛ばして確かめてやつてもいいんだぞ！」

『ガ、グガ……』

間近で星人の顔を覗き込んだヒロタの瞳の奥には、紛れもない殺意と、猛烈な怒りと、そしてなにより仄暗い憎悪の炎がありありと燃えており、この男が確実にそれを実行するであろうことを、ペガ星人に否応なく理解させた。

そんな復讐鬼の肩へ、穏やかな掌がそつと置かれる。

「……そこまでだ、ヒロタ」

「……」

それからも数十秒間、ヒロタが引き金にかけた指が離れる事は無く、より一層グリップを強く握りこむ音が、ギリリと聞こえてくるかのような沈黙が続いたが……やがて、星人の嘴から拳銃がそつと引き抜かれる。

そうして立ち上がったヒロタであったが、その瞳はずつと足元の糞虫を睨みつけたまままだ。

『ハア……ハア……私を生かしてどうするつもりだ？』

「お前はあくまで先遣隊で、本隊が来るんだろ？」

『フツ……拷問か。しかし、お前たちの基地に連れていくと、どちらにせよ私は死ぬ。』

……それとも、君達二人がずっとそうして私を見張っているつもりかね？」

だが、苦しうに肩で息をする星人をまるで気にした風も無く、ソガは呑気に隣のヒロタへ話しかけた。

「……ヒロタ、今度の賭けも、また俺の勝ちのようだな」

「……チツ……お前が勝手に持ち掛けて来たんだろうが」

『なんの話だ！ 私を無視しているのか！』

「いやなに……お前さん、さつきから少し膨らんできてないか？」

『な、なんだと!? ウグツ!?』

そうして、自身の体を見下ろそうとした星人は、それが出来なかったが為に深く絶望した。

彼の胸はいつの間にか、冬の朝方に公園で団子の如く丸まっている鳩が、そうして暖をとるかのようになり、大きく膨らんでいて、下半身にまで視線が通らなかつたのだ。

先程から感じている息苦しきは決して、緊迫した空気と、鋭い本物の殺意に晒されたが故の錯覚ではなく……実際に彼の着込んだ耐圧スーツが膨張していた為であった。

『ハ、これは……!?』

「いやあ、上手くいったみたいだなアマギ」

「ソガ！ この宇宙船は凄いぞ！ 圧倒的な技術力だ……！ 気圧系統のコントローラ

が特に嚴重だったから、運よく中枢が分かっただけで……それ以外の機能を解析しろと言われても、相当かかるぞこれは」

「それに船体の造りも頑丈で、装甲も一際強固です。恐らく例えセブンであっても、この船を破壊しようと思つたら……最大威力の必殺光線を叩き込まないといけないでしょうね」

ビデオシーバーの画面には、バイザーを降ろし宙間装備となつたダン。

彼が驚嘆するその向こうから、アマギの興奮した声が聞こえて来る。

コントロールルームは無事に制圧出来たらしい。

しかし、アマギでも難儀するような技術の宝庫か。

……まあ、それもそうだが、たかが円盤一機で巨大化セブンと互角にやり合えるくらいの性能を持つてるんだから、これが鹵獲出来たのは大きな戦果と言えるだろう。

そりやセブンも諦めて、侵入してから乗員倒そうとするわけだよ。

なんせ、ペガ星人が死んだ後に外からワイドショット撃たれても、爆散せずにフラフラ墜落するくらい頑丈だったんだから。

「まあ……いつらにとつて、宇宙空間で外殻に傷が付いたりしたら、死活問題だろうしなあ

……」

「お前……もしかそれが分かかっていて、おれにあんな賭けを持ちかけてきたのか？」

「賭け……?」

「気圧のコントロールが無くなった時、ペガ星人はしぼむのか、はち切れるのか……てな」

「ふむ、興味深い。膨らんでいけるとすると、相当に高密度高重力下の惑星なのだろうな、彼らの星は……なるほど、道理で宇宙船の技術が発達するわけだ……お前たちのいる洗脳室も、あくまで地球人とペガ星人の共存できるギリギリの気圧帯……汽水域のようなものだ。俺達からすると、エベレストのてっぺんと変わらんぞ」

「それでさつきから耳がキンキンするわけだな……おい、ダン。こいつを運ばなきゃならんから来てくれ」

いまや風船のように膨らんで、床の上でバタバタもがくペガ星人を見下ろしながら、ダンを呼ぶ。

「これで今回は2勝1敗つてところか? ヒロタ」

「こんな下らん勝負を加算するな……馬鹿馬鹿しい」

『ウウ……グア……このまま、では……死んで……しまっ……』

「焦るなよ、一区画だけ元の気圧で残してあるそうだ。そこがお前の軟禁場所という訳さ……」

やってきたダンと共に、監禁区画へとペガ星人を運ぼうとするが、固辞されてしまっ



た。

「最早こうなったペガ星人が抵抗する事はありません……僕一人で大丈夫ですよ」

「そうか……すまん、ダン」

そう言うダンは、俺の肩越しに背後の男へ向けてチラッと一瞬だけ視線を送る。

彼が星人を引き摺りながら出て行った部屋には、俺達だけが取り残されてしまう。

……振り向くと、ヒロタは手の中にある拳銃へ視線を落としたまま、黙ってそこに立ち続けていた。

「……ヒロタ」

「ソガ、なぜ止めたんだ。おれは、奴を……」

「さっきも言ったじゃないか、奴には吐いて貰わないといかん情報が山ほど……」

「そんな事は分かっているッ!!」 分かっているんだ……分かっている……おれはこの手で、この手で奴を……殺してやりたかった……ッ!!」

そう絞り出すように慟哭し、膝をついて項垂れるヒロタ。

奴は……泣いていた。

「すまん……ヒロタ」

「すまん……? すまんだと? そう思うならなぜ……なぜあの時、おれを素直に殺してくれなかったんだ!! 愚かな侵略者の手先として……死なせてくれなかったんだ、ソ

ガ！ ええ!？」

「馬鹿野郎!! そんな事……言うな!」

「おれは! 仲間を殺したんだぞ?! 洗脳など関係ない……おれが、この手で殺した……おれの醜い心が! 奴につけ入る隙を与え! ひいては地球を裏切ったんだ!! そんなおれが! なぜ生きて……これからのうのうと……どんな顔で生きろと言うんだ……言ってみろ……ソガ……」

ヒロタは怒ったような顔で俺の胸倉を掴み、吊り上がった眼から、静かに涙を流した。「おれを殺せたのは……お前だけだったのに……」

「……それでも俺は、お前に……生きていて欲しかったんだ……お前だけじゃない。ミナミにも、スズキにもエージエント・デューカスにも……みんなを殺したというなら……俺も……同じだ」

「お前に……何がわかる」

「わかるさ……俺だって……たまさかこの銃がホルスターに入っていないければ、今頃……どちらにせよ、お前に手を汚させたのは、俺だ。催眠が関係ないと言うのなら、俺だって、同罪だ……」

あの時、催眠から目を覚まして記憶を引き出した時に感じた、仲間を殺してしまったという絶望は……本物だ。

俺は実行犯にならずに済んだというだけで、ただ運が良かったに過ぎない……

なにせこのチブル製のモデルガンが、どうしてあの時、都合よくホルスターに入っていたか……オレにはさっぱり分からないのだから。

俺は今回、ヒロタの事ばかり考えていて、自分がターゲットになるなんてこれっぽっちも思っていなかったの、あの仕込みをしたのは当然、洗脳された後の事。

催眠で夢見心地だった俺が、飾ってあった銃を取り違えたのだとしても……それは本当に奇跡としか言いようがない。

いや……さっぱり分からない……とは言うのは語弊があるか。

まさかな……？ と疑っているひとつの可能性は……ある。

ヒロタと同じく催眠状態において……俺だけがペガ星人の思惑から外れる事ができた理由となると……

とはいえ、もし本当に『彼』が助けてくれたのだとしても、それはオレがたまたま特殊な状況だったに過ぎず……結局、運が良かっただけだ。

ヒロタとの違いは、そこにしかない。

であるならば、ヒロタだけが苦しんで、オレがそこから外れる事もまた……恥知らずなように思えてならないんだ。

「ハッキリ言って、今回の俺はペガ星人に完全にやらされた。それでも俺は……勝つ

たんだ。あの悪魔からリヒター博士を守り切って……お前も救う事が出来た。どんなに負けて負けて負け続けても……最後に勝てた。俺達の戦いは……そういうもんじゃないのか？ 射撃大会はまた来年がある。でも、死んでしまったら……2度と勝てないんだ……お前こそが……俺の唯一の優勝トロフィーなんだよ……！ そのお前が……そんな寂しい事……言ってくれるな。なんの為に俺は、苦勞して奴を出し抜いて勝ったんだよ……」

「ソガ……お前は……」

言葉につまるヒロタに対して、俺は彼の生きる理由をもう一つ付け足す。

「それに……お前が死んだら、お袋さん達の面倒は誰が見るんだ……？」

「……お前、なぜそれを!？」

ハツとして、こちらを見上げるヒロタ。

なぜとは水臭いな……知らないでか。

「お前がそこまでして参謀本部に拘る理由……俺が気付いてないとでも？」

年老いた母親と、病弱な妹……彼女らの住む浦賀港は、東京湾岸にある参謀本部ならいざ知らず、富士山の地下にある秘密基地からというのは少しばかり……遠い。

「それでもそんなに殺して欲しいなら……今すぐここでやってやろうか？」

「なんだと……？」

言うや否や、ホルスターから拳銃を引き抜き、ヒロタの眉間に向かって、引き金を引く。

銃声と硝煙が立ち上り……ポカンとしたヒロタの顔は、豆鉄砲を食らった鳩のよう

……不謹慎ながら笑みが零れた。

「バーン」

「お前……」

「……ほら、お望み通り仲間殺しのヒロタはたった今死んだよ。……満足したか？」

「おれは……やはりお前の事が……嫌いだ」

「なんでえ!？」

「そういう所がだ……まったく、反吐が出る」

なんとも言えぬ顔で吐き捨てると、男は立ち上がり、ズボンを手で払いつつ、苦々しい顔でこちらをねめつけた。

「本当にお前は……度し難い男だよ。出会った頃は、幾分マシだったと思うんだがな

……」

「流石に酷くないか？」

「どうしておれは、お前なんぞと同じ時に入隊してしまったのだろうか……こんな奴を、切磋琢磨し合うべき男などに見込んだおれが……まったく馬鹿馬鹿しい」

「いや、腕前的にはまごう事なく、切磋琢磨し合うべき男だが?」

「そういう事は、おれに早撃ちで勝つてから言うんだな」

「は? 負けてないが?」

「……分かった分かった……そんなに勝星が欲しいならくれてやる……どうせ正式な決着は、次の射撃大会で付く」

「……一応今年はお前の方が上だったらしいがな。オレもお前も優勝してないけど」

「侵略者に水を差された試合など、無効試合だ! 来年だ、来年こそ俺はお前に……」

「……なんだ?」

「うるさい」

言葉を切ったヒロタに俺が聞き返すと、彼は露骨に顔をしかめて踵を返す。

でも良かった。なんとか今後も頑張ってくれそうだ。

完全に嫌われてしまったようだが……まあ構わない。

生きてさえいれば、いずれ和解のチャンスも来るだろう。

そう、生きてさえいれば……俺達の、勝ちなのだから。

「そうだヒロタ、せっかくだから参謀本部に帰る前に、祝勝会寄って行けよ。アンヌの手料理が食えるぞ」

「……まったく、勝てんな。お前には」

「なんだって？」

「お前は独り相撲で勝手に優勝してると言ったんだ」

「それってつまり俺の一人勝ち……ってこと？」

「鬱陶しいからもうそれでいい……少し黙っててくれ」

「やったー！」

その晩、俺はささやかな会にて、かけがえのない仲間たちと生ビールで優勝した。

## 盗まれなかつたウルトラアイ

山中に、未確認物体が降下したとの目撃情報が入った。

パトロール中のポイントではアマギが無線に怒鳴っている。

「何をぼやぼやしてるんだ！ 落下地点くらい確認できないのか！」

「防衛基地のリーダーには、何千という怪事件がキャッチされているんですよ！」

無線の相手はソガだ。

「だから、コンピュータがあるんだろう！ お前みたいなウスノ口が、よくもウルトラ警備隊員になれたもんだ……！」

「おいアマギ、いいかげんにしろ。我々は、警察から連絡を頼りに探そう」

仕方ないなど苦笑いするフルハシがアマギを止めた。

珍しく感情的な後輩たちを見て、まだまだ青いな……とでも言いたげだ。

しかし、これ幸いと尻馬にのるソガ。

「そうしていただきたいですね、ウスノ口の僕じゃ、その未確認飛行物体とやらは……」  
「うるさい！」

乱暴に通信を切ったアマギ。



怒り心頭だ。

「奴と話していると、アタマにくる！」

憤懣やるかたないアマギを、フフフと宥めるフルハシがアクセルを踏む。

ポインターは月の光を頼りに、落下地点へと急いだ。

---

オレは今、とても不機嫌だ。

別にアマギと喧嘩したからじゃない。

むしろその前からイライラしてたから、彼のしようもない嫌みを受け流せずに、ああなったと言える。

アマギには悪い事をしたと思うが、人間なんだからこればかりは仕方ない。

そういうえば本編でも、この時のソガは珍しく投げやりというか、卑屈になっていて、アマギと同じような口論をしていたような気がするな。

あつちは多分、致し方ない事とはいえヒロタを殺してしまった事がかなりショックだったのだろう。

それが後を引いて、あんな感じになったと言うのがオレの推測だ。

ところが、こっちの世界じゃ全員は救えなかったとはいえ、少なくともヒロタはピンピンしてるので、オレ的に及第点だったと思ってる。

じゃあなんでこんなにカリカリしてるかと言うと……

今度の事件が、俺の大っ嫌いな話だからだ。

地球を惑星間弾道ミサイルで破壊することにしたマゼラン星は、工作員として一人の少女を送り込んでくる。

彼女の名はマヤ。

その使命は最大の障害たるセブンを妨害するために、変身アイテムであるウルトラアイを盗む事。

今まで、ピット星人やゴドラ星人にも奪われてたし、あまつさえ雪の中にポトリなんて事までやらかしてるので、今更『盗まれたウルトラアイ』も何もないのだが……とにかくダンはまたしても変身できなくなり窮地に陥る。

しかし、マヤは仲間が助けに来てくれると信じていたが、マゼラン星からキャッチした通信は『迎えにはいけない』という、実質的な死刑宣告だった。母星の裏切りをダンから聞かされ動揺するマヤ。

お優しいダンは、彼女に「この星で共に生きよう」とまで告げて説得する。

彼の言葉に改心したのは分らないが、マヤはウルトラアイをダンの顔に装着し

……

飛び立つセブン。しかし、マヤは失意の内に自決し、地球を救ったセブンがかえってくる、彼女のネックレスだけが残されていた……

という感じ。

……ふざけんな。

いやね、怪獣が出なくて地味とか、後味が悪いとかそういう事ではなくてね……！

むしろ、ウルトラセブンという作品において、このエピソードがあるからこそ世界観に深みが出ると言うか、今となっては予算不足によって生み出された筈の話は、後世で評価されるに足る、作品に必要な回だったというのは分かる。

でも、嫌いだ。

何が嫌いつて、マヤ……というかマゼラン星人が嫌いなんだよオレは！！

狂った星だから破壊しますって……おい、ふざけんな。

そんなもって、マヤもマヤだよ。騙されて利用されたとかなら分かるが……彼女は自分の行動が地球にどういう結果を齎すのかをきちんと理解した上で来たのだ。

騙されていたのは、その破壊対象に自身が含まれるか否かという点だけで……実質的

に、今までの敵と何ら変わらないのである。

そりゃあ、彼女は可憐な少女だ。母星に裏切られて可哀そうだろう。……でも、自らの意志で地球を侵略どころか破壊しにやってきた作業員には違いないのだ！

それを一体、なにを悲劇のヒロイン面しとんねんお前、という話。

しかも自分は仲間が助けてくれるから大丈夫と思っていたら、裏切られたので任務放棄しますとか……作業員としても下の下じゃないか！

そんなブレブレの覚悟で、よくもまあ他所の星を破壊しようなんて言えたもんだな!? 自分本位にも程がある。

防衛軍基地と殉じるつもりだったゴドラ星人とか見習ってどうぞ。いや困るけど。

そしてなにより一番許せないのはマゼラン星だ。

母星の為にと使命を果たした仲間を見捨てる時点でもう宇宙のゴミなんだが、送り込んだ作業員がよりによってこの使命感ガバガバのマヤとか……舐めてんのか？

それならそれで、最後まで「待っている」と嘘を吐き通すとかあっただろ。

とは言え、ペダン星並の優秀なスパイを選ばれてたら今ごろ地球は木っ端微塵なので、またしてもこっちが困るだけなんだけどさ。

別に、これまでの侵略者の肩を持つ訳ではないが、寿命が限界とか、物資が無いとか……彼らの生存や利益に関わるそれなりの理由があった。

ところがマゼラン星は、狂った星はただ破壊するだけと来たもんだ。

ギエロン星の代わりに、R1号ぶち込んでやろうかと、本気で悩んだくらいだぞ。

まあ、決めたのはどうせ上層部連中で、他の住民にまで罪は無いんだろうけども。

とかくマゼラン星に対しては、マヤを切り捨てた事も含めて、セブンも相当にキレていたんじゃないかと思う。

なんせ、セブンが機械をいじくったミサイルの軌道は……180度回頭するのだ。

あれはあくまで演出上の都合であって、どこかの恒星に向けただけなのかもしれないが……せめてもの意趣返しとしてそのまま送り返した……という可能性が無いとは言いが切れない。

どうせ自分達の兵器を撃ち落とせなくて滅ぶとか、そんなマヌケな事はないだろうが……少なくとも作戦が失敗した事は分かるだろう。

お前たちの悪辣な裏切りの結果が返ってきたのだ、自分達でなんとかしろ。というメッセージ……というのはオレにとって都合のいい妄想であろうか。

拳句に帰ってきたらマヤは自決してましたとか……胸糞悪いにも程がある。

「何故、他の星でも生きようとしなかったんだ……僕だって、同じ宇宙人じゃないか」  
彼にここまで言わしめた罪は重い。ダンのそれはそれは悲しそうな声よ……  
どうしてこんな奴らの為に、優しいダンが傷つかなきゃいけないんだ！

あーあ、本当にムカムカする。

何が一番気分が悪いって……

オレのこれからしようとしている事も……あまりダンには顔向け出来ない事のような気がするからさ。

何をするかって？

決まってる。

そんなの……ひとつしかないだろ。

オレは、操縦桿を握る指に力を込めた。

---

フルハシがハンドルを握るポインター。

その向こうから走ってくるダンプカーとすれ違う。

警備隊の優れた動体視力が、ダンプの運転席に座った人物を捉えた。

「おい、今の……女に見えなかったか」

「ああ、イカす女の子だった……」

「チクショー、ダンプなんて運転しやがって……ん？」

しばらくいくと、ライトが山道に倒れている男を照らし出す。

「おい、どうしたんだ!？」

「しつかりしろ!」

「…光……の中……、女が……」

重傷を負っている男は、それだけ言い残しこと切れる。

訝し気に周囲を見渡すフルハシとアマギ。

やがてフルハシの指さした先では、高熱で焼かれ濛々と水蒸気を上げる草地。

「猛烈な噴射の跡だ」

「これは只事じゃない。さっきの発光体と何か……」

「すると、あの女が……行こう!」

ポインターに戻ったアマギは、無線でダンを呼び出す。

「ポインター1号よりポインター2号へ」

「はい、こちらポインター2号」

「若い女が運転するダンプが山を下った。検問を頼む！」

「若い女ですね。了解！」

タイミングよく、ダンの目の前にダンプカーが迫ってくる。

車道に飛び出し、大きく腕を振って止めようとするダン。

しかし、ダンプカーはそれを意に介さず、ダンを轢くのも辞さぬ勢いで通過していく。

間一髪でダンプを躲したダンはポインターに乗り込むと、ダンプの追跡を開始する。

すると、上空から謎の発光体が現われ、ダンのポインターに閃光を浴びせかけるではないか！

目の眩んだダンはハンドルを切り損ね、崖下に落下していくポインター……

背後でポインターが落下した事を悟ったダンプが停止し、運転手の少女は降車しようとドアを開け……

その時！

キーンと耳をつんざくエンジン音が響いたかと思うと、丸い翼に月明かりを反射させ、ホーク3号が夜の森に姿を現した！

不意の迎撃に慌てて高度を取り、逃げ去ろうとする発光体。



しかし、ホークはUFOを追う事はせず、まつしぐらに突き進んだかと思うと……下部の爆弾槽を開き、一粒の鉄塊を放り投げた。

紡錘形の黒い塊は、重力に引かれていき……

凄まじい勢いでダンプの荷台を突き破ると、地表で思い切り弾ぜた！

数トンの車が、紙切れのように吹き飛び、ゴロゴロと転がっていく。

横倒しになった大型車は、やがて燃料に引火し、大爆発を引き起こした！

運転席が丁度下敷きになっており、とても脱出する暇は無かっただろう。

黄色いダンプだった残骸が、轟々と燃え上がり、森の木々を照らし上げる。

「ふん……さあみる……」

3号の爆撃でマヤを抹殺したオレは、知らず知らず強張っていた体をシートに沈めた。

これが今回のやるべきことだ。

ダンとマヤが接触する前にマヤを……殺す。

あのダンが誠心誠意説得しても、自殺するんだ。

ただでさえオレは、彼女に対して好感を抱いていないのに、心にもない説得で死ぬのを止められるわけもなし。無理して止めてやる義理もなし。

ダンにすら出来ない事を、どうしてオレにやれる道理がある？

どうせ死ぬなら、どのタイミングで殺したって文句を言われる筋合いはないというわけさ。

むしろこうしてやった方が、彼女の為ですらある。

このまま行けば、彼女は故郷の恥ずべき裏切り者だが……敵に殺されたなら、使命に殉じた悲劇の英雄だ。

身内の誰かを人質に取られていたとか、そういう事情があつたとしても、これなら悪いようにはされまいよ。

彼女と出会い、その境遇を知った時点でダンは心を痛めるだろうが……出会う前に死んでしまえば、単なる侵略者の女。

ダンは彼女を救えなかったと後悔する事もなく、マヤは裏切られた事実すら知らず、普通に作戦が失敗したので地球にミサイルは飛んでこない。

誰も傷つく事の無い、完璧な作戦だ。

オレは、ダンの心の平穩の為なら、どんな事だつてやってやるさ。

彼の思う程、心の綺麗な人間じゃないんでね……

その事実が少しばかり、心を苛むが……これがオレの生きる意味なのだから。

民間車両に向けて、過剰な程の破壊力を叩き込んだホークは、ぐるぐると上空を旋回しながら、発光体の行方を探っていたが、やがて諦めたのか基地の方へと飛び去っていった……

木々の合間から、銀色の翼を見送る影……

森の中で黒く振じれた鉄の塊が、炎で照らされた星空を見上げていた。

メデイカルセンターから治療を終えたダンが出てくる。

「ダン、すまん。俺がモタモタしていたために怪我をさせてしまつて……アマギがあんまりポンポン言うもんだから、すっかり頭に來てしまつたんだ」

「いやあ……うっかりしていた僕が悪いんです。皆に心配かけて……」

今回はダンが狙いだつたから仕方ないんだけどね……

だが、その企みも打ち砕かれた！

なんて気分がいいのだろうか！

「じゃあ、気をつけてな……」

「はい……」

ところがダンは渋い顔で、胸元をさするばかり……  
待てよ？　なんでお前そんなソワソワしてんの？

……いやいや、お前、まさか!?

## 他人の星（I）

軌道上に浮かぶステーションV2。

通信室ではとある怪電波を受信する。

それは地球から、宇宙へと発されていた。

「奇妙な電波です」

「マゼラン星へ、マゼラン星へ……第一任務完了しました。迎えの円盤を送ってください」

通信機からは女の声が聞こえて来るではないか。

「マゼラン星雲……？」

「任務を完了したとか言っていました、いったい何のことでしょう？」

「……ひとまず地上基地に報告だ」

---

作戦室では、V2から送られた怪電波を分析していた。

「発信源は、K地区のプラネタリウムセンター。おそらく、もういないだろう。見たとおりの娯楽場が多い。隠れ場にはもってこいの地域だ」

「ええ……、ボウリング場にジャズ喫茶、地下に潜ればアングラバー……」

「こいつは若い子ですね。ダンプに乗っていた娘も17、8でした!」

フルハシが怪電波の発信源と、発光体と関係のありそうな少女を結びつける。

しかし、ダンプはソガが爆撃したはずだ。

もしや寸前で脱出していたのか……?

「完了しました。これでK地区から発信される電波という電波は、漏らさずキャッチできるとは思いますが……」

「よし、あとは網にいつかかるか。その時を逃さないことだ……」

三日が立ち……その間、怪電波の発信は途絶えていた……

ついに四日めの午前2時。

レーダーが怪電波をキャッチする。

「アマギ、解読器の用意を」

「隊長……発信源は、スナックノアです!」

早速、発信源へ向かう急行する、フルハシとダン。

「アマギ、どうだ?」

「確かに、マゼラン星に向けられています」

「通信の内容は？」

「迎エハ、マダカ……迎エハ、マダカ！」

「それだけか？」

「その繰り返しです」

「うむ……迎えはまだ、か……」

---

スナックノアでは、大勢の若者が、無軌道に踊り狂っていた。

グループ・サウンズのギターに合わせ、ただ目的も無くゆらゆらと揺れる人、人、人……

煙草の煙が充満し、うっすらと霞がかかったような部屋で、酒と、娯楽、踊りに興じる退廃的な地球人達。

後から合流したソガとアマギは、ブルーグレーの制服に身を包んだフルハシが、所在なさげに立っているのを見つけて合流する。

この狂った空間の中で、彼一人だけが職務を全うしようとする様は、非常に悪目立ちし、浮いていた。

だが、そんな非日常すらも、若者たちの目には映らない。  
ここではフルハシ達こそがはみ出し者なのだ。

その中へ私服で紛れ込んだダンは、テーブルに座りつつ、鋭い眼光で店内を見渡す。  
彼の視線の先には、もう一人の異物。

白いワンピースに身を包み、下手糞なゴーゴーを踊る少女の姿があった。

リズムに乗り切れず、さりとて周囲に合わせる気が端から無い立ち振る舞い。

ケタケタと笑い合うアベックの群れの中で、たった一人彼女の顔だけが、ぼんやりと  
虚空を見つめながら、ただ機械的なステップを踏んでいた。

やがて、ダンは店の中心で浮いている少女に、テレパシーで呼びかけた。

「聞こえるか、僕がわかるか？」

「だれ……？ 地球人ならテレパシーは使えないはずよ。わかったわ……、おまえは、セブンね……！」

語り掛けられハツとし、しばし辺りを見渡すも、セブンが接触してきたと分かった途  
端、平然と踊り続ける少女。

「そうだ、お前は何者だ？」

「私はミーヤ。それ以上を教える義理があるかしら？」

「ウルトラアイをなぜ盗った？」



「それが私の任務だから……」

「なに！」

そう語るミーヤのテレパシーは、非常に平坦な物で、感情の起伏が感じられない。

自身の行動に対して、なんら感慨を抱いていないようだ。

「地球を侵略するつもりなのか？」

「こんな狂った星を……？ 見てご覧なさい、こんな星、侵略する価値があると思つて？」  
いままで無表情で体を揺らしていた少女が、初めて歯を出して笑う。

心底可笑しいとでも言うように、腕を振り上げ、ステップを踏みながら、嗤う。

「迎えはまだか……迎えはまだか……」

しかし、ダンが電波の内容でカマを掛けると、一瞬身体が止まる、ミーヤ。

テレパシーで繋がっている彼女の脳裏で、僅かに思い描かれる発信源。

タカタン、タカタン、タツタ、タタタンタツタ、タカタン。

リズムボックスの出す音源に混じって、符号が巧妙に隠されているのをダンの聴覚が捉える！

しかし、ダンの気がリズムボックスへ向いた一瞬の隙について、ミーヤは姿を消して  
いた……

ダンの報告を聞いたソガが照明を撃ち落とし、真つ暗闇になったスナックから、リズ

ムボックスが押収されたのだった。

作戦室で押収したりズムボックスを解体し分析するアマギ。

「このリズム……」

「これを繰り返し、マゼラン星に送るんだ！」

タカタン、タカタン、タッタ、タタタンタッタ、タカタン。

「返信が入りました！」

「アマギ！」

「恒星間弾道弾、既二発射セリ。迎エニ及ブ時間ナク……」

翻訳機から打ち出されたテープをアマギが読み上げると、警備隊の表情がサツと変わる。

「恒星間弾道弾という……隊長、マゼラン星が地球にミサイルを！」

「それじゃあの娘が？」

「恐らく何か、特殊な任務を帯びてやってきたのだろう……」

「迎えには来ないって、どういう意味なの？」

「裏切られたんだよ……、自分の星に……」

複雑な表情で俯き、ぼそりと呟くダン。

「隊長、計算の結果、ミサイルの地球到達は、午前零時ちょうど！」

「なにッ!？」

皆の視線が時計に集中する。現在午後5時。

「あと7時間か……」

その時、作戦室の非常ブザーがけたたましく鳴り響く。

「こちらステーションV2。巨大なミサイルが宇宙より接近中……巨大なミサイルが宇宙より接近中！」

## 他人の星（Ⅱ）

宇宙空間ではステーションV2に、恒星間弾道ミサイルが接近してきていた。

V2は以前、恐るべき宇宙植物の群れとの追撃戦で、飛行隊が全滅しており、再編の目処が立っていなかった。

故に弾道ミサイルに対し接近し、要塞砲で迎撃するしかない。

対艦レーザーが何度も命中するが、全く効果は見られず、大型ミサイルはステーションの阻止可能限界点を超える。

「V2、回避しろ！ 軌道修正用の緊急ロケットを全力噴射すれば、まだ間に合う筈だ！」

「いいえ、それは出来ません……ロケットは、ミサイルの進行方向へステーションを割り込ませる為に必要なだからです！」

「なんだって!?!」

V2からの返事に驚愕するソガ。

「レーザーが効かない以上、あのミサイルが着発式の可能性に賭けてみたく思います」

「バカ野郎！ V2が無くなったら、地球の警戒網はどうなるんだ!」

「愚問ですな。地球が無くなつては、元も子もありません。どうせステーションだけ生き残つても半月で干上がつてしまふでしょう。もはや我々の背後には、あの時のように電磁バリアは無いんです。今この瞬間は我々だけが、地球の唯一の傘なのです！ その務めを果たします！」

「……隊長！ 彼らを止めて下さい！ 対惑星用の爆弾が、ステーション一つで止まるわけありません！ これでは無駄死にです！」

「……」

ソガの懇願に、目を瞑つたキリヤマは、厳しい表情でそれを無視した。通信機の向こうでは、V2が慌ただしく衝突準備を進めていく。

「緊急ロケット噴射、最大出力！ コンデンサー稼働限界を維持せよ！」

「砲手！ 一点を狙い続けろ！ 弾頭右舷へ集中砲火！」

「ありつたけのボンベと弾薬を格納庫に集約するんだ！」

「やめろ！ 体当たりでどうにかなる相手じゃない！ こんな……狂ってる！」

「それで結構！ 最後の地球人になるつもりは毛頭ありません……地球をお願いします！」

「……ウルトラホーク、発進スタンバイ！」

「隊長!?!」

音を鳴らして踵を合わせたキリヤマが、通信機に向きなおると、その掌を額の横へびしりと掲げた。

「諸君らの分まで、我々ウルトラ警備隊が地球を守る盾となる事を、ここに誓おう！」  
「それを聞いて安心しました……では皆さん、おさらばです！」

「衝突します！」

ミサイルとステーションが真つ向からぶつかり合い、V2は人員諸共、一瞬のうちに破壊した。

集積された全ての可燃物が激しく爆発し、漆黒の空に真つ赤な大輪の華を咲かせる。

しかし、朦々と立ち上る爆煙の中から、無傷で姿を現す大型ミサイル。

「くそつ……クソ、クソ、クソッ！ くそおつ!!」

一人の隊員が悪態をつきながら、ブーツで椅子を乱暴に蹴り飛ばす。

普通であれば、激しい叱責が飛ぶ筈の醜態を、しかして今だけは、誰も見咎める者が居なかった。

地殻を貫く惑星破壊兵器は、たかだか人類が浮かべた鉄屑一つで容易く破壊出来る物ではなかったのである。

そんな事は誰から見ても明白だった。分かっていた筈だ！

だが分かっているにも、現場の彼らはそうせざるを得なかった。そうせずには居られな

かったのだ。

……ただ、それだけの事だった。

「フルハシ、アマギ、ソガはホーク1号。ダンは俺とホーク2号だ」

「ハッ！」

「出動！」

隊長の号令で、ホークの格納庫へと急ぐ警備隊。

その最後尾に行く隊員の肩を叩き、声をかけるキリヤマ。

「ダン、頼むぞ」

彼の厚い信頼が、肩に置かれた掌から伝わってくる。

思わず、空っぽの胸元を握りしめるダン。

その時……

「隊長、待って下さい！」

ソガが踵を返して戻って来た。

「我々を、スナックノアに行かせてはいただけませんか？」

「なにつ？」

「えっ……？」

その提案に、全く虚を突かれたという様子の二人。

「あの工作人員の女がどうも気になります……隊長達が直接破壊を試みる間、地上からミサイルを誘導する手段がないか、探ってみたいのです」

「ふむ……」

「隊長、僕からもお願いします」

逡巡するキリヤマだったが……二人の顔を一瞥すると、深く頷いた。

「この際、出来る手は全て打っておこう……好きにやれ」

「ありがとうございます!!」

顔を見合わせると、ポインターのガレージへと駆けだしていく二人。

彼らの背中を見送ったキリヤマは、ため息を吐くと、アンヌへと通信を入れた。

ダンの代わりは彼女にやって貰うでしょう。

しかしこれでは……

「私と組ませた意味が無いではないか……」

苦笑した男は、独りで発進口へと走るのだった。



## 他人の星（Ⅲ）

「……良かったんですか？」

「良いも何も、あんなドデカいミサイル相手には、操縦手と火器管制だけで十分だろう。大気圏外じゃ分離攻撃もできないし、三人も載ってる必要はあるまい。それともアマギはレーダー監視と通信手だけやってるってるか？」

「いえ、そういう事では無く……」

歯切れが悪いダン。

そりやそうか。ウルトラアイを取り戻したい彼からすれば、俺の提案は渡りに船だもんな。

実際にそうなんだけどさ。

しょうがないじゃないか、ああでも言わないと、隊長がなかなか発進しないんだから……

腕時計をしきりに確認しながら、何をしているんだ、あいつ……と呟く隊長はかなり見ものだが……時間が惜しいからね。

2号のコックピットへ、アンヌが代わりに現れた時の反応なんか、「本当はダンが良

かった……」とでも言いたげだ。

この地球の危機において、隊長がわざわざ自分の隣に彼を指名した理由というのはつまり……『そういう事』なんじゃないだろうか。

とはいえ、今のダンがどういう状況を隊長は知らないのです、完全に悪手なんだが。スンマセン隊長、いまのコイツ、ご期待には沿えないんすよ。

「今のお前は、えらくあの女にご執心みたいだから……お前のカンは外れたことが無い」

「え？ そんな理由で？」

「なんだ、違うのか？ それともただ惚れただけ？ 浮気はアンヌが怒るぞ」

「ソガ隊員……」

呆れ顔のダンを余所に、ポインターがスナックノアに到着する。

「よしダン、お前は正面から。俺は裏口から回り込む。女を挟み撃ちにしてやるんだ」  
「了解！」

ダンが退廃的なスナックへ突入すると、中では無軌道な若者達が、狂ったように踊っていた。

あと数時間で地球が滅亡するかもしれないというのに……

しかし、そんな彼らが一斉に入り口を振り返る。

皆の目元には、一様に同じデザイン的眼鏡がキラリと光っているではないか！

赤い縁取りに、集中線の入ったレンズ……明らかにウルトラアイを模した偽物だ。

これではどれが本物かわからない……

異様な雰囲気の男女が、ダンをぐるりと取り囲み、一步、また一步と無言のまま詰め寄って来る……

（みんな、催眠術で操られているんだ……！）

相手はただ洗脳された民間人であるため、ダンも下手に手を出せない。そして……

ジャガジャン!!

ギターがかき鳴らされると同時、それを合図に男女が奇声を上げながら襲い掛かって来た。

もみくちゃにされるダン。

危ない！

その足元へ、何かがころりと転がされる。

猛烈な閃光と、爆音を発するフラッシュユバン。

「キヤアアアア!!」

ダンに群がっていた若者達は衝撃で目を回し、床に倒れ伏す。

効きが悪い者へは追い打ちのようにスタンレーザーが照射されていくではないか。

店の奥から、パラライザーをくるくる回しながら、ソガがゆっくりと現れた。

「危なかったな。それとものダンスの相手でも物色してたか？」

「あ、ありがとうございます、ソガ隊員……」

「しかしおかしいな……？ あの子がいないじゃないか。……ヤヤツ!? 何ダコノ眼鏡  
ハー？ 押収シナクチャー！」

「いや、それは……むッ!？」

妙に態とらしい言葉とは裏腹な、やけにニヤついたソガが、酷く嬉しそうに赤いメガネを回収していくのを尻目に、ダンの耳が店の奥から誰かが走り去っていく足音を捉えた。

「裏口から誰か出て行きました！」

「しまった！ 俺が見落としたのか！」

ウルトラアイの贋作を押収する手を止め、慌てて元来た道を逆走していくソガとそれを追うダン。

大きく開け放たれた裏口の戸を抜けると、そこは月明かりに照らされた空き地だった。

「……おかしいな」

先に飛び出したソガが、辺りを見渡そうとして……

ズガガガガガガン!!!

立て続けの発射音が、夜の静寂を切り裂いた。

ダンの目の前で、友の体が無様に踊り狂い、背中や胸から真つ赤な液体を吹き出して芝生にどさりと倒れこむ。

その光景が、ダンにはまるで、引き伸ばされたスローモーションのように感じられた。「ソガ隊員!!」

「ア☒……ダ……う☒し☒……ろ☒……」

ハッと我に返り、ソガへ駆け寄るダン。

彼の腕の中でごぼりと血を吐く隊員が、荒い息の合間で、かすれた警告を発したが、もう遅い。

咄嗟に構えたウルトラガンは、少女の構えた重火器によって撃ち落とされた。

「……ミーヤー!」

「ダン、無様ね!」

扉の影に隠れていたミーヤが、背後から大型のマゼランガンで掃射したのだ。

機関銃で右半身を撃たれたソガは息も絶え絶えの重傷だ。

まだ辛うじて生きてはいるが、早く治療しなくては手遅れになるのは明らかである。

怒りに吠えるダン。

「どうしてこんな事をする！」

「どうして……？　じゃあ、地球はギエロン星をどうして吹き飛ばしたの？　あれは、私達の銀河のすぐ隣の出来事だったわ。地球人にとっては、遠い彼方の事かもしれないけれど、私達にとっては、この通信機の電波が届くぐらいすぐ隣の宇宙の事なのよ。貴方だって、こちらの感覚の方が、よく分かるのではなくて？」

「それは……」

確かに地球人の距離感間は、宇宙全体からして余りに近視眼的だと、常々セブンも危惧してはいた。

マゼラン星からすればR1号の事件は、隣人が庭でいきなり銃を乱射しはじめたようなものだと言われても充分に納得出来る。数万光年をひとつ飛びする彼にとっては、ミーヤ達の言う『近さ』こそが身近なものであるのだ。

しかし……

「だからといって、警告も無しに惑星ごと破壊したりはしない！」

「それはおめでたくも、永らくお前達の星に、同等以上の並び立ちうる存在が居なかった為よ。野蛮で凶暴な得体の知れない化け物が、みるみる自分達に匹敵する力を付けていくのを、隣で見せられる恐怖が分かる？　……分からないでしょうね、貴方達には」

むしろそれを願ってすらいる！　……本当におめでたい奴ら……

ミーヤのテレパシーが、どんどんと感情的にヒートアップしていく。

「これで下手に警告なんてして御覧なさい。今に地球はさらに強力な惑星破壊兵器を開発し始めるに決まっているわ」

「そうだ、その先に待っているのは泥沼の軍拡競争だ。両者共に疲弊し、やがて共倒れになってしまう……だからそんな虚しい事は止めるべきなんだ！」

「馬鹿ね……競争から最も早く一抜けするには……走りだす前に、脅威になりそうな存在を、先手を打って自分の周囲から一つ残らず排除する事よ。……こんな風に！」

ミーヤのマゼランガンが、素早くダンの左手に向けて発射される。

重体のソガを収容するために、予備のウルトラカプセルを取りだそうとしていたのを見咎められたのだ。

弾かれたカプセルポーチが遠くに転がる。

「それは……あまりにも孤独な考えだ。生命は独りでは生きていけない。だからお互いに話し合い、相手を理解し、手を取り合う必要があるんだ」

「話し合えば理解し合えるというのは、ただの傲慢よ。言葉が通じるからといって、意思の疎通が取れるとは限らない。得体が知れぬ脅威と触れ合うリスクより、それを消し去ってしまう方がよほど合理的なの。少なくとも自分達の平和は保たれる」

「そんなのは間違っている！ それでは宇宙に本当の平和は来ない！」

「……お話にならないわね。その点、その地球人の方がよっぽど共感してくれるでしょう。なにせ、正体の分からない内から宇宙人を吹き飛ばす仕事をしているんですもの。……私達とその男、何か違うかしら」

「……だから、ソガ隊員を撃つたのか」

少女の侮辱に対して、ダンは激発しそんな心をなんとか鎮め、努めて平静を装った。今は、なんとか少女の隙を見つけなくては。

自らの腕の中で、命の息吹がどんどんと微かなものへ変わっていくのを感じる。急激に冷めていく友の体温が、ダンの焦燥を煽った。

「その男は、妹を殺した。その報いを受けさせただけ」

「妹……?」

「あのダンプには、私の妹が乗っていたのよ。……元々、この任務はマヤが遂行する筈だった。私はそのバックアップ。あの子がヘマをしなければ、こうして後始末をする必要も無かったのよ。……でもね、いくら出来損ないとは言え……マヤは……わたしの妹なの。だからその男には出来るだけ苦しんで死んで貰う! その為に急所は外してあるわ。……こっそり念力で止血するのは、やめて貰おうかしら。邪魔しないで」

「断る!」

「どうして? 少しの間生き長らえさせた所で、この星の命は、午前零時で終わり……」



うせ死ぬのよ。いつ死んだって変わらないじゃない」

「君も死ぬんだぞ！」

心底理解できないといった様子のミーヤに、ダンは力なく垂れ下がるソガの手を握りしめ、そこから懸命に生命エネルギーを注入しながら、険しい顔で彼女を睨んだ。

「私は、仲間が迎えに来てくれるわ……」

しかし、ミーヤがそうあつげられかんといい放つと、途端に彼の顔は酷く哀し気な、今にも泣き出しそうな顔に変わっていき……すっかり怒気を収めると、思わず彼女から目を逸らしてぼつりと眩いた。

「……誰も来ない。君ははじめから、見捨てられていたんだ……」

目を見開くミーヤの前で、ダンが血で汚れた指でゆつくりと、黄色い暗号テープを広げていく。

所々がべつとりと真っ赤に染まってしまったテープだが、まだ読むのに支障はないはずだ。

それを彼女に手渡そうとして……

「……ウフフフ」

「ミーヤ……？」

彼女は肩を揺すって笑っていた。

ただカラカラと、嬌声と言うにはあまりにも空虚な声を喉から出しながら、口元を押しさえていた。

「そう、そうなのね……いいえ、テープは結構よ。貴方の顔を見れば嘘ではない事くらいわかるもの。本当に隠し事が下手なのね、貴方たちは」

「なにが可笑しいんだ！ ……裏切られたんだぞ！」

「それがいったいどうかして？」

「なにッ!？」

途端に真顔へ戻った少女からは、何の感情も窺う事は出来なかつた。

「言つたでしょう、私はバックアップ。……マヤは……アレはスパイとしては本当に役に立たず。どれだけ技能があつたとしても、心が弱すぎて使い物にならない。どうしてそんな子が選ばれたのか……合点がいつたわ。最初から捨て駒にして惜しくない人員だつたわけね。そして私の方は出来れば手元に残しておきたかつた……とはいえ、あくまで出来れば程度だつたんでしょね。上からすれば、私もマヤも、大して変わらない消耗品だつたというだけの事。……私自身が生きた誘導ビーコンだつたなんて……上の連中も、よく考えたものだわ、本当に合理的」

まるで他人事のように、冷静に分析し、あまつさえ賞賛さえするミーヤ。

彼女の振舞いから、マゼランという星の在り方が透けて見えたような気さえしてダン

は思わず慄いた。

なんて、なんて……！

「それが、君達の星の……やり方か」

「そうよ、使い捨ての工作人員に、愛国心や情操教育なんて、割に合わないでしょう？」

「故郷に未練がないというなら……こんな事をする必要もないじゃないか！ 今ならまだ間に合う。この星で生きよう。この星で一緒に……」

だが、ダンの放った一言は、少女の逆鱗に触れた。

「ふざけないで!! 一緒に生きる……? この狂った星で!! ……私達はね、ずっとあの施設で、何も無い部屋でたった二人で生きてきた! 捨て駒だろうと何だろうと、私達にはこの生き方しかないの! この生き方しか知らないわ! マゼランだろうが地球だろうが全部同じ、他の星なんてどうでもいい! この宇宙には、初めから私とマヤしか居なかったのよ! それが宇宙の全てよ! でも……もうこの宇宙にあの子はいないの。それを今更、横からいきなり割り込んできて、アナタ一体、何様のつもりなの!?!」

「ミーヤ! 落ち着くんだ!」

銃を構えたまま、少女はもう片方の腕を高く掲げた。

そこにはブローチ型の機器が握られており……詳細はわからなくとも、それがこの場

にいる全員にとって、都合の良いくないものである事だけは確かだった。

「本当は、その男が徐々に弱っていくのを眺めているつもりだったけど……気が変わったわ……」

「自棄になっちゃイカン！ 破壊と憎悪は、虚しいだけだ！ 死んでしまっただけは、そこから先へは進めない！」

「勿論そうね。でも死ぬのは私一人じゃない！ あなたも、地球も、その男も、皆で一緒に死ぬのよ！」

鋭く響く銃声。

夜闇をつんざく閃光が迸る。

何かがドサリと地面に落ちた。

それは、白磁の如き、人の腕。

「……え？」

一瞬の事に呆けた少女は、遅れてやってきた激痛に身をよじる。

ぼたりぼたりと赤に染まっていく白いワンピース。

ミーヤの両腕は、肘より先で千切れ飛んでいた。

「あ×あ×あ×あ×……ぐ、ううッ!!」

「ミーヤー！ ミーヤー！」

あまりに突然の出来事で、ダンも事態を把握できないまま、困惑するばかりであったが……地面の上でのたうつ娘の背後から、聞き覚えのある声が聞こえたのでハッと息をのんだ。

「ヤレヤレ……あまり借り物に文句を言うべきではないが、彼女の銃は威力の調整に難がありすぎるナ……悪かったヨ、楽にしてヤロウ。君は少しばかり眠っていたマエ」

物陰から、闇を凝縮したような影法師が立ち上がり、月明かりの下へ、その異形を晒す。

彼の手には、未だに先端からチリりとオゾンの燻る軍用光線銃が握られており、これでミーヤの腕を撃ち抜いたのだろう。

そうして影は、痛みをこらえて気丈にこちらを睨みつけている工作員へ近寄ると、何らかの液体瓶をその顔に嗅がせるではないか。

するとたちまちミーヤは大人しくなっていく、ついにはぐったりと意識を失った。

「フム、少々癪ではあるガ……流石の効力ダナ」

「お、お前は……!?!」

驚愕に目を見開くダン。

そんな彼を意に介さず、影法師はミーヤの傍にかがみこんで、何かを探しているらしい。

やがて、彼女の後ろ髪から真つ赤な縁取りのレンズデバイスをするりと摘まみあげると、不愉快げに鼻を鳴らしてから、それを酷くぞんざいに、ダンの方へと投げてよこした。

「なぜ、君がこんなところへ……」

「……うるさいナ、オマエと話す事など何もナイ。ワタシは、その男に用がアルンダ。さっさと置いて行つて貰おうカ」

「待て！ ……ソガ隊員をどうするつもりだ!？」

「それハ、オマエの知るトコロでは無いナ。……どうした、いみじくも恒点観測員の端くれなら、惑星間航行物の弾道諸元を再入力するくらいは出来るダロウ？ 一体いつまでそうしている気ナンダ？」

「し、しかし……」

投げ渡されたウルトラアイをキャッチしたダンは、それでも踏ん切りの付かない様子で、抱えたソガの顔を覗き込んだ。

いまや彼の皮膚は土気色に変わり、生気をほとんど感じさせない。今はダンが辛うじて生命力を繋ぎとめているだけで、彼が数分も離れば、確実にソガの心臓は止まるだろう。

彼の命が、ダンの腕から零れ落ちていく……

「何をグズグズしているんだー！ たかが一人の命と、一つの星を天秤にかけるつもりか！？」 キサマが所詮、この巨大な石ころを守る事しか出来ない能無しだという事くらい、とうの昔によくよく知ってイル！ ……だったら、そのたった一つの使命くらい、誰に言われるまでも無く果たしてみせろ！ ウルトラ<sup>こ</sup>半<sup>半</sup>端<sup>端</sup>者<sup>者</sup>!!」

影が怒気を含んで発した言葉に、目を剥いて、大いに傷ついた表情を見せるダン。とても寂し気に顔を伏せた彼は……

「ソガ隊員を、頼む……」

それでも、次の瞬間には決然とした眼差しで、前を向き、赤いデバイスを正眼に構えた。

「デユワツ!!」

装着されたウルトラアイがスパークし、彼の瞳から眩い閃光が涙のように迸った。

その目元を中心として、銀色の輝きが徐々に展開され、肌色の柔らかで哀し気な表情を鋼鉄の仮面が覆いつくしてゆく……

そうしてこの宇宙に顕現した深紅の救世主は、太く力強い両腕を大きく広げると、星空の世界へ飛び立っていくのであった。

## 他人の星（Ⅳ）

いつかの公園。

月明かりの下で、ブルーグレーの戦衣を纏った男と、闇を塗り固めたような影法師が、深い深い地の底まで穿たれた巨大な溝を間に挟んで、正面から対峙していた。

「何をしているんだ！ この穴は何だ!？」

「ペガッサから運んできた爆弾だ。まもなく地球の中心に届くダロウ……そして地球を粉砕するんだ……」

「何のために?」

「私たちの愛するペガッサ市ヲ、守る為だ!」

影法師は、自らがこよなく愛する故郷の為に、とある密命を帯びてやって来た宇宙人だった。

……だが、彼は事故で病床にあつたが故に、たった一つの、しかして致命的なまでに残酷な信実を、まだ知らないのだ。

そんな事をする必要は、もうどこにもないというのに……

「ペガッサは……破壊したよ……」



影法師が余りにも痛ましくて、告げる男は、顔を背けずにはいられなかった。

その表情には、両者を救えなかったという無念さが、これでもかと張り付いている。

「うそダ！ 地球人の貧弱な科学デ、あの強大な宇宙都市を……うそダッ!!」

「地球が無事なのは、ペガツサが破壊された何よりの証拠じゃないか！」

「私たちの計算デハ、地球がペガツサと衝突するまで二、まだ充分な時間がアル……」

「僕は見たんだ……ペガツサの最期を……」

男はつい先程まで、宇宙で必死に呼びかけていたのだから、こんな悪趣味な嘘を吐く必要も無かったし、口にしたくも無かった。

むしろ……嘘であつたなら、どんなに良かったか！

「なんとということをするんだ!? ペガツサは宇宙が生んだ最高の科学なんだ。私はとつくに地球を破壊する準備を終えてイタ。アンヌの部屋からだつて、この爆弾を地球の中心にぶちこむことができたんだ！ それをしなかったのは最後の最後マデ、私たちの科学の力がこの事態を何とかしよう……」

信じていたのに!!

努めて冷静に、穏やかに語っていた影法師は、そう最後まで言い切る事が出来なかった。

ふつつつと混み上がってきた憎悪と怒りが、津波のように溢れて、彼の最後の理性を

真つ黒に塗りつぶしてしまったから。

「……復讐シテヤルツ!!」

振り上げた両の拳を握りしめ、感情を激発させる影法師。

本当はもうそんな事をしなくても良いのに、彼は爆弾を止めるという選択肢を完全に捨て去った。

手の中にあつたコントロール装置を、怒りに任せて粉々に握り潰したのだ。

小さくて繊細なパーツが、指の間からハラハラと零れ落ちる。

重大な使命を背負つた英雄が、ただ一人の復讐鬼へと成り下がった瞬間だった。

今の彼には、個人的な恨みを晴らす事しか頭になく……

破滅はもう、止まらない。

しかし、それでも諦めない者がいた。

「ヤメロー!」

爆弾を追いかけようと、穴へ身を乗り出す男に向けて、腕を突き出し短い制止をかける影法師。

「……無駄ダ」

ただの地球人には、地底爆弾を止める事などとはや不可能。

僅かな時間とは言え、確かな友誼を結んだ眼前の男には、絶望のまま奈落の底へ身を

投げるのではなく……ただ破滅の道連れとなつて貰いたかつた。

影にはもう、一欠片の感傷に浸るくらいしか、やる事が無かつたからである。

……だが対する男には、爆弾を止める為に、残された最後の手段があつたのだ！

「デユワツ！」

激しい閃光が辺りへ飛び散り、男の体を炎のように包み込む。

眩い輝きの中から、真っ赤な太陽の化身が現れた時、影は心底驚いた。

地球人だと思つて友情を育んだ相手が実は、宇宙正義を自称し、あまつさえそれを体現しようとする星の出身だつたと、この時はじめて悟つたからだ。

その時彼が抱いた感情は、筆舌に尽くしがたい。

激情に促されるまま、すかさずプラズマデイスペンサを引き抜くと、最大出力でトリガーを引く。

起動した装置が瞬時に空気中の水分を取り込み、それを凝縮したプラズマ光球として解き放つ。

分厚い岩石の壁をも容易く破壊する威力のエネルギー弾がマシンガンの如く連写されるが、それを左右にステップして躲す真紅の戦士。

一刻も早く爆弾を解除するために、黒が持つ危険な武器をなんとかしようと、頭頂部にある実体剣を投げ放つ赤。

夜の闇を切り裂いて、銀の煌めきが月明かりを反射する。

甲高い硬質な音を立てて、作業員の持つプラズマ銃を、その右手から叩き落とした宇宙ブーメランだったが、勢いが付きすぎていた為か、弾みで軌道が変わり、影法師の頭頂部を掠めてしまう。

誓つて言うが、この時の赤には、相手を傷つける意思は全くなかった。ただ、地球の破壊を前にした焦りによって、念動力によるコントロールが多少甘くなっていたのかもしれない。

そうでなければ、あの必殺武器は、黒く柔らかい外套膜を切り裂くだけに留まらず、その奥に隠された堅い頭蓋殻に弾かれる事もなく、それすらをも、悉く断ち割っていたに違いないからだ。

頭部の傷を掌で庇いながら、一目散に走り去る哀れな黒。

彼の背中が、夜に溶けるかのように、遠ざかっていく。

凶らずも友人を傷つけてしまった正義の使者は、影法師を追いかけようと一步を踏み出すも、思い留まり、潜航する爆弾を求めて、深い地の底へと落ちて行った……

---

誰かが俺を呼ぶ声がする。

「……ガ……きろ……」

水底からズルズルと引き上げられていく感覚。

まるで錨を巻き上げるようにゆっくりと、覚醒していく。

ごぼりと浮き上がった気泡が弾けるが如く、ソガの瞳が見開かれた。

「……ハッ！ 俺は……？ どこだ……？」

「フム、多少の意識の混濁はアルガ、会話に支障は無さそうだな」

「誰だ!？」

芝生に寝転がされた態勢から、声のする方を向くと、そこには奇妙な生物が立っていた。

黒く、のつぺりとした鼻先から、左右に飛び出した鋭い目。

闇を集めて固めたのかと錯覚するほどに、つるりとしなやかな肉体を、白い貝殻が覆いつくし、まるでモコモコとしたセーターを着こんでいるかのようだ。

目を離れた瞬間に、周囲の暗がりに溶け込んでしまいそうなその男を……俺はよくよく知っている……

「お、お前……ダーク!? ダークじゃないか!? 今までどこに居たんだ! 心配してたんだぞ!」

「キミに心配されるほど、落ちぶれちゃ居ないガ……まあ、それなりにやってイル」

「そうか……良かった……」

ホツと息をつくソガ。そうしてひと心地ついてから、自身が意識を失う直前の事を思い出し、胸元もとをぺたぺたと押さえる。

「き、傷が無い……！　　そうか、お前が助けてくれたのか?！」

「我々ペガツサの医療水準であれば、あの程度を再生するのは造作もナイ。例え四肢が吹き飛んでも、元通りにする事だつて出来るのサ。……もつとも、現状の設備デハ、完全にはいかないガネ……数ヶ月は皮膚が引き攣れタリ、痒みが取れない筈ダ。君たちが元通りに動きたいなら、人工細胞が本来の組織と馴染むまで、リハビリを欠かさない事ダナ」

「充分すぎるくらいだよ！　命の恩人だ。ありがとう、ダーク！　……君たち?！」

ダークの言葉尻に、引つかかるものを覚えたソガは、周囲を見渡すと、夜の空き地には、自分と、目の前の友人しか居ない事に気づいた。

「そうだ、ダンとマヤ……あのマゼラン星人は?！」

「ダンにはミサイルを阻止しに行つたヨ。そして……キミを撃つた女は、ワタシが捕らえた。ダークゾーンの中で治療中だ。手荒な手段を使ったのデネ」

「そうか……じゃあ事件は落着か……」

「何を言つてイル?　まだ午前零時を過ぎたわけではナイ」

「え？ あ、そうなの……!? いやあ、じゃあ随分早い治療だったんだな……とにかく、地上からやれることは無いよ。俺は仲間を信じているからな。ケセラセラだ」

「なんと呑気ナ……」

まるで全て終わったかのように朗らかに話すソガの様子に、ダークはまるで頭が痛いとてもいう風に首を振った。

とはいえ、彼自身も地球が破壊される運命は回避されたであろう事は分かっていたので、それ以上言及しようとはしなかったが。

「……そうだ、ダーク。この後、俺の部屋に來いよ！ 積もる話がいっぱいあるんだ！ あの時は喧嘩別れみたいになってしまったけど……お互いに焦る事も無くなった今なら、チョコレートでも食べつつ、ゆっくりと……」

「トウエルド・ポ・セクテウム」

「どうえ……ぼ？ なんだって？」

「トウエルド・ポ・セクテウム……ペガツサの言葉デ、『すまない、それは、できない』ダ」

「な、なんで……？」

「なぜダト……？ これが誰の言葉カ、覚えていないノカ？」

「誰の……？」

『すまない、それは、できない』謝罪と、拒絶の言葉。

彼の顔と照らし合わせて、ソガが記憶をまさぐると、どこかで聞いたような気もする。冷たい宇宙の闇の中で、通信機の向こうから聞こえる掠れた声で……

「……まさか！」

「そう、我々の愛する故郷を破壊シタ、憎き部隊を率いた男ノ……二つの種族の命運ヲ、たつた一人でその肩に背負いこんだ偉大な男の……言葉ダ」

「キリヤマ隊長……」

ソガは確かにあの時、爆破を中止してくれというペガッサからの要請を、彼らの敬愛する上官が、喉の奥から絞り出すように断つたのを、通信機越しに聞いていた。

「なんで、お前がそれを……」

「あの時、君達の隊長ト、我らの市長のごくごく短い対談ハ、貴重なエネルギーを割いてマデ、市内全域に同時放送されていたのダ……通信を切ツタ後、市長は残りの市民へ向ケテ、脱出先を地球にするよう演説シ……その最後にこう言つたソウダ。『地球はきつと、美しい星です』……と」

「つまり……」

「全て同胞達カラ聞いたヨ……」

「そうか……」

地球に流れ着いた生き残りのペガッサ星人達と合流したのか。



「……良かった。お前が、ひとりぼっちにならなくて……それだけが、気がかりだったんだ」

「それなりにやってイルと、言ったダロウ……君たちの勧告を聞いてからハ、復旧を諦めてエネルギーを全て脱出に回したカラ、随分と多くの市民が助かったのは間違いない。……それにあの水！ ワタシの助言があつたとは言え、よくも短時間にあれだけの量をかき集めたものダ。アレを見て、君達の本気を疑う者は居なかつた。あの水が無かつたら、同胞たちの臨時コロニーの立ち上げは、より過酷デ、困難なものになつていたダロウ……皆に変わつて、ワタシから、君に礼を言わせて貰うヨ」

「いや、いいんだ……というか、それなら……」

言つてくれれば、もつと援助が出来たのに。

そう言おうとして、彼の突き出した掌が、俺の言葉を遮つた。

「とはいえ、全ての住民が脱出できたわけではナイ……市長をはじめ、多くの仲間が、若い世代をより多く送り出すタメニ、滅亡する街に残る事を選択シタ……出来るだけ家族ごと避難させようとしたらしいガ……残念ながら離れ離れになつた者も多い。キミたち地球人ハ、同胞の恩人であると同時に、やはり故郷の仇なのダ！ ……理性デハ分かつてイル。あの時、地球がした事は、緊急的かつ正当な防衛行為でアツテ……そもそもその遠因は、他星の領域を不用心に航行した我々ト、理不尽な攻撃を仕掛けてきたカナ

ン星にあるという事ハ。我々にキミ達を非難する資格はナイという事モ。……しかしワタシは、どうしてもキミの差し出した手ヲ、再び握る気にはなれそうもナイ……ワタシ自身の狭量さ故にダ……だからどうか気にしないでクレ。しかし、分かつて欲シイ……」

「……」

頭で分かっている、感情では納得できない……なるほど。

どこまで行っても、彼らと俺達の関係は、都市の破壊者と難民であるという事実は変わらない。

「キミたち地球人は、表情筋の数が豊かデ、考えている事がすぐに分かる。外から内心の変化を観測できるというのは愉快ダナ……」

「ダーク……」

「そもそも、キミ達以外の地球人ヲ、あまり信用していないという点は、以前から変わらナイ。ペガッサの難民が、助けを求めてその存在を明らかにした所デ、地球人が受け入れてくれるとはどうしても思えないんだ。人間にとって、我々は所詮、得体の知れない異邦人でしかナク……どうせ恐怖と侮蔑の対象となるダケダ。そうならないとは言わせないゾ。原住民や難民といった弱者への迫害は、キミ達の歴史が証明してイル。我々も密かに情報を集めて、慎重に検討した上でそう判断したのダ……正直言つて、こうし

て個人的に地球人と接触するのも、仲間内での取り決めに抵触しかけてイル」

まあそれは……そうだろうな。俺だって自分が同じ立場だったら、はいそうですかと仲良く出来るかどうか分からない。

「でも、じゃあそのお前が、どうして地球人の味方をしてくれたんだ？」

「……何か勘違いしているようだが、我々としてハ、侵略者に防衛軍が負けようガ、地球人が何人死のうガまったく興味はナイ。この星を我が物顔で占領している種族が、すげ変わるだけダ。なんなら、他の宇宙人の方が地球人よりも話が分かる可能性がある分、種族によつては歓迎すらするダロウ。……だが、地球を破壊するとなつたら話は別だ。この星には、大切な同胞達が大勢暮らしているんだ。地球は決して、人間だけの物では無い。キミ達地球人は、そういう意識が特に希薄だしナ……今回の事ハ、あくまで自分達の生活を守つたに過ぎナイ」

俺の質問にため息を吐きながら、ダークが言う。

つまるどころ……

「単に利害の一致か……」

「そうダ、そのついでに人命を救助しただけデ……まあ、命の恩人という点デハ、キミにも借りがあるシナ……」

「お、なんだなんだツンデレか〜？」

「ツンデレ? ツンデレとはナンダ?」

「……あー……なんとというか、気高さ故に、他者への慈愛の心を審らかに出来ない……複雑な立場の者の総称だ」

「あまりに用途が限定的過ぎやしないか? 地球は状態を示す言語が多すぎるゾ」

「桃が川を下る擬音があるくらいだからこれくらい普通……というかツンデレの使用頻度は高いぞ」

「そうなのか……今度、翻訳機に登録しておくとしヨウ」

マズイ、彼の辞書に余計な語彙を増やしてしまった……

「とはいえ、今のところは地球人が外敵に対して防衛力を行使する事ヲ、邪魔したりはしないサ。だが……今回のキミの振る舞いは……拙かったナ」

「なんだって……?」

「ハッキリ言おうか? 率直に言って……失望したよ。」

「失望しただと……?」

なんだ、何かダークの癪に障るような事をしたか?

「ワタシはこれでも……ソガ、キミの事はそれなりに買っていたつもりダ。地球人にしてハ、人間以外の者に対しても、思いやりと誠実さを持って対話する事が出来る稀有な存在ダト。キミが、ペガッサを救う為に随分ト心を砕いてくれた事ハ……ささやかな希

望ダツタ。地球人が本当にアンヌやキミのような者達ばかりなら……いつかペガッサ市民が正体を隠しながら、日陰の中で身を縮込める生活が終わるかも知れないト……だが蓋を開けてみれば、その君ですら、宇宙人と見れば即座に爆撃する冷酷な軍人ダツタ」

「……見ていたのか」

「ああ、見ていたとも。今回だけではナイ。キミが、キュラソーの捜査官を歓待するトコロも、ワイルド星の外交官から謝罪を受け入れるトコロも、怒れるアンノンの眼前に身を投げ出して必死に懇願するところも！……そして、あの哀れな生き物の墓標に、ダント二人で平和の祈りと懺悔を捧げるところもずっと見てイタ！それが……どうして、地球に足を踏み入れた宇宙人を、話も聞かずに殺してしまつたんだ……？キミは知らないだろうが、キミが戦闘機で襲つた者と、さっきの女は別人ダ」

「それは……」

なるほどな、確かに何も知らない者から見れば、オレは確かにただの不法入国者を問答無用で殺したわけだ。

マヤがマゼラン星のスパイで、地球を破壊する計画の為に来たというのは、あくまで視聴者だったオレだからこそ知りえる情報なわけで……

そりゃあ、ペガッサの人々も姿を現さないわけだよ。

不法入国がバレたら皆殺しにされると恐れているんだ。

これはちよつと……我ながら下手をうったな……

なによりも、知らない内に彼の信頼を裏切つてしまったというのが……辛い。

「単なる旅行者ではないとなぜ言い切れる？ キミ達警備隊が追っていた発光体から、逃げていたかもしれナイ。そもそも、マゼラン星のミサイル攻撃は、同胞を殺された復讐だと主張されたら、どうするつもりだったんだ？」

「……ダンプの持ち主を襲つた奴だと思つたから……仕方なかつたんだ。というか、実際にスパイだったわけだし」

「苦しいナ。第一………工作人員ならば問答無用で殺傷するというナラバ……なぜ、ワタシを殺さナイ？」

「………え？」

「彼女らと同一視されるのは甚だ不本意ダガ……地球を破壊しようとした工作人員というなら、ワタシも同罪ダ。なんなら、直接に爆弾を撃ち込んだのはワタシなのだから、彼女らよりも罪は重い筈ダ」

「それは、でも………違う、お前はまず、俺達と友達になろうとした！ 最初に平和的な解決法を提案してきたじゃないか！」

「彼女も、キミが爆弾を落としたカラ、その提案を出来なかつただけではないノカ……？」

なぜ彼女には友達になろうと声をかけてやらなかつたんだ……？」

「うっ……」

思わず言葉に詰まる俺。

それはそうだ、なにせマヤはもう死んでしまった。

事情を聴取する事も、事実確認や弁解する機会を与える暇なく、俺が殺したのだ。でも、こうするしか無かつたんだよ。

彼女を野放しにしたら……

俺が手を汚しさえすれば、V2もダンも、救えると思つたんだよ……

何も言い返せず、ただ顔を伏せる。

するとどこからか、ざり……ざり……と、何かを擦り合わせるような音が聞こえて来た。

視線を上げると、ダークが腹を抱えて肩を揺すっているではないか。

どうやら、これが翻訳機を介さない、彼ら本来の笑い声らしい。

「いやはや、悪カッタ。少しばかり意地悪が過ぎたナ。だが、キミから言ってくれるのではないかと思つていたんだ。意趣返しという訳では無いが、ワタシも嘘を吐かれて思うところが無かつたわけではないのだ」

「意趣返し……？　俺に？」

「そうだ、なぜマゼラン星の職員にはあれほど悪辣に振舞えるキミが、ワタシに掌を返

してすり寄ってきたノカ……当ててやろうか？ キミは初めから、我々の目的……というか、人と成りを知っていたんじやナイノカ？」

「……は？」

「ダークはやつとこさ、ざりざりと笑うのをやめて、俺の目を真正面から覗き込んだ。キミは、この時代の人間デハ無いナ？」



## 他人の星 (V)

「……は？ え？ いやそれは……ああ〜？ えっと……」

「ソガ、やはりキミは工作人員には向かないナ。せめてシャドー星人として生まれてくるべきダツタ。そうすれば、そんなに苦勞して動揺を隠す必要も無かつたロウ」

「うるさいね」

唐突にそんな事言われたら、誰だつて困惑するわ。

一応、オレがこの時代の人間ではないという事は当たっている。

だが、聞いてきたという事は確証がない状態だろう。

まだ挽回が……

「当たらずとも遠からずといったトコロか……これで、ワタシが本当の意味で信頼できる地球人は、アンヌだけになつてしまつた……」

「それは……それは違うんだ！ あの時にまつさらな状態で無かつたとしても、お前を助けたいと思つた事は本当なんだ！ 俺が初めてお前を知つた時の感情そのままなんだよ！」

「……ヤレヤレ、自分の秘密がバレた事よりも、こちらの方が焦るのか。事ここに至つ

て、他人を氣遣う余裕があるとはナ……やはりワタシは、キミやダンのそういうトコロが、あまり好きになれそうも無い。キミ達の強さが、心底羨ましいと思えてシマウ……キミ達が善意で施そうとしてくれているのは分かってイテモ……我々のような者二ハ……時にそれが眩し過ぎるんだ。善意の光で照らされる事が苦痛とナル場合もアル……この数カ月、如何に自分の心が浅ましいか思い知つたヨ」

「……ダーク、お前は浅ましくなんか無いよ……誰しも、自分が弱っている時に他者を氣遣う事なんかできない……俺だつて、そうさ……誰もがそうなんだ。自分が満ち足りていてこそ、初めて誰かに優しく出来る……だから、誰かに与える事ができる奴は、強いと思うんだ……」

オレが呟いた言葉に、ダークが息を呑んだような氣がした。

とはいえ、オレは顔を背けていたし、彼の表情は分かりにくいので、真偽の程は分からないが。

「……悪かつタ。こう言えバ、キミが傷つくだろうと思つたんだ。ワタシの氣持ちを少しくらい思い知らせてヤレ……とね。あの事があつてからコツチ、随分と皮肉が多くなつてしまつてナ……その、ナンダ。キミのそういう顔が見られたノデ、多少なりとも收穫はアツタヨ」

「ダーク、お前……あの時は氣付かなかつたけど、随分イイ性格してんだな」

「…………ン? 今の文脈で、なぜワタシが賞賛されるのか理解デキナイ」

「ああ、これは悪かった。今のはな、地球の言葉で『このひねくれ者め』と言ったんだ。翻訳機に登録しとけ」

「そういつた言い回しを使う方が、随分とひねくれているのではナイカ…………?」

そう、俺たちはこれくらいで丁度いい。

憎まれ口の応酬を楽しむ余裕が無くつちやな。

「…………60点、かな」

「ナニ?」

「及第点だけど、満点をやるにはちよつと足りない…………つて感じ。というか、よく自力で辿り着いたな。なぜそう思ったのか聞いても?」

「キミが不用心すぎただけダ。そもそも、なぜマヤの名を知ってイル? 最初の言葉もそうサ、キミの前にこの姿を晒したのは今日が初めての筈なのに、なぜ一目でワタシだと気付イタ? それに…………先程からワタシは意図的にダンを地球人の勘定から除外しているガ、気付いているカ? 本来であれば、そこに疑問を差し挟むべきナノダ」

「え? あ…………そ、れは…………」

思つた以上に…………脇が甘かつたようですネコレは。

だつて、知つててを知らないフリするのつて…………結構、難しいんだよ?

「それにキミはあの時、まるで幼い頃からウルトラセブンを知ってイルような口ぶりだったガ……この星に根を降ろして情報を収集してみても驚いたヨ。セブンが地球に姿を現したのは、つい最近じゃないか！ これでは辻褃が合わナイ。ワタシが最初にキミへ疑問を抱いたのはその時ダ」

「俺、そんな事言ったつけ……？」

「言ったサ。記憶力には自信ガ有るンダ。そして気付いてシマエバ、キミの言動が随分とちぐはぐな事にモ思ひ至る事が出来タ。発信機付きの救急箱ナンテ……どうして用意する必要ガアル？ 偶々アンヌの部屋に傷ついた工作員が飛び込んで来たから使う機会があつたノカ？」

「……手ぐすね引いて待っていたのさ、お前と会える日をな」

「それで、キミはペガッサと地球の間に発生した、悲しい歴史を知る男だと思つた訳ダ。……マゼラン星の所業も、全て知っていたからこそ……マヤを殺シタ。キミの知る歴史上で、あの娘は結局……死んだノカ」

「……そうさ、ダンが説得したが……自決したよ」

「成程ナ……」

流石の知能と言うべきか……オレの考えは殆ど見透かされていたという事だ。

正直、ダークと話す時まで意識してそこらへんを誤魔化そうとした覚えは無かつたか

もしれない。

地球の事をよく知らない宇宙人なら、細かい部分まで気付かないだろうと、無意識に手を抜いていたんだろうな。

完全に油断していたが故のミスである。

「……安心シロ。この答えに辿り着いたノハ……今の所ワタシだけだ。キミと直接に話した事が無ければ、この違和感には気付けない。そして、誰かに言うつもりもない」

「……そうか、ありがとう……ダーク」

気にするなという風に手をヒラヒラと振るダーク。

彼は俺を安心させる為に言ってくれたんだろうが……不思議と彼がそんな事はしないんじゃないかとは思っていた。それなら、わざわざこうして俺の目の前でペラペラ喋る必要なんて無いわけで……彼なりに警告してくれているんだろう。

隠す気があるなら、もう少し気を引き締めた方がいいぞ、と。

……これじゃダンの事言えないな。

「じゃあ、バレついでに聞きたい事があるんだが……」

「ナンダ？」

「知っていたらで構わない。生き残ったベガツサ星人の中に、『サユリ』っていう地球人名使ってる人いない……？」

「ナニッ!？」

オレの質問に対して、ダークの細い眼が、大きく開かれる。

彼は口にしなかつたが、声色は明らかに『なぜそれを知つてイル!？』とでも言いたげだつた。

良かった。知り合いらしい。

「そうか、無事なんだな……それなら、そのサユリ先生のお子さんは………無事か？」  
「……無事だ。彼女の子供だけでは無く、多くの子供が命だけは助かつた。若い者から先に脱出を優先したからナ」

「そうか、そうか………！ 生きているんだな!? サユリ先生は、自分の子を失わずに済んだんだな!？」

良かった………本当に良かった。

平成版に出て来た、穏健派ペガツサ星人のリーダーは、サユリと名乗り、地球で孤児院の園長をやつていた。

それは、ペガツサ市から脱出する際に、自分の子供を無くしてしまった悲しみからだつたが……地球人だろうとペガツサ星人だろうと、分け隔てなく愛情を注げる素晴らしい人だつた。

少なくとも今回は………そんな悲しい思いをして欲しく無かつた。

「彼女もキミの知る歴史に、名が挙がるのダナ? という事は……………待てソガ、泣いているノカ…………?」

少し考え込んだダークが、顔を上げてこちらを向くと、ひどく驚いた声で聞いてくる。彼に言われるまで気付かなかったが…………どうやらオレは泣いていたらしい。

「……………ありがとう、お前が教えてくれたお陰で……………この世界にきた甲斐ってやつが、もう一つ実感できたよ」

「知ってイルかは分からないガ……………彼女ハ……………市長の奥方ダヨ」

「なに……………! そうなのか!? じゃあ……………旦那さんは失ってしまったんだな……………」

「彼女程の人格者がいたからコソ、沢山の市民ガ、自らの子供を安心して託シタ。今デハ、親を失った全ての子供たちの母トシテ、彼らに教育を施す傍ら……………難民達の指導者トシテモ、忙しくしてイル」

「そうか……………サユリ先生は、やっぱりサユリ先生なんだな」

「お前が押し付けた救急箱モ、彼女の元で役立つてイル筈ダ。もちろん、発信機は捨てたガネ」

「そりゃあいい」

「……………教えてくれソガ。彼女ハ、キミの知ル未来において……………なにか不本意ナ死に方をしてしまふノカ?」

彼女は平成版において……過激派の作った兵器を止める為に……その身を犠牲にしてしまった。

「過激派のペガッサ星人が、ゴドラ星人と組んで地球を自分たちの物にしようとして……兵器型ダークゾーンを止める為に……立派な人だよ。彼女のような人が本当にいるなら、絶対に幸せになって欲しかった……」

「ナニ、ゴドラと……？ ……ああ、そうか」

ダークが再び、ざりざりと腹を抱え出した。

何か彼の中でよほど愉快な事が分かったらしい。

「どうした、ダーク？」

「……いやなに、喜ベソガ。キミは……偉大な男ダ。見直したヨ」

「話が見えないが……？」

「そうか、成程ナ。なぜキミがこの時代にやって来たノカ……何ヲしたいのか……少しわかったような気がするヨ。こういう事なんだナ」

「二人で勝手に納得されると……困る。キレていいか……？」

「待テ待テ。ただ……安心したマエ。キミの知る時間軸において、過激派を率いたリーダーもマタ……今では地球に復讐しようと思つていない筈ダ。ワタシが保証シヨウ。恐らくその男のコトは……よくよく知つてイル」



「何!? 本当か!? ……そうか、良かった……彼女達は……もうあんな悲しい思いをしなくていいんだな!」

「ソウダ、ペガッサ人の反乱ハ……おそらく起きない、と思ウ……いや、誓ウ。もちろん、人類が裏切つたら、保証はしないガ……」

「良かった……良かった……!」

オレはあの時、結局失敗したんだと思つていたが……少しだけ、事態を好転させる事が出来ていたらしい。

でもそれなら……マヤの事だつて……もつと上手くやれたのだろうか……

「ソガ……キミが、我々の同胞の為ニ、そうして涙を流してくれた事……彼らに代わつて、感謝と敬意を、述べさせて貰ウ。そして、その礼とシテ……いい事を教えてヤロウ」

「いい事……?」

「マヤは……生きているヨ」

## 他人の星（VI）

地球軌道上では、警備隊の駆るホーク1号と2号が、猛猪を追い立てる猟犬のように、ミサイルの周りをぐるぐる飛び回っては、弾頭とエンジン基部の一点へ向けて、何度もレーザー精密照射による反復攻撃を繰り返していた。

だが、一向に弾道弾が止まる気配は無く、その場にいる全員の心が、逃れられぬ絶望によって手折られそうになる。

その時！

彼らの背後、護るべきだった一つの青い星から、真つ赤な流星が一直線に、ダークマターの深海に光の尾を曳いて飛来した！

「セブンだー！」

巨大ミサイルの表面に取り憑いたセブンは、透視力を使い、不気味な飛翔音を奏でる鈍色の悪意を、隅々まで検めた。

すると、弾頭の右側に、ごくごく僅かなひび割れが一筋だけ発生しているのを、見て取ったのである。

ステーションV2の全質量と、警備隊が最後の瞬間まで諦めまいと、必死に加え続け

た猛攻撃を足し合わせたにも関わらず、たった一筋、それも巨大な凶体に比してほんの僅かな大きさしか、損傷を与えられなかったのだ。

そんな破孔は、何光年と離れた長大な宇宙空間を航行し、無数のデブリや小惑星帯を突き抜けた上で、惑星の地殻を穿ち抜く事を想定して、特別頑丈に造られた兵器にとつて、掠り傷以下の何物でもなく、なんら本来の威力を損なうものでは無い。

だが……星空よりも深い慈愛と、苛烈なまでの情熱を太陽の如く内包した、真紅に燃える平和の使者が、その超人的な腕力で外殻を叩き割り、内壁を突き破つて中の空間へ侵入するには、充分すぎるぐらいに致命的な傷だったのである！

ミサイルのコントロール部分では、あらゆる機器がひしめいており、それらが寸分の狂いもなく噛み合つて、ただ合理的に、地球を破壊し尽くす為の歌を刻んでいた。

セブンには、それらの機器が一体どのような目的で、何の為に動いているかまでは分からない。

彼が知る中ではアマギヤ、いつかのペダン星人ぐらいに天才的な専門家であれば……もしかしたら、これらの役割や名称を瞬時に言い当てる事ができるのかも知れない。

しかし残念ながら、彼の工学知識の限度を超えてしまっており、ミサイルを解体する等といった芸当は不可能である。

当然ながら、惑星を破壊しうる程に頑丈な質量兵器を粉碎するにも、同等のエネルギー

ギーが必要な為に、彼一人の小さな腕では、それを成す事はできない。

いくら怪力無双のセブンでも、流石に惑星を破壊する力は無いからだ。

……とは言え、今から宇宙爆撃艇を爆装したり、R3号を組み上げて飛ばす時間も無いし、なによりも、そんな兵器に頼らなくては地球が守れないと、地球人に思つて貰つては困るのだ。

彼らはようやく、単なる暴力だけの自衛とは、また別の道を模索しよう……果てしなく、しかして偉大な一步を踏み出そうとし始めたのだから。

ではどうするのか……？

彼が周囲を見渡しながら、慎重に奥へ進んでいくと……

『やはり……あつた！』

測距儀だ！

いくら太陽系とマゼラン星団が隣同士とは言え、2点間を最短距離で一直線に結べば、その間でいくつもの惑星や暗礁地帯を貫通する事になる。

さらに、いくら損傷が無くとも、V2のような質量物体と衝突すれば、軌道に誤差が発生する事は避けられない。

広大な宇宙空間に置いては、たった1。の誤差も、最終的には数光年のズレを引き起こす原因となるのは、恒星間航行を行う者にとって常識だ。

であるならば……ミサイルが回避運動をした後に、その軌道のズレを都度都度、修正していく必要がある……それにはミサイルの現在位置を含めた2点間の正確な座標と、それらをリアルタイムに反映する高度な計算機が必要な筈だと踏んだセブン。

しかししてミサイルの最奥部には、彼の想定通りに巨大な電算機が鎮座していたのである。

セブンは記憶の中から、マゼラン星域内で普遍的に用いられている言語形態を幾つかピックアップすると、目の前に羅列された記号の群れと照らし合わせながら、座標と経路に関する数式を紐解いていく。

星々の公転周期や、それによる惑星間衝突の発生確率等も算出せねばならない恒点観測員にとって、空間飛翔物の軌道計算は必須技能だ。

セブンの優れた頭脳が、スーパーコンピュータに匹敵する速度を発揮して、難解で複雑な計算式の意味や、そこへ代入するべき値を次々に解き明かしていくではないか。

そしてついに、ミサイルを制御するのに必要な解を導き出した!

あとはこのうちの一点が、マイナス方面へ振り切れるように逆算するだけだ。

測距義のダイヤルを赤い指がカリカリと回すにつれて、地球へ到達寸前だったミサイルの鼻先が、徐々に持ち上がっていく……

彼が行った事は、解き明かした数式の難解さに反比例するかのようになり、至ってシンプル

ル。

適当な諸元を再入力して、無関係の惑星に迷惑をかける訳にはいかない以上、最も確実で簡単なのは……設定されているスタートとゴールの地点を、そっくり返してしまう事だった。

実際にはもつと複雑なプロセスが必要になるが……とにかくセブンは、自身の持ち得る全ての知識を総動員して、ミサイルを逆進させる事に成功したのだった！

間一髪で地球の破壊を防いだセブンは、脱出する事もしばし忘れて、一息ついた。

そして、自身がこの場に居合わせた事への奇妙な巡り合わせに思いを馳せる。

今まで、レット族由来の強靱な膂力と、父親譲りの優れた戦闘センスだけを頼りに、数々の侵略者を打ち負かしてきたセブン。

悪辣なる者達との戦いの中で、彼は自身が、正規の戦闘訓練を受けた戦士でない事、口惜しく感じた事が幾度かあった。

自分にもつと力があれば、より多くの者を救う事が出来たのではないか？ そう思わなかったと言えば嘘になる。

だが……今回ばかりは、ここに立っていたのが、自分よりも優れた戦士……例えばそれこそ、勇士司令部長である父であっても、果たして地球を救う事が出来たであろうか……？

彼は自身の経歴と、今回の事件に関するこの数奇な縁に、深く感じ入った。

この広大な宇宙に揺蕩う、物言わぬ者達の確かな意志……運命とも言うべき星々の願いを聞いたような気がしたからだ。

『そうか……ぼくでなければ、だめだったんだな?』

ならば……この結果もまた、地球とマゼラン星が、お互いに望んで引き寄せた結果なのかもしれない。

このミサイルでマゼラン星が傷つく事もまた無いだろう。

かの星の上に住まう人々は、慄き、大いに焦るだろうが……それもまた運命だ。

地球人はかつて、自らの過ちの結果を、代償として多大な出血を強いられながらも

……ほんの僅かな助力があつたにせよ……自分達の力で後始末をつけた。

それならマゼランの人々も、自分達の悪意が跳ね返ってきた時、自分達の力でそれを御する責任がある。

そこに、第三者の助力があつたとて一向に構わない。

その者にとって、彼らが手を差し伸べるに足る存在だと言うに過ぎず……それもまた彼らの普段の行いに対する報いだからだ。

とはいえ、ミーヤの口ぶりでは、マゼラン星の周囲には今やそんな存在がいるかどうか……

これを機に、彼らはこれまでの行いを大いに反省するだろう。

……反省して欲しいし、そうすると信じたい。

でなければ、この無限に広がる宇宙において、彼らはずっと独りぼっちのままだから

……

それはあまりにも、寂しい事ではないだろうか。

「……何だつて？ マヤが……生きている？」

「ソウダ。我々の方で身柄を保護してイル。キミにとっては興味がナイだろうと思つて、言わずにおくつもりダツタガ……気が変わつタ」

「え？ どうやつて？ 俺は……確かに……」

「あのマゼラン星から工作船が飛来シテ、一体何をするつもりかと警戒してイタラ、すぐさまキミ達の不細工な空力戦闘機が飛んできたので驚イタヨ。しかモ……てつきりダンを助ける為ニ、工作船を追い払うのカト思いきや、仕返しとバカリに地上の工作員ヲ、びんぼいんとデ爆撃するのダカラ、仰天シタ。……と同時に、吹き飛んだ車の運転席からダークゾーンに引き込んでしまつタ。思わず体が動いた結果ダツタガ……あのまま



ダト、燃料爆発デ、バラバラになっていたダロウ。流星に我々も、死体の肉片カラ生命を再生する事はデキナイ」

「そうか、お前が……助けてくれていたのか……恩に着る……は、ハハ……」

それを聞いたオレは、へなへなとその場にへたり込んだ。

……なあんだ、知らない内に、ダークがオレの尻ぬぐいをしてくれていたのか。

これは……どうもご迷惑をおかけしました……

「……待てよ？ その場にいたなら、ダンがアレ盗まれるのも、見てたつて事か……？」  
「ソウダガ？ 実に面白い見世物ダツタ。こういう時は、『溜飲が下がる』というのだったカ」

「おいおい、見てたならそっちも助けてやれよ……」

「助ケル？ ワタシが奴ヲ？ なんの義理がアツテ!? 重ねて言うガ、ワタシはダンの事まで許した覚えはナイ！ 奴はキミと違って、ワタシを救おうとしてはくれなかつタ……！」

「そんな事はない！ ダンも泣きながらペガッサに避難勧告をしていたんだぞ！」

「……地球人の姿デナ。しかし、地球を救う時は、惜しげもなく正体を晒すクセに……」

そう呟いて、ダークは下へ俯いた。

無意識なのか額をさするような仕草をする。

その時オレは初めて、彼のつるりとした顔の右側で、肉が蚯蚓腫れのように醜く盛り上がっており、大きな三日月型の向こう傷が刻まれているのだという事に気付いた。

そうか、あれは……きつとセブンと戦った時にアイスラッガーで付けられた傷だ。

劇中ではカキーンなんて硬い音がしたし、よたよたと走っていった記憶があるから、致命傷ではないんじゃないかと思っていたが……いや、そうか。

もげた腕すら、元通りに繋げて見せると豪語した医療技術を持つているのに、あんな傷跡を消せない訳が無い。

あれはきつと……わざと残しているんだ。

「ダンを……憎んでいるのか？」

「憎ム……う？ 憎むなんてもんじゃない！ 奴は大嘘吐きのノ、裏切者ダ！ お優しい、

口先バカリの理想主義者！ その上、英雄気取りの酷い依怙鼻屑デ……ただの偽善者ダ

！……何が友達ダ！ 奴は……お気に入りノ地球人ニハ甘い顔をスル癖に……結局、

ペガツサを救ってはくれなかつタツ!!」

「ダーク……」

彼が腕を振り回し、暴言の数々を吐き捨てる。最後の叫びを、空き地に大きく響かせながら、傍に落ちていた石ころを思いつきり蹴り上げた。

こちらに背を向けながら、はあはあと、肩で息をするダーク。

そうしてその男は、弱々しく絞り出すような声で、旧友への本心を告げるのだ。

「……ダガ、感謝してイル」

「感謝……?」

「ソウダ。奴があの時、力尽くデモ止めてくれなかつたら……ワタシは……一時の感情に流されテ、取り返しのない過ちを犯すトコロだった。この手デ地球を……同胞達の第二の故郷ヲ、愛する者達全てヲ、吹き飛ばしてしまふトコロだったんだ!!」

彼の声は、翻訳機越しにでも分かるくらい震えていた。

それ程までに、自らの所業の恐ろしさを思い返していたのだろう。

「ダカラ……本当ハ奴にも礼を言いたいタイ。感謝しこそスレ、奴を憎むなんてソんな事……そんな恥知らずナ真似が出来ると思うカ?」

「……だつたら面と向かつて礼を言えればいいじゃないか」

「……駄目ダナ。言つた口ウ? そうするにはワタシは、狭量デ、頑固スギル……キミには分からないだろうネ、ソガ。……そして、分からなくて良い。キミ達はそれで良いンダ」

「そんな寂しい事、言うなよ……」

「違ウ、そうじゃナイ。キミ達には、相手の気持ちを想像出来ル聡明さがアル。ダガ、あくまで当事者ではナイ……弱者ガ、強者の孤独ヲ理解出来ナイように、持つ者ガ、持た

ざる者の気持ちを知る事もまた難シイ。いかなる者モ、自分とは異なる他者に対シテ、それを取り巻く状況や、心情を慮る事は非常に困難なのダ。……かつてワタシが、地球ヲ、自力で散歩も出来ないただの石ころダト、思い至れなかつタようにネ……」

「想像するだけでは限界があると云う事か？」

「……時と場合にヨル。キミ達地球人の最大の武器もマタ……他者を思い遣る想像力ト……愛ダ。ワタシは、キミ達からそれを学んだ。ダカラ……今度はワタシが、彼女達にそれを教える番ダト思う」

「彼女達つて……もしかして……マヤと、さっきのアイツの事か!？」

「時には光で照らすダケでは救われない者もイル。特に我々のヨウナ影に生きる者ニハ……傷を舐め合う時間もマタ、必要なのダ」

……ダンや俺が説得しても、上から目線ではないが、同じく異郷の地でひっそりと隠れ住むしかない彼らの言葉なら、まだ聞く余地があるかもしれないと云う事だろうか？

「しかし……」

「案ずるナ。報いは受けさせル。我々にとつてモ、住み家を破壊しようとした事は許せナイ。……ダガ、キミ達に預けてモ、どうせキュラソーの流刑地に引き渡すしか手段がナイだろう？ あそこの覆面刑ハ、普通のヒューマノイドには耐えられマイ……末端の

実行犯ダケを、一人二人、死地に追いやつたところデ、なにも変わらナイ。真に糾弾されるベキはマゼラン星の方針と手段デあつて……彼女らは、その生き証人と言う訳サ……」

「なる程な……それは道理だか……出来るのか？ そんな事？」

「今は無理デモ、あと少し生活ノ基盤が整えば……可能性はアル。我々ニハ我々ノ、独自のツテと流儀があるノダ……文句がアルなら、サツサと宇宙に出て来テ、治外法権の撤廃を訴えてみるんだナ」

ダークがざりざり笑いながら挑発してくるが、これはもうしようが無い。

どこの銀河連盟に加盟すればいいのかすら、地球はまだ分からないのだ。

「……あつそ。まあそんなら好きにしてくれ。俺が目を醒ましたら、マゼラン星人は死んでいました。これでいいか？ どうせアイツらがどうなるうと、知ったこっちゃない」

「なる程、こういう時に使うノカ。ソガ、キミもまた随分ト、『つんでれ』なのだナ」

「……やめろよ、男のツンデレなんて、気色悪い……誰得だよ」

「ナニ!? 男性に相応しく無いと言う事は『つんでれ』は女性格の形容詞なのか!? ……」

イヤ、という事は待ちタマエ……まさかソガ。ワタシの事を雌性個体だと思っているノカ？ 確かにキミ達地球人からスレバ、我々ペガッサ人の雌雄差は判別し辛いだろう

ガ、これでもワタシはれつきとシタ、成熟済みの雄性個体デ……」

「あーもういいもういい！ 悪かった、悪かったよ！ 俺が悪うございました！ お前が男なのは知ってます！ ツンデレはごく稀に男に使う場合もございます！ さつきのは俺の個人的な主義主張であつて、文法には一切関係ありません！ そして俺はツンデレです！ これでいいか!?!」

「ウム、実に簡潔で良いと思うゾ。……ただ、どうやら我々のこみゆにけーしよん二ハ、まだまだ大きな隔たりがアルらしいな。それが確認できたダケでも収獲ダ」

「クソしようもない言葉を題材にして、言語の壁の高さを再認識しないでくれ。気が抜ける」

なんか唐突に話が脱線したけど……なんの話だっけ？

「ついでに、アノじゅーくぼつくす、モ手間賃として貰つて行くゾ。上手く言い含めておいてクレ」

「え、ちよ……なんでえ？」

「当たり前ダ。惑星破壊兵器の誘導技術に関する物品ヲ、素直に手渡せる程、キミ達地球人は信用されてイナイ。言わばキミ達は、前科一犯ノ状態にあるノダ」

「……それを言われると、なんとも……というか、前科一犯なんて言葉、どこで覚えてきた？」

「知人が、『北川人情放浪記』とイウ小説を貸してくれてナ。地球人の風土と言語ヲ学ぶのに、役立ててイル。ソガは、知ってイルか？」

「いや、読んだ事ない……」

勉強熱心な事で……でも、なんかペガッサ人の言語が偏りそうなんだけど大丈夫かなあ……

「心配するナ。我々もその長距離通信機を悪用したりハしないと誓ウ。ただ……仲間の中に、いつか故郷へ還してやりたい女がイルンダ。彼女自身ガそれを望むかどうかハ別として……せめて母星に残された家族ト、一度くらい連絡ヲとれてもイイと思うノサ。両者共に、マダ生きてイルンだから……」

「故郷……? もしかして、お前の仲間って……ペガッサ星人だけじゃないの?」

ペガッサシティは無くなつてしまつたから、彼の言う人物は少なくとも彼の同胞ではないはずだ。

「イヤなに、この辺境の星<sup>ズ</sup>、寄る辺なく生きる異邦の民の……互助組織のようなものサ。様々な理由で地球へ流れ着キ、故郷へ還る術をも失イ、人間ノ中に混じつて隠れ住む事ヲ余儀なくされている宇宙人というのハ、キミ達が思っている以上に多いとイウだけダ。もはや故郷や仲間と切り離されてしまつた者達ハ、こうして互いに身を寄せ合つて生きていくしか無いのダ。案ずるな、我々の中で未だに地球を侵略しようと言うよう

な奴ハ……いや、怪しい奴はいるガ……彼も賢明な男ダカラ、手に入れた細やかな地位と権力を手放すような真似はシナイだろう。むしろ、ここでの生活ヲ氣に入つてイル節があるシナ……」

「そ、そうなんだ……あの……さらつと重大情報を暴露しないでくれる？ 言つたか忘れたけど、知つてる事を知らないフリするの、苦手なんだけど……？」

「ダガ、嘘を吐くのは上手かつた筈ダ。上手くヤレ」

「嘘じゃないつてば！ オマエには腹割つて話したじゃん！」

「イヤ、キミはダンに勝るとも劣らない嘘吐キダ。よくもペガツサ全市民の前で、人の事を勝手に殺してくれたナ？ おかげで合流当初ハ死人扱いだつたんだゾ！」

「……え？ なにそれ？」

「メツセンジャーは不慮の事故デ死んだ。彼の遺言デ助けに来タと言つたそうじゃないカ！」

「……あ、そりゃー……お前が生きていたら、地球は爆破されるから大丈夫と思つて、誰も脱出しないかと思つたんだよ……」

多少憤慨していたダークだったが、オレが素直に白状すると、きよとんとした様子で、しばらくフリーズしていた。

「……なるほど、意外と計算高いのだナ。それなのにどうしてあんなに詰めが甘いノカ



……歴史を知ってイルあどぼんてーじというのは、予想以上に大きいようダ……？」

「というか、嘘吐きなら、ダークも人の事言えないぞ！　なーにが水を持っていけ、そっちに移ってくるかもしれないぞ、だ！　ペガッサに宇宙船用のハッチが無い事知ってただろ！　お前あれ……輸送機を俺達の脱出艇にするつもりだったんだろ。俺達用に集めさせたんだろ？　人が一生懸命、みんなを救う手立てを考えてたのに、お前はあの時既に、地球もろとも爆散する腹を括ってたわけだ。……違うか」

「グウ……まさか、ワタシの助言を無視シテ、アンヌを置いていったのハ……」

「俺の方が一枚上手だったという事さ。三人纏めて宇宙に行ってたら、地球は次の瞬間木っ端微塵だ。ざまあみろ」

「やられタ……」

掌で顔を覆い、空を仰ぐダーク。

とはいえ、彼が俺達の事を思って用意しろといった水が、巡り巡って本当に彼の同胞を助けたのだから……ダークは誇っていいと思う。

言葉とは裏腹に、愉快なざりざり音を発しながら夜空を見上げていた彼は、やがてある事に気付く。

「……オヤ、見ろ……ミサイルが離れて行く……」

「あ、ほんとだ……ダンがやったんだな」

「それぐらいヤツテ貰わなければ、困ル」

そうしてしばし、二人で星空を眺めていたが、唐突にダークが踵を返して歩き出した。

「……そろそろ、時間ダ。まだ奴ト顔を合わせて平靜でいられる自信がナイのでネ」

「そうか……また会えるか？」

「イヤ、あまり接触しすぎて、地球人に気取られたくはナイ。キミは嘔吐きの癖に隠し事が下手ダカラナ……もう会う事も無いだろう……」

「……残念だ。お前ともつと話したかった……」

「……」

ダークが立ち止まり、彼の白い背中が月明かりに反射してキラキラと輝いているように見える。

でも、それももう見納めなのだろう、

彼らは本来、とても臆病なのだ。

「……ソガ、これだけは言っておく。キミがあの日と、そして今夜……我々の同胞の行く末を憂い、その安息を願つテ落涙した事ヲ、ワタシは決して忘れないダロウ……だから、キミもどうか忘れないでクレ。我々は……ずっと見てイル。キミ達地球人の一挙手一投足を、夜の闇に紛れた影の側の住人ハ、暗がりから怯えた瞳デ、昼の世界をじつと見張っているんだ。キミ達がこれからいっただいどうするのかヲ……。地球はもはや、人間

ダケノ星ではナイのだという事ヲ……心に刻んでおいて欲シイ」

彼がこちらを向き直り、一步、また一步と、後ろ向きに遠ざかる。

「仲間が言っていたヨ。我々はミナ、泡沫の夢を追い求めるあまり、宇宙の闇のなかで、藻掻き、苦しみナガラ、彷徨い続ける愚か者達ダト……だがナ、ソガ……キミやアンヌ、そして……アイツがくれた温もりは……小さな恒星のように瞬いて、今でもワタシの心の中を、照らし続けてイル。キミが、我々のような日影に生きる者にとつても、信頼に足る小さな希望の道標として、輝き続けてくれてイル限り……その光を頼りトシテ、ワタシを包み込もうと忍び寄つてクル、仄暗く甘美な闇の帳に……抗い続けるダロウ。だからどうか、ワタシに夢を見させ続けて欲シイ……いつか……」

「ダーク……待て!!」

オレは、彼に最後の言葉をかけようとして……うまく言葉が出てこない。

彼の輪郭は、もう背後の闇に溶け込んで朧気にしか見えない。

また会おう? ありがとう? ごめん?

でも、こういうときは……やはり……

「……さよならだ、親友。……達者で暮らせよ」

「サヨウナラ、ソガ。……元氣デ」

滲んだ視界で見上げる空には、真つ赤な明けの明星が輝いていた。

まーちとうじえんどおぶびーぐみるきいーうえい

白い眼帯で左目を隠した少女が、手に持った匙を口元へ運んでいく。

だが、それは自分の口ではない……ベッドの上で身を起こした、もう一人の少女の顔へと近づけていくのだ。

なんと驚いた事に、向かい合う二人の少女の顔は瓜二つであり、その表情がまるきり正反対な事を除けば、彼女らが何らかの血縁関係にある事は明らかだった。

とはいえ、差し出された方の少女は口を堅くむすんで、頑としてそれを受け取ろうとしない。

もはや唇に付着する寸前にまで接近した匙から、ほかほかとした熱気と、柔らかな芳香が漂ってくるが、その到達地点は未だに、岩戸のように閉じられたままだ。

『ミーヤ、口を開けて。でなければ、食べられないわ』

『イヤよ。今日ほど私達の意思伝達方法が、発声式なんて原始的な手段に頼らなかつた事を感謝したことは無いわ。絶対に開けるもんですか。……いったい何なの、そのどろどろした白色ペーストは？ それを口に入れるなんて正気じゃないわ。穢らわしい』  
『これはカユよ。この星の穀物を、大量の水分と加熱してアルファ化した物。大丈夫、私

達が施設で配給されていた維持ペレットよりも、ずっと多く満足感が得られるわ』

『そういう事じゃない！ どうして私がこんな狂った星の食べ物をお口にしないでいいの!? 絶対に御免よ!』

『私も、このカユを啜って生き延びた。ミーヤにも、生きて欲しいの』

『……』

ぐつと息を詰めたように黙り込んでしまったミーヤは、俯いたまま、本当に渋々とした様子で僅かに唇を開いた。

そこへすかさずマヤがスプーンを差し込んだので、前歯に縁が当たって甲高い音を立てる。

『あつつい!! ちょっとアンタはどうしてそう何でもかんでも不器用なの!! このとんまー! 貸しなさい! そもそもどうして、アンタに食べさせて貰わなくちゃいけないのよ! 食事くらい誰の手も借りずに、自分で摂取するわ!』

突然放り込まれた粥の熱さに、悶絶しながら憤慨したミーヤが、マヤの手から匙を奪い取ろうとするが……

『う、くつ……この!』

『駄目。ミーヤの腕はまだ再生したばかりなんだもの』

ぶるぶると力無く震える指から、スプーンを取り落とし、それを尚も拾い上げようと

躍起になるミーヤの手を、マヤの細く白い指がそつとやさしく包み込んだ。

『だったらもう少し上手く食べさせなさいよ……』

『ごめんね、ミーヤ』

『……マヤの馬鹿……』

マヤの下がった眉尻を、姉の指がゆっくり拙く動いてその側面を慈しむように撫でつけた。

二人の間に神妙な空気が流れるもの……

やがてミーヤの眉間に段々と苛立ちの溝が刻まれていき……

『……それもこれも……全部お前のせいよ！ 私にこんな辱めを受けさせて……どういうつもり!? 腕が自由に動くようになったら、覚えてなさい！ ちゃんと聞こえていて!? そのペガッサ星人!』

『……ダーク、言われているわよ?』

「何の事ダ? 残念ながら、ワタシは原始的な発声式のこみゆにけーしよんしか取れないものデネ」

「しつかり聞こえてるじゃないの……」

『こつちを向きなさいよ! この陰険! 根暗! 日蔭者!』

「同意はするけど、言い過ぎよミーヤ。貴方の腕を吹き飛ばした武器は、アタシが貸した

のだから、その責は彼だけのものではない筈よ」

『……わかっているわ……そんなこと』

キツと振り返ったミーヤから、怒気に塗れたテレパシーが飛んでくるのを、手元の小説に目を落としたまま、ページを捲る指も止めず、涼しい顔で受け流す影法師。

その向かいに座った金髪碧眼の美女が、その荒れようを見かねて少女の暴言を窘める。

歯を？いて威嚇する勢いだったミーヤも、途端にしおらしくなってその氣勢をそいでいく。

「随分懐かれたものだな」

「アナタが嫌われ過ぎなのよ。そもそも仲を改善しようという姿勢が見うけられないのが問題ね。そんな調子だから、彼とも和解できないんじゃない？」

「……ヤレヤレ、彼女らのテレパスは静かデ良いと思っていたガ、キミの姦しさが移ってきたのではナイカ？ これでは、ガムを噛み出すのも時間の問題だな」

「……前言撤回、早く腕を治してやつつけちやいなさい、こんな奴」

『言われるまでもないわ』

『……三人とも喧嘩はよして』

ふーふーと、粥に息を吹きかけて熱を冷ましていたマヤが、努めて平淡で冷静な思念

を飛ばし、ヒートアップした二人を宥めるのを見て、ざりざりと愉快げに頷くペガッサ星人。

「素晴らしい。二人とも、少しハ彼女の成熟具合を見習いタマエ」

『……ダークさん、私とミーヤの命を助けて下さった事には心から感謝しています。……でも、姉の腕を躊躇いなく原子崩壊させた事に、私も思うところが無い訳ではありませんし……その、もう少し笑い声を抑えて頂けませんか。頭に響いて不愉快です』

「……」

マヤからの思わぬ逆襲をくらい、絶句するダークの背後から、堪えかねたような高笑い漏れてきた。

さつきから作業をしつつ聞き耳を立てていた、この部屋の家主が、ついに吹き出すのを我慢出来なかったのである。

「あつはつはつはつは！……いや、失敬失敬。しかしこれは一本取られたな、ダーク」  
「ウルサイナ……というか、キミ達。この間から言おうと思っていたのだが、ワタシの事をダーク、ダークと馴れ馴れしく呼び始めたのはナゼだ。それは地球人ガ、彼らの慣習に従つて、便宜上、それも勝手に名付けた番号ダ。ドロシーと龍リオンの二人は知つての通り、ワタシには歴とした市民管理番号方……」

「いいじゃないのダーク。アタシ達は、もうかつての自分とは違うのよ。そんな事を



言ったら、アタシだって故郷に残してきた名前と階級と役職がある。……でもね、今のアタシはドロシー。地球に住むただのドロシーなのよ。……地球にいる間、アナタはダーク。……それに元の番号は、アナタのお仲間が、キチンと覚えていてくれるわ」

「そうとも。故郷を失った今のキミは、ペガツサ星人でもなければ……かと言って地球人でもない。どちらでもあり、そのどちらでもないのだ。我々は言わば、昼と夜の狭間で揺蕩う愛しき半端者達だよ。何者でもないキミにとって、繼るべき心のよすが。それが、その名なのではないかね？」

「……ハア。今日のところハ……ロン龍、キミの詭弁にはぐらかされておくとスル。そんな事ヨリ……」

『そんな事……?』

新参者のマヤが、ダーク達の会話に首を傾げる。

今のはかなり、自己のアイデンティティにとって重要な話をしてきた筈だが……そんな事で流してしまつて良いのだろうか？

マヤは、彼ら三人……時に四人が、ほぼ毎日このような禅問答をしている事を、まだ知らない。

「さつきカラ、我らが敬愛すべき家主様ハ、何をゴソゴソしているんだ？　なんだその植  
物ハ？」

「これか？　これはな……笹だよ」

「ササ……？」

龍が先ほどから紐で括ったり試行錯誤していた植物を部屋の隅に立てかける。

細長い葉が互いにぶつかって、しやらしやらと囁いた。

「……そういえばキミは白黒で草食だったな。なんだ？　美味しそうに見えたかね？

残念ながら食べ物ではないんだ」

「馬鹿にしてるノカ？　いくらひもじくとも、そんな見るから二栄養価が低くそうデ、織

維質バカリの植物ヲ食べようとスルものカ！」

「ユーモアが分からん奴だね……」

「……ワタシが地球に来てカラ、随分ト皮肉屋にナツテしまったノハ、明らかにオマエのせいダと思ウ」

肩を竦めて首を振る龍に、ダークが苦言を呈する。

しかし、傍から見ていると違ったようで……

『元からじゃないのかしら』

「似た者同士なのよ」

「一緒にしないで貰おうか！」

『姿がそんなに違ってても、氣質が近いというのは、羨ましいですね』

ンン！ と喉を鳴らしたダークが、形勢不利と見て先を促す。

後を引き取り、勿体ぶって大仰にお辞儀をした完熟果実が、白くてぎざぎざした花卉の両手を振るって、朗々と解説を始めた。

「今日は、地球人の言う、タナバタの日なのだよ」

「タナバタ……？」

「そうだ。このタンザクという紙に、自身の願望を書き連ねて飾るのさ」

「……ナンデ？」

「さあ？ 強欲な地球人の事だ。星に願うと、望みが叶うと信じたのではないか？

まあ、いつも人任せな彼ららしい事ではないか」

「……なる程、カミね！」

他の面々が首を捻る中、ドロシーだけが、得心いったように目を輝かせた。

「……？ 説明したと思うが、この紙に願いを……」

「違うわ、God！ 超越存在として彼らが信仰するメシア、つまりカミサマという上位者が、宇宙に存在するとする土着の風習の一つなのね！ なる程、紙と神……そういう事なの……この前、アナタが言っていた、見立てという奴よ！ これが彼女の言っていた、復活祭……!!? という事はこの儀式自体が、何かしら呪術的な意味合いを……」

「多分違うと思うが……」

珍しくテンションの上がってしまったドロシーにタジタジとなった龍が、面倒くさそうに短冊を配っていく。

「そのカミとやらの母星はどこなんだ？」

「……天の川だそうだ」

「アマノガワ……？」

『あ、知ってるわ。地球人共は局所銀河群の事を一つの塊だと考えてるらしいわ。馬鹿よね』

『それぞれ数万光年離れているのに？』

『プラネタリウムとかいう学習施設で説明しているのを聞いたわ。あまりにも天文学的見地が低俗で失笑モノだったわよ。おまけに自分達の星を「なんて綺麗な星」なんて絶賛するもんだから、呆れて出て来てしまったくらい』

「……地球は、美しい星でしょ？ 何言ってるの」

「夕焼けだけは、目を見張るものがあるな」

「……らしいゾ」

『……悪かったわよ』

ドロシーと龍が心からそう言っているのが、テレパシー越しに伝わってきたので、バツの悪そうなミーヤ。

そんな姉を気付かかってか、マヤが代筆をかって出ると、何を書くのかしきりに聞いて、気を逸らせた。

「シカシ、一番近い銀河系でも数光年先なの二、願いがもし届いたとシテモ、返事が返ってくる頃にハ、当人は死んでイルのではナイか？」

「ダーク。アナタは本当に……駄目ね」

「長距離通信機もナイのに、不可能ダロウ？ ペガッサやペダンの通信機ならいざ知らズ……ソウダ、結局アレは使えそうカ？」

「……ああ、アナタのお節介なお土産のコト？ マヤ達の肉体を維持する機能は復旧できたから、彼女らがブローチコアだけ残して崩壊する事はないわよ」

「そうではナイ。通信機の方ダ。母星と連絡ハつきそうカ？」

「お世話様。連絡したいなんて言った覚えはないわ。帰りたいとも」

「……ダガ、キミはマダ、望めば家族と逢える可能性がアル。……それハ、幸運な事ダ」  
「御免なさい。アナタ達の前で随分と贅沢な事を言っている自覚はあるの。でも……戻ったところで、アタシは脱走兵みたいなものよ？ よしんば潜伏して再起を伺っていたと主張が通ったとしても……今更、原隊復帰したいとは思わないの」

ドロシーが青い瞳を伏せて、短冊に何かをさらさらと書き綴る。

残念ながら、ダークに彼女の母星語を読む事は出来なかつたが……少なくとも帰郷の

類ではなさそうだ。

「なる程、ペダンの軍国主義ハそれほど力……」

「聞く限り、ペガッサ市民からすれば、理解できないと思うわ。まさか軍がないなんて」  
「そうだな。我々ニハ、階級社会はよくワカラン。管理された役割分担ハ……キミからすればひどく並列的に映る事ダロウ」

「少し羨ましいいけれどね……アナタの銃が、工具だと聞かされた時は……笑っちゃったわ。地球人は、アナタの落とし物を、高性能のピストルと勘違いしているのよ？ 勿論、ペダンにおいても、そうとられる筈。面白いでしょう、ダーク」

「都市内で自己完結していたカラ、侵略の必要がなかったダケサ」

「そんな都市に生まれたアナタが、地球を爆破しようとしただなんて……ねえ、元の役割は何だったの？ 爆破技師？」

「なんといいコトはナイ。市長の補佐ダ。地球的に言うなら……秘書が最も近いカ？」  
「……えっ!？」

本当に何でもないといいた様子で紡がれた言葉に、ドロシーの碧眼が見開かれる。

「随分と……大物だったのね、アナタ」

「言った口ウ、階級差はナイと。キミが思うほど権力がある訳デハないヨ。市長にもナ。ただ、市民からの信頼ト、都市決定への責任ガあるダケダ」

「やっぱり変よ、アナタの街……でも、星のナンバー2と、末端の一兵卒が、お貴族様のうらぶれたボロ屋で蜥蜴の尻尾を匿ってるつても、面白いわね」

「……そこ、聞こえているぞ。私の城に文句があるなら、ララのように山で暮らして貰って構わないんだよ？ 彼女の獲る猪は新鮮だから、弟子が増えるなら私は歓迎する」

「お貴族様がお怒りだわ」

「……決めたヨ」

「何を？ 願いな事？」

「家主様が空調設備ヲ新調しますヨウニ」

「……願いが叶った時は、数光年レベルの型落ち品よ？」

「星に願うより、電気屋に行ったホウガ、早そうダナ」

「そこ、聞こえていると言ったはずだ……！」

—————

「見てご覧、サエコさん。あれがデネブ、アルタイル、ベガさ」

俺が指指す夏の大三角。

「……違います。それはデネブではなくてアンタレスですよ、ソガ隊員」

「……らしいよ」

「……もう。しつかりしてよソガクン！ うふふ」

ダンが凄く言い辛そうに訂正してくる。

くそう、本職には叶わねえ……けど、空気読んで黙つとくくらいしてくれよ。

赤つ恥だよ！

「流石ねえ……そうだわ、ダン。七夕は何をお願いしたの？」

「……彦星と織り姫の心が、この先ずっと、離れ離れにならないように……あの天の川の距離が、今よりずっと縮まれば良いのに……」

「詩人ねえ……ソガクンは？」

「世界平和」

「ソガクンって……時々、本当につまらない事いうわねえ……あつちの彦星に乗り換えようかしら？」

「やめときなサエコさん。織り姫がすげえ形相で睨んでる。縫い殺されるぞ」

「ちよつと！ 聞こえてるわよ！」

四人で夜空を見上げる。

天穹を覆い尽くす天の川がキラキラと輝いて、圧倒されそうだ。

この時代は、こんなに星が見えるのか。



「今日は晴れて良かったわ」

「ああ、ダンに晴れるかどうか聞いて予定を立てたからな」

「せっかく逢える日に雨だと可哀想ですから……」

「引き裂いというて、年一しか逢える日がなくて、雨だとお流れとか、酷い話だ」

「でも……どれだけ離れ離れになっても……心で繋がっている。素晴らしい話じゃありませんか」

「カササギももつと頑張れよな……」

「カササギ？」

不思議そうなダンに、七夕の逸話を説明してやる。

「つまり、天の川に架け橋をかけてくれる鳥はカササギなんだ」

「へえ、どんな鳥なんです？」

「ああ、それはな……」

真つ黒な頭に、白い胸。

あの偏屈なカササギは、今日も同じ星空を見上げているのだろうか……

## 大義ある戦い（Ⅰ）

箱根山中に、原因不明の濃霧が発生。徐行運転中の自動車30台が消滅するという事件が起こった。そして、ウルトラ警備隊に原因の調査が命ぜられた……

隊長からの招集に応え、作戦室に集まる隊員たち。

しかし、その中にダンの姿がない。

彼は遅刻などするような男ではなかったはずだが……

「……ダンは何？」

「私の友だちの弟さんが入院している病院に行っています」

「アンヌの友人の弟が、心臓欠損症で手術をしなければなりません。ところが……手術は怖いといって承知しないんだそうです」

「オサム君というんですけ……。オサム君、ウルトラ警備隊のダンさんに会えれば、手術を受けてもいいって言うもんですから……」

キリヤマ隊長の問いに、アンヌとフルハシがバツの悪そうな表情で答える。

なるほど……車が消えたというからには、薄々分かつてはいたものの……二人の説明

を聞いて確信した。

やっぱり今日はあの話か。

特に待機命令が出ていたわけでもないのに、フリーの時間にどこへ行つていようが別に問題はないんだが……こんな時になにやってんだアイツ。

「呼び出しましょうか……？」

「いや、事件の原因調査だ……。我々だけで、出かけよう」

寛大な隊長で良かったな、ダン。

そのころ、ダン隊員はひとり、ある病院を訪れていた。

第三セントラル病院。

アンヌの友人であるスギサキ・ユキコに連れられ、彼の弟がいるという病室へ。

「オサムちゃん、ウルトラ警備隊のダンさん。約束どおり来てくださったのよ」

ベッドの上では布団が大きく盛り上がっている。

ダンがシーツをめくると、一人の少年が怯えた様子で蹲っていた。

顔を上げ、ダンを認めると途端に喜色を滲ませるオサム少年。

「ダンさん……！」

「なんだ、とつても元氣じゃないか」

「来てくれたんだね……僕のために……」

「そうだよ！」

「だけど……ぼく……」

オサムが目を伏せると、その視線の先には数カ月前の新聞が広げられている。

何度も読んだのであろう。くしゃくしゃに依れた一面には大きく『心臓移植の患者死ぬ』の文字。

それはオサムを担当するはずであるユグレ博士の執刀ではなかったが、同じ方法には違いない。

見れば、病室にはいくつもの新聞記事が重ねられており、そのどれもが、凶報を伝えるものばかり。

いかに地球の医学が、宇宙由来の素材や知識によって、ここ数年で飛躍的な発展を遂げたと言えど、全てが民間に降りてきているわけではなく、中でも臓器移植は未だに成功率の高い手術とは言えなかった。

これでは少年が不安に駆られるのも当然の事だ。

ダンは彼の心中を即座に見て取ったが、そんな事はおくびにも出さずに、さも簡単な事であるかのように装った。

「意気地がないぞオサム君。手術なんて、寝っっているあいだにすぐ済んでしまうさ！」

ねえ!？」

「そうよ。スイスのユグレ博士は、心臓手術じゃ世界一なのよ。心配する方がおかしいわ……」

しかしそんな大人たちの慰めの裏に、子供特有の鋭さでもって微かな詐称を見て取ったのか、病室を飛び出していくオサム少年。

その後を追いかける、ダンとユキコ。

だが心臓に疾患を抱える彼の体が、激しい運動にとうてい耐えられるはずも無く、冷静にゆつくりと歩くダンですら、彼の背中を見失う事は無かった。

当然、少し小走りになれば追いつけたのだが、ここは彼のしたいようにさせてやろうと思つたのだ。

姉のユキコは気が気でない様子だったが、彼女は彼女で過保護に過ぎるようだ。家族であればそれも当然であろうが、彼女の焦りが、さらにオサム君の不安感を刺激しているのかもしれない……

そうこうしているうちに、すぐに彼の歩みはどんどん遅くなつていき……距離も速度も満足に得られない逃走劇は、オサム少年が中庭の池のほとりで立ち止まる事でついに終わりを告げた。

「すみません……せつかく来ていただいたのに……」

「いやあ。それより……どうしても明日、手術をしなければならないのですか?」

「ええ……わざわざスイスからユグレ博士が来て下さるんです。でも、博士はとてもお忙しくて、それもシンガポールへ心臓手術に行かれる途中なんです」

「じゃあ、博士はまだ日本へは……」

「ええ、明日の朝、日本へ来て、手術が済み次第、お発ちになるんです」

「……わかりました」

蹲るオサム肩に、ダンがその大きな手を置いて、優しくそつと立たせてやる。

そうして、彼の体を自分の真正面に持つて来たダンは、少年に語りはじめた。

「オサム君、ウルトラ警備隊のことは知っているかい? ……我々は、地球を脅かす宇宙人と戦っている……。オサム君、ウルトラ警備隊が、どうしてもあんな素晴らしい戦いができるか、わかるかい? ……それはね、我々の全てが、人間の作った科学の力を信じているからだよ。小さなネジひとつ、メーターひとつにも人間の作った最高の科学が活かされている。そう信じているからこそ、ウルトラ警備隊はあんなに勇敢に戦えるんだ! わかるね……?」

花壇で飾られた美しい池のほとりを、ゆつくりと歩きながら、少年を諭すダン。

彼の話には、オサムが頷きを返すのを見て取り、もう一度彼の肩をしつかりと抱きすくめながら、その掌から伝わる熱で、少年の心を解きほぐそうとするかのように語り掛け

る。

「信じるんだ、オサム君も。……前に、ぼくの大切な仲間がこんな事を言っていたよ……  
『人間の科学は、人間を幸せにするためにあるんだ』と！ いいね……？ わかってく  
るね!？」

「うん！ ……明日、僕の手術に立ち会ってくれる?」

「わかった、約束しよう！ 明日、オサム君の手術の前に、僕はここへ来る!」

「本当に来てくれるんだね!？」

「うん!」

彼らは、互いの手を堅く握りしめ、笑顔で約束を交わし合った。

作戦室にて。

ダンに対し、箱根山の事件現場を検証し帰還したメンバーが写真を見せつつ、そのあ  
らましを説明していた。

「ハイウェイが大きく削れている……なんだい、このひしやげた紙屑のようなものは?

まさかガードレールだとも言うんじゃないだろうね?」

「そのまさかよ。それに見て、こっちの大穴! まるで、大男の足跡みたい……」

「明らかに、なんらかの巨大なものが動き回った跡だ」

踏み荒らされ、陥没した道路の様子から、そう断言するアマギ。

しかしその足跡は、現場の周囲からはふつつりと途切れているのだ。

「うむ……深い霧……消えた30台の車……霧の中で何か巨大なもの……」

「何者でしょう？ その巨大なものというのは？」

「わからん。何の手がかりもない……」

「霧の中で車が30台も消えた……こりゃあ、いったいどういうわけなんだ？」

「明日、現われなければいいがなあ……」

「どういう意味だよ、それは……？」

ダンの呟きを、耳ざとく拾ったソガが聞き返す。

「いや。明日、オサム君の心臓手術に立ち会ってやるって、約束したもんでね」

「明日どころか、永久に現われて欲しくない……しかし……」

「車が消えた……」

「うむ……」

隊長の願いは、恐らく叶わないだろう。

「心配だなあ……。アンヌ、念のため明日、空港へユグレ博士を迎えに行つてやつてくれ

ないか……？」

「あした……」



空港へユグレ博士を迎えに来た、アンヌとユキコ。

大きなケースを抱えた、初老の外国人紳士が降りてくる。

「ユグレ博士ですね。ウルトラ警備隊のアンヌです」

「ノンノン。ウルトラ警備隊、アリガトウ。スイスデモ、皆サンノコト、ヨク聞イテオリマス」

荷物を受け取ろうとするアンヌをやんわりと手で制す、ユグレ博士。

繊細な仕事道具を、安易に他者へ任せたくはないのだという博士の意図を悟り、同じドクターとして少しばかり恥じ入るアンヌ。

そんな彼女をすかさずフォローする紳士ぶりに、医師としてのプロ意識の高さと、優れた人格性を見て取り、アンヌは内心胸を撫でおろした。

この人ならば、オサム君を救ってくれるにちがいない。

「博士、弟をお願ひします」

「御安心ナサイ、ユキコサン……」

しかし、ユキコの心はもうしばらく晴れる事は無かった。

早速、病院へ向かおうとしたものの、ハイウェイで渋滞に捕まってしまったのだ。

「どうしたのかしら、事故でもあったのかしら……!？」

「ユキコさん、落ち着いて」

「だって博士は、どうしてもシンガポールにいらつしやらなければならぬのよ。オサムの手術の時間がなくなるわ……!」

「大丈夫よ!」

しかしその時、まるでユキコの心情を反映したかの如く、にわか霧が立ち込めると、たちまちハイウェイ一体を覆いつくしてしまった。

もうすっかり周囲が見えない状況。

山中であるならいざ知らず、こんな街中でこの時期に、それもここまで短時間に濃霧が立ち込めるなど尋常な事では無い。

すかさず本部に連絡するアンヌ。

「こちらアンヌ。空港の高速道路に突如、深い霧が発生……!」

すると、眩いフラッシュと共に重々しい轟音が響き渡る。

まるで巨大な何かがゆっくりと地面を踏みしめているかのような……!」

……CLANG! ……CLANG!

「……なに? あの足音? 近づいてくるわ……! アンヌさん! オサムは……オサムは……!」

ムは……! ああッ!」

激しい閃光で目が眩む車内。

しかし、思わず顔を伏せたアンヌの耳が、聞きなれた甲高いエンジン音を捉えた！  
ウルトラホークの救援だ！

「すげえ霧だなあ……」

「よし、霧を消そう」

「了解！」

ホークから赤い乾燥材が散布され、大気中の水蒸気を吸着していく。

そうして赤いモヤが晴れて行った先には……

「あッ!! ロボットだ!!」

金色の装甲で日光をきらりと反射させながら、巨大な蟹にも似たシルエットのロボットが、武骨なハサミを振り上げて、ハイウェイの車両を今まさに摘み上げているところであった！

「攻撃開始!!」

## 大義ある戦い（Ⅱ）

β号を分離させ、即興の編隊を作り出したウルトラホークは、猛烈なミサイル攻撃を開始した。

爆炎に包まれるロボットの体。

しかし、鋭く振り返ったキリヤマが見たものは、攻撃を物ともせず巨蟹が食事始める光景だった。

腹部にある巨大シャッターを開き、そこへ右手のハサミでがっしり掴んだ車両を、次から次へと放り込んでいくロボット。

ダンとフルハシの駆るβ号が、今度は正面から大きく開いた敵の口内を狙って攻撃を行うが、すぐさまシャッターが閉じて堅牢な装甲によりミサイルが弾き返されてしまう。どころか全くそれを意に介さず、ハサミでハイウェイの車両を掴み上げるのを止めようともしない。

そうしてβ号が背後へ旋回したのを見計らって、絶妙のタイミングで口を開けると、再び戦利品をもりもりと貪り食い始めるのだ。

「なんてずぶとい野郎だ……いー」

取りやすい位置にある車をあらかた平らげたロボットは、今度はその足で高速道路を崩しながら前進する。

料理が疎らになった眼前の皿を文字通りちやぶ台返しにしてしまうと、新たな満漢全席が彼の前に用意されるといふ寸法だ。

愛車ごと取り込まれてはたまらないと、車を乗り捨てた人々が慄き逃げ惑う。

巨大な怪物の姿を認めたドライバーの皆が皆、てんでバラバラに逃げ出したせいで、もうすつかり車列は止まってしまい、どの車すら前にも後にも進めない。

前列の人々の逃げる時間を稼ぐため、何より老齡のユグレ博士を守る為に、アンヌは運転席から降りて護身用のレーザーピストルでロボットを押し留めようと金色の頬を撃つ。

だが、それもロボットの装甲の前では全く効果なし。どころか、余計に敵の注意をこちらに引いてしまった。

歯車を組み合わせたような顔が自分の方を向くのを見たアンヌは、とっさに車内に戻ってバリアのレバーを引こうとするが……あいにくと、今乗っているのはポインターではなかった。

凄まじい振動が三人の車を襲う。ロボットの鋼鉄製アームによって、両側からがっつりと挟み込まれてしまったのだ！

車列の中からふわりと持ち上げられる緑の車。

ダンは、見覚えのある車が挟まれていたのを見て取り、目を見開く。

そして通信機からはアンヌが懸命に自分を呼ぶ声がある。

山の如き巨軀を持つロボットからすれば、まるでミニカーのようなサイズ感だが、間違いない……あの中にはアンヌ達が乗っているのだ！

「チクシヨウ……！」

「弱ったな……！」

「β号！ 攻撃を中止せよ！」

「隊長……！」

！  
敵に人質をとろうという意図があつたのかは定かでないが、これでは爆撃が出来ない

それでもなんとかロボットの捕食を妨害しようと、その眼前を低く飛び、注意を引き付けようとするウルトラホーク達。

スレスレの位置にまで最接近した彼らの目には、持ち上げられた車の窓から、アンヌが身を乗り出して助けを求める姿がハッキリと見えた。

だが、ロボットの目の前を旋回しようとしたその時！

敵の頭頂に設置された、ライトのような部品が明滅し、青白い怪光線を発してきた！

いままで車を回収するだけだったロボットからの、思わぬ反撃に不意を突かれ、翼に光線を食らってしまふβ号。

目の前で戦闘機が炎を噴き上げ墜落していく様を見て、ユキコが引き裂けんばかりの悲鳴を上げる。

けれども、敵に反撃手段があると分かって尚も、捨て身の妨害を試みるウルトラホーク。

再び額帯鏡めいたレーザートーチから光線が発射され、銀の翼を追いかけるが、そのまま突つ切る事で何とかそれを躲すキリヤマ。

ロボットの光線は狙いが遅く、旋回中の隙を狙われさえしなければ、ホークの加速性能で振り切れる。

しかし、旋回を妨害されるという事は、こちらも敵を妨害出来ないという事。

このままでは三人が敵に食われてしまう！

「デュアアアアッ!!」

その時、ビルの谷間から、真つ赤な巨人が姿を現し、鉄の化け蟹に飛びかかった！

巨大な右腕に取付いて、車を挟むクレーンをなんとかこじ開けようとするセブン。

しかし、ロボットはそんなセブンの登場にも一切焦る事無く、鬱陶しそうにハサミを振ると、真つ赤なパワーファイターを容易く跳ね飛ばしてしまう。

片腕のたった一振りで、大きく吹き飛ばされ、もんどりうって工場に倒れこむセブン。邪魔者が居なくなっただけかと思っただけか、やれやれとでも言いたげに、シャツターで出た大口を開けるロボット。

摘まんだ車を食べてしまう気なのだ。

そんな事、許してなるものか！

立ち上がったセブンが組み付き、もう一度ハサミをこじ開けようとするが、ビクともしない。

真つ赤な両腕に凄まじい剛力が宿り、筋肉が小刻みに躍動するが、クレーンは1mmも開く心配が無いではないか！

セブンの眼前には、車内で叫ぶアヌヌの姿。

「ダァー!!」

金色の鉄面皮にキックをお見舞いし、敵の腕を振り回すセブンだが……ついに力負けして、ハサミを高々と掲げられてしまう。

ただでさえ巨大な体のロボットが、その全長と同サイズ、ともすればそれ以上に長いアームを振り上げると、さしものセブンの長身でも、腕が届かないのだ。

まるで意地悪な大人に、ミニカーを取り上げられた子供のように、無様に取りすがらないセブン。



しかし、敵の意図はセブンにそんな嫌がらせをする事では無かった。

高々と振り上げたハサミを、今度は巨人の顔面目掛けてハンマーのように振り下ろすロボット!!

自分の顔と、ただの車が衝突した場合、どちらが粉々になるかなど分かり切っている。大切な存在をペしゅんこにする訳もいかず、咄嗟にしゃがみ、なんとか顔を伏せるセブン。

振り下ろし攻撃が外れると、ロボットは再び腕を持ち上げ……

今度はそのモーメントが最大になった瞬間、堅く閉じられたハサミをパツと開いた。呆気なく上空へ放り出される車両。

弾かれたようにセブンの四肢が動き、真つ赤な筋肉をしなやかなバネのように使いジャンプすると、放物線を描く車を空中でキャッチ!

と同時に、念力で車を包みこんでその衝撃を相殺する。

あまりの恐怖体験に中の人々は目を回してしまっただけのもの、彼らが無事な事を確認すると、車をロボットの居ない反対側のハイウェイにそと置くセブン。

そうして、赤い巨人が一台の車にかかりきりになっている隙に、ロボットはどうしていたかと言うと……

行儀よく片腕を頭上に持ってきて折りたたむと、両足を内部へ格納し、その下から現

れた巨大なジェットを猛烈に噴射して、上空へさっさと逃げていった。

邪魔が入ったと見て、河岸を変える事にしたのだ。

車を放り投げたのも、敵がその車両に固執しているのを見て取り、逃走の囿とするため。

堅牢な装甲と強力無比のパワーだけでなく、高い判断力まで兼ね備えているとは……今度の敵も、なんと手強いのだろう……

ひとまず敵を見送ったセブンは、追撃を上空のウルトラホークに任せ、自分はダンの姿に戻り、アンヌ達の元へ急ぐ。

運転手が気絶したために、緩やかな走行を続ける車になんとか追いつくと、サイドブレーキを引いた。

急ブレーキの衝撃で目を覚ましたアンヌは、目の前に愛しい顔を認め、安堵の笑顔を交わし合う。

「……ダン！」

「うん。博士、お願いします！」

あれほど凄まじい体験をしたばかりだというのに、ドクターユグレが力強い頷きを返すのを見て、ダンは胸を撫で下ろした。あとはオサム君が覚悟を決めるだけだ。

「アンヌ、すぐ病院へ！」

「ダンさん……」

「必ず行きます。オサム君の手術までには！」

走り去っていくダンの背中を、不安げに見送るユキコ……

無事に病院までたどり着いたアンヌ達は、オサムの病室へ向かう。

足音を聞きつけ、眠っていたオサムが笑顔で飛び起きてくるが……来客の顔を見た瞬間、さも残念そうに顔を歪めた。

「……ッ！ ……なんだあ、アンヌさんかあ……」

「ダンさんはね、いま宇宙人のロボットと戦っているの……だから……」

「じゃ、来てくれないんだね……」

「さ、ユグレ博士の時間がないのよ。手術していただきましょ……」

「……やだ」

「オサムちゃん……」

「やだやだやだ！ ダンが来なけりや、僕はイヤだ！」

布団を被ってしまうオサムの姿に、ユキコとアンヌは顔を見合わせた。

あの後、逃げる敵を追撃したウルトラホークだったが、ロボットは上空で巨大な飛行基地に連結すると、雲の中へと消えてしまったのだった……

無念そうに帰還した隊長達を、作戦室で出迎えるダンとソガ。

以前の事件で受けた傷によりまだ本調子ではないため、ソガは戦闘機動の予想される今回、基地で待機していたのだ。

「どうでしたか、隊長」

「残念ながら、取り逃がしてしまった……」

「あんな凶体でウルトラホークを振り切るなんて、敵の母艦は凄まじい性能だ。β号が合体出来ていれば、最大出力が出せたんだがな……」

「母艦？」

「コイツさ」

アマギが悔し気に、写真の束を机に投げつける。

敵にはあえなく逃げ切られてしまったものの、その姿はしっかりとホークのカメラが捉えていたのだ。

……そしてなんと、ダンはそのこに写る敵の姿に見覚えがあった。

(このシルエット……そうだ、あれは確か2連星の……)

一般的に、星の質量を決めるには重力の大きさを測定する必要があるが、巨大なエネ

ルギーの塊である恒星においては、重力の大きさを測定できるのは、ほとんどが連星に限定されてしまう。

このため、恒点観測員達の間では、連星はその星系における観測の基準点として非常に使いやすいとされている。

中でも蟹座にある2連星『HM星』は、銀河系の中で最も強力な重力波を放つ事でも名であった。

新しい星系で観測業務を始める際や、宇宙で迷子になったりした際には、直近にあるこうした特異な星々を基準にすれば、公転周期の再計算がしやすいとして、宇宙に携わる者の殆どが習う基礎知識なのである。

そして、そういった有名な星々は、同定に役立つようにその周辺についての情報も、いくつかデータが載っている事が多い。

もちろんの事、HM星も御多望に漏れず、補足情報がいくつかあるのだが……その中に、この恒星系に住む珍しい生態を持つあの種族もまた、殆どのテキストに必ず記載されている。

かつて熱心な学生であった恒点観測員340号もまた、教材を隅々まで読み込んでいたので、当然ながらこの円盤を知っていた。

一見、鉄くずをそのまま組み合わせたかのような彼らの機械群は、拡張性を担保した

結果であり、追求された機能美を有しているのだと、世話になった先輩が熱弁していたが……今では彼も、技術局の次期長官だったか。

懐かしい記憶と共に呼び起こされた、かの種族の名前、忘れるはずも無い。

彼らの太陽だけでなく種族そのものが、特記事項として記されているのだ。

非常に傍迷惑な要注種族として。

まさしくこの写真通りの画像が、載っていた。

彼らの母星と太陽がどちらも歪な形をしているからかなのか、育まれた独特の感性でもって作られた、左右非対称のフォルム。

これは……

「バンダ星人の宇宙ステーションじゃないか！」

思わず口をついて出てしまった言葉に、仲間達が反応する。

「えっ……っ？」

「あッ……」

「ダン、お前どうしてそんなことを……」

「いやあ……ちよつと……」

ダンが言葉に窮していると、唐突に、どこかわざとらしい大声が作戦室に響いた。

「なるほどおお！ バルタン星人かあ！ 確かに資料室で見た、奴らの円盤にそっくり

だ！ よく覚えてたな！ ダン！ それでハサミを持つているんだなあ！ こいつう  
！」

「えッ……あ……その……」

「おお、そういやいたなあ、そんな奴も！ 兄貴に聞いた事がある。パゴスつてえ奴の事も知ってたし、昔に現れた怪獣まで勉強してるなんて、流石はダンだ！ 真面目君だなあ、おめえは！」

「しかし、名前を間違えて覚えていたのは戴けないな」

「……そうです」

バルタン星人の薄っぺらい円盤とは似ても似つかないはずだが……

いや、地球人の感性ではなんらかの共通点が見られるのかもしれない。

ダンはこれ幸いと、ソガ隊員の聞き間違いと早合点に乗っかる事にした。

（そうか、やつら地球へ車を集めて来ていたのか。自分の星の物資を使い果たして他の星にやって来るなんて、まるで強盗みたいな……）

胸を撫で下ろし、バンダ星人の行動に思いを馳せるダンの耳に、ラジオ放送が聞こえてくる

《都内の交通情報を申し上げます。街道筋はいつものとおり混雑し、特に、水戸街道の……》

「わかった、やつらはこれを聞いて車の多そうなところへロボットを派遣していたんだ……。ようし、いい考えがある！ 隊長！」

「……なるほど、偽の交通ニュースを出して、ロボットをそこに引きつけるわけか……」

「そうです。そして、そこに新型のスペリウム爆弾を積んだ車を集結させるのです」

「わかった！ そいつをロボットに食わせて、宇宙ステーションに戻ったところで……」

「ドカアアアン！ とやるんだ！」

そこへアアンが帰ってくる。

「ダン……」

「どうだった、オサム君？」

「ダンさんが来てくれないと言って……」

「まだ、そんなこといつてんのか！ 聞き分けのない子供だな！」

「アアン、ユグレ博士の時間は？」

「遅くとも3時には、手術をしなければとおっしゃっています」

「その、シンガポール行きは延ばせないのか？」

「ええ、向こうでも心臓移植の患者が待っているんです」

厳しい顔で、マイクを持つ隊長。

「……第3格納庫、出動準備！」



指示に従い、ウルトラガードの格納庫へ向かう隊員たち。  
逡巡するダンに念を押すように、キリヤマ隊長が告げる。

「……ダン、急げよ」

「隊長！」

「隊長……！」

「……アンヌ、オサム君を頼む……」

こうして戦士は、化け蟹退治に出かけるのであった。

## 大義ある戦い（Ⅲ）

「これより、バルタン星人のU—T—O—M撃滅作戦を開始する！」

ユートムはとつくに撃滅したんだよなあ……

俺のせいで、バンダ星人の侵略ロボットことクレージーゴンの呼称が、なんかとんでもない事になっちゃったけど許してくれ。

キチガイロボット呼ばわりよりかはマシだろう。

地図を広げながら、割り当てを決めている隊長を尻目に、ウルトラガードへ積み込む爆弾をチエックしているアマギを捕まえ、それとなく話しかける。

「……なあアマギ」

「なんだ？」

「奴の装甲がペダニウムだったと仮定してさ。仮にスペリウム爆弾を30個食わせた想定だと……破壊しきれるもんなのかね？」

「いいや、それは不可能だ」

「やっぱり？　じゃあさ、スペリウム爆弾なんかより、ライトンR30とか……それこそ全部スパイナーに変えちまった方がいいんじゃないかね？」

「……無理だな」

「なんでえ？」

はあ……と呆れたように溜息をついた名プランナーが振り返り、面倒くさそうな顔でこつちを見下ろしてくる。

「理由は二つある。まずはお前が知らなくても仕方の無い技術的な話だ。ライトンR30は超硬物質を外から破壊する為のものであって、今回みたいに最初から内部破壊を狙えるなら必要ない。そしてスパイナーの威力は確かに折り紙つきだが……その代わりに安定性に欠ける」

「安定性……？」

「お前は奴の食事風景を直接見てないから、そんな事が言えるんだ。スパイナーをあんな乱暴に放り込んだら、その瞬間にたちまちドカンだぞ！ きちんと回収時の衝撃に耐えて尚かつ、こちらの指定したタイミング通りに起爆できるようにするなら、乗用車になんかとても納まらないよ」

「マジ？」

「ラリーの時だって、本物のスパイナーはお前達のジープの座席を引つ剥がして載せていただろう。遠隔起爆装置まで組み込んだら、大型トラックの荷台サイズになっちゃうよ！ その点、スペリウム爆弾は威力こそ劣るが、扱い易さはピカイチだ。ダンが何も

考えず引き合いに出したと思うのか？ お前が言うように、全部スパイナーで揃えたりしたら、忽ちトラックばかりの車列が完成だ。流石に怪しくて敵が食いつかんだろう」「なるほど……」

そんな理由があったのか……その辺りは詳しく知らなかったから、全く思いつかなかった……

「そして、こっちはお前も知ってる筈の、より現実的な理由だ……」

「はて……そんなんあつたか？」

「V2が無くなってしまった担当宙域の穴を、宇宙機雷で埋める為に、この前ありつたけの爆薬を持っていったばかりだろうが！ ライトンもスパイナーも、とつくに在庫切れだよ！ この馬鹿！」

「あつ……そうだった……」

すつかり忘れてた……

本当に余計な事をしてくれやがったな、マゼラン星人め……！

おかげでクレイジーゴン爆殺計画が丸潰れじゃないか！

「安心しろ、装甲が抜けないからこそその内部爆破じゃないか。操縦してる宇宙ステーションさえ壊せば、ロボットをどうこうする必要はない」

「だが……ユートみたいな自律式だったらどうする？」

「……それは、確かに無くはないだろうが、ステーションが爆発するという事は、連結されたロボットも吹き飛ばされるといふ事だ。人工知能なんて複雑な回路は無事では済まないだろう」

「しかし……」

「なぜそんなにロボットの撃破に拘るんだ？」

当たり前だ。

原作じゃあ結局、ステーションを爆破できても、生き残ったクレイジーゴンがコントロールを失って、大暴れするからだよ。

その上、一戦目で全員が痛感した通り、このクレイジーゴンが強いものなのって！

エメリウムもアイストラッカーも弾き返すわ、セブンは踏んづけていくわで、いつかのキングジョー並の強敵なのだ。

だったら同じようにライトンR30でさっさと吹き飛ばせばいいのに……と考えていたが、まさかやらなかったんじゃなくて、物質的にやれなかったとは……世辛いね。じゃあ、そんな状態でいっただいどうやって倒したんだと言うと……セブンをエレクトロ口Hガンからぶっ放して勝った。

いや、何を言ってるのか分からねえと思うが、俺も分からねえ。

セブンは、自分の力だけではクレイジーゴンに勝てないと悟るや、体を瞬時にミクロ

化して、地上でフルハシが絶賛連射中のランチャーの銃口に飛び込む。

そのまま敵目掛けて発射されたセブンは、空中でどンドン巨大化していき、激突！

爆発！ 勝利！

みたいな凄まじいテンポのゴリ押しで決着するのだ。

初めて見た時は、あまりにも唐突過ぎるのと、究極の力押し具合に目が点になったのを覚えている。

いやまあ、一番ぶったまげたのは間違いない、撃ち出した本人であるフルハシ隊員だろうけど……

オレはいつたい何をしちまったんだあ？ ……みたいな表情で、思わず銃口覗いてたのが笑ってしまう。

これがその名もステップショット戦法。

……子供の頃は、他のシーンの凝りように比べて、ここだけすげえ雑じゃない？ とか思っていたもんだ。

どうしてアイスラッガーの効かない敵に、地球の銃でセブンを撃ち出したくらいで勝てんねん？

だが……こちらの世界にやってきて、セブンの戦いを直に見ているうちに、あの時、何をどうしたのか、というのがボンヤリとだけ分かってきた。

まず、我らがセブンの飛行速度は皆さんご存知の通りマツハ7だ。

ところがそれは、あくまで地球上における最高速度であって……デユワツと飛び立った次の瞬間に、いきなりマツハ7フルスロットルなわけではなく……上空で徐々に加速して最終的にマツハ7に到達する。

もしもあの巨体でそんな事したら、毎回ソニックブームで地上はめっちゃめっちゃだし、それを念力で押さえ込むのも消耗する。だから彼は、本当に急いでいる時は燃費の悪いテレポートを使うのだ。セブンの能力にも限界があるという事だな。いかなセブンと言えど、初速だけはダアーツとジャンプしたのと同じ速度しか出せない。

しかし、自分を銃弾サイズにまで縮小すれば、その問題はある程度解決する。

ライフル弾の初速は、一般的なものでもマツハ1とか2とかザラに出る（とソガの記憶が言ってる。よくもまあそんな知識持ってたな。流石はスナイパーだ）なので、防衛軍の秘密兵器なら音の壁を越えるなんて余裕だろう。この時点で既に最高速度の四分の一弱を稼ぎ出しているんだな。

その上で、さらに卑怯なのは……セブンは巨大化できるという事。

身も蓋もない雑な言い方をすれば、『速度×質量＝破壊力！』なわけで。

重たい物体を素早くぶつけりゃ、そりゃ痛い。

だが、重ければ重いほど、これを素早く動かすというのが難しい。素早く動かそうと

すれば、軽ければ軽いほど良い。でも軽いもんぶつけても痛くはない……というのがジレンマだ。

どうあがいても地球の兵器じゃ、打ち出した弾丸が、速度はそのままに質量だけ増大していくなんて現象は起こりえない。

ところがこの緋色の弾丸は、発射後にどんどん重くなつていくだけに留まらず、自力で飛翔能力まで持っていて、凄まじい加速性能を有しているのだ。

速度も質量も青天井で上昇していくライフル弾とか、もしも実現しようものなら、劣化ウラン弾なんか屁でも無い威力を叩き出すに決まつてる。そんでセブンを徹甲弾にすることで、それを実現してしまつたのだ。

しかも……

アマギ直々の解説を聞いて初めて知つた事ではあるが……このエレクトロHガンは、単なるロケット砲ではない。

ダークが落つこととしていつたピストルの技術を流用して作られた、れつきとしたメテオールであり、撃ち出す弾丸の表面電子を励起してうんたらかんたら……要約してびつくり、つまりプラズマガンなんじゃねーか！

プラズマつちゅーのは、そこに存在するだけで様々な現象を引き起こす、固体でも液体でも気体でもない第4の物質……らしい。(アマギ談)



俺のチンケなおつむじやあ、あんまり理解出来ないが、そんなもんをぶつけりや、そりや怪獣も痛いでしょうよ……というの分かる。

で、そんな銃で今回射出したのが、セブン。

彼の拳は岩をも砕く強靱さだが、それはあくまで人型の固体状になっているだけであり、元を正せば太陽エネルギーの塊だ。

そんなセブンを？ プラズマ化して？ 噴射？

……それはもう太陽風なんよ。

フレアを直に押し当てられて、耐えられる奴なんかいない。

そりやどんな装甲だつてブチ抜けるはずだわ。

極小太陽を撃ち出します。それは射出直後から運動エネルギーが二次関数的に増大していきます。……なんて、地球の物理法則に正面から喧嘩売つてるとしか思えない。

ブチ切れたアインシュタイン大先生のシャドウマンが、光の速さで殴りかかってくるレベルのチート技。

それがステップショット戦法なのだ！

咄嗟に編み出した技にしては、実に理に適っている。

……破壊力に関しては。

いやもうね、アホかと。

プラズマ化した皮膚で、敵に向かつて激突します、音速で！とか馬鹿の所業である。というか、表面をプラズマ化するという時点で、パンドンの業火を食らってるようなものなのに、その状態でキングジョー並の金属板に全力の頭突きをかますとか、自殺志願者か何か？

タロウのウルトラダイナマイトに勝るとも劣らない、自爆技以外の何物でもない。

……というかまさか、聞きかじった従兄弟の技をヒントに、ぶっつけ本番で再現しましたとかじゃないだろな？

あれはウルトラ心臓とかいうチート臓器を持つ、選りすぐりのエリートにだけ許された技であって、断じて一介の恒点観測員が放って良いものではない。

ただでさえこの回のセブンは、ダンの姿で重傷を負っており、セブンに変身した後も、その影響かフラついていた。

そんな状態で放ったのが、このステップショット。

エネルギーの消耗という点では、やはりガンダーやガッツ星人のせいであろうが、肉体のダメージという点では、間違いなく今回がトップだったに違いない。

だってあの不死身のタフガイ、モロボシ・ダンが……エピソードでは車椅子に乗ってるんだぜ！

ワイルド星人に一度殺されて、生き返った直後ですらピンピンしてた、あのダンが！  
いかに切羽詰まった状況であったとはいえ、こんな戦法を思いついて、あまつさえそれを素面で実行してしまったセブンの方が、クレージーゴンなんかより余程狂ってるんじゃないだろうか。

一歩間違えれば、この回で最終回を迎えていても、全然おかしくはなかったぞ。

「という訳で、俺はなんとしてでも、あのロボットを倒したいのだ、アマギよ」

「どういう訳だよ……とにかく無い物は無い！ 諦める」

「かくなる上は、プランBしか……」

「まあ、待て……」

次の策に頭を巡らせる俺の肩を、誰かが叩く。

「……隊長！」

「話は聞かせて貰った。確かにソガの言う事にも一理ある。出来る手は打っておかねばな」

「といっても、本当に在庫が無いんです。今から作成する時間はありませんし……」

「こういう物はな、あるところにはあるものさ……機雷を打ち上げた後に精製されたスパイナードが、海軍と陸軍へ優先的に配備されていた筈だ。その中から一つ二つ、こちらへ回して貰えないか、ヤナガワ参謀に陳情してみよう」

「……ありがとうございます！ 隊長！」

「お前の頼みだと言えば、海軍からも参謀からも、そう悪い顔はされまい……いや、逆に  
響められるか？ ハハハ！」

参謀に今度、菓子折持つてかなきゃ……

いや、胃薬の方がいいかな。

「そういうことならば、あちらで装置を組み立てるための資材も必要になりますね……」  
「よし！ そっちは俺が後から運ぶよ！ アマギと隊長たちは先に行つて準備を始めて  
下さこ」

「お、上手く逃げたな……まだ傷は痛むのか？」

「……気圧が変わるとどうにも疼きまして……空の旅はちよつと……」

「構わん。健康体でない者にパイロットの資格はない」

「お前が操縦をトチツて、道連れにされちや敵わんしな……ま、最初に言つてた通り、ア  
レでのんびり来いよ。積載量は充分にあるんだから」

「いくら空路が辛いと言つて、くれぐれも渋滞に捕まるんじゃないぞ、ソガ。ハハハ」

「その場合、横道が増えるかもしれないね……」

「ハハハ」

背後で軽口を叩く同僚達を気にも留めず、ダンはウルトラガードの計器を確かめつつ

も、しきりに腕時計に視線を送るのだった。

## 大義ある戦い（Ⅳ）

「……よし」

人工的に再現された渋滞の車列。

そのトランクにスペリウム爆弾をセットし、起動状態へ移行させると、満足げにダン  
は頷く。

「お、なんだそつちはもう終わったのか？ 早いな」

「ええ……これだけの車列ですからね。急がないと……」

次の区画へ向かう途中、先程のまでの自分と同じように、車の荷台を覗き込んでいる  
ソガが、爆弾に目線をやったまま声を掛けてくる。

ソガ隊員が合流する前に半分は終わらせていたが、彼の持つてきたスパイナーの設置  
は特に慎重を期す作業だ。

アマギ隊員と隊長が専任せざるを得ない以上、爆破班の協力ありきとは言え、残りの  
半分は自分達で設置しなければいけないのだ。

張り切って作業を終わらせていかねば、オサム君の手術に間に合わなくなってしまう  
……

ダンが無意識に腕時計を確認すると、顔を上げたソガが、その様子を見咎めた。

「……お前、さつきから時計ばかり見てるぞ。注意散漫なんじゃないか?」

「ああこれは失礼。でも、作業にはしっかり集中できていますよ」

「だから撃墜されたり負傷したりするんだ……そんなにあの少年の事が気になるのか?」

「ええ……約束したんです、オサム君と。必ず手術に立ち合うって」

しかし、そう呟くダンに、ソガは露骨に眉を顰める。

「オサム君オサム君って……あのなあ、ダン。俺達はウルトラ警備隊なわけ。怪獣を倒すのが仕事であつて。かわいそうな病気の子供を救うのは職務外なんだ。だいたいア  
ン又ならいざ知らず、医者でもないお前が行つてどうにかなるのか? それで手術が成  
功したりしなかったりするもんか」

「そんな! それは違います! 例えユグレ博士がいかに名医であつても、患者である  
オサム君自身の精神が安定しなければ、その回復力に大きく差があるんです! 心臓移  
植は僅かな要素が成功に直結する大手術です。彼が前向きになれなければ、助かるもの  
も助かりません!」

「あつそ。じゃあ結局、助からなくてもオサム君のせいなわけだ。そんな事気にしてる  
場合じゃないぞ、ダン」

「なんですって!!」

どうでも良さげにトランクを閉め、さっさと次の車へ向かうソガ。

目を剥いて立ち尽くしていたダンは、彼の真意を問いただそうと、ソガの背後にびつたりと付いていく。

「そんな事とは、いったいどういう事です?」

「そりゃそうだろ。何の為に心臓を移植する? 手術しなけりやいずれ死んじまうからするんだろが。手術をしようがしまいが、どつちにしろ死ぬんだったら、助かるかもしれない手術の方に賭ける……ってんなら分かる。でも、それをしたくないってんならしょうがない。お望み通り死ぬしかないわな? 移植して死ぬのが怖いって? 移植せずに死ぬのは怖くないのかね? それとも生死には関係なくて、運動機能回復の為にんだったら、無理強いせずに本人の望み通りやめてやれよ。一生走れないのと死んじまう二択だったらば、俺だってオサム君と同じ選択するけどもさ」

「それは、あまりにも極端すぎる意見です。オサム君は、まだ子供なんですよ? 我々大人のように、そう簡単に分別がつくわけではありません! ……ソガ隊員、こつちを向いてください!」

「……何をそんなに怒ってるんだ? お前はオサム君の親か……? 違うだろう。そりゃアンの弟ならまだしも……その友人の弟なんて、お前からすれば他人もいいとこ



ろじゃないか。一回会って励ましてやっただけでも充分に義理は果たせてるはずだろ。これだけ気を揉んでやってるんだ、頼んだアンヌだって失望したりしないよ。……だいたい、ユキコって姉貴も姉貴だな。親はいないのか親は？　ダンより、まずはそつちを呼ぶべきだろうが！　自分の子が死ぬかも知れないのに、顔も見せないなんて……！」

「……そんなの、ユキコさんだってオサム君だって、本当はご両親に来て欲しいに決まっているじゃないですか！　……でも彼らは今、海外にいます。医療技師である彼らのペースメーカーや、透析装置を待つ患者もたくさんいて、ユグレ博士とはスケジュールが合わなかつたんです！　僕が顔を見せてやるだけで、彼らの代わりを果たせるというのなら……僕は喜んでそうします！　……それを、どうしてそんな風に言うんですか！？」

少し涙ぐんだダンに詰め寄られ、彼の気迫のたじろぐソガ。

「それは……俺も知らなかつたから、悪かつたよ……でもな、だつたらますます許せんぞ。これだけ周囲が心を砕いているのに……肝心の本人が治療拒否なんて、あんまりにも失礼じゃないか！」

「……きつとソガ隊員は、子供の頃に病気をした事がないから、そんな事が言えるんです。なにせ、ウルトラ警備隊の適正試験をパスできるくらいの健康優良児ですからね！」

「……なっ!? そ、それは……!」

珍しく、ダンが皮肉ると、ソガは何か言い返そうとして、口を噤んだ。

やがて目を逸らしながら、反論めいた事をぼそぼそと呟く。

「……そりゃあ入隊前に、手術が要るような大病はしたことないさ。でもな……俺だつて……子供の頃に長期入院くらい、したことは……ある……」

「……意外ですね。でもそれだったら、オサム君の不安な気持ちを理解できるでしょう?」

「……いいや、だからこそ理解できないね! 俺はそんなワガママを言つて、迷惑をかけるような事はしなかった!」

「へえ、随分とお利巧だったんですね。しかし、それを他人に押し付けるんですか? それはあくまでソガ隊員の心が強かっただけで、今のオサム君とは何もかもが違います。自分は出来たからお前も我慢しろなんて、不公平ではありませんか!」

「不公平だと!? ……たまたま姉貴が友人だったからつて、オサム君だけがモロボシさんに直接励ましてもらえるのは、不公平ではないってか? 病気の子供なんていっぱいいる。彼らがみんなお前に会いたって願つたら、全員に会いに行くのか? 違うだろ!?」

半ば怒鳴り散らすように、ダンへ無理難題をふっかけるソガ。優しい彼が返答に窮す

姿がありありと浮かぶ。

そうして少しだけ困らせているうちに、うまく丸め込んでしまおうとした画策したソガであつたが、彼の想像と真逆の言葉が返つてきた。

「行きます」

「な、に……う？」

……即答であつた。

ダンは、まるで曇りのない瞳でソガを真正面から見据え、一切思い悩む事なく堂々と  
 そう言い切つたのである。

「そう望む、全てのの人に会いに行きます。僕は、オサム君がアンヌの知り合いだから、再び会いに行く約束をしたではありません。……彼が、僕を必要としていたからそうしたので。僕に会う事によつて、明日を生き抜く希望を僅かにでも得られるというならば、それが例えば子供であろうと老人であろうと、地球のどこによつて、直接会いに行つて、その手を握り、怖がらなくていいと伝えます」

何一つ自分の言葉に疑いを持つ事無く、ダンはそのように表明した。

それを呆然とした様子で聞くソガ。

ダンの決意に満ちた表情が、そうありたい等という生易しい理想を言っているのではなく、請われれば間違いなく彼はそうするだろうという、ある種の確信を抱かせた。

どんな言葉を重ねようとも、そこを曲げさせる事は決して出来ないのだ……という事も。

「ソガ隊員はさつき、我々の仕事は、怪獣を倒す事だと言いました。その通りです、だからといってそれだけでは無い筈です。我々の使命は……地球の平和を守り、不安を取り除く事で、人々が生きる喜びと、未来への勇気をその心に抱けるようにすること。我々は……希望なのです！ ソガ隊員も、そうでしょう!？」

そうしてダンが力強く同意を求めるが、なぜかソガは、トランクへ手をつけて、顔を背けるばかりで、直ぐに答えを返してはくれなかった。

その姿はまるで……何かに叩きのめされて、打ちひしがれているようでもあった。

「……詭弁だな」

「詭弁……?」

「そうだ、お前が言っているのはな……ただの理想論だよ、ダン。ただの人間には、そんなに強く在る事なんか出来っこない……アナタもそうでしょう、だと? ……違うな。オレは別に、見ず知らずの誰かの為に……なんて、これっぽっちも思っちゃいないさ。……オレは、オレの大切な人だけを守れば、最悪それでいい。そりゃあ、余裕があつて手の届く範囲にいれば、赤の他人だろうと見捨てたりはしないよ。でも……それで優先順位を見誤ったりは、しない」

「優先順位ですって……?」

「そうだ、人間の腕は二本しかなくて、しかもこんなに短いんだ。出来る事なんかたかが知れてる……如何に俺が早撃ちの、名手でも、倒せる敵に限度があるようにな。二丁拳銃にしたところで、一度に倒せる敵は二人だけ。三人目の敵は放っておくしかない。三匹の宇宙人が誰かをそれぞれ襲っているとして……オレにとつて、より大切な人を守るだろう。いや、その三匹が一緒にいればまだいいさ。てんでバラバラに現れたらどうする? オレに分身しろってか? バルタン星人みたいに?」

「それは……」

「人間が、より大切な物を守る為には……何かを切り捨てなくてはならない。お前が誰彼構わず助けたいと願うのは勝手だが……手術が失敗したところで、可哀そうな男の子が一人死ぬだけだ。しかし、お前が不注意で怪我をした結果、怪獣を倒せなかったら……大勢の人が死ぬんだぞ。一人と数百人、どちらの方が大事なんだ。……え?」

「……冷たいんですね、ソガ隊員」

「なんとでも言え。オレは……所詮、ドライでリアリストだよ」

僅かな沈黙。

ソガは手元の爆弾を弄るばかりで、ダンがどんな表情で彼を見つめているのか、知りもしなかった。

いや、頑として顔を上げようとしなのは、それを直視したくはなかったからなのか。だが、ぽつりと呟いたダンの言葉にを、思わず自嘲ぎみに混ぜ返してしまう程には、彼へ気を向けていた。

「……不幸ですね」

「不幸？ ……フツ、それはなにか？ オレに切り捨てられた人々がか？ それとも、そんな生き方しかできない俺自身がか？」

「……貴方に守って貰った人がです」

「……なんだと？」

ソガの指が止まる。

ダン は拳をぎゅつと握りしめ、とても悔し気な顔で絞り出した。

「貴方にとつての大切な人であるならば、ソガ隊員の事だつて大切に思っているはずで  
す。大切な人へ、他の誰かを犠牲にさせた……それが自分の為であると知った時、その  
人はどう思うんでしょうか？ ……少なくとも、僕はそんな風を守られるのはごめんで  
す。……ソガ隊員にだけは……見捨てられた方がずっとマシだ」

そう吐き捨てるように言ってしまったから、ダン は思わずハツとした。

……違う、そのような事が言いたかつたのではない。

ただ、大切な友人であるこの男が、そのように自分を卑下し、寂しい事を嘯く姿に、つ

い口が滑ってしまっただけだ。

そんなに過酷な選択を迫られるくらいなら、自分を頼ってくれればいいのに。

テレパシーであれば、ダンの抱えたもやもやした感情を、そのままダイレクトに、包み隠さず伝える事ができたであろう。

しかし、先程のオサム少年についての意見の相違と、その際の頑固なまでの無理解に對する僅かな苛立ちが、つい先立ってしまったのだ。

薩摩次郎青年の姿を模倣して以降、自身の凧のようであった精神の波が、以前と比べて随分と上下しやすくなった自覚はあった。

だが今まではそれを、より地球人らしい感情の豊かさを獲得できた証拠であると、喜びこそすれ、邪魔に思った事など一度として無かったのに。

侵略者に対する激しい怒りや悲しみですら、次なる戦いへの糧として、そして今の自分を支えるなよりの原動力へ変換出来ていると思っていた。

……それが、まさかこんな場面で足を引く張る事になるとは！

拗ねて言葉尻が強くなってしまふなんて、我ながら、なんと子供染みた醜態だろうか。慌てて訂正しようと思顔を上げたダンは、弾かれたように振り返ったソガと目が合い、愕然とした。

彼が酷く傷ついているのが、一目で分かってしまったからだ。

激しい驚愕に見開かれたソガの瞳には、深い悲しみと後悔、羞恥や無念に自己嫌悪と諦観……あらゆる負の感情が混じり合って揺れているのを見て取った。

テレパシーを使わなくとも分かる。きつとなにか、彼の触れてはならない部分を土足で踏みにじつてしまったのだ！

そもそも、先程自分は何と言ったか……？

口論に茹だつた頭で考えた事とは言え、守つて欲しくは無いなどと！

いままで自分は、彼に散々助けて貰つたではないか！

ダンだけではない。目の前の男が、仲間を救おうと必死に戦っているのは、自分がよく知っている。

……そんな彼が、あまりにも意固地な現実論を打つものだから、そうではなからうと否定の言葉を投げかけてしまったのではあるが……

自分は、なんとという事を口走ってしまったのかと、強く強く後悔した。

……しかしダンの方も、僅かな一瞬に激しい衝撃を受けたので、咄嗟に言葉が出なかつた。気付いた時にはもう遅かつたのである。

彼が謝ろうと口を開いた時にはもう、ソガの瞳は細く戻つてしまつていて、あんどりと開いていた口元は、普段通りに飄々とした笑顔を張り付けていた。

「なるほどな、そいつは盲点だつたよ。ありがとうダン。目が覚めた気分だぜ……おつ



といかん、急いでいるのに話し込み過ぎた。悪い悪い。設置を急がないとな！　ここらへん頼むわ！　俺はあっちをやってくるよ、じゃな！」

「ソガ隊員、あの……」

足早にその場を後にするソガの背中を、ダンはまだ立ち尽くして見送る事しか出来なかった。

人の好い彼の笑顔に、自分がどれだけ甘えていたのか、じくじくする胸で痛感しながら。

## 大義ある戦い（V）

深夜、とつくに消灯時間を過ぎた病室に、激しい咳と鼻を吸る音が断続的に響く。

個室の中にポツンと置かれたベッドの上では、点滴に繋がれた小さな男の子が、少しだけ身を乗り出し、懸命に何かを吐き出そうとしていた。

彼が覗き込む先には、喉に絡んだ痰を捨てる為に、プラスチック製の洗面器が置かれており、やがて男の子が体を戻すと、ぜえぜえと苦しかった呼吸が、ほんの少しばかり楽になったのか、また横になる。

先程、悪夢に魘されて起きてしまつてからは、ずっとこの繰り返し。不規則に上下する小さい胸の奥からは、ひゅうひゅうと耳障りな音が奏でられ、炎症を起こした彼の气道が、腫れ上がつて狭くなつている事を如実に表していた。

……あんまり、おはなしできなかつたな。

体力のない彼が、すうつと眠りに落ちてしまう前、この病室には、男の子の母と祖父母がいたのだが。

流石に面会時間を過ぎれば、帰らざるを得なかつたらしい。

……とら、みせてあげられなかつたな。

今日はお遊戯会で劇をするはずだったのに。

今朝になって、いつもより大きな発作が起こり、入院する事になってしまったのだ。男の子の口が不満そうに尖る。

別に、劇がやりたくて仕方なかった訳じゃない。

むしろ、トラだいじんの役なんて、やりたくは無かった。

それはそうだ。

いぼりんぼで、うそつきで、自分が一番になりたいがために、ライオンおうさまの大切なメガネを隠してしまう、悪いやつ。

そんな嫌なやつ役なんて、いったい誰がやりたいものか。

みんなは、優しくて立派なライオンおうさまをやりたがったらしいけれど、ぼくは断然、サルのけらいがやりたかった。

まじめで、かしくくて、ライオンおうさまを助けるちゅうじつなけらい。すごいさくせんを立てて、メガネを取り返してしまふんだ。

勿論こつちも人気の役だから、ジャンケンに勝てないといけないけれど。

……ううん、別におじいさんゾウでも、犬のほあんかんでも良かったよ。彼らはあんまり役には立たないけれど、おうさまの為に、いっしょうけんめいだから。

でも、トラのだいじんだけは、嫌だったのに。

後から役を聞かされて、ぼくはふてくされた。

布団に潜つていじけていると、おばあちゃんが、いったいどうしたの？ つて聞いてきた。

トラのだいじんになつちやつたんだ、と言うと。

「やつた！ 虎は上等な役やんか！」

と言つてきた。

「あのねおばあちゃん、よー聞いて。トラのだいじんつていうのはね……」

男の子は拙い語彙力を総動員して、いかに虎の大臣が利己的で、他者を蹴落とす事なんとも思わない、虚栄心の塊かというような事を、ニコニコと耳を傾ける祖母に対して、切々と説いた。

「せいならピツタリや！ 一番ええ役やんか！ 良かったねえ」

ぼくは暴れた。

お母さんが「ほたえたら、あかん！」と怒るから、暴れる代わりにぎゃんぎゃん泣いた。

そうしたら、おばあちゃんはオロオロして、ごめんね、違うんよ、と言つてきた。

「お芝居で一番大事なのは、敵役なんやで」

かたきやくつて、なに。

「お話のワルモンの事や。敵役が格好よくて魅力的じゃなかったら、全然盛り上がりへんのよ。だから、いっとう大事で難しい役なんやで」

「うそや」

「嘘とちがう。せやから敵役をするんは、座長さんとか、前の主役やった人がしはるんや。一番お芝居の上手な人がするから、かつこええんやんか」

かつこいい悪役って、なに。

よ。ごめんおばあちゃん、つばきさんじゅーろーってお侍さんのお話されてもわかんないよ。

「おててに持つとる、金と銀のブリキと一緒よ」

「ブリキちがうよ。これはロボット」

祖母は、かつて自身の買い与えたソフビ人形を指差した。

「銀のコケコツコーはええモンやけど、金のカニカニはわるモンやろ？ でもどっちも大好きやんか」

言われてみれば……確かに。

今よりもさらに幼かった自分が、なにかと口に入れて、しゃぶってしまったせいで、すつかり色の禿げたトサカとハサミ。

銀色はとても良いやつだけ、金色の方は……悪いやつだ。

「こんな変な形でも、腕のある役者さんが、ガシヤガシヤ動かすから格好ええんやんか。一番ちから入れるのが、敵役や。先生は、ソガちゃんの声がよう通るし、お歌も踊りも一番上手いから、一番大事な役にしはったんや」

……ううん、違うよおばあちゃん。

役決めジャンケンの日にお休みしたから、余り物の役になっただけだよ。

僕のお芝居が上手いとかじゃないんだよ。

……でも、おばあちゃんには、そんな事もう全然関係ないみたいだった。

かとうきよまさがどうの、たいわんの動物園でだっこしたあの、ホワイトタイガーがなんちやら……ウチはね、虎がいつとう好きなん。

勝手にウキウキしながら、外国の歌を歌って、よくわかんない踊りを始めたおばあちゃんを見ていると、なんかどうでもよくなっちゃった。

おばあちゃんがトラを好きなら、だいじんでも、いいや。

こうなったら、みりよくてきなかたきやくを、やってやるぞ。

だからね、おとうさんのへやにある、トラのマスクのヒーロー人形を見ながら、げきに使うお面を作ったよ。

かたきやくは、ヒーローみたいにカッコよくないといけないんだ。

あつがみを折り曲げて、おはなを高くする。キバもつけちやうぞ、がおー。

次の日、お面を見せた先生はびっくりして、すごくすごくほめてくれた。

その日から、ぼくいがいのトラだいじんも、お鼻が高くなつて格好よくなつた。ついでに犬のほあんかんも、ぶるどつくからしえぱーどみたいになつた。

だいじんチームで集まつて、かつこよく、そして悪そうに吠える練習をする。がおーじゃないな、ぐうるるごお！ だな。

……とらだ、ぼくはとらになるのだ！

チューリップ組さんのお遊戯会は、未だかつてないクオリティーで上演される筈であつた。

しかし……

「……えほっ……えほっ……」

彼は結局、その舞台上上がる事は出来なかつた。

(ロボットみたいなのに、ぱーつをこうかんできたら、よかつたのに)

男の子は、ベッドの脇からお気に入りの人形達を、布団の中に引つ張り込む。どうしてこう、大事な時に限つて、ほっさになつちやうんだらう。

きつと、ぼくの”きかんし”が”ふりよーひん”なんだ。

「……きみといっしょだね」

握りしめた金色ロボットの足は、片方がくにやりと内側へ曲がつていた。

吊されて売られていた時に、変な型がついたまま固まってしまったのを、気付かず買ってきたのだらうと、彼の父は言っていた。

「まあでも、もとからコイツはそのまま立てへんからなあ。おばあちゃん許したりな？」  
ほら、こうすると立てる……父が人形の大きなハサミを床に接地して、三本目の脚のようにしたが、手を離れた途端、こてんと後ろに倒れてしまった。

……じゃあしようがないね。どうせ立てないなら、おどつてるあしの方が、楽しそうだよ。ほらこれ、バレエの人のあしだよ。

そんな会話を思い出した彼は、隣にある特別な吸入器が、透明な蒸留槽のてっぺんから、白い薬剤の湯気をしゅんしゅん吐き出すのをぼんやり眺めながら、胸から込み上げる気持ち悪さを紛らわせようとした。

まるでクレージーゴンみたいだなあ、と。

その時、廊下の方で、誰かがパタパタ……と走っていく音がする。

こんな夜更けに？ 看護婦さんは走ったりなんかしないよ。

まさか……おばけ？

男の子は怖がりで、おばけの話がとても苦手だった。

大好きなウルトラセブンにも、おばけの出てくるお話があるらしく、その回のビデオだけは怖くて未だに見たことが無いくらいに、おばけが怖かった。



布団を頭まで被って、息を殺そうとしたが、あまりにも苦しくて咳が我慢できない！  
だめ！ おぼけに見つかっちゃうよ！

泣きそうな彼を、誰かが励ます。

【大丈夫だよお。おぼけなんて、オイラがこの大きな口で、パツクンチョ、パツクンチョと、たべてしまおうよお】

「きみは、ひとりで立てもしないのに、よくそんなことが言えるね」

「いいえ、うそではありませんぞ！ コイツはなにせ、わたしのごしゅじんさまでも、ぜんぜんかなわなかったスゴいやつなのです！」

【てれるなあ】

そうしていると、廊下をヒソヒソした声が通りすぎていく。

「走ると起きちやうでしょ」

「すみません……」

なあんだ、人間じゃないか。

いったい何を怖がっていたのか。

……本当は知ってるんだ、おぼけなんかいないって。

だって、おぼけがいるなら、それをやっつけるモロボシ・ダンもないと不公平だもんね。

このせかいに、ウルトラセブンはいないんだ。だってあれはぜんぶ、おしばいなんだから……

「……ガ……ソガ、応答せよソガ！」

「はい？ ……あ、ハイ！ こちらソガ！ 感度良好！」

すこしばかり、ぼんやりしていた。

慌てて通信のスイッチを入れる。

「退避は完了したのか？」

「ええ、こつちもバツチリ隠れました！」

「……自分で具申した通り、対U—TOM戦闘の要に乗ってるのはお前だ。もしも敵が罠に気付いて暴れ出した時は、頼むぞ？」

「勿論です。そのために新兵器を積んできたんですからね」

午前の戦闘でβ号が撃墜されてしまったので、隊長達は迷彩塗装を施した支援戦闘機ウルトラガードを二機、林の中に隠して待機中。

ただでさえ高出力の敵機を、後から追いかけて捕捉し、タイミングを見計らって遠隔

爆破するという任務特性上、必要なのは攻撃力や防御力といった正面戦闘力ではなく、より高い隠密性や操縦性、飛行特性の良さ、そしてなにより起爆タイミングを外さない為の高度な通信機器こそが重要だと隊長が判断したからだ。

その点、ウルトラガードは武装こそ貧弱なもの、ダンとアオキという化け物級のエースが、全力で超音速ドッグファイトをこなしても問題ないくらいの飛行性能を有しているし、練習機にも使われるだけあって、コックピット周りの機器が非常に充実している。計器飛行から濃霧戦闘訓練、機上作業練習もお手の物。

合体不可で最高速の出せない1号が、既に一回振り切られている以上、攻撃力を削つても敵に追いつがれる機体である必要があつたわけだな。劇中で隊長は、どうやって爆破のタイミングを掴んだのか不思議に思つてたが、ウルトラガードの索敵能力なら、爆弾につけた子機から電波を受信して、ステーション側に受け渡されたかどうか、ぼつちり観測できるつて寸法よ。

つつきり、ベテランパイロットならではのカン、つてやつかと思つてたぜ……

それにウルトラホークは1号も3号もデカすぎて、着陸してたとしてもピツカピカの翼が上空から丸見えだし。

マツハ3を超える為には、あの銀色の特殊塗料が必要不可欠なのだ。

迷彩塗装に塗りつぶした上で飛ばうものなら、整備班総出でド突き回される。……ア

ライソ君、俺より年下なのに眼光がもうやべえのなんのつて。

特に今回、超兵器群に分類されないウルトラガードなんかは、ドンピシャで彼の担当なので……それを多分、これから一機落つことす事になるという未来を知っている身としては、とてもじゃないがその目を直視できなかった。

ただでさえオレはこれまでも、リモコン戦車で包囲陣を敷いたはいいが、敵の目の前でモタついたせいで、逆にそのまま多数撃破されてしまったり、あまつさえ残ったそれを敵に突っ込ませて、固定器具代わりに使った挙句、砲身も装甲もベッコベコにして返すという所業を、散々やらかしてきた前科があるので……目の仇にされている気がしてならない。

スパイナーの緩衝材を受け取りに行ったら、すげえ渋面されたし……用途を話したらありえんほど低い声で聞き返されて怖かったよ。握りしめたスパナで殴り殺されるかと思つた。

メビウス本編じゃ、あれでも相当丸くなってたんやなって……

「……ソガ」

「はい、なんででしょうか隊長？」

「……物思いに耽るのはいいが、自分が他人に言った言葉くらいは、違える事の無いようにな」

「え……？」

「私としては、お前達が気にしていないなら、何も言わん」

「これは……どうもすみませんでした」

「くれぐれも功を焦って、敵に踏みつぶされたりはせぬように……それと」

「それと？」

「フルハシが随分と気を揉んでいたぞ。……私からは以上だ」

そうして個別回線が切り上げられる。

……やらかしたなあ。

「本部、こちら準備完了。交通情報をお願いします！」

## 大義ある戦い (VI)

帰還した資材回収装置から、大量の資源がステーションに搬入される。

コンベアの左右から伸びてきた大小様々なアームによって、バラバラに解体された戦利品達が、コンテナに積まれて各セクションに行き渡るのを、甲殻類めいた異星人達がモニター越しに監視していた。

彼らは、ただ黙々と胸部から生えた無数の歩脚を駆使して、担当する計器をガチャガチャと調整している。

その様子に、大漁を終えた感慨らしきものは見えず、ハサミが触れ合う程の緊密さでズラリと整列しているにも関わらず、隣の者と勝利の余韻を囁き合う事も無い。

この宇宙船に居る、全てのバンダ星人が、一切言葉を発さずにただただ、目前の仕事に集中していた。

それは、船内が鉄工場を思わせる、けたたましいまでの騒音に満ち満ちているので、互いの声が聞こえないから……ではない。

例えばここが森林の奥深く、木々のざわめきや、小鳥の囀りしか聞こえないような静寂に支配された空間であったとしても、彼らは一言も発さなかっただろう。

別に、バンダ星人が言語を持たない訳ではない。彼らにも独自の学問があり、高度な知能を有しているのは明白だ。そもそも、緻密な数学とそれに裏打ちされた深い材料工学の知識がなければ、このように巨大なロボットや、宇宙船を建造出来るはずがない。というより、知能指数という点では、かのチブル星人には遠く及ばないものの、銀河全体で見ればかなり上位に位置する筈だ。ゴドラ星人などお話にならない程に強固な社会システムを構築し、メトロン星人よりも遙かに広い範囲の薬学知識に精通している。

いつかのペダン星人達の工学技術はまさしく本物だが、そんな彼らが得意とするペダニウムの加工法を、彼らの手を借りずに、全く別のアプローチから独自に編み出した。

そして、ペダンのように機械工学へ特化しているのかと言えばそれだけでなく、生物学の方面でも非常に発達している。宇宙の生んだ最高の科学とまで謳われたペガッサシティが、未だに現存していたならば、あと数年で辿り着いたであろう永遠の命……もはや永久に失われてしまった、生物の悲願とも言えるその命題を、バンダ星人はずっと前から達成していた。

尤も、ほとんどの生物が想像し、実際にペガッサ市民が研究していたであろう形とは、まるきり逆の方向性ではあるうが……とにかく、人体改造や再生医療など造作もない、と豪語する人々と遜色ない程度には発達した医療基盤を持っていた。

これほどの科学力を言語無しに到底獲得できる筈もないので、勿論バンダ語も、少ない記号の組合せで何パターンもの意味を持たせる事の出来る、ある種の圧縮言語とも言うべき高度なものだ。

だが、当のバンダ星人達は通常、それを発する事は滅多にない。

それはなぜか？

一言で言えば……無駄だからだ。

互いの状況や、個人的な所感を述べ合い、共有する……なんと無意味で非生産的な行為だろうか。

その個体が置かれている状態など、高度な知能を有する彼らが一目見れば直ぐに分かる事であるし、同一の現象、物体を観測した時に得られる情報など、差が発生するはずもない。

事象の有する情報量が勝手に増減する事はない以上、同じものを同じタイミングで見れば、全く同じ感想を得る筈で、もしも両者の意見に相異が発生したならば、それはどちらか、あるいは両方が、その事象の持つ情報を、全て読み取り切れて居ないだけである。

バンダ星人の優れた知能ならば、約90%を余すことなく受け取る事が出来るし、残りの取りこぼした10%も……それは全てのバンダ星人が知覚できない情報形態など



けであり、バンダ星人同士で会話をしたとて、補完できるものではない。

お互いに分かっている事を、わざわざ伝えあったり、確認をとるなど、全く無意味な事であり、お互い分からない事はいくら議論を重ねてもまた、見つける事はできないのだ。

つまり、彼ら程に高度な共通認識を種族内で持てていれば、こういった説明すらも必要ないという事。

書き手と読み手がバンダ星人であれば、数千文字に及ぶ内容が、たった一行で事足りるのだ。

会話は無駄。

……では、なぜ彼らがそれほどまでに無駄を嫌うのか？

それは、彼らの母星の成り立ちに起因する。

恒点観測の教本にも記載されている通り、彼らの母星は、蟹座HM系に属する。

二つの恒星が互いに引き合い、エネルギーを反発させる2連星である彼らの太陽は、非常に強力な重力波を発している。

そしてその、宇宙有数の重力波を間近で受け続けたバンダ星は……地表のあらゆる鉱石が浸食され、凄まじい速度で洗い流されてしまった。

かつては地球の数倍もの質量を持っていたのだが……いまでは至るところに穴があ

き、地殻が何重も重なったかのような無惨な姿を晒している。

巨大な惑星の内部がスカスカなスポンジのようになってしまったために、体積と質量のバランスも狂っており、表層の大部分が、惑星核の持つ重力半径から飛び出している。ペダニウム星人が住む場所の殆どが、地球の月のように低重力の地域となっている。

そんなボロボロの星が、なぜ崩壊もせず未だに惑星としての体裁を保っているかというところ……元々ペダニウムの埋蔵量が桁違いに多かったから、という点につきる。

ペダニウム星人が宇宙で初めて精錬加工に成功したが故に、かの星の名が冠されたこの重金属は、その加工性の悪さが示す通りの安定性を誇り、先の重力波の影響も少なく、周囲の地面がどんどん削れていくのを尻目に、その鉱脈だけが、組み上がった鉄筋のように地表へ露出し残された。さながら星の骨格標本だ。

この骨組みの非常識な堅さでもって、かろうじて歪な楕円形を維持しているのが、ペダニウム星なのだ。

……そして、これを惑星と呼んでも構わないかほとほと迷う代物に巣くっているのが……彼らだ。

その過酷さは想像を絶する。

まず単純に、使える大地が少ない。

ペダニウム以外の物質が残っているのは、偶々鉱脈に挟まれたり、覆われていた部分

を除けば、深く深くめぐり取られた赤道面の底か、太陽へ垂直に晒される事がなく、かろうじて浸食が遅い地軸周辺の両極地くらいにしかなく、海に至っては半分以上が濃硫酸のプールと化していた。

そんな環境に適応するために、否が応でも人体改造は必須であり、発展せざるを得なかった……というのが、先の彼らの医療水準の真実だ。

そして最低限の生命維持を、自分達を改造して確保した次に直面するのが、使える資源の圧倒的少なさ。

先に述べた通り、生半可な物質は殆どが洗い流されてしまったので……彼らにとっては、金やタンングステン、ジルコニア……そしてなにより上下左右見渡す限りに鉱脈ごと露出したペダニウムやウルトニウムこそが、生活を支えるベースメタルであり、逆に加工性の高い鉄や銅、アルミといった、地球でも比較的手に入りやすい金属は、軒並みレアメタル扱いなのである。

そして星でもっとも埋蔵量（半分以上は埋蔵ではないが）が多く、気兼ねなく使えるペダニウムは、周知の通り加工に難がある。宇宙で最もこの元素を使いこなしていると認識されているペダン星人ですら、ライントーン工法が発見されるまでは死蔵するしかなかった。

そんな金属の問題をどうやって彼らが解決したかと言うと……

マンパワーだ。

全てマンパワーでゴリ押しした。

いかに硬い物質であつたとしても、かつて地球防衛軍がそうしたように、一点に力を加え続けられれば、ごく僅かに摩擦し、変形する。

理論上は、ペダニウムとペダニウムをかわり合わせ続けられれば、打製石器のようなものが出来る。

そうして出来た打製石器でさらにペダニウムを打ち続けると、先程よりも精巧な打製石器が出来る。

以下、これを何度となく繰り返し事……ペダニウム製の道具や型が出来る。

すると、今度はペダニウム製の部品を造る事が出来……やがてペダニウム製の加工機が出来上がる。

ここまでこぎ着ければ、さらにペダニウムを効率よく加工でき……以下繰り返しせば、純ペダニウムのペダニウム工場が出来上がる……という寸法だ。

勿論のこと、こんなものは机上の空論で、一部で別の物質に頼らなくてはならないし、何より……途方もなく時間がかかる。

第一、一か所を叩き続けるという単純作業でも、そんな重労働を休息もなしに続けられるはずがない。普通は。

だが、彼らは先のバイオテクノロジーと人体改造手術によって自分たちの代謝を根本から作り変えてしまったのだ。

例えば地球の生物の大多数が呼吸をすれば、筋肉を動かした後に乳酸が精製される。こうして生まれた乳酸は肝臓に運ばれ別のエネルギーに生まれ変わるのだが……このコリ回路と呼ばれる代謝系を全身の細胞に埋め込んだ。それだけでなく、特殊な乳酸菌を体内に共生させ、通常の食物や呼吸から得られるエネルギーだけでなく、糖や乳酸から、直にエネルギーを取り出す事ができるようにしたのだ。

これらの解糖系と呼ばれる代謝は嫌気呼吸……つまり酸素の無い状態で呼吸できるようなものだ。そして実に都合の良い事に、彼らの星は先に述べた通り、低重力の星であり……大気を引き留める力もまた弱く、地表部分は殆ど無酸素に近いぐらい、空気の薄い星であったので、こちらの代謝をメインに据えた方がずっと効率的だったのだ。

おまけに低重力であるため、甲殻や筋肉を極限まで削って基礎代謝を低下させる事で、瞬発力の低下と引き換えに、持久力を担保しても、ギリギリその細い骨格を支える事ができたのである。

こうして、疲れを知らぬ肉体を得たバンダ星人達は、昼夜を問わず作業を続け、乳酸菌とその餌である糖度の高い液体をがぶ飲みしては作業をし、時には乳酸をそのまま取り入れ、さらに特殊な地域では硫酸すらも嫌気呼吸でエネルギーに変え、爆発的な速度

で産業を発達させた。もはや彼ら自身がメインの機械と化した重工業は素材の豊富さもあつて特に発達し、バンド星の床も、壁も、天井までもを工場が埋め尽くした。

そうして、通常の生物では到底成しえない速度でもって生産活動を行つて……当然の如く資源が枯渇した。

星全体を構成するペダニウムだけは、まだそこらじゅうに有り余っていたが、それ以外のあらゆる物質が底をつき始めたのだ。

人はペダニウムのみにて生きるに非ず。

困つた彼らは、優先度の低い部門の資材を、より優先度の高い部門へ回す事でなんとか、やりくりし始めた。

作つた機械を解体し、部品を鑄つぶして、新たな機械に作り替える。

ここから、偏執的なまでのリサイクル地獄。

不要と思われる道具は、全て供出し、他へ回す。

部品が壊れたら、新しいものを造るのではなく、その壊れた部品を材料にしてもう一度作り直す。

機械を人力に置き換えられる部分は、どんどん人力へ置き換える。

無駄は省く。省いて省いて切り捨てて、極限の極限まで必要部分だけに切り詰める。

彼らの勿体ない精神は筋金入りで、それは彼ら自身にも適用されるほど。

休みなく働き続ける彼らの肉体は、いかに疲れを知らないとはいえ、酷使するのであるから、その摩耗具合も半端ではない。

当然の如く寿命……もはや耐用年数と言い換えても差し支えないそれは、僅か10年にも満たない。

そんな事は彼らとて重々承知であるし、というよりも……耐用年数であるのだから、きつちりと決められているのだ。

彼らは皆一様に一分一秒単位で寿命が決められている。

そして、その終わりが近づいた者、もしくは不慮の事故で四肢が欠損したような個体は、自らの意思で浄化槽に赴いて……ドボンと溶解液に浸かる。

そうして、ドロドロに溶けて無数のタンパク質となった生命のスープは……再生槽にまた一匹のバンダ人として生まれ変わるのだ。

浄化槽に入る直前、彼らはコンピュータに繋がれて、その記憶を電子情報として吸い上げられる。

そして、再生槽からよっこいしょと這い上がってきた新人は、全てのバンダ星人の記憶を吸収したコンピュータに再び繋がれ、必要な知識をインストールするのだ。

これこそがバンダ星人における生命の連続性。

1個人の塩基配列を延々とコピーし続けるバド皇帝は、やがていつか自我がすりきれ

てしまうが、これならばそんな事は起こりえない。なにせ、全てのバンダ星人がコピーでありながらオリジナル。肉体の分解と再生を行う度に、知識が更新されていくのだ。まさに命の洗濯！

だが、リサイクルを極限まで行っても、星全体の資源量は変わらない、どこるか目減りするのは避けられないために、バンダ星人は新たな金属鉱脈を探す必要に迫られた。近場の小惑星等も掘り尽くし……星系外に鉄資源を求めて飛び出していったのである。

幸い、他の惑星においては、鉄をはじめとした彼らの欲しい資源がありふれているよ。うで、地下を掘り起こすまでもなく、そこらじゅうに転がっていた。

ただ、何故か彼らが採掘行為をしていると、その星の住民から攻撃を受けるので、資源回収装置を頑丈に作り直して行かなくてはならなかった。

頭部に設置した溶断機の出力も上げて、自衛用火器として転用出来るようにもしたが、一番は攻撃されないことである。

スチームに隠れて採掘を行えば、見つかる事は無く、攻撃もされない。

とはいえ、この星においては、霧を消してしまう技術があるようなので、次回の採掘からはもう使わないだろう。

なにせ、無駄だからだ。



そう、彼らは自身を改造し、自由に誕生……いや、製造されるようになってから、自己と他者の境界というのが、酷く希薄になってしまっていたのだ。

彼らにとっては自分達を含めて、生命であろうが機械であろうが、宇宙にあまねく全てのものが、一様に工業製品でしかない。

バンダ星人にとつても、そして彼らの盗掘行為（手当たり次第にそこら中の金属製品を搭乗者の有無に関わらず拾っていくが、悪気は一切無い）を受ける星々にとつても不幸だったのは、バンダ星人には言語があるにもかかわらず、それを駆使した会話という概念が存在しなかった事だ。

ネジと歯車が会話をする必要性があるか？

無駄だ。

ネジは持ち場をただ固定していれば良いし、歯車は延々とそこで回っておれば良いのだ。

そんなバンダ星人達が、言語を発する瞬間というのは、僅かに存在する。

それは不測の事態が起きた時。その発生を報告する為に彼らは声を上げる。

だが、それは虚空に向かつて呟くようなものでしかなく、それを聞いた周囲も、これから自分が行う作業の変更を手前勝手に告げるだけだ。

とてもではないが、会話と呼べるようなものではない。

故に、バンダ星人は十分に知的で、文明的ではあるものの、宇宙の大部分から知的文明であるとは見なされていない。

そしてそれを、バンダ星人は知りもしないし、気にしてもいない。

自分達の使っている金属が、ペダニウムという名で浸透している事すらも知らないだろう。仮に知ったとしても、特に憤慨したりせず、ただ粛々とそれを受け入れただろうが。

宇宙船のスピーカーから、傍受した放送が聞こえてくる。

『交通情報を申し上げます。今日は珍しく、甲州街道高尾山付近の混雑が激しく……』  
地球には良質な資源が沢山ある。

鉄も、燃料も、たんぱく質も。纏めて入手できる素晴らしい資源の箱。

これが纏まっている場所は、この放送が通達してくれるのだ。

貪欲なザリガニ達は、目前に差し出された餌の先に、紐が結わえられている事に気付かなかった。

誰も疑問を呈さなかったし、それに答える者もいなかったからだ。

……尤も、誰かが声を発したとしても、嘘を吐くと言う行為すらも理解出来なかったに違いないが。

## 大義ある戦い (VII)

「ウソつき、人間の科学を信じろだなんて……、あんなウソつきの言うことが信じられるもんか！ ふん！」

「オサムちゃん！」

「ダンさんは、ウソつきだ！ 僕は死ぬ。……僕は手術をして死んじゃうんだ！」

そこへ、柔和な笑みを浮かべたユグレ博士が現れる。

彼からすれば、手術の直前にこのような恐慌に陥る患者も何度か見たことがある。

安心させるように何度も頷くユグレ。

しかし、オサムは病室を飛び出し、逃走する。

「捕まえて下さい！」

「いけませんオサムちゃん！」

「離せ！ 離せたら！ 僕はダンが来なけりや嫌なんだ！ 離せたら！」

「オサム！」

「うるさあい！」

ウルトラ警備隊が見守る前で、金色のロボットが飛来した。

こちらの思惑通り、偽のラジオを聞きつけて、車を奪いに来たのだ！

脚部を折りたたんで姿勢を低くしたロボットは、行儀よくその場で食事を開始する。

用意された色とりどりの心づくしを、シオマネキを思わせる巨大な片手で引つ掴んでは、好き嫌いせずモリモリ平らげていく……それが毒入りだとは気づきもせずに。

「よし、そのまま隣だ……食べる、食べる……食べた!!」

ロボットの食事を双眼鏡で見張る俺。

原作じゃあ、乗用車ばかり食っていたから、スパイナートラックを食べてくれるか不安だったが、問題なく取り込んでくれて安心した。

出されたものを選び好みしないとはエライぞ。

しかし、あらかた食べて満足したのか、再びジェットに点火して離陸準備に入る。

結局食べたのは一台だけか……

用意できたスパイナートラックは三両。ロボットがどこから食事を開始して、車列の辺りまで食べ進むか分からなかったの、前と中央、そして後方にばらけて置くしかなかったのだ。

一つも食べられずに空振る可能性もあったのだから、それに比べたら随分マシだが……これはクレイジーゴンも纏めて爆破とはいかんだろうな……

颯爽と飛び立ち、宇宙ステーションに戻るロボット。

それを追うように、木々の合間から2機のウルトラガードが発進する。

機首に白鳥と猛虎がそれぞれペイントされた戦闘機が雲を抜けると、その先では特徴的な巨大船が、帰還した金色の車泥棒と連結しているところだった。

「隊長、宇宙ステーションに着きました」

「やりますか」

「もう少し、待て」

キリヤマが見つめるモニターでは、爆弾につけられた子機の移動が開始されたばかり。

今爆発させてしまうと、爆風の大部分が連結部から漏れて、あの大型船を破壊できるか分からない。

「あと、13分……今から行けば、何とか間に合う……」

「よし、爆破！」

「はい!!」

ステーションは内側から一瞬で膨張し、張り裂けるようにして大爆発。がちり固定されていたロボットも、連結ハッチが噴射口のように働いて、逃げ場を求めて猛烈に吹

き出した爆風の煽りをモロにくらい、凄まじい勢いで吹き飛ばされていった……

大質量の物体が谷間に叩き付けられ、轟音が鳴り響く。

なんとも呆れはてた事に、これだけの衝撃に晒されながら、未だに原型を保っている金色の歩行クレーン。

だが、どんなに頑丈な機械とて、ここまで乱雑に扱われては中の機構が無事では済まないだろう。

誰もが敵の撃破を確信したその時！

弾道ミサイルもかくやと言うべき発射音と共に、真下から黄金の塊が飛び上がってきた！

「ああ……っ！ ロボットが……」

信じられないといった様子のアマギが、ぽつりと漏らす。

指さす彼の声は若干震えていた。

このように強大な敵を放置して病院に向かう事など出来ない以上、もはや約束を守る事が叶わぬと悟るダン。

「オサム君、許してくれ……」

街の中心に、謎の機械生命が落着する。

着陸に適した平地でもなんでもなく、ビル街の直上に腰を落ち着けるなど、本来であれば絶対に採らないであろう選択肢だ。

大質量によって、鉄筋組みの建築物が容易く踏み潰され、斜めの状態で投げ出されるロボット。

しかし、尻餅をついた次の瞬間には、その場ですつくと立ち上がり、コンクリートジャングルを見渡す。

常にならない着地の失敗が、顔から火が出る程に恥ずかしかったのか、側頭部から突き出す円筒じみた排気筒から、てんでばらばらに蒸気や炎を噴射しつつ、ガシヤガシヤと体を揺すって移動を開始する大型作業機。

「うわああ!! 助けてくれ!」

突然の襲来でパニックに陥り、足元を逃げ惑う人々を一切気にも止めず、右手の採掘アームを鉋のように振るって、周囲の邪魔な木々を伐採していく。

……なんのために?

地球には、5 W 1 Hと呼ばれる言葉がある。

「When:いつ」「Where:どこで」「Who:だれが」「What:何を」「Why:なぜ」「How:どうする」

物事を分かりやすく提示する際によく使われる考え方であり、他者に仕事を指示する際も、これらの要点を明確にする事によつて、よりスムーズな意思疎通が可能とされる。

そしてそれは、AI制御の工業機械のプログラミングにおいても、基本的には変わらない。

柔軟な思考力を持つ人間よりも、よほど堅物で融通の利かない彼らコンピュータには、座標や時間、対象物など、必要な情報を過不足無く教えてやらねば、満足に仕事をこなす事もままならないからだ。

いつ? ……現在時刻14:51地球時間

どこで? ……現在座標《ポイントD38W》

だれが? ……当該機Ⅱ歩行型資源回収装置N040

なにを? ……対象物【地上走行用ロコモータ】

どうする? ……回収プロセス適用

では……なんのために?



5 W 1 H において、人間にとつては最重要視されるにも関わらず、彼ら機械には例外的に入力されない項目があるとすれば……それは『なぜ』である。

作業機械とは本来、特定の仕事をさせる為に作成されるものであり、その用途に沿った形状、動作になるよう設計されている。

そしてその道具達を、適切な場所に配置し、適切な仕事をさせるのはそれらを作った人間の役目であつて……『なぜそうするか』は必要がないからだ。

リングの皮を全自動で剥く機械があつたとして、そのリングを何の為に剥くかは使い手が決める事。機械が知る必要も、術もない。

自分で食べる為なのか、はたまた病人の見舞いの為なのか……少なくとも必要であるから電源を入れられた。

なんのためにそれを行うのか？ という部分は確かに物事の要点ではあるものの、機械群においては、その指令の発行元である人間達自身がそれを司っているからこそ、『なぜ』が未入力であつても正常な動作足り得る。

それはこの名も無きロボットについても同じであつた。

なんのために車を集めるのか？

それは作り手であるバンダ星人が鉄を欲していたからで、彼が回収した鉄はステーションに運ばれた後、別の工程でそれぞれの用途に沿った加工を成される筈であつた。

その為の指令は全て、バンダ星人達が下してくれたから、素直に従っていればそれで良かったのだ。

しかし今や彼の造物主はこの世に居ない。

ステーション諸共、粉微塵に吹き飛んでしまったから。

彼の体が特別頑丈に出来ていたが為に、彼は爆発から生き残った。

……生き残ってしまったのだ！

いつそ、あの時に機体制御機構も全て破壊されていれば、どんなに良かったことであろう。

与えられた頑健さ故に、彼は創造主達に殉じる事すら出来なかつたのである。

彼らのような機械は、正しく使われてこそ、その存在意義を満たせるというのに……理性を司る使用者諸共、自身のアイデンティティが空の彼方へ吹き飛んで、ぼつかり欠落してしまつたまま。

今や、彼に仕事を与えてくれる存在は居ない。誰も、彼の指令を更新してはくれなくなつた。

いくら車を集めても、それを欲する人たちはもう居ないのだと、そんな必要はないのだと、優しく声をかけてくれる者はもうどこにもいないのだ！

もはやあるのは、爆発の前に下されていた最後の、そして唯一の指令のみ。

『鉄を回収せよ』

だから彼は鉄を探す。

それが集まっている場所がどこかも知らないが、少なくともここではない。

前進する……なぜ？

多目的アームで前方のコンクリート塊を破壊する……なぜ？

前進する……なぜ？

レーザトーチを発射する……なぜ？

両脚部で障害物を踏みつぶす……なぜ？

前進する……なぜ？

……なぜ？

……なぜ？

なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？

なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？

なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？

なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？

なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？



？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？  
 なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？  
 なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？  
 なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？  
 なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？  
 なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？  
 なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？  
 なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？  
 なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？  
 なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？  
 なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？

……なんのために？

従者が主人を失ってはお終いだ。

……彼は正しく、狂ってしまっていた。

しかしその時、暴れ回るロボットの装甲を、突如として爆炎が包み込む！

いったい何事かと、逃げ回る人々が空を見上げれば、戦闘機がビルの谷間を縫って駆け抜けていくではないか！

地上の市民たちからは、迷彩塗装の施されていない機体下部が、炎を反射してきらりと煌めくのがしつかりと見えた！

人類の勇気は銀の羽！

「……あッ！ 見ろ！ ウルトトラ警備隊だ！」

「ウルトラ警備隊が来てくれたぞ！」

傍若無人なロボットを倒す為に、ウルトラガードが飛来したのだ！

ぐるりと旋回する機首には、黄色い猛虎の姿がペイントされている……あれは二番機だ。

防衛軍でも屈指の耐G性能を誇るフルハシ、ダン両隊員のペアであれば、機体性能の限界まで加速した超音速飛行が可能なのである。

「……ステーションを破壊したのに、まだ動いている……見て下さい、完全に暴走状態です！」

「ちくしょう！　なんてしぶてえ野郎だ……まるでキチガイロボットじゃねえか！

やつこさん、爆破のシヨックで頭のネジを左向きに巻いちまったらしい！」

とはいえ、ウルトラガードには機銃以外の武装はロケットランチャーだけ。

敵の円盤を迎撃するならともかく、巨大な怪獣と正面戦闘するようには設計されていないのだ。

それでもやるしかない！

懸架されたランチャーが立て続けに火を噴いて、巨蟹の甲羅にロケットの雨を降らせる。

一向に歩みを止めないロボットに、今度は正面から爆撃の嵐をお見舞いだ！

鋭い牙をむき出しにして、虎が蟹へと飛び掛かる。

本来であれば、回収作業中ならいざ知らず、装甲に対して効果の薄い攻撃など無視するところであるが、足を止めた巨大機械は、お返しとばかりにレーザーを発射してきた。

今の彼は、肉体を制御する理性オペレーターを失っているので、全ての攻撃に対して反撃する。

もはやcrazyを通り越してmadであるとも言えるが、警備隊にとつては朗報だ。

少なくとも攻撃を加える事で、注意を引いて足止めする事が出来るのだから。そこへ白鳥がポイントされた一号機が合流する。

「なんとという置き土産だ……」

キリヤマは、眼下に広がる街の被害を確認して、苦虫を噛み潰した。

ただ車をムシヤムシヤと食んでいただけの敵が、いかに慎重しかつたのかを理解せざるを得なかったからだ。

体の至る所から煙や蒸気を吹き出しながら、ハサミを振り上げ体を揺らし、轟音と共に街を破壊していく姿は、まるで二足歩行するスクラップ工場！

二機が交互に挟み撃ちを仕掛けるも、敵の分厚い装甲を打ち破れる気配は全くない。少なくともステーションの大爆発を至近距離で食らったのであるから、なんらかのダメージがあるはずなのだが……自分達の放つ攻撃が、手負いの獣への最期の一押しになる事を願いつつ、猛攻をくわえる警備隊。

だが、その焦燥が仇となったのか、均衡が崩れる時が来た。

ロボットの頭部が怪しく輝き、青白い光線を放射する。

この攻撃は今までも繰り返されてきたが、敵の射撃システムではウルトラガードの機動を捉えられない筈だった。

しかし機体を追いかけるように撃たれていた今までは違い、今回の光線は狙いが大



大きく外れているではないか。

爆発のショックも含めて、射撃システムが遂に異常を来たし始めたのかもしれないが……不幸な事に、それは二号機の旋回先を薙ぎ払っていたのである。

移動先に攻撃を置かれた……つまり不意の偏差射撃を食らったフルハシ機は、咄嗟に回避する事も出来ない。

ウルトラガードの薄い装甲では、光線を弾き返す事も出来ず、黒煙に包まれながら墜落していく……

「二号機！ どうした、二号機！」

「ぐあ……！……ちつくししょう……！」

操縦不能の機体から、寸でのところで脱出したダンとフルハシ。

背後に落ちた戦闘機の事など知らんぷりで、そのまま街を破壊し続けるロボット。

二人は地上から敵の侵攻を阻止するべく、敵の側面にまわり込もうするが……

「ダン！ 危ない！」

シオマネキの如き巨大なハサミが、力任せにビルを叩き壊すと、大量の瓦礫が飛び散った。

そしてコンクリートの飛礫達は、狭い路地を走り抜けようとしていたダンの頭上に、めいめいっばい降り注いだのだ！

「うあッああッー!!」

「ダン！ おいダン！ しっかりしろ！」

頭部からだくだくと血を流し、フルハシの肩をかりながら、傷ついた足を引き摺って歩くダン。

白い病院の廊下を、滴る血液が点々と汚していく。

フルハシが手漉きの医師を探して視線を彷徨わせるも、辺りには傷付いた人々。

ロボットの襲来で発生した大量の怪我人が運び込まれていた。

浴衣姿の女性が、悲痛な顔で家族に電話をかけている。

たった1機の暴走機械によって、これだけ多くの人々が人生を狂わされてしまったのだ。

角を曲がった先で、見知った顔と何事かを相談する医者と看護婦を見つけたフルハシは思わず声を上げた。

恐らく避難計画について話していたのだろうが、それよりもダンは一刻を争う重傷なのだ。

担がれた男の一目で分かる負傷具合に、血相を変えて駆け寄ってくる医師達とアンヌ。

「あっ！ 先生！ お願いします！」

「おいキミ！ どうしました!?!」

「大丈夫です……」

「ダン!?!」

「ダンを頼んだぞアンヌ！」

アンヌにダンを預けると、エレクトロHガンを担いで戦場に戻っていくフルハシ。

「アンヌ、オサム君は……!?!」

「えっ……!?!」

自身が負傷して尚も、ダンの口をついて出たのは、少年の名であった。

オロオロするアンヌに支えられるまま、手術室に飛び込むダン。

「オサム君!!」

「……ダン……?」

麻醉で朦朧とする意識の中で、待ち人の声に反応を返すオサム少年。

まだ手術が始まる前とは言え、清潔が信条の手術室に、砂埃と血で汚れた男が乱入しては、周囲の医師達から颯唳の視線が突き刺さる事は免れなかったが……ダンはそれす

らも平然と受け止めた上で、オサムに聞こえるくらいに声を張り上げて謝罪し、主治医に懇願した。

「待たせてすまなかつた……！ 必ず間に合います！ ……お願いします！」

マスクで隠れたユグレ博士の表情は伺いしれなかつたが、彼が真摯な瞳で深い頷きを返すのを確認してから、ダンは転げるように退出する。

それを追って手術室から飛び出すユキコ。

彼女が見たのは、つい先ほどオサムに力強く声をかけた時とはうって変わり、憔悴した様子で扉にもたれ、荒い息で喘ぐダンの姿であつた。

「ダンさん、手当てを受けてください！」

「いや、僕のキズのために……来たと……オサム君に思われたくないんです……」

「もういいんです。オサムは手術を受けています。さ、ダンさん！」

「さあ、手当てをしましよ」

「ウツ……があ、ぐっ……」

頭を押さえ、床に膝を突く負傷兵。

ところが彼らの耳に、不穏な重低音が聞こえてくる……

……CLANG！ ……CLANG！

「ハッ……、あれはロボットの……」

悪魔の足音は、着実にこちらへと近づいてきていた……

「隊長、ロボットが……！　大変だ、あそこには確かオサム君の入院してる病院が！」  
「何っ!？」

焦るキリヤマとアマギ。

狂ったように前進を続けるロボットの進行方向には、なんと病院があるではないか！  
避難は進められているだろうが、手術中のオサムをはじめ、ベッドから動く事の出来ない重病人が沢山いるだろう。

だめだ、このままでは!!

……その時、ロボットの体が大きく傾いで、凄まじい勢いで倒れこんだ!

濛々と立ち上る土煙の向こうで、大蟹の足が地面を踏み抜いているのが見て取れる。

いったいこれはどうしたことか……? ?

困惑する隊長機の通信機に、場違いに陽気な声が飛び込んだ。

「待たせてすみませんでした！ 隊長！」

アスファルトに亀裂を走らせ、銀色の円錐が屹立する。

地下のインフラをズタズタに引き裂いて、地中から現れた漆黒の機体が、病院を背に立ち塞がった！

## 大義ある戦い (VIII)

「マグマライザーただいま現着！」

嘘です。

ちよつと先について、こそこそ落とし穴掘ってました。

スパイナーの運搬にかこつけて、対U—T O M戦術の要だと主張し、出動させておいたのさ。

キングジョー戦での実績があるから、すんなりO Kが出たのはラッキーだったぜ。

隊長達が離陸したと同時に、よーいドンで病院目指してまっしぐらよ。

地上走行と地中潜航を駆使してなんとか間に合った。

そうでもしないと、マグマライザーの足でジェットに先回りなんてとてもとても……

クレージーゴンが病院目掛けて進んで来る事が分かっているからこそ、使える手だな。

隊長達の向かった先と、病院を結んだ直線状に穴掘っておけばいいんだからさ。

その上、クレージーゴンはそもそも兵器じゃないし、コントロール不能の暴走状態だ。キングジョーにはあんまり効かなかった落とし穴戦法も、そこまで転倒対策してない

相手ならバツチり決まるって寸法よ!!

お前の人形が自立してるところなんか、一回も見たことがない俺は知ってるんだぞ。上半身に比べて下半身が貧弱過ぎる事が、お前の弱点だクレイジーゴン!

……地下の配管? 知らんがな。

コイツが暴れ続けたらさらに酷い事になるんだから、必要経費と割り切ってもらえないか。

いわゆるコラテラル・ダメージというやつだな。

ヤナガワ参謀には養命酒でも御供えしとこう。

「おいおい、誰かと思えば……こいつあ派手にやったなソガ! いきなり地面からドリルがおっ立ったもんだから、たまげたぞ」

「へへっ、俺がやらなきゃ誰がやるって話ですよ」

マグマの操縦席にフルハシ隊員が乗り込んでくる。

なんでわざわざこんなもん持ってきたかって?

対クレイジーゴン兵器ってだけじゃなく、墜落したフルハシ隊員を自然に回収するためだ。

この人にエレクトロガン持たせたままフラフラさせてると、いつステップショットが発射されてしまうか分かったもんじゃないからな。



「しかし、転ばせたはいいが……どうやってトドメを刺す？ まだ動いてるぞアイツ」

「ふふふ……お忘れですか先輩？ マグマライザーはね……レーザーが撃てるんですよ！」

「……知ってらあ、それくらい」

俺を白眼視してくるフルハシ隊員に向けてチツチツチツ……と指を振る。

「わかつてないなあ！ マグマライザーの強みはまさにそこなんですよ！」

無補給で地下を掘り進められる潤沢なジエネレーター出力。重量制限を気にせず搭載できた大型のレーザー発振器。

これがあるからこそ、通常の破壊光線のみならず、岩盤を破砕する超振動波レーザーと撃ち分ける事が出来るのだ。

例えメテオールレベルであろうとも、多種多様なレーザーを搭載できる拡張性にも、マグマライザーの真価がある。

なので……

「MHサイクル光線が撃てます！」

「……なんだいそりやあ？」

「こいつの恐ろしさはね、フルハシ隊員が一番よくわかってる筈です……なんせ、カナン星人のオーロラレーザーを解析した新兵器なんですからね！」

「何だつて!？」

カナン星人のオーロラ光線と言えば、ホーク3号を操縦不能にして、フルハシ隊員をあわや大爆死一步手前まで追い込んだ兵器である。

原作ではウインダムすら為す術なく操られ、逆にダンを襲うように仕向ける事すら可能なのだから、威力は折り紙つきだ。

この世界じゃ、なぜかダンがウインダムじゃなくてミクラスを使ったせいで、活躍する暇もなく退場したらしいけどな、カナン星人。

実はこれが使えれば、軒並み強敵揃いのロボット怪獣達が楽勝だろうな……とってはいたものの、流用するのはハナから諦めていた。

なんせカナン星人のロケットといえば、原作でセブンのワイドショット食らって爆発四散しちゃうので、回収なんか出来っこないと思いついていたからだ。

ところがどっこい……リッガー戦におけるアギラの活躍について喋っていたら、アンヌがふと思いついたかのようにミクラスの話を出してきたもんだから、びっくりしたね。

聞いた時は『へー、だからガンダウの時はウインダムだったのかー』なんて思っていたが、しばらくしてから『……もしかして、北極にカナンロケット沈んでる!？』と気付つき、慌ててサルベージ依頼を捻じ込んだ。

そしたらなんと、丸ごとサルベージできちゃったのである……カナン星人のロケットが。

後はアマギを急かしに急かして完成したのがこの「M<sup>MadHoney</sup> H サイクル光線」だ。これでどんな電子機器もイチコロよ！

アンヌ、もう少し早く教えてくれれば、恐竜戦車もリッガーも瞬殺だったのに……とは言え、伯父さんからの又聞きだもんな、仕方ない。

むしろ巡り巡ってオレの耳に入ってきた幸運を喜ぼうではないか。

一番大事なクレージーゴンに間に合ったのだから。

「というわけで……新型レーザーが撃てます！」

「やっちまえー！」

マグマの鼻先から、七色に煌めく美しい光の帯が発射され、クレージーゴンの頭部を覆う。

これにて第38話、完!!

オーロラを浴びてもぞもぞとのたうつ気狂いロボット。

……ん？ もぞもぞで？

「……おい、効いてねえんじゃねえか？」

「あれー？ おつかしいなあ……機械だったら絶対効くはずなのに……あ!？」  
「……おい、なんだその『あつ』ってのは……」

「なるほどねー……あーはいはいそっかあ……完全に理解したわ」

レーザーは効いている。

確実に効いているのだが……効いても意味がないだけだ。

MHサイクル光線の効果は機械を狂わせる事……じゃなくて、制御できなくするだけなんだな……きつと。

てつきりコンピュータがオシャカになるとか、そういうカンジのものだとばかり思っていたが……よくよく考えりや計器も全部ダメになったら、その時点でホーク3号は真つ逆さまに墜落するし、ウインダムもアツパラパーで泡吹いて気絶する筈で……単にカナン星人以外の指令を受け付けなくなるだけだ。

他の機能は殆どそのままという事は……

そりやあくレーザーゴンには効かんわな。

なんせコイツは最初っから狂ってる。

司令塔を失ったから暴走してるわけで……ぶつちやけ最初っから光線食らったのと同じ状態だったわけか。



『ジューアツ!!』

コックピットの視界を真つ赤な大木のようなふくらはぎが覆い隠し、凄まじい振動がマグマライザーを揺らす。

セブンが俺達の前に立ちはだかつたのだ!!

「おおッ! セブン! ……おい、なんだかふらついてねえか?」

「くそッ……とにかく後退しましょう!!」

やはりダンの怪我が、セブンになっても反映されているんだ。

ウルトラガードの弾薬が尽きてしまったキリヤマとアマギは、地上に降りて病院を指していた。

マグマライザーとセブンがなんとか敵を押し留めているうちに、避難を完了させなくてはならない!

だが……

《バルタン星人のU—TOMが近づいています。全員大至急退避してください。重症患者はスタッフの指示に従って屋上へ退避してください。防衛軍の収容ヘリが到着しま

す、そのままお待ちください。バルタン星人の……」

「これは……」

思わず言葉を失う隊長。

アナウンスの鳴り響くエントランスは、人々でごった返していた。

医師や防衛隊員が一丸となって患者を運び出しているが……キリヤマには一目で分かってしまったのだ。間に合わない。

防衛隊員は、ロボットの侵攻ルートや次の輸送先が分かっている、どの患者にどの処置や施設が相応しいかまでは分からない。

逆に、医師や看護婦達には患者に必要な処置が分かっている、避難計画の全容までは把握できていない。

そのどちらにも精通しているアンヌが、両者の間に入って仲立ちをすることで、なんとか大混乱だけは避けられているもの……やはり全てを救う事は出来ないだろう。

こうなったら、ウルトラガンで立ち向かうか……

拳を握りしめて中庭に走る二人。

しかし、角を曲がったところで、見慣れた銀の輝きが飛び込んできた。

「こっちです！ 正門に防衛軍のトラックが来ています！ 皆さん慌てないで！ スロープは車椅子に譲ってください！ お見舞いの方は松葉杖の方を介助してください

!!

ポインターのスピーカーを使って、避難誘導をする防衛隊員がいるではないか。

その声と顔には、キリヤマも神戸事変の折に見覚えがある。

確かソガが随分と目をかけていた新兵だ。しかし、主計課に転属したはずの彼が……なぜこんなところに？

「キミ、キミ！ このポインターはどうした!？」

「ハッ!? キリヤマ隊長！ 手術が長引いても、ユウグレ博士が飛行機に間に合うよう空港までお送りするようにと……ソガ隊員が……」

「あいつ……相変わらず気障な奴だ」

「粹と言ってやれ。おかげで我々は丸腰だけは免れそうだ。……キミ、すまないがこのポインターは使わせて貰うぞ！」

「もちろんどうぞ！ なんなりとお使いください！ ……ご武運を、お祈りしております！」

神妙な顔で敬礼した青年隊員は、言うが早いか、車椅子を階段から降ろそうとする看護婦の方へと駆け寄っていった。

「……アマギ、ここは彼らに任せよう。なるべく時間を稼ぐぞ！」

「了解！」



手術室の緊急ランプが光る。

先程から、ずっと鳴りっぱなしだ。

ランプに意識を取られていた助手は、ユグレが無言で剪刀を要求していた事に気がつき、慌てて目的の器具を手渡す。

僅かにタイミングが遅れた事を、冷静な主治医は叱責しなかった。

……理由は分かっている。

朝に襲ってきたモンスターが、また暴れているのだ。

しかし、ユグレはそのような事は一切気にせず、ただただ手術に集中していた。

例えば火の海になろうが、自分がやる事は変わらない。目の前の命を救うだけ。

スギサキ夫妻の医療器具には、ユグレ自身何度も世話になってきたし、彼では救えぬ患者を、代わりに救ってくれている。その夫妻の息子が、このような病に侵されるなど、なんとという皮肉であろうか。

彼らの人工心臓が、なによりも愛する息子には転用できないと知った時、どれほど悔しかった事であろう！

そんな彼らの屈辱を他ならぬ自分が晴らせるというのならば、その為にスケジュール

を組む事をどうして断れる道理がある？

医学の発展に多大な献身をした彼らに対して、正当な報酬が支払われる事を、神が御許しにならない筈がない。

それが彼の信条であるし、なによりもユグレは、この病院が踏みつぶされるような事は決してないと信じていた。

なぜなら、あの勇敢な女戦士が言ったのである。

「私達の仲間が、きつとあのロボットを止めてみせます」と。

彼女の瞳に、自身と同じ professional だけが持つ、覚悟と信念の輝きを見たユグレには、その言葉を深く信じる事が出来るといふ確信があった。

自分が臓器移植において世界一の専門医だといふならば、彼らは怪獣退治の専門家だ。

その彼女が言うのであれば、余人がその言葉を疑う事など決して出来はすまい。だから、スタッフ達にも安心して手術に集中して欲しい。

ユグレのエゴに、この極東の職員達を命懸けで付き合わせている自覚はあるが、手術は一人では成功させられない。尊い命を救うためには、彼ら彼女らの協力が必要不可欠なのだ。

そして、ユグレが手術から逃げられない理由はもう一つある。

なによりも……先程この手術室に飛び込んできた彼！

ユグレには、彼の暴挙を言語道断と切つて捨てられなかった。

あの傷だらけの隊員が、麻酔で意識の混濁した少年に言葉をかけた時、オサムの拍動が安定し、手術を受け入れる態勢を整えた事を、熟練の外科医は感じ取っていたのだ。

ユグレには、彼らに何があつたのかは分からない。それでも、二人の間には何らかの oath<sup>誓</sup>があつたのであろうという事は間違いない！

そして、あの青年は約束を守つた。彼は責務を果たしたので！

であるならば、あの隊員に敬意を表すと同時に、ユグレも自身の責務を全うしなくてはならないだろう。

なにせ、懇願する彼に領きを返してしまつたから。

私は誓<sup>I swear</sup>つたのだ、彼を助けると！

側頭部の煙突から、炎を吹き出し、凄まじい馬力でセブンを投げ飛ばしてしまふクレージーゴン。

装甲の輝きを煤で汚しながらも、一切足を止める事無く、ただただ前進しては街に蒸気と破壊をまき散らしていくその威容はまさに、廃工場が直立したかの如く！

ビルの瓦礫から起き上がったセブンが、エメリウム光線を発射するが、金色の甲羅は火花を盛大に噴き上げるだけで、小さな焦げ跡がついただけだ。

ダメーじと失望によつて、がつくりと膝をつく赤い戦士。

「くそっ！ くそっ！ なんでこけないんだよ！ おかしいだろうがあああああ  
ああああ！！！」

後退するマグマライザーから、各種レーザーが乱射されるも効果は無し。

ソガが怒り狂った咆哮を上げる。

「確かにおかしい……」

その様子を見ていたアマギがぼつりと呟いた。

いくら色が同じとは言え、ソガのようにキングジョーと同一視するのも安易な話だが、数少ない歩行兵器のサンプルである事は間違いない。

そうして比較してみた時に……やはりあのロボットは不可解だ。

あまりにもバランスが悪い。

普段の我々が何の気なしに行っているから、あまり実感がわかないが、直立して歩行するというのは、本来は非常に高度な技術を要する。

件のキングジョーですら、歩行補助に関する技術や対策を詰め込まれていて尚、足回りの弱さが弱点の一つとなった。地球の技術だけでは、未だに残骸を直立させる目途す

ら立っていないのだ。

同じく二足歩行のU-8も、機動性を犠牲にした頑丈な足腰に加え、機体制御に宇宙竜の高度な電子頭脳を積んでようやく実現している有様だ。その電子頭脳が狂ってしまえば、たちまち転倒は免れない。

人型に限りなく近いそれらですら……である。ところがどうだあのロボットは。

まさしく異形というほかなく、とても均整がとれているとは思えない。

本来であれば、歩行する事は疎か、セブンと格闘してあまつさえ競り勝つなど、絶対にありえない筈なのだ。

あのような巨体を支えるには、それこそモーター通りに多脚型にでもすれば良かったものを……だが現実はどうだ、なんらかの制御機構で問題点をクリアしているではないか。

長大なアームを尻尾や第三の足とできるならば、あの華奢な足もまあ分かる。必要最低限の本数というのも、脚部を格納して飛行するという設計的にはメリットになり得るからだ。

全体的に見れば、どうにもちぐはぐで、非合理的にしか見えないデザインも、問題点に一つ一つ焦点を絞ってみていけば、なるほどそれなりの合理性と最低限度を担保しているという、実に不可思議な設計思想。

エンジニアとしてのアマギの直感が告げていた。あのロボットは完成している……と。

では……いったい何処に自分は引つ掛かっているのか？

そうしてロボットを敵ではなく、一つの作品として捉えた時に……彼の脳裏に天啓のように閃くものがあつた。

「そうか……左腕だ!!」

あの機械の左腕部は、強大な右腕に比べてあまりにも矮小だ。それが一層、機体のアンバランスさを招く一因になっているくらいには。

だが、地球の甲殻類にもヤドカリやロボスターのように、左右のハサミで形状の違うものがある。

アマギもたまさか、それらの存在を知っていた為に無意識のうちに『そういうもの』だと受け止めてしまっていたが……違う。

あれが生物であれば、使わない器官が退化するという事もあるだろう。

だが、どれだけ外見が有機的であつてもあれは機械だ!

機械であれば、その形状にはなんらかの作為がある。

しかし……あの左腕はどうだ？

作業にも戦闘にも、なんの寄与もしていないではないか。

先程に引き合いに出したような生物たちとて、取り回しの悪い巨大なハサミはもっぱら威嚇や防御用、大雑把な用途で使うのであって、餌を切り取って口に運んだりといった細々とした作業は片側の小さなハサミの役目というふうに使分けられるものだ。

しかし、あいにくとアマギが見た限り、ロボットの左側がなんらかの形で役に立っているところを見たことが無い。

あの大蟹は、食事も戦闘も、全て右手のハサミ一本で行うのである！

それならばいっその事、役に立たないお飾りの左手など取っ払ってしまった方が潔い。生物でなければ名残を残しておく必要もない。軽量化やコストカットであればなおさらだ。

そう言った制限を考えないのであれば、あの強力な右腕をもう一本つけてやった方が余程いい。そうすれば作業効率も戦闘力も単純に二倍。機体バランスも左右の収まりがつくというもの。

それなのに……あの小さな左腕の付け根は、蛇腹状の軟質な素材で覆われており、明らかに可動域が確保してあるではないか！

なんの役にも立たなさそうな短い左手が、自由に動くことにこそ、意味があるのだ!!

アマギが目を凝らすその先で、巨体をふらつかせながらも、倒れこんだセブンの背中を、二本の足で一步一步しっかりと踏みしめて、真つ赤な段差を難無く乗り越えていくロボット。

その左腕が前後にぐわんぐわんと大きく揺動するのを見て、彼の疑惑は確信に変わった。

「隊長、左腕です！ 奴の左腕部を狙ってください！」

「なにつ、左腕だと？」

「きつとあの左腕が、振動型のジャイロスコープになってるんです!! 奴の腹は車を納めるために空っぽなはず。姿勢制御のセンサーは、外付けするしかなかったんですよ！」

「聞いたか！ 攻撃を奴の左腕部の付け根に集中せよ！」

「了解！」

マグマライザーとポインターから、光の銚が怪物の左腕目掛けて放たれる。

しかしいかに可動部とはいえ、とびきり頑丈に作られた作業機械の外装が、容易く貫けるわけもない。

なんの効果も及ぼせない。

ただ、その様子を見ていた者からすれば、攻撃がどこに向けて加えられているのかが、



狙いの正確さ故に一目瞭然であった。

セブンには、その具体的な理由も、発揮される効果の詳細すらも判然としなかったが、彼らがどこを壊したいのか、という意図だけは、はっきりと見て取ることが出来たのだ！

『デュオ!!』

背後から飛びついた戦士が、敵の左側面にとつてつけられた音叉のような部分を両手でしっかりと握りしめ、全体重をかけて後ろ側へ引き倒そうとする。

それにつられ、僅かに空を切るロボットの片足。いままでびくともしなかつた大蟹が僅かにとはいえ、よろめいたのだ！

ここが踏ん張りどころだと理解したセブンは、両腕に万力のような力を込めると同時に、額に収束させたエメリウムエネルギーを、これでもかと手元の部品の接合部へ照射した。

アーク溶接もかくやというべき盛大な火花が辺りへ飛び散り、セブンの顔面にも容赦なく襲い掛かる。

溶接工のように仮面をつけていない彼はその飛沫をモロに浴びるが、それでも一切攻撃の手を緩めない。

そこへ再び警備隊のレーザーが合流し、計3本の光条が、ただ一点に集中する。

接合部が赤熱し、周囲の空気が蜃気楼のように揺らめいて、警備隊からは大蟹と戦士の姿がぐにやりと曲がって見えた。

『ダー！！』

裂帛の気合と共に、セブンがレバーを引き倒す！

メキメキツと何かの軸が押し折れる盛大な破碎音が轟き、ロボットの左腕がぶらんと力無く垂れ下がる。

「今だー！」

「マグマライザー、超振動波ー！」

大きくたたたらを踏んだクレージーゴンは、足元に突如として現れた大穴めがけて金の草鞋を踏み外すと、そのままアスファルトの中に下半身をすっぽりと埋め込んでしまった。

## 大義ある戦い (IX)

「いよっしやあああああ！ 虎の仇だ！ ざまあみさらせクレイジーゴン！」

「クレ…………？ なんだって？」

「ああ、クレイジークレイゴンのクレイジーゴンですよ。いつまでもバルタンのユートムなんて呼んでられないでしょう？」

「…………けっ、あんなもん『きちがいロボット』で充分でい」

いやいや、キチ○イ呼ばわりは色々とマズいんだってば！

いやーしかし…………一時はどうなる事かと思っただが、なんとかなって良かった良かった。

まさかあんなちっこい左手がセンサー系だなんてな。

ふっつーに単なるデザインだと思っただけスルーしていた。

アマギ様々だわ。

ふう…………と息を吐いて、シートにもたれ込む。

「おい、何をひと心地ついてやがる。まだ終わっちゃいねえぞ」

「え？ いやいや、終わりですよ。ほら、アイツはもう立つ事はおろか、穴から出られま

せんし」

「……バツキヤロウ!! 奴は動いてる! まだ生きてるんだぞー!」

眉を吊り上げ、穴の中でもがくクレージーゴンを指差すフルハシ。

滅茶滅茶に振り回される大型アームへセブンが取り付いて、なんとかしようとするが、力負けして振りほどかれるのを繰り返していた。

ハサミの先端が掠ったビルが砕け、乱射された怪光線によって道路が灼けていく。

「そりゃあ周辺の建物に被害は出るでしょうが、エネルギーが切れるか機体ダメージが蓄積すれば、そのうち止まりますよ。さつきからセブンがもぎやすいように、こうして右腕の付け根にレーザー照射してるじゃないですか」

「お前……何を呑気な事を言ってる……忘れたのか? あのく、クレ……クレバーゴンは……飛べるんだぞー!」

「あ……」

「奴がああして穴から出て来ねえのはな、なんとも俺達にとっては運のいいことに事に奴が『自分は飛べるんだ』ってことを、墜落のショックでお前みてえにただ忘れちまつただけさ! だがな、それをフとした拍子に思い出して……たちまち奴は、あのですげえジェットで飛び出してくる! そのうえ、もうアイツの balanサーはイカれちまつてると来たもんだ。まともに飛べるわけがねえ。どこに落ちるか分かったもん

じゃない！俺達の頭を飛び越えて、そのまま後ろの病院に突っ込んでいく可能性だってあるんだ！あの怪獣は、とつとつシメてやらねえとならないんだよ！」

「なるほど……」

フルハシ隊員の力説する事はもつともだ。しかし……

「じゃあどうするってんですか。俺達に出来る事なんて……せいぜい食べ残しのスパイナートラックを持って来るくらいですかね」

「いったいどれだけ時間がかかると思ってるんだ。その間に奴が目を覚ましたらどうする！」

「……でしたらやっぱり俺達にできるのはここまでです。クレージーゴンを解体するのはセブンに任せておきましょう。彼は時間制限ないわけですから。満足するまでほつときましようよ」

「馬鹿言ってるじゃねえ!! お前、敵をセブンに丸投げするつもりか!! 彼が病院を守るために戦ってるのが分からないお前じゃないだろ。今のセブンは俺達から見ても明らかに弱ってる。そりゃあ、馬鹿みてえに堅い剛腕で、何度もぶつ叩かれりやあ当然だ。仲間が一人で戦っているのを、ただ見ていろなんて、一体どうしちゃったんだ? 何を拗ねてやがる!」

「別に拗ねとりやしませんよつ! でもね、実際問題として俺達の武器はちつとも効き

やしないんですから、手を出したくても出しようがないじゃありませんか！ そんな状況で奴にもういいから帰れとは言えないでしょうが！ セブンからしてみても、足元でウロチヨロされるよりはよっぽど戦い易いでしょうよ！」

「……なあんだ、そんな事か。だつたら俺にいい案がある。アレをしろ！ 奴の下つ腹を！」

ニヤリと笑つたフルハシが、得意げに指さした先。双眼鏡でよくよく観察すると……シヤッター部分の下側が、少しだけひしゃげて捲れあがつているのが見えた。

……なるほど、スパイナーでかさました爆風が、ほんのちよつとだけクレージーゴンを傷つけていたのか。

「あそこを狙えつて？」

「いいや違うね……せつかく何か挿し込むとつかかりが出来たんだ。このマグマライザーのドリルを突っ込んで、どてつばらに大穴開けてやりやあい！ そんなでもって、中から虎の子の地底魚雷を一発ドカンと叩き込んでやるのさ！ 兄貴達は、いつか現れた金ぴかの地底怪獣に、この地底魚雷をブチ込んで退治した事があるらしい。奴もお詠え向きに金ぴかだあ。ご利益にあやかろうってわけよ！」

「……ハア……」

ウキウキと自慢げに主張するフルハシ隊員に対して、思わずため息を漏らすソガ。

「やめときましよう。ほら、あれを見て見て下さいよ」

俺達の目の前で、セブンの放ったアイスラッガーが、甲高い音で弾き返される。

「あれも効かないとなりやあ、多分クレージーゴンはペダニウム製です。いくら薄いシャツター部分であろうと、マグマのドリルが効かないのは実証済み、無駄ですよ。スパイナーの爆発力が何ギガトンか知りませんが、それでもちよつとだけ変形させるのが精いっぱいなんですから。そんな危ない事はやめて……」

「いい加減にしてくれっ!!」

突然の大声に、ぼかんとした表情のまま固まるソガ。

ハンドルを放して、ぐるりとこちらをむいたフルハシは眉を吊り上げ、凄まじい怒りの形相で、同僚を睨みつけていた。

「てめえ……俺をバカにしてんだろ? ああ?」

「馬鹿につて……あのねえ、俺は別に事実を述べているだけであつて、こんな真面目な場面で茶化してるわけじゃないでしょうが!」

「そういう事じゃねえっ!! 俺がお前やアマギなんかよりもずつと頭が悪くて、考えが浅いつてのは誰でも知つてる事さ、俺だつてバカ呼ばわりにこれっぽつちも文句はねえさ。そんな話じゃねえんだよ。それでもな、『やつても無駄だからやめておきましょう』とは、どういふ了見なんだ? だつたらお前がもつとイイ案を考えてみやがれつてん

だ。そのお前がもう打つ手無しだとお手上げだから、じゃあこうするしかねえと言つてんだよ。やれる事がねえんじゃないかと、やれる事はあるんだよ！ それを危ないからやめろたあ、どういうこつた、ええ？」

「当たり前でしょうが！ そんな無茶な作戦に命をかけるなんてコスパが悪すぎると言つてんですよ！」

「……お前がいつも、俺達を心配して言つてるのは重々分かつてる。……でもな、お前は俺のおふくろか？ 違うだろうが？ なんで30も過ぎた男が、親でもねえ奴にいちいち心配されなきゃなんねえ！ こちとら本物のおふくろが止めるまでもなく、いつでも死ぬ覚悟なんざとつくにした上でやってんだ。おめえさつきダンに言つたよな？ 俺達の仕事は、『怪獣を倒す事だぞ』つて！ おう大正解だ！ じゃあ最期までキツチリ責任もつてトドメを刺して、ピクリとも動かなくなつてからようやく帰れるんだよ。そういう仕事をやってんだよ俺達は！ 俺は別に誰かに嫌々戦わされてるわけじゃねえ。危ないからやめろだつて……？ そういうのをな、余計なお世話つてんだ！」

「人の命が掛かつてる仕事だから、後先考えてるんでしよう？ ここで俺達が突撃して、失敗したら、誰がその後始末するつてんです？」

「そんな事は、アマギや隊長に任せとけ、隊長達がしくじつたら、今度は参謀や長官がやってきて奴が動かなくなるまで攻撃するよ」



「そんな無責任な!」

「無責任だどっ!」 目の前の敵を放っておいて、手を抜く方がよっぽど無責任だ! 俺はな、まだ自分の職分を全うできてねえんだよ! これが俺の役割だ! どんな仕事だつてそうさ、みんながみんな、自分の持ち場で一生懸命やってるから、他の奴が自分の仕事に集中できるんだよ、ソガ。ここで俺達が逃げちまつたら、一体誰が怪獣を倒すんだつて話になつちまう。俺達が最後の最期まで、全力で戦う姿を見せなきゃ、誰も安心できねえのさ!」

「……はっ、市民の安心の為に……ですか。ご立派な事ですな」

フルハシの言に対し、ソガは思わず、鼻から抜けるような失笑を溢した。

肩を竦めて視線を逸らし、せせら笑うソガの胸倉を鷲掴みにして、ぐいとそちらに引き寄せたフルハシは、今度こそ唾をまき散らして怒鳴り声を挙げた。

「ほれ見ろ!! それが馬鹿にしてるといふんだ!! ……なにか勘違いしてるようだから言っておくぞ。俺はな、ソガ。隊長達みてえに御大層な大義の為に戦ってるんじゃない。所詮は腕つぶしぐらいしか誇れるもんがなくて、家業も継がずに考えなしで軍に入った大馬鹿もんだよ。でもな……だからこそ、俺はこの仕事に命を懸けてやってんだ! ひとたび敵が現れたら、一切手を抜かずにぶん殴つて、最後まで戦い続ける! ぎりぎりまで頑張つて踏ん張つて! ……ここから先にやあ一歩も通してやるもんかって体

ごとぶち当たって行く！　それが俺だ！　それがフルハシ・シゲルって男なんだ！　それで死んじまっても、構わねえ！　あんたらの生んだ馬鹿息子は、地球の為に命を懸けられる男だったんだぜって、胸を張って自慢できるような戦いが出来なきや意味がねえんだよ！　一度でも手を抜いちまったら、俺が俺でなくなっちゃう！　誰かの為だあ？　違うね、俺は俺自身の為に戦ってんだよ！！　それを……お前なんぞに横から啜られる謂れはねえ！！　なんか文句あつか!?」

座席に放りだされて、シートの手摺にしがみつくとソガ。  
フルハシがそれを睨みつけながら、フンと鼻を鳴らす。

巨漢の見下ろす操縦席から、震えた声が、恐ろしいまでのねばつきを伴って、這い上がってきた。

「黙って聞いてりや、好き放題言うてくれましたな……馬鹿にしてんのか……だって……?　ああそうさ！　バカにしてるよ！　当たり前やろが！　こつちが頭捻って必死で止めても、嬉々としながら突っ込んでいく死にたがり共が何言うとんねん!!　どいつもこいつも大仰な事ほざきながら次から次へと死にくさって!!　右も左も見渡す限り馬鹿ばっかり!!　大体なあ、あんなごつついバケモンに、ちっこい戦闘機だの戦車だの、拳銃の果てには生身で戦うとか、どんな神経してたら出来んねん!!　正気の沙汰ちやうぞ!!　そんなはなあ……アホの所業言うんや!!　ええですか？　オレの信条

はね『君子危うきに近寄らず』って言葉がありましてね、ホンマに賢い人は、そもそも危ない所に近づきませんって意味なんですわ!! ええそりや、『危うき』が向こうから近寄って来てますから? 仕方ないですよ? でもね、普通はそういう時すたこらさつさと逃げるんですわ!! 普通の人間は!! 勇気がどうだのああなんだ、そんなもんはただの蛮勇や!! いったい、どんだけの人間がそんな事できる思てんねん! みんながみんな、顔も知らん誰かの為に戦えるんなんて、御伽噺の中だけや!! そんな事できるんな、ただの命知らずのド阿保か、一握りの英雄サマだけなんよ! オレはそのどつちともちやう! 死ぬんは怖い! 別にそこまで高潔でもない! それでも俺が抜けたら人数足りんなるから、しやーなし戦つとんねんこつちは! 好きで戦つてるような物好きと一緒にせんといってもらえますか!?’

「んな……っ!」

爆発したような勢いで、一気に早口でまくし立てる。ふうふうと肩で息をしながら、鋭い眼光で救い上げるようにねめつけて来るソガ。

あの温厚な男が、ここまで激しく感情を露にして言い募るのは、かつてのR1号の一件でセガワ委員長に詰め寄る場面くらいのものであった。

しかし、その時とはまた何か違う……フルハシにはうまく言葉に出来ぬ、どこか悲痛な響きがそこにはあった。

故に、それこそソガの剥き出しの本心が大きな圧力となつてこちらに押し掛かつてくるような感覚を覚えたフルハシは……軽い眩暈を起したように、ゆつくりとシートに座り直し……しばし黙つて俯いていた。

分厚い筋肉を纏つた巨漢の見慣れた背中が、ほんの少し萎んで見えて、ソガの胸がチクリと痛んだような気がしたが……それよりも激しい感情のうねりがどうにも止まらず、次の言葉を発する気が起きずに、同僚の姿を見下ろすしかない。

やがて怪力自慢の大きな口から、絞り出すようにぼつりと、余りに小さい眩きが発された。

「お前……そんな事思つてたのか……」

「あーあ……言っちゃつた……」

「言いたい事はそれだけか……?」

「ええ、まあ……はーあ、なんかスツキリしちゃつたな……」

ハンドルに凭れるようにして顔を伏せたままのフルハシと、ただ機械的にレーザーの発射ボタンを押し続けるソガ。

「……俺はただ……お前がなんとしてでも、あのガラクタをぶつ壊してやるつて……そういう本気の熱意が伝わってきたから……じゃあとことんぶちのめしてやろうぜつて言えば、そりゃいいですねつて……お前ならそう言つて一緒に来てくれるつて思ったか

ら、誘っただけだ……それを……もう俺にやあ、お前が何考えてるか、よく分かんねえよ……」

「それは……すみませんでしたね」

「でもな……別に……俺だつて……死ぬのが全く怖くねえわけじゃあ……ねえんだぜ……」

「……え？」

「そりやそうだろう。エレキングやアイロス星人に踏みつぶされそうになつたつて、俺の筋肉なんかこれっぽっちも役に立たねえよ……でも……みんなで一斉にウルトラガンで撃てば、ちよびつとくらい押し返せるかもしれないねえ……いくら覚悟してても、北極の寒い空の上で、一人寂しく死ぬのは嫌だつて気持ちがないわけじゃねえのさ」

「ああ……」

「なあソガ。生きてりやあ、嫌な事も、怖い事も、胸の奥がじくじく膿んだみてえに痛い時だつてある。でも……それが生きるつて事じゃねえのか？ 人間誰しも、伊達や酔狂だけで戦えはしねえよ。でもどうしてもほっぽり出せねえ敵が来た時に、なんだかんだと理屈をつけて、どうにか心を奮い立たせて戦う事が、そんなに馬鹿な事なのか……？」

「……」

「……つつても、テメエの言う事にも一理あらあな。俺様の馬鹿な自己満足に付き合わ

せようとしたのは悪かったよ。もういいから早く降りろ。別にマグマライザーは一人で動かせないわけじゃねえ。俺にだってそんなくらい出来らあ！……だから、とつと降りてくれ……」

そうして、操縦系統を一人用に変更しようとする先輩隊員に、後輩から声がかかった。

「……フルハシ隊員」

「なんだあ？ ハッチの開け方が分かりませんなんて言うんじゃねえだろな」

「やっぱ……アンタはバカだ。とびきりの大馬鹿野郎だよ……でもね……」

胡乱気にそちらを向くフルハシの瞳に、苦笑するソガの姿が映った。

「俺も……結局は同じバカの貉だったって事ですわ。見る阿呆よりは、踊ってる方が楽しそうだ。一緒に踊らせて下さいよ。俺はどうやら……一生賢い猿にはなれん運命のようです」

「……ソガ」

「だいたいねえ、マグマを一人で動かすのが、どんだけ大変だと思ってるんですか！ フルハシ先輩が地底魚雷の狙いを付けるってんなら、一体誰がバックギアを入れるんですか？」

言いつつ、魚雷の発射シーケンスを解除していき、ターゲツトサイトを展開するソガ。それを認めたフルハシは、みるみるうちに破顔して、まるで幼子のように満面の笑み

を咲かせると、後輩の肩を、ごっごつした岩のような平手で、バシンと大きな音がするくらい、思いつきり引っぱいた。

「……いつてえっ!!」

「おいおい、そうこなくつちやあな! ソガ先生よオ! へっへっへ、このべらぼうめ! やきもきさせやがって!」

「ちよつとお! 今から突撃するつてのになんで叩いた? しかも痛い方の右肩をさ!? あんたの力で叩いたら傷が開くどころか、脱臼しちまうよ!!」

「あたぼうよ! そいつでさっきのは全部チャラにしてやらあ」

そんなやり取りをしていると、通信機から隊長の声が響く。

「マグマライザー! どうした? さっきから攻撃の手が止まっているぞ! 故障か?」

「いえ、なんでもありません!! ただ、ネジが一本たるんでおりましたので、二人で巻き直しておったところですよ!!」

「なに? ネジが……?」

フルハシの返答に困惑するキリヤマ。

マイクに声が入らぬよう、クスクスと忍び笑いを漏らした馬鹿野郎共は、澄ました声

でマグマライザーでの攻撃を提案する。

「ハッ！ つきましては、今からマグマライザーで呐喊し、あの金属シャッターを突き破り、内部攻撃を仕掛ける所存であります！」

「なにッ!? ……勝算はあるのか?」

「……いえ、ありません！」

「馬鹿者！ そんな無茶を許せるか！ 今、各基地に爆撃編隊のスクランブルを要請してある。彼らが来るまでは我々だけが最終防衛線なんだぞ！」

隊長の剣幕に、通信マイクを握るソガがニヤニヤと隣を見て「ほらね」と口の形だけで告げる。

それに対してフルハシはバツの悪そうな顔で、視線を逸らすと小声で返答した。

「……だからお前を誘ったんだろうが」

「そういう事……」

「おい！ 聞いているのか!？」

「いえ隊長！ あのクレージーゴンは飛行能力を有しています。バランスを失った今、奴がひとたび打ち上がると、近場に墜落して甚大な被害を及ぼしかねません！ 今すぐに破壊するべきです！」

「ケツ……人の受け売りでよくもまあ、そこまで堂々と言えたもんだぜ……」



ハンドルに体を預けた大男が、隣のやり取りに茶々を入れる。

その口調とは裏腹に、彼の口の端は愉快そうに吊り上がっていた。

「ふむ、あのジェット噴射だな……待て、クレージーゴンとは何だ？」

「ああいや、クレイジークレーンのクレージーゴンです。いつまでもバルタン星人のユートムは、流石に長すぎるんで……」

「お前と言う奴は……また勝手に呼称を……」

「隊長！ 見て下さい、セブンが！」

「なにッ」

アマギの声にキリヤマが視線を上げると、ロボットの大きなハサミが、セブンの首元を挟んでギリギリと締めあげているところであった。

アームを開こうともがきながら、苦し気に呻く赤色の巨人。

セブン危うし!!

『デユワ……ダアア……』

「……よし。仮称クレージーゴンへの直接攻撃……やってみろ。ただし、破壊が困難と判明した場合は、速やかに後退する事！」

「了解！」

「よしきたあ!!」

待つてましたといわんばかりのフルハシがレバーを倒すと、マグマのエンジンが唸り上げて、黒光りする機体が猛進する。

接近する敵に対し、クレージーゴンがレーザーブートで迎撃を行うが、マグマライザーは分厚い装甲で青白い怪光線を弾き返しながら、履帯の馬力で強引に強引に突破していく。

「ジェットドリル回転！」

「エンジン全開！ 耐シヨック！」

「どりゃあああああ!!!」

金色の岩盤へ、黒いモグラが激突し、銀色の削岩機が凄まじく不快な異音をまき散らしながら、ひしゃげて僅かに開いたシャツターの隙間をさらに押し上げようとする。

ぎやりぎやりと火花が舞って、徐々に持ち上がっていく黄金の岩戸。

しかし、それも勢いがついた最初のうちだけであり、たった数cm開いたところからは、一向に動く気配がない。

自分の腹へ、一心不乱に鼻を押し付ける小動物を煩わしく思ったのか、大蟹は右手で挟んでいた獲物をほっぴり出してから、黒い土竜を持ち上げようとアームを伸ばした。

「クソツ……やっぱりダメなのかよおツ……!?!」

ソガ達が諦めかけたその時。

「……まだだっ!! そのままそこで押さえていろっ!!」

通信機からキリヤマの指示が飛ぶ。

振り返れば、ひび割れたアスファルトに銀の輝きが躍り出た。

ポインターの扁平な車体を、僅かに開いた隙間に滑りこませようというのだ!

ブオンとエンジン音を唸らせて、鏡のように磨き上げられたボンネットが、赤い夕日を反射する。

その一瞬の煌めきに、瞳を奪われ、薄く靄の掛かったような思考を覚醒させた者がいた。

カメラアイに捉えた、銀色の四角い箱。

四つのタイヤで地を蹴り接近する金属反応。

クレージーゴンの白く色飛びした画像認識でもハッキリと分かる……車だ! あれ

こそまさに、彼が探し求めていた、存在意義だ!!

前進する……車を回収するためだ。

アームを振りかぶる……車を回収するためだ。

なぜ、ワタシはここに存在するのか……?

車を回収するためだ。

ハッと気づいた赤い戦士が、振り下ろされたハサミの先へ、素早く体を割り込ませ、渾

身の力で受け止める。

この赤いロボットは、なぜ邪魔をするのか。

このままでは車が回収できないではないか。

一直線に走り込んでくる銀の車は、たちまち右腕部の間合いの中に入ってしまふ。

どうすればいい？

どうすればいい？

このままではせつかくの車がワタシの装甲に激突してしまう。

どうすればいい？

どうすればいい？

……そうか、こうすればいい。

なんのために……？

私が車を回収するためにワタシであるために

腹部のシャッターが解放された。

「うおッ!？」

突然抵抗がなくなってしまうので、アクセル全開のまま一気にクレイジーゴンの体

内へ突入するマグマライザー。

ドリルが背中側の装甲にぶち当たり、ガツンと激しい衝撃音を反響させる。

その横へポインターが急ブレーキを踏みながら飛び込んできた。

警備隊の背後でガラガラとシャッターが下りていくが、マグマライザーの長大な機体はクレージーゴンの腹に収まりきらず、後部が外へ飛び出てしまったので、機体そのものがつかえ棒となり、シャッターが完全に閉まるのを防いでいた。

退路が確保され、メンバー達が胸を撫で下ろしたのもつかの間、足元から突き上げるような振動と轟音がゴゴゴと空間を揺さぶる。

「……そうか！ 車を回収したので、飛び立とうとしているのか！」

クレージーゴンの行動を看破し、もはや一刻の猶予もないと理解したキリヤマは、素早く指示を下す。

体内にMS爆薬を仕掛ける時間はない。攻撃で直接破壊する！

「ウルトラミサイル用意!!」

ポインターの後部がせり上がり、大型のミサイルランチャーが姿を現す。

「ソガ、奴の上咽頭を見ろ！ あのエレベーターが鼻腔に繋がっているんだ！ 頭蓋に

直接叩き込むぞ！」

「ジョイント部分のエレベーターだな！ よっしゃ任せろ！」

アマギ達の目の前で、空母のエレベーターのような部品が、ガコンガコンと半開きのまま中途半端に上下を繰り返していた。

おおかた、取り込んだ車を上部の格納スペースへ輸送するためのものだったのが、吹き込んだ爆風で壊れてしまったのだろう。

まるで機械式駐車場だ。

「いくぞ……3、2、1、撃て!!」

地底魚雷とウルトラミサイルが、クレイジーゴンの喉元に打ち込まれ、そのまま格納スペースの天井を突き破り、頭蓋骨の中へと侵入した。

強固なペダニウム製の外殻を破壊する事は出来なかったが故に、外へ飛び出る事無く、クレイジーゴンの脳内でピンボールのように反射して、軽金属で出来た内部構造をズタズタに引き裂いく。

そして……爆発。

ロボットの内部で小さな火花が次々に連鎖していく。

やがて主動力に誘爆して、大爆発するだろう。

「全員退避!」

電磁バリアを展開したポインターが、バックで飛び出すが……

「……ちよつと! 早くしてくださいよ! 流石にマグマの装甲でも、クレイジーゴン

自体の爆発となると、保障できませんぜ、先輩！ 何のために砲手とドライバー分けたんですか！」

「そんなの分かってる！ でも、さつきから逆進をかけてるんだが……全然進まねえんだ！」

「どうした、マグマライザー！ 早く退避せんか！」

「それが……バックできません！」

「あッ!? いけない、シャッターが完全に食い込んでいる！」

「なにっ!?」

いかにマグマライザーの強固な外装と言えど、クレージーゴンのシャッターと根競べをして無傷でいられる筈がない。

むしろ、中程で真っ二つに切断されずに耐えているのがおかしいのだ。歪んだ金属同士がめりこんで、完全にロックされてしまっていた。

前にも後ろにも、動く事ができず、キヤタピラが朦々と砂煙を撒き散らす。

このままでは、脱出できずに爆発へ巻き込まれてしまう！

……そんな事、許せる筈がない！

ぼくはまだ……彼に謝らなければならんだ!!

『ジュワッ!!』

化け蟹に突き刺さったままの地底戦車へ飛びついたセブンは、両手でがっしりと機体を掴むと、ロボットの顔を思い切り踏みつけた。

そうして今度は親指に力を込めてグググと押し込めば、ベキリとあっけなく、マグマライザーの中間部分における外殻がへこんでしまうではないか。

シャッターとの干渉部分を力業で排除したセブンは、そのまま力一杯、鉄のモグラを引き抜いた。

メリメリッと、装甲の剥がれるけたたましい音と共に、マグマライザーが摘出される。取り出した機体をかき抱いたセブンは、くるりとロボットに背を向けると、機体を庇うように蹲った。

次の瞬間、大爆発するクレージーゴン!!

『デュアーツ!!』

吹き飛ばされて、瓦礫に埋まる赤い巨人。

「マグマライザー! マグマライザー、応答せよ! フルハシ、ソガ! 生きているなら返事をしろっ!!」

「フルハシ隊員! ソガ隊員!」

ノイズ混じりの通信機からは、なんとも気の抜ける声が返ってきた。

「……はい、こちらソガ。なんとか二人とも生きてます……お陰様で……」



「……心配かけさせるんじゃないっ！ セブンが居なければ、今頃……木っ端微塵だぞ！」

「反省してまーす……あー、すみません、通信おわり」

「待たんか……！」

逆さになったマグマライザーの操縦席で、疲れた顔のソガが、ため息を漏らす。

「やつぱりバカじゃないんですか、フルハシ隊員。こんなのは、金輪際まっぴらごめんですからね」

「ハッハッハッハ！！ いいじゃねえか、怪獣は倒せた！！ これで俺達の仕事もようやく一段落ついたって訳だ。……まあでも、俺もそうそうこんな目に遭いたくはねえかなあ」

「……フルハシさん、大義の為に戦ってるんじゃないやねえって、さつき言いましたよね？」

「おう、そうだけ……？」

「でもやつぱり間違ってますよ、ソレ。あんたらみたいなの馬鹿野郎をね、なんて呼ぶか知ってますか？ ……そういう大馬鹿者を全部ひっくるめて……正義の味方って、いうんですよ」

きよとんとしたフルハシだったが、やがて腹を抱えて笑い出した。

「……っへっへっへ、そうか、正義の味方か」

「ええ、紛うことなくね。だから友達少ないんですよ。そんな馬鹿に付き合ってくれるのは、愛と勇気くらいしかないませんか」

「……なあソガよ。やつぱり俺にはさ、お前が何考えてるかさっぱり分からねえし、お前が何を思つて戦つてるかなんて、ちつとも興味がねえ。……でもな、お前は俺の同僚で、戦友で、後輩だ。だから……お前がなんか出来ねえ事があつたり、やりたくねえ事があつたら、そんな時は迷わず言つてくれ。頼むよ。お前一人で抱え込む必要なかねえんだ。そのために隊長がいて、アンヌがいて、アマギがいて……ダンがいるんじゃないかねえか。仲間がいるから……戦えるし、どこまでだつて馬鹿になれんだ……」

「フルハシ先輩……」

徐々にマグマライザーが持ち上がつて、天地が正常に戻る。

セブンが優しく地上に置いてくれたのだろう。

「じゃあ……さつそくお願いがあるんですけど……」

「おう、なんだい？」

「あまりにも右肩が痛いんで、今日はベッドに直行させてもらつていいですか？」

「それはダメだ」

「なんでえ!？」

おい、言つてる事がちがうじゃねえか。

「……なんの為に前を誘ったと思ってるんだ？ ……隊長の説教を一人で食らいたくねえからだよ！」

「あんたねえ……！ ふ、ふへっ……ヒヒヒ……いいひやつひやつひやつひやつひやつ！！ あいててて……あんま笑かさんといってもらえますか？ 傷開いちやうんで……いっひっひ！！」

「おめえが勝手に笑ってんだろうが？ ……というかなんだよ、その気色の悪い引き笑い。ついにイカレちまったのか？」

「俺はもともと引き笑いですよ！」

「嘘つけ、見た事ねえや」

だろうな。

オレだって、引き笑いするソガ隊員なんてみたくなえや。

病院の中庭をゆったりと歩くウルトラ警備隊。

そこには包帯を巻き、松葉杖をつくダンと、それを取り囲む仲間達。

「我々は勝ったんだ……バルタン星人とクレージーゴン……そして、人間の愛と信頼と

の戦いにも……!」

満足げな顔で頷くキリヤマ隊長。

その少し前を、車椅子を押しながら歩くソガの姿があった。座っているのは、回復したオサム少年。

「オサム君……その……悪かったよ……」

「……えっ?　なんで?」

「ああいや……なんというか……ダンをすぐに君のところへやれなくてね……」

「ううん、ぼくこそわがまま言ってごめんなさい。ぼく、どうしても意気地がなくて……勇気がでなかつたんだ。でも、ダンさんはちゃんと来てくれたよ。ダンさんとユグレ先生は、僕のヒーローさ!　……もちろん、ソガさんもね!」

「……俺も?」

「そうだよ。じゃなかつたら、病院なんか今頃ぺちゃんこになってたんだろ?　姉さんが教えてくれたんだ。ウルトラ警備隊、かっこいいなあ……ぼくね、大人になったらウルトラ警備隊になりたいんだ」

「そうか……ウルトラ警備隊か……」

オサムの言葉に、なんとも言えない顔をするソガ。

手術が成功したとはいえ、心臓に疾患を抱えていた少年が厳しい体力テストを合格で

きる筈がないからだ。

どう言ったものかと逡巡するソガを見て、オサムが零したのは、不満では無く笑みであつた。

「ふふふ……やつぱりソガさんは、なれるよつて、言わないんだね」

「えっ？」

「ぼく、知ってるよ。僕の体じやあ警備隊になれっこないさ。姉さんに言われたからね、知ってるんだ」

「そ、そう……」

「……優しいんだね、ソガ隊員。ダンさんが言つてた通りの人だ」

「はあ!? 俺がかい? 何かの間違いだろう」

ゆるゆると首を振るオサム。

「大人つてね、たいていみんな、なれるよつて言うんだ。でも、そんなの嘘さ。姉さんやアンヌさんは、すごく残念そうな顔で、なれないよつて言うからね。どっちが本当かくらいすぐ分かるよ」

「そうか……」

「でもね、ダンさんがなれるよつて言う時は、本当はなれるんじゃないかつて思う。そりゃあ、ぼくの無茶なお願いを、本当に叶えてしまう人だもん。たぶん、ダンさんがぼ

くと同じ体でも、ウルトラ警備隊になっちゃうんだろうなあ……」

「ああ、それはなんとなく分かる気がする」

本心からそう信じてるから……ダンが言う分には嘘ではないんだな。

「でも……僕はダンさんじゃないからね。やっぱり無理だ」

「……」

「だから……ぼく、お医者になる事にした。ユグレ先生みたいな立派な先生になってやるんだ」

「おお！ それは素晴らしいな！ それならなれるよ、きつとー！」

「ありがとう！ ソガさんが言うなら間違いないね！」

「え？ どういう事……？」

心底安心したと言った様子のオサム。

なぜそこまで信頼度が高いのか？ 会うのは今日が初めてのはずなのに。

「ソガさんは、嘘が付けない人だね。できるよって言っつてしまえば楽なのに、そうしない。でも、できないよって言いたくないから言わないんだ。そうでしょ？」

「……ただ、頑固な割に優柔不断なだけさ……」

「でも、逃げたいのに逃げなかつたんでしょ？」

「え、フルハシ隊員からなんか聞いたの？」

「うん、すごく褒めてたよ。あいつは俺なんかより、よっぽど勇気のある奴だつて。だからソガさんも……やっぱりぼくのヒーローだよ！」

「参ったなあ……」

少年からの真つ直ぐな尊敬の眼差しがあまりにも眩しくて、つい顔を逸らすソガ。そんな彼の脳裏に、いつか聞いたフレーズがふと思い出された。

「戦いから逃げるヒーローを、子供達はヒーローとは呼ばない、か……」

「なに？ それ？」

「……おじさんが好きなヒーローが言つてた言葉……だつたような気がする」

「へえ……よっぽど強くてカッコいいヒーローだつたんだらうね！」

「うん……まあねえ……」

微妙な顔のソガを、なおも質問せめにするオサム。

まさしく、大好きなヒーローに会えた少年の、年相応なはしやぎ方だつた。

「人間の科学は人間を幸せにするためにあるんだつても、ソガさんが言つたんだろ？」

「え？ 違う違う。そりやダンが言つたんだよ」

「え？ ダンさんはソガさんから聞いたつて言つてたけどなあ……」

「……あつ！ なるほどなあ……くつくつく」

ソガは、自分がうっかりダンの台詞を、それが彼の口から出る前に奪つてしまったの

だという事によく気が付いた。

それが妙におかしくて、ついつい笑ってしまう。

いつ言ったかも分からない言葉に、ダンはいらなく感銘を受けたらしいが、そりやそう  
だ。なにせ元々は彼自身の感性から生まれた言葉なのだから。心に沁み込むのもさぞ  
や早かったことだろう。

「……それは間違いなくダンの言葉さ。奴が自分で言ったのを、すっかり忘れちまつて  
るだけだよ」

「そうなの？ でも……そんな事あるかなあ？」

「俺がちよつと似たような事を言ったから、混同しちまつたんだろうよ」

「似たような事？」

「ああ……心を忘れた科学には、幸せ求める夢が無い……ってね。これも別なヒーロー  
が言ってた言葉だよ」

「へえ、ソガ隊員って、いろんなヒーロー知ってるんだね」  
「そうだね」

思えば彼の心には、本当に沢山のヒーローがいる。

例えそれらが、全て嘘で塗り固めた作り物の物語であろうとも……そういつた経験か  
ら受けた影響が、今の自分を形作っているというならば……あながちダンやフルハシの



言っていた事も、理解できるような気がした。

子供には、いや、人間には……ヒーローが必要なのだ。

「やっぱり、人間の一番の強みは……心を持つている事なのかもな」

「……ろ？」

「そうさ、いくらクレイジーゴンみたいなロボットが作れたって……それで誰かの幸せを奪ってしまったら、意味が無い。やっぱり、心を忘れた科学から生まれた化け物は、破壊しかできないけど……人間に誰かを愛する心がある限り……それを正しく使う事ができるのかもしれない」

「それは、どんなヒーローの言葉なの？」

「臆病者で、大馬鹿野郎なヒーローの言葉さ……」

後ろからひよっこり顔を出したアンヌの問いに、答えるソガ。

良いも悪いも、リモコンを握る者の心次第なのだ。

人間がなんのためにそれを使うのかによって、科学は神にも悪魔にも成り得る。

「じゃあ、人間が愛する心を忘れてしまったら……？」

「そりゃあ……恐れ知らずの鋼鉄の悪魔が暴れ出してしまいかもな」

「そんなの、嫌よ。ねえ、オサム君」

「大丈夫だよ。その時はダンさんやソガさんが倒してくるんでしょ？」

「まあな。とはいえ……」

「あつー!」「キヤア!!」

背後で上がった悲鳴に思わず振り向くと、オサム姉のユキコが、ダンに抱き着くようにして彼の体を支えていた。

松葉杖がひっくり返っているの、石ころにでも躓いたか。

その様子を見て、良かった……と胸を撫で下ろすアンヌ。

ダンが転ばなくて良かった……? :

「おいおいアンヌ、愛する心はなにも、天使ばかり生むわけじゃないぜ。こわーい悪魔を生む事だつてあるのさ」

「え?」

「例えば……嫉妬の悪魔とか……けけけ」

「まあ!」

そう言いつつ鼻つ柱をかいて揶揄うと、頬を膨らましたアンヌが、手に持った綿毛をソガの顔面にフーッと吹きつけて、イーツと顔をしかめた。

ついでとばかりに、ダンの方へ目掛けて同じことを繰り返し、パタパタと走っていく乙女。

……平和だ。

この日常こそが、オレの守るべきものなのだ。

「……オサム君」

「なあに？」

「……よく頑張ったな」

「うん！」

穏やかな表情の男が、少年の頭を撫でるのを、物言わぬ金色の廃材が、夕日に照らされながらじっと見つめていた……

## セブンは……

荒野を走る銀の車。

ポインターには、ウルトラ警備隊のフルハシ隊員と、モロボシ・ダン隊員が乗っていた。

基地のリーダーが不審な反応をキャッチしたので、一帯の調査をするよう命令が下ったのである。

問題の地点に到達すると、早速下車して、手持ちの機器で付近をスキャンし始める二人の警備隊員。

「おかしい……これといった反応がありません」

「よし、もう少し奥へ行ってみよう！」

「了解」

岩が剥き出しの斜面を降りて、調査を開始するも……空振りだ。

まさか誤反応だったのだろうか？

「……異常ありませんね」

「なんでい、リーダーの故障か？ ついにユシマダイオードも寿命って事かね。また取

り換えて貰わなきゃなあ」

「ええ……しかし妙だ……」

持ってきた全ての計器上では、なんの異変も感知できないが……ダンの第六感だけは確かな違和感を訴えていた。

なぜだか無性に胸騒ぎがする……。

いやまて……何も異常が無い、だと？

そもそも、そんな事が有り得るのか？

ダンの手の中では、地震計の針がピツタリと止まり、微動だにしない。

ふと気づけば、頬を撫でる風の感触も、草木や小動物達の発する微かな気配すらも、先程から感じる事が出来ていなかったのだと思に至る。

あたかも、この空間だけが喧騒から切り取られてしまったかのような……不自然な静寂。

その杓子定規に整えられた空気の向こう側で何か……じつと息を潜めて、こちらを窺っている。

「戻ろうぜ、ダン」

「……待って下さい！ ……なにか……匂いませんか？」

「あん？ 何も怪しい事はないだろうが」

「いえ、そうではなく……」

その時、ダンの飛びぬけて優れた嗅覚が、この場に薄く薄く漂う粒子の存在を捉えた。鼻腔をくすぐる刺激臭。この匂い、どこかで……

そうだ、確かあれは怒れるアンノンが襲来した時だ！

「これは……硫黄？」

「なに？ ……うおッ!!」

「ハッ!!」

途端に、二人の立つ大地が激しく揺れ動き、岩肌がガラガラと崩れていく。

態勢を崩した隊員達の頭上に、サツと黒い影が差す。

耳をつんざく悍ましい咆哮と共に、土砂を巻き上げ、木々をなぎ倒して、常識外に巨大な生物が姿を露にした！

これほどの巨体を、いったいどこに隠していたというのか!?

『ゴガアアアアアアル!!』

「か、怪獣だと!?!」

「危ない!」

怪獣の鋭い鉤爪が、身を屈めた二人の頭上を掠めていき、たったの一撃で崖の上方を

抉りとつてしまう。

砕けた岩石の破片が、シャワーのように、小さな人間達へと降り注ぐ。

寸でのところで左右に跳び、石礫を回避したダンとフルハシ。

しなやかな身のこなしでくるりと一回転すると、その勢いのままに先輩隊員とは真逆の方向へ走り出す後輩。

「あ、待て！ ダン！」

岩を蹴り、倒木を飛び越えると、砂利の斜面を転がるような速さで駆け下りていく。なんと命知らずな事であろうか！

それもそのはず。何を隠そうモロボシ・ダン隊員の正体は、かのウルトラセブンのだ！

例え人間の姿をしていても、その身体能力は、とても常人とは比べ物にならない。

本当であれば、このままウルトラアイで、元の姿に変身してしまいたい所であったが、少々タイムイングが悪かった。

今の一瞬で大きく引き離れたとは言え、彼の背後からはダンを呼ぶフルハシの声が追いついてくる。

いかなダンといえど、相手が防衛軍きつての肉体派であるフルハシの脚力とあつては、これ以上の差を付ける事は難しい。

そして、なによりこの荒野には木々が疎らにしか生えていない。

あともう数秒すれば、背後の崖からひよっこり顔を出した巨漢からは、ダンの姿が丸見えになってしまおうであろう。

そのような状態で変身するのはいささかりスクがありすぎる。

一瞬でそう判断したダンは、腰のポーチに手を伸ばして小型の爆弾を一掴みすると、全力疾走しながらそれを怪獣の足元目掛けて放り投げた。

何も怪獣にダメージを与えようとしたわけでは無い。

そもそもこれ程にサイズ差のある相手に対し、小型爆弾はあまりに無力で、蚊の刺した程の感触すら与えられないだろう。

今、重要なのは……

まるで爆竹の爆ぜるような音が連鎖する。

背後のフルハシ隊員にもきつとよく聞こえたに違いない。

これで彼は、ダンが爆弾を投げて敵怪獣の注意を引こうとしていると認識するはずだ。

狡猾な宇宙人や、感情の無いロボットには無意味な行為でも、より強い本能に従う怪獣であれば、こうした音や光に反応を示す事がある。

現に、見上げる程に巨大な敵は、後ろを走っているであろうフルハシ隊員には目もく



れず、ダンに対してだけ強い敵意と観察の視線を向けているのではないか。

しかし、本当の狙いはそこではなく……

続けていくつか爆弾を投げたダンは、手頃な岩陰にサツと身を滑り込ますと、もう一方のポーチから、本命のカプセルを取り出した。

そう、カプセル怪獣だ！

彼らはある程度の判断力がある為に、いちいちダンが指示を与えずともそれなりに戦える。

これならば、フルハシ隊員に追いつかれても大丈夫だ。

万一、カプセルを投げる瞬間を見られなくても、その前後で小型爆弾を投げ続けていれば、ダンが振りかぶったものが、よもや怪獣の入れ物だとは思えない。

地球人はまだ、セブンが怪獣を粒子状にミクロ化して持ち歩いているなどは、知りもしないのだから。

その点、ソガ隊員に分けて貰った小型爆弾は良い隠れ蓑だった。

たまたま、大きさもよく似通っており、全く同じモーションで投げる事が出来たからだ。

……本当に？

些細な疑問が頭を過ぎるが、今はそれどころではない。

今この場で、敵怪獣を押し留めるのに最も適した、頼れる仲間を選び出し、ダンは空中に放り投げた！

「おい！ ダン！ 一人で無茶をするんじゃない！ ここは二人で力を合わせて……ウツ！ なんだ!？」

ガラガラと石を跳ね飛ばしなら斜面を滑り降りてきたフルハシが、追いついたダンの肩を掴むが、激しい閃光に目が眩む。

目を開けたフルハシが見たものは、爆炎の向こうに立ち上がる、もう一匹の屈強な怪獣の姿！

『GRAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!』

「……あつ！ ミクラスだつ！」

カツと開いたどんぐり眼を、無邪気に輝かせたフルハシの感嘆へ、思わず喜色が混じる。

この窮地に駆け付けてくれた、野性味溢れる援軍が、彼を破顔させたのだ。

フルハシは、恐らくセブンの仲間と目される特殊な怪獣達の中でも、このミクラスという荒々しい猛獣が特に気に入っていた。

それは湖のほとりと、北極の空とで二度も命を救われたから……というだけにあら

ず。少々不細工で、見るからに力任せなこの怪獣に、どこか親近感を覚えて止まないからだ。

小さな人間がいくら体を鍛えたところで、巨大な怪獣にはたつたの一步でたちまち踏みつぶされてしまう。

それでも自分が、もしもセブンのように大きくなれたなら……そんな荒唐無稽な妄想も、ミクラスがその太く短い腕を振り回して活躍すれば、何かが少しだけ満たされるような気がするのです。

「いよし！ やつちまえミクラス！ そのままとつちめろ！ 奴がくれば百人力よ！ 俺達も加勢するぞ！」

「……」

「……おい、どうした？ ダン？」

満面の笑みで振り返ったフルハシだったが、それに対しダンの顔はと言えば、苦虫を噛み潰したように厳しい表情で、じつと二体の怪獣を見つめている。

やがて彼は、視線を逸らさずに、ただ一言だけぽつりと呟いた。

「……大きい……」

「なにこい？」

背後で響く凄まじい衝突音にハツとしたフルハシ。

彼の戻した視線の先で、ミクラスと謎の怪獣ががっしりと組み合って、相撲のようにお互いの体を押し合っている。

そして、ダンの眩きを即座に理解した。

……明らかに敵の方が体格に優っているのだ、と。

先程までは、ただ地表から巨大な姿を見上げているだけだったので、遠近感すら掴めなかったが……こうして比較対象を隣に置いて初めて、敵の威容を客観的に捉える事が出来た。

蟻からすれば、目の前の動物は全て巨きいが故に、その程度を正しく理解できないが、流石に象と他の動物を並べれば、その偉大さを知る事が出来る。

なんと敵の怪獣は、ミクラスよりも頭一つ……いや、二回りも違うではないか！

それもそのはず、セブンの知る限りミクラスの身長はおよそ40m。しかしそれは頭頂部から長く突き出た鋭い角を勘定に入れての数字であって、実態はそれよりも小さくなる。

むしろ、その少しばかり小柄な体躯に、限界まで筋肉が凝縮されているが故に、ミクラスは強いのだ。

パンパンに圧縮された500万馬力の怪力で、鋭い角が敵の懐に抉り込むように突き出されては、並みの生物に成す術はない。

父の胸に飛び込む幼子が、その実、胸甲騎兵のランスチャージと同じ威力を秘めていればどうなるかという話である。

だが……対する敵の怪獣は……ざっと見積もっても軽く45m以上はある。それも少々猫背気味で基本的に前傾姿勢な上で、それなのだ。ずっと屈めたままの足も、ハゲタカのように長い首も、全て伸ばせば、50mは優に超えるだろう。いや、それ以上かもしれない。

人間で言うならば、身長160cm程度の者が、180、190cmの巨漢に挑むようなもの、と言えば分かりやすいだろうか。

尤も、ミクラスの膂力は、ノッポのエレキングですら軽く投げ飛ばした実績があり、本来はそういった体格差をも平気で覆してしまふのだが……

「なんてこった、あのミクラスと真正面から互角に競り合うなんて……なんつう剛力……いや豪力だ」

フルハシの頬を冷や汗が伝う。

20歳の入隊時点で既に、柔道5段、空手5段とあらゆる格闘技を修めていた彼には、実力が拮抗している際の殴り合いにおいて、体格がいかに重要なファクターであるかが骨身に沁みて分かっていたからだ。

それこそ、得意の柔道技であれば、柔よく剛を制す事も出来るのだが……残念ながら、

見るからに愚直そうな戦い方をするミクラスに、巧みの技を期待する事は出来ないだろう。

やがて巨獣同士の力比べは、徐々に力の均衡が崩れていき……ついには雄牛の躰が宙を舞う。丸太の如き筋肉の塊が、ゴロゴロと地べたを転がり、小規模な地震を誘発した。

『ゴガアアアアアアル!!』

「畜生! 本部、本部! ……くそッ! 繋がらねえ!」

「きつとあの怪獣のせいで、地磁気が乱れているんです! ポインターの通信機なら、あるいは!」

「だが……!」

ビデオシーバーの画像が不明瞭に乱れ、満足に連絡が取れない!

より強力な車載無線ならば、可能性があるかもしれないが、ポインターは崩れた崖の上だ。

「お願いします、フルハシ隊員。ここは僕とミクラスが引き受けます。一刻も早く基地に連絡を! ホークの援護が必要です!」

「……分かった。あんまり無茶はすんじゃねえぞ!」

後ろ髪をひかれつつ、崖をよじ登り始めるフルハシ。

彼が応援を呼ぶまで、なんとかこの怪獣を釘付けにしなくてはならない。

ダンはウルトラガン抜き放つと、素早く怪獣に向けて引き金を引いた。

レーザーの帯が敵の皮膚を舐めていくが……ちつとも堪えた様子がない。

ミクラスを放り投げた怪獣は、三白眼で小さな挑戦者を睨みつけると、山のような巨体でダンを踏みつけてしまおうと近づいてくる。

『GRAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!』

その背後で、雄叫びを上げて立ち上がったミクラスが、後ろ脚を高く蹴立てて、ぐぐつと総身に力を漲らせた。まさに彼の真骨頂、大突進の構えだ！

乾いた荒れ地に、分厚く平たいクレーターのような足跡を残しながら、人馬一体の騎兵突撃が敢行される。

己を無視する気かと、怒り狂ったミノタウロスが、悪辣に笑うグロテスクな怪物へ一直線に駆け抜けた！

これは決まった！

いかに巨像の如き体軀を誇る怪獣と言えど、これを側面から食らえば、ひとたまりもないはずだ。

次の瞬間には忌々しい土気色の肉体が、地面に打ち付けられるに違いない。

そう確信したダンの眼前で……激突の瞬間、怪獣のシルエットが一気に膨れ上がったかと思うと、ふわりと巨体が空へと舞い上がった。

遅れてダンに叩きつけられる凄まじい風圧。

「デアアアー!?!」

目標を見失ってしまったために、勢い余って頭から地面に突っ込んだミクラスと同じように、地面を無様に転がる羽目になったダンが顔を上げると、怪獣の背で大きく広げられた翼が、太陽をすっぽりと覆い隠すように羽ばたいている所であった。

何という事だ！ 怪力に加えて飛行能力まで持っているのか!?

ダン自身は自身の采配が、致命的に誤りであった事を理解して、激しく悔いた。

飛ばれてしまえば、ミクラスでは手も足も出ない……

急降下した敵怪獣が、全体重をかけた踏みつけをミクラスにお見舞いする。

そして、再び空へ舞い上がっては、両手両足の鉤爪で勇敢な闘牛の躰をひつかいて傷つけていくではないか。

『ゴガガガガ!!』

地面で藻掻く戦士の無様を、上空でせせら笑うかのように、鳴き声を上げる怪獣。

それは決着を付けようとする者の行いではない……眼下の獲物が徐々に弱っていくまで甚振っているのだ!

仲間に対する侮辱に、激しい怒りを覚えたダンは、何度目かの降下に合わせ、敵のぎよろりとした目玉に狙いを付けた。



ウルトラガンの光が怪獣の顔面に炸裂する！

激しい動きに、敵の急所を撃ち抜く事はできなかったが、流石にこれには敵も煩わしく思ったのか降下の軌道が僅かにズレ、転がったミクラスが敵の爪から逃れる隙を作る事に成功した。

傷口から染み出した血を、毛皮に滴らせながら、猛牛が立ち上がる。誇り高い戦士である彼は、受けた侮辱を決して許しはしない！

牙の生えた口を、獅子舞のようにガバリと開いて、背を逸らしながら大きく息を吸い込むと……ぶるりと身震いひとつ、肩をいからせ、凄まじい熱線を吐き出した！

ミクラスの全身から発せられた熱量を、一気に叩きつけるバツファフレイムだ！

溶岩流を思わせる火炎の竜巻が、敵の全身を覆いつくす！

周囲の木々が自然発火してしまう程の温度で炙られた空間が、陽炎のように揺らめいた。

シューシューと全身から湯気を立ち昇らせるミクラス。ぎよろりと怒りに燃える瞳が睨みつけるのは……濛々と立ち上る黒煙の向こう。そこにくつきりと浮かび上がる黒い影！

煙を引き裂き現れたのは、真っ赤に赤熱して、全身からダラダラとねばつく血液を垂れ流す悪魔の姿。

磐の如き肉体は、ところどころ真つ黒に炭化しており……ボロボロになった皮膚が砕け落ちる。

明らかなダメージだ。全身にこれほどに重度の大火傷を負って無事で済むはずが無い。

……それなのに。

『ゴガアーガガガ!!』

こんなものはカスリ傷だとしても言わんばかりの大咆哮。

醜く節くれだった嘴を大きく開けて、自らの健在をアピールする。

なんとという悍ましい耐火性！ およそ生物の持ち得る耐久能力を凌駕している！

アレは言っているのだ。……お前など、相手にならんと。

力及ばなかった衝撃か、積み重なったダメージか、がっくりと膝をついたミクラス。

「戻れ！ ミクラス！」

ダンの手元に戦士が帰還する。

そして、胸元からウルトラアイを取り出すと……

「デュア!!」

カシャ

戦友の敵討ちに、ウルトラセブンが立ち上がった！

まるで待ちかねていたかのように、全身を大きく広げて威嚇する怪獣。

『ゴガアアアアアアル!!』

対するセブンも、普段は40m前後に留める巨大化を、以前のキングジョーとの戦いで見せた限界ぎりぎりの50mまで発揮して、怪獣へ躍りかかる。

エネルギーを消耗するが、あのミクラスすらも退けた相手に、出し惜しみは無しだ。

魔女の鷲鼻のようにひん曲がった嘴を掴んで、喉元に強烈なチョップを叩き込む。そして怯んだところをすかさず背負い投げ！

『デュアアアアアア！』

カシヤ

敵の凄まじい豪力と、まともにやり合ってはならない。セブンが地球での戦いの中で学んだ基本は、敵に長所を發揮させない事だ。

この怪獣は、身体能力こそ高水準で纏まっているが、距離をとれば遠距離攻撃手段が無いと、ミクラスが教えてくれた。それを活かす！

そう思っただけで投げ技で距離を取ったセブンだったが、敵も馬鹿ではない。すぐさま足元の岩石を、その脚力でもって蹴り上げて、飛び道具としてきた。

怪獣からすればサッカーボールサイズでも、彼ら巨人達にとってのそれは、人間から

見れば小山に等しい。

なんとという馬鹿力であろうか。そのような塊を素手で叩き落とせば、いかなセブンとて手痛いダメージを受けてしまう。

すばやく額に指を翳し、エメリウム粒子を収束すると、ソガの如き早撃ちで岩を撃ち抜いた。

『デュツ!!』

カシヤ

忽ち粉々に砕け、岩石の塊だったものが霧散する。これぞまさしくウルトラビーム！ウルトラセブンの誇る超兵器だ！

しかし、細かな粒子となった飛礫がパツと空気中に広がって、セブンの視界を一瞬だけ覆い隠してしまった。

ほんの僅かな間とはいえ、怪獣から目を離してしまったセブン。

『デュア!?!』

銀の仮面に暗い影が差し、セブンがハッと顔を上げれば、敵は飛び上がって上空を旋回していた。

必殺の急降下攻撃を仕掛ける機会を伺っているのだ！

翼の切れ目から、怪獣の背に射した太陽の光がチカチカと瞬いて、目が眩むセブン。獰猛なハゲタカが、その隙を見逃すはずは無い。

旋回を止めて、まるで矢のように地表へ向かって飛び込んで……

「させるか!!」

キーンと耳をつんざく甲高いエンジン音！

きらめく銀色のデルタ翼が、両者の間に割り込んだ！

「撃てー!」

ウルトラホークから狙いすまして発射されたミサイルが、怪獣の口腔内に命中！

『ガアアアアアアッ……!!』

錐揉み状態で落下した怪獣は、地面に激突すると、ふらりふらりとよろめいている。

『デユワー!』

トドメのエメリウム光線だ！

……しかし……

『ガアアッ……!』

『デユ!?』

怪獣は蝙蝠の如き被膜をマントのように翻し、エメリウム光線を受け止めてしまう。もちろん着弾した場所は大きく破れ、もはや翼としての役目を果たさない。

逃走手段を失つてでも、生にしがみ付こうとする意志を感じさせた。

ならばとアイスラッガーを投げるも、両手の鉤爪で防御され、弾き返される。おまけに動体視力まで優れていると来た。

流石にアイスラッガーと何合も打ち合える強度はないらしく、一度弾き返す度に、ツメが無残に割れ砕け、どんどんとその鋭さを減らしていくが……そんな事は構わないらしい。

一体何がこの怪獣をそうさせるのか？

まるで何かを待って、耐え忍んでいるかのようにも見える。

どこかに群れの仲間でもいるのか……？

とにかくこれは、早く決着をつけた方がよさそうだ。

セブンは、怪獣の恐ろしいまでの打たれ強さと、最後まで足掻き続ける執念に脱帽し、外力によってこの生き物を倒す事を諦めた。

『ブエア——!!』

セブンは怪獣に向かってジャンプすると……飛行しながらどんどんと縮小化していき……ついに豆粒ほどに小さくなってしまった。

それこそかつて、カオリの肺に巣食ったダリーを退治する為にミクロの世界に挑んだ時のように……

目の前で敵が消えて驚き、あんどりと口を開けた怪獣の喉にそのまま突進！

この怪獣の皮膚は、ミクラスのバツファフレ임でも焼き尽くせない程に耐火性が高い。

そのような肉体を、ビームやミサイルで破壊するのは非常に困難だ。

であるならば……

ズガガガガーン！

怪獣の体内で一気に巨大化したセブンは、本来であれば宇宙竜ナースですら引きちぎってしまうほどのウルトラパワーを全身に漲らせ、敵怪獣を体内から破壊した。

さしもの怪獣も、これには対抗できなかったようだ。

無残に飛び散った肉片を一瞥すると、真っ赤な戦士は空の彼方へ飛び去っていく。

カシヤ

……その背中を、何者かがジツと見つめている。

レンズ越しに、舐め回すように、隅から隅まで見落とすまいと。

やがて、木々の合間から、不可視の小さなドローンが宇宙の彼方に浮かんでいった。

【せぶんハ、身長50mノ巨人ニモ、豆粒ホドニモ、小サク、ナレル】



セブンは……

「くそっ……!」

ホークの中で、ソガが悔しげに臍をかむ。

機首から放ったレーザーも、アロンに全く効果が無く、怯ませる事すら出来なかったからだ。

今、彼らが飛んでいる夜空は、激しい雷雨が吹き荒れ、まるで嵐の真っ只中にいるかのようだ。

横殴りの豪雨で、レーザーが減衰し、普段通りの出力が出ない。

「ソガ、ミサイクルはどうか!？」

「ダメです! 雷の影響でミサイクルのロックが……」

「そうか……むっ!」

「それに、この揺れですからね!」

ホークの機体があくんと揺れる。

ダウンバーストの断裂面がそこらじゅうに吹き荒れていて、先ほどから見えない段差に躓かされ続けているようなものだ。

なによりも、頼りの計器が雷による電磁波の影響で狂わされたと来れば、有視界戦闘を余儀なくされるのだが……ただでさえ夜間飛行な上に、低く低く降りてきた分厚い暗雲のせいで、おそろしく視程が悪い。

操縦桿を握っているのがキリヤマでなければ、忽ち空間識失調に陥って、墜落しても可笑しくは無い程の悪条件。

いかにウルトラホークが大気圏内外両用の驚くべき最新鋭戦闘機と言えど、有人航空機という特性上、悪天候には滅法相性が悪かった。

むしろウルトラホークでなければ、この嵐の中を飛行し、あまつさえ戦闘継続など……自殺行為だ。

「こちらアマギ、だめです隊長！ やはり表層へのダメージは軽微！ 気にする素振りすらありません！」

地上のポインターからアマギの観測結果が届くも芳しくない。

レーザートミサイルによる精密射撃が封じられると、後は無誘導爆弾やロケット砲をばら撒くしかないが……敵の怪獣は尋常でない耐久性を持っており、顔面以外への攻撃は、全くと言っていいほど効果が無いのである。

ウルトラ警備隊は、嵐の夜に現れた怪獣を相手に、効果的な援護を行えていなかった。そう、援護だ。

一体誰に対して？

そんなものは明白だろう。

『デューア！』

『ガアアアア!!』

土砂降りに晒される崖の上、月の光すら届かぬ夜の闇の中で、二つの巨大な影が相對していた。

しなやかに引き締まった赤い筋肉が雨を弾き、いつそ艶めかしい程にその存在を主張させているのは、ウルトラセブン。我らが地球の守護者。

その正面で、悍ましい巨体が蠢いた。

魔女の鷲鼻のように折れ曲がり、醜く節くれ立った嘴。グロテスクな悪魔の翼が、猛風の中に翻り、鋭い爪が雨粒のベールを裂く。

闇の中で雷の輝きに照らし上げられたのは、血走った瞳をカツと見開き、雄叫びを上げる巨獣アロンの姿！

真つ赤な守護神の勇姿に、まるで怯む素振りも見せず、その四肢を八つ裂きにしてやろうと言わんばかりに、舌舐めずりでもするかのように如き余裕を見せつけた。

その肉体の強力は折り紙つき。自信満々なのも頷ける。

しかしセブンは、この敵の長所だけでなく……攻略法も知っているのだ！

『デュワツ！』

体を瞬時にミクロ化させると、豪雨をもともせず飛び上がり、怪獣の口へ一直線！

再び体内に飛び込んで、一寸法師の如く内部から敵を破壊しようという魂胆だ。

……しかし！

『ガアアツ！』

アロンは大きく裂けた嘴をバツクリと開き、喉奥から猛烈な勢いで、黄色いガスを噴射した！

『ダアーツ!?!』

真つ赤な矢羽根を包み込む、激烈なまでの刺激臭。これは……硫黄だ！

高濃度の硫黄ガスが、セブンを襲う！

さしものセブンも、ミクロサイズの質量しか持たぬ身で、猛毒の逆風に打ち勝つ事は出来ず、木の葉のように吹き散らされ、堅い岩壁に叩き付けられる。

そのまま踏み潰されないように、すぐさま巨大化して怪獣から距離を取ったが……勝負は振り出しに戻ってしまった。

嵐の中で、じりじりと睨み合う両者。

やがてセブンは、戦場を移動するために、崖下へとその身を躍らせた。

開けた場所では、怪獣の得意な急降下攻撃が猛威を發揮する。崖を背にして戦えば、敵の降下ルート限定出来ると考えたのだ。

『デュワーー!』

カシャ

……しかし……見上げたセブンが目にしたのは、自身を追ってくる怪獣の血走った瞳ではなく……ふいと興味を失ったかのようにそっぽを向いて、翼を大きく広げると、明後日の方向へ飛び立っていく敵の後ろ姿だった。

『アユ!?!』

やられた。

凄まじい敵対心を怪獣から感じた為に、自分が背を見せれば、てつきりこちらを追ってくるものとはばかり思っていたが……怪獣側では、わざわざそれに付き合う道理もないと言うわけか。

確かに、奴に暴れられて困るのはこちらの勝手な都合であって、本能のままに動き回る怪獣にしてみれば、襲いにくい場所にいる獲物に固執しなくてはならない訳では無い。

これまでの殆どが、侵略者との戦い続きであったセブンは少々失念していた。

互いを、排除すべき障害と認識していたこれまでの敵とは違い、野生の怪獣であればギエロン星獣のように、こちらから興味を引き続けなければならぬのか。

あの怪獣を市街地に逃がしてはならない。

セブンは嵐の空に飛び上がり、雷の合間を縫って、敵の翼へ追い縋った。

額からエメリウム光線を何度も撃ちかけて、敵を撃墜しようとするが、怪獣の背中は火山岩のように頑強で、着弾してもさしたる傷を与えられないではないか。

これでも最も威力を重視した磁力線を放っているのだが……雷雨と距離による減衰がもどかしい。

かといって、敵の機動力もそれなりである為、飛行中にアイスラッガーを抜き放って、脳波コントロールで命中させるのもまた難しく……

……かくなる上は。

セブンは切り札の使用に踏み切った！

両腕を使い真つ赤なエル字を組んで、極太の太陽光線を解き放ったのである！

夜空を光の帯で薙ぎ払い、回避も防御も許さぬ圧倒的な力業で捻じ伏せるのみ！

怪獣の背に命中したワイドショットが、堅牢な外皮を突き破り、内部の肉を一瞬のう

ちに焼き焦がした！

爆発四散！

実に手強い敵だった……胸をなで下ろすセブン。

しかし、前回の怪獣があればほど生存に必死だったのは、今回の怪獣と番いだからであつたのだろうか？

それならば悪い事をした……

地球における怪獣は、自然界の法則から大きく逸脱した存在ではあるものの……この星に生きる命である事に代わりはない。

とはいえ、より多くの生命を危険に晒しかねない以上、放置もできない。

彼らが理性と言葉をもって、話し合いが出来れば良かったのに……そうでなくとも、せめてパゴスのように大人しい性質であつてくれたなら……

セブンは先ほど倒した怪獣に対し、少しばかりの罪悪感と憐憫を感じながら、徐々に雨足が遠のいていく夜空を帰還していくのだった……

「うーん……」

「どうしたアマギ？ 何見てんだ？」

「ソガか……これだよ」

「二酸化ケイ素52%、酸化カルシウム、二酸化硫黄含有率共に……なんじゃこれ？」

アマギから手渡された資料に、ぎっと目を通したソガは、内容の理解を即座に放棄した。

「回収したアロンの、体組織データさ」

「ほうほう、アロンね。……それってもしかして、この前の怪獣の名前？」

「ああそうだ。久方ぶりに出現した地球怪獣……怪獣頻出期を経て地球防衛軍が発足し、地上から粗方の巨大生物を駆逐してからこの所、ギエロン星獣を除けば、宇宙人が連れてくる生物兵器としての怪獣か、既に記録のある怪獣ばかりだったからな。単独<sup>alone</sup>で出現した新たな怪獣……という事だったんだが……」

「だが……？」

「命名が決定して、すぐに2匹目が出現してしまった上に……これを見るとどうも……正式な記録には、もう一つの命名理由を記載する事になるだろう」

「……つまり、アマギ大先生は、もう一匹出てくる可能性があるかと踏んでいるわけだ」

「……そこが悩み所だ。あれが果たして2匹目だったのか、それとも同一個体だったのか……それによって話が変わってくる」

「同一個体？」



「これを見てくれ」

アマギはソガに何かの比較データを手渡した。

いくつものグラフや表が記載されており、そのどれもが、多少の違いはあれど、よく似た挙動を見せている。

「あーはいはい。こつちが1匹目でこつちが2匹目と……えつとき、なんか知らないけど生物の遺伝子って実はほとんど同じじゃないやなかったっけ？」

「バカ。誰がそんな初歩的な塩基配列を載せたりするもんか。確かにお前の言う通り、我々人類だって99%の部分では同じであって、残りの僅かな部分で個人差が決まるとも。だがそれは真正正銘、お前の話で言う残りの1%に当たる部分であって……」

「それがこの一致率だと、もはや別人とは考えられないって？」  
「そうだ」

無然としたアマギが、小さく頷く。

「ははあ……つまりギエロン星獣みたいに1匹目が再生したかもしれんと、そういう訳か！」

「それならば簡単だったんだが……」

言いつつ、難しい表情のプランナーは次の資料を見せた。

そこには、先ほどとは打って変わって、グラフの曲線には大きな差異がありありと示

されているではないか。

「……これは？」

「お前が言うところの99%の部分……本来であれば一致していなくてはならない筈の部分だ」

「二枚目は……硫黄細菌がどうたらって書いてあるけど？」

「2匹目の体組織からは、その硫黄細菌が大量に発見された。恐らく腸内細菌のよう共生関係にあつたんだろう。実際に高濃度の硫黄ガスをセブンに吹きかけていたからな。確かにアロンの肉体にはAとBの個体両方共に硫黄が含まれているから、不自然ではないが……」

「1匹目からは少しも検出されない……と」

「……1匹目は恐らく、硫黄ガスがそもそも吐けなかつた筈だ」

「……つまり何か？ 明らかに個人としては同じ人物の筈なのに、種別や性能が……素質が全く違う……って事？」

「人間で例えるなら、そうなる」

眉間のシワをソガへ押しつけると、ため息と共に椅子から立ち上がり、コーヒーを二つ分淹れるアマギ。

ソガの前にソーサーがコトリと置かれるが、それに気付きもしないで、何事かをブツ

ブツと呟いている。

「単なるクローンじゃないって事か……」

「ゾウリムシのような無性生殖ならば、こうはならない。そしてもしも、死ぬ度に進化して肉片ひとつから蘇るといふならば……ある意味ではギエロン星獣以上の驚異だ」

「……量産した怪獣を、実は宇宙人がチューンナップしてるんじゃないのか?」

「なんの為に?」

「そりゃあ……セブンすら倒せるような、最強の生物兵器を造り上げる為さ!」

「……無理だな」

「なぜそんな事が言い切れる!?!」

「純粹に容量が足りないからさ」

「容量って……まさか遺伝子の?」

「まあ……簡単に言ってしまうえば、そうだ。2匹目は1匹目と比べて、出来る能力が増えたかも知れないが……その分、出来なくなつた事もある。肉体硬度なんかは、明らかに1匹目へ軍配が上がるだろうな。一番最初の資料を見ろ、体表組織の比率が違う。ガラス質の分量が増えているから、レーザーにはかなり強くて、セブンのパンチには勝てんだろうさ。どんなに手を変え品を変えても、総合力でセブンを上回る事は決して出来ない。アロンではセブンを倒せんよ」

「なる程……そういう……」

「なんだ、妙に納得するじゃないか？ ほら、飲めよ」

「いや、こつちの話……オツと、こりや失敬」

コーヒーに気付いたにも関わらず、ブツブツと資料を眺めながら、物思いに耽るソガ。その様子へ首を傾げつつ、カップを傾けたアマギがポツリと零した。

「しかし……量産して改造……か……」

「なんだ？」

「いやなに、もしもお前の言う通りに運用するなら、これ程都合の良い怪獣も居ないだろうと思ってね」

「そんなにか？」

「ああ。お前はその一枚目を見て、なんとも思わなかったのか？ アロンの肉体は……半分以上が鉱物質なんだぞ。僅かにだが、鉄も含まれてある」

「なんだって!? ……あ、本当だ」

「もしもこれが、異星人のデザインした生命であった場合は、肉体の構成成分からの名付けだと取り繕う羽目になるので、あまり歓迎したくはないが……」

「どういう事？」

「鉄製品……つまりアイロンの振りだよ」

「なーるほどねー……」

じゃあ本当は、アロンじゃなくてアアンじゃねえか。

「かつて飛来した詳細不明生命体が、地球上で精神の器として使っていた肉体があっただろう？ あれは100%が岩石で出来た疑似生命と言わなければならないが……あれには有機生命体としての側面を持たせれば、丁度そのアロンのようになるだろうな。言わば、生きた鋳造だよ」

「ああ……そうか！」

「ほら、お前が好きな海外の三文小説にもよく出て来るじゃないか。ゴーレムと言う奴さ。いや、原点はユダヤ教の神話だったか……？ まあ尤も、姿形はガーゴイルと言わなければならないが……パリ本部の近くにあるノートルダム大聖堂を見たことがあるか？ あれはなかなかに見物だぞ」

「……」

「おいソガ。聞いてるのか？」

「聞いてるよ！ 次にコイツが出て来たらどうするか考えてんだよ！」

ソガがムツとして言い返すも、それを聞いたアマギは呆れたように肩を竦めた。

「無駄な事はやめろ。次に出て来た時には、また別の性能かもしれないぞ？ なまじ予測に頼る方が危ない。……そもそも、アイロンすら出て来ないお前のオツムじゃ

なあ」

「うるさいね！　そういうお前はアレ出来たのか？　前からずつと言ってるじゃないか！」

「出来るわけないだろ。実物もないのに……理論値すら分からないんじゃあ、計算のしようも無い。勿論、お前の言ってる理屈は分かるが、それはあくまで発想の取っ掛かりであつて……せいぜいが使えそうな機材に目星をつけたり、実験環境を整えるのが関の山さ」

「そりゃそうか……」

今度こそソガは、がつくりと項垂れた。

暗闇に、映像が映し出される。

巨大な怪獣に対し、真っ赤な戦士が立ち向かつていく様が、何度も何度も繰り返される。

稲妻をバックに、対峙する二つの影。

やがて、掛け声と共に崖から飛び降りるウルトラセブン。

その格好のまま、空中で彼の姿が静止した。

時間が止まる。

それを無感動に眺める瞳が二つ。

闇の中に、白い輝きが浮かび上がる。

悍ましく唖れた声が、地の底から這い上がるかのような重々しさでもって、破滅へのシナリオを紡ぎあげる。

「せぶんハ……じゃんぷスル事ハ、勿論。空ヲ、飛ビマワル事モ、可能ダ」

「飛行性能を含む身体能力においては腕力以外の全てでスラッグの性能を大きく上回っている」

「ソシテ、ソノ腕力モ、うるとら念力ト、緻密ニ計算サレタ、効率的ナ、力学配分ノ、併用ニヨツテ、補ウ事ガ、可能ダ」

そう分析する彼らの眼前では、セブンが自身よりも上背のある怪獣を、一本背負いにかけているシーンが、何度も何度も繰り返されていた。

「基礎能力の全てでスラッグを凌駕する事が証明されたわけか」

「ソウダ、我々デ、ナケレバ、せぶんヲ、倒ス事ハ、出来ナイ」

「それでこそ我々がツツ星人の次なる標的に相応しいというものだ」

「デハ、ココニ、『せぶん抹殺計画』ノ、承認ヲ、起案スル」

「承認」

「承認」

「承認ダ」

「承認する」

闇の中に木霊する複数の声。

そのどれもが、ウルトラセブンを殺す事を望み、そしてそれを当然の事であると、看過する。

「主張一致ニヨリ『せぶん抹殺計画』ノ承認ヲ、受諾」

恐ろしい計画が、今まさに遂行されると確定した。

そうして彼らの会議は、滞りなく次の段階へ進んでいく……

再び切り替わる映像。

怪獣の蹴り飛ばした岩石の塊が、エメリウム光線によって粉碎される。

「コレガ、せぶんノ、うるとらびーむダ。ソノ熱線ハ、アラユル金属ヲ、貫キ通ス、ダロウ」

「回収したS1とS2の肉片サンプルはどうなっている」

「狙イ通り、えねるぎー粒子ノ、残滓ガ、付着シテイタ」

「それならば波長の特定も容易いな」

「既ニ、解析ガ、終了シタ。たきおん関数ニ、照ラシ合ワセタ、結果、M、2、S、H、

3、G、W、F、B、1……」



彼の嘴が、何らかの数値を淡々と読み上げていくが……およそ地球人には理解し得ない計算式の羅列であった。重要なのは、それを領きながら聞いている同じ顔の聴衆達全てに対し、セブンの持つ必殺光線における、重大な秘密が暴露されてしまったという事だ。

「この情報が正確であるかはS3の耐久テストですぐさま検証できる」

「ソレニ、加エテ、次ハ、せぶんノ、洞察力ト、判断力ヲ、測定スル」

「ではS2によつて得られたデータを基にS3の調整に入れ」

「分カツタ。『アロン』ノ、隠密性ト、耐ビーム能力ヲ、向上サセル」

「アロンとは何だスラグの事か」

「ソウダ、地球人ハ、我々ノ、怪獣ガ、くろーん生成、サレテイル事ト、体ノ、半分ガ、無機物デ、構成サレテイル事ヲ、見抜イタノダ」

「地球人の割にはやるではないか脅威度を一段階修正これ以降スラグシリーズを本計画の遂行中はアロンと呼称する」

「承認」

「承認」

「承認……」

闇の中で、何者かの声が木霊する……

## セブンは……………

荒野に行くポインター。

運転手はソガ。

険しい顔で周囲を注意深く警戒しながらの運転が、決して信号無視や飛び出しを懸念しての安全運転ではない事は明らかだ。

もはや襲撃を確信していると言って良い程に、真剣な様子のソガへ、助手席のダンが遠慮がちに声をかける。

「あの…………ソガ隊員…………」

「なんだ？」

「止めて貰えませんか」

「なに!? 何か見つけたのか!？」

「いえ、ちよつとお話が…………」

「ああそうか、アロンの事だろうか？」

「それもありませんが…………」

口籠もるダンを置き去りにして、早合点したソガはハンドルを離さないまま、そのま

ま奥へと進んでいく。

「いいかダン。アロンが現れたら、俺が奴を引きつけるから、お前はポインターの通信機で応援を呼ぶ。これでいこう」

「えっ？ いいえ、その役目は僕がやります」

「まあまあ、安心しろって！ そのためにわざわざエレクトロガンを積んで来たんだから。アマギの報告書見たる？ アロンの皮膚が半分岩石だと言うなら、アレは効く……はずだ。なんせワイルド星人の隠れてた洞窟を吹き飛ばした実績があるしな。逃げ隠れしながら撃つのは俺の十八番だぜ？」

「……」

確かにソガ隊員の言う事にも一理あるが……

「何をそんなに焦っているんです？ ソガ隊員」

「……焦ってる？ 俺が？」

「ええ、僕からはそう見えます」

「なる程なあ……そうか、焦ってるか……」

思っても見なかったという風に呟くソガだが、そう言われても仕方有るまい。

なにせ控え目にはいえ、ダンが制止したにも関わらず、ポインターは未だに荒野を突き進んでいる。

普段の彼であれば、そうはならなかったはずだ。

「そうかも知れん。我々は前回の戦いで、セブンをろくに助けてやれなかったからな……」

「前回と言うと、あの嵐の夜？」

「そうだ」

ソガは、ガッツ星人がアロンを捨て駒にしてセブンの戦闘能力を測定している事を知っている。

原作においては、その戦闘は39話開始時点より前の段階で、既にあつたものとして、ガッツ星人が記録映像を再生するという形で語られ、そこに警備隊の姿は一切ない。

だからこそ、そのアロンに対し、なるべく警備隊側の攻撃でダメージを稼ぐ事で、ガッツ星人のデータ収集を妨害出来ないかと画策していたのだ。

だが、蓋を開けてみれば想定以上の強敵だった。

よもや数カットしか出番の無かつたマイナー怪獣が……いやむしろ、原作において活躍が全く描写されなかつたからこそ、アロンがここまで厄介だとは知らなかつたのである。

ミクラスの活躍とホークによる撃墜というプロセスを経て、内部からの巨大化という、ソガすらも見たことが無い方法で一匹目を倒した時には小躍りしていたものだが

……二匹目が嵐の中で現れた際、ソガは最悪のパターンに思い当たってしまったのだ。

原作において示唆されたアロンとセブンの戦闘は、あれこそがカプセル怪獣やウルトラ警備隊の援護があつた上での結果であり……セブン以外は、ガッツ星人にとつては取り沙汰するまでもない事柄として、映<sup>カッ</sup>つてい<sup>ト</sup>な<sup>サ</sup>か<sup>レ</sup>つた<sup>タ</sup>だけなのではないか？

……つまり、今の状況こそが、原作と何ら変わらない展開なのではないか、という事に。

そして……

「結果的にセブンのワイドショットを使わせてしまった」

苦々しげな言葉を聞いて、今度はダンが思いがけない表情をする番だった。

「……そのの、なにがいけなかつたんでしようか？」

「そりやそうだろう。ありやあセブンの一番の切り札だろうから、きつとエネルギー消費も一番デカいはずだ。大技つてのはな、そう何度も使えないから大技つて言うんぞ。それを気軽にポンポン撃たせる訳には、いかんだろうが」

「……はあ」

「このままじゃメダルが取れないからつて、クアドラフルだのトリプルルツツ……じゃないや。えつと……鉄棒で毎試合ごとに大車輪を披露しろつて言われても困るだろ？

そんなの出来てフルハシ先輩くらいのもんさ」

「……なるほど?」

なんだか分かったのか分からなかったのか判然としない顔で、ダンが首を傾げるが……

「ハッ! ブレーキ!」

鋭く叫びながら、ダッシュボードへ手を伸ばし、電磁バリアのスイッチを押すダン。急ブレーキによる制動で、ハンドルへ強かに頭を打ち付けたソガの目の前で、地面がザックリと抉りとられていく。

そのまま進んでいけば、間違いなくお陀仏だ。

生睡を飲み込む二人の眼前で、明るい黄土色の砂丘がゆっくりと立ち上がったかと思うと……その表面の色がみるみるうちに濃くなっていき、カッと開いた瞼の下と嘴の中に、それぞれ真つ白な水晶体と、真つ赤な肉の色がチラリと見えて、それが紛れもない生命であるとようやく分かる。

白眼を? いていた怪獣の眼窩の中で、石英の宝玉が裏返り、殺意と悪意の籠もった瞳がギョロリとこちらを見下ろした。

「野郎! 保護色で隠れてやがったのか!」

『ガアアアア!!』

なんと、道路脇の小高い丘だと思っていたのは、皮膚表面の構成分子をルービック

キューブのように組み替えて、体色を欺瞞したアロンの頭部だったのだ！

カマキリのように鋭い鎌が、ポインター目掛けて振り下ろされる。

慌てて座席から転がり出た二人の後ろで、ポインターが真つ二つに断ち割られて爆発した。

アロンの豪力の前では、ポインターのバリアも装甲も、全く太刀打ちできないのだ。

例によって、微弱な電波障害が撒き散らされており、腕のビデオシーバーでは基地に繋がらない！

初手で連絡手段と攻撃手段を一度に奪われたソガには、効きもしないウルトラガンを乱射しながら、空気を読んでこの場から大きく離れるように走り去る事だけだった。

それこそダンと、お互いの姿が見えなくなるくらいまで……

『デユワー！』

『ガアッ！ ガアアアア！』

素早くセブスがエメリウム光線を放つも、全く効果が無い。それこそ、先程からアロンの目玉付近に目掛けてしきりに発射される、か細いウルトラガンの光条とまったく同じ。

両者の間には威力にして絶大な開きがあるというのに……この怪獣にとっては、どち

らも牽制程度の痒みすら齎さないのだ!

いくら効きが悪いといっても、以前の個体に対しては羽を破壊するくらいの効果はあったはずなのに……驚愕に目を見開くセブンの前で、アロンの嘴の隙間から黄色い気体が漏れ出すのが見えた。

『アユ!!』

猛毒の硫黄ガスが来る!

そう思い距離をとったセブンであったが……開かれた嘴から噴射されたガスが、そこまで勢いのあるものでは無かった為に、思わず拍子抜けした。

以前はそれこそ横殴りの豪雨の中でも、まるで工業ブローのような力強さでセブンを押し返してきたものだ。

あの時はミクロ化していたとはいえ、セブンの飛行能力に打ち勝つ強さの噴射力というのは相当である。

しかし今回はどうだ、以前は束のような収束力だった黄色いガスも、先程までセブンが立っていた場所にですら、到達するころにはすっかり拡散してしまっている。

今度の個体は耐久性のかわりにガスの噴射が苦手なのか……いや、さて? 拡散!?

『アユワー!!』

念力で一帯に充満した黄色い霧を吹き飛ばしたセブンであったが、一足遅かった……



ガスの先にいると思われた怪獣は、その姿を忽然と消してしまっていたのである。

先程の奇襲を思い出し、セブンは納得する。なるほど、どこかに隠れているな……？  
その隠れ身の技量へ、相当自信があるらしい今度の奴にとつては、硫黄ガスは武器ではなく、タコが吐くスミの如く、単なる目くらまし煙幕として使えれば充分なのか。  
敵の気配を探ろうと意識を集中したセブンの耳が、レーザー音と小さな水音を捉える。

振り返れば、崖の上からソガがしきりに地面にできた無数の水たまりへ向けて、手当たり次第にレーザーを打ち込んでいるところであった。

この荒れ地は水はけが悪く、つい先日の豪雨によつて湖や川が溢れ、そこら中に大小様々な水たまりが発生していたのだ。

大きいものでは、それこそセブンの全身を映せる程の……池といつて差し支えないものまである。

一番近くのそれを足で踏みしめるセブン。ばちやんと捻りのない水音で、泥水に映ったの巨人の姿があっけなく歪む。

今のは踝まですら沈まない程に浅い、それこそ水たまりという形容が相応しいものであったが……問題は、泥で濁っているために、踏むまでその深さが分からなかった事だ。

これがもしも、深い穴であったならば……

辺りを見渡すセブンの瞳が、キラんと輝く。透視力だ！

カシヤ

すると泥水が透過され、一つの水面にアロンの顔が浮かび上がる。

その穴の幅は狭く、とても怪獣が身を潜められる程に深い穴が開いているとは誰も思わないだろうが……だからこそ、敵の姿を探して不用意に歩きまわれば、恐ろしい罠にかかってしまうはずだ。

きつと、あらかじめ穴を掘っていたのだろう。

セブンが巨大なし字を組む。

敵はまだ見つからないと思って、まったく動いていない。これはチャンスだ！

待ち伏せは非常に効果的な策ではあるが、その場所があらかじめ分かっているならば、そこへ最大火力を叩きこまれるリスクも承知して然るべきなのである！

『ダァ——！！』

極太の太陽光線が、オゾン層の軽減すら受けずに水浸しの地上へ叩きつけられた。

怪獣が丹精込めて掘った竖穴ごと、光のスコップが乱暴に暴いてしまう！

泥飛沫を盛大に噴き上げて、アロンの巨体が地上へとかち上げられる。

苦し気なうめき声でのたうつ怪獣。

膨大な熱量で、水分と言う水分が一瞬で蒸発し、アロンのいた周囲だけが、泥濘からあつという間に砂地へと変わってしまったほどの凄まじい威力！

……しかしなんと、真に驚くべきはセブンの方であった。

アロンが、その目に凄まじいまでの怒りと恨みを籠めて、砂塵の中で立ち上がって来たからだ！

地面や水がクッションになったとしてもいっつかの？ いや、例えばそれで僅かに威力が減じたとしても、生物がまんじりともせずその身に受けて、生き残れるような、まして闘志を燃やして立ち上がれるような代物ではないのだ。それがセブンのワイドショット、まさに文字通りの必殺光線だったはず！

これは流石にセブンをして心胆寒からしめた。痛覚のない石人形でも相手にしているかの如き恐怖が、赤い足を一步下がらせる。

こんな化け物相手に、例えばエレクトロ口Hガンであっても、たいしたダメージを与えられなかっただろう事は明白だ。

何ギガトンの爆弾にも耐える物理耐性だけでも厄介だったのに、その上ビームすらも効かないなんて。

もはや自分に残された武器は……

その時、セブンはうなじの辺りがチリチリと灼けるような感覚を覚えた。

常識外の強敵に、第六感が激しく警鐘をならしているのかと思つたが……いや、違う。こゝ、これは……アイスラッガーが白熱しているんだ!? なぜっ!? というか、熱い!?! 思わず後ろを振り返つたセブンは、今度こそ足元が崩れ落ちる程の絶望を味わう事となつた。

なんと崖の上から、ソガ隊員がウルトラガンを構えて自分に向けてレーザーを発射していたからである!

一体なぜなんです、ソガ隊員! まさか……今度のアロンは人間の脳を操れるのか!?! 心の底から信頼していた相手に、後ろから撃たれるという、考え得る中でも最悪の状況に、セブンは膝から崩れ落ちそうになつたが……次の瞬間、自分の後頭部を狙つていたレーザーが狙いを変えてアロンの首筋を舐めるようになつたのを見て、別の意味で崩れ落ちそうになつた。

ソガの意図する事を正確に読み取つたからである。

それから何度も何度も、自分の頭頂部と敵の首をレーザーが行つたり来たりするのを眺めながら、セブンは戦闘中だと言うのに、呆れのあまり溜息を吐きそうになつた。

なんとという事はない。彼は……アイスラッガーを使えと言っているのだ。

よくよく集中してみれば、何事かを必死に叫んでいる。

「超獣に片足突っ込んでるような奴は、さっさと首を落とせ！」

何を言っているかよく聞こえないが……つまり遠すぎて、声が戦闘音でかき消されてしまうから、彼はレーザーで気を引いたのだ。

それでもいくら急いでいるし、特に効かないからとは言え……味方を撃つというのは、その……うん、ソガ隊員ならやりかねない。

以前、彼はアイスラッガーを『頭に括りつけた包丁』呼ばわりしていたので……彼の中で、これは僕の肉体とは別という認識なのだろう。

なるほど、ソガ隊員からしてみれば、ヘルメット越しに小さい石ころをぶつけて気を引く程度の行為なわけだ。

……とても、彼らしい。

彼にその、ひどく雑で、投げやりで、横着な部分があるのは薄々察してはいたが……その対象に自分がなってみると……なんだかとても……心地よい。

今までどこか壁のような、一種のよそよそしさを感じていたが、それが取っ払われるところなるのか。

これが地球人であったならば、きつと気分を害するところなのであろうが……

込み上げてくる不思議な笑いを堪えながら、セブンは既に少しばかり熱を帯びた頭頂部の武器に両手を添える。

一匹目がアイスラッガーを迎撃していた事で、アロンの動体視力には捉えられてしま  
うのではないかと懸念していたのが……そういえば、目の前で素早くステップを踏むこ  
の個体は、一匹目よりもずっと背丈が小さいのだという事に気が付いた。

ガスを吐いたり、姿を隠したり、多芸な一方で……肉体面の成熟具合は劣っていると  
いう可能性に賭ける事にしたのである。

セブンが態勢を整えたのを見てとり、ソガのレーザーが敵の顔面に狙いを変える。

『ジュワツ!!』

アイスラッガーは大暴投。

アロンの左側をすり抜けていくではないか。

そこへチカチカと細いレーザーが左目に突き刺さり、煩わしそうに左手を払った瞬間  
!

敵の後方でぐるりと弧を描いた銀のブーメランがアロンの首を右側から綺麗に刈り  
取った!

カシヤ

頭部を失い、ばたりと倒れる怪獣の四肢。

セブンの躰を光の螺旋が包むと、崖の上にはモロボシ・ダン隊員が立っている。

カシヤ

さあ、早くあのせつかちな隊員と合流しなくては。しかし……

ソガ隊員、助けて貰って置いてなんです……

他の人にはあんまりしない方がいいですよ、そういうの。特に……アマギ隊員とかア  
ンヌには。

空中に映し出されたホログラム。

セブンの瞳が眩く輝く。

「せぶんノ、透視力、普通ノ、物質ナラバ、簡単ニ、見通シテ、シマウノダ」  
闇の中で声がする。

二つの白い瞳が、じっと映像を見つめている。

誰かに説明するかのようになり、ゆっくりと、丁寧に、自問自答する鳥人。

「あい、すらつがー、……えめりうむ光線ト、共ニ、せぶんノ、万能武器ノ、ヒトツダ」  
怪獣の首がどきりと落ちる。いかなアロンの防御力といえど、その上から叩き切つてしまふとは、恐ろしい切れ味だ。

「シカモ、脳波こんとろーる、出来ル」

「軌道も自由自在というわけか」

虚空に響く、二人目の声。

しかし、この空間には一人しかいない筈だが……

いや、正確には居なかった。

つい今しがたまでは。

「使用ノ、直前ニ、奴ノ、脳波ヲ、検出シタ」

「早速分析して波長を割り出してしまえ」

領くガツツ星人の前に、もう一人のガツツ星人が現れる。

今まさに、脳内会議が、脳外会議に切り替わった瞬間。

議論とは、一人では出来ない行為だ。

であればもう一人そこに、作り出せば良い。

そう、分身だ。



ガッツ星人は、自分の分身を作り出し、それに向かつて得られた事象の解説を繰り返す事で、より理解度を深め、さらなる真理を探究するのだ。

しかし、単なる分身ではない。自身のコピーではなく……別人を疑似的に作り出す。それこそが、ガッツ星人の妙技であり、秘訣だ。

ガッツ星人は、分身を作り出す際に、その思考傾向にあえて偏りを作る。重んじる価値観、目の付け所、ひらめきのプロセス。それらを一旦自分から切り分けて、別の存在に分け与える。そうすれば、例えば基の人格は同じであっても、議論を進めるに足る別人となる。

議論とは、異なる意見、見地から何度も何度も琢磨する事によって、議題の完成度を高めていくものだ。

この、思考パターンの違う人格を何通りも用意し、それらを脳内で、時に分身として直接に話合わせる事で、ガッツ星人は計画を決定する。まったく別の意見を持つ者達が、納得できるまでに話し合われた時……誰も文句のつけようが無いモノが出来上がるのだから。

……しかし、そんな事が可能なのだろうか？

「せぶん攻略の糸口は見つかったか」

「コレヲ、聞ケ」

《そりやそうだろう。ありやあセブンの一番の切り札だろうから、きつとエネルギー消費も一番デカいはずだ。大技つてのはな、そう何度も使えないから大技つて言うんだぞ。それを気軽にポンポン撃たせる訳には、いかんだろうが》

《そりやそうだろう。ありやあセブンの一番の切り札だろうから、きつとエネルギー消費も一番デカいはずだ。大技つてのはな、そう何度も使えないから大技つて言うんだぞ。それを気軽にポンポン撃たせる訳には、いかんだろうが》

《そりやそうだろう。ありやあセブンの一番の切り札だろうから、きつとエネルギー消費も一番デカいはずだ。大技つてのはな、そう何度も使えないから大技つて言うんだぞ。それを気軽にポンポン撃たせる訳には、いかんだろうが》

「やはりか」

「ソウダ、我々ノ、推測、シタ通りダ」

ガッツ星人の分身は、単なる分身ではない。

それぞれが、考え、理解し、行動する。

本来であれば分身とは、自身を分解、つまり切り分けていくのであるから、元のオリジナルよりも劣るはずだ。

だが、ガッツ星人の分身は分身であつて、分身でない。

彼らは……質量を持った【情報】なのだ。

ガッツ星人の知能であれば、この宇宙における多くの情報を理解し、計算することが出来る。星の歴史、量子の動き……それらの膨大な情報を、一つの空間に圧縮したならば……情報は見かけ上の質量を持つに至る。

なぜなら、物質とは、生命とは、それすなわち情報の集合体に過ぎないのだから。

物質を分解すれば、あらゆる情報が手に入る。逆に、あらゆる情報を詰め込めば、それはもはや物質足り得るという事だ。

あとは、その情報が正しく、そして……そこに「在る」と断定できる観測者さえいればよい。

ガッツ星人がそこにて、目の前に自身と同等の情報が存在し、それが「ガッツ星人」であると認識さえできれば、事象はそのように収束する。

そして顕現したもう一人のガッツ星人が、観測者たるガッツ星人を認識し、またそう定義すれば、両者間に何者も疑問を差し挟む余地はないのである。

宇宙とは、空間に揺蕩う、無限の情報と、それを定義する観測者達によって、無数に形を変えるのだ。

この科学的哲学……ではなく、【哲学的科学】こそが、ガッツ星人の導き出した真理である。

「我々ノ、狙ウ、せぶんハ、実ハ、うるとら警備隊ノ、だん隊員ナノダ」

「だったらダンを倒してしまえば簡単ではないか」

「イヤ、せぶんヲ、倒サナクテハ、我々ノ、目的ハ、成功シナイ。せぶんヲ、倒セバ、人類ハ、タチマチ降伏スルニ、違イナイ、カラダ」

彼らの目的とは、地球を手に入れる……等というちっぽけなものではない。

地球を手中に治める事が、自分たちの『強さ』を全宇宙に知らしめる為に、効率が良いと判断しただけだ。

そう、強さだ。

ガッツ星人の強大さをより広範に、より正確に、遍く銀河の星々へ流布しなくてはならない。

それこそが、彼らの至上命題なのだから。

ガッツ星は、星全体が活火山で覆われた、非常に過酷な星だ。いつもどこかで噴火が起こり、大気は高濃度の硫黄ガスに満ち満ちている。

彼らの祖先は、そんな星に住む鳥類の中で、最も進化した種だった。

まさに弱肉強食。強くなくては生き残れない。

厳しい生存競争を勝ち抜いたのが、彼らの祖先だったわけだ。

その生存欲求は当に筋金入りで、生息地である火炎林の熱から身を守る為に、卵の殻

は非常に強固で分厚く、その中で雛は、嘴で堅い殻を叩き続け、それを2年も3年もかけて破壊できた者だけが、ようやくまともに生を受ける事を許される。

獅子は子を崖から突き落とすと言うが、それすら生温いと言わんばかりの生存選択。

弱者は、この世に生まれ出ずる事すらも許さぬという、強者絶対主義が、ガッツ星人の根幹にある。

そして、あまりにもストイックな、しかして単に強すぎるオウムに過ぎなかつた彼らが、ガッツ星人として次のステージに登つたのはあの出来事があつたからこそ。

ある日、ガッツ星人は地軸のズレにより大規模な地殻変動に見舞われた。

星の全域が割れ砕け、マントルプリュームによつて炎と死のガスに覆われた時、非常に知能の高い、それこそ野生動物が到達できる最高到達点ぎりぎりまでに成熟した彼らの頭脳は、星の終わりと自身らの破滅を正しく理解したのである。

もしくは日々の研鑽によつて研ぎ澄まされた野生の本能の発露だつたかもしれないが、とにかく彼らは個体や家族等という単位ではなく、「種」そのものが一匹たりとも生き残る事無く悉く死に絶える事を予想した。予知と言つてもよい。

そうして、自分達の死が確定したその瞬間に、彼らはそのすべて、つい先ほど殻を突き破つたばかりの雛に至るまでが、それを拒絶した。

『例え星が死のうとも、こんなにも強い我々が死ぬはずがない。いや、死んで良い筈が無

い。なぜなら……」

『『我々は無敵なのだ!』』

次の瞬間、すべてのガッツ鳥が覚醒……いや、生命の限界という殻を突き破って一斉に孵化した。

こうして銀河にガッツ星人が爆誕したのである。

全てのガッツ星人が同時に発揮した超能力によってマントルは押しとどめられ、星の終わりは回避された。

当然ながらガッツ星人以外の生命は全て死に絶えたが、彼らは生き残ったのである。生命の進化を数段一気に飛び越して覚醒した超人類として。

行き過ぎた自己肯定感と、生存欲求が、種としての滅びを受け入れる事をよしとせず、その運命を撥ね除ける事に成功したのだ。

詰まるところ、宇宙にとってガッツ星人達は、そこで絶滅させるにはあまりにも……根性がありすぎたという事らしい。

「我々はアロンを使ってセブンの能力を分析したこれを基にして戦えば必ず勝てる!」

敵を知らば百戦危うからず。

比喩でもなんでもなく、ガッツ星人にとってはそうなのだ。彼らが勝てること確信し、疑念を差し挟む余地がなくなった時、彼らは勝つ。

彼らが目覚めた能力は、一種の『願望実現能力』であり、自分だけの現実パーソナルリァリティを宇宙に反映させるための力とでも言えば良いか。

全ての生命はこの力を大なり小なり持っているものであるが、通常それは現実を改変するに足るほど強固なものではなく、意志の強さで望んだ結果を引き寄せる確率がほんの少しだけ上がるといった程度に過ぎない。

それも当たり前で、皆が皆この能力を持つているので、それぞれの望みが干渉したり、それぞれが観測した階層の違う宇宙の姿が互いに重なりあつて、ちよつとやそつとの力ではそうそう動かす事が叶わないからだ。そして、この力が強くとも、事象を捻じ曲げるのならば、その結果やプロセスをどうすればいいのか？ 力が作用した後の世界の姿も正しく認識していなくてはならない。

宇宙とは、無数の観測者によって収束させられた結果だからだ。

普通の人間が「そこに見えない壁がある」と言い張つても、それは妄想の域を出ず、他者に否定され、何よりもまず本人が心の底からそれを信じる事が出来ないために、それは存在しえない。

しかしこれが、非常に権威のある物理学の名誉教授が述べた見解であればどうである

うか？

「不可視ではあるが、Aという粒子とBという現象の観測結果として、そこになんらかの物質が存在する」と主張された場合、何人かの人間はそこに首を傾げながらも理解と納得を示してしまうのではなからうか。その瞬間、両者の間には臆気ながらもそこに壁があるという認識が生まれ、宇宙がそう観測されるのだ。

ガッツ星人程の頭脳であれば、より精密に、より深く、それらの現象を正しく理解し、その上で……「そこにバリアがある」と主張できる。なんなら、既に持っている科学力でもって、ある一点に差し掛かった粒子のベクトルを操作して、あたかもそこへ壁があった場合の大気の流れを再現出来るかもしれない。

この非常に高度なパントマイムを見せられた宇宙は……納得し誤認するのだ。そこに不可視の壁が存在する前提で、その姿を変える。現実が改変されたあとは、そこに別の物質が侵入しても阻まれる。なぜなら、そこに壁があるからだ。

雲霞の如く攻め寄せるガ口星人の物量を捌き切り、得意の洗脳戦術すら寄せ付けないとなると、それに負けない高度な分身能力を持っているに違いない。

ヴァイロ星人の切り札である生物機械兵器すらも退けたというならば、あの火力を寄せ付けられないバリアと、その装甲を貫く光線を持っていて当然だ。

ガッツ星人が他星に攻め入り、その尽くを下すにつれて、ガッツ星人がどうい存在



であるかを、銀河中が認識していく。

彼らは勝てば勝つほどに、その力を増し、より強大になっていくのである。

さてここに、あらゆる侵略者を撥ね退け続ける星がある。地球というらしい。

そこにはウルトラセブンというM78星雲人がいて、様々な星人を打ち倒して来た。では……そこを陥落せしめた時、ガッツ星人はどういう存在か？

ウルトラセブンより強いという事は、彼が下してきたあらゆる星人達が束になってかかっても敵わないという事だ！

ゴドラよりも強靱で、メトロンよりも狡猾で、ペダン星よりも凄まじい兵器を有し、ペガッサよりも優れていることなどはや語るべくもなく銀河中が認識するだろう！

そう彼らの目的は、ウルトラセブンを倒し、地球に敗れ去った全ての種族の上に立つ事なのだ！！

そうすれば、名実ともに、あらゆる戦いに負けた事のない無敵のガッツ星人が誕生する。

そうなったら、もはや宇宙のどこにも彼らを止める事などできない。

宇宙警備隊など、相手にすらならないだろう。なぜなら、M78星雲人では彼らを倒せなかったのだから。

勝利、絶え間ない勝利こそが彼らの【哲学的科学】に唯一にして絶対必要なものである

この計画における最大の障害は、それを言い張るガッツ星人本人の頭脳が、そうであると強く信じる事が出来るか否かという事だが……  
何も問題はない。

ガッツ星人は賢いから強いのか？ 否。

ガッツ星人は超能力が使えるから強い……違う！

まったくもつて的外れもいい所だ！

逆だ。すべてが逆！

ガッツ星人は、強<sup>い</sup>から何<sup>でも</sup>出<sup>来</sup>て当<sup>然</sup>な<sup>ので</sup>ある!!

「ソウダ、せぶんヲ、倒ス、抹殺計画ハ、完了シタ」

「これから地球の引力圏へ入る……」

《これより、セブン抹殺計画を開始する》

# セブン抹殺計画 第一段階

「隊長！」

「どうだった？」

「異常ありません」

「まだですか……」

作戦室に戻ってきたフルハシとアマギ。

その顔はなんとも不機嫌そうである。

通報を受けて遊園地へと慌てて出動したのに、空振りだったからだ……

「ああ、まったくひどいイタズラだよ！　これで4回目の出動ですからね……」

「まあ、そうボヤくな……」

隊長がにこやかに肩を叩いて慰めるが、なんとも不服そうである。

そんなフルハシへ、何かを後ろ手に隠しながら、妙にウキウキした様子でアンヌが近づいてくる。

「はい、フルハシさんに小包が届いているワ……遥か、アフリカから！」

「へええー!」

「アフリカからあ?」

警備隊のメンバーが、わくわくした顔を隠しもせずに覗き込む中、思いがけない贈り物に、どこことなく嬉しそうなフルハシが包みを開けていく。

箱の上に置かれていたメッセーじカードを、横からアンヌが素早く抜き取って見れば……そこにはとても可愛らしく丸っこい筆跡で、丁寧な挨拶が書かれていた。署名には……ナツコの文字。

「アラ!? 女性からよ!」

一気に声のトーンが上がリ、隣のアマギに文面を見せるアンヌ。彼女のミーハーな面がうっかり顔を出してしまっただけらしい。

とは言え、見せられたアマギはと言うと、カードをちらりと一瞥しただけで、あとはすっかりフルハシの手元にある蒼い輝きに夢中となっていたが……

「はわあ……綺麗な宝石ですねえ……!」

「えく……フルハシさん、お元氣……!」

勝手に手紙の内容を朗読し始めたアンヌから、フルハシがそれを取り返して後を引き継いだ。

その為に一旦、脇に置かれた宝石を、今度はアマギがサツと取り上げて、しげしげと

眺めては矯めつ眇めつする。そんなアマギの肩越しに、興味深げな視線を送るダン……いや、コイツらやりたい放題だな。

それとダン。いくらその石に見覚えがあるからといって、作戦室で透視を使うな。なんか今、お前の目がチラツと一瞬光って見えたぞ。

……そうか、この時にこの石の正体を見破っていたのか。

だからって、物欲しげに先輩をチラ見するんじゃないよ。オレからは全部見えてるんだぞ。

「……私がサファリラリーへ参加した折りに、土地の有力者からいただいたものです。珍しい宝石なので半分お分けします。あまり高い宝石ではありませんが、原住民のたちが首飾りにしているそうです……フルハシさんはどういう風に使うかしらん」

「へえくうまくやりましたねえ！　するとその女性はつまり、先輩のですよ……？」

「いやや、この人はねエ、つまり……、そのオ……ボクの妹の友達なんだよ……」  
「妹さんの友達ネエ？　なるほどなるほど、それで？」

「えっ……へへへ……そうあんましつこく聞くなよ……ハハハ……」

そういつた話題とは無縁そうなフルハシに訪れた、仄かな春の気配を敏感に察知したアンヌが、茶目つ気たつぷりに彼を追求する。

そんな和やかな雰囲気を引き裂いて、緊急警報が鳴り響いた。

「また警報です！」

「第三地区だな……」

「デマだ！ デマだ！ ほっときやあいんだ！」

怪訝そうなダンに、上機嫌なフルハシが、水を差されたせいかわげやりに言い放つが……

「フルハシ！」

そこへ隊長の叱責が飛ぶ。

「そう簡単に決めつけちゃイカン！ たとえ千回の通報が千回とも嘘でも、出勤するのが我々の義務じゃないか！」

「はっ、軽薄でした……」

「せーんばい。この前俺に、なーんて言いました、つけ……う？」

「うっせえなあ……蒸し返すなよ……」

「ひひひ……」

この人はなんとというか……スイッチの切り替えが激しいタイプなんだろうなあ、多分。

目の前にひとたび敵が出現しさえすれば、矢も楯もたまらず突っ込んでいくけれど……逆に言えば、はつきりそうと分かる形で困難が提示されないと、なかなかエンジン

がかからんのだろう。

自分の目で見たもの以外はまったく信じないが、一度でも認識したならば、どこまででもそれを信じて猛進するという、典型的な例だ。ヤスイさんや、後のペロリンガ星人の件でも、それがハッキリと示されている。

まあ、そこがいいところでもあるんだけどね。

怪事件の調査には全く役に立たないが、いざ戦闘となればこれほど頼りになる奴はおらんと言うのが、前回身に沁みて分かったよ。

まさに人間としてのモロボシ・ダンの対極に位置するような人材だ。

こういう人がいるから、調査パートでどちやくそ活躍するくせに、こと戦闘となるといまいち。パツとしないダンという存在が、警備隊において重宝される下地になっているような気がする。

本当はパツとしないどころか、一番目立つところで戦ってるんだけどさ……防衛軍目線じゃ、どうしてもな。

昼行燈ここに極まれり。いや、逆か？

「ダン、アンヌー！」

「出動します！」

ヘルメットを持って出て行く二人を見送れば……さてさて、オレの役目を果たす時



だ。

先輩、そしてアマギくんや、ちよつとちよつと。

「ねえ先輩。その宝石……ちよつとアマギに見て貰った方が良くないですか？」

「ナンデ!？」

二人の返事がシンクロする。

フルハシは宝石を大事そうに掻き抱き、アマギは面倒事が降って湧いたような響め面。

おい、お前さつき無邪気に眺めてただろうが。

「だって……アフリカから持って帰って来た珍しい石でしょ？ 中近東といやあ……

昔、バローンだがバラージだか言う砂漠から隕石が発見された事があって、資料室で読みましたよ」

「……それがこの宝石に一体何の関係があるっていうんでい!？」

「俺え……嫌ですよ？ この次に赤い石が持ち込まれて、それが合体して……基地が丸ごと四次元空間に飲み込まれたりするのは……」

「四次元空間……?？」

二人が顔を見合わせるが……ハツとしたようにフルハシが手をポンとついた。

「そーいやあ、兄貴に聞いたことがある! ような……ないような?？」

「その青い石が、無限へのパスポートじゃないって保証は、今の所、どこにもありやしませんぜ？」

「お前……それは……杞憂つてもんじゃねえか？」

「でも、一晚貸し出すだけで、皆が枕を高くして眠れるんです。アマギだって、別にあのコレクションみたいなのに、番号付けて保管する必要はないんだ。異常が無ければ、先輩にそのまま返してあげりゃあいい。どうですか？ 代わりと言ってはなんですが、サエコさんおススメのお洒落なキーチェーン……あげますよ？」

「……じゃ、じゃあ……くれぐれも大切に頼むぜ？」

「……ええ……」

オレの言葉に、アマギと再び顔を見合わせたフルハシは、澁々と青い宝石を彼に手渡した。

そしてそれを澁々と、本当に澁々と受け取ったアマギは、なんとも言えない顔で分析室に歩いていった。

……勝ったな。風呂入って来る。

夜のビル街。

ダンとアンヌはポインターを降りて、警報器をチエックするが、異常はない。

水質計や振動計のチャート紙を引き出して確認するも、おかしな波形は見られず、ただ単にアラーム機能だけが起動しているのだ。

異常と言えば、それ自体が異常な事ではあるのだが。

納得いかない様子で、アラームのスイッチを切るダン。

「何も変わった様子はないなあ……」

「また、誰かのいたずらだったのかしら?」

二人が車に戻ろうとすると、ポインターの後ろに、無人の車が近づいてきた。

「あつ……あれは……? ダン!」

運転手が居ないにも関わらず、じわじわと前進する車。

すると今度は、前方から強烈なヘッドライトが二人を照らす。

いや、前方だけではない!

路肩に止めていたポインターを囲むように、四台の車が、がっちり道路を固め、その進行を妨害してきたのだ!

ポインターから降りたダンの目がキラリと輝く。

超能力で透視をかけると……車の運転席には、巨大な鳥類の頭部が、妖しく笑っている

るではないか！

「誰だキミは！」

ダンが誰何すると、運転席にいた怪物はテレポートのように車外へ一瞬で移動する。

『我々は、いかなる戦いにも負けたことのない、無敵の、ガッツ星人だ！』

「ダメー！」

唐突に現れた怪鳥を直視してしまい、思わず目を背けて座席に蹲ってしまうアンヌ。

そもそも、幼少の頃の経験から、鳥恐怖症を抱えていた事のあるアンヌにとつて、ヒト型の胴体に巨大なオウムの如き頭部を備えたガッツ星人の容姿は、あまりにもショックングなものであったからだ。

「ダメー！……ダメダメ、すっかりしなくっちゃ……」

父の友人宅へ遊びにいった際、籠に飼われていた巨大な（当時のアンヌにはそう見えた）オウムが翼を広げて彼女の顔を覗き込み、人間の言葉をしきりに叫んだ事がある。たまさか、その主人が口の悪い人物であった為、『鳥に罵倒される』という経験をしてしまった彼女は、オウムや九官鳥といった鳥が恐ろしくてたまらなくなってしまうのだ。

とはいえ、現在はそれも克服して生活や任務にも支障はない。もともと彼女が医師を志したのも、後に施術された催眠療法によって、人の恐怖を取り除く事が出来るという

事実が、少女に天啓のような使命を与えたからである。

だからこそ、彼女は外科治療と並行して、心療療法も学び、あまつさえそれをモノにしてしまう等と言う、とんでもない偉業を成し遂げることが出来た。

目を閉じ、自分に暗示をかけて……勇気をふりしぼり、指の間から敵の姿を焼き付けて……そして、ダンの横に並び立つのだ。

なぜなら彼女はウルトラ警備隊だから。

「……ようしー！」

「アンヌ、君は逃げろ！」

「ダメダメ、絶対にダメよ！……絶対逃げないわ！」

『ダン……我々の挑戦を、受けるか？』

「我々の……？」

アンヌが戦線に復帰しても、まるで意に介さず、ガッツ星人はダンにだけ話掛ける。

まるで彼女の事など、目に入ってすらいらないようだった。

1対2になったというのに、まるで怯まぬガッツ星人の言い草にダンが首を傾げると

……

二人の後ろに、もう一体のガッツ星人が現れる。

さらには周囲に蠢く無数の気配。姿を現さずとも何体かの敵が隠れているのだろう

!

なるほど、我々とはそういうことか！

敵は空間に溶け込んだり、無数に分身する事ができるのか!!

「つまらないことは止めろ！ ……アンヌ、基地へ報告するんだ」

「でも……」

「やつらは、僕が何とかする」

「ダメダメ、アタシだって、たいした腕前なのよ……見くびらないで！」

ウルトラガンを引き抜いて、戦意を漲らせるアンヌ。

そんな彼女の肩を掴み、強引にこちらを向かせたダンは、真正面から女戦士の瞳を覗き込んだ。

「キミにだから……頼むんだ！」

そこに、庇護者としての誇りや、女子供への慈悲といった色は一切無かった。

ただ、頼もしい戦友に対して、状況の打開を託したいという、信頼の光しかない事に、アンヌは遅ればせながら気付いた。

「どうして……？」

「彼が言っていたのを、聞いていただろうか？」

「彼……アツ……！」

いつかのメディカルセンターで、包帯を解いたソガが、肩をぐるりと回す。

「どうかしら？ 具合は」

「うん、大分良くなつて来たよ。いやあ、流石の名医だな」

「良かったですね、ソガ隊員」

「でも、またあんまり無理しちゃダメよ」

余った塗り薬や包帯を、トレイに乗せて棚に戻るアンヌの後ろ姿に、ソガが何気ない風に呟いた。

「いやしかし、アンヌが女で、本当に良かったよ」

「……ちよつと、それどういう意味？」

ムツとした様子の白衣天使が、聞き返す。

慌てた様子で、耳打ちするダン。

「ソガ隊員らしくもない。失礼ですよ」

「ああ、いやいや！ そういう意味じゃない！ 悪かったよ。逆だ逆！」

「逆う？ いったい何が逆だつて仰るのかしら、ソガ隊員？」

「つまりな、ウルトラ警備隊の一員として、アンヌほど相応しい奴はおらん、という話だ」  
「……………」

「お世辞が下手ねえ……………」

呆れた様子で薬品を棚に戻していくアンヌと、怪訝なダン。

「お世辞じゃない。俺は大真面目に言つとるんだ。俺が言いたいのは、戦闘における脅威度の事さ」

「脅威度……………とは？」

「ダン。おまえがもし侵略者の立場で、ウルトラ警備隊と戦うなら、まず誰から襲う？」

ああ、お前自身は抜いていいぞ。今のお前はモロボシ星人だからな」

「えっ……………」

酷く困惑した様子のダンは、かなりの時間悩んでいたが……………やがて、それはそれは気まずそうに、おずおずと回答した。

「……………キリヤマ隊長」

「素晴らしい！ 初手で指揮官を倒すのは100点満点だ！ じゃあ次は？」

「……………ソガ隊員、でしょうか……………早撃ちで遠くから狙撃されたくありません」

「ほう、嬉しいこと言ってくれるね。じゃあ次」

「フルハシ隊員……………彼は強過ぎるので、そこを超えないと、後の二人を守られてしまう」



「そんで？」

「アマギ隊員に秘密兵器を開発されたらお終いですので、最後に……」

「……アンヌと」

ダンの視線がゆつくりとアンヌの方を向いた。

青い顔をした彼にとっては、大切な仲間達を倒すのがとても辛い事なのだ。それが例え想定の中であつたとしても。

だが……

「残念ながら、お前に侵略者としての才能はゼロだ。よかつたな、断言してやるぞ。向いてないわ」

「……え？」

「隊長の後は、零点もいいところだよ！ まったくダメ！ ダメダメ侵略者！ そんなんじゃセブンすら引き摺りだせないね！」

「はあ……」

チツチツチと指を振つたソガは、すっかり怒気を収めて、話に耳を傾けているアンヌを指さした。

「真つ先に倒さなきゃならんのはコツチだよ！ もしも俺が侵略者なら、むしろ隊長よりも先にアンヌを消すかもしれん」

「私？」

「なぜ？」

「彼女がドクターなのに、優秀な兵士だからだ」

真剣な顔でソガが続きを話す。

「いいか？ 戦鬪で一番効果的なのは、相手の回復手段を潰す事だ。人間はすぐ病気になる。怪我をして、戦えなくなる。でも医者がいれば、ほっといたら死ぬような奴が助かったり、怪我を直していつか復帰できるんだ。だからこそ、真つ先にやるべきで、一番やっちゃいけない事が、医者を殺す事なんだ。報復で自分達の医者を殺されたらかわんからな。最低の行為だよ」

「最低の……」

「そして医者がいれば、兵士も戦える。死ななかつたら、助かる可能性があるんだからさ。医者はいないところで怪我なんかしたら、死んじまう。怪我したくないなら怖くて戦えねえよ」

「確かにね。でも、私を当てにして、毎回無茶をされる方の身にもなつて欲しいわ」

「ゴ、ゴメンナサイ……」

無茶の筆頭達が揃って頭を下げる。

「話を戻して……だから彼女さえ排除すれば、あとはジリ貧なのさ、アマギなんてちよつ

と出血したらすぐおっちゃんじまうし、俺や先輩なんざ放っておけばいい。何回も戦えば、疲労して消耗して、それが積み重なって勝手にいつか死ぬ……さて、もう一つ、集団戦において大事な事があってな？ 敵の数を減らす事だ」

「確かに、それは大事ですね。仲間は多い方が有利だ」

「ではこれも分かる筈だな。定石は弱い奴から削ること！」

「それで……アンヌを？」

「へっへっへ、そういえばここに、見るからに弱っちい女で、そのうえ貴重な軍医殿が居るなあ！ ソガ星人は当然、アンヌを殺しに行く。するとどうなると思う……？」 答えは……死ぬ」

「私が？」

「いや、俺が」

「え、ソガ星人が死ぬんですか？」

神妙な顔で頷くソガ。

「だって俺は彼女を『弱い医者』として襲いに行った。ところが、アンヌは……弱いか？

パラライザーを片手で早撃ちして、ウルトラホークでドッグファイトできるような女が、弱い……？ それなら俺は辞書の『か弱い』を書き直さなきゃならん。……お前のような女医がいるか！」

「ハツハツハ！ なるほど、つまり僕のような考えの宇宙人からは見逃され、ソガ隊員の  
ような考え方の宇宙人には激烈なカウンターに成り得ると！」

「そういう事！ とんでもないトラップだよ。俺は実の所、戦闘においては敵を如何に  
油断させるかばかり考えている。だってそれが一番効果的なんだからさ。しかし、アン  
又はその存在こそが、俺の求める究極系なんだな、これが。フルハシ先輩がヨヨヨ……  
と泣き崩れても、敵の同情を誘えるか？ 絶対無理だね。だからこそ俺は、アン又こそ  
が警備隊で一番恐ろしいと思うわけさ」

「……ふーん、ソガ隊員は、私の事をそんな風に見てたの。トラバサミみたいな女で悪  
かったわね」

「あの、いやこれはね。あくまで戦闘の話であって、そりゃあアンさんは可憐な乙女で  
ございますですよ、ハイ……」

「ウフフ……」

とはいえアンも、つーんとした表情をしつつも、まんざらでは無かった。

なにせ、今まで「女だてらに」だとか「もしも男であったなら」といった類の言葉は  
山ほど聞いてきたし、軍隊において、女としての面を評価されるのはいつも容姿の事で、  
それは「華がある」という程度の事でしかない。

外面を褒めそやされて、別に悪い気はしないでも、能力面を評価する際には常にマイ

ナスとしてしか見られなかった点。それが悔しくて、そう言った男達を黙らせる為にも、彼女の努力は一層激しいモノととなり、舐められまいと肩ひじ張っていた時期もある。

そんなアンヌにとって、自身が『女である』事をこうまで好意的に……好意的？ ……少しばかり首を傾げたくはなるものの、紛れもない『強み』として評価された事は無かつたような気がする。

少なくとも、恥も外聞もなく泣き叫び偽の降伏をしてまで、敵の異星人を油断させる事に注力するような男が、どう足掻いても勝てないと、真剣に言っているのだ。

きつと彼の中では、自分という存在は、地球を守る為に必要な要素なのだろう。

それならば、この無礼な物言いも、今日の所は許してあげてもいいかしら。そう思ったのだ、あの時に。

---

アンヌの脳裏に、あの時の会話が想起される。

と同時に、ダンの思惑も理解した。

彼は言っているのだ……『敵の油断を利用しろ』と。

それはアンヌにとって、とてもとても屈辱的で耐え難い要請であったが……それを飲

み込み頷いた。

なぜなら、モロボシ・ダンは容易く人の矜持を冒瀆するような男ではない事など、誰に言われるまでもなく彼女自身が分かり切っていた事であり、その彼をして、そのような頼みをせざるを得ない程に、事態は逼迫しているとダンが考えている事が、ありありと伝わってきたからだ。

「ハイ！」

アンヌが返事をすると同時に、なかなか返事を返さないダンへ痺れをきらしたのでらう、ガッツ星人と名乗る敵が大型の銃を取り出し発砲してきた！

ダンが大きく前転して回避し、ビルの谷間を全速力で駆け抜けていくと、二匹のガッツ星人も彼を追って姿を消した。

本当に彼らは、自分を敵としてすら認識していないのだ、という事実をまざまざと見せつけられ、アンヌはカチンと来たが……自分がするべき事は、ウルトラガンを引き抜いてダンの応援に駆け付ける事では無い。

真に許せない敵であるならば、絶対に目にももの見せてやる。

私が怖くないと言うならば、それもよろしい。自分よりもずっと恐ろしく、そして……自分よりもずっとずっと意地の悪い悪魔のような男達を召喚するだけだ！

ポインターのマイクをひったくるように掴むと、基地へと緊急コールを入れる。

「隊長！ 隊長！」

「どうした、アンヌ！」

「ガッツ星人に囲まれて、身動きができなくなりました！」

「よし、了解！」

「ホーク1号出撃準備OK！」

「でかした！」

彼女の敬愛する果敢な上司は、短い報告に二つ返事で出撃を決定し、彼女の信頼する用心深い同僚は、ずっと出撃の機会を伺っていたらしい。

彼らならきつと、この状況を打開してくれるに違いないのだから。

## セブン抹殺計画 第二段階

走り去るダンを、ガッツ星人が追いかける。

純粹な脚力に関して言えば、人間と大差ないようだ。

しかし……

「どうやら、我々だけになったようだな……」

ダンの目の前に、もう一体のガッツ星人がテレポートして、その行く手を塞ぐ。

彼は、敵をなるべくポインターから遠ざけようとしたが、それは敵も同じ思惑だったのだと言う事を、星人の台詞から察するダン。

ダンにとっては陽動でも、彼らにとってこれは……分断だ。

星人はアンヌを、相対するべき敵としては見なしていないが、少なくとも邪魔者ではあると認識しているらしい。

そして、いつでもテレポートでダンの逃走を阻止できたにも関わらず、今更になってそれをしたという事は……彼らは、ダンをこの地点に追い込みたかったのだ。

遅ればせながら、まんまと罠にかかったのだと理解したダン。

そうしている内に、ガッツ星人はテレポートでさっさとビルの屋上に移動してしま



う。

敵は何か用意している可能性が高い。

そのまま変身するのはマズいと、彼の勘がささやく。

だったら、地球を守る戦士は、なにもウルトラセブンと警備隊だけではないのだという事を教えてやる！

敵の思惑を崩すため、腰からカプセルを取り出すダン。

「ウインダム、行け！」

爆煙と共に、夜のビル街へ、銀色の巨塔がもう一棟出現した。

『FUUAAA!』

ダンの手持ちにおいて、このような狭所で戦えるのは、ウインダムにおいて他にはいない。

アギラやミクラスは、強みの機動力を發揮できず、パゴスなどもつての外。

しかし彼ならば、非常識な関節駆動範囲と、レーザーショットの精密射撃を駆使しての市街戦が可能だ。

巨大怪獣の足止めだけでなく、威力偵察や小型目標を追い払う事まで、なんでも熟してしまふ汎用性こそが、ウインダムの長所なのである。

とはいえ、ガンダーに手酷く破損させられたダメージが回復しきっていないのか、頬

のアンテナが片方破損したままで。

あまり無理はさせられないかもしれない……：ダンが心配そうに見つめる中、瞳のランブを闇夜に白く光らせて、のっしのっしと歩くウインダム。

道路の上で立ち尽くす小さなガッツ星人の前で、金床のように巨大な足裏を持ち上げる。

勿論これは警告だ。

先に発砲したのは向こうであるが、彼の主人が敵の挑戦に対して明確な返事を返していない以上、配下であるウインダムが敵に損害を出して、勝手に戦端を開く訳にはいかない。

即座にレーザーショットで撃ち抜いたりせず、わざわざゆっくり近づいたのも、逃げねばお前を踏み潰してやるぞ、という威嚇に過ぎない。

だと言うのに。

ガッツ星人はと言えば、逃げるところか、反撃しようという素振りすら見せず、ただその場につ立っているままではないか。

これにはウインダムもカチンとくる。

彼も普段は冷静で、仲間の中では慎重派を気取ってはいるが、その実、ミクラスと余り大差ない程度には、短気で血気盛んな一面を持っていた。

宜しい！ ならばお望み通り、地面の染みとなるがいい！

彼が怒りのままに、プレス機のスイッチを押すと、磨き上げられた鉄塊の如き足裏が、アスファルトへ垂直に振り下ろされた！

……おや？ おかしい。

彼の足の下で、小さな生き物が臍物をぶちまけたような手応えが、全くないのだ。

不審に思つて足を退けても、そこにはペシヤンコになつてはいるはずのガッツ星人は影も形もなく、敵の姿を求めて辺りをキョロキョロと見渡すウインダム。

すると頭上から、甲高い声が両耳の集音マイクへ降ってくる。

『貴様ナド、相手ニナラン』

はて、明らかに今の声は自身の額付近から聞こえてきたのだが、いくら戦闘ログを漁つてみても、そこには『何も無い』という記録しか帰つてこない。

なんなら、額に何か乗っているような重量変化すらも検出されないのだが……

ウインダムが恐る恐る額に手をやるも、やはり何もいないではないか。

しかしそれと同時に、僅かに頭が軽くなったような感覚を覚えた瞬間、今度は逆に、先程まで無かつた筈の『頭部に人間大の何者かが座っていた』事を示す、膨大な観測データが溢れかえり、全く訳が分からない。

大量の疑問符を浮かべたウインダムが、再び周囲を見渡すと、自身の右前方で、『巨大

なガッツ星人の頭部が此方を嘲笑っている』のを、彼のカメラアイがしっかりと捉えた。おのれ面妖な！

しかし、敵が巨大化能力も有しているとは。

先程までは、たかだか百数センチ程度の身長しか無かったのに、それではこちらに對抗できないと踏んで、格闘戦を仕掛けてきたか！

いいように翻弄され、完全に鶏冠に來しまったウインダムは、憎たらしい表情を浮かべる敵の脳天目掛け、渾身のチョップを叩きこんだ！

……瞬間。

けたたましい破砕音と共に、ウインダムの眼前で自身の左手が、ビルの壁面を凄まじい切れ味でもって抉りとっていく。

なんとという事だ。

その座標には、戦闘開始直後から『ずっとビルが建っていた』じゃないか。

戦闘ログ内の空間認識記録にも、周囲の地形はしっかりと記載されていて、破壊しないようにロックがかけられているのは確認済み。

いくら『屋上へガッツ星人が立っていた』からと言って、そんなところへ鋼鉄の腕を振り下ろせばどうなるかなんて、分かりきっていた筈なのに！

いったい自分はなんという事を……!? これでは街の破壊者はこちらではないか！

やってしまった……主人にどう顔向けすれば良いのだ!?

……いやまで、おかしい。何かおかしい。

しかし何がおかしいんだ？ 一体さっきから何が起こっている!?

もしや敵の罠か!?

あつという間に電子頭脳の処理能力がパンクし、頭を抱えてパニック状態へ陥ったウインダムの背後で、透明な石英ガラスの結晶体の如き円盤が、ゆつくりと浮上していく。

空間に漂う無数の『情報』を自在に操る事ができるガッツ星人には、ウインダムの各種センサーをハッキングして、彼の感覚機能を欺瞞し、認識能力を改竄し、その判断力と自律性を完全に狂わせてしまう事など、まさしく赤児の手を捻るよりも容易いのである！

「ハッ!? ウインダム戻れ!」

機能不全に陥ったウインダムを、ダンが慌てカプセルに戻そうとするが……

(何故だ!?! 反応しない!?!)

敵の円盤を前に、帰還する事も出来ず棒立ちのウインダム。目の前に見えている敵の姿を、ロックオンすらも出来ず、せめて一太刀と腕を振りかぶる彼の額に目掛け、ガッツ円盤の中心から正確無比な赤色光線が一直線に放たれて……

「させるかつ！」

横から差し込まれた黄色いレーザーと空中でかち合つて、盛大にスパークする！

ダンの聴覚が、甲高い聞き慣れた爆音を捉えると同時、その背後の星空から、無数のミサイルが白煙の尾を曳いて、ガッツ星人の円盤に殺到した！

上空へ浮かび上がって、射線上から退避する敵円盤。

そうして開いたウインダムとガッツ円盤の間の空を、銀の翼が切り裂き、月光を反射する。

ウルトラホーク1号の救援が間に合つたのだ！

「ダン、聞こえて？　ダン！」

「アンヌ！」

「今すぐポインターに戻つて！　ウルトラミサイルでみんなを援護するわよ！」

「……っ！　わかつた！」

アンヌからの通信に、僅かな逡巡を見せたダンだったが、悔しげにウインダムを一瞥すると、ポインターの方へ大急ぎで戻つていく。

「ふうふう……は、はっ、はっ……」

長く息を吐きつくすと、短く荒い呼吸を繰り返すソガ。

レーザーをレーザーで、それも長距離から狙撃して相殺する等という離れ業に、全神経を集中させていた彼は、極度の緊張から解放された反動か、滝のような汗を拭ってシートに深く沈み込んだ。

原作において、ウインダムは弱点であるビームランプをガッツ星人に狙撃されて爆発炎上、それ以降は平成版で再登場するまで一切出番が無い。

カプセルに戻されずにやられてしまったので、ウインダムはこの時死んでしまったのではないか？ それ以降の個体は別個体なのではないか？ と噂されるが、真偽はどうあれ、深刻なダメージを受けるのは間違いない。

ソガは自分のお気に入りのピンチをなんとしても救う為に、集中力を高める為に身を清めた後は、ずっとホークのエンジンを暖めておいたのだ。

「よくやった、ソガ」

「それにしても、えらく気合が入ってたじゃねえか」

「え、ええ……こういうのは、機先を制するのが大事ですからね……」

「それもそうだな。しかし、あれがガッツ星人とやらの円盤か！」

「後はポインターの脱出を援護するだけだが……」

ソガが息を整えようとするのも束の間、今度はガッツ星人の円盤からミサイルが一筋飛んでくる。

「発射！」

キリヤマの号令でフルハシがスイッチを押せば、ホークミサイルがそれを迎撃した。

「チクシヨウ、ガッツの奴、邪魔する気だな？」

「フルハシ先輩、頼みますよ」

「任しとけ！」

互いの攻撃を躲しつつ、熾烈な空中戦を展開するホークと円盤。

その最中に、助けたはずのウインダムはどうしているかと、ソガが地上へと目を向ければ、未だにカプセルには戻らず、同じ場所で突っ立ったまま、なにやらずっと藻掻いている。

いったいだんは何をやってるんだと、苛立ち紛れにポインターの方を見ると、ビル街の狭間に、巨大化したガッツ星人が堂々と歩いているではないか！

ガッツ星人の胸には、ミサイルらしきものが次々と着弾しては、爆発の炎でおそるべき鳥人の白面を、照らし上げていく。



建物の影に隠れて見えないが、ポインターがウルトラミサイルで反撃しているのだらう。

「隊長！ 見て下さい、ポインターが！」

「なにつ！ ……よし、もはや一刻の猶予もない。直ぐに回収に移るぞ。フルハシ、次の交叉で切り上げて、降下ルートに入れ！ 気取られないよう、低空で侵入してそのままポインターをかつ攫う！」

「了解！」

敵の攻撃を回避し、切り返しの旋回と見せかけて、そのまま侵入ルートへつけたフルハシ。流石の腕だ。

地面スレスレへ急降下しようと……

「うおっ!？」

ホークが急降下を始めた途端、巨大化ガッツ星人がぐるりとこちらに狙いを変えて、目から光線を発射してきた！

慌ててフルハシが機首を上げようとした矢先、ポインターからホークを結んだドッキングコース上を、いつの間にか上空を取っていた敵円盤が、パルスレーザーで機銃掃射のように薙ぎ払う！

「ぐわっ！」



「隊長！ もうこれ以上は無理です！ ホークの安定が保てません！」

フルハシが告げる言葉に、キリヤマがぎりりと歯を噛みしめた。

するとこの地区一帯に、低く悍ましい声が響き渡る。

『我々の力を甘く見ルト、余計な被害者を出スゾ。もう貴様達デハ、どうにもならないノ  
ダ』

ガッツ星人の言うとおり、事態は完全に手詰まりかと思われた……その時！ 地上で光が瞬いた。

見れば、コンクリートの波間に一つの灯台が周囲を照らしているではないか。

その灯台の壁は銀色で、目を爛々と輝かせながら、両腕を使って虚空を叩き続けているのだ。

「ウインダムはいったい何をしてるんだ？」

「そうか、アイツ……見えない檻か何かに捕まってるんだ！」

ソガは、ウインダムの死因が、ダンが戻さなかったのではなく、バリアに阻まれて戻れなかったのだという事に、遅ればせながら気付いた。

「助けてやりてえが、こつちもそれどころじゃない！」

「……いや」

キリヤマの眉間を汗が伝う。

彼らが見守るうちに、ウインダムはどうとう額からレーザーショットを放ちだした。それは虚空中で唐突に向きを変え、次々とあらゆる方向へ飛んでいく。まるで四方を鏡で覆われているかのように、ウインダムの周囲を無数のレーザーが飛び交い、やがて彼の体に着弾しては、爆発し、彼の装甲板を飛び散らせる。

すると益々ウインダムは、瞳のランプからサーチライトのように光を放射して、額からはレーザーショットを雨あられと発射するのだ。

ついには腰から上をぐるりぐるりと回転させ、やたらめつたら撃ちまくる。もはや破れかぶれの大暴走に他ならない！

「やめろウインダム！ そんな事してもバリアは破れない！ お前がダメージを食らうだけだ！」

「……すまん」

「……隊長……？」

ソガが叫ぶ隣で、キリヤマは小さく呟くと、機体を大きく旋回させた。

明らかに戦闘から離脱するコースである。

「隊長、どうしたんです!? ダンとアンヌはっ!?」

「黙っている！ いいからお前は手許に集中しているんだ。舌を噛むぞっ！」

「えっ！」

ウインダムの興奮が最高潮に達し、灯台が煌々と夜空を照らし上げた時、いい加減に煩わしく思ったのか、巨大なガッツ星人が、瞳から光源へ向けてビームを放った。

それはさながら網のように広がると、ウインダムの体に巻き付いて、彼の回転を強引に引き留めてしまった！

ギギギと異音が響き渡り、銀色の腰から火花と白煙が上がる。

動きの止まったウインダムは、それでもレーザーの射出をやめないが、彼の眼前に、ガラスのように綺麗な円盤がきらりと煌めきながら浮上した。

「今だっ！」

キリヤマが渾身の力で操縦桿を引くと、ホークが小さく弧を描いて反転する。

凄まじい遠心力に耐えようと、歯を食いしばるソガ達の耳に、コックピットの後方からメリメリという轟音が届けられた。

破損箇所の装甲板がどんどん剥離していつているのだ！

機体が軋み、フレームに限界以上の負担がかかる。

しかし、それでもウルトラホークは耐えきった！

すぐさまアフターバーナーを吹かして急加速、機体がバラバラになってもおかしくな  
い殺人機動をフルハシが必死に制御し、三人の視界がモノクロに染まっていく。

狭まっていく視界の中で、意識を手放すまいと掴んだモニターの端で、結晶体の放つ

た赤いレーザーが銀の巨塔を貫くのがチラリと見えた。

いかに堅牢な装甲を持つロボット怪獣と言えど、額のレーザーランプは電子頭脳と直結しており、ここを撃ち抜かれれば、一撃で致命傷となってしまうのである。

忽ち巻き起こる大爆発。関節の各所がスパークし、脳天から豪炎によつて噴火したパーツ群が、周囲の明かりを赤々と反射して、彼の体を一層煌びやかに飾り立てた。

それをどこか遠い出来事のように眺めながら、不思議とクリアになった思考の中で、照準器に見慣れた車の天井が飛び込んで来るのを見てとると、ソガはアンカーの射出スイツチを押す。

機体下部から撃ち出された磁力アンカーは、寸分違わずポインターの車体に張り付くと、ワイヤーを巻き上げて、ガッツ星人の包囲網から銀の車を引き揚げる。

轟々と音を立てて燃え上がる鋼鉄のオブジェを尻目に、ふらつく機体が煙を吐きながら、夜空の彼方へ消えていった。

## セブン抹殺計画 第三段階

「そおかあ！ 昨日からのイタズラは、きつと奴らの仕業だったんだ！ なあ!? そうだろ？」

何やら難しげな顔で押し黙っていたフルハシが、唐突に顔を上げると、掌をポンと打った。

昨晩から抱えていたモヤモヤが解消され、ようやくスッキリ出来たからだ。

まさしく天啓の如き名案！ 早速この素晴らしい名推理を仲間達と共有して、言い知れぬ不安感を解消してやらねば。フルハシは作戦室中に響き渡る大声で持論をぶった。

……だというのに。

誰も彼の言葉に返事をしようとはせず、ただ気まぎれに視線を逸らすばかり。

はて、今のはかなり真に迫っている自信があつたのだが……ははあ、みんな手許に集中して聞こえなかつたんだな？

もう一度、念押ししようと口を開きかけたフルハシの隣で、ホークの損傷報告書を非常に苦々しい表情で捲っていたソガが、見かねたように顔をあげる。

彼は、注意深く周囲を見渡し、誰も彼もが自分達を遠巻きにして、見えないふり、聞

こえないふりをしているのを見てとると、これまた嫌そうに、差し出された貧乏くじを引く事にした。

作戦室中の空気が、こう言っているのを聞いてしまったからだ。

お前が言え、……と。

「……せんばあい。そんな事はもう皆とつくに分かつとるんですよお……。問題なのは！ いったい、奴らが何をしようとしているか、という事なんですよお！ わかるう？」  
「う、うん……」

最初は形式的には言え、ヒソヒソと辺りを憚るような声で、先輩隊員の名誉を守つてやろうという涙ぐましい努力が垣間見えたが……言っている内に、あまりの周回遅れ具合に腹が立ってきたのか、最後は完全に、出来の悪い生徒を叱る教師か親の様相を呈していた。

がっちり広い肩幅を、シユンと縮こめて項垂れるフルハシと、しようが無い人ですね……と、資料を見せながら苦笑するソガ。

そんな室内的一幕を、全く耳に入らない様子で聞き流しながら、ウロウロと考え事をしているのは……モロボシ・ダんだ。

(ソガ隊員がパトロールに出たときも異常はなかった。フルハシ、アマギ隊員が出ていったときも何ら変化はなかった……それなのに、アロンに襲われたのも、ガッツに狙



われたのも、僕が出ていったときだった……だとすると、敵の狙いは僕だ。しかし、何のために僕を狙うんだ？)

ダンが思い悩む中、作戦室に通信が入る。

ホーク3号で偵察中のアマギとアンヌからだ。

「キリヤマだ」

「隊長、泉が丘上空1万メートル付近に、何か存在しているようです……」

「何か存在している？」

「レーダーでは捉えているんですが……なにも見えないんです！」

「よし、さらにその付近のパトロールを続ける」

「了解！」

謎の物体が姿を現わしたとの報告を受けて、ダン、ソガの両隊員は泉が丘へ向かった。ハンドルを握るソガの表情は、非常に険しい。

当たり前だ。彼はウインダムを救う事が出来なかったばかりか、ホーク1号まで損傷させてしまった。

銀色の戦友を救う事に拘った為、原作以上に不利な状況を作り出してしまったのだか

ら。

そんな真剣な表情のソガへ、助手席のダンが遠慮がちに声をかける。

「あの……ソガ隊員……」

「なんだ？」

「止めて貰えませんか」

「なに!? 何か見つけたのか!？」

ソガの問いかけに、ダンは少しばかり躊躇うような様子を見せた後……しつかりと頷いた。

「……はい。少し気にかかる事があります」

「分かった! すぐに止める!」

慌てた様子ソガがブレーキを踏み、ポインターを路肩に寄せる。

ダムの上に作られた道は非常に狭いが、幸い後続車はいない。

泉が丘方面への道は現在、陸上戦力を展開する為に防衛軍によつて緊急確保されているからだ。

「それで、何を見つけたんだ、ダン？」

「すみません、ソガ隊員……さっきのは……嘘です」

「な、なんだって!？」

座席から身を乗り出し、ダンに質問するソガは、その返答に目を見開いた。完全に予想外の返事だったからだ。

「う、嘘ってお前……こんな非常事態に!？」

「はい、こんな時だからこそです。……こうでもしないと、ソガ隊員が話を聞いてくれそうにありませんでしたから」

「それにしたってお前なあ……」

「お願いです。大事なお話があるんです!」

「……えっ? 大事な話って……」

非常に緊張した様子で、ごくりと唾を呑むソガ。

「……この間は、すみませんでした。ソガ隊員」

「……っへ?」

「僕はその時、貴方に酷い事を言っつて、傷つけてしまった……ずっとその事について謝りたいと思っつていたんですが、機会がなくて……」

「……? ちよちよちよ、ちよつと待っつてくれ! ……なんの話だ?」

「クレージーゴンの爆破準備中に、僕たちは言い争いになっつてしまっつたでしょう?」

「……はっ。」

ソガはしばらくポカンとした顔を晒してしたが、ゆっくりと再起動を始めたらしい頭

に、その時の光景が思い浮かんできたので、とてもとても微妙な表情をする事になる。

その記憶は彼にとつて、一か月以上も前の出来事だったからだ。

「それ……一体何週間前の話だよ……てか、お互い謝つ……」

言いかけて、固まるソガ。

(……つてないわ。確かに)

正直なところ、この件に関して言えば、ソガの中ではとつくに『終わったもの』という認識だった。

なにせ、その後すぐにフルハシと互いの本音をぶつけ合った彼は、苦戦するセブンの窮地を救うために命懸けの突撃を敢行したし、その結果として脱出不可能となり、クレージーゴンと共に爆死する直前だったところを、セブンに救出して貰った。

そうした命がけの助け助けられを経た、ソガの中では些細な諍いなど、勝手に清算したような気分になっていたのである。

……だが、それはダンとセブンを同一視しているソガの視点においての一方的な納得であり、モロボシ・ダンの視点で言えば、その件に関して明確な謝罪の言葉を交わしていないという認識が完全に欠落してしまっていたが故のすれ違いであった。

ダンが長期入院していた事もあり、アロンに襲われた時のパトロールまで、ソガとダンが二人きりで出勤する事も無く、個人的な会話をする機会を逸していた、という事

思い至ったソガ。

なにせダンが退院してからの数週間は、なんとかガッツ星人への対策が出来ないかと思死に駆けずり回っていたので、そんな事は頭の中からすっかり吹き飛んでしまったのだ。

(……って事は何か？ この数週間、ずっとそんな事を気にしていたのか？ ……ああ、確かにコイツなら在り得るな……)

「貴方は僕の為を思って言うてくれたのに……ごめんなさい、ソガ隊員」

「あの……その……それについては、俺の方が悪いから、謝られると居心地が悪いといひかなんというか……」

「そんな事はありません！ 熱くなってしまった僕が悪いんです！」

ダンの謝罪を受けたソガは、非常に困ったような、情けないような、なんとも言えない顔になってしまふ。

さもありません。自身の放ったしようもない言葉と無配慮によって、彼のヒーローに頭を下げさせているというこの状況自体が、まさに穴があつたら入りたいという程に、彼の羞恥心を刺激していた。

これが双方共に、同じ程度の認識から生じた齟齬であるなら、まだ救いはあつたのだが……ソガは、モロボシ・ダンが、つまりウルトラセブンが一体どういう存在なのかと

いう部分まで、自分でよくよく知っていたのにも関わらず、そこに踏み込んでしまったという認識があるからこそ余計に辛い。

あの場面で引くべきは確実にこちらであった。

なにせ……

（全宇宙を敵に回してでも、地球人の為にたった一人で戦うような頑固者が、オレなんか  
が止めた所で止まる訳ないわな……）

思えば最初から、ソガは彼のそういう部分に魅せられた者の一人であるのだから、ダ  
ンの持つ無限の博愛性と自己犠牲という部分を、否定できよう筈がなかったのである。

「あーすまん……お前には言ってなかったがな、あの後、俺の方でもこう……心境の変化  
というか、そういうのがあってだな……いや、思い出したというか……」

「え？　なんですか？」

「こによこによと尻すぼみに口ごもるソガに、ダンは首を傾げて続きを促す。

「俺達はさ、生まれも育ちも違うんだからさ、どう足掻いたって同じにはならんわけだ。  
立場も違えば、得意な事も、主義信条も異なる……例えば生物学的には同じ地球人でも、そ  
の実、一人一人が別々の全く違う生き物なんだよ、俺達は」

「……ええ」

「まったく別の生き物が、全く同じ場所に立つ事なんか土台無理な話なのさ。そりゃ差

異が限りなくゼロに近い漸近値で集まることが出来ても……決して100%にはならない。もしもそうなったら、それはただの同化だ。同化と相互理解は似て非なるものさ……だから……どれだけ言葉を重ねようが、俺達が真の意味で分かり合う事は決して無いんだ……」

「……」

「でもな……」

ソガはそこで言葉を切って、ダンの瞳を真正面から見据えてこう言った。

「同じ方向を向く事は出来る」

「……え？」

「どれだけ立ち位置が違っていても、東を向いてりや日の出を拝むことが出来る。別に富士山の上からでも、基地の中からカメラで見たって構わない。……さらに言ってしまうとだ。この特別にみんなでお日さん見てなくなっていく。朝日に照らされる皆の顔を写真に収めたっていいし、赤く染まる富士山の美しさを発見したっていいのさ。人それぞれに好みの方法で、その感動を分かち合う事だってできる……」

「……」

「つまりだ、大事なものは何か大きな目標の為に、それぞれが自分にできる事を探すのが肝

要であつて、同じ方向を向いてるうちは、その細かいやり方にいちいち横から口を出す権利は無いという訳さ。お前はお前のやり方で地球を救えばいいし、俺は俺のやり方でやる。それでいいじゃないか……それをすっかり忘れていたんだ」

「同じ方向を向く事は……出来る……いい言葉ですな」

ダンがしみじみと賞賛すると、ソガは気恥ずかし気に指で頬を書きながら白状した。

「……といつても、これ俺が考えたんじゃない……昔、友達が言つてた受け売りまんまなんだけどな」

「ご友人が？」

「ああ、お前と出会うずっと前に……それこそ、地球防衛なんて大それた話題じゃなくて、もつと下らない遊びの中で出た言葉だったけど……それでも俺は、感銘をうけたんだ……」

「なら……いいご友人をお持ちですね」

「お前の足元にも及ばんような奴らだったけどな」

もう、臍げにしか思い出せない者達の言葉を、ソガは反芻するかのようにもう一度繰り返した後、ダンに向き直つて笑顔で告げる。

「だからさ、この前のは俺自身の主義主張に反する行いだつたわけで……今はちつとも傷ついちゃいない訳。むしろ、これを思い出すきっかけをくれて感謝してるくらいだ。



あの時は……個人的な事で苛々しててな、やつぱり俺も人間だからさ、調子の悪い時なんてあんなもんよ。だから許してくれていったら……言い訳がましいか？」

「……いいえ、誰だつてそうです。それを許さなかつたら……僕は自分で自分を許す事が出来なくなつてしまう」

「まったくチョロいなあ……そんな調子で大丈夫か？」

「僕だつて調子がいい時は、こんなもんですよ」

二人が朗らかに笑う。

くつくつと喉を鳴らしながらも、ソガの笑みはだんだん苦笑へと変わっていく。

「しつかし、なんつたつてこんな時に……今更だとは思わなかつたのか？」

「そんな事はありません、やはりどんな事でも謝れるうちに謝っておくべきです。それも、相手が大切な人ならば特に」

なるほど、数カ月や数週間などは、彼にとつて見れば『ついさっきの出来事』なのかもしれないなど、ソガが納得しかけたところへ、ダンは「それに……」と言葉を続けた。

「今度の敵……ガッツ星人と名乗る彼らは、今までの敵とはなにかが違う。いつにも増して、一筋縄ではいかないような……そんな気がするんです。胸騒ぎとでもいいますか」

「……ほう、俺もそれには同意見だ」

「やはりソガ隊員ですか……そんな難敵の前に、心につつかえを残したまま戦いを挑むのは、どうしても避けたかったんです。だから、申し訳ないとおもいつつも、僕の内儘に付き合ってもらおう事に……ソガ隊員？ どうしました？」

ダンが運転席を振り向くと、ソガは両手で顔を隠して、ハンドルに突っ伏してしまっていた。

まさしく痛恨の極みとでも言いたげな様子に、面食らうダン。

ハンドルと顔の間から、非常に弱々しく震えた、情けない声が漏れてくる。

「しまった……こんなタイミングで俺……フラグみたいな事言っちゃったじゃん……なんて事言わせるんだよ、チキシヨウ……」

「……フラグ？」

「死亡フラグだよ！ 死亡フラグ！ どうしてくれんだ！」

「死亡フラグ……？ なんだか前にも聞いた事があるような気がしますが……一体なんの事ですか？」

「えっ？ あーそれは……お前に貸した推理小説がいくつかあつたら？」

「ええ、まあ……捜査の参考にはなります……」

「その中でさ……『あつ、コイツ死ぬな』って分かる言動する登場人物がいるだろ？ あれが死亡フラグだ。そして何も推理小説だけじゃない……戦記モノだってそうさ！」

決戦前夜に、突然、聞いてもいないのに自分の人生観を語り出したり、いがみ合っていた者同士が和解したり……まさに今の俺達のような！」

非常に大げさな身振りで、一体何を言い出す事かと思えば……いつものソガ隊員の悪い癖が出てしまったようだ。

「でもそれは、作品の中だけでしょう？」

「いいや、そんな事はない。あれは使い古されてしまったから、そんな風に思うだけで、きつとりリアルに則しているんだ！ 殺人鬼からすれば、広間で互いに監視しあっている者達より、単独行動取った奴の方が殺しやすいし、戦場で未練がなくなるって事は、帰る理由がなくなるって事だ。それでなくとも、普段と違う心境で作業をすれば、ミスも起きるだろう。功に焦って突出したり、結婚に浮かれるなんて以ての外だ」

「はあ……なんだかそう言われると……申し訳ない気がしてきました……」

「えっ？ あつ違う違う。別にそこまで本気で言ってる訳ではなくて……い」

しまった。またしても不用意な言動で、ダンに不安感を抱かせてしまった。

自分で、戦闘における心境の些細な変化に言及しておいて、ガッツ戦を前になんて迂闊な事を……今まさに、彼らの頭上では不吉の旗が翻っているだろう。

慌ててソガは弁明に走る。

「安心しろ。どれだけ死亡フラグを重ねても、まったくピンピンしてる奴がいる」

「それは……?」

「主人公だ! 主人公はどれだけ不吉な言動をしても死ぬ事は無い! よく言うじやないか、みんなが一人一人の人生の主人公ですって! だからダンは大丈夫だ!」

「主人公とは、物語において一人だけなのでは……? とうかそれだと、ソガ隊員はどうなるんです?」

「……えツと……そう、実は効力が一段落ちるが、もう一つ無敵のポジションがある!

それはな……主人公の相棒さ!」

「相棒ですか?」

「そう! さっき言った推理小説だって、ホームズとワトソンは無敵のコンビだ! な? 俺がホームズで、お前がワトソン! これなら安心だ」

「……え? 僕がワトソン博士なんですか? もう少し活躍させてくださいよ」

「何言ってるんだ! ワトソンめちやくちや活躍してるだろ!! ちゃんと読め! とうかお前みたいなお人好しが出来る役は、ワトソン以外無いね!」

「ええ……」

「完璧超人のホームズ役は、俺みたいに、なんでもできるナイスガイにこそ相応しいと思うだろ? 射撃も一流! 捜査も一流! ほら、やっぱりホームズだ」

「ハハハ」

彼の冗談がツボに入ったのか、腹を抱えるダン。

そんな彼の瞳だけが、僅かに失笑する。

そのまま冗談めかして、その実、かなり真剣にソガへもう一つ質問を投げかけた。

「名探偵のソガ隊員としては……今回の事件で何か気になる点はないんですか……？」

「気になる点か……実はある」

「へえ……ガッツ星人の目的とか？」

「……いいや、そんな事より気になって仕方がない事があつてな……」

ソガはそれを、少しの間、言おうか言うまいか逡巡していたようであった。

ダンは、彼がその常識外れの鋭さでもって、一体何に気付いたのか、まるで死刑宣告を受ける囚人の如き心境で彼の返事を待つ。

彼の疑問がもしもそうであったのなら……自分は一体、なんと答えてあげるべきなのか。

その覚悟を未だに決めかねていたダンは、どうかそれを口にしないでくれと願うと同時に……その実、彼の口からその質問が出てきて、彼らに対する唯一の、そして最大の不実に関して口を割らざるを得なくなる事を、どこか期待している自分が居る事を、確かに自覚した。

……でなければ、わざわざ自分から水を向けるような真似……なんと小賢しい。

だが、喜ば<sup>残念</sup>しい事に、ソガの口が紡いだ疑問は、全く別の事であった。

「ウインダムは死んでしまったのだろうか？」

「……えッ？」

身構えていた所とは別に、がら空きの場所へ不意打ちが決まったため、ダン是非常に間抜けな声を返す事になってしまった。

「今まで、彼らは光になって何処かへ消えて行つたが……今回はガッツに眉間を撃ち抜かれて爆散した。つまり……あれはどう見ても死んだんだ。隊長やフルハシ隊員だつて、ハツキリと、『ウインダムを倒した恐るべき敵』だと言っていた……でもな？ ウインダムは……見るからにロボットだ。いつか、ユートがボーグ星人に脳天をかち割られた事があつたが……バックアップで復活出来た。だったら……ウインダムも実はバックアップがあつて……死んだわけじゃないんじゃないかと、そういう希望がさ……どうしても手放せないんだよ」

「……なるほど」

「ダン……どう思う？」

「……」

ダンは腕を組んで、しばし考えこんだ。

それは傍目には、想像力を働かせて、よく知りもしない不思議な怪獣達の生態を妄想

しているように見えたが……ソガの目には、ハッキリと別の心情が見て取れた。

「……これは、あくまで僕の推測でしかないんですが……」

「それでいい」

「彼は……死んではいない、と……思います」

「……そうか！ ……やっぱり、そうか!!」

「しかし、かと言って、ユートのような完全にロボットかと言えばそれも違う。やはり彼も生命体としての一面を持っていて……あれほどに酷い傷を……それこそ、自分の電子頭脳が丸ごと吹き飛んでしまった後に、もう一度その存在を元通りに作り直すのは……非常に長い時間を要するでしょう」

ダンがまるで釘をさすような事を言ってみても、ソガの笑顔は変わらない。とても晴れやかなものだった。

「それでもいいんだ！ 死んでさえいなければ、どれだけ長い時間をかけても、いつか復活できるというならば……俺はそれでいい」

「……あくまで、そうなんじゃないかって……僕の勝手な推理ですよ？ そんなに無邪気に信用していいんですか？」

「当り前さ！ お前のカンはよく当たるからなあ……ホームズは、ワトソンの言う事を一番信頼しているんだぜ？」

「彼の推理が当たった事は少ないでしょうに……やっぱり僕もホームズがいいなあ……」

「そういう事はな、もつと戦鬪で活躍してから言うんだな。推理小説の山場は捜査だが、俺達の仕事においてはその後の戦鬪が一番大事なんだから。フルハシ先輩やアマギミたいに華々しい戦果を立てられたら、ホームズに昇格してやるよ」

「ソガ隊員は？」

「キングジョーにトドメをくれてやったのは、一体誰が引き金を引いたからだと思うかね？ ソン？」

「はいはい、おみそれしました……」

ここでふと、あの時敵を押さえていたのは僕だったんですよ。などと明かした時に……ソガ隊員は一体どんな顔をするのだろうかという疑問を、ダンはどうしても拭い去れなかった。

別に悔しいとかそういう感情は全く抜きにして、純粹に気になったのだ。

驚くのか、そんな筈は無いと否定するのか、それとも……やっぱりな、と言うのか。

そして……あの恐るべきガッツ星人と戦う前に、連携において最も大きな効果を発揮する手段があるというのに、それを採らないというのは、出し惜しみに当たるのではないかと……そんな考えが……



「あの……ソガ隊員。実はもうひとつ……」

その時、ポインターの無線に連絡が入る。

「こちらホーク3号！ 敵の円盤を捕捉！ これより交戦を開始します！」

「いかん！ バカ話でほっこりしとる場合じゃなかった！ 急ぐぞ！」

「……はい！」

## セブン抹殺計画 第四段階

一方そのころ泉が丘上空では、謎の飛行物体に対して、ホーク3号による追撃戦が展開されていた。

今まで、付かず離れずの距離を保ったまま移動していた、ガラス細工の如き円盤は、山間部に到達すると、一旦停止してから、今度はゆっくりと下降を始める。

敵の移動が止まった為に、ようやく目標を射程に収める事の出来た3号が、すぐさまロケットランチャーによる攻撃を加えるも、それをものともしない結晶体。

そればかりか、ホークが再攻撃の為に旋回した一瞬の隙について、パルスレーザーによる迎撃まで行ってきた！

右翼に被弾し、煙を吹き出すホーク3号。

ガッツ星人の円盤は、小細工を使うまでも無く、その単純な機体性能だけでウルトラホークを完全に上回っているのだ。

「チクシヨウ……とことんまでやってやるっ！」

「アマギ隊員！ 無茶をして勝てるわけないわ！」

徹夜明けで少々興奮気味のアマギを、アンヌが必死に窘める。

彼女には、昨夜の自分という反面教師がいたために、アマギよりは冷静に、事態を客観視する事が出来た。

なによりも……敵は、あのウインダムすら退ける強敵なのだ。このまま力押しで敵うはずがない。

「……ッ、脱出用意！」

その忠告に、普段の沈着さをとりもどしたアマギは、悔し気に離脱準備へかかる。

黒煙を噴き上げて墜落していくホーク3号……

報告を受けた地点にポインターが到着すると、俺達の目の前で、きらめく水晶のようなガッツ円盤が、土煙を濛々と巻き上げて、谷間へ着陸する所だった。

すぐに下車しようとするダンの腕を、慌てて掴んで止める。

「ダン、まずは報告だ」

「はい！……本部！ ハッ!？」

オレの言う通りだと思いなおしてくれたのか、無線で連絡を取ろうとしたダン。しかしその直後、俺たちの耳に、怪しげな飛翔音が飛び込んできた。

二人で車内から上空を窺うと、案の定、ガッツ星人の円盤が着陸した方向から、白磁器を思わせる小型ドローンが飛んでくるのが見えるではないか。

来やがったか……これから起こる事を知っているオレにとつては、まさに因縁の相手である。

「……頼む、効いてくれ！」

一縷の望みをかけて、サイドミラーからニードルレーザー砲による対空砲火を加えるが……

「やっぱり駄目か……」

原作の後編において、フルハシがコレであの小型円盤を撃退していたから、ワンチャンあるかと思っただが……

やっぱりというかなんというか、容易く弾き返されてしまった。

とはいえ予想は出来ていた事だ。

なにしろポインターから飛び出したレーザーの形状が、オレの思っていたものとは全く違う。

今飛んで行った攻撃は、スパイナー輸送作戦でキル星人のヘリコプターを墮とした時と同じく、直線の黄色いレーザー光がそのまま着弾したが……件のシーンでは、円盤の周囲へ、青白い無数の閃光に拡散していたような気がする。

つまり、あの時撃っていたのは、普段ポインターに搭載されているモノとは別物という事で……今この瞬間まで普段通りなのに、後編までの僅かな時間で何かしらの変更があったのだとしたら、その要因はもうほぼ一つしかない。

きつとアレは、ダイモード鉱石をマグネリウムエネルギーの偏光レンズに成形した際に発生した切子を、ニードルレーザーの発振器に詰め込んで、即席のマルス133擬きに改良したんだらうな。

さらに言えば、それですら、別に撃墜出来た訳じゃなかった。

人類が未知の武器をいきなり使ってきたから、意表を突かれたガッツ星人が警戒して引き上げただけに違いない。

つまり、今この時点でオレに出来る事は無いと証明されてしまった。

なんとも歯がゆい事だが……俺はこのあと、この小型円盤に捕まってグルグル大車輪をくらう羽目になるという事だ。

だが……ただでは捕まらんぞ！

電磁バリアを展開し、バンパーレーザーやウルトラミサイルも駆使して、弾幕を形成する。

だが、辺りに響く謎の声が、無情な事実を告げた。

『そんな物でガッツ星人に立ち向かえりとも思っているのか！』



ソガ隊員への拷問や、バディに対する分断策を目的としたものならば、余りにも幼稚でお粗末な出来といえる。

不可視の檻でウインダムを捕らえ、ウルトラホークすらも片手間に弄んだ敵の手腕だとはとても思えない。

では、ガッツ星人はなぜこのような迂遠な真似をするのか？

そんなの、決まっている。

わざとやっているのだ。

少しでも長く仲間の絶叫を聞かせ、その醜態を見せつける事で、ウルトラセブンの精神を追い詰め、揺さぶりをかけようとしているに他ならぬ。まさしくこれは、セブンという敵に対する、見せしめなのである。

余りにも見え透いた罠で、驚く程にやすい挑発だ。

しかし、その効果のほどは……まさしく靦面であった。

ダンが堅く拳を握りしめる。

彼とてこれが、自分を引き摺り出す為の策である事など、とつくのとうに分かっているのだ。

自分がこれからすべき事は、踵を返して直ちにこの場を離れ、そんな人質には価値などないのだと、奴らの挑戦へ、にべも無く三行半を叩きつけてやる他ないのだという事

くらい。

そうすれば、忽ち敵はソガ隊員から興味を失つて、彼をとつとその辺に打ち捨てるだろう。

真にソガ隊員の事を案じるのであれば、そうすべきだ。

だが……だが!!

誰しも、どうにも我慢がならない事というのは、やはり存在するのだ!

大切な存在を、眼前でこのように辱められて、それを黙って見過ごさなければならぬなど!

モロボシ・ダンの心——若き薩摩青年より借り受けて、ウルトラ警備隊の仲間達と育て上げた、熱く迸る正義の血潮と黄金の如き輝きを発する不屈の精神が、ウルトラセブンの胸の奥でしきりに叫んで仕方が無いのである!

彼を助けろ!!

重ねて言うが、ここで変身する事こそが、まさしく敵の思う壺であり、張り巡らされた蜘蛛の巣のような狡猾な罠に自ら飛び込むかの如き、非常に愚かな決断である事は、ダン本人とて重々承知の上であり、それを強いるガッツ星人の方でも、ダンがその狙いを看破するであろうことなど、もはや前提条件でしかない。



双方共に互いを理解しあつたその上で、敢えて問うているのだ。

『仲間を置いて、逃げられるものなら、逃げてみる』……と。

こうなれば、もはやダンに一片の躊躇いもなかった。

彼は胸元から、深紅のデバイスを引き抜くと、その決意を表すかのように真つすぐと伸ばした腕で、正眼に構える。

そして、その慈愛の輝きに富んだ瞳へ、ウルトラアイを装着すると、そこから溢れる憤怒の奔流にその身を委ねた！

「デユワッー!!」

澄み切ったレンズ越しに、彼の視界は迸る閃光で覆いつくされ、柔らかな頬を、真一文字に堅く結ばれた口元を、白銀の覚悟が覆いつくしていく……そうして彼の肉体は、やがて太陽の強さを凝縮した、紅蓮の炎を身に纏い、蒼く輝く天を衝くのだ！

怒りに燃える平和の使者が、陰謀渦巻く荒涼とした大地へ、今まさに顕現した！

『やつとセブンになつたナ』

不気味な白面の怪鳥が、深紅の巨人と対面する。

そうして、その小さな嘴を、僅かに喜悦で歪ませた。

『……待つていたゾ』

「ヤハリ……ハ……ダ」

「セブンの……は我々の……」

ズルズルと引き上げられていく感覚。

まるで錨を巻き上げるようにゆっくりと、覚醒していく。

ごぼりごぼりと、意識が泡となって体を包み……

「うう……ここは……」

気が付くと、俺は薄暗い部屋の真ん中で、台座の上に大の字で縛り付けられていた。

「今の声はなんだ」

「そが隊員ガ、意識ヲ、取り戻シタノダ」

「早すぎるのではないか」

「意識消失状態カラノ、回復ニ要スル時間ガ、地球人ノ、平均値ヨリ、半分程度ニ収マツ  
テイル」

「ウルトラ警備隊の脅威度を一段階上方修正」

「了承シタ」

首をおこすと、オウムの化け物達が、モニターを背にして俺の顔を覗きこんでいる。

「ガッツ星人……」

『貴様は我々の虜囚となったのだ』

「くそツ……俺なんかを捕まえてどうするつもりだ！」

マズいぞ……この後、帰ってセブンの救出作戦をしなきゃいかんのに……こんなところで捕まってる場合じゃない！

「勘違いするな我々は貴様に興味などない」

「我々ノ、目的ハ、うるとらせぶんノ打倒ダ」

「丁度いい貴様にも現状を正しく認識してもらおうか」

「我々ノ、勝利ノ、立会人ト、成ルノダ」

「……なに？」

彼らの背にしたモニターでは、セブンが崖つぶちで戦っている。

まさに俺が見たガッツ星人との戦いそのままだ。

画面を注視する俺を無視して、その周囲を取り囲んだガッツ星人達が、口々に説明を始めた。

『我々はある星系に攻め込んだ際、一つのデータを手に入れた』

『そこには「ノンマルト」または地球と呼ばれる辺境の星について記されていた』

『地球は、主要な星域間の、どの航路からも外れた場所に位置している為、ほとんどその存在を知られていなかったが、ある時、護送中の凶悪犯がその逃走ルートに使用した為、暗黒物質蠢動効果におけるミュー粒子の滞留地域としての価値が証明され、近年、注目を集めている星だ』

『この星系を掌握し、地球に前哨基地を置くことが出来れば、サルガツソーを迂回する必要がなくなる』

『暗礁回廊に抜け道を確保する事が、星間戦争において計り知れないアドバンテージを齎すだろう事は明白だ』

『だが、数々の種族が侵略を画策したにも関わらず、未だに地球はその独立を保っている』

『我々が手に入れたのは、その地球の現生人類が組織した防衛機構の構成員のパーソナルデータに関するものだった』

「……………なにツ!？」

つまり……………ウルトラ警備隊の身体情報という事か!？」

そんな物が流出していたなんて……………今まで敵の計画は尽く潰して来たはずだ。

そんな敵がいるはず……………

いや、待てよ……?」

情報を持ち出すとは、まさか……プロテ星人かッ!?

人工衛星は敵の手に渡らなかつたから、安心してはいたが、もしも別口の情報ルートがあつたとしたら?

そうだったらかなりマズイ!?

それだけは、はげしくマズイ!

『その情報を精査した我々は、すぐさまそこにある小さな違和感に気付いた』

「違和感だと……?」

『そうだ、現地人で構成されている筈の組織の中に、たった一人だけ、異物が紛れ込んでいる事を見つけたのだ』

『巧妙に偽装されていたが、そのホメオスタシスのパターンは、M78星雲人が擬態時に使用する独特の波長を有していたのだ』

『その隊員の名は……モロボシ・ダン』

『我々の狙うセブンは、実はウルトラ警備隊の、ダン隊員なのだ』

『故に我々は、次なる標的に、この星を選んだ。宇宙警備隊の管轄外地域で、M78星雲人との戦闘記録を得られる機会を逃す手は無い』

ガッツ星人の独白を聞かされるソガは、もうすっかり顔面蒼白となっており、それ  
気をよくしたのか、ますます持つて饒舌になっていく鳥人達。

『我々は手始めに、アロンを使ってセブンの戦闘技術について分析した』

『すると驚くべきことに、セブンの用いる格闘術は、宇宙警備隊員が正式採用しているソ  
レとは全く似て非なる事が分かった』

『宇宙警備隊は、M78星雲人が持つ数々の特殊能力を前提として、光線技を主軸に置い  
た戦闘技術を編み出しており、格闘戦においても、捕縛に優れた関節技や、牽制目的の  
チョップ連打、光線技へと繋ぎやすい投げ技を多用する傾向にある』

『しかし、セブンの戦術は、初撃の威力に偏重して組まれており、格闘戦においても、慣  
性の威力を足した突進や、全体重を乗せた重い打撃を主体としたインファイトだ』

そう語るガッツの背後のモニターでは、今まさに、セブンがガッツ星人に向かって、ア  
イスラッガーやエメリウム光線を放つ様子が映しだされていた。

しかし、それらは分身やバリアによつて、容易く躲されてしまう。

飛び道具が効かないと悟るや、今度は大きく走り込んでからの大ジャンプ。

ガッツ星人の立っていた場所に紅い巨人が躍りかかるが、既に敵の姿は無い。

……そうだ、確かにセブンは初手から必殺技をぶつ放す事もあるし、いざ怪獣と組み合う時も、ショルダータックルのような、体ごとぶつかつていく技が多い。

『敵の出方によつて、柔軟に対応できる中距離戦を得意とする警備隊員に比べ、セブンの戦法は遠、近距離の両極に振り切れている。明らかにセブンは警備隊員らしからぬ戦法を採っている』

『しかし我々は、セブンのドクトリン及び、打撃格闘の構えと奇妙に符合する戦闘技術が存在する事を解き明かしたのだ』

『それは、恒点観測局が局員に広く指導している護身術の構えと、多くの点で合致するのである』

『セブンは、観測局で採用されている護身格闘術に、独自の改良を加えた、我流の宇宙拳

法で戦い続けているのだ』

『すぐに我々は、観測員の任命リストを入手し、照合した結果、セブンの正体を突き止めた』

『ウルトラセブンの正体、それは……』

『【恒点観測員340号】』

ガッツ星人の声が重なって、その名を合唱する。

ごくりと唾を？みながらそれを聞くソガにとつては、そのような事は周知の事実であつたが……かのガッツ星人が、このようなプロセスを辿つてその事実に通りに着いたのだという事が、彼にとつて最も重要なのであつた。

『つまり……セブンは正規の戦闘訓練を受けた宇宙警備隊員ではない』

『この意味するところは、セブンの戦闘経験が浅く、戦術眼、及び戦略的見地において非常に未熟な状態だと言う事だ』

『観測局の護身術は、襲い来る危険生物の出鼻を挫き制圧、または逃走の隙を確保する事を念頭に置いたもので、本来、異星の戦士と高度な駆け引きを行う事は想定されていな



』

『ではなぜ、戦闘の素人であるセブンが、これまで多くの戦いを制する事ができたのか』

『その疑問は、アロンとの戦闘記録を紐解く事ですぐに氷解した』

『セブンの身体能力は、M78星雲人の中でも、上位に位置するものである』

『そしてその恩恵は、筋力、敏捷性といった表面的な部分に留まらず、感覚機能、特に、視覚や聴覚といった部分に置いて顕著に表れている』

「感覚だと……?」

『その聴覚は、敵の肉体が発する筋肉や骨の僅かな軋みを逃さず、攻撃の予兆を予備動作の段階から推測する手助けとなる』

『セブンの動体視力であれば、例えばそれが光の速度を持つ粒子線であったとしても、その射線を捉える事が可能だ』

『ここに、ウルトラ念力を駆使した、第六感的な補測が加われば、それらの観測結果を、即座に次の行動へ反映するなど、彼の身体能力を以てすれば、造作も無い』

『セブンは、自身の経験の不足を、その驚異的な肉体スペックによって覆す事が、可能なのだ』

……なるほど、確かに彼はペガッサ戦やアイロス戦でも、敵の光線を避けながら戦っていた。

逆に言えば、それくらいできなければ、マツハ7で上空を飛び回りながらの空中戦なんて芸当、出来るはずが無い。

アイストラッガーを縦横無尽に飛ばせる空間認識能力こそが、彼の戦闘スタイルを支えているのか。

いわゆる後の先。見てから回避余裕でしたを、素の能力ゴリ押しで再現していたと。

戦闘経験に裏打ちされた、高度な読み合いが出来ないのならば、敵の攻撃を回避した後に、もしくはそれを撃たれる事が分かった瞬間に上から超火力でねじ伏せる。

……言われてみれば、なんとも粗削りにすぎる戦法だな。

『だがそれは、裏を返せば、戦闘直後から常に過集中の状態にあると言う事だ』

『意図的な極限状態に自身を置いたセブンの頭脳には、尋常ではない程の外部情報が絶

えず流れ込んでいる筈』

『その演算処理能力の高さは、戦闘において大きな利点となるが、逆に些細な齟齬でも重大なエラーを引き起こす一因となる』

『視覚や聴覚、その他様々な方法で認識した外界の状態に、欠落があればどうなるか。その行動予測が正確であればあるほどに、現実との認識差は肥大化し、その修正処理に伴う労力は、時間と共に急激に加速するだろう』

その言葉を聞いたソガは、弾かれたように顔を上げた。

……そうか！

酔いだ!!

俺達人間だって、三半規管と視覚情報にズレが生じると、脳の処理能力がパンクした結果、神経作用の混乱が引き起こされてしまう。

これが乗り物酔いや画面酔いのメカニズム。

ましてやセブンの五感は、俺たち地球人の数万倍だ。

得られる情報量なんて、視覚情報だけでも凄まじいものになるだろう。

彼の場合は、ここにテレパシーの第六感も入ってくるわけだ。

普通に戦闘しているだけで、その疲労感は二次関数的に跳ね上がっていくはずだ。

いや、それらが全て一致しているうちはまだいい。

どれか一つでも、本来の認識からズレてしまつたら……？

その誤差はとんでもない事になってしまう。

ただでさえ不器用な彼は、敵の一挙手一投足を片時も見逃すまいと、敵の動きへ全神経を集中しているというのに。

その敵が、常ではありえない動きをしてきたとしたら……!?

声はすれども、姿は見えぬ。

気配はないのに、足音だけが聞こえてくる。

人一倍に真面目な彼が、そんな状況に置かれてしまえば、その消耗は普段とは比べ物にならない……!?

『第一の結論。セブンは、幻惑を主軸とした翻弄戦法に極めて弱い』

そう断言する侵略者の、背後で光るモニターの中、真つ赤な戦士がよろめいていた。

## セブン抹殺計画 第五段階

セブンが頭部に手を添え、アイスラッガーを抜き放つ。

白銀の刃は、妖しく笑うガッツ星人の正中線を真つ二つに切り裂き、その影が左右に分かれるも……それらは鏡写しのように二体の星人の姿へ分離し、また一つに合体する。

今度はエメリウム光線だ！

寸分変わらずガッツの胸元を捉えたかのように見えたが、周囲に薄く展開されたアンチフィールドに阻まれ、即座に無害化されてしまう。

しかしセブンは諦めない。

全身のバネを活かして跳躍すると、敵に目掛けて急降下！

着地の直前で掻き消える怪鳥の姿。

……ならば後ろか！

セブンがその思念を大気中に拡散させて気配を探れば、彼の背後に憎き敵の影が現れる。

そうして振り向きざまに……ワイドショットを叩き込んだ!!

それを受けたガッツは忽ち肉体が崩壊していき、光の粒となって消えていく。

この恐るべき星人を倒す為には、やはり切り札たるワイドショットを打ち込まねばならないのか。

だが、辺りに渦巻く不穏な気配は未だに消える事は無い。

まだまだ多くの敵が、姿を消して、辺りに潜伏しているに違いないのだ！

「やめろセブン！ そいつらは幻覚だ！ そんな偽物に無駄弾を使うんじゃない!!」

四肢を拘束されたソガが、思わず身を振りながら叫ぶが、画面の向こうにその声は届かない。

暴れる地球人を見下ろしながら、なおもガッツは持論を展開していく。

『次に我々は、セブンの必殺武器に注目した』

『アイ、スラッガー……恐るべき切れ味を誇る宇宙ブーメラン』

『しかし、その制御にウルトラ念力を使用する都合上、セブンの脳波パターンを予め割り出す事さえできれば、その予兆と軌道までもが、手に取るように分かる』

『もはや我々を、あの武器で傷つける事は叶わない』

セブンの攻撃準備を察知した瞬間に、分身と消失を駆使して、アイスラッガーの連撃を躲し続けるガッツ星人達。

『そしてエメリウム光線』

『高い汎用性と威力を両立した、理想的な攻撃手段だ』

『これには、速射性と正確性を重視し、純粋な粒子熱量のみを照射する熱線タイプと、そこへ物理的な威力と長射程を加味したより強力な磁力線タイプが存在するが、本を正せばどちらも太陽エネルギーを変換したものに過ぎない』

『我々が対策すべきは、このウルトラビームの根本的な変換方法についてだと結論付けた』

『アロンの肉片サンプルから回収した残留粒子から、その組成は既に解析済みだ』

『あとは、このエネルギー波と逆の波長を持つアンチフィールドをぶつけて、相殺してしまえば、セブンの光線は、理論上、ワイドショットであつても、全て無効化できる』

『アロンによる実験で、それも証明済みだ』

『もはや、セブンの持ち得る全ての攻撃方法に対して、その対抗策が完成した』

『あとは、セブンのエネルギーが尽きるのを待てば良いのだ』

セブンを取り囲んだガッツ星人達めがけ、ぐるりと光線が薙ぎ払われるが、すべてバリアのようなものに阻まれて、全く効果が無い。

ご丁寧に、対エメリウム特効のバリアを準備してきたというのである。

そしてまた深紅の巨人は、自身の持ち得る唯一にして最大の火力を解き放つ事を迫ら

れるのだ。

『セブンの持つ武器は、どれもが必殺の威力を秘めた恐るべき攻撃だ』

『しかし、その強力さ故に、セブンは負ける』

『過剰なまでの火力で、その障害を尽く粉碎してきたが為に、セブンにはそれらの攻撃が通用しない場合の経験が、一切無いのだ』

『全ての攻撃が効かなかった時、セブンは戦闘経験の浅さから、状況の打開策をこれ以上持ち合わせていない』

『セブンが無意識的に、短期決戦を挑む傾向にあるのは、観測局のドクトリンのみならず、自身の戦闘における未熟さを自覚し、それが露呈しないようにしているからに違いない』

『こうなった場合、セブンの行きつく結論はただ一つ。最大火力であるワイドショットの連射による、防御の貫通だ』

『都合の良い事に、正規の戦闘員ではないセブンには、宇宙警備隊員の標準装備であるエネルギーリミッターが支給されていない』

『これにより、セブンは地球のような劣悪環境下でも、無尽蔵のスタミナを発揮し続けられる代わりに、戦闘が長期化するほど、際限なくエネルギーを使用してしまうだろう』

「く、くそっ……」



『第二の結論。セブンにとつての長期戦は、諸刃の剣だ』

やはり、カラータイマーが無いのは、セブン最大の長所であり欠点だったか！

時間の制限無く戦い続けられるという事は、つまり決着がつかない限り、際限なく戦つてしまうという事だ。

持久戦に強いと言えは聞こえはいいが、敵が最初からそれを狙いに遅滞戦闘を心がけた場合は、逆に生命維持すら危ういレベルでエネルギーを消耗し続けてしまうんだ！

『そして……アイ・スラッガーと、ウルトラビームに次ぐ、セブンの三つ目の武器について』

「三つ目の武器だと……?」

どうやらガッツ星人の口ぶりでは、彼らはワイドショットもエメリウム光線の延長と考えている節がある。

物理技のアイスラッガーと、光線技のウルトラビーム全般というような分類だ。

じゃあ、三つ目なんてあるか……?」

『我々が、セブンに消耗戦を仕掛ける上で、最大の障害と成り得る不確定要素』

『それが、携帯型怪獣兵器とウルトラ警備隊の存在だ』

「な、なんだって……ッ!」

全くの意表を突かれたソガは、これまで大人しく星人達の解説に相槌を打ってなんと

か情報を引き出そうとしていたにも関わらず、完全に素の驚きを返してしまった。

この流れで、奴らの口からその名が出るとは、思ってもみなかったからだ。

『我々もこれについては、地球圏に到達するより以前に、事前情報入手していたのだ』  
『セブンは、即席で展開可能な局地戦闘用の怪獣兵器を、複数体携行している可能性が高い』

『これらの怪獣兵器を適宜投入する事で、威力偵察及び、戦力の水増しによる集団戦が可能である』

「……………うん……………」

『それに加えて、ウルトラ警備隊による上空支援』

『その直接的な攻撃力は考慮に値せずとも、制空権の完全な確保が出来なければ、セブンに対し、地上の怪獣と上空の円盤群からによる二面制圧が妨害される恐れがある』

『現に、カプセル怪獣とウルトラ警備隊の戦力値は、ガストロポータ・プルモナーター一体分に匹敵するという試算が出ている』

がすとりぼーだ……………何だって？

『極限までセブンを消耗させたとしても、戦闘にこれら存在の介入を許した場合、セブンにインターバルを与える結果となり、太陽付近へ飛翔され、エネルギーを補給されてしまいう可能性がある』

『少なくとも前例がある以上、そのようなリスクを看過することは不可能だ』

『故に我々は、不確定要素を予め排除する事にした』

「……」

苦虫を噛み潰したような表情のソガを尻目に、いよいよもって講釈の大詰めにかかるガッツ星人。

『尤も、携帯型怪獣兵器については、セブンが全戦力集中展開による物量作戦を採らず、限られた状況下での逐次投入しか行わないことから、その総数は凡そ3匹前後であると予想され、再使用に一定の間隔を要するのは明白だ』

『また、識別名ミクラスは、我々のアロンで十分に対処可能であった事から、総数予想の多少の誤差は許容範囲とする』

『特記戦力であった識別名ウインダムに関しては、入念な対策を講じた甲斐あって、完全撃破に成功した』

『ウルトラ警備隊の最大戦力であるウルトラホーク1号についても、我々はダン隊員を囿とすることで、分離機能を発揮する前に、甚大な損傷を与え、非戦力化する事が出来た』

『残るウルトラホークも、我々の円盤をもってすれば、哨戒中の各個撃破なぞ容易なのだ』

彼らは非常に用心深く、敗北に繋がる可能性があるならば、全力を注いでそれを排除する。例えばそれが非常に些細な要素であっても。

『第三の結論。現在のセブンは孤立無援だ』

ガッツは、自らの抹殺計画における主軸となる方針を発表し終え、満足げに頷いた。

『上記三点から、我々のセブン抹殺計画が完璧であるのは明白だ』

『ロイコガンダリデイウムポルドクサムのような失敗を犯す要素は一つも存在しない事が分かる』

『もはや、セブンは我々の前に屈するしかない』

『これでセブンの置かれた状況を認識できたはずだ。さあ、我々の勝利を見届けるのだ』  
そうして、「どうだ勝てる訳が無いだろう」とでも言いたげに、100点満点の結論を述べたガッツ星人達は、この戦いの観測者たるソガ隊員の顔を嬉々として覗きこんだ。

この脆弱な地球人の顔に浮かんでいたのは……

「……………ふう」

安堵。

まるで、ぬるま湯に浸かっているかの如き、圧倒的な余裕と安心の表情であった。

困惑でガッツ星人達の動きが止まる。

中には、先祖返りしたかのように、首を捻る個体すらいた。

「……………」

「あ、ごめん。発表終わった？　じゃあ、素人質問なんですけどいいですか？」

『……………なんだ？』

「なんかさつき誰かが失敗したとか言ってたけど、名前なんだっけ？　聞き逃しちゃって……………地球人にもわかるように、ゆっくり発音してもらえますか？」

『ロイコガンダリディウムポルドクサム』

「あ……………うん、ありがとう。普通に知らない単語だったわ」

互いの顔を見合わせるガッツ鳥達。

今の解説を聞いて、疑問点がそれだけ？

この非常に完成された計画の全貌を聞かされて、気になるのが、たかが寄生虫の正式名称だけ？

そのような事がありえるのか？

……………さもありません。

ソガは、ガッツ星人の解説冒頭の発言から、自身の犯した失態によつて、原作知識という禁断の兵器が、最も渡つてはならない相手に渡つてしまったのではないかと、そこそ肝が潰れる思いで、一言一句聞き逃すまいと悲壮な覚悟で聴衆に徹していたのだ。

しかし、最後の最後で、そうではない事が彼ら自身の口から語られた事によつて、すつ

かり安心しきってしまった。

結局、その言葉が一体なにを意味するのか、ソガには分からずじまいだったが……彼らが情報を入手したルートについて、凡その見当がついてしまったのである。

プロテ星人が持つて帰った情報でないなら、特段原作と変わりはないので、極論としてどうでもいい。

——であれば、セブンが彼らに負ける事など、ソガにとつては、できれば避けたい状況ではあったものの、なつてしまった以上はもはや既定路線以外の何物でも無く……

長々と聞かされた理論も、彼の前世的な興味を満たす程度の感慨しか与えられなかったのだ。

だがこの反応は勿論の事、ガッツ星人達が予想し、欲していたものではない。

彼らは目の前の地球人が、ガッツ星人の強大さを認識し、恐れおののき、隔絶した戦力差に絶望する事をこそ望んでいた。

彼らにとって不幸だったのは、そうならなかったのが、ソガの非常に特異かつ個人的な理由である事を知らず——もし知っている存在がいれば、それはかの悪辣で凶悪な教授しかいないのであるが——無知で理解力に乏しい愚かな地球人が、その蒙昧さ故に、セブンへ対する信頼が厚すぎるのだ……と誤解してしまった事だろう。

これだけ教えてやっても、まだセブンが勝つと思つていいのか——と。  
なので、彼らは多少憤慨しつつ、さらなる捕捉説明をする羽目になった。

ガッツ星人からすれば、自分達の計画をより完璧なものとする為に、この地球人には  
こう思つて貰わなくてはならないのだ。

【セブンは弱い】——のだと。

『まだ、現状が理解できていないようだな』

『セブンは我々に勝つ事が出来ない。それは絶対だ』

『なぜなら、セブンは根源的に最大の弱点を抱えているからだ！』

「……寒さか？ そんなん教えて貰わなくても知ってますよ」

やはり愚かだ。ここに気付いていないとは。

溜息と共に、少しばかり自信を取り戻したガッツ星人は、喜び勇んでそれを教えてや  
ることにした。

『違う。セブンは既に我々に対し、その弱点を露呈してしまつて』

『それは、セブンの行動原理そのものだ』

「……行動原理？」

『そうだ、セブンは地球の守護者として振舞う以上、絶対に避けて通れない道が存在す  
る』

『これはもはや、M78星雲人という種族そのものが持つ業のようなもの』

『それは……セブンには人類を見捨てる選択肢が採れないという点だ！』

「……は？」

『ソガ隊員。我々がセブンを釣り出す為の餌として、無作為に貴様を捕らえたとも思っているのか？』

『我々は、事前情報によつて、セブンが貴様に対して一定以上の信頼を置いている事を知っているのだぞ』

『ソガ隊員と、アンヌ隊員。この両者どちらかを足枷とすれば、セブンは我々の挑戦から逃げずに戦う可能性が極めて高いことは明白だった』

『それが、例えどれだけ不利な状況であっても、セブンは決して撤退しない。いや、出来ない！』

『M78星雲人は、長期間接触した他惑星の生命体に対して、異常に執着する傾向にある』

『彼らは、その肉体と精神が非常に頑健である代わりに、庇護者として振舞う事を生まれた時から課せられているのだ！ 他ならぬ自分自身によつて！』

『この最大の枷を外せぬ以上、彼らは選択できる戦術的多様性が圧倒的に少ないのだ！』

『つまり、彼らは』



『守るべきものを持つ限り、セブンは絶対に強者足り得ない!』

ガッツはその強固な事実を、愚かな弱小種族に突きつけた。

『貴様がここに囚われている限り、セブンはエネルギーが尽きるまで永遠に戦い続ける』  
『故に、我々の勝利は確定しているも同然!』

『セブンは、地球の守護者として、この星に降り立ったその瞬間から、圧倒的弱者であるのだ!』

ガッツ星人は、高らかにそう宣言すると、肩を揺らして一斉に歌い始めた。

彼らが原生物であった頃からの本能的な習慣。

気分が高揚し、強者である事が確定した際にのみ奏でられる、勝利の旋律だ。

喉袋を存分に震わせ、笑い声を同調させる。

ああ、なんと甘美で心地よい……

「あ×あ×あ×?」

余りにも耳障りな不協和音が響いた為に、共鳴を一旦取りやめて、ガッツ星人達は互

いの顔を見合わせた。

そうして、音の出所の方向を一斉に見下ろした。

そんなはずはないのだが……どうやら今のは、彼らの眼前に捕らえられた、哀れな地球人の口から発せられたものであつたようだ。

その証拠に、彼の眉は奇妙に吊り上がり、口の端は醜く歪んで、犬歯が剥き出しとなつた表情のまま固まつていたからである。

この事態について、この場にいるほとんどのガッツ星人達は、いったい何が起きたのか咄嗟に理解が追いつかなかつた。

……語弊を招きかねないので捕捉すると、ガッツ星人も、今の声が地球人における威嚇に相当するものである事までは瞬時に理解できた。

ガッツ星人の中に、原初の頃より脈々と受け継がれてきた、生態系の頂点に位置する絶対的強者だけが持つ激しい闘争本能を、僅かに揺さぶる響きが、先程の短い発声に含まれていたからだ。

だが一方で……彼らを構成する理性の部分が、全くもつてそれを受け入れられなかつたのである。

ガッツ星人の半分は、なぜこの地球人がここまで激しく激昂し、突然、怒りを露にしているかが理解できなかつた。

別に眼前の地球人を侮辱した覚えはないからだ。

そしてもう半分、こちらは思考パターンをより戦闘面へ割り振った者達は、彼の怒りを大体把握した。彼らもまた「力」を信奉する者達であったので、地球人が心の拠り所とする、圧倒的な力の象徴を否定された事によつて、彼は怒り狂つたのだらうと。

だが……このような状況でなぜそんな行動をするのが理解出来なかつた。

四肢を拘束され、周囲には自身よりも明らかに強大な存在が犇めいているこの状況で、それらの氣分を害するような行為を、なぜ……？

まったくもつて、彼らには理解出来なかつたのだ。

「もっぺん言うてみい」

『……何？』

「よう聞こえへんかつたから、もっぺん言うてくれいとうんねん」

『……セブンは、地球の守護者として、この星に降り立ったその瞬間から、圧倒的弱者であるのだ』

「ほう、そうか」

ソガはいったん目を閉じ、一度だけ深呼吸した後、再びその目で、質問に答えたガッツ星人をまじまじと見つめ返しながら、こう言った。

「なんでそんな当たり前のことを、そんな自慢げに言えるんや？」

『……………?』

「ハア………」

意表を突かれ続け、事態が想定よりも明後日の方向へ転がってしまい、思考が止まったまま首を傾げる鳥人に対し、ソガは大きな大きな、それこそわざとらしく、相手の神経を逆撫でするためだけの行為を行った後、まるで理解に乏しい子供へ優しく授業をするかのような口ぶりで呟いた。

「ええですか? ……守るのと、攻めるのと。どっちが難しいか、分かりますか?」

『攻める方だ。守備側は地の利を活かして防備を固めることが出来る為、3倍の戦力が……』

「あーだめだめ、全然分かってへんなあ……」

やれやれと首を振ると、ソガはうつすらと笑みすら湛えて話し始める。

「ガッツ星人さん、地球の民話を教えてあげましょう。……あるところに、商人がいました。彼はどんな盾も突き通す最強の矛と、どんな矛も防ぐ最強の盾を売っていました」

『そんなはずは無い。その盾と矛をぶつけた場合、パラドックスが生じる』

「ええ、貴方のように賢い客がそう言つて、ぶつけてみました。どうなつたと思いますか? 答えはね……傷のついた盾と、穂先の曲がつた矛が出来上がりました」

『どちらも同じ物質で出来ているならば、そうもなろう』

「じゃあこれ、どっちが勝ちだと思えます?」

『なんだと? 勝者など居ない』

「残念ハズレ、答えは矛の勝ち。なぜなら、盾の仕事は攻撃を防ぐ事で、矛の仕事は対象を傷つけること。この場合、盾は仕事を果たせませんでした、矛は役目をばっちり完了しました。ちよつとでも傷がつくなら、その矛投げ続けたら、両方壊れるってことです。盾は壊れちゃダメですが、別に矛は壊れようがなにしようが、相手をこわせりゃ勝ちなんですわ」

『ん……ん?』

「つまりですね、防衛側つてのは、100%の保全が目標なんであって、損失が出たらその時点である意味負けなわけです。それで、防衛側は撤退できません。攻撃側は好き勝手暴れて好きな時に逃げりゃいいですが、砦が退いたら、その時点でもう負けなんですわ。もちろん退かずに玉砕しても負けですよ。防衛側の方が明らかに敗北条件を満たしやすくて常に不利なんですわ」

『……その通りだ』

「有利な状況で勝ち続けるのと、不利な状況で勝ち続けるのと、どっちが価値ありますか  
ね?」

『……価値、だと?』

ガッツ星人が、不思議そうに聞き返した途端、ソガは狂ったように笑い声をあげる。そして、泣き笑いながら、たちまち大きな声で思い切り唾を飛ばして吐き捨てた。

「強いとか弱いとか、そんなちやつちい次元で戦つとんちやうねん!! 守る為に戦うもんは、強いわけでも、弱いわけでもない!」

ソガという男は馬鹿だ。だから、滅茶苦茶だ。

「ええか!? 何かを守って戦う奴はな!」

ソガという男は滅茶苦茶だ。だから、狂っている。

「尊いんじや!」

ソガという男は狂っている。だから。

「お前らなんかと戦うまでもなく、最初っからセブンの勝ちじゃボケエ!」

## セブン抹殺計画 第六段階

呆気にとられたように動きを止めたガッツ星人達は、またしても互いに顔を見合わせで、相互認識のすり合わせを素早く行った。

即ち、目の前の地球人の言葉を理解出来なかったのは、偶々、自分という個体がエラーだったという可能性を排除する必要があったので。

そして、誰一人として思考経路に問題が無い事を確認してから、ソガに返答をよこす。  
『貴様の理論は支離滅裂だ』

『戦闘行為を行わずして勝敗が決するなどありえない』

「……あのですね。前提条件をしっかりとらせておきたいんですけど……アナタ方は『勝ちたい』んですか？ それとも『強者でありたい』んですか？」

『勝利した者こそが強者だ！』

「じゃあ、強者として振る舞いたい、という事で……おK？」

『……そうだ、我々の強大さを、全宇宙に知らしめる事こそが、絶対の使命だ』

「まあ、セブンを倒して名を上げようってんだから、そうだろうと思っただけさ……」

その返答は、ソガにとっては予想通りだったらしいが……

「あーあ！ もう全然ダメやんか！ なーんも分かってへんわ！ 閉廷！ 解散！ 残念ですが面接は以上です」

『待て、理不尽に我々を否定する事は許容できない。説明を要求する』

「説明も何も。俺はね？ あーやつぱりガッツ星人強すぎるわと、敵ながらアツパレ！

それでこそガッツ星人やと感心してたわけ。引き分けとかならいざ知らず、セブンを相手に完全勝利を成し遂げるような強敵は、後にも先にもガッツ星人ただ一人！ セブンの戦った敵の中で最も強大な敵たり得たのは、それはガッツ星人においては他にはいないと！ そう考えとったわけですよ！」

『ホ……ホウ？』

「ところが！ 蓋を開けてみればどーですか!? とんだ肩透かしもええところ！ ガッツ星人がこんなに軟弱な敗北主義者だったとは！ ぶつたるんどる！ ガッツを出せ、ガッツを！」

『なんだト!?』

「自分達がいっただいどういう戦い方をしたのか、そのスーパーコンピュータ顔負けの天才おつむで、もっぺん考えてみたらよろしいわ。ええか？ まず、怪獣を捨て駒にしてセブンの性能を丸裸にします。次にセブンに対して最も有効な戦術を組み立てます。極め付けには、万が一にも負ける可能性を無くす為に、先にセブンの味方をボコボコに



した上で、地球人を人質にします。……完璧か!? もうこれは蟻の這い出る隙間もない程完璧なんよ! ぼくのかんがえたさいきょうの地球侵略以外の何者でもない! 誰がここまでしろと言った? 宇宙一の策謀家の名声を欲しいままにせんと気が済まんのか? 頭にちっさいチブル星人載ってんのかい! これで勝てねば貴様は無能だ!」

『ま、マア……当然の事だ』

罵声を浴びせたのか、それとも持ち上げたいのかサツパリ分らない文句を聞いて、ガッツ星人は面食らいながらも、僅かに満更でもなさそうに喉をならした。

男の言葉は、語気の荒さを考慮しさえしなければ、明確にガッツ星人の計画を褒め称える内容であると気づいたからだ。

攻め入った星の住人から、それも完全に屈伏させる前の者から純粋な称賛を浴びるといふのは、ガッツ星人をして初の経験だった。

これで、ガッツ星人の強さに対し、第三者からの正当性が得られ……

「だから駄目なんよ!」

『どうしてそうナル!?!』

あまりの驚愕に、ついつい吼えてしまうガッツ鳥。

「あんな? メタを張る……つまり相手を研究して、傾向と対策をしつかり立てるとい

う行為はな？ ……【弱者】の戦い方やねん!!」

『…………?』

「普通に真つ向から挑んでも勝てへんから、弱点ついたりするんで……相手を研究しようとした時点で、その相手を強者と認めて、自分をその下に置く行為に他ならんわけよ！ わかる？ 相手の動きを封じて、出落ちを狙うつてのはなあ……」

ソガは、溜めに溜めて、ずっと言つてやりたくて仕方なかった特大の爆弾を落つことしてやった。

「俺と… やつとる事が！ 同じやねん！」

……つまりはそういう事だった。

彼はずつと、侵略者や怪獣といった、明らかな格上に対して、原作知識というチートを使使しつづつ、まさに手段を選ばず戦ってきた。

……と同時に、それが決して誇れるような事でもないと自覚もしていた。

セブンやウルトラ警備隊が、絶対に使われないであろう汚い手をとつた事も、一度や二度ではない。

ただそれは偏に、それらを食らわせるべき相手が強すぎるから、死に物狂いの中で手段を選べないのであつて。

ましてやその結果で得た勝利を、誇つた事など一度もなければ、下した敵よりも自分

が上等だなんて吹聴しようとしなかった。

彼にとつて、真に誇るべき存在は、大いなる正義の為に、素面で命を懸ける人々だけであり、自分のような小手先のカンニング行為が許されるのは、彼が身を投じる戦いが、生きるか死ぬかの生存競争だから……という事に他ならない。

勝つ為には手段を選ばない……戦いに臨む上で最も正しい在り方。

しかし、手段を選ばなかった時点で、勝利を誇る資格は決してない。

それが、彼の信条だった。

泥臭くて薄汚い、弱者なりの矜持であつた。

それなのに……自分と同レベルの行いをしている者が、こともあろうにあのウルトラセブンを、彼の大事な友人を槍玉に挙げて、その尊い精神の気高さを踏みつけ、嘲笑つたのだ。

彼は、ガッツ星人がただ純粹な勝利と実利だけを追い求めた結果として、このような方法を採用したなら、同意とともに深い領きを返しただろう。

だが、そこに付随する名声や栄光までをも欲する事だけは、決して、許しておく事が出来ないのであつた。

尤も、それだけではない。

警備隊の激務からくるストレス。死と隣り合わせの戦場に身を置く狂気。容易くこ

ちらを踏み潰してしまう巨軀への根源的な恐怖。そしてソガという男に対する責任。

いくら、外見の器がそうあれかしと誂えられていたとは言え、もとは単なる一般人に過ぎなかった男が、耐えられるものではない。

彼の精神はとつくに摩耗し、限界ギリギリだったのだ。

溜め込みに溜め込んだ、あらゆる負の感情が、吹きこぼれる寸前の鍋の如くシユンシユン湯気を立てていたのが、仲間達との軋轢や、ささいなミスとして表出化しはじめていたところへ……

不運にも彼らはやってきてしまったのだ。

なんなら、最悪のタイミングであった。

超特大のストレスとして、モロボシ・ダンへの後悔を自覚し、最大限に恥じ入った直後だったのだから。

端的に言って、ソガは、完全にブチギレてしまったのである。

「わかる？ セブンはな？」ただでさえ凄まじい縛りプレイ中なの。デュワつと放った光線が、敵に避けられた時、後ろに俺達がいたら大惨事不可避。そうでなくてもビルに掠っただけでバカヤロー案件なわけ。いちいち攻撃の度に射線も考えなきやいけないし。宇宙の平和を守る者として相応しい立ち振る舞いも要求される。平和は守る、ルー

ルも守る。両方やらなくっちゃあならないってのが、正義の味方のつらいとこだな。

……ところがどうだい、おたくらは？ 適当に撃ったミサイルが、セブンに当たろうがホークに当たろうが、街に着弾しようが、なんなら山に落つちて木一本燃やすだけでも戦果アリだ。地球に損害を与えた事には変わりない。とんだイージーモードもいとこころ！ えーマジ？ イージーモード!? キモーイ！ イージーモードが許されるのは、小学生までだよねえ!」

『イージーモード……?』

「セブンは凄まじいハンデを背負った状態で戦ってるんだから、そのセブンとイー勝負してる時点で、そのハンデ分負けとんねん!」

『何っ!? 我々は決して、接戦を演じているわけではない! 見ろ!』

ガッツの指差す画面の中では、彼らの狩りが大詰めに入るところであった。

幻影に対してワイドショットを連発したセブンは、まさに疲労困憊といった様子で膝をつき、その額では緑色のビームランプがゆっくりと明滅している。

これが、警備隊員の装備であるカラータイマーの点滅であればまだしも、この時のセブンは、そのような物は有していない。

彼のランプはまだ、単なるエメリウム粒子変換機構でしかなく、そこに供給される太

陽エネルギーの量が既定値に満たない瞬間が発生した為に、機能不全に陥って、発光つまり変換が出来ないでいるのだ。

エメリウム粒子は、決して攻撃の為だけのエネルギーではない。効力を調節すれば、他の生命を活性、正常化できる事からも分かる通り、本来は肉体に正の作用を齎すものである。

これを自前で精製する能力が、同族の中でも極めて高いからこそ、セブンは地球人に憑依する事無く、地球人の姿を保ち、環境の異なる星に長期間滞在できるのだ。

つまり、セブンの肉体構成において重要な位置を占めるこの粒子は、額から常時産出されなくてはならないものであり、この精製が阻害される事は紛れもなく異常な事態。

カラータイマーは点滅する事で活動限界を知らせ、エネルギーを最低限度保持するストップの役目を果たすが、今のエネルギーランプはいわば電池切れや接触不良で、本来想定されていない動きをしているに過ぎない。

それは、彼のエネルギーが底をついたというサインであり、もはや戦闘力の枯渇どころか、これ以上闘えば生命維持すらも危ういという事である。

『アユ……ワ……』

セブンの限界を見てとつたガッツ星人は素早く、次なる段階へ、即ち追い込みからトドメを刺す為の行動へシフトチェンジする。

これまでガッツ星人は、幻影やバリアで、敵の攻撃を躲し続け、光線を反射する程度にしか手を出していなかった。

セブンが息も絶え絶えになっているのは、躍りになって全力を出し続けたせいであり、それは『自業自得』というものだ。

だが、これからは……違う。

二体に分身したガッツ星人は、これまで量子的な揺らぎの最中にあつた自身の体を、観測強度を強める事で完全に空間へ確定化。実体化した脚部で蹲るセブンを思いつきり蹴り上げた！

鱗に覆われた趾あしゆびで腹部を下から蹴撃し、今度は踵落としての要領で振り下ろし、鋭く尖ったけづめで彼の肉体を切り裂いていく！

ヘビクイワシの如き、猛烈なピストンキックの連打！ セブンの躰がかち上げられ、よろめいた先でもう一体からの強烈な蹴り返し！

二足歩行で肥大化した巨大な頭部を支え続ける事で、非常に発達した強靱な足腰から放たれる足技で、セブンを左右からお手玉してしまうガッツ星人。

エネルギー不足と深刻な肉体ダメージで、セブンがその場から一歩たりとも動けなくなった事を確認すると、ガッツはその両目からワイヤー状のビームを放って彼を雁字搦めに拘束してしまう。

そうして万が一の可能性すら排除した上で、彼らはセブンに敗北という概念を粒子状にしたものを叩きつけるのだ。

彼らが丹精込めて塗布した、敗者のレットルは、予め準備していたガッツ星人お手製の、強化ガラスのように煌びやかでかつ強固な拘束具と適合し……亜空間から呼び寄せた透明な十字架に、セブンをすっぽりと収めてしまった。

自身の下した強者というトロフィーを、ショーウインドウの中で踊るマネキンのようにしてしまうこの納棺作業をもって、ガッツ星人の勝利が確定する。

嗚呼——卑怯と言うなかれ。ガッツ星人は粗にして野だが、卑ではない。

今回は偶々、その目標となったウルトラセブンが搦手にすこぶる弱かったが為に、このような迂遠な手を使っただけであり、肉体が貧弱な訳でもなければ、敵を甚振って喜ぶ趣味がある訳でもない。

ただ、こと戦闘という部分において……ただひたすらに容赦が無いだけだ。

強さを貴ぶガッツ星人は、戦闘という格付け行為を絶対視すると同時に、ある意味神聖視しているとも言える。そこで手を抜くという事は、相手に対する最大限の侮辱にも等しい行為であり——仮にも最強たるガッツ星人の相手に相応しいと、他ならぬ自分達が認めた相手なのだから、全力をもって相手をする事こそが、対戦者に対する最上級の賛辞であり礼儀なのだ。



彼らが求めるものは単なる勝利ではない。ガッツ星人の経歴を飾るのは、その全てが、圧倒的で鮮烈な勝利でなくてはならない！

対等な土俵に立つての辛勝など、全くもって意味が無く、誰もが認める強者を、手も足も出ない程完膚無きまでに叩き伏せてこそ、初めて勝利と言えるのだ。

そうガッツ星人は、戦鬪に対して呆れる程真摯であり続けただけである。

その結果として、常に最大効率のオーバーキルを信条とするようになったただけの話だ。

それを……

……この地球人は。

『ドウダ、せぶんノ、敗北ガ、今マサニ確定シタ！』

『気分はどうだ地球人これでもまだセブンの勝ちだと言い張るつもりか』

決定的な瞬間を見せつけられた男は、やがて口を開いて――

「それがどうした！」

またしても呆気にとられるガッツ星人。

「いいことを教えてやろうか、ガッツ星人。この世で一番、強い台詞……つまり宇宙最強の言葉をな。それがどうした、だ。ほう確かにセブンが負けたらしいな……それがどう

した？ 日本では……あ、いや地球では、こういう言葉がある……『試合に負けて、勝負に勝つ』というんだ。今、セブンは試合には負けたようだが、勝負には勝った。奴は諦めず逃げないで最後まで戦って、負けた結果……望むものを二つ手に入れた。すなわち、ガッツ星人は正面からではセブんに勝てないので、小賢しい策を弄するような弱小種族であるという情報と……人質として俺を拘束しておく必要が無くなった、という事だ」

『いや、それはない』

「なんだと……？」

『貴様を解放すると、セブンの生存確率が0.7%程上昇してしまう。セブンの処刑が完了するまで、貴様にはここにいてもらう』

「……は？」

ソガは、致命的な失敗を犯していた。

活躍しすぎて星人に目を付けられないように気を配っていたつもりでも、ガッツ星人の目は誤魔化せなかったという事だ。

忽ち彼の顔に焦りが浮かぶ。

「それは……困る」

『ホウ……』

……命乞いか。

目の前の生物が、全く理解しがたい存在なのではないかと、言い知れぬ不安を抱きかけて——ガッツ星人にソナ感情は存在シナイ！——いたところへ、ようやく分かりやすい、それもある種でガッツ星人の求めていた反応が返ってきたので、人心地つけた。

大抵の星は、ガッツ星人が圧倒的な力を見せつけければ、容易く屈服してきた。そして、それが最も賢明な選択なのだから当たり前であるとも。強大な存在の庇護下に入る事は生存に置いて、非常に重要な事であり、ガッツ星人は庇護下の存在にはそれなりに寛容であろうとしている。それが統治において最も効率的であると同時に、強者たる者のふるまいだと理解しているのだ。

彼らが他星への挑戦時に、その標的とする者以外の命、特に民間人や、ガッツ星人の相手にすらないような戦士の命を徒に取らないのも、そういった考えからである。

いずれ、自分達の所有物となる資源を、なぜ自分達自身の手で浪費しなくてはならない？ それは馬鹿のやる事だ。

……尤も、反逆するのであれば、別であるが。

この男もようやく軍門に下る気になったか。さあ、吐け。自身の保全の為に。今までが無礼も、こちらを上位だと認めるならば、許してやらん事もない。言うのだ『地球をあげます』と！

男の口がよく回るように、ガッツはわざわざ水をむけてやった。

『なぜ困るノダ……?』

「ここにいと、円盤ごと隊長達に吹き飛ばされるので……死にたくありません」

『……ハ?』

「唐松インコと犬死には……いやーきついっす」

三度、ガッツは顔を見合わせた。

そして、今度は努めて優しく……理解力の乏しい難か何かへ語り掛けるように、確認を取った。

『貴様、自分の状況が分かっているのか?』

「状況……?」

『貴様が乗っているのは、ただの拘束具ではない。我々の操作ひとつで、自由に電流を流す事が出来る。拷問具であると同時に、処刑台なのだ。いつでも貴様を殺せるノダゾ?』

「……それが? どうしました?」

『貴様さては……馬鹿ダナ?』

『ウルトラ警備隊の脅威度を三段階下方修正』

「いや、その機能を使う必要ないっしょ?」

『貴様がこれ以上、舐めた事を言えば、すぐに口を塞ぐ必要がある』

「いやいや！ あり得んでしょ！ 事もあろうに無敵のガッツ星人が？ 俺を？ 殺す

？ いやないない。だって、それって、俺に対して負けを認めるって事だよ？」

『なに？』

「だってさ、ガッツ星人が怒るってことはさ、俺の言ってる事が凶星だってことでしょ？

というか万が一凶星であつたとしてさ、本当の強者だったら、そんなの気にしないよね？ だって『無敵』なんだもんね？ それはどんな侮辱にも耐えうる強靱な精神を持つてるってことでさ……よりによつて、銀河最弱の野蠻人たる地球人ごときの言葉に心がささくれ立つとか、あまりにも雑魚すぎるでしょ。いや、俺の知ってるガッツ星人は、そんな事しないね。獅子は兎を殺すにも全力とか言うけど、それは満足に狩りのでさくない飢えたライオンで、本物はハーレムの頂点として寝てるからね？ ライオンの周りで虫が鳴いてても怒ったりする？ いや人間でもしないわ、むしろ地球人は、秋の音色として虫の声を楽しむ余裕すらあつて、つまりそれはガッツ星人よりも精神的に超越してるってこと？ 怒るってのはさ、『負け』なのよ。分かる？ 分かれ。そんなに殺したきや、さつさとやれよ。セブンにすら勝った相手がそんなちやつちい器だとは思わんかつたけど……」

『グウ……』

宇宙には、命乞いをしつつ、敵の油断を誘う手合いもいる。シャドー星人やプラチク星人の潜入部隊がよく使う手だ。そのような手合いも、鎧袖一触にしてきたガッツ星人も、よもや自分から死にたがるような相手は初めてだ。

ほとほと対応に困ってしまった。

「その上で言わしてもらいますけど、俺を攻撃した瞬間、俺達の間で戦闘行為が発生したことになって、つまりはガッツ星人は地球人と同等だと、そういうことになるんですわ、戦いつてのは同じレベルの者同士でしか発生しないわけでき。そんな雑魚相手に、地球人が負けを認めると思う？ いや思わないね。だって、俺はウルトラ警備隊の恥さらしとか言われるくらい弱虫なんだけどき、その俺ですら負けを認めてないのに、いわんや他のみんなはどうよって話なんですわ。」

『貴様……やはり馬鹿ニシテイルナ？』

「馬鹿にしてるだって……？ 滅相も無い！ だってあのセブンが手も足も出ない作戦を考えられるって事はすげえ賢いってことじゃん？ そもそも、絶対に勝てる弱つちい相手にだけ戦闘を仕掛けるってのも、だいぶクレバーだと思うし、あんなつよつよバリア持つてるのに、地球人が怖いから万が一にも負けられないように人質とるってところも、オレは心の底から尊敬してるよ。それオレの一番好きで得意な戦法だもん」

口を尖らせて、非常に悔し気に言い放つソガ。まさしく本心から言っているのである

うことは、ガッツ星人でなくとも見て取れる。

「でもねえ、流石にこんな手は思いつかなかったね。なにせ、自分達より圧倒的に劣る存在に支配される事が確定するなんて、そりゃあ屈辱的です。ここまで敵の心を的確に折る事ができるってのもないんじゃないかな。だって、地球人の方が強者なのは確定的に明らかなのに、戦う前から不戦勝決められちゃうんだからなあ……流石だなあ……オレつてさ、仲間内で臆病者とか卑怯者とかめっちゃめっちゃ言われるんですけど、そのオレですすら思いつかなかった！ いやあ、凄いや、脱帽だわ。いやまてよ？ つまりガッツ星人はオレ以上の臆病者であり卑怯者……つてコト？」

『待テ、ソレハ、聞キ捨テ、ナラン』

「え、でもオレが防衛軍で臆病者って呼ばれてるの知ってるよね？ オレのコト調べたんだもんね？」

『確カニ、ソノ情報ハ、アル』

「じゃあ合ってるよね？ ん？ ああー！！ しまったあー！！ あの勇猛果敢、常勝無敗、戦場の魔術師ガッツ星人を？ こともあろうにオレなんかと同列に扱ってしまつたあー！！ こんなことしたらオレ、殺されちゃうんじゃない？ あーでも、別にそれもいつかあ。そしたらオレの『勝ち』が確定するわけだもん。ガッツ星人は一生オレに勝てないわけか。こんな弱者に負けるなら、死んだ方がマシだもん。あーあ、普通

に戦えば普通に勝つただろうに、わざわざ自分達で自分達の戦いに泥を塗るなんて、ガッツ星人哀れすぎん？ ああガッツ……かわいそ……なんでガッツすぐ負けてしまふん？ ううう……アアンマリダア……！ それもこれもガッツが足りなかつたばかりに……シクシク……」

拳句の果てには泣き真似までする始末。

ここにもし地球人を連れてきて彼の様子を見せれば、それが例えアマギでなかつたとしても「あ、こいつ楽しんでやがるな」という事が分かつた筈だ。

それぐらいには、調子に乗っているソガ。

彼とて、余りの怒りと勢いで『ガッツ星人に喧嘩を売る』という自殺行為を行った事に気付いた時にはもう遅く、文字通りサアつと血の気が引いた。

しかしそれで逆に冷静になってしまい、ふと改めて状況を鑑みた時に……こう思ったのだ。

「これもしかして使えるんじゃないか？  
……と。」

なにせ思った以上に、彼の挑発へガッツ星人が食いついてきたのがいけない。

意外外の僥倖だったとすら言える。



そして、とつくにソガの中では「適当に騙くらかして、打開の糸口を見つけよう！」という段階から「多分これ騙せるわ」へと意識がシフトチェンジしていた。

あのガッツ星人を、単なる地球人が口先一つで欺こうなどと……画策しただけでも、とんだ思い上がりとしか言いようがなく……確信したというならば、それはもはや、舐めている。

ガッツ星人の嗅覚と指摘は正しかった。

彼は、ガッツ星人の『戦い方』を馬鹿にしていたのではなく……『ガッツ星人を』馬鹿にしていたのだ、心の底から。本気で。

本人的には無意識であつたが。

惜しむらくはただ、ガッツがテレパシーを使わなかつた、否、使えなかつたばかりに、その両者の間にある微妙な違いが分からず、勘違いを加速させてしまった事であろうか。

もつともらしい顔で、正論という棍棒を振りかざす野蠻人が、心の中では舌を出して嗤っている事がバレていたら、ソガは確実に死んでいただろう事は間違いない。

ではいつたい、その謎の自信はどこから来たのかといえは……

生き物とは常に、心の赴くままに暴力を振るつても構わない『弱者』を、隙あらば見つけようとするものである。

相手の反撃できない位置から、一方的に他者を好き放題貶めるといふ行為ほど、人が夢中になれる娯楽はない。

好き好んで他者の揚げ足をとっては、散々悪し様に言う事にかけて、銀河でも地球人の右に出る者はいないだろう。

まさしくソガも、そう言った行為において天下一品の腕を持つ人種の一人であった。

だが、彼は善良な小市民であったから、普段はそんな経験はやりたくてもできやしない。

ところが今回、事もあろうに自分が決して敵わないような強大な存在、それも超有名な大物悪役相手にそれができるとなればどうなるか。

ソガの脳内では、ただでさえ生命の危機に晒された事でアドレナリンがドバドバと放出されていたのに、そこへ間欠泉のようにドーパミンが噴出し、際限なく降っては湧き、降っては湧きを繰り返す事で、たちまち頭の中が脳内麻薬のナイアガラと化した。

メトロンの毒タバコなど、比ではない程の中毒性をもって、かつてない興奮状態に陥るソガ。

これが普段であれば、臆病で小心者な性質が鎌首をもたげ、『死にたくない』という理性が歯止めをかけるのだが……

そんなブレーキは、とつづくフルハシが力任せに振じ切ってしまったので、もう止まらない。止まらない。

クレージーゴンもかくやというべき無敵の暴走特級がここに爆誕した。

あとは秒速700キロで突っ走れ。

「セブンを拘束して即勝利とはとんだ腰抜けの集まりじゃのう、ガッツ星人。リーダーがリーダーなら……それも仕方ねエか……!!」

「ガッツ星人」は所詮……先の時代の

「敗北者」じゃけエ……!!」

いくら虫けらのさざめきといえど、流石に堪えるのが辛くなってきた宇宙人。

ハアハアと、興奮で息を荒げだしたガッツが震えた声で問う。

あまりにも今の一言は、聞き流すには強烈にすぎた。

『敗北者……ダト……?』

「あん?」

『取り消せ……!! 今ノ言葉……!!』

「ハア? アンタ馬鹿ア?」

口の端をひんまげて、これでもかと憎たらしい顔を披露すると、一息で捲し立てる。

「取り消せだと……? 断じて取り消すつもりはない……!」

『ツ!?!』

「そりゃあそうだろうが? 地球の守護者セブンに阻まれ『地球の支配者』になれず終いの、永遠の敗北者が“ガッツ星人”だ。どこに間違いがある……!?! 無敵、無敵と配下に持て囃されて……闇討ちまがいの茶番劇で銀河にのさばり……何十年もの間、ガッツ星に君臨するも『勝者』にはなれず……何も得ず……!! 終いにやあ自分達でそれも眨め……!! オレに言わせりや、たかが雑魚の惑星相手に睨みを利かせたぐらいで“無敵”気取りとは笑わせる……!! 実に空虚な人生じゃありませんか? 宇宙人は正しくなけりやあ、生きる価値なし!! お前ら侵略者に生き場所はいらん!! “ガッツ星人”は敗北者として死ぬ!! スペースデブリにやあ詠え向きだろうが!」

溜まりに溜まった鬱憤を潤滑油にして、ソガの頭脳と舌の根が普段より数倍の滑りを獲得し、凄まじい勢いで回転を始める。

マシンガンのように噴射した持論と罵詈雑言が、雨あられとガッツ星人に降り注ぐこと矢の如し。

まさに立て板に水。

あまりの勢いに、頭でつかちな星人は、豆鉄砲を食らったような顔で立ち尽くすばかりだ。

「あの、なんだろう、とにかく侵略者がイキるの止めてもらっていいですか？」

星人の優れた聴覚がそれらを一言一句聞き逃さずに捉えようと、圧倒的な理解力でもって中身を吟味し始めて、それに対する正しい返答を考え始める宇宙鳥人。

ソガが何かの言葉を投げかける度に、どんどんと人数が増えて、あーでもないこーでもないと別人格が議論を紛糾させていくガッツの脳内会議。

ガッツ星人の権謀術数は、あらゆるデータを根気強く収集し、それらを慎重に検討した上で、熟慮に熟慮を重ねた事によって発揮される。

故に正確無比で、恐ろしいまでに非の打ちどころのない計画が実行された時、その標的にされた者は、もはや何人たりとも逃れる事は出来ないのだ。

「こんな作戦考えられるなんてかしこいね♪ 死ねよ。雑魚インコがよ。しかしその計画力、誉高い」

そんな高度な知能を持つガッツ星人であれば、目の前の男の理論が、どれもこれも微妙に破綻しており、敢えて取り上げるべき実のある話ではない事など、いずれ分かるだ

ろう。

しかし……その答えを出すには余りにも時間が無かった。

情報をよく噛み締めて、吟味し、じっくりと考えるには、ソガが有り得ないくらいに喧し過ぎたのだ。

「僕の彼女というか妻というか細君というか奥さんは、プロテ星人ですら勝てなかったくらいに圧倒的強者？　といますか？　もはや宇宙最強なんですね。だって彼女は戦闘員でもなんでもない身であるわけでして、でもスパイより強い。可愛いは正義という人いっぱいいますけど、じゃあなんでつていうと、僕を愛しているからなんですって。キミにはそういう人います？　まだ？　じゃあソガクンの方が強いですよね」

彼はもう随分と気持ちよくなって、その場で思いついたある事ない事を好き勝手に吹聴するだけで良かったので、ガッツ星人の情報処理能力を完全にパンクさせる事に成功した。

恐ろしい程に硬度の高い暗号文を入手したと思い、非常に有能な暗号解読のエキスパート達を総動員して、ようやくと解読に成功したと思ったら、それが単なる薩摩弁の恋文であった時、人はそれをなんと呼ぶだろうか。

……徒労だ。

たった一枚の手紙へかかずらわっている間に、彼らの貴重な時間が浪費されて、より重要な議題をスルーしてしまったのと同じ事が、ガッツ星人にも起こっていた。

なにせ、ソガのふっかけた議論に最初から中身などないのだから。

「今のままではいけないと思います。だからこそガッツは今のままではいけないと思っ  
ている」

ガッツ星人の、妥協を許さぬ完璧主義的な在り方が、今回ばかりは仇となった。

全ての物事を多角的に考えて、最適解を導こうとするガッツ星人の目の前で、未だに得意顔のまま講釈を垂れ続けているのは、ただの地球人ではなく……ソガなのだ。

話の中身や情報の確実性よりも、相手を言い負かす為の膨大な文量と、勝ち誇らせる暇をも与えぬ返信の瞬発力こそがなによりも最重要視される、平成・令和の厳しい情報社会の中で培われた感性を持つ男。

それが彼だ。

よりによってこんな男に、そんな宇宙人の相手をさせるなど……

まさしく『役不足』というものだろう。

これがゴドラであれば、残忍な高笑いと共に、忽ちソガを縊り殺していただろう。ちやぶ台の向こうにメトロンが座つていれば、鼻で笑つて、とりあう事も無かつた。なんなら、ウィットに富んだジョークの一つでも切り返してきたかも知れない。

お堅いペダン軍人を侮辱しようものなら、拷問だ！ とにかく拷問にかけろ！ となつた筈で。

ペガツサやマゼラン星人？ よしてクレ、野蛮人と話を通じる等と思われタラ、こちらの程度が知レル。

だが、ガツツ星人は非常に思慮深く、挑戦者に対してどこまでも真摯である。

鷹の如き気高さと獍猛さを、梟の瞳のように透徹した知性で覆い隠した、銀河に羽搏く猛禽。

それがガツツ星人だ。自他共に認める戦人。

……ところが、このソガにとってはそうではない。

ガツツ星人にとつては非常に運の悪い事に……彼の中では、既にガツツ星人の格付けはとつくの昔に終了していたので、いくら策を尽くそうが、その順位が変動する余地は全くなかつたのである。

……そんなわけで、いかに宇宙広しと言えど、よもや無敵と名高いガツツ星人に、あろうことか口喧嘩を挑んで来る愚か者など、皆無であつた。



だから、これは彼らにとって初めての経験で、全くの未知との遭遇であったのだ。  
雑な言い方をしてしまえば……

ガッツ星人は種族単位で、致命的なまでに、レスバに弱かったのである。

「というわけで、キミ達が人類に勝利することは、残念ながら、無理です。はい論破。証明終了QED！俺の勝ち！何で負けたか、明日までに考えといてください。そしてそれから何かが見えてくるはずですよ。ほな、地球いただきます！」

如何に慎重派といえど、そろそろ限界を迎えそうなガッツ星人。

あともう少し続けていたら、数百万ボルトの電流が彼の軀を駆け巡り、一瞬で炭素の塊と化していた。

だが……

「そんなガッツ星人に、朗報があります。実は、ここからでも入れる保険があるんです！」

これをすれば、地球人として、負けを認めねばなりませんね」

『それはナンダ！』

「さつきも言った……縛りプレイです」

『縛り……？』

なんだその言葉は。

「確かにガッツ星人からしたら、地球人と正面切つて戦うなんて、とんだおままごとで

しょう。分かります。そもそも難易度が低すぎて、満足感が得られない。そんな熟練プレイヤーにこそ許された、神々の遊び、まさに酸いも甘いも知り尽くした強者に相応しい戦い方こそが、縛りプレイ！ 自分に敢えて枷を付けて、挑戦するんです！ 慢心せずして何が王か!? どうですか？ あなたの人生、せめてノーマルモードくらいは挑戦したら?」

『それは……』

「ああもう、理解が遅いなあ……分かりやすく言っただけでしょう」

ソガは、四肢を拘束されたまま、大の字ですうと限界まで息を吸い込みむと……

我々はッ!

いかなる戦いにも負けたことがないッ!

無敵の!

ウルトラ警備隊  
地球防衛軍だあつ!!

そうして、胸の中の空気を全て吐き出して咳き込んだ後、少し掠れた喉を酷使しつつ、口の端を不敵に釣り上げたソガは、ガッツ星人の瞳の真正面から睨みつけて宣言した。

「我々の挑戦を……受けるな？」

## セブン抹殺計画 第七段階

ポインターで現地へ急行したキリヤマ達。

アマギの観察眼は、地面に見慣れたブルーグレーの人影が、大の字で寝転んでいるのを見逃さなかった。

「隊長！ あれを！」

「ソガ！ ……おいソガ！ 大丈夫か!？」

「あ……うう……」

呻き声が帰って来た事に、ひとまず安心し、互いに頷き合う仲間達。

しかし、そこに倒れているのはソガだけだ。

「ダンは?！」

「分かりません……」

苦し気に呟くソガ。

『ダアアアアン!!』

フルハシとアマギの声が、泉が丘に木霊するも、返事はない……

二人は山彦のように、ソガを助け起こすキリヤマの元へ戻っていくしかない。

「ソガ、大丈夫か」

「ハイ……」

「隊長、見当たりません！」

そんな時、谷の向こう側で、なにかがゆつくりと浮上する。

夕日を反射する透明な結晶体……ガッツ星人の円盤だ！

「ハッ!?!」

「退けっ!」

キリヤマの合図と共に、一斉に走り出す男達。

その矮小な背中目掛け、ガッツ円盤から砲撃が襲い掛かる！

ソガの甘言にのせられ、まんまと彼を放り出したガッツ星人達だが、その挑戦を受ける事と、みすみす撤退を見逃すような真似は決してイコールではないのだ。

むしろ、この程度で死ぬような相手からの挑戦など、受ける価値すらない。

自分達と戦いたいならば、まずは生き延びて、対戦者足る實力を見せろという、ガッツ側からの意思表示に他ならなかった。

彼らは、戦闘においてとことんまで真摯で、かつ、容赦が無いのだ。

逃げる警備隊の周囲に、陽電子迫撃砲が着弾し、荒野が爆ぜる。

この時、先頭をひた走るアマギは、敵の攻撃が自分達をまるで追尾してこない事に気がついた。

爆発火球は前後左右へバラバラに落ちてきて、真つ直ぐ走ることもままならない。しかし、自分達の進路とは全く関係の無い場所への着弾も多いのだ。

人類より遙かに優れた科学力を持つ、百戦錬磨の侵略者が所有する兵器にしては、半数必中界……つまり集弾率があまりにも疎らに過ぎる——それこそ彼は、先の空中戦において、レーザーバルカンをたつた一度、それもほんの挨拶程度に斉射されただけで、乗機たるホーク3号を撃墜されたのだから、その恐ろしいまでの射撃精度を身を持って知っているのだ——なのでこの攻撃は、わざと散布角を広くとり、偏差修正を行わない、面制圧を目的としたパターン射撃に違いないと推測した。

……ならば！

アマギは、自身から数メートル先の地面が盛大に爆ぜたのをこれ幸いに、たつたいま耕されたばかりの地面へ目掛け、まるで真昼の流星を思わせる見事なフォームで飛び込んだ！

少しばかり先行していた彼の長い足ならば、そこからさらに僅かばかり進んだ先へ見える、より安全な稜線の向こう側まで逃げ込めただろう。

だが、衰弱したソガを庇いながら後方を走るキリヤマとフルハシは、恐らく第二射へ

間に合わない。

一人で安全圏へ退避するくらいなら、自分自身が道標となって、比較的安全な避難場所を教えた方が、部隊全体の生存率を向上させられる。

単砲による同時射撃下では、同じ場所へ弾が落ちる可能性は限りなく低い……なんて、あくまで確率論的な気休めではないが、それでも、盛り上がった周囲の土を遮蔽と出来る分、蹲って投影面を減らした方が、直立しているよりずっとマシだろう。

アマギの背中が、簡易防空壕へ逃げ込むのを見てとると、フルハシの行動は早かった。負傷者との下手くそな二人三脚を一方的に切り上げるや、キリヤマの肩から半ばひつたくるようにソガを取り上げて、その背中を渾身の力で前方へと押し込んだ。

「ウ、ウ、ア、ア!!」

もはや聞き慣れてしまった情けない悲鳴が、アマギを飛び越し、砂丘の向こう側へもんどり打って倒れ込むのをしっかり見届けると、今度は足元で蹲る瘦身の隣へ駆けつける。

このお利口な後輩が、ここだと言うんだから間違いない。先ほどソガを放り投げた先を除けば、そこが一番安全なのだ。アマギか隊長の言う通りにしていれば、死ぬことなんて有り得るもんか。

恐れ知らずの怪力自慢は、一切の疑問なく出来たての窪地へ身を伏せると、その巨体

で瘦せつぼちの天才を肉布団で隠すように覆い被さった。勿論、彼が受け持つのは敵へより近い左側。

そうしてぼつかり空いた、着弾痕の右側スペースへ向かつて、キリヤマが走る。

先に伏せていた二人の背中を、私はここにいるぞと言わんばかりに撫でつけながら、アマギの右脇へびつたりと寄り添った。

彼らの周囲へ、二度目の砲撃が降り注ぐ。

亀のように身を縮こめて、それをやり過ごす警備隊。

この時、ソガがもしも生粋のスナイパーであるならば、部隊から離れた位置で敵の射点を確認し、再移動のタイミングを知らせる役目を果たせたかも知れないが、今の彼にそんなマークスマンじみた行動をとる余裕は微塵も無かった。

フルハシに助け起こされながら、死に物狂いで走る。走る。

彼らが、負傷者を抱えながら無事に切り抜けられたのは、非常に運がよかったからに他ならない。なぜならガッツ星人の撃つていたのが……単なるデブリ排除用のイオンモーターでなければ、こうはいかなかっただろう。

ガッツ星人は、逃げ惑う小目標を撃つという機会が全く無かったので、円盤に対人火器を装備していなかったのだ。その必要も無いと言うべきか。

そもそも、僅か百数センチ程度の大きさしかない生命体が、ガッツ星人の対戦者に選



ばれる事自体が稀であり、そういった種族は往々にして、巨大機動兵器か超射程高火力の粒子兵装で武装しているものである。

歩兵が携行兵器を用いて、それも目視可能距離で交戦するなど余りにも原始的で野蛮極まりない。

そんな相手をフュージョンブラスターで薙ぎ払ったりする事は、如何に容赦の無いガッツ星人と言えど躊躇われた。慈悲や配慮でもなんでもなく、彼らの矜持が、それを許さなかったのだ。

それこそ、ホークを撃墜したレーザーバルカンで機銃掃射でもしていれば、忽ち警備隊は、塵も残さずこの宇宙から蒸発していたハズである。

地球人にはこの程度で充分だろうという、無意識の侮りが、彼らから害虫駆除の機会を奪った。自身の逃がした生命体が、どんなに危険な毒虫なのか、ガッツ星人はまだ知る由も無い。

「全車突撃！ 警備隊の撤退を援護せよ！」

「射程に入り次第、順次発砲！ こちらに注意を向けさせるんだ！」

「彼らを殺させてはならん！ 撃てええ!!」

間一髪、到着した特車部隊が一齐に攻撃を加えつつ、敵と味方の間へ割り込んだ。荷台のガトリングランチャーから盛大に火を噴きながら前進していく装甲トラックの群

れ!

「みんな! こっつちよ!」

ポインターで陸上部隊を率いてきたアンヌが、救急鞆を担いで合流する。

天使の救援が間に合ったのだ。

「た、助かった……!」

「動かないで、今治療するわ……」

命からがら安全圏へ辿り着けたソガは、打撲や擦り傷だらけの体をアンヌに預けながら、ようやく一息つけた。

生身の隊員には、爆発で飛び散った瓦礫ですらも脅威だが、防衛軍の装甲車であれば、直撃を食らわない限りは、少なくとも壁の役割くらいは果たせるらしい。

ガッツ星人としても、少しでも脅威度の高そうな相手の方が満足できるので、喜んで標的をそちらに切り替えた。

死に物狂いの陸戦隊と、命中率の低い工作用装備で撃ち合うガッツ円盤。星人からしてみれば、パチンコでバツタの群れを何匹殺せるかという、暇潰しのお遊びに興じているようなものだろう。

その上……陸上部隊の放ったロケットの濃密なカーテンは、周囲の岩壁や空中に火薬の華を咲かせるばかりで、円盤に一つも着弾しないのだ!

「師団長！ 我、有効弾認められず！」

「同じくウシジマ車、手応えナシ！」

「射程や精度では敵に圧倒的優位がある！ 被弾を恐れず突き進め！ どんな武器でも、銃口を押しつけて撃てば絶対に当たる！ 全車呐喊！」

「ハッ！ 呐喊します！」

「撃てええ！」

敵に打撃を与える為に、ますます勢いを増して前進していく陸戦隊。

「あつ！ いけない！」

ソガがそれを止めようと……する前に、彼の上司が一步早かった。

「待てつ、全車停止！ 全車停止だつ！ 射撃を継続しつつ、直ちにその場で停車せよ！」

「隊長……？」

キリヤマは眉間に汗を伝わせて、真剣な眼差しで敵を見つめていた。

アマギもそれに倣って、円盤の周囲を観察すると……やがて舌打ちと共に、敵の戦法を理解した。

「畜生……何か強力なバリアを張り巡らしたんです」

「やはり……」

このまま陸戦隊が突撃を続けていけば、前衛は全速力でバリアに激突し、大破炎上してしまつたに違いない。

しかし、そうはならなかつた。

キリヤマの脳裏には、昨夜の光景が克明に刻まれていたからだ。

すなわち、あの銀の巨獣が、彼の大切な部下を逃がす為に、その身を擲ち犠牲になつてまで困役を買って出てくれた事へ、深く感謝し、そしてそれをただ見届けるしか無かつた己の無力さを恥じ、激しく後悔していたのである。

だからこそ、あの物言わぬ巨大な同志が最後に放つた、命懸けのメッセージを、キリヤマはしっかりと受け取っていたのだ。

敵が不可視の壁を自在に操るといふ事を。

「警備隊全軍に告ぐ、敵は強力なバリアに包まれている模様だ。現在位置より前へ進むな！ 順次後退せよ！」

『無駄な抵抗は止める。このまま戦闘を続ければ、君たちは全滅するだけである。地球防衛の切り札、ウルトラセブンは、我々の手中にあるのだ……』

その目前に突如、十字架型のカプセルに囚われた、セブンの無惨な姿が晒された！

「た、隊長！……セブンが！」

口を押さえ、信じられないという表情でわなわたと震えるアンヌに、ガッツ星人の宣

言がさらなる追い打ちをかける。

『地球の全人民に告ぐ、君たちの英雄セブンは、夜明けと共に処刑されるであろう!』

天文班から明朝の日の出は5時21分と報告された。  
セブンの処刑まで、あと12時間足らずしかない。

失意と焦燥に沈む作戦室。

「チキシヨー……どうしたらセブンは蘇るんだい？」

「何しろ、相手が宇宙人だからな、見当がつかない……」

「……ねえ、さつきからセブンのことばかり言ってるけど、ダンはどうなるの？ 敵に連れて行かれたのよ!!」

呻るフルハシとアマギに向かって、凄まじい剣幕で詰め寄るアンス。

思わず言葉に詰まるフルハシ。

こちらを睨む彼女の瞳には、涙が滲んでいた。

そこへ、キリヤマが静かに言葉を投げかける

「アンヌ、決して忘れてるわけじゃない……ただ、ガッツ星人が、セブンを夜明けに処刑するという意味を考えるんだ」

「だって……」

尚も言い募ろうとするアンヌに、今度はタケナカ参謀が暗い表情で諭す。

「やつらは、我々の目前でセブンを処刑し、地球人に心のよりどころを失わせようとしているのかもしれない……そうすることによって地球人は、彼らと戦う勇気を失い、服従を認めてしまうようになるだろう……」

「セブンを見殺しにはできないんだ」

あまりにも重苦しい沈黙が作戦室を支配した。

「……じゃ、ダンは犠牲になれって云うの？」

「アンヌ！……ダンは……もう殺されているかもしれない……！」

「エッ……!?!」

愕然とするアンヌ。

誰もが心の片隅で思いながら、しかし決して考えずにおこうとしていた最悪の可能性を、タケナカは敢えて断言せざるを得なかった。なぜなら……

「もし生きていたら……なおさら敵の基地を叩くことはできないだろう……」

この地球の危機において、人質まで取られていては、攻撃の意志が鈍ってしまう。

それならいっそ、ダンはまだもう死んだものとして扱った方が……タケナカはその胸中で、他ならぬ自分自身に対して唾棄した。

だが、アンヌは諦めない。

涙を拭い、キツとした表情をうかべると、部屋の隅でただ一人黙々と何かの資料を書き込んでいる男の元へ、つかつかと突撃した。

「……そうだわ！ ソガ隊員！ 貴方は敵に捕まっても帰って来れたじゃ無い！  
ねえ、何か策があるんじゃないの？ ネエ、答えなさいっつらッ！」

手許の紙をひったくって、その向こう側にある顔を下から睨めつけると……そこには、悲しみでも、怒りでもない……ただ氷のような無表情があるだけだった。

「……ッ!? そ、ソガ隊員……貴方はあんなにも……ダンと仲が良かったじゃない！  
それを……どうしてそんな表情が出来るのよッ！」

「それがなんだ……？ 奴はな……死んだよ」

「……そ、そんな……」

絶望の表情で、膝から崩れ落ちるアンヌ。

「そしてもう、俺にはそれで何かしようという気力すら無いんだ。なぜなら……これを見ろ！」

机の下で膝をつくアンヌに、追撃をかけるかの如く、ソガは自分の持っていた紙を見

せつける。

そこには、驚くべき事実が記されていた！

汚い字で書き殴られた文字列は……

《俺たちは、盗聴されている》

「……エツ?!」

「どうやって俺が、奴らのところから帰つて来たか教えてやろうか……? 無様に這い

つくばつて、命乞いをしたんだ! 勿論、普通の命乞いじゃない。あたかも、奴らにとつて面白い戦いを見せてやる気概があるような風を装おつて、防衛軍を焚きつけるメツセ  
ンジャーとして見逃して貰つたのさ! 笑えるだろうが! ええ?」

《ダンは、生きている》

アンヌが、その言葉を食い入るように見つめ、紙の端を握り混みながら震えるのを無視して、ますますソガは、自分がいかに道化じみた行為をしたのか、声を張り上げて告白した。

「でもな! セブンを倒すような相手に、俺達地球人が出来るような事があるもんか!

何か策があるだつて……?!? そんなもん、こつちが教えて欲しいよ! こうなつたら、自棄だ! もうみんなで一斉に突つ込んで玉碎戦法しかない!」

「バカを言うな! ソガ!」



「この戦いに敗れるということは、地球の破滅を意味するのだぞ！」

《ダンを円盤から助ける為には、セブンに力を貸して貰うしかない》

「じゃあ、どうしろってんです！ 俺達は負けられない。でも、勝つことも出来やしない

じゃないですか！」

「……そうだ。我々は、決して負けられない。絶対に勝つ自信がなければ、戦うことはできないんだ！」

「しかし、このままほつといたら、間もなくセブンは処刑されます！ そうなる前に……」

腕を広げて敗北主義の論説をぶつソガの前で、泣き崩れていた女性隊員が、決然とした表情で、すつくと立ち上がる。

そして、右手を大きく振りかぶって……

バシッ！

細く美しい指が奏でたと思えない程に大きな音が、ソガの頬から発された。

作戦室中に響き渡る程に。

「最ッ低!! 見下げ果てた人ねソガ隊員！ つくづく見損なつたわ！ 私たちで争っていたんじゃ、ダンどころかセブンを助ける事だって、できやしないじゃないの！」

「あ、アンヌ……」

「もう、貴方の意見なんか一切あてになんかしない！　するもんですか！　貴方は隅で、ガタガタ震えていればいいんだわ！　もう二度と口を開かないで!!」

眉をつり上げた怒りの形相でソガへ背を向けたアンヌは、歩き去る前に一度だけ、頬を押さえて驚愕する男の方を睨みつけて……

彼にだけ見えるように、小さく舌を出してウインクした。それはそれは華麗な笑顔で。

彼女は優秀な兵士であり、医者であると同時に……生まれながらの大女優だったらしい。

女の涙をダシに使った事に対しては、それでチャラにしてあげる。という事だ。

「……おみそれしました」

ジンジンする頬とは反対側を、照れくさそうに指で搔いて——周囲の者からはそれが益々、バツが悪そうに見えて迫真であったが——いると、そんな茶番が耳に入らない程に集中していた通信員のヨシダが、声を張り上げた。

「……隊長、おかしな発信音をキャッチしました!」

「なに?」

「宇宙ステーションの回路を使っていますが、ステーションからのものではありません」

「よし、録音して直ちに分析するんだ!」

「ちつきしよう、誰だそんな事をする奴あ……い！」

通信機の周りに集った隊員達は、彼らの後ろで、大きな紅葉を貼り付けてぼつねんと立つ哀れな男が、待ってましたと言わんばかりに口を吊り上げたのを見逃した。

セブン救出に心を砕くウルトラ警備隊に、また、ひとつの謎が投げかけられた……あの発信音は新たな侵略の前触れなのか……？ しかも、ガッツ星人によるセブン処刑のときは、刻々と迫っていた……明日は、我々人類の破滅の夜明けになるのだろうか……？

## 地球圧殺計画 10%

地球侵略を狙うガッツ星人は、セブンを倒すことが早道だと考え、怪獣アロンを使ってその能力を探り、セブン暗殺の計画を立てて地球にやって来た。

苦戦するセブンのエネルギーは、刻々とゼロに近づいていった。地球の平和を守るために活躍するセブンは、遂にガッツ星人の手に落ちてしまった。

そのころ地球防衛軍は、キリヤマ隊長の指揮の下に、ダン、ソガ両隊員の捜索を続けていた。だが、ウルトラ警備隊が救出したのはソガ隊員だけである。

ガッツ星人は、夜明けと共にセブンを処刑すると通告してきたのである。天文班からの報告で、夜明けは5時21分とわかった。どうしても、それまでにセブンを救出しなくては、地球人がガッツ星人に降伏するという事態が、起こるかもしれないのだ。

「……隊長、おかしな発信音をキャッチしました」

「なに？」

「宇宙ステーションの回路を使っていますが、ステーションからのものではありません！」

「よし、録音して直ちに分析するんだ！」

「そんなことをするやつあ……いったい誰だ？」

「しめたッ！ きつとダンだ！ 奴が拘束を振り切つて連絡してきたんだ！」

「えっ!？」

しかし発信音は、新たな雑音に掻き消されてしまう。

「クソッ！ 妨害電波です」

「よし！そこまでを分析室にまわせ！」

「はっ！」

「よっしやああ！ 妨害電波キター！ 待つてましたあ！」

「なに!？」

アマギが分析室に駆け込むのを見送ると、先ほどまで、あんなにも情けない事を言っていたソガが、突如として小躍りしそうなくらい喜び出した。

アンヌの平手打ちをくらつて、ついに頭がイカれてしまったのか……？

「ソガ隊員、待つていたつて……さっきの通信を？ それとも妨害電波を？」

「どっちもさ！ これでキミから引つ叩かれる必要も無くなった！ 茶番に付き合わせ  
て悪かったなアンヌ。ナイスアドリブ！」

「え、ええ……ちよつと強く叩きすぎたかしらと心配したんだけど……」

「それは、ぼちくそ痛え」

先刻の仲違いが嘘のように話始めたソガとアンヌ。

周りで見ていた一同は、その変わり様に面食らってしまった。

「待て、茶番とは一体……」

「はっ！ 実はですね。ガッツ星人は我々の会話をどうやら随分前から盗聴していたようなんです」

「なにっ！」

「奴らの円盤の中で、俺の発言がぼちり録音されていたのを、えらい自慢げに聞かされました。ガッツ星人は、セブン対策の為に情報を集め、用意周到な策を練ってきたんですよ」

「なるほど！ だからあんなに強いセブンが、手も足も出ずにやられちゃった訳か！

卑怯な奴らだ！ おかしいと思っただぜ」

「……それで一芝居打ったのか。奴らに我々が絶望して、諦めたと思わせる為に」

「んもう！ 本当に意地悪なんだから！」

「悪い悪い。やっぱ宇宙人も美人の涙には弱いと思っただけ……これで許してくれよ。なな？ なな？」

そう言って、真っ赤に腫れた横面を見せるソガ。

「お、おい！ だったらこんな早くネタバラシしちまったら、駄目じゃねえか！」

「チツチツチツ……そこでこの妨害電波ですよ」

「ふむ……なるほど、考えたな」

「……どういうこつたい？」

「さっきの通信は、恐らく牢屋から脱出したダンが、敵の通信機を使つて連絡してきたに違いありません！ 奴の事だ、何か重大な敵の秘密を掴んだのかも」

「確かにダンならやりかねない……」

「こういう時、その生存力に対して、ダンの信頼度が天元突破しているのは有難い。

ソガはニヤつく顔を、努めて冷静に保ちながら説明する。

「そんな、自分達の弱点に関わるかもしれない情報と、仲違いで空中分解寸前の弱小人類達の会話。どっちがガッツ星人にとつて重要ですか？」

「そうか、それで妨害電波を……」

「この基地に、妨害電波を上から被せて通信関係を全て塗りつぶしてしまうという事は、逆にこつちの盗聴も出来なくなるという事です。ま、奴らにとつてそんなリスクは、もはや無いも同然なんですけどね……」

「だが、そうではない。違うか、ソガ？」

「ええ、こつちの逆襲計画が奴らに筒抜けなのは、とてもマズいですから」

「……皮肉なものだな。奴らはこちらを邪魔したつもりで、自分達を妨害してしまったのか」

ソガは意気揚々と、作戦室の机へ、ずっと書き込んでいた計画書を広げた。

それはガッツ星人の立てたセブン暗殺計画の内容について。

なにしろ、彼らが語った内容をほぼそのまま記してあるのだから、信憑性はお墨付きだ。

彼はそれを、『セブンの正体がモロボシ・ダンである』という部分だけ都合良く隠して、全て公開した。

……いや、むしろ。

ガッツ星人の喋っていない部分まで、やたらと細かく補足がしてあるではないか。

ソガは、ガッツ星人の存在をこれ幸いと、自分の知っている原作知識のうち、言いたくても言えずにいたあれやこれやを、全て奴らの責任におつ被せてぶつちやけてしまうという暴挙に出ていた。

M78星雲の宇宙警備隊……？

セブンのカプセル怪獣……？

太陽エネルギーや必殺技の数々……？

ソガ、お前どこでそんな知識を……？



はい、全部ガッツ星人が教えてくれました。

本当なんです……信じて下さい。

当人達に聞こえていないのを良いことに、まさしくやりたい放題だ。

とはいえ、そのような事は些事ではない。

なぜなら、それらを聞いた警備隊の面々にとつて、真に驚愕すべき事実だったのは

……

「……まさか、ウルトラセブンが戦士でもなければ、軍属でも無い、単なる善意の第三者だったとは……」

机の上へ肘をつき、組みしめた両手の上に額を置きながら、タケナカはその弱り切つた表情を隠した。

今まで、セブンの肉体面や精神性については何度か議論を重ねた事もあつたし、その幾つかが多少なりとも当たっているという確かな手応えを、決して短いとは言えない期間共闘してきた中で、掴んでいたつもりだった。

だが……全くもって思い上がりも甚だしい事ではないか。

実のところ人類は、やはりセブンの事を、何一つとして理解など出来ていなかったのだ。

彼を、信頼できる個人として尊重しながら、この世界に生きる尊い生命として見よう

としていたつもりが、その実、彼の宇宙における社会的属性や、果たすべき役割がいつたい何なのか、という視点がすつぽりと抜け落ちていたという事実には、今更になつて気付いたのである。

あれほどの強さを持ちつつ、積極的に地球防衛に協力する姿勢を見せてくれていたので、てつきり軍人や警察機構、よしんばそういった組織が無い文化だとしても、戦士階級的な、所謂、戦闘行為や荒事を生業とする類の者なのだとばかり思っていた。

無意識的に、セブンもまた、自分達のような地球防衛軍と同一の『他者を守る事に責任を持つ側』なのだ。

ところがどうだ。ソガがガッツ星人から聞いたところによれば、彼は恒点観測員という……地球人と言えば国土地理院の測量司や、文部省や外務省の査察官などに近い職務を遂行する、どちらかと言えば役人的な性質の強い立場なのだと言う。

いわば、大航海時代の航海士が、たまたま立ち寄った漁村を、ヴァイキングの襲撃から守ろうと、義憤に駆られて立ち上がったようなもの。

彼我の戦力に、圧倒的な隔たりがあるから気づけなかつたし、属する国というか星が違うが故に、地球の管轄下に無いというだけで、『軍人』であるタケナカ達からすれば、彼もまた、守るべき『文民』に違いないのである。

ところが、彼の正体であるM78星雲人というのは、とある事故によって、大人から

子供に至るまで、数万単位の寿命や超能力を有するようになった種族なのだという。

そしてその力を、全宇宙に秩序と平穩を齎す為に使う事をこそ至上とする、崇高な精神と決意を宿した人々なのであるとも。

例えその宇宙警備隊とやらに属していないとしても、目の前にいる弱者へ手を差し伸べずには居られないのが、光の国に住む者の国民性らしい。

ウルトラセブンは、銀河を股にかける平和の使者なのだと思っていたら、天の川を飛び越えて駆けつけてきた、飛びつきりの義勇兵に過ぎなかつたのだ。

「……てえ事はなんだい？ 俺達は、ちよつと力自慢の一般人に、今までおんぶにだつただつたつて事かよ!? アイツは……セブンは何の義理もないのに、俺達の為に戦つてくれていたんだつて……それで今、そのせいで命の危機にあるつて……そういう事かよ!!」

「まあ、そうなりますね」

「そんな、そんな事が……あつてたまるかっ!」

「……痛恨の極みです」

情けないやら、悔しいやら。

様々な感情がない交ぜになって、机を力強く殴るフルハシ。

キリヤマは、彼ほどに激情を露わにする事は無かつたが……その内心は、部下に負け

ず劣らず荒れ狂っている。

「これでセブンを見殺しにしてしまったら……私たちウルトラ警備隊は、いったい何の為にいるのか、分からなくなってしまうわ！ アマギ隊員のいつかのナーバスを全然笑えないじゃない！」

「そうだ！ この戦いは、もはや地球の支配権どころの話ではない！ ここで諦めてしまったら、我々、地球防衛軍の存在意義そのものが揺るぎかねん！ ガッツ星人のセブン処刑は、なんとしてでも絶対に阻止するんだっ！」

タケナカが激憤と共に立ち上がった時、作戦室にアマギが飛び込んできた。

「隊長！ さっきの通信内容が解読できました！」

「でかしたっ！」

「ダンはいつたい、何て言ってきたんだい!？」

「ダン……?？」

「なに？ ダンが敵の円盤内から秘密通信を送ってきたのではないのか？」

「……いいえ、残念ながら発信者はダンではありませんでした」

アマギの返答に、目に見えて落胆する一同。

この通信こそが、縋るべき一縷の望みだと思っていたからだ。

だが……アマギとソガだけは、全く違う表情をしていた。

「ですがその送り主は、もっと驚くべき人物ですよ……さっきの発信音は、なんとセブンの脳髓から出ていたんです！」

「なんだって！ セブンが生きていたのか!？」

「はい！ 彼が超能力を使用する際に観測される脳波パターンと、波長がぴったり一致しました！」

皆の顔が、一様に明るくなる。

「しかし、マグネリウムエネルギーがないと、体を動かすことができないといっています」

「マグネリウムエネルギーといっても、まだ合成に成功していないだろう……?」

「これを見てください」

アマギが解読結果をタケナカに手渡す。

「水素の4個の原子を融合させて、ヘリウム1原子に変化させたときに、そのエネルギーを固定させる……しかし、困ったな……」

「……何ですか?」

「うん、その水素を融合するのに、ダイヤモンドが必要らしいんだ。それから後は、妨害電波で消されてしまった」

「しかしダイヤモンドか……アフリカ産の鉱石なんだが、アフリカの原住民の一部で

しか使われていない代物だな……果たして、この日本中を探しても、持っている人がいるかどうか……」

タケナカもその鉱石の事は知っていた。

なにせ、新エネルギー開発の為に、他ならぬアマギ・ソガの連名で、この鉱石の確保依頼が陳情されていたからだ。

だからこそ、その入手難易度の高さが分かってしまう。

ヤナガワ参謀と協議した結果、調査チームの編成や派遣に莫大なコストがかかる上、満足いく質の物が手に入る確証も低く、確保計画を見送るしか無かったからだ。

だがそんなタケナカとは対照的に、アマギの顔は少しだけ余裕が見える。

「いえ参謀。実はもう、石の持ち主に見当はついているんです」

「なにっ?」

「皆さん、ダイヤモンド鉱石は、アフリカの原住民が使っている……どこかで聞き覚えがありませんか?」

「……アフリカの原住民!?!」

「そうよ! そうだわ!」

アマギの言葉を聞いて、ハツとした様子のソガとアンヌが、フルハシの方へ振り向いた。

作戦室中の視線が、ただ一人困惑する巨漢へ集中する。

「……なんだい、アフリカの原住民と俺と、どういう関係があるんだ？ そりゃ、俺の面はねえ！ ……あつ!? そうだ!!」

慌てて作戦室を飛び出したフルハシは、自室の扉を蹴破らん勢いで開け放つと、ベッド脇の引き出しから、ハンカチで大事に包んだモノを取り出した。

武骨な指で布切れを払い除けると、その下からは、夏の天空の如く澄んだ鉱石が、電灯の光を反射してキラリと顔を覗かせた。

まさしく青天の霹靂。

「あつた…!! ……神様、神様!!」

フルハシは瞳を僅かに潤ませて、この呆れる程の幸運と偶然を、それを彼に齎してくれた全てに向かって、心の底から感謝した。

## 地球圧殺計画 20%

ダイヤモンド鉱石を持ってほくほく顔のフルハシは、おお急ぎで作戦室へ戻ってくる。

「おい！ これだ！ これがありやあ、セブンが生き返るんだろう!? 早速助けに行こうぜ！ なあ!」

「あー……」

だが、迎える仲間達の方はと言うと、今一つ反応が鈍いといふかなんというか……彼が予想していたものとは、些か違う様子であった。

「……なんだい……歯切れが悪いな……?」

「実は今、それを説明しようとしていた所で……糠喜びさせてしまい申し訳ありませんが……残念ながら、すぐにセブンを助ける事は……出来ないんです」

「なんだつてっ!」

「まあ、待て。アマギの説明を聞こうじゃないか」

フルハシに手渡された青い石ころを、何らかの計測機器の光に当てたり、大きさを巻き尺で正確に測りながら、アマギは溜息をついた。

「やっぱり……」



「おい、どうしたってんだ？ まさか……ニセモノだったりするのかわ？」

「いえ、紛れもなくこれはダイヤモンド鉱石です。それは昨日の内に調べた時にハッキリしています。ですが……それと同時に、問題点も……純度が、足りないんです」

「純度お？」

「ええ、実は……かつてこのダイヤモンド鉱石を、兵器に転用した例が、既にあるんです」  
「なんだって！」

「もしかして……それって前にアマギ隊員の言ってた……」

「ああそうさ。その兵器こそ……マルス133。僕の原点にして目標……いや、永遠の課題だ」

その眼差しに神妙な光を宿して、アマギが深く頷く。

確かにその名は、誰かから聞いた事があるような気がするが……生憎と、実際に自分で使う機会の無い兵器の事なぞ、フルハシの耳には右から左だった。

「マルス133……？ どっかで……」

「以前、バラージ砂漠に現れた非常に強力な怪獣を、現地に秘宝として伝わっていた、ダイヤモンド鉱石の巨大な原石を激突させる事で退治したとあります。その折に、運良く回収できた破片をペータ線発信器に組み込んだレーザー銃が、マルス133です。記録によれば確か、フルハシ隊員のお兄さんも現地にいたようですから、それで聞いた事があ

るのでは？」

「ああ！ そうだ兄貴が言っていたような……凄いや威力の銃だったって……でも、もう無いんだろ？」

「はい、残念ながら宇宙恐竜の襲来時に、一丁が基地と共に焼失。現存する最後の一丁は、火星開拓団が、危険な原生軟体動物を撃退するために使用中です。今から取り寄せたのでは、とても間に合わない」

「それで、その兵器に使用された物と比べて、この石の純度が著しく低いと言うことか？」

「ええ……というよりも、件の石の純度が信じられない程に高かったと言うべきでしょう。もしかしたら原石ではなく、何らかの超技術によって、工業的に精錬された物だった可能性すらあります。もちろん、現在の地球の技術力では再現不可能ですが……」

「ああ、ノアの神から貰ったって、そういう……」

妙に得心いった顔で頷くソガは、当時の資料と今回の測定結果を見比べていた。

彼がつまみ上げたカラー写真には、フルハシの物とは比べ物にならない程に、深い蒼を湛えた石の破片が写っている。その大きさは、親指の爪程しかないが、石の向こう側は決して見えない。

ところが今、彼の手許にある石を持ち上げてみれば、うつすらとはあるが、向こう

側から不安げに此方を覗き込むアンヌの顔が、真つ青に透けて見える。

同じ物質なのに色が違うという事は、それはつまり、光の透過率や反射率に差異があると言う事だ。

「とにかくマルス133と同等、もしくはそれに準ずる出力が得られなければ、今回の用途には……出力を増幅させるために、何らかの工夫を施さねばなりません」

石の測定値や、そこから算出されるエネルギーの計算式は、わざわざ資料を見なくても諳んじられるくらいに、アマギはこの技術に精通していた。

自身の半生を捧げてまで、かの作品を再現、量産しようと苦心し続けていたアマギであるからこそ、突然にセブンから開示された情報を、素早く地球上の科学力と照らし合わせた上で、なんとか応用可能なラインまで落とし込めたのである。

これが彼でなければ、石の出力が足りないと分かった時点で、完全に匙を投げてしまふところだ。

「この石ひとつじゃ、リキがないんだな……」

「せめてサイズが拳大か、同じ純度の物がもう一つあれば……」

ところが、アマギの曇り顔を吹き飛ばすように、フルハシがその大きな手をポンと打つと、それはそれは暢気な声で重大機密を言い放った。

「そうだ！ 大丈夫ですよ！ 半分はナツコが持っているはずだから！」

「なにイ!？」

日もすっかり落ちて、夜闇に沈んだレース場。

人影の消えたピッチに、1台の車が最後のランから帰ってくる。

当然の事ながら、ガッツ星人の宣戦布告が成されたのはつい先程の事であり、地球の危機について知っている一般人はまだまだ少ない。

愛車のコスモスポーツから降りてきた女の名はナツコ。

その首元には、青く澄んだ石が鎖に吊られ、きらりと輝いている。

まだ年若くとも、こう見えて大陸横断ラリーにも参加経験のある、凄腕女性レーサーだ。

そして今回、アフリカラリーの途中に、砂漠で立ち往生したキャラバンを救ったら、それがたまたま有力者の息子だったのである。

例え人名救助の為とはいえ、コースと日程を大きく外れた彼女は、当然ながら失格扱いだったが、本人はちつとも気にしていなかった。

そして助けられた部族達の長は、自分の栄光を擲ってまで施された行為にいたく感銘

を受け、その感謝の印として青い石を彼女に贈ったのだ。

……本当は、息子の嫁になってくれとも頼まれた——つまりあの石は、族長筋の者が婚姻の証としてのみ身につける事が許される、非常に特殊な……言わばエンゲージリングのような意味合いを持つのだ——が、ナツコ自身は既に心に決めた相手がいるのだと、丁重に断って石だけ頂戴したのは内緒である。

「はい、記録です」

「わあい、良かった。じゃ、お願いね……」

最終ラップタイムが、なかなか満足いく内容だった事に上機嫌なナツコは、練習を切り上げて愛車のキーをスタツフに渡すと、帰り支度をするべくロツカーへ向かう。

だが……そんな彼女は、真つ暗な廊下を歩きながら、僅かな違和感を感じた。

自分の足音に紛れて……誰かもう一人が後をつけてきているような気がしたのだ。

「……誰？」

馴染みのスタッフはみんな帰って、先程キーを渡した彼だけのハズ。

車を車庫に入れて、その他諸々の始末があるのに、こんな早く終わるものだろうか

……？

彼女の呼びかけに、何の返事も帰ってくる事はなく。

釈然としないまま、ナツコは再び歩き始める……が。

ひた……ひた……

冷たく硬質な何かが、コンクリートを踏みしめる。

勢いよく後ろを振り返ってみても、そこには誰もいない……

試しに、右足を思いっきり踏み鳴らしてみる。

ガレージの反響が、そのように聞こえたのかという淡い期待と……もしもこれが、けしからん悪戯の類であつたら、ただじゃおかないぞ、という苛立ちを意思表示する狙いも兼ねての確認だ。

それはもう、婦女子たる身で、命知らずのレーサーなんぞをやっているのだから、このレース場でもナツコのじゃじゃ馬を知らぬ者はいない。

例え何かのサプライズだとしても、彼女が機嫌を損ねかけているとなれば、早々に内容を明かすはずだ。

だが……柱の陰から見知った顔が、舌を出しながらバツの悪そうにペコペコしつつ出て来るなんて事はなく……

ナツコのブーツがたてた乾いた音が、先程とは全く別の響きでもって、虚しく反響するだけだ。

ひた……ひた……

いる！

人間ではない、何かがこの空間に存在する……！

直感的にそう判断したナツコは、一目散に逃げ出した！

曲がり角で振り返った時、巨大な頭部と細長いかぎづめを持つ異形の影法師が、ガレージの壁に踊っているがチラリと見える。

あれは、ダメだ。人間の力の及ばない存在だ。

凶暴な野生動物、天候や災害、マシントラブル……

過酷なラリーを最後まで走りきれるレーサーというのは、驚く程に少ない。

どれだけ技量の高いベテランであろうとも、不慮のアクシデントに見舞われれば、そこで容赦なく脱落していくのがレースの世界。

実力が高度に競り合う、厳しい勝負の場では、時として、いや常に……運が、最後にモノを言うのだ。

ナツコは、自身がここまで来れたのは、類い稀なる運と直感力の賜物だと信じている。

この直感に従ってコースを選び、時に砂嵐を、時に土砂崩れを、トップ集団5台が絡む記録的な事故をすら回避してきた。

ある時など、妙な胸騒ぎがするからといって、もう少しで1位ゴール寸前だったレー

スを降りた事すらある。

後で調べてみれば、エンジンが爆発寸前だったと、真つ青な顔でピツチクルーが告げてきた。

そんなナツコの勘が言っている。

逃げろ。

……でも、いったい何処へ？

生憎と、今の彼女は百戦錬磨のレーサーではなかつた。

普段であれば、心の赴くままにハンドルを切ればいい。

そうすれば、彼女の愛車が、ナツコの行きたい場所へと運んでくれる。シートに座つてヘルメットを被っている間だけは、彼女の視界には常に進むべき道が見える。

だがしかし、ひとたび車から降りてレース場を出しまえばナツコは、ほんの少し気が強い、うら若き乙女でしかないのだ。

エントランスの二階に出たナツコ。

右に進めばロビーに繋がる長い廊下。左に行けばロッカー室。

廊下はだめだ。柱もなければ扉もない。

あの影から身を隠す事も出来ず、丸見えになつてしまう。

しかし、ロッカー室やシャワー室ならば、中から鍵をかける事が出来る。



ナツコは当然ながら、左の道に足を踏み出して――

《――もしも――》

ブーツが止まる。後ろからは不気味な音が、気配が、彼女の背中に手を伸ばそうと――

《――もしも、もしもですよ？ この先、貴女の身に、とてつもない困難や、何か恐ろ

しい事が降りかかった時――》

彼女の脳裏に、囁れた老人の声が響いた。

《決して、奥まった方向へ行つちやありません。……外です。外の世界に目を向けなさい。身を晒しなさい。例えどれだけ、だだっ広く、寂しげに見えたとしても、外の世界には、貴女を見つけてくれる人がきつといます。貴女が声をあげて、助けを求めるとき、きつと――それを、どうか忘れないで》

帰国した日、迎えを待つベンチで、青い衣装に身を包み、古びた鞆を大事そうに抱えて話しかけてきた、あのどうにも胡散臭い老爺の言葉を、ここにきてなぜか思い出したのだ。

《あたしやあ、嘘はつきませんよ。お嬢さん》

占いなんて、普段のナツコなら歯牙にもかけないし、現に今の今まで忘れていたというのに……どうしてだろう。

彼のふにやりとした笑顔なら、信じてみてもいい気がしたのだ。  
踵を返して、ロビーを全力疾走するナツコ。

後ろがどうなっているかなんて、気にする余裕は一切無い。

自分自身がラリーカーにでもなったかのような錯覚に陥りながら、長い廊下をひた走った。

突き当たりのドアノブに、指がかかる。

取っ手を捻じ切りかねないくらいに勢いよく回し、僅かに開いた隙間へ、猫の如き身のこなしで体を捻じ込むと、全体重をかけてドアを閉めた。

磨りガラスにびったりと耳をつけて、向こうの様子を窺うも、怪しい気配が走ってくることはない。

扉一枚距てた事で、ようやく一安心ついたナツコは、未だに激しく上下する胸を手で押さえながら、はち切れそうな心臓と肺を労るべく、深呼吸をひとつ。

そして出口に向かって振り向い――

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……』



再起動したナツコの動体視力は、自身を覗き込む変な動物のこめかみに向かって、見慣れた金属標識の先端が空を切って吸い込まれていくのを捉えた。

## 地球圧殺計画 30%

「ナツさーん!!」

遠くで、地球人の声がする。

ウルトラ警備隊の到着が、想定よりも早いな……?」

ガッツ星人は、ウルトラセブンの発信した暗号文を解読し、ダイモードという鉱石が、自身の計画に対する不安要素となり得る事を知ると、すぐさまその確保に動いた。

先程、妨害電波で防衛軍基地を封鎖したが、それまでの会話、及び電子データはガッツ星人の手中にある。

防衛軍は既にダイモード鉱石を一つ入手しているが、そのサンプルだけでは、要求量を満たす事が出来ないかと瞬時に試算した。

であるなら、わざわざ基地を襲わなくとも、追加の入手先を抑えてしまえば、圧倒的ローコストで地球人の計画を阻止する事ができる。

そして、この日本でフルハシ隊員以外にダイモード鉱石を所持している人物についても、昨日の会話から特定が可能だった。

ガッツの推測通り、女の首には青い石が煌めいている。

これを回収すれば、もう用済みだ。

戦う術を持たない個体など、言われなくとも五体満足で返してやるつもりであった。少しばかり恐怖心を煽ってやれば、本能的に閉所へ逃げ込み、余計な邪魔も入らず狩りが容易と踏んだのだが、あてが外れたらしい。

とはいえ、量子レポートを得意技とするガッツ星人にとつて、先回りなど造作もない。追込みが失敗しようがしまいが、アフターケアが万全ならば、結果として同じ事。別の空間に辿り着いた事で安心したのか、息を整える雌個体を見て、ガッツ星人は計画の完遂を確信した。

「てめえ！ なにしてやがるっ！」

見て分からないのか？ ダイモード鉱石を回収しようとしているに決まっているだろう。地球人は理解力に乏しすぎる。

後ろでさえざる雄の事など無視して、恐怖で硬直した雌の首に向かって右腕を伸ばす。

どれだけ威勢がよかろうと、彼らに出来る事なんて、呆れるほど低出力の光線銃を撃つ事くらいしかないからだ。

ガッツ星人の体表を覆うバリアは、そんなビームで破れるようなものではない。

「ナツコから……」

すると後ろから、もはやドドドと形容するしかない地鳴りと共に、ウルトラ警備隊員の声が近づいてくるではないか。

……いや、まさかな……

あの距離から走り込んで、こちらと目標の間に割り込もうなどと……

しかし、少しでも勝率の高い行動を模索し続けようという姿勢は、非常に好ましいところでもある。

だからガッツ星人は、警備隊員の涙ぐましい努力と無謀に敬意を評して、ほんの少しだけ待ってやることにした。

「離れやがれ……」

すなわち、あと一步の所で間に合わず、眼前でむぎむぎ対象を奪われるのを、黙って見ているしかなかったという失態を、この戦士に負わせる事を良しとせず……

決定的瞬間には間に合う事が出来た……という事実だけは、素直に渡してやる事にしたのだ。

そしてその上で、真正面から二人纏めて昏倒させる。

任務失敗とはいえ、最大限努力しつつ、やはり力及ばずの事であったとなれば、彼の名誉もそれ程傷付きはすまい。

どころか、ガッツ星人に立ち向かった偉大な地球人の戦士として、永遠に宇宙史へ名を刻むであろう。

「聞いてんのかこの……」

ガッツが、ここまでの恩情をかける事など滅多にないが、敗者の面子にも配慮するのが強者というもの。

なにせ地球は、いくらウルトラセブンを倒した事による副次的効果とはいえ、明日をもつてガッツ星支配圏の仲間入りを果たすのだから、これくらい箔付けはあつてしかるべき……

と、そこまで思考したところで。

「青びようたんがッ!!」

側頭部への凄まじい衝撃が、彼の体をそのまま横つ飛びに吹き飛ばした。



壁際の掃除用具ロツカーが、飛来した怪鳥の体を受け止め、無惨に破壊される。

ナツコの視界から、一瞬にして恐ろしい白面が消えた事により、その後ろから、さらに凄まじい形相の般若が、ロリポップバー——ピツクルーが、レーザーに停止と発進を知らせる為に使用する、先端に円盤状の鉄板を貼り付けた手持ち式標識の俗称。ドレイバーから見た形状が、棒付きキャンデーのように見える為、そう呼称される——をヴァイキングの戦斧の如く構えて、その姿を現した。

「フルハシさん！」

「ナツさん！ 無事か！」

短い確認を済ましたフルハシは、胸を撫で下ろす暇もなく、そのむくつけき体を横にする。

瓦礫から、ガッツ星人がうつそりと立ち上がって来たからだ。

「けっ……頭でつかちの癖に、ずいぶんタフな野郎だぜ」

彼は渾身の一撃を与えたつもりだったが、その敵が何らダメージも無さそうに起き上がり、ふらつきもしないのを見て、思わず舌打ちを禁じ得ない。

これは流石にセブンを倒したただけの事はある。手強い相手だと気を引き締めた。フルハシの太い首を冷や汗が伝う。

だが……

この場において、真に驚愕していたのはガッツ星人の方であつたらう。僅か数秒の事とはいえ、完全に困惑の渦中へ叩き落とされたと言つてよい。

身を起こしたガッツ星人は最初、自身の目の前に、携帯型怪獣兵器の識別名ミクラスが、極小サイズで顕現したのかとすら錯覚した。

その背後へ、立ち上る大量の湯気を幻視してしまう程に、フルハシ隊員が怒り狂い、その闘争心を剥き出しにしていたからだ。

肩をいからせ、鼻息も荒く敵を睨みつけるその姿は、同じ地球人のナツコから見ても、ミノース島で目にしたレリーフの怪物を彷彿とさせる程だが……彼が両手で担いでいるのは、ハルバードやフランキス力ではない。

単なる鉄の棒で？

宇宙最強のガッツ星人を？

殴り飛ばす？

……意味が分からない。

もちろん、ガッツ星人の表面を覆っている、窒素装甲をはじめとした数々の防御プロ

テクトは、光波防御力だけでなく、物理的衝撃にも滅法強い。

「故に、標識部分の鉄板がひしやげてしまう程の力で殴り付けられたのに、頭蓋骨陥没はおろか、薄皮一枚切れてすらいなかった。」

だが、違う……違うのだ。そういう話では……

「ちよつと先輩、彼女さんが心配なのは分かりますけど、置いてかないで下さう。わ。あ、ガッツ星人!!」

ガレージの方向から、遅れてひよつこり顔を出したソガが、心底魂消た様子でウルトラガンを連射する。

だが、凄まじい速度の早撃ちも、自動防壁に阻まれ全く意味をなさない。

……これだ。

これこそガッツ星人と対峙した者の正しい反応であり、ましてや、あのウルトラセブンを倒す前ならいざ知らず、それを知っていて尚、殴りかかってくるとは、いったいどういう神経をしているのか？

その選択自体、愚かにも程がありすぎるし、その結果として起こった『バリアごと吹き飛ばす』という事象が全くもって有り得ない。有り得なさすぎる。

とはいえ、ガッツ星人がフクロウのように首を捻ってしまふのも仕方がない。

フルハシのどんぐり眼が、悲鳴を上げるナツコと、襲いかかろうとする星人の姿を認

めた時、彼の脳内で小さな火山が爆発し、思考のあれやこれやは全て宇宙の彼方に吹き飛んでしまつたからだ。

(……野郎、セブンの次はナツコまで手籠めにしようつてか！　そうは問屋が卸さねえぞ！)

堪忍袋の緒が切れる、とは正にこの事だ。

手頃な長物をリースチームの用具入れから拝借すると、猪の如く駆け出す巨漢。

小難しい理屈や作戦なんか関係ねえ、まずは一発ぶん殴つてから考えりゃいいのさ。それが、フルハシ・シゲルという男なのだから。

敵がこちらを振り向きもしないのは、バリアに絶対の自信があるからだろう、とか。テレポートで避けられたらどうしよう、とか。

そもそもこの距離で間に合わない、とか。

そんな弱気は一切ない。

この時、フルハシの頭にあるのはただ一つ！  
まっすぐ行つて、ぶつとばす。

混じりつけ無しの純粹な怒りが、星人のこめかみを強かに打擲する。

こうして、ガッツの常識と、フルハシの当然がガチンコにぶつかり合つて……より強固な方が上回つた結果、宇宙の姿はそうのように収束した。すなわち、傷一つ無いまま放

り投げられるガッツ星人という姿に。

超弩級の熱血バカは、筋肉気合いと筋肉根性の力業で、宇宙の真理を一息に捻じ伏せてみせたのである。

とはいえ、それも当たり前の事。

なぜなら……女子供や非戦闘員を選んで襲うような卑劣漢に、このフルハシ様が負けるわけが無いからだ！

「ナツさん、このヒヨコ頭は俺が相手をする。ソガのいる方へ走れ！」

「フルハシさん！ 危ないわ！」

「早くいけ！ ……どりゃあああつ!!」

ナツコの逃げる隙を作るため、フルハシが裂帛の気合いと共に突撃し、大上段に構えたロリポップアックスを振り下ろす！

……が。

『何力、シタカ？』

「ちいつ……！」

まるで舗装された地面でも叩いたかのような、硬質な手応えが返ってくるばかりでビクともしない。

ロリポップも、くの字にひん曲がってしまった。

先程のはあくまで、背後からの不意打ちがキレイに決まったからであり、そう何度も同じ手を食らわれないのがガッツ星人である。

今や、敵の姿をしつかりと観察した妖鳥にとつて、少しばかり平均値より高めの腕力を持つているだけの地球人は、脅威たり得ない。

『……フーン！』

「ぐわああああつ!!」

「フルハシさん！」

ガッツ星人が無造作に片手を突き出すだけで、呆気なく宙を舞うフルハシの巨体。

彼らの膂力は、素の状態でも地球人を上回るが、そこに高度な演算能力によるベクトル操作を加えてやれば、その力は何倍にも増幅可能。

フルハシの相手など、赤児の手を捻るより簡単だ。

「ナツさん！ こつちです！」

ソガがウルトラガンを撃ちかけながら、ナツコとの距離を詰めようとするも……

『邪魔だ』

「ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア!!」

ガッツがそちらを一瞥するや、その瞳からワイヤー状の未元物質が発射され、隊員の足首に絡みつき、ソガは盛大なヘッドスライディングを披露する事になる。

「まだまだあー！」

うずたかく積み上がった荷物用の段ボールが跳ね飛ばされ、不屈の熱血野郎がリベンジを……

『ウルサイ』

ガッツは両腕から、粒機波形電子砲を、懲りずに立ち塞がろうとする筋肉達磨に向かつて放つ。青白いビームの滝が、体勢を立て直したばかりの地球人へ殺到する。

それをフルハシは、咄嗟に金属棒を突き出して防御するも、着弾部分はまるで湯煎した飴かチョコレートのように、でろでろと溶け出してしまい、それでも治まりのつかない熱量が、持ち手の部分まで瞬時に赤熱させてしまった。

「ウワツチチチ……!?!」

特殊手袋の表面が焦げ付き、思わず得物を取り落とすフルハシ。

『貴様ナド、相手ニナラン』

その様子に興味を失ったのか、今度こそガッツはナツコの方へにじり寄る。

「ナツさん！」

「あ、ああ……」

ナツコは恐怖で足が竦んで動けない。

ソガは遠くでモゾモゾ這いつくばったまま。

そして自分は丸腰だ。

(何か無いか、何か……)

フルハシは悩んだ。

撃つても殴つても、効かない事が分かっている攻撃では、ガッツ星人を怖がらせる事は出来ない。

一瞬だけでいい。奴の注意を引けるような、脅威になりそうなものが……

……いや、ある！

フルハシは、傍に落ちていたソレ——未だに白熱し続ける、さつきまでロリポップだったモノを、左手で思いつき握りしめて持ち上げた。

「おいこら、待ちやがれガッツ星人！」

手の平から、ジユウウ……という肉の焼ける匂いが立ち上り、彼の鼻腔をくすぐる。

腕に信じがたい激痛が走つても、それをド根性で抑えつけて笑う熱血漢。

「これが本当の……オウム返しだぜ！」

なにせ宇宙人ご自慢の光線威力が、たつぷり詰まった投げ槍だ、無視出来るもんなら無視してみやがれ。

大きなエネルギーの飛来を感知して、ガッツ星人の足が止まる。

恐るべき瞬発力と弾道予測で、振り向きざまに鉄塊を迎撃してみせる宇宙人。



ガッツの腕から再び発射された超電磁砲が、野蛮な投擲物に吸い込まれ、たちまちメルトダウン。先程の手加減した威嚇射撃とは比較にならない出力でもって、鉄棒を原子レベルでグズグズに崩していく。

『ムッ!』

「どわあっー!」

金属が一瞬にして蒸発する程のエネルギーが、一つの空間に集中した為に、極小規模の水蒸気爆発が発生。

咄嗟にガッツ星人は爆発力を抑え込むのに演算を注力し、その背後にいるソガやナツコを意識の外へ追いやった。

『ホウ、自爆も辞さぬトハ。ウルトラ警備隊の脅威度を一段階修正』

「フルハシさん! フルハシさん!」

『喜べ地球人、いや……識別名フルハシ・シゲル。貴様は現時点より、ガッツ星人の“敵”として認定サレタ。よってここで……全力をもって排除スル』

「へ、へへ……そいつあ、光栄だね……」

「まったくもう……無茶しやがって!」

芋虫のように地べたを這いずっていたソガは、ようやく目的地へ辿り着くと、そこに散乱していた掃除用具……ぶちまけられたモップやバケツの中から、白い塊を掴み取

り、ガッツ星人の足元に向かって、タイル張りの床を勢いよく滑らせた！

石鹼を相手のオウムにシューッ！ 超☆エキサイティング！

『グワーツ！』

摩擦係数の低い物体を、鱗に覆われた素足ではなく、よりによってベクトル反射の施された、不可視のバリアで踏んでしまい、芸術的なズッコケを披露するガッツ。

彼の重心は、その肥大化した頭部のせいで、いつかの黄金機神に負けないくらい不安定なのだ。

「よし！ いいチャージインだ！」

驚愕したガッツの集中が途切れた事で、ソガの足も解放される。

慌てて満身創痍のフルハシに駆け寄り、彼を助けおこした。

『オノレ、地球人風情が……』

「ナツさん！ ペンダント！」

「……ペンダント？」

「そいつはあなたのペンダントを狙ってるんです！」

「そうだ！ だから絶対に……」

「投げて！」

「「えっ？」」

ソガの指示に、聞いた二人の声が重なるが、その中身は全く違う。

ナツコはただ純粹に、なぜ？ と聞き返したただだが、フルハシのは「何言ってるんだコイツ」の「えっ？」である。

「鳥は光り物が好きでしょ！」

「なるほど、わかりましてよ！」

「あ、バカ！ ナツ！ やめっ……」

頷いたナツコは一切の躊躇いなく、ネックレスから青い石をぶちりと筆取り取って、フルハシが制止する前にそれをぽーいと、巨大な鳥の背後へ放ってしまった。

自分の大事な人が死にかけているのだから、当たり前だ。

そうする事で彼を助けられるならお安い御用である。

「な、なんて事を……」

「フルハシ隊員、石は諦めましょう！ ここは大人しく負けを認めて、引き下がるべきです！」

「し、しかし！」

「ここにはナツコさんがいる。彼女の保護が優先でしょうが！ そんな体で、民間人を守れますか？」

「う、ぐっ……」

「撤退だー！　ちくしょー！　覚えてろよー！　ナツさん、こっちへ！」

「はいー！」

『……………』

バタバタと逃げて行く地球人達の背中を、ガッツ星人は大人しく見送った。なにせ、ターゲットである青い鉱石は、もう彼の手中にある。

それに……好敵手を下した後の満足感は、やはり何物にも代えがたいのだ。

これを無粋な追撃で水を差す気にはなれない。

星人は喉を震わせ勝鬨を上げると、テレポートで夜の闇の中へに溶けていった。

「あが、いてツ……アチチ……」

「ああもう、無茶するからですよ……赤熱した鉄棒握るとか、アホなんちやいますか？」  
「うるせえ！　俺の手の皮はな、特別分厚いんだよ！　火傷がなんでい、唾つけときゃ治るんだ、こんなもん……」

「バカモーン!!　手袋外そうとすなー！　んなことしたら皮ごとべろりやぞー！」

洗車用のホースで、左手に流水をかけるフルハシ隊員と俺。

強がる怪力自慢はもどかしくなったのか、真つ黒こげの特殊手袋を外して直接水をかけようとする……が、すぐにシバいて止めさせる。

火傷した時に無理に衣服を脱がせると、癒着した皮膚が剥がれて、さらに悪化すると前世で習った事があるからだ。

そこへナツコさんが、事務所から救急箱を持ってきて合流する。

「ほら、消毒液と絆創膏と……あと氷嚢とタオルね」

「ありがとうナツコさん。はい、沁みますよ……」

「ああああああ!!! いてええええええ!!! てめえソガ、丸々一本ぶっかけるやつがあるか!」

「だまらっしゃい! あんた今ねえ、自分が重症患者だつて自覚ある? これでも足りんわ!」

早く基地に帰って、アンヌに見て貰わなくちやいけないんだが……ちよつとだけ寄らなきやいかん所があるもんで、先に応急処置をしているところだ。

まあ、この人ありえんくらいタフだから大丈夫でしょ。

「ごめんなさいフルハシさん、あたくしのせいで、こんな怪我をさせてしまつて……」

「ああいや、ナツさんのせいじゃありませんよ。それもこれもガッツ星人と……お前がよお! ソガ!」

「なんです？」

「なんですとお!? お前があんな事言わなきゃ石は……」

「石? 石がどうかしまして……? もしかしてアタクシ……何かいけない事を……?」

「あ、いや……その……」

「あーあ。フルハシ隊員を助ける為にやってくれたつてのに、そんな事言っちゃうんだー。見損なっちゃうなー。ナツさん可哀そうだなー」

「てめえ……ツ!! アツツツ……いてて……」

不安げなナツコにいたたまれなくなったのか、フルハシ隊員はそれ以上黙っている事が出来なくなつて口を開く。

彼は、嘘や隠し事がとことん苦手な男なのだ。

「あのアフリカ土産の鉱石……地球を救うには、どうしてもあの鉱石が必要なんですよ」  
「……分かりましたワ。それであるヘンな動物は、アタクシの事を……!」

「しかし……あれを奪われたんじゃあ……」

しよぼくれるフルハシを見て、思わずナツコがくすりと笑う。

「この人、じゃじゃ馬レーサーとは思えないほど上品だよな。」

「あれは家に仕舞つてありますワ。ソフフ」

「ええっ!? でも、これは……?」

「ガラス玉。失くすといけないから……練習の時はイミテーションしてますの!」

「アツハツハツハツハ!!」

ナツコの言葉を聞いて、三人で大笑いする。

いやほんと、このシーンは何度みても面白い。

あんだだけ詳しくセブンを解析するくらいだから、ちよつと調べりやあすぐ気付けるだろうに。

ガッツ星人って、自分にとって興味の無い事は、とことんどうでもいいんだろうな……

「ハツハツハツ……さまあみろ! ガッツ星人め! ガラス玉を持っていきやがった!!

ハツハツハツ!」

「シッ! 声がでかい」

まあ、俺達の会話なんてもう聞いちやいないだろうけど、念のためだ。

フルハシ隊員は本当に隠し事が下手で困る。

まあ、その分……頼りになるんだけど、さ。

「……聞かれたかな?」

そんな不安そうにこつちを見るくらいなら、最初から言わなきやいいのに。

氷嚢をタオルで固定した後も、フルハシの不安顔は収まらず、ナツコさん家に寄って、本物のダイヤモンド鋳石を回収するまで続いた。



## 地球圧殺計画 40%

一二つの鉦石から削りだした円柱状のレンズを、発振器にセットするアマギ。

「準備OK。ベーター線照射」

「エネルギーは？」

「順調です」

「撃て！」

俺が装置の引き金を引くたびにエネルギー弾が射出され、標的として用意されていたゲルマタントやチルソナイトの合金板を粉々に破壊していく。

「硬度15だ。これが割れれば、マグネリウムに劣らないエネルギーを確保したことになるんだ」

そうして出ました硬度15番。

ボーグ星人の残骸から採取したボーグメタルを鑄つぶして、チルソナイト808と混ぜ混ぜした合金版。真正正銘、現在の人類が作れる最硬金属だ。

これ以上を用意しようとしたらもう、ウルトニウムだのペダニウムだのに手を出すし

かない。

「……なあ、どうせ今回の目的は15番をクリアしないと意味ないんだったらさ、最初っからこれでやれば良かったんじゃないか？ 下の番号からわざわざ繰り上げていく必要あった？」

「……あのなあ、装置やレンズが、出力を上げても問題なく動作するかどうかの実験も兼ねてるんだよ。いきなり最大出力でぶっ放して壊したら、それこそ次善策すらとれなくなるだろうが」

「あ、そっかあ！」

「お前みたいは何でもかんでもぶつつけ本番でやったらな……ああなるんだよ」  
そう言ってアマギが指さす先には……

「あででで!! アンヌ! アンヌ！」

「もう! しつかりなさい! そんな事で怪力が泣くわよ！」

「もつとこう……手心と言うか……なあ!？」

「こんな無茶する人にかける情け、なんて、ない、わ！」

「いぎぎ……でもよ、そんなに縛ったら指どころか、腕一本うごかせねえぜ？」

「そんな必要ある？」

「あるともさ! これからセブンを助ける大一番って時に、一人だけベッドで寝てられ

るかい。そういうのはな、ソガの役目だよ」

「呆れた……その大事な時に大怪我こきえて来たのは誰？ ほら、ナツコさんももつと言つてやつて！ この人すぐこれなんだから！」

「フルハシさん……アタクシも、アンヌさんの言う通りにしてた方がいいと思いますワ」  
「くそおろろ味方はいねえのかあ……」

「まあまあ。お前の活躍でナツコ女史も、石も無事だったんだ。名誉の負傷と言う奴さ」  
「参謀……！」

アマギがこちらをゆつくりと無言で振り返つた。

「……うん、俺が間違つてたよ。安全第一で行こう」

「お前が利口でなによりだ」

「終わったか？ よし……撃て！」

隊長の号令と共に、跡形も無く粉碎された15番の標的。

「やったあ!!」

「みんな！ いいな！ ……破滅の道を選ぶのは、地球人か、ガッツか……これが、我々の最後の作戦だ！」

砕けた標的を指さしながら、険しい表情で述べるタケナカ参謀。

この場にいる全員の顔に決意が漲る。

そして一同は、セブンを救うべく、残された最後の希望であるホーク2号のハッチへ

……

「ちよつと待った!!」

「……なんだ」

「今、いい所だったろうが……」

出鼻を挫かれ、ヘルメット片手にどやどやと戻ってくるメンバー達。

うん、ごめんな。

完全に水を差す形になっちゃったけど、そのまま行かせるわけにはいかねえんだわ。

「皆さん、さっきのアマギの話ではありませんが、ここは一つ、安全第一で行きましょう

よ」

「お、なんだあ？ まあた、いつもの臆病風が吹いてきたかあ？」

「ふふふ……敵を知らば百戦危うからず……というのは、今回の敵であるガッツ星人が教えてくれた兵法です。なんせ自他共に認める強敵ですからね、我々もそんな敵に倣つて、相手をもつとよく観察すべきではないかと」

今の段階では、プロファイリングがね、足らんよ、敵のさ。

「ほう、一理あるな。では、お前の見解を聞こうじゃないか」

「ありがとうございます。ガッツ星人はね、まず……戦闘狂です」

「戦闘狂？」

「セブンを倒して名を上げようと言う行動原理や、わざわざ正面切つての戦闘に拘る面から言つて間違いありません。だって、あれだけ敵の事が分かつてるんですよ？ 寝込みを襲うなりして暗殺してしまうのが、一番簡単です」

「まあ、そうだな」

「セブんに寝込みが存在するかという疑問があるが……生命である以上はなんらかの休息期間が必要か」

「それをわざわざ彼を呼びつけてまで戦つたという事は……飽くなき闘争心に突き動かされている種族……という事かしら？」

「……続けたまえ」

参謀が続きを促す。

「しかしその割には、粗暴であつたり、思慮に欠けているかと言えばそうではなく……逆に凄まじいまでの慎重派です。これは、ホーク1号をわざわざ罠にかけて撃墜したという彼らの言葉からも分かります」

「……どういう事だ？」

「彼らはね、何もしくともホーク3号を素の力で撃墜する事が可能だ。という点に着目すべきなんです。そりゃあ、1号の方が性能高いですよ？ でも、それは我々地球人

から見ての話……ガッツ星人からしたら、どんぐりの背比べでしょう?」

「ふうむ……」

「確かに、言われて見れば……彼らは1号の何をそんなに恐れたんだ……?」

1号と3号では、速度がマツハ4を超えるか超えないか、という違いこそあれ、その火力にさしたる差はない。機動性なら3号が有利だが、その3号をして旋回中に撃墜されている。

「防御力においても僅かに1号が優ると言えるが……ガッツ星人の優れた武器の前では特筆すべき事も無い筈だ。」

あとは大気圏突破能力の有無だが……彼らを発見したのは既に大気圏内まで突入された後であり、その機能が活かされる事はない。

まさか、逃げる際に追撃される事を考慮して……? いや、あのガッツ星人が、自分達の負けた時の事を考える訳が無い。

ではなぜ……

「……分離だわ」

「お、アンヌ。なんて?」

「1号は分離が出来る。でも3号は出来ない。彼らからすれば、1号以外は全てただの戦闘機よ。でも……」

「そう！ 分離して何をしてくるか分からない！ 1機が3機になったり戻ったりするだけでもややこしいのに、こっちにや戦闘巧者のキリヤマ隊長がいますからね。ナースを固結びしたり、ガンダーを四重奏で泣くほどもてなしたり出来る」

「なるほど、それを嫌って奴らは、ダンとアンヌを囿に使ってまで……」

「緻密な計画は、その中の要素が不確定であればあるほどに狂いやすい……と」

「でもよお、結局その1号は壊れちまって使えねえ……今更そんな情報がなんになるって言うんだ？」

「過程がどうあれ、やはり我々は残されたホーク2号で出撃するしかない」

「最も大気圏内性能の低い2号で？」

「そうだ……そして、それこそが奴らの思う壺だと、そう言いたいんだな？ ソガ」

腕組みした隊長が、こちらを鋭く見て来るが……それを俺は余裕をもって受け止め、皆を安心させるように掌でジェスチャーする。

「まあまあ皆さん。そろそろ、ガッツ星人の性格が分かかって来たんじゃないですか？

恐ろしい程の負けず嫌い、勝つ為には決して手段を選ばず、そのくせ超が付くくらいの臆病者……どつかで聞いた事ありませんか？ そんな奴……それも皆さんの身近で「負けず嫌いで、臆病者で？」

「そんな奴……？」

聞いていたメンバー達の視線が辺りを彷徨い……そして、ある一点で固定された時、皆の表情はなんとも言えないモノへと変わった。

彼らの視線の先で、ソガが満面の笑みを浮かべていたからだ。

「ご丁寧にピースサインまで添えて。」

「ソガあ……いくらなんでも」

「それはよお……」

「自意識過剰つてもものじゃないかしら……」

「いやいやいや！ 別にね！ 俺がガッツ星人に勝るとも劣らない智将だって言いたい訳じゃなくつてですね！ オレでも考えつくような策は、とつくのとうにガッツ星人も考えていて、当たり前のように使ってくるだろうという事ですよ」

「言いたい事はわかるがな……」

「オレ如きの裏もかけんようでは、ガッツ星人の手のひらの上で一生踊り続ける事になりますよっ」

「……」

この時、得意気なニヤニヤ顔を突き出されたフルハシにとって、なにが一番、癪に障るか……それに対して妙に納得してしまった自分が居る事だった。

「で？ ソガ星人は何をしてくるんだ」



「ウルトラアマギはせっかちだねえ……ほらアンヌ、これを解いたらセブンはキミのモノだ。……とオレがこれ見よがしにその辺に置いていたとして、素直に信じるかい？ 誰でも触れるようなところにだよ？」

地図上に置かれていたセブンの人形を、キーチェーンでぐるぐる巻きにしてアンヌの前に放り投げる。マップが見やすいかなと思つて、私物を持つて来てたのだ。

縮尺に対してデカすぎるつてんで、ほつたらかしにされてたが……役に立つてよかつたよ。

「これを……」

持ち上げた人形とソガの顔を見比べるアンヌ、そしてそれを両脇から覗き込むアマギとフルハシ。

しばらく三人は怪訝そうにしていたが……やがて一斉に三者三様のしかめ面を披露する事となった。

彼らの脳内で、ソガが非常に憎たらしい顔をしながら鎖の端を摘まみ上げ、『はい、あげた』などとケタケタ笑い出したからである。

「ソガあ……いくらなんでも」

「それはよお……」

「もうちよつと大人になった方がいいんじゃないかしら……」

「自分で振つといてなんだけどき、みんなの中でオレってどういう扱いなの？」  
すると、我々のやり取りを黙って見ていた隊長が、にこやかに俺の腰を叩く。

みんなの肩から、イイ感じに力が抜けたのを見て取ったのだろうか。

「さて、諸君の考えるソガ星人、もといガッツ星人は、果たしてどんな手を使つて来るのか、聞かせていただきましょうか」

「ハッ、やはりなんといつてもですね、敵のバリアは強力です。あの時みたいに、セブンの周囲へ見えないバリアを張り巡らせてしまえば、我々がそこへ突つ込んでいった瞬間、壁にぶつかつて、たちまちドカーン！」

「いえ、それを待つ必要すらもないでしょう。なにせ、我々の目的が彼を救う事であるに分かつている以上、侵入コースもセブン正面のごく狭い範囲に限られます。あとは待ち伏せて、その飛行経路上を掃射してしまえばいい。敵の持つ武器は、それが出来るだけの基礎性能があります」

「……ううん、もつと言うなら、あの空中に見えているセブンの像そのものが、幻なんじゃないかしら。私達全員に催眠をかけて、集団幻覚を見せているのよ！ 偽物でなければ、わざわざあんな場所に置いておかないわ。取り返されないか、不安ですもの」  
「ひゃあ、そんな事が出来るのかい？」

「ああ……彼らの科学力であれば、空気中の塵や埃といった微粒子に映像を投影して、巨

大なホログラムを作り出すくらいは、造作もないでしょうね」

「なるほどなるほど……どちらにせよ、このまま飛んで行っても、我々は敵の罠に嵌る公算が極めて高い。という事だな？ みんなも随分と性格が悪くなったものだ」

ハツハツハとひとしきり笑った隊長が、さて……とこちらを見据えて来る。

「答えをお聞かせ願おうか、ソガ星人」

「答え、ですか？」

「そうだ、これらの策を取り揃えていた貴様は、これから我々に何をされると一番困る？」

「ああ……」

隊長の問いに、少しばかり考えて、俺は頷きを返した。

「流石ですね隊長、自分で言っておきながら、そういう視点で考えてはいませんでしたよ……私がこれから具申しようとしていた策は、私としてもバツチリ困る策でしたよ」

「ほう、それは朗報だ。言ってみろ」

「セブンにミサイルを撃ち込みましょう」

「……なに？」

あれ、聞こえなかったかな。

「セブンにミサイルを撃ち込みましょう」

キラキラした目でこつちを見ていたタケナカ参謀が、深いため息とともに、頭を抱えて机に崩れ落ちた。

「は？ ……な、バツカおめえ！ これから助けようつて相手にミサイルだあ？ このやろっ」

「フルハシさん、落ち着いて」

「そうです、ナツコさんの言う通りです。我ながら完璧な作戦なんです」

「どこが！」

「まずフルハシ隊員案のバリアがあった場合、ミサイルは途中で爆発しますが、バリアの場所が分かります。次にアマギ隊員案も、ミサイルは迎撃されますが、待ち伏せている敵の位置が分かります。最後にアンヌ隊員案、セブンが幻であった場合。ミサイルはセブンを素通りします」

「……もしもバリアや迎撃もなく、セブンが本物であった場合は？」

「ミサイルはセブンに直撃します」

「あのねえ……」

「大丈夫！ セブンはガッツじるしの十字架ケースに入ってるからさ。ワンチャン敵の拘束を破壊できれば一石二鳥じゃん？ というか、地球人のミサイルでガッツの箱やセブンが傷つくと思う？」

「ソガツ!!」

「ひえ、すみません!!」

怖え顔した隊長の叱責が飛ぶ。確かに今のは地球防衛軍としては失言だった。

「ま、まあ……ガッツ星人としては、セブンが本物であれ偽物であれ、このミサイルが着弾してセブンが死ぬのは困るので、それだけはなんとしても阻止する必要があります」

「なぜだ?」

「だって、地球人がセブンを先に殺してしまったら、ガッツ星人の処刑宣言が嘘になってしまいうからです」

「ああ……」

「なんでだ? 自分で殺す手間が省けていいじゃねえか」

「ガッツが先輩みたいに賢い考え方をする奴らなら、我々はお手上げでしたね」

「……?」

うーんと、苦い表情で唸っているのは参謀だ。

「いかに実害がないとはいえ、やはりウルトラセブンに地球人から攻撃を加えるというのは……彼は捕虜で元非戦闘員だ」

「その心理的ハードルの高さを乗り越えてこそ、ガッツ星人の意表を突けるんです! 奴らも流石に、いきなり味方を撃つとは思わんでしょ」

まあ、オレはあの空中に浮かんでるのが偽物って分かってるから、こーやって好き放題言えるんだけどさ。

あれかな、セブンが恒点観測員って明かすの、早まったかな……？

そんな時、何事かを考えていたアマギが顔を上げる。

「隊長、いかがでしょう。いつかの特殊噴霧装置を使つては」

「特殊噴霧装置……ふむ」

「ペダン事変の折、神戸港沖合のキングジョーに向けて、沿岸部の砲兵隊から、弾頭を換装した長距離ミサイルで攻撃してましたよね。あれならば、バリアを可視化できるし、セブンに直接当てる必要はありません、かすらせて十字架に着色できなければ、それは幻です」

「アマギおまえ……天才か」

「あらかじめ提言するなら、これくらいは考えておけよ……」

「よし、それで行こう！ 参謀！」

「うむ、現在展開中の各陸戦隊は、マナベ参謀が掌握してくれているはずだ。こちらから連絡しよう」

「お願い致します！ 我々は、万が一、空中のセブンが偽物だった場合に備え、2号以外に使える機材がないか、洗い出すんだ！」

「了解!!」

方針が決まり、各々が慌ただしく動き始めていく……

「あ、そうだ参謀。ついでにマナベ参謀へ許可を取って頂きたい事がありました……」

泉が丘上空に、巨大な十字架が浮かんでいる。

ガラスで出来たかのような透明な箱の中では、深紅の巨人が身じろぎ一つせず、ただぐったりとその身を露にしていた。

その十字架は、巨大であると同時に空へ浮かんでいるが故に、どの方角からでも、視力の許す限りという注釈はつくものの、非常に遠くからでも観察が出来た。

直下は防衛軍によって規制されているが、深夜だと言うのに詰めかけた報道陣のカメラがあらゆるアングルから、捕らええらえた巨人の姿を中継している。

常であるならば、異星人の人権を無視したマスコミの破廉恥さをなじるべき場面ではあるが、それも仕方ない。

地球の為に戦ってきた正義のヒーローが、あと数時間で処刑されてしまうというのだから。

そこへ……遠方より、一本の矢が飛来する。

「アツ！ ご覧ください！ あれはなんでしよう!? 防衛軍の新兵器でしょうか！」

だが、矢は突如として現れた光の奔流に飲み込まれ、空中で呆気なく爆散してしまつた。

ガッツ星人がパルスレーザーで迎撃したのだ。

彼らは、ウルトラ警備隊が必ずセブン救出の為にやってくると思信していた。

こうして囷を晒しておけば、例え畏と気付いていても、飛び込んで来ざるを得ないだろうと。

なにせセブンこそが彼らの希望であり最終手段だ。どう足掻いても彼を解放しなくては地球人に勝ちの目は無い。

であるならば、残されたウルトラホーク2号に乗って、やってくるはずだ。

2号はホークシリーズの中でも大気圏外での航行を主軸に置かれている為、地球圏内の機動性など、おまけのようなもの。

こんどこそウルトラ警備隊を一網打尽に出来る……と思っていたのだが。

……はて、今のがそうだったのだろうか。

シルエットはよく似ていたが……

と、ガッツ星人が空中の画像を拡大しようとしたその時、爆炎の向こうから、新たな



矢が飛び出してきた！

1本、2本……さらに無数！

それが……全方位からセブンに目掛け殺到する！

もちろんガッツ星人の高度な迎撃システムの敵ではない。

ミサイル群は目標に到達することなく、その全てが撃ち落とされてしまう。

だが……彼らは充分に仕事を果たしていったと言えよう。

なにせ彼らの仕事は弾着することではなく……周囲に、赤い特殊塗料の雲を撒き散らす事だったからだ。

途中までは噴霧装置が、そして最後は爆散のショックで特殊塗料が広範囲に拡散する。撃ち落とされようがされまいが、どちらにせよ彼らの仕事は完遂するのだから、なんと易い。

そうしてガッツの迎撃が完了した時、セブンの十字架は周囲から非常に濃く、分厚い塗料の雲で覆われてしまった。

ガッツ星人も当初はこのミサイルこそが、セブンを蘇らせる新兵器なのかと疑ったが……この霧になんのエネルギー反応も見受けられず、盛大に肩透かしを食らってしまった。

そして、気付いた。これは煙幕なのだ。

これで視界を塞ぎ、その隙を突いて第二陣、ホーク2号なり本命のエネルギー弾なりが飛んでくるのだと。

だがお粗末なり地球人、このような手でガッツ星人の目を欺こうなどと。

彼らは高笑いと共に気流を操作し、一瞬にして、真つ赤な雲をきれいさっぱり洗い流してしまった。

そう……洗い流してしまったのだ。

だが、ガッツがこのように常ならぬ悪手を取ってしまったのも、仕方のない事であるといえよう。

彼らの計画、戦術は、対象を正しく認識してこそ発揮される。だが、ガッツ星人は、この煙幕がなんたるかを、十全に理解しきれていなかった。

いや、使用した側である地球防衛軍も知らず、なんならあのソガ隊員ですらも見落とっていた、ある一つの秘密が、この煙幕には隠されていたのだ。

それは……この塗料が、一体誰によって考案されたのか……という部分。

なにを隠そうこの装置は……モロボシ・ダンの発案したものなのである。

防衛軍にとってモロボシ・ダンはまだの地球人だ。だから決してそう評される事は無い。

ソガやガッツ星人からすれば、たかが噴霧装置、ダンが考えたから何だと言うのか？  
『兵器』というイメージからはほど遠い。

だが、マルス133が人類の手で作りだされた初のメテオールであり、マグマライザーが初めて量産されたメテオールなのだというならば、これは、この特殊噴霧装置は紛れもなく、『異星人の監修の元に作り出された最初のメテオール』なのである。

だが、特殊噴霧装置とはいうものの、一体何がそんなに特殊なのか？ 通常の霧吹きと何が違う？

使用している塗料が、特別粘性が高く特殊だから、それを霧状に変えるのに特別な装置が必要なのだ。

この特殊塗料は、モロボシ・ダンの、まだウルトラセブンですらなかった者の恒点観測員としての知識から生み出されたものなのである。

なぜ観測員が塗料の知識を？ と思うかもしれない。

それは、恒点観測員がどういう業務か、という部分に起因する。

まず、非常に勘違いされやすい事だが『恒点観測局はM78星雲独自の組織ではない』という事だ。

この勘違いは、恒点観測員のうち、他文明に接触するという選択を取るものが、ほぼほぼM78星雲人の観測員に限られるから、という部分によるところが大きい。通常の観

測員は、観測対象の文明とコンタクトを取ったりはしない。

故に、恒点観測局ⅡM78星雲人というイメージが銀河に広がる一因となつてしまつてゐる。

だが、観測員の任命リストを広げてみた時、その構成員の割合に対して、光の国の住人が占める割合のなんと少ないことか！

当然である。

この無限に広がる広大な宇宙に、線を引き、未知を観測し、安全な星図と航路を設定するという職務に対して、あまりにも人手が足りないのだ。

宇宙の地図は、そこを行く全ての者が必要とする。それが例え善人であれ悪人であれ関係ない。地図がなければ闇を無限に彷徨つて死ぬだけだ。

だからこそ、あらゆる種族が垣根を超え、それぞれの思惑を一旦脇へやりながら、手を携えて、宇宙の端へ向かつて散り散りに飛んでゆく。

そんな恒点観測員達の勤務地は常に未知の領域であり、不慮の事故と、それに伴う遭難というアクシデントも付き物である。

恒点観測員に求められるものは何か？ 高度な計算能力？ 原生生物を制圧する腕力？ その全てに勝る真の素養、それすなわち、サブバイパリティ生存能力なのである。

なので彼らは宇宙船が故障した時でも生存が可能ないように——身一つで宇宙空間を

航行できるようなふざけた種族は、銀河にも数えるくらいしかない——ありとあらゆるサバイバル知識を叩きこまれる。

局が指導している護身術も、このサバイバル技術の一環であり、極限状態を想定したテストに合格した観測員が、自動的に一般的な戦士階級と遜色ないレベルまで鍛えられて送り出されるが故に、結果として恒点観測員は全体的に強くなりやすい傾向にある……というだけの話。

なぜ、モロボシ・ダンがエリートレンジャーの集まりであるウルトラ警備隊において尚、サバイバルの専門家として名が通っているかというところ——今更になるが、一般人であるモロボシ・ダンがなぜ入隊できたのかは、この知識で一芸入隊したようなものだ。サバイバル訓練で防衛軍史上初となる100点を叩き出した男を、軍が放っておくはずが無かった——つまりこういう事だ。

そしてサバイバルにおける染料の合成知識……一見地味だがこれも必要である。現地の簡易マップの作製や、必要な情報のメモ……そして、救難信号の作成。

つまり彼らにおける染料・塗料というのは、そのグレードを上げた先に、空中ヘサインを書き記す事ができる信号弾レベルの物も含まれるという事。

成層圏からでも観測可能なぐらいに発色がよく鮮やかで、かつ耐用年数の極めて高いものが望ましい。

だが、不時着した星の物資で、一体どのグレードの物が作成できるか分からない以上、出来る限り多くの精製知識を持つておくことが推奨される。

風の噂に、素人でも宇宙空間へすぐさま救難信号を打ち上げる事ができる技術が、目下研究中らしいと聞くので、そのうちこの慣習は廃れていくかもしれないが。

モロボシ・ダンが提供したのは、そんな知識の一片。

現在の地球上の物質と科学力で精製可能な、理論上そして実質的ハイエンド品。それこそがこの深紅の塗料なのだ。

この赤い液体は、一度付着すれば、並大抵のことでは流れ落ちたりしない。

そんな霧に囲まれて、数十秒後にシミ一つない綺麗な姿を晒したとあれば……一体どんな手品を使ったのかと疑われても無理はなからう。

特に、この液体を精製し、移動させ、保管したり、あまつさえ使用するような業務に従事したことのある者であれば、どれだけ注意深く作業を行っていても、全く気付かない内に、裾や袖口があかあかと輝いていた……という経験を持つていて、そんな苦苦しい記憶を持つ現場の隊員達からすれば、それを目にした時、一斉に同じ感想が口をついてしまっても、仕方のない事だった。

「……そりゃあ、嘘だろ」

あらゆるものが見守る中で、闇夜に浮かんだ綺麗な十字架は、だんだんとその輪郭をぼやけさせていき……

やがて綺麗なさっぱり消失してしまった。

## 地球圧殺計画 50%

空にあったセブンが幻であったら、いったい本物のセブンはどこにいるのか。手がかりは全くつかめない。夜明けは近い！

「くそう……あとはセブンを見つけてこいつをぶち込むだけだつてのに……」  
「肝心の本人が見当たらないんじやなあ……」

作戦室で悩むフルハシの袖を、誰かが引つ張る。

「ん？ ナツさん……申し訳ないけど今はね、相手してる余裕がなくなつてさ」

「違うわ、フルハシさん。見くびらないで。アタクシだつて地球人の端くれ。今まで散々セブンに助けて頂いたのは変わらないんだから、その恩を返す義理は、アタクシにだつてあるはずよ」

「義理つてねえ……」

「要はセブンの場所が知りたい。セブンの場所つていうのは、あのヘンな動物の巣を見つければいいんでしょう？」

「ナツさんにかかりや、ガッツの秘密基地も、枯れ枝で出来てるみてえに聞こえてくる



なあ……」

「おんなじよ、おんなじ。ジバチの巣をどうやって見つけるかご存じ？ 匂いでおびき寄せたハチに、紐を結わえた餌を運ばせて、それを追いかけるのよ」

「ほーん、匂いねえ……ガッツ星人が涎たらして飛びつきそうな餌がありやな」  
「いるじゃない、ここに」

そうしてナツコは、その場でぐるりとターンを決めて見せた。

「……え？」

「あちらはニセモノの石を掴まされてカンカンに来てる筈だワ。そこへアタクシがフラフラ出て行けば……」

「そりゃあ名案だ！ ……とでも言うと思ったかい？ ナツさん、いくらなんでもそりゃあ危険過ぎるよ」

「でも、他に手がありました？ それにね、カンカンなのはアタクシもおんなじ。あちらさんに一泡吹かせてやらないと気が済まなくてよ」

「おいおい……」

「それに……いざとなったら、フルハシさんが助けてくれるでしょう？」  
「参ったなあ……」

参ったなあ……じゃないよフルハシ先輩。

こういう流れだったのか、あの作戦。

いやはや、流石のナツコ女史だ、感服いたしました。

発信機つけたナツコさんの車を囿にして、その後ろをフルハシがポインターで追っかけるというすげえ原始的な作戦……原始的すぎて逆にガッツ星人にブツ刺さったアレは、ナツコさん側からの発案だったか。

「でもね、その必要はありませんよ、お二人さん」

「ソガさん!？」

「良かった……なんか策があるんだな!？」

「ええもちろん。……ナツコさん、貴方は地球人の鑑だ。その覚悟は立派なもんだよ。俺は敬意を表する。貴方みたいな人が沢山いるから、きっとこの地球はずっと勝ち続けてこれたんだ」

「ソガさん……」

「でもね、今回ばかりは俺に活躍を譲ってくださいいな。民間人を盾に使ったとあつちや、ガッツ星人に面と向かって啖呵が切れなくなっちゃいますから。そりゃあ、どうにもならない時は、喜んでお力をお借りする所なんです……まだ、俺の手札は品切れちゃいないんでね」

「……仕方ありませんわね。今回は大人しくしておきますけれど、そのかわり……期待

してよろしいんですね?」

「お任せください!」

俺が自信満々に取り出したるは、紙切れ一枚!

「……これは、電報?」

「ええ、誰からだと思えます?」

「おや、マナベ参謀から返事が来たか」

「タケナカ参謀……いくらなんでも解答がお早いですよ……」

「マナベ参謀からだって?」

参謀や隊長の声に、皆が集まってくる。

「我々は現在、セブンの居場所が分からんわけですが、まあガッツ星人のおひぎ元に居るだろう、という事は何となく察せます。つまり、セブンを見つげなくとも、ガッツ星人の居場所が分かれば、その周辺を探せばいい」

「ガッツ星人の潜伏場所だって、正確な位置は分からんぞ」

「いいや、分かるね。なんせ奴らはその手がかりをずっと垂れ流し続けてる……時にアマギ、セブンの通信はあのあとつかい拾えたかい?」

「いいやまったく。あれからずっと妨害電波で邪魔されっぱなしだ」

「いいねえ! じゃあその妨害電波は誰が出してる?」

「それはもちろんガッツ星人が……いや、まてよ……妨害電波?」

「防衛軍には、妨害電波に滅法強い兵器があつたよな?」

「……新兵器、キリー!」

「うむ、あれなら逆に、妨害電波にくらいついてゆく……」

多分、ガッツがやってるのは、ノイズジャミングとかいう、ばつちくそに強力な電波で他の電波を上から塗り潰すタイプの電波妨害だ。

ふつうは特定の周波数帯に向けてやるもんだが、なんとガッツ星人様はそれを全帯域に向けてやっている。流石としか言いようがないが、単純であるが故に対処が難しい。

対抗するには、間に何個も中継点を設置したりとこれまたゴリ押しで対処するしかない。本編のフルハシカーは、その後ろに何個も地上部隊の通信所があつたからこそ成せた技だろう。

ところが、この方式はその強力さ故に、周囲からはその発生源が一目瞭然となつてしまふという欠点がある。ガッツ星人にとつたらデメリットでも何でもないけど。

ようは大声で『俺が一番強いぞー!』と叫んでいるようなものだ。電波妨害の仕方まで、自己顕示欲の塊みたいな奴らである。

そして今回はそれが仇になる。

新兵器『キリーミサイル』

いつかの散歩する惑星を、進退窮まったマナベ参謀が、これを使って吹き飛ばそうとした事があったが……結局使われないまま死蔵されていた。

特筆すべきはその威力……ではなく、妨害電波にくらいついていく、という特性の方だ。

分類としてはパッシブ方式と呼ばれる誘導方式になるんだろうが……普通、このタイプのミサイルは、撃つ前に、目標となる周波数を入力してから撃つ。そうしないとあっちゃこつちや飛んで行ってしまいうからね。

ところがキリーはそんなまどろっこしい事しない。撃ちっぱなしで、ハイ終わりだ。内容がなんであれ、一番強力な電波の発生源に向かってひたすら飛んでいくように設計されている。ある意味で狂つてると言えなくもないが……この世界じゃ一番理に適っているとも言える。

なんでって？ 大抵の敵が、未知の周波数を使ってて、かつ、地球のどの周波数よりも強力な電波を巻き散らしてる事が多いからだよ！

具体的にはユーフォーとかUFOとかゆーえふおーとか！ たまにキングジョーとかまで飛んでくるし。

だから敵がいるタイミングで引き金を引いたら、十中八九敵に向かって飛んでいくやろ……みたいなゆるゆる設計思想で作られているのが、このキリーミサイルちゃんであ

る。参ったね。

一応、基地のミサイル系統の装備は、陸軍の管轄だから、使用許可はマナベ参謀に貰わないといけないのだ。

「今この瞬間、地球上で一番強い電波を発してるのは、間違いなくガッツ星人ですから、奴らの所へすつ飛んでいきますよ」

「しかし、その隣には今度こそセブンがいるんだぞ……」

「大丈夫大丈夫、さっきの見たでしょう。キリーミサイルだろうが変わりませんよ。俺達の大事なセブンは、ガッツが必死こいて守ってくれますから。むしろ、こっちも死ぬ気で攻撃しないと、俺達が行くのがバレてしまいます。ガッツには、『え、まさか地球人、火力で押し通るつもりなの？』って思ってた貰わなきゃ」

「うーむ……」

その点、キリーの大火力はおまけとはいえ、良い隠れ蓑になるかもな。

「本命はあくまでも我々です。マグマライザーで地下からバリアの中に潜り込んで、マグネリウムをピピーつとね。キリーもマグマも、どちらもガッツ星人の知らない初見殺しです。だからこそうまく行きます。この作戦に全てを突き込むべきです！……奴等はね、既知では絶対に殺せないんです。常に未知をぶつけ続けて、訳が分からないう

ちに不意打ちで素早く殴り倒してしまおうしかない。そういう手合いですよ」

「……よし、こうなったら全火力をガッツへ集中するより他あるまい。内陸へ砲撃可能な全艦艇を、最寄りの湾港へ集結させられないか試してみる。砲兵隊の指揮は、マナベ参謀が採って下さるだろう。君達が突入するまでの目くらましくらいは、任せてくれたまえ」

「了解いたしました。諸君……この作戦にセブンの、ひいては地球の命運がかかっているのだ。いいな！ 総員出動！」

「了解！」

「ナツさん、ここで待っていてくれ。俺達がきつと、セブンを助けてくるから！」

「フルハシさん、気を付けて！」

かくして、地球防衛軍の総力をあげた、盛大な反抗作戦が開始されようとしていた。極東基地の側面、崖にカモフラージュされたミサイル発射口が展開し、ランチャーに懸架された二本のキリーミサイルが、鋭い切っ先を露わにする。

それだけではない。

基地の各所に隠されていた、ありとあらゆる発射口が開いては、今か今かと攻撃の時を待っていた。

「全サイロアクティブ」

「各セクションのミサイルハッチ、一番から八番、解放確認！」

「よろしい。キリー以外の誘導兵器は、まだ諸元入力しなくていい。第一射の着弾地点が確認出来次第、観測結果を元に地点爆撃を行う」

「ハッ！ 再通達します」

「各駐屯地、全兵装オールクリア」

「マナベ参謀からも各部隊展開完了との事です」

「……キリヤマ隊長、そちらはどうか？」

「準備完了。いつでもどうぞ」

「うむ。……これより作戦を開始する！ キリーミサイル、発射！」

「発射！」

その言葉と共に赤いボタンが押し込まれ、極東基地から一本の矢が放たれた。人類の反撃を知らせる鎗矢が。

拘束から解き放たれたキリーは、しばらく中空をひた走っていたが、やがて、ひとところから強烈な電波が発されている事に気付いた。



嗚呼、我慢ならん。

驕り高ぶった者達が、その所在を所構わず喧伝しているではないか。キリーミサイルは忽ち怒り狂って、そちらの方角へ向け、一直線に飛んでいった。

飛んで飛んで、ひた走って。推進剤の許す限りの速度で、風を切り、音を置き去りに、彼我の距離をあつという間に飛び越えて……

轟音。

泉ヶ丘西方の崖つぶちを、とてつもない衝撃が揺さぶった。

怒れるミサイルの巻き起こした、極大サイズのキノコ雲は、四方八方あらゆる場所からよくよく見える。

キリーは核兵器ではないものの、直径一キロの浮遊島を余裕で消し飛ばす事が出来るのだ。

例え夜間飛行であっても、周辺を哨戒していた偵察機からは丸見えであったし、泉ヶ丘を遠巻きにしていた歩兵分隊からでも、もはや双眼鏡を必要としない程度に立派な爆撃マーカ―が屹立していた。

妨害電波によって、レーダーと通信網が妨害されたとしても、まだ人類には立派な目と手足があつた。

たかがその程度の妨害では、この野蛮な種族に戦いを諦めさせるには、全くもつて足

りていないのである。

「キリー着弾！」

「火球は空中で発生したとの報告あり。目標地点には、常時バリアが展開されている模様！」

「各部隊からの観測情報、来ます」

「集計値より、敵本陣はポイントD-40-kと推定」

「よし！ 聞いたな!？」

「ハッ！ マグマライザー、発進！」

「位置情報を各部へ通達。マル・サン・ヨン・ゴー時点で総攻撃を開始する。時間合わせ！」

ここからが正念場だ。

警備隊の到着まで、ガッツ星人の興味を引き続けなくてはならない。

「……時間だ。ミサイル一斉射！」

タケナカの号令で、極東基地の持ち得る、全ミサイル攻撃能力が唸りをあげて発揮されていく。

各駐屯地からも同時発射された、大小合わせて計数百発のミサイル群が、ガッツ星人の潜伏場所に殺到した。

しかし、地上から伸びた光の奔流が、上空をひとなぎすると、バリアに阻まれるまでもなく、その全てが火球へと変わった。

「ミサイル、全て迎撃されました」

「流石だな。……しかし、分かっていた事だ。ウエノ通信士！」

「ハッ！」

「第一、第二打撃戦隊に、艦砲射撃を要請せよ」

「了解！」

沿岸に停泊していた戦艦群に対し、手旗信号が送られる。

「参謀直々のご命令だ。一発も外すんじゃないぞ」

「丘の上で止まっている相手に、どう外せと仰るのです」

港に大輪の華が咲く。ガッツ星人の透明なドームが、横合いから凄まじい速度と質量でもって殴りつけられる。

それでもビクともしないバリアー。まさに人智を超えた技術なのだ。

「艦砲射撃の第一射、敵のバリアに防がれました！」

「狼狽える必要はない。我々は粛々と役目を果たすのみだ。次の装填まで、攻撃を引き継ぐぞ」

前線指揮所でマナベが沈着に指示を下す。

泉ヶ丘一帯をぐるりと取り囲んだ砲兵隊は、彼の素早く構築した電信網によつて、その全てが掌握下にあつた。

「第一から第八陣地は、目標地点に30秒間の自由砲撃を加えよ。座標の振り分けは把握しているな？」

「問題ありません」

「よろしい、第九以降の陣地は別命あるまで待機せよ。これより砲撃を開始する」

マナベの計算され尽くした統制射撃が、ガッツ星人のドームに降り注ぐ。グリッド状に細分化された敵陣に、余すところなく、かつ、一切のムラなく均一に、鉄の雨が降り注ぐ。

練度に裏打ちされた名人芸は、とある目的を孕んだものだ。すなわち、敵のバリアはどこまでの範囲を覆っているのか？

不可視のバリアも、その範囲外にある地面を砲撃から守る事は出来ず、バリアの外だけは、無惨に耕し尽くされていく。

そうして、その様子を歩兵隊がしっかりと観測し、後方にフィードバックしていくのだ。そして。

「敵からの迎撃が止まりました」

「今だ！ ミサイル第二陣、発射！」

流石のガッツ星人も、ミサイル以下の体積で飛翔する砲弾に対して、いちいちその全てを撃ち落とそうとはしないのではないか。タケナカの読みは当たっていた。

なぜなら、彼らのバリアは非常に強固であるが故に、そうする必要がないからだ。

そして、その油断こそが、人類の付け入る隙となる。

艦砲射撃や砲兵隊の爆撃が降り注ぐ中、発射されたミサイル群。それをガッツ星人は素通しした。

地球人の火力では、自分達の防御が抜けない事を、この時点で確信していたからである。

位置がバレた後の初手は、何が飛んで来るか分からない為に迎撃したが、なんの事は無い、最初の一発が一番威力のあるものだった、というのは些か拍子抜けと言うべきか。

そんな余裕と共に見守っていたミサイル群が、一斉に赤い雲を吐き出したのを見て、ガッツ星人は思わず舌打ちを禁じ得なかった。

……小賢しい真似を。

地球防衛軍は、ガッツ星人が迎撃を止めたところを見計らって、特殊噴霧装置付きのミサイルを織り交ぜたのだ。

不可視のドームが赤く色付き、その全容を露わにしていくな。

「上手くいったぞ！ 上空の爆撃編隊に発光信号を送れ！」

「はいっ！」

基地のサーチライトが、最大出力で明滅し、作戦空域のギリギリを旋回しつつ待機していた、大型爆撃機の群れにゴーサインを届けた。

「待ちくたびれて、帰ろうかと思つてたところさ」

彼らは、各飛行場からスクランブル発進した、寄せ集めの特別編隊である。

腹の爆弾槽には、それこそ各基地からかき集めた、ありとあらゆる兵器が満載となつており、重力に引かれてのダイビングを、今か今かと待つていた。

「全機、不法投棄のお時間だ。……お行儀悪くいこうぜ」

でっぷりと太った鴉達は、真紅に塗られた廃棄場の真上に到達すると、抱えていた荷物を一斉に投下した。

別に比喩ではない。

なぜなら、彼らの運んでいたのは、その殆どが年代物の爆発物であり、老朽化によつて廃棄処分間近のものばかりだったからだ。

爆薬の廃棄処理というのは、実はそれなりにコストがかかる。例えどんな物でもゴミを捨てるには金がかかるものなのだ。……そう、金が。

ところが、それをなんとタダで全て引き受けてくれる者がいるという。備蓄は必要だが、古くなればなるほど、不発弾のリスクが高まり、実戦では新しい物から使われてい

く。この爆撃編隊を、一体誰が差配したかは言うまでも無い。

ましてや、各地の爆撃隊は、迎撃戦闘機に比べて出動機会が圧倒的に少ない。

なぜなら、セブンやウルトラ警備隊が迅速すぎて、彼らが爆装している間に事が全て終わっている……なんて事がザラだ。

後詰め of 悲哀というべきか……贅沢な悩みであるのは重々承知だが、地球上の怪物が一掃されてからこつち、彼らの活躍は余りにも減ってしまった。

それこそ怪物頻出期は花形であつたのに。

そんな鬱憤を晴らすかの如く、不良在庫の絨毯爆撃は驚く程に濃密に、かつ、執拗に成された。

勿論、全てが中古品と言う訳では無い。一部には、最新式の化学兵器や、特殊兵装、果てはEMP弾擬きのような物まで、盛大に落つこととして行く。

……その全てが、正式採用の見送られた失敗作だったり、技術的知見を得る為だけに作製された試作品であつたり……生産ラインに載っていない記念品の類である、と言う点に目を瞑れば、まさに新兵器のオンパレードだった。

ガッツ星人からすれば、僅かな可能性に賭けた地球人が、あの手この手でこちらを攻略しようとしているように見えた為に、その闘争意欲を非常に満足させる良質な出し物だつたのだが……彼らはヤナガワという一人の地球人から、体の良いゴミ箱扱いされた

事に、まだ気付いて居なかった。

ガッツ星人は、その崇高なる足掻き様で、こちらを満足させた礼として、白んでいく空に、高度を上げて去って行く爆撃編隊へ、対空砲の照準を合わせるが……再びの轟音と共に、大量の土砂が巻き上げられ、興が削がれてしまった。

二本目のキリーミサイルが着弾したのである。

ガッツ星人は、流れるような連携に賞賛を送りつつ、しかして効果の無かった地球人の攻撃を嘲笑うと、セブン処刑の準備を着々と進めていく。

エネルギーが無くなったとはいえ、M78星人の肉体は強靱だ。

まずはその自己認識を塗り潰してやるところから始めなくては。

赤く色付いたドームの中で、楔型のドローンが三機、悠々と浮かび上がり、十字架に納められたセブンの頭部に、粒子状の自我崩壊因子を浴びせていく……

ガッツ星人は、セブン処刑という地球における最大の目的を前にして、興奮の最中にあった。

だから、気づけなかった。

ドームの中で、地面が僅かに隆起していく事に……



「隊長、振動音が消えました！」

聴音機に繋がれたヘッドホンを耳に当てながら、フルハシが振り返る。

「よし、ここだな。マグマライザー上昇！」

「了解！」

キリヤマの号令に合わせ、アンヌがレバーを引くと、マグマライザーの車体が徐々に傾き、上へ上へと登っていく。

エネルギー管理に専任しているアマギが頷いた。

「マグネリウムエネルギー、安定しています。いつでも撃てます」

「よし、後は任せるぞ、ソガ」

「……はい！」

レティクルを操作する指が、手袋の中で汗ばむのを感じる。

そして……

一瞬の浮遊感と共に、俺達の視界が、一気に開けた。

銀のドリルで岩盤を穿ち抜き、マグマライザーが地上に姿を現したのだ！

参謀達主導の総攻撃は、ガッツ星人への目眩ましという目的とは別に、もう一つ、ある重大な狙いがあった。

それは、地中潜行中のマグマライザーに、浮上地点を教える、というもの。

ガッツ星人のバリアは凄まじい。

全ての攻撃を遮断するだろう。

それはつまり……バリアの内側に入れば、砲撃による音も振動も地下まで全く伝わってこない、という事だ。

通信は効かないし、地中にいるので目も見えない。そんな我々にどうやってバリアドームの境目を知らせるかと言うと、バリアやその周辺の地面を延々叩き続けて、音が聞こえなくなったら、その上にドームがあると分かる。

めっちゃ簡単でしょ？

「アッ！ セブンだ！ ケースに捕まっている！」

「今度こそ本物だろうな!？」

「大変、もう攻撃されているわ！」

「じゃあ本物だ！」

エンジン出力を上げて、どんどんセブンに接近していくマグマライザー。

こちらに気付いたのか、ドローンの1機がこちらに機首を向けて、レーザーを撃つてくる。

「きゃあつ!! ……負けるもんですかっ！」

ハンドルを握るアンヌが、アクセルを全開に突撃する。

レーザーが車体に直撃するが、それでも怯まず前進あるのみ。

機体の装甲自体が、空力特性を得るための重要なフックになる。マグマライザーの車体は破損しても、直ちに走行に影響がない。

地中潜行中はモノコック構造がモノを言うが、被弾時はブロック状に仕切られた内部構造が空間装甲のように働いて、中枢部を堅く防御する。

機体表面に穴が開こうがどうしようが、エンジンさえ無事なら、ひたすらにタフだぜ、こいつは！

「俺達を止めたきや、富士山でも持つてきな！」

「そのままつき進め！」

装甲版が弾け飛び、各所から炎を吹き出しながらも前進し続けるマグマライザーを見てとり、ドローンはセブンを攻撃するのを止め、三機で取り囲み、その機体の最も脆弱な部分を狙い撃った。

戦車の泣き所は足回り……すなわち、前輪の車軸と、キャタピラ部分である。

「やめて！ やめなさい！ うううう……!! ああつ！」

「うわあつ！」

履帯が千切れ、タイヤがごろりともげていく。

それでも余力で数メートルは進んだものの、ついに停止してしまふマグマライザー。

「くそつ、駄目か！」

「……いいや」

スコープを覗き込むソガが、ニヤリと笑う。

彼の目には、ぐったりと項垂れる巨人の額、今は明かりの消えてしまった緑のランプがしつかりと見えていた。

「遅かったなあつ！」

彼がトリガーを引くと、黒い土竜の鼻先から、青白い光が帯のように放たれる。

それは、狙い違わずセブンの額に吸い込まれ、警備隊の面々からは、赤い巨人の体が、一瞬輝いたように見えた。

「いつけえええええ!!」

## 地球圧殺計画 60%

男は、闇の中を歩いていた。

目のさめるような真紅の肉体に、銀細工を貼り付けたような姿をした、不思議な男だった。

彼は虚空に向かって何事かを叫んでいる。枯れ果てた喉で、あらん限りの声を振り絞って何かを伝えようとしていた。

しかし、言葉が彼の口から出た瞬間、周囲の闇が忽ち纏わり付いて、それを掻き消してしまう。

さつきからずっと、その繰り返しだった。

それでも、男は叫ぶのを止めない。何か、そうせねばならないような……使命感のようなものが、彼を突き動かしていたからだ。

だがもはや、一体何を伝えようとしていたのかすらも忘れてしまった。とても……とても大事な秘密を教えなくてはならなかった気がするのだが……教える？ 誰に？ 分からない。

それでも彼は叫び続ける。なぜなら、そうせねばならないから。

もしかすると……彼が声を発し続ける事自体が、重要なかもしれない。

そうだ、きつとそうに違いない。そうすれば彼らが絶対に私を見つけてくれる。

彼ら……？ 彼らとは誰だ？

……分からない。

苦しい。

男はついに立ち止まってしまった。

彼はとつくに満身創痍で、精も根も尽き果ていたのである。

肉体は至るところが傷つき、ボロボロで、全身からだらだらと血を流していた。

……そう、血だ。

彼の躰が赤いのは、頭のとつぺんからつま先まで、余すところなく血で汚れているからなのだ。

別にその全てが彼の流したものという訳でもない。誰かの返り血だつて含まれているだろう。でもそれが誰のものだったのか、どこからどこまでが自分の血か、さつぱり分からない程度には血みどろで、なにより彼は、もはやそんな事すらも気に止められない程に消耗していた。

ただ右も左も、立っている地面の感覚さえ分からないこの空間で、全身をじつとりと

濡らす赤い液体の気怠い重みだけが、唯一の感覚だった。

急にそれが堪らなく不快に感じた男は、両手を顔の前まで持つてきて、掌を覗き込もうとする。

だが悲しいかな、目の前には吸い込まれそうな程に深く、濃い漆黒が広がるばかりで、どれだけ近づけても指の輪郭すら判別できなかった。

目も視えず、音も聞こえず、あらゆる感覚が遮断されたこの世界に放り込まれてから、自分はいったいどれだけ歩き続けてきたのだろう。

思えば、自分の手足も長らく視界に入らなかつたので、果たしてそれが本当にまだあるのか確信できない。もしかしたら、とつくの昔に千切れていて、はるか後方で転がっているのではないか？

彼はその疑問を解消しようと、広げた両手を、そのままさらに近づけて、自らの顔面をぺたぺたとまさぐった。

頬を、口を、鼻筋を、目を、あるいは耳を。

それらの位置や形を見極めようとして……粘ついたもので指の先がずるりと滑るばかりで、ちつとも詳しい事が分からないのだった。

はて……私はいつたい、どんな顔をしていたのだったか？

というよりも……私は……

わたしはいつたい、ナニモノなのだろう？

ふと、激しい眩暈を覚えた男は、自身の目の前で、険しく切り立った溪谷が唐突に口を開いた事を理解した。

闇の中を見通せず、地面の感触どころか何の気配も感じられないが、分かるのだ。自分の目の前で、道がふつつりと途絶えてしまっている事が。

ああ、そうか……

わたしは、死ぬのか。

あと一步踏み出せば、この肉体は容易く重力に引かれて滑落し、谷底に叩き付けられてバラバラに千切れ砕け散ってしまうのだ……という事をソレは悟った。

……それも良いかもしれないな。

なにせ彼は疲れていた。



もうこれ以上どうしろというのだ。

長く苦しい道のりを、血へどを吐きながら歩き続ける意味がいつたいどこにある？  
……終わりにしよう。

彼は、錆び付いたように重たい足を、ギクシヤクと持ち上げて、先に広がる深い深い奈落の底へと踏み出した。

ああ、さいごに一目だけでも……

「そつちへ行つてはダメっ！」

彼の腰が、何か太い綱のようなモノで後ろへ引つ張られた気がした。

尻餅をついたまま、声のした方向へ、ぼんやりと顔を向ける。

すると、闇の中を誰かが走ってくるではないか。

その誰かさんは、地味な色合いの隊服に身を包み、まだあどけなさの残る小顔に、まったく似つかわしくない厳ついヘルメットを被って、白い手袋に包まれた右手をぶんぶん振りながら此方へ駆けてくる。

「もう、こんな所にいたのね！」

「キミは……」

彼女は腰に手を当てて、若干の不機嫌さを滲ませながらも、確かな安堵と深い愛情の籠もった瞳で、青年の姿を見下ろした。

「ダン！ 随分探したんだから！」

「……アンヌ」

アンヌの差し出した手を、半ば反射的に掴んだダンは、強引に引き起こされたせいで、立ち上がった後に少しばかりよろめく羽目になった。

「ほら、早く行きましょ？ 隊長がお冠よ」

「う、うん……」

いつの間にか隊服に身を包んでいたダンは、彼女に手を引かれるままついてゆく。

ぼくは何をしていたんだっけ……？

いまいち状況の飲み込めないダン。

何か大切な事をしなくちゃいけなかったような……？

「ホラ、もうアナタの出番が来ちゃってる！」

「出番……？」

アンヌの指さす方向には、闇の中にぽつんと、スポットライトで照らされたかのように

に、マウンドとバッターボックスが浮かび上がっていた。

「……なぜ野球？」

首を傾げたダンの脳裏に、いつかの記憶が思い起こされる。

……そういえば、キリヤマ隊長に連れ出されて、みんなで野球の猛特訓をしたことがあつたっけ。

隊長曰く、心身を鍛えつつ、連携を磨くのに最適だ……と、レクリエーションの名目で行われたソレは、案の定、普段の訓練にも勝るとも劣らない厳しさと敢行され、千本ノックの後半では、ソガ隊員が半ベソでボールを追いかけていた……ような気がする。

……そうか、今日がその成果を披露するための、大事な試合の日だったのか！  
すっかり忘れていた。危ないところだ。

ダンが冷や汗を拭うと、彼はいつの間にかユニフォームに着替えて、打席に入っていた。

「……いつの間に」

いやいや、今はそんな事を気にしている場合ではない。

勝負に集中しなくては。

ダンはバットを強く握りしめ、マウンドに立つ相手の投手をしつかりと見据えた。

青白く、不健康そうな顔立ちのピッチャーが、大きく振りかぶって……投げた！

「……………うっ!？」

途中で上下左右に揺れるボールを、ダンのバットは捉えられず、気がつけばミットの中に収まっているではないか。

思い出したぞ! そうだ、この魔球だ!

この独特の振動する魔球に、前回いいように討ち取られてしまったんだった。

球のブレを見極めなくては、この魔球は撃てないのだ。

「えいっ!」

「ツーストライク!」

あつという間に追い込まれてしまう。

「……………ダン」

ベンチでマネージャーボードを握りしめるアンヌが、不安げな瞳でダンを見つめる。

「落ちて着いて、打球をよく見極めるんだ! その魔球には、一定の法則があるハズだ!」

巧打者であるアマギが、メガホンでアドバイスを送る。

「……………っ!」

「ボール!」

頷いたダンが、冷静に打球の軌跡を目で追う。

彼の動体視力は、打球が僅かにストライクゾーンから外れているのを見逃さなかつ

た。

「そうだー！ 諦めるんじゃないぞー！ 粘って粘って粘りまくれー！ 死に物狂いで食らいつくんだー！ お前なら出来る！」

四番を背負ったフルハシが、持ち前の大声で檄を飛ばす。

「ふんっ！」

「ファールー！」

力強い声援に押されたダンの両腕が、バットを凄まじい速度で振り抜き、僅かに打球へ掠らせる事に成功した。

全く芯を捉えられてはいなかったが、彼のパワーは何とかボールを後ろのフェンスへかちあげる事には成功した。

「はあ……はあ……」

だが、やはり自分には魔球攻略の決定的なタイミングが掴めない。

このままで良いのだろうか……出塁を見据えた方が良いのではないか？

ちらりとダンがベンチを見やる。

腕組みをしたままどっさり座り込んだキリヤマ監督は、ダンの不安げな視線に気付くと、両腕を胸の前でクロスさせ、指先を握り込んでから、それらを体の両側へ持つて行って小さいガッツポーズを作った。

そうして、右腕の人差し指を一直線にピンと伸ばし、相手のピッチャーを力強く指し示す！

真つ向勝負のハンドサインだ！

それを見たダンの瞳に、もう迷いは無かった。

それからはただひたすらに、打球を掠るバットのたてる乾いた打撃音と、フェンスが揺れる耳障りな金属音が立て続けに繰り返される。

積み重なっていくファールの声。

荒い息を吐きながら、敵の打球に食らいつき続けるダン。

あと少し、もう少しで掴めそうだ。魔球攻略のタイミングがあと少しで……！

しかし、彼の疲労もピークに達しようとしていた。腕も足もパンパンだ。

このままでは、打ち返す前にスタミナが切れてしまうかもしれない……

駄目だ、僕がやらないといけないんだ！ 僕が……っ！

「タイム！」

その時、すぐ近くで声が拳がった。

試合の時間が止まり、意気込んでいたダンの闘志が、急激に萎んでいく。

ああ……なんて間の悪い……

ダンが珍しく恨みがましい視線を向けた先で、待ったの声をかけた張本人……今まで

無言で魔球を受け止め続けていたキャッチャーが、すつくと立ち上がる。

そして彼が徐にマスクへ手をかけ、それを勢いよく剥ぎ取った時、ダンは今度こそ度肝を抜かれて口をあんどぐり開けたまま固まってしまった。

「お前さ、肩に力入り過ぎ。……もつと気楽に行こうぜ、気楽に」

「そ、ソガ隊員!?!」

「よう、びつくりした?」

悪戯の成功した童のような顔で、キシシと笑うキャッチャーは、なんとソガだったのである。

「ダンは混乱の最中であつた。」

「なぜ貴方がそんなところに?」

「いや、それよりも……」

「敵が魔球で来る事が分かつてたなら、どうして先に教えてくれなかつたんですか!」

「いや、悪イ悪イ……でもさ、それだと……ちつとも面白くないじゃん?」

「え?」

「やつぱさ、様式美つつーの? いったん苦戦してから頑張つて反撃! みたいな?」

「そういうのつてホラ……大事じゃん?」

「は、はあ……?」

「まあ俺もね？ 魔球の秘密とかまで全部知ってたらさ、対抗策をお前に授けられたかもしれないが……残念ながらそれは知らないの。じゃあさ、どっちでも一緒じゃん？ よしんば知らなかったフリしてた方が、相手が喋ってくれるかもしれないじゃん？」

「……あの……まあ……そうかも……しれませんか？」

「敵がいい気になってから絶望に叩き落とした方がさ……もう二度とこちらと勝負しようって気が起きなくなるくらい心をバッキバキに折れるし」

「スポーツマンシップの欠片もありませんね」

「俺スポーツマンじゃないし、敵のキャッチャーだし」

思わずダンの口から深い溜息が漏れる。

「どうだ？ 肩の力抜けた？」

「へなへなでバットが持ち上がりませんよ……」

「いいじゃないじゃない！ 別にさ、この打席で負けたっていいんだぜ。お前がアウトになったって、まだ皆がいるんだしさ。次のチャンスが回って来た時に、また勝負すればいいんだよ。最後に勝ちやなんだっていいのさ、最後に勝ちやあ」

「次のチャンスなんて……」

「勝負はまだ一回の表だ！ 気楽に行こうや！」

「……えっ？ そうだったんですか？」



「俺がそうだって言えばそうなんだよ！ お前が打ち返すまでずっと一回の表だ！」  
「そんな無茶な」

あんまりな物言い、不謹慎とは思いつつ、つつい笑い声がこみ上げて来てしまう。  
ソガはマスクを被り直しながら、ダンの肩を叩く。

「さつ、お前には俺達がついてる。ドーンと大船に乗ったつもりで三振してこいや」

「ソガ隊員、貴方は僕の味方なんですか？ 違うんですか？」

「……同じ方向は向いてるだろ？」

「なるほど、確かに」

ソガの言葉に妙な説得力を感じ……いや、全然納得してはいないが、とりあえず試合が進まないの、仕方なくそれで許しておく事にする。今のところは。

「さあ、来るぞ……！」

「ハイ！」

「……なあ、敢えて普通のストレートとか指示出来るけど、どうする？ 俺、キャツ

チャーだし」

「是非、あの魔球でお願いします！」

「……そこなくっちゃなあっ!!」

ソガがミットを突き出し、指で何事かのサインを出す。

マウンドの上で、白面のピッチャーが、片脚を高々と振り上げる。舞いあがるロージンバツク。

そして……

かぎ爪によつてV字に変形するほど強く握り込まれた白球が、あり得ない程の運動エネルギーと共に投げ放たれる！

空気が震え、巻き上げられたマウンドの砂が竜巻のように軌跡を描く。

半ばに差し掛かった時、ボールは上下と左右の方向に大きくブレはじめ、バッターボックスのダンから見れば、残像によつてまるで白い十字架がそのまま迫ってくるかのようだ。

本物は、あのどこかにある。

今までは、その本物を捜そうとして狼狽えるバッターの動きに、まるで詭えたような振動によつて、そのスイング全てを躲されてしまった。

逆だ。

向こうに合わせるのではない、こちらに合わせさせるのだ！

ダン、普段の自分が行うベストなスイングタイミングから、敢えて一拍待ってから……頭から引き抜いた歪な金属バツトを全力でフルスイングした。

ここだ！

「デュワアアッ!!」

魔球のパワーが、彼のバットを弾き飛ばそうと押し返してくる。

ダンも負けじと力を込める。

ボールの高速回転によって引き起こされた帯電現象によって、雷がバチバチと四方八方に飛んでゆき、受け止めるバットから真つ赤な火花がボルケーノの如く噴き上がる。

負けない、負けるもんか。

僕は……防衛軍一のスラッガーだぞ!

「ダアアッ!!」

小気味良い打撃音が炸裂し、レーザービームが相手のピッチャーのこめかみを掠っていく。

そのまま電光掲示板に突き刺さる打球!!

ホームランだ! 魔球敗れたり!

「やったー!!」

ベンチからチームメイトが飛び出してきて、ダンを力強く抱きしめる。

「良くやった!」

「お前なら出来ると思じていたぞ!」

「凄いわ、ダン!」

「ヒヤヒヤさせやがってコンチクショ〜！」

口々に褒め称える仲間の後ろから、相手チームのキャッチャーが歩いてくる。彼の差し出した右手を、力強く握り返すダン。

「やったな」

「ええ、ありがとうございます」

「ほんじゃま次は……俺達で奴等に一泡吹かせに行きましょうや！」

「……ハイ！」

ダンの視界が、段々と青白い光に包まれていく。

ああ、なんて暖かい……

遠くで誰かが僕を呼んでいる……

聞こえる……みんなの声が。

そうだ、思い出した。

僕の本当の使命を。

そうか、僕は……

「立ち上がれ、ウルトラセブン」

---

マグマライザーの中で、仲間達が固唾を飲んでその光景を見守っていた。額のランプへ一直線に伸びる光を。

彼の四肢に力が戻り、その瞳に輝きが宿る時を、待っていた。

「……セブン」

「セブン……」

「セブンっ」

「セブンー！」

マグネリウムエネルギーの狙いをつけるソガの背後で、それ見つめる仲間の口から、誰かれともなく声が漏れる。

彼らの待ち望む、英雄の名が、かけがえのない仲間の名が！

「セブン！ セブン！ セブン！ セブン！」

「うおおーっ!!」

雄叫びを上げたソガが、出力レバーを目一杯押し込んで、最大出力でエネルギーが注入される。

真つ赤な指が、ピクリと動く。

「立ち上がれえ！ ウルトラセブン！」

呼びかけに応えるかの如く、巨人の瞳に光が宿り、沈黙していた額のランプに緑の輝きが戻った！

セブンは両手の人差し指と中指をぴったり揃えて突き立てると、それを電極板のように使用して、光線をスパークさせる！

忽ちヒビが入っていくガッツの十字架。

やがて、全面までヒビが行き渡った時、あれほどに強固だった戒めは、硝子細工のように呆気なく砕け散ってしまったのだ。

真つ赤な肉体が自由を取り戻し、岩場から素早く身を起こすセブン。

誰がどう見ても、文句の付けようがない程に、ウルトラセブンの完全復活であった！  
「やったああああ！」

マグマライザーの中で歓喜の絶叫が爆発する。

興奮と達成感の絶頂で互いの体を抱きすくめて健闘を称え合う警備隊の面々。  
しかし、その周囲には依然として、ガッツの処刑ドローンが戦闘態勢で陣形を整えて

いた。

『デュワッ！』

セブンは左手を顔の真横へ持つてくると、それを手刀として振り下ろすのではなく

……そこから楔状の青白い光線を繰り出した！

ガッツ星人のバリアに、セブンの光線は効かないはず……しかし、光線の命中したドローンは、まるで火の付いた導火線のように勢いよく出火して、着弾場所から溶けるようにして消滅してしまっただけではないか！

ガッツ星人は、一度見た攻撃を直ぐさま分析して無効化してしまうが、それはセブンとて同じ事。

捕まっていた間、無為に時間を過ごしていた訳では無い。時間はたつぷりとあつたのだ、敵のバリアの攻略方法をずっと考えていた。

敵のバリアは、エメリウムの固有周波を解き明かし、その真逆の周波数帯をぶつけて相殺する事で、こちらの攻撃を無効化してきた。

だったら簡単な話だ。

光線の周波数を、普段と全く逆のパターンに変えてしまえばいい。

そうすると、バリアは無効化どころか逆に光線を増幅させて素通ししてしまう。

もちろん、光線の周波数を変えるなんて、普段であれば非常に難易度の高い技術である。

だが、周波数調整の為のヒントは敵が既に教えてくれていた。なぜガッツ星人はバリアを展開しながら光線を撃てるのか？

それは、ガッツ星人の現在使用している光線こそが、エメリウム粒子と逆の波長に調整されているからに他ならない！

であればその光線を幾度も食らい、あまつさえそれを結晶化した物の中に閉じ込められていたのだから、解析は可能だ。

……問題は、閉じ込められているセブンのエネルギーが底を尽き、精神の疲弊した状態で、自己と正常な思考を正しく維持できるか、という点につきる。

だが、彼はやり遂げた。

例えガッツ星人が、彼からエネルギーを奪い、感覚を奪い、そして命すらも奪おうとしたとしても、たった一つだけ奪えなかったものがある。

心だ！

薩摩次郎から受け継ぎ、ウルトラ警備隊の仲間達と育んだ人間の心。美しい思い出のぬくもりと、熱い意志と絆の力だけは、何人たりとて奪い去る事は出来なかった！

例え恒点観測員340号の自我が擦り切れてしまったとしても、モロボシ・ダンとしての意識が、その魂の片隅に無意識のうちに住まわせていた仲間達の小さなビジョンが、セブンの衰弱した精神が自我崩壊因子によって無間地獄へ足を滑らせてしまうのを、すんでの所で必死に繋ぎ止めていたのである！

セブンは、マグマライザーから降りてきた、かけがえのない仲間達、命の恩人の顔を、



超人的な視力で一人一人目に焼き付けてから、上空を覆う赤く汚れたドームを一瞥した。

『デュワツ！』

セブンの手から、バリア破壊光線が発射されると、眩い光と共に巨大バリアが掻き消える。

「おお……」

と同時に、キリヤマのビデオシーバーが着信音をかき鳴らした。

妨害電波とバリアが消失したので、通信が復旧したのだろう。

「こちらキリヤマ」

「ああつ！ キリヤマ隊長！ ようやく繋がった！ 良かったー！」

「うむ、セブン救出には無事成功した、後はガッツ星人の母艦を叩くだけだ」

朗らかに報告するキリヤマ隊長。

しかし、通信機の間こうからは、焦りに焦った返事が帰ってくるではないか。

「隊長、急いでお戻り下さい！」

「待て、一体どうした？ 何を慌てている？」

告げるヨシダの声は、まさしく切羽詰まっていた。

「基地が2体のアロンに襲われています！」

「なにつ!?」

## 地球圧殺計画 70%

「基地が2体のアロンに襲われています！」

「なにっ!？」

緊急通信で基地から齎されたのは、とびきりの凶報だった。

「しかし、基地は岩盤で厚く防御されているはずだ！ いかにもアロンと言えど、富士の麓をまるごと掘り返せるわけはあるまい」

「それが駄目なんです。ガッツ星人の円盤に、富士山頂の予備動力施設が破壊されてしまつて……その余波で一部の電気系統が麻痺してしまつたんです！」

「なに、予備電力が？」

「その中にはキリーの発射口ハッチも含まれています。現在、基地の側面が外から丸見えになつてしまつているんですよ！」

「なんだと……!？」

事の重大さに、キリヤマは思わずよろめき、黒い装甲版にもたれかかった。

「……やられた」

圏を使って目標をおびき出すのは、ガッツ星人の十八番だったはず。それは既に分かっていた。

しかしまさか……本物のウルトラセブンまでをも釣り餌にするなんて。

ガッツ星人は、ここ一番という場面で、自らの最も得意な戦法を、最大規模に拡大した上で使ってきたのだ。

こちらは敵の手の内が分かっていたのに、それを読み切る事が出来なかった……！  
まさに磨きあげた一芸のなせる技。

キリヤマにとっては、指揮官として痛烈なまでに敗北を喫したと同義であった。

「……我々には、帰る手段が無い」

「そうか、その為に奴らは……」

アマギが無残な姿のマグマイザーを見やる。

足回りが徹底的に破壊されており、走行はもはや不可能だ。

……尤も、例え無傷であろうともマグマの最高速度は時速1000キロ。

どれだけとばしても、ここから基地までは1時間以上もかかる。

その頃には全て終わってしまっているだろう。

警備隊が、鈍重な地底戦車でここに乗り込んだ時点で、用心深いガッツ星人の策は既に成功していたのである。

さらに付け加えれば、この策の真に悪辣な点は、例えその懸念があつたとしても、地球防衛軍はセブン救出に全力を傾けなければならぬ事に変わりはないと言う部分。

戦う前から相手を雁字搦めにして、選択の余地を一切無くしてしまうというのが、彼らの恐るべき狡猾さなのだ。

ハツとしたアンヌが、僅かな期待を込めて隣に立つ仲間の方を見たが、直ぐに目を逸らす事となる。

その顔から、いつも湛えられていた余裕の笑みが消え失せ、代わりに焦りと後悔の色が覆っていたからだ。

そして彼女は理解した。彼の持ち札が完全に無くなつてしまつたのだと。

「なんとか迎えの航空機は出せないのか!？」

「それが、そちらへ向かうルート上に敵の円盤が居座っていて、向かつた端から落とされてしまいます! 発進口上空の制空権を確保するのでも手一杯な状況です!」

「……………ここまでして我々を基地から引きはがしたのだ。敵も必死に妨害するだろう」

「くそッ!!」

ソガが思わずヘルメットを地面に叩きつける。

彼の顔には悔しさがいっぱいに滲み出ていた。

……そんな時。

『デユワツ!!』

「……なんだ？」

セブンが徐に両手を掲げ、その銀色に光る立派な胸板を、僅かに降り注ぐ朝日の方向へ向かつてぐぐつと突き出したかと思うと、数秒間そのままの姿勢で制止した。

その様を怪訝そうに見上げていた警備隊員達からは、彼の胸が、いつも以上に光輝いているようにも見える。

いつそ反射ではなく、彼の胸全体が発光しているかのようだ。

しばらくそうしていたセブンは、やがてこちらに向き直ると、一度だけ大きく頷き、力を込めるように両の拳を突き合わせた！

『ダァーッ!!』

次の瞬間、なんとセブンの体が足先から解けるように分解されていき、アツと言う間にその姿がかき消えてしまったではないか。

「セブンが……消えた？」

「あつ！ まさかあのバカ野郎……!!」

「どうした、ソガ！」

皆が困惑する中、一人だけ慌てたような、そしてどこか怒ったような声を発するソガ。「今のは消えたんじゃないやありません！ テレポートです！ ベル星人の時にやってみせた

ように、瞬間移動したんです！」

「なに、テレポート!?!」

「アイツ……俺達の基地を守りにいったんだっ……!」

彼の言葉を裏付けるように、通信機の向こうから、喜色の混じったウエノの声が聞こえてくる。

「アツ！ セブンです！ セブンがあらわれました！ 本当に救出が成功したんですね！」

「おおっ！」

「いよしっ！ セブンならアロンを倒せるぞ！」

「……いや、ダメです先輩。違います」

「なに……?」

セブンによる救援が間に合ったと知り、安堵するメンバーの中で、ただ一人表情の優れないソガ。

その理由は、彼の説明を待つまでも無かった。

「……いや、待って下さい、様子が変です。セブンは……セブンは明らかに弱っているようです！ 二体のアロンを相手に、全く歯が立ちません！」

「なに、あのセブンが！」

「でもさつきはガッツ星人の円盤を撃ち落としていたのに……」

「やっぱりか……!? ウエノ隊員! セブンの額は? 額のランプはどうなってる!」

「額ですか……!? アツ! 緑の部分が点滅しています! あんな状態のセブンは初めて見ます! あれはいつたいどういう事なのでしょう!」

困惑するウエノ隊員の返答に、ソガはぎりりと奥歯を噛み締めて呟いた。

「……エネルギー切れだ……」

「エネルギー切れだ?!」

「そんなはずは無い。さつきマグネリウムエネルギーを最大出力でチャージしたばかりじゃないか!」

「いや、あれでもきつと、止まってしまったエンジンを再点火するスターター程度でしかないんだと思う。その証拠に、さつき日光浴して太陽光をチャージしていたじゃないか」

「あれは太陽からエネルギーを充填していたの?」

「アンヌ、ついさつきまで意識不明で寝たきりだった病人が、点滴で意識を回復したと思えば簡単だ。起きていきなり戦闘できると思うか?」

「……そんな、無茶よ!」

セブンの現状を理解したアンヌが、一気に顔を青ざめさせる。



「しかもテレポートなんて、下手したらワイドショットより消耗する大技だ。そんなの病み上がりでやってみろ、光線技を撃つエネルギーすら残ってるか……」

「そんな状態で助けに行つて、なんになるって言うんだ!？」

「それでも体でアロンを押し留める事は出来る……アンタと同じですよフルハシ先輩!!」

「……ツー！」

ソガが包帯に巻かれたフルハシの左腕を掴み上げる。

それだけで、彼は後輩の言いたい事がありありと分かってしまった。

怪我を押してもセブンの救出に付いてきた自分。例え操縦が出来ずとも、自分が聴音ソナーを担えば、アンヌをドライバーに据える事で、手の空いたアマギを繊細な新兵器の調整に専念させられる。

今、自分に出来る事を精一杯。

その考えに心底共感してしまえたが故に、フルハシは二の句を継ぐ事が出来なかった。

彼が同じ立場であつたなら、迷いなくそうしただろうからだ。

「セブンは、依然として窮地のままといふ事か」

「……はい。そして……俺達はそれを、もう援護してやる事も出来ない……」

「……」

絞り出すように呟いて、その場に蹲るソガ。

言葉も無く、ただ沈痛な面持ちで顔を逸らすしかない仲間達。

各々の表情は違つていても、その心中はみな同じだった。

……絶望。

彼らには、地球の為に最期まで戦う意志と覚悟がある。

だが……それを示すべき戦場に立つ事すら出来ないという事が、どれほどの屈辱か。

彼らは、それを嫌つたガッツの策略によつて、盤面から完全に爪弾きにされてしまつたのであつた。

基地では、まさしく死闘が繰り広げられていた。

「撃てえー！」

「駄目だ、効かねえ！」

「構うもんか！ 効くまで撃ちまくれ！」

戦車隊の砲火に照らされ、アロンの巨軀が暗闇の中に浮かび上がる。

雷雨を背負つた怪獣の血走つた眼光が、矮小な不屈き者共を見下ろした。

愚かな反逆の報いを受けさせるべく、アロンが胸を反らし、息を大きく吸い込んでブレスを吐き出そうとしたところへ……

『デュ、デュワ!!』、

横合いから飛び出してきた深紅の巨人がその喉元へ飛びついて、怪獣の嘴をとつさに上空へ向ける事でなんとか陸戦隊を守った。

しかし……

『ゴゴガガアアアアアアッ!!』

『デュアッ!! ダッ……ッ!』

セブンの背中を、鋭いかぎ爪が襲う。

もう一体のアロンが、隙だらけの巨人を後ろから怪力で思いつきり殴りつけたのだ。たまらず地面にころがるセブン。

その腹部を、拘束の無くなった一体目のアロンが踏みにじる。

「いかん、セブンが!」

「集中砲火ー!」

真つ赤な戦友を助けようと、装甲車や武装トラックから火線が伸びるのだが……

『ゴゴゴゴ!!』

その前に、山の如き巨体が立ち塞がる。

二体目のアロンは、片割れやセブンよりも一回り大きな体を持ち、飛び道具はないものの、圧倒的な耐久力と怪力を見せつけていた。

大きさに似合わぬ俊敏さで、一気に戦車隊へと距離を詰めると、一両を文字通りぺちやんに踏みつぶし、一両をかきづめで串刺しにすると、それを武装トラックの群れへ向けて放り投げた。

忽ち鉄くずの山が出来上がる。

『アユ!!』

これ以上暴れさせてなるものかと、泥だらけのセブンが立ち上がり、巨大アロンを羽交い絞めにしようとする。そんなセブンを嘲笑うかのように、アロンは翼を大きく羽ばたかせてセブンの躰を打ち据える。

「師団長！ 第四から第六小隊全滅！」

「各歩兵分隊の損耗、とまりません！」

「特車課3班、応答ナシ！」

強力な二体の怪獣の前に、被害が積み重なっていく。

ガツ星人はソガの……否、人類の諦めの悪さを見て学び取ったのだ。

最後に勝った者こそが勝者だと。

セブン防衛戦においては負けだ。真つ赤なトロフィーもくれてやる。それがどうしたというのだ？

一度倒したセブンなど、もはやガッツ星人の敵ではない。

こうして基地を襲撃すれば、レポートで駆け付けるのは目に見えていた。

いくら復活したとて、エネルギーの切れたところをアロンで袋叩きにし、もう一度捕獲してしまえばいいだけのこと。

地球は我々ガッツ星人の物だ。

人類は飛車を取り返す事に必死になりすぎて、王将が取られれば負けだと忘れていた。

セブンこそが絶対に守らなければならないキングの駒だと、錯覚してしまっていた。

軍は軍であるが故に、従うべき命令を下す指令部を失つてしまえば、組織立った反抗が出来なくなる。

ガッツ星人は、正しく地球人の流儀に則って戦闘を理解した。

「敵はこちらの攻撃に、ひるむ様子すら見せません！」

「……山だ」

「はー」

「敵を生き物と思うな！ 我らは山と戦っているのだ！ 山は血を流さん！ 怯みもせ

ん！　だが、撃ち続けなければいずれ切れ、砂になる！　殺す必要はない！　ただひたすらに撃ち続けろ！」

「そうだ！　単なる山に負けたとあつては防衛陸軍の名折れぞ！　セブンの果敢な攻めを見習わんか！」

「ウルトラ警備隊の助け出したセブンを、我らの眼前で死なせたとあつては、キリヤマ隊長にいったいどう顔向けするのだ！」

「撃て！　撃て！　削り殺せ！」

「なんとしてもセブンと基地を守り抜くのだ！　陸戦隊の名誉にかけて！」

「うてえーっ！」

「歩兵は戦車を盾にしろーっ！」

地下や山肌からせり上がった防衛砲台や、森の中に隠された偽装バンカーから、一斉に攻撃が加えられる。

岩陰や振じれた戦車の残骸から、ひよっこりと姿を現した歩兵達の対戦車ロケットが、アロンの頭部に集中する。

逆上したアロンが、怒りに喉を震わせて、ついに猛毒の硫黄ガスを噴射した！

塹壕や物陰の向こうに潜む歩兵達にとって、これほど恐ろしいものはない。

彼らはガスの毒性で死ぬのではなく、その猛烈な肺活量によって叩きつけられたガス

の圧力に潰され、または吹き飛び、地面に叩きつけられて死ぬのだ。

「怯むなー！ セブンには我々の援護が必要なのだ！」

「戦友を見捨てて逃げる事は許されない！」

「今の彼には、我々しかいないのだぞ！」

アロンが黄色い吐息を吐き出す度に、歩兵が木の葉の如く舞い散り、装甲車が横転する。

それでもお返しとばかりに、重機関銃や対獣ライフルの弾丸がアロンの表皮を僅かに、ほんの数ミリだけ削っては、そちらに毒ガスが吹きつけられていく。

「班長！ そんなもので奴は殺せませんよ！ 撤退しましょう！」

「どこへ逃げるって言うんだ！ 逃げたところで基地がなくなれば同じ事だ！」

機関銃を景気よくぶっ放す上官に向かって、弾薬を担いだ新兵が叫ぶ。

「それでもそんな攻撃に意味はありません！ それは班長も分かっているでしょうに！」

「意味はある！ 奴がこちらを見ている限りは、基地は攻撃されない！」

「我々が死んだら同じことです！」

「俺達の役目は、奴を殺すことじゃない！ 時間を稼ぐことだ！」

「いつまで！」

「ウルトラ警備隊が戻ってくるまでだ！」

「なんですって!?!」

雨で滑る手が、思わず弾を取り落とした。

「彼らはきつと戻ってくる! 必勝の策を携えて、セブンを救いにやってくる! それまでに基地が墮とされなければ俺達の勝ちだ!」

「ウルトラ警備隊が戻ってくるなんて……あつ!」

「チツ! 伏せろツ!!」

「班長おー!」

ひとつ、またひとつと火点が潰されていく。

減った火力を補う為に、戦車隊が前進する。

近づけばアロンの怪力の餌食になる。

しかし遠くからでは有効打は望めない。

ならば近づくしかない。

少なくとも体の大きな方の怪獣は、飛び道具を持っていない事が分かっている。

奴がこちらを攻撃する為に近づくとという事は、その数秒間は、あの巨体をセブンから引きはがせるという事だ。

悲壮な覚悟で戦車が隊伍を組んで突撃していく。



しかし……その上空の戦いは、さらに壮絶を極めていた。

「この天候下でなんて機動だ！」

「そつちだけ自由に動けるのは、不公平だとは思わねえのかよ！」

暗雲の立ち込める空を、円盤と無数の戦闘機が飛び回る。

白鳥や虎のマーキングされたウルトラガードが、炎に巻かれて落ちていく。

雷を引き裂いて、円盤の攻撃が戦闘機をまた一機、火達磨に変えた。

しかし防衛軍側の放つミサイルは、命中率が悪く、バリアに阻まれるどころか、かすりもしない。

荒れ狂う嵐のせいだ。

もちろん自然現象ではない。

戦場を覆う分厚い雲は、ガッツ星人の呼び寄せたもの。

ガッツの科学力をもってすれば、アロンの吐き出した硫黄ガスを起点として、大気中の粒子を操り、巨大な雷雲を作り出すなど造作もないのである。

流星にギラドラス程の天変地異とまではいかないが、そんなものは必要ない。

ただ、地上に太陽光が降り注ぐのを妨害できれば良いのだから。

そうすれば、ウルトラセブンはエネルギーをチャージする事が出来なくなる。

そして彼は予め分析した通り、地球人を見捨てて、雲を突破し太陽まで飛ぶことも選

扱出来ない。

この戦場は全くもって、ガッツが思い描いた通りの戦場となっていた。

唯一読み違えていたのは地球人が想定以上に好戦的な点か。

本来ならば、アロンの挟撃に加えて、円盤からの上空支援でもう少し早く決着がつくはずだったのだが……

周囲をブンブン羽虫の如く飛び回る航空機が、鬱陶しくて仕方ない。

「やめろ！ そのまま突っ切れ！ 旋回は……！」

「駄目だ、三番機が落ちた。ここで俺が戻らないと、カバーがで——」

「……馬鹿野郎が」

如何に貧弱であろうとも、地球人が闘志を燃やして立ちはだかるといふのなら、ガッツ星人は全力をもって相手をする。それが対戦相手に対する礼節だからだ。

それを知ってか知らずか、ウルトラガードのパイロット達は、円盤に追いすがり、挑発し、そして爆散していく。

性能差では絶対に勝てない事が分かっているとしても、決してそれを止めようとはしないのだ。

少なくとも、空を舞う愚か者達の命がつきるまで、地上部隊とセブンは空爆に晒されずに済むのだから。

通信機の向こうから、阿鼻叫喚の声が聞こえてくる。

通信士の伝える戦況を、タケナカ参謀が必死に立て直そうとしているが……後手後手だ。

無理もない。

そもそも基地機能の半分が麻痺しているので、即応可能な戦力から泥縄式に出撃せざるを得ないから……戦力の逐次投入になってしまっている。

キリヤマ隊長がなんとか一部の指揮を執って負担を減らせないか試みてはいるが、タイムラグが激し過ぎて上手くいってない。

俺達は……主戦場から遠く離れた場所に放り出されて、何も出来る事がない。

詰んだ。

完全に詰みの状態だ。

いずれ防衛戦力が尽きて、セブンのエネルギーも尽きる。そうなら今度こそお終いだ。

オレは……失敗したんだ。

もう泣く気にもなれない。

ここまで必死にやってきて、このザマか。

ガッツ星人相手に啖呵を切ったのが悪かったのか？

でもああでも言わなきや、あそこからどうやって帰れって言うんだよ。

やっぱり正史を変えた時点でダメだったんだ。

俺のやってきた事は、無駄だった。

無駄に被害を増やしただけで、結局地球もセブンも守れなかったじゃないか。

何かが、ボキリと折れかけて……

……その時。

聞きなれた響きが、どこかから聞こえて来た。

「……なんだ？」

「トンネルの方から、何か来るぞ」

「……あれは、まさか！」

！  
マグマライザーの掘った穴の向こう側で、何かがちらりと光ったかと思つた次の瞬間

暗がりの中から、その身に科学と勇氣の色を宿した我らの忠実な番犬が、両目を爛々と光らせて、エンジンの遠吠えと共に、砂利を蹴散らしながら雄々しく飛び出して来た

！

「ポインター!？」

「一体誰が乗ってるんだ!？」

鮮やかなドリフトを決めて、立ち尽くす警備隊の面々の前へ、ピタリと止まった忠犬から降りてきたのは……

「みなさま、ご機嫌よろしくつて？」

「ナツさん!？」

愛用のヘルメットを被り、レーザースーツに身を包んだナツコさんだった。

「……え？ えっ？ まさか運転してきたんですか？」

「ええもちろん。ワタクシの職業をお忘れになって?」

「いやいやいや……地下トンネルを、全速で?」

「前にフルハシさんが自慢していましたもの。俺達のポインターは絶対にパンクしないんだぞって。でしたら道が地上だろうと地下だろうと全然関係ありませんわ。一本道で逆に走りやすかったくらい。確かにこの子はちよつと頑固で気位の高い所がありませんけれど……じゃじゃ馬具合でいったら、ワタクシのコスモスポーツの方がずっと利かん坊ですよ。うふふ」

そうしてニツコリと笑うナツコさん。

いやいや、装備も使わず走るだけなら、運転の仕方はそりや普通の車と変わらんけど

……

鍵はどうしたのよ?

え? ガレージから一緒に帰っただろって?

ああ……そうね。

「……待つて下さい。いくらポインターの速度でも、距離を逆算したら、さつき出てきたのではとても間に合わない。ナツコさん、いったいいつ基地を出発したんです?」

「ここへの攻撃が始まってしばらくしてから……胸騒ぎが止まらなくて……何か忘れてるんじゃないかしらと思っていたら……あの鳥が全然飛び出してこないんですもの。」

あ、これは皆様を呼び込んで何か良くない事を企んでいるに違いない！　と思いましたがわー！」

「……どういうことだった？」

ありがとう先輩。

そして安心してくれ、別にフルハシ隊員の頭が悪いわけじゃない。

俺も理解出来てないから。

「だってそんな筈ありませんもの。ソガさんが仰っていましたわ。ガッツ星人は酷い負けず嫌いだって。そんな負けず嫌いがやられっぱなしだなんて、おかしいじゃありませんか？　やられた事は絶対に仕返ししなくっちゃ気が済まない。それが負けず嫌い。ニセモノ石で騙された上に、巢をいいようにされて黙ってるなんて、負けず嫌いの風上にも置けません！」

「ははあ……なるほど？」

「その点、ワタクシにはガッツ星人の気持ちを手取るように分かりました。なにせ、負けず嫌いの度合いでいったら、ワタクシの方がずっとずーっと、あの変な動物よりも高いに違いないですからね！　ワタクシがガッツ星人なら、警備隊の皆様を絶対に一番酷いペテンに掛けてやらなきや気が済みませんわ」

「……ハツハツハツハツハ！！　ガッツの野郎、負けず嫌いさでナツコに負けやがった訳

か！」

「ええ、レーザーなんてね。いくら気取っていても、結局はみーんな、飛びっきりの負けず嫌いの集まりなんですから！」

「まったくお前つて奴は……最高だ！ 地球……いや、宇宙一の負けず嫌いだあ！」  
「きやあ!!」

思わずといった様子で、ナツさんを片手で抱き寄せたフルハシ先輩が、その場でぐるりと一回転する。

するとナツさんは、フラフラとそのまま尻もちをついてしまった。

「お、おい……ナツコ……大丈夫か？」

「もう！ 当たり前よ、フルハシ隊員！ いくら凄腕レーザーだからって、デコボコの地下道を、アクセル全開で走り抜けるなんて、普通じゃないわ！ きつと凄く神経を使っただけよ。大丈夫、ナツコさん？ 立てますか？」

「え、ええ……」

そう言いつつ、アンヌがヘルメットを脱がせると、その下からはじつとりと濡れた髪が零れ、よくよく見れば、額には滝のように冷や汗が滲んでいる。

アンヌの見立てによると、過集中による神経衰弱らしい。

「す、すまねえ……」



「大丈夫よ、ワタクシったら、ちよつと張り切りすぎちゃったみたい」

「……隊長」

「うむ……ナツコくん。今回の貴方の働きは、まさに値千金の価値がある。この場で地球防衛軍を代表して、お礼を述べさせて下さい。貴方の協力のおかげで、我々は再び敵に立ち向かう事が出来る!!」

「お役に立てましたでしょうか？」

「少なくともウルトラ勲章の授与は確定です。フルハシ！」

「ハッ！」

「貴様はここでご婦人をお守りするんだ。残念ながらポインターでは定員オーバーだからな」

「えっ? ポインターは7人乗り……」

「いいな！」

「は、ハイ！」

続々とポインターに乗り込んでいく俺達。

「ありがとうナツコさん。あとはフルハシ隊員がこれ以上無茶しないように見張っていてください」

「アマギさんもお気をつけて！」

「ナツさん、あなたもあまり無茶しちやだめよ?」

「アンヌさん……ワタクシはアンヌさんみたいに戦う事は出来ないけれど……ここで応援しているわ」

「……ええ、きつとセブンを助けてくる。約束するわ。せつかくあなたのくれたチャンスを、無駄になんかしてなるもんですか」

アンヌが彼女をひしつと抱きしめてから駆けていく。

「……ナツコさん、前言撤回させて下さい。やっぱり貴女の協力がないとダメだったみたいです」

「いいえ、ソガさんの言葉があったからですわ。それに……」

「それに?」

「……ううん、背中を押してくれた方がいましたの。閉じこもってないで、外に目を向けなさいって。その人の言葉を信じただけ」

「なるほど、じゃあ今度その人に会ったら、ありがとうって伝えておいてください。皆さんのおかげで地球は守られそうですって」

「……おいソガ」

「なんです?」

「セブンを、頼む」

「言われずとも」

「おーい、早くしろー!」

アマギが呼んでる。行かなくては。

「いつてきまーす!」

「ソガ、早く窓を閉めろ! オートパイロット起動!」

「こちらキリヤマ、迎えは不要だ。航空戦力は全て防衛に回して構わん! 我々が帰還するまで、なんとしても基地を死守せよ!」

「了解! お待ちしております!」

「ホバー良好」

「後部ジェット展開!」

ガッツ星人め、俺達を基地から隔離して勝った気でいるな?

だが残念。

ナツコさんとポインターが、全てをひっくり返してくれた。

確かにポインターの運転は、普通車とあまり変わらない。

ただしそれは普通に走行していれば、の話。

驚くなかれ、ポインターの最高速度はなんと……時速365キロだぜ。

オートパイロットでジェットエンジンをおっ飛ばせば、あつと言う間だ!

待ってろよセブン！  
「ポインター、発進！」

## 地球圧殺計画 any%

俺達が戦場に辿り着いた時、そこはもう地獄としか言いようがないくらいに酷い有様だった。

破壊され尽くし、辺りに散らばる鉄クズ達は、もはや原型を留めておらず。

真つ二つに折れた戦闘機の残骸が、ぬかるんだ地面に突き刺さっている。

木々がなぎ倒され、完全に拓けてしまった森の中では、辛うじて戦車だったのだろうと判別できるモノが、降りしきる雨に負けじと、黒煙と炎をごうごう噴き上げながら、その骸を晒していた。

あちこちから怒号と悲鳴が聞こえる中、思い出したように銃声が轟き、怪獣への散発的な攻撃が敢行される。

圧の減じてしまった横やりは、もはやアロン達の気を引く事すらも満足に出来ず、怪獣達は真つ赤な巨人を玩具にして、キャッチボールじみた遊びに興じている。

まさに負け戦と呼ぶに相応しい場面だった。

だが、それでも。

防衛戦力はほとんど失われ、2体の怪獣に為す術なく、いいように捌られ続けるウルトラセブンは足取りもおぼつかず、リンチと言うべき様相を呈していたが、それでも、基地は未だに健在であり、セブンはまだ生きていた！

彼らは、やり遂げたのだ。

自らの意地と誇りと命を懸けて、守るべきものを守り通したのだ！

防人達は、勝利を掴みとったのである。

「そうか、嵐で太陽が隠れてしまっていたのか！ ガッツ星人め……っ！」

これではセブンがエネルギーを回復できない。

まるで2体目のアロンと戦った時のようだ。

やっぱりあの時の嵐も、奴らが引き起こしたものだっただんな！

いくら合流できたとはいえ、このままでは……はやくなんとかしないと。

その時、近くの岩陰からうめき声が聞こえる。

「う、うう……き、キリヤマ……隊長……」

「あなた、大丈夫!？」

「アンヌ、彼を喋られるようにしてやってくれ。状況を知りたい」

「はい」

ボロボロになりながら這いずってできた一人の隊員を、アンヌが助け起こすと、血塗れの腕に素早く鎮痛剤を注射した。

「キミ、現在の指揮官が誰か分かるか」

「オカ師団長は……搭乗車両ごと、踏み潰され……戦死、なさいました……」

「そうか……」

「戦車隊は壊滅……現在……各員の、判断で……抵抗を……」

「分かった。もういい。感謝する」

「はん、ちよう……おれた、ちの……か——」

「あ!? ……っ!」

「……全隊! よくぞ持ち堪えた! これよりウルトラ警備隊が戦闘に参加する! 諸

君は我々の指揮下に入れ!」

キリヤマがビデオシーバーに向かって叫ぶ。

「一度戦線を立て直す! 生存者はB地点に集合せよ!」

「しかし、その間は攻撃が止んでしまいますが……」

「バラバラに攻撃を加えたところで、あの怪物には痛打を与えられん。遺憾ではあるが、セブンには今しばらく忍耐を強いる事になるだろう」

「……わかりました。彼を信じるしかありませんね……では、我々もはやく行きましよう！」

「待てよソガ、行くつてどこへだ？」

「何言つてんだアマギ、俺達にはまだ2号がある！ あれで今すぐ……」

「駄目だ。上空に円盤がいる以上、双子山をスライドさせる事は出来ない。基地の内部が丸見えになってしまう！」

「あつ！……そうか……！」

極東基地の弱点として、上空を抑えられた場合、メインゲートである双子山のハッチを開くと、致命的な隙を晒してしまうと言う点が、劇中でも言及されている。

そうなった時の為に滝裏ゲートの3号しかり、駐機場のウルトラガード編隊なんだが……生憎と、今の俺達にはそのどちらもが無い。

「じゃあどうするんだ!？」

「少し待つてろ。今に届く……」

「届くつて……何が?」

俺が首を傾げていると、基地の隠し通路が開き、その中から誰かの声と、耳障りな電子音が聞こえてくる。

「おおい！ アマギ隊員！ こつちです、こつちです！」



「その声は……ウエノ!？」

「コ。チ。ラ。ヲ。ム。シ。ト。パイ。イ。ト。キ。ヨ。ウ。タ。」

「御注文の品は、こちらであつていますでしょうか!」

「ああ、バツチリだ!」

安堵するウエノ隊員の後ろから、ドシンドシンと重たい足音を立てながら、U—8がピーピー歩いてくる。

その腰には極太のロープが巻かれ、もう一方の先端はえらく頑丈そうな軍用台車に繋がっていた。

それもそのはず、その台車の上には、戦車砲もかくやというべき、巨大な筒が載せられていたからだ。

歩兵用のロケットランチャーを何倍にも拡大したかのようなソレに、アマギは嬉々として取り付くと、なにやら後部の基盤を開いてガチャガチャ弄くりだした。

「な、なあ……コレは……なんだ?」

「ああ、人工太陽弾だ」

「なるほど、人工太陽弾……じ、人工太陽弾なん!？」

基盤から目を逸らさず、ぶつきらぼうに答えるアマギ。事も無げに言うから一瞬納得しかけたが、あまりの字面に二度見してしまった。

「待つて待つて、人工太陽弾つて何!? 初耳なんだけど!?」

「うるさいなあ……集中させてくれ」

「そういえば、ソガ隊員はあの頃、マゼラン星雲人に撃たれた傷のリハビリをしていたわね」

「ついでに言うくと、その少し前はペガ星人に操られてアツパラパーの役立たずだった。つくづく間の悪い奴さ、お前は」

「え、ええ……?」

いつかの作戦室。

机に図面を広げたアマギが、頭を掻きながら難しい顔で呻っている。

そこへコーヒーを差し入れるアンヌ。

「今度は何を考えているの? アマギ隊員」

「ああ、ソガの奴がな。セブンにエネルギー補給をさせると言うんだ」

「へえ、セブンに……それは凄くいいアイデアね! やっぱり難しいの?」

「うん。確かに理論上は奴の言う通り、僕の考えている兵器を調整すればいけそうなんだが……特殊な鉱石が必要だね。そもそもそれが手に入らんから原案を棚上げして待つていうのに、実数値が分からないんじゃないじゃお手上げだよ」

「そうなの……それは残念ね……」

「おいおい、二人してどうした！ そんな難しい顔して！ ……ゲッ、まーた数字が沢山並んでやがらあ……」

アマギの肩越しに手許を覗きこんだフルハシが、数式の羅列を見て、瞬時に顔を顰める。

「もう、そんな顔しないで、フルハシ隊員も何か考えてよ。三人寄らばなんとやら、つて言うじゃない」

「ええ!? 俺え？ そんなのソガにやらしとけよ」

「奴は理想論ばかり打つ癖に、細かい部分は丸投げしてくるんですよ……」

「ねえ、ソガ隊員のアイデアもそのまま置いておいて、何か他のアプローチを試してみましようよ。一つの症状にも色んな治療法があるように、エネルギー補給にもバリエーションがあるはずだわ」

「ほう、何やら面白い事を話しているな。私も混ぜてくれんか？」

「隊長！」

アマギ達が顔を上げると、机の向かいに座ったキリヤマが、にこやかにコーヒーカーブを傾けていた。

「セブンのエネルギー補給について話していましたの」

「ふむ、セブンの……」

「セブンには助けられてばかりだもんなあ」

「ソガが言うには、彼のエネルギーを現場で補給できれば、これ以上ない援護になると言うんですが……」

「確かに、兵站管理は用兵の基本だな。どんな兵士も弾薬や糧食が尽きれば、戦う事はできん。」

「そもそも、セブンが何食って生きてるか分からねえのに、補給もへったくれもあつたもんかい！」

「ですから、少なくとも放っている光線の基になりそうなエネルギーをですな……」

「……いや、待て」

カップを置いたキリヤマが、何かを思い出すかのように瞑目すると……やがてハツとしたように呟いた。

「光だ」

「え？」

「以前、月の裏側にセブンが現れた時、俺とクラタでセブンをミサイルで炙ったり、照明弾で照らした事があつてな……まあ、それ自体は対して意味があつたように思えんだが……」

「だが？」

「その直後、セブンの傍に隕石が落下して爆発したんだ。途端にセブンは息を吹き返し、必殺光線で怪獣を撃破した。……私には、どうもあれが偶然とは思えん。セブンが念力か何かで隕石を引き寄せ、その爆発のエネルギーを利用したのではないか？」

「となると……セブンは熱か光が欲しい？」

「そういえば、ガンダーの時も、吹雪でその両方が無かったわね」

「……ソガがいつだったか、セブンは太陽光を食ってるなんて言っていたが……」

「そうか太陽か！ セブンはきつと太陽の化身なんだ！ だからあんなに赤い体をしてる。な？」

「太陽光……巨大な鏡でセブンに光を集めるとかかしら？」

「いやいや！ もっと簡単な方法があるぜ！」

「え？」

自信満々なフルハシ隊員に、皆の視線が集中する。

「この前のリヒター博士！ あの人がなんで宇宙人に狙われたか、覚えてるか？」

「確か……そうよ、そうだわ！ 人工太陽計画！」

「そうさ！ リヒター博士に人工太陽を貸して貰ってだな、それをホークに吊り下げて、セブンの周りをぐるぐる旋回すればいいのさ！ どうだ、簡単だろう？」

「……」

「……それだ」

「え？ アマギ隊員、正気？」

アンヌが呆れた目をフルハシへ向ける中、アマギが思いがけない反応を示したので、彼女はただでさえパツチリとした目をさらに見開く事になった。

「いやいや、ホークに吊り下げてなんて乱暴な策はしないよ。というか無理だ」

「ら、乱暴な策……？」

「そもそも人工太陽計画は、バド星人の置き土産である惑星破壊爆弾を解析した結果立ち上がった計画だね。火星軌道上に第二の疑似太陽を浮かべて、そのエネルギーを利用してしようというものだった。でも、まだまだ計画は始まったばかりで、当初の予定の数万分の一も進んでないんだ」

「そう、実用化は当分先になるって事ね……」

「だからいいのさ！ 本来の人工太陽なんか、強力すぎて地表でなんかとても使えない。だが、燃焼時間も出力も、本物のたった数万分の一しかないなら……」

「射出した一瞬だけ、セブンの前で輝かせる事が出来る」

「そうです！」

頷くアマギ。

キリヤマが席から立ち上がる。

「そういう事ならば、リヒター博士にサンプルをまわしてもらえないか、参謀達に掛け合ってみよう。アマギは射出機構の調整を頼む」

「はい！」

「本当に解決しちやつたわねえ……やるじゃないのフルハシ隊員」

「え、そう？　へへへ……」

なんとか、あの遙かなる友人の助けになりたい。

考える事はみな、同じだったのだ。

「私もソガ隊員と同じく、生憎とその場にはおりませんでした、代わりにヨシダ隊員が、皆さんの話をしっかりと聞いて覚えてくれました」

「確かにヨシダ隊員は作戦室に常駐だもんな……それにしてもウエノ隊員、よく保管場所が分かったな？」

「いえ……お恥ずかしい話、自分は日ごろから基地内をたらい回しにされておりますから……整備班の皆がすぐにホーク2号から取り外してくれました」

「ハハハ、謙遜すんなよ」

なるほど確かに、専任通信員であるヨシダと違って、補助通信士のウエノ隊員はいつ

も、様々な部署から引つ張りだこにされている。

ちよつとでも人手が足りなくなると、すぐに彼へお声がかかるのだ。

本人としては思うところがあるようだが……彼が器用になんでも熟せてしまうのが悪い。行つた先で元来の几帳面さを発揮して、めちやくちや丁寧な仕事をしては帰ってくる。

ちよつと頭が堅いのが玉に瑕だが、裏を返せば、ひたすら真面目で基本に忠実つて事だ。

そりやあ応援に呼ぶんだから、信頼感ある相手に来て欲しいわな。

歩哨に整備、基地修繕から研究助手、果ては連絡員までなんでもござれ。

基地の中で、彼を見ない部署は殆ど無いと言つていい。

ある意味、顔の広さじゃ、俺達警備隊以上かもしれない。

やつてる仕事は非常に地味だが、基地内に最も精通している人間かもしれない。こいつだけは宇宙人に渡しちや駄目だ。

「それにしても人工太陽弾とは……」

「驚いた？」

「ああ驚いたね。しかも俺の案よりよつほど現実的だ」

なまじ答えを先に知つてたばかりに、マグネリウムエネルギーに固執しすぎて、全然



思い付かなかったぜ。

参ったなこりや。

「……しまった」

「どうした！」

なにやら数値を入力したりと調整作業に没頭していたアマギが、不意に眩きを漏らす。

やめてくれよ、お前だけが頼りなんだぞ！

青い顔でこちらを振り向くアマギ。

「ソガ、良い知らせと悪い知らせがある」

「こういう時はまず良い方だ！」

「弾頭の調整は完了した。今すぐに撃てる」

「えっ？　じゃあ悪い方は？」

「……トリガーが無い」

「はあ？」

ドユコト？

「これはあくまで航空機に搭載する用に設計してある。だからホークから取り外して、地上で使う事なんて想定してないんだ！　僕のミスだ……なぜこの状況を考えていな

かったんだ！」

「そりや無理でしょうよ……」

むしろ、こんな事もあるうかと人間用の引き金を付けておいたんだ、なんて言われた日にや、もう一人の転生者かと疑いたくなってくる。

しかし……

「なあ、コツキングレバー的なものは無いのか？ それか撃鉄代わりの機構とかさ。どんだだけデカくても銃の基本はそんな変わらんでしょ？」

「あるにはあるが……これだ。この突起を連結させて、機体側のクランクで作動させる」「じゃあ、これが引いたら実質的には撃てる？」

「理論上はな。だが無茶だ！ 例えフルハシ隊員がここにいたって、ビクともせんぞ！ 人間が束になっても、とても引ける固さじゃないんだ！ これが撃てる奴なんて……」

「いるわ！ ここにひとりね！」

振り返ると、挙手して主張するアンス。

「いやいや、フルハシ隊員でも無理なものをアンスが……」  
「私じゃないわ、この子よ！」

「エ。ワ。タ。シ。テ。ス。カ。」

「そうか！ ユーエイト！ お前がいたか！」

「彼の戦闘起動時の馬力なら……いける、いけるぞ！ 頼む！」

「シ。ヨ。ウ。カ。ネ。エ。ナ。」

「やってくれるわね？ ユート？」

「カ。ツ。テ。ン。シ。ヨ。ウ。チ。ノ。ス。ケ。 イジヨウナシ」

「よし、持ち上げてポインターに立て掛けるぞ」

「せーのっ！」

ユートやウエノ隊員と力を合わせ、ポインターの後部を銃架代わりに、射出口が空を向くように持ち上げた。

整流板を支えに使い、ロープで車体と固定する。

「方位はこちらでいいな」

「しかし隊長、セブンはあちらですが……？」

「私に考えがあるんだ」

「分かりました。では、車体をアンカーで固定しますね」

両端に楔の付いたロープでポインターを地面に固定しようとしていた時だ。

『ゴガ、ゴガガガ!!』

「不味い、気付かれた！」

セブンを甚振っていたアロンの一匹が、此方の動きを察知したのか、ゆっくりと向かってくる。

そして、息を大きく吸い込み、胸を逸らす。

ブレスの直前動作だ。

コソコソ何かやろうとしている人間共を、まとめて吹き飛ばすつもりなのだろう。

「バリア展開！ みんな、しがみ付け！」

急いでバイザーを下ろし、咄嗟に開いたドアを盾にして、アンカーロープに縋り付いた。

『ガアアアツ!!』

次の瞬間、黄色い竜巻が俺達を襲う。

車体前面に展開した光波バリアが、硫黄ガスの勢いを減じるが、それでも台風の中に放り込まれたみたいな暴風だ。

ポインターやユートが吹き飛ばないように、固定ロープを死に物狂いで引っ張るが、もはや俺達が飛んでいってしまいそうだ。

視界が黄色い粒子に遮られる中、ありつたけの音量で叫ぶ。

「やれええ！ ユートオオ!!」

「キ。カ。ネ。エ。ソ。テ。カ。プツ　イジョウナシ」

金と銀に煌めく腕が力強く伸び、やっとこのような武骨な指が、大筒から飛び出た突起をがっしり掴む。

彼の臉は透明で、最初から閉じられていたからこそ、砂混じりの竜巻にも怯む事が無かった。

大口を開けて、こちらを見下す怪物を、サーモセンサーでしっかりと睨み据えて、U—8はその身に全電力を漲らせた。全身のモーターが唸りを上げる。

常人にはとても動かす事の出来ない頑固なレバーが、ジャキリと巨大な音を響かせるのを、ごうごうと叫ぶ嵐の中で、警備隊員達は確かに聴いた。

「オ。ウ。シ。ヨ。ウ。セ。イ。ヤ。」

凄まじい爆音と共に放たれた弾丸が、怪獣の横つ面を掠めて、鋭いピツチャーライナーのように飛んでいく。

そのまま背後に広がる分厚い雲に突き刺さり……起動。

深い闇に包まれた地上に、その瞬間、極小の太陽が爆誕した。

燃焼時間僅か数秒。威力は本物の太陽と比べるべくもない。肩書きこそ大仰なもの、その実態は、少しばかり強力な照明弾擬きでしかない。

所詮は今の人類に起こせる奇跡などその程度だ。

人工太陽なぞ夢のまた夢。

それでも、たった数億数万分の一に縮小されたとしても、その輝きは紛れもなく太陽の輝きだった。

叡智の結集により再現された、偉大なる原初の炎は、戦場を覆う暗雲を一気に引き裂いて、闇のカーテンに大穴を開けてしまう事に成功した！

分厚い嵐に、ぽっかりとあいた虫食い穴から、本物の太陽が齎す暖かな輝きが、まるで光の柱の如く地表へと降り注ぐ。倒れ伏す戦士の元へ。

その様は、さながら一枚の宗教画のように幻想的であった。

『デュワーツ!!』

呆気にとられるアロンを尻目に、立ち上がったセブンが胸を張り、肩をいからせ、全身で太陽からの抱擁を甘受する。

満身創痍の身に、光の力が漲り、真っ赤な筋肉が躍動した！

『ジュワツ!!』

立ち尽くすアロンを素早く振り返ったセブン。

彼の両手は、巨大なし字に組まれていた。

『ダー!』

『ゴゴガガツ!!』

ワイドショットを受けたアロン、S4号は爆発四散！

怪力自慢の巨体と言えど、降り注ぐ太陽の力には敵わなかったのだ！

「やったー！」

「太陽エネルギー作戦、成功だ！」

沸き立つウルトラ警備隊。

「S4号ガ、破壊サレタゾ」

「馬鹿ナ有り得ナイ」

慌ててガッツ円盤が高度を下げて、セブンにフュージョンプラスターをお見舞いする。

『アユツ！』

腕をクロスさせ、赤色光線を防御したセブンは、すかさず片手を掲げると、手のひらから楔状のバリア破壊光線を円盤目掛けて撃ち掛けた！

「ウワアーッ！」

ガッツ円盤に光線が命中する度、機体が衝撃で激しく揺れる。

慌てふためくガッツ星人達。

なぜだ、なぜバリアが効かないのだ!?

しかし、そこは腐ってもガッツ星人の母艦。

構造体自体がバリアで構成されていたドローンと違い、外殻を特殊偏向クリスタルで

覆っている為、光波熱線には滅法強い。

ガッツ星人の円盤は、光線技に強い装甲を使用し、物理攻撃はバリアによってシャットアウトする。

そういう設計思想の元に作られているのだ。

例えばバリアを抜こうとも、ビームだけでは撃墜出来ないように出来ている。

それでもお構いなしに、光線を放ち続けるセブン。

やがて透明だった円盤が、段々と黄色みを帯びてきた。

光線の熱量を受け流しきれなくなってきたのである。

例え駄目でも、諦めない事。

一度で駄目なら、百回やれ。百回駄目なら千回繰り返せ！

ノックを繰り返すキリヤマが、隊員達に授けた言葉だった。

練習を終えたダンは、正確に同じコースへ打ち込まれ続けた球場の土が、はつきりとボールの形に抉れていたのを目にして感嘆したものだ。

「え、S5号！ セブンを止めろ！」

『ガガガーガゴ！』

しかし、そんなセブンの背中にアロンが迫る。

彼が倒したのは一体だけで、まだ戦場にはもう一体の怪獣がいるのだ。



流石に二体分のワイドショットを撃ってしまったら、ガッツ星人の円盤を撃墜できなくなってしまう。

だからセブンはもう一体を見逃して、円盤に集中し続けている。

だがこのままでは、アロンの鉤爪の餌食となってしまうだろう。

それでもセブンは振り向かない。

決して避けもせず、後ろに一瞥すらも向けぬまま、ただひたすらに円盤を攻撃し続けている。

なぜなら……

なぜならば！

爪を振り上げたアロンの、長く伸びたうなじを、猛烈な爆発が襲い、怪獣の頭部を大きく揺らした。

たたらを踏んで、態勢を崩すアロン。

『ガアアア！』

「俺達を忘れて貰っちゃ困るぜ」

「地球を守ってるのは、何もセブンや警備隊だけではない事を教えてやるっ！」

「撃てえー！」

ベンガルトラやゴリラ、バイソンのペイントされた戦車達を筆頭に、集結した陸戦隊

の生き残りが、タイミングを見計らった一斉射を喰らわせたのだ。

「ウシジマ車！ エンジン再起動に成功！」

「こちらヘラクレス、ウルトラ警備隊、指揮を乞う」

「よし！ そのまま後退してC地点に誘い込め！ セブンから引き離して、スパイナーガンの射線上に誘き出すんだ！」

「了解！」

「オラア！ 付いてこいバケモノ！」

『ゴゴゴゴガ！』

なぜならウルトラセブンは知っている。

自身の背中中、いつだって小さな英雄達が守ってくれているのだという事を！

『デューワ！』

「何故ダ、有り得ナイ。」

「我々ノ計画ハ完璧ダツタハズダ」

ガッツ星人は負けない。

強いからだ。

ガッツ星人は完璧だ。

宇宙最強の存在故に。

ならば、そんなガッツ星人の計画が失敗する事は有り得ない。

完璧なガッツ星人の考えた事が、間違っているハズが無いのに！  
なげだ。

アロンは一体撃破され、もう一体は制御不能、円盤は拘束されており、セブンは生きて  
いる。

まったく計画通りになっていないではないか。

そもそもなんだ、あの地球人共は？

個々は特に強くないが弱点もなく、どんな過酷な戦場にも嬉々として馳せ参じ、命令  
が無い限り絶望的な戦況でも絶対に降伏せず、最後の一人まで死を恐れず戦う。あんな  
頭のおかしい連中、攻略のしようがない！

吹けば飛ぶような程に弱い地球人は、ガッツ星人からすれば、わざわざ對抗策を用意  
する必要がまるでなかった。実に対策のしがいが無い種族だったのだ。

ところがどうだ。

その弱小地球人と、敗北者たるウルトラセブンに対し、自分たちが明確に押されてい  
る。

計画は完全に破綻していた。

完璧な計画は、全く完璧では無かったのだ。

では、不完全な計画を立てたガッツ星人とはいったい……う？

「基地の電力が復旧しました！ スパイナーガンが地表へ露出します！ 射線上から退避して下さい！」

「ムカイ班長達がやってくれたか！」

地面がせり上がり、長大な砲身が露わになる。

これぞ最新の要塞主砲スパイナーガンだ！

「総員、耐シヨック！」

「主砲、発射！」

炸薬量にあかせた砲声が轟き、超重量のベトン弾が撃ち出される。

しかし……

『ガッツ!』

「なんて奴だ……避けやがった……！」

固定砲台故に、正面からの攻撃になってしまったのが災いしたのか、発射の瞬間にアロンは身を屈め、必殺の砲弾はその頭上を飛び越していった。

「第二射、急げーッ！」

「駄目だ、間に合わない！」

怒りに燃えたアロンが猛然とこちらに向かってくる。

巨砲は未だに沈黙したままだ！

不味い！

「ソガ隊員、これを使え！」

「アマギ……？」

「かつて、僕の目標でもある人が作った武器だ。どんな生物の脳細胞も立ち所に破壊してしまう。僕にはそんな凄まじい性能のものは作れないが……たった一匹の遺伝子にだけ効けばいいなら、話は別だ！ 僕にだってこれくらい出来る！」

「そうか！ アロンはクローン……そういう事だな！」

「ああ、セブンの救出を邪魔されてはいかんと、懐に忍ばせていたが……効果は未知数だ。でも確実に足は止まる！」

「充分だっ！」

アマギから受け取った弾丸を、ウルトラガンの先端にセットして狙いを付ける。

今まさに、ガスを噴射しようと大口を開けたアロンの喉元に向けて引き金を引いた！

ソガの手により、怪獣の口蓋へ一直線に飛び込んだアロン専用の必殺弾は、目覚ましい効果を発揮する。

アマギの作った科学のノミで、二重螺旋の頭文字を削り取られてしまった石人形。

彼の辿るべき運命はただ一つ。

どんな生命も決して逃れられぬ、絶対の『真理』すなわち……『死』だ。

いくらコピーを増やした処で……愛さえ知らずに育つた人造モンスターは、最後まで独りぼつちな事に変わりは無かつたという事か。

びくりと痙攣したガーゴイルは、自らを殺し得る退魔の槍の前で、致命的な白痴を晒す事となる。

「スパイナーガン、ファイヤー！」

特大のベトン弾が、ハンマーの如く宇宙ゴレムの肉体を粉碎し、これでもかど詰り込まれた炸薬が、アロンの細胞を粉微塵に吹き飛ばした！

「S5号が沈黙した！」

「もうだめだ！ 計画は失敗した！」

「そんなはずは無い我々はいかなる戦いにも負けた事の無い無敵の——！」

円盤の外壁が、沈みゆく夕日の如く赤熱し、コンソールがスパークする。

ガッツ星人は、想定外の事態に右往左往するしかない。

彼らは強い。円盤から飛び出して分身戦法を使えば、ここからいくらでも巻き返す目

はあっただろう。

彼らは賢い。セブンも防衛軍も満身創痍で、あとほんの一押しで瓦解する寸前だ。少し冷静になれば、すぐさまそれに気付けただろう。

だが、彼らはただパニックに陥って、次にどうするべきか全く分からなかった。

彼らは強すぎて、賢すぎたが故に……想定外の事態に直面した経験が皆無だったのである。

絶滅を回避した時は、皆が死に物狂いで細かい事を考える暇もなかったが、それを撥ね除けた事による絶対の自信によって、自らの存在価値を証明し続けて来た。

だからこそ、彼らは、自分達が追い込まれるという状況そのものが、理解出来ない非常事態であって……現状を認識してしまった瞬間、彼らの足元で今まで築き上げてきた何かが、ガラガラと音を立てて崩れ去ったのを感じてしまった。

自らに言い聞かせるように、無敵無敵と繰り返すガツツ星人は、モニターに映るウルトラセブンを、頭頂部から銀色の実体剣を引き抜き、正眼に構えるのを見た。

まさか、我々が負

『ダー！』

ウルトラ念力で空中に固定したアイスラッガーに、反バリア波長のエネルギーを充填させ、その後ろから全力の光線威力を撃ち込んだ！

赤熱したブーメランが弾丸の如く射出される。

表面に纏ったエネルギーがバリアを中和し、勢いを一切減じる事無く、堅固な実体弾を、クリスタルの装甲に叩き付けた！

ヒビ割れ粉々に砕け散るガッツ円盤！

これぞまさに、光線と物理の両特性を一挙に打ち込むウルトラノック戦法！

ガッツ星人、敗れたりッ!!

「やったーッ！」

「勝った、勝ったぞー！」

「我々とセブンの勝利だ！」

戦場に勝ち鬨が木霊する。

「キ。タ。イ。カ。ス。イ。ペイ。テ。パア。リ。マ。セ。ン。」

「見たか、ユート……お前のお陰さ」

「パヤ。ク。オ。コ。シ。テ。イジヨウアリ」

「いやいや、これ以上ない活躍だったよ……」

吹き飛んだ太陽弾の発射筒の下で、ひっくり返って藻掻いてるユーエイトも、心なしか誇らしげだ。

『デュワ！』



「ありがとうー！ ウルトラセブナーー！」

暗雲の晴れた空に、両手を広げたセブンが飛び立っていく。

大きく手を振り、それを見送る隊員達。

この場にいる皆が、生まれた場所も、時代も、何もかも違う者達が、全く同じ日の出を見ている。

うつすら白む東の空には、明けの明星が二つ輝いていた。

## 水上での挑戦

「ねえ見て、水鳥よ。鴨かしら？」

「え、どこ？」

「ソガくんのう、し、ろ」

「……いや見れねえ！ え？もしかしてわざと言ってる？」

「もちろん。うふふ」

小さなボートの上で、俺の対面に腰掛けたサエコさんが、悪戯っぽく微笑む。

俺は今、両手でオールを回して、絶賛船漕ぎ中なので、そんな事言われても後ろは向けん！

彼女は俺を揶揄っているのだ。

「ちくしょー……今に見てろよ、カモなんかすぐに追い越してやる！」

「大丈夫、すぐに見えるようになるわ……ほらね」

俺が一生懸命にオールを漕ぐと、そのうち視界の中に岸边を歩くカモの番いが現れた。



俺はともかく、何で宇宙人のお前が、舟漕ぎスキル持つてるんだ！

普通は逆だろ！

おつと落ち着け、ステイステイ……

これで良いのだ。アンヌとダンを二人つきりにして良い雰囲気にする為に、四人乗りを止めて二艘に分かれたんだからな！

まあ、付き合わせたサエコさんには悪い事したと思うが……

俺達は今、深山湖に來ている。

湖といつても、ダム湖だ。

ガッツ星人を倒した後、立て続けに淡水湖での戦闘が続いたから、現在ウルトラ警備隊は絶賛『湖の警戒強化月間中』なのだ。

大カツパの次は巨大ヤモリときて、とどめはカンガルー怪獸ときたもんだ！

ヤモリは分かる。カツパも百歩譲って納得しよう。

カンガルーってなんだ!? なんで日本に有袋類がいるんだよ!? それでなんでカンガルーがダムに現れるんだよ!

いい加減にしろ!

まあ全部、宇宙人が連れてきた用心棒怪獸だったんだけどさ。

とつちめたピニヤが言うには、自分達の星系にある太陽が死にかけてるもんで、母星

を脱出して地球に移住するつもりだったとか。どうやらテプト星人もバンデル星人も同じ口らしい。

「同じ星系内にある星だったから、たまたま環境が似てる日本の湖に大集合する事になったのかあ……んなアホな。」

そんなでもって、原生怪獣ヤモが現れた、この深山湖に関しては、他の個体がいなか  
どうかの後追い調査をするハメになったわけ。

え、任務になんでサエコさんがいるんだって？

それはね……調査はあくまでも建前で、本当は隊員達の休暇も兼ねてるから！

俺はね、気付いたんだよ。

最近、癒やしが足りなかつたな、って。

色々と立て込んでたせいで、あまりにもカツカしてた。

ダンやフルハシにキレ散らかすだけならまだしも、いくらなんでもガッツ星人相手に  
までぶち切れて、口喧嘩のバーゲンセールを開くのはやり過ぎだ。

偶々ガッツ星人が紳士的だったから良かったものの、普通だったら死んでるぜ今頃。

冷静になったオレは、大いに反省したのだ。

だから、保養を兼ねた湖の調査任務と言うわけさ。

病床のピニヤは、ヤモを一匹しか造ってないって証言してるし、調査は本当に念のた

め。

なんか提案はアンヌからだっただけだが、承認が下りた以上は、最近忙しかったからお前ら自然の中でちよつくりフレッシュしてこいという、キリヤマ隊長からの暗黙のお達しである。

だつたらサエコさんとデートするしかないよね？

癒されるうゝ……となるはずだったのに、妙なところでストレスを抱えるハメになるとは……とほほ。

なんでこんな進まねえんだ、このボートは！

しまいにや保養先でキレルぞ！ 元も子も無いぞ！ いいのか？ オレは口だけでガッツ星人を泣かせた男だぞ？

……嘘です調子乗りましたごめんなさい。土下座でもなんでもしますから、旋回するのはやめて前に進んでくださいお願いします。

そうしてオレがボートに頼み込んでみると、後ろの方からこちらを呼ぶ声がある。

「おおい。ソガサーン！ そんなところでなにやってるんですかあー？」

「……ああ、タケムラさん。カワナカさんも。おはようございます」

バチャバチャと水音を立てながら、スワンボートが近寄ってきた。

乗っているのは二人の中年男。

日本カツパ倶楽部のリーダーであるカワナカと、メンバーのタケムラである。

「いやあ、私は野暮だからやめろって止めたんですがね、この人が……」

「だって、さつきからこんな岸辺の近くで、ずっとグルグル回ってんだもんさあ」

ベレー帽の下で、細目をさらに八の字にしつつ恐縮するカワナカ。

丸眼鏡をかけたタケムラが、前歯の抜けた口でふにやりと笑う。

「あー……それはですねー……」

「もう、聞いてくださいいなお二人とも。ソガくんったら、ぜんぜん漕げないの。さつきから気合いの空回り！」

「はええ！ ソガさんにも出来ない事があるんですねえ！ 宇宙人相手にはあーんなに頼りになるのに！ まるで河童の川流れだあ」

「馬鹿だな、この場合は『陸に上がった河童』だよ。あいや、陸と湖が逆だけどさ」

「水に浸かったソガくん？ ソガツパ？」

「ハハハハハハ!!」

「いやあくサエコさん、でしたっけ？ あんたセンスあるよ」

「しかし、ソガさんにこんな別嬪さんがねえ……勿体ないくらいだ」

「おい、そりや聞き捨てならんね。ちーとばかし、俺に対する有難みつてもんが、薄いんとちやうかい？」

「ハハハ……こりやまた失言を」

俺はテペト星人の話なんか、内容をもうすっかり忘れちまつてたんだが、少なくとも彼らが襲われるくだけだけは辛うじて覚えていたので、タケムラさんが殺される前に、なんとか華麗に助ける事ができた。

その縁でこうして仲良くさせてもらつてるんだが……あの時は四人とも物凄い勢いで感謝してくれたのに、まさか忘れてらつしやる？

「いいのいいの。舟の上じゃあ、カモにも追いつけないんだから。ねーソガくん？」

「カモ……？ カモとおっしゃいますと？」

「ああ、あすこにいるでしょう？ 番いが……」

サエコさんが指さす方向を怪訝そうにじっと見つめるおっさん二人。

やがてタケムラが歯抜けの口を大きく開いて切り出した。

「ああ、ありや鴨かもじやない。鵜ぼんですよ」

「……バン？」

「カモではありませんの？」

「ははあ、流石はシティーボーイにシティーガール。カモといやあ冬の季語じゃないですか。日本で夏に見かけるカモなんて、オシドリかカルガモくらいでしょう。それ以外はみーんな、外国に飛んでいっちまいますからねえ……おかしいと思つたあ」



「あ、そっか。あいつら渡り鳥でしたっけ」

「そうそう！ 一口にカモと言っても色々おりましたな。冬には湖面に多種多様なカモがひしめいて、これがまた面白い。なんといっても白鳥や雁だつて、結局はカモなんですから」

「ほお……」

「随分と野鳥にお詳しいんですね……？」

彼らの解説に、オレはついつい感心してしまつたが、サエコさんの言葉を聞いた二人はと言えば、やおら顔を見合わせて、小恥ずかし氣にへどもどし始めた。

「あゝこれはですな……中々にダムより深い訳がありましたえ……」

「私らは何を隠そうカツパ倶楽部なわけであります……カツパを探すとすれば、それはもう活動の中心が湖か川になる……というのは容易にお分かりいただけると思います」

「ふんふん」

「しかし、カツパなどという妖怪変化は所詮、夢物語の話で……」

「意義あり！ ……と申したいところですが、探しても探しても、簡単には見つからないからこそその我らがカツパちゃん。行けども行けども、水面はひようひよう鳴きもせず、たださざ波が広がるばかり。毎回がつくりと肩を落とす我々は、さながら河童が皿の水をこぼしたよう」

「やる事がなくなつた以上、せつかくだからと水鳥を観察し続けていれば、おのずと野鳥の会と化す……というわけですな」

「ハハハ!!」

それでいいのかカップ倶楽部。

「とはいえ、あながち得る物がないわけではありませんよ」

「そう。なにせ……バンはうまい」

「えっ!?!」

サエコさんが絶句した。かわいい。

「江戸時代には5大珍味としてタイやアンコウに並び、皇室に献上されていたとも言われます。今日の昼は決まりだ」

「ソガさん、サエコさん。私が腕によりをかけて、うまいつみれ汁を食わせてやります

よ」

そう言つてタケムラがウインクする。

なにを隠そう彼は『河童』という名前の小料理屋を営んでいるのだ。

料理の腕には相当に自身があるらしい。

……が、そういう事では無い。

「……食べてしまふんですか?」

「へへへ、冗談ですつて。お嬢さん」

「ちよ、ちよつと！ ……もう！」

「そうだよなあー……野鳥つてアレなんですよね。勝手に捕つたらダメなんですよね」

「いいえ？ 免許なら私がもつてますとも」

「あ、ハイ………なんで漫画家が狩猟免許なんか……」

「そりゃあ、ネタのためですよ。とはいえ、夏は狩猟期間じゃありませんし………残念です」

「あ、そういう問題なんだ……」

「そうだ、冬になったら是非ともウチにいらして下さいよ。こっちは冗談抜きで、最高の鴨そばを馳走させていただきますから」

「おお、それは是非食べたいなあ……」

「ソガくん、お蕎麦が好きだものね」

想像するだけで涎が垂れてきたぜ。

そうこうしていると、後ろを振り返ったカワナカ氏が相方の肩をたたく。

「なあおい、タウラくん達が追いついてきたぞ」

「あれま、もつとのんびり漕いでりゃいいのに……」

「今ね、競争中なんですよ。信じられますか？ 私らの事を、年寄りの冷や水だなんて言

いおるんです」

「しかも、フジシマちゃんを載せても勝てるよきた！　こりやあ目にももの見せてやらねば！　という訳でして」

「は、はあ……」

「それでは、昼飯時に合流しましょう！」

来た時のように、バチャバチャと慌ただしく去って行くスワンボート。

それと入れ替わるように、小ぶりなボートがスイーツと視界に入ってくる。

「あらら、逃がしたか」

「もう、ソガさんつてば。しっかりあの二人を捕まえておいてよ！」

「え？　俺のせい？」

今度は女性キヤメラマンのフジシマさんと、SF作家のタウラさんのコンビ。

「カワナカさんがね、テントに自分のカメラを忘れて行ったから、彼女の予備を渡してあげたいんだけど、二人とも必死で逃げるから、なかなか追いつけないのさ」

「タウラさんがあんな事言うからじゃないの……ムキになってるわ、あの二人！」

「ハハハ、どうもあの二人を煽るのが趣味だね。見ていて飽きないんだ」

爽やかな笑顔で、とんでもない事いいやがる。

顔は男前なのに、随分ひねくれてんな……作家つてこんなものばかりか？

見ろよ、サエコさんとフジシマさんの呆れ顔をよ。

「いやいや、そんな目で見ないでくれよ。だいたい、君だっていつも記事に困った時は、彼らをコラムのネタにしてるじゃないか」

「そ、それはそうだけど……」

「あら、フジシマさんはコラムもお書きになるの？」

「ええ、日本全国河童紀行！ 河童の伝承を紐解くときながら、地域の文化史に触れていく事をテーマにしています」

「サエコさんに興味を持って貰ったのが嬉しかったのか、ハキハキ応えるフジシマさん。

思った以上にしつかりしたテーマ性が返ってきて、びつくりした。

「すごいじゃない！」

「へえ、趣味が高じたというかなんというか……河童倶楽部も伊達じゃないな」

「ありがとう！」

「ウケてるのは、タケムラさんのご当地グルメ解説の部分だけどね」

「違いますー！ タウラさんじゃないんだから、私の読者は河童の神秘性を求めているのよー！」

「神秘性ねえ……」

イーツと歯を出して威嚇するフジシマさんを、フツと鼻で笑い、皮肉げな視線を返す  
タウラ氏。

その口ぶりに首を傾げたのはサエコさんだ。

「あら？ タウラさんは河童のファンじゃないんですか？」

「ん？ ああ、僕らは全員が河童の信奉者じゃありませんよ。というより、信じているのはカワナカさんと彼女だけです。タケムラさんと僕は、真つ向否定派」

「え？ 四人のうち二人って……じゃあ半分は信じてないんじゃない！ 河童倶楽部なのに!？」

「やっぱ聞いたらそう思うよなあ……それでいいのか河童倶楽部……」

「ハハハ!!」

心底面白そうに腹を抱えるタウラ氏に、肩を竦めるフジシマさん。

「河童がいない事を証明するために、在籍してるんですこの人。信じられないと思ったらあ  
りゃしない」

「ま、旗色は悪いけどね……悪魔の証明なのは、重々承知さ……」

「そうよ！ 例え前回は宇宙人だったとしても、本物がいない事の証拠にはならないわ」  
「毎回空振りなのに、いつもこの調子なんだ。居るわけないよ」

「なんなら、あの村の漁師さんの方が一番カッパっぽかったもんね」

「あ、やつぱりソガさんもそう思いましたよね!? タウラさんがあの人を案内して来た時、ついに本物を連れてきたかと思っちゃった!」

「カワナカさんが、次回の漫画で河童人間のモデルにしようなんて言ってたよ」

「そうなの? コラムのイラストに使わせてもら……って違う! 絶対、日本に河童が存在した証拠を見つけてやるんだから!」

「大丈夫よフジシマさん。わたしは応援してるわ。頑張つて!」

「ありがとうサエコさん! やつぱりソガさんみたいに素敵な人のフィアンセは、素敵な人なのね!」

盛り上がる女性陣を余所に、タウラ氏が意味ありげな視線を送ってくる。

……そうだよ、二人には言つてないよ。

俺がどっち派かなんて。悪いか!

「ま、僕らはこの辺りで退散するでしょう。あつちでオジサン達がへばつてる隙に追いつかなきゃ」

「そうね……なんならソガさんにも協力してもらいましょうよ」

「あ……それは……無理だろうね」

若手作家の眉が下がり、その瞳にちよつとだけ同情的な光が灯る。

「ソガさん、実は向こうで見てただけ……腕だけで回そうとしても駄目さ。どうし

ても利き手側に力が入って、左右で漕ぐ力に差が生まれてしまうんだ。体全体を使うようにするといいいですよ」

「マジ!？」

「その分、疲れると思うから頑張つてね。それじゃあまた後で」

「御忠告感謝するよ」

アドバイスを残して去つて行くボート。

俺とは違い、スイスイ進んでいく。

……つてアイツ、さっきから片側だけしか漕いでなくない？

なんでそれで真つ直ぐ進めるんだよ!!

その漕ぎ方を教えてくれよ!

かあーっ! 去り際まで気障つたらしいな、もう!

「ふふふ……愉快な人達ね」

「愉快……? まあ、愉快だな。確かに彼らは人生楽しそうだ」

「そんな事言つて、ソガくんだつて随分意気投合してたじゃない。特にさっきの……タウラさん? 彼なんてなかなか気難しそうだったのに。昨日なんか、ホテルのラウンジで遅くまで話し込んだじゃつて。何を話してたの?」

「そりゃ河童についてだけ……たまたま彼の持論と俺のスタンスが似てたから、つい



白熱しちゃってさ」

「ソガくんも否定派だったんだ？」

「ちよつと違うな。河童伝説の一部は、大昔に飛来した宇宙人の事ってだけ」

「へえ……私にも教えてよ」

漕ぐの飽きたし……いつか。

「テペト星人は、以前から地球の調査に来ていたんだと思うんだ。それで、しりこ玉を抜かれるつてのは……そのままズバリ、キャトルミューティレーションされて、気を失つてる間に臓器ぶっこ抜かれた暗喩じゃないかとか……尻こだまを抜かれて腑抜けになるつてのは、現地生物の記憶を確認する為に脳を弄られたり、記憶消去や精神汚染で廃人になった奴なんじゃないかとか、そういう類の話」

「げーっ！ それにしたつて、もつとまともなのは無いわけ？ 河童と言えば、相撲が好きとか、キュウリが好きとか、あるじゃないの！」

「相撲好きは、捕まりそうになった地球人が抵抗して投げ飛ばしたら、予想外の反撃に命乞いしてるテペト星人を『なんだ相撲がしたかっただけか』と勝手に勘違いしたんじゃないか？ あいつら宇宙人のくせに肉体面は貧弱だからなあ……」

「河童の国は穂高山にあるんじゃないかと、山中に隠してあつた円盤で、主人公が母星に連れ去られただけってわけね。言われてみれば、宇宙人らしい社会かも」

「……なんの話?」

「芥川龍之介よ」

タケムラさんのような一般人なら容易く殺せるが、相手がウルトラ警備隊だと、ホームグラウンドたる水辺にも関わらず負けるような奴らだ。

戦国時代の武士や、畑仕事で鍛えられた力自慢なら、ワンチャン倒せたとしても不思議ではない。

彼らは侵略目的の兵士ではなく、移住目的の調査員だったんだろうし。

「相撲に勝ったら秘薬をくれるっていう逸話も、これをやるから命だけは! と差し出した治療薬だろうな。傷口に馬糞塗りたくってたような時代からすれば、宇宙人の常備薬なんか、まさに秘薬と言うべき効き目だったろうし……少なくともガマの油よりは良はずだよ。なんなら、現代の軟膏だとか、そのサエコさんの日焼け止めすら、昔の人からすれば天女の薬さ」

「それは納得できるわね……じゃあキュウリは?」

めっちゃキュウリ拘るじゃん……

「キュウリが好きだったんじゃないかって、キュウリしか口に合わなかった可能性あるよ?」

「ああ……」

「まあ、テペト星人は魚だのニワトリだのも食ってたから、そこまで偏食じゃないだろう

けど……やっぱ水辺から離れた時の水分補給だろうな。もしくは難民だから満腹感の得られるシヤキシヤキした食感が好きだったのか……あ、でも違うか。なんか、江戸時代の後半まで、キュウリは熟れてから食ってたんだって、日本人。河童倶楽部はキュウリの時代考証もするんだから、流石だよなあ……」

「宇宙的にキュウリの栄養素が良かったとか?」

「お、サエコさんも、タウラ説推すカンジ? 彼は、利尿作用と体を冷やす効果が、淡水に潜むテペト星人には有難かつたんじやないかとか言ってたな」

「ふーん……」

水面を指先で搔いていたサエコさんは、こちらへ流し目をくると……

「……情緒が無いわね」

と呟いた。

「べ、別に地球産の河童を否定してるわけじゃないよ? 伝承の何割かは宇宙人、何割かは古代生物、何割かは妖怪で、それぞれ別々にいたけど、たまたま姿が似てたから、話を聞いた人間が全部ごっちゃにしてしまった可能性もある。……ともあれ、全部絶滅してるだろうとは思うけど」

「……あれ? 妖怪も?」

「そっだよ?」

不思議そうな顔で目をパチクリさせるサエコさん。  
なんか俺、変なこと言ったか？

「ソガくんって……前に『俺は神様なんか信じないよ』って言ってなかった？」  
「ああうん、信じてないよ？」

「妖怪は？」

「いるよ？」

「幽霊は？」

「いるよ？」

「神様は？」

「いるよ？」

「え……？」

???

「神様は信じてないよって言わなかった？」

「信じてないよ」

「今、いるって言ったじゃないの」

「ああ!!」

なるほどな！

「いやごめんごめん……神や靈魂、妖怪変化の類が存在する事は認めるけど、信仰する気がこれっぽっちもない、が正しいかな」

「……どういうことよ？」

「そりやこの宇宙には、超次元的なそれこそ全知全能の存在がいてもおかしくないし、そいつが宇宙を創造したと言われても、まあそうか、と思うよ？　でもそれは決して、一般的に言われているような善なる存在じゃない」

「なぜ？」

「善性があるという事は、感情や自我が存在するって事で、自我や感情があるからには、その判断基準や知覚範囲に偏りがあるって事……そんなのぜんぜん全知全能じゃないじゃん？　全知全能に近づけば近づくほど、それは個人ではなくて『現象』として存在するはず」

「……うん？」

「善なる存在ならば全知全能じゃないし、全知全能ならば善なる存在じゃない。いくら信仰を捧げた所で、その能力に限界があるなら頼ってもしょうがないし、こつちを認識しない奴に信仰なんか捧げてても無駄」

「……開いた口が塞がらないわ。それ、ウチの教授の前で絶対に言わないで！」

額に手をあてたサエコさんが、すごい剣幕で釘を刺してきた。

そういえば彼女のゼミの教授は、外人さんだったような気もする。

「大丈夫大丈夫。他人の趣味をわざわざ否定したりしないよ」

「本当でしょうか？」

「ホントホント。もし本当に神がいるなら、なぜこの世は悲劇に満ち溢れ、全ての人が幸福ではないのですか、なんて言わないよ。人間に試練なんぞ与えて喜んでるような奴は性根が腐ってる。悪魔は否定できないけど、神の不在は一瞬で証明できるからね」

「そ、れ、よー！」

「まあまあ、そんな怒らないで、昔の偉い人は言いました。……神は死んだー！」

「ハア……ニーチェね」

「えっ……これニーチェが言ったの？」

「そうよ？ まさか……知らないで使ったの？」

「そうですね……知らないで使いました。」

すみませんでした。

「マジかあ……前言撤回していい？」

「なんで？」

「ニーチェが嫌いだから」

「えっ？ ソガくん読んだ事があるの!? 意外ね……」

さつきまで三角だった目が、一気に丸く見開かれる。

今、さらつと馬鹿にしなかつた？

「昔、友達がさ……お前は絶対に読んだ方が良いつて、しきりに勧めるから、詩集を買つたんよ」

「いいじゃない〜」

「……クツソつまらんかつた」

「それは……いきなり詩集はハードルが高かつたかもしれないわね……」

「いやそれがさ、当たり前の事しか書いてないのよ。途中で飽きて投げ出しちゃつた……俺が読書で躓いた経験つて、多分アレが最初だと思う。そんなくらい嫌い」

気付けば、サエコさんが口に手を当ててクスクス笑っている。

「どしたの？」

「へえ〜当たり前なんだ……」

「俺、変な事言つた？」

「それこそ当たり前よ。今の私達の考え方や価値観なんて、そういつた人達のおかげで成り立っているんだもの。彼らの生きた時代では、今の私達からしたら、当たり前に思えるような事が、当たり前ではなかつたのよ」

「ああ……なるほど。コロンブスの卵か」

「そういうこと。後の時代の者が、先人を嗤うのはズルいと思わない？ ソガくんだった、遙か未来の子孫から、『なんで舟も漕げないんですか？ ナントカカントカ装置を使えばすぐなのに』なんて言われたら、嫌でしょ？」

「……別にいいよ、ウルトラガンで蜂の巣にするから」

「素直じゃないわね……」

嗜虐的な笑みを浮かべた彼女は、そのままわざとらしく口を尖らせる。

「あーでもそつかあ……残念だわー。ニーチェは詩の中で、妻は大事にしなさいって言ってたのになあ……それが嫌いって事は……私は大事にしてもらえないのかしら」

「ウソウソ、ウソでーす。実はニーチェの大ファンでね。彼こそ今世紀最高の哲学者だよ」

「あ、そうだったわ。ソガくんにとっては、そうするのも当たり前なんですものね」

「うんうん、そうだね。しかし、アイツが愛妻家だったとは知らなんだ」

「いいえ、ニーチェは生涯独身だったわ」

「はあ。」

堪えきれないといった様子で吹き出すサエコさん。

「こころろ笑う声はずっと聞いていたいが、二重に揶揄うのは勘弁して欲しい。

「あーおかしい。やっぱり、ちゃんと読んだ方が良さそうね、ニーチェ」



「ぜってー読まない！ それよりも俺は、アウトドアのハウツー本を読む！」

恥ずかしさを紛らわす為に、タウラ氏に教えて貰った漕ぎ方を試す。

……おっ、動いた！

でもこれメツチャしんどいぞ……

「そんなに急がなくてもいいのに……」

「昼メシ、に、間に合わ、ない」

「別にいいじゃないの……たまにはボートを揺らして波風を立てる時間も必要よ……」

さつきみたいだね……」

「それも、ニーチエの、言葉……？」

目を伏せたサエコさんが、水面に掌を差し込めば、ボートの速度に合わせて、後方に波紋が広がっていく。

「……さてどうかしら。自分で勉強してみて」

「そんな、暇は、ないな」

「そう……ボートを漕ぐのが忙しいのね」

「なんか、言った？」

「ううん、なんでも」

さつきまで眺めていたパンの番いは、とつくに何処かへいつてしまっていて、俺の目

には波立つ水面とサエコさんの顔しか映らない。

彼女からはいったいどんな風景が見えているのだろうか。

「少なくとも、わたしは今、幸せよ」

その時、一陣の風が吹いて、彼女の髪を撫でていった。

それがなぜか、酷く愛おしかった。

## ノンマルトの渚（I）

見渡す限り一面の青。

砂浜から遠く離れた沖合に、海底開発センター所属の巨大双胴調査船シーホース号が停泊している。

「こちらシーホース海上基地、コンプレッサー快調に回転中。そちらの気圧、エアは順調ですか？」

錨を降ろし、海上における仮設基地となった調査船からは、大小様々なケーブルやパイプが伸びており、その先は海底に並び立つ巨大なドーム群へと繋がっていた。

「こちらシーホース海底基地。気圧、エア共に良好」

通信機に伝える調査員の眼前で、特殊強化ガラスの向こう側に、タイやヒラメが舞い踊る。

岩と海藻に彩られた海底のサバンナは、今日も普段と変わらぬ顔を見せていた。

「了解……おい、カマタ。めし食ったか」

「カレライス2皿に、干ブトウ。パイナップルの缶詰！ ……めしはうまいし、海はきれいだあ。交通地獄の地上とはおさらばして、このまま海底人間になりたいよ！」

フォークに刺したシロップ漬けの果実を、それはそれは美味そうに頬張りながら、海底調査員のカマタは感嘆する。

「テストが終わったら、いよいよ本格的な作業が始まるんだ。調子に乗りすぎて下痢するなよ」

「ングツ！ ……了解、了解」

カマタは痩せの大食いで、その大食漢は仲間内でも有名だ。

優秀なのだが、どうも軽い性格が災いして、こうして釘を刺される事も多い。

とはいえ、揶揄されても特に気にしない、海のような大らかさを併せ持っているのが、海底基地のような閉鎖空間での任務には欠かせない、重要なムードメーカーでもあるのだが。

カマタの隣席では、同僚がさつきから大きなカワハギとにらめっこをしている。

彼が席に座るといつも寄ってくるのだ。完全に顔を覚えられてしまったらしい。

もつとも、魚の遊びに付き合っただけのような酔狂な奴は、今のところカマタと彼だけなので、それもむべなるかな。

同僚が口を尖らせて睨み返すと、カワハギ側が形勢不利と見えたか、窓の外に仲間がさらに沢山集まってきた。

「この野郎、邪魔物が来たって顔してやがる。刺身にして食っちゃもうぞー!」

「相手だって、お前さんのことを、人間バーベキューにして食べちゃいたいなんて、思ってるかも知れないぞ」

「ハハハ!!」

二人は朗らかに笑いながら窓の外に広がる大地を眺めた。

海底と言っても、所詮はカワハギがいるような深度だ。

水深50mなんて、人間がダイビングできる最大深度は越えていても、光の全く届かぬ海溝が、鬱蒼とした森林だとするならば、雑木林……いや、並木道みたいなものである。

最大深度で言うならば、かつては深度200mに海底基地を建設した事すらもある。

その時はアクシデントで結局計画は頓挫してしまっただが……今度の計画は、それと比べれば、ずっと易しいように思えるだろう。

だが、その内容はかつてのそれよりも、さらに一步も二歩も進んだものなのだ。

一時的に滞在可能な拠点ではなく……それこそ海底都市。

長期間の居住……すなわちヒトが、問題なく海底でも生活ができるようにする。

ついに人類は、その居住圏を海底に拡大しようとして乗り出したのである。

月面基地や火星の開拓拠点の技術を応用すれば、そう難しい事ではないだろう。

今までやらなかったのは、外敵に対する備えとして、宇宙の監視網を構築するのが急務だったからに他ならない。

ようやく地球は、外へ向けていた目を内側に戻し、地固めの時期に移ろうとしているのだ。

浅瀬での実験で最終確認が終われば、早速より本格的な都市建設が始まる事になっていく。

宇宙に遅れる事数年、人間はようやく海底進出の秒読み段階に入ったのである。

海底……それは、我々人類の第二の故郷である。やがて、理想的な海底都市や海底牧場が生まれ、地上よりもすばらしい世界が出来上がるだろう。

白い波が押ししては引きを繰り返す砂浜。

美しい波打ち際を少年が走っている。

しかし次の瞬間、彼の視界になんともショッキングな光景が飛び込んできた！

砂浜に、なんと若い女の生首がころがっているではないか！

すわ一大事と思つたのか、少年はすぐさま駆け寄り……

「お姉ちゃん」

呼びかけに、生首がパチリと目をひらく。

なんとということはない。

それは砂に肩まで埋まつたアンヌだったのだ。

最近の彼女は、それなりに美容に気を遣うようになっていた。

今は砂浴の真つ最中。

もちろん一人ではここまで見事に埋まれないため、協力者が近くに居ることは明白だ。

もつとも、砂を掛けながら彼は「それ、楽しいのかい？」と首を傾げていたが。

「お姉ちゃん、ウルトラ警備隊の隊員だろう」

「……」

問いには応えず、うるさそうに目を閉じるアンヌ。

ウルトラ警備隊は子供の憧れだ。こうして声をかけられる事もしよつちゆうある。

とはいえ、流石に完全なプライベートの休暇中にまで纏わり付かれるのは、辟易するものが無いと言えば嘘になるだろう。

そりゃあ彼女も子供は好きだし、普段ならファンサービスのひとつくらいしてやると

ころなのだが……今日くらい、ほつといて欲しいというのが本音だった。

しかし少年の目的は、サインや握手を強請る事ではなかったようだ。

「だったら、あれ、やめさせた方がいいぜ。ウルトラ警備隊が注意したら、きつときいてくれると思うんだ。僕、もうずいぶん前から、やめろ、やめろって言ってるんだけど、ちつとも聞いてくれないんだよ」

どうやら抗議の類だったらしい。

危険行為をしている輩でもいるのだろうか。

そういえば、銚を携えたダンが、張り切つて海へ入つていったが……彼の事ではあるまいな。

この辺りに立ち入り禁止区域があるとは聞かなかつたものの……地元民だけが知る危険な岩場でもあるのだろうか。

不安になつたアンヌも、仕方なく起き上がる。

「うるさいわねえ。あれあれつて、何よ？」

「あれだよ」

と沖を指さす少年。

水平線に、白く巨大な煙突じみたコンプレッサーが4棟見える。あの独特のシルエツトは間違いない、シーホース号だ。



「ああ、あれね。海底の開発を研究してるシーホース号じゃない。あれがどうかしたの？」

「困るんだよ。すぐやめないと、大変なことになるよ！」

「おーい！」

そうこうしていると、足ひれを持ったダンが、銚に大きな魚を突き刺して、海から上がってくる。とても素人が一朝一夕で出せる成果ではないだろう。

彼は故郷でも、水泳が得意で有名だったらしいが、その言葉に嘘偽りは無いようだ。

……そういえば、ダンの出身はどこなのだろう。

特に聞いた事は無かったが、寒がりなところを見るに南の方の出なのだろうか。

しかし、九州出身のはずのソガ隊員が、寒さなんかへっちゃらだとも言っていたし……だとするともつと南国、それこそ沖縄あたりかしらん。

彼の少々世間知らずなところも、卓越したサバイバル技術も、田舎の島から出て来たのだとするならば、まだ領ける。

その割には、言葉に独特の訛りを感じないし、やたらと自然に感銘を受けるので、妙ではあるが……我々と出会うまでは、随分と苦労したのだろう。

つくづく、知れば知るほどミステリアスな男だ。

「ね、頼んだぜ、ホントだよ？」

ところが少年は、そんなダンの頼もしい姿を見るや、まるで犯罪者でも見つけたような、咎める目つきで彼を睨むと、言いたい事をアンヌに向かつてまくし立てた後は、一目散に走り去ってしまった。

あたかも、ダンの視界に映る事を恐れているかのような……

アンヌは呆然と、少年の背中を見送るしかなかった。

それこそ、モロボシ・ダンと言えば、ウルトラ警備隊の中で最も子供からの人気が篤く、本人もとびきりの子供好きで有名だ。

何かを頼むならば、アンヌなどよりも真っ先に頼るべき人物だろう。

彼ならば、それがどんなお願いだって、真摯に向き合い対応してくれるはずだ。

現にアンヌは、さっきの言葉を真に受ける気なんて、さらさら無いのだから。

そんなダンから逃げるなんて……もしやあの少年は漁師の息子で、ダンが勝手にこの辺りの魚を獲ったのが許せないとか？

ともあれ……

「変な子……」

「どうしたんだい？ ホラー！」

眩しい笑顔を浮かべながら、自慢げに大物を見せびらかすダン。

「海底開発センターのシーホース号が、大変なことになるんだってさ……」

「大変なことって?」

「よくわかんないわ」

「海底の開拓は、宇宙開発より身近なテーマだよ。何が大変なものか」

ダンがそう呟いた……その時。

凄まじい爆音が二人の耳に飛び込んだ!

振り返ると、沖に停泊していたシーホース号が盛大に爆発炎上しているではないか!

あまりに突然の出来事を、為す術なく見つめるしかない二人。

アンヌ達の眼前で、轟々と炎に包まれたシーホース号は、アツという間もなく傾いて、海中へと没してしまった。

「ダンより作戦室へ……作戦室応答願います!」

「キリヤマだ。どうした? 二人ともクラゲにでも刺されたのか?」

休暇中のダンから通信が入る。

アンヌと二人きりのバカンスを、にこやかな表情のキリヤマ隊長が暢気に茶化す。

彼らの仲は、もはや作戦室メンバー公然の秘密となっていた。

しかし、続くダンの報告によって、弛緩した微笑ましいムードは一瞬で消え失せ、隊員達に緊張が走る。

「海底開発センターのシーホース号が沈没しました！ 原因は不明です！」

「なにッ!? シーホース号が沈没……!?」

「ええっ!?!」

たちまち隊長の顔が引き締まり、驚愕したフルハシが立ち上がる。

そして……俺の対面にいたアマギの顔から、サツと血の気が引いた。

「よし判った。すぐ帰って来い。フルハシ！ ハイドラランジャー出動スタンバイ！」

「ハッ！」

先輩の放り投げたヘルメットをキャッチして、海中ゲートへ向けて走りだす俺達。

ついにこの日がやってきたか……いつもいつも先手を譲るしかないのが、歯痒くて仕

方がない。

だが、俺には襲撃の正確な日時も分からなければ、ノンマルトの警告へ額面通りに

従って、シーホース号の任務を止める権限も無いのだ。

それでも、出来る限りの事だけは、やらなくてはならない。

それが、未来を知っていないながら彼らを見捨てた俺に出来る、唯一の贖罪だから。

「頼む……」

後ろでアマギが何か呟いた気がしたが、発進準備でそれどころではなかった。

海域に到着して、ソナーの用意をしていると、アマギが妙に思い詰めた表情をしているのが目に入って、どうにも気になってしまふ。

そういえば、船内で一言も喋らなかつたなコイツ。

「アマギ、どうしたんだ？ 顔色悪いぞ」

「いや……なんでもない」

「おい、みろ!!」

フルハシ隊員の声に、水中窓から外を見ると、無残に破壊されて着底したシーホース号と、海底開発センターの残骸が見える。

「ハイドランジャーより作戦室へ……ハイドランジャーより作戦室へ！ 沈没したシーホース号と、海底開発センターの残骸を確認！ 全棟のパイプが引き千切れて、酷い有様です！ 見える範囲に無事なものがありません！」

「全滅!!」

通信機の向こうでキリヤマ隊長が慄くのに合わせて、背後でヒュツ……という誰かの悲鳴が聞こえる。

振り返ると、窓を覗いたアマギが愕然としていた。

「そ、そんな……カマタさん……ああ……」

わなわなと震えた彼は、焦点の定まらない瞳で此方をゆつくりと振り向くと、顔を歪めてその場に蹲つてしまう。

「しつかりしろ！　まさか……知り合いがいたのか!?!」

「お、恩人の……親族が……彼も優秀な技術者で……こ、ここに……」

「嘘だろ……そんな事……早く言つといてくれよ……」

　　「だつたらもう少し……他のやりようだつて……」

「何をボサツとしてやがるっ!」

　　俺達の頭上から、凄まじい怒声が降つてきた。

「生き残りがいないなんて、いったい誰が決めたんだっ!?!」

「し、しかしあれでは助かりようが……」

「たまたま無事な区画があるかもしれないねえだが!　それでも放つといたら酸素は直ぐに尽きる。誰かが助けてやんなきゃ、死んじまうんだよ!　ソガを見ろ!　あんな事があつて、それでも恐れず海底任務についてきた!　アマギ!　お前は どうするんだ!?!」

「……そうか、ソガ隊員はあの時……」

　　アマギが俺の顔を見て、何かを決意する。

……二人とも、いったいなんの話をしてるんだ?

「ありがとうございます。フルハシ隊員。目が醒めました……積んできたレイクダイヴァでもっと接近してみましよう。あなたの言うとおり、各棟はそれぞれ独立していて、接続パイプには弁がある。爆発で隔壁に穴さえ開いていなければ、数時間は持ち堪えられる可能性があります」

「よし、生存者を見つけ次第、ハイドランジャーの排水口と連結させよう。ホースの設置は任せとけ！」

言うやいなやヘルメットを脱ぎ捨て、後部ハッチへ走って行くフルハシ。潜水装備に着替える為だろう。

「ソガ、お前はハイドランジャーを頼む。絶対に、生存者を見つけてみせるぞー」

アマギも決然とした表情で、小型潜水艇レイクダイヴァの搭載口へ、タラップを降りていく。

ハイドランジャーは大きすぎて、これ以上は接近できない。その点、レイクダイヴァなら水中アームで障害物を除去しながら、居住棟同士の隙間にも入り込めるはずだ。

俺だって、この時に生き残りがいたかどうかなんて、もはや覚えちゃいない。

ストーリーには全く関係ないし、当時の俺にとっては、そんな事はごく些細な事だったからだ。

だが、この世界では彼らは確かに生きていて、未来に向かって精一杯に藻掻いている。

俺には今回、転生者としてどうしてもやらなきゃならない役目があるが……

それでも……それ以前に今の俺はウルトラ警備隊員で、絶対に果たすべき使命は、目の前の人々を一人でも多く救う事なのだ、という事に変わりは無い。

前世の記憶があろうとなかろうと、俺のやるべき事はそれしかないのだ。

二人が去つて、静寂の支配した船内。

救援を呼ぶために通信機を手に取りろうとした時、壁から微かに、カーンカーンと一定間隔で小さく反響する音が聞こえた気がした。

手許を見ると、パッシブソナーが反応しているではないか。

慌ててピンガーを打つ。

すると、しばらくして。

カカカン　カーンカーンカーン　カカカン……

「二人とも！　生存者だ！　生存者がいるぞ!!　壁かパイプを叩いて救難信号を発してる！　生きているんだっ！」

俺が船内マイクに向かって叫ぶと、格納庫が開いて、アマギの乗ったレイクダイヴァーが飛び出していく。

そのすぐ後にランプが点灯し、フルハシのいる後部ハッチが早速と、注水を始めた事を知らせた。



「作戦室、作戦室！ 直ちに最寄りの病院に収容体制を整えるよう要請して下さい！ 生存者がいます！」

「でかした！ 速やかに救助せよ！ 今、海上保安庁の巡視艇が救命士を乗せて向かっている！」

「……絶対に死なせるもんか」

## ノンマルトの渚（Ⅱ）

「カマタさんは僕の恩人の従兄弟でね……火星開拓に行つてしまつたその人に代わつて、なにかとよくしてくれただよ。彼らがいなければ、今の僕がこうして科学を志す事も無かつたらう」

「ふーん……じゃあ、ある意味、地球防衛軍の恩人みたいなもんだな」

「こんな事を言つては不謹慎かもしれないが……彼らだけでも助ける事が出来て本当に、良かった……」

病室の扉を開けるアマギ。

そこにはベッドが並んでおり、救助された海底基地の作業員達が体を横たえていた。顔の上半分に包帯を巻いた男が、ドアの音に気付いたのか、ゆつくりと上体を起こそうとする。

「待つてカマタさん！ 起きてはいけません、安静にしていなくては」

「おや、その声は……もしかしてアマギ君かい？」

「ええ、御無事でなによりです」

「いやあ……命の恩人だよ。本当に、ありがとう」

「あの人が帰つてこないうちに、地球であなたを死なせてしまったら、会わず顔がありませんから……出来ればもつと大勢の方を、助けてあげたかった……」

「いいや立派だよ。あの時の少年が、自分を追いかけてウルトラ警備隊だなんて、奴も鼻が高いだろうさ……」

あんな大事件から救助されてすぐだと言うのに、そうしてアマギを労う男。なるほど、彼が慕うのも分かる人格者だ。

流石に声からは張りが失われて、酷く弱弱しいが、その響きには隠しきれない優しさと親しみが滲み出ている。

この声、どこか懐かしさを感じさせるものがあるんだが……はて、どこで聞いたんだつたか……？

まあいい。本当ならもう少しこのまま旧交を温めさせてあげたいところだが、本題に入らせていただく。

後が押してるもんでね。

「あーすみません。カマタさん……でよろしいでしょうか？」

「ソガ、やっぱり休ませてあげてはくれないか。なんといつても彼らは……」

「いや、いいんだアマギ君。あなたもウルトラ警備隊の方ですね？ この度はなんとお

礼を申し上げれば……」

「……よして下さい。お二人を見つけたのはアマギだし、身一つで多目的ホースを結合させたのは、フルハシ隊員です。俺は何もしちゃいません……」

「いいえ、閉ざされた空間の中で、打ち返してくれたメッセージが、どれほど心強かつたか！ あの時間聞いたピンの音は、一生忘れないでしょう……コイツと私がこうしているのは皆さんのおかげです。協力させて下さいよ。当時の事をお聞きになりたいんですよね？」

「うっ……」

声を頼りに、俺の手を握りしめてくるカマタ氏の言葉を聞いて、なんだか涙が溢れそうになるが、それをグツと堪える。

「こんなところで泣いてる暇はないのだ。」

「辛い事を思い出させて、申し訳ないですが……」

「それをお伝えするのが、生き残った私の役目なのでしようから……あの時、横からの激しい衝撃で、私たちは壁に叩き付けられました。そして次の瞬間には、上の方から凄まじい爆音が響いて……すぐに気を失ってしまいました。ただ一つ言えるのは、あれは決して機材の誤作動によるものではないという事です」

「その根拠は？」

「あれ程の爆発を引き起こすと言う事は、おそらく船に積んであったコンプレッサーの、圧縮酸素に引火したとしか考えられません。しかし……直前には、エアや気圧に異常がない事を、上でも下でも確認し合いました。他でもない、私自身が確認したんです！アマギ君……1番棟や2番棟の様子はどうだった？」

カマタの質問に、目を瞑って現場の光景を思い出そうとするアマギ。

「1番棟は中から弾け飛んだみたいにはバラバラで……それ以外の棟は、海底のあちこちに吹き飛んで酷いものでした。2番棟なんて、元の位置から10mも移動していたんです！海底に固定されたままだったのは、お二人のいた5番棟だけでした……」

「やっぱり……」

押し黙るカマタ氏。

何事かを考えて、結論が出たのだろう。

顔をあげて、再び証言を続ける。

「でしたら最初の爆発は、基地中央の1番棟で起きたと考えられます。居住棟の外壁は、水圧に耐えられるよう特殊合金製です。生半可な衝撃ではビクともしないはずだ。それが一つだけバラバラになつていたという事は……1番棟の爆発がメインシャフトを伝つてシーホース号のコンプレッサーへ逆流し、圧縮空気に引火……その後に、船の爆風がまた換気パイプを伝つて、各棟へ届けられてしまったのだと思います」

「そうか、他の棟は上から吹き込んできた爆風が、ドームの底面を突き破って、そのままジェットのように飛び上がってしまったのか！」

カマタの仮説が、脳内で詳細に理解できたのだろう。

あまりに壮絶な有様に慄くアマギ。

「天井が船とパイプで繋がっていないのは、我々のいた5番棟だけさ。通信ケーブルを通さないといけなかったからね……しかし、みんな苦しまずに逝つただろう事は、不幸中の、幸い……だな……」

カマタさんは、仲間の最期に思い至つたのか、ついにさめざめと泣き始めてしまう。ここまでよく我慢したものだ。なんとという精神力だろう。

だがこれで、爆発が海底から始まつた事が分かつた。

そして……

「1番棟には、特殊合金の外壁を吹き飛ばすような威力の爆発物は置いていないはずだ。なんといつても、海上と基地を繋ぐ玄関口なんだから」

「つまり……これは単なる事故なんかじゃない」

頷き合う俺達。

「ああ……ちきしよう……もう魚は食べられねえなあ……」

「……今日を思い出してしまいますか」

「いやあ……流石の私も、恩人は食べません」

苦笑いでゆるゆると首を振るカマタさん。

「恩人？」

「ええ、本当はね……私達も通信が終わったら、四番棟の点検に戻るはずだったんですよ。でも、メシが終わってさあ戻るかという時に……窓の外に魚が山ほど集まってきましてね」

「魚が、ですか？」

「今までも、カワハギが二、三匹覗きこんでくる事がありました……その時は、あらゆる魚が窓をびつしり覆う勢いで此方を見つめていたんです。普段は知らん振りで通り過ぎていく、ドチザメまでもがですよ？　こんな事は初めてだなと、相棒と首を傾げていたら……いきなりドカーンと」

怪訝そうなアマギと顔を見合わせる。

まあ、ウルトラワールドならあり得そうな話だ。

特に俺からしたら、今回の下手人はノンマルトと分かっているから尚のこと。

……とはいえ、アマギは信じなさそうだけどな。

「つまり……魚達は何らかの異変を察知していた？」

「さあてねえ……でも、奴らが引き留めてくれていなけりや今頃は……」

「そんな言い草、貴方らしくもない……弱気になってるんですよ。もう休んだ方がいい」

「……そうさ、あいつらがそんな殊勝なもんか。ようやく邪魔者がいなくなるぞと、野次馬に来てただけさ！」

後ろのベッドから皮肉げな声がする。

さつきまで寝ていたもう一人が、いつの間にか目を醒ましていたようだ。

「おう相棒、起きたかい？」

「その声……カマタか。助かったのか、俺達？」

「ああ、そうだ。ウルトラ警備隊が助けてくれたよ。お前さんなんか、ホースが繋がった途端に、気をやっちまうんだから……あの、カラのでっかい隊員さんに感謝しなきゃな。お前を負ぶってくれたんだぜ」

「……他のみんなは？」

「……」

「そうか……」

同僚の沈黙で察したのか、消沈した声を漏らす。

「あの坊主の言うとおり、海底開発なんか止めときや良かったんだ……」

「……坊主？」



「いただろう、あのホク口の……そういやカマタは会った事がないのか」

「ああ……あいつらがそんな事を言ってたな……」

「坊主とは？ 誰の事です？」

「なんでも、作業をやめろと何度も言ってきた子供がいたそうだね……」

「あの子だ、あの子が知ってる……何か知ってるはずなんだ……あの子が……」

「寝ちまつたか……」

呻き声がいびきに変わる。

そりやそうだ。体力だつて消耗しきつてるだろうからな。

カマタさんが元氣すぎるだけだ。

「……我々は領分を侵してしまったのかもしれないなあ」

「領分ですって？」

「そうです。私はね、思ってしまったんですよ……煩雑な地上より、静かでキレイな海底の世界の方がずっといいってね……」

「……」

「それはとんだ思い上がりだ。海底は、美しいだけじゃない。我々なんか思うより、ずっと深くて、ずっと恐ろしい場所のままだった……それを忘れてしまったから、海の神様が怒つたに違いない……お前達なんぞがこちらへ仲間入りしようだなんて、烏滸が

ましいぞって……」

「……神様なんか、居やしませんよ。例え居たとしても、怒って誰かを傷つけるような器の小さい奴が、海の神であるハズが無い。それはただの……怪物ですよ」

「そうでしょうか……そうでも考えなきや、爆発の原因は、まったく分からないんですから……」

カマタは包帯の巻かれた顔で、病室の外を向いていた。

開いた窓から聞こえる潮騒の音で、渚の方角が分かるのだ……

作戦室に、ダンとアンヌが帰ってくる。

アンヌに接触して、事件を予告したという子供を探したらしいが、収穫は無し。

学校にも行つたのだが……

「授業中で駄目でした。後で連絡をくれることになっております」

「苦勞」

「生存者はいましたか？」

「船と海底基地の係員が二人、奇蹟的に助かって、近くの病院へ收容されたよ」

「会つて来たんですか？」

「うん」

「原因は全く判らんそうだ、彼らにも……」

「シーホース号の係員が、その子供のことをうわごとのように言ってたよ」

神妙な顔のアマギは、カマタ氏の同僚が、寝入る前に放った言葉が気になるらしい。

「あの子が、何かを知ってるって……」

そこへマナベ参謀が、テープレコーダーを持って入ってくる。

「さつき、長官のところには、子供から妙な電話がかかって来たんだ。……これが録音したものだ」

参謀がテーブルの上にレコーダーを置いて、スイッチを入れる。

『海底はノンマルトのものなんだ』

『そのノンマルトって何だね？』

『人間が、海底を侵略したら、ノンマルトは断然闘うよ』

『坊や……』

『ねえ、長官にちゃんと伝えておくれよ。海底はノンマルトのもんだから、侵略したりすると、大変なことが起きるよ』

ガチャンと乱暴な受話器の音が出て、それきり少年の声は聞こえなくなる。

参謀がスイッチを切ると、すかさずアンヌが頷いた。

「あの子の声だわ」

「ノンマルト……何のことだ？」

「ハーハツハツハツハハハ！」

眉間に皺を寄せる隊長の後ろで、フルハシが豪快な笑い声を上げた。

「嘘っぱちで言ったことが、本当に起こったんでねえ、調子に乗ってんだよ、きつと」

「ダンカンの時みたいにも、宇宙人が人間の口を借りてるのかもしれないよ？」

「……大体ね、事件そのものが、故意なのか、事故なのかハッキリしないんだよ。こんな子供のイタズラ電話なんて気にしない方がいいよ？」

まったく、この人はいつまで経っても、この調子だ。

安心と信頼のフルハシ隊員。

有事と平時の落差が凄い。

（ノンマルト……ノンマルト。やっぱり、あのノンマルトの事なんだろうか）

俺達のやりとりなんかさっぱり無視して、ダンが一人で考え込みながら作戦室をうろつき回る。

おおかた、ノンマルトという言葉にひっかかりを覚えてモヤモヤしてるんだろうな。

今回の話は、地球の先住民と名乗るノンマルトが、現生人類に対して反撃してくる、という話だ。

かつて海に追いやられた種が、最後の居住圏までも人間に侵略されそうになって……との事。

作中では結局、その話が本当かどうか分からないままノンマルトが全滅して有耶無耶になった……というか、有耶無耶にしたんだが。

セブンの故郷であるM78星雲では、地球人の事はノンマルトと呼称していたそうだから、まあ、本当だったんじゃないかな？ とは思っている。

ぶっちゃけ、ノンマルトの主張が嘘だろうが本当だろうが、俺にとっちゃーミリも関係ないんだけどな……やることは変わらないし。

とはいえ、恒点観測員であるダン的には、気になるところなんだろう。

安心しろダン。お前の悩みのタネは、俺が綺麗さっぱり取り除いてやるからな。

そうしていつものダンしぐさを眺めていると、俺の目の前で、作戦室の電話がなる。

「はいこちら作戦室……ああ、チョットお待ち下さい……アンヌ、電話」

「モシモシ、友里ですけど……ああ、校長先生。先ほどはどうも……えっ……そうですか！ ……はい、すぐお伺いします……では、後ほど」

電話を切ったアンヌが安堵の溜息をつく。

「あの子、みつきりそうです」

「そうか」

「僕も行くぞう」

出て行く男女の背中に、フルハシが呆れたように鼻を鳴らした。

## ノンマルトの渚（Ⅲ）

ポインターの中、ハンドルを握るダンの隣では、アンヌが意気消沈している。

結局、学校では彼女の会ったと言う少年は、見つからなかったのだ。

あるいは、この付近の子供ではないのかもしれない。

そんな事よりもダンは、テープの中で、少年の発した言葉がずっと引っかかっていた。（ノンマルト……僕の故郷M78星雲では、地球人のことをノンマルトと呼んでいる。ノンマルトとは人間のことだ。だが、確かに少年はノンマルトと言った。それはどういう意味だろうか。人間でないノンマルトがいると言うのだろうか……？）

ダンの抱える悩みの事など露知らず、ポインターの窓からぼんやりと海岸を眺めるアンヌ。

水夫達が、綱引きの巻き取り車を数人がかりで回している。

まるで古代の奴隷のよう……

そんな事を考えていると、岩場に座る青いボーダーシャツが見えたような気がした。

「ストツプ！」

「どうしたの？」

「あの子だわ……」

車を降りていくと、岩場の上で、子供が小さな背中を丸めてオカリナを吹いていた。物悲しいメロディーが、波間に揺れる。

「君！……随分さがしたわよ。君、なんて名前？」

「シンイチ」

「そう。ねえ、シンイチ君、なぜ、海底開発センターが壊されてしまったの？」

「ノンマルトが怒ったのさ！」

なぜ？

アンヌは努めて優しく問いかける。

「海底はノンマルトの物だもん！」

「ノンマルトってなんなの？」

「本当の地球人さ！」

この子は何を言っているのだろう。

地球人に、本当も何もないではないか。

私達が地球人なのだから。

「ずっとずっと昔、人間より前に地球に住んでいたんだ。でも、人間から海に追いやられ



てしまったのさ。人間は、今では自分たちが、地球人だと思ってるけど、本当は侵略者なんだ！」

「人間が、地球の侵略者ですって？」

まさか。

まるで信じられないといった様子のアヌに、無言で頷きを返すシンイチ。

「君……ノンマルトなの？」

「人間はズルい。いつだって自分勝手なんだ。ノンマルトを海底からも追いやろうとするなんて……」

「シンイチ君は人間なんでしょ。だったら人間が人間のことを考えるのは、当然のことじゃない。海底は私たちにとって、大切な資源なのよ」

シンイチの言葉を遮るアヌ。

そろそろ議論が平行線になりそうだったからだ。

しかし、少年はますますいきり立って声を荒げた。

「でも、ノンマルトには、もつともつと大切なんだ！」

「わたしは人間なんだから人間の味方よ。シンイチ君もそんなこと言うべきじゃないわ」

シンイチは口を真一文字に結んで押し黙る。

アンヌの瞳の中に、堅い拒絶の意志を見てとったからなのか。その時、ダンが岩陰から姿を現す。

超人的な聴力で、全て聞いていたのである。

「シンイチ君！」

「人間がやるんなら、ノンマルトもやるよ！ 僕知らないからね！」

シンイチは捨て台詞を残し、そのまま海にとび込んだ。

ダンとアンヌは心配そうに海を見つめるが、いつまで経っても少年が浮かび上がってこないではないか。

溺れて沈んでしまったのだろうか。

いや、それとも……

その時、ダンのビデオシーバーが鳴る。

「はい、こちらダン！」

「キリヤマだ！ 城南大学の海底探検部の船が襲われた！ すぐ戻れ！」

「了解！」

後ろ髪を引かれたアンヌが振り返るも、水面には白いオカリナが揺蕩っているだけだった。

ホーク1号が急行した時、巨大なタコの如き触手を持った怪物が、大学所属の調査船に絡みつつき、海底に引きずり込もうとしていた。

「ノンマルトつてのは、奴のことか！」

「船が危ない！」

低空飛行で接近し、出来るだけ至近距離から催涙弾を撃ちかける。

怪獣と船の距離が近すぎて、通常の攻撃では危険すぎるからだ。

もちろん催涙弾といつても、対怪獣用のものであるから、サイズはほとんどミサイルみたいなもの。

とてもじゃないが、人体に悪影響が無いとは言えないし、小規模とはいえ、着弾すれば爆発だつてする。

しかしこれでも、ホークに搭載している兵装の中で、なるべく殺傷力の低い物を選んだのだから、船員達には割り切ってもらえないだろう。

本物のロケット弾やレーザーで誤射されるか、このまま怪獣に真つ二つにされるよりははずつとマシンはずだ。

刺激性の煙が粘膜にさぞや染みたのか、仮称ノンマルトは吸盤から船を解放すると、触手を空に向かつて振り回してホークを威嚇する。

その隙に全速力で離脱する調査船。

手酷くやられて、甲板に並んでいたクレーンやコンテナは全てぺちやんこにへし折られてしまったものの、スクリューだけはなんとか無事だったらしい。

半ば傾きかけているが、救助船のいる方向まで逃げるくらいはできるだろう。

防衛対象が離脱したのを確認すると、ホークは今度こそ真正銘の対獣ロケット弾をこれでもかとお見舞いした！

あまりの威力に、スミを吐き出し。慌てて海中へ逃げ込む怪獣。

……が、大ダコにとつての脅威は決して上空だけに居るのでは無い。

「発射！」

「ハイ！」

キリヤマ隊長の恐るべき二段構え。

号令と共にソガが発射レバーを倒す。

怪獣の背後から忍び寄ったハイドラランジャーが、必殺の重魚雷を無防備な背中に解き放った！

脇腹と首筋に長槍を突き込まれた怪獣は、たまらずと言った様子で飛び上がり、思わず水上に頭を出してしまう。

すると今度は、待つてましたと言わんばかりに、ホーク1号の急降下爆撃！

凄まじい爆発の雨に、触手が一本千切れ飛んでしまった怪獣は、放心状態で海底にゆっくり沈んでいく。

空と水中からの両面攻撃。

水に潜って姿を隠す怪獣に対しては、実に有効な戦術だ。

「これぞウルトラ作戦第七号さ」

海底に横たわり、ゆらゆらと触手を揺らして海藻に擬態する事で、なんとかこちらの目を誤魔化そうとする怪獣。

俺はその喉元へ、魚雷の照準を合わせた。

悪いなガイロス、隠れんぼへ付き合つてやるほど、怪獣に対する容赦は持ち合わせていないんだ。

極東支部ご自慢の、七〇式圧縮酸素魚雷をくらえ！

正中線に対獣魚雷を被雷してしまった怪獣の肉体が、びくと大きく跳ねる。へたりと岩場に力無く垂れ下がる触手。

ようし、やつつけたぜ。

……でも言うと思つたか！

「隊長、タコは知能が高いと言いますからね。死んだふりかもしれませぬ。念のために

追撃しておきましょう」

「うむ」

海底にくたりと広がるガイロスの上を、ゆっくり通り過ぎつつ、ありつたけの爆雷をばら撒いておく。

次々に炸裂する攻撃に、今度こそ怪獣は沈黙した。

死亡確認、ヨシ！

本来なら死んだふりでやり過ぎされてしまうけど、俺はコイツの出番がもう一回ある事を知っている。

だからここで、念入りにトドメを刺しておくのさ。

ノンマルトの武器を奪っておくに越した事はないのでね。

ガイロス君、よく雑魚扱いされるけど、警備隊にこれだけ一方的に叩かれておきながら、後半にセブンともう一戦できるくらいにはタフなんだよな。

その耐久力だけは目を見張るものがある。

残念だが今回は、そのしぶとさを発揮することなく、ここで静かに眠っていてくれ。安らかにな。

「やれやれ、これで人騒がせな事件も無事落着というわけだ！」

「コーヒーでもいれるか？」

「おお、僕にも頼むよ」

大物を倒し、ようやく一息ついた隊員達。

「海底怪獣ノンマルトを生け獲りにして、水族館に持って行けば、ひともうけできたのになあ、おいしいことをしたよ」

「これで海底の邪魔物も消えた。アマギ、報道班に連絡、テレビ、新聞、ラジオでニュースを流すよう要請してくれ」

「はい」

アマギもようやく、フルハシの不謹慎なジョークに笑う余裕が出て来たに見える。

キリヤマ隊長の顔も晴れやかだ。

しかしそこへ、マナベ参謀が険しい顔で割り込んでくるではないか。

「ちよつと待った！ 今、例の子供からまた連絡があつてね。ウルトラ警備隊がやつつけたのは、ノンマルトではなく、怪獣ガイロスだというんだがね」

「何ですつて!!? するとまだノンマルトは……」

「その子の言によれば、ノンマルトは遂に、原潜グローリア号で、地上攻撃を開始するこ

とになったと……」

「グローリア号？」

「二ヶ月前、太平洋側で行方不明になったイギリスの原子力潜水艦です」

隊長の疑問に、アマギが答える。

新鋭兵器に關しての知識は、やはり彼が図抜けているらしい。

横から焦った様子の子のダンが声をかける。

「参謀、その子は？」

「電話をかけて来た場所が判ったんで、隊員が急行したよ。今頃、つかまえた頃だろう」

「……」

「ダン！」

マナベ参謀の言葉を聞いたダンは、おもむろにヘルメットをひつつかむと、アンヌの制止も聞かずに走って行ってしまった。嫌な予感がしたんだらうな。

……おっと、そうだった。

「参謀、急行した隊員の装備は？」

「装備？ ……特殊警棒があるにはあるが、子供相手に振るうわけにもいくまい」

「いけません、直ちに射撃装備を解禁してください！ 例え外見が子供でも、相手はノンマルトのメッセンジャーです。それにその子自身はただの子供でも、奴らが回収しに来



る可能性があります！　せめてなんらかの非殺傷武器で警戒する必要があるのではないのでしょうか？」

「ふむ……」

「まーた始まったぜ」

「怪獣まで出て来た以上、ノンマルトの實在は疑いようもありません」

「……駄目だ。やはりそれは出来ん。どれだけ行つても我々は地球防衛軍であり、例えば宇宙人の内通者であつても、相手が非武装の子供であるなら、武器を携えて追い回す事は出来んのだ」

「……そうですか。差し出がましい口を聞きました。お許しください」

「いや、ソガ隊員の懸念は尤もだ。確保の人員には武装できずとも、その代わりに増員と、少年の確保よりも周囲の警戒を密にするよう伝える。万一の後詰めには武装許可も出そうじゃないか」

「ありがとうございます！」

「待てー！」

「とまれー！」

海岸沿いを少年が走る。

彼の後ろからは、数人の防衛隊員が追いかけてきており、進行方向からはさらにもう幾人の男達が湧いてきて、子供を挟み撃ちにした。

シンイチは逃げ場を失って、四方八方を囲まれてしまったのだった。

「捕まえろ捕まえろ」

「囲め、そつちだ」

「大人しくしなさい」

「……ん？」

その時、遠くの岩陰で何かチラリと光ったような気がしたのを、外周で辺りを窺っていた隊員が見咎める。

警戒を促そうとした瞬間！

「うわぁーっ！」

「ぎゃあ！」

少年に覆い被さっていた隊員の背中にレーザーが突き刺さり、苦悶の声を上げて倒れていく。

「狙撃されているぞー！」

「散れ、散れー！」

「そこの岩場だっ！」

「がっ!？」

慌てて散開する隊員達の間を縫って、シンイチがレーザーの発射される先へ逃げ出した。

「ま、待ちなさ……ああっ！」

「危ないぞー！」

「駄目だ、こつちがやられてしまう」

「あの子は敵の仲間だったんだ！ 撃たれてない！」

遮蔽に辿り着くまでに、次々に倒れる隊員たち。

だが、敵の隠れていると思われる岩場で、いくつもの粒子が爆ぜ、レーザー射撃が止まる。

シヨックガン装備のバックアップ隊員達を引き連れて、ダンが崖の上から制圧射撃を敢行したのだ！

崖上からの援護射撃を隠れ蓑にして、ダン以下数名の決死隊が、確保班の隠れている岩場に辿り着く。

「大丈夫ですか！」

「モロボシ隊員!?! 救援ありがとうございます……！」

「みんなレーザーでやられてしまいました……！」

生き残り達の言葉に、ダンが砂浜を見れば、逃げ遅れた隊員達の死屍累々たる様が目に入る。

「やっぱりあの少年、ノンマルトだったのか……」

「撃ち返してきたぞっ！」

「怯むな、応射せよっ！」

岩場を挟んでの、激しい銃撃戦が開始される。

そして、互いの火線が双方の逃げ場を塞いでしまい、膠着状態に陥った。

あちらもこちらでも逃げられないが、そのために射撃をやめると、圧が減ってこちらがやられてしまう。

引くに引けない状況が出来上がる。

このままでは双方ジリ貧で共倒れになるかもしれない……

その時、沖合いでさざ波が立ったかと思うと、たちまち異形の潜水艦が現れた！

「あ、あれは何だっ!？」

「……グローリア号だ！」

ここへ来る途中、アマギ隊員から聞いた特徴にそっくりだ。

艦橋付近を埋め尽くす勢いで、オルガン砲の如く横並びに設置されたフラック群。

それらがまるでパドルシップの外輪のように回転して、凄まじい密度の砲火を形成す

る。

潜水艦としては正気を疑う設計をしているグローリア号であるが、元は異星人の円盤に対しての、移動式対空プラットフォームとしての運用を想定されていた。

上空から目視不可能な深度で、敵円盤の移動経路上へ接近し、急浮上からの全力射で、奇襲を仕掛けて撃墜せしめると言う戦法である。

英国支部は元々が、周囲を海に囲まれた海軍国家だった事もあり、海上戦力は非常に充実していたのだが、異星人や怪獣に防備の厚い海域を避けての侵攻、離脱を許すという苦い思いを幾度か経験している。

それに業を煮やした海軍が、港から遠い海域にはこのグローリア級原子力潜水艦をあらかじめ沈めておき、上空偵察で戦力が配置されていないと油断した敵の前で、潜水艦隊を浮上させ、海上に即席の対空陣地を構築する……と言う構想の基に建造したのが、この兵器だ。

それ故、両舷へ張り出すようにしてまで増設された連装砲は、全てが艦首方向に向けて固定されており、前方90度方向へ全火力を投射できるつくりになっている。

そのハリネズミのような威容はもはや、潜水艦と言うよりは水中戦艦と呼ぶべきだろう。

さながら、かつてのアイアンボックスを彷彿させる苛烈な砲撃が、海岸を襲った。

「ダンより作戦室へ……！ グローリア号が浮上しました！ 激しい攻撃を受けています！」

ビデオシーバーで救援を要請するダンの背後からは、凄まじい爆音が聞こえており、それに掻き消されないように、ダンは声を張り上げる必要があるほど。

「フルハシ、ソガはホーク1号で出動。アマギとアンヌは俺と一緒に来い」

「待つて下さい。ホークはまだ本調子じゃありません。対空特化のグローリア号を相手取るなら、アマギのサポートがあった方がいいでしょう。俺が彼と代わります」

「……そうか。ハイドラランジャー出動スタンバイ！」

さあて、こっからが正念場だ。

## ノンマルトの渚 (IV)

沖合いのグローリア号は、依然として対地攻撃を続けている。

ダン達のいる海岸だけでなく、近くの漁村にも無数の砲弾が着弾し、恐ろしい被害を出していた。

しかし、グローリア号の浮かぶ海面に突如として噴き上がる水柱！

ホーク1号の上空支援が開始されたのだ！

ターゲットを対地攻撃からホークへ移すグローリア号。

そもそも、シンイチ少年を回収に向かった同胞達の、撤退支援の為に浮上したのだ。

まんまと彼らが逃げおおせた以上、地上への攻撃は優先度が低い。

「今だ、ここは僕に任せてください。みんなは住民の避難を！」

「分かりました、モロボシ隊員。武運を！」

ホークが潜水艦を引きつけている間に、海岸へ走るダン。

海上では壮絶な撃ち合いが行われている。

「フルハシ隊員、グローリア号の前面に飛び出しては駄目です。背後の死角から攻撃し

ましよう」

「そうは言うけどな……今日はなんだか調子が狂って仕方ねえんだ」

「やつぱりか……アルファ号の3番エンジンだけ出力調整が甘いようですね」

「……アルファ号だと？ ガンマ号じゃなくてか？」

「いったい、いつまで予備機のもりなんですか！ 元のアルファ号は、昨日オーバーホールから帰ってきたでしょう！ 今、僕らの乗っているのが、真正正銘のアルファ号ですよ！」

「……ああっ！ そうか、それで妙に感覚が違うと思つたぜ！ 合点がいった！」

アルファ号は、ガッツ星人に手酷くやられた影響で、長期間のオーバーホールに入っていた。

昨日までは予備機を使っていた関係で、番号が繰り上がっていたのだが……フルハシは、ようやく慣れた予備機の機動におけるちよつとしたクセが、どうにも邪魔をしてしまっているらしい。

異星人の円盤を墜とす為に開発された、偏執的とも言えるグローリア号の対空砲火の前では、その微妙なズレが致命的な隙を作ってしまった。

「あつ、やられた！」

「ちくしやう、ガンマ……いや、アルファ号を捨てよう！」



「僕はベータ号へ！」

「俺はガンマ号へ行く！……クソツタレ、返して貰った途端にまたオーバーホール送りか！俺としたことが、ずいぶんヤキが回っちまったぜ」

しかし、分離した事が功を奏したのか、グローリア号の死角から挟み撃ちにする事で、敵を翻弄していくフルハシとアマギ。

グローリア号は設計上、単一の敵に対しては絶大な火力を発揮できるが、複数の敵を攻撃するのは向いていない。

元々が単艦運用するのではなく、複数艦で互いの死角をカバーしあうつもりだったのが災いした。

中に乗っているノンマルト達は、グローリア号を奪ったは良いものの、種族的に戦い慣れしていなかった為、目標をどちらに絞るか決めあぐね、咄嗟の判断が付けられなかったのだ。

迷った末、彼らは大人しく撤退する事に決めた。

海面が泡立ち、海底怪獣ガイロスが姿を現す！

殿としてノンマルト達が呼び出したのだ。

「あつ！ガイロス！」

「あのタコ野郎……生きていたのか！ソガの奴め、自分で言った癖に、トドメを刺し損

ないやがった！」

「……いや待って。見て下さい、奴の触手を！」

アマギが注意深く観察すると、ガイロスの触手は八本全てが揃っているではないか。「奴の触手は僕達で一本千切ったハズです。それが揃っていると云う事は……我々の倒したものと別個体かもしれません！」

「なんだと!? チクシヨウめ、海底にはあんなのがウジャウジャいるつてののか!? たまらんね！」

ガイロスが岸边に向かっていくため、二人はグローリア号を追跡するのを諦めざるを得ない。

村は先ほどのグローリア号による砲撃で、無数の家屋が倒壊している。

防衛隊員達が救助作業を行っているが、そこへ怪獣が上陸したら、さらに被害が拡大してしまうだろう！

彼らにガイロスを野放しにする選択肢は無かった。

怪獣を攻撃する為に接近したアマギが、冷静に敵の能力を看破する。

「ははん……カラクリが分かりましたよ、フルハシ隊員。奴は再生したんです」

「じゃ、やっぱり仕留めきれてなかったのか！ あれだけロケット弾を撃ち込んだつてのに、やつこさん不死身かよ！」

「いいえ、逆です。腕を再生したのではなく……腕から再生したんですよ！」

「なんだと！」

アマギは、眼下の怪獣の持つ触手が、脇腹の一本だけ異様に長く太い事を見てとつた。その不釣り合いな腕が生えているのは、奇しくもあの時に千切れた……いや、千切れたと思つた場所と、同じ部分なのである。

一本だけが大きいのではなく……それ以外が一回り小さいのだ！

「さっきの戦いでは、我々が腕を切つたんじゃない。身の危険を感じて、奴の意思で自切したんだ、きつと！」

「トカゲのシツポみたいにか？」

「タコの腕も同じ事ができますし、再生する事も知られています」

「腕から頭まで生えてくるって!？」

流石にタコの再生力はそこまではないが、同じく海の生き物であるヒトデならば、千切れた腕の一本から残りの体が生えてくる事をアマギは知っていた。

改めて見てみれば、ガイロスはタコと言うよりはクモヒトデか何かのようにも見える。

どちらかと言えば頭足類ではなく、棘皮動物に近いのかもしれない。

さらに記憶と照らし合わせて観察すれば、確か目元にあたる部分には、口かと思紛う

程にひととき大きな吸盤があつたはずだが、今はそこに不揃いな肉腫が盛り上がるばかりで、あたかも口髭を蓄えたかのようになっている。

まだ再生が完全ではないのだろうか。

「タコの足は、一本だけは繁殖用だともいいますからね」

「じゃあ奴が腕を落とさねえように戦わなくちやならねえのか？」

「もしくは切断面の組織をレーザーで焼いてしまふか、です」

「そつちのが簡単だ！」

フルハシはそう言うが、敵はしぶとい。

上陸を阻止しながら、分裂能力までケアしながら戦うとなると、ホークの燃料と弾薬が保つかどうか……

何せ今は分離してしまつたので、それらの残りも三分の一になつてしまつているからだ。

だが、実を言うとアマギは、今この地球に、あの怪獣をより簡単に始末する方法が存在する事を知っている。

それは……アイスラッガー。

ウルトラセブンの持つ、あの宇宙ブーメランは、凄まじい熱量で白熱するため、切断面が灼かれてしまふと言う特性を持つ。

そうでなければ、エレキングやテペトの出血があつた程度で済むはずが無い。

熱でたんぱく質が変質してしまえば、そこから再生する事はもはや不可能だ。

アイスラッガーで切断される事は、あのガイロスにとつて、さながら吸血鬼が心の臓へ銀の杭を打たれるような物である。

しかし、ここまで考えて、アマギは頭を振り、思考の全てを端へと追いやった。

なぜなら、ノンマルトの主張がもし、本当だつたとしたら……果たしてウルトラセブンはここに現れるのか？

人間にその力を貸してくれるのだろうか？

むしろ……

あの白銀の刃が、こちらへ向けられる事がないと言う保証は、一体何処にあると言うのだろうか？

地球人は、彼に守つて貰う資格があるのか？

そんな恥ずべき疑念が、彼の脳裏に浮かんで仕方なかつた。

ガイロスが現れた事で、ダン是人々を守るべく、ウルトラアイを装着しようとした。その時、ダンの前に、シンイチが現われる。

「君!？」

「ノンマルトは悪くない！ 人間がいけないんだ！ ノンマルトは人間より強くないんだ！ 攻撃をやめてよ！」

ダンはシンイチの視線から逃れるように別の岩陰へ移動し、ウルトラアイを掲げることが、またしても目の前にシンイチが先回りしていた。

「やめて！ やめて！」

ダンの背中に、少年の声が追い縋る。

「ウルトラ警備隊のバカヤロー!!」

## ノンマルトの渚（V）

どこまで行っても、少年の声がダンを糾弾する。

シンイチの声が聞こえなくなる場所を探して、ダンは逃げ回った。

まるで犯罪者を咎めるような、トゲトゲしい響きが、ダンの耳朵を打って離さない。

どうしてノンマルトの事を守ってくれないの。

どうしてアイツらばかり、ズルいじゃないか。

ウルトラセブンは、地球の守護者じゃないの。

どうして、どうして、どうして……

ノンマルトだって、地球の仲間じゃないか！

「ここは、ノンマルトの渚だよ！ 人間は出て行け！」

「シンイチ君！ 僕は……闘わなければならぬんだ」

「バカヤロー！」

シンイチの叩き付けたオカリナが、岩にぶつかり、けたたましい音を立てて粉々に

なった。

さながら、ウルトラセブンへの失望で、砕けてしまった少年の心のように。

……その破片を見つめるダンの心も、また。

「……ジュワツ！」

「目標、南西15度！ 深底200！」

俺はさ、ノンマルトの使者が大っ嫌いだ。

「敵艦発見！」

よくもまあ、こんなお話を作ってくれたもんだよ。

12話なんかより、よっぽど封印したい。

カジ参謀の気持ちも、分からなくはないね。

「距離1200！」

ことある事に引き合いに出されて紹介されるのは、この話かR1号で、さもなくばマヤか。

どれもこれも爽快感とはかけ離れた、重苦しいエピソードばかり、おかげでウルトラセブンは、風刺色の強い社会派作品かのように扱われる始末。



違うだろ、ウルトラセブンは、普通のSF冒険活劇として充分に満足行く作品だろうが。

マックス号のように、ストーリー展開ガバガバの、エンタメ極振りみたいな回があると思つたら、キングジョーをはじめとした、強大な敵に対する、セブんと人間の熱い共闘が描かれたり。

かと思えば、毒タバコで人間を皮肉つてきたりするその裏で、ペガツサのような悲劇があるから、良いアクセントなんじゃねえか。

そのSF的な物語の幅の広さこそ、ウルトラセブンの魅力だろうが！

ノンマルトノンマルトノンマルト……うるせえ！

ウルトラ警備隊がいかに素晴らしいチームか力説しても、「でも、原住民をよく調べもしないで虐殺したんでしょ？」と言われたら黙るしかないだろが！

一部だけじゃなくて、全話見ろ！

ちよつと囁つたような層からキリヤマ隊長を、タカ派の人類史上主義者みたいに言われる俺の気持ちがいかに分かってたまるか!!? 聞いてんのか、原作者！ このキング・ジョー！

おまけに平成版になってまで、この件をほじくり返されて、地球防衛軍を悪者にされ、挙げ句の果てにはセブンが宇宙犯罪者だ。

侵略者の味方をする事は、宇宙の掟で許されていない？

だったらじゃあ、そのご大層な宇宙の掟とやらで、今すぐ侵略歴のある宇宙人を片っ端から罰してくださいよ！

犯罪者リストなら、地球から快く提供してやるからさ！

真面目なセブンは法を遵守するのが分かっているから、そいつに全部罪をおつ被せて落とし所にしたんだろ？

貧乏くじ引かせたんだろ？

正直者がバカを見るような運用しといて、なーにが宇宙の法じゃ！ おとといきやがれ！

「目標敵艦、グローリア号。撃てっ！」

「地獄に落ちろオラアツ！」

誘導式の短魚雷なんか必要ない。

センサーの分まで炸薬を詰め込んだ、最大威力の重魚雷がたった一発あれば充分だ。グローリア号の土手っ腹に命中し、ひき裂けるように爆沈！

「ざまあみやがれ、クソが」

先に手を出した癖に、被害者ヅラしてんじゃねえよ。

「……隊長、あれは何でしょう!」

窓から前方を確認したアンヌが、岩陰の向こうに妙な物体が並んでいるのを発見した。

海底から生えてきたように並び立つそれらは、どれも丸みを帯びており、色も質感も明らかに人工物。

「ハッ、ノンマルトの海底都市?!」

巨大な海草が防風林のように都市の周りを囲っており、グローリア号の爆発で一部が掻き分けられていなければ、一目では分からなかっただろう。

「もし、宇宙人の侵略基地だとしたら、ほうっておくわけにはいかん……我々人間より先に地球人がいたなんて……いや、そんなばかな……」

「隊長……?」

「やっぱり攻撃だ。ミサイル発射用意!!」

敵は明確な意志を持って、地上を攻撃してきており、既に死傷者が出ている。

シーホース号や漁村の人々は、民間人であり、卑劣な無差別攻撃の犠牲となったのだ。許しておく事は出来ない。

そして、この決断に例え万が一があつたときは……

短い逡巡の後、当然の判断として、キリヤマは攻撃の命令を下した。

……しかし、いつまで経つても、殺意の塊がハイドラランジャーから吐き出される事は無かった。

「……どうしたつ！ 何をしている。発射装着が故障したのか？」

「いいえ隊長。そのご命令は……承服いたしかねます」

「なに！」

振り返ったキリヤマは、ソガが発射ボタンから指を離し、体ごとこちらを向いているのを見て取り、一瞬だけ、呆気にとられた。

「承服できん、だと？」

「はい。いかに隊長のご指示と言えど、あれが前線基地ではなく、非戦闘員の住む単なる都市ではないと言う確信が無い以上、そのような攻撃はできません。ただの虐殺です」

「上官命令に背いた場合は、軍法会議だぞ」

「だとしてもです」

ソガは落ち着いて、キリヤマを真っ直ぐ見返してきた。

「……話にならない。アンヌ、ソガと代われ。奴は疲れてる」

「待てアンヌ。隊長、医者である彼女に、民間人虐殺の汚名を着せるのは、些か酷ではありませんか？」

「莫迦を言うな。彼女も軍人だ。舐めるな」

「……隊長」

キリヤマの指示に、赤いボタンを押そうと指を伸ばしたアンヌが、ソガの言葉に思いとどまる。

そうして、しばしの間、細く長い指が虚空で小刻みに揺れていたが……彼女はそれを膝に置き、上官に向き直った。

「隊長、あの子は……ノンマルトは地球の先住民だと言っていました。もしも本当なら、海底の何処かに、人々の住む居住区があるはずです。私達ウルトラ警備隊が守る、戦術を持たない人々の住む街が。……もしもあの建造物の中で、普通の営みを送るノンマルトの人々がいるのなら、それを破壊する事は、侵略に当たります」

アンヌは震える声で、頭を下げた。

「赤十字に誓った者として、それだけは出来ません。御容赦ください、隊長」

「……」

アンヌの言葉を噛みしめた男は、やおら立ち上がると、穏やかな声で、申し訳なさを滲ませた顔で、彼の誇るべき軍医を労った。

「そうだな。確かにお前達の言うとおり、懸念の払拭できない状況で、医者である彼女にそのような行為の片棒を担がせる事を強要するのは、指揮官として恥ずべき命令だ。

……許せ、アンヌ。私が間違っていた」

「……隊長お！」

「隊長！」

そして。

「どけ、私がやる」

「隊長！」

決意を漲らせたキリヤマに、素早く部下の男が抱きつき、羽交い締めにして彼の歩みを妨害する。

ソガとてダンやフルハシには数段劣るものの、ウルトラ警備隊の精鋭だ。

しかも若い。肉体的には最盛期とすら言っていだろう。

本来であれば、四十を手前の、それも僅かに腹の出たような男を一人、制圧するなど造作も無い。

……しかし、ソガが組み付いた背中中は、まるで鋼のようで、一向に引き倒す事が出来ない！

「やめてください！ そんな事をすれば、地球防衛軍の汚点となります！ この先、絶対に困る事になるんですよ！」

「怖じ気付いたかキサマ！ それとも、ノンマルトの手先になっているのか！」

「それならとつくに、後ろから撃つてます！　まずは降伏勧告から……！」

「離せ！　離さんかこの……莫迦者がっ！」

「ウツ！　……がっ！」

「キヤアツ！」

キリヤマの肘がソガの鳩尾を抉り、拘束が緩んだ瞬間、あつという間に正対した隊長が、唸りをつけて右腕を振るう。

彼の鉄拳制裁は一度では終わらず、さらにソガの左頬を、握りしめた裏拳が強かに打擲した。

床に倒れ、椅子に取り縋るソガを見下ろしながら、キリヤマがウルトラガンを静かに引き抜き突きつける。

それを見たアンヌは、あまりの事に色を失い、半狂乱でキリヤマの腕を下げさせようとするが、上官の狙いはソガの肩間から一向に離れない。

「やめてください！　隊長、やめて！」

「ソガツ！　我々がやっているのは戦争だ！　それも、個人や国などと小さなものではなく、地球に住む全人類の命がかかった戦いなのだ！　僅かな判断の甘えが、無辜の民を危険にさらす事になる！　汚点だなどと、女々しい事を気にして勝てるものではない！　どうしてそれが……わからんのだツ！！」

「だったら最初から！ あんなガキはさつきと始末するなり拷問にかけるなりして！ ノンマルトにはこちらから先制攻撃するべきだった！ 違いますか!? でもそうしなかつた！ なぜだと思えますか！」

「なにッ」

「ソガ隊員も！ やめなさい！ 冷静になつて！」

「我々が……地球防衛軍だからでしょう!? 人々を、力無き者を守るためだけに、その行いの尊さのみを免罪符として、本来は唾棄すべき暴力を保持して振るう事を許されていゝる、ただ一つの組織！ それが俺達なのではないのですか!?!」

「……それはっ!」

「我々は宇宙攻撃軍では無い。地球防衛軍なのだ……誰かを殺す為ではなく、命を守るために戦うのだと……そう教えてくれたのは貴方ではありませんか！ キリヤマ隊長！ 私がここに居る意味を、それを探せと、背中を押してくれたのは他でもない貴方だっ！ その言葉がいつたいたいだけ……それは、嘘だつたんですか!?! あの美しい信念は、ただのその場しのぎの、薄っぺらい建前だつたんですか!」

「っ!? ……キサマア!」

その時はじめて、キリヤマは僅かにだがたじろいだ。

ソガは震える声で、尚も叫ぶ。



「どうして分からないですって……? 分かっています! あのノンマルトが引き起こした諸々の問題を……詳しく調べてしまったからこそ、今後起きるであろう危機の全ての責任を、貴方が独りで背負って、墓場まで持つていこうと考えている事くらい、分かっているんだっ!」

「なんですって!?!」

隣の隊長を振り返るアンヌ。

彼女が見たその顔には、小さな驚きが浮かんでいたために、上官の思惑を知る事になる。

「地球の為に、たった一人で悪人になって、孤独な戦いをしようなんて人を……どうして見捨てられるんです。俺達の隊長は、こんなにも素晴らしい人なのに、どうして素直に賞讃させてはくれないんですか? 俺達の戦いは、尊い行いなのだ、誇らせてくれないんですか……?」

「ソガ隊員……」

「……なにを莫迦な……」

ぼたぼたとソガの頬を、涙が伝う。

尊い争いなど、この世にありはしない。

命を奪うに、誇らしいも何もあるものか……

しかしそんなキリヤマにも、たった一つだけ、否定しようの無い事実がある。

それは……敵の目の前で、自分たちがこれだけ悠長にしているのに、あの建造物群は、反撃らしい反撃を未だに一切してこない、と言う事だ。

それがどういう意味を持つのか。

その先へ思考が辿りつかないように、彼は努めて気を逸らさねばならなかった。

「それに、人の口に戸は立てられません。例えここでアレを打ち壊して、一旦は封じ込められたとしても……秘密はいつか、絶対に詳らかになる時が来ます。その時になって、虐殺の事実が明らかになった時、地球は宇宙に対して、どう弁解するのですか？」

「弁解だと？ いったい何を弁解する必要がある！」

「あります！ そうする義務が、地球にはあるはずだ！ そうでなければ、酷く嘆き悲しむ男を、貴方は知っているはずじゃありませんか。地球がその説明責任を果たさなかった時……ウルトラセブンはどうなるって言うんです！」

「なに、セブン……？」

思わずキリヤマは、素の疑問を返してしまふ。

「なぜここで、彼の名が出て来る」

「地球がいつか、宇宙社会に進出した時、それが自称先住民を虐殺した上で生き残った種族だとなれば……その人間の為に戦った彼もまた、酷い汚名を被る事になるのは明白で

す」

「なんだと!？」

「あれらが隊長の仰るように侵略宇宙人であつたなら……それを喧伝する事こそが狙いでしよう。地球人は、先住民を問答無用で撃滅するような野蛮な種族だ、ウルトラセブンは共犯者だ。そうして大義名分を与えることこそ、敵の思う壺です。そんな策に乗るのは、まっぴらごめんですよ」

ソガの言葉に、キリヤマの眉が上がる。

「そう思つて貰つて結構だ! なんだかんだと理由を掲げて侵略すれば、容易く反撃を躊躇するような軟弱な組織だと、地球防衛軍が見做されるよりは余程良い! そしてここに、セブンは関係ない! 事実を隠蔽したのは我々地球人……私と言う個人であつて! 彼に罪は一切ない!」

「宇宙がそう判断すると思いませんか? 彼が地球で、なんと呼ばれているか御存知でしょう!？」

ソガは興奮で上下する肩を一旦鎮め、息を整えて、噛みしめるようにその名を口にしました。

ウルトラセブン。

「ウルトラ警備隊の、七番目の隊員。……我々ウルトラ警備隊の行いは、彼の名譽に直結するんです！ 所属する組織の責任からは逃れられない！」

「……ばかなっ!!」

今度こそ、キリヤマは目を？いて、彼の言葉を切り捨てた。

「そんなものは詭弁だっ！ その名前は、彼の本名ではない！ 我々が、身勝手な羨望と欲求を一方的に押しつけただけの、たわいも無い兇戯に過ぎん！ 大体彼が、それを自分から名乗っているのを聞いたのか!？」

「いいえ隊長！ しかし、ひとつ確かな事は……彼はかつて、マックス号の事件の時、貴方を『隊長』と呼んだ！ 宇宙人が地球人を区別するためなら、個人名である『キリヤマ』と呼ぶはずだ。そうではなく、貴方をそう呼んだと言う事は！ 貴方がこの地球を守る組織、ウルトラ警備隊を率いる長に、相応しい男であると認めた何よりの証左ではありませんか！」

「なっ!？」

「あの時、宇宙から帰ってきた俺に、あんなに嬉しそうに自慢してくれたじゃないですか。……彼は、俺達が自分をそう呼んでいるのを知っています。その上で、俺達を信頼し、無償の愛を捧げてくれているんです。隊長にはそれを裏切る覚悟もありません」

ね？ お前が命を懸けて救ってくれた地球人は、お前が思っているような高尚な存在ではない。野蠻で醜く、猜疑心と破壊衝動に満ちた、怨恨からくる負の連鎖を、断ち切る事すらできない愚かな種族だと、そう突きつける役目を……していただけなんですわ……」

鼻声でそんな事を云う、彼の情けない姿から、キリヤマは目を逸らすと、歯を食いしばり、拳を握りしめて押し黙る。

そしてまた、凄まじい形相で部下を睨みつける上官に対し、ソガは悪びれもせず懇願した。

立ち上がり、腹に銃口が突き刺さるのも構わずに、キリヤマの両肩を掴んで、真正面からその険しい眼差しを覗き込んだ。

「奴らを殺すなどは言いません。ですがせめて……その前に降伏勧告だけはなさるべきです。我々がやっているのが戦争だと仰るならば、その最後の一线だけは守ってはくれませんか。ルールも知らない愚かな先住民に、信念に則り戦う軍人とは、こうあるものだと教えてやってください。あの冷血なゴドラやガッツですら、追い詰めた我々に投降を迫ってきました。それこそ、あんな見るからに昆虫のようなクール星人ですら！ 総攻撃の直前は、我々に生き残る最後のチャンスを与えたんです！ それさえしないうのならば、地球防衛軍はいつたい……我々は、ウルトラ警備隊はっ！ 虫ケラ以下の存

在なのですか……ッ？」

項垂れたソガの両腕が、力無く垂れ下がるのを見つめるキリヤマ。

やがてその手が、ゆっくりと引き戻され、静かに銃を腰のホルスターに戻した。

「私からもお願い致します、隊長。地上攻撃が、ノンマルトの総意であるとは限りません。彼らはシンイチ君を介さず、怪獣と潜水艦で、ただ船舶を襲い続ける事も出来ました。もしかしたら……」

アンヌの顔を見たキリヤマは、もう一度ソガの後頭部に視線を戻すと、……今までとは違う、普段の落ち着いた声で、反抗的な部下へ問いかけた。

「しかし、そうした者達を、我々は下し続けてきた。だからこそ今日がある。……あそこにいるのが、あの時の我々だとして、この状況を逆転されない保証はない。いかに眼前の敵が、手足をもがれたように見えたとしても、戦場に絶対など存在しないのだ。まだこちらに気付いていないだけかもしれない。降伏勧告は、その最大の機会を擲つという事だ。奴らが反撃してきたらどうする」

「その時は……」

ソガの顔が持ち上がり、ゆっくりと瞼が開かれる。

「もしも、奴らが我々の慈悲を撥ね除けて、最後の一兵になるまで戦う意志を見せたなら……その時は私がこの手で奴らを皆殺しにします。あの基地を壊して終わりなんて、そ

んな生易しい事はしません。必ず生き残りが出るように半分だけ壊して残りは捕まえます。そのための音響爆雷や電磁網も積んであるんですよ」

「……ッ！」

真つ赤に充血した眼には、隠しようのない怒りと、殺意がにじみ出していた。

それは、ソガがたまに見せる、アンヌの嫌いなあの目だった。

「そいつらから他のノンマルトの居場所を聞き出して、草の根搔き分けてでも彼らを根絶やしにしてみせる。封印なんてあまつちよろい。彼らの命も、文化も、歴史も！ その全てを破壊し尽くして、地球に生まれてきた事を後悔させてやりますとも！ そのために残りの人生捧げたっていい……海底は、我々人間のものだ」

「……ふっ」

キリヤマは鼻先だけで薄く笑うと、踵を返し、黙ったままコンソールへ歩き出す。

操作盤へ腕が伸びる。

それを横から掴むソガ。

「……隊長！ どうしてッ……！」

「離せ、ソガ」

「離しません！ お願いします！ 撃ち殺されたって構わない！ 私は……っ！」

「いいから。離しなさい。……攻撃は、しない」

「……たいちよう!!」

キリヤマは、諭すようにソガの肩を叩くと、彼の手をそつと外し、無線の広域帯へスイッチを入れると、マイクに向かって口を開いた。

「こちらは、地球防衛軍ウルトラ警備隊隊長キリヤマだ。ノンマルト全員に告ぐ! 諸君らの戦力は完全に粉碎した。我々の勝利だ! 直ちに武装を放棄して、降伏せよ。さもなければ、目の前にある建造物群を地上攻撃の為の前線基地と見なし、速やかにこれを撃滅する! 尚、非戦闘員の脱出は残念ながら認められない。我々にはそれが、病院船なのかミサイルなのか判別がつかない。通告なく動きがあれば、即座に攻撃を開始する。いいな! 10分やる。それまでに返答が無かった場合もまた、これを粉碎するだろう! 繰り返し……!」

もう一度、同じ文言を述べた後、スイッチを切り溜息を吐き出すキリヤマ。

「これで満足か」

「隊長……ありがとうございます! 本当に……ありがとうございます!」

「帰ったら懲罰は覚悟しろ。それから、いつでも魚雷を発射できるようにしておけ、お前の早撃ちよりも敵が素早ければ、死ぬのは我々だ」

「……ハイ!」

みつともなく涙の跡をつけたまま、嬉々として席に戻る部下の背中に向かって、キリ



ヤマは顔を向けずに言葉をなげた。

「ソガ」

「ハッ！」

「……殴つて悪かったな」

きよとんとした顔で、上官を振り返つた男は、やがてしどろもどろになりながら、見えないだろう頭をペコペコと下げる。

「いえ、その自分も出しやばりましたと言うか……あの、ウチの隊で私を殴つてないのは隊長だけでしたので、これでコンプリートですね！」

「……ばかが」

「あの、隊長……」

二人の様子を恐る恐る窺っていたアンヌが、ひかえめに声をかけてきたので、キリヤマは呆れた顔を即座に切り替えねばならなかった。

「どうした、さっきの通信をノンマルトが受信出来なかった時は、私も知らんぞ」

「いえ、彼らは……降伏の仕方を知っているのでしょうか……？」

「そんなものは白い布でも……」

「あつ」

やがて、相手が人間では無いと言う部分に思い当たつた男達は、頭を抱え、鬱陶しげ

に溜息を吐くしか無かった。

そもそも、宣戦布告や降伏勧告、それに伴う国際条例などというものは、国家間における戦いの歴史の中で醸造された文化であり……言つてしまえば、人類が勝手に決めた自分ルールにすぎないのだ。

教えてもない取り決めや、内輪における暗黙の了解を、その外にいる者達までもが理解していると考え期待するのは、あまりにナンセンスと言えた。

「どうします？　白い貝殻か骨でも繋げて垂らせとか言つてみますか」

「10分でそれを作れと……ならばあの海藻を振つてもらつた方がマシだ」

「非武装の使者に、一人だけ泳いできてもらうとか……」

「敵は海底人だぞ、グローリア号を拿捕するような種族を、近寄せられるかよ。そんなん泳いできたら、他でもない俺が撃ち落とすわ」

「悩んでいても仕方ない、ひとまず白いものを探せと伝えてみるか……」

キリヤマがスイッチを入れようとした時。

『それには及びません、キリヤマ隊長』

「なんだっ！」

ハイドラランジャーの中に、女の声が木霊する。

『私はこの都市の代表です。我々ノンマルトは、あなたがた地上人に、降伏します。……』

この都市にはもはや、皆さんを害そうとするものはおりません。それが出来る者達はみな、グローリア号と共に逝きました。どうか、攻撃なさらさないで。伏してお願ひ致します』

## ノンマルトの使者（Ⅰ）

帰還して、隊長から自室待機を命じられていた俺は、やがて参謀室に呼び出された。直ちに出頭し、参謀達やキリヤマ隊長の前で、長官に敬礼する。

ヤマオカ長官直々の命令とは……こりや終わつたかな。

「よく来たソガ隊員。戦いの垢を落とす間もなく呼びつける事となつたが、実は貴様にやつてもらいたい任務がある」

「ハッ、なんでありましょうか！」

「うむ。マナベ参謀」

「はつ。ソガ隊員、こちらへ来て、この窓を覗きたまえ」

「……？ 分かりました」

手招きするマナベ参謀の隣へ行くと、彼は壁に取り付けてある小さな秘密窓を開いて、そこへ促す。

確か、マジックミラーで隣室の応接間と繋がっていたはずだ。

どれどれ……

見れば、白くヒラヒラしたローブのような服を着た女が、姿勢よくソファに座って、じつと前を向いていた。

なんというか……貝殻を繋いだみたいなネックレスをしちやいるが、それ以外はぶつちやけ普通の日本人女性に見える。

「彼女は？」

「ノンマルトの代表と名乗って出頭してきたので、身柄を確保した。念の為、ボディチェックは済ませてある。武装の類どころか、衣服とネックレス以外は何も持っていなかったが……どんな危険な能力を隠しているか、ハッキリ言つて未知数だ。とはいえ、今のところは抵抗もなく、此方の指示にもよく従い、大人しくしている」

まあ武器がなくても、念力とか使つても不思議ではないわな。

「それで、なぜ私が？」

「ああ、実は降伏に際しての条件……というか要請があつてな。交渉の窓口として、ソガ隊員、キミを指名して来ているんだがね」

「えっ!! 私に? ……ダンやアンヌではなく?」

「それを呑んでくれるならば、無条件降伏も辞さないと言つてきている。心当たりは無いのか?」

「いや全く」

「ダンにはセブンだし、アンヌも一応はシンイチを介してコミュニケーションの実績がある。」

「まあ、二人とも彼の言葉には対して耳を貸さなかったわけだから、話をしても仕方ないと思われたのかも知れないが……」

「でもそれ以外のウルトラ警備隊の面子は、全くノンマルトと接点がない。」

「せめて、降伏勧告をした隊長に接触するべきだろう。」

「接触したところで、隊長の本性は鬼！ 悪魔！ キリヤマ！ なので、余りのギャツプにひっくり返ってしまうかもしれないが……するとそのキリヤマ……間違えた、悪魔隊長が口を開く。」

「因みに、私も声を聞かせて貰ったが、あの時ハイドラランジャーの中で、我々が聞いたあの声だった。……思うに、彼女は私達のやりとりを、何か特殊な能力で聞いていたのかもしれない」

「やりとりとは？」

「はっ……彼らに、降伏勧告をするようソガが進言し、私がそれを受け容れた。ただ、それだけのものです」

「……隊長」

「とはいえ、もとは奴の口から出た考えですので、私自身よりは、ソガの方が与しやすい」

とノンマルトが考えても、不思議ではないでしょう」

「うむ、なるほど」

「……」

「何だ、ソガ。長官の御前だからとはいえ、そんなに恐縮して私の顔色を窺う必要はないぞ」

「いえ……」

まあ彼らからすれば、隊長にボコボコにされながら攻撃を思い留まらせた救世主……に見えなくもないか？

「その点、ソガ。キサマは、キュラソー連邦の保安官を歓待したり、ワイルド星間連合との捕虜交換締結の場にも居合わせた実績がある。先方の名指しが無くとも、異文明との接触に際し、適任であると、私は判断した」

「長官もこう仰っている。ノンマルトの使者とのコンタクト、やってくれるな」

「は、はあ……し、しかしタケナカ参謀、自分は調印の形式など知りませんで……」

「ハハハ、調印と来たか。随分と自信満々じゃないかソガ隊員。君に賠償請求その他が出来るなんて思っっちゃいないさ。そういつた部分はこちらで詰める。君は、相手の言い分を聞き出すだけでいい。第一、相手は海底原人だ。物物交換の概念が通じれば御の字とすら、私は考えているよ」

「や、ヤナガワ参謀……助かります……」

この人がケツ持ちしてくれるなら、まあ……安心だ。

あとは……

「何だ、その目は」

「いえ……」

「元はと言えば、お前の撒いた種だ。自分の責任は、自分で取れ」

「……ありがとうございます！」

---

部屋に入ると、推定ノンマルトの代表が、ソファからふわりと立ち上がり……

そのまま床に三つ指ついて、深々と頭を下げてきた。

「この度は、我々ノンマルトの降伏を受け容れてくださり、感謝の言葉もございません……」

「あ、いやあの……」

え、こういう時どうすればいいの？

降伏に来た使者を、頭下げさせたままはマズいか？



でもコイツらはそれでも仕方ないくらいの事を仕出かしたわけだし……直ぐに頭上げさせても、防衛軍の面子的にNGなのか？

どっち？ どっち？ どっちなんだい!?

俺は土下座するのは慣れてても、土下座されるのは慣れてないんだよ！

助けて隊長！

ダメだ、鏡で俺のテンパリ顔しか見えねえ！

「あの、まずは話を進めて頂いてから……謝罪はその後正式にという事で……」

「そういうわけには参りません。わたくしは、貴方にもはや言葉では言い表せない恩と……その贖罪をしなければならぬのです、ソガ隊員」

「ま、まあ……そうでしょうね」

僅かな残党以外は、一族郎党皆殺しにされるとこだったわけだし……？

民間人への無差別攻撃までしたわけだから……残当か。

「いいえソガ隊員。わたくしは、貴方が今、想像する以上の……」

「あの……ひとまず、なんで私をご指名になったのかを聞かせて頂いてから……」

「……分かりました。もとより、全てをお話するつもりでしたから、先にそちらを済ませてしましましょう……そして、その為にはまず、我々ノンマルトの事について話させて頂きます。その方が……より、円滑でしょう」

「はあ……?」

「お見せいたします。ノンマルトが、いったい何者なのか」

「お見せつて……あッ!」

次の瞬間には、俺は森の中にいた。

さつきまでの応接間は消え失せ、じんわりと湿った空気が辺りに充満し、さわさわと木々が囁く声が耳を撫でる。

「……ここは、わたくしの精神世界。貴方の精神と一時的にチャンネルを繋げました」

「お前……!」

「お待ちください。わたくしに貴方をこれ以上害そうという気はありません。信じては頂けないかもしれませんが、敵になるつもりはないのです。どうか話をお聞き下さい」  
「言うに事欠いて、信じて下さい、だと?」

「いざとなれば、その銃でわたくしを撃ち抜いて頂いて構いません。本来は精神世界で武器は使えませんが、今なら、強い攻撃の意志をのせて引き金を引きさえすれば、それを弾として撃つことも出来ましょう」

言われた通り引き金を引く。

女の後ろで、枝が折れて地面に落ちる。

「なるほど、本当のようだな」

「ツ……それで私を殺せば、この世界はたちまち崩壊し、先ほどの部屋に戻れるでしょう。これが……今わたくしに示せる誠意です」

別に掠らせた訳でもないんだが、ここにある木を傷付けただけで、彼女は僅かに苦悶の表情を浮かべて、こめかみを押さえた。

あ、ごめん。

精神世界を傷付けたらそうなるか。

……まあいいや、一人で敵地に乗り込んできたその気丈さに免じて、俺は彼女を信用することにします。

「そういえば、名前聞いてなかったな」

「……ヤオ、とでもお呼び頂ければ構いません」

「そうか、ヤオさんや。俺達の体ってどうなってるの？ もうバレてると思うからぶつちやけちまうと、俺達の対談ってみんなが見てるから、怪しい動きがあると即座に隊長達が突入してくるんだけど……？」

「ご安心を、精神世界での時間は、一炊の夢のようなもの。戻ったとしても、傍から見れば僅かな身じろぎに感じられるでしょう」

「あつそう。じゃあ大丈夫か」

「ええ、ですからここでは、ウルトラ警備隊として振る舞う必要もないのですよ」

「なに……?」

「わたくしもまた……本来の未来を知っています。アナタと同じように」

「なっ!?!」

今度こそ俺は、危うく引き金を引いてしまう所だった。

驚きが先行しすぎて、殺意がうまく乗らなかつたのが幸いしたらしい。

「そんなに驚く事でしょうか? 私たちが、やろうと思えば時を遡る事が出来るのは、貴方も知っている筈です」

「……あつー!」

そうか!

そういやコイツら、平成版で死んだフルハシ参謀を、自分達の証人にするために、蘇生して過去へ送り込んだんだった!

「つて事は……アンタも未来から来たのか」

それに対し、ゆるゆると首を振るヤオ。

「……わたくしは……生まれ変わったのです。同胞達の行く末を見届けた精神だけが、記憶を保持したまま……その記憶だけが、この世界にいたわたくしの肉体の中で、ある日突然、目覚めました」

「あー、憑依転生モノかと思ってたら、実は逆行モノじゃったか……」

「……………」

俺は思わず頭を抱えた。

てつきり、この世界でバグを起こしてるのは、オレだけかと思つてたら、他にもいたのか。

待てよ？

とりあえずヤオはいいとして、他にも変な奴いないだろうな？

セブンの時代に後の時代の作品からラスボスとか来られたら、正直詰むから止めて欲しいんだけど……

「ソガ隊員？」

「ああいや、続けてどうぞ……というか、知つてたならなんで攻撃してきたんだよっ！」  
「それについては……本当に申し訳ありません。過激派を抑える事が出来なかつたのは、わたくし達の明らかな失態です。しかし、恥を忍んで弁解させていただくと……我々も一枚岩ではありません。あなたがた地上人が、誰か一人の思惑で全てが決まつたりしないように、ノンマルトも……いやむしろ、我々の意志を統一する事は、地球防衛軍以上に難しかった」

「ほう？」

「我々は、いくつかの氏族が寄り合い、それぞれの特技を活かしながら生活してきました

た。ソガ隊員が見逃してくださいだった海底都市。あれは、確かにノンマルトにとって最も大きく重要な居住区ですが、あれ以外にも、我々の住み家はありません。ごく小さいものではありますけれど」

「ふーん。じゃあアレをぶつ潰しただけで、虐殺だ根絶やしだと、ネチネチ言われる筋合いねーじゃねえか」

平成版の残党もいたしな。

しかしヤオは悲しい顔で再び首を振った。

「いいえ、あの都市は各集落を繋ぐハブのような役目を果たして居ました。あの場所が破壊されれば、残された集落は分断され孤立し、やがて滅んでしまうでしょう。やはり、わたくしと貴方の知る歴史で起きたあの事件こそが、ノンマルトにとって致命的だったのです」

「そうかい……で？ この歴史でアンタはその間何してたの？」

「何も」

「……はあ。」

「ガイロスを操る能力を持つ者達は、みな過激派の氏族に属していました。もともと、彼らの氏族が狩りや防衛の主な担い手でしたから……わたくし達は、弱い。彼らの暴走をとめられるような手段は……」

「ハイハイ、分かった。その件についてはもうこれ以上言わないよ」

「ありがとうございます……」

ま、人間で言うなら、ウルトラホークやポインターを使えるウルトラ警備隊がクーデター起こしたら、民間人がそれを鎮圧できるかと言う話だろうな。

俺ですら、R1号を止められなかったんだから、しようがあるめえ。

「……というか、もつとどうにかならなかったのか？ あんたら下手過ぎなんだよ。やり方が！ 切羽詰まる前に、もつと早い段階で地球人とコンタクト取るとか、あつたしろ」

「……お言葉ですが、我々が本当に地上人と接触を凶らなかつたと……本当にそう思われますか？」

「なんだと……？」

ヤオは、この時ばかりは苛立ちを見せたが、自分がどのような立場か思い直したのだから。

息を整え、何かに集中し出した。

「前提を知らない状態で、長々と話しすぎました。まずは、ノンマルトの真実をお伝えしましょう。その方が、貴方も納得しやすいでしょうから。色々と……」

「……」





なぜそれを知っているかと言うと、オレがこれを見るのが初めてではないから。平成版で、蘇ったフルハシ参謀が、歴史を見てきたと語る背景で流れていた光景、そのままがオレの眼前に広がっていた。

そして……そのピラミッド群に、円盤ロケットの編隊が襲来し、ビームで空爆してく。

あの妙に、ちやちいんだか、手が込んでるんだか、よく分からん、見る角度で印象が変わるデザインの円盤も、映像で見た通りだ。

そんなもん作れた奴が祖先なら、もつと人類の歴史は早回しだっただろ、と思った記憶がある。

……が、今それをもう一度見させられても、何の感慨も浮かばない。

あくびが出そうだ。

ヤオは、オレがこれ見たこと無いと思って、わざわざ見せてくれたんだろうか。だとしたら拍子抜けだな。

「……ご丁寧に見せてくれたところ悪いけどさ、知ってたんだわ、コレ」

「そうでしょうね……ここまでは、同胞達フルハシ参謀に見せたものと同じです」

「(ト)まで？」

「貴方に見て頂きたいのは……この先なのです」

「……ん？」

崩壊した都市に、視点が近づく。

炎が燦る街へ円盤が着陸し、スロープのようなものが伸びてくる。

扉が開き、そこから降りてきたのは……

「あつ!? え? どういうコト!? おい!」

それは明らかに人間ではなかった。

体は、真つ黒でつるりとしたウエットスーツの如き衣服で覆われていたが、剥き出しの頭部、その肌の色は……明確に我々とは似ても似つかない、真つ青な能面だったのである。

「は? アレ……どう見てもお前らじゃん! そりやちよつと違うところあるけど……明らかに遺伝子的に近いのそっちだろ! アレから俺達になるよりずっと簡単だろうが!」

「見ていてください」

「見ていてって……ほら! ピラミッドから人間出て来た! 地球人が侵略者とか嘘

じゃん!」

「……時間を、送ります」

早回しのように青と肌色のヒトガタが動き回る。

焼け出されたボロボロの人間達が、青い肌の宇宙に縛られ、円盤の中へ連れ去られ

……

しばらくして、人間が、縛られ項垂れた宇宙人を、引き連れて出て来た。

「??？」

「お分かりですか？」

「え、何？ 弱すぎて白兵戦で返り討ちに遭ったってコト？」

「ハア……円盤の中を映します」

光景が切り替わると、そこには縛られた大勢の人々がおり、俺達はその列にならんでいた。

前の人間の後頭部が見える。

捕虜の誰かの記憶なのだろうか。

甲高い声で意味不明の言語をわめき散らす宇宙人が、我々の前にならんでいた男を引き摺って、何かの装置に座らせた。

椅子に縛りつけられた男の頭には、変な機械が被せられる。パーマでもあてるのか？  
そしてその隣には、これまた縛られた宇宙人が大人しく座っており……

機械が怪しく光ったかと思うと、今度はその宇宙人の方が藻掻きはじめ、人間の男は  
と言えば、近づいてきた宇宙人の手により、手足の戒めを解かれ、すつくと立ち上がつ

た。

笑顔で宇宙人と頷きあう人間の男。

ああ……そうか。

「なるほど、お前達ノンマルトは……」

俺達の頭に例の機械が被せられる。

視界が光に包まれた時、俺達の目には……ウエットスーツに包まれた、自分の手足が見えた。

「肉体を、宇宙人と無理矢理交換させられた古代人。その末裔と言うことか」  
ヤオが、涙の奥に、悔しさと怒りの揺らめきを宿した目で、力強く頷いた。

## ノンマルトの使者（Ⅱ）

「……で、地球人はガワだけ古代人のままで、その精神だけが、暴力的な宇宙人と入れ替わった。その体は元々自分達のものだから返せ、そう言いたいんだな？」

ヤオは目を瞑り、静かに首を振った。

「確かにこの時の肉体の持ち主が今も生きていれば、そう出来たかもしれません。しかし、そうするには時が経ちすぎました。我々はお互いに、世代を重ね、進化を重ね、もはやこの時とは別の種族となつてしまった。ノンマルトに押しつけられた肉体も、海底へ適応していくにつれ、豊かな髪は失われ、皮膚は鱗へ変わり、瞳も殆ど退化した。我々は、もはや心も体もすっかり海のいのちです。そんな我々が、今更地上を取り返したところで、いったい何の意味があるというのでしょうか……」

悲しげにヤオは呟いた。

それは、その道理が分からなかった同胞へ向けてのものなのか。

「それに地上人の全てが、その侵略者の末裔という訳でもありません」

「と……？」

「単純な話です。彼らは船でやってきました。それは非常に大きな船団ではあったものの……星を丸ごと持ってきたわけではありません。元から住んでいた人間の方が遙かに数が多かった。当然、全ての宇宙人が入れ替わりを終えても、当時の人口の半分にも満たない」

「余りが出たのか……その人間は？」

「もちろん、奴隷です」

「せやろな」

視線をヤオから外し、眼下の原始地球を眺める。

人間が人間に指示を飛ばして畑を耕させていた。

疲れて倒れた男が、空に浮かべられて悲鳴を上げている。

精神体は宇宙人由来なので、超能力が使えると……なんかセコいな。

かと思えば、むこうの山には、どこかで見たような生き物達のシルエツト。

平べったい鋭角をした、シャベルの如き口を持つ巨大なトカゲと、鼻先がドリルのように回転するカラフルな怪魚が、力を合わせて穴を掘っている。

「彼らとてそんな事は百も承知だったので、入れ替わり先には、集団の長や土地の権利者を上から選んで行きました。元から臍氣にあつた支配構造を乗っ取って、それを強化した方がずっと効率的でしたから……海底に押し込んだ円盤群とノンマルトの存在だけ

は、巧妙に隠されましたが、急激な発展だけは隠しようが無かったみたいですね。あなたがたも、既にこの出来事を発掘していますよ。確か……新石器革命と呼ぶのですか」

「詳しいな、本当に海底人？」

「私も、何か出来る事はないかと、地上人について必死に学んだ時期がありました。それだけです」

「そう……」

「因みに同じ頃、私たちノンマルトが、かつて最も多く住み栄えていた所は、都市ごと彼らによって沈められました。正確には維持出来なくなつたと言いますか……アトランティス、ムー、レムリア……我々はザバンギをはじめとした神獣達の力を借りて、大陸と文明を築いていましたので、侵略時に殺されたり傷付いた彼らの力が弱まり、交信能力を持つ我々が居なくなつて、それらの土地は崩壊してしまいました。侵略者達にとつても、誤算だつたようですね」

「いい気味です……と、ヤオが小さく呟くのを、俺はあえて聞き逃した。

それくらいは、彼女にも吐き捨てる権利があるだろうと思つたので。

「支配層になつた侵略者達は、食料や資源を生産する地上部分と、自分達が休むための地下基地を、完全に分けて作らせました。万が一にも反乱を起こされないよう、地上の奴

隷達には、進んだ文明に一切触れさせず、地下基地で働かせる奴隷達は、鉄人形に厳しく見張らせて、情報が決して外に漏れないようにしたんです」

「徹底してんな」

「それはもう。各地の労働者が結託できないように、我々の使っていた言語もいったん全て破壊して、地区毎でバラバラになるよう、イチから構築し直しました。ノンマルトは共通言語で、スムーズに意志の疎通が取れていたのに……その方が明らかに効率が良いにも関わらず、彼らは奴隷の分断に心血を注ぎました。その名残が、地上の国々なのでしよう」

マジ?

オレ、万年英語が赤点だったんだけど、急激に侵略者側へ殺意湧いてきたわ。

ノンマルトの肩持ちます。

「肉体の寿命が尽きる前に、自らの子孫とまた入れ替わり……スピアの肉体を確保するため、彼らは彼ら同士でよく交わり、たくさんの子を成しました。精神体がよく馴染むよう、第一世代に何らかの因子を埋め込んだらしく、それを受け継ぐ彼らの子もまた、何らかの能力を有して生まれてくるので、その支配は盤石でした。しかし……」

そこで、言葉切るヤオ。

不思議に思つて隣を見ると、彼女の口元には、うつすらと喜悅の笑みが浮かんでいた。



「ある時を境に、鬩りが見えはじめます。子孫達に受け継がれる能力が、徐々に弱まっている事に気付いたのです。超能力は、彼らの精神だけでなく、肉体にも寄るところが大きかったのでしょうか。それにいくら支配層とはいえ、階級が下の者達から、いつの間にか奴隷との混血も徐々に進み、無能の産まれる確率の方が高くなっていたのです」

「それで奴らは？」

「さあ……？ 自然に淘汰されて完全に同化してしまっただか、それとも新たな肉体を求めて宇宙へ旅立ったのか……少なくともノンマルトが気付いた時には、宇宙人達の精神はどこかに消えていました。この時の為にロケットを残していたんでしょうから、おそらく逃げたのでしょうか。ノンマルトだって、本当はスペアに使うつもりで養殖していたのでしうし」

「ところがとつくに彼らの元の肉体は、海底原人に変質した世代ばかりになっていた。そうだろう？」

「彼らが徐々に力を失っていくにつれ、我々もまた、その肉体に適合し、能力を開花させる者が次第に現れはじめたのです。実に皮肉なものだとは思いませんか？ ウフフフフ……あ、すみません……」

ヤオの笑みは、ちよつとした狂気すら感じるものだった。

普通に引いた。

「……ん？ 待てよ？ 半分は宇宙人入りの支配層として、もう半分は純地球人なんだよな。」

「はい」

「じゃあ、地球人が侵略者の末裔って主張は……どうなん？ 嘘を言っつてはいないけど……」

「……無理があるとは、わたくしも思います。だからこそ、過激派は、シンイチやフルハシに、あの部分しか見せなかつた」

「偏向報道のお手本みてえな手口だな」

「……お恥ずかしい限りです」

ヤオの顔が羞恥に歪む。

……まあ、コイツを責めても仕方ないんだけどさあ。

だからといって優しくするのも、なんか絆されてるみたいで嫌。

うーむ……シンイチもこんな感じだったのだろうか。

そりゃあ物心ついたばかりのガキじゃ、ノンマルトに感情移入しないなんて、無理だろうな。

ただでさえ、子供というのは正義に強い憧れがある。

今の話をも、都合よく端折った上で聞かされりや……ああもなろう。

「そして侵略者達が去った事に気付いた我々は、すぐさま地上とコンタクトを図りました。住む場所は違えど、元を正せば同じ地球人。虐げられた者同士、すぐに手を携える事ができると……」

「……あー……」

「結果は、酷いものでした。地上へ向かった同胞達は、無惨に殺され、中にはその肉を喰り喰われた者すらいました！ どうして侵略者が、文明レベルの大幅な低下と、能力消失のリスクを呑み込んでまで、元の姿を捨て、その古着を海底深くに仕舞い込んだか、分かりますか？ 彼らの肉体は、日光の下では長くその存在を保てないのです！ もちろんノンマルトは進化しましたが、しかしそれでも陸に上がってしまえば、地上人には及ぶべくもない！ 我々は弱い。それこそ無手では、子供相手ですら、2、3人に囲まれただけで、為す術なく斃り殺されてしまう！」

興奮で、ふうふうと荒く息を吐き出すヤオ。

「……なるほど。どうして世界各地で人魚伝説だの、半魚人の逸話だのが残っているか分かったよ。あれは……お前達の事だったんだな」

「それを何度となく繰り返し返し、ようやくノンマルトは理解しました。地上人は、自分達と姿形の違う存在を、決して仲間とは見做さないので……！」

「それで今度は、水死体を蘇らせて使者に仕立て上げたのか……そういや、海で死んだ筈の奴が、ふらっと戻ってくる話も多いわな」

「しかしそれも、なかなか上手くは行きませんでした。なんとと言っても、死者蘇生の技術は、我々としても多くの制約と、様々な消耗を強いられるもので、おいそれとは出来ませんし……その能力に目覚めたばかりの頃は、我々自身が、力を使いこなせていませんでしたから」

「……ま、お前さん達がそれなりに苦労したって事は、認めよう。それでもなあ……あんまりにも此方にそれが伝わらないというか……正直言つて、今回、いきなり逆ギレしてきたようにしか見えんわけよ。こつちからすると」

「ええそうでしょうね……ある時を境にノンマルト自身も、対話を諦め、自らの存在を隠す事になりましたから。それは地上人が、外海へ漕ぎ出し始めたからです。……確かに全ての地上人が、使者の言葉を信じなかったわけではありません。しかし、それを聞いた各地の王達は……やはり侵略者の血は争えないのだなど、痛感しました。同盟を結ぶどころか、我々の住み家へ艦隊を差し向けてきたのです！ 友好の証として、真珠や珊瑚、黄金を渡したのが間違いでした。地上人はこれを喜びと聞いたからあげたのに……我々にとっては、大した価値もないからと……それを……奪おうだなんて……」

拳をぎゅっつと握りしめ、俯きさめざめと涙を流すヤオ。

……なんでオレが、責められたみたいないな気分にならにやいかんのだ？

居心地悪いぜ、まったく……

ただ……価値観というのは、教育によって生まれ、継承されていく。

だから例え、中身が宇宙人の侵略者ではなくなったのだとしても……その支配を受けた者もまた、そうする事が当然だと思っっているわけだ。

むしろ、そうする事しか知らないというか。

地球人は侵略者の末裔……か。

なるほど、彼らの主張を否定する事は、出来ない。

「もはや事ここに至っては、和解は無理だと悟りました。ガイロスの力を借りて艦隊を追い払うと、私たちはもう二度と地上へ干渉するのはやめようと誓ったのです」

「ガイロス？ あっ……もしかして……」

「そうです。かつては彼に敵う船なんて、この海のどこにも無かったのに……あなたがた地上人は、ついに伝説のクラーケンすらも、容易く打ち破ってしまえるように進化したのですね……我々は、貴方達が心底恐ろしい……恐ろしくて、たまらない……」

「……」

「……少々、取り乱しました。貴方に言っても、仕方の無い事なのは、分かっています。お許しください」

「だったら、その誓いを守って欲しかったところだとしても言えんな」

「その通りですね。しかし、我々は危機に瀕してしまいました。海洋プラント建設の為に、海溝にアンカーを打ち込んで、大地を安定させようとしたでしょう?」

「そうなのか?」

「……申し訳ありません、ついあなたを、地上人の代表であるかのように扱ってしまいました。とにかく、あれが決定的でした。いかに先細りの種族とはいえ、このままいくと……我々はエネルギーの供給先を失い、多くの命を失う事になるでしょう。それに我々として心を持つヒトです。もともと地上を憎む過激派はいましたが……その蜂起に絶好の口実を与えてしまいました」

「……待てよ? じゃあ使者なんか立てる必要なくない?」

「最初に申し上げた通り、我々は一枚岩ではない。過激派にも同じことが言えます。組織と呼ぶのが烏滸がましいくらいに漠然としたあの集まりは、複数の氏族から成り立っていて……各氏族の方針は、それほど纏まってはいませんでした」

「シーホース号襲ったのと、ガキ寄越して来たのは、過激派の中でも別の派閥ってことか?」

「おおかた、子供であれば容易く此方の言い分を刷り込めると考えたので……使者とするには、些かノンマルトの側へ引き込みすぎましたね。あれではわざわざ地上

人を使う意味が無い。ノンマルトがそのまま行つて話した方がまだマシです」

上手くいくわけないだろ……と思つたが、よく考えたらコイツら、海底という狭いコミュニティに一万年以上も引きこもつてた、文字通り筋金入りのコミュ障だったわ。

「シンイチは余りに純真すぎ、発信者としての立ち位置が我々側へ寄りすぎました。ノンマルトから見た主観的な意見ばかりでは、地上人から拒絶されてしまうのも当たり前でしょう。その失敗を活かして、次に選んだのがフルハシ参謀でした。彼は地位も名誉も、信用もあり、何よりノンマルトではなく、あくまで地上人としての立場から、その功罪を証言できます。しかし……」

「人選が悪かつたな」

コクリと頷くヤオ。

「彼は……フルハシは、どこまで言つても地上人でした。自らと同じ人間の側を愛する思いが強すぎて……結局、突きつけられた証拠を認め、歪められた地球人の罪というものを自覚して尚も、それらを無視して、ウルトラセブンに懇願する事ができてしまえたのです。またしても過激派の思惑は外れることになりました」

あの人ほんと図太いからなあ……

使者とするには、フルハシの面の皮が厚すぎたんやな……つて。

「彼を生き返らせてくれた事だけは、感謝してもいいぞ」

オレの言葉にヤオは少しだけムツとした様子を見せ、何事かを反論しようとして口を開きかけたが……結局、頭を振って、別の言葉を述べた。

「……わたくしは、未来で彼らの犯した罪とその失敗を知り、深く絶望しました。わたくし達ノンマルトには、もはや救われる道が無いのだと……理解できてしまったのです。声を上げなければ、誰にも顧みられる事無くひっそりと滅ぶ。声をあげても無視される。だからと言って、自棄を起こして暴走すれば滅ぼされる」

「……まあ、見事なまでに詰んでんな。ちよつと……同情するよ」

「ですので……わたくしは、自助の為に動く事を諦め、禁忌の道を選びました。ノンマルトが生き残る為には、ノンマルトではない誰かが、ノンマルトではない誰かの為に、ノンマルトを救う道を選んで貰うしかないのだと……他のなにがしかの目的のついでのように、もはや取るに足らない存在として、そのおこぼれに預かるしか道は無いのだと」  
なんと卑屈な……それでいて悲壮な結論。

事ここに至っては、自らの生存権すらも、他者に委ねるしかないくらい、彼女らは追い詰められていた。

「そしてそれは、ノンマルトにも、地上人にも出来ず、そのどちらでもない者にしか出来ない選択です。まったく、彼女の言葉は至言でした。人間が人間のことを考えるのは、当然のこと……ノンマルトであるわたくしもまた、いざ動く時には絶対に私情を挟んで



しまうはず。それでは、ダメなのです……ここまで言えばお分かりでしょう。」

「あ?」

「貴方こそ、我々が生き残る為に一縷の望みを託した……わたくしが選んだ最後の……ノンマルトの使者。それが、貴方なのです。ソガ隊員……いや」

ヤオが、真正面からオレの瞳を見据えて、一筋の雫を流しながら微笑んだ。

「名も知らぬ、遥かなる我らが英雄。苛烈で歪んだ、優しき人よ」

## ノンマルトの使者（Ⅲ）

「……は？　なんて？」

「ですから、わたくしが、貴方をこの宇宙にお呼びしたと、そう申し上げているのです」  
「いやいや……嘘だあ」

何を言い出すかと思えば。

「お忘れですか？　ここはわたくしと貴方の精神を繋いだ世界。しかし、ただ見た目通りにソガ隊員の精神へチャンネルを繋げようとすれば、貴方ではなく元の人格を呼び出す事になります。貴方がたの置かれた、複雑な状況を初めから知っている者でなければ、この交信自体が成功しない」

「なん……だと……？」

確かに言われて見ればそうだ。

例えばオが逆行者だとしても、未来が変わったからと言って、ソガ隊員と接触しようとする事はイコールではない。

あの態度は……彼女が最初からオレの事情をわきまえていたからで……

ん、待てよ？

「つて事はオレ、死んだの？」

「それは……どちらのソガ隊員についてでしょうか？」

「あつ、そうか……え？　でもオレがこつちへ来る前に、本編のソガ隊員が死んでたら、そもそも話が合わなくね？　……まさか、お前が殺したのか！」

「それこそまさか、です。ただでさえ禁忌の手段に手を染めているのに、自分達が助かる為に他者を殺した等とバレたら……貴方様に……使者となる筈の者が怒り狂うのは明白です。そのような者をこそ、選んだのですから」

「おう、その通りだ。理性的で助かったな。もしそうだったら、Uターンしてノンマルト虐殺してたぞ」

「まず結論から言えば、ソガ隊員は……その肉体の持ち主は、死んではおりません。精神が活性化している状態で、他の魂を憑依させても、まず定着しないだろう事は予想できました。ですので最大限まで弱り切った時に、その意識を奥深くまで封印し、死体に限りなく近い仮死状態へする事で、依り代として使える状態にしたのです」

「なぜそんな回りくどい事を……シンイチよろしく死体を用意すれば良かったら？」

「それこそダンのように手柄を立てさせて入隊させれば良かった！　それに……なぜソガ隊員を選んだんだ。もし、ウルトラ警備隊なら誰でも良かったというなら、なんなら

キリヤマ隊長や参謀達をすげ替えた方がもつと楽だったんじゃないか？」

「それは偶然……いや、必然的にそうなっただけです」

「必然だあ？」

「そうです。その肉体の持ち主は、自分の身を危険に晒してまで、我々の盟友を殺さずに追い払う事を選びました。もちろん、あの場所で彼に傷を負わせれば、仕留めきれなかった場合に、暴れ狂った盟友が港をめちやめちやにしてしまうからそうしたのだ、とも分かっていきます。しかし、海の仲間を殺す事無く事態を解決した彼ならば、そこに宿る精神もまた……と、願掛けのようなものでしょうか」

「願掛けってお前……やる気あるのか？」

「大いに本気でしたとも。そして、勘違いされているようですが、死体なら誰でも良かった、というのは誤りがあります。我々が使者として蘇生出来る者には、先ほども申し上げた通り、代償だけでなく、ある条件があるのです」

「ほう、条件」

「それは……我々ノンマルトの元の肉体……つまり、侵略者の末裔として、その血と因子を色濃く受け継いだ者だけが、我々の技術で精神に介入できる素質を持つのです」

「なについ！」

「フルハシも、シンイチも、宇宙人の因子を色濃く発現していたが為に、過激派に利用さ

れてしまった……その素質を持った者が少なかつたからこそ、かつての地上人との接触も、思うように進まなかつたのですから」

「フルハシやソガが宇宙人の末裔だつて？ ……あつ！」

「思い当たるフシが、お有りのようですね」

まさか、フルハシ隊員がやたらと頑丈なのつて……そういう事なの!?

度々発揮する妙な鋭さは、野生のカンだと思つてたけど……もしかして、ダンの第六感と同じ事してんのかつ!?

そしてオレは、昼飯時か何かにフルハシとした、いつかの馬鹿話を思い出す。

そう、ダンの目が光るといふ話だ。

作劇上の都合じゃなくて、周りにバレてんのかよアツハツハ……なんて笑つてたが、そもそも、人類には不可視領域の光線を使つて、ダンが周囲を透視してる時に、その放射光が常人に見えるはずがないんだ!

そして、それが見える俺ソガもまた!

オレはバカか?

どうしてこんな重要な事に気付かなかつたんだ……

フルハシがタフすぎて、アイツ宇宙人かよ、なんていつも冗談で言つてたが、まさか本当にそうだったなんて……

「いや待て、ウルトラ警備隊に宇宙人の子孫が集中しすぎだろ」

「それほど不可思議な話では無いと思いますが？　宇宙人の因子は、発現すれば大なり小なり何らかの能力を齎すのです。つまり血を受け継いでいない人間よりも遥かに優秀と言う事。精鋭を組織するために人類の上澄みを掬った時、そこに因子持ちが集中するのは、むしろ当然の摂理と言えましょう」

「……マジ？　この世界の一般人が、たまにやたら強いのもって……」

「いつかなんて、半端にレイオニクスとして覚醒した少年が、無意識に我々の領域へ侵入してきた事もありましたが……傷付けずに追い返すのに苦労しました……友達の力を借りなければ、とてもとても」

「なんか大変だったみたいね……」

つか、なんだ？

もしかしてアンヌもアマギも隊長も……そうなの？

ええ……ウルトラ警備隊に一人だけ宇宙人と転生者が紛れてるんだか思ってたけど……他のみんなも、たいがいやんげ。

「いや待て、そんな話はどうでもいいんだ。オレは？　ソガ隊員じゃなくて、アンタが呼んだ方のさ！　ノンマルトが蘇らせたって事は、オレ……あつちで死んでんの？」

「それは残念ながら……分かりかねます」

「はあ!? アンタが呼んだんだろが!」

それで分からんって、どういうこっちやねん!

「落ち着いて下さい。確かにわたくしの行つた儀式で、貴方がこちらへやつてくる事になりましたが……別にわたくしは、貴方を呼んだわけではないのです」

「ヤオ……せつかく平和的に解決できたんだからさ、あんまり怒らせないで欲しいんだわ」

「……ハッキリ申し上げると、わたくしが望んだのは『なにがなんでもウルトラセブンを救ってくれる者』ただそれだけです。その条件に合致したのが偶々、貴方だったと言うだけで、わたくしには、貴方がどんな人で、何をしていたのかすら、こうして会うまでは分かりませんでした。無責任な事ですが。それこそお名前すらも! 貴方の名はなんと言うのです……?」

「……もう、忘れちゃったよ。セブン本編の事ですら、大筋以外はだんだん曖昧になってきてる」

「そう、ですか……大変、申し訳ありません……」

「いや……」

俺達の間、気まずい空気が流れる。

ヤオが、なぜあんなに下手に出て来たのか分かった。

自分達の生存の為に、実質二人の人間を犠牲にしたわけだから、そりやそうだ。オレだって、思うところしかない。

「……で？　だからアンタには、オレがもともと死んでたのか、それともノンマルトが時空を弄くつたからこつちに来ちまっただけなのか、判別がつかないってわけか？」

「ええ……少なくとも、我々の儀式に呼び寄せられたと言うならば、その魂を肉体から剥離させられる程度には、意識レベルが低下していたとは思いますが……それが死によるものか、はたまたただの睡眠時によるものか、定かではありません。なにせ、死者の蘇生以外で魂に介入したのは、前例がありません。全くの未知の事です」

「ま、世界の壁も越えてるしな……」

「えっ？」

「……いや、ちよつと待て。睡眠って言ったな？　ノンマルトの儀式的には、睡眠も死と

同義なのか？」

質問すると、視線を空に向けて少しばかり逡巡するヤオ。

彼女にとつても初の試みだったからか、考えを整理しているのだろう

「……そうです。正確には、周囲の変化を知覚できない状態。思考を行っていない無意識下では、肉体を制御できません。その肉体の持ち主も、今は同じような状態にあります。夢を見ているか、さもなければ気絶しているのと同じです」



人間は考える葦である、とはよく言ったものだが……別に、考えるのをやめた途端いきなり植物として扱う、とは一言も言ってねえんだわ……

寝てる間なら、葦のように植え替えても文句が言えんとそういう事か？

バカが！ とんちやつてんじやねえんだよ！

「じゃあ、オレが寝てる時は？」

「ごめんさい。質問の意図が……？」

「なんで寝たり気絶する度に、オレは体から弾き出されて無いんだって事！」

「ああ、それはご安心下さい。わたくしの術式で、貴方の魂が剥がれてしまわないよう保護されていますし、ソガ隊員の精神はきちんと封印されていますから」

「……その術式つてのは、やたら眠くなったり、逆に眠りが浅くなる副作用でもあるのか？」

「いえ？ そのような事は無いはずですが……なにぶん、わたくしにも未知の事ですから、貴方の体にどのような変化があるかまでは……」

「あつそう。いや、ちよつと確認したかっただけだから、気にしなくていいよ」

「……ですが、そのような心配とは、もはや無縁です」

「あん？」

ヤオは、原生林の中で、泥と雑草に塗れるのも気にせず手足を地面に付けると、オレ

が部屋に入った時と全く同じ姿勢で深々と頭を下げ、こう言った。

「我々ノンマルトの都合で、これまでご迷惑をおかけして大変に申し訳ありませんでした。そしてもう一度、心よりの感謝を。我が一族の総意を代表して、陳謝いたします。我らを滅びの定めから救って頂き、誠にありがとうございました！そして、その償いとして……貴方様を元の時代にお帰しさせて頂きます。もとより、地上人との和平は二の次、その為にこそ、わたくしはここへ参つたのですから」

「はあ？」

額に落ち葉を貼り付けたまま、ヤオが顔を上げる。

その顔は決意に満ちており、今すぐここで儀式とやらを始めそうな雰囲気を感じたので、すぐさま彼女を制す。

「いや、待てや。償いってさあ……それ、オレに何もメリツト無くない？」

「……確かに、貴方様から見れば、そう思われるでしょう。用が済んだから、さっさと帰れと言うのかと」

「よく分かつてんじやねえか。えらくムシの良い話だと思わんか？ んん？」

「しかし……事は貴方様が思っている以上に、時間が残されていません」

「時間がないだと？ 何の時間だよ」

「貴方様が消えるまでの、時間です」

オレが……消える？

「御存知の通り、その肉体は本来、貴方のものではありません。ハッキリ申し上げて異物です。わたくしがそうした事を棚に上げて形容するならば、異常な状態にあります。ではそんな体になぜ、貴方の精神が未だに張り付いていられるかと言うと……」

「ヤオの術式でそうしてゐるって、そう言ったじゃねえか」

「……その内容です。無理やりソガ隊員の精神を奥へ押し込んで、貴方を捻じ込んでしまうと、双方共に反発し合い、お互いの魂が酷く傷付いてしまう」

「……続けて？」

「精神が傷付いてしまつては、正気を保てない。それはわたくし共ノンマルトとしても困ります。我らの趨勢が決まるその時までには、貴方にソガ隊員としていて貰わねばならない。だから、術式にはある工夫をいたしました。貴方の精神が、肉体から拒絶反応を起こされないようにする為の仕掛けを」

ヤオは冷や汗を流しながら、説明する。

そんなにキツク睨んでしまったらどうか。

「貴方の精神は、ソガ隊員本人の精神が回復するまでの代役……つまりかさぶたのような物だと、肉体へ誤認させる必要があつたのです」

「かさぶた、ね……ハハハ」

「実態としても、そう間違つた事は言っておりません。偶々とはいえ……ソガ隊員は生死の境を彷徨う経験、それも、意識を失うレベルの低酸素空間に置かれた事で、あの時は非常に危うい状態にありました。もちろん、本来の歴史で彼は、驚異的な回復力でそれを克服したのを知っております……が、後遺症として軽い分裂症を煩つてしまいました。貴方とて、彼が時折、おかしな様子を見せていたのを知っているはずです。彼の肉体と精神が、常識外れに強靱であつたからその程度で済んだようなものの、普通ならば再起不能だつたでしょう」

……まさか、ソガ隊員がPTSDだつたとは。

確かに本編でも、普段はあんなに格好いいくせに、思い出したかのような三枚目というか、妙に能天気だったり、やたら縁起に拘つたりしてたが……

ストレス障害のせいとか、分かるわけないだろ。

まあ、ウルトラ警備隊で勤務してりやあ、PTSDなんて日常茶飯事だわな。

どのシリーズの防衛チームだって、毎回あんな激戦を50話近くも戦い続けられる方がヤバイ。

揃いも揃つて、鋼の精神の持ち主かよ。

「で？ ソガ隊員の精神を医療ベッドに寝かしつけて、オレがその間の……時間稼ぎのカプセル怪獣ってか。ハッハッハ！ 考えたな！」

「笑い事ではありません！ ソガ隊員の精神が十全に回復した時、肉体は貴方の精神を不要な物として排除しようとするでしょう。既にそうなり始めているハズ。最近、具合が悪かった事はありませんか？」

「具合？ あー……」

ま、ちよつと不注意だったり、感情の抑えが効かん事がなきにしもあらずだが……

「その顔は、やはり……今はまだ、わたくしの術で貴方の精神を保護してはいますが……それも効力が切れかけている。なにせ、今回の事件さえ解決して頂ければ、すぐにお帰しするつもりだったので、その分しか力を込めておりません。保護が無くなってしまうば、貴方自身の存在を削りながら生きて行く事になるでしょう」

「文字通り身を削る、ってやつか」

「そうして、本人の精神が回復していく一方で、貴方が衰弱していった結果、バランスが崩れた貴方の魂は、突然に肉体から弾き出されてしまう事になる！ 本来の手順を踏まずにそのような事をすれば、どうなるか……元に戻れば良いですが、最悪、弾き出されないまま精神が解けて消滅してしまう可能性だってあります」

「突然は困るなあ……」

「今ならまだ、間に合います。貴方の精神が傷付いていないままで、元の時間へ穏便な形で帰す事が可能です」

「なんでそんな焦る事がある？ その口ぶりだと、結構猶予はあるんだろ？」

「それは……確かに今日お会いして分かりましたが、ソガ隊員本人の精神が、わたくしの予想していたよりも回復が遅いので……」

「回復が、遅い……？」

「わたくしの予想では、もう十分に回復しきつて、後遺症の全くない状態で、すぐに貴方と肉体を受け渡せるようになっていっていると思っていました。ですが……」

「なあ、その精神の回復つてのは、どういう条件で遅れるんだ？」

「さあ、わたくしも詳しい事は……本来ならば、酷く精神力を使うような事をすれば消耗しますが、意識の無い状態でそんな機会は無いはずですし……」

「……オレの意識が無い時に、体を動かしたりすれば？」

「そんな馬鹿な事はありません！ 金縛りの体を、無理やり動かすようなものです。消耗するしないの話ではなく、出来るわけがない。そして仮にそんな事をすれば、多大に消耗するのは当たり前ですから、そもそもしようとする思わないでしょう。肉体や精神が、回復を優先して、無意識的に避けるはずですよ」

「……そうか。そうなんだな。ちよつと気になったただけだ。合点がいったよ。じゃあさ、ソガ隊員の精神が回復しきるまで延長つてのは？ 最初に込めたエネルギーが足りないだけでしょ？ もつかい糊付けすりゃいいじゃん」

オレが尋ねると、ヤオは非常に申し訳なきような顔で首を横に振った。

「それは……できないのです。わたくし達の蘇生術には、制約と代償が必要と申し上げました……その代償は様々にありますが主な物は術者の生命エネルギー……つまり端的に言えば、わたくしの寿命なのです」

「なんだって!?!」

驚くオレに、ヤオは何度もうなづく。

「だつたら残りを寄越せと仰るのでしようが……わたくしの寿命は、貴方をこの時代に呼び寄せるのに殆ど使ってしまった。そして、いまこうして定着させているだけでも少しづつですが消耗し続けている。そして当然の事ながら……貴方を無事に向こうへ到着させるにも、最初ほどではないにせよ、少なくとも寿命を必要とします」

「おいおい……寿命だと!?!」

「一人を蘇らせるのです。当然、その代償も同じものでなくてはならない。わたくしは、はじめからこのタイミングで、貴方を向こう側へ帰す事が出来るよう計算して、術式を組み上げました。貴方がもう少し長く留まれば、わたくしに残されたエネルギーは消耗され、必要量が確保できなくなってしまう」

「なるほど……」

「お分かりになりましたか？ 貴方が無事に帰る事ができるのは、これが最後の機会な

のです。これ以上ここへ留まる事は、貴方の存在そのものの消滅を意味します。魂が、輪廻の輪に戻ることにすら出来ず、文字通りの無になってしまふのですよ!」

「そうか……本当に今帰れば、オレの魂は元の世界へ無事に帰れるんだな?」

「ツ! ようやく受け容れて頂けましたか……ごめんなさい、少々、脅かしすぎました。もちろん、今のはこのまま何もなかった場合の可能性であつて、今のタイミングであれば、安全に儀式を執り行う事が出来ます。わたくしの全身全霊をかけて、貴方様を無事に送り届けると誓います」

ぐつと拳を握り締め、気合いを漲らせるヤオ。

彼女は、少しでも拓けた場所で、柔らかい土の層を見つけると、ソガが倒れて怪我をしないよう導いた。

「さあ、そちらへ横になっていただけますか……?」

ソガはそれに対し、笑顔でうなずくと、たった一言こう言った。

「だが断る」



## ノンマルトの使者 (IV)

「……なんですって？ 失礼、聞き間違えましたか？」

「もう一回言つてやろうか？ ……お断りだね」

「断るって……死んでしまうかも知れないですよ？ それもただ死ぬのではない、円環の理から外れたまま、輪廻転生すらもできず、完全なる消滅！ 魂の安息無き……」

「あーもう、うつるせえなあ……」

鬱陶しげに髪を掻き毟つたソガは、つま先で土に埋まった石ころをほじくり返しながら、それがさも当然であるかのように言い放つた。

「なるほど、このまま帰らねえなら死んじまうかも知れない……それがどうした？ 人は生きてりやいつか死ぬ。でも、今日じゃない。生憎とオレは、太く短く生きる派でね」

「なっ!？」

「お前達が弄くりまわせる以上は、魂というものも実在して、ひとは生まれ変わりをするんだらう……で、それがどうした!？ 次の人生なんて知つた事か！ 前世が思い出せないなら、オレからしたら他人じゃない！ そんなもん！ 知覚できんなら、普通に死ぬの

と変わらんわい！」

目を見開き、呆気に取られた様子で立ち尽くすヤオ。

構わずソガは口を開いて、彼女に向かってまくしたてた。

「だいたいな、今のオレは最高に輝いてるわけ。前世じゃどんな暮らししてたか知らねえけど、地球の為に戦うなんて事あるか？ 無いね、絶対無い。憧れの職業ランキングで、パイロットだのYouTuberだの、相手にならん程ぶっちぎりの1位がウルトラ警備隊だ。いわば子供の頃の夢を現在進行形で叶え続けている真つ最中やねんこっちは！ それを？ ここまでやらせといて？ 途中で取り上げようってたって、そうはいくか！」

「あの、ソガ隊員……」

「世の中にはな……2種類の人間がいる。糖尿病が怖くて、糖質ゼロのダークチョコレートしか食えない奴。知ったことかと、生チョコケーキを頭から齧り付く奴！ オレは後者だ！」

「チョコを食べない人もいるでしょう」

「んなもん人間じゃねえ。ノンマルトだノンマルト」

「このゲスラが……」

「ああん？ なんつった？」

「巫山戯ている場合ではありません。真面目な話なんです」

「大真面目だよ！ こちとらなあ、伊達と酔狂だけで今まで戦ってきたんねん！ 死ぬのが怖くて推しが推せるか！ 限界オタクなめんじゃねえ！ 第一、ここで素直にハイそうですかと帰る奴が、あのキリヤマ隊長に噛み付けると思うのか!? オレみてえな天の邪鬼を呼んだ、お前が悪い！」

「そ、それは……ん？ あまのじゃく？ まさか……意地をはっているのですか？ わたくしが帰れと言ったから、駄々を捏ねているではありませんよね？」

「ん、そうだが？」

「~~~~~ツ!？」

「おお……これウメエな。味もそのままじゃん」

ヘルメットに隠してある、非常用の糖衣チョコレートを取り出して、ポリポリ囓るソガ。

ここが精神世界なら、おやつ代わりに非常食を貪り喰ったとして、減りもしなければ、誰にも怒られないという事に気付いたらしい。

「あ、あ……貴方と言う人は……ッ！」

「……ああ意地だ。そうだと。ここで帰ったら、オレはこの世界に、『ノンマルトを救う』ために来たって事になっちまう。……そうじゃねえだろ！ オレは、誰かに言われ

たわけでもなく、自分の意志で！ セブンを、地球を！ 守ってきたんだ！」

「これはオレが始めた物語だ！ だったらオレにはその結果を、最後まで見届ける義務と、権利がある！ 違うか！」

「そんな事……！」

「オレは、オレ自身のために！ この地球を守ると決めたんだ！ それがオレの見つけた意味だ！ 横から他人にゴチャゴチャ言われる筋合いはねえっ！」

そう叫ぶソガの迫力に、ヤオは気圧され、つい目を背けてしまった。

彼女は、込み上げる罪悪感をどう処理すれば良いのか分からず、狼狽えるしかない。

奥歯を食いしばり、辛うじて絞り出せたのは、あまりにも情けないと自分でも思うほどに、身勝手な懇願じみた問いかけだけだった。

「そんな事を言われては……わたくしは……どうすれば良いのですか……」

「知るか、んなもん。自分で考えろ………と言いたいが」

つかつかと歩いてきたソガは、俯いたヤオの頬を鷲掴みにすると、無理矢理に開けたそこへ、銃口でも捻じ込むような乱暴さで、糖衣チョコレート粒を突っ込んだ。

「今までの会話で分かった事だが、人間とノンマルトじゃ、価値観と歴史背景が違いすぎて、とてもじゃないが話が纏まらない。お前らに考えさせたらどうせ失敗するのが目に見

「えてる。オラ、糖分を補給しろ」

「せいひんせひやいへ、ものほたふえてひよ、ひみひやはりはへ」

「オレを向こうに送って、その後の交渉どうするつもりだったんだ？ おまけに寿命ま

で削ってさ。馬鹿なの？ 死ぬの？」

「もぐ……それは地上人とノンマルトの問題であり、貴方にそこまでのご面倒をおかけするわけには……」

「あのさあ……せつかく助けた命なんだから、もう少し上手いこと立ち回って貰わなきゃ困るんだわ。いなくなった後で交渉決裂なんてされた日にや、殴られ損なの。分かる？」

溜息をついて首を振るソガの、なんと憎たらしいこと！

しかし、ヤオも交渉についてはさっぱりノープランだったので、押し黙るしかない。

とにかく彼を元の場所へ帰して、けじめを付ける事だけを考えていたからだ。

皆殺しの憂き目を回避できただけで僥倖であり、その後の事など……思いもよらなかつた。

なにせ彼女は、ここで寿命を使い果たして死ぬつもりでいたので。

「しかし……」

「オレがここににいる意味は、地球の未来をより良くすること。それはノンマルトの事も

含まれてる。お前らの問題を上手いことしなきゃ、地球の汚点として一生擦られ続けるのが分かってんだからな」

「はあ……しかしわたくし共は、これ以上を望みません。地上を返せなど今更過ぎて、海底でひっそりと生きていければ……」

煮え切らない彼女の様子を見て、苛立たしげに足踏みしながらソガは呻った。

「それじゃこつちが困るってんの！ おたくらは地上攻撃しちゃったんだから、償いをするべき先が沢山ある！ それもせず引き込もったら、今度こそ虐殺不可避だぞ？」

「ではどうするのです？ ノンマルトの事実を公表し、地球人が侵略者の末裔だと、宇宙に向けて喧伝するのですか？」

「するよ？ 当たり前じゃん。そんなの前提条件すぎて、それこそ言うまでも無いというか……」

「……えっ？」

今度こそ、完全に虚を突かれた様子のヤオ。

まさに信じられないと、顔に書いてある。

「そんな事をすれば、地上人達は地球を去らねばならなくなりますよ？」

「ナンデ？」

「それは……何人も、自らの居場所以外で生きる事は許されていないから……」

「それさ、ここは日本なんだから、日本人以外の外国人は即刻退去せよって言ったら、宇宙的にまかり通るんか？」

「あつ……それは……」

「我々地球人は？ グローバルな種族であるからして？ ノンマルトだろうが地上人だろうが、果ては宇宙からの移民者でも、他者に迷惑さえかけないならば、どうぞ受け容れますとも。ははあ、地上人にここはお前の星ではないから退去せよと仰る。では残念ながらあちらにあります可哀想なペガッサの難民も揃って出て行けとそう言うわけですね？ なるほど確かにここはノンマルトの星ですから、それ以外の種族には居住権が無いと！ そういう事でございますか！」

にこにここと喋りまくるソガを見て、ヤオは……完全に引いていた。

顔や口調は先ほどなどより、よほど穏やかで紳士的であるにも関わらず、なにか得体の知れない恐怖すら感じてしまうくらいに、ドン引きしていた。

「ところで先ほどから、我々の事を侵略者、侵略者と呼びになりますけれど、先祖の罪をその子孫にまで被せようなどという、愚劣で遅れた考え方は、この地球ではとつくのとうに廃止されておりまして、もしや我々などよりよほど高尚で進んだ考えをお持ちであれば、あろう宇宙連邦様がよもやそのような……まさかそれがスタンダードだなどと、ハハハ。御冗談を」

ドン引きしていた。

「……それを、言うのですか」

「言うが？ あの手やマ隊長に喧嘩売ったんだ。もうこの世に怖いモンなんかあるかいな！ それも、仮にも法の下に通達してくるような奴に。目には目を、歯には歯を。正論には正論！ その上で殴りかかってくる奴は、そいつこそ侵略者だよ」

「わたくしは……人選を、間違えたのでしょうか」

「さて、その為にはノンマルトにも、地上との和平を結んで貰わなきゃならないんだな。地球はもう、人間の物でも、ノンマルトの物でも無い。地球星人達の星。そうなりつつあるんだ。例え、俺達から『地球人』という肩書きが引つ剥がされても、人間としての誇りを忘れない限り、ヒトとして在り続ける事は出来る。一日そこらで解決する話じゃない……そりゃ時間もかかるだろうさ」

「その為に、残されたわたくしの命を使えと、そう仰るのですね？」

「だから、ここで俺達だけが話しても、しょうが無いってわけ。チョコレート食い放題は、捨てがたいけどな」

おどけて見せるソガを見て、くすくす笑うヤオ。

彼の言う事は、あまりにも理想論に過ぎ、そう上手くいくのだろうかという不安もある。



だが、どうせ死んだはずの命ならば、それも……悪くはない。

「頼むよ、みんなの力でヒトの革新って奴を見せないと、セブエモンが安心して宇宙に帰れないんだ！ オレが使者だと言うのなら、使者らしく最後の仕事くらいしてやろうじゃねえか」

「せぶえもん……？ 分かりました。感応を解除します。我々の精神はすぐにあの場所へ戻る事でしょう」

「ヤオ。これでオレとお前は共犯者だ」

「共犯者……？」

「さっきはああ言ったが……この世でたった一人だけ、オレにド正論で、真正面から文句を付けられる奴がいる。オレはその人にだけは、絶対に勝てないし、その人が出て行けと言ったら、尻尾巻いてすぐご退散するしかない」

「えっ……あ、分かりました。ウルトラセブんですね」

「いや、違うね」

「ではいったい……？」

ソガは、精神世界が解除される、その瞬間を少し待ってから、ヤオが反論できない絶妙なタイミングを見計らって舌を出し、ウインクした。

「ソガ隊員がブチ切れた時は、一緒にゴメンナサイしような」

「なっ……！」

二人の姿が原生林から掻き消えた。

## ノンマルトの使者 (V)

次の瞬間、俺達は応接間に戻ってきていた。

目の前には、ヤオが驚愕の表情で座っている。

「ソガ隊員！ さっきの言葉は……！ 卑怯ですよ！」

「ええ失礼。実はあなた達ノンマルトが、テレパシーによる接触を図ってくるのは予想してしまっただね。まあ、悪用する気がなかったのは、結構な事だったが。例えその気があったとしても、我々には催眠解除装置がありますので、私を洗脳してどうしようとしても無駄だった訳です。いやあ、試すような真似をして申し訳ありませんでした」

「え？ あ……ええっ!？」

俺が急に澄ました顔で、訳分からん事を言い出したから、ヤオが目を白黒させて慌てている。

ほんま、そういうところやぞ。

ノンマルト、腹芸弱すぎ問題。

縄文時代で、外交術の進化が終わってるような海底人なら、それが当たり前なんだが

な。

原作での支離滅裂さを考えたら、ヤオはこれでもまだ良くやつてる方ではある。あるが……

共犯者として甚だ不安になってくるわ……

「さて……あなた達がかつて、侵略者によつて肉体と精神を強制交換された挙げ句、奴隷として海底に押し込められたアトランティス人だ、という主張は理解しました。現生人類の文化や思想が、もとはその侵略者由来の物だという事もね」

「え、ええ……」

「そして、支配層から侵略者が消えた後も、ノンマルトは細々と地上へコンタクトを試みたが、一顧だにされず、あげくの果てには、当時の支配者達からガレオン船団による逆侵攻を受けたので、これをガイロスにより撃退し、以後国交断絶に至る……と。私の理解は概ねこのようなところですが、お間違いありませんか？ ヤオ代表」

「はい……それは、そうですが……」

いいからキョロキョロすんな。

余計な事言わずにじつとしてろ。

めっちゃ怪訝そうな顔で、しきりにアイコンタクト取ろうとしてくるが、彼女の内心はテレパシーなんぞ使わなくても分かる。

多分、『それも言うっちゃうの?』だ。

いいんだよ。むしろ、今からさっきの話を、もう一回する方が白々しいわ！  
話してないフリと、聞いてないフリ。

出来るんか？ お前。

「ソガ隊員……?」

「ハア……」

出来んやろなあ……

こんな足引つ張りを抱えて、海千山千の参謀達の前で一芝居打つなど、御免被る。

俺のソロ芝居ですら、いつ見破られるかハラハラもんなんだぞ。

とりあえず、絶対に隠さなきゃならない部分以外は、もうオープンにぶっちゃけて、実態との差をなるべく無くすしかない。

あたかも、俺がイニシアチブを取ったかのように見せつつ、ヤオ達の主張を別室の上司達に伝えなければ。

……本当に使者の仕事か？ これが？

超過労働手当てを、請求したい。

「それで？ あなた達ノンマルトの要求はなんなのですか？ 地上返還などを求める気は

無い、と仰いましたか？」

「我々はただ……生きたい。それだけです。生存圏を脅かされる事なく、自分たちの暮らしたが、したい……」

「ふむ……しかし、ノンマルトの攻撃によって、地上側も死者を出している。それは、ご理解いただけますね？」

「はい。わたくし共が過激派を抑える事が出来なかつたが故の、失態です。本当に申し訳ないと思います。後で、遺された者達にもお詫びをしに行こうと……」

「待った待った。……ははあ、ノンマルト的にはそうなる訳ですか。どうも我々は、価値観や認識にズレがあるようですね」

「ズレ？ と仰いますと？」

「ま、種族や歴史の違いから来るものでしょうが……賠償の仕方については、後ほどご相談していただきましょう。少なくとも、ヤオ代表がその足で頭を下げに行くのは、よした方がいでしょうね」

「そういうものですか……」

ヤオが項垂れた際に、応接室の鏡に向かって首を竦める。

完全にお手上げのポーズ。

頼む、隊長！ 伝わってくれ……！

コイツら、俺達が想像するより、遥かに救いようがないです……っ！

基本的に、幼稚園児か小学生だと思って接してやってください！

参謀！ 賠償請求の件……ほんとお願いしますよっ！ 養命酒御供えするから！

「ええと……過激派はなぜ、我々人間を攻撃し始めたのです？」

「それは……地上人はノンマルトの領域を侵した上、大地を固定しようとなりました。それでは、我々の使うエネルギーが、届かなくなってしまう。海嶺から噴出したウルトニウムが、海溝に沿って流れてくるのを、我々は回収していましたから」

「……そうなの？」

「ええそうです。なぜこの地球上で、これだけ土地の狭い日本にばかり突出して、怪獣の出現が多いか考えた事はありますか？ 彼らは、巨体を維持する為に、膨大なエネルギーを必要とします。だから普段は、地底奥深くで眠っています……地表付近にウルトニウムが溜まりすぎると、それに惹かれて集まってくるのです。日本は、周りが海溝に囲まれているから……我々が回収しなければ、あつという間に地中がエネルギーで飽和してしまうでしょう」

「マジ……？」

「はい……まじっ？ です」

思わず、鏡の方を見てしまった。

なかなかぶっこんでくるやんけ……

今そんな事言わんといてくれるか？

「あなたがた地上人は、地球の怪獣を一掃したと思っただけですが、それは比較的浅い場所にいた者達でしかなく、ザバンギが抑えている地層の下では、さらに多くの怪獣達が眠っています。そうですソガ隊員、現に我々ノンマルトの都市が破壊された後は……」

「わー！ ストップストップ！ あんまりね、一度に言われても僕たち困っちゃうからね、そのへんにしといてね」

「……そうですか」

とりあえず余計なことまで口を滑らせそうだったので、慌ててヤオを押しとどめる。

いや、そんな不服そうにされてもね……

それとも、わざとやってる？

いや、そんな意趣返しが出来るなら、最初からこうなっていないな。

この天然が。

「……というか、そういう事なら、ちゃんと言ってくれりや良かったのに……今だっこうしてさ」

「証拠がありません。あくまで我々の主張でしかない上に、先程のビジョンも因子……相性の良い方しか見せられませんし……どうせ信じては頂けなかったでしょう」



「……チツ。だつたらもつと前から協力しとこうや、そこは！ 今までだつて、いくらでも機会はあつただろ」

「協力、ですか？」

「それこそ、ミミー星人の時なんて何やってたんだよ。あんたらの縄張りだつて、ずいぶん荒らされたはずだ。その時に共闘でもなんでもしときやあ、ポツと出の宇宙人とは思わなかつたよ、こつちは。今までさんざん地球の危機をスルーして、俺達ばかり戦わせたくせに、ムシが良すぎるとは思わ……」

そこまで俺が言った時、ヤオの頬にサツと赤みが差したかと思えば、剣呑な表情でこちらを睨みつけてきた。

その拳は、膝の上で堅く握りしめられ、何かを耐えるように下唇を噛んだまま、わなわなと震えている。

「な、何だよ……」

「くツ！ いえ、なんでも……ありません……ッ！」

「なんだ？ まさか地雷踏んだ？」

「文句があるなら、言ってみろよ。聞いてやろうじゃねえか」

「……でしたら、お言葉ではありませんがっ！ わたくしたちは、戦いました！ あの、おぞましくて凶暴な宇宙エイが襲来した時！ わたくしたちは、必死で戦つたんです！

アレを都市から遠ざける為に、どれだけの狩人が死んだとツ！ ガイロス達だって、たつた一匹を遺して無惨に食い散らされました！ そ、それを……！」

「え、エイ……？」

「あなた方地上人は、あらかじめ警告を貰ったんでしようが、我々には誰も……教えてくれなかったつ！ ほとんど奇襲のような形で、アレに、襲われて……集落が、ふ、二つもいつぺんになくなったんですよ!? たまたま狩人が、変な喋る人形を拾ってきたから、残った全ての氏族を都市に結集させて……！ それこそ地上人にとっては、船と飛行機で容易く殺せるような相手だったのでしようとも！ ですが、我々ノンマルトにとっては、まさしく悪魔のような敵だったんです……っ！」

「わ、分かったよ……」

さつきまでの、しおらしい態度から一転、殆ど金切り声で叫ぶヤオ。

完全にヒステリーを起こしてしまっている

「いいえ！ 分かっておりませんわ！ あの時は折悪く、盟友達も自分の事で手一杯で力を借りられず、わたくし共だけで対処せざるを得なかった……だいたい、あの怪獣が地上人の飛行機から攻撃を受けた時、海の中へ逃げ込んでしまわないよう、我々は命懸けで追い立てました！ そりゃあ、地上人が倒してくれるかもしれないと、利用した事は認めます。しかし、結果として……そんな有様だったのに、今度はあの鉄のヒトデに

立ち向かえと！　そうおっしゃるのですか！　そもそも、海にあんな大きなゴミを沈めたのは、あなた達でしよう！　なんなら彼らは、海底を掃除してくれました……」

「悪かった、悪かったって……よく知りもしないのに失言だったよ、マジで」

泣きながらキレ散らかすヤオ。

よっぽど悔しかったと見える。

とうかこいつ、はじめの大人しきはどうしたんだよ……

あ、もしかして……

「あの一件で、ノンマルトは大きな痛手を負いました……そもそもガイロスだって、岩を退け、土を掘り、集落の拡張を手伝って貰っていたに過ぎない……地上人が、怪獣頻出期などと呼んでいる時期も、わたくし達が力を失った何よりの……証明ではありませんか……わたくしとて、記憶が、もっと早く……戻って……いれば……」

……思うんだけどさ、ヤオ。

お前は……オレなんぞと精神感応なんか、するべきじゃなかったんじや……無いか？  
その時、背後で扉の開く気配がする。

ヤツベ……

「すみません隊長、すぐに落ち着かせますから、どうぞ御容赦を……今のはね、俺が……  
わる……かっ……」

「ヤオ代表、今の言葉は、本当かね」

応接室の入り口に立っていたのは、キリヤマ隊長では無かった。

カーキの軍服に身を包んだ……

「ヤマオカ長官……」

長官は、俺を一瞥する事無く、ただ真つ直ぐに、泣き崩れるヤオを見つめていた。

「本当も何も、嘘など申しません……嘘をつくのは、人間だけです……」

「そうか、ではその怪獣というのは……もしやボスタングという名前では無かったか」

「えっ？」

「ボスタング……そう……そうだわ。あの人形はそんな事を言っていました……」

「うむ……」

涙を拭いながら頷くヤオを、じつと見下ろす長官。

なんだ？　なんでわざわざ長官が……

「ノンマルトの主張。まだその全てを受け容れるわけではないが……少なくとも、彼女らがつい最近に地球へ来た、余所者では無いという部分を、私は信用する」

「長官!？」

「あ、ありがとうございます……しかし、なぜ……?」

「私も……あの場に居たのだ。ボスタングが砕け散る様は、この目にしつかり焼き付い

ておる」

「なんと!?!」

普段の厳めしい表情を、まったく崩す事は無かったが、ヤマオカ長官の声音はどこまでも穏やかだった。

「海底からでは預かり知れぬ事ではあったと思うが、あの時の我々は、警告があつたにも関わらず、半信半疑で準備が不十分だった。通達が遅れた為に、大型の貨客船が、海域から逃げ遅れてしまっていたのだ。あの船には、500人の乗客が乗っていた……」

「そんな事が……」

「航空隊の発進にも時間がかかる。ボスタングは音に反応するというので、救援が来るまではエンジンを止めて息を潜める事になり、一度は難を逃れたが……再び浮上した怪物が、貨客船の方へ向かうのを見て、私達は囷として単艦で戦いを挑む事にした。あの時に、船上にいた全員が、死を覚悟したものだ。だが、結果として支援が間に合い、私はこうして命を拾う事となった……」

そう語る長官は、一瞬ではあるが、はじめて口元に小さな笑みを湛えると、踵を合わせ、顎を引き、実に見事な敬礼を送った。

「ノンマルトが航空隊の到着まで時間を稼いでくれていなければ、私の船はおろか、客船も沈み、さらなる被害が出ただろう。地球防衛軍を代表して、諸君らの勇敢なる戦士達

に敬意を表する。彼らは、自らの仲間だけでなく、500人の命を救ったのだ！」

「あ、ああ……っ！」

「ボスタングが深く潜行せず、爆撃と艦砲射撃によつて撃滅された事など、それを見た当事者しか知り得ない情報である。協力者があれほどに警戒していたにしては、やけに呆気ないと思つていたので。ようやく得心がいった。あれは、ノンマルトとの戦闘で、奴が傷付いていたからに違いない」

「そんな……」とは……」

ヤオは口元を押さえて、嗚咽を漏らすまいとするが、その目からは、真珠のような雫がとめどなく溢れてカーペットを濡らす。

それでも彼女は、必死に首をふつて長官の認識を改めようとした。

あの口ぶりでは、怪獣に致命傷を与えるほどの戦いなんて、とても出来なかつたであろう事など、誰が聞いても明白だからだ。

そんな事は、長官だって百も承知のはず。

だがたつた今、事実はそうなつた。

ノンマルトはかつて、地球の為に人類と手を携えて、宇宙からの外敵を屠つたのだ。

「地球防衛軍は恩知らずではない。とはいえ、ノンマルトが此度の戦闘で地上に被害をもたらした事もまた、許すことは出来ない。ついでには……ヤナガワ参謀！」

「はっ」

「早急に、地上側の損害を取りまとめ提出せよ。遺族への賠償は防衛軍が肩代わりする」  
「畏まりました」

いつの間にか入室していた参謀達から、神経質そうな面持ちの男が一步前になると、きつちりとした敬礼を見せた。

一刻でも時間が惜しいのか、敬礼するやいなや、スタスタと退出していく。

「次、タケナカ参謀！」

「ハッ！」

「現在の哨戒海域に、ノンマルトの集落を考慮しつつ艦艇配備を見直す事。彼らとのホットラインを確立し、共同で海の警戒網を構築せよ」

「必ずや、実りのある物にしてみせます！」

気合いを漲らせて頷いた男は、こちらを一瞥すると、ノンマルトの代表を激励するかの如く、力強い領きを寄越してから退出した。

「そしてマナベ」

「ハッ……」

「キミには、彼らの主張の裏付けを頼みたい。各支部と連携し、調査チームを編成するのだ。同時並行して、地下の発掘準備も進める事。なにか手懸かりが掴めるやもしれん」

「拝命いたします……ヤオ代表、詳細な聴取の為、後ほどお時間を頂きたい。それまでに質問事項は、簡単に纏めておきます」

「はい……そういう事でしたら、いくらでもご協力させていただきます」

「それまではこちらでお寛ぎ下さい……では」

長官に対して、丁寧な腰を折った男は、あくまで沈着さを保ったまま、ヤオを客人として遇しつつ、職務を遂行しに出て行った。

「ヤマオカ長官……わたくし共の言葉を信じて下さって……感謝の次第もありません」

「いや……我々は共に、過去の怨恨を断ち切り、より強大な困難に立ち向かうべき時が来たというだけの事。地球防衛軍は……この星を守る忠勇なる戦士達の誇りを、無碍にするような組織ではないのだ。そして勿論、そちらにも相応の労役は担って頂く」

「……覚悟しております」

「その代わりに、矢面へ立つ事は、我々の仕事として命の限り全うすると、ここに宣言する」

そう言つて長官は、踵を返し部屋から出て行くこうとして……護衛のように扉の傍へ控えている、警備隊長へ敬礼した。

「キリヤマ隊長……よくぞ、やってくれた。此度の事は地球にとって、歴史的な快挙と言えらるだろう」



「過分なお言葉に、感謝致します」

「キミは、良い部下を持ったな」

「……自分には、勿体ない男であります」

「その手綱を握り、進言を聞き入れるのもまた、指揮官の務め。苦勞をかけるが、これからも頼むぞ」

「恐縮です！ ……ソガっ！」

「は、はいっ！ ……なんでありましょう！」

「良くやった。お前はそのまま代表がお帰りになるまでの護衛につけ。ただし、任務の後……」

「メデイカルチェック……ですかね？」

「分かっているなら、よろしい。では長官、こちらへ……」

そうして扉が閉められる。

コップを持って、鏡の貼られた壁に近付くと、それを耳にあてた。

「ソガ隊員……なにをしているのですか？」

「……おつ、マジで監視無いんだな。大丈夫かよ」

「あの……」

まあいいや、別にそこまでする事もない。彼らは味方なのだから。

「おめでどうヤオ。いや、物事ってどう転ぶか分からんもんだね。塞翁が馬ってやつ？」

「声を荒げて申し訳ありませんでした……お恥ずかしい」

「いいじゃないの。結果オーライさ。思ってたよりあっさり行つて笑つちまつたけど……ちゃんと話し合えば、こんなもんだよな。やっぱコンタクトの取り方が下手すぎたんよ、おたくら」

「……そうですね。わたくし達も、今の地上人を……もつと信用するべきでした。あんな事をする前に、歩み寄っていれば……」

真つ赤な目でそう呟いた彼女は……ひどく寂しげに見えた。

「なあ、なんでセブンを頼らなかつた？ 彼なら……」

「……むかし、わたくしの妹が、彼にこう聞いた事があります『なぜ人間を守るのか』と……」

俺の問いかけを遮り、涙の跡をつけたまま首を振るヤオ。

「彼はなんて答えた？」

「その時は、何も……しかし、あなた方がタキオンと呼ぶ、時の残滓となったわたくしは、後に彼がその答えを出す瞬間を聞いていました……『地球人を、愛しているからだ』……とね」

「……」

「彼の言う地球人は……我々では無い。彼と共に戦い、同じ時を過ごした、地上の人々を愛しているからこそ、セブンは……人間の為に立つ事が出来る。我々を守る義理など、はじめから持ち合わせてはいない」

「それは！ そんな言い方は、無いだろ……」

「勘違いなさらないで。彼はもう充分に傷付き、戦った。その肩に……これ以上の重荷を背負わせたくは無かったのです」

「お前……」

その時彼女が見せた微笑みは、とても澄んだもののように見えた。

だからかもしれない。

ずっと引つかかっていた疑問が、口をついて出てしまった。

「なにがなんでもセブンを救ってくれる者……どうしてノンマルトを指定しなかった？ その者が、セブンを救う手段として、お前達の救済を選ぶかどうかなんて……あまりにも、賭けだ。最悪、セブンがその存在を知る前に殲滅する……そんな未来もあったはずだ」

現にオレは……

「わたくしもまた……貴方と同じです。ソガ隊員」

「同じ……?」

「確かに、彼が地球人の味方をした罪で、馬の首星雲に幽閉されたと聞いた時……残滓として剥き出しの精神しか持たなかったわたくしが、いい気味だと嘲笑わなかったと言えば、嘘になる。しかし……今ならば、セブンの気持ちがるのです……人間は決して、不実な生き物ではない。罪を赦し、悔い改める事が出来る。そう教えてくれる人が……わたしにはいたから」

「何が言いたい?」

彼女は、右の手のひらをじつと見つめた後……憑きものが落ちたように、破顔した。「人間とノンマルトが、仲良く夕顔の花を愛でる……そんな未来が見たいと、思っただけの事ですよ」

## 第四壁面の空夢（I）

ナレーター「地球防衛軍は、長距離用宇宙ロケット、スコープオン号を完成させた。テスト飛行に成功すれば、太陽系をはるか、銀河系のどの星へも自由に行けるようになるだろう」

：基地・作戦室

ソガ「いかんいかん……。蠍座と冥王星が並び、さらにそこを火星が通過する……」

ソガ、星座盤を指で弄りながら呻る

フルハシ、立ち上がり一喝

フルハシ「何いってんだ、ソガ！ そんな星占いに振り回されて！」

ソガ「いや、蠍座、冥王星、火星と重なったときには、死神の座といって、何か災難が起こるものなんだ……」

ソガ、いつになく神妙な面持ち。星占術に絡めてスコープオン号に難癖をつける。地球儀を抱えて作戦室内を闊歩

隊員達、苦笑

ソガ「今度の宇宙ロケットは、スコープオン……。つまり、サソリだというのにも気にかかると……」

フルハシ「バカ！ スコーピオン号は、科学の粋をこらしてつくられた、宇宙ロケットなんだ！ お前の星占いとは関係ないよお！」

一笑に付す、フルハシ（普段通りに）

アマギ「頼りねえテストパイロット！」

相変わらずソガに対しては歯に衣着せぬ、アマギ。横からソガの地球儀を回して小馬鹿にしたように（アマギは科学信奉者なので、フルハシ以上に辛辣さを出す）

他隊員達（笑い声）

ソガ「占星術を馬鹿にしちゃアイコンよ！ 潮の満ち干きが月と関係があるように、万物はすべからなく天体の動きに影響されながら生きているんだ……。科学万能の時代になればなるほど、我々は宇宙の神秘と向き合ってみる必要があるんじゃないのか？」

ソガ、食い下がる（尚、原作ママ。なるべく寄せて。わざとらしさは出してよい）

キリヤマ「いいか、スコープオン号は君たちが操縦するわけじゃない……。すべて計器がやってのける。航路からロケットの状態まで、すべて計器がはじき出し、地上に送ってくる……。我々はそのデータを見ながら、地上から操縦するって仕組みだ。まあ極端に言えば、君たちは終始眠っていていいわけだ」

キリヤマ、呆れつつも朗らかに、部下の緊張を解きほぐす感じで。占いというよりもソガの駄々なので気にかかるが、普段の屁理屈と腹案が飛んで来ないので、座視する感ソガ「予言しましょう、何か一大事が起きるに違いない！」

ダン「一大事って？」

ソガ「そりゃあ決まってる……一大事さ！」

ここで11話冒頭のやり取り引用。キメ顔で画面手前（ダン方向）を指差すソガ。この時ピントは指先集中

「はい、カットオー！」

その声が響いた瞬間、緊張間の漂う現場に、弛緩した空気が流れ込んだ。

メガホンを片手に、監督が満足げに頷いている。

「休憩はいりませう」

「次、ダンとソガのダイアログからね」

「誰かー、リクライニングシート用意しといて」

スタジオの隅で、置物のようじとしていたアシスト達が一齐に動き出し、タオルや飲み物を片手に役者達を労う。

アマギ役の降谷おりたによすが便は、手渡されるコーヒー缶を無感動に受け取り、簡易椅子に腰掛け  
た。

ふう、と息をつく彼が、プルタブに指をかけると、頭の上から不平が落ちてくる。

「ちえ、ホット缶じゃねえか。もうそんな季節じゃねえだろ」

「言っても、まだ3月の頭じゃありませんか。充分に冬の範疇だと思いますけどね」

「そういう事じゃなくて、その日のぬくさに合わせて臨機応変にだなあ！ 今日のAD  
誰だよ。これだから、ろくに教育を受けない人間はダメだ。エキストラにでもしちま  
え」

「まあまあ」

降谷の隣にドカツと座り込んだのは毒蝦蟇ぶすがえるよんだゆう四太夫。今日も毒舌混じりのガマ節が絶  
好調である。

落語家である彼は、舞台俳優としてもベテランであり、べらんめえ調が特徴的なフル  
ハシ役として、これ以上ないくらい相応しい男だった。

顔合わせ初日、降谷の名札に書いてあった便の文字を“よすが”ではなくそのまま“  
びん”と呼び、あまつさえそれで押し切り、渾名として定着させてしまったのも彼であ  
る。

「毒蝦蟇さんは口が悪いから、気の使い甲斐が無いと思われるんじゃない？ ビン君



の大人しさを見習ったら？」

「やだなあマリちゃん。いつも見たいにガマちゃんが良いってば」

「ええ？ でもガマさん、偉くなったんでシヨ？」

「あ、そうだ。襲名おめでとうございます。言うのが遅れました」

降谷が頭を下げれば、毒蝦蟇はイイヨイイヨと制しつつ、満更でもなさそうだ。

「あれ、そういえば改名の話はどうなったんです？」

「どうもこうもあるかい。このままだよ」

「改名って？」

「お師匠がな、カエルじゃママシに勝てない、前任を越える気概で毒蛞蝓にしろ、なんて言うんだ。冗談じゃないよ！ 俺あ、ナメクジがいつとうキライなんだ。だいたい、”

ぶすがえる”なんて変な芸名つけたのは、お師匠じゃねえか」

「ふふ、ナメクジが嫌いとは、とことんフルハシ隊員ですね」

「え？ そんな設定あった？」

「真理子ちゃんはもう少し台本読もうね……」

「だって、わたしの役じゃないし」

「マリちゃんはアンヌの科白だって、時たまうる覚えじゃねえかよ」

伏見真理子ふしみまりこが首を傾げるが、まあそれだけで画になるもんだ。

美人は得で良いな……と降谷は内心で羨ましく思う。

尤も、これだけ長く撮影をやつてきたのだから、彼女が顔だけの女ではない事くらい、既に分かつていた。

当初はアンヌ役に地下アイドルを起用するなんて、と批判が殺到し、彼女も相当に荒れていたが、演技力でそれらの炎上を捻じ伏せてみせたのは、同じ役者としてスカツとしたものである。

まったく監督は、こんなハイスペックの逸材を何処で見つけて来たのか……

とはいえ、才能に胡坐をかかず、もう少し真摯になつてくれたら……と思わなくもない。

そんなだから、干されたりするんだぞ。

まあ、当人は全然気付かず、ヒロインは扱いが良いから、休みが多くていいわね……なんて喜んでるのを見て、これは筋金入りだなと理解したが……

そのメンタルは、是非とも見習いたいものだ。

「別にいいけどさ、あんまりトチツてオヤジさんをイライラさせないでくれよ?」

「あらご挨拶。隊長はガマさんみたいに怒りっぽくないし」

「そんな事言えるの、真理子ちゃんだけだよ……」

キリヤマ隊長は、監督が張り切つてベテランもベテランの大御所俳優を引つ張つてき

たので、彼のいるシーンで何度もリテイクすると、現場の緊張感が半端ではない。

それこそ、俳優になる前は自衛隊の所属経験もあるというのだから、真理子がポカをやらかさないように、周りは気が気では無かった。

当然、自身の芝居にも身の入り方が違う。変なところで、ウルトラ警備隊のリアリティが再現されてしまった形である。

監督は大喜びしていたが、やらされる方はたまったもんじやない……というのが、男性陣の総意だった。

「まあしかし、いい時代になったよなあ……一昔前は、やれジャリ番だとか言われたらしいけどさ、今じゃ若手の登竜門みたいになつちまってまあ……お師匠が、ズルいつてるせえの何の」

「そうなの？ マネージャーが喜んでたから、とりあえずオフアール受けただけなんだけど」

「そうだよ。おかげで真理子ちゃんもだいぶ有名になつたんじやない？」

「確かにねー。今度ガソスタのCM出るの、わたし」

「やったじゃねえか！」

「おめでとう」

まさに大躍進だ。今後は彼女次第とはいえ、素晴らしいスタートダッシュを切れたと

言えるだろう。

ヒロインや主人公役ではない自分には、あんまりそういう機会が巡ってこないというのが、チクリと胸を刺すが……いいんだ。そもそもスーアク志望なんだし。

あんまり顔が売れるのも恥ずかしいし、後年のシリーズで、ゲスト宇宙人やモブパイロット役でカメラ出演するのが密かな夢である降谷は、撮影仲間の栄達を酸っぱい葡萄として素直に賞讃することにした。

「……令和にもなつて、今更ウルトラセブンのリメイクやるなんて聞いた日にや、誰が見るんだと思ったが、やっぱ人気なんだなあ」

「そりやそうですよ。ネットでもだいたい話題になってますしね」

「ふーん……」

「うわっ、興味なさそう……」

「流石は初日に、マンセブン発言で現場をヒエツヒエツにした女だぜ……」

「だつてわたしの頃は、特オタクくらいしか見てなかったんだから、仕方ないじゃん……」  
「かぁー！ その特撮でおまんま食ってる人間の言うことかねえ……これがゼット世代つて奴か。末恐ろしいや」

コーヒー缶を傾けながら、肩を竦めるドクガエル。

乙世代はもう少し下なんだけどな、とか。

あんたも言うほどトシ離れてないでしょうに、とか。

いくつかの突っ込みが脳裏に浮かんだものの、降谷は曖昧に微笑むだけにしておいた。

彼は、あまり気の大きな性格ではないので、こういう時はたいてい言葉を引つ込めるタイプだ。

というか、彼が逡巡している間に、似たような事を既に真理子が言っつて、毒蝦蟇を笑わせている。

——やはり、沈黙は金。

「というか、未だに信じられないのよね。ウチの番組が人気って言われてもさー。誰も見てませんって方が、全然説得力あるでしょ」

「なんだよ、マリちゃんエゴサとかしねえのか？」

「うわっ、ガマさんからエゴサって単語出て来るのすっごい違和感なんですけど……しないよ。アンチに叩かれまくってんの見るのがマジで嫌」

「ありや酷かったなー……でも今はあんまりねえんだよね？ ビンちゃん」

「そうですね。概ね好評ですよ。むしろ、放送が始まった直後は、ソガの性格が軽すぎてヒーロー側に相応しくないとか、最近じゃ、内容はいいけど監督の後書きが煩いとか……そつちが多いくらいかな」

「あー……監督出たがりだからねー」

事ある毎に、モブとしてカメオ出演を企む監督の目立ちたがりは、彼らの中でもちよつとしたご愛敬みたいな物だった。

なんなら、番組最後のまとめコーナーと次回予告を自分でやり出した時は、生暖かい空気が流れたものである。

「あ、でも内容は褒めてんだー。良かったー」

「ガッツ編のラストじゃ、いいねだかここすきだが、ついに四桁越えたって、この前凄く喜んでましたからね、監督」

「そーいや、飲み屋ですげえデカい声で言ってたな……」

「一杯でベロンベロンなっちゃって、めっちゃ煩かったね……」

撮影後の飲み会における、監督の醜態を思い出し、苦笑する一同。

いつだったか、真理子が酒焼けのガラガラ声で撮影に来た日は、隊長を差し置いて凄いい剣幕で怒鳴っていたのにな……

「まあまあ、あの日はノンマルト編の放送日でもありましたから、気が抜けたんでしよう」

「炎上しないか炎上しないかって、毎日ビクビクしてたもんね。つい笑っちゃった。そんなに怖いなら、オリ展開なんてナシにすれば良かったのに」

「炎上だあ？」

「ノンマルト回は話自体が物議を醸すから、前々から腕の見せ所、なんて言われてたんですよ」

「で？」

「悪くない、むしろ好感触でしょう……ホラ」

降谷がスマホの画面を見せると、SNSか何かの画面が開かれている。

【朗報】腹パン同僚実況スレ part 43 【やっぱり転生者】

77 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 20:33:4

2 ID : sNO5VZBJk

ウルトラセブン最高や

86 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 20:36:4

5 ID : BntC5PZEM

▽降伏します

読んで、素で「マジか」って口から出た。うおお…、どう終わるんだろ。

9 3 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 0 2 0 : 3 8 : i  
 8 I D : y E n f w 4 O 2 k  
 あつぶねえ……状況的にノンマルト側の民間人に対して地球防衛軍が虐殺をやりか  
 けたわけなのかこれ

9 6 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 0 2 0 : 4 2 : 5  
 4 I D : z z z / g T e 6 0

> 狭いと言うなら、私が穴熊になれば良いだけのことさ……  
 隊長、今がその時なんですわね……

1 0 5 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 0 2 0 : 4 4 :

2 9 I D : I p H t K x j c w

よかつた……

ソガはちゃんとセブンの味方だったんだ……

1 1 1 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 0 2 0 : 4 7 :

5 8 I D : B f f L K 6 Z b Q



隊長!!

地球のためならどんな個人的汚名も意に介さず、部下を死地に送る事も辞さない彼も、決して出来ない事がある。

部下の尊厳を蔑ろにする事だ

114 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 20 : 49 :

15 ID : jNV6h2USI

いや、ちよつと、待って!ちよつと待とう!

いやキツツイ!なるほどなこう来るのね!

122 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 20 : 52 :

43 ID : woKn+6y85

そうきたか!

たしかにこれなら現人類の進化的な歴史と侵略者によって海底に追いやられたノンマルト両立するわ!

129 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 20 : 54 :

54 ID:4MeKyVMVJ

ヤオ:八百比丘尼?

>キリヤマ:...間違えた、悪魔隊長

間違つてないよw

138:名無しに代わつて警備隊員がお送りします 2000/8/30 20:58:

11 ID:yunRR70QB

:もしかして、この世界の「アトランティス文明」って「ノンマルト」のことを指しているのか?

146:名無しに代わつて警備隊員がお送りします 2000/8/30 21:02:

46 ID:vvWQs3fYf

また何ともめんどくさい歴史なんだなあ。

ノンマルト人の言つてることも間違つてないからややこしいことになるのか。

しかしこの世界どの世界線に繋がってるんだろうか?

151:名無しに代わつて警備隊員がお送りします 2000/8/30 21:05:

51 ID:0UGDwKe79

中々にこの世界線だけとはいえお辛い事情すぎるぞ

153:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 21:10:

03 ID:SypNY0n7U

中の人のソガ憑依にも何か関係してるのかなとか、なんだかんだコンタクト取ろうとしてたんだとか、

色々と疑問も尽きないけども、特にツツコみたいのは…

▽異文明との接触に際し、適任である

やっぱりすでに外交役として目エつけられてるってコレ。

162:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 21:14:

39 ID:crFALsKCN

地球生まれの現人類と侵略者の末裔をこう両立させるとは…よく考えられましたね

:

169:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 21:19:

45 ID:9tK4DSaTv

もしかして人類が愚かしさも素晴らしさも内包している多種多様さはもしかしたら今回のノンマルトの過去みたいに宇宙人の性質によって進化させられてる可能性もあるわけか

177:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 21:22:

19 ID:bt5uYeYlY

あゝ……こりやなんとも……

「ノンマルトこそが先住民で地球人は侵略者の末裔」つてのも

「地球人が地球由来の生命体」であるというのもどっちも正しいのかこれ……

でも「少なくとも今の地球人はかつての侵略者とは無関係に近い」よなあこれ……

……くつそめんどくせえなあ!!

179:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 21:28:

01 ID:UzHCYUtos

そう言えば、いきましたね。人間と猿の精神を入れ換える宇宙人。

184 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 21 : 29 :

57 ID : HhJm g59A o

それはそれとして落とし所が気になるね

194 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 21 : 33 :

22 ID : YUQ6R g43s

一番手っ取り早いのは、クローン技術でボディを用意してワイルド星人の技術で魂を転写し、地球人類として受け入れることでしょうか

197 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 21 : 35 :

49 ID : SU709A M v P

どうすんだこれ決着が難しいぞ

206 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 21 : 38 :

05 ID : HRobBj m o T

白兵戦で負けたの？って勘違いに関してはウルトラシリーズでよくある事すぎてそ  
う思うのも無理は無いわなあ…(ダダ等の等身大で防衛チームになぎ倒された面子)

精神交換か：外見変わらない憑依とか寄生ってウルトラマンZの本編でセレブロが暗躍しまくってたのに一切ウルトラマンとかに気づかれなかったみたいに宇宙の法の抜け穴っぽいんだよなあ（側から見ると勝手にその種族が自滅したようにしか見えな  
い）

この古代の侵略も側から見たらソガが誤解したようにノンマルトが侵略者を白兵戦で返り討ちにしたようにしか見えないうしそりゃ今の今までスルーされる

214：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 21:43:

16 ID：GAP5Gij9f

…、逆行…、転生…、成り代わり…。

ん、これは…、アイデアロール成功したらSAN値チェック振らなきやいけませ  
んね…

待って？

これSAN値チェックするのソガじゃなくてダンだな??

224：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 21:44:

17 ID：ap731/WH+

故郷を追われて体も奪われてと尊厳すら奪われたから強硬派が怒り狂うのは仕方ないけど誰が悪いかと言ったら侵略者達だけど遥か昔の事だからなあ……ソガ隊員の降伏勧告がせめてもの救いですかね。

2 2 8 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 0 2 1 : 4 8 :

0 5 I D : s f K 6 B Q n t t

段々と訳とか聞くと出るわ出るわ

今明かされる衝撃の事実の連続です

2 3 5 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 0 2 1 : 4 9 :

2 2 I D : 8 O z z Y C K d F

∨ 子供相手ですら、2、3人に囲まれただけで

?? 「これこれ子供たち。亀?をいじめるのはよしなさい」

「(心優しいお方……この人なら使者に……) お礼をしたいのでお城へお招きさせて下さい  
!」

こうして「浦島太郎」は誕生したのである!

237 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 21:51:  
38 ID : ONYx / naeJ

しっかし過激派ノンマルトの主張はもはやアイアンキングの不知火一族みたいになってますね。あつちは佐々木守脚本だけど。蘇我って表記なら大化の改新とも繋がるし。

246 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 21:57:  
09 ID : 7mq17IWP4

なるほどなあ。敵対的だった時代の方が生きてるんじゃないやなくて、敵対的だった時代の教育から変わってなかったのか

254 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 22:00:  
22 ID : HsWWW34vt

異形の者を認めない……同じ地球人、いや、この際あえて地上人と言わせていただきますが、同じ地上人ですら肌の色の違いでいざこざが起きているのだからノンマルトなんてなおのこと。

ノンマルトがコミュ障とは言ってたけど、地上人も排他的なのよな。



259 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 22 : 02 :

42 ID : pTEICjJHg

げえっ、自分たちの生殺与奪の権利を丸投げしてよこしやがった!?!これには義勇さんも激おこですよ；

ついででいいから自分たちの一族を滅びないようにしてくれだなんて、悲壮ってレベルじゃない；；

262 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 22 : 07 :

32 ID : 8jQMAvhBG

あのアンヌ隊員の発言をここまで昇華するとは

それはそれとして転生ソガ隊員もまた主人公というわけですね

269 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 22 : 12 :

01 ID : f47TQRxy

確殺の0・4秒で本来のソガ出てきた事思い出しました。

274：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 22:17:  
07 ID:UyjsdHnYH

光る眼の認識とか頑丈な身体とか、怒涛の勢いで伏線が回収されていつている！  
当初の目的果たしたんでお帰りくださいは流石に舐めてんだよな

278：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 22:23:

04 ID:Dsf tKePYf

そりゃ断るわ。

きつと断るわ。

絶対断るわ。

セブンを愛するソガ隊員がそんなところで帰るはずがない！

280：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 22:27:

52 ID:zobQ6LZR

私の寿命を削って精神呼んでまして仮糊付けしてるだけなんです。(分かる)  
寿命が尽きたらアナタ死ぬんですよ。責任持って帰りたいんです。(分かる)

だから本来のソガ隊員に戻ってもらってノンマルトの使者の継続してもらいます(あ

のさあ…)

284 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 22 : 32 :

04 ID : +IkWwf6Vm

・・・ノンマルトの話が終わったら、次は悪夢なんだよな。

そして猿人や偽セブン、そして地球に対しての最大の侵略があるからな。

ノンマルトに関しては悪いけど、ソガさんが最後までセブンを護るために戦うだろうからね。

291 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 22 : 36 :

42 ID : Vrh1+qJsd

確かに元祖ソガ隊員にはブチ切られても可笑しくないんだよなあ…

婚約者の件然り

292 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 22 : 39 :

09 ID : 7mi34nySE

まあ本来のソガさん無断で意識封じられて、どこの馬の骨とも知らんやつに自由にさ

れちやってるからなあ。きちんと地球のために戦ったことは考慮してくれるかもしれないけどw

295：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 22:45:

05 ID：46EBdGxae

銀河連邦より怖いKIRIYAMA隊長w

298：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 22:46:

55 ID：/hdEjB6+

ゲスラめに吹いた、あの子カカオ大好きですからね。

ソガ隊員に怒られたら一緒に謝ろうねはまさに正論すぎて草。

302：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 22:50:

31 ID：ABYlvZ9vt

流石ソガ！

ちよいちよいふざけた態度とりながら主導権をとり、正論と他人には暴論の正論交えて丸め込むのが上手い！

ペガッサ星人も地球に住んでるし地底人やら他の隠れてる人達もいるからノルマン  
ト以外出てけは無理なんだよね

305 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 22 : 54 :  
37 ID : wr7kkTm4K

本来のソガ隊員が人生の中で最も他生物を尊重するようなタイピングを使って転生  
ソガ隊員を引き出せたのは結果的にははいえファインプレーに違いない  
転生ソガ隊員は基本的にはセブンに顔向け出来ない事はしないからね

310 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 22 : 58 :  
20 ID : zLtbZ0Ew1

蒸発闘志で言ってたことをセブンにやってもらえるかもしれないんだな

317 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 23 : 01 :  
20 ID : VYAw9ykr0

この長口上には自分を奮い立たせる面もありそう :

> 次の人生なんて知った事か！ 前世が思い出せないなら、オレからしたら他人じゃ

い！

い。ほんとそれ。前だろうと次だろうと自我を維持できないなら死も消滅も変わりない。

しかも元の世界では死んでるかもしれないとかさあ…

3 2 1 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 0 2 3 : 0 5 :

5 4 I D : D W K W i 7 Z y i

成る程ー

「ウルトラセブン」という存在に己の存在理由を預けられないと

そもそもこっちに來れなかったのね。

でもそればかりの人格だったらノンマルトとも上手く行かなかったのね。

クレージーゴンのところがマジでこの作品でも転機つすな…

3 3 0 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 0 2 3 : 1 0 :

1 8 I D : a p 7 E N F 1 9 X

なによりいい形に着地でできて良かった。

確かにノンマルト側からしたら、ミミー星人は海底のお掃除してくれたわけだから

……うん。

335 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 23 : 13 :

30 ID : Q5 + G / 26 / L

∨ウルトニウムの溜まりすぎ

ノンマルト殲滅が怪獣頻出期の引き金だったとは……

341 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 23 : 16 :

08 ID : 98A0zCxJF

スタッフの腹パンがソガ隊員(おやすみ中)の魂にキマる音が聞こえたぜ……

348 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 23 : 17 :

11 ID : Ec7OTUOmJ

それはそうと、ソガ隊員にリミット付いちゃったかあ……そうかあ……

最終話にかけてどういう風に作用していくのか、楽しみでもあり怖くもある

353 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 23 : 20 :

33 ID:FKWUMCV10

ノンマルトを撃滅しなかった…?…さてはこいつ

中身が別人になっているな…?

(すつとぼけ)(ソガ隊員を見つつ)

362:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 23:24:

46 ID:Q690XV8t7

ソガ隊員がちゃんと不満を聞き出したお陰で聞き取り調査や協力体制を築き上げられるのはセブンの人間評価が上がる上がる

366:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 23:30:

38 ID:h59K6/MzS

ふと考える。

…彼らはどこへ行ってしまったのだろうか。

…もしかして今も、性懲りなく体を渡り歩いているのではなからうか

374:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 23:35:



15 ID:QaKsoSg7b

「なぜこの地球上で、これだけ土地の狭い日本にばかり突出して、怪獣の出現が多いか」

この情報を踏まえ、改めてシンイチ少年の発言を読み直すと：

「困るんだよ。すぐやめないと、大変なことになるよ！」

我々は、「ノンマルトのナワバリを荒らされて困る。やめないとノンマルト過激派がブチギレて地上人と戦争になる」という意味に理解していましたが、実は「ウルトニウムを回収できなくなった結果、ノンマルトにとつて死活問題だけでなく、地中にウルトニウムが貯まりすぎた日本は怪獣無法地帯になってしまう」が正解だったのですね。そりゃ、交渉の余地もない真つ当な警告だけど…省略しすぎだ！分かるわけねーだろ！

380:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 23:39:

56 ID:yh/iz+Mfv

これで一応は平成セブンルートに行ったとしても状態は大分軽くなった…M78スペースルートに言ったら今後30〜40年は地獄のようなスケジュールだな！

382:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 23:41:

10 ID: h w p N q 4 G B Q

いや良い話だったザバンギや海の生き物達が力を合わせてノンマルト達と生活しているという環境が守られる事になって良かった

地上人もノンマルト達を同志として迎え入れる事が出来て本当に良かった今回もウルトラ警備隊の思い切りの良さや義理堅さが発揮されてて

ある意味最終回でも良い気がするけど最終回までまだあるのだからどう料理してくれるのか楽しみだなあ

383:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 23:43:

31 ID: 7 g t M v r T G q

セブン本編でもいろいろと考えさせられるノンマルト回かつ、ソガのこれまでの考え方からして一筋縄ではいかないと思っていたが、まさかまさかのノンマルトどころかスタート部分につながる話だとは思いませんでした……

389:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 23:45:

27 ID: q x D A p Y M m 5

ハラハラライライラモヤモヤさせて後出し情報が重要って所がコミュ障ノルマントラ

しや

399 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 23 : 49 :

56 ID : 8D3V1 / L8b

結局は、愛だったな。いつも交わり合うことがないと思われた2つの道を結びつけたのは、相手の立場を思いやれる慈しみの心であったな。

409 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 23 : 51 :

56 ID : yluOe251p

ハイドラランジャー内にてキリヤマ隊長に食らいついていったソガは過去イチ頑張ったんじゃないかと。なんとしても魚雷攻撃を強行しようとしたあの時の隊長はどんな宇宙人よりも迫力があって恐ろしかったです。敵に回したら絶対ダメな御仁であるというのを再認識させられましたw

415 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 23 : 54 :

22 ID : O30yye+Uj

こつから先は正しく人類が偉大なる一步を踏み出せるかどうかの瀬戸際だ。

もしかしたらメイツ星人のいざこざも解消に向かえるかもしれない。

416：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 23:58:

19 ID:vbccclmNU

扱いの難しそうなノンマルト編を単に作中のひとつのエピソードとして留めることなく番組の根幹に関わる最重要エピソードとして位置づけた所に、スタッフの並々ならぬ熱意というものを感じずにはいられん

420：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/31 0:02:4

6 ID:93kdj5m7L

新石器も、バベルの塔崩壊も、超古代大陸沈没もあいつらの仕事だったのか……

424：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/31 0:06:5

6 ID:U0v9txPD9

エース兄さんの変わらざるの願いを人がノンマルトとの間に出来たら良いなあ……

428：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/31 0:08:3

0 ID:Kkh2xRib /

>>416

ラストで明らかになった本作の始まり……確かにハイドランジャーが沈没する可能性のある行動をして死にかけてたけどもさあ……あれがまるっと伏線とかだれも思わんぜよ!?

436:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/31 0:12:4

3 ID:qR9erm/is

>>317

これ間違ってたらし訳ないんですけど、今回の話で今まで凡人だったソガが超人になつたって事ですかね？

444:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/31 0:17:0

8 ID:CGtSMdMXD

曰く付きのノンマルト回をソガ隊員(の中の人)野朗ぶっ殺してやる!って気持ちと平成セブンまで知ってる身としてウルトラ警備隊7人目の隊員に絶対責任を押し付けないぞという気持ち両方の視点から考えてて屁理屈混じりではあるけど面白い決着の

仕方をしたよなあと思った

448：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/31 0:21:3

3 ID：HTYACHtO

>>436

おい待てい、ソガは人間だゾ

なおメンタル

455：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/31 0:26:5

4 ID：WPHYdTlp

メンタル鬼殺隊な人類に引っ張られてソガ隊員もすっかりメンタル鬼殺隊になった  
もんだな

もしくは無免ライダー

465：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/31 0:28:3

2 ID：ssvrbs23

>メンタル鬼殺隊な人類に引っ張られてソガ隊員もすっかりメンタル鬼殺隊になっ

たもんだな

セブンガチ勢を呼んだんだからそりゃあセブン限界オタクムーブするよなあ!?

473:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/31 0:31:i

8 ID:jFctHvzvO

>>448

いや、テペト回でニーチェ擦ってたじゃん？

生まれ変わりとか否定して、現在の生に意味を見出すのって、ニーチェ的な超人の定義じゃね？ってなった。

480:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/31 0:34:i

1 ID:USiydaqTG

>>473

脚本の人そこまで考えてないと思うよ

481:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/31 0:38:5

8 ID:wkxw/lhPp

&gt;&gt;473

&gt;&gt;480

サエコさんの言葉が気になって調べたワイ、ニーチェじゃない哲学者出てきて無事死亡

なお、さらに調べていったら舞台がボート上だった事にビビった模様。

484・名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/31 0:40:2

7 ID: B5r0WmNt3

&gt;&gt;481

分かる、俺もそれで調べてたから、今回で「ん？まさか」ってなったわ

490・名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/31 0:41:5

7 ID: FYyXC38/2

見て来た。ボートは人生や未来の暗喩って・・・コト・・・!?

この番組のスタッフこういうことするから、案外アリかもな

496・名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/31 0:45:4



3 ID:46Qyfyf5o5

今回もアンノンの会話伏線だったしな

モスキートニキ大勝利じゃん

506:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/31 0:47:5

0 ID:LipMLBIhE

>モスキートニキ大勝利じゃん

なんそれ

509:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/31 0:48:5

1 ID:bNlypsZF6

まだ、ソガの中身が違うってのが確定してない時期の考察スレで

>見直してて調べてみて気づいたんですけど、モスキート音が発見というか使用され始めたのって2005年からなんですな。

って言った奴がいて、やつはこいつ未来人なのでは?って説が濃厚になった。

実際はさらにもう一段回あったわけだが

5 1 1 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 1 0 : 5 1 : 5  
 4 I D : O B A k 9 t b b A

相手がフルハシ隊員じゃなかったら再走確定なとんでもガバじゃねえか w w

5 1 7 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 1 0 : 5 5 : 4

4 I D : 2 P x U D v z R a

隠す気なくて草

5 2 1 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 1 1 : 0 1 : 1

0 I D : G F r G G Z y r i

じゃあ今話でやっとキリヤマ隊長達みたいな精神的超人になったわけか

5 2 7 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 1 1 : 0 5 : 5

7 I D : 6 O o C v 2 8 8 /

【朗報】ソガ覚醒

5 3 1 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 1 1 : 1 0 : 5

1 ID: Win6refe

なお覚醒しても、やつてる事は詐欺師の手口な模様

勢いで煙に巻く三段論法はやめいww

533:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/31 1:14:5

9 ID: BfJrEIL04

>見返して気が付きましたけど、後半に近づくにつれて明らかにソガ隊員が関西弁を出す頻度が上がり(『ソガ隊員』を取り繕えなくなってきた)、言動が殺伐としてきたり(オサム君へのあたりとか、宇宙人への無警告爆撃とか)、逆に過度にテンション上がりすぎたり(今回とか今回とか今回とか)してて、かなり精神的にすり減って躁鬱状態になつてますねえ……

よもや本当に保護ゲージがすり減ってたとは、この海のリハク(ry

538:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/31 1:19:2

4 ID: hTeG3ot7

この番組のスタッフ、こういうイースターエッグ的な要素ボロボロぶち込んでくるからようやるわ

5 4 3 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 1 1 : 2 1 : 1

2 ID : U r v u Q O U h P

>裏設定の数々

見返してみると、結構前のほうから節々でそれっぽい下りがあるのに改めてドン引き  
いや、本当に…

5 5 0 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 1 1 : 2 3 : 3

6 ID : k v N 4 L I J C f

というか、ぶち込む方もぶち込む方だが、それを拾って来る視聴者もたいがい定期

5 5 1 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 1 1 : 2 6 : 1

6 ID : e k b z x F X + q

いつも考察班の洞察力がヤベえ

解説助かる。

5 5 8 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 1 1 : 2 8 : 3

2 ID: J d v U m 4 E A 8

今回のウルトニウム云々って、どうせ帰マン序盤の怪獣連打に絡めてるんだろ？  
 ベムスター来るまで、地底怪獣とか古代怪獣ばかりだしな

5 6 2 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 1 1 : 3 4 : 0

3 ID: + F b g f D Y E 9

調べたら30話までずつと宇宙人出ないのか……

星人ばっかのセブンの逆かな？

5 7 2 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 1 1 : 3 6 : 2

5 ID: Y I y Y I E f v +

気になってボスタング回見て来たワイ、案の定ヤマオカ長官(の役者)が巡視艇の船  
 長やってて変な笑い声でた

宇宙からの侵略を、始めて真正面からの武力衝突で撃退した実績買われて防衛軍に呼  
 ばれたのかなとか考えると妄想捗る

5 8 1 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 1 1 : 3 7 : 3

9 ID:OXj24gGO/  
 監督がSNSで呟いてたけど、DMでそういう細かい設定拾うファンメモめっちゃ来るらしいね。

582:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/31 1:40:5

0 ID:rgqBTQkrR

スタッフさん、そしてソガさん。私が思うところを全て代弁していただき、ありがとうございました。

587:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/31 1:46:2

8 ID:fdO7juwFO

てつきりこれまでのカンジから、ノンマルト壊滅させると思ってただけに予想外。

594:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/31 1:49:0

1 ID:bistprzmM

「海も！空も！地上も！宇宙も！全て我々人間のモノだ！」

604 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 31 1 : 5 1 : 0

7 ID : w S n R m c N O t

クソデカ悪魔隊長やめい w w

608 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 31 1 : 5 4 : 5

6 ID : Z / o O L 2 t y v

>>>604

ソガ「御供します！」

こうなるかと

618 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 31 1 : 5 7 : 1

0 ID : q u K F N F n K d

>>>604

ぶつちやけ、マヤに初手爆撃かましてた頃なら、普通に有り得たかもしれない未来よな  
 ダークとフルハシ居なかつたらと思うと……

621 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 31 2 : 0 2 : 3

5 ID: UIBu/bIt1

「ダン！お前の悩みのタネは、俺がきれいさっぱり取り除いておいたぜ！

なんだその顔は？　ダン、どこ行くんだよ？

ダン？　ダン！　ダァ~~ア~~~~ア~~~~ア~~~~ア~~~~ア~~~~ア~~~~ア~~ン→！！」

6 26:名無しに代わって警備隊員がお送りします　2000/8/31　2:06:4

4 ID:sgzSNlflT

>>>621

人類に呆れて宇宙に帰ってくセブンは草

6 30:名無しに代わって警備隊員がお送りします　2000/8/31　2:12:1

6 ID:YHCOPe8bW

そうならなくてホント良かった。

マジで最終回かと思ったからな

ウルトラセブン見たことなかったけど、めっちゃくちゃ原作が気になる。むしろ原作はどうなってるの??



638:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/31 2:16:4

2 ID:msLykzf0H

私もセブンを見られていないのですがそれでも面白さが伝わってきます。影ながら応援しています。史上最大の侵略も期待しています！

639:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/31 2:16:4

5 ID:sNO5VZBJk

次も楽しみや

「嬉しいねえ……こうまで言ってもらえりや、役者冥利につきるってもんだぜ……やつてて良かった!」

「ソガ隊員の事ばかりじゃん」

「そりやね。ぼくらの活躍についての感想なら、ガッツ回まで遡ったらいっぱい出て来るよ。見る?」

「あらそう? ……ならいいや」

真理子が本当に満足そうに笑みを浮かべたので、降谷は大人しくスマホを仕舞うことにした。

ふと横を窺えば、毒蝦蟇の目が少しだけ潤んでいるようにも見える。

自身の出演作がこうまで好意的に見られていると知って、感激したのだろう。降谷もその気持ちはよく分かるので、あえてからかったりはしない。

なにかあっても、彼にアンチスレだけは見せないようにしよう……と、降谷が決心したところで、スタジオに号令がかかった。

「休憩終わりー！」

「はい、じゃあ次のシーン撮りまーす！」

## 第四壁面の空夢（Ⅱ）

：スコープオン号・操縦室

ダン「スコープオン号、大気圏脱出。予定のコースに乗りました。各計器異常なし。ロケットエンジン全開」

キリヤマ「これより、計器航行に移る。切り替えてくれ」

ソガ「了解、計器航行に切り替えました」

キリヤマ「よし、ご苦労……。では、これから睡眠テストに移る。あとは一切、電子計算機に任せろ。安心してぐっすり眠るんだ」

ダンとソガ、座席を倒し、コールドスリープの準備に入る

ソガが何気なく横を向く。満面の笑みを浮かべるダン

ソガ「おいダン、やけにウキウキしてるじゃないか」

ダン「え？ ……そうかもしれませんね。以前、僕の言った事を覚えていますか？」

ソガ、首を捻り困惑顔を浮かべる

ダン「いつか地球代表として宇宙に行くなら、一緒にいってくれますかと……それを、



ダン「ええ。僕は……貴方のような友人に会えて、本当に良かったと、そう思っているんですよ、ソガ隊員」

ソガ「……よせやい」

ソガ、照れ隠しに顔を背ける（つまり画面側を向く）

ソガ「……俺の方こそ、お前という存在に出会えた事が、なにより幸せだと思ってる。生きてて良かったってな……本当さ」

目を瞑りながら呟くソガ。（ごく小さい声で）

ダンの聴力なら聞こえる事を織り込み済み

ダン、弾かれたように体を起こすが、ソガの背中しか見えない（ピントはソガに合わせ、奥のダンの表情はぼやかす）

ソガ「あーあ、眠くて妙な事言っちゃったかもしれん……このまま夜更かししたら寝坊しちまう。ダン、さっさと寝ようぜ」

ダン「はい」

ソガ「いい夢見ろよ」

ダン「おやすみなさい、ソガ隊員」

「ねえ……アレ何やってるの?」

スタジオの端で、演者用の椅子に座っていた真理子が、隣で次の台本を読み込んでいた降谷の袖を引っ張る。

彼が視線を上げると、グリーンバックの前で、主役二人がキョロキョロと辺りに視線をやりながら、右往左往していた。

「真理子ちゃん……今回の話、第四惑星での背景だけは原作の映像をそのまま使うって、監督が言ってたじゃないか。二人だけを後から合成するんだよ」

今はおおかた、コールドスリープから目覚めた二人が、ロケットから降りて、現在地を特定するために、作りかけの埋め立て地を彷徨うシーンだろう。

今回の舞台である第四惑星は、ロボット人間に支配された、地球そっくりの惑星だが、監督はあえて放映当時のまま使う事で、なんとも言えない違和感を演出する気なのだろうか。

造成中のぬかるんだ宅地や、未舗装の道路なんて、今時じゃ探す方が大変だ。CG合成の発達した現代だからこそできる手法を使って、リメイクならではのファンサービスを模索するという、本作の方針には合致している。

でも、そこまでして原画を使う必要があるかと言えば……監督の拘りというしかない。降谷には、イマイチ分からないが。

「えっ!? じゃあロケしないの?」

「……しないよ。というか、僕達の出番はもう無いよ」

「……ウツソでしょ?」

目をまん丸にして驚く真理子を見て、それはこちらの台詞だよ、という言葉をぐっと飲み込んだ。

「スコープオン号が誘導不能に陥って、基地が大慌てになるシーンは、もう午前中に取りたくないか。この後は二人が突撃張りだよ。本当に台本読んでないんだね……」

「なーんだ。じゃあ今日の打ち上げ予約しとくね。いつものとこでいい?」

「気が早いなあ……この前の喫茶店じゃダメなのかい? ガマさんも、あそこのハヤシライスが美味しいって……」

「えー……あそこも良かったけど……やっぱ私、お酒呑みたいのよねー」

相変わらずの酒豪っぷりに、溜息しか出ない。まったくどんな性能の肝臓を搭載してるんだ。

降谷に彼女の相手は荷が重い。毒蝦蟇に早く帰ってきてくれと願うしかなかった。このスタジオは喫煙所が遠すぎる。

「たまにはビン君のリクエスト無いの? あっちの二人もあんまり拘りないしさー」

「じゃあ……怪獣酒場」

「おっけー」

脚を組んだ真理子が、スマホを取り出すのを横目に見ながら、降谷は撮影風景に視線を戻す。

丁度ソガが駆け出す所で、カッツの声がかかった。

：第四惑星・住宅街

ダン「ソガ隊員、ここはいったいどこなんでしょう。スコープオン号が帰ってきたなら、地球のハズでは？」

基地への連絡が取れず、妙に余所余所しい住民達の態度に、不安げな顔をするダンソガ「分からんなあ」

ソガは、原作知識でここが地球ではなく、第四惑星であると知っているのに、しばらく経っても、余裕が漂う（にこやかに、のんびりと演じて）

「ダン、ソガはソガが慌てていないので、まずまず不思議げに彼の背中を見つめること」

二人の目の前で、自転車に乗っている少年がダンプカーに撥ねられかけて、転倒する。

ソガ「坊や、しつかりしろ。なんて酷えクルマだ！」

ダン「大丈夫かい？」



少年「ありがとう。オジサンたち、どこから来たの？」

ソガ「地球防衛軍さ。富士山の麓」

要領を得ない少年に、ソガは胸元のTDFマークを指差しながら聞く

ソガ「坊や、このマーク、知らないの？」

少年、首を横に振る

ソガ（だよな、知ってる）

ソガ「坊や、ここはいつたいたいどこなんだ。日本のどの辺り……？」

少年「ニッポン……？」

ジープが走ってきて、軍服姿の男達が降りる。

少年「オジサン達逃げて！」

少年を無視して、今起こったことを説明するソガ。

ソガ「トラックにはねられたんですよ。悪質運転だ！」

ダン「確かに車が悪かった。手配して逮捕すべきです」

二人の証言を聞く軍服男は、顎を噛み合わせて不快な音を出しつつ、眉をあげる

謎の軍服男「警察にそんな暇はない！ 人間がよければ事故は起こらずに済んだ。車

は避けようにも避ける場所がない！」

軍服男は、ピシピシと鞭を手の平で弄びながら、聞く耳を持たない

謎の軍服男「したがって、事故を起こした人間が悪い！」

お前達を逮捕する！」

「しかし、分からんねえ……」

「んー？ ……何が？」

毒蝦蟇が腕を組んで呻ると、手鏡を覗き込んだまま、真理子が生返事を返した。

「この第四惑星つてのは、結局何なんだ？ 地球じゃねえなら、なんで日本語使ってるんだよ」

「あーたしかにー。私も思ったそれー」

リップクリームのよく馴染んだ唇からも、同意の声漏れる。

毒蝦蟇は、卓上モニターに映る合成後の映像に、カタカナで書かれた『ガソリン』の文字を見つけ、違和感を抱いたらしい。

「ああ……それは……いずれ地球人を連行した時の為に、それぞれの人種に合わせて町並みを揃えてあるという設定らしいですよ。ダンとソガが見たのは、日本人用の居住区だった……という事にしたんですって」

「へええ……ずいぶん用意周到なんだな……」

「そりゃそうですよ、なんせ惑星全体が、元ナツクル星人の捕虜収容所ですからね」

事も無げに降谷がそう答えれば、毒蝦蟇がギョっとして振り返る。

彼もそこまで熱心に台本を隅々まで熟読するタイプではないものの、話の流れくらいは把握していた。いかに自身の科白が無い場面であろうとも、目を通すくらいはするものだ。

しかし、そんな毒蝦蟇でも知らない情報が、仲間の口からすんなり出て来たものだから、ちよつとばかり驚いてしまったのである。

「……そんなの何処に書いてあるんだよ？ 見落としたかな……？」

「いえ、そこには書いてませんが『ひとりぼっちの異邦人』の台本の隅にサラッと書いてありましたよ」

「いや、異邦人って……なんだってそんな前の回に!？」

「あの回に出て来たプロテ星人は、人工生命の試作品だったでしょう？ バイオテクノロジーでのアプローチが失敗したから、機械工学へシフトした結果が、ロボット長官である……って注釈がありました。つまり第四つてのは単に収容所の番号で、ここにいる人間達は、連れ去られたノンマルトやペダン星人と言ったヒューマノイド……という事らしいですよ？」

「すごい。ビン君オツタクう!」

真理子の賞讃に、降谷が苦い顔をする。確かに数ヶ月も前にやった撮影の、そんな細かい部分まで記憶しているのは、少々偏執的かもしれないと降谷自身も自覚しているの

だろうが、よりによって彼女には言われたくない……というのが本音だろう。

「マアマアよしなよ、この場でいっちばんオタクなのが、あの監督なのは明白だろ？ 最初っからちゃんと書いとけよそんなもん、つて話さ」

「話のテンポを考慮すると、泣く泣く省かざるを得なかつた裏設定とか沢山あるみたいでしたからね。この前ネタ帳見せて貰いましたけど、あれは読む気がしませんでした」

「省いてあれなのかよ……」

呆れたように苦笑いする毒蝦蟇の後ろでは、トラックの荷台で運ばれる主役二人の姿が映し出されていた。

：第四惑星・総合センター

ダンとソガは巨大なビルに連行され、内部を軍服男に案内される。

ロボット将軍「我が国の誇る、総合センターだ。司法、立法、行政。その他学校、病院、新聞、テレビ。一切の機関が、一箇所に総括されている」

ロボット将軍、鞭をしならせながら得意げ

顎からは摩耗した歯車とクランクの噛み合う音が、舌で飴玉でも転がすような異音を奏でる

(SE挿入) コカツ、コロツ。(クルミの殻を擦り合わせて代用)

途中のテレビスタジオではドラマの撮影が行われている

（SE）ダダダダダ！

銃撃戦シーンなのか、主役のマシンガンが連射され、役者がバタバタと倒れて動かなくなる

実は第四惑星では、リアルさを追求して、人間のエキストラと実弾が使用されている

つまり、彼らは本当に死んでいる

ソガ「見ろよ、やっぱり日本だよ」

ソガは当然知っているが、展開上しかたなく知らんぶりせざるを得ないので、顔が引き攣っている

ダン、首をかしげる

：総合センター・長官室

ロボット将軍「長官に、逮捕してきたと伝えてくれ」

謎の女（アリー）「はい」

将軍の部屋も、奥の長官室も、駄々広い部屋の真ん中に、ポツンと執務机が置かれ

ている

（かつては將軍室には沢山の人員が詰めており、長官室はサーバルームだったが、全ての機能がロボット人間達にそれぞれ集約された為に、不要となった。がらんだ部の部屋が彼らの性能の暗喩である）

ロボット長官「遠路はるばるようこそ……お前たちが来るのを首を長くして待っていたんだ」

長官、スコープオン号を遠隔操縦して二人をこの星へ拉致した事を明かす

ロボット長官「ここは、地球から約120万億キロ離れた、第四惑星だ」

（基本的に2進数を下地にしているので、単位表記も地球と少し違う）

おもむろに目元の皮膚を外す長官。

剥き出しの眼球の周囲では、無数の歯車が規則正しく回っている

ロボット長官「この惑星も、昔は人間が支配していたのだ。ワシの記憶装置によると、えーつと……あれは二千年も前のことだ……」

秘書のアリーが、長官の後頭部を開き、油を差す

啞然とするダンとソガ

長官「人間は、我々ロボットを生み出してからというものの、すっかり怠け者になってしまつて……つまり、やる事がなくなつたわけさ。そのうち、ロボットに取って代わ

られたいうわけだ……フハツハツハツハ！」

秘書のアリーがコーヒーを入れる。

長官、一口、飲む。

長官「ぬるい！ それに砂糖も多い！」

立ち上がり、アリーに平手打ちを何度も食らわすロボット長官。

その後ろで、平然と長官の飲み残したコーヒーを旨そうに啜るソガ

ダンはオロオロする

アリー「すみません。データ通りにやっただけですけど、以後気を付けます」

長官「どうも人間は、物覚えが悪くてイカン。コーヒーの味が、毎日違うんだからなあ」

ロボット長官、呆れ顔

すかさずソガ、空のカップを伏せて置きながら一言

ソガ「そりやそうでしょうねえ。気温や湿度も毎日違うんだから、レシピ通りに作つたら、毎日違う味になりますよ……いや、中々うまいコーヒーでした。ご馳走さま」

笑顔でうんうん頷きながら

長官「なんだと？」

長官、髭をピクピクさせる

ダン「そうだ、彼女に謝るべきだ」

ソガ「まあまあ、よせよダン。賢い長官様がそんなの気付かない訳ないじゃないか。秘書さんが自分で気付くか試していたのさ。ねえ？　そうでしょう？　でもね、人間つてのは仰る通り馬鹿なもんでして、教えて貰わなけりや気付けないもんなんですよお……勘弁してあげてくれませんかねえ」

ソガ、えへえへ笑いながらゴマをする

信じられないモノを見た顔のダン

満更でも無い長官

三者三様

長官「そちらのキミは、なかなか立場を弁えているな」

長官室を出る一行。

ドアの外へ控えていたアリーが、最後尾のダンが持つヘルメットの中へ、メモをそつと投げる。

メモ『あなたたちも殺される。地球が危ない』

ダン（地球が危ない……どういう意味だろうか……？）



7 7 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 15 : 0  
 7 ID : H / C O C h b F 8

途中から妙に画質荒いと思ったら、昭和当時の映像なのかコレ

7 9 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 15 : 0  
 8 ID : Z 2 n F b i 6 B 1

今回はずいぶん思い切ったな、制作陣

8 1 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 15 : 1  
 1 ID : a G Z 1 W V 5 x V

実相寺回という説得力よ

8 3 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 15 : 1  
 3 ID : A A A b f p f u /

もしかしたらやってくれるかなと期待してたが、ロボット長官もちゃんとプロテ回の  
 あの人なんだな

配役分かってんねえ！

84：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:15:1

6 ID：56dF42dD5

この俳優さん、爽やかなイメージばかりあつたけど、こんな演技もできるんだね  
知的で紳士的だけど、人間を見下してるのがよく分かる

85：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:15:2

0 ID：jwMF90mkp

部屋出た後の、人間処刑場のシーンやばない？

まさにコレが生きがいです、と言わんばかりの満面の笑みよ

めっちゃめっちゃ腹立つ

87：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:15:2

2 ID：AodHXcgSJ

>>>85

分かる。

机に座ってる時の笑い方は、なんか張り付いてるといふか、すげえ人工的なのに、人間を処刑してる時だけやたらイキイキしてんの伝わる。

所々で見せる、異質さといふかの塩梅が絶妙に上手い。

流石はベテラン俳優。

8 8 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 15 : 2

7 ID : sqwD a P 7 Q a

ソガの皮肉がまるで伝わってない所で、「あ、コイツ本当にロボットなんだな」って分かって、ゾツとした。

思考のズレといふかなんといふか

9 0 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 15 : 3

2 ID : D R E k N z Y N n

メインキャストは勿論の事、今作はキャストイングがどれもハマリ役で好き

9 2 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 15 : 3

7 ID : o 4 n I R l u 2 2

人間の処刑が、まるで工業製品の流れ作業みたいになってんのも、それをロボットが娯楽にしてるってのも、めっちゃ皮肉効いてんね

▽人間もロボットらしく生きるべきだ、と主張する連中でね

▽A級の政治犯だ

ロボットらしく生きるといふパワーワードよ

94：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:15:4

3 ID：oQSkXceQh

こうして見ると、ダン役の彼も、序盤の頃と比べたら全然違うね。

段々と演技の硬さが取れてきたのが、まるでセブンが地球に馴れてきた感の演出かと思える。

今じゃ表情だけの芝居まで出来るようになって……

96：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:15:4

7 ID：DSOpOjTRY

確かに今思えば2、3話辺りのモノログ部分とか、すげえ辿々しかったわ

あれがまだまだ頑張って人間のフリしてた頃と考えると、急にセブン可愛いなww

98 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 15 : 5  
 2 ID : i H k i h X 6 5 I

このコンビになると大抵、喋りまくるソガに、ダンが相づち打っていく流れになるけど、ダンの表情はころころ変わるから微笑ましくて好き

100 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 15 :

56 ID : h c m A W 5 h q M

アンヌという時とはまた違った笑顔を見せるよな。

新人なのに、もうそこらへん使い分けできてんの素直にスゴいわ。

101 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 15 :

58 ID : z 3 X L t E U B A

俺も学生時代にダンみたいな友達欲しかった

そしたら、こうはなあって無かったやろなあって……

102 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 16 :

04 ID:V4sqE/fhC

>>101

( ; ; ; ; ) ブワッ

103:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:16:

08 ID:yCXY4rocr

>>101

おまおれ

ソガみたいな奴ならいたんだがなあ……

105:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:16:

11 ID:ppMwb9EPp

クラスにソガいるとか裏山

絶対おもしろい

106:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:16:

16 ID:STLBBncvj

>>105

本当にそうか？

今までの言動もう一回思い出してみ？

108 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 16 :

21 ID : v Z w t r z e J R

面白いとか以前にクソほどうるさそう

109 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 16 :

25 ID : T B x j R W F 4 O

ソガの中身はおまいら定期

111 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 16 :

27 ID : u 3 R Z G 8 d x m

今作ソガは100倍タチ悪くしたテッペイってそれ一

113 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 16 :

33 ID: tuDwMvbNd

実際、憑依した現代人だから、キリヤマ隊長とかアマギに比べたらよっぽど身近ではある

良くも悪くも人間らしいというか

界限を探せばワンチャンいそうなライン

114:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:16:

37 ID: X2s5txG/1

>>113

本当にそうか?

今までの言動もう一回思い出してみ?

115:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:16:

40 ID: pGv/D54z0

(いくら筋金入りのファンとはいえ、侵略宇宙人や怪獣と白兵戦は) いやーキツいです

117:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:16:



45 ID:91Mld1/I5

隣でソガがなんか屁理屈捏ね出したら、ダンみたいにニコニコ聞いてられる自信ないわ。

「うるせえ！」っておもつくそビンタかましてしまいそう。

118:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:16:

51 ID:+rMIUQu

&gt;&gt;117

お前のビンタよりソガがウルトラガン抜く方が速いゾ

119:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:16:

52 ID:efluanc7B

転生ソガのここがスゴい!

・原作知識で敵の先手が取れる

・→を活かせる口八丁

・肉体スペックはほぼソガ本人

・宇宙人相手に啖呵切るクソ度胸

・根はなんだかんだお人好し

転生ソガのここがダメ!

・中身が俺ら

1 2 1 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 0 1 9 : 1 6 :

5 6 I D : B c 2 o + b P 9 N

>>>119

っ悲鳴が本物より五月蠅い

も追加で

1 2 3 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 0 1 9 : 1 6 :

5 8 I D : H 8 s 3 r W S R G

原作見に行ったら、ソガが叫んでるシーン思った以上に少なすぎてワロタ

アイツどんだけびびってんだよ

二回に一回くらいの頻度で叫んでるぞ

1 2 4 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 0 1 9 : 1 7 :

02 ID:oyU2FVTC3

動画サイトに、悲鳴シーンの纏め動画が上がってんのは流石に草を禁じ得ない  
無いなら無いで、ちよつぱり寂しいのは内緒だぞ

125:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:17:

07 ID:Yabe+W5kF

今日の話はソガが大人しい代わりに、軍服のロボット人間の音が不快すぎる  
なにあれ、ずっと口の中で飴玉でも転がしてんの？

頭おかしなるわ

126:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:17:

13 ID:U83H00G98

ロボット君、迫真のASMR

128:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:17:

14 ID:04i0D4qTm

ゼロワンみたいな美少女アンドロイドならまだしも、軍服のおっさんロボの咀嚼音と

か誰得だよ

1 2 9 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 0 1 9 : 1 7 :

1 7 I D : s N o v / s I I Y

原作でもあの音出してたし、駆動音かなんかじゃね？

ロボット人間特有の音みたいな

1 3 1 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 0 1 9 : 1 7 :

2 3 I D : T o n D E Y V m r

昼休みの休憩所で、ずっとクチャクチャしてるおっさんおるやろ？

あれや

1 3 2 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 0 1 9 : 1 7 :

2 8 I D : K n 2 X B T 5 a s

俺にはダンのように純粹な友達もいなければ

ソガのように愉快なクラスメートもいなかった！

ついでにアンヌみたいな美人にも縁が無い！

したがって、お前達をタイホする！  
カリコロカリコロ：：

1 3 4 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 0 1 9 : : 1 7 :

3 3 I D : E 6 z S m U / N A

>>> 1 3 2

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!

1 3 5 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 0 1 9 : : 1 7 :

3 6 I D : K N W d + O d u o

>>> 1 3 2

三番目が本音だろ w w

## 第四壁面の空夢（Ⅲ）

：総合センター・コンピュータールーム

長官「ここが、わが第四惑星の頭脳だ。政策方針からロボット市民20万の健康管理まで、すべてここから弾き出されるわけだ。むこう500年間の、あらゆる方面のデータが出されておる」

ダン「我々をこの惑星に誘導した目的は何ですか？」

長官「コンピューターの計算によれば、我が第四惑星の人間たちは、むこう500年間のうちに滅亡する運命にある。ところが人間は、我が国にとっては、なくてはならぬエネルギー源だ」

ダン「そこで僕たちを……」

ソガ「そりゃ、あの勢いで消費すればね（小声）」

長官「そのとおり。お前たち地球人は立派なエネルギー源になれることが判った。地球を植民地にすれば、30億の人間が確保できる計算だ」

ソガ「どうやって、地球を植民地にするんです？」

長官「我が国の侵略部隊が、間もなく地球に向うことになっている」

ソガ「なるほどねえ、何から何まで、計算通りというわけか」

ソガ、感心した様子

長官「コンピ्यूターは間違いをしない。そして、いつも冷静だ」

將軍「コカツ、コロツ……」

ソガ、いかにも不思議だ、という風に首を傾げる

ソガ「しかし本当ですかね？ どうにも信じられない」

怪訝なロボット人間たち

ソガ「私の知っている地球のコンピ्यूターは、おたくらのように勤勉ではなくてね。

仕事は人間に押しつけて、チェスや将棋を打っていたかと思えば、歌を歌ったり、絵を描いたりと遊び惚けてばかりいる。冷静で間違いを犯さないなんて……どうにも」

長官「当然だ。地球の遅れた科学力と同じにされては困る」

失笑する長官

ソガ「ここは一つ、コンピ्यूターの性能が、どれくらい違うのか気になるなあ……問題を出しても？」

長官「君がかね？」

いかにも小馬鹿にした様子の長官

ソガ「長旅の暇潰しになるかと思って、アマギ隊員に計算問題をいくつか見繕って貰ったんですが……これが中々難しくて……」

長官「人間が考えたような問題が、コンピュータに解けない訳がない。5秒もかからんよ」

ソガ「はあ……じゃあ失礼して……」

ソガ、紙片を広げて画像解析のカメラに読み込ませる

その途端

コンピュータのピストン動作が急にゆっくりになり、数秒後には、火花を散らして煙を吐き出す巨大サーバ

啞然とする長官

ダン「ソガ隊員！ いったい何を讀ませたんです！」

ソガ「何って、ミレニアム懸賞問題とかを渡したただけだが？ ……あれ、俺、また何かやっちゃいました？」

長官「なんということをしてくれたのだ！」

怒りの形相で振り返るロボット長官

將軍が鞭を振り上げるが、ソガのウルトラガンによって頭部と腕部を吹き飛ばされる



ダン、阿吽の呼吸で長官に飛びつき、取り押さえる

ソガ「いいぞ！ そのまま押さえてろ！」

ソガ、長官のこめかみに手を伸ばす

長官「やめろ！ なにをする！」

目元の人工皮膚が剥がされ、頭部の機構が露わになる長官

ソガ「てめえのツラ見てるとな、嫌な野郎を思い出して仕方ないのさ！ これでもくらえ！」

左の手袋をひっくり返すと、中から砂利が降ってくる（自転車少年を助け起こす時に詰めてあった）

(SE) ガチン！

歯車に砂が噛み込んだ長官、腕を伸ばしたまま硬直

ソガ「これがホントのサンドマンだ。電気羊でも数えてろ！」

ソガ、剥き出しの顔面に向かって、ぺつと唾を吐く

ダン「完全に破壊しておかなくて良いんですか？」

ダン、床の長官を指差して質問

ソガ「こうしときゃ、修理の間は指揮系統がストップするかもしれない？ あそこまでブツ壊しちゃうと、新しくすげ替えた方が効率的だとか判断しかねんからな、この

星。その分時間が稼げるといわけよ」

ダン「確かに！」

ソガ「それよりもダン。これ持つてるだろ？」

ソガ、ポーチから小さなカプセルを取り出しニヤリ

頷き、同じくニヤリとするダン

サーバーに向かって、いつもの小型爆弾をバラ撒く二人

(SE) ジリリリリリ!

火災警報とスプリンクラーの作動する中、大笑いしながら脱出するダン、ソガ

137:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:17:

39 ID:6a8nYlb86

コウイwwツwwやりやがったww

138:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:17:

44 ID:S8odN9tce

あーもうメチャクチャだよ

140 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 17 :

50 ID : 7G2RM R17x

警備 ガバガバ

141 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 17 :

55 ID : sa5XB Xz3K

二人が大人しくしてるから、てつきり武器の類は取り上げられてるのかと思つてたら、全然そんな事なくて草

いや、完全武装の兵士を拘束もせずに重要施設歩かせちやイカンでしょww

馬鹿かよww

ボデイチエックくらいしろww

143 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 18 :

00 ID : ReDCeULUM

【悲報】工場勤務設備課ワイ

あまりの所業に腹痛

145：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000／8／30 19：18：

02 ID：R7UO28kVL

ワイ、システムエンジニア

一瞬失神してた

147：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000／8／30 19：18：

07 ID：oyrjeZVWN

そんなに？

149：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000／8／30 19：18：

09 ID：cfOyVXR M

그리스面に砂はヤバイ

俺が長官の修理担当だったら多分憤死する

150：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000／8／30 19：18：

15 ID：cKsKfUmW

サーバルームは火気厳禁だっつってんだろ！！！

隠れてタバコ吸ってたハゲをしばき回した俺は悪くない  
未だに絶許

151 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 18 :

18 ID : FuTGEbm31

監督は技術者ニキ達に深刻なダメージを与えた

訴訟も辞さない

153 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 18 :

23 ID : x5m1051B5

待てよ？

確かこの星、全部をロボットに任せて成り代わられたんだよな？

んでロボット支配が何年だっけ？

ここの人間って武器使えるのか？

……というか今までに人間が武器持って暴れた事例なんてあるのか？

154 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 18 :

27 ID : m m t G 0 + 5 i X  
あーあー！

サンプルがゼロだから、そもそも危ないって発想がないのか！

確かにインプットされてない情報を想定しろと言われてもなあ……

いやポンコツすぎるでしょ

155 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 18 :

29 ID : D W Y 2 e 3 8 D 8

でも、思想犯すら根刈りされてるなら、この星に反逆者なんてもういないかもな

存在しない脅威に対するセキュリティは無駄だと判断して省きそう

明らかにロスだし

156 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 18 :

31 ID : y f 5 j 6 c e 8 h

市民、幸福ですか？

158 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 18 :

36 ID: 8aU/9BeZw

まあ二千年もロボット社会が継続されてるなら、被支配層も、反逆の方法なんか忘れてたっておかしくない

そして支配者側もそれに馴れきってシステムが順応してしまつたと

そこにソガを招き入れたのか……

うーんこの

160:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:18:

40 ID: JHlzukhr

押すなって言われたボタン押したくなる地球人、野蛮すぎるでしょ

やっぱ滅ぼさなきゃ(使命感)

162:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:18:

45 ID: wvHSCngda

これは想定外すぎてボツ立ちするのも致し方なし

原作時点でも、長官達がよそ見してる間に逃げるし、その後のシーンで武器も使つてるから、ガバ警備はある意味原作準拠

逃げてどうせ捕まえられるし、別にいいだらうくらいの緩さ

……というかよく考えたら、虐げてる人間に後頭部のメンテナンスさせるのは流石に危機管理意識無さすぎるな……

その説は大いに有り得る

164：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:18:

50 ID:t2MRvkiX9

▽ソガ隊員！ いったい何を読ませたんです！

ここ、焦って詰問してくんのが長官達じゃなくて、ダンなのが最高におもしろい  
絶対お前がまたなんかしただろ、みたいなある種の信頼を感じるww

166：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:18:

54 ID:tu6jasJir

ダン（また何かする気だなこの人……）

コンピュータ」

ダン「やっぱり！」

ソガは最初からぶっ殺す気だったからカリコ口おっさん倒せてもまあ当然なんだが



ノータイムで長官に飛びかかったダンは、絶好これ

168 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 18 :

58 ID : g227TCzGI

ミレニアム検証問題はギルバリスすら処理落ちするからね

しかたないね

ソガ、Z視聴勢確定

169 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 19 :

02 ID : 3obScPVIz

ん? 待って?

ソガが未来知識知ってんのはいいとして

この時代にミレニアム懸賞問題あるのおかしくね?

だってミレニアムなんだろ?

セブンの時代設定いつよ

170 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 19 :

04 ID : p2qxiccvl

1980年代後半想定なんじゃないかとは言われてる

この回だけはスコープオン号の時計がもつと未来になってるけど……

171 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:19:

06 ID : iaJ/W33i6

あ、オイ待てい

懸賞金付きで7つ纏められたのが2000年なだけで

問題の一部はもつと昔からあるゾ

一つは解決済みだが、残り六つはまだ未解決や

172 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:19:

09 ID : M8/y7zmkZ

はえくそうなん

やるやん数学自信ニキ

もしかして頭アマギなんか？

173 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 19 :

11 ID : 31Dd3tDe2

とはいえ、今の俺達には解けないだけで、第四惑星のコンピュータなら解けないまでも、あんなショートするほど処理落ちするとは思えん

175 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 19 :

15 ID : 8nLTcTwi

▽ミレニアム懸賞問題とかを渡したただけだが？

はいダウト

気になったから一時停止して査読したら明らかに七問以上書いてあるし、判別可能なものだけでも

・ 6×9 || 42 を証明せよ

だの

・ 手を加えられた民を恐れよ、彼らを作り出す力を恐れよ

だの、果ては

・ 1秒ごとに自身を再定義し直せ

とか書いてあつて草

他にも仕込んである可能性ある  
 そらバグるわ

177 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 19 :

18 ID : 8005IIS2z

ただか2000年しか稼働してない人工知能に

750万年かけて解く難問出すのはやめてやれww

179 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 19 :

20 ID : MFXfROEBH

確かに地球人が考えた問題だけど!

地球人が考えたけども!

限度があろうもん

181 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 19 :

26 ID : WIKFrODDX

嘘は言っていない嘘は

……解けるとも言っていないが

183 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 19 :

32 ID : +1jZFOst

地球人が考えた問題など余裕 キリッ ( . . ω . . )

185 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 19 :

35 ID : OTPIF / Xtm

いくらなんでも解のある問題にしてやれ

186 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 19 :

39 ID : NhwStIwBd

解はあるぞ、42って言ってるだろ！

188 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 19 :

43 ID : yosaJodOX

じゃあ究極の疑問ってなんだよ

190 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 19 :  
 45 ID : j95ke+7w6  
 んにやぴ

191 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 19 :  
 46 ID : Py80F7p5L

長官を指さして「トドメ刺そうぜ」ってくるダン……

ソガに毒されとる……

そこは見習わなくてよろしい!

192 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 19 :  
 51 ID : O+9bscWnR

原作セブン、ロボット怪獣にめちやめちや辛酸舐めさせられてるからな

案外、素で言いかねないぞ

194 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 19 :

57 ID : t w 7 6 5 + t p U

おまえら忘れてないか

そもそもコイツの主武器は アイ ス ラ ッ ガ ー だ

元からわりと容赦ないぞ

196 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 20 :

00 ID : p E K D k 2 P c i

そうだったわ。

普段のニコニコ顔に騙されてた

197 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 20 :

04 ID : Q q 6 t N A M E /

てかユートの稼働にも最初は反対してたくらいだもんな

(かく言う俺もぜってー暴走すると思っただ)

198 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 20 :

07 ID : v n s Y Q Z M U

今作じゃナースとかボーグ星人との戦いスキップ出来てるから、そこらへん払拭できてるかと思っただが

それ以上にダブルオーとか強化アイアンロックスいたの忘れてた

199 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 20 :

09 ID : XN2SoyQwr

ウインダムとユート以外のロボット信用できるのかコイツ？

201 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 20 :

12 ID : S26cgizlt

逆にその二人が有能な分、敵に回ったときの恐ろしさも、過剰に加味してる可能性すらある

203 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 20 :

17 ID : NIGPrbcUN

安心しろセブン、少なくともウインダムは裏切っても全然脅威にならないぞ

お前は知らんかもしれんが



205:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:20:  
20 ID:2BbKi09+1

ソガとカプセル爆弾ばら撒いてる時のノリが、完全に悪ガキのそれ  
いぞもつとやれ

：第四惑星・郊外

センターを大混乱に陥れたダンとソガは、途中で秘書アリーの手引きを借り、死体  
運搬用のトラックを強奪して脱出する

アリーは、二人が助けた少年の姉だったのだ

人間である姉弟達と合流した二人は、スコープオン号を目指すが……

アリー「包囲されてます」

すでに二人が連行された時点で、不時着したロケットの周囲は武装したロボット人  
間達によって封鎖されていたのだった

ダン「スコープオン号の通信機なら、地球と連絡が取れるかも知れないのに……」

アリー「人間の街へ行きましょう」

センターの混乱もすぐ終息するはずなので時間がない

人間の居住区で匿ってもらおう事を提案するアリー

ソガ「いや……そろそろだ」

ソガ、腕時計を見ながら呟く

ダン「何がそろそろなんです？」

ソガ「それよりも秘書さん、言った通り人間達は解放してきたんだろ？」

アリー「はい」

じつと腕時計とロボット兵士達を見つめるソガの後ろで、怪訝な顔のダン

アリーがメモを手渡す

メモ『混乱に乗じてセンター内の人間を解放しろ、このライターはそのまま置いてい

け』

アリー「コーヒークップを下げようとしたら、中にこれが」

ダン（いつの間にかこんなメモを……）

ダン「ライターとは？」

アリー「メモの重しにしてありました」

ソガは非喫煙者なのでライターなど持ち歩かない

ダン、ハツとした顔で振り返る

ソガ「……時間だ」

遠くで盛大な爆音と共に、黒煙が広がっていく

ソガ「お散歩惑星の前線基地すら吹っ飛ばす、地球防衛軍謹製の小型爆弾さ。奴さんが、出されたコーヒーに文句を付けずに飲み干してりや、気付けたかもな」

(尚、32話でダンはカプセル爆弾や投石で地道に破壊工作を行ったので、本作時空では初使用となる)

(ソガはそのことを知らないので発言に矛盾が生じてしまっている)

少年「あっ!？」

四人の前で、兵士たちの動きが止まったり、倒れたりする

センターからの指令が途絶えたので部隊が機能不全に陥った事を示唆

ソガ「へへへ、人間の兵士を一人でも入れときゃ、こうはならなかつたろうによ」

ソガ、ニヤニヤしながら堂々とロケットへ歩いていく

ダン「……」

少年「オジサンのお友達、すごいね!」

ダン「うん……そうだろう!」

206 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 20 :

25 ID : xjfm4ufJB

確かにコーヒーカップ伏せてあったわ

208 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 20 :

30 ID : +0W3Rq7K5

これが本当の伏線ってか

やかましいわ!

209 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 20 :

33 ID : GqpmZV5FR

一極集中型の悪いところ出ちゃったねえ……!

211 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000 / 8 / 30 19 : 20 :

35 ID : sUUTIP1 / C

確かに人間の兵士入れときや、センター壊れようが関係ないけど……

この状況になったらここぞとばかりに反逆するだろうから結局意味ないゾ

2 1 2 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 0 1 9 : 2 0 :

4 1 I D : L a S l u v 7 F q

自律型 A I じゃねえのかよ! やっぱポンコツじゃねえか

2 1 4 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 0 1 9 : 2 0 :

4 3 I D : Z J G l x 9 T u +

自律行動もできるにはできるけど、指示更新なしで行動できないようにプロテクトかかっているんじゃないか?

一応、ソガとダンに攻撃してる奴もいるし

瞬殺されてるけど

2 1 5 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 0 1 9 : 2 0 :

4 4 I D : R O g f j l u X i

てつきりカナン星人の鹵獲兵器使うのかと思ってたけど、予想以上に火力のゴリ押し

だった

216：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:20:

45 ID：M97rYkjTi

あれ使うと結局暴走しちゃうからあんまり意味ないって、クレイジーゴンの時に気付いてお蔵入りになったんだろ

銃持つてるロボット兵士数十体が暴走して周囲に乱射とか、なまじ狙いもしないからもっと厄介だし

218：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:20:

48 ID：khsBNJzCM

あと忘れてるかもしれないが、スコープオン号も自動航行だから、万が一誤射とかすると帰れなくなるぞ（一敗）

219：名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:20:

52 ID：jbx8u/l

失敗ニキは成仏してクレイジーゴン

2 2 1 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 0 1 9 : 2 0 :

5 5 ID : Q r Q N P 6 l f b

奴隸人間を率いて逆襲するソガ

今までの鬱憤を晴らすかの如く大暴れしてて笑っちゃまうww

ついさつきまで長官に揉み手してたんだぜコイツ

2 2 3 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 0 1 9 : 2 0 :

5 9 ID : v x f N L W Z Z /

止め絵が完全にドラクロワの絵になっててファイタww

後ろのアリーとポジション逆だろwwいいのかそれでww

2 2 4 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 0 1 9 : 2 1 :

0 0 ID : u n J 7 8 g 8 d T

地球侵攻部隊を蹂躪するセブン強スンギ

2 2 5 : 名無しに代わって警備隊員がお送りします 2 0 0 0 / 8 / 3 0 1 9 : 2 1 :

01 ID:1OMgeQgDW

飛びつつか両手からレーザーで薙ぎ払ってくの卑怯だろ……

気持ちええ……

227:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:21:

05 ID:z07KEk1QB

飛行場破壊シーンなんか完全に機銃掃射やんけ!!

228:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:21:

08 ID:3y+/OSPez

ぶつちやけ地球に辿り着けてもクラタと隊長に蹂躪される未来しか見えない

229:名無しに代わって警備隊員がお送りします 2000/8/30 19:21:

11 ID:Xfv62iHu4

手を振る住民達に見送られつつ、普通に帰っていくの笑ってしまうわ

これ、相手がソガじゃなかったら「なんでここにセブンが来たんだ？」ってなるぞ



：太陽系第三番惑星地球・ウルトラ警備隊極東基地

地球に帰れた、ダンとソガ。

しかし、仲間からは信用してもらえない

ソガが握りしめていたロボット長官のマスクもいつの間にか失くしてしまっていた

た  
アンヌ「第四惑星って本当にあつたの？ 眠っている間に見た、夢か幻じゃないの？」

ダン「いや、夢じゃない！ 夢じゃ……」

キリヤマ「まあ、いいじゃないか。とにかく、スコープオン号のテスト成功を機会に、地球防衛軍は全機関を電子計算機システムに切り替えるつもりだ。みんな、楽になるぞ」

そんなことをすれば第四惑星の二の舞だと主張するダン達に、疲れているからと静養が勧められる

：太陽系第三番惑星地球・郊外

緑の中を散歩する、ダンとソガ。

(SE) カランコロン…… (下駄の音)

ダン「キレイですねえ……」

橋の欄干にもたれかかる二人の眼下には、幹線道路が走っている

ソガ「でも、地球の自然もだんだんと削られていくみたいだな……」

ダン「……このまま行ったら、地球もいずれは第四惑星みたいに……」

ダン、不安げな表情

ソガ「いや、そうはならんね」

ダン「どうして？」

能天気なソガ

ソガ「地球の機械には、心がない。心がないという事は、欲求が無い……つまり進化をしないという事だよ」

ダン「しかし第四惑星では……」

ソガ「奴らは本当にロボットだったか？ 弱者を虐げ、自らの征服欲を満たす事に愉悅を感じる……ありやあ立派に人間だったさ。独裁者なんて、俺達の社会にだっているだろう。ロボットだろうが人間だろうが、そこに変わりはないのさ。要は……そいつ自

身が何をしたがるか、だ」

ダン「何をしたがるか……ですか」

ソガ「別に地球もいずれそうなるだろうが……ま、ゾツとせん話さ」

ダン「ゾツとする、の間違いではなく？」

ダンの指摘に首を傾げるソガ

笑みを浮かべて伸びをする

ソガ「人間の科学は、人間の幸せの為にある……それを忘れさえしなければ、手綱を握っているのがロボットだろうが人間だろうが、俺はいつこうに構わんよ。AIに仕事を奪われるってんなら、さっさと奪って欲しいもんだぜ。やれるもんならな」

ダン「おつ、ここにすっかり怠け者になってしまった人間がいるぞ」

ソガ「馬鹿言えよ、俺は元から怠け者だぜ」

くくくと笑いあう二人

ソガ「それに……明日の天気は？」

ダン「……雨です！」

ソガ「よし、見てろ？」

ソガは、履いていた下駄を思いつき放り投げる

木製の簡素な靴は、放物線を描いて裏向きに着地した

ダン「ほらね？」

ソガ「いや、晴れだ！」

(SE) コカツ！コロツ！

ソガ、足を振り抜き、残っていたもう片方を勢いよくブチ当て、下駄を表面す  
たった一人の主張で、明日の天気が変わってしまったのだ

ダン「ハツハツ……ハツハツハツハツ!!」

あんまりにも下らないやりとり

しかし我々は、そこに愉快さを感じる事ができる

ソガの真意を察して、たまらず笑いが込み上げるダン

彼の気遣いがどうしようもなく嬉しかったのである

大自然に二人の爆笑が木霊した

## 脅威の超エンジン (I)

「ワア、ミテクダサイ。オオキイ、ミズタマリダ。アレガ、海デスネ。スゴイ、ナア」  
後部座席から、ピーピーとがなり立てるような電子音と共に、角張った人工音声が響く。

抑揚もへつたくれもない、ごくごく平坦な棒読みの台詞。

だがそこに、歓喜と驚嘆の色が確かに混じっているのをアンヌは聞き取った。  
勿論、そんなのは単なる錯覚にすぎない。

しかしそれがどうにも可笑しくって、彼女はクスリと小さな笑みを零す。

「ウフフ……違うわユート。あれは川よ。か、わ。分かる？」

「ワカリマス。カワ。イワユル 河川 デスネ。ツマリ、アレガ、スベテ、ダンスイ、ナンデスカ」

「そうさ。だから、君がうっかり落ちたとしても、海よりは錆びにくいだろうね」

「ソナ、ヘマ、スルワケ、ネエダロ。ダンジャ、アルマイシ」

「おつ、言ったな？ コイツう！」

ポインターのハンドルを握るダンは、バックミラー越しにわざと颯め面を作ったが、後ろに載せた珍客が暢気に歯車を回すのを見て、ハハハと笑う。

そう、彼らの後ろには今日、U—8が載っていた。

今までは内蔵バッテリーの問題で、発電機無しには基地から一定範囲以上離れられなかったU—8だったが、近頃、思いがけず動力関係の技術が立て続けにブレイクスルーを起こした事もあり、通常起動でさえあれば、半永久的に動き回れるようになったのである。

しかも、ソガやアマギの友人であるというイチノミヤ氏が、ついにU—8の圧縮言語を解き明かし、アマギと共同で開発した自動音声による翻訳声帯を取り付けてくれたのだった。

これにより、行動範囲とコミュニケーションの制限が取り払われたU—8は、搭載された人工知能に、より深い学習をさせる基盤が整ったため、こうして隊員達に同行させるように通達が出たのである。

MJ計画も、ついに大詰めといったところであろうか。

隊員達も、すっかりこのマスコットに愛着がわき、彼と会話ができるようになるの而今か今かと待っていたので、この変化を大いに喜んだ。

もちろん、彼はたった一人でもとんでもない重量のため、本来は七人乗りのポインターの定員はたったの2名となつてしまひ、後部座席に搭載されているウルトラミサイルも、ランチャーごと外さなくてはならない為、彼を連れて行けるのは、もっぱら戦闘予定の無いパトロール時などに限定されているのだが。

「ソレデ、キョウノ、デーとコーすハ、もんきーぱーく、デスカ」

「ええっ!？」

不意の言葉に、二人は思わず赤面した。

「な、なに言つてるのよユート！ これはれっきとした任務よ！」

「そ、そうさ、隊長が言つていたのを聞いてなかつたのかい？」

出発前の作戦室。

「これが昨夜の現場写真だ」

「惨いやりかただ……」

キリヤマ隊長から渡された写真を見たフルハシは、思わず顔を顰めて、肩越しにちよこんとこちらの手元を覗き込むアンヌにもよく見えるよう、写真を傾けてやった。

二人の警官が、頭から血を流して倒れている。

彼らの首や四肢は、それぞれあらぬ方向に曲がついて、その命がとづくに失われて

いる事を如実に示していた。

「例え医者として凄惨な人体を見慣れているアンヌであっても、なるべく直視したくはない代物だ。」

「忠実に職務へ励み、その結果として殺されてしまったのであろう彼らの事を思えば、胸が痛む。」

「警官の死因は、二人とも頸骨を粉々にされていることだ」

「ええ」

「おそらく相当強烈な一撃を、首に受けたと思われる。その力は、人間の限界をはるかに超えている」

「……すると、人間じゃないかも知れませんね」

「うむ、県警から捜査の依頼を受けたのも、その点からだ……これを見てくれ」

「領き、別の写真を取り出す隊長。」

「そこには、真つ二つにへし折られた警棒が写っている。」

「これは、人間の力では考えられんことだ」

「おまけに付け加えて言うなら、現場には千切れた鎖と思しき破片が見つかっており、警官の死体のうち片方は、義務として携帯しているはずの手錠を所持していなかった。」

「このことから推察できる最悪の想定として、『加害者は手錠をはめられたのに、腕力だ



けでそれを引きちぎったのではないか』というものがある。

もしもそうならば、由々しき事態だ。

いかな木製といえど直径数cmの警棒を容易く叩き折り、鋼鉄製の手錠をあまつさえ嵌められた状態で引きちぎるというのは、それら道具の強度に精通している人間にとつて、その字面以上の度し難い事実を孕んでいた。

「たまたま現場付近を通りかかった目撃者の話によると、ゴリラのようなものが、3mもある塀に飛び上がって、軽い身のこなしで塀伝いに逃げていったとのことだ」

「ゴリラねえ……なるほど怪力なはずだあ！」

得心いったと納得するフルハシを、すぐさま制すキリヤマ。

「あわてるな。まだゴリラと決まったわけじゃない。初めからゴリラと判っていたら、何もウルトラ警備隊に捜査を依頼しなくともよからう」

またしても写真を取り出す隊長。

地面に点々と残る血痕が写っている。

警官の所持していた拳銃は、実弾が一発無くなっていた……つまり。

「これは犯人が撃たれたとき、傷口から出たものと見て間違いない。また、目撃者の逃げを行ったという塀からも、これと同じ型の血液が検出されている。つまり、これは犯人の血液なのだ」

「ゴリラののでしょうか？」

「……違う」

首を横に振る隊長。

「ゴリラの血じゃないんですか？」

「うむ……人間の血だ」

最近発足したという科学捜査研究所……通称S R Iが送ってきた分析結果として、その血は紛れもなく人間の血液であり、A型であるとの情報が付け加えられていた。

現在日本で飼育されているニシローランドゴリラにはB型しかない。

もちろん、マウンテンゴリラなど、他の種類であれば話が別なのだが……それらの種類が密かに日本へ持ち込まれているとなれば、また別種の事件性が浮上してしまう。

幸か不幸か、密輸団の活動は最近報告されていなかった。

「人間？」

「恐怖のあまり、ゴリラと間違えたんでしょう。似てますからねえ、直立して歩いていけば……」

「では、仮に人間だったとして、3 mも飛び上がれると思うか？ しかも、警棒を真つ二つにして、首を叩き折るほどの力……一体どんな人間が想像できる!? 言ってみろ！」

「はあ……」

ソガとアンヌの視線が、一瞬にしてフルハシの元へ集中するが、何かを感じた本人が、訝し気に向き直る直前、慌てて逸らされた。

「ダンとは？」

「……」

どう思う？ と隊長に水を向けられたものの、彼とて答えに窮する質問だ。

いかに自身の正体がウルトラセブンであるとはいえ、人間態時に発揮できる出力なんて、たかが知れている。

そんなダンだからこそ、今回の犯人の異様さが身に沁みて理解できた。

およそ人類が出し得る最高峰と思しき、フルハシやダンの怪力ですら、鋼鉄製の手錠を引きちぎるなんて芸当は不可能なのだから。

そもそも、鎖が破壊される前に、その応力を受けるであろう手首が耐えきれないのだ。手首、手錠、鎖。

これらに1トン以上の力が満遍なくかかった上で、最も脆かったのが鎖の部分でなければ、そんな現象は発生し得ない。

つまり少なくとも、敵の外皮は鋼鉄以上の強度を持っている事になる。

ダンが同じことをしようとすれば、セブンの姿に変身しなくてはならなかった。

「ゴリラと見えてゴリラじゃない……人間の血液で人間とも思えん、では一体……何だ

「？」

どちらにせよ、警察は密輸団の線を洗い、ウルトラ警備隊は異星人の侵略に関する予兆として捜査するしかない。

元はウルトラ警備隊の前身が、警察機構の一組織だった事もあり、こういった怪奇事件の捜査から彼らが完全に切り離されるのは、人員や体制が整ってから……もう少し後になるだろう。

それまでは、彼らの管轄なのだ。

もちろんあの場にもU-8は居たし、その上で、ゴリラやサルの状態に詳しいマヤマ博士に話を聞く為、彼の居るモンキーパークへ向かう事になっているのも知っている。「デモ、ソガタイインガ『いいかユーエイト？ くれぐれも二人のデートの邪魔はするんじゃないぞ？』ト、イツテキマシタ」

警備隊のエンブレムが貼り直された、U-8の銀色をした胸の奥で、キュルキュルとカセットテープが回り、録音されたソガの肉声が再生される。

なんということだ、本当に出発前のU-8へ向かって言ったらしい。

「あ、あのなあユート……それは、ソガ隊員の……ジョークだよ」

「そうよ！ 冗談も分からないんじゃないや、まだまだだね！」

「じょーく、アルイハ 〽冗談〽 ツマリ、でーとトイウノハ、 〽嘘〽 ナンデスネ？」

「そ、それは……！」

U—8の返しに、それぞれの理由から言葉を詰まらせる二人。

ダンは、〽冗談〽と〽嘘〽の間にある、僅かなニュアンスの違いを、この頭の固い友人に分かるよう説明するにはどう言えばいいのか、咄嗟に思いつかず、どうにも返事を決めあぐねた為。

そして、未だに頬を紅潮させたままのアンヌは言わずもがな……

「ソレハ、ヨカッタ」

「え？」

「ジャア、アンヌタイイン。ワタシト、でーとシマシヨウ」

「ええっ!？」

今度ばかりはアンヌだけではなくダンも度肝を抜かれ、急ブレーキを踏んでしまう。

あまり使われていない川沿いの道だったので、後続車が居なかつたのが幸いであつた。

「な、何を言っているんだユート!？ アンヌとデートだつて？ キミが？ まさか！」

「あ、ああそうだ。あれでしょう？ 時間を決めて待ち合わせするっていう、元々の意味

よね！ 確かに仕事でも使うらしいし、任務だつてある意味デートよね。わたしたちの方こそ、過剰に反応しちゃったわ。ごめんねユート」

「なあんだ。安心した……」

語源的な意味合いか。

ホツとした様子で、力を抜いてシートにもたれるダンだったが……

「チガイマス。『ん？ デートってのはなあ……なんていうかその……男女がお互いを知ったり、仲を深め合ったりして、恋愛感情を高めるために遊びに行くことさ』ワタシハ、イミヲ、シツタウエデ、オサソイ、シテイマス」

「……ちよ、ちよつと……この子だったら……」

突然の事に、どうすれば良いか分からず、ドギマギしてしまうアンス。

「いいかいユート。デートや恋愛っていうのは、人間同士でするものさ」

「ナニカ、モンダイデモ？」

「いやだからさ……キミは……ロボットじゃないか」

なんとも言えない顔で指摘するダン。

今更そんな事を口に出す羽目になるとは思っていなかったからであるが……

「ワタシハ、ニンゲンデス。異常ナシ」

「なんだって!？」

ついにダンには振り返って、U—8の顔をまじまじと見つめるのだが……彼の強化ガラス製の顔は、つるりとしたままなんの表情も浮かべない事はない。

果たして本気なのか、それとももしや……冗談を学習して、意趣返しに言っているのだろうか？

「ダン。アンヌハ、ニンゲンカ？」

「そりやあそうだよ！」

「アンヌ。ダンハ、ニンゲンカ？」

「ええ、もちろんよ！」

「ダツタラ、ボクモ、ニンゲンダ。キミタチガ、ニンゲント、イウナラ、ボクト、ナニガ、チガウンダ？」

「それは……」

顔を見合わせる二人。

「やだわこの子つたら……ペットはよく自分の事も小さい人間か、さもなければ飼主を変な姿の同種だと思ひ込んで言うけど……周りがみんな人間ばかりだから、自分がロボットだって分かってないんだわ、きつと」

「そうか、彼にはもう、同じ体のお仲間がいないんだったね……」

ダンの瞳が、寂し気に揺れる。

確かに、無機物のみで構成されているものは人間に定義されない……なんてことは今更すぎて、これまで誰も彼に教えたことはなかった。

おまけにU—8はもう、曲がりなりにも自分で考え、会話まで出来るほどに成長したのだ。

……その肉体の構成成分以外に、彼を納得させられる要素はいつたいなんだろうか？ 魂の有無なんて言っても、U—8にはきつと理解できないだろうし……あいにくそれを証明する手立てを持っていない以上、彼に根拠を強請られても困るだけだ。

こうなったらもう、一度帰って、アマギ隊員に新しいデータを入れて貰うしかない。コミュニケーションが可能になった途端、とんでもない行き違いが浮き彫りになってしまった形だ。

「あのね、ユート？ 人間はね、そもそも任務中にそんな話はしないものなの」

「ソウナンデスカ」

「そうだぞ、あんまりアンヌを困らせちゃダメじゃないか」

「オマエニハ、イワレタクナイゾ、コノ、ボクネンジン、オタンコナス、マジメクンロボ」

「はあ……お前がこんな口が悪かったなんて、思いもしなかった……」

「いつたいてどこで覚えてきたのよ、そんな言葉……」

頭を抱えるダンと、呆れて肩を竦めるアンヌ。



二人の頭には、ほぼ同時に下手人と思しき男の顔が浮かんできたので……  
揃って恨み節をぶつけることとなった。

「シヨウガアリマセン、ニンムニ、シユウチュウ、シマシヨウ」

「是非そうしてくれると助かるよ……」

切り替えの速さは流石ロボットといったところか。

疲れた声で同意するダン達。

「ソレニシテモ、ガケクズレガ、アツタノニ、もんきーぱーくカラハ、フツキユウノ、ヨ  
ウセイガ、ホントウニ、ナカッターノ、デスカ」

「え？ ああ、うん……」

「変よねえ……」

実はそれも、今回の訪問理由の一つではある。

モンキーパークは、警官の殺された名古屋駅からの直通ラインが、数日前からがけ崩  
れで塞がっているのだ。

本来ならば、基地から通じるシークレットハイウェイの出口から、山をほぼ直線距離  
で登ればすぐに到着するのだが、その道も閉鎖されているため、わざわざ川沿いを登る  
道を使って遠回りしなくてはならなかった。

だというのに、パークの職員からは救援要請もなく、行政側は誰もその事態に気付い

ていないという有様。

そりゃあ、今走ってるような下道はあるわけだから、完全に閉ざされたわけでもないが……少々呑気すぎやしないだろうか。

市街地への近道が無ければ、彼らも困るだろうに……これではまるで、孤立したがつているかのようだ。

それとも、車も無しに山中を駆け下りるのが、全く苦ではない程に、職員たちが健脚揃いとしても言うのだろうか？

惨殺された警官。

ゴリラのような犯人。

近傍のモンキーパーク。

閉ざされた主要経路……

それらを一度に結び付けるには、あまりに飛躍しすぎているが……  
ダンはどうしても、悪い予感を拭い去れなかった。

## 脅威の超エンジン（Ⅱ）

日本モンキーセンターに到着したポインター。

「ここには世界の猿が、1000頭近くもいるんですって」

「ほおう」

「ホオウ」

車から降り立った三人を、センターの入り口から窺う者達がいた。

「あう、あうう……」

「ウルトラ警備隊だ……お前は仕事をしなさい。早く！」

「……あうっ」

背を丸め、どこか陰気な様子の大男が、見慣れぬ姿の来訪者を指差して、唸り声をあげる。

彼は左腕に包帯を巻いていた。

そんな大男に呼ばれ、センターの中から出て来た白衣の女は、警備隊員に感づかれないうよう、短く指示を出し、大男を厄介払いした。

階段を降りていく大男と、登ってきたアンヌの視線が交叉する……

しかし、両者の瞳はそのままファイと逸らされてしまうのだった。

「こんにちは」

「お待ちしておりました、どうぞ……それは？」

笑顔の警備隊員たちへ、白衣を着た、出迎えらしき女職員が、慇懃に頭を下げるが……再び顔をあげた時、男女の後ろから、妙な物体が階段に四苦八苦しつつ、ちんたら登ってくるのを見咎めて、怪訝そうに眉をひそめた。

「ウンシヨ、コラシヨ……ヨツコイシヨウイチ」

「ああ、彼は新型の人工知能ですの」

「はあ」

「ユート、よっこいしようにちって、なんだい？」

「シリマセンガ、マエニ、ソガタイインガ、イツテイマシタ」

「ふうん……：しようにいちって事は、誰かの名前かな？ 有名な人なのかい？ アンヌ」

「ううん……：知らない」

「今度聞いてみるか……」

アンヌが可愛らしく小首を傾げるのを、ダンは満足げに眺めていたが、その視界の端で、階段をようやくと制覇したユートへ、職員がえらく冷たい視線を送っているのに気付く。

彼女はしばらく、銀色のボディを頭のとっぺんから爪先までじろじろと何度も不躰に検分していたが……最後にうっすらと、本当に僅かばかり口の端を吊り上げて、フ……と嗤うのを、ダンだけは見逃さなかった。

なんだか彼を馬鹿にされたような気がして、思わずムツとしてしまうダン。  
ユートの事をよく知りもしないのに、なんて失礼な人なんだろう……

「どうしたの？ ダン」

「ハラ デモ イタイカ」

「ん、ああいやなんでもないよ」

「そう？ ……あのミズシマさん、博士はお元気ですか？」

「ただいまお仕事中です」

アンヌが博士の事を尋ねると、さっきのが嘘のように丁寧な対応をしてくれる。

どうやらアンヌとも知り合いらしいし、気のせいだろうか……

「ちよつとご挨拶してくるわ……アツ!？」

勝手知ったる様子で角を曲がったアンヌが、その先に展示してあったゴリラの剥製に驚いて、たたらを踏んだ。

彼女がびつくりしているとところを見るに、つい最近に追加されたものらしい。

「アンヌタイイン コワガリヤサン」

「……もう！」

「死んだんですか」

「ええ、三ヶ月前に。アフリカから着いて三日目でした」

「じゃあ……ここにゴリラは？」

「現在、1頭もおりません」

「はあ……」

だとすると無駄足だったかもしれないな。

勿論その方がいい。

アンヌの知人が事件に巻き込まれていない事に、ひとまず胸を撫で下ろす。

「じゃあちよつと博士のところへ」

「うん」

「イツテラツシャイ」

「……そうだ、待っている間、ユートに展示を見せてやりたいんですが」

「アソビジヤナイゾ ダン」

「君が言うのか？ 人間とそれ以外の違いを知るには、ここの展示が役に立つかもしれないじゃないか」

「ソソナノ データーヲ インプット スレバ」

「百聞は一見にしかず、さ……よろしいでしょうか？」

「展示を破壊したりしないのであれば」

「……彼はそんな事しませんよ」

「では、こちらへ……ご案内します」

「ワアイ」

「なんだ、やっぱり嬉しいんじゃないか」

---

コンコンとノックの音が転がる。

白衣を着た初老の男性は、顕微鏡から顔もあげずに入室の許可を出した。

「はあい」

「こんにちはー！」

聞こえてきた元気のよい挨拶が、助手のものでは無い事に気付き、博士はようやく顔をあげる。

ヘルメットを被った人物が、知人の娘である事を認識すると、彼はにこやかに相手を崩した。

「おお、アンヌ君……」

「お元氣そうですね、博士」

「ずいぶん、久しぶりじゃあないか」

「ええ、3年ぶりくらいかしら……でも、ここにはゴリラがいなくて、良かったですわ」  
「ううむ。例の事件か」

「ええ、猿なのか人間なのか。まだハッキリしていません」

「早く犯人を捕まえてもらいたいねえ。そうでないと、あらぬ疑いをかけられて困るよ」

「あら、アタシそんなつもりで来たんじゃないやありません！」

「ハハハ……冗談、冗談。まあ、モンキーアパートでも見てきたまえ。また増えて百種類になったよ」

「はい、それでは失礼します」

博士の様子に変わらない事を確認し、アンヌは内心でホッとした。

さつきはああ言ったものの、目下1番の嫌疑がかかっていたのが、この施設である事は間違いなかったからだ。

父の友人であるマヤマ博士は、アンヌにとつても恩人であるし、いくら任務とは言え、そんな彼に面と向かって「お宅のゴリラが事件に関与していますか」などと質問する必要が無いのは助かった。

マヤマ博士の穏やかな笑顔は、三年前に入隊合格の報告に来た時と全く変わらない。

彼は動物行動学の権威だが、研究の過程で精神医学にも造詣が深い人物だ。



より正確に言えば、心理学の方で行動学的知見が有用とされる事が多々在り、マヤマ博士はその共同研究者として声がかかる事が非常に多いのである。

アンヌがかつて、恐怖症を克服する為に施術して貰った医師も、そして催眠療法を学ぶ為に師事した恩師達も、元を正せばこのマヤマ博士の伝手で紹介してくれた人達ばかり。

彼女にとってではかけがえのない人物なのだ。

「あ………」

廊下ではたと立ち止まるアンヌ。

「ダンを紹介するつもりだったのに……うっかりしてたわ、あたしったら」

ミズシマ助手に館内を案内されるダン達。

今、彼らの前では檻の中で金色のたてがみを持つ小さな生き物が、身軽な動きで枝から枝へ飛び移っていた。

「これは？」

「ニンゲンダ」

「違います……ゴールデン、ライオンタマリンです」

「ほおう」

「ホオウ」

「ブラジルの固有種で、熱帯雨林に生息しています」

「インプット カンリョウ」

助手がタマリンの生態をユートに教え込むのを聞き流しつつ、ダンは目の前のサルから、妙に此方を伺うような気配を感じ、僅かな違和感を覚えた。

これまでの檻でも、興味深そうに覗き込んでくるサルが沢山いたが、このタマリンからはやけに……そう、敵対的な雰囲気を感じてならない。

（これがサルだろうか……？ 待てよ……）

ダンには記憶のどこかに引つかかるものがあつた。

確かあれば、S71星雲に立ち寄つた時、世話になつたエージェントが見せてくれた資料に……

そんな事を考えながら歩いていたのがいけなかつたのか、助手に鋭い声で制される。

「あつ、ここから先は倉庫なのです」

「タチイリキンシガ ミエナイノカ」

「すみません」

そこへ折良く戻ってきたアンヌ。

「ダン、モンキーアパートを見ましようよ」

「うん……」

「モンキー アパート ナンデスカ ソレハ」

「世界のサルが100種類も飼育されているの。そのゴールデンタマリンみたいに、かわいいお猿さんがいっぱいよ」

「アンヌタイインノ ホウガ カワイイ デスヨ」

ダンとアンヌは、思わず顔を見合わせて、肩を竦めるのだった。

「ほら……ハツハツハ」

「ウフフ」

「ナニガ ソンナニ オモシロイノ デスカ」

「え、何がって……そんなの……ねえ？」

「ねえ？」

「リカイ フノウ」

モンキーアパートの前で、楽しげに笑いあう男女の姿を、じつと見つめる者がいた。陰気な雰囲気の大男だ。

箒で檻の掃除をしながら、チラチラと男女の……否、アンヌの事を伺っている。

そんな事には気付かないダン達は、食事中のマンドリルを冷やかしつつ、今度はその隣にあるニホンザルの檻に向かって指を突き出しぐるぐると回す。

すると、ぼやぼやした毛を生やしたサルの子供が、物欲しそうにその指に追従するのを見て、また楽しそうに笑い声を上げた。

「ほい、ほい……ハハハ。餌が貰えると思ってるのかな？」

「ダン、あの子言ってるわ』そのハンサムなお兄さん、リンゴかバナナはありませんか』ですって」

「ええ、参ったなあ。お世辞のうまいお猿さんだ。褒めても非常用チョコレートしか持っていないよ」

「チガイマス ワタシノ ホンヤクプログラムニ ヨレバ ソノ サルハ コウ イツ  
テイマス」

「へえ、なんて？」

「サツサト ウセロ スカポントン」

「えっ？ ユート、君はサルの言葉が分かるのか！」

「ソナワケ ネエダロ」

そのとき、ギヤツ！ という短い悲鳴が聞こえてきた。

見れば、箒を持った職員がサルに指を噛まれているではないか。

彼はアンヌ達に気をとられて、檻に近付きすぎていたのだ。

勿論そんな事など露知らぬ警備隊一行は、怒りのままに箒を振り回す男性職員に駆け寄った。

「うがああつ!!」

「大丈夫ですか!」

ダンが男の腕をとり、アンヌの方へぐいと引つ張る。

指から真つ赤な血が滴っているのを見ると、彼女はハンカチを取り出して、患部を縛り、手際よく止血していく。

その間中、男が目を細めて、アンヌの横顔をねつとりと嘗め回すように睨めつけているの事に、ダンには気付いていたが、敢えて注意はしなかった。

ただ脳裏に焼き付いたその表情が、どこか幼気で純粹な歓喜と、獣のように原始的で野性味溢れる情欲が入り混じった、非常に歪なものに思えてしまい、ダンの心は酷くざわつくのだった。

「はい、もう大丈夫よ……ダン、向こうも見ましようか」

「うん……」

「オダイジニ」

去って行くアンヌ達の背中を、二つの瞳が見送っていた。

「だからね、ユート。君が自分を人間だと言うなら、このサル達の行動を見て、もつと感情を学べばいいと思うんだ。ソガ隊員が言っていたよ、機械には心が無いってね。じゃあ、今よりもつと感情豊かになれば、人間の事が分かるんじゃないかな！」

「オオキナ オセワダ」

「……まったく、呆れちゃうわ」

ユートの手を引きながら、あつちだこつちだとはしゃぐダンを見て、アンヌは思わず溜息をついた。

さつきまでいい雰囲気だったのに、突然なにか思い付いたようにハツとすると、今度のはアンヌをほっぽり出してユートばかり構いだしたからだ。

そもそもユートがデートしたのは、私となのに……いやいやそうではない。

ソガ隊員もソガ隊員だ。ユートにあんな事を言うくらいなら、なんだかんだと御得意の御託を並べて、最初っから二人きりにしてくれば良かったじゃないか……

アンヌの頬がぷくつと膨らみかけるが、振り返ったダンの無邪気な笑顔を見て、すっかり毒気が抜かれてしまった。

……そうだった。

モロボシ・ダンは不思議な男だ。

普段は大樹のようにどっしりと構えて、森の空気みたいに静かで穏やかな気配を纏っているのに、ふとした拍子にキラキラ輝いてみせる時がある。まるで木洩れ日だ。

彼のたまに見せるこういうところが……彼の魅力なのだ。

どうしようもなく人を惹きつける。

だからこそ私は――

それを改めて自覚したアンヌは、白旗を振る代わりに、もう一度深く溜息をつくとき、仕方ないなどでも言いたげな苦笑を浮かべて、彼の背中を追いかけた。

そろそろモンキーアパルトも終わろうという頃合で、ダンは視線を感じ、振り返る。建物の影に、白衣の端がちらと翻ったような気がした。

「どうしたの……」

「どうも気になる……あの大男にしても、助手にしても……どこか様子が変だ。アンヌ、これは調査の必要がありそうぞぞ」

「そういえばさっきの男……アンヌが右の指にハンカチを巻いてやったが、左腕にも包帯を巻いていた……」

飼育係は生傷が絶えないのだろうか……はたしてサルにやられたものなのか？

あの包帯の下にあるのが、もしも銃創だったとしたら……

いや、まさかな。

「シカシ　ぱーくナイハ　トクニ　異常ナシ」

「どうするつもり？」

「一度、何気ないふりで引き上げる。それから戻って忍び込む……」

「OK、じゃ、博士に挨拶してくるわ」

「ダンノ　カンガエスキ　ダト　オモイマス」

「……ああ、僕もそうであってほしいよ」

……ところが、だ。

博士達に見送られながら、その場を辞そうとしたのだが、ポインタのボンネットが開き、配線がめちやめちにされていたのである

「ちきしょう……」

「コレハ　につぱーデ　キラレテ　イルゾ」

ご丁寧に、タイヤの周りには釘のようなもので散乱しているではないか。

どうやら犯人は最初、パンクさせようとしたが、その強度に降参したらしい。

なにせ地雷を踏んだって平気なコンバットタイヤなのだ。



乗り心地を犠牲にしてタイヤ強度を高めてある分、面目躍如といったところだが、電気系統までやられてしまうとは……これは直すのも一苦労だぞ。

「こりや、いかん……よかつたら、泊まっていきなさい。これからの夜道は大変ですよ」  
「でも……」

「いいじゃないか、お世話になろう！」

ダンは渡りに船だと、博士の提案へ乗ることに。

どうせ忍び込もうと思っていたのだ。

夜になにか動きがあるかもしれない。

「こちらダン！ 本部応答願います」

「そっちの様子はどうか？」

「別に異常ありません。ただ、ポインターが故障して、今夜こちらで一泊したいんですが」

「いいだろう。ただ、定時連絡だけは忘れるな」

（油断していると思わせて、誘き出してやる）

そう決意するダンの顔を、藪の中から何者かが憎悪を込めて観察していた。

夕日を反射し、赤く燃える瞳が、邪魔な雄の姿を焼き付けていた。

……だというのに。

「まるで動きがないとは……」

「コラソコ モット テギワヨク デキナイノカ コノ ポンコツ」

カメラアイからのライトで、ダンの手元を照らすユートが、彼の作業が止まった事を見咎めた。

「うるさいなあ……小姑かい、きみは」

「コジユウト コジユウト トハ ナンデスカ」

「さあ……知らないけれど、ソガ隊員が前に言ってたんだ。多分、君のように口うるさい人の事だろうね」

「ソウデスカ コンド キイテ ミルカ」

胸から伸びたサブアームが、ダンからドライバーを受け取り、その代わりに新品の配線とはんだごてを渡す。

真夜中とはとくに過ぎて、現在午前三時。

予想していた夜襲もなく、そろそろ夜明け前という事で、ポインターの修理をしているのだ。

本当に単なる悪質なイタズラだったのだろうか……

ダンが汗を拭ったその時！

「キケン！ キケン！ ダン キケン!!」

「ユート？」

「ダン ヨケロ!!」

「え!? ……がつ!」

暗闇からなにかが飛んできて、ギラリと月明かりを反射する。

それは、ダンが咄嗟に翳した左腕にぶつかり鈍い音を立ててから、跳ね上がった軌道で、彼の額を掠めるようにして弾いた。

頭部から派手に血を吹き出しながら、もんどりうつて倒れるダン。

ガランと硬質な音と共に地面に落下したのは、巨大な金属製のモンキーレンチ。

こんなものが、先ほどの速度で頭部に当たった場合、通常の人間であればほぼ即死する。

例えば誰が見たってそれが分かる程の豪速球だったのだから。

もしもダンが顔を上げなかつたら。

彼が腕で防御するのが数秒遅れていたら。

この飛翔体は容易く彼のこめかみにめり込んで、頭蓋を一瞬で粉碎していただろう。

一連の出来事を目撃していた弾道計算機は、そのシミュレート結果から、先ほどの凶

弾が明確な殺意を持って放たれたのだと、完全に理解した。

「ふうーっ！　ふうーっ！」

レンチの飛んできた方向から、荒い息づかいと共に何者かがのっそりと姿を現した。血走った眼に剣呑な光を宿したまま、月明かりに照らされて出て来たのは……昼間の  
大男、ゴリー。

倒れたダンをニマニマと見下ろしていた男は、憎たらしい男の死体が、小さくうめき声をあげるのを聞いて、たちまち怒りに顔を歪ませた。

そして、足元に落ちていた血塗れの工具を拾い上げ、トドメを刺すべく歩み寄り……  
バチバチッ！

男の立っていた地面が光線で爆ぜる。

その直前に、野生的な直感でもってその場を飛び退いていた大男は、ピーピーがなり立てる不快な音の存在を認めると、今ようやく気付いたとでも言わんばかりに目を見開き、自らの倒すべき相手がもう一匹現れた事を悟った。

「ス。ク。ラ。ッ。プタ。　タ。ン。パク。シ。ッ。」

微かに震える電子音へ向けて、ゴリーは一瞬で歯茎を剥き出しにした。

## 脅威の超エンジン（Ⅲ）

「マ。ツ。サ。ツ。カ。イ。シ。」

U—8の両手首に装備されたターボ・パラライズブラスターが回転し、麻痺効果のある光弾を滝のように噴射した。

ガトリングのように弾みをつけて、徐々に速くなっていく発射レート。

しかし、ゴリーはU—8が銀の腕をこちらへ向けた瞬間には、すでにその場から飛び退いていた。

野性の勘で、何らかの攻撃が来ることを察知したのだ。

腰を曲げて拳を地面につけたかと思うと、獣のような四足歩行で素早く草むらを駆け抜け、半円を描くように敵の側面へと回り込む。

ゴリーの駆け抜けた場所を、遅れて光の礫が追従し、閃光が弾け飛ぶも、その姿を捉えきれない！

これがゴリーの巧妙な点だった。

もしも彼が、自らの敏捷性を過信し、一直線に距離を詰める事を選択していたら、た

ちまちま濃密な弾幕の中に飛び込む事になっていただろう。

しかし、彼は昼間にU—8が動いているところを観察し、彼の弱点ともいべき特性に気付いていたのだ！

つまり、あの変な鳴き声のする生き物は、ほとんど腰をひねる事が出来ない、ということに。

U—8はその胴体に、エンジンやバッテリーなどの巨大で重要な部品を多数収納しているため、腰部の可動域が非常に制限されている。

出来てせいぜい屈むくらいが関の山。

そもそもユートムは、地下基地の警備用インタフェースだった。

狭くて長い通路は、ユートムがその巨軀をもって立ちただかるだけで、脱走奴隷は道を塞がれ通り抜ける事が出来ず、それでも突破を図る愚か者には左腕でパンチング、逃げる背中には右腕の麻痺銃を浴びせるだけで良かったのである。

ユートムは設計段階からして、『距離』という殆ど二次元的な概念しかない場所での運用以外は、全く考慮されてはいなかった。

だからこそ、その構造的に縦軸方向への対処能力は優秀であったが、横軸への対応は非常に弱い。

例え現在装備されている武装の連射速度自体は高くとも、こんなに拓けた場所で、三

次元機動をする素早い相手に偏差射撃が出来るようには造られていないのだ。

もちろんゴリーとて、そこまで詳しく敵について考えた訳では無い。

ただなんとなく、横に走ればあいつは追いつけない……と思っただけだ。今回はそれが大当たりだっただけで。

「チ。ヨ。コ。マ。カ。ト。」

人間離れた跳躍力により、腕部の可動域で対処可能な射角から一気に外れられてしまい、U-8はその場で足踏みして敵を正面に捉え続けなければならなかった。

だが、それも長くは続かない。

なんとか広域サーモセンサーで敵の動きについていこうとしていたU-8の視界から、四つ足歩行の影が掻き消えた。

そしてそれを追うように連射していたパラライザー弾が何かに阻まれ、視界が真っ白に。

慌てて赤外線カメラに切り替えた彼の目に飛び込んできたのは、光弾を弾き返すポインターの車体。

敵は、障害物を利用してまんまと射線を遮る事に成功したのだ。

そして、ババン、ペコン！ という金属の上を何かが駆け上がる音と共に、ポインターの影から人型の何かが飛来した。

車体後部を踏み切り板に使ったゴリーが、モンキーレンチを上段に構えて、飛びかかってきたのだ!

ゴリーは、自身の怪力で振り下ろされた金属工具が、ガラス張りのヘルメットを打ち砕くのを確信する。

……しかし!

「チ。ヨ。コ。サ。イ。ナ。」

「う、うごっ!」

正確無比に動いた右腕のパワーハンドが、レンチをガツシリと受け止め、固定した! まさか止められるとは思わず、驚愕するゴリー。

どれだけ力を籠めてもビクともしない。

「ポツ。シ。ユ。ウ。ポツ。シ。ユ。ウ。」

「うぎっ!」

やっとこの如き形状をしたパワーハンドが、工具を掴んだまま手首ごとぐるんと回転し、絡め取るような動きで敵から凶器を奪う。

「ムダナ テイコウ ハ ヤメナサイ」

武器を失った相手に、電子音で呼びかけるU—8。

そのまま彼がパワーハンドに力を籠めると、メキメキ音を立てて、くの字に折れ曲



がっていくモンキーレンチ。

「うほっ!!」

金属塊が展延する程の握力を見せつけられ、目を見開いたゴリーは、サツと身を翻すと近くの木陰に隠れる。

「タダチ ニ トウコウ セヨ」

倒れたダンを庇うように前に出るU—8の姿を、ゴリーは血走った目で睨みつけた。邪魔な雄を殺そうとしたのに、奴が邪魔をするせいでトドメがさせない。

それにあいつは自分よりも力が強い。

……ゆるせない。

それを認識した途端、ゴリーの中で、凄まじいまでの殺意と闘争本能が爆発した。

……ころしてやるっ!!

「ふーっ! ふーっ! フゴッ! ウがアアアアアアアっ!」

咆哮、そして——変貌。

ゴリーの顔を、指を、そして全身を黒い毛が覆っていく。

膨張し、盛り上がった筋肉によつてシャツは破れ、ミシミシと骨格が組み変わる音が、夜の闇を引き裂いて、辺りに響き渡った。

「ウギヤアアアアッ!!」

蹲った男が、月明かりに向かつて吼えた時、その顔面すらもはや醜く歪み果て、掘りはより深く、唇は突き出し、そこにあったのは紛れもなくゴリラの貌。

実はこのゴリーは、ゴロン星人によつて脳波を猿と入れ替えられた、猿人間だったのだ！

「ウホッ!! ウホッ!!」

先ほどよりも素早い身のこなしで、するすると木の幹をよじ登ったゴリーは、一番太い枝を掴んでゆっさゆっさと葉を揺らし、見せつけるように突き出した自らの胸板を、両の掌で打ち鳴らした。

「ウキキキーツ!!」

そのまま枝をベキリとむしり取つたかと思えば、不安定な樹上をものともせず、両足だけで立ち上がつて、力一杯それを槍投げの要領で放り投げる！

「テ。イ。コ。ウ。カ。ク。ニ。ン。」

しかし、それにも焦らず短く呟いたU—8の右腕部で、花卉が開くようにラジエーターが展開したかと思うと、彼は飛来する大質量に向かつて、赤熱する黄金の右ストレートを振り抜いた！

「ユ。ー。ト。イ。ン。パ。ク。ト。」

轟音。

高速回転するパワーハンドの軸に溜まった熱量が、強制冷却機構によつて圧縮空気と共に排出され、一直線に飛来する即席破城槌を真正面から木っ端微塵に粉碎した！

「ホオオオオオオオオオオオオッ！」

「パイ。シ。ヨ。パイ。シ。ヨ。」

その貌を怒りにどす黒く染めて、戦闘力をさらに倍増させた敵が、性懲りも無く枝を力任せに叩き折るのを確認し、次に左腕を大きく掲げるU—8。

「チ。エ。ー。ン。ア。ー。ム。」

月明かりで黄金色に輝く手首の中で、ジャキリと何かが装填されたかと思うと、次の瞬間には、爆砕ボルトの圧力で彼の左拳……つまり高密度のチルソナイト鉄球が凄まじい勢いで射出された。

銀の拳骨が猿もどきの顔面を殴りつけようと迫るが、大きくジャンプし、それを回避するゴリー。

枝が千切れ飛び、木の幹に鎖鉄球が深々とめり込んだ。

U—8が鎖を巻き取り始めれば、バキバキ音をたてながらゆっくりと倒れていく巨木。

しかし、その繁茂した枝葉がU—8のカメラを遮った瞬間、一つの影が飛び出した。木が倒れる勢いすらも利用して、ゴリーが奇襲を仕掛けたのである！

すたっ……と、U—8の背後に着地したゴリーは、手に持っていた太い杖を機械人形の股下に差し込んだかと思うと、それをテコのように使つて彼の左脚を絡め取りつつ、渾身の体当たりを背中にむけて喰らわした。

「ア。ッ。」

と言う間にすつころんで、バタバタと藻掻くU—8。

もちろん、いつかのキングジョーのように自力で起き上がれないという事はないが……それでも即座にというわけにもいかなかった。

そしてそれは大きな隙となる。

「クキキ……」

「ナ。ニ。ヲ。ス。ル。」

ゴリーは、傍に転がっていた金属片……折れ曲がったレンチだったものを取り上げると、それを迷い無く差し込んだ！

U—8の右腕で、シューシューと水蒸気を噴き上げている排気口に目掛けて。

「ヤ。メ。ロ。」

「ウオオオーッ！」

それをレバーのように力一杯押し込めば、ピスが弾け飛び、無惨に歪んでいくラジエーター。

そうして取っ掛かりが出来てしまつてからは速かつた。

缶切りの要領で歪みや亀裂をどんどん拵げていったゴリーは、その破損個所が肩口にまで到達した事を見てとると、こんどは蛇腹のように重なつた金属板を引つ掴み、ニヤリと嫌らしい笑みを浮かべ……

「マ。サ。カ。」

「ガアアアアッ！」

総身にあらん限りの力を込めて、歯を食いしばつた猿人が力いっぱい関節を逆側へ引き倒せば、歯車と火花が飛び散り、ついにU—8の右腕が、肩口からボロリともぎ取られてしまつたのである！

ゴリーは猿人間だ。

しかし、ただの猿人間ではない。

脳波を猿と入れ替えられたと言っても、それだけで人間が鉄を破壊する怪力や、桁外れの跳躍力を發揮したり、ましてや野獣のような姿に変身できるわけがないのだから。

実は彼の肉体には、外科手術によってゴロン細胞が埋め込まれており、感情が昂るとそれら細胞が活性化して、その肉体を異星人に近しい状態へと瞬時に作り替へてしまふのだ。

もちろん、純粋な馬力や装甲ではU—8に軍配が上がるだろう。

しかしゴロン細胞を活性化させ、超猿人の姿となったゴリーは、怪力はもちろん、皮膚や毛も柔軟性はそのまま鋼鉄並みに強靱となり、なにより俊敏さは比べるまでもない。

その上、1番の長所は……その知能だ！

確かに彼の言語野は大きく退化し、短い単語や呻るような発声でしか意思疎通が取れない。

故に勘違いされやすいが……彼は簡単な命令に従い、敵味方の区別が付き、道具を使ってポインターを破壊する程度の知能は、未だに有しているのである！

これが、脳を丸ごと移植するのではなく、脳波だけを交換する利点と言えるだろう。

ゴロン細胞を使いこなす為には、強い野性本能や激しい闘争心が必要だが、知能は人間並みのままに保つ。

それをクリアする方法こそが、まさに脳波交換だった。

そして驚くべきことにゴリーはこの力を、なんのアイテムも使わず瞬時にスイッチし、特別なエネルギーもまったく必要としないのだ！

廉価版ウルトラセブン……いや、ある意味ではその上位互換とすらも言えるだろう。

フルハシ以上の怪力で、U-8に準ずる装甲を有しながら、ダンよりもタフかつ、アマギのように身軽で、ソガの如くずる賢い。

にもかかわらず、ひとたび変貌するまで外見は普通の人間と変わらない。

ゴロン医学の粋が生んだ、この恐るべき超兵こそ、猿人ゴリーの正体なのだ。

「キ。タ。タ。タ。イ。タ。メ。ー。ジジジジgggggggggggg」

「ウホオーツ！」

筆り取ったU-8の右腕を高々と掲げ、勝利の雄叫びを上げるゴリー。

もしもゴリーの標的が右腕でなかったら、また結果は違っていたかもしれない。

U-8はかつてのボーグロイドとの死闘によって、オリジナルの右腕を完膚無きまで破壊されてしまっていた為に、こちらだけは丸ごと防衛軍製の物と取り替えていたからだ。

いかにハイマンガンスチール製の装甲と云えど、それらを繋ぎ止めるビスやボルトまでは、異星人の技術には敵わなかったのである。

「キキキッ」

ビービーと真つ赤なランプを点滅させて動かなくなった相手を見ると、ゴリーは満足そうに舌を出し、徐々に人間の姿に戻っていく。

そうして、ようやく目的を果たそうとしたところで……

ビシッと何かに叩かれ、恐怖の表情で振り向いた。

「ゴリー！……貴重な実験材料を殺したわね！」

そこには白衣を翻し、電磁ムチを振りかぶった女助手が怒りの形相で立っている。言われるままに、頭から血を流す雄に目を落とせば、奴はピクリとも動いていなかった。

……ころした？

あたまをなぐれば？ しぬ。

うでをもいだら？ しぬ。

……ついにやったのだ。

「ぐへへえ……」

「なにを笑っているんだ。お前はお仕置きだよ！ ゴリー！」

この雌が怖いのはいつもの事だ。

ゴリーはただ、ライバルを排除した満足感に浸っていた。



「う、うう……」

よろよると起き上がるダン。

常人であれば確実に脳挫傷か脳内出血で死んでいただろう。

しかし、例えば人間の姿に身をやつしていても、その正体はウルトラセブンなのだ。

その生命力の強さといったら、並大抵の怪我では死なず、身に宿した太陽エネルギーが尽きない限りは、回復力も尋常ではないのである。

ダンが血を拭い目を瞬かせると、朦朧とする視界の中で、銀色の仲間が倒れ伏しているのが見えた。

「……ハッ!? ユート! 大丈夫か……!」

戦友に駆け寄り寄ったダンは、そのあまりの悲惨さに思わず叫んでしまう。

「そ、そんな……! キミ、腕がっ……!」

「ダイジョウブ 異常ナシ ダン ハ ダイジョウブ カ」

「あ、ああ……」

「ヨカッタ」

「……そうか、キミが守ってくれたのか……ありがとうユート」

「シユウゲキシャ ハ パーク ノ ショクイン デシタ」

「なんだって!!? ……ハツ! アンヌが危ない! いくぞ!」

走り出そうとするダンだったが、U-8がうつ伏せに倒れたまま起き上がってこない事を訝しんだ。

「どうしたんだい、ユート? やっぱり腕以外にも、どこか故障してしまったんじゃないか……」

「バッテリーザンリヨウ テイカ」

「そうか、それで起き上がれないのか……」

確かに全力戦闘を行ったなら、充電が必要なのはずだ。

しかし、修理や補充をしている時間は無いし……

困ったように辺りを見回したダンの目には、ボンネットが開いたままのポインターが映った。

## 魯威の超エンジン (IV)

その頃、パークの地下室では……

「キャアーツ!!」

ムチで打たれた手首の痛みに、悶絶するアンヌ。

それを冷徹な表情のまま見下ろす白衣の助手。

外の戦闘音を聞きつけ、自室を抜け出してパーク内を探っていたアンヌだったが、不意を突かれ囚われの身となっていたのだ。

「アアツ……ウツ……」

振るわれるムチの痛みに悶えるアンヌの悲鳴に反応し、地下室の隅からは抗議するよ  
うな激しい唸り声。

「うううう!!」

「……むいこー」

鎖に繋がれたゴリーだ。

その扱いを見たアンヌは、女助手の所業を非難する。

だがそれを、顔色ひとつ変えないままに、フンと鼻で笑い飛ばした彼女は、吐き捨てるように言った。

「その男は、人間の格好をした猿人間さ」

「えっ？」

「体は人間だけど、脳波は猿のものと交換されているんだ。この……脳波交換装置によつてね。お前の脳みそも、今夜、猿のと替えてやるからね」

助手の指し示した先には、機械の取り付けられた手術台があつた。

絶好のタイミングで現れるミヤマ博士。

取り纏るアンヌを冷たく突き放すと、淡々と命令を下す。

「手術台にのせろ」

「はかせ……」

博士はアンヌに目もくれず、普段の温厚さからは正反対の形相を浮かべると、隅で暴れるゴリーに向かって指を突きつけて、激しい口調で彼を叱責した。

「お前の勝手な行動によつて、我々の目的が危うく警備隊に漏れるところだった！……バカめが！」

「やめて！……お願いします、やめてください！」

アンヌの懇願がまるで聞こえていないかのような博士は、機材の様子をチェックし、

調整を始めた。

それを見てアンヌは理解する。

博士は何らかの催眠状態に置かれ、操られているのだと。

彼は生態学の権威であつて、このように高度な装置を作製したり、現調できるほどの工学知識はないはずだ。

博士を操っている何者かがいる……

機械を頭に被され、絶望の悲鳴を上げるアンヌ。

すると、それを見ていたゴリーの顔つきが、一挙に剣呑なものへと変わった。

そして始まる……変貌。

「うがあああああつ!」

「な、何をするゴリー!? やめろ!!」

超猿人の姿となったゴリーは、自らを戒めていた両腕の鎖を引きちぎると、アンヌを手術台に固定していたベルトを掴み、力任せに破壊した!

制御下にあつた筈のゴリーが思わぬ暴走をしたことで、呆氣にとられる博士と助手。

毛むくじやらの指が、アンヌへ向かつて伸ばされた!

その時!

ドンツ!!

地下室全体が大きく揺さぶられ、天井からパラパラと破片が落ちて来る。

狂乱の最中にあつた三人と一匹は、思いがけぬ衝撃に一旦動きをとめ、敵味方すらも忘れた表情のまま、その音の出どころに向かつて一斉に振り向いた。

地下室の重厚な鉄の扉が大きくへこみ、周囲の壁には蜘蛛の巣のような亀裂が幾重にも走っているではないか。

扉が歪んで出来た隙間の向こうから、誰かの声が漏れてくる。

「もう一度だ、頑張れ!」

「……まさか」

「それ、さん、に、いち!! やれっ!!」

バゴオオオンツ!!

重々しい鋼鉄の扉が、くの字に折れ曲がつて紙切れのように蝶番ごと弾け飛び、薬品棚を直撃する。

分厚いモルタルの壁が粉々に粉碎されて出来た大穴の向こう、濛々と舞い上がる砂ほこりが晴れた先には——隻腕の鉄人が、残された片腕を振り抜いた姿勢のまま突っ立っていた。

「ルック アット ユー」

その背後から、怒りの形相を湛えた男が、ウルトラガンを構えて部屋へ突入する。

U-8をポインターのエンジンと繋ぎ、彼のバッテリー上がりをジャンピングスタートさせたダンプが、救援に現れたのだ！

「ダンプ！」

「アンプ！」

「アンプタイイン」

しかし、そんな乱入者の顔を見て、より一層怒り狂った者がいる。

大事な雌を奪われると思ったゴリーだ！

「うがああーッ!!」

超猿人が絶叫と共にダン目掛けて飛び掛かり、床に彼を叩き伏せると、両手を固く堅く組み締めて大上段に振りかぶる。

今度こそ、そのにつつき顔面に拳を振り下ろし、物言わぬ挽肉に変えてしまおうつもりなのだ！

「ガラアキ ダゾ」

そこへ突進したU-8が、自身の重量を活かして馬乗りになったゴリーに体当たりした！

これにはさしものゴリーですら、たまらず吹き飛んで、その先に堆く積まれた標本の群れに突っ込み、藻掻く。

「ツイゲキ ツイゲキ」

このチャンスに、U-8は残された左腕の鉄球を高々と振り上げるが、それより速く。その手首に細長いものが巻き付いた。

「邪魔をするな！ 機械人形！」

助手は電磁鞭のスイッチを入れ、回路をショートさせようと試みるも……

「カデンヒン ジャ アルマイシ」

拷問用、つまり生体を殺さない程度に調節された電圧では、彼の絶縁加工を突破出来なかった。

U-8が縛られた左腕をぺいっと軽く振ってやるだけで、つられた助手は本棚へ激突し、その場にノびてしまう。

「ええい……くそっ！」

「あつ、待て！」



形勢不利と見たか、博士は壁伝いに大穴へにじり寄り、そこから外に向かって脱兎の如く駆けだした。

起き上がったダンが腕を伸ばすも届かない。

咄嗟にウルトラガンを構えるも……

「待って！ 博士は操られているのよ！」

「そうか……しまった……」

逃げた博士か、目の前の怪物か。

逡巡するダン。

「オエ ダン」

瓦礫から身を起こし、此方を睨みつける野獣を牽制しながら、U—8が告げた。

ダンはずらりとアンヌを一瞥する。

それに彼女は頷き、短いアイコンタクトを交わした。

「アンヌを頼むぞ、ユート！」

「マカセロ」

頼もしい電子音を背に、ダンが階段を駆け上る。

彼の身体能力をもってすれば、息切れした博士に追いつくなど造作も無い。

「ダァーッ！」

「うっ！」

取り押さえた博士の鳩尾に、キツイ一発をお見舞いすると、気を失ってその場にくたりと崩れ落ちる。

「ふう……あとは……」

事件の黒幕を倒すだけだ。

その時、ダンの脳内に甲高く耳障りな笑い声が響く！

「ウキヤキヤキヤキヤキヤ!!」

「やっぱり貴様……ゴロン星人！」

「さすがはセブン。よくぞ見破った」

「人間と猿の脳波を入れ替えて、どうするつもりだ?」

「猿人間を増やすんだ。地球はやがて猿人間が支配するようになる!」

ガイシテス太陽系またの名をゴロンネビュラと呼ばれる星域は、高度に発達した宇宙猿人達が暮らす宇宙である。

星系内の各惑星はどこも自然豊かで、様々な種類の猿人達が円熟した穏やかな精神で助け合い、それぞれの持ち味を活かした社会を形成しているが、残念な事に時折、平和な社会に適応できず、先祖返りした狂暴性を持って余す重犯罪者が一定数排出されるのだという。

そんな時、第五惑星イプシロンでは、逮捕した凶悪犯に対して、脳波交換を用いて能力はそのままだに、人畜無害な性格に矯正して社会奉仕させる精神改造刑を言い渡すのだ……と、セブンはかつて知り合ったサイボーグエージェントに教えて貰った事があった。

恐らくこのゴーロン星人も、そのような危険思想を持つ脱獄囚だったのだろう。

まさか自分がかけられるハズだった処刑道具を、地球侵略の為に使いこなしてしまうなんて……なんと恐ろしい奴だ！

確かゴーロンネビュラの中でも、金色のたてがみを持つ種族は、高貴な血筋のエリートとされ、他の猿人よりもさらに進化した頭脳によって、様々な超能力を発現するのだという。

脳に直接語りかけてきた所を見るに、おそらくこの個体は、超常的なテレパスを駆使できるに違いない。

「それで博士たちを、脳波催眠にかけて操っていたんだな！」

「彼らは私のロボットだ。私の思い通りに動く。だがお前は騙せなかった。その代わり

……殺す！」

「ぐわっ!!」

ウキヤキヤキヤ!!

猿の不快な叫び声が木霊する。

モンキーパーク内の無数の猿の思考を、直接セブンの脳へ送りつけたのだ！

脳波攻撃に、頭を抑えて苦しむダン。

這いつくばるようにしてセンターから外に出てみれば、そこには巨大化したゴーロン星人がこちらを見下ろして嘲笑っている。

「デュワッ！」

ウルトラアイを装着し、自らも巨人の姿となったセブンは、アイスラッガーを構え、ゴーロン星人と相対する。

しかし、途端に掻き消える星人の姿。

セブンの脳のうち、視覚情報を司る部分に猿の思考を送り込み、自分の姿を認識出来ないようにしたのだ！

……だがセブンは冷静だった。

かつてのガッツ星人との戦いを反省した彼は、目に見えるものだけではなく……心の目で見て、敵の気配や敵意が動く瞬間を待っていた！

『デュアア！』

セブンの投げ付けたアイスラッガーが、ジャンプしたゴーロン星人を空中で撃ち落とす！

『ウギギギ……おのれ……!』

毛皮の防刃効果で致命傷を回避したゴロン星人は、胸元から血を流しつつ、セブンを睨む。

こちらが見えていないと思って油断した……だが!

『これでもくらえ!』

『デュアーツ!』

ゴロン星人が全身全霊で放った脳波光線がセブンの頭脳を揺さぶった。

「ふっ—っ! ふっ—っ—!」

地下室に獣の荒い呼吸と殺意が充満する。

じり……じり……と距離をつめるゴリーに対し……

「シヨー タイム」

爆薬が装填される音と共に、U—8が爆砕ストレートを真正面からゴリーの顔面に目掛けて解き放った!

しかし、ゴリーはその攻撃を知っている。

ひよいと首を逸らし、迫り来る鉄球をやり過ぐすと、無防備な敵に向かって駆け出そうと……

「うがつ!？」

背後で何かがぶち当たる硬質な音が二回響き、その内容も分からぬまま、ゴリーは咄嗟に身を伏せる。

その頭上を、鈍く光る鉄球が通り過ぎて行くのを見て、彼は思わず身震いした。

これが狙いだっただのか!

だが……

「ばかめ」

一発逆転の策を失敗し、今度こそゴリーは勝利を確信した。

雄叫びを上げて、黒き野獣が凄まじいスピードで突撃する!

「サル ノ ヒトツオゴエ」

その瞬間!

U—8の胸奥で唸りをあげる、脅威の超エンジン!

ぎやりと地下室の床を削りながら、巻き取られていく鋼鉄の鎖!

恐ろしい精密さで腕を振るったU—8によって、撃ち出された鉄球の軌跡を描いてい

た黒金の太蛇が、その鎌首をもたげたのだ!

「うーあつ!？」

鈍重なU—8には、弾丸よりも速く走るなんて芸当はとて出来ぬ。

しかし、撃ち出された弾丸がどのような軌道を描くか予測するなんて、それこそ『オチャノコサイサイ』なのだ。

彼は、左手の鉄球を地下室の隅に向かつて発射し、その壁に反射させる事で、あやとりのようにゴリーを囲む鎖の結界を描いて見せたのである！

なにせ彼に搭載されている電子頭脳は、あの宇宙龍ナースすらも制御しきつてみせるくらいに演算能力が高い。

金属製の紐を、どううねらせれば良いかなんて、階段を登るよりもずっと簡単なのだから。

今こそ振るえ、その腕を！ ……鋼鉄の腕を！

「ぎゃあああつー！」

「コレガ ホントノ サルマワシ」

「すごいわ！ ユートー！」

ゴリーは全身に絡まった鎖を引き千切ろうとするが、力の籠めやすい姿勢がとれるならいざ知らず、転んだ状態で、その全てを一瞬のうちに外す事など流石に出来なかった。

「ムダナ テイコウ ハ ヤメナサイ」

「うっー！ うう……」

「そうよ、大人しくなさい」

「……」

しばらくばたばたと暴れていたはゴリーは、アンヌの呼びかけに観念したのか、ついに大人しくなる。

のっしのっしと歩いていくUー8。

……突如、猿人の眼がぎらりと光った！

「うがあああああああつ!!」

「キヤアツ！」

隣に立ったUー8の脚をむんずと掴むと、それを支えに身を起こしたゴリーは敵の背後をとり、その銀色に光る太い首へ、自らの腕に絡まった鎖を輪のようにして巻き付けたのだ！

「ふんんんんんツー!!」

歯を食いしばり、渾身の力で邪魔者の首を締め上げるゴリー。

こいつさえ、ころせば。

背後で悲鳴を上げる雌を手に入れる事を思い、喜悦のままに声をあげ……

「うぐるうう……はっ!？」

「ドウシタ ボケザル」

「し……しな ないいつ……!？」



ゴリーの声が、はじめて恐怖に引き攀った。

腕を千切っても、首を絞めても死なないなんて。

「ば……………ばけ もの……………」

「……………」

U—8は返事の代わりに、右腕を動かした。

在りもしない右腕へ、今だ動けと電気信号が走る。

剥き出しになつていた接合部から、火花が飛んだ。

「ウギヤアアアアアアアアッー!!!」

鎖を伝つてゴリーの全身を電流が苛んだ。

恐怖と痛みで闘争本能が萎えていくにつれ、ゴリーの体が人間のものへと変わつていく。

「アンヌ イマダ」

ゴリーは、感電により朦朧とする意識の中で、あの雌が銃を構えてこちらを睨んでいるのを見た。

彼女の瞳をハッキリと真正面から見たのはこれがはじめてだ。

そこに浮かんでいたのは……………確かな拒絶の意志だった。

ゴリーはチクリとした痛みを感じて、すぐさま深い眠りに落ちた。

その痛みが、針の刺さった腕からするのか、はたまた無傷の胸からするのか分からないままに。

「ユート！ 大丈夫!?!」

「ワタシハ ダイジョウブ」

麻酔針をアタツチメントしたウルトラガンを放り出し、アンヌがU-8に駆け寄る。

「ソレヨリ ダン ヲ タスケテ クダサイ カレ ハ チリヨウ ガ ヒツヨウ デ  
ス」

「ダンは怪我をしているの!?! ……分かったわ!」

「……」

アンヌがパタパタと階段を登っていくと、地下室にはゴリーのいびきだけが残されるのだった。

## 脅威の超エンジン（V）

ダンを探すアンヌが、センターから飛び出して最初に見た光景は、思わず目を疑ってしまうものだった。

あのセブンが、巨大な猿の怪獣に両足を抱えられて、どこかへ引き摺られていこうと  
していたのだから。

「……なんとかしなくっちゃー！」

アンヌは口元をキュツと真一文字に引き締めると、急いでポインターへ向かった。

『ウキョキョキョキョ!!』

セブンを脳波攻撃でノックダウンしたゴーロン星人は有頂天だった。

なにせ彼の計画にとって最高の実験材料が手に入ったわけであるからして。

ウルトラセブンを脳波交換装置にかけて手駒にする。

もはやこれ以上ない収穫だ。

一時はどうなるかと思っていたが、ともすれば当初の予定を大幅に上回る大成功と言える。

彼がいくら強力なテレパシーの使い手といっても、一度に何人も催眠術で操れる訳では無い。

その駒が優秀であればあるほど……端的に言えば賢ければ賢い程に、その思考を操るのは負担が大きかった。

それこそマヤマ博士のように理的な人物を対象にした場合、怪しまれないような元の人格をトレースするだけでも至難の業だ。

逆に言えば思考が単純な者なら、負担も少なく同時に催眠支配下に置く数を増やせる。

しかし、ただの馬鹿ばかり数を増やしたとしても、者の役にも立たない。

そこで超猿人だ。

最低限の思考能力だけを残し、複雑な感情は排す。

そして個々の戦闘能力は、移植したゴロン細胞で底上げする事により担保する。

こうして出来た超兵を、直々に催眠支配した少数の優秀な部下に指揮させるのだ……見た目は人間と変わらない為に、静かに浸透したゴロンの部隊が、各地の街中で、重

要区間で、基地内で一斉に決起した時、地球人は為す術も無いだろう。

これぞ最強なる猿の軍団。

あいにくと、このゴロン星人は脱獄犯であるために、強奪した脳波交換装置以外の準備が圧倒的に不足していた。

だからこそ兵力を現地調達せねばならぬ都合上、僅かな細胞だけを元手に作れる超猿人が、非常に安上がりで適していたと言うわけだ。

あと必要なのは数を揃えるための時間……だったのだが。

まさかこの星の猿どもが、こんなに直情的で考え無しだとは思わなかった。

母星では、猿と言うのは高度な社会性と哲学を駆使する者達であり、野性という言葉はそれこそニンゲンの代名詞だったと言うのに……

こちらでは立場が逆転しているのを見ていささか驚いたが、その肝心のニンゲンが母星の森で見かけるものと知能レベルにおいてさして大差無かったので、てつきり猿ももう少し利口なのだとばかり思っていた。

おかげで計画が露呈しかけたのを、ウルトラ警備隊の精鋭を手駒にする事で補おうとしたのだ。

単なる飼育員ですら、超猿人に改造すればあれほどの戦闘能力を得られるのだから、元となる材料が優秀であればあるほど、スペックを引き上げられるわけである。

しかし……よもやウルトラセブンそのものが手に入るとは……

もはや細かい計画など必要無い。

これほどに強力な大駒は、一つあれば充分なのだから……

ゴロンは皮算用に浮かれ過ぎて、セブンへの脳波攻撃がどんどん雑になっている事に気付かなかつた。

……おまけに、自身のふさふさとした長い尻尾が、さつきから興奮によつて上下しっぱなしであり、気絶したセブンの顔を何度もべしべしと叩いていたと言う事にも。

『ギャア!? あっつ!?!』

目を覚ましたセブンが、目の前の背中にエメリウム光線を叩き込んだ事で、ようやく自身の失態を悟るゴロン。

彼は強力な超能力に驕り、他者を見下しているが……その実、自身が思うほどには賢くなかつた。

それこそ母星には、彼なんぞを遥かに超える大天才がゴロゴロいたので……無意識の劣等感は大するばかりで、それが彼に道を踏み外させたのである。

ここで自らを客観視出来る者ならば、そもそもこの場にはいなかっただろう。

どれだけ医学や工学に優れていて、素晴らしい超能力が使えても……その他者を蔑む愚かな本質こそが群れを追われた原因なのだと、彼は分からなかつたのだ。

『アユアー！』

『ギユエギユエギユエエエ!!』

怒りに身を震わせたゴーロンが、ふらつくセブンに躍り掛かる。

鋭い爪がぎらぎらと光る敵の手を掴み、攻撃を受け止めるセブンだが……

『ギエギエギエギエギエー！』

『ジユ……ワツ……』

逆に手の甲を握り込まれ、徐々に逆手にされていく。

腐っても宇宙猿人、その身体能力は本物だ。

あの宇宙屈指のパワーファイターであるセブンをして、純粋な力比べでは敗北を喫してしまうのである！

逆側に力をかけられたセブンの肘関節が、ミシ……ミシ……と痛ましい音をたてる。

危うしセブン！

「やめなさい！」

ゴーロンの肩が突如として爆発する。

『ギユアアア!!』

アンヌが、ポインターの後部座席から引つ張り出したエレクトロガンで攻撃したのだ。

「キャッ！」

それを行った当の本人とは言えば、エレクトロガンの反動に、短い悲鳴をあげて尻餅をついていたが。

両手でしっかり支えていたのに……

実は彼女も、これを実戦で使うのは初めてだったので、その重量と取り回しの悪さに驚いた。

これは何かを銃架にしなれば、直立射撃なんかとても無理だ。

よくも他の隊員は、こんな装備をホイホイ担いで使っていたな……と彼女は内心で舌を巻く。

連射でどんどん跳ね上がる銃口は、全然狙いが付けられないし、そもそも重心が前に寄っているせいで構えるだけで一苦労なのである。

こんなじゃじゃ馬を、時々フルハシ隊員は二挺もそれぞれ片手で担ぎ上げたりするし、あまつさえソガ隊員に至っては精密射撃までやってのけるの言うのだから……

「みんな、ちよつとおかしいんじゃないの……!？」

とはいえ、アマギ隊員ですら普通に使いこなしているのを思い出し、少しばかり情けない気持ちになりながら、自身の細腕を恨めしく思うアンヌだったが、両頬をピシヤンと叩いて気合いを入れ直した。



「今はワタシがしつかりしなきやー！」

ここにはダンもユートも居ないのだから、セブンの苦境を救えるのは自分だけだ。

階段に半ば座り込むようにして、EHガンの短く切り詰められた銃床を段差へ宛がうと、自身の体全体を使ってきかん坊を押さえ込み、引き金を引く。

「うううぐぐぐぐつ……！」

密着面からダイレクトに伝わる反動。

当然の如く込み上げる吐き気に耐えながら、死に物狂いでEHガンを発射するアンヌ。

狙いも何も無い攻撃は、てんでばらばらに撃ち出され、命中弾を殆ど与えられなかったが、セブンと大猿の力比べに横槍を入れる事には成功した。

『ウギョ、ウギョオオオ！』

その場から大きく飛び退くと、腕を振り回し、胸部を打ち鳴らして怒り狂うゴーロン星人。

敵の拘束からは逃れられたセブンだったが、左手首を押さえながらフラフラとその場に片膝をつき、せつかくの機会をふいにしまった。

変身前のダメージに加え、執拗な脳波攻撃が彼の動きを鈍らせているのだ。

『デュ……オ……！』

それでも、アンヌを見つけたゴロンの瞳が妖しく光るのを見るや、飛び付いて怪光線の狙いを逸らす。

怒りに我を忘れている猿人は、容易く攻撃対象を変更した。

すなわち、腰に縋り付く真つ赤な背中へ、強烈な打ち下ろしの連打を繰り出し始めたのである。

「いけない!」

咄嗟に引き金を引くアンヌ。

だがしかし、先程まで景気良く吼えていた連装ロケット砲は、光弾を一発吐き出しただけで、ウンともスンとも言わなくなってしまった。

「そんな、弾切れ!」

積載量とは、携行可能な弾薬数に直結する。

慌ててウルトラガンを引き抜き、敵にレーザーを撃ちかけるも、興奮した宇宙猿人の気を逸らす事も出来ない。

「お願い、止まって……!」

そんな時、大猿の首筋へウルトラガンとは比べ物にならない程極太の光線が着弾した。

聞き慣れた甲高いエンジン音。

ウルトラホーク1号だ！

警備用ロボットであるU-8は、ボディに何らかの重大な破損が発生した場合、直ぐさま作戦室へ警戒信号が送られるように、自動プログラムが組んであった。

彼がゴリーに腕をもぎ取られた時点で、基地のメンバーは素早く出撃準備に取りかかっていたのである！

「おい、ちつとも堪えてねえじゃねえか。ソガ、もつとよく狙えー！」

「おつかしいなあ……いや最近、ちよいとばかり寝不足でしてね」

「ダメよ！ あの敵にはレーザーが通じないの！ ……きつとあの黄金の毛皮が、光線を吸収してしまうんだわ！ じゃないと、セブンのエメリウム光線が効かないはずなものー！」

「あ、そつかあ！ なる程ね！ そういう事なら……」

通信機から聞こえるアンヌの声を聞き、得心した様子のソガはポンと手を打つと、目の前のボタンを乱暴に何度も押し込んだ。

ホークから無数のロケット弾が撃ち出され、ゴロン星人の周囲で次々に爆発する。飛び上がって驚く宇宙猿人。

「そうか、いくら進化したとはいえ、生物である以上、火への根源的な恐怖は拭い去れん！」

「それに見たところあの敵は、猿の中でも特に樹上生活に適應した種に酷似しています。彼の母星が豊かな密林だとすると……」

「そりゃあ火災や爆発は、おっかなくて仕方ねえわな！」

『デューア！』

転がって距離を取ったセブンは、ゴーロン星人がホークの爆撃に右往左往しているのを見てとると、指先にエネルギーを集めて、手首のスナップを効かせつつ手裏劍の如く撃ち出した！

ゴーロン星人の足元を正解に狙い撃った攻撃が、地面で爆ぜ、眩い閃光が大猿の見事な毛並みに反射する。

『ギャオ!? ギャツ! ギョエーツ!』

『ジュワツ! ジュジュジュジュジュジュジュ……』

凄まじいスピードで連射される手裏劍光線。

着弾に怯えて逃げ回るゴーロンが地団駄を踏む様は、さながらダンスを踊っているかのよう。

『ま、待ってくれ……悪かった、許し……』

死の舞踏に踊り疲れた猿人が、その場にへたり込んで片腕を上げる……

しかし。

『アユワーツ！』

エメリウム熱線が、動きの止まったゴロン星人の胸元、アイスラッガーによって僅かに開いた傷口へ照射される。

セブンは聖人君子だ。暴力を嫌い、友情と平和を尊ぶ紳士である。

だが、だからといって……一切の怒りを感じない訳では、無い！

ユートを破壊し、なによりもアンヌをあのように恐ろしい目に遭わせた事へ対し、彼の忍耐はとつくに限界だったのだ！

熱線により直に炙られた大猿の血液が、怒りに沸き立つセブンのそれと等しい温度に上昇する。

そして、ゴロン星人の強靱な心肺機能は、それを余す事無く瞬時に全身へ送り込ん

だ。  
五体の血管が瞬時に沸騰した宇宙猿人は、内部から爆発四散！

金色の鬣を持つ頭部だけを遺し、彼の野望は跡形も無く消え去ったのだった……

ガチャン、ドシン……ときこちない音がセンターから這い出てくる。

それは眠りこけるゴリーを、鎖で足に縛り付けたまま、低出力モードでゆっくり歩くU—8だった。

彼の炉心には予備動力としてウルトニウムが放り込まれており、石が仄かに発する熱量で、最低限の稼働だけは担保されているのだ。

彼のカメラアイが、小柄な隊員の後ろ姿を捉える。

「ア　ンヌ……」

しかし、伸ばされた腕が彼女の肩を叩く事はなかった。

「ダン！　……ダン！」

「アンヌー！」

向こうから駆けてきた男の姿を認めると、一目散にその胸へ飛び込むアンヌ。

「よかった……無事で……」

「キミも、ずいぶん怖い思いをしたろう。平気かい？」

「ええ……」

センターの玄関から、銀色の隊員は、その画面をじつと眺めていた。

『しな　ない……！』

『ばけ　もの……！』

彼の記憶装置が、数分前にかけられた言葉を思い出す。

ソウダ ボクハ ニンゲン ジャナイ

彼女が彼の逞しく、しかし暖かな胸に顔を埋めるのを見て。

ソウダ

彼が、彼女の頬を伝う透明な雫を、指で優しく拭ってやるのを見て。

ボクハ

それからそっと……鈍く光る、自身のつるんとした左手に視線を落とした。

ロボット ダ

その時、彼の回路でなにかが、つきんと……

その時だった。

無限に広がる地平線の向こうから、霧の立ち籠める中庭に、朝焼けの光が差し込んだ。

「……オオ！」

光の中で、女が男の額に包帯を巻いてやっている。

その時、朝日に照らされる彼女の横顔を……そこに浮かんでいた愛と慈しみに溢れた微笑みを認識した瞬間、彼の中で何かが起こった。

今まで、単なるゼロとイチの組み合わせでしかなかった世界が、その時はつきりと色付いて……

ユーエイトはその色彩の鮮やかさに圧倒された。

光る河！

光る大空！

……光る大地！

嗚呼……なんと!!

なんと、世界は……

それを認識した瞬間、彼は自らの立っている場所……存在する空間全てに対し、初めて挨拶した。

この地球という星へ。

「あ、ユーートー！」

「おーい、ユーートー！」

こちらに気付いて、大きく手を振りながら駆けてくる二人を見て、彼はゆっくりと一



歩を踏み出した。

「これでよし！ 動かしてみろ、ユート」

工具を片手に、アマギが額を拭う。

以前と同じ、武骨で頑丈な右手がぐりぐりと回転し、何度か開閉する。

「感度リヨウコウ 異常ナシ」

「良かった……」

安心したように、笑顔で頷き合う警備隊のメンバー。

口々に、おかえりや、お手柄だったな……と思いきいの言葉をかけつつ、肩や背中  
の装甲を労うように叩く。

「ユート、助けてくれてありがとう……あなた達が来てくれた時、とても嬉しかったわ  
僕からもだ。ありがとうユート」

「当然ノ 事ヲ シタマデ」

「でも、あんまり無茶しちゃいけないよ。君、自分ごと相手に電撃を喰らわしたんだって  
？」

「そうよ、びつくりしたわ。その……いくら直ぐに怪我が治るからと言っても、傷付く事を前提で動いちゃダメ。人間は、そんな事しないの」

「ゴ心配 オカケ シマシタ」

「そうだ、それはあまり、人間らしくない行いだよ」

「……あん？ どういうことだ？」

ダンとアンヌの物言いに、不思議そうに首を傾げる他のメンバー。

「あ、その……彼は……自分の事を人間だと思っていて……」

「なんというか……そう！ 例え見た目が人間でも、中身がそれに相応しくない人だつて、世の中にくらでもいるんだから……見た目がどうであれ……人間らしく、は出来るんじゃない？ ねえ？」

「ふーん、こいつがそんな事を……？」

「プログラムを修正しておこうか？」

すると、U—8の腕がガチャリと動いてそれを制した。

「イイエ ワタシハ 人間デハ アリマセン」

「え……？」

「ワタシハ……」

彼は、自分を取り囲み、こちらへ気遣わしげな瞳を向ける仲間達に向き直ると……

「ワタシハ ユーエイト。ウルトラ警備隊ノ  
ハエアル 8番目ノ 隊員デス」  
そう叫び、胸を張った。  
真つ赤なエンブレムの輝く、鋼鉄の胸を。

## 円盤 “は” 来た

「あの……食べないのかい？」

「……」

行きつけの蕎麦屋『増田屋』にて。

フクシン青年は、自身の対面で俯いている男の子に、恐る恐る遠慮がちに声をかけた。彼らの目の前には、ざるそばが二人前置いてあるのだが、少年は椅子へ横向きに座っており、完全にそっぽを向いたままだ。

やだなあ……麺が渴いちまうよ……

フクシンは、そんな事をぼんやり嘆いたが、さりとして、すっかり不貞腐れた様子の連れより先に箸をつけるのも気まずいし、どうしたものかため息を吐く。

彼は、非常に押し弱い性分なのだ。

「サブ、この子どうしたんだい」

「あーそのお……」

横から蕎麦屋の店主であるシゲさんが、こつそり耳打ちしてくる。

たかだか客と店員の関係なのに、どうしてこう首を突っ込んでくるんだろう。

馴れ馴れしいのは、よして欲しいナ……

「ちよつと親戚の子で……」

「ふーん……若い身空で大変だな」

「はあ……」

鬱陶しいから適当な嘘を言ったものの、そうであつたらばどれだけ良かったか……と、自身の吐いたその場しのぎが実態とあまりに乖離している事へ、思わず天井を仰いだ。

なにせ、目の前で塞ぎ込んだまま一言も発さない少年は、フクシンの血縁どころか日本人、いや……この星の生き物ですらないのだから。

なんとこの男の子の正体は……宇宙人だ。

しかも真正銘、地球を狙う侵略者だったのである。

だった……などと過去形なのは、その侵略がすっかり頓挫してしまつた後だから……という他ない。

——  
ついこの間の事である。

日課の星空観察の最中、偶然にも円盤群を発見したフクシンは、ウルトラ警備隊に通

報したのだが、基地や天文台の観測には異常なしとの事だった。

それを知らされ気落ちするフクシンの前に、ふらりと現れたこの少年は、自身をペロリンガ星人と名乗り、フクシンを『きれいな星の世界』に連れて行ってくれると言ったのだ。

彼らは円盤を星にカモフラージュして接近し、人類が気付かない内に大船団で地球を取り囲んでから、地球に降伏を迫ろうとしていた……らしい。

だがセンサーは騙せても、人間の直感までは騙せず、フクシンのようにカモフラージュを見破ってしまう人間が稀にいる。

彼らは逆にそれを利用して、オオカミ少年の如くそういった人々に騒がせた後、誰もそれを信じなくなつてから悠々と侵略を開始する手筈だった。

結果は……推して知るべし。

「なんだよ、一瞬の露光だから星は写真にうつらないって……どれだけ原始的なのさ！」  
「うん、なんか……ごめんよ」

彼らの誤算は、地球のカメラが思った以上に低性能過ぎたという事か。

フクシンの取った写真には、何の変哲もない星空が写っていたが、あまりにはつきりと星が写り過ぎていたため、逆に異常だと判断されたらしい。

実際に侵略が開始されようとしたその日、ステーションや各基地から宇宙戦闘機や爆撃艇がわんさか飛び立ち、地球人が油断していると思ひ込んでいた円盤群を、月の裏側で手ぐすね引いて待ち構えていたのだと言う。

つまり防衛軍は最初の通報の時点でとくに準備を始めていて、わざと泳がされたフクシンと星人達は、まんまと一杯食わされたという訳だ。

この記録的な快勝は、ニュースで連日流されており、さつきも店のテレビからアナウンサーの声が聞こえていて、彼の機嫌がすこぶる悪いのもそのせいだ。

「……地球人は嘘つきばかりだ」  
「うーん……」

騙されたのは僕も同じなんだけどな……

だが気持ちも分かる。

フクシンと違い、彼は味方全滅の引き金を引かされてしまったのだから。

それを思うと、胸が罪悪感でじくじく痛む。

彼がフクシンを案内してくれた家……の皮を被った秘密基地は、すっかり防衛軍に差し押さえられていたので、てつきり捕まってしまったのかとも思っていたが……

今日、何の気なしにあの河川敷を自転車でぶらぶらしていたら、膝を抱えている彼を見つけたのがさつきの事。

寂し気なその表情を見てしまったフクシンは、いてもたってもいられず、気付けば彼をこの増田屋に連れて来ていたという訳だ。

幸いというべきか、ウルトラ勲章に付いてきた金一封で懐は温かい。

そばを一食奢るくらい、なんてことはないのである。

……まあ、新しい望遠鏡を買ってしまったので、うーほど余裕があるわけでもないのだが。

「……元氣出しなよ」

本当は通報するべきなんだろう。

なんて言っただって、彼は侵略者の残党なんだし……でも……

あの顔を見たら、そんな仕打ちは出来ない。

別に、彼の姿が子供だから絆されたって訳じゃない。フクシンは星人の本当の姿を知っている。

では何故かと言われれば……異郷の地で、身の置き所がない気持ちは、痛い程分かるからだ。

上京してからこつち、良い事なんて一つもありやしない。

フクシンは、彼に自分を重ねて見ている事に、うつすら気付き始めていた。

「帰りたい……」



「うん……そうだね」

男の子がぼつりと呟いたそれに、思わず同意が口を突いて出た。

彼は……本当に、子供なのかもしれない。

宇宙人の寿命や成長が、地球人と同じである保証なんて全くないじゃないか。

彼の今の姿が、それこそ人類に換算した年齢の可能性だつてある。

もしそうだったら、こんなに小さい子供がたった一人……

フクシンは、蕎麦をまだ一口も啜つていないというのに、ずしんと胃に鉛でも飲み込んだように錯覚した。

「ごめんください」

その時、がらがらと引き戸が開いて、妙な男が暖簾を潜つてくる。

何故かフクシンは、その男から目を離せなかつた。

夏場だと言うのに、全身真っ黒づくめ。

見るからに仕立てのいいスーツをびっちり着こなして、洒落た中折れ帽まで被つていける。けつ、男が香水なんてつけちゃつてさ。

畳んだサングラスを胸ポケットに差し、お手拭きを使う所作の一つ一つが、やけに気品というか気障つたらしさに溢れていて、こんなうらぶれた下町に、全くもって不釣り合いといしか言いようがなく……

「あら、ロンさん！ 今日も来てくださったのね！」

「これはこれは、マダム。ご機嫌麗しゆう。笑顔がまるでヒナゲシのようだ」

「あらやだ、お上手なんだから！」

「……ブツ!? ゲホッ! ゲホッ!」

思わず茶を吹き出してしまい、その場の全員から白い目で見られてしまった。

仕方ないじゃないか！

聞いたか? 「まだむ」だって!?

女将さんがそんなガラかい!? 満更でもなさそうにブンブン振る腕の太さが見えないのか!?

お世辞もいいところ、ダイコンだ。

しかも、あの様子ではそれなりの常連らしい。

確かにフクシンは昼時しか来たことが無かったが、夕方にはこんな変人が入り浸っていたなんて……

「では、天ざるを二枚」

天ざるを?! 二枚!?

「あいよ、それにしてもよく食べるねえ！」

「……この蕎麦は絶品ですからな」

「あんた聞いたかい!? 絶品だつて! こんなシケた蕎麦屋、褒めてもなんも出ないよう!」

ニコニコしながら厨房へ引き返す女将を、啞然としながら見送るフクシン。  
なんだあれは……あんな表情見たことがない。

そもそも女将さんが出て来る事自体がまれで、出てきてもぶつちよう面で乱暴に皿を置いて行くだけだと思つていたが……

何者だ、あの男。

というか、天ざるを一人で二枚も?

フクシンがいつも頼むのは、かけ蕎麦か拉麺くらいで、今日のざる蕎麦だつて大分奮発したのに……

一体どれだけ羽振りが良いんだ……?

思わず男の顔をまじまじと見てしまった。

声は非情に朗々としていて惚れ惚れするような美声だが、顔立ちの方は別段変わった事もない。

それなりに整つてはいるが、ハンサムすぎるといふ訳もなく……ああいや、確かロソなんて呼ばれていたな。中華系か?

それにしちやあ流暢によくも喋る。

確かにこの辺りは出稼ぎの移民が多いし、その関係だろうな……などと考えていると、ぼつちり目があつた。まずい。

「おや、如何なさいましたかな？ 私の顔に、何か？」

「いや、なんでもありません」

フクシンはとつさに目を逸らした。

なんとというか、その柔和で人好きする笑顔に、一発で苦手なタイプだと分かつたからだ。

あれはきつと、要領がよくて、自分の思い通りに他人を動かすのに慣れてる類の人間だろう。自分が働いている所の工場長とかが、正にそう。

フクシンは昔から、周囲の顔色をびくびく伺いながら生きてきたので、いつしか、そういう嗅覚のようなものが備わるようになっていた。

だからといって良いことなんてひとつも無い。むしろ出会う人間が片っ端から鼻について、ほとほと嫌になる。

もう本当に、こんな星なんか棄てて、出来る事ならばいつそ、星空の向こうへ行つてしまいたいくらいには……人間が嫌いなのだ。

目の前で項垂れている、彼だけだったんだ、こんな自分に、あの時優しい言葉をかけてくれたのは。

確かに、侵略作戦の一環だったかもしれない、自分を利用していただろう。

でも、一緒に星の世界に行こうと誘ってくれた、その気持ちだけは……嘘じゃなかったはずだから。

だから僕は……

ずるるるーッ！

フクシンが顔を上げれば、例の客が蕎麦をかつ喰らっていた。

なんと豪快な啜りっぷりだろうか。いつそ小気味良いくらいに。

口に頬張った麺を咀嚼しつつ、うんうんと小さく頷きながら、満面の笑みを浮かべる男。

おおかた、ぷつぷつとした歯切れの良さを堪能しているのだろう。

そして、蕎麦が完全に原型を無くしてしまいう前に、ごくんと飲み込み、深呼吸。

「ぷはあ〜！」

余韻もそこそこに、次を味わうのが待ちきれないという様相で箸が伸び、せいろに山

盛りだった麺がどんどんと胃袋へ消えていく。これではまるで飲み物ではないか。

「あつ……！」

その時、男がワサビを箸の先でちよいと摘まんで、蕎麦に塗りつけて食べるのを、フクシン青年は見逃さなかった。

この男……デキる。

わさびは、ツユに解いてしまうより、直接ああして蕎麦に付けて食べた方が、辛さを抑えつつ、風味だけをよりダイレクトに感じられるのだ。

一般的にはそうして食するのが、ツウであるとされる。

「くう……！」

それにしても旨そうに食べるなこの客は。

フクシンは、増田屋の味がこの異国人にも好まれていると知り、少しばかり嬉しくなった。

彼は実は無類の麺好き……特に蕎麦には目がないのだが、生憎と上京してからは本当に『うまい』と思える蕎麦屋に巡り会えていない。

それは決して、付近にあるのが不味い蕎麦屋ばかりという訳では無く、単純に好みの話だ。

どうも此方の蕎麦ツユが、フクシンには塩辛いばかりに感じてしまい、奇跡的に好み

のツユを出す店を見つけたと思ったら、今度は麺が妙に粉っぽい……なんて具合。

あまりに美味い蕎麦と巡り会えないもんだから、最近は拉麺ばかりだ。それならどこのお店も、対して変わりようがない。それに安いし。

そんな中でこの増田屋だけが、フクシンの中でも及第点の蕎麦を出してくれるのである。ちよつと甘みの効いたツユに、喉越しのよい麺。

そうでなければ、ゲンさんはじめ知り合いばかり来る近所の店を選んだりするものか……

そこまで考えた時。

「げほっ！ げほっ！」

対面で、宇宙人の男の子が激しく咳き込みはじめたので、フクシンの思考は現実に取り戻された。

男の子は、バツテンに握り込んだ箸を振り回して、蕎麦を口に啜えたまま涙目になっているではないか。

素早く彼の薬味皿を確認すれば、そこに乗っていたハズの緑色……つまりネギとワサビが忽然と消えている。

隣の食いつぷりに、食欲を刺激されたものの、ワサビを全部ツユに投入して食べてしまったのか。

「あーあー、落ち着いて。そういうときはね、鼻で息を3回するんだ、思いつきりね」  
何度も鼻で息を吸ったり吐いたり、水を飲ませたりしてなんとか落ち着かせたころ、男の子が睨んでくる。

「いったい、なんてものを、たばさせるんだ」

「初めて食べる時に、いきなりワサビを全部使う奴がいるかい……ほら、こつちを使いなよ」

そう言いつつフクシンは、まだ真つさらな自分のツユと、薬味全盛りになった少年のツユを交換してやった。

まだ食べる前で良かった……などと思いながら、乾ききった蕎麦を嚼る。

……うん、うまい。

さつきはあんな事を言っていたものの、フクシン自身は、最初からツユに薬味を全て解いてから食べる派なので、彼が食べ始めてからだと交換のしようがないからだ。

フクシンとしてはこうした方が、ツユの甘さにワサビの辛さがガツンと効いてよい。どうせ僕は馬鹿舌だよ。ふん。

なんせ彼は、蕎麦屋で拉麺を頼むような男であるからして。

そうして蕎麦を嚼るフクシンの顔を、怪訝そうに覗き込んでいた男の子も、自身の小さな腹がくうくう鳴ったのに観念したのか、恐る恐る蕎麦を口にした。



「……ん」

「どう？」

「別に……おなかがすいてるよりは、まだだよ」

「そうか、良かった」

「ずるずる。ちゆるり。」

その二重奏に、横から不躰な声がする。

「おかわいいですね。息子さんですか？」

「え？」

恐るべき早さで一人前を平らげた黒尽くめの客が、ニコニコと話しかけてきたのだ。

「あ、いや……親戚の子を……ちよつと……」

「おや、そうでしたか。お住まいは近くに？」

「なんだこいつは？」

「ああ、サブの家は斜向かいだよ。ゲンさんの修理屋があるだろ」

「なるほど、あそこですか。ありがとうムツシユー」

「このクソ店主！」

何をペラペラと喋ってるんだ！

「羨ましいですな。ご近所にこんな美味しい店があるなんて」

「はあ……」

「しかし、この辺りは夜中まで騒々しいですし、あまり小さなお子さんの成長にはよろしくないのでは？」

「いや、別に……」

成長つたって……

この段階になってようやつと、フクシンはこの後の事に思い至った。

彼をどうするべきかという事に。

蕎麦を奢ってハイサヨウナラ？

しかし家に連れて帰るのか？ あの狭い安アパートに？

そりゃあ、今は勲章の褒賞金があるとはいえ、二人分の食費となると……

「いつまでお預かりになる予定なのですか？」

「ご両親が迎えに来るまで……だよ……ね？」

迎え……？

フクシンは自分で言っていて、その虚しさに気付いてしまった。

迎えと言うのはもちろん、あの照明カバーだか、灰皿だかを重ねたみたいにヘンテコリンな形の円盤だよな？

この子に来るのか？ そんなものが。

来るとして、それはいつ？

「……」

思わず黙り込んでしまったフクシンは、彼の視界の外で、ロンと呼ばれた黒尽くめの異国人が、にんまりと笑みを深める瞬間を見逃した。

「ほう、少々お困りのようで……如何でしょう。わたくし、こう見えてアパートの大家をしております……」

そうして差し出された名刺にはでかかど『盟道メドウ 龍ロン』の文字が鎮座しており、小さく北川町の住所……恐らくアパート『星雲荘』の場所が記載されていた。

「はあ……」

「まだいくつか空き部屋が有りましたね。彼にそのうちの1つを管理……と言つては大層に聞こえますが、端的な表現では入居……していただければな、と」

「いやでも」

「家賃の事でしよう？ いえいえ、こんな小さな子に払えなどと申しません。私の代わりに共有スペースや、周辺の清掃などを手伝つて頂くだけで充分ですとも。なにぶん多忙の身でして、そこまで手が回らないのですよ」

「うーん……」

はたしてそんな都合の良い話があるのだろうか……

「実を言いますと、このぐらゐの子供がいるといないのでは、ご近所や新規入居者からの印象が天地の差でして……私にとつても良い事づくめなのです。その点、そちらの坊やは大入しくて実に良い子そうじやありませんか。現状では、なぜか女性入居者の割合も多くて……彼女らの精神面にも非常に良い影響を見込めるのでは、と考えています」

それは勿論、日中に彼の面倒を見てくれそうな相手が多いという事でもありますよ。

……と、メドウⅡロンなる男は声を潜めて耳打ちした。

「……しかし……」

確かに聞く限りでは、良い話のように思える。

なにせ、フクシンには殆ど損がないのだから。

それでも、相手は怪しげな異国人で……こうして集めた女子供から臓器を抜き取り、裏で売り飛ばしているのでは……という懸念が脳裏を掠めたり、いやいや、この男の子は宇宙人なのだから、そんな悪人は返り討ちだろう……と考えたところで、そもそもそれが一番の問題点なんだった！ と気付いたり……

「ちよつと……考えさせて……欲しい……です」

もしよもしよと、フクシンがなんとも尻すぼみな回答を寄越しても、ロンなる男は一向に気分を害したりせず、それどころか。

「時に、お二人ともテンプラは召し上がらないので？」

などと、素っ頓狂な事を言ってくる。

「あ、いや、別に……は？ 天ぷら？」

「いけませんなあ……よもや、この店のテン普拉を召し上がった事がない？ それはもはや、人生の損失ですぞ」

「は？」

まるで煽るような台詞を言い放ったロンは、盛り合わせの揚げ物から、大ぶりの海老天をつまみ上げると、それにサクリと歯を立てる。

「うむ……美味！ 実に美味！ 軽やかな衣の奥に隠されたエビの身が、舌と口蓋を心地良く押し返す弾力のなんと豊満なことよ！ さながら絹を纏った貴婦人に口づけを交わすかのようだ！」

フクシンが呆気に取られているうちに、今度は茄子をじんわりと天つゆに浸したかと思えば、サツと引き揚げた身からツユが滴るよりもはやく口へほおぼる。

「んん！ なんだこれは！ 私、確かに固体を食したはずだ……なのになぜ、衣の中からねつとりトロリと旨みが溢れてくるのだ？ まさに熟した果実の汁が舌に絡み付くかの如く……そうか、茄子にツユを吸わせるなどと……もはや罪！ 罪の味だよこれは……」

「ごくり……と知らずうちに喉が鳴る。

あ、コイツ海老の尻尾残しやがった……勿体ない。

フクシンは、思わず財布を開いて中身を確認するが、彼の口からは溜息だけが漏れる。「はふう……やはり、これは是非とも味わうべきだ。ムツシュ！ こちらの方々にテンブラの盛り合わせを！ 勿論、支払いは私が」

「はいよ！」

「ちよ、ちよつと！ 僕らは別に……」

「おやおや？ そちらの彼はもう興味津々というご様子ですが？」

ロンが指し示す先には、隣の天ぶらをじつ……と見つめる少年の姿。まさに釘付けだ。

「これも何かの縁、ご馳走させては頂けませんか？ いやいや、決して何かを要求しようなんて腹積もりは、ありませんとも。ただ、私の好きな物をより多くの人に知って頂きたい。それだけの事ですよ」

嘘だ。絶対にさつきの話を断り辛くさせる為に違いない。

ここまで見え透いていると、一周回っていつそ清々しさすら感じてきた。

くそ、絶対に誘いに乗ってやるもんか。天ぶらだけ美味しく頂いてやる！

「だからといってさつきの話は……」

「ええどうぞ、よくよくお考えになって下さい。なにせ、時間はたつぷりある……」  
「なんだって？」

ガラガラガラ……と後ろで引き戸が開く。

「ごめんください！　ここは『ますだや』であつてるのかな？」

振り返ると、若い男がのれんを掻き分けて、店内をキョロキョロ見渡している。

「先生！　ここです！」

「せんせい？」

先生と呼ばれた男——どう見たつてロンよりも年下な若造——は、店の真ん中で知り合いが手を振つて呼んでいるのをすぐに見つけたらしく、爽やかな笑みを浮かべながら颯爽と席についた。

「どうやらロンは、この店で彼と待ち合わせをしていたらしい」

「ヤアヤア、久しぶりですね」

「ようこそ先生。我々は君の来るのを待っていたのだ」

「おや、一応時間通りだと思つただけども」

「これは失礼、私は待たせるよりも、待たされる方が好きな性分だね」

多分その人、蕎麦が待ち遠しくて一足先に食べたかっただけですよ……と思つたが、フクシンは黙して語らず、他人のフリに努める事にした。

まあフリも何も、最初から他人なただけども。

だが、店内を興味深そうに見渡す若者——それこそフクシンとそう変わらない年頃——の顔にどこかで見覚えがあるような気もして、いつたいてどこで見たんだったか……と首を傾げていると。

「へえ……ここが今度のオススメかあ。今日は何を食わせて貰えるのか……俄然、期待が高まつてきたよ、伯爵？」

「はくしゃくう?!」

ハツと口を噤むがもう遅い。

「……彼は？」

「ついさつき知り合いましたね。我がアパートの入居希望者の後見人です」

「ああ! あの愉快的なアパートの!」

待つてくれ、まだその話は保留中なのに。

ぶんぶんと首を振るが、こんなのは言った者勝ちである。

ロンはどこ吹く風で、優雅に紅茶を注いで……違う、あれ蕎麦湯だ。あんまりにも所作が品に溢れてて見間違えた。

というか、ちゃっかり蕎麦湯まで貰つていやがる。なんて図々しいんだ。

因みに引つ込み思案なフクシンは、「蕎麦湯下さい」を中々言い出せなくて、ここでは



ついで飲んだ事がない。

最初から出してくれる形式の店は珍しいのだ。ついでに言えば、蕎麦湯が美味しい店というのも、それ自体が非常に貴重である。……閑話休題。

「ハハハ、驚くのも無理ないか。安心してください、ただのペンネームですよ。彼がファンレターをくれる時はいつも『夕暮れ伯爵』名義でね、文通での交流期間が長かったものだから、こうして顔を付き合わせるようになってからもそう呼んでしまふんです。没落貴族ならぬ、落日貴族なんですって。面白いでしょう?」

「ファンレター?」

「ええ、私はこちらのタウラ先生の著作が愛読書なのだよ。『北川人情放浪記』……もしも読んだことが無いなら、是非とも一読する事を薦めよう。そうすればもう、虜になること間違いなしだとも」

ロンのその言葉でフクシンは、さつきからずっとモヤモヤしていたものの正体によく思い至った。

「タウラ……タウラ……まさか、あんたあのSF作家のタウラ先生!? いったつたかの出版社主催コンテストで新人賞とった!」

「やだなあ……そういう誉め方は星雲賞とってからにしてくれるかい?」

「す、すごい……本物だ……」

どこかで見たと思ったのは、作品の著者近影で見たのだ。皮肉っぽい笑い方がそっくりじゃないか。

フクシンは星座観察が趣味で、よく宇宙関連の雑誌を読んでいた。

そしてその雑誌に短編をいくつか載せている関係で、タウラの事も知っている。

特に、大昔の伝承やお伽話を、SFに上手く絡めた切り口が中々独創的だなど印象に残っていた。つい最近だと、不時着した宇宙人が村人に河童と間違えられて、双方共に大混乱する話が面白かっただろうか。

数百年後に再びやってきた宇宙人の大使が、もてなしとして出されたサラダに舌鼓を打っていたら、実は先遣隊の撒いた食用でも何でも無いテラフォーミング用植物だと知り、ひっくり返るといふオチも秀逸だった。

「おや、先生はSFも書かれるのですか」

「SFも……っていうか、僕はSFが代表作なんだけどね……君みたいに放浪記の方でどっぷり、なんてファンは珍しいんだよ、伯爵？ あれは息抜きに書いてみたようなものだからさ」

「ほう！ 息抜きであのような傑作を！ 流石です先生。そうそう、新刊も楽しませて頂きました。特に主人公が河川敷で咲いていた野草に、故郷を思うシーンなどは、さすらい者ゆえの郷愁がありありと描写されていて、思わず胸を打たれてしまいました

ぞ」

「……こんな風にね、まあ嬉しい事を言ってくれるわけさ」

タウラはそうして茶目つ氣たつぷりにウインクするが、それを飛ばされたフクシンはと言えば、自分達の机に届いた天ぷらを食べる事も忘れ、すっかり茫然としていた。

一氣に増えた情報量に、そろそろ脳が追いつかなくなってきたからだ。

「しかし、先生がSF作家だったとは……なるほど、ようやく合点がいました」

「合点が？ 何にかな？」

「ええ、ヘンミ先生との接点がですよ」

「ヘンミ……ヨシヤ先生の事？」

「はい。実は今日お招きしたのは、このお店の紹介がてら、先生に彼の事をお尋ねしようと思った次第で」

「……へえ」

タウラは爽やかな笑みを崩さなかったが、フクシンには分かった。

その短い返事が、先ほどよりも微妙に堅く、余所余所しい響きを伴った事に。

「……因みに、なぜ？ と聞いても？」

「ええ実は……」

鞆からいそいそと、一冊の冊子を取り出すロン。

「先月のこちら、私も寄稿させて頂きましたが」

「ああ、僕らの同人誌か……そうだ伯爵。貴方の紀行文は大層評判良かったよ！ よくぞあれほど表現豊かに旅情をかきたてられるもんさ！ まるで熱海の夕焼け空が目に浮かぶようだったね」

「これは光栄の至り！ まあ、先生の高尚な文学を解する者ならば、あれくらいのモノは片手間に書いて然るべきと言ったところでしょうか」

「優れた読み手が、必ずしも優れた書き手であるとは、限らないけれどもね。逆もまた然り」

「身に余るお言葉です……さて、本題ですが」

大仰に礼をしたロンが、当然のように話を戻したのを見て、タウラの顔に僅かな焦りが浮かんだのを、フクシンは嗅ぎ取った。

「なんだ？　なんでそんなに話を逸らそうとしてるんだ、この人？」

「ああ、これこれ。『彦野の夜鳴き蕎麦』実に面白い作品でした……どれだけ時が遷ろうと決して捨てられぬ思いがある……彼が最期に「地図にない星を見た！」と叫んだ時は、涙を禁じ得ませんでしたね……」

「ふむふむ。それで？」

「実はこの行……ああ、ここ。主人公の飲む夜明けのブラックコーヒーなんです……」

これがね、是非飲みたいんです！」

「え？」

タウラは、肩透かしを食らったような顔でロンを仰ぎ見た。

「それだけ？」

「それだけ、ですつて？ 失礼、先生はコーヒーをあまりお飲みにならない？」

「あー……飲むけど、眠気覚ましとして、かな」

「でしたら、お詳しく無いのも致し方ありませんな。実はここに書いてある淹れ方をするのは、非常に珍しい豆を使ったものでして……私はそのコーヒーが一番好きだったのですよ！ これ無くして、その日が始まらなかつたと言つても過言ではない！ あのコクと深みを知っている身としては、最早普通のコーヒーなどでは決して満足する事など出来ません！」

「へ、へえ……」

「故郷を離れ、もはや飲む事も無いと思つていた味をもう一度……ぜひ、ヘンミ先生に淹れて頂きたいのです。豆は私が伝手で入手致します。が、私にはそれを扱う腕が無い。残念な事にね」

「ふーん、故郷では誰が淹れてくれていたんです？ ご両親？ 恋人？」

「勿論、使用人ですが？」

「……伯爵は時々、本物の貴族みたいな事を言うよね」

タウラは、疲れたように鼻頭を揉むと、纏っていた緊張感を元のように砕けた物に戻し……いささか自棄つぱちさすら滲ませながら、確認のように聞き返した。

「下巻を探しているわけではない？」

「下巻……？ ああ、彼の著作ですか。生憎と、冒険活劇は私の好む範疇からは外れておりまして、さして興味をそそられません……それが何か？」

「……いや、なんでもないよ。僕たち作家には、未完の続きをせがまれる事に恐怖を覚える人種もいるのさ」

「ああ、それで。ヘンミ先生は日本SF作家倶楽部にも所属しておられないようなので、渡りを付けるのが大変で……」

「あ……あそここの入会資格には、冗談みたいな不文律がいつぱいあってね……そのうちの一つに引つ掛かって入れないんだ。ほら、ヘンミ先生、真面目だから」

まさかあの一文が機能するなんて、作った本人も思わなかっただろうけど……とタウラは小さく呟いた。

「因みに先生の名前も名簿にお見かけしませんでしたが？」

「ん、僕？ そりや簡単だ。なんせ既に他の倶楽部に所属してるからね。兼部はどちらにも失礼だから辞退させて貰ってるんだ」

「なるほど、カツパ倶楽部ですか」

「そういうこと」

タウラは、お冷やで一旦口を湿らせると、ため息と共に上体を反らして頭の後ろで腕を組む。

「期待して貰ったところ悪いけど……ヘンミ先生にはしばらく逢えないよ。おつきい仕事が入ったからね」

「ほう、それは目出度い。私にとっては残念極まりないですが……因みにどのような？」

「さあ？ なんでもウルトラ警備隊にオブザーバーとして、しよつ引かれたらしい」

「「ウルトラ警備隊!?!」」

三人の声が重なった。

そしてそのことに、タウラを含めた四人全員が驚いている。

「ど、どうしたの……みんな」

「あ、いやいや、ウルトラ警備隊なんて雲の上の存在ですから……」

「そ、そうですね、自分達みたいな平々凡々には関わりがないから……」

「ほくもほくも……」

それぞれが胸中に複雑な思いを抱きながら、すぐすごと席に着く。

そんな中で、ロンがこつそりと「先を越されたか……」と舌打ちするのをフクシンは確かに聞いた。

よっぽどその幻のコーヒーとやらが飲みたかったのだろうか。凄い執念だ。

「でも、小説家をオブザーバーになんか呼んでどうするつもりなんでしょう?」

まさか、アマチュア天文家の通報で事件が解決したのを鑑みて、市井からも協力者を募ろうとでも言うのだろうか?

これはもしかして自分にもお鉢が回って来たり……

「あーそれは……最近のウルトラ警備隊は、海底人だかとも交流してると言うし、このまま一気に融和路線を打ち立てたいみたいだから、異文明との接触を想定するとなると、SF小説家の意見すらも参考にしたいくらいなんじゃないか? ……あの様子だと、ただあの人、伯爵みたいに熱心なファンなだけって気もしてきたけど……」

あ、違った。全然関係無かった。

というか、その口ぶりだと、このタウラ先生がその件のヘンミ氏を推挙したのだろうか?

もしや、今のロン氏のように向こうから乞われて? ……まさかな。

「ま、しかし……残念です。ヘンミ先生には我がアパートになんとしても、入居して頂こ



うと思つていたのですが」

「部屋埋めに余念が無いねえ、伯爵……仲間の貧乏作家に声かけておくかい？」

「いえ、入居者は私自身の目で選びたいと考えておりまして……それこそ、その彼のよう」

「ん、ぼく……？」

揚げたサツマイモに、ホクホク顔で齧り付いていた少年が、呼ばれた事に気付いたのか振り向いた。

「どうかな、君？ さっきの話さ。我々双方にとつて悪くない話だと思うが？」

「うん、そうだね」

「えっ!？」

そんなに軽く頷いてしまつても良いのか!？」

ギョツとするフクシンに、男の子が穴だらけの天ぷらを持ち上げて、諭すような口調で言う。

「フクシンくん。未来はね、この食べ物みたいなものだよ……ほら、違う穴から向こうを覗けば、また違った景色が見える。君の好きな望遠鏡みたいに、覗き込んだからつて正解が見えるわけじゃないんだ。誰にも簡単に見通せそうで、全然見通せないものなのさ。……ねえこれ、美味しいね。なんて食べ物なの？」

「……レンコン」

「ふうん……ま、そういうわけさ」

「いったいどういう訳なんだ。」

宇宙人の言うことは、どうにも分からない。

「それは良かった。さて入居に当たって聞いておきたいのだが、君の名前はなんと言うんだね？」

「名前……？　ぼくは、ペガツ……むぐ」

フクシンは、慌てて男の子の口を塞いだ。

……まさか彼は今、ペガサスだかペガツサだかいう星雲の第なんちゃら惑星ペロリンガ……とかいう、あの長つたらしい名乗りを口にしようとしていたんじゃないな？

とんでもない！

こんなところで正体をバラす奴があるか！

……しかし、どうしよう。

もしかしなくとも、彼には地球で通用するような名前が無いんじゃないかしらん。

これには参った……それこそ、地球人じゃ発音できないようなピニヤガピヤ某とかだったりして……

「彼は……その……」

訝しげなタウラと、何故か明らかに面白がっている風な光を宿したロンの視線が、フクシンに集中する。

追い詰められた青年は咄嗟に、望遠鏡で見えた彼らの円盤群が、白鳥座の方角からやってきたのを、フと思い出した。

「シラトリ……」

無垢に此方を見上げる瞳に、かつての自分を重ねれば、母に連れられて毎週のように聞いていた賛美歌が、どこからか聞こえてくるようで。

憐れみたまえ、憐れみたまえ、世界よ、どうかこの子を、憐れみたまえ。

「キリエ」

「ふむ？」

「シラトリ……キリエ。彼は……シラトリ・キリエと言います」

「そうか……なかなか言い得て妙だな。実態に即しているというか……」

「ええっ？ キリエ？ 男の子にかい？ その子の親も、妙てけりんな名前をつけたもんだねえ、浮ついてるよ」

タウラの天ざるを運んできたシゲさんが、身も蓋もない事を言う。

「いやいや、かのサコン・マスエのように良い作品を書くかも知れませんか？」

「はあ、そういうもんですかねエ？」

「なんか……星空みたい……キラキラした名前を、付けてあげたかった……らしい、です……よっ。」

「全く変な親だね、サブの親戚だからしようがないか」

真つ赤になりながら、尻すぼみに説明するフクシンに、シゲは肩を竦めて奥に引つ込んで行く。

「僕は……まあ、嫌いじゃないかな、この名前」

「おや、さつきから偉く大人びた物言いをする子だ。伯爵、貴方のところの住人は、一癖も二癖もある人間ばかり集まるのかな？」

「その方が退屈せんでしょう？ 百花繚乱、ひゃっかりょうらん桜梅桃李、おうばいとうり是非も無しといったところか」

「……家主からして、癖の塊だったね、そう言えば」

タウラは、こりやあキヤラクターモデルの聞き取りが捗りそうだ。などとクツクツ笑っている

「それじゃあよろしく、家主さん。シラトリ・キリエです」

「じゃあひとまずサインだけで構わんよ、細かい事は明日詰めようじゃないか。心配は要らない、君の部屋は角部屋だ。隣にはえらく陰気な男が住んじやいるが……多分、君なら同郷のよしみで仲良くしてくれるだろう。あれはそういう奴だ」

そうして話をする彼らを見て、フクシンはようやくやく人心地つけた。

ああ、肩の荷が下りた……と。

しかし、そんな事を思った途端、心にぽっかりと穴が開いてしまったような心地になるではないか。

おかしいな、何故だろう。

確かに、今日このまま別れば、彼らとはもう二度と会う事はないんじゃないか。

そんな不思議な予感がある。

だが、別にそれでいいはずなのだ。

宇宙人の知り合いなんて……厄介事のお手本みたいな物なんだから。

このまま、平凡な日常に戻った方が……

……本当に？

戻って、いったいどうするんだ？

あの日々に嫌気が差してたんじやないのか？

でも、自分には彼らのような特別な事は何も無くて。

資格なんてないんじゃないか？

それでも、彼との繋がりが、何か……何か無いか。

「……そうだ！　タ、タウ……タウラさん！」  
「ん？」

口から食いかけの蕎麦を、だらりと垂れ下げた、若手作家が振り返る。  
男前が台無しだ。

「あの……ど、同人誌を作っていらっしやる……んですよね！」

「うん、最近はオフセット印刷つてのが普及し始めたからね、昔よりは僕らみたいなのでも、随分とやり易くなったものさ。とはいえ、本当に細々とだけでも……なんだい？　欲しいの？」

前々回ので良かったら余りが……なんて言い始めたタウラに、フクシンは拳をギュツと握り、氣力を振り絞って問いかけた。

「あの、それは！　星座の観察記録とかでも、載せられるんでしょうか！　……ね……と  
か思つて……」

半ば裏返つてしまった自分の声に、どうしても恥ずかしくなつてどんどん小さくなつていくフクシンの姿に、タウラとロンはビックリしたように顔を見合わせたかと思えば……

次の瞬間、彼らが恐ろしいくらいに獐猛な笑みを浮かべるのを見て、やはり選択を間違えたかと、青年は激しく後悔して冷や汗が止まらなかった。

後にフクシンが息子に語ったところによれば、その時の彼らの瞳と言ったら、それこそ、沼に沈めて貪るべき次なる獲物を見つけたかのような、飢えた獣の如き眼差しだったという。

誰にも言つてはいけないよ

ウルトラ警備隊

◇キリヤマ・カオル

ウルトラ警備隊の隊長。

38歳とは思えない貫禄を持つ。

常に果断で冷静。部下に対し深い思いやりを持つ一方で、一軍の指揮官としての非情な面も持ち合わせた男。

宇宙ステーションV3のクラタ隊長とは同期であり、当時の教官であつたマナベ参謀とは、単なる上司部下以上の絆がある。

ウルトラ警備隊結成前に、ザンパ星人の侵略艦隊が襲来した際は、土星の輪に身を隠した宙間雷撃艇部隊を率いて、敵旗艦に肉薄攻撃を敢行した。

その際に自機を損傷し、小惑星帯を漂流しながら死を待つばかり……となつた経験を持つ。

堅実な指揮能力から堅物に思われがちだが、比較対象のクラタが突飛にすぎるだけで



あり、防衛軍の中では珍しく柔軟な発想を持つ融和派である。

しかし、植物学者の従兄弟がかつて、擬態能力を持つ吸血植物に殺されかけているため、人に化ける侵略者に対しては特に敵愾心が強い。

ぶつちやけ、七番目の隊員の正体には薄々気付いている。毎回、決まったタイミングで戦闘中に指揮の通らなくなる部下がいたら、諸君は一体どう思うだろうか。

#### ◇フルハシ・シゲル

防衛軍一の怪力の持ち主。

入隊時にはすでに各種格闘技を一通り習得していたフィジカルモンスター。

北海道生まれなので、寒さに強い。(つまりあの地はガンダーの氷河期よりも厳しいらしい、流石は試される大地)

原作開始時には28歳であったが、本作品内では割と事件の間隔が長いので、シリーズ最終盤である現在では30歳を越えている。

父が再婚した後の子なので、年の離れた腹違いの兄がいる。(兄は母方の旧姓を名乗っているが、兄弟仲は良好)

ナメクジと女の腐ったような奴がでえ嫌い(本人談)

三半規管が異常に強靱なだけでなく、下半身の筋肉が耐Gスーツのような血流調整効

果を齎すので、防衛軍内でもっとも空戦適性が高いエースパイロット。

でも出身は戦車隊。古巣のベンガルズやヘラクレスの隊員と、たまに食堂で大食い対決していたりする。好物はカレー。

兄貴肌で面倒見もよく、休日にはもっぱらダンに柔道の稽古をつけてやっている。

本人は鍛え上げた肉体のおかげと思っているが、実は異星人の血を色濃く受け継いでいるせいで、各種耐性が人間の限界を突破しているに留まらず、常人よりも凶抜けて認識実現能力が高く、思い込みの強さだけで、とんでもない事を成し遂げたりする。

#### ◇ソガ

本作の主人公。中の人の方。

関西出身（本人曰く、神戸のちよつと山越えた辺りの田舎）なので、ソガ隊員のフリをする余裕が無くなると、すーぐ関西弁が漏れる。

本来のソガ隊員は九州出身であるが、九州出身者のイントネーションとも微妙に違うので、素を出すとすぐバレそうなものだが、運良く他のメンバーに関西勢が居ないため、奇跡的に九州弁話者だと思われる。

それなりのウルトラファンを自認しているが、Ｑ＼マン＼セブンについての知識以外はうろ覚えな上、リアタイ世代でもなんでもない。本人自体はがつりTDG世代であ

り、子供の頃から朝が弱かったので、夕方放映のウルトラ派になったという経緯がある。いつの間にかこの世界に来たと思っていたが、実際はノンマルトの使者として選ばれ、その魂だけ呼び出された存在だった。

本作内では原作知識を活かして活躍しているように見えるが、場面外の日常業務ではポカミスをやらかしまくっているの、周囲からの評価は微妙なところに落ち着いている。

特に隊内の仲間達からは、いわゆる『肝心な時にしか役に立たない男』だと思われる模様。

それでも、立てる功績が功績なので上層部からは次期幹部候補として目をつけられており、ステツプアップを兼ねた異動人事が裏で発動されかけては、キリヤマ隊長によって、やんわり阻止されている事には、本人も全く気付いていない。

原作改変の為に奔走した結果、派閥を越えて恩を売りまくったおかげで、発言力だけは右肩上がりに増大した。もしもこの先平成セブンルートに行ったら、間違いなく情報部による肅正対象待った無しである。

高所恐怖症なので、隊内で一番ホークの操縦が下手（無意識に急旋回等を避けるため、挙動が直線的になりがち）

基本的に能天気かつ大雑把で面倒くさがりな性格の為、原作終了後の事なんてまるで

考えていない。

極度の甘党。好物はチョコレート。

最近、サエコさんが髪を伸ばし始めたので、アンヌ共々早くショートカットに戻してくれないかなと思っている。

ぶつちやけ、キリヤマ隊長がダンの正体に気付いている事に気付いている。ノンマルト編の説得はその辺りまで加味したものだつた。

他人に対して非情にドライな部分があるが、ノンマルトの転生術式がわざとそのような人格を選んだ。博愛主義者ではセブンの二の舞になると判断された為である。

#### ◇ソガ隊員

本作の主人公……に憑依されてる人。ガワの方。

瞬発力と空間認識能力がズバ抜けており、早撃ちで彼の右に出る者は居ない。また、ここぞという時に発揮する集中力で、狙った的は決して外さない生粋のスナイパー……だった。

現在はおねんね中。ソガ被害者の会名誉会長。

正しい射撃姿勢を体に染み込ませる為、日夜訓練を重ねるストイックな努力家だが、それを決して鼻にかける事のない、非常に気さくな人物である。多分、宮崎生まれ。

主人公の活躍は、彼の積み重ねた研鑽の賜物。もつと感謝した方がいい。先祖を遡ると蘇我入鹿に行き着く。

つまり、かつての支配者層Ⅱノンマルトを虐げた侵略者の因子を受け継ぐ子孫。

割とプレイボーイで、髪は女の命だと常々言っていた。

実は影ながら主人公の窮地を幾度か救っている。

主人格がペガ星人の催眠下に在るとき、その支配から逃れた第二人格として、無理矢理に体を動かして銃をすり替えたり、ニワ教授Ⅱプロテ星人の記憶探知機にかけられた際は、自身の記憶を矢面に立たせる事で、主人格がイチノミヤへの手紙をしたためていた場面をギリギリ隠し通した。

そもそも主人公の気絶耐性が異様に高いのは、憑依者が意識を失った事で浮上してきた彼の精神が、その度に主人公を必死で叩き起こしているからである。もつと感謝した方がいい。

#### ◇アマギ

チームに一人は絶対必要な頭脳担当。

困った時はアマギ、それでほしいななんとかなる。

ウルトラ警備隊の前身組織である科学特捜隊に所属していたある隊員を尊敬しており、彼の偉大な発明を『技術』に昇華する事を目標としている（大抵が有り合わせで作っ

た一点モノばかりで、量産化が不可能な『作品』止まりなため)

現在、防衛軍で正式採用されているウルトラガンを設計した功績を評価され、入隊した。

とはいえ、原型となった兵器とは出力において雲泥の差があるので、本人的には満足していない模様。(もちろん、量産性と取り回しの面では圧倒的に勝っている)

神経質で、完璧主義のきらいがある。

名古屋出身のA B型(R H—)

幼い頃のトラウマから、爆発物恐怖症を抱えていたが、月基地やラリー作戦での経験で、その恐れを完全に解体した。

仲間達からは、それに加えて高所恐怖症であると思われる(特にソガからは同類として勝手にシンパシーを抱かれている)が、正確には『気流に流されて、予測不可能な動きに抗えない』のが怖いのであって、実のところ高い所が怖いわけではない。

上記はどちらも表面的なものではなく、根本的には『自身の意志決定やコントロールが及ばない状況や事象』に強い不安を感じているだけであり、全ての困難は人類の叡智によって克服できるはずだという強い信念の裏返しである。

入隊当初は周囲に上手く馴染めていなかったが、ソガ(憑依前の本人)の気遣いによって救われており、内心では彼を深く尊敬している。

またソガが居なければ、ゴドラ星人によるマックス号襲撃や、ベル星人の疑似空間から生還出来なかつただろうと、カオリに漏らした事があるとかないとか。

……が、それはそれとして、普段のソガ（憑依後主人公）の言動に振り回されたり、通常業務のやらかしに對する尻拭いをさせられる事には、心の底から苦々しく思っており、そもそも几帳面なアマギと、大雑把なソガでは氣質からして反りが合わないのは火を見るより明らかなので、彼に對してだけは、ついつい当たりが強くなりがち。

ソガ被害者の会、堂々のナンバーワン。

なんなら、学術的見識の深いダンや、對等に議論を交わせるイチノミヤとの方が、よっぽど仲が良い。むしろ心のオアシス。（でも最初に仲を取り持つてくれたり、引き合わせてくれたのはソガ、というのがまた複雑な心境にさせるらしい）

ソガと同じく、公式で下の名前が未だに設定されていないので、こういう企画の時は非常に困る作者泣かせな人物。

本人すらも気付いていない事ではあるが、深層心理ではとつくにウルトラセブンの正体を導き出している。

しかし、彼にとつてはセブンもやはり理解の範疇を越えた存在＝恐怖の対象という側面があるため、そんな存在と大切な友人であるダンが同一であると認めたくない。またそうなった時にダンを拒絶してしまうかも知れないという恐れから、無意識下で思考に蓋

をしている。

◇ユリ・アンヌ

本作の……というよりは原作のヒロイン。

チームの紅一点。

勘違いされがちであるが、衛生兵ではなく歴としたドクターつまり軍医である。

これは、彼女の従事する任務の特殊性によるところが大きい。

衛生兵は医療資格が必要ではない代わりに、出来るのは応急処置までであり、負傷者の後送が主任務である。

しかし、特殊部隊であるウルトラ警備隊は孤立状態や不意の遭遇戦が予想され、現地での高度な治療が必要とされるだけでなく、未知の毒や病原体とも戦わねばならない可能性が高い。

また、当然の如く戦闘に巻き込まれ、戦時法の通用しない（医療従事者を狙わない良識が期待出来ない）異星人を相手にする都合上、本人の戦闘力も加味して任命する必要がある。

それらを満たした上でかつ、異星人への敵対心や差別意識が最も薄い（侵略者ではない異文明の遭難者や捕虜への治療も担当する為）人材が彼女だった。



幼少期の鳥恐怖症を催眠療法で克服した経験を持ち、外科治療だけでなく、カウンセリングを得意とする。

常に未知と戦闘を行う警備隊では、隊員の心理的負担も大きく、精神面でのサポートがより重要視されている背景がある。

ある意味、警備隊の中で最も替えの効かない人物。

なので、戦闘時の出撃頻度が非常に低い。

当然、そんな事まで分かっている者は少なく、侮られたり、やつかまれる事が多々あった。

本人は負けん気の強さを発揮し、そんな状況すらもバネにしていたが、そこへ突然現れた不思議な男の魅力にコロツと絆されてしまったらしい。

劇中描写を見るに、ダンが入隊するまで最も仲が良かったのはソガ隊員だと思われる。

彼女の周囲には、男らしさをアピールしてマウントを取ろうとする輩が後をたたなかつた為、その反動から、紳士的で優しく、茶目っ気のあるタイプが好み。

実はトーク星人の末裔。

◇モロボシ・ダン

恒点観測員340号、またの名をウルトラセブン。

原作主人公であり、本作のもう一人の主人公……というよりはヒロイン枠。

任務で地球の記録を採っていた時に『金色の虹』という異常気象を観測、地球に降り立つ。

その際、サツマ・ジロウの自己犠牲と黄金の精神に心打たれ、咄嗟に助けた彼の魂をコピーした、地球人としての姿。

虹（とジロウの滑落原因となった地震）は、クール星人に追い立てられたパゴスの引き起こしたもので、傷付き地上に飛び出す寸前だった彼を、治療効果のあるカプセルに収容し、事情を聞いた事で地球に魔の手が忍びよっていた事を知る。

当時の地球は、護送中に脱走した極悪犯（ミュー粒子さえあれば、宇宙警備隊員と同等以上の速度で単独ワープ航行可能な能力を持つ恐ろしい怪物。神出鬼没に惑星間を逃げ回り、全宇宙を恐怖で震撼させた『蒼海の悪魔』の異名を持つ）が、その脱獄ルートへ選んだ事によりミュー粒子の滞留地点である事が判明し、星間戦争が頻発しはじめた最近の情勢もあり、注目度が飛躍的に高まっていた。

これから先、何度も侵略に晒される事は容易に予想がつき、その度に地球の美しい自然が踏みにじられる事に心を痛めたセブンは、人間の姿を得て、より深く地球人と交流をした事で、彼らの事も愛おしく感じるようになり、この星を守る為に戦う事を決意す

る。

本来の姿からは大幅に能力が制限されているが、それでも常人を遥かに上回る身体能力（殆どフルハシと並ぶ）を発揮する事が出来、恒点観測員としての知識もフルに活かせば、防衛軍のサバイバル訓練で史上初となる100点満点（持ち点100からの減点方式で、脱落者が出た時点での保有物資や、開始前の体力テスト結果との落差などを競う。勿論ダンは支給品に一切手を付けず、肉体面も完璧に維持し続けた）を叩き出す事も容易である。

健康診断などは念力で肉体や機材をコントロールして誤魔化す事（自動的にサツマ・ジロウの肉体を元にしたシミュレート結果が返される）が可能。逆に言えば、念力の使えない状態の時にそれらの測定機器にかけられると、一発で異常値が出てしまう。

ソガの差し金によって仲間達との交流が増えたり、人間に助けられる場面が増えた為に、人類に抱くクソデカ感情が原作時よりもさらに重たいものとなっている。

反面、戦士としての完成度は原作ほど極まっていなない。

本編時空で後の防衛組織隊長に就任した自分と、もしも邂逅する機会があれば、「甘えるな！」と自分自身に説教される憂き目に遭うだろう。

アンヌとの親密度も、原作より圧倒的に高い。もはや彼女はダンにとっても特別な存在である。それが果たして恋愛感情なのかは分からないが。

休日になればアンヌと映画館へデートに出かけ、ソガに飯屋を連れ回され、フルハシと柔道場で汗を流し、アマギと図書館で本の感想を交換する。たまに隊長がレクリエーションを開けばホイホイ参加し、今のところ皆勤賞らしい。

四方八方から引つ張りだこで、プライベートが消滅しかけているが文字通り筋金入りの陽キャ（太陽の化身）なので問題ない模様。

ぶっちゃけソガが普通の地球人ではない事なんてお見通しだが、最早気にしていない。自分もセブンである事を言っていないからお互い様だと思ってる。というより、いつか彼が打ち明けてくれた時には母星へ遊びに行く気満々。

唯一、彼の出身惑星にてんで見当が付かない事だけが解せない。恒点観測員としての自信喪失中。あなたはいったい何星人なんです？

#### ◇ウルトラセブン

ウルトラ警備隊七番目の隊員。

何処か遠くの惑星からやってきた宇宙人と思われるが、何故かファーストコンタクトの時点から人類に友好的で、現在まで侵略者に対し共闘する姿勢を見せている。

正体や行動原理をはじめとして、多くが未だ謎に包まれた存在。

その能力は人類の常識を完全に超越しており、恐るべき超兵器の数々で武装してい

る。

近年判明した情報として、M78星雲（宇宙正義を自称し、宇宙警備隊なる機構を組織して、隊員を各地へ派遣する事で治安維持に貢献している星）出身であり、恒点観測局（宇宙の地図を作成、もしくは異文明の歴史を編纂する仕事と思われる）の職員らしい。

尚、この情報を齎したガッツ星人に、我々を攪乱する意図があつた可能性は否めないが、同星人がセブンを処刑寸前まで追い詰めた事を鑑みて、信憑性は高いと思われる。

また目撃証言によれば、目も眩む閃光と共に突如として出現したとも、木々やビルの合間から急激に巨大化したとも報告があり、事が終われば直ぐさま何処かへ飛び去つて行く。

その最高飛行速度は、観測範囲でもマツハ7に達すると目されており、ウルトラホークの最高速マツハ4すら振り切ってしまう為、潜伏地点の割り出しは困難。

戦艦大和他数隻の艦艇からなるアイアンロックスの転舵を阻止し、大質量の恐竜戦車による突進すらも押しとどめてみせた事から、その腕力はおよそ百万馬力に相当すると思われる。

防衛軍のタケナカ参謀とウルトラ警備隊長キリヤマ・カオル他数名の隊員が、対象からと思しき念話によるコミュニケーションを受け取つたと証言しており、地球人の言

語を理解している可能性が高い。

唯一の弱点としては寒さに対し、極端に弱いと考えられる。

実はその正体はウルトラ警備隊のダン隊員である！

◇U-8（ユーエイト）／ユートム

超兵器Rシリーズの凍結を受け、防衛計画の見直しを余儀なくされた警備隊が再防衛作戦の一環としてでっち上げた機械兵士。

謎の地下施設から回収したロボットに、ワイルド星との捕虜交換で入手した人工知能を換装した事で戦力化した。

隊員からはユートと愛称で呼ばれ親しまれている。

当初は定期的な充電を必要とし、基地内の決まったルートを巡回するしか出来なかったが、何度も改良を重ねた事で、現在はある程度の範囲なら屋外でも活動が可能となった。

本来ユートムとは、かつてノンマルトを虐げていた侵略者が作った採掘基地の管理AIと監視システム全体を指す呼称であり、本機は奴隷監視兼基地警備用の歩行端末に過ぎない。

しかし本作時空では、ソガが口を滑らせた結果の言いくるめとして、異星人の歩行機

械兵器全般に対する総称として浸透してしまった。

キングジョーもクレージゴゴンも、全部ひっくるめてU-TOMである。

両腕部に回転式のターボ・パラライズブラスター二門装備。

左手の鉄球は、火薬式の射出機構が組み込まれており、鎖分銅のような攻撃も可能。

右手は作業用のパワーアームに換装済み。近接戦闘時は手首を回転させ破壊力を増す他、モーターの廃熱を利用して相手に高温の圧縮空気を叩き付ける強制排熱兵装。プラズマクラスター（本人？曰くユートインパクト）も備える。

これはソガが冗談で、空気清浄機能を取り付けてくれという意味で口にしたのを、詳細を知らされなかったアマギが勘違いして搭載した。シャープの造語だから伝わりっこない。当たり前である

追加武装イメージはほぼビッグオー。

登場初期の台詞に半濁点が付いている時は、原作でも発していた電子音による判別不能の言語を喋っていた。

後に録音音声による異常アリと異常ナシのみ発声可能な時期を経て、現在は片言の合成音（全角カタカナ）で話している。

半角時は早回し。

また、搭載されている人工知能は、本来はナースタイプに使用されるもので、複雑な

変形や姿勢制御すら可能な高性能品のハズだが、肝心のボディが何千年も前の旧式モデルなため、膨大な演算能力の殆どを完全に持て余している。

初期の頃から妙に人間臭い言動をしていたのは、製作段階から既にソガ達の会話を学習していた為。いわゆる胎教みたいなもの。

失恋により初めて『痛み』を知り、このたび晴れてシンギュラリティを突破したが、誰も気付いてない。

実はユートムに搭載されているセンサー類には、ダンの内包している異常なエネルギー量がばっちり計測されている。

そのサイズ比を無視した質量や熱量は、それこそアンドロイドに近い数値なのだが、ユーエイトが誕生した時には既に、ダンが仲間にいる事を誰も疑問に思わず、あまつさえ基礎学習に使った防衛軍のデータベースにも当然のようにモロボシ・ダンが『人間』として登録されているので、それが正常なのだと認識した。

分かりやすく人間の平均値が5だとするなら、彼の職場環境は5〜10、フルハシ30、ユート95、ダン100(カンスト)みたいな状態だったので、ついこの間まで彼にとつての人間の定義は『エネルギー5〜100の二足歩行』くらいのガバガバ判定だったわけである。

つまり、初期学習の時点で失敗しており、ユートが自身を人間だと誤認したのは、だい



たいだんのせい。

防衛軍

◇ヤマオカ長官

日本支部を取りまとめる長官。

富士山の極東基地だけでなく、東京の参謀本部や日本各地の基地を巡回しているの  
で、普段はあまり目にする機会が無い。

大戦中にも多くの戦闘を経験した歴然の猛者で、退役後は沿岸警備隊の巡視艇艦長に  
就任していたが、キール星人の侵略兵器ボスタング襲来の警告を受け、出港。紆余曲折  
を経て件の怪獣を撃破した経験を持つ。

これが人類にとって公式では初となる、地球外文明との武力衝突に勝利を収めた事例  
(それまでは民間人や警官の活躍で撃退していた)であり、その功績を買われ、超常存在  
への対抗手段として再編された防衛隊に招聘された。

イワムラ博士とはその頃からの付き合い。

怪獣頻出期には、幕僚長としてバルタン星人への対策会議にも出席していた事もあ  
る。その際も、攻撃準備はしつつも先に対話案を採用する程度には慎重派であった。

## ◇マナベ参謀

冷静沈着な参謀。ヤマオカ長官の腹心。しかし劇中の言動から推察するに、ゴリゴリのタカ派である。

キリヤマとクラタの訓練生時代の教官であり、クラタをV3勤務に決めたのもこの人。

飛行隊の教官という事は空軍出身……と言いたい所だが、日本の防衛軍は前身たる防衛隊を再編するまで、長らく独立空軍を持つていなかった関係上、陸海軍それぞれに所属していた航空隊を合併して日が浅い。

また、本編のパラシュート訓練時にも顔を見せていた事から、空挺降下する特殊部隊の養成も行っていた可能性があり、ひいては特殊レンジャー集団ウルトラ警備隊の設立を主導したのも彼ではないかと推測される。

旧日本軍において落下傘部隊は陸軍の管轄だった為、おそらく陸軍閥の人間。

かつて日本にパゴスが出現した際、事件に巻き込まれた叔父が負傷しており、その関係から教材によく使っていた。

そのパゴスが再び現れ、今度は事態の收拾に寄与した事について、奇妙な巡り合わせを感じている。

## ◇タケナカ参謀

参謀最年少とは思えぬ目力を備えた男。

しかし顔に似合わずユーモアを好む、穏やかな人格者で現場の兵士からも人望が篤い。防衛軍内では珍しくハト派。

最新鋭艦マックス号の出港に権限を持ち、ミミー星人襲来時は大和の搜索指揮を執っていた事から、間違いなく海軍閥の長。

地球防衛軍が軍事組織にしては妙に風通し良く見えるのは、この男が普段「海軍としては陸軍の提案に反対である」とか言わないからだと思われる。

R計画の中止も、提言者がタケナカ参謀だったからこそ周囲が納得した可能性が非常に高い。

視察で各地を訪れた際、初めて赴く土地であるにも関わらず何故か熱烈に歓迎されたり、「あの時はどうも」「命の恩人」等と身に覚えのない感謝を述べてくる人が後を絶たない。(特に飛行場関係者からは現人神か生きる伝説のような扱いをされる)

絶対に人違いなので誤解を解きたいが、そのお陰か市民が防衛軍の存在を快く受け容れてくれたり、交渉がとんとん拍子で決まったりするので、本人としてはなんともアンバランスな気分になるとのこと。

## ◇ヤナガワ参謀

防衛軍の軍政を一手に引き受ける苦勞人。

ウルトラ警備隊がいつも万全の状態で戦えるのは、この人が兵站をしつかり維持しているから。

そりゃ1話以降、本編に登場してる暇なんかない。

ソガ被害者の会？ とつくに殿堂入りですが何か？

実は参謀の中で最年長。実質的な極東支部におけるナンバー2である。

この人がいなくなったら、今頃地球はペダン星人のものだった。船は動かねえ、ホークは飛ばねえ、おまけにライトンR30の材料がねえ。

恐らく個人としては最も地球防衛に貢献した地球人。

酸素破壊剤も無重力弾も、金が無いと作れないのだ。

## ◇ヒロタ

ソガ隊員の同期。

射撃であのソガと張り合う腕前を持つ。

浦賀の実家に年老いた母と病気がちの妹がおり、様子を見るために毎日帰宅している。

東京湾沿岸部にある参謀本部勤めに固執しているのはそのせい。毎日帰るには富士山麓は遠すぎる。

引き揚げ者として苦勞する母の背中を見て育ったため、ハングリー精神が凄まじい男となった。

そんなヒロタからすれば、ソガの「負けても次があるさ」というおおらかな態度は、非常に我慢ならないものだったらしい。

なまじ同期のひたむきな努力も知っているだけに、それを目の前であっけらかんと切り替えられるのは、ヒロタからすればある意味、自身がこれだけ切り詰めて欲している栄光全てを、価値の無いものとして踏みじられるような心持ちだったという。

本作ではそんなソガに、軟弱な現代っ子が成り代わってしまった為、自尊心が爆発四散した。ソガが口を開く度に神経を逆撫でしてくるので関係は悪化の一途だった。

現在は呆れが一周回って悟りの境地に達した模様。

こいつはこういう奴。多分宇宙人なんじゃないかな。洗脳効かなかったし。

あれから憲兵参謀補佐になった。不審人物の検挙に定評がある。なにせ自分自身が一度そうなった経験があるため、不穩分子のとりそうな行動や、内通者予備軍特有の小さな予兆が手に取るように分かる。

ステーションV3

◇クラタ

宇宙ステーションV3の隊長。

キリヤマの同期。

土星海戦では、当時の最新鋭機であったステーションホークを駆り、率いた戦闘機隊と共にザンパ艦隊直掩機を引き付け、キリヤマ達爆撃班の為に突破口を開いた。

技術力に劣る地球側が射程差を埋める為に乱戦に持ち込んだ結果、敵旗艦の誘爆に敵味方双方が全て巻き込まれるという最悪の結末を迎えたが、運よく無傷で生き残り、漂流していたキリヤマを回収した。

肉体的にはフルハシの方がよほど恵まれた素養を持つが、それを覆して余りある飛行センスと先読みで、撃墜王の名を欲しいままにしている。

訓練生時代には、追い縋る相手をフェイントだけで罠にかけ、自滅判定を食らわせた逸話を持つ。

よつぽど悔しかったのか、その時の相手には未だに悪党呼ばわりされる。

希望配属先を南極基地と嘯き、初代南極基地司令になると豪語していた（当時は、非常に強力な冷凍光線を吐く怪獣が居座っており、建設が難航していた）ため、同期からは『サウス』の渾名をつけられた。

しかし、口述試験及び戦略演習科目で悪友に一步及ばなかった為に首席は逃した。

◇アオキ

元ウルトラ警備隊候補生

少々、自信過剰のきらいがあつたが、異星人の洗脳工作により、侵略の駒となつた（自責の念が強いのか、本人は頑なに『あれは自分の意志だつた』と主張しているらしい。精神が未熟だつた為に付け入る隙を与えたという旨の発言と思われる）のが余程堪えたのか、そのような言動はなりを潜めた。

性格はともかく能力面では優秀の一言につき、野戦演習後に行われた射撃大会では、ソガとヒロタが共に星人の催眠下で足を引っ張りあつた結果、見事に優勝を果たし、副賞の人事希望権を使いV3勤務に志願した。

これには、キリヤマ隊長からの勧めがあつたとも、クラタ隊長直々の招聘があつたとも囁かれるが、本人としても「再出発には丁度良い」というなんとも彼らしい発言を残している。

クラタ隊長の腕前は、着任初日に嫌と言うほど見せつけられており、自信家の彼をして心服する他ないもので、上官として認めざるを得なかつた模様。

最も、完全に従順になつたという訳では無く、いつまでもヒヨつ子扱いするクラタ隊

長の態度を見返してやると意気込んでおり、出撃の度、彼の驚異的な飛行に僚機として死に物狂いで追従し、事実何度も死にかけている。

## ワシントン基地

### ◇ボガード参謀

本来はワシントン基地こそが任地であり、極東基地は管轄ではないのだが、戦後の在日米軍から供与を受けていた警察予備隊及び発足直後の自衛隊を下敷きとした防衛軍日本支部は、保有装備の多くがアメリカ支部と共通しているだけでなく、一部の基地は指揮系統がそのままアメリカ支部の傘下となっているため、その折衝役として両国間を飛び回っている多忙な人物。

兄の載っていた旅客機が、ベル星人の疑似空間に取り込まれており、後に見つかった血塗れの上着と手記だけが遺品となった。

手記には疑似空間での恐怖体験が克明に記されており、これがなければ、防衛軍は疑似空間の存在を認識できず、ソガアマガ両隊員の失踪時にも、前情報の無いまま搜索に当たらねばならなかったはずである。

マーヴィン捜査官をはじめとしたエージェント達の任命権限を有する。



## ◇マーヴェイン・ウィツプ

祖国アメリカの為に、世界をまたにかける超凄腕の諜報員。

人が嫌がる汚い仕事であっても、それらを進んで引き受け、ミッションのことごとくをクリアして来た。

秘密裏に、社会のゴミ共をきれいに一掃していく彼を、人は尊敬と畏怖をこめて、ダイテイルウィツプ処刑鞭と呼ぶ。

アメリカ支部にはウルトラ警備隊のようなチームはおらず、彼のような数十人のエージェント達が日本支部で言うところの警備隊に相当する。

これは、設立にあたり主にCIAやMI6といった機密性の高い組織が下敷きになっているためで、人員もほぼそのまま出向してきている性格上、一つのチームとして運用するのではなく、任務内容や担当地域によってそれぞれ任命される方が適しているとの考え方からである。アメリカの広大さでは、チームがいくつ必要になるか分かったものではない……とも言える。

尚、彼自身はCIA出身であり、本来は犯罪組織やテロリストといった地球人が普段の相手である。(とはいえ、地球防衛軍が動くのだから、勿論その内容は核弾頭や地球外技術を狙ったものだったりと、予想される被害が地球規模の巨大犯罪ばかりである)

実はドロシー・アンダーソンの幼馴染であり、彼女の護衛任務は彼が専任。その関係上、異星人と関わることもしばしば。

劇中では、ソガに匹敵する驚異的な射撃技能を披露し、あのフルハシを格闘戦で圧倒したりと、個人としては恐らく最強クラスの戦闘力を見せている。

実は大昔に飛来したルバン星人の先遣隊が、人間牧場計画の一環として現地で行っていた、品種改良実験の試作品であるデザイナーズチルドレン達の子孫。

◇ドロシー・アンダーソン

ワシントン基地の誇る才媛。瞬間記憶能力保持者。

放射性物質を用いた金属加工技術などを主に研究していた。

実は地球防衛会議で議論されるハズだったペダン星への対抗手段とは、R1号の事である。

あまりに天才すぎて、基地内でも浮きまくっていたが、つい最近、共通の話題で盛り上がる同性の友人を獲得したので、以前のように明るくなった。

独自に解き明かした暗号言語を用いて、誰ぞかと長距離通信に勤しんでいる。

マーヴィンはさらに待たされる事になるだろう。

何気なく手に取った冊子を開いて、どれくらい経っただろうか。

一語一語を噛みしめるように、刻みつけるように、何度も何度も見返して。

数行しかない一項目を読み終える度に、しばし瞑目しては何事かに思いを馳せる。

そんな彼は、その薄い冊子のあるページで、本来ならば紹介などされないハズの人物評を、もう一度指でなぞった。

「ウルトラセブン……ウルトラ警備隊7番目の仲間……強くて真面目、宇宙人なのに地球のために頑張ってくれる勇氣あふれる優しい戦士……」

少々面映ゆい気分になりつつも、その後続く文言が、さらなる追い打ちをかけてくるのではないか。

「しかしその真面目すぎる性格と秘密が多いことから、将来子育てに失敗するのでは？と仲間の隊員達から心配されている……か……」

まったく、好き放題言ってくれるものだな。

「……………ふいふ」

気付けば、小さな笑みが溢れていた。

—そもそも載せるの？—

—そりやあ載せるさ！—

—だが、下手な事は書けんぞ。機密には違いない—

—何か欠点でもあれば、親しみを感じられるのでは？—

—でも……勝手に欠点を作るなんて—

—任せろ！ こうしてやる！—

耳を澄ませば、どこからかそんな声が聞こえてきそうぞ。

「………いつたい、どこまで分かっていたんです………？」

知らずうちに込み上げてきていた何かが、彼から零れそうになった時。

「………あ、こんな所にいやがった！ まったく探したぜ親父！」

背後から聞こえた息子の声に、ソレは忽ち引つ込んだ。

「今日はお袋のトコ行くんだろ？ ちゃんと花持ったのかよ………って、何読んでんだ？」

そのままズカズカと近寄ってきた息子は、父親の手元を覗き込むと、その手にある物がなんなのかを瞬時に見抜き、大声で咎めた。

「ウルトラ警備隊のヒミツ………って、それオレがソガに貰ったパンフレットじゃねーか

！ なーに勝手に読んでんだ！」

「勝手に何も、そもそも私達が配っていた物だぞ。自由に読む権利くらいあるだろう」

「そ、そりや………そうかもしれないけど………いや、そうなのか？ うーん………」

父の堂々とした物言いに、息子は顎に手を当て悩み始めたが……

その結論が出る前に、父の方から待ったがかかる。

今、何か聞き逃せない事を言ったような……

「待て……ソガ、だと……？」

「あ？　なんだよ親父？」

「なぜお前が呼び捨てにしているんだ」

「呼び捨て……？　あーハイハイ、『けーご』とか言うアレ？　未だによくわかんねーん

だよなあ……ええ、なに？　怒ってんの？」

「怒ってなごいない」

「怒ってんじやん……」

　　「……聞かせてくれ」  
　　「……聞かせてくれ」  
　　「彼は……ソガ隊員は、どうだった？」

　　「……聞かせてくれ」  
　　「……聞かせてくれ」  
　　「彼は……ソガ隊員は、どうだった？」

「……聞かせてくれ」  
「……聞かせてくれ」

「彼は……ソガ隊員は、どうだった？」

問われた息子は、一瞬だけポカンとした表情を浮かべたものの……父の瞳の奥に、常に無く何かを期待するような、キラキラとした無垢なる少年の如き煌めきが灯っている事に気付くと、小さな驚きと共にニヤリと口角を上げて、親指をグツと力強く突き出した。

「ああ……聞いた通りの、イカした奴だったぜ！」

それを聞いた彼は、フツ……と小さく、しかし心から満足げに微笑み、頷いた。

「当たり前だろう……何せ、俺の友なのだからな」

## 戦い終わって見上げる空の

星雲荘

◇盟道Ⅱ龍／メトロン星人

宇宙ケシの実を使った侵略を目論み、セブンにアイスラッガーでくす玉にされたメトロン星人その人。

素早くエメリウム光線の追撃を喰らうも、体が真つ二つに割れたせいで勢いよくばら撒かれた濃密なフェロモンにより、セブンの狙いが狂ったためギリギリでトドメだけは免れた。

その後、ナラザキという心優しい奇特な地球人に縫合され（散らばった果肉や種は息子である少年がかき集めてくれた）一命を取り留める。なので正中線に沿って粗い縫い跡が残った。

本作でのメトロン星人は、植物性の宇宙人となっており、完全に切断されても直ぐには死なず、断面が空気や土に曝露しても多少は問題ない程度には生命力が強い。（地球人にも馴染み深い例としては、切り花や接ぎ木など）

その恩もあつてか、現在は地球侵略の意志をひとまず放棄したようだ。

メトロン星人は武力に頼つた侵略を無粋と見做す傾向があり、用意周到に謀略を張り巡らして、巧妙に相手を自滅や降伏に追い込む事を是とする。

彼もまたその例に漏れず、周到さを遺憾なく發揮しており、確保しておいたセーフハウスが軒無事だったため、それを元手に宇宙人専門の賃貸を始めた。

とはいえ当初からそれが目的だったわけではなく、放浪していたペガッサ星人を偶々拾つた事から、宇宙人同士の奇妙な同棲が始まり、それがなし崩しのこつたらしい。

偽名が中華系（あくまで彼が誰かにハッキリとそう明言した事は一度も無い。思わせぶりの言動で、周囲が勝手にそう納得しているだけ）なのは、下手に日本人だと言い張るよりも、異国人のフリをしていた方が、いざ地球の常識に無知を晒した際、単なる異国情緒として誤魔化しが利くと思つたから。

目論み通りにご近所からは、胡散臭い外国人だと認識されているが、アパートの場所が下町故に、行き交う人々が血気盛んな労働者ばかりであり、当人の社交性と品の良さもあつてか、『下手な日本人の荒くれ者よりよっぽどマシ』だと受け容れられている。

尚、侵略をしないとは言つても、土地の権利や、住民達の戸籍情報などは全て彼が偽造したもので、グレーどころかバリバリの犯罪者。



もともとが貴族的な生活をおくっていたので、音楽や芸術などの文化に関心が高く、またその素養も高い。(侵略も一種の道楽としての側面があった)

基本的に自らの好奇心を優先する趣味人であり、元侵略者崩れが多いアパート住人には珍しく風流を解する。これは、メトロン星にも地球ほどハッキリとはないにせよ四季があり、彼らが植物である為に『時期』に対してとりわけ敏感である事が関係していると思われる。

新人作家であるタウラ氏の『北川人情放浪記』の大ファンで、かなり気合いの入ったファンレターを送っていた。

その縁で現在は氏の同人雑誌に、『夕暮れ伯爵』のペンネームでエッセイを寄稿している。

尚、母星ではそこまで地位が高いわけでもなく、せいぜいが男爵相当。とはいえ、片手間で貿易商(的なもの)を営んでいたので、財力に関しては下手な爵位持ちよりはあったらしい。商才はあるようだ。

本人は完熟(成人)済みなので、近づくと、仄かな甘ったるい香りがする。

一昔前までメトロン星は、エンペラ皇帝傘下ヤプール(後の暗黒四天王)の支配下にあり、完熟した同族を献上品として上納する事で、代わりに庇護を約束されていた。

しかし丁度彼が発芽したくらいの頃、皇帝がM78星雲との戦争に敗退し失脚した事

で、配下たるヤプールの勢力圏もその煽りを受けて著しく縮小、しばらくしてメトロン星も庇護対象から外れてしまった。

おかげで葉も青い内から、あくせく働く羽目になったので、光の国には忸怩たる思いを抱いている。

実家では、ドラゴリーを初めとした昆虫系怪獣をフェロモンで従わせ、宇宙ケシや宇宙タバコのプランテーションで奴隷のように働かせていた。

収穫した品はマーキンド星人のルートで売り捌き、そうして得た金でシャプレー星人やキュルウ星人の使用人を雇っているらしい。

実は侵略目的も、地球を恐れる星々に『私がなんとかしてあげましょう』と囁き融資を募りつつ、ちやっかり自身の領地の特産品を使う事で、ブランドイメージの底上げも狙っていた。

なので、いつか領地の様子も見に行かなくては……と、うつすらではあるが頭の片隅で気にしてはいる。

とはいえ円盤が無いので、どうしようもないのだが……

また、一命を取り留めたとはいえ、専門家でもなんでもないド素人が緊急措置として行った手術だった為、予後不良で弱っており、定期的にペガツサ星人ダークの治療を受けなくてはならない。

なので、大家として威丈高に振る舞っている（というかナチュラルに他者を見下している）が、彼にだけは頭が上がらず、ある種の友誼すらも感じている。  
作者の脳内モチーフはナスとアケビ。

◇ダーク／ペガッサ市民：D区間9ライン

航行不能になったペガッサ市から、万が一の保険として、地球を爆破する密命を受けてきた作業員。

しかし、動力停止中のペガッサ市からでは、不完全なダークゾーンしか繋がられず、殆ど不時着のような形で地球に來訪し重傷を負う。

彼が自らを癒している間にペガッサ市は破壊され、いざ任務遂行という段でそれを知り、復讐心のまま地球もろとも心中しようとするが、セブンに阻止される。

失意のまま闇夜に紛れ、幽鬼のようにフラフラと彷徨っていたが、術後感染症に苦しみ、自身を治療できる者を血眼になって探していたメトロン星人に確保された。

当時は発狂一步手前の精神状態だった為、メトロンの口車（私を治せば君の復讐を手伝ってやる）にまんまと乗せられ、彼を治療したが、いざ回復したメトロンがペガッサ難民達の情報を手に入れてくると、丸三日狂喜乱舞してから、冷静にそれどころでは無いと考え直した。

現在は、同胞達が安定した生活を手に入れられるよう、地球人に溶け込む手助けをしている。

彼自身は長距離トラックの運転手として生活費を稼いでいる。(荷を受け取ったらトラックごとダークゾーンで転移して、ある程度間を置いてから目的地に出現すれば、燃料費ゼロで移動時間を丸々自由に使えるから)

尚、ダークは善意でこのペガツサ星人向きの仕事を同胞達に勧めており、仲間の多くがこの職に就いた結果、日本の物流が大幅に強化(ペガツサ星人達はまるで気付いていないが、彼らが請け負っている運搬量は通常の十倍)され、怪獣災害からの異常な復興速度を支えている。

ペガツサ星人は本来、工場で生産される特殊な海藻だけを食べていたが、地球で生きていく上では身体改造を施して雑食寄りの食生活に適合させる必要があった。

しかし、技術があってもそれを行う為の高度な医療器具までは市から持ち出せておらず、途方に暮れていたところ、メトロンが自身の設備を貸し与えたので難民達は餓死せずに済んだという経緯がある。

ダークはその事を大変に恩義と感じているため、口ではなんだかんだ言いつつ、内心では頭が上がらない。

住人が体調を崩した時は、だいたい彼が見てやる事になっている。

しかし処方箋代わりに皮肉を山ほど聞かされる羽目になるので、みんなやせ我慢してしまいがち（それデ病氣ヲ悪化させる方が、よっぽど馬鹿馬鹿しいトハ、思わないノカ!?) さてハ皆、地球人の病院デ、ピン詰めにされる方が、お望みなんだナ!?)

本作におけるモチーフはアメフラシ。

不時着のショックで翻訳機が不調であり、少しだけ発声に違和感が残った。

調律部分に繊細な専用部品が必要となる為に、流石のドロシーでも直せず、彼女には別の翻訳機を使うよう勧められたが、頑なに元の品を使い続けている。

曰く『奴に文句を囁いタ時二、声ガ違つたら、傷付きようがナイ』との事で、それを聞いたドロシーは『勝手にしたら?』と呆れ果てた。

ペガッサ人が笑う際は、舌<sup>しぜつ</sup>歯に当たる部分を擦り合わせる癖があるので、翻訳機を通さない場合、ざりざりと何かを削るような音に聞こえる。

顔の右側面に（人化した際は瞼の下から顎にかけて）大きく引き攢れたような蚯蚓腫れがあるが、アイスラツガーが外とう膜を掠った事による古傷である。消すのは容易いが、消す気は無い。

実は市長の元秘書官であり、実質的にはペガッサ市のナンバー2。

地球爆破任務も、もちろん脱出など出来ない片道切符で、同胞達の為に地球と運命を共にする覚悟で来た。

本来の歴史であれば、ペガッサ過激派を率いて、ゴドラ星人と共に地球防衛軍の乗っ取りを企むはずだったが、防衛軍の動向を監視する中でソガやアンヌ（……と非常に癪だがダン）達と結んだ友情に希望を見出し、いつか同胞達が表舞台に立てる日を夢見ている。

尚、ソガが善人面して渡してきた救急箱に、こっそり発信機が仕込まれている事へ気付いた際は、本気で頭に来ており、地面に叩き付けて粉々にしてやろうと思った。

その救急箱は現在、市長婦人の運営する孤児院で、今日も子供らの生傷を癒すのに役立つっている。

#### ◇ドロシー・ペダン

元ペダン太陽系銀河方面軍特殊作戦群筆頭技術主任。

ジーアング技術開発棟（母星で最も権威のある研究機関であると同時に工兵養成所）の首席。

潜入工作に高い適性を発揮し、ワシントン基地のドロシー・アンダーソンとすり替わり、地球防衛軍の機密情報を探っていた。

方面軍の中ではそれなりのポジションに就き、エリートコースで出世も約束されていたが、それでも所詮は末端兵の一人に過ぎず、彼女は本気で両星間の和平の為に奔走し

たものの、それを平気で裏切るような上層部の命令に、自身の信じていたペダン軍の理想が虚飾であった事を悟り絶望した。(兵士のほとんどはプロパガンダによつて母星の正義を純粹に信奉しており、彼女のように現実とのギャップで苦しむ者も珍しくない) ドロシーを返還した後、自暴自棄のようになり地上で帰還を拒んでいたが、キングジョーと共に遠征軍が全滅した為、彼女も母星に帰る手段を失った。

尤も、彼女のサポータージュが原因で部隊が全滅した事は紛れもない事実であり、この過失が意図的なものであると露見すれば銃殺刑は免れない為、帰還する気はさらさら無い。

母星では彼女の軍籍はそのままM I Aとして処理されている。

もとより潜入任務は得意中の得意であり、地頭の良さで直ぐに職を見つけたが、その華やかな美貌が目立ち過ぎ(そもそもの顔立ちからして美形だったが、整形装置がキングジョーと共に爆散した為、顔の変更が出来ずドロシーと瓜二つのまま。髪色を染め、カラーコンタクトで誤魔化しているが、もしもモデルを知る人物に見られたら何処ぞのグラサン捜査員が飛んで来かねない)、噂にならぬように一所へ留まれ無かつたところ、ペガッサ星人ダークと接触した。

現在は、彼に顔を手直しして貰った(面影はあるが、せいぜいハーフ程度に落ち着いた)事もあり、メトロンの偽造戸籍で、バイト先だった図書館に職員として正式に(あ

るいは不正に)就職した。

たまに児童コーナーで、絵本の読み聞かせをしているらしい。

母星が強烈な女尊男卑の女系社会だった為、アパートの男共には冷ややかな態度をとる事もあるが、彼女が真に嫌っていたのは軍国主義の息苦しさで、その根底にある星ぐるみの行き過ぎたマッチョイズムな為、常に知性的かつ紳士な態度をとる彼らとの仲は良好。

むしろ同性であるゴドラ星人ララの方にこそ、故郷の匂いを感じて辟易する場面が多いとか。

ペダン星人にしては珍しく、異星の文化に対して強い興味を持っており、軍人になったのも娯楽の少ないペダン星において、『潜入工作の精度を高める為の敵性文化の研究』と称し、大手を振ってそれら資料の閲覧申請が出せるという、かなり俗な理由が占めていた。

なので、住民達の中では白眼視されがちなメトロンの趣味道楽に、最も理解と共感を示す。

アパートの機材はたいてい彼女がメンテナンスをしている。

尚、任務中にバックレた為、携行していた軍用拳銃もそのままちよろまかしており、仲間達がちよつと危ない橋を渡る時は護身用にホイホイ貸し与えたりする。(彼女として



は御守り程度の感覚だが、ペダン軍の正式採用モデルの中では低出力というだけであり、着弾箇所を瞬時に原子崩壊させてしまう威力の代物。おかげで後にミーヤの両腕が吹き飛ぶ事になる)

ブローチ型発信機を使って、夜中に毎日、誰かとクチャクチャ長電話するので、神経質なダークに文句を言われがち。

#### ◇後藤Ⅱララ／ゴドラ星人

女に化け、油断したダンを襲撃し、まんまとウルトラアイを奪ったゴドラ星人であり、基地の地下動力炉でセブンと格闘していた個体。

途中で駆け付けたキリヤマが時限爆弾を解除してしまった為に、激昂して背後から彼を殺害しようとするも、エメリウム光線を右肩に受け昏倒。

しかし、等身大故に出力が下がっていたのか、はたまた急所を外れていたのか致命傷には至らなかった。

当時は一刻を争う状況だった為、セブンもキリヤマも死亡確認まではしておらず（と  
いうよりエメリウム光線を耐えきる存在の方が稀）、基地の混乱に乗じ這う這うの体で  
脱出に成功する。

それからは一目につかぬよう山野に潜伏し、傷の回復を待ちつつ機会を伺っていた

が、逃げ延びた先がベガツサ難民達のキャンブ地近くであった為、彼女が大量に食い散らかした動物の死体を怖がった難民達が、ダークに助けを求めた事で存在が発覚。

半ば野生化していた所を、調査に来た三人によつて確保された。

メトロンのフェロモンまで使つた説得でようやく彼らに（渋々）合流したが、もともとの気性からして住居の必要性を全く感じておらず、割り当てられたアパートの自室を、ちよつと容量の大きな物置程度にしか考えていない。

とうか普段は修行と称して山籠もりしているか、たまに趣向を変えたい気分になったらスポーツジムに入り浸つて自己鍛錬に明け暮れているので、殆どアパートには寄りつく事がない。

ほぼ籍を置いてるだけのマタギと化している。

彼女の正体であるゴドラ星人は、分厚い外骨格に覆われた節足動物なので、本来はいくら鍛えようともその甲殻の容積以上に成長できず、脱皮しない限りは肉体強度が上がる事など無い。

……ハズなのだが、脊椎動物（つまり人間）へ擬態中に特訓すると、何故か本来の姿の方でも筋繊維密度が上昇するという謎の現象を発見してから、自身の肉体開発にのめり込み、今では晴れて立派な筋肉フリークのトレーニング狂となつてしまった。

恐らく人体のうち、筋肉へ関する事にだけ限れば、ダークすらも凌ぐ程に精通してい

る。

何故それ程までに強さを追い求めるかと言えば、もちろん弱肉強食な種族柄もあるのだが、アピールしたい意中の相手がいるから。

その相手とは、自身を初めて打ち倒した強靱なオス……つまりウルトラセブンに首っただけであり、彼の番いとして相応しい相手になるべく猛特訓中。

本性でも人化中でも、右肩を中心に酷い火傷の跡があるのだが、それを愛おしそうに指でなぞってはウツトリするという奇行には、全ての住民がドン引きしている。

一応、メトロンが家賃を寄越せと五月蠅いので、修行中に山で獲れた動物（大抵イノシシか熊）だとか、適当に拾った木の実や山菜（と正体不明のキノコ）を物々交換しているようだ。

本来の歴史では、ダークから防衛軍転覆計画を唆され、セブン会いたさに二つ返事でそれに協力。

母星から同志達を呼び寄せ、ルンルン気分準備を行い、今度こそ侵略成功一歩手前まで行くが、阻止しに現れたのがダンではなくカザモリで、しかもセブンとしての覚醒すら中途半端も良いところという有様に、盛大な解釈違いを引き起こし、ヒステリーのまま爆破される防衛軍基地と運命を共にした。

本作時空ではダークにその気が無いので、よほどの事が無ければ彼女が自分から侵略

に乗り出す事は無いものの、各人差はあれどそれなりに丸くなっているハズの住民達の中で唯一、侵略当時のマインドをほぼそのまま保ち続けているぶつちぎりの危険人物。

そんな武闘派の彼女だが、住民の中では意外にもダークの事を一番認めており、『種族の為に敵惑星ごと自爆する事も辞さぬとは、その覚悟なかなか天晴れな奴!』……と思っている。

次点でミーヤを『お前、見所があるね!』と目にかけてやっている(つもり)。

逆にドロシーやマヤのように、工作人員にも関わらず、母星を裏切り利敵行為に走るような輩を、ゴドラ的価値観に則り、心底見下げ果てた奴らだと軽蔑している。(本作時空でのマヤはそうなる前に退場したのだが、彼女曰く『軟弱者の匂い』がするらしい)

しかし、彼女らは『強い戦士』ではなく『弱いメス』(武器が無いと何も出来ないような虚弱体質……!)なので、そういう判断をしても当然だと許してやってもいる。(強靱な精神は、強靱な肉体にこそ宿ると主張するタイプ)……というかむしろ、弱くて可哀想な存在なので積極的に自分が守ってやらねばとすら、考えているフシがある。

……メトロン? ふん、どうでもいいわ、あんな道化!

——おや、これは手厳しいね。

……わあ、ふえろもんらあ! いいにほひ。

実はゴドラ星人は真社会性動物のような生態をしている為、集団への帰属意識が非常

に強く、母星から切り離されてしまった彼女にとっては、このアパートこそが新しい群れであり、この集団に貢献しているという認識によって、所属欲求をなんとか満たしている状態。

一見、彼女にメリットが何も無さそうなのに籍だけは置き、催促された家賃を踏み倒したり、そのまま出て行ったりもしないのがその証拠。もちろんララ自身もそれに気付いてはいない。

モデルはテツポウエビとドウケツエビ。及びシナルフェウスレガリス。（分かる人には『サガミレガリス』の方がピンとくるかも）

◇マヤ／マゼラン星雲人

惑星破壊弾道弾が、セブンによって迎撃されないよう、彼の変身を阻止する密命を帯びてやってきた作務員。

しかし、その内容を既に知っていたソガにより、見敵必殺とばかりに爆撃される。

死んだと思われていたが実は、監視に来ていたダーク（マゼラン星雲のやり口は宇宙でも有名で、地球に並ぶ要警戒対象）により間一髪のところまで救出されており、重傷を負ったもののアパートに保護されていた。

原作ではセブンの説得に絆されていたが、こちらの世界線では命の恩人であるアパート住人に心を開く。

自分が失敗しても後詰めが投入される事。またそれがさらに優秀な自身の双子の姉である可能性が高い事を告白し、地球に滅亡の危機が迫っていると警告した。

いきなり殺されかけた為、地球人に対しては原作以上に懐疑的。やっぱり野蛮人じゃないか。

それでも、恩人であるダークやドロシーが好いている星なので、なにかしら見るべき所があるのだろうかと考えている。

また、母星では味わえなかった『自由』を知り、その感覚と地球が紐付きつつあるので、地球人は別に好きでも無いが、この場所については母星以上に自身の在るべき居場所であると認識している。

劇中では、小柄な彼女の体格に対してあまり適しているとは言えない、大きめのアサルトライフルであるマゼランガンをも、難無く使いこなす姿を見せている。

先に構えていたとはいえ、単射かつ腰だめの状態から、ダンが素早く引き抜いたウルトラガンだけ撃ち落として機先を制するという離れ業を、涼しい顔でやってのけており、こと射撃に関しては相当な腕前を持つ事が伺える。

単独での重要な潜入仕事を任されるだけあり、格闘戦以外のあらゆる技能において優秀な成績を収めるが、精神面での脆さを度々指摘されており、裏では上層部から失敗作の烙印を押されている。

なので、目標に取り入れる程度には人間性を残している事もあって、今回の任務で使い捨てるには丁度良い人材だった。

本来の計画においては、ウルトラアイを奪取するため無害な少女を装ってダンに接近する予定で来ており、原作であんなにすんなり行くとは上層部含め誰も思っていなかった。

マゼラン星雲人は、基本的にテレパシーで会話するのだが、そのままだと地球生活に不便な為、語学練習も兼ねてアパートの中でも普段から喉を震わせて発声するよう心がけている。

慣れない喋り方をしているせいで、多少辿々しいが、もともと口数の多いほうではなかったたので、違和感は少ないようだ。

現在は科学館でプラネタリウムの受付バイトをやっている。

物静かで雑用も器用に熟すため、客受けも含めた評価が高いが、稀に人が変わったようにとんでもなく勤務態度が悪い日があるので、同僚達は首を傾げている。

そういう日は大抵、しばらく女性職員から幾分同情的に接される模様。

トラックが横転した際、運転席の下敷きになり両足を複雑骨折したため、未だにびっこを引く時がある。

それでも、休みの日はスナックに繰り出し、下手くそなゴーゴーを披露しては、無軌

道な若者たちに紛れて何者でも無くなる瞬間を楽しんでいるらしい。

◇ミーヤ／マゼラン星雲人

潜入早々、爆撃されて死亡したマヤのバックアップとして投入された作業員。

マゼラン星雲では、彼女らのような作業員を育成する専門施設があり、マヤとはその施設で物心ついた時から一緒だった。

実はクロロン生成されたデザイナーズチルドレンであり、双子でも何でもないので、同室である二人は自分達をそう信じ込む事で、共依存による精神的支柱としていた。

施設では幼い頃から人殺しの技術を叩き込まれ、時には蠱毒のように同じ顔の同世代と殺し合いをさせられて育ってきた為に、人間らしい感性はほぼ無い。

唯一の生きがいは、養成訓練が終わり、ベッドが一つしかない狭い部屋の中で、マヤとお互いのぬくもりを抱きしめながら一日を終える事。

個々の技能テストでは一部でマヤに劣り、特に正確性では明らかに軍配が上がるが、即断即決を旨とする性格上、考え込んでしまいがちな妹よりは速度に秀で、あらゆる動作がマヤよりもごく僅かにだが早く終わる。

特に、施設で最も重要視される年度末の生存テスト（各自ナイフ一本手渡され、数千人纏めて閉じ込められる殺し合い）では、妹以外の存在を塵芥としか思っていない生粹



の殺人マシーン故に、凄まじいキルスコアを叩き出す（通常は規定時間を越えても生き残りが10人以下になるまで終わらないが、彼女の場合は時間内に全員血祭りに上げる）為、総合的な評価ではミーヤの方が高いとされている。

同世代のクローンの中でも、ミーヤは突出した残酷性と戦闘力を発揮しているが、実はこれは、脳の共感性を司る領域を麻痺させ、目的解決に最適な合理的思考を強化する為の精神矯正薬を、こっそり妹の分までミーヤが服用していた為である。

ミーヤは自分達に毎晩配給される一部の錠剤の効果をたまたま知ると、妹が自分のような殺戮マシーンになる事をよしとせず、マヤにも気付かれないようにそれを自分で消化してしまう事にした。

実は彼女らクローンの肉体は、捕虜になった際の機密漏洩防止策として、通信機とブローチコアの接続が切れると、気体のように跡形も無く崩壊してしまうようになってい

る。確保したジュークボックス型通信機を、ドロシーが改造してくれなかったら、二人ともブローチだけ残して地球の大气に同化する羽目になっていた。

妹に第二の人生を与えてくれたので、彼女の事は純粹に慕っている。恐らくミーヤが初めて感謝した大人。

反面、自身の両腕を吹き飛ばし、復讐の邪魔をした上に生き恥という屈辱まで与えて

きたダークに対しては、非常に憎々しげ。とはいえ妹の命の恩人である事は事実なので、なかなかアンビバレンツな感情を抱いている様子。

腕はペガッサの再生医療でくつついたが、流石にアパートの限られた設備では限界があり、少しだけ痺れが残ってしまったので、以前のような細かい作業は出来なくなった。相変わらず地球人の事などどうでも良いが、ミーヤにとつては妹以外の全てがそうなので、特段変わりは無い。過酷な任務を命令されないので、母星なんかよりよっぽどマシ。

それでも、狂った星の滅茶苦茶な言葉を覚えるのなんか御免だわ！……との事で、外では翻訳機を使い、アパート内では思いっきりテレパシーを使っている。

そうは言いつつ、姉は手と口の出る速さが施設で一番だった分、思考に口が追いつかないと苛立つて仕方が無いからではないか……とマヤは睨んでいるらしい。

思うように動かない腕の事もあり、この期に及んで働きたくなんか無いのだが、プー太郎だとメトロンが家賃家賃五月蝋いので、嫌々スナックでバイト中。

住人達は、人間嫌いのミーヤが接客業なんて（客が）大丈夫かと戦々恐々していたが、彼女の場合は妹（と住人ら）以外の存在を心の底から無価値に思っているのが功を奏し、工員時代に叩き込まれたハニトラ技術としての営業スマイルを振りまいている。

もともとアングラなバーに来る客層には、はずっぱな対応の方がウケるようで、特に

オイタをした客には腕を捻り上げる程度で済ましてやっている聞き、住人らは胸を撫で下ろした。

ただ稀に、店の隅でただ静かに黙り込んでいるだけの日があるとの噂もある。

客の中には、その時に見せる物憂げな表情にドキリとさせられた者もあり、そんな日は決まって、普段の彼女では考えられない程に素朴で丁寧な接客をされるので、いつものギャップから、心を驚擱みにされてしまった不運な若者が後を絶たない。

#### ◇シラトリⅡキリエ／ペロリンガ星人

船団をカモフラージュする作戦の事前工作として地球に潜り込み、見所のある人間を母星にスカウトしていたが、侵略が秒で頓挫したため、地球に取り残された。

なお、スカウトされた人々は、専用の居住施設に入れて飼われる。その名も『異星生物保護観察館』いわゆる動物園。

とはいえ基本的に利用客との距離は近く、業務形態は猫カフェに近いもの。

飼われている地球人側としても、衣食住が完全に保証され、趣味に没頭したり、訪れるペロリンガ人に地球の話をしてやったり、他の収容生物と触れ合ったりしていれば良いので、だいたい似たような気質の者ばかり集められている事もあつてか、概ね快適に暮らしている。地球人の感覚で最も近いのは老人ホーム。

恐らく、動物園の動物は幸せだと考えている人間なら、死ぬまで穏やかに暮らせる場所。私も連れて行って欲しい。

—「そうでない人間？ さあ、そんな子はウチに居ませんねえ……徐々に弱っていく体の弱い可哀想な地球ちゃんならたまに来ますけど。でもでも、ここに保護される子は、元の場所で酷い目にあっていた子ばかりらしいですから、ここで最期の時をみんなに看取られながら幸せに過ごせたという記憶をプレゼント出来るのが、この仕事の誇りなんです」……と、一等管理員ピニヤガピヤ氏は晴れやかな笑顔で語った（『今月の地球ちゃん便り45号』より抜粋）—

キリエはペロリンガ星人の幼体であり、地球人換算ならまだ少年だが、もともと長寿な種族で、純粋な経験年数自体は住人達の中でも上位。

その為、非常に早熟な印象を与えるものの、これがペロリンガのごくごくスタンダード。幼体であるキリエが潜入作業員をやっていたのも、ペロリンガ的には普通の事であり、裏方なのは戦闘力が低い（成体になれば、巨大化して宇宙空間を飛行し、セブント格闘戦も出来る）からという、ただ単純な理由だけ。

長寿な種族柄、割と気が長く大らか（劇中でもフクシンに決断を急かしたりせず、逆に動転した彼から用語を再び質問されても、聞き取りやすいよう、ゆっくり返答していた）で、相手の意見を尊重し、話をよく聞こうという姿勢を見せる。

そんな外見に似合わぬ老獺さと、年相応の純真さを併せ持ち、おまけに聞き上手の為か、相手の懐に潜り込んで心情を吐露させるのが異様に上手い。コミユカの鬼。

つい最近加わったばかりの新参にも関わらず、すっかり近所のオバサマ達のアイドル。アパートの玄關掃除してたら、よくお菓子とかもらう。

この才能には、同じく社交性に長けたメトロンをして、思わず舌を巻くほど。

日中は住人達も出払っているため、アパートの掃除が終わって暇な時は、大抵ミーヤ（夜勤）に遊んで貰っている。

出身星系が同じで、種族特徴から来る趣味嗜好が似ているのでダークと仲が良い。

一見、トサカとクチバシを持つ鳥類に見えるが、貝殻の名残や舌歯が発達したものであり、こう見えて軟体動物。

なお、古代バド共用語から派生した彼らの言語において『ペ』は冠詞や指示語のような役割を持ち、『リング』が『子供』を指す。そこへ複数を示す接頭辞の『ロ』を付けて『ペ・ロ＝リング』と表記される。

さらに言えば『ガツサ』は『光輝くもの』や『あるべきところ』といった強いプラスのニュアンスを含んだ語であり、それが転じ、『星』という意味も持つ。

特に断りもなく単に『ペ・ガツサ』と言った場合は彼らの太陽の事を指すため、翻訳するならば『唯一の星』となり、ペロリングは『その偉大なる子ら』と言ったところか。

なので『ペ・ガツサ　ロ<sup>星</sup>||ガツサ　パ<sup>第</sup>・ロ<sup>68番</sup>||68ガツサ　ペ・ロ<sup>惑</sup>||リంగా』までが正式な種族名である。

なおキリエは、地球に来て一番最初に、宇宙人の姿でシロウという少年にもスカウトをかけており、こちらにもきつぱり断られている。

地球人としての姿は、その時にシロウ少年をモデルにして借りたもの。ちゃんと本人も了承済み。

本作時空でのモチーフはウミウシ。

余談として、『シラトリ||キリエ』は白鳥健太郎とキリエロイドから取った演者ネタ。

## 海底

◇ヤオ／ノンマルト

ノンマルトの穩健派氏族を率いていた代表。

ヒメという妹がいる。

海底原人のボデイは殆ど宇宙人由来であるが、連絡役として身体交換せずに人質にした豪族関係者や、侵略者が地上で産ませた子孫の内、なんの能力も発現しなかった失敗

作なども海底に押し込んでいた為、ごく僅かにはあるが、本来の地球人としての血を持つ者もいる。

そうした者同士の間産まれた子の中には、一種の『先祖返り』を起こして産まれてくる子供が、ごく僅かながら存在していた。

その子供は、人間の肉体に、宇宙人の強力なサイコパワーを宿しており、かつての侵略者のように超常の力を使う事が出来た。

しかし、肉体が人間の為、海底環境には全く適応出来ず、大抵は産まれてすぐ死んでしまう。

だが中には幸運にも生き残った子がおり、宇宙船を改造した宮の中で大切に育てられ、神の巫女として崇められる。

ヤオも、そうした先祖返りの一人であり、かつ双子とも先祖返りという凄まじく珍しい存在。

彼女本人は有り余るサイキックパワーから来る長寿と、変身能力、加えてちよつとしたレイオニクスの素質まであり、ノンマルト始まって以来の天才と言われている。

むしろ、彼女らが居なければ、ノンマルトはもう少し早く滅びていた。

幼い頃より海龍と心を通わせ、友としており、集落の防衛を担っている。

これまたレイオニクス半覚醒状態の地上人が、カメの怪獣に乗って、ノンマルトの領

域に飛び込んで来た時などは、集落に被害が出ないように、彼を精神世界に引き込み、海龍と力を合わせて追い払った事もあった。

本来の歴史では、セブン本編開始前から既に死亡しており登場しない。

かなり古くから地上人との干渉を試みており、人間としての肉体を活かし、長期間陸に上がって活動していた事もある。

その際、カマタリという地上人に力を貸し、かつての支配者層直系氏族の一つであるソガ氏相手にクーデターを成功させた。

それを皮切りに、このまま侵略者の子孫を根絶やしにして先祖の仇を討とうとしたが、余りにも超常の力を見せ過ぎた為に、妖怪変化として味方から殺されかけたので、一旦計画は中止した模様。

この出来事は当時の記録にも『大化の改新』の名で残っており、時を同じくして『ヤオビクニ』なる存在が各地で目撃され始めている事から、相当長い間暗躍し、かつての侵略者が作った支配体制の転覆を狙っていたと思われる。

だが、ある時に自分を探しにきたノンマルト氏族の者を、地上人の青年が助けるのを見て、彼の純粋な優しさに期待して、海底に連れ帰った。

そのウラシマという青年と急速に惹かれあつたヤオは、彼と将来を誓い合い、復讐ではなく、地上人との和平を目指す事にしたらしい。



右手の平に、何かで突き刺したような傷があるない。

◇ヒメ／乙姫

ヤオの妹。

実は、平成版で浦島太郎を探しに来た、乙姫その人。

タロウという地上人の願いを聞いた彼女の姉は、タロウを一旦過去に送り、村の人々に別れ（最後に『タイやヒラメ、ヤオとヒメが待つてる』とか言ったらしい）を告げさせ、帰ってくる彼をタキオンバリアで包み（彼女らの過ごしていた精神世界は時間概念から隔離されているため）、過去の村から回収しようとしたが、何らかの事故によりタロウは未来に不時着。

墜落ショックにより記憶を無くしたタロウが、制御盤を開いてしまった為、貝殻に封じていたサイキックパワーが逆流して、ヤオは命を落とすとした。

ヒメは姉の魂を、彼女の友だった海龍に憑依させ、復讐を誓った。

なおこの時失敗したのは、さらなる未来において、ノンマルト残党がフルハシ参謀を無理矢理過去に送ったせいで時間軸が捻れてしまったから。（ゆつくり横軸移動していたタロウの脇から、縦軸を弾丸のようにぶつ飛ばされてきたフルハシが、超スピードで彼を跳ね飛ばしたようなもの）

ヒメにとって地上人は、最愛の姉を奪い、大切な同胞を根絶やしにした最悪の象徴だが、海龍と一体化した姉の心を救ったのも、またタロウの愛だったので、ヒメは彼らの幸福の為に、自らの命を燃やして二人の魂を過去に送った。

ただ、こうして完全に歯止めを失った残党が暴走したせいで、上記の事故に繋がってしまう。

#### ◇ウラシマ・タロウ

記憶を取り戻し、『夕顔の花の約束』を果たした事で、魂ごと海龍に取り込まれ、最愛の人と一つになった。

その後、ヒメの命を賭した超能力で、ヤオ共々過去に飛ばされてきた模様。

今はヤオと一緒に、憑依術式の維持の為に血を捧げている。

実は、全く別の宇宙であるにも関わらず、こちらの世界からソガ（主人公）を呼び出せたのは、彼という『時間の旅人』を触媒としたから。

『浦島太郎』という概念だけは、どちらの宇宙にも共通して存在するため、ごくごく細かいパスが繋がった。

「ふむ……」

胡坐をかいたまま、さつきから微動だにせず、ちやぶ台に置かれた住民名簿と睨めっこしていたロンが、難しい顔で唸った。

「どうした？」

後ろを通りかかったダークが、それを聞きつけ訝しげに覗き込む。

白い部分が減ってきた名簿に内心、えらく充実したもんだ……などと感慨深く思いながら。

問われた大家はと言うと、眉間のシワを崩さず無言のまま、顎に当てていた花卉を、ゆつくりと紙の上に移動させ、ある一点を指し示す。

『ペ・ガツサ ロ||ガツサ パ・ロ||68ガツサ ペ・ロ||リング シラトリ||キリエ』  
「……長いな」

そしてようやくポツリと漏らした一言が、全てなのだろう。

もう一方の花弁で、湯せんしたチョコペンを、器用にクルクルと回しながら黙り込むロンの姿に、全てを察したダークは、深く溜息を吐く。

そして、徐にペンの蓋を開けると——こちらはただの油性ペンだが——先ほどの名前

の前半部分殆どに対し、キュツキュツと線を引いてやった。

「ほら、ここカラここまでハ、共通部分だカラ、よほど畏まつタ場でナイ限りは、イラン」  
 『ペ・ガツサ ロ||ガツサ パ・ロ||68ガツサ ペ・ロ||リンガ シラトリ||キリエ』  
 「……ほうー！」

それを見たロンは、明らかに喜色の混じった声を上げると、チョコペンの口を捻じ切り、ホワイトチョコで出来た板に、残りの部分をいそいそと書き込んだ。

『ようこそシラトリ||キリエ』

「……完璧だ！ こういう時、ネイタイプがいると大違いだな！ いや、助かったよ」  
 「……カタカナで『キリエ』じゃ駄目だったのか？」

ちつつちつち、と花卉の中の雄しべを左右に振るい、肩を竦めるロン。

「当たり前だろう？ 地球人としての名を、母星語の綴りで書いてこそ、喜びもひとしおと言うものだ。風情が足りんよ、風情が！ なあ、キリエ君？」

椅子の上で足をふらふらさせていたキリエは、一旦うどんを啜るのを止め、少しだけ首を傾げて考える素振りを見せたが……

「ん……別に、どつちでも良いよ」

「……風情が足りんよ、風情が！」

ロンは、ダークとキリエの顔を素早く見比べ、全く同じ台詞を繰り返した。

……と、その時、玄関が開いて誰かの足音が……

「ただいまー……きやつ！ ナニコレ、いったいどうしたの!? 今日って何かの日だったかしら!」

そう言ってドロシーは、賑やかに飾り付けられた部屋を見渡し感嘆する。

「お帰り、フロイライン。我々は君の帰ってくるのを待っていたのだ」

だがその言葉に、渋々と言った様子で飾り付けをしていた少女が反応し、目を吊り上げた。

『なーが、待っていたのだ……よ！ アイツら、先に食べ始めてるじゃないっ！ ドロシーに失礼だと思わないっの？ 待ってたなら止めなさいよ！ 常識ないんじゃない?』

そう言って、向こうのテーブルでうどんを啜る、ダークとキリエを指差しながらいきり立つミーヤ。

しかしそんな剣呑な少女を、金髪の美女は背後から覆い被さるように腹部へ腕を回し、ギュツと力強く抱きすくめた。

「す、すごい……ミーヤが人に常識を語ってる……! アナタ、失礼という概念がついに芽生えたのね! アタシ、そっちの方がずうっと嬉しいわ!」

『ねえそれ、私に失礼だからね……?』

年下の妹分が見せた、思わぬ成長に相好を崩して、うりうりと頬擦りするドロシーと、なんとも鬱陶しそうな顔で、為すがままにされるミーヤを尻目に、そのさらに本来の妹分が、お盆にうどんを持って台所から出て来た。

「おかえりなさい。ドロシーさん。今日は、みんなが集まれそうだから。キリエ君の、歓迎会なんです」

「そういう訳だ。最近是谁かしら出かけていて、一堂に会する機会を失っていたからねえ」

「ロンさんが、オウドンを、打ってくれましたよ。はい。ドロシーさんの分です」

「わあ、ありがとうマヤ！ お腹ぺこぽこだったの」

『私達で生地を踏んで作ったんだから、ちゃんと味わいなさいよ、ドロシー……それにあなたも！ キリエ！』

「分かってるよ、ミーヤおねーちゃん」

うどんを受け取り、ウキウキとした表情でキリエの対面に座ったドロシーは、慈愛に溢れた笑顔で少年に質問する。

「わあ、楽しみだわあ……どうキリエ君、UDONはおいしい？」

「……うーん、ソバの方が好き」

「あらまあ、案外ワガママね、この子」

目を見開いて固まるドロシーに、ダークが思わずと言った様子で、くつくつと笑う。

「なんと言つてモ、我々ハ、海藻を食べてイタからな。コムギから作製するウドンよりモ、ソバの方がミネラル分を豊富に接種できるノデ、好まシク感じるのダロウ」

「ふーん、そういう事なら仕方ないわね……」

「もちろん、ウドンの中では美味しいウドンだよ。ありがとう、おねーちゃん達」

「どうして先にそれを、素直に言えないのかしらね、貴方達は……もしかして、そういう種族柄なの？」

「マテ、心外ダゾ……という声を聞き流し、髪をかき上げてから麵を吸おうと——」  
「啜る」という行為はどうやったら彼らのように上手く出来るのか……相変わらず不思議だ——するドロシーだったが……

「……え、ちよつと待つて？ 一堂に会する？ ララは？」

「来るとも。ひとまずその肉を置いて、残りを取りに行つてゐる」

ロンはそう言いつつ、うどんに乗っている薄切り肉を指し示した。

「ああ、シシ肉……」

よくもまあ、次から次へとポンポン獲ってくるものだ。

というよりも、ニホンにこれだけ沢山のlionが生息しているとは思ひもしなかつた。そのうち絶滅するのではなからうか。

「シシ肉って、美味しいものだとばかり思っていたけど、地球人にとってはあまりそうではないらしいわね。堅くて臭いイメージがあるらしいの」

「ハハハ！ それはそうだろうね。シシ肉の旨さは、鮮度が大きく関わってくるからな。血抜き velocity おいては、恐らくこの星で、彼女の右に出る者など誰も居るまいて」

「……そうか、ララは獲物を殺す事なく、気絶だけさせテ、仕留メルからナ」

『……え？ あのララ姐様が？』

心底信じられないと言った表情で、ミーヤが聞き返す。

彼女の中にあるイメージは、自分以上に血も涙もない、情け無用の戦闘兵器だからである。

「知らないのかね？ 後藤君の狩りは、麻痺光線で昏倒させるか、組み付いて絞め落とすか……万が一殺すにしても、喉笛をハサミで切り裂くから、素早く生き血を抜く事に代わりは無い。なにせ心臓は動いたままなのだかね。地球人の猟師ではこうもいかんよ」

脳天を一撃で割り砕いていた頃はもう少し不味かったな……などと懐かしむロン。

「近頃は腹を裂くハサミ捌きも随分上達したようだね。剥いだ毛皮が裏手にあるから見てみると良い。シシの瞳が輝いて、まるで剥製だよ」

それを聞き、ミーヤは得心いった顔で何度も頷いた。それならばイメージともびつたり合致する。



「え……それって……ちよつと可哀想じゃない？ 生きたまま出血多量で徐々に弱って死んでいくつて事でしょう？ 残酷よ」

ドロシーが顔を顰めながら声を上げたが……周囲を見渡して、虚しくなった。

その場にいた全員が全員、ただ疑問符を浮かべながら、揃って首を傾げていたからだ。「可哀想？ なぜだ？」

「どうせ、食べる為に、殺すわけですから。残酷も、何も、無いのでは、ないでしょうか」「ムシロ、美味しく食べるナラ、それが一番合理的ダロウ？」

『そうよね、肉としての価値を重視するべきでしょ』  
「僕もそう思う」

……ダメだわ、こいつら……

——しかし、いくら姿が隠せるとはいえ、血まみれのまま帰ってくるのは頂けんな——  
「違う、そういう事じゃない。」

——何も無いのに突然、生臭い風が……なんて、噂になってたよ——  
「ご近所で怪談が生まれてるじゃないの。」

「ま、まあ……そんなに凄いやハンターだったのね。正直言つて見直したわ。筋肉のことしか考えてないのかと思つたら、やればちゃんと出来るじゃない」

「……ちゃんと出来る、とは？」

「今日ね、ウチに来た漫画家さんが言ってたわ。地球には狩猟免許つてのがあって、地球人にも資格勉強中だけど、先を越されちゃったわね」

「いや、持つてないが？」

「……は？」

「いやいや待ちなさいよ。」

「違法じゃない！」

「待ちたまえよ、何の為に免許なんぞ必要だと思つてゐるのだね？ 地球人は狩りに銃

だの罫だの、危険な物を使わざるを得ないからだぞ」

「だから？」

「素手に免許なぞ不要」

「……ごめんなさい、もう一度言つて？」

「だからそもそもからして、後藤君のように無手で山に入って野生動物を狩るなんて、地球人の法には最初から想定されてないのだよ。不可能だからね。狩猟免許にも方法によつて種類があるが、素手免許だけはない。無いものは取りようが無い。だから違法じゃない」

「そんな抜け穴みたいなの……」

「なにを今更」

どこ吹く風で肩を竦めるロンに、ドロシーはそれ以上の事を言えずに齒噛みした。彼女自身、この大家が捏造した戸籍情報で暮らす、後ろ暗い身である事を思い出したのだ。「アナタからも何か言いなさいよ。仮にも行政側で働いてたんでしよう？ いいの？ あんな事言わせといて」

「フム……」

自分では説得力に欠けると思ったのか、ダークに小声でそう問いかけるドロシー。

何だかんだ言って、ここの大家はいつも、この偏屈な影法師の言葉になら耳を傾けるのだから。……多少は。

だが頼みの綱である彼は、テーブルにどんぶりを下ろすと……

「難しいナ。法を作ると言う作業ハ、それに該当スル事象がそこに確かに存在スルと、まず公に認メルところカラ始まる。だが、まだこの星ハ、とてもそのような段階にナイ。存在シナイものに対して、行政ハ感知シナイ。……当方からは以上ダ」

特に感慨も無く、澄ました顔でそう言い放った。

「……お役人めっ！」

「あれ。それなら少々……いや、かなり、拙かったのでは？」

「何ガ？」

マヤの表情が、サツと真剣味を帯びる。

「先ほど。ロン様に言われて。その肉を、ご近所に『オスソワケ』して、しまいました」  
『……ッ！ マズいじゃない！ 正規の手段で獲ったものじゃないってバレたら、面倒な奴らが来るわ！』

何せ彼らの腹は、探られて痛いところしかない。

だが、命じた本人は鷹揚に頷くばかりで、ちつとも焦りを見せないではないか。

「ああ、それなら構わんよ」

『なんでよ!?!』

「毎回、後藤君の獲ってきた肉はご近所に分けているからね。むしろ、我々が食べる分なんて一握りで、殆ど贈答用とすら言える」

「確かニ、ウチの奴らハ、あまり肉を食わナイからナ」

ダークとキリエは元々草食だった身なので、動物性タンパクの分解能力に乏しい。

さらに自分自身が植物であるロンも、水分以外に関する消化のプロセスが少々特殊だ。

マヤとミーヤは、無補給でも任務が遂行出来るように代謝を弄つてあるから小食であるし、ドロシーだって喜びこそすれ、元からそこまで健啖家である訳でも無い。

住人達の中で、肉に対して最も需要があるのは、それを確保してくるララ本人だけと

いう有様なのだ。

「これはね、円滑なご近所付き合いをする為の……いわゆる賄賂なのさ」

「わいろ？」

「我々は余った肉を処分できる。向こうはタダで美味にありつける」

「win-winの関係だとも言いたいのか？」

「そうだ。仮にだよ、善意で渡される肉の違法性に気付いたとして、それをわざわざ声高に指摘するような輩がいるものか」

「ん、どうしてそう言い切れるんだい。大家さん？」

チユルチユルとうどんを啜っていたキリエが箸を止め、珍しく自分から質問を投げかけた。

「通報して後藤君がしょっ引かれた場合、肉の供給先を失うのは彼らも同じ。そしてその恩恵に与っているのは、何も一世帯ではなく、このアパートを中心とした複数の家庭……になるように私が計算して分配している」

「どおりデ、毎回渡す先が違うと思っタ」

「すると、誰かが最初に告げ口をした場合、自分だけでなく、この一帯全てが、万遍なく不利益を蒙る事になるのだ。そうすると、その者は周囲から総スカンを食らう事になる」

「あー……なるほど」

『きたない、流石大家きたない』

「別に密告者へ報酬金が支払われる訳でも無いのに、そんなリスクを犯したいと思うかね？ 地球人は確かに感情的で愚かだが、そこまで馬鹿ではない。むしろ、無意識の損得計算についてはかなり敏感で、優秀だ」

キリエは、なんとも渋い顔で頷いた。

そして同時に、自分たちの侵略が失敗した理由を悟ったのである。

要は、人類に対して提示する利益の最大化を怠ったのだな……と。

てつきりフクシンが二の足を踏んでいたのは、未知への不安や恐怖だけかと思っていたが、それだけでは無かったのだろう。

一人勝ちする事に対する後ろめたさを、もう少し薄めてやれていれば、彼はこの手をとって居ただろうか……

「私はね、人類が互いにルールを守り、信頼しあって生きている事に目をつけたのだ。我々が安寧を得るために、他者との対立を煽る必要は無い。ただ人間同士の信頼感へ、我々も入り込んでしまえば良い。どうだ、いい考えだろうか？」

「……」

得意げに言うロンの背中を、テーブルの者達は各々に別の感情を抱きながら見つめ

……やがてそんな互いの表情に気付いて、観念したように苦笑しあつた。

「……さて！ 完成だ！」

徐に立ち上がり、デコレーションの終わったケーキを差し出すロン。

「ようこそシラトリ君、我々の星雲荘へ！ 歓迎するぞ」

「うん、ありがとう大家さん」

「なんなら、フクシン君も呼んだらどうだい？」

「……それは、やめておこうかな」

「アイツ、ケーキなんて作れたのね。」

「料理教室で。カオリさんと、言う方に、教えて貰ったらしいよ、姉さん。」

「左団扇で暮らせているのは、誰の家賃のおかげだと思ってるのかしら。」

「全くダ。」

そんな声が聞こえているのか、いないのか。

ケーキに視線が釘付けとなつているキリエの耳元に、ロンはそつと囁く。

「……それとも、迎へはまだ必要か？」

「……いや。もう少し、この星で暮らしてみよう」

「そうか」

満足げに頷いた大家は、両手を大きく広げて高らかに宣言した。

「では、今日という日を盛大に祝うとしよう！  
事を！ ……この星での生活に、乾杯!!」

我々がこの宇宙に生まれ、存在している



## セブン対セブンの激闘（Ⅰ）

白いブーツで金属製タラップを駆け上がれば、カン、カン……と小気味よい音が第4格納庫の乾ドック内に響き渡った。

辺りを見渡せば、そこかしこで作業員が顔を突き合わせ、真剣な表情で何かしかのチエックに勤しんでいる。

ここは駿河湾に面した、防衛海軍の造船所兼格納庫であり、この下にはハイドランジャーの浸水ドックもある。とはいえ、今は空っぽだろうが。

この広いドックで、一体どれだけの人間が働いているのか……想像しただけで眩暈がするようだ。

この歳にもなつて迷子になるわけにはイカン……と、フルハシは前方から歩いてきた白衣の研究者らしき男に、申し訳ないとは思いつつ声をかけた。

「ちよいと君。すまないが、アマギを見なかったかい？」

「ああ、フルハシ隊員。お疲れ様です！ アマギ隊員なら、そちらをもう一段上がって、そのまま突き当たりです。ちょうど、このコードの束を辿っていけば分かりますよ」

「おう、これか！ 助かったぜ！ ありがとうとさん！」

にこやかにそう言つて、自分たちの足元を指差す研究員。

フルハシが無意識のうちに跨いでいたそれは、階段の先へと延びており、これを道標にすれば目的地へと着けるらしい。

こんなに分かり易いなら一安心だと破顔したフルハシは、目線を下げ、そして少々の違和感にふと首を傾げたが……すぐハツとして、壁際にひよいと忍者のようにへばりつき（キヤットウオークが狭すぎて、彼の肩幅ではそうせざるを得ない）、研究員の為に道を開けてやった。

「どうもどうも……」

手刀を切りつつ、目の前を横切つていく男の後ろ姿を、怪訝そうに見送つたフルハシは、気を取り直してタラップを駆け上がり、中身のよく分からない配線を辿っていく。

進めば進む程に、その道標へ方々から様々な管が合流していき……やがて彼の太ももぐらいはあろうかという程に太くなった頃、そのケーブルに半ば埋もれるようにして、アマギが巨大な電算機と格闘しているのを見つけた。

四方八方から集中したケーブル類が、まるで触手のようにうねり狂う中心にいるせいで、遠目からは巨大なタコにでも襲われているようにしか見えない。

だが、さらに近づいて彼のデスクを覗きこんだフルハシは、自分の見立て以上に、後

輩の陥っている事態は深刻なのだと理解した。

アマギの足元には、本やら資料やらが堆く積み上がって散乱していたからだ。とっ散らかっていた……あのアマギの机が、である。

いつも几帳面なアマギは、その仕事ぶりもキチツとしていて、フルハシの知る彼の姿と言えば……たいてい図面一枚に、それ以外は本当に必要そうな最小限の道具とコーヒー……それがアマギという男の仕事風景だったはずだ。

自分やソガならいざ知らず、あの整理整頓が隊服着てるような奴がねえ……隊長などは普段から、『机の乱れは思考の乱れ』と身辺整理を口酸っぱく言い含めてくるので、フルハシとしては頭をぺこぺこ下げるしかないが……その言葉を借りるなら、今のアマギの脳内は、この作業場の如くしつちやかめつちやかだと言う事だ。

あの大天才がこうまで追い詰められるとは……

「おいおいアマギセンセ、大丈夫かい？」

「えっ………ああ、フルハシ隊員ですか」

目元に隈を作ったアマギが、うつそりと顔を上げる。

「ひでえ顔だな………なんか手伝える事あるか？ つつても俺にやあ、荷運びくらいしか出来ねえけどよう………」

「いえ、結構ですよ。もう最終チェックの段階ですから………というよりも、貴方がなぜこ

こへ？ 珍しい」

疲れた顔で鼻頭を揉むアマギが、隣のコーヒーカップに手を伸ばすも、既に空っぽだったので何も啜れず、さらなる顰め面を披露した。

「ああ！ ソガからコイツを届けてくれって頼まれてな……アイツ、俺を使いつ走りしやがった！ 偉くなったもんだぜ、まったく……帰ってきたら覚えてやがれ！」

「ソガから……？」

ようやく本題を思い出したのか、フルハシが小脇に抱えていた封筒を差し出した。

怪訝そうに受け取ったアマギが中身を確認すると……やおら歓声を上げる。

「おおっ！ 遂に完成したのかっ！ いやあこれでようやく肩の荷が降りますよ、助かりました」

「そんなに大事なもんだったのかあ？ なんなんだソレ？」

「うーん……最終プログラム兼、原稿の続き……ですかね」

「はあ!？」

「まあまあ、僕の仕事はこれで一段落って事です。あとは下の連中に渡すだけ」

「下の連中……？」

彼の言葉にハツと気付いたフルハシは、差し出がましい忠告であると重々承知しつつも、先ほど思った事を口にした。

「なあおい、アマギ。こういう作業場でサンダル履きはいくらなんでも危ねえからよ、研究員でも止めるように言つてやった方がいいぜ？ 同じチームなんだろう？」

「ああ、見たんですか。言つても聞かないんですよ、彼ら」

「彼ら？ まさか……流行つてんのか!？」

てつきり一人だけの問題行動かと思つたら、複数人いるのか！ 危機管理意識がなつ

ちやいない！

「まあ自己責任ですし、僕らが口出し出来る事ではありません……あれでなかなか、見た目以上に高性能ですからね」

「……？ もし安全靴が足りねえなら、俺から上に言つといてやろうか……？」

よく分からぬ顔でそう言うフルハシを、苦笑しつつやんわり制したアマギは、取り出した紙束を大事そうに『P・D』名義のファイルへ挟み込んだ。

アマギがいそいそと帰り支度を始めたので、手持ち無沙汰になったフルハシ。

自分のやるべき仕事が終わつたらしい事を理解した彼は、いよいよ好奇心を抑える必要が無くなったので、自分たちの隣にずっと鎮座していた巨大建造物を振り返り、鉄柵に凭れながら、しげしげとその威容を眺める事にした。

「……しっかし、これが噂のマックス号Ⅱ世かあ！ 遠目で見たとときにも、随分でけえと思つたが、こうして近くでゆっくり見ると益々信じられねえなあ！ ホントにコイツが

浮かぶのかい？」

まるで少年のように瞳を輝かせながら、心からの感嘆を漏らすフルハシに、アマギが思わず笑みを零す。

「もちろん。しかし、我々だけの力では到底為し得なかったのもまた事実です。アンダーソンやリヒター博士をはじめとした、数々の協力がなければ……このMJ号は絶対に完成しなかったでしょう」

「だろうなあ……」

「ま、とはいえSF小説家なんぞをアドバイザーに招くと言われた時は、流石に正気を疑いましたけど」

「な、なんだいそりやあ？ 天下の地球防衛軍も堕ちたもんだな……」

「ハハハ、やはりそう思いますよね？」

アマギは、当時の心境を懐かしく思ったのか、心底可笑しそうに笑ったが、机の上置いてあった付箋だらけの空想科学小説は、忘れずに鞆へしまい込んだ。

「……そうだ、僕はこっちの調整にかかりきりで結局知らないんですが、一体誰が乗艦する事になったんですか？ 相当揉めてた印象がありますが……」

「ああ、最終的にアラキ艦長達が手を挙げてくれたらしいぜ。こんな日く付きの船だしなあ……誰も乗りたがらねえだろうに、ありがてえこつた」

「なるほど、だからか。じゃあやつぱりMJ号というよりも、海軍的にはマックス号Ⅱ世で通すつもりなんですね」

「さてなあ……どうだつていいじゃねえか、名前なんざー！」

「そうは行きませんよ……」

上機嫌でガハハと豪快に笑うフルハシに、アマギは溜息しか出ない。

「それで？ 肝心のソガは？」

「伊良湖岬さ」

「ああ、例の……」

つい先日、通報があつたのだ。

怪しい動きがある、と。

しかし、その通報者というのが……

「ホントなのかねえ？ 俺には、どうもあのノンマルトとかいう奴らがいまいち信用できん。そもそもだよ？ 内容も内容じゃないか。なんだつけほら、あの……ザバーンだかザバーンだかが怯えてるって……」

「ザザーンですよ」

「そうそれ！ それがいったい、どうしたつていうんだ？ 魚が怖がつてるなら、奴らが子守歌でも歌つてやるんじゃ駄目なのかい？」

「それがなんでも、ただの魚類ではないらしい。海の同胞だとかいいつつ、正体は怪獣だそうで……」

「なに、怪獣!?!」

その情報が初耳だったフルハシは、流石に目を剥いた。

確かに字面だけ見れば一大事だが、ますますもって怪しさ満点。

だいたい、怪獣が何かに怯えることなどあるものか。逆に、その怪獣を使って、またぞろ地上侵攻でも考えてるんじゃないのか……

「でもね。一つ付け加えるなら……」

「あん?」

フルハシの心中を見透かしたアマギが、なんとも言えない顔で補足する。

「一緒に聞いてたソガが、妙に驚いた顔で、うんうん頷いてましたよ」

「え、ソガが? あー……そいつあ……うーん……」

腕組みしつつ2回ほど唸ったフルハシは、神妙な顔で頷いた。

「じゃあ、なんかあるんだろうな」

「……」

フルハシの言葉に、アマギは思わず苦虫を噛みつぶしたような表情で黙り込んでしま  
う。



彼としては、根拠の薄い判断基準で動くのが心底嫌いだからだ。

だが……先輩隊員の言葉を否定するための確固たるデータがあるわけでも無し。

むしろその実績が、半ば統計学的数値に片足を突っ込みつつあるという事実と……なにより、アマギ自身がそう思っているというのが、本当に気に食わなかった。

「なるほど、それでこんな重要な書類を、俺に押しつけてまで現場に出てったのか。相変わらず熱心な奴だ。せつかく自分のアイデアが形になるって時に……」

「まったく、いつも言うだけ言いっ放しで、最後は丸投げなんだからアイツは……」

「まあそう言つてやるなよ。おめえほどじゃないが、奴もここんところまく寝れてなかつたようだぜ？」

「ふん、どうだか……今頃はダン達とプールではしゃいでるかもしれませんよ？」

「そんなわけ……いや、やりかねねえな？」

「ね？」

ドック内で二人の笑い声が響く。

ここに本人がいれば、『俺の事なんだと思つてんの？』と突っ込みの一つでも入りそう  
な言い草だが、生憎と居ないのだからしょうが無い。

彼らも別に本気でそう思っているわけではないが、普段の行いに振り回されている身  
としては、こうして笑い話のタネにするくらい必要経費だろと言つたところだろうか。

……思つてないよね？

「……ハックシユン！」

「おや、ソガ隊員。大丈夫ですか？」

「ずっと日陰にいるから、冷えちゃったのかしら？」

「ああいや、大丈夫大丈夫」

「ここは平和で美しい伊良湖岬……」

近頃、この一帯に怪現象が頻々と起こっているとの情報をキャッチした地球防衛軍では、ハイドランジャー隊で海底を搜索する一方、ウルトラ警備隊のダン、アンヌ、ソガの3隊員を現地へ派遣。

その原因を追求することになったのである……

ソガ達三人はここ最近、所属不明の水中翼船に乗って現れる謎の女を監視するため、水着を着込みプールサイドで観光客に紛れていた。

「きつと疲れが祟ったんだわ。MJ計画の為に働き詰めだったところに、この調査任務でしょう？ 隊長も少しくらい休ませてあげれば良かったのに……」

「いや、俺が行かせて欲しいって行ったんだよ。ホラ、おあつらえ向きにプールで療養が

てらって事さ。任務なんてついでだよ、ついで」

「とてもそうは思えない目つきですが……」

「何も知らなければ、さつきから凄い熱視線よ。これで鼻の下でも伸びていたら、あの人にクラツと来ちやったのかと思うくらい……フフ、それともまさか、本当にそうじゃないでしょうね？ その時は……」

「おっと、彼女に言いつけるのだけは、やめてくれよ」

自身も上下セパレートの青い水着姿を披露しつつ、アンヌが冗談めかして言うてる。

とはいえそんな彼女も、あのサロメ星人の女も、俺からすれば水着のデザインがあまりにも古臭さすぎてサエコさん一筋なので、そんな目で見ようという気すら起きないね。

……本当だよ？

そして当のサロメ星人はと言えば、パラソルの下で真っ赤なストールを肩へ巻き、チエアにゆったりと腰掛けている。まったく優雅なもんだ。

それとも、その視線はサングラスで分からないが、向こうもこつそりダンを盗み見ているのかもしれない。

「……おっ？　なんか時計を取り出したぞ」

「アンヌ、女の近くで見張るんだ」

「ハイ！」

水音を立ててプールに飛び込むアンヌ。

「今日こそ尻尾を掴んでやるぞ……」

さて、そろそろだ……見てろよサロメ星人め……

知らず知らずの内に、俺は口角を吊り上げていた。

海底で、定期的に響くソナー音。

「こちらハイドラランジャー、まもなく目的地へ到着」

息を殺したように静かな潜水艇内で、ハイドロフォンに耳を澄ませていた防衛隊員が、ハツとする。

「不思議な音波が聞こえてきます……！」

「なに？」

「……こつちに向かってくる……魚雷かミサイルかと思われまますッ!!」

そう実はこの時、2基の大型水中ミサイルが、凄まじい速度でハイドラランジャーへ放

たれていた。

サロメ星人の海底基地からの、完全な奇襲攻撃だ。

はたしてハイドランジャーは原作通り、このまま為す術無く撃沈されてしまうのか!?

「よし、音響データリンク、開始!」

『了解! 2号艇、リンク開始します!』

通信機から聞こえる友軍の声。

なんと、この海域にはハイドランジャーが2隻いたッ!

ノンマルトの通報を重く見たソガの提案によって、防衛軍は保有するハイドランジャーを、全力投入したのである!

それぞれの潜水艇は、お互いのソナーで得られた情報を、電算機で高度に擦り合わせ、接近物の位置情報から推進速度、果ては周囲の地形まで正確に把握したのだ。

「目標ロックオン完了!」

「迎撃レーザー、発射!!」

『発射!!』

2隻の艦首から照射されたレーザーは、それぞれに割り当てられた標的に寸分の狂い無く命中し、2基の大型ミサイルを木っ端微塵に破壊した!

『迎撃確認!』

「やった!」

「素晴らしい成果だ!」

「このローレライシステムがあれば、水中では敵なしだぞ!」

狭い艇内が歓声に満ちる。

「しかし……出撃前に警告された通りに、明確な攻撃行為を受けましたね」

「うむ、ソガ隊員の言っていた通りだ……流石だなあの人は」

『では、2号艇はこれより、応射準備に入る。1号艇、オクレ』

「敵攻撃軌道の逆算結果、出ます!」

データリンクによって、先ほどの攻撃がどの方向から飛んで来たか、おおよそは割り出してある。

つまり、その先に確かな敵がいるのだ。

「本部、こちらハイドラランジャー1号。敵からと思しき魚雷攻撃を迎撃せり。これより威力偵察を敢行する」

「1号艇もタイミングを合わせるぞ」

『飽和攻撃のお返しと行くか』

「重魚雷、発射準備よーい!」

「注水開始！」

始まる反撃のカウントダウン……その時。

『ぐわっ!? な、なん——』

通信機に向こうから、困惑の音が聞こえると同時に凄まじい破壊音がハイドランジャーを横合いから殴りつけた。

「どうした! 2号艇、応答せよ!」

「爆縮音! 2号艇反応途絶……!」

「そんな、やられたのか!? 今の一瞬でっ?」

「デコイ射出するんだ! 急げ! デコイ撒けーい!」

「状況確認!」

「駄目です、2号艇の爆発。パルスでソナーが効きません! ローレライシステムダウン

……っ!」

「いったい何が起きたんだ……」

あまりに突然の事態へ、呆然とする隊員達。

「ツ!? いかん、魚雷射出して全速後退!」

「撤退ですか!?! しかし敵の正体はまだ……待て、なんだ今の音は……!?!」

ずるずると……まるで巨大なものが、這いずるような……

直後、激しい衝撃が船体を突き上げる！

「し、下だあつー！ 下に何かいるぞオーツ!!」

「本部、本部！ 謎の攻撃を受け——！」

「撃て！ 撃てえええつ！」

「うわああああ!!」

苦し紛れに装填済みの魚雷を吐き出すが……もう遅い。

あとは無残に圧壊した残骸を一つ残して、光の届かぬ水底に再び深い静寂が戻った。



## セブン対セブンの激闘（Ⅱ）

「げ、撃沈っ!？」

聞こえてきた報告に、思わず立ち上がり叫んでしまう。

「ま、待って下さい! 2隻ともですか? 1隻ではなく?」

『そうだ。それもほぼ同時にやられている。ローレイシシステムがある以上、単なる魚雷攻撃や機雷との接触ではなく、全く未知の攻撃に晒されたのだろう……やはりその一帯には、敵の基地があると見なければならん』

「……クソツ!」

俺はテーブルに拳を叩き付けた。

なんてこった……オレのせいだ。

ハイドラランジャーの撃沈を防ぐどころか、原作以上の被害にしまった……

しかし、いったい何が起こったって言うんだ?

そりゃあ、単純に数を増やしたから余裕だなんて思ってたわけじゃない。

最悪、1隻は奇襲で沈んでしまうかもしれない事は承知の上だったさ。

でも、もう1隻が情報を持ち帰るなり、反撃するなり出来るんじゃないかと思っ  
たんだ。

それが2隻同時だって……？

サロメ星人は何をしたんだ……？

くそっ……ちゃんと覚えてないのが悔やまれる。

オレは今回、冒頭部分でモブ兵士の乗ったハイドラランジャーがやられてしまう事は  
覚えていたが、その詳細な攻撃シーンはすっかり忘れてしまっていたのだ。

ぶっちゃけ本当に魚雷だったのかすら、あやふやなくらいで、この後ダンが奴らに捕  
まる経緯もほとんど思い出せないという状態。

だから、あまりはつきりした事が言えず、念の為に戦力増強しといた方がいいんじや  
ないスカね？ 程度のフワツとした入れ知恵しか出来なかった。

訳も分からぬ内に2隻同時にやられたとなると、一番可能性が高いのは、ニセセブン  
にやられた線だが……まだあれはこの時点では完成していないハズ。

でなければ、あの女がこうしてダンを誘い出す為に姿を見せたりはしない……と思  
う。

サロメ星人は、ロボットのウルトラセブンを秘密裏に建造したが、エネルギー源とな  
るウルトラビームの数式だけは分からず、ダンを捕らえて口を割らせたのだ。

だからああして、意味ありげにこつちを挑発してダンを孤立させようとしている。そうはさせるか。

次に考えられるのは、水中翼船にカモフラージュした宇宙船がやけに強かった印象があるから、そつちにやられたのかもしれない。

なにせ、あのウルトラホークと互角の空中戦を繰り広げて落とされなかつたくらいだからな。

あれ？ ホークはニセセブンにやられたんだっけ……？

まあ、とにかくラストまで健在だったのは確かだ。

でもウルトラホークと互角の性能というのは、並み居る敵円盤と比べたら凄まじい高性能と言えるが……逆に言えばホークを瞬殺出来る攻撃能力が無いとも言える。

ガッツやクール星人の円盤程には、圧倒的有利だったとも言えないなら、それがハイドラランジャー2隻分の戦闘力と言うのも可笑しな話じゃないか。

……わからん。

オレが不甲斐ないばかりに、無駄に犠牲を増やしてしまった……みんな、すまん……『幸い、最初の攻撃情報から、敵基地の大まかな位置は割り出してある。尾行している女の子はどうか？』

「今のところ別に。……でも、水中翼船でどこからともなく現われることや、我々の関心

を引こうとする点など、どうも只の女じやなさそうですね……」

考え込む俺に変わって、ダンがラジオ型通信機に返答する。

『一刻も早く正体を掴むんだ。我々もそちらに急行する』

「了解！」

通信で一瞬目を離した際に、女は姿を消していた……

そこへアンヌが戻ってくる。

「アンヌ、ハイドラランジャーがやられたぞ」

「ええっ？ それでソガ隊員がそんなに怒ってるのね……」

「別に怒っちゃいないさ……」

「よく言うわ、鏡でも覗いてみなさいな。それより見て、ダン。彼女これを忘れてったわ」

アンヌが差し出したのは、つい数分前で止まっている腕時計。

「見ろよ、ハイドラランジャーがやられた時間で止まっている。……あの女を捜すんだ！」

「いや、そんな暇はない。直ぐに隊服に着替えるぞ」

「えっ!？」

館内を探したってどうせ見つからないんだ。

それなら先回りしてやる。

……と思っていたのだが……

「アツ！ あの車！」

「チキショー……。アンヌ、検問所と本部に連絡！」

「はい！」

俺達が駐車場に戻ると、来たときと同じ赤いスポーツカーが、丁度ホテルから出て行く所だった。

なぜだ？ 一直線に急いで来たのに……！

ダンと一緒に黒いセダン（あくまで潜入捜査だから、ポインターは目立つと許可が出なかつたのだ。もう向こうには最初からバレてんだって！ 隊長のケチ！）へ乗り込み、女の後を追う。

「赤いスポーツカーです」

『赤いスポーツカーですね？ お任せ下さいモロボシ隊員！』

「なんなら射撃してでも、止めてくれ」

『ええっ!? なんて事を言うんです、ソガ隊員！』

「やっぱ駄目か？」

「当たり前でしょう……」

ハンドルを握りながら、呆れた声でダンが言う。

サロメ星人は見た目だけなら、地球人と全く変わりないヒューマノイドタイプなので、どれだけ怪しくともこの時点では、宇宙人の侵略者であると確証がないのである。それを知ってか知らずか、首に巻いた赤いストールをマフラーのように風へなびかせて、悠々と逃げるスポーツカー。

そうかそうか……じゃあやつぱり……

「自分でやるしかないわなっ！」

「ちよつと！ 危ないですよ、ソガ隊員！」

窓から身を乗り出して、前方を走るオープンカーのタイヤを狙おうとしたが……

あ、やめろ！ 煙幕は卑怯だろ！

後部からモクモクと濃い煙を吹き出して、こちらの視界を妨害してきやがった！

ええい、数撃ちや当たるわ！

くらえ！ くらえ！

「うぐ、見えない……」

「あわわ、落ちる落ちる！」

「早く引つ込んで下さい！」

視界不良の中でダンが懸命に運転するが、崖際のカーブから落ちないかヒヤヒヤだ。

ついでに俺も窓枠から滑り落ちそう！

「大分、引き離されてしまいましたね……」

「……しようが無い、捕獲は諦めるか」

「いえ、まだまだ見失ってはいません！ 諦めが早いですよソガ隊員！」

「いや、そうじゃなくてな……」

知り合いの隊員に頼んでおいた検問所にさしかかる。

「オーイ！ 止まりなさい！ その車、止まれ、止まれ、止まれってうひゃああー！」

作業員に扮した隊員が、腕を振り立ちはだかるも、逆にアクセル全開で突っ込んでい

く！

ひき逃げ上等の突進に、慌てて横っ飛びに転がる防衛隊員。

オーブンカーは、立ち入り禁止の立て看板を粉碎し、そのまま……

ボカーン！

「うわっ!？」

「あーあ……」

突如巻き起こった爆発に、ダンが急ブレーキを踏む。

「い、いったい何が……」

「ああ……地雷埋めといた」

「じ、地雷っ!？」

「うん、どうせ灯台まではこのルート通るわけだしさ」

「だからって……公道ですよ!？」

「その為に立ち入り禁止の検問所なんじゃねえか。はーあ、せつかく親切に教えてやったのに、素直に止まったりやあ、死なずに済んだものを」

「……最近、だんだん雑になってきてませんか？」

半眼でこちらを詰るダンはスルーして、セダンから降車する。

検問所の前で腰を抜かしてる隊員に手を貸してやらねば。

「は、はわわ……はわわ……」

「おいおい、大丈夫か？ 随分体はったもんだねえ……そんなに無理せず、遠くからバズーカでも撃ち込んだきや良かったのに……なんかゴメンね？」

「わたしにそんな事できるわきやあ、ないでしょ!？ そ、そんな事より、あれは……」  
「工兵隊に頼んで対戦車地雷を設置してもらたんよ。ホラこの前、穴掘ってくれたじゃん?。」

「えっ! あれって落とし穴じゃなかったんですか……!？」

「落とし穴で侵略者が倒せるかい」

顔なじみの隊員が、その福々しい顔を真っ青にしながら身震いしている。



市民の避難誘導とかで、道路封鎖にも慣れてると思つて頼んだんだが……  
いやあ、悪いことしちゃったかな……

「ソガ隊員、そちらは……む！」

ダンの瞳がキラリと光る！

彼が振り返つた岩陰に……ヒラリと真つ赤なストールが翻つた。

「アツ、あの女！」

「ヒイツ！ 幽霊！」

「生きてやがったのか……！ 待て！」

「ちよ、ちよつと！ ソガ隊員！ 一人にしないで下さいよう！」

ウルトラガンを引き抜き、崖下の岩場に降りていく。

「どこだ！ 出て来い！ ……そこかっ！」

岩場にちらりちらりと舞うように現れては消える人影に向かつて引き金を引くが、紙一重の差で捉える事が出来ない！

つか、そつちの岩場からそつちの岩場に出て来るの、どう考えてもオカシイだろ！

お前、テレポート使えたのかよ！

ちくしょう……おちよくりやがつてえ……！

頭に血が昇り、岩場のさらに奥へと足を踏み出そうとするも……

「ま、待って！ 待って下さい！」

「は、離せ！ 早くあいつをなんとかしないと……！」

「いったい何を追ってるんです？ そっちは崖ですよ！ 危ないから！ あ、アラーツ  
!？」

「うわあつー！」

後から追いついた防衛隊員が俺の袖を引いた……と同時にツルリと足を滑らせたので、盛大な水音と共に、二人一緒に潮溜まりに落ちた。

「ぶっは！ やってくれたね……全く……」

「うへえ……しよっぱいです。アイテテテ！ 蟹が！」

「相変わらずドジだねえ……ハハハ」

お陰で頭が冷えたけどな。

「ダン、すまんが手を貸してくれ……ダン？ あれ、ダンどこいった？」

「ありや？ さつきまでそこに……」

「しまった……ッ！」

その頃ダンは、女を追って全力疾走していた。

ソガが先走って岩場へ突撃した際に、翻弄される彼を後ろから見ていたダンの動体視力は、ソガの周囲を岩から岩へ、恐ろしいまでのスピードで飛び移る、謎の女の姿を僅かに捉えていたのだ！

（あの速さは、とても人間の目で追いつけるものではなかった……むしろソガ隊員でなければ、存在を認識する事すら出来なかったに違いない……）

岩場の中心にいた彼からは、恐らく敵が瞬間移動でもしているように見えたハズ。

走る瞬間が見えない程の超スピードとは……それも、岩場をハイヒールで。やはりあの女、只者ではない。

そして、そんな相手を追うともなれば……ダンも少々、本気を出さざるを得ない。

人間態で出せる、限界ギリギリの速度で走るとなると、オリンピックの世界記録を余裕でダブルスコアつけて塗り替えてしまいかねず、そんな姿を他の隊員に見られるわけにはいかなかった。

それに……

（敵の狙いは、恐らく……僕だ）

去り際に一瞬だけ立ち止まり、こちらを振り返った女の表情……まるで、着いてこいと言わんばかりだったではないか。

(それに彼は……疲れている。今、巻き込むわけにはいかない)

やはりダンは、ソガが常に無く疲労を滲ませている事を気にしていた。

特に今回のような、爆発からも生き残り、人外のスピードで動き回る相手に、今のソガ隊員は……言つては悪いが足手纏いになりかねない。

先ほどだつてきつと、翻弄されるだけですんだのは、あちらがダンとそれ以外を、引き離れたがつていたからに過ぎないのだ。

敵が本気を出した時……常人である彼らは手も足も出ず、無惨に殺されてしまうのではないか？

その懸念がダンに、岩場から走り去る女の姿を見咎めた時、誰に言うでもなく一人で追いかける……という選択をさせてしまったのだった。

(この状況……まるでガッツ星人のやり口を思い出す)

あの時も、ソガ隊員を人質にされ、やむなく変身する羽目になったが……その経験が、ダンの深層心理において、少なくともトラウマを残している事に、本人すらも気付いてはいなかった。

(……という事は、敵は僕との直接対決を望んでいるに違いない)

ダンをおびき寄せ、それ以外は無価値と嘲笑うあの態度……余程の自信家と見える。

(いいだろう。奴が正体を現した時が勝負だ。今度は冷静に、敵の出方を見極めてやる

ぞ！ 何度も同じ手が通用すると思うな！

ガッツ星人との戦いで得た反省。

そしてそれを活かし、ゴーロンを退けた自信。

それが、今回は仇となった。

「ハッ！ 待て！」

灯台まで女を追い詰めたダンは、階段の上に翻る赤いストールを見つけ、彼女を追いかけようと……

「ぐわああああああつ!？」

手すりから、大量の高圧電流が流れ込み、ダンの意識は暗転した。

## セブン対セブンの激闘（Ⅲ）

「……ウツ!？」

暗闇の中で、気が付くダン。

しかし、彼の四肢は既に台座の上へ固く拘束されており、少しも動かない。

(ここはいつたい……)

訝し気に周囲を見渡すダンの耳に、上方から高笑いが降ってきた。

「アツハハハハハ!!」

そちらへ顔を向ければ、扉を開けて一組の男女が姿を現す。

禿頭に顎鬚を蓄えた貫禄ある壮年男性と、その隣に立つ女の顔は……さっきの!!

「ウツフツフ……ようこそセブン。ミイラとりがミイラ……まんまと罠にかかったわね」

「罠!？」

「ここは海底にある、我らサロメ星人の海底工場」

「工場……?？」

いったい何の……？

疑問と共に再びダンが視線を動かすも、部屋の中にそれらしいものは見当たらない。あくまでここはダンを捕らえる為の部屋ということか。

一つだけ普通ではない点を挙げるとするならば、天窓には水面のように揺らめく光が淡く反射しており、ここが海底にあるという先程の言葉は、どうやら本当らしい。

いったい、いつの間にこんな基地を……

階段を降り、ダンのすぐ隣までやって来た彼らが、ライトの下に照らし出される。

目の醒めるくらい鮮やかな群青色をした生地に、煌びやかで繊細な銀の小洒落た装飾が施された、上品な仕立ての装束とは打って変わって、それらを纏う彼らの瞳には強い嘲りと、過剰なまでの自信が見え隠れしていた。

サロメ星人達の着用している手袋とブーツが、これまた抜けるような白さで暗闇に映えて、それを見たダンに、あたかも警備隊の仲間達を連想させたが、泥にまみれ草臥れた自分達のモノとは違い、星人達の装備は卸したてのように新品同然の輝きを放っていた。

「あなたは私たちの作っているものを見たくて来たのでしょうか。ことにあなたには、ぜひにでも見てもらいたい」

サロメの女が、自信作を披露したくて堪らないといった表情で、ダンの顔を覗き込む。

「開け！」

女が白い手袋を振れば、ダンの固定されている台座がグググと上体を起こすように傾き、硝子張りの向こうで、巨大なシャッターが持ち上がっていく……

徐々に室内へ光が満ちていき、眩しさに目を細めたダンが瞼を開いた時、そこへ映つた光景とは……！

「あつ……！？」

驚愕のあまり、言葉を失い二の句も告げず固まるダン。

大樹のようにそびえ立つ巨軀。

工場のライトを反射し、ギラリと輝く銀色の装甲。

そして……その全身を余すこと無く染め上げる赤、紅、朱！

恒点観測員の業務で数多の銀河を飛び回り、様々な現象や光景を目にしてきた、あのダンをして、その衝撃は未だかつて無いものであった。

それもそのはず、彼の眼前にはもう一人の自分……ウルトラセブンが直立不動のまま存在していたのだから！！

「いかが……？」

挑戦的な微笑みと共にこちらを振り返るサロメ星人の後ろで、今まさにクレーンで吊り下げられたアイスラッガーが、キュラキュラとガラスの前を横切っていく、そびえ立



つセブンの頭頂部へ重々しい音を響かせて装着される。

海底工場……何を作るための？

如何に信じがたい事実であろうと、もはやこれを見せつけられては、答えなどただ一つしかない。

彼らは、ウルトラセブンを造っていたのだ！

「こんなもの作って、どうするとうんだ！」

「無敵の超人ウルトラセブンを、我らの味方にできたら……」

「セブンは地球人の味方だ！」

「それがもうすぐ地球人の敵になるわ！ 地球上のあらゆる物を破壊する、ウルトラセブン……正義の味方が悪魔の代名詞になるのよ！」

「地球人はセブンが、侵略者になったと思うだろうなあ……？」

しかし、その時ダンの脳裏に閃くものがあった。

「フン……」

「どうした、ダン？」

「つまらない虚仮威しだ。アレはまだ未完成だろう！」

「なに？」

「いくら完成間近でも、ひとつだけ足りないものがある……ウルトラビームだ！ お前

達にはアレを動かすエネルギーが分からない。だから僕を捕らえてチームの秘密を白させようと言うんだな!」

ダンにはある種の確信があつた。

さつきは模造された自身の姿に動揺してしまつたが、工場で造り上げたと言うならば、アレは生き物ではない。

きつとロボットだ。

ならば、あれほどに巨大な建造物を動かすには莫大な動力源が必要なはず。

そうでなければ、MJ号を動かす為に、ソガ隊員やアマギ隊員があれほど駆けずり回つて頭を捻る必要も無かつたのだから。

彼らの苦勞を知っているダンには、サロメ星人の抱えている悩みが手に取るように分かつた。

ならば話は簡単。

自分が奴らの拷問に屈せず、時間を稼げばいい。

幸いな事に、ハイドランジャー隊のお陰でこの工場場所は分かっている。

それならば、きつと彼らが助けに来てくれるに違いない。

それさえ心の支えにすれば、どのような方法であろうと耐えきる自信が……

「ハッハッハ！」

「何がおかしい!」

「これは傑作だ。大した推理力だともダン。しかし……とんだお笑い種だね」

「えっ?」

サロメの男がニヤリと笑う。

そして、衝撃の事実をダんに叩き付けた!

「我らのセブンは……既に完成しているのだよ」

「なんだって!?!」

目を見開き、蒼ざめるダン。

「君は……いや、君達は……些か強すぎたな」

「強すぎた……?」

「そうよ、私たちのセブンが完成するまでに、どれくらい時間がかかったと思うかしら?」

いくらサロメの科学力でもこれほどの作品を造り上げるには、一日二日では足りないわ……」

「教えてやろう。我々がこの地球にやってきたのはな、ダン……お前がああ空で礫にされていた、まさにあの時なのだ」

「なにっ!」

ガッツ星人の挑戦!

あの時から既に地球へ潜伏していたと言うのか!?

「私達は、以前から地球に目をつけていたけれど、どうしても準備が大掛かりになつてしまふ……」

「そんな時にとあるルートから、あの自意識過剰な鳥頭共が、貴様の暗殺計画を練つていると教えて貰つてな。早速、我々も一枚咬ませて貰うことにしたのだ」

「彼らは真正面から敵対すればタダでは済まないけれど、その実、こちらがその膨れ上がった自尊心を満たしてやれるなら、随分と取り入り易い相手だったわ。知つていて？」

ガッツ星人は、最初から下手に出て来た相手には、存外度量が広いのよ」

「奴らは貴様の死体には興味が無いようだったので、処刑後はこちらで引き取る手筈だった。その代わり、あの粗悪品の量産に関しては此方が請け負つてやるという契約だったのだよ……もつとも、思つていたよりも基礎設計がしっかりしていて驚いたがね。我々も久々にやり甲斐のある仕事だったとも」

まさか……アロンがあんなに沢山出て来たのは、彼らの仕業だったのか!?  
そのせいで大勢の隊員達が……よくも!

「本当にガッツ星人は素晴らしい働きをしてくれた。地球防衛軍の総力を一手に引き受けて貰えたので、我々も機材の搬入が自由に出来て助かったものさ。なあ?」

そうして笑いあふサロメ星人達。

ダンのこめかみに血管が浮き出てきている事に気付いているのか、いないのか。

「おまけに……こんなものまで」

ひとしきり笑ったサロメ星人は、得意げに何かの紙束をヒラヒラとダンの眼前に掲げた。

「なんだそれは……!」

「まあ待て慌てるな。なにになに……? タキオン関数、M2SH3GWFBI……?」

「ま、まさか……」

勿体ぶつて、サロメ星人がゆつくりと読み上げて行くにつれ、ダン自身は自身の血の気がサアーツと引いていくのが嫌でも分かった。

「気付いたかね? そう、これこそが……貴様の暗殺計画書だ! ウルトラセブン!」

勝ち誇ったサロメ星人が、拘束されたままのダンに突きつけた書面には、宇宙共用語ではつきりと記されていた。

『セブン抹殺計画』と。

「奴らは実に理解し難い価値観で動いていたが、その分析力と強さに関しては、まさしく本物だった! 我々も素直に賞讃するとも。こうして貴様の弱点まで悉に解き明かしてくれたのだから……! 実に理路整然とした計画だ、まるで取り扱い説明書だよ。これを読めば、誰でもウルトラセブン博士になれる! しかし!」

「そんなガッツ星人すらも、お前達には勝てなかった……!」

二人揃って、パチ……パチ……と手を打ち鳴らすサロメ星人達。

「先ほど私は、ガッツ星人を褒め称えたが、その実! 真に賞讃へ値するのは君達だろう! ウルトラセブン、いやそれを含めたウルトラ警備隊! まさに君達こそが! どんな敵にも負けた事の無い、無敵の地球防衛軍なのだ!」

「くそっ! 彼らを馬鹿にするな!」

思わず唾を飛ばして反論するダン。

しかし、かぶりを振ったサロメ星人は、拍手を止めた腕を後ろ手に組み、ガラスの向こうで屹立する最高傑作をしげしげと、満足そうに見上げる。

「馬鹿にしてなどいないさ。我らがセブンは、我がサロメ星の科学を結集して作り上げたものだ。完成すれば天下無敵……我らの計算では、本物のセブンでも倒せる!」

「そう思っていたのに、私達は戦う前から、その自信を砕かれた。その後の戦いも、特に苦戦もせず連戦連勝……生半可な敵では、セブンどころかウルトラ警備隊にすら太刀打ち出来ない!」

「その通り! セブン。例えば君を100%再現できたとしても、それはあくまで同じモノ。全力でぶつかり合った場合、お互いがお互いに同じだけ消耗し、全く同時にゼロ……つまり待っているのは共倒れだ。そしてセブンを失った我々は、丸腰でウルトラ警

備隊と戦わなくてはならない。それは御免被る！……あまりスマートとは言えんな」

「私達のセブンには、お前とウルトラ警備隊の、両方を同時に相手して尚、それを大きく上回るだけの戦闘力が必要だと分かったの」

「だから私達は、君を完全再現するのは……諦めた」

そう言つて微笑んだサロメ星人のリーダーが、白手袋を二度ほど打ち鳴らすせば、奥から同じ装束に身を包んだ手下達が移動式の机をガラガラと押してくる。

まるでルームサービスでも取り寄せるかのような気安さだが、机の上には絹のカバーが掛けられており、場違いさを一層の事引き立てるのに役立っていた。

「ご覧、ダン。これが今回の目玉だよ」

サロメリーダーがサツと布を取り去った時、その下から現れたのは……

白と黒に塗り分けられた、様々な――

「隊長――！」

「ソガ、アンヌ！　　ダンはどうした？」

「ハイ、例の女を追つて、この灯台にやって来たと思われまます。道中に……これが」

ウルトラホークで駆け付けたフルハシ、アマギ、キリヤマと合流する俺たち。

アンヌの手には、警備隊のマークが描かれた発信機つきの特殊シールワツペンが握られている。科特隊時代から使われていた特殊マーカーを、改良して使い続けているのだ。

「ヘンゼルとグレーテルってか！ ダンもやるようになったもんだぜ！」

「だが未だに連絡が無いとなると……」

「ええ、敵に囚われていると見て、間違いないでしょう」

「この灯台の下には、敵の基地がある。恐らくダンも……」

「どうやって潜入します？」

「まともに行つては、ダンの二の舞になる」

そうして考え込む俺達の後ろで、沖合いを航行していたタンカーが凄まじい勢いで爆発し、轟々と真つ赤な炎を噴き上げた。

「なんだ!？」

もうニセセブンの出番か？

こんなに早かつたんだな……

文句なしに凄まじい強敵だから、なるべく起動前に基地ごと破壊したかつたんだが……間に合わなかつたか。



そんな思いで振り返るも、空を飛ぶ巨人の姿は見えず……

おや、おかしいな？

「見ろ！ 船の下だ！」

「あれは……触手？」

炎を纏って沈みゆく船に、何か黒くて長いものが何本も巻き付いているような……待てよ、どつかで見たことあるぞ？

その時だった。

そいつが咆哮と共に船を真つ二つに叩き割り、その姿を現したのは。

「あれは……ガイロス!？」

てらてらと水を滴らせる不揃いな吸盤。

鞭のようになる触手。

まるでタコのような8本足のあの怪獣は……

「ええええええつ!! ガイロス!! なんで!! ガイロスなんで!! ここで? ハアアア!!? 意味わからん!」

思わず頭を抱えて絶叫する。

半ばパニック状態の俺を見てか、フルハシ隊員がぼそりと呟いた。

「なんでい、今日はソガが役立たずの日か……」

「ちよつと、どういふ意味なんスカそれ！」

「こつちの話だよ……気にすんな。こりゃあ気合い入れねえと……」

気にすんなど言われるまでもなく、俺の頭はもう疑問符でいっぱいだ。気にするべき事がありすぎる！

え、俺なんか話数とか間違えた？

これニセセブン回だよね？

さっきのサロメ星人じゃなかったの？

もしかしてノンマルト編終わってないとか？

そんな馬鹿な！ 有り得ない！

そもそもガイロスはセブンが既に倒したハズ……え、倒してるよね？

大丈夫だよね？

もしかしてオレ、またなんかやらかしたのか……？

……いったい、何が起こってるんだ。

## セブン対セブンの激闘 (IV)

「な、なんでガイロスがここに……」

「まさか、ノンマルトが裏切ったのか！」

「野郎！ やっぱり怪しいと思つてたんだ！ 今度の通報だつて、俺達を誘き出す為の嘘だつたに違いねえぜ！」

「そんなはずないわ！」

「じゃあアレはなんだつてんだ！ 隊長！ 早く奴らの本拠地を叩きに行きましょう！」

「ま、待つて下さい！ 隊長アレは……」

ガイロスを見つめる隊長の背中に、咄嗟に待ったをかけるが……言葉が出て来ない。なんて言うんだ？

俺にも何が起こつてるか分からないのに？

隊長を止めたとして、それが絶対に正しいという保障など何処にも無い。今度こそ本当に過激派が陰謀を企てたのではないと、何故言い切れる？

こんな流れ、原作には無かった。

だからもう、なにが正しくてなにが間違っているかなんて、俺には……

「ソガ」

「は、はい……」

「あの怪獣は、殺す。これは決定事項だ。お前が何を言おうが、もはや知った事ではない。奴は事もあるうに我々の目の前で、船を襲い、人々の命を奪ったのだ。言い逃れは出来ん。絶対に許すことは出来ない！」

「そ、その通りです……」

「しかし！」

隊長がくるりとこちらを振り向いて、あの鷹のように鋭く全てを見通してしまうような眼差しで俺を真正面から貫いた。

「貴様に一つだけ確認する。ソガ、彼らは信頼に足る隣人か、それともこのように醜い裏切りをする下衆共なのか！ どっちだ！ 言ってみろ！」

「……ッ！」

その時、俺の脳裏に浮かんだのは……あのとき彼女の<sup>ヤオ</sup>見せた、晴れやかに吹っ切れたような微笑みだった。

「……彼らは無実です！ あの怪獣は、ノンマルトとは一切関係ありません！」

自分達だけでなく、ウルトラセブンにも救いがあつて欲しいと願つた、夕顔の花のよ  
うに儚く罪深い、純粋な思い。

それはきつと……本当の事に違いないからだ。

そうでなければ、黄昏の向こうから、わざわざオレなんぞを呼び出したりするものか。  
「誓えるか！ 今、ここで！」

「……私の誇りにかけて！ あれは、我々と彼らを引き裂こうとする何者かが、裏で操つ  
ている偽物です！ 断言します！」

そうだ、サロメ星人はもともとニセセブンを造るような奴だ。偽物の一つや二つ、新  
しく造つたとして何もおかしくないじゃないか。

今度こそ俺が、自信満々に声を張り上げてそう叫ぶと、隊長は僅かに口角を吊り上げ  
た。

「……その言葉が聞きたかつた」

「隊長……！」

「全員！ これより我々は、ノンマルトを騙る正体不明の侵略者を攻撃する！ まずは  
手先であるニセガイロスを撃滅し、海底基地に総攻撃をかけ、ダンを救出！ いいな！」

「了解！」

「ホークに急げ！」

脇に駐機してある1号に乗り込む直前、フルハシ隊員が俺の肩を叩いて苦笑した。

「おめえが言うなら、仕方ねえな。俺は信じるよ」

「……ありがとう、フルハシさん」

「ま、お前も気張れや」

「……よかったわね、ソガ隊員」

「うん」

「ウルトラホーク、発進!!」

そうして直ぐさま空に上がった俺達は、海面で暴れ狂いながら、次の獲物と定めたらしき客船へ向かって泳ぐガイロス目掛けて、急降下爆撃を仕掛ける。

『ーッ!』

「へ、おめえが飛び道具の一つも持ってねえって事は、こつちもとづくに分かってんだよ!」

「海底調査をハイドラランジャーだけで編成したのは失敗でしたね……恐らく岩壁に擬態して、待ち伏せしていたんだ」

「あの怪力で、船体を引き裂いてしまったのね。でも、自慢の触手も空には届かない!」

「みんなの敵討ちだ! くらいやがれ!」

ロケットを雨あられと降らせる事で、大ダコを釘付けにし、周辺海域から船舶が逃げ  
る時間を稼ぐ。

ウルトラホークはガイロスに対して、絶対的な優位性を誇っているかに見えた……  
レーダーを監視していたアンヌが、金切り声で叫ぶまでは。

「一時の方向より、小型の何かが高速で接近！」

「なにッ！ ミサイルか！ 避けるフルハシ！」

「みんな掴まれっ！」

前方から突っ込んできた飛翔物を、間一髪のところまで避けるウルトラホーク。

なるほど、ガイロスを囷にして、ミサイルで狙い撃ちにするつもりだったのか。

だが、五人体制のホーク1号に死角は……

「待って！ さっきのミサイルが急旋回！ 追って来ます」

「なにッ！」

「だが、この距離なら……うわっ！」

機体に小さく衝撃が走る。

「キャアッ！」

「何だ！ 何が起きている!?!」

窓の外を、幾筋もの光条が前方へ抜けていった。

「レーザーです！ 後方のミサイルがレーザーで狙撃してきました！」

「そんな馬鹿な！」

「フルハシ隊員！ 回避機動をとってください！」

「クツソ、舐めやがってえ……！」

きりもみ旋回からの急降下でレーザー攻撃を躲すも、その隙を突こうと突っ込んでくるミサイル。

「そうはいくかよっ！」

フルハシがもう一段ブースターを炊いて、急加速により衝突を回避する。

ミサイルと機体が交叉する一瞬、急加速で彩度の落ちた視界の中で、俺は見た。

「……人だ……人が飛んでる！ ありやミサイルじゃない！」

「なんだって！」

「見間違いだろっ！」

アンヌが慌ててて双眼鏡を覗けば、みるみる驚愕に染まっていく表情が、その内容を如実に伝えてきた。

「……ほ、本当だわ！ 手と足が……頭もある！ り、両足から……踵からジェットを吹き出して……そ、空に立っています!! そんな！ こつちに来るわ！ 逃げてええ！」



「全速力で振り切れ！」

「やってますよ！」

「差が開かないわ！」

「冗談だろ!? こっちは今、マツハ3だぞ！」

「向こうはマツハ2出てる！」

「人型でマツハ2!? バツカじゃねえの!？」

「僕だって計器の故障かと思ったださ！」

観測計を瞬きもせず見つめていたアマギが、思わず信じられないと呟きを漏らす。

「ホークの最高速度は、マツハ4でしょうが！」

「馬鹿野郎! そりゃ直線距離の話だ! 真っ直ぐぶっ飛んでみる、レーザーで狙い撃ちにされてえか！」

回避の度に速度は落ち、マツハ3という数字すら、ごく僅かに一瞬到達するような状態だ。

音の壁を越えた世界は、単純な数字だけでとても語れるものではない。

そうこうしているうちにも、レーザー攻撃によって少しずつダメージを受けた機体の空力性能は、みるみる下がっていき、両者の差は開くどころか縮まる一方である。

なにせ最高速度で勝っていても、旋回半径どころか、その場で急制動と急発進を繰り返

返す向こうの方が、機動性において段違いなのだから。

「……こんなにやろう、あつたま来たぜ！ 隊長、もう限界です！ まともな空戦じゃあとても勝てません！ コブラをかましちまつても構いませんか！」

「なに！ それで後ろを取れる程甘い相手で無いのは、お前もよく分かつてるハズだ！」  
「いえ、オーバーシュートなんて生つちよろい！ 翼でそのままぶん殴つてやるんです！」

「なんだと！」

隊長とフルハシ隊員がなんか言つてら……

隣でガタガタ震えてるアマギは内容を理解してそうだから教えてもらおう。

「アマギイ！ どういう事!？」

「機首を垂直にして急ブレーキをかけるつもりなんだ……翼の剛性をそのまま武器にしようとしてる……有り得ない」

「有り得ないって!？」

「いくらVTOLと重力制御があるからって、本来マツハ機動でやるもんじゃない！  
その上でぶつけるなんて！ 自殺行為だ！」

「え、ちょ……ま」

「よし、フルハシやれ！」



つか……

「つて……うっそだろ……へ、へへ……」

俺は、見てしまった。

窓の外、クレーターの如く大きく陥没した翼の中心で、人間大の存在が、華麗にヒーロー着地を決めているのを。

ゆつくりと立ち上がったその敵は、何の感情も窺えない昆虫のような瞳でこつちを確かに見た。

その姿は忘れもしない。

悪魔のようなツートンカラー……あれは……

「ご覧、ダン。これが今回の目玉だよ」

サロメリーダーがサツと布を取り去った時、その下から現れたのは……

「む……？」

白と黒に塗り分けられた様々な形の駒が置かれる、チェス盤のようにしか見えなかった。

その隣には、何らかの棋譜めいた記号の書かれた紙束が積まれているが……これがいったいなんだというのか。

ただ、盤面の端では、巨大な昆虫らしきモノが、白のクイーンによつて磨り潰されていたが、もはや原型の分からない程にボロボロで、相当以前に殺されたのではないかと思わせた。

そう気付いたダンが、目を凝らしてよくよく見れば、駒の間には蜘蛛の巣が張つていたり、埃が積もつていたり……まるで何処かに放置されてあつたものを、そのまま持つてきたかのような……

「フッフ、ダン。君が分からないのも無理はない」

「なんだコレは？」

「実はね、ただの遊戯盤ではないのさ。高度に暗号化されてはいるが……これは、ある兵器の設計図なのだ」

「なに、設計図？」

「さよう。もちろん独自性が強すぎて、流石の我々にも、この暗号を解き明かす事は終ぞ出来なかつた」

「でもね、何も自分達だけで全てやってしまう必要なんてないの」

「我々サロメのやり方は、他者の美点を素直に認め、それを柔軟に取り入れるというもの

だ。模倣できる部分は模倣し、出来ない部分は……協力を取り付けければ良い」

「協力……だと！」

「そうさ。パズルが解けない時は、それを作つたものに直接聞くに限る。その成果がコレだ！ おいで……」

「ハイ。御主人様。」

「おっ！ お前は……！」

サロメ星人に呼ばれ、暗闇からコツコツとハイヒールの音を響かせて現れたのは……

「女が、二人……!?!」

「ウツフツフ……」

不敵に笑う青い装束のサロメ女の隣へ、真っ赤なストールを靡かせた、全く同じ顔の女が並び立った。

「さあ、お前の正体を見せてやるんだ。……チエンジ！」

サロメ星人が号令をかければ、ハイヒールの女が鍵のようなデバイスを耳に差し込んだ。

「スイッチオン！ ワン、ツー、スリー！ ゴー！」

閃光と共に弾け飛ぶ衣服、そして……皮膚！

稲妻の向こうから歩み出たシルエットに、ダンは戦慄し、思わず喉をゴクリとならす。

悪魔のようなツートンカラー。

その姿は忘れもしない……

「ま、まさか……」

「久しぶりだろう？ ウルトラセブン。紹介しよう、チブル星人と我らサロメで共同開発した、アンドロイドゼロシリーズだ！ ハッハッハッハ！」

「なんだって！ ゼロシリーズ!?!」

「その通り！ みたまえ、これを！」

サロメ星人が腕をサツと一振りすれば、床からモニターがせり上がり、とある光景が映し出された。

「アツ、ウルトラホーク!? みんな！」

そこでは、仲間達が何かから必死に逃げようとしている。ホークの後方に、何か小さな……トリか？

飛行機だ！ ……いや、アンドロイドだ！

両足からジェットを噴出して、自由自在に空を飛ぶアンドロイドの姿！

「我々はまず、セブンの性能をより向上させる為に、幾つか基礎研究用の等身大プロトタ

イブを造った。今、奴らを追いかけているのも、そのうちの一体だ。せつかく造ったのに、ただ廃棄するのも勿体なからう？ うまくウルトラホークを撃墜してくれれば御の字だな。いいぞ、そこだ！ 頑張れ！」

次に画面が切り替われば、ダンはまだしても信じられない光景を目にする事となる。

「ガイロス!!? なぜここに……!!」

ガイロスは自分が倒したハズ。

それに、ノンマルトだって、地上の人々と手を携えて生きていこうと和平を誓いあったのではなかったか？

「あれも、我々のアンドロイドだ」

「あれがアンドロイド? ……まさか!」

「いやあセブン。君は本当に良い検体を提供してくれたよ」

「状態の良い怪獣の死体が一気に二分。それも、全身が筋肉の塊だなんて、最高だわ」

「我々も、チブルのアンドロイド技術を巨体に適応するのは初めてでね、一分分はセブンの強化に使って、残りは念の為に、人工筋肉の制御実験兼、水中戦用サイボーグにしてみたのさ。結果は良好」

「そして、思わぬ効果も見込めそうよ」

「ノンマルトと地球防衛軍を仲間割れさせ、戦力を分散消耗させる。おまけにそこへセ



ブンが現れて人類を攻撃すれば、いよいよもつて、宇宙正義に見限られたかと奴らは絶望するだろう！ 何の前触れもなくセブンが裏切るよりも、よっぽど説得力があるじゃないか。我ながら良いシナリオだとは、思わんかね？」

「流石ですわ！ これでは彼らは全力で戦う事が出来ません！ 完璧な計画です！」

「ガイロスは人類の罪の象徴だ。奴らはそれに、再び向き合つて尚、セブンの相手が出るものかな？ ハッハッハッハ！」

「アッハッハッハ!!」

「貴様達は……ッ！ なんとという事を……ッ！」

ダンは怒りのあまり噛みしめた奥歯が砕けるかと思うほどだった。

彼が瞳に真っ赤な炎を燃やす様を、サロメの男は満足げに眺めると、ニンマリ笑つて、ダンの肩へ親しげに手を置いた。

「そこでお前に頼みがある」

ギロリと睨みつけるダンの眼光を涼やかに受け流し、サロメ星人シハカタは、さも当然といった口調で言い放った。

「……で死んでくれ。モロボシ・ダン」

## セブン対セブンの激闘（V）

「この期に及んで……」

「フッフ、先ほどのストーリーだね。せっかくの悲劇に突然、本物のお前が飛び出してきたら台無しだろう？」　まあ、我らのセブンがお前を倒すところを見られ無いのは残念だが……しようが無い。より確実な地球侵略の為だ。我々はガッツ星人のような愚かなミスは犯さないと決めたのだから」

「こんな奴ら、ウルトラアイさえあれば……」

「ダン。キミが何を考えているか当ててやろう。変身さえ出来れば我々を直ぐに倒す事が出来る……甘いな。だが、その甘さに、我々は感謝せねばならない」

「ダン……胸元が軽いんじゃないかって？」

「……ハッ！」

「これ見よがしにサロメ星人がダンの隊服胸ポケットを弄ったが……そこには何も無い。い。」

「貴方が欲しいのは、これでしよう？」

差し出されたクツションの上には、真つ赤なレンズデバイスが乗っていた。

ウルトラアイだ！

「後生大事に鎖までつけて……これが重要な物だと言っているようなものじゃないか。いけないなあ、ダン」

「これじゃあトークマシンも必要無かったわね」

「く、くそッ……」

ソガ隊員が『お前は鍵とかすぐ無くすタイプだろ？』と言って、わざわざくれた皆とお揃いのキーチェーンは、無惨に途中から破壊され、ブラリと力無く垂れ下がっていた。「シハカタ様。ウルトラホークが……」

先ほどチブル星人の設計図を運んできた手下が、モニターを指差す。

そこでは、機首を垂直にして鎌首を擡げたウルトラホークが、機体底部のVTOLで全力加速して、追い縋るアンドロイドをデルタ翼で強かに打ち据えたところだった。

「やった……！」

「ほう、流星はウルトラ警備隊。地球人もなかなかやるじゃないか……だが、それでは倒せん」

「そ、そんな……」

激突の瞬間、咄嗟に体勢を整えたアンドロイドが、勢いを殺しながら両手両足を器用

に使い、ホークの翼へ着陸する様を、ダンの動体視力はしっかりと捉えていたのだった  
……

「オイオイ、やめてくれよ……なんでガイロスの次は、お前までこんな所にいるんだ  
……」

ありやあ、アンドロイドダブルオーじゃねえか。

お前、飛行能力まで持ってたんかい……!!

ダブルオーは左手の人差し指を、それこそ子供がごっこ遊びで撃つ指鉄砲のように突き出すと、先端から細いレーザーを発射して、ホークの安定尾翼に何発も何発も撃ち込んでいく。

「ぐ、だめだ！ これ以上は水平が保てねえ！」

「みんな！ ベータ号へ移るんだ！」

「ベータ号へ？」

「残念ながら……機体を放棄する！」

「そんな……」

「だが、タダではやられん！ 見ろ、奴の足を！」

隊長が指さす先で、アンドロイドが今度は翼の装甲をむんずと掴み、ベリベリと剥がしているところだった。

だが、その破壊は奴の両手の届く範囲だけで、アンドロイドは動こうとしない。なぜなら、両足がガンマ号に深々と突き刺さっているからだ。

「いずれ奴はガンマ号の翼を破壊して脱出するだろう……そうなる前に、機体ごと奴を海面に叩き落としてやるんだ！ 急げ！」

「了解！」

アマギに肩を貸しながら、アンヌを担ぐフルハシ隊員の尻を下から押し上げる。

「隊長ー！ 準備完了です！」

「よし！ ……やれ！」

「掴まって！」

アルファ号の長い機体通路を全力疾走してきた隊長を、フルハシ以外の三人で引っ張り上げて、勢いのまま床に転がる俺達。

「ベータ号、離脱！」

ガコンと体に伝わる振動で、アルファ号とベータ号が切り離された事が分かる。

そして角度のつけられた2機はそのまま海面へ突き刺さり、深く深く沈んでいった

……

「しかし、ガイロスが残ったままだ……どうします?」

ウルトラホークの攻撃力は実状としてほとんどが、ガンマ号の潤沢なパイロードと、アルファ号に直結されたレーザー機関に依存していると言つていい。

「残念ながら、ベータ号だけでは火力が足りん……岸辺からの地上攻撃に切り替える!」

「了解!」

皆が意気込んで返事をする中、俺は一人だけ、とてつもない懸念事項に、胃が爛れるんじゃないかというくらい苛まれていた。

……頼む。

ニセセブンの代わりにニセガイロス使うしか無かったんだと言つてくれ。

バタフライエフェクトかなんかで、実は敵も物資不足でしたとか、そういうオチであつてくれ……っ!

もし、これ以上出て来たら……本気で俺達だけじゃあ相手出来んぞ……

それはマズい……激しくマズいッ!

「ようし、それなりに健闘……と言ったところか。奴らからウルトラホークを奪ったのは、大きいぞ」

「では……？」

「そうだ。遂に我々のセブンを出撃させる時が来たのだ！ ……しかし、その前に念の為、少しでも勝率を上げておくとしよう」

サロメが腕を振れば、先ほどウルトラアイの納められたケースが、クレーンでアンドロイドセブンの頭頂部近くに吊り上げられていく……

「我々は既にウルトラビームの秘密を解き明かした。だから……こんな事だつて出来る」

「ウルトラビーム充填作業……開始！」

「ダン、見なさい……アナタの兄弟が誕生するのよ」

「ハッ!？」

ウルトラアイから、アンドロイドセブンのビームランプにむけて、青い光が吸収されていく……

サロメ星人は、ウルトラアイに充填されていた本物のエネルギーまでも搾り取り、自らの愛し子へ分け与えたのだ！

セブンそっくりに造られた、巨大アンドロイドの六角形の瞳に、光が宿る！

「ようし……成功だ」

「これでウルトラビームを介し、お前の持つ記憶も全て、セブンの電子頭脳に取り込んだ」

「記憶!？」

「そうだ。我らのセブン……アンドロイドゼロセブンは、協力者であるチブル星人の発案で、その頭脳にチブル星人数十人分のチブルタイトを用いてある!」

「な、なんだって!」

「確かに、彼らチブル星人は体そのものが生きた集積回路だ。まさしく巨大ロボットの電子頭脳に相応し素材だが……よもや、臆面もなく同族を生体部品へ使う提案をしてくるとは……全く恐ろしい奴だったよ。それともこれも、母星を追放された恨み故か……」

「私たちサロメでは考えつかない発想でしたね……ウフフ……」

「ハツハツハツ……!」

「……待て、そのチブル星人はどうした!」

「ああ、安心したまえ。そんな狂人をゼロセブンに使うわけにはいかないから……ちゃんと有効活用させて……いや、今も活躍してもらっている最中さ。ワッーハツハツハツハツ!!」



そうして腹を抱えながら、ダンの四肢を拘束している手錠を指し示すサロメ星人。  
……なんという事だ。

仮にも仲間だった者を、鋳つぶして金属部品に変えてしまったと言うのか!?

「優秀な電子頭脳には、我々の観測した、お前の行動パターンが全て学習済みだ。万が一、貴様と戦う事になったとして、負ける理由は一切無い!」

「さつきはシハカタ様があのような事を仰ったけれども、実は私たちからすれば、お前がここで死のうが、生き延びてゼロセブンの前に立ちはだかるうが、別にどちらでも構わないの……」

「なにせ、その時お前は、ゼロセブンに絶対勝てないようになっていたのだから! ようし、セブンを地上に出す! ウルトラ警備隊も、このゼロセブンが相手なら不足はなからう! ハーハツハツハ!」

「ハッチオーブン!」

ついに、悪夢の兵器アンドロイドセブンが、地上へ解き放たれたのだった!

『D y w a a a a』

「ハッ！ ……セ、セブンだ……」

ベータ号からエレクトロHガンを搬出していた俺は、聞こえてきた飛行音に振り向いた時、見慣れた真紅の巨人が飛んでくるのを見て、絶望のあまりロケットランチャーを取り落とした。

「やったー！」

「セブンが来てくれた！」

「こつちよー！ おーい！」

歓喜の声で仲間の勇姿に手をふる隊員達へ駆け寄り、慌てて彼らを押し倒す。

あれが本物だったら、俺が馬鹿を見るだけで済む。

だが、そうじゃなかったら……！

「伏せろオー！」

「な、なにをするの！」

「気でも狂ったのか！」

「てめえソガ……こんな時に！」

『Dy w a a a』

上空のセブンが額に指を翳すと、周囲の岩場が粉々に砕け散り、潮溜まりが一瞬で蒸発した。

……畜生めえ！

やっぱり偽物じゃねえーかあつ！！

くつそがよーツ！！

「セブンが俺達を……」

「気でも狂ったのか……？」

「まさかそんなハズないわ！」

そのまま地上に着地したセブンは、ホテルを踏み潰し、辺りの建造物を破壊し始める。

ああ……良かった……オレの知ってるニセセブン回だ……

いや、全然良くねえ！

良くねえ……が！

「も、もしかして……またダンカンの時のように操られているのか……？」

「そんな！ だったらこのまま攻撃しては、セブンを傷つけてしまうわ！」

「しかし、例えウルトラセブンでも……この地球上で暴力を振るう者とは……戦わなければならん！！」

「ですが、隊長！ まさか、俺達がガイロスを攻撃したからセブンは怒っているんじゃない……」

動揺する警備隊の面々。

「いえ！ 隊長の言う通りです……！」

「ソガ隊員!？」

ふふふ……ふははははは！

しくじったなサロメ星人！

ガイロスとダブルオーとかいう、ほんま訳分からんチョイスで終わらしておけば良かったものを！

調子に乗って原作通りニセセブンまで出したのが仇になったな！

おかげで、ちゃんとサロメ星人回であると確信できた！

オレの目が黒いうちは、原作要素において、お前らの思惑通りになんて行かせるかよっ！

「見て下さい！ あのセブンは真っ赤なニセモノです！」

「……セブンは元から真っ赤だぜ？」

「フルハシ先輩は黙ってて下さい」

もう一度暴れ回るセブンを指差し、堂々と語りかける。

「見て分からないんですか！ 全然違うでしょう！ 変な装飾が付いています！」

「なにっ！ ……なに？」

「うーん……」

「えつと……」

皆が目を凝らす……

「すまん、見ても分からん」

「嘘オ!？」

「変な装飾つて、どれだよ？」

「手足とか胸元が思いつきり……えつと……あー……」

逆にそう言われたので、自分の目で確かめてみれば、敵の動きが激しすぎて、細部が全然判らなかつた。

特に、海岸からニセセブンの立っている崖を見上げると、木々に隠れて殆ど肩から上しか見えない。

「そういやニセセブンつて、顔は本物と全く一緒なんだっけか……」

「いや、目がつり上がってたり、黒いラインでも入れとけや！」

「ニセモノとしてのリスペクトが足んねえんだよ馬鹿！」

「誰がここまで似せて作れつて言った？」

「一目で違いが分かるようにしとかんかいボケ！ カス！」

そんなんだから、最後どっちが勝つたか分からなくて逃げるタイミグ無くすんだぞ

「腹！ さつき飛んでる時に腹がなんかこう……ベルト的な、腹巻きみたいな奴がついてました！」

「腹巻き……？」

「……確かにベルトらしき金属部品が見えます！」

双眼鏡を覗いていたアマギが、俺の主張を裏付ける。

「……元からしてなかったかあ？ いつも、かつちよいいプロテクターつけてるしよ」

「いいえ……そうよ！ セブンは頭と肩以外はいつも裸よ！ いつかそんな話をしたわね！ ソガ隊員！」

「そ……そう！ それ！」

イマイチ詳細を覚えていない様子のフルハシが首を捻るも、セブンの見た目に関して是一家言あるアンヌが、こちらを素早く振り返った。

「はえー、やっぱり女性って、他人のお洒落とか良く見てるんすねえー！」

「え？ 違う？ 患者の些細な変化に気づけないようでは医者失格？ ……さ、流石っすアンヌさん。マジリスペクトっす。」

「だから操ってるにしても、あれが洗脳装置的なサムシングに違いない！」

「そうか……じゃあそうなのか」

「よし！ 全火力をセブンの腹部に集中！」

「了解！」

よっし！

ニセモノ案件は比較的あっさり解決できたぞ！

たかがニセモノ程度で、今更狼狽えたりしねえんだよ！ ざまあみやがれ！

さて問題は……

強さに関しては紛う事なき本物だつて事。

しかもそのうえ、原作とは違ってニセガイロスまで同時に相手しなきゃならんときもんだ。

……うん、どうしよう。

コレ、詰んでね？

「おや、もう攻撃を始めたぞ。ダン、お前は存外信頼されてないらしい……まあ、所詮は地球人か。ひとたび自分達の敵となれば、今までの恩も忘れて攻撃するとは……敵ながら少しばかり同情するよ」

「可哀想にね、ダン。ウッフ」

モニター内で、警備隊の仲間達が自身の姿をした巨大アンドロイドへ攻撃を加えるのを見て、ダンは思わず目頭が熱くなった。

サロメ星人の言うような理由で悲しいからではない。

むしろその逆だ。

彼は、これまで共に長く戦ってきた仲間達が、自分よりも強大な相手に対し、いつものような戦術を採ってきたか、よくよく理解していた。

まずは冷静に敵の弱点を探り、皆で力を合わせてそこを叩く！

それだけが、非力で小さな人類に許された、唯一にして最大の対抗手段なのだ！

そんな彼らの火線が、今はいったい何処を狙っているかなんて、このモニターで遠くから見れば一目瞭然じやないか！

腹だ。明らかに皆はアンドロイドの腹を狙っている。

でもセブンの弱点は、そんな場所ではない。

もしも彼らが本気でウルトラセブンを殺そうとするのなら、真っ先に額を狙うはずだ。

ウルトラ警備隊は、囚われたセブンにそこからエネルギーを注入し、命を助けた事がある。



だったたら、その場所がセブンにとって非常に重要な器官である事くらい重々承知しているはずなのだ！

だが、彼らは限りある火力を、セブンの顔面ではなく腹へと放っているではないか。きつとみんなは、あれを拘束具か何かだと思い込んで、僕を自由にするために破壊しようとは必死なのだろう。

ダンは込み上げる感情で胸がいっぱいになった。

「すまない……みんな……っ」

「ウルトラ警備隊の最期の相手がセブンとは……皮肉な巡り合わせだな！」

「これでウルトラセブンも……地球人の敵になった！」

「これでこの工場の役目は終わった。時限装置をセットしろ」

「ハイ！」

手下が爆弾のタイマーを作動させると、カチカチと不快な音が部屋に響き渡る。

「ここがお前の墓場だ」

「サヨウナラ……ダン」

ダンを一人残し、撤収していくサロメ星人達。

「う……くっ……」

力を籠めても、チブルタイト製の手錠はビクともしない。

（待てよ……チブルタイト？ ……そうか！）

ダン は 隊服の腰ポケットに人差し指を突っ込むと、鎖を関節に絡ませて、一気に引き抜いた！

「しめたー！」

ソガ隊員のくれたキーチエーンは、胸ポケットのウルトラアイをサロメ星人の手から守る事は出来なかったが、腰につけていたもう一本は、ダンの手に素早く目当てのライターを握らせる事に成功した！

「アツ……ツ！ グウツ……！」

ライターの火で、火傷も気にせず手首の手錠を炙るダン。

チブルタイトの編み込まれた繊維は、柔軟な布に織物とは思えない程の強靱さを与えるが、逆に異常なまでの可燃性まで齎してしまっていたのだ！

「えいつー！」

手錠を焼き切り自由を取り戻したダンは、チラリと時限装置のタイマーに幾分余裕がある事を確認すると、腰のポーチからカプセルを一つ取り出した！

「アギラ！ さっさきの話は聞いていたな！」

ウインダムはガッツ星人に完全破壊され修復中、ミクラスはアロンとの戦闘で消耗したので本調子ではなく、パゴスは論外。

「今はお前だけが頼りだ！ 皆を頼む！ 敵の姿に惑わされるんじゃないぞ！」

そうしてダンは、手元のカプセルに意識を集中し……

「だあーッ！」

彼の手からカプセルが掻き消える。

まだダンはウルトラアイを取り戻しておらず、能力には大きく制限がかかったまま。

この姿でウルトラ念力を使う事は、激しく消耗を強いられ、まさに寿命を削るに等しい行為だ。

だが、逆に言えば……寿命さえ削れば人間態でも念力は使えるのである！

流石に人間一人をテレポートさせる事は難しいが、指先程度の小さなカプセル一つを転移させる程度ならば、どうという事は無い！

戦友達にささやかな援軍を送ったダンは、ガラスの向こうを見上げ、瞳をキラリと光らせた。

「ウルトラアイは……あそこか！」

工場の天井近く、アンドロイドの頭部があつた辺りを確認したダンは、大きく助走をつけて……

「でゅわーっ！」

ガラスを体当たりで突き破り、工場の通路に躍り出た。

「よし、行くぞ！」

だが、その時……！

「オッ!？」

激しく警鐘を鳴らす第六感に従って、咄嗟にその場を飛び退くダン。

そこへ銃撃が殺到し、金属製の手摺や床が、まるで紙切れのようにボロボロになっていく。

「……なにっ!」

ダンが射線の先を見上げれば、そこには似たようなシルエットの人影が三体、彼の行く手を阻んでいた。

脳裏に思い起こされるのは、先ほどのサロメ星人の言葉。

『お前がここで死のうが、生き延びてゼロセブンの前に立ちはだかろうが、別にどちらでも構わない』

『その時お前は、ゼロセブンに絶対勝てないようになってる』

「……なるほど、そういう事か……!」

ダンがここから脱出するには、あのプロトアンドロイド達を倒さなくてはならず、その戦闘分だけ、セブンは消耗した状態で現れる。

その上で、最後に自分自身を倒せというのなら……いいだろう。

「……………やってみせる!!」

なぜならモロボシ・ダンは……………ミラクルマンの一員なのだから!!

## セブン対セブンの激闘（VI）

『AGRAAAAAAAAAA!!!!!!』

「あ！ アギラだ！ アギラだ！すよ！」

「セブンに向かっていくぞ……」

「やっぱり、本物のセブンはどこか別の場所にいるんだわ！」

待ってたあああ!!

ありがとうアギラ！

お前が来てくれるとだいぶやりやすいよ。

戦力的にも、説得力的にも！

……ごめん嘘。

実を言うと戦力的にはあんまり期待してなかった。

確かに今の状況だとその巨体で敵の注意を引いてくれるだけでありがたいのだが

……

……問題は、そのままブチ殺されかねんと言う事だ。



その構えはほんまアカン！

「と、止まれエー！」

だがいくらエレクトロガンを乱射しても、ニセセブンは止まらない。

そして放たれるアイスラッガー！

あ、これは死んだ……

あまりにもショッキングな絵面を予想し、戦闘中だというのに思わず目を覆ってしまつた。

カツキーン！

「……………ん？ 何いまの音は？」

ここはズバツ、だの……………ドヒュ、ではなくて？

恐る恐る指の間から覗いてみれば……………な、なんと、アギラがエネルギーを集中させた角でアイスラッガーを跳ね返し続けているではないか！

あの！ アギラが！ アイスラッガーを！

跳ね返し……………ハア？！

「は、はははははあー?!?!」

顎が外れるとは、このことか……



「おい、ソガ！ 何やってる！ 攻撃が止まってるぞ！」

「いや！ だつて！ 見て！ アギラが！ アイスラツガー跳ね返して……いや有り得  
んでしょそれは……」

なんなら、今日イチ信じられん光景なんですけど。

「あん？ 何がおかしいんだ？ アギラはセブンの仲間だつて言ったのはおめえじゃね  
えか！ だつたらセブンの攻撃くらい見切つても当然だろ？」

「え、そうなん？」

「むしろ、ちよつと楽しそうに見えるわね……」

「ええ……？」

ソガが困惑するのも無理は無いのだが……これこそ、ダンが自身と同等以上の能力を  
持つであろうニセセブンの相手に、アギラを選出した最大の理由でもあった。

敵がこちらの能力をコピーしているという事は、対峙した時に、須くエメリウム光線  
やアイスラツガー、果てはワイドショットといった、どれもまともに命中すれば即死級  
の危険な技を容赦なく放ってくるという事。

生半可な怪獣では、足止めどころか、時間稼ぎにすらならない。

しかし、アギラは普段から仮想空間内にて、セブンによる戦闘訓練を受けており……  
特に、反射神経を鍛える為にセブンが操るアイスラツガーを角で弾き返すという遊びは

アギラにとって、大好きな主人と長時間触れ合える、何物にも代え難い至福の時間であるのだ。

もとよりアギラは、敏捷性の高い種族であり、その瞬発力や動体視力は、ロボットであるウインダムを覗けば、カプセル怪獣の中で一番優秀なのだった。

お陰で、アイスラッガーの軌道を読むことにかけてはカプセル怪獣イチ。エメリウム光線やワイドショットの構えも完全に覚えてしまっており、技の出だしの時点から回避行動に移る事が出来ていた。

そうでなければ、流星のダンであっても、一瞬で無駄死にするしかないような相手にぶつかったりはしない。

「う、うおおおっ！ アギラ鬼TUEEEEEEEEE!!! なんだかよく分からんが、アギラ最強！ アギラ最強！ このまま逆らう奴ら全員ぶっ飛ばしていこうぜ！」

……のだが。

『Dy wa』

『AGRAA!!?』

一気に距離を詰めてきたセブンに、顎を蹴り上げられてひっくり返るアギラ。

そのまま抑え込まれ、めった打ちにされてしまう。

「オイオイオイ！ さっきまでの威勢はどうしたんだよ！」

「……ありやダメだ。体格も腕力も、おまけに多分体重まで全部においてセブンに負けてら。接近戦で勝てる要素が一つもねえ」

「そ、そんな……！ おいてめえ、アギラになにしとんねんはよ退けや！ アギラ逃げろ！ あ、効かない……」

「しかも一番大事な闘志がイマイチ足りてねんだよなあ……ガッツを出せ！ ガッツを！」

「言うとする場合ですか！」

アギラはセブンに締め上げられて、ただジタバタと藻掻いている。

なんて痛々しい姿だろうか。

俺たちも援護射撃を加えるのだが、ちつとも堪えた様子が無い。

そりやそうだ。

ウルトラセブンに歩兵の携行火器で太刀打ちなんかできるもんか。

「おい！ 後ろだ！ もうガイロスが上陸してきた！」

「なんだって！」

振り返れば、触手の化け物が八本の足を器用に使い、陸地へと上がってくる所だった。

水中では分からなかったが、その触手の根元は軒並み金属部品で固定されており、腹

部と背中には、ひときわ巨大な箱のようなものが取り付けられていた。

やはり、あれはサロメ星人の作った二セガイロス……というか、もしかしなくともフランクシユタインの怪物のように、死体を利用したサイボーグ怪獣なのではなからうか。

そうか、セブンがアイストラッガーでキレイにナマス切りにしたから、死体が再利用可能な状態で残ってしまっていたのか！

……確かに原作では見たことがないが、技術力にあかせてメカ怪獣を仕立て上げるつてのは、如何にもサロメ星人がやりそうな事である。

それが分かったところで、ピンチには変わりないのだが……

「アンヌとアマギはガイロスを牽制しろ！ セブンは我々でカタをつける！」

「し、しかし……ただでさえ火力が足りてないのに、この上、分散してしまつては！」

「だが背後の敵を無視する事も出来ん！ セブんにガイロスが合流してみろ！ アギラはたちまち縊り殺されてしまうぞ！ それだけはなんとしても阻止するんだ！」

「く………了解!!」

「でえやあああ!!」

走るダンを、幾筋もの粒子砲が襲う!

アンドロイドの一体が、右手の四本指から滝のようにビームを発射してくるのだ。

お陰で真つ直ぐ進む事が出来ない。

「ええい……これでもくらえ!」

試しにウルトラガンで狙撃してみたのだが、敵の装甲には焦げ跡がつくばかりで、非常に効果が薄い。

「くそー! これならどうだ!」

ウルトラガンが効かないと見るや、ダンは腰のポーチから小型爆弾を一掴み取り出すと、背後に向けて、それを一齐にバラ撒いた。

煙と火花が敵のセンサーを惑わし、ダンの姿を一瞬隠す。

「今だ!」

銃撃が止んだタイミングを見計らって、上階へ向けて駆け出すダン。

『ゴゴゴゴゴゴ……』

だが、煙の向こうから、通常よりも一回り体格の大きなアンドロイドが両腕を広げて、ダンを抱き締めてしまおうと襲いかかってきた!

「だあーッ!」

咄嗟にジャンプし、頭上のパイプへ飛び付いたダンはそのまま鉄棒の要領でぐるりと一回転。

遠心力を乗せた大車輪キックをアンドロイドの頭部へお見舞いし、その巨体を仰け反らせた！

「うぐっ……」

もちろんその反動はダンの両足に多大な不可をかけ、ズキンとした痛みが走る。

だが、そんな痛みなど無いかのように華麗な着地を決めたダンは、ついにウルトラアイの納められたケースの前に辿り着く。

とはいえ、ケースは未だクレーンに吊り下げられたまま。

「レバーは……あそこか！」

必死に機械を操作して、なんとかケースを此方へ寄せようとするダン。

「ん？　なんだこの匂いは……それに……熱いぞ？　まさか！」

これは……新兵器研究所の工房で、何度か嗅いだ事がある！

ダンの鼻腔をくすぐったのは……まさしく鉄の灼ける匂いだった。

「じゅわっ！」

素早くその場を飛び退いたダンの目の前で、クレーンの操縦機械が真っ赤に赤熱し、原型も残さずでろでろに溶けていく。

「しまった……！」

機械の背後から現れたアンドロイドが口から猛烈な火炎放射を行って、周囲を一瞬で火の海に変えてしまったのだ。

どんとんと火に吞まれ崩れていく足場。

「こうなったら……！」

ダンには、バックルのボタンを押し込むと、変身デバイスの入ったケースを、ウルトラガンで撃ちぬき破壊した！

落下していく真つ赤な宇宙グラス！

「だあっー！」

意を決し、ウルトラアイを追って空中に身を躍らせるダン！

すると、ただ自由落下するしかなかった赤い眼鏡が、僅かに軌道を変えて、ダンの方  
向へと……正確には、彼の身につけているバックルに吸い寄せられるように、飛び込ん  
できた！

そしてそれを……ミラクルマンは空中で顔面キャッチするのだ！

『デュワッ！』

ウルトラアイがスパークする！

光に包まれたダンの体が、そのまま階下へと落下していき……

「駄目です！ 全然注意を引く事が出来ません！ まるで痛覚が無いみたいだ！」

「こつちを向きなさい！ ……ねえつたら！」

アマギ達の攻撃をまるで意に介さず、一直線にアギラとセブンの方向へ進むニセガイロス。

「マズい！ これでは挟み撃ちです！」

「こうなつたら全員でガイロスに攻撃するんだ！」

「止まれエー！」

その時！

ガイロスの腕が突如爆発し、一本が根元から盛大に千切れ飛ぶ。

『ー!?!』

困惑したように動きを止めるガイロス。

だが、戸惑っているのは何も怪獣だけではなかった。

「なんだ、いまの攻撃は？」

「わ、分かりません！」



再びの爆発。

ガイロスの腕が六本に数を減らす。

そして今度は、僅かに砲声すら聞こえてきた！

沖からだ！

「あ、あれは……！」

水平線の向こうに、異形の戦艦が見える。

二又に分かれた艦首に、それぞれ備えられた大口徑砲からは、朦々と黒煙が吐き出されていった。

照りつける太陽の光を反射し、眩く輝く無敵の特殊装甲！

「え、MJ号だ……MJ号がきたぞー！」

「なに！ 本当か！」

「あの色！ あの形！ 間違いありません！」

同時に全員の通信機が鳴り響く。

『ようやく通信可能域まで来たか……こちらマックス号Ⅱ世！ ウルトラ警備隊聞こえるか！ 援護する！』

この汽笛のようなバリトンは！

「アラキ艦長！」

『やれやれ、海底人達からウルトラ警備隊のピンチだと聞いて駆け付けてみれば……これはいったいどういう状況だ？ なぜセブンと仲間割れしている？ 謎の海底基地を追うという話では無かったのか？』

「艦長！ 詳しい事は省きますが、あのセブンとガイロスはニセモノです！ 敵のサイボーグです！ あ、あとアギラは味方です！ 撃つちゃ駄目です！」

『なに!? ……よし、ひとまず全火力をガイロスへ集中！ 緑の怪獣を援護せよ！』

「シハカタ様！ せ、戦艦です……！」

「なに！ 怪獣といい戦艦といい、次から次へと出て来おって……！」

これでもしも本物が出て来た時に、数の優位をとられてしまうではないか。

この時サロメ星人達は、ダンが素直に工場の爆発で死んでくれるとは思っていなかった。

本来の歴史であれば、完全に油断していたかもしれないが……なにせ、今回のセブンはまだ一度きりしかビームランプが点滅していないのだ。

なので、少しでもセブンの戦闘力を削ぐ為に必死だった。

捕らえたダンの神経を逆撫でしていたのも、怒りや絶望で、少しでも判断力を鈍らせてくれれば御の字と思って、わざとやっていたくらいなのだから。

サロメ星人は自分達の最高傑作たるゼロセブンが、戦闘力においては完全に本物を上回ると確信していた。

しかし、その周辺を取り巻く環境までは、再現仕切れない。

ガッツ星人の計画書には、セブン第三の能力として、本人以外からの援護が特記事項として記されていた。

なので、本人の120%いや150%の能力を持ったセブンを作ろうと、本物と戦う前にその余剰分を削られてしまっただけでは意味が無い。

そこで今回、サロメ星人が用意したアンドロイドシリーズこそが、彼らのカプセル怪獣でありウルトラ警備隊だったのである！

だが、ここで大きな誤算が生じてしまった。

「そもそもなんだあの戦艦は!? あんなものは計画書にも書いておらん! 全くガッツ星人め、杜撰な仕事をしておって……!」

「ですがご心配いりません。幸い相手は船です……いくら強力な砲を積んでいようと、水の中にいる以上我らガイロスの敵ではありません!」

「おお、そうだな! やれ! あの悪趣味な戦艦を真つ二つにへし折ってしまえ!」

『——!』

サロメ星人の号令で、ニセガイロスは海中に没し、少しばかり減ってしまった八本の足をくねらせて、陸上とは比べ物にならない速力を発揮した。

「敵怪獣、接近!」

「魚雷で近づけさせるな!」

「効果ナシ!」

「うわっ!」

直ぐさまMJ号に取り付いて、長い触手で雁字搦めにしてしまった。

そのまま全身の筋肉を一気に収縮させ、タンカーすらも引き千切る怪力でペチャンコにしてやろうと……!!

『——?!?』

「はっはっは。よりにもよって、このマックス号Ⅱ世に格闘戦を挑もうとは……クレイジークレーン展開!」

「クレイジークレーン展開!」

ガイロスがいくら力を籠めてもビクともしない。

それどころか船体下部から、黄金の輝きを放つ巨大なクレインが波を断ち割って出現したかと思うと、先端の武骨なカニバサミで、ガイロスの頭部をガツチリと固定した!

『ー!!!』

「形態移行！」

「アイキャプテン！ 艦首沈降開始します！」

「艦首沈降開始！ ベント開けーい！」

マックス号Ⅱ世の二又に分かれた艦首がズブズブと海中に沈んでいき、それに引き摺られる形で、艦後部とガイロスも一旦水中へと姿を消す。

「艦首着底確認！」

「よろしい！ では艦尾起こーせー！」

「艦尾起こします！ メイインターンク！ ブローー！」

「重力方向切り替えよろしー！」

指揮所のクルーたちは、ほんの僅かに、体の引かれる方向が90度入れ替わった事を悟った。

ざばりと海水を滴らせながら、戦艦の後部が水面から付き立つ！

「艦尾離水確認！」

「艦底部ロケット噴射！」

「重力軽減機開始動！」

「量子変換システム、正常に作動中！」

猛烈な勢いで噴射されるロケットの束！

あらゆる機関のサポートを受け、輝く大鉄塊がその身を起こしていく。

そしてついに！

「本艦、これより……直立します！」

海を割り、水飛沫を噴き上げて、M J号の艦尾……いや、上半身が海上にその輝く全貌をついに晒す！

『ー！?』

「ば、馬鹿な！ あれはまさか……っ！」

「有り得ません、地球人が……ぺ、ペダ……ッ！」

驚愕するサロメ星人達の眼前で、敵船の右舷が動いた。

そうして無敵の大戦艦は、自らの右腕を振るい、万力のような三本指で眼前の敵を鷲掴みにするのだ。

「本艦はこれより、格闘戦に移行する！ ……マックスジョー！ 交戦せよ!!」

『グワッシ！ グワッシ！』

黄金の巨神の胸奥で、七色の輝きが二度目の雄叫びを上げた！

## セブン対セブンの激闘 (VII)

ニセガイロスの眼前で、巨大戦艦が直立し、円らな瞳で敵の姿を見据えていた。強靱で頑丈な四肢。

太陽を照り返す黄金の装甲。

頭部と胴体が一体となった、土偶を思わせる独特のシルエット！

その姿はまさしく、かつて襲来したキングジョーそのものであった！

「これより本艦は、敵怪獣を格闘戦で粉碎する！ 右舷で敵の脇腹を掴め！」

「右舷アーム展開！」

『グワツシ』

鉄柱の如き右腕が、ガイロスの脇腹を抑える。

「そんな馬鹿な！ なぜペダン軍の巨大戦車が動いているんだ！ 破壊されたハズでは

無かったのか!？」

「ハハハ!! 見たか！ これぞマックスジョー！ 科学の力よ！」

そう、これこそがMJ計画の真髄。

ペダン事変で神戸港に沈んだキングジョーをサルベージし、防衛兵器として再建するのが最終目的だったのだ！

勿論、その制御系統を始めとした諸々は、ライトンR30爆弾の攻撃で完膚なきまでに破壊されており、人類の技術だけでは再建など夢のまた夢であっただろう。

しかし、これまでに鹵獲した、数々の異星人兵器を解析して得られた新技術群と、なにより友好を結んだ他惑星の技術者達との協力により、ついに物言わぬ残骸だったキングジョーは、再び起動の日の目をみた。

有りと有らゆる叡智がひと所に結集した結果、かつて破壊の限りをつくした機械仕掛けの悪魔は、光り輝く鋼鉄の守護神として、新たに生まれ変わったのだ！

「地球人がこんな兵器を動かせるはずがありません！ 何かの間違いです！」  
「いいぞ！ そのまま引き千切ってやれ！ ペダニウムエンジン全開！」

マックスジョーの宇宙コランダムで成形された風防の中で、銀河に轟く最先端の光波エンジンが唸りをあげて、左肩から伸びた巨大クレーンと、重機の如き右腕を、それぞれ別の方向へと引っ張った。

ミチミチと不快な音がしたのは一瞬だけで、次の瞬間には爆薬でも爆ぜたような轟音が断続的に響き渡る！

一本一本が、海峡大橋の金属ワイヤー程にも太く強靱なガイロスの筋繊維が、そこへ



かかる負荷に耐えきれず次々と断裂しているのだ！

『……！』

「いくらニセモノとはいえ、海の隣人達の旧友を、これ以上辱めさせる訳にはいかん！

一氣に決めるぞ！ 左舷ライザードリル準備！」

「ライザードリル回転開始！」

そして今度は左腕の先端に装備した、黒鉄の土竜を高々と振り上げる。

「ぶちかませ！」

千切れ掛けていた肩口目掛け、銀の円錐が突き込まれた！

死体を繋ぎ止めていた拘束具が弾け飛び、肉片と共に海面へ撒き散らされながら、凄

まじい水柱を立てる！

「ウオオオオオッ……！」

『!!!』

そのまま純粋な膂力によって、真つ二つに引き裂かれるニセガイロス！

「デストレイ、発射アー！」

マックスジョーの双眸から、眩い光の奔流が放たれる。

哀れな怪獣の死体は蒸発し、もはや二度と誰かに眠りを妨げられることがなくなつた。

「敵怪獣、沈黙！」

「いよーし！ やったぞー！」

圧倒的な戦果に、艦内で歓声が爆発する。

だが歴戦の艦長は、それよりも大きな発砲音の如き声で部下たちを諫めた。

「まだだつ！ まだ我々には、戦うべき最大の相手がいる！」

「……ウルトラセブン」

ブリッジクルーに緊張が走り、副長がゴクリと生唾を飲む。

「……よもや、本艦の初陣の相手がよりによってセブンのニセモノとはな。宇宙人はこのような手しか使わんのか？」

「ガイロスばかりか、セブンの姿まで騙るとは……！」

「……だが」

艦長が制帽を深く被り直す。

「相手にとって不足なし！ やはりあの敵を撃破するべきは本艦において他に無い！ 不屈者を粉碎し、我らのセブンを取り戻すぞ！」

「「アイ、アイ、サー!!」」

---

海底工場に光が満ちる。

そしてその光が収まった時、基地の最下層には真紅の戦士が立ち、此方へと向かってくるプロトアンドロイド達を見据えていた。

(……やはり、エネルギーが足りない……か)

しかしその姿は、普段の地球人態と変わらぬ大きさでしかなく、雲を貫く巨人の姿となるには、些か出力不足であった。

サロメ星人によつて、アイスラッガーからエネルギーを絞り尽くされてしまったせいで、残されていたのはごく僅かな量しか無かったのだ。

まずは海上に出て太陽光を浴びなければならぬが……

(すんなり行かせてはくれなさそうだ……なっ！)

『デユワツ！』

一体のアンドロイドが、右手の親指をコッキングのように引き下げる。

そして、ピンと真っ直ぐに伸ばした残りの四本指から、一斉に荷電粒子銃を撃ちかけてきた！

『ダァー！』

セブンが凄まじいスピードで工場内を走り抜けるが、その動きを正確に追いかけてくる。

しかも、敵はそれだけで無い。

『ゴゴゴゴゴゴ！』

『デユワ！』

セブンのさらに一回り以上体格の大きなアンドロイドが、五本の指をしつかりと組み絞めて、ハンマーのように振り下ろしてきた！

咄嗟に避けるが、床は大きく陥没し、飛び散った破片が礫のようにセブンの体を襲う。

『ゴー！』

その状態から腕を薙ぎ払い、床から周辺機材から、何から何まで手当たり次第に投げ付けてくるではないか。

もはやこの工場は用済みであり、事ここに至っては、セブンの処刑場でしかないのだ。

『デユワ！』

飛来物を避けようとしたセブンは、背後から迫る炎に表皮を舐められ、苦悶の声を上げる。

よもや太陽の子であるセブンをして、なお苦しめられる程の火炎放射とは！

さしもの彼も、マグマや太陽に突っ込んでしまつては堪らない。

それらの表面温度は摂氏6千度とも言われているが、このアンドロイドの吐き出す火炎は、それに近い威力があるのだ！

思わず膝をつくセブンであつたが、休んでいる暇などない。

遠くからその場へ小型のミサイルが飛んできたからである。

『アユーー!』

エメリウム光線で迎撃すれば、凄まじい爆発が巻き起こり、爆風だけでセブンの体を吹き飛ばしてしまう!

『ジュワーツ!?!』

ミサイルの飛んできた方向を見れば、先程の銃撃型アンドロイドが片膝をついた姿勢でこちらを向いており、噴進煙は彼のぽっかりあいた膝から始まっていた。

右手にレーザーバルカン、膝にはマイクロミサイル。なんとという火力だ、これでは人型戦車ではないか。

(一度に相手しては駄目だ……まずは連携を崩すんだ!)

特技の異なる者同士がチームを組んだ時の恐ろしさというのは、セブン自身が誰よりも理解している事である。

だからこそ彼は、この中で最も厄介で、連携の要となっているアンドロイドに、あえて真正面から勝負を挑んだ!

『ダアー!!』

『ゴツ!!』

びりびりと空気が震え、余波だけで周辺機器が全て割れ砕けてしまう程の勢いで激突

する、パワーファイターと重戦士!!

3体のうち、最も巨躯を誇るこの接近戦型アンドロイド……ただ単に身体能力だけを追求して強化されているのであろうこの機体は、一見、攻撃の射程が短く優先度が低そうに見えるが、その実、ひたすらに頑丈かつ単純であるが故に、つぶしが効きやすい。

なので遠・中距離の二体を先に倒そうとしても、この機体がその恵まれた基礎性能と重装甲で、素早く護衛のように動き、邪魔をしてしまうのだ。

だからこそ、余力のある内にコイツから……倒す!

『アユ……ワ……』

『ゴゴゴゴゴゴ』

五本の指をガッチリと絡ませ、自慢の握力でもって相手を押し倒そうと力比べする両者。

あまりの圧力に、二人を支える金属製の床がひび割れ、歪み、陥没するほど。

だが、その驚異的なパワー勝負の結果、徐々に押されていくのは……なんとセブンの方であった。

半ば予想していたことではあれど、これには銀河一の力自慢も内心舌を巻く。

コンセプトとしては、出力でセブンを圧倒できる人工筋肉と基礎骨格の研究……と  
いったところだろうか。

なるほど、チブルとサロメの共同開発というのも伊達ではないらしい。

そして、そんな劣勢のセブンの背後で、件の無慈悲な砲撃アンドロイドが、片膝をつき真つ赤な背中へ狙いを定めた！

『……死ネ。』

折れた太ももから、ギラリと覗く殺意の先端。

セブン、危うし!!

『ジユ……アアツ……!』

——おっ！ この防衛軍イチの怪力無双フルハシ様に、真つ向から腕力勝負を挑むたあ、いい度胸だな！ ダン！

極限状態に置かれたセブンの脳裏に、いつかの柔道場で聞いた野太い銅鑼声が響く。

——でもよ、俺の武器が、自慢の筋肉一本だけだと思つたら……大間違いだぜっ！

(……そうですね、フルハシ隊員。貴方は存外……技巧派でした!)

『デエアーツ!!』

背後でついにミサイルが発射!

すると突然、セブンは体重を後ろへ落とし、押し返していた敵の腕を一挙にグンと引き戻した！

そして、素早く両足を相手の腹部に滑りこませたかと思うと、地面についた背中を支点に使い、敵の巨体を遠心力のままに後方へ投げ飛ばす！！

決まったッ！ これぞフルハシ直伝、ウルトラ巴投げ！

重戦士の巨軀が宙を舞い、そのままセブンの背後へ迫っていた陽電子ミサイルと激突

！！

途端、目も眩むような閃光と共に、けたたましい爆発が雷と部品を四方八方へまき散らした。

跡形もなく粉碎される近接型アンドロイド！

工場の爆破まで、残り5分。

『ジューワ！ デェア!?!』

だが、勝利の余韻に浸る暇もない。

上空から飛来したアンドロイドが、灼熱のカーテンで包み込もうとしてきたからだ。

すぐさまセブンは、傍にあった機材を腕力と念力の合わせ技で投げつけると、壁に張り巡らされた配水管をアイスラッガーで鋭く切り裂いた！

アンドロイドは防御の為に、飛来物を自慢の火力で一瞬のうちに融解させてしまった



が、その代わり、チーズのようにとろけた大量の金属を頭から被る事になる。

『ムムッ。』

もちろん、耐熱性を高められたボディがそれで傷つくことはなかったが、そこへタイミングよく吹き出した水流が直撃したので、急激に冷え固まった金属で全身を戒められてしまった。

『デュー！』

しばし時間を稼ぐことに成功したセブンは、振り返って狙撃アンドロイドに呐喊する。

それを右手の粒子マシンガンで素早く迎撃するアンドロイド。

今度は四本の指を巧みに動かし、セブンの動きを制限してしまうではないか！

『グ……グァー！』

手足に何発かくらってしまったセブンは、堪らず強行突破を諦めて、物陰に退避する。

(なんとという精密射撃だ、これでは近づけない。まるでソガ隊員の早撃ちじゃないか

……さてよ?)

彼はサロメ星人の言葉を冷静に思い出した。

あのアンドロイドの電子頭脳には、今までのセブンの戦いに関するデータが一通り入っていると……

それはパワーやスピードといった、単純なスペックだけの話に留まらず、些細な行動のクセから思考傾向、好みの戦術、選択した技から次へ繋がる一連の動作に至るまで。

それらの情報を複合的に学習させれば、セブンのあらゆる戦闘パターンを、何万通りもシミュレートする事ができる。

(なるほど、だいたい私の取りそうな行動は、最初から全てお見通しという訳か。道理で素早い訳だ)

どのようなルートを通っても、電子頭脳の演算結果から、絶対に先読みされてしまうというのならば……！

……よろしい！

(やれるもんなら……やってみろ！)

『デューツ!!』

物陰から飛び出したセブンは、なんの回避もとらず、ただエメリウム光線を馬鹿みたいに乱射しつつ、破れかぶれで一直線にダッシュした！

当然そんな考えなしの突撃が通用する筈もなく、予想外の行動にアンドロイドが戸惑ったのも最初の数秒のみ。

次の瞬間には凄まじい量の火線が殺到し、銃撃と逸れたエメリウム光線によって、セブンの立っていた場所の配管は無残に破壊し尽くされてしまい、蒸気が盛大に吹き出し

た。

『でゆわわわーっ!』

蒸気の向こうで、セブンのシルエットが身悶えるように折れ曲がったかと思えば、喉も引き裂くような声量で、工場内へと響き渡る断末魔。

『でゆわ。じゆわ。だあ……がくっ』

煙のカーテンから千鳥足で現れた真紅の戦士は、胸を押さえながら苦し気に呻くと、二、三步ほどよろめいたところで、無防備に倒れ伏してしまった。

『……???』

標的が急に動かなくなった為に、困惑したように途切れ途切れの駆動音を出しつつ、左右に首を傾げて、少しでも多面的にセブンの死体から情報を得ようとするアンドロイド。

このような行動は、どの予測ルーチンに入っていない。

『……死亡証明システムヲ。執行!!』

だが、動きをとめたならば、チャンスだ。

機械仕掛けの死神は、確実にターゲットを破壊するために、最も威力のある左腕の電磁ナイフを展開し、ピクリとも動かない敵に接近する。

そして、足元の標的に紫電を纏った必殺の刃を振りかぶり……

『ダー!!』

……交叉。

立ち上がったセブンがアイスラッガーを頭部にもどすと、アンドロイドの頭部がグラリと揺れて、火花を散らしながら工場の床を転がった。

爆破まで——残り、2分。

「いかん！ こちらのサイボーグ怪獣がやられた！ ナデイカ、早くあのカプセル怪獣にトドメをさすんだ！ せめて一対一に持ち込め！」

「はい！ ゼロセブン、敵の機動力は充分に削いだはずよ。やっておしまい！」

『D y w a a a a 』

ニセセブンが、打撃によって痛めつけられ、動きの鈍ったアギラの喉元を驚づかみにし、頭部のアイスラッガーに手をかける。

「させるか！ 機関最大船速！」

「背部ロケットエンジン全力噴射！」

「………呐喊！」

巨大な水柱を上げ、海中から全身を引き抜いたマックスジョーは、重力低減の恩恵を

最大限に享受しつつ、ペダンエンジン齎す大出力にあかせて、さながら釣り鐘に打ち付ける鐘つき棒のように、アイスラッガーを振り上げるセブンの側面へ、そのまま頭部から突っ込んだ。

「総員、耐シヨック姿勢！」

『グワツシ』

『D y w a a a 』

これには流石のゼロセブンと言えど派手に吹っ飛ばされ、森の木々を薙ぎ倒しながらダウンする。

そして、マックスジヨーは各部のジェットを器用にふかしつつ、その重量からは考えられない程ふんわりと、地面に着地しようとした。

それでも衝撃を殺しきれず、周囲の土が肩口まで巻き上げれる事までは防げなかったが。

「各員、損害知らせい！」

「機体ダメージ小！」

「姿勢制御正常に機能中！ 地上での歩行に問題ありません」

ユーエイトの稼働により得られた、二足歩行に関する姿勢制御のデータは、マックスジヨーへ十全にフィードバックされており、浮力の助けが及ばない陸上においても、

しっかりとバランスを崩す事無くその巨体を二本の足で支える事に成功していた。

そして今や、セブンがワイドショットで完膚なきまでに破壊し、撃墜してしまったペダ星人の司令船に代わり、マックスジョーのポツカリ空いた腹部には、無傷で鹵獲されたペガ星人の巨大円盤がそのまま納められている。

重量制御だけでなく、急激な気圧変化や衝撃にも耐えられるよう頑丈に設計されていたペガ円盤は、水上航行どころか水中潜航、空中浮遊に陸上歩行とあらゆる場所を戦闘空間として想定されている万能戦艦マックスジョーのコックピットとして、船体がどのような状態に置かれようとも、乗員を周囲から隔離するのに役立つていた。

『D y w a a a a』

起き上がったゼロセブンが即座に額からビームを放つ。

「うわっ!」

「エメリウム光線だ!」

「回避不能!」

「狼狽えるな!」

だが、マックスジョーの胸部を正確に狙い撃った光線は、その装甲をほんのりと赤く色付かせる程度の役目しか果たさなかった。

むしろ背後のアギラを庇うように、より前面へと一步踏み出すマックスジョー。

「あのセブンですら、最後まで破壊出来なかった最強の装甲だぞ！　ましてや偽物の貴様が、本物にすら為し得なかった事を出来ると思ったか！」

マックスジョーは再建に当たって、本来のキングジョーが持っていた、分離合体機構までは流石にオミットされてしまっている。

故に鈍重な動きと相まって、素早く敵の攻撃を回避出来る可能性は皆無。

しかし回避の必要など……無い！

ペダニウムの正面装甲は、純粋な剛性では殆ど宇宙一と言って良い、無敵の素材なのである。

究極の防御力と、無尽蔵の出力を持つ、銀河に轟くジャガーノート！

「……撃ち返せっ！　主砲用意！」

「マックススカノン、発射準備完了！」

「つてえー！」

二股に分かれた艦首……つまり両足首に装備され、モード移行により艦後方を向いていた巨大な主砲が、最大仰角で無防備な敵の上半身に狙いを定め、下段から不意打ち気味に砲弾を撃ちこんだ。

『Dy w a a a』

「マックスジョー前へ！　このまま畳みかけるぞ！」

## セブン対セブンの激闘（Ⅷ）

「いいいっつよっしやあああああ！ キングジョーの再建間に合わせたつたぞおーっ  
！」

新造戦艦マックスジョーが、直立モードでガイロスを撃破し、ニセセブンの光線を防いだのを見届け、未だに戦闘中ではあるものの、どうしても我慢できず、俺は万感の思いを籠めて渾身のガッツポーズをとった。

スケジュールがギリギリだったので、もう今日の戦闘には間に合わないと諦めかけていたが、間一髪のところまで到着してくれたらしい。

ありがとうみんな！ そしてありがとう昨日までのオレ！

なにせこの瞬間の為に、寝る間も惜しんで各方面へ頭を下げに下げ、急ピッチで建造してもらったのだから。

まさにこの光景は俺たちの汗と努力の結晶が生み出したものとしか言いようがない。

原作のキングジョーは、警備隊のライトン30攻撃によって内部から破壊されて尚、



外殻に関しては最期の瞬間までその脅威的な堅牢さを發揮して、殆ど原形を残したまま神戸港に沈んだ。

そして、平成版ではついにサルベージされ、防衛軍の改造の元、キングジョーIIとして蘇っていた。

まあ結局、100%人類の技術力だけで完成出来たかどうかは、その後の展開のせいで分からずじまいではあったが……少なくとも時間さえかければ、鹵獲品を再利用する一歩手前までは漕ぎ着けたわけだな。

……とはいえ、それは本編から数十年も後の事だったのをなまじ知っていたので、キングジョーを撃破した時の俺は、最終回までにコイツを戦力化するなんて、最初から無理だとも諦めていたさ。

だがその後、様々な出来事が重なって、何も暴走を防ぐためだけならば、別に地球の技術に拘る必要はないじゃないかと気付いた時、やっぱりコイツをどうしても完成させる必要があると確信した。

それは、サロメ星人製セブンの攻略法を必死こいて考え抜いたけど……やっぱりキングジョーぶつけるしかねえわ！ って結論に至ってしまったからである。

だって……相手の能力普通にセブンぞ？ 番組の主人公と同じ強さなんだぞ？ んなら、張り切って原作以上の活躍をしようとホーク等の既存兵器で無理した結果、普

通に警備隊全滅したっておかしくない。

かといつて全部の戦闘をセブンに任せるといふ扱もとれん。

なぜ同じ能力……いや、セブンすら倒せるとまでサロメが豪語した強さのニセセブンを、原作において倒せたか。

所詮、偽物は本物には勝てないから……？

それともサロメ星人の慢心や設計ミス……？

違うな。

奴らが『セブンをモデルに造った』からだ。

この話の一番のミソは、サロメ回が原作においての終盤も終盤、最終回のたった2話手前ということ。

つまりこの時点でセブンは既に傷付きボツロボロで、相当弱っていたはず。

もしもサロメの言う『セブンの戦闘力』が彼の全盛期……シリーズ序盤でゴドラやエレキング相手に、登場すれば勝ち確の瞬殺無双をやった頃のデータなら、それこそ本物の方が、今まで並み居る宇宙人や怪獣に彼のやって来たように出落ちされて終わり。

原作のような、手に汗握る互角の戦いを繰り広げる暇もなかっただろう。

だからニセセブンは少なくとも、ガンダーの冷気やギエロン星獣の放射能汚染で重篤な後遺症を負ってしまった、中盤以降のセブン性能を基にして建造されている可能性が

非常に高い。

そう、だから……ダメージやそれによるタイムリミットも、そうと気付かず再現してしまっていたんじゃないか？

ロボット……というか機械が持つ最大の特徴は『安定性』だ。

補給やメンテを完璧に受けられるならば、ほぼ一定のパフォーマンスを発揮し続ける事が出来る。

疲労やモチベーションで振り幅ブツレブレの有機生命体との最大の違いがそこだ。

その代わり、どうしてもエネルギーの補給が絶対必要になる。

1000の燃料からは1000の仕事しかできない。

どれだけ直前までバリバリ動いてようが、電池が切れたらその時点でパツタリ停止する。

泣こうが喚こうが関係なく、俺たち人間のような無理が出来ない。

セブンと同じウルトラエネルギーで動いているなら、太陽光電池の上位互換みたいなもんだが、その他ならぬ本人が、太陽光の下で戦っていても、ゆっくりチャージする時間を挟まなければ、いずれランプをチツカチカさせるようになってるんだから、ニセセブンも一回の戦闘で連続稼働可能な時間が決まっているはず。

サロメ星人の「お前を再現したけど、お前には勝てる」という一見矛盾した発言はつ

まり……

「日に日に弱っていくお前を、ある時点で複製して保存した。本物はあの時よりさらに弱っているはずだから、あの頃の自分に勝てるわけない」という意味だったのでは……？」

じゃあなんで原作で勝てたかと言うと、答えは簡単。

『ニセセブンはあの日、本物より長く戦っていたから』

警備隊とアギラが戦闘時間を僅かに稼いだおかげで、ようやく衰弱セブんとトントンのエネルギー量になったニセセブンへ、ダンは最後に『回ればなんとかなる』とばかりに遠心力を加えた全力体当たりで相殺。

光の届かないように水中戦へ引き摺り込んでから電池切れになった置物を、なんとか気力で一押ししての辛勝……だったのではなからうか。

その証拠に、この回を境として一気にセブンの戦闘力が引き下がる。

多勢に無勢だったとはいえ、あろうことかフック星人相手に人間態時はフルハシに助けて貰い、変身後もたかだか数とアクロバットしか取り柄のなさそうな彼らに翻弄され、苦戦してしまっていた。

……で、翻つてこちらの世界における、我らのセブンは……だいぶ体力を残してる……と思う。

未だにビームランプの点灯が一回だけだったのも、我ながら鼻高々なんだが……  
逆にニセセブンもめっちゃ強くしてしまったのでは……？

原作の流れがオレの予想通りなら、それまでにどれだけ余力を残していようが、セブ  
ンとニセセブンは結局相殺しあって、最終的にほぼ残量ナシのプラマイゼロに落ち着い  
てしまう可能性ががががが。

嫌じゃ！

せつかくここまで頑張ってきたのに、元の木阿弥とか許せるか！

ゲームで例えるなら、どれだけ勇者のレベル上げて、伝説の武器で固めて、仲間をゾ  
ロゾロ引き連れてつても、シナリオの都合上、魔王との最終決戦では必ずレベル1の素  
手タイマンしてもらいます……みたいなもんだぞ!?

なんなら難易度は、魔王城突入時の総ステータスを基準に設定されるので、最初から  
素っ裸の方が安定しますとか、なんだそのクソゲー!?

ふざけんな！ コントローラ叩き壊すぞ！

だからオレは、そんな理不尽ゲーを強いてくる相手を、黄金のハンマーで画面ごと  
ぶっ壊してやる事にしたのさ！

「いつけええええ！ キング……いやマックスジョー!! ブっ飛ばせえッ！」

オレの答えは……これや！ くらえ！

『グワツシ』

マックスジョーの脚部から主砲が連射され、ニセセブンの肩や顔を猛烈な爆炎で包む。

『Dy w a a a a』

思わぬ位置からの艦砲射撃に仰け反った贗作は、忌々しそうに両手を額から離し、下方に向けてガツチリとクロスさせ、それ以上攻撃が届かないように射線を遮った。

「マックススカノン命中、効果アリ！」

「よし！ ガードが下がったぞ！ 今だ、アレを使え！」

「ハッ！」

艦長の指示に、砲術長がコンソールを操作すると、マックスジョーは脚部からの攻撃を継続しながら、右腕を自身の腰部へ伸ばす。

右舷ラッチに連なっていた特大サイズのドラム缶を、三本の指で器用に引っ掴み、ぐぐぐと後ろに振りかぶったかと思えば……

「ライトンR30爆雷……投射！」

それが空き缶でも放り投げるかの如く軽やかに、手首のスナップを効かせた鮮やかなサイドスローで、敵に向かって投擲した！

『Dy w a a a a』

紅蓮の炎と巨大なキノコ雲が発生し、爆風と衝撃であらゆるものを吹き飛ばす。

「うわあああつ!!」

「ソガアー! 大丈夫かつ!」

「あ、ありがとうフルハシ隊員……」

転がる俺の首根つこを捕まえて、先輩が笑う。

「いいってコトよ! しかし凄まじい爆発だったな! 見ろよあの煙を……やったか!!」

「あつ……バカツ」

朦々と立ち上る暗幕の向こうから、真紅の腕が突き出され、銀の仮面がギラつく闘志を反射する。

流石はウルトラセブンと同等の謳い文句。

秘密兵器を食らっても、ニセセブンは健在だ。

「ああもう! 先輩がフラグ建てるから! なんてことしてくれましたか!」

「えっ、俺のせいなのか?」

『Dy w a a a』

「猿真似とはいえ、不死身のセブンを模しただけはあるか。だが、ダメージはあるはずだ! この機を逃すな! デストレイ斉射!」

「デストレイ斉射！」

大きく体勢を崩したゼロセブンに向かって、マックスジョーの両目が輝く。

そして……

『Dy wa』

「な、なにっ!？」

突如ゼロセブンの周囲に展開されたフィールドが、マックスジョーの撃ち出した光線を阻み、その光の束が持つ凄まじい破壊力を、一瞬のうちに霧散させてしまった!

「ハツハツハツ! チブル星人が打倒セブンの為に開発した電磁フィールドだ! そのようなビームが効くか!」

「やはり、対セブンを想定して光線防御機能をつけておいて良かったですね」

「ああ。あらゆる粒子の持つ指向性を拡散させてしまえば、光線防御能力は実数値の三分の一以下で構わない。残りは物理的な防御能力に割り振れるからな。おいナディカ、さっきの攻撃の分析結果は?」

「はい、着弾時に強力なライントーン周波を検出。どうやら硬質目標の表面剛性を一時的に無効化してしまう兵装のようですわ」

「しめたっ。装甲表面を柔軟な人工有機素材で覆っておいたのが、功を奏したぞ」

「一時はどうなることかと思いましたが、相手の攻撃能力も、ゼロセブンに対して決定打



になり得ません」

「よし、電子頭脳に打開策を演算させろ！ おい、ゼロスリー。もしも本物が想定より早く合流すると拙い。少しでも時間を稼ぐんだ」

「ハイ。ご主人さま。」

サロメ星人が命じると、傍に控えていた等身大のプロトアンドロイドは耳に手を翳して目を光らせる。

しばらくすると何かを探り当てたのか、かちりと奥歯のスイッチを噛みこむと、岩場でソガを翻弄した脅威的な加速度を發揮して、真っ赤なストールを翻し、船のデッキから飛び出していった……

『デユワ！』

(あとは出口を見つけるだけだ……)

射撃アンドロイドを下したセブンだったが、既に体力は限界に近い。

早く太陽の下でエネルギーをチャージしなくては……

『デユ!!?』

そこへ膨大な熱量が襲いかかる。

強力な火炎放射を備えたアンドロイドが、自身を戒めていた金属を焼き切つて、ボディを赤熱させたまま飛び込んできたのだ。

確かに今のセブンは太陽を欲していたが、別に炎そのものを望んでいたのではない。むしろ、星の光を宿さぬ人工の熱は、彼の表皮を冷たく灼いていく。

(……ダメだ。もう光線が出せない)

周囲の機材を遮蔽物にして、なんとか逃走を試みるも、次々に融解させられていき、辺りはすっかり火の海だ。

いつそ飛び立つてしまいたいが、広い空間では良い的になるだけ。外壁を突き破れずに手間取ったところをこんがり丸焼きにされてしまうのが目に見えている。

(なんと恐ろしい秘密兵器だろうか……アマギ隊員の改造したストラグル700でも、ここまでの威力は出ないぞ……)

もはや爆破までの時間も無く、焼死が先か、爆死が先か……こうなったら、全ての力を振り絞つて一か八かの賭けをするしか……

(いや……)

——おいおい、いつまで同じところ見てんだよ。時間が無いんだからさ。チャチャツと次に移ろうぜ？

——ダメだ。これは単なる水上艦じゃない。水中でも運用するなら、耐圧能力には隅々まで目を通すべきだ。

——キンググジョーの装甲だぞ？

——だからさ。深海の圧力を侮ってはいけない。僕がハイドランジャーの設計に、いったいどれだけ細心の注意を払ったと思う？ 極限の状態では、僅かな差が明暗を分けるんだ。お前が一番、それを知っていると思つてたんだけどな

——あー……まあ……そうね。

——時間が無い時ほど、焦つてはいけない。急がば回れという奴さ。冷静に、慎重に……所詮は神ならぬ人が立てたプランなんて、どんな穴があるか、分かつたもんじやないんだから……

(……そうだ。最後まで、冷静さを失つては、いけない)

セブンは逸る心を落ち着け、自身の五感を極限まで研ぎ澄まし……今の自分が置かれている状況をよく見て、よく聞き、よく考えた。

そしてこの灼熱地獄の中で……僅かに水の滴る音と、足裏から伝わる仄かに冷たい感触を拾い上げる。

その事実に通かれ、そのまま背後の壁を見やったセブンの瞳がキラリと光った。

彼が透視した先では……この海底工場を覆う岩壁の一部が、まるで魚雷でも当たった

かのように抉れ、隔壁にごく微細な亀裂を走らせているのを見て取ったのだ。なぜこの区画にだけそんな傷がついているのか。

分からない。分からないが……

(使える！)

彼がここからの脱出プランを採択したのと同時。

周囲の障害物が全て液体のように溶け落ち、もはや赤熱のしすぎで装甲が単色に染まってしまったアンドロイドの姿を露わにした。

セブンはゆっくりとそちらを振り向いたが、二三步後退るだけで、直ぐに退路を断たれてしまう。

壁だ。彼の背中を分厚い金属と岩盤の二重隔壁が阻む。

アンドロイドは、もはやセブンが逃げも隠れもしないのを見てとり、敵の姿を真っ黒なすす汚れに変えてしまうべく最大出力で炎を吹き出し……

『アュー！』

セブンは床に突っ伏した。

蹲る彼の背中を、熱風が炙る。

そんな事をして、アンドロイドは即座に火炎放射線の向きを変えてしまえばいい。僅かに数秒間生き延びただけ。

だが、そうはならなかった。

次の瞬間！

灼熱火炎砲の当たった場所が崩壊し、全てを押し流す勢いで猛烈な水流が流れ込んだのだ！

鉄砲水は一直線に壁の前に立っていたアンドロイドに直撃！

そして瞬時に沸き立ち膨れ上がった水蒸気が、さながらボイラー事故の如く一挙に爆発した！

『ジュワツーツ?!』

当然セブンも押し流されそうになるが、なんとか床の鉄材にしがみ付く。

幸いな事に、水流のカーテンとアンドロイドの爆風が互いに相殺し合った事で、どちらかによる致命的な結果には至らなかった。

だが、いざ大穴から飛び出そうとしても、工場内に流入する海水に押され、進めない。『バババ爆弾ノ爆発ママでマでマで。残りリリリリリリ……!』

その時、ぶかぶかと流されてきたアンドロイドの頭部が、不吉な死の宣告を紡ぐ。

『デユワツ?!』

『シーモモー d d d d d d d d d d d d d d d d 起動。』

工場を中心に横たわっていたアンドロイドの屍が、眩い光と共に白熱し――

――ダン！――

『デユワアアアッ!!』

真紅の弾丸が水面を突き破ると同時、海上に凄まじい水柱が発生した。

まさに間一髪。

自らを呼ぶ声に手を伸ばしたと思つた次の瞬間には、ダンの体は海水の分厚い壁をぶち破り、眩い輝きの下にその身を晒していた。

ダンの持つ生への渴望が、彼に最後の力を与えたのだ。

『ダアー!』

(みんな、今行くぞ!)

すぐに駆け付けようと、飛行速度を上げるセブンだったが……その時彼の目は、海上で一本の白い筋が、自らの後を追いかけてきているのを捉えた。

(あれは……!)

それは、凄まじいスピードで海面を駆け抜けるアンドロイドの姿！  
それだけではない。

『デユ!?!』

サツと視界が暗くなり、海面に影が差す。

セブンが頭上を見上げれば……

太陽を背に、灰色の飛行機雲を引きながら、両腕を失った小型戦闘機が此方へ突撃してくるのを認識して、彼は自身の遅刻を悟った。

(あと少しだけ、待っていてくれ、みんな……!)

「敵は正体不明のフィールドを展開、本艦の射撃を無効化している模様!」

「砲戦で決着が付かないならば、馬力勝負で直接粉碎するのみ! アイアンアンカーを投锚せよ!」

「了解! アイアンアンカー投锚!」

次にマックスジョーは、左の腰に右手を伸ばし、大和級に巨大なイカリをむんずと掴むと、太く頑丈な鎖をジャラジャラと引き出す。

それを巧みに振り回し、鎖分銅の要領で投げ付けて、ニセセブンの胴体を絡め取る事に成功した！

『Dy w a a a a』

「そうれ、錨を上げろ！　ペダンエンジン全開！」

「巻き取り開始、ヨーソロー！」

「ヨーソロー！」

基部のウインチと右腕の腕力で、ニセセブンの体を力任せに手繰り寄せるマックスジョー。

対する偽物も、負けじと反物質のチェインビームを指先から打ち出し、マックスジョーの右腕に絡ませて、それ以上動けないように引っ張った。

100万馬力vs脅威の超エンジン！

常識の埒外にある剛力重機達が、互いの最大出力をぶつけ合う。

両者一步も引かない拮抗状態！

「まだまだあー！」

「ライザーハンド接続！」

食い下がる紅蓮の悪魔を圧倒するべく、ダメ押しとばかりに左腕を振り上げて、そこへ装着された巨大ドリルの基部を鎖に噛ませると、モーターの回転数をプラスする黄金



機神。

マックスジョーは、各破損箇所の修復に使う部品取りの為に、本来の左腕を犠牲にしていた。

その代わりに低下した戦力を補えるよう、同じく足回りが修復困難となったマグマライザーの後部を切り詰め、義手代わりに装着していたのである。

「ばかなっ！・ゼロセブンがパワー負けだどっ!? 理論上のゲイン値は、本物の1.5倍あるんだぞ！ 有り得ん……」

地面を抉りながら、じりじりと引き寄せられていく巨大アンドロイドの姿に、サロメ星人は驚愕を隠せない。

「奴を捕まえろ！ クレイジークレーン展開！」

マックスジョーの背面から、同じ金色の輝きをもつ巨大アームが伸びて、距離の近付いた偽物の首をガッチリ掴んで離さない。

そのまま万力のような力で敵を締め上げていくハサミは、機能停止したクレイジーゴンの右腕を、そのまま取り付けたものだ。

バンダ星人の資源回収メカは、奇しくもキングジョーの装甲と同じペダニウム製であり、その造りも頑丈さと拡張性をただただ追求した、よく言えば単純かつ信頼性の高い……悪く言えば非常に古臭いローテクの塊だったので、異星由来の鹵獲兵器とは思えな

いほど容易く付け替える事ができた。

旧式と侮るなかれ、その剛性と馬鹿力は本物だ。

かつてのセブンも、決してそのハサミをこじ開ける事は出来なかつたのだから。

「侵略者風情が……恥を知れっ！ 貴様のような相手を彼と戦わせてやるものか！ このマックスジョーが必ず撃滅してくれる！」

「セブンの真なる強さは、その魂の高潔さ！ 平和を愛する勇気の志ぞ！ それが上つ面を真似ただけで、彼の力にあやかろう等と……片腹痛いわアー！」

「これ以上我々の戦友を貶めてなんとするかあつ！ 貴様、そこへ直れ！ 修正してやる！」

マックスジョーの三本指が、堅く握りしめられ……

「歯を食いしばれエーっ！」

これぞ海軍魂、文字通りの鉄拳制裁！

金属と金属が激しくぶつかり合い、盛大に火花を散らす！

ニセセブンの頬が僅かに凹んでいるように見えるが、マックスジョーの腕力を称えるべきか、ゼロセブンの頑丈さに驚愕すべきなのか。

「……ええい、分かっているもあの顔を殴るのは気分が悪い。さっさと化けの皮を剥がしてやれ！」

「アイ！ アイ！ 左舷ライザードリル再起動！」

すっかり怒髪天の乗組員達は、このまま勝負を一気に決めるべく、右手で白銀の仮面を押さえつけ、左腕を大きく振り上げた。

『グワツシ』

『Dy w a a a a』

両腕でマックスジョーの義手を受け止めるパワーファイター！

銀の円錐が彼の瞳を穿たと徐々に迫る。

「そのまま押し込め！」

その時、ニセセブンの双眸が激しく瞬いた。

殴られた衝撃でカメラアイが接触不良でも起こしたのか？

……否！ いくら贗作であろうとも、ウルトラセブンがこれで終わるはずがない！

『Dy w a a a a』

アンドロイドセブンが咆哮するや、地面に打ち捨てられたままになっていたアイスラッガーが、マックスジョーの背後でふわりと浮き上がり、無線操縦に従って、黄金色に輝く太く頑丈な右脚部の膝裏にピタリと鋭い刃を当てた。

次の瞬間！

「な、なんだ!?!」

マックスジョーの足を軸にして、その場で地面と水平に高速回転を始めるアイスラッガー。

傍目から見ると、さながら機械兵の右膝で回転鋸でも回っているかのようだ。

金属同士の擦れる不快な高周波が辺りに響き渡る。

「ハッ！ いけない！」

敵の意図へ真っ先に気付いたアマギが叫んだ。

「マックスジョー！ すぐにセブンから離れてください！」

「なんだとっ！」

「もう少しで倒せるんだ！」

「いえ、倒されるのはこちらです！」

「馬鹿なっ！」

「……ああっ！ もう遅い！」

一際大きな破砕音と火花が巻き起こり、高速回転していたアイスラッガーが弾き出される。

と、同時。

警備隊が見守る中、アンドロイドセブンが片足を大きく振り上げて……

『D y w a a a 』

マックスジョーの右膝を、真正面から踏み抜いた。

## セブン対セブンの激闘（IX）

マックスジヨアの右膝を蹴り砕くニセセブン。

「うわあああっ!!」

支えを失った巨体は、その超重量のままに後ろへ倒れこむしかない。アンドロイドにはセブンの今までの記憶がインストールされている。

そう、彼は思い出したのだ。

キングジヨアは如何にして倒されたのかを。

そして敵の構造を素粒子透過線でスキャンしてみれば、案の定、敵戦艦の右足だけが不自然に補強されていたのである。

後は簡単だった。アイスラッガーで寸分の狂いなく同じ箇所を切りつけながら、その回転数を特殊な周波数に調整。

そうして敵の装甲を極限まで脆くした上で、関節構造的に想定外の方向から負荷をかけた。

ただそれだけだ。

言葉にすれば容易いが、とても一瞬の内に為し得る事ではない。だが、アンドロイドの驚異的な演算能力と精密さを持つ彼になら、それが出来た……というだけ。

無線操縦で戻ってきたアイスラッガーを頭頂部へ戻し、無感動にマックスジョーを見下ろすゼロセブン。

その代償として銀の刀の先端が、ぼろりと無残に刃こぼれするが、対する金の鎧はさらに悲惨な傷を負った。

「無事か!? マックスジョー! 応答せよ!」

キリヤマ隊長がビデオシーバーに叫ぶ。

「な、なんとか……」

「各員状況報告……!」

「右脚部損失……起き上がれません……!」

「なに!? 航海長! 折れたのか! 見せてみる!」

「俺のじゃない! マックス号の足だ!」

所々の配線が歪み、火花を散らすブリッジ内で、かろうじて意識を保っていた数名が、思い思いに返答する。

流石にペガ星人の円盤は、乗員保護に関してはピカイチだった。

急激なGの変化に、突撃時の重力緩衝システムが自動で働いたのか、凄まじい勢いで

地面に叩きつけられたにも関わらず、乗組員達は致命傷を免れ、運の悪い数名も気絶で済んでいた。

しかし、機体の方はそうもいかなかったのである。

「か、艦長……駄目です！ 艦橋からの操作を受け付けません！」

「なにっ!？」

「腹部と胸部を繋ぐメイン回路が、今ので断線してしまったようです！」

キングジョーは元々、四つのパーツに分離して運用する兵器だった。

もちろん、そんな複雑怪奇な機能を持つ接合部を完全再現できる筈もなく、それらの繋ぎ目は本来とは別の方式で、無理矢理連結されている。

ただでさえ、全く異なる技術体系の鹵獲兵器を継ぎ接ぎにしているのに、体内のパーツがほとんど純正品では無くなってしまっている為、例えハード面は良くとも、中身の配線部分までは、元機体に追いついていなかったのだ。

腰を思いつきり強打してしまったマックスジョーは、すっかり全身不随に陥っていた。

「なんとか立て直せないか!？」

「何度やっても認識されません！ ブリッジからの出力がマックスジョーから切り離されてしまつて……ああっ!？」



半分視界の無くなってしまったメインカメラからの映像を見た通信班長は、思わず恐怖の叫びをあげた。

金色の大槌を振り上げた、血染めの悪魔と目が合ってしまったから。

『Dy w a a a a』

「うわあああつ！」

「あああつ！ マックスジョーが！」

凄まじい衝撃音が響き渡る。

確かにマックスジョーの胸を守る風防は、ウルトニウムルビーとペダニウムサファイアの複層構造で形成され、光を透過しながらも、セブンのパンチすら弾き返す靱性を備えている。

しかしあくまで、その強度は船体外殻の中でも二番目止まりであり……それ以上に堅い素材で何度も攻撃されて無事かと聞かれれば……。

堅い素材、そう例えば特に……ペダニウム製のパーツとか。

『Dy w a a a a』

完全に逆方向へ折れ曲がった右足を、力任せに膝から捻じ切ったニセセブンは、それをハンマーのように担いで、身動きひとつできないマックスジョーの、七色に輝く胸に目掛けて振り下ろす！

容赦なく繰り返される破壊の意志。

何度も、何度も。

「そ、損傷拡大！」

「胸部ダメージ77%突破！ これ以上は持ちません！」

「ぐわっ！」

「ペダニウムエンジン出力低下、尚も進行中……！」

機体に衝撃が走る度、そこかしこから火花や蒸気が噴出し、乗組員を苛んでいく。

ついに、ばきりと一際大きな破壊音が聞こえると、マックスジョーの窓に、蜘蛛の巣の如き亀裂が無数に走っていた。

「……や、止むを得ん……総員退艦……」

「ああっ！ 間に合わないッ!？」

トドメを刺すべく、金の斧を高々と振りかぶる深紅の巨人……

海兵達が死を覚悟した……その時！

『ダァー!!!』

『D y w a a a 』

天空から飛来した太陽の使者が、錐揉み回転しつつ、悪魔の胸を蹴り抜いた！

「せ、セブン……」

「セブンだ……」

「本物だ……本物が来たぞー！」

「俺達のセブンが来てくれたー！」

皆の声援を背に、自身の偽物と対峙する紅蓮のヒーロー！

しかし、彼は明らかに肩で息をしており……

「アツ！ 見て、セブンの額を！」

「……点滅している！」

「敵も馬鹿ではあるまい。偽物を用意する以上、本物の動きは封じておいたはず」

「だからさつきは、自分の代わりにアギラを超越してくれたのね」

「きつと敵に捕まって、拷問を受けていたんだ！」

「それを無理やり振り切って、駆け付けてくれたってのか!?」

誰から見ても、明らかな消耗のサイン。

墜落寸前の飛行型アンドロイドを一撃で粉碎し、驚異的な速度で海上を駆け抜ける加速アンドロイドとの、スピードを超越した激闘を経て、ついにセブンは仲間達の元へ姿

を現した！

しかし、戦友の危機へ間に合うためには、十分なエネルギーチャージを行えず、かろうじて最低限の巨大化状態を維持するのが精いっぱいという有様だった。

「くっそ……マックスジョーが動けばなあ……マグネリウムエネルギーを分けてやれたんだが……」

「そうだ！ アレをびびーと撃ちかけてやりやあ、セブンはたちまち元気になる！ アマギ、なんとかなんねえか!」

「残念ながら……マグネリウム発振機はここにはないよ」

「なんで!? マグマライザーについてんじゃん!」

ソガは摺座したマックスジョーの左腕を指さした。なんなら、彼がマグマライザーを格闘兵装として転用する提案をしたのは、密かにこれを狙っていたからだ。

しかしアマギはゆっくりと頭を振る。

「僕たちがセブンを救い出した時に乗っていたのは2号機……マックスジョーの左腕部に使われているのは……1号機の方だ」

「なんだって!」

「そもそも、なぜアレの転用許可が下りたと思う? キミたち二人がクレイジーゴン相手に無茶をして、車体中央部の構造体がすっかりお釈迦になってしまったからだ! だ

からガッツの時には当然動かなかつたし、機体に累積したダメージで、もはや修理するよりもパーツに使ってしまった方が早いと判断されたんだ！」

「そうか、あん時にセブンが引っこ抜いた奴か……」

「クレージーゴンに挟まれて……ん？ クレージーゴン？」

その言葉に引っかけかりを覚えたソガは、腕組みしながらすつかり物覚えの悪くなった頭を懸命に働かせ、しばし黙り込んでからハツとした。

「1号機ならアレが出来る！」

「何が出来るってんだ？」

「MHサイクルレーザーが撃てます！」

「……お？ おお!? なんかつたな！ そんなもん！」

「あれで回路を狂わせてやれば……少なくとも……マシ……うーん」

言いながら、ソガは段々自信が無くなってきた。

もしもカナン星人の光線が効いたとしても、そのまま機能停止するのではなく、あくまで暴走するだけという事が分かっている。

であればそれをニセセブンに使ったとて、ただセブン並みの強さをもつクレージーゴンが爆誕するだけだからこそ、彼はあの兵器を今まで選択から無意識に除外していたのだから。

「待てよ、レーザーならどっちみちダメじゃねえか。さっきのバリアで防がれてオシマイだあ」

「そっかあ……」

フルハシの言葉に、がっくりと膝をつくソガ。

……そうだった。あのニセセブンは何故か知らないが、原作になかった能力を搭載している。

もしもあれがダブルオーの使っていたバリアなら、確かエメリウム光線すら防いだような……

セブンに対して使うマグネリウムエネルギーならいざ知らず、敵に対してつかうMH光線では……お手上げだ。

「待って下さい。なぜ二人とも……いや、ソガ隊員は、アレが敵に効く前提で話を進めているんです?」

「なぜって? そりゃあアレはロボット怪獣の特効兵器みたいなもんだし……あ」

「そうだ。もしもニセセブンがU-TOM兵器ならば、そのプランで間違いは無い。だが、同族を捕まえてきて洗脳していたり、クローン培養したのだったら? それに例え体はメカでも、脳などの中枢神経が有機体であるサイボーグだったなら、やはりアレは効かないぞ。別のプランが必要だ」

「で、でも……」

ソガは知っている。

ニセセブンが完全なロボットである事を。

だがそれは。

「なあソガ……教えてくれ。あの偽物は……ロボットで間違いないんだな？」

「……」

アマギがソガの肩にそつと手を置いた。

そして、彼の手も微かに震えているのを感じとったソガは……

「……その通りだ！ あれは……サロメ星人の作ったセブン型ロボットだっ!!」

決意と自信に満ちたソガの表情を、真正面から覗き込んだアマギは、穏やかに微笑んでから目を閉じる。

「ありがとう、ソガ隊員」

……そして、再び見開かれた彼の瞳には、普段通りに、深い叡智と理性の煌めきが宿っていた！

「ならば話は簡単だ。マグマライザーのコックピットはまだ生きている。……こんな事もあるうかと、制限を解除すれば、サブ権限で単純な操作を出来るようにプログラミングしておいた」

「……本当か!？」

「ああ、マックスシヨは未知の技術の寄せ集めだ。一つくらいは既知の技術を入れておかないとな」

「アマギイ!!」

「やめろ暑苦しい」

感極まって足に縋りつくソガを、心底鬱陶しそうに引きはがすアマギに向かって、今度はフルハシが疑問を呈す。

「でもよ、敵のバリアはどうやって破るんだ?」

「それについては問題ありません。一口にレーザーと言っても所詮は電磁波。特にMH光線は電波に近い性質を持ちます。電磁波の中でも電離が可能なものとそうでないものがある、MHサイクルは超低周波に属する、所謂ELFなので……」

「あー……つまり、どういうこったよ」

「加害能力が低く……えつと……ベクトル方向の勢いが弱いので、そもそも拡散されません」

「なにい!? 勢いが弱いから逆に通り返けられるだあ?」

「……こういうコトよ、フルハシ隊員」

するとアンヌが横合いから、フルハシの鍛え抜かれた腹筋に向かって思いつきりパン



チをかました。

突然の事にギョツとしたフルハシは、咄嗟に大きな掌で彼女の細腕をパシリと受け止める。

目を白黒させたままの彼に優しく微笑んだ彼女は、そつと慰めるように逞しい肩をゆつくりとさすり……

「……ね？」

「ん？ ……ああ！ そういうことかあ！」

途中で自身が握り込んだアンヌの小さな拳と、肩に置かれたままの左手を交互に見比べ、フルハシは大きく納得した。

「一番の問題はあそこへどうやって行くかですが……」

尻もちをついたままの姿勢で機能停止したマックスジョーの左手は、高々と掲げられたままになっており、地上からはとても登る事が出来ない。

しかし、背後でセブンと偽物の戦いを見守っていたキリヤマが、腰に手を当てこちらを振り向いた。

「安心しろ、私が連れて行ってやる」

「……隊長」

「決まったか？ ではこれよりマックスジョーを再起動し、セブンを援護する。フルハ

シ、ソガ、アマギはパラシユートを装備してβ号へ。アンヌはここに残って退艦してくる乗組員を救護するんだ。いいな！」

「了解！」

「……ん、パラシユート……？」

『デユワ!!』

『Dy w a a a a』

額から放たれたエメリウム光線が互いの威力を相殺し、両者の中心で激しく火花を散らす。

「ダンの奴め、やつぱり生きていたか！」

「でもご安心下さい。もはや彼にエネルギーはなく、動ける味方もいません。我らのセブンに勝てるはずがありませんわ」

「そうだな。このままスタミナ勝負に持ち込んで、削り倒してしまえ！」

『Dy w a a a a』

『ジュアーツ!』

戦士達が、同時に必殺武器を投げ放ち、敵の刃を弾き返す。

そのまま激しく空中戦を繰り広げるアイスラッガー。



ロープで互いを結んだ三人が、マグマライザーへ飛び降りるのを確認し、注意を逸らす為ニセセブンへの攻撃を開始するキリヤマ。

意を決して飛び出したソガはと言えば……

「う、うわ〜！ 助けてえ〜！」

見事にマグマライザーへ引つかかったロープの先で、ぶらんぶらん揺れつつ叫んでいた。

「まったくビービーうっせえなあ……言われなくとも今引き揚げてやるよ」

どっしり構えたフルハシが、半ベソの後輩達を引き揚げると、三人で力を合わせ、上開きになってしまったマグマライザーの重たいハッチを持ち上げる。

「どうだ？ アマギ？」

「……ああ、これなら制御系統を切り替えるだけだから直ぐだ」

「よっしゃ！ 後は任せたぞ、ソガ！」

「ええ！ 絶対に外したりするもんですか！」

斜めに傾いたシートに座り、意気揚々とスコープを覗くソガだが……

「あれ？ 動かないぞ？」

「どうした？」

「いえ、マックスジョーの腕が動かないんです……これじゃ照準が合わせられない！」

「そんなハズは……まさか!」

慌てて計器をチエックしたアマギが、頭を抱える。

「し、しまった……メインエンジンの出力が足りない……」

「なに、出力が?」

「ええ、胸の採光窓がひび割れてしまったから、十分な明るさを確保できなくなったんだ

! 光がないとペダニウムエンジンは動かない!」

「なんだとっ!?!」

予想外の事に驚愕するメンバー達の前で、二人のセブンが格闘戦を始める。

両者一步も引かないデスマッチが繰り広げられるなか……

『Dy w a a a』

まるでガッツポーズのように両腕を掲げたニセセブンの口から、白銀に輝く息が吐き

出された!

『デュワアーツ!』

「ま、まずい! 冷気だ! ヤロウ、セブン対策にあんなもんで積んでやがった!」

「そんな!」

太陽の子を蝕むダイヤモンドダスト!

サロメ星人がプロトタイプで真に研究していたのは、空気中から温度を取り出してし

まう技術！

！  
周囲の窒素から熱量を奪い、液化したソレを相手に吹き付けるセブン殺しの秘密兵器

！  
火炎放射はその研究過程で生まれた副産物にすぎなかったのだ！

「ハツハツハ！ お前はゼロセブンには絶対に勝てんと言っただろう！ ここがお前の墓場だ！ 死ね、ダン！」

「くっそおおお……！ 動け！ 動けよおおっ!!」

「やめろソガ、そんな事をしても……」

ガチャガチャと狂ったようにレバーを動かすソガをアマギが止めようとした時……

ガコン

「……えっ、動いた？」

「そんなまさか……」

半信半疑でチラリと横を確認したアマギは目を疑った。

出力を示す数値が、僅かに……ほんの僅かにだが、先ほどよりも上がっている。

なぜ？ 時間が経過してペダニウムエンジンに太陽エネルギーが集まったのか……

？ いやこの短時間でそんなはずは……

「どうなんだ？ 直ったのか？ 故障か？」

「い、いえ……確かに出力は上がりましたが、原因は……」

「そうか！ まだ直りきってねえんだな？ いやーし！ 任せろ！」

困惑しっぱなしのアマガギを置き去りにして、腕まくりしたフルハシが周囲の壁を手当たり次第に叩きまくった。

「ちよ、ちよつと！ 何をしてるんです？」

「機械なんてな！ 叩きやあ直るんだよ！ ウチのテレビもお袋がブツ叩いたら映りがよくなったもんさ！ ここか?! ここか?!」

「うおおおつ！ 動け！ 動けええ！ 今動かねえで、いつ動くんだよこのポンコツー!!」

「や、やめろ！ 二人とも！ そんなので動くわけないだろう！」

狂ったようにレバガチャするソガと、盛大に騒音を撒き散らすフルハシに囲まれ、アマガギは気の変になりそうだった。

ところが、そんな彼を嘲笑うかのように、出力ゲージがみるみる溜まっていくではないか！

「ば、馬鹿な……」

「うおおつ！ このままセブン一人に戦わせてられるかってんだよオーツ！」

「そうだ！ 俺達がアイツを助けてやらなきやあ、いつてえ誰がやるってんだ!」

「二人とも……」

その時、一心不乱の仲間達を見つめるアマギの脳裏に、ある一小節がよぎる。

——ダイテツカイを完成させるのには、人の熱い思いが必要なのです。

「……そうか、量子変換システム……」

損傷により、最大出力が低下してしまったペダニウムエンジンを補助するために、サブエンジンとして搭載されていた、眉唾物の機関名がアマギの口から思わず漏れる。

量子レベルの変換システムは、人の思いをエネルギーに変換することが可能だなどと、所詮は空想科学小説の中だけの話だと思っていたが……

——しかし、それは不可能ではない。科学を夢見たあの日のことを、忘れさえしなければ。

「そう……ですね」

「アマギ……？」

休憩中に読み進めていたら、今やすっかりファンになってしまった著作のテーマは、アマギの心にも確かに響いていた。

彼もまた、かつて科学を志した純粋な少年の一人だったのだから。

レバーを握るソガの手に、アマギの繊細な指が重ねられる。

「ソガ、科学は常に、正義のために在らねばならない……そうだな？」



「……ああ！ そうだ！ 決してあんな存在を許してはならない！」

「よし、フルハシ隊員！ こつちへ！」

「どうした!？」

「地球を救うには、我々とマックスジヨーが一つになるしかないのです！」

「お？ ……おう！」

フルハシの武骨な手が、レバーの上から添えられる。

「ソガ！ お前の熱い思いを、マックスジヨーに注ぎ込むんだ！」

——そうすれば、あの荒ぶる神を、正義の神に変える事が出来るでしょう。

——この美しい星を、素晴らしい友のいる星を、異星人に侵略させてはなりません。

「「うごけええええ!!」」

三つの心が一つになれば、一つの正義は……100万パワーだ!!

量子システムによって変換された勇氣と熱意によって、エンジンが再起動し、背部クレーンを支えに使ったマックスジヨーが上体を起こす!

「偉いぞ！ それでこそだあ！ マックスジヨーは男の子！」

「くそつ!! こつちを向きやがれ——！」

口のスリットから蹲るセブンに向かって冷気を吐きかけ続けるニセセブン。

電子頭脳があると思しき額を正確に狙わねなければ効果は無い。

「顔を向けさせればいいんだなっ！」

急降下したベータ号がセブンロボットにミサイルを浴びせかけ、わざとその顔面を掠めるように低く飛び、敵の注意を引いた！

一直線に飛ぶベータ号に狙いを定めたニセセブンの額から、エメリウム光線が銀の翼を貫く。

黒煙を上げながらフラフラと墜落していく小型戦闘機。

「ぐわっ！」

「隊長!？」

「私に構うな！ お前は自分の使命を全うしろ！」

「……………うおおお、くらええええ!!!!」

対空攻撃の為に、不用心に振り返った敵ロボットの額へ目掛け、マックスジョーの左腕から虹色のオーロラ光線が照射される！

気付いたニセセブンが咄嗟に頭を傾け避けようとするも、彼の首は火花を散らすばかりで、まるで寝違えたように動かない！

『Dy w a a a a』

当然、電磁フィールドを張ったゼロセブンだったが、壁に当たった光線はそこからプリズムのように乱反射して、彼の顔面を照らした！

頭を押さえ、身悶えるアンドロイドセブン！

「やったー！」

「効いてるぞ！」

「な、なんだあの攻撃は!? なぜフィールドが効かん!？」

「わ、分かりません……! そんなはずが……!」

しかし、苦痛に仰け反ったのが幸いしたのか、偽物の頭部はすぐにオーロラビームの射線から外れてしまった。

「ビームはあのペダン星人のロボットからだ！ 奴は今動けない！ 後ろへ回り込め！」

『Dy w a a a a』

素早く地面を転がった巨大アンドロイドは、座り込んだままのマックスジョーの背中へ、し字に組んだ腕から極太の太陽光線を発射しようとする。

『デユ!! ダアー!!』

「わああああ!!」

なんとか飛びついたセブンによってゼロワイドショットの直撃を免れたものの、掠っただけで凄まじい威力だ！

今度は組み付いた戦士に向けて、至近距離から冷氣攻撃！ なんとという戦闘力！ ア

ンドロイドゼロセブンは無敵なのか!?

『ぐわあ……』

『こ、このままじゃヤバイぞー!』

「みんな……ッ!」

「ま、待つんだ! アンヌ隊員! どこへ行く!」

ビデオシーバーから流れる悲鳴を聞いて、海兵達を手当てしていたアンヌが脱兎のごとく駆け出した。

走る……走る!

精銳として鍛え抜かれた健脚で、彼女が目指していたのは……

「……良かった……生きてる!」

アンヌは恐れる事無く、地に伏せる怪獣の目の前まで行き、僅かに呼吸する緑の臉に向かつて大声で叫んだ。

「アギラーっ! 起きて! アギラー!」

ざらざらとした表皮にぴったりと手をそえて、巨大な顎に祈りを捧げるアンヌ。

「お願い……みんながピンチなの。このままでは貴方のお友達も死んじゃうわ! お願いよ、起きてアギラ。今は貴方だけが頼りなのよ!」

『a……g r a?』

「……アギラー！ あのマックスジョーを、貴方の大きな体で支えるだけでいいの！ 小さい私にはできないけれど、貴方ならきつと……！ お願い、セブンを助けて……！」

『AAA……AGRAAAAAAAAAA!!』

ゆつくりとその身を起こした怪獣は、座り込んで動かない鉄人形へドタドタと走り寄ると、両脇に腕を通して一生懸命に助け起こそうとした。

しかし、どれだけ力を籠めてもビクともしないではないか。

エリマキを懸命に動かして、鼻息も荒く悪戦苦闘するアギラだが、非力さだけはどうしようもない。

マックスジョーは呆れるほどに重いのだ。

やはり彼では力不足だったか……

「アギラー！ 頑張つて！」

「負けるなアギラー！」

「おめえなら出来る！ ふんばれ！」

「やれえええ！ アギラー……!!」

『AGRAAAAAAAAAA!!』

その時、アギラが天に向かって力いっぱいに吠える。

……すると、彼の体が眩い光に包まれたかと思えば、みるみるうちにその身が変化し

ていくではないか。

体を支える鱗と骨が、まるで鋼鉄のように硬化して、一気に密度を増したかと思うと、全身の筋肉が蒸気を吹き出す程の熱量を帯びて膨れ上がり、彼の心臓はさながら原子炉の如く早鐘を打った！

『GRAAAAAAAAAA!!』

信じられない事に、徐々に持ち上がっていくマックスジョーの大質量……！

「よっしゃああ!! お前は最高の怪物だぜええ!!」

「いけえソガ！」

「ぶちかませーっ！」

「くらええええええ!!」

再び照射される虹色の輝きが、ニセセブンを包み込んだ！

『Dy w a a a a!!』

頭部を押さえつつ、地面をのたうち回るニセセブン

「いまだ！ セブン！ ワイドショットだ！」

『デュワ!!』

セブンは頷き、その両腕をL字に組んで……

『待て！ コイツがどうなってもいいのか!?!』

両者の眼前に、サロメ星人の水中翼船がふわりと浮かび上がった！

偽装宇宙船の下には、トラクタービームによって囚われたベータ号！

『ジュオ!』

「あつ！ 隊長……………」

「何をやっている！ 侵略者の策に乗るんじゃない！ 早く私ごと敵を撃て！」

『デエ……………ア……………』

「惜しかったなあ？ 地球人共め、ハッハッハッハ!!」

高笑いを響かせるサロメ星人達の後ろで、ニセセブンが立ち上がる。

咄嗟に攻撃を躊躇してしまったせいで、彼らはアンドロイドを倒す絶好のチャンスを

失ってしまったのだ。

「さあ！ 我らがセブンよ！ こいつらを焼き払ってしまえ！」

仁王立ちしたアンドロイドは、地に伏せる敵陣営を見下ろした。

地球人達のロボットを支える怪獣と……………そしてそれを背に庇う真つ赤な宇宙人……………

「どうした？ ゼロセブン？ 何をやっている……………」

偽物ロボットは、しばしの間……………自らと同じ姿をした愚かな異星人と視線を交わし

……………そして、彼が今まで守ってきた、この星の豊かな大地を見渡してから、静かに澄み

渡る大空を仰いだ。

「ゼロセブン！ 早くせんか！ 今こそウルトラセブンを超える時だ！」  
『J u w a !』

こくりと頷いたアンドロイドは……眼前の宇宙船を掴んだ。  
自らの造物主達の乗る船を。

そのままトラクタービーム発生装置をメリメリと力任せに剥ぎ取っていくではないか。

「キヤアアアー！ 気でも狂ったのゼロセブン！ 誰がお前を作ってやったと思ってるのです!？」

「な、何をする……！ は、はなせ！ 離さんかこの……不良品め!」

『D y w a ……』

『……デエワ』

『……D a a a a a a a !!』

そうしてから一度だけ、自身と同じ銀色を呈す男の顔をチラリと一瞥すると、そのまま沈みゆく太陽を追って、空の彼方へと飛んでいき……

やがて、上空に大輪の花が咲いた。

そのボデイの色の如き、真っ赤な紅蓮の花が。

「……な、何が起こったんだ……?」



「暴走してコントロール不能になったんでしょう」

「いや……多分……」

隣に立つ深紅の戦士の横顔を見たソガからは、その銀色に輝く表情が、どこか寂しげに見えて。

「奴らは完璧に再現しすぎたんだ……ウルトラセブンという存在を……」

地球を愛した平和の使者は、自らの兄弟が消えた西の空を、しばらくの間、ずっと見つめ続けていたのだった。

## お前はだあれ？（Ⅰ）

『キャー！ キャー！』

耳障りな甲高い叫びが、月明かりの下で、闇夜の中を躍り狂う。

『デューワー！』

背後から飛びかかってきたフック星人を、背負い投げで軽々と放り飛ばすセブンだが、間髪を入れずに別の個体が躍り出るため、追撃をする暇がない。

まるで新体操選手のような身軽さで、敵の周囲を散々に跳び回り、真紅のパワーファイターを翻弄していくフック星人。

洗練された、実に見事な連携だ。

それもそのはず、フック星は地表温度が高過ぎるために、殆どの生物は、地層内にくらした巨大な洞穴空間に棲息している。

光の届かぬ昏い生活の中で、彼らの目は次第に退化していき、代わりに聴覚が異常に発達した。

顔面の大部分を覆い尽くす程に肥大化した、反響板のような鼻葉組織から、特殊な超

音波を絶えず発し、パラボラアンテナもかくやと言うほど巨大な耳で、その音響反射を拾う事で、周囲の状況を察知する。

他種族には聞こえない超音波によるコミュニケーションは、もはや一種のテレパシーの領域に達していた。

互いに綿密な声かけをし合う事で、どれだけ機敏で複雑なアクロバットをしても、それが破綻する事は絶対ないのである。

これぞフック陸戦隊浸透作戦群の精鋭達が誇る、近接集団格闘術!

ウルトラセブンの用いる、恒点観測局の護身術をベースとした我流拳法は、タイマン勝負では無類の強さを発揮するが、多対一の状況には滅法弱い!

そもそも観測局では、そんな状況なら真っ先に逃走を推奨していたので、集団戦を真正面から打ち破る事は元より想定されていないのだ。

華麗な宙返りを見せつけながら、闇を切り裂き、しなやかに躍る影が三方から迫る!

『キャイ』『キャイ』『キュアアッ!』

『ジュオツ!?!』

『『『キエイイイー!』』』

握り拳を突き出して身構えるセブンの眼前で、三つの影が宙を舞う。

彼らはセブンに指一本触れようともせず、脅威的な跳躍力を発揮して、ただその頭

上を飛び越した。

一体どういうつもりなのか……？

『デユ……ア……』

その時、セブンが頭を抑え、苦しげに呻いた。

『キキイ！』

敵が片膝をついたのを見て取り、フック星人の一体が喜色を隠さず声を挙げる。

——そう、声だ！

彼らの武器は、アクロバットから繰り出される遠心力を乗せた打撃や、三位一体の連携術だけではない。

強力な超音波を駆使したエコーロケーション。

それは、反響定位だけに留まらず、武器にもなる。

音というのは即ち、振動であり衝撃波だ。

クジラやイルカは、仲間とのコミュニケーションに使う超音波を、至近距離で獲物にぶつけ、その脅威的な爆音の圧によって対象を気絶させてしまう。

フック星人もまた、互いの体が触れ合うか否かといったギリギリの距離から、セブンの頭部に目掛けて最大出力の超音波を叩き付け、彼の聴覚と脳に直接ダメージを与えていたのだ！

セブンの五感はそれこそ常人の何百倍。

人間ですら、敏感な者ではモスキート音などに不快感や頭痛を覚えるというのに、それを指向性を持って叩き付けられればどうなるか。

いわんやセブンの聴覚ならば。

「あつ! セブンが!」

フルハシの通報で駆け付けた2機のウルトラホーク。

マンモス団地をバックに、頭を抱えて苦しそうに蹲る真つ赤な巨人の姿に、3号の中でアンヌが叫ぶ。

「今助けるぞ!」

「待て!」

アマギが、セブンを援護する為にホーク3号を先行させる。

そこへピンポン球のようなフック円盤群が襲いかかった!

「うわっ!」

「きゃあ!」

球体円盤群のトラクタービームによって、空中に固定されるホーク3号。

「いかん!」

「隊長、人工太陽弾を!」

「なにつー！」

「奴らは夜行性だから強い光に弱いはずです！　それでカタがつきます！」

「よし、発射！」

円盤群の頭上で、極小の日輪がバツと煌めき咲き誇る。

たった一瞬の事だと言うのに、それだけで円盤群は蜂の巣を突いたような大騒ぎ。

操縦を誤り、僚機に激突して爆散する機体もあれば、パイロットが気絶したのか、そのままフラフラと眼下の団地型前線基地に墜ちていき炎上する円盤達。

高い練度で密集陣形を敷き、見事な弧状の突撃形態を描いていたのが仇となった。

忽ち大混乱に陥って、右往左往する隙を、警備隊が見逃すはずもない。

すっかりトラクタービームの照射も止んで、自由になった3号からミサイルが雨霰と降り注ぎ、辛うじて立て直した機体には、1号からの狙い澄ましたレーザーが突き刺さる。

人工太陽の輝きは一瞬であったが、炎に巻かれて次々と墜ちていく円盤達のおかげで、光源が絶える事は無い。

さながら、灯火に灼かれる胡蝶の如し。

「弱点が分かればこっちのものだ！」

「喰らいなさい！」

瞬く間に円盤を片付けたホーク3号が急降下。

蹲るセブンを取り囲む、巨大フック星人達の中心に目掛けて、人工太陽弾を解き放つた!

『『ギユアアアアッー!』』

彼らの目は、退化しているとは言え、完全に無くなった訳ではない。

むしろ僅かな明かりの中でも、洞窟が外と繋がっている方向は見えるように、顔面の表皮には光の強弱を受容するための桿体細胞が全方位に散在していた。

なんなら、人類がとつくに捨て去ったハズの紫外線すらも、彼らにとつては可視光だ。フック星人の戦闘服が透明なのは、彼らの世界に色が存在せず、互いの位置把握の為に、音や光を反射しやすい素材を選んだからに過ぎない。

そんな服が鏡のように、お互いの視覚器を……つまり顔を灼いた。

明順応すら許さぬ一瞬の輝きと、太陽が現出する際の凄まじい爆音によって、フック星人達の世界は、白一色に塗りつぶされてしまったのだ。

『アユワー!』

直ぐさま立ち上がったセブンは、腕をL字に組んで、太陽光線を三方へ同時発射した。彼らの戦闘服に、生半可なビームでは弾かれてしまうので、純粋な熱量が必要だったというのもあるが、彼も彼で、ぐわんぐわんと歪んだ視界の中で、他の小細工をする余

裕が無かったのである。

本当は極太の光線で3匹同時に薙ぎ払うつもりだったのだが、エネルギー残量がそれを許さなかった。

「よっしやああー！」

蒸発したフック星人を見下ろしながら、ホーク1号の中で、ソガがガッツポーズを決めた。

「よし、3号はそのまま帰投せよ。私たちは、撃ち漏らしがないか、念の為パトロールしてくる」

『了解！』

「とうわけだソガ、一廻りするぞ。少し付き合え」

「もちろん。お供します」

通信機を戻したキリヤマの事後承諾を、二つ返事で了承するソガ。

戦闘終了によって一気に緊張状態から解放され、酷い眠気がじんわりと迫ってきていたが、そんな事はおくびにも出さず、眼下の街を見下ろす振りをしながら、こつそりとアクビを噛み殺した。

本当は、今すぐにもベッドへダイブしたいくらいであるものの、念には念を入れるのが、彼の流儀だ。



キリヤマのこういった、侵略者に対する徹底的な態度に関して、非常に好ましく思っているの、彼としても否は無。

とはいえ、事が完全に『解決した』のを知っている身としては、確認作業へいまいち身が入らないのは、如何ともし難いが。

「……ところで、ソガ。我々が出会ってから、もう……どれくらいになる?」

「ふあはえ? ……失礼。そうですなえ……」

完全に気が緩みきつていたところへ、唐突に投げられた世間話に返事をしようとするば、開いた口から噛み殺したはずのあくびが暴発してしまい、慌ててシートに座り直し、居住まいを正すソガ。

横目でチラリと確認すれば、隊長は鼻先で苦笑しつつ、穏やかに前を向いたまま。

どうやらお目こぼしして頂けるらしい。

上司の寛大さに甘えつつ、ソガは指折り数えた。

確か、ダンが入隊して直ぐに、先輩の誕生日会にかこつけてレクリエーションをやったから……1年目はクール星人の物真似でお茶を濁して、2年目はええつと……

「そういうやもう2年……いや、そろそろ3年になるんですかねえ?」

「3年……そうか、3年か……」

「それがどうかなさいましたか? 隊長?」

「いや、随分と長いこと戦ってきたものだ、と思つてな」  
「そうですね……！」

操縦桿を握りながら、しみじみと呟くキリヤマに、しきりに頷いて同意を示すソガ。思えば遠くまで来たものだ。

「私などは、ダンを迎えて部隊が本格的に動き始めたのが、ついこの間の事のように感じる。3年どころか、実はあれからまだ1年も経っていないのではないか……とすら思うよ」

「忙しかったですもんねえ……時が経つのは早いと言いますが、あつという間でしたね」  
「ハハハ！ お前もまだまだ若いだろうに。その歳で言っていたら、私くらいになると、もつとだぞ。光の速さでも抜かすつもりか？」

「ウラシマ効果の逆バージョンみたいなものでしょうか……ふふつ」  
「ハハハ。相変わらずとぼけた奴だ」

謹厳実直で鳴らすキリヤマ隊長といえど、任務中の怠慢や重篤な命令違反でもなければ、そうそう目くじらを立てたりはしない。

むしろ旧友があれであるからして、例え階級下の部下相手であつたとしても、こういった軽口の応酬を好んでいるフシすらある。

勿論、ホークを飛ばしているのが彼本人であるというのも大きいだろう。

頭では別の事に思考を割きながらも、キリヤマの操る翼が奏でるエンジン音は、まるで自動操縦かと思う程に均一で、迷いが無かった。

操縦席に座っているのが逆であつたなら、もう少し集中しろと軽い叱責が飛んだかも知れない。

そんなキリヤマがふと、世間話の続きでも語るような、さも普段通りと言つた調子でその言葉を紡いだ。

「……そろそろ、良いのではないか?」

……と。

「ん? 何がです?」

問われたソガは、当然のようにその内容が分からず、きよとんとした表情のまま首を傾げる。

わざと惚けているのか、それとも本当に素で聞き返しているのか。

……きつと後者なのだろう。彼は元来、随分と察しの悪い性分なのだという事を、これまでで時間でキリヤマはもうすっかり把握してしまつていた。

「……3年。お前が言つた通りだとしても3年だ。確かに人の生の中に占める割合としては、まだまだかもしれん。だが、我々が共に同じ釜の飯を食い、轡を並べて戦つた期間としては充分に長く、単なる数字それ以上に濃密な時間だつたと……私は思う」

「……ええ、その通りですね」

「お前達は私にとつて、部下であると同時に……もはや無二の戦友だ。死地に赴くにあたつて、この背中を預けるに値する、かけがえのない仲間だと心から……信頼している」

「……貴方にそう言つて頂けるなんて……私には……身に余る光榮です」

尊敬する男からの告白に、ソガは一瞬、虚を突かれたように目を見開いたが……やがて瞑目し、ゆっくり顔を伏せた。

少しばかりの気恥ずかしさすら覚えながら、それでも、先の言葉を無言で噛み締める。

「……だが、果たしてお前にとつて私は……良き上官足り得ただろうか？ 勿論、お前達に相応しい指揮官たれと、常に自分を戒めてきた自覚はある。時にそれが行き過ぎた場面もあつたと……いや、それすらも私の一方的な自惚れに過ぎず、さらなる苦勞をかけていたのやもしれんな」

「そんなことはありません！ ウルトラ警備隊の隊長は……やはりキリヤマ隊長、貴方しかいない。私は貴方の下で戦えた事が、本当に……その……誇りなんです！」

「誇り……か。お前の口からそんな言葉が聞けるとは。嬉しい事を言つてくれるじゃないか」

キリヤマの口角がほんのりと上向いたように見えたが……それも錯覚だったのだろう。

「例えそれが、世辞であつとしてもな」

次の瞬間には、その口が真一文字に引き締められてしまつていたので。

「せじ……? まさか私がお世辞で言つているとお思いで!」

ソガの顔が驚愕の色で跳ね上がる。

「違うのか? お前は口が上手いからな。人の心をくすぐる事にかけては天下一品だ。

私であつても、気を抜けば足を掬われかねん」

「そんな! 違います! 私は本心から……」

「だったら」

憤慨するソガを、キリヤマはチラリと一瞥すると、彼の言葉を遮り、今まで心にわだかまっていた疑念をついに……投げかけた。

「……だったら、何故。その心の内を……我々に語つてはくれないのだ?」

その言葉尻に、僅かな寂しさすらも滲ませながら。

「……何の事でしょうか」

「ほう。まだシラを切る気か? 私は……ずつと待つていたのだぞ。だが、そちらから言う気が無いならば仕方あるまい、こちらから聞いてやろう」

キリヤマはそこで一度、深呼吸を挟み、胸にたつぷりと空気を溜めてから、その良く通る声でどこまでも穏やかに、しかしハッキリと告げた。

「お前は……誰だ？」

男は小さく息を呑んだ。

心の何処かでは、分かりきっていたであろうに、いざ本当にその言葉が上官の口から出て来る事は無いのではと。

彼はそれを聞いてこないのではと、淡い期待を寄せていたのかもしれない。

「少なくともソガで無い事は確かだろう。一体、どこから来た何者で……一体、何を知っている？」

「……」

問われたソガはと言えば、大きく目を見開き……しばらくしてから、人好きのする、あの柔らかな笑みを浮かべ、ひとときわ明るい声でしきりに頷いた。

「ははん、分かりましたよ、隊長。この間、私が危うく人間怪獣になりかけたのを気にしておられるんでしょう。その節はどうもご心配おかけしましたが、セブンにエメリウム光線で元に戻して貰ってからは、この通り！ 元気澆刺、後遺症の一つもありません。ご安心ください」

「見くびるなよ、ソガ。私は何も、貴様があの時、ヒポック星人の放射能で、中身まで手

先に変わってしまったままなのだとか、そういった簡単な事を言っているのではない。下手な誤魔化しはよせ」

「しかしですねえ……私が何者かと言われましても、先ほど隊長がお聞きになった通り、ずっと一緒に戦ってきた、ウルトラ警備隊のソガ隊員に違いありません」

彼がそう言い張る瞳には、いつそ清々しいほどに曇りが無く、なんの後ろめたさすら、感じ取る事は出来なかった。

なんと面の皮の厚いことか。

「それだ。そもそもお前は何時から……ガッツ星人の虜になった時? それとも、ペガ星人の洗脳? 違う。私が言っているのはな、ソガ。それよりもずっと前……そう、お前は最初から……」

「……最初から、なんだって言うんです?」

「……一つ確実に言えるのは、私が『これだ』と目をつけて、今後指揮する部隊に必要なだと思ひ、直々に呼びつけたソガという男はな。……自分が侵略者によつて怪獣にされかけていると分かった時に、自らを地下深くへ拘束してくれなどと、大人しく願い出てる殊勝なタマではない。……そうなる前に、自身のこの手で必ず黒幕の息の根を止めてくれると意気込んで、一人飛び出していくような……向こう見ずで、血気盛んな若者だったはずなのだ」

「……」

その言葉には、流石の彼も顔を顰め、ほんの僅かに視線が逸れた。

キリヤマは未だに前方だけを見て、部下の姿を見てはいなかったが、今まで絶対の自信を揺らがせようとしなかった男が、ここで初めてたじろいだのを、その気配から感じとった。

「私のよく知る……いや、覚えていた通りのソガは、例えるなら、撃ち出されたライフル弾のような男だった。ただひたすら真つ直ぐに、素早く敵を追いかけていく。だが、お前はまるで……機雷だ。ぶかぶかと波に揺られながらも、一所にじつと潜んで、敵が来るのを虎視眈々と待っている。相手が直前で踵を返すならそれでよし、だがひとたび領域に触れようものなら……その身に秘めた悪意すら全て爆発させて、いつそ恐ろしいまでに牙を剥き、決して相手を逃さない」

「……そう、ですか？」

「ああ、おかげで想定していたものと、隊の役割はそれぞれ少しばかり変わってしまった」

「……はは、なんというかその……申し訳ないです」

面と向かつてそこまで言われると、流石に気まずいのか、指で頬を搔くソガ。

「勘違いしてくれるな。別に責めているわけじゃない。防衛向きの性質だと言っている



んだ。……私が奴を見出した時にはダンが居なかったしな。本来ならばソガにやってもらいたかった役割は、彼が充分に果たしてくれている」

「……でもそういうのは、フルハシ先輩の十八番なんじゃ?」

「奴はあれで腰の重いところがあるからな。まずはお前が敵の機先を制した後に、じりじりと追い詰める役を任せるつもりだったんだ。丁度、戦車が地面を耕していくように。フルハシは一見派手好きに見えて、その実、仕事ぶりは地道で堅実だぞ。本人は嫌がるだろうが……お前も少しは見習え」

「あー……なるほど?」

「話が逸れたな……兎に角、どちらもスタンドプレーヤーとして優秀には違いないが、その有り様はまるで逆。これで別人では無いと主張されても困る」

「はあ、しかしですねえ……」

「私はな、ソガ」

キリヤマはそこで敢えて言葉を切った。

ソガは、今度こそ核心を突いた問いかけでもって、逃げ道を無くされるのではないかと身構えた。

いくら詰問されても、こればかりは明かすわけに行かない秘密だ。

なんと云つても、肉体は正真正銘ソガ隊員と地続きなのだから、キリヤマ隊長の疑心

は、科学的な視点でならば言い掛かりも甚だしいと言える。

魂だけ憑依しているなんて、そんなオカルトじみた話、真相を言い当てたのならば、こちらの方が荒唐無稽なのだから、のらりくらりと煙に巻き続ける事も不可能ではない。どう足掻いたって、隊長が100%の正解を口に出来ない以上、全てに対し「いや違います」と首を振るだけでよいのだ。

さながら、完全犯罪を成し遂げた犯人と、それに追い縋る探偵のようだった。

どれだけ推理を述べたところで、「証拠はあるのですか？」と返せば、探偵は立証できないと首を振るしかない。であれば犯人が自供しなければ良い。なんと簡単なのだろうか。

なんなら、別に何か悪い事をしている訳では無いので、一層の事、気が楽だ。

もう残すは最終回だけで、そのあとはどうなるか、ソガ本人にだって分からない。

そんな状態で、一体何を告白せよと言うのだろうか。

むしろ、ここで秘密をぶちまけてしまつて、最後の最後に彼の知識をアテにされる方が困るのだ。

彼は、これまでの戦いを通して、ある事実を薄々と気付きつつあったが……この前のニセセブンとの戦いで、もはや確信に至らざるを得なかつた事がある。

もう原作知識など、何の役にも立たないのだろうかと言う事に。

元々が、違う結末を求めて奔走してきたのだから、終盤へ行くにつれ、物語が彼の知っているレールを外れてしまうのは当たり前なのだ……

気付かないうちに、自分は随分と取りこぼしてきてしまってるんだろうな、と遅ればせながら悟ったのである。

サロメ星人の侵略には、明らかにダブルオーの技術が流用されていた。

だが、あのダブルオーというのは原作には未登場だったものの……チブル星人の口ぶりから、元々存在はしていたらしい。

ただゼロワンを早々に破壊してしまったから、倉庫で埃を被っていたのを引っ張り出してきたに過ぎない。

なのに、原作のサロメ回には影も形も登場しなかった。

それを不思議に思っていたのだが……ある晩、ふと気付いてしまったのである。

そういえば、チブル星人のアジトを見つけるのを忘れていたな……と。

わざわざ正体の分かっている老人を尾行する必要など無く、その分、玩具の解析に時間を回せると早々に帰還してしまったが……そのせいで、あのボロ屋は防衛軍に差し押さえられる事もなく、ずっとどこかに放置されていたのだろう。そこには設計図か、替えのパーツなんかもあったに違いない。

それに思い至った時、思わず乾いた笑いが出たのを覚えている。

よかれと思つて省いた行動にも、ちゃんと意味はあつたのだ。

だからソガとしても、残るゴース星人が、本来の侵略計画をそのまま使用してくるなんて、もうちつとも思つて居なかつた。

でも、彼の脳裏には、あの最終回がどうしてもチラついて離れない。どうあつても、思考が偏つてしまうのだ。

だからみんなには、もしも自分の知らない展開が押し寄せてきた時、何も知らない真つ新たな状態で、自分には思いつけないような逆転の秘策を考えて欲しい。

もう彼は、本気で地球を守る為に、どこまでもシラを切り通し、秘密を墓場まで持つて行く覚悟を決めていた。

だが、意気込むソガに対してキリヤマ隊長は……

肩透かしなくらい柔やかな、非常に親しげな響きでもつて、隣の男に問いかけた。

「お前が、ウルトラセブンなんじゃないかと思つている」

## お前はだあれ? (II)

「お前が、ウルトラセブンなんじゃないかと思っっている」

そして隊長は、どうだ当たりだろう? とでも言いたげに、ふふんと笑った。

「……は!? え? 私!? が……セブン?」

「もう言い逃れはできんぞ」

「いやいや、いやいやいやいや! 少なくともオレだけはあらへんでしよう! ホラ、私  
がセブンなら、さっきまであそこで戦ってたセブンは何? ……つて話になりますよ?  
なりますよね? だからセブンの正体は私ではありません! ……よ? ね、隊長?  
あれ、違う?」

「ふむ、そうか……そうなるな……ハハハ」

「いや、ハハハて……」

なにそれという感情? ……こわ。

ソガの困惑を余所に、ひとしきり笑ったキリヤマが、自らの表情を、再び真顔に引き戻す。

「……いいか？　この際だから教えておいてやるが」

ため息と共に、そう前置きしてから部下へ対し口を開いて曰く。

「そもそも我々にとつてのウルトラセブンとは、まったく未知の存在だ。……そんな中で、今の私の発言は、論理の飛躍に飛躍を重ねた、単なる妄言の類に過ぎない。だから、キサマが今、私に対して返すべきだったのは……『セブンが人間のはずがないでしょう！』という至極単純に、そして常識的な反応であつてだな……」

「……あつ」

「そこへあろうことか、『私ではありません』……などと。その返答には、様々な認識が前提として敷かれている事に、お前は気付いているのか？」

まるで出来の悪い教え子を、優しく諭すかのような調子で隣へ語りかけるキリヤマ。

そしてそれを指摘されたソガはと言えば、シートに深く身を沈め、額に手を当てながら天井を仰いでいた。

ウルトラセブンは普段、人間に化けているのかもしれない。……という推測までは、まだ分かる。

だがそれが、宇宙人を監視する組織である防衛軍の、あまつさえウルトラ警備隊の中に紛れ込んでいるなどと。

それもこれだけ長期間。

灯台下暗しにも程がある。

……勿論、ウルトラセブンという物語を……いや、ウルトラシリーズという作品群を知っている者になら、そんなことは語るまでもない『お約束』なのではあるが。

この世界の中では、あまりにも非常識甚だしい妄想といえよう。

逆に言うなら、『光の巨人が戦っている間は、その変身者が人間として同時に存在できない』という縛りも、彼らの登場プロセスを知っているものにしか、伝わらない言い訳なのだ。

……そして、それに対するソガの返答といったら!

勿論、言葉そのものは単に問いを否定しただけ。

だがその時の語調や表情には、やはりどうしても、それを発した者の感情がありあり

と乗ってくるもの。

つまり彼の言葉の裏には、声なき声——貴方も既に気付いているでしょうに——という、隠しきれぬ響きが、どうしても滲み出てきてしまっていた。

要は、単純なカマかけに引つかかって、あっさりと言語に落ちた、という事である。彼らの問答は、『部隊の誰かがウルトラセブんだ』という文脈ありきでしか、成り立たない代物だったのだから。

……間抜けにも程があるではないか。

シートに撃沈するソガの耳は、誰かさんの肌と遜色ない程度には、真つ赤であった。

「セブンの正体が、自分では無いと言う……では、他の誰なのだ……？ ええ？」

「そ、それは……もう勘弁してくださいよ、隊長」

「ふん、下手な誤魔化しが通用すると思った罰だ」

先ほど以上に言い淀むソガに対し、半ば呆れたような声でもって、苦笑する隊長。

「……実は最近、是非お前を副隊長に……と推挙する声があまりに多くてな」

「はえ？」



寝耳に水とは正にこのことだろう。

唐突に告げられたソガの口からは、思わず間の抜けた声が漏れてしまう。

「だが、この程度の腹芸も出来んようでは……やはり、まだまだだ。そうだろうか?」

「え、ええそうですね……私もそう思います……ハハハ」

——しばしの沈黙。

「……しかし、いずれ誰かに私の役目を引き継がねばならんのは確かだろうな。それがいつになるかは分からんが、その日が決まった時期に来るとも限るまい。……我々の職務はそういうものだ」

「……隊長……」

「その上で、もしも部隊の中に何か致命的な問題があったのならば、それを共有しておきたいと考える事は、別段不思議では無い……という事までは、理解してくれるな?」

「……はい」

「何も、お前の正体が知りたい訳では無い。だが、私が必ず知っておかねばならない事が

一つだけある！　もしも私の懸念が杞憂ならば良い。……しかし、私の予想通りなら……そこに本来、座っているべき男がどこかにいるはずなのだ」

「……ッ!?!」

それを聞き、目を見開くソガ。

ここまで言われてはじめて、隊長が真に知りたがっている事柄——なぜダンは野放しになっているのに、自分にはこうして話をもってきたのかという違和感も含めて——を理解したのだ。

嗚呼……本当に、自分の事ばかり考えていて嫌になる。

そうだ、全くそこに思いが至っていなかった。

自分だけは、それを絶対に忘れてはいけなかったのに。

「自らの意志なのか、はたまた何処かへ囚われているのか。ならば我々は、彼を救出せねばならないだろう。いや、それとも……もう、どこにも居ないのか。少なくとも、これほど長期間、姿をくらましているには、何か理由があるはずだ。私には……この部隊の長として、それを知っておく責任がある」

「それは……そう……ですね……」

彼は決して、ソガの正体を暴きたいのではない。

自身が監督するべきはずだった、もう一人の本<sup>本</sup>当<sup>当</sup>の部下<sup>ソガ</sup>の消息を、確認しておきたいだけ。

……何が原作知識は役に立たない、だ。

そんなことは彼らにとって、はなからどうでもよい事だったじゃないか。

思い上がりも甚だしい。

「……別に今更、何かが判明したところで、お前との関係が変わる訳でもあるまいに。

……それともやはり、我々は……」

操縦桿を握ったまま、僅かに男が目を伏せる。

「おれは……そんなに頼りないか」

「……」

なるほど、これは――

決して詰問や尋問の類ではなく……ただ単に、互いの信頼感に関する確認に過ぎない

のだなど、ようやくソガは……本当に遅ればせながら気付いた。

敬愛する上官が、いままで聞いたこともないような、酷く寂しげな声でそんな事を言うので、それを聞いた彼の胸は、ざわざわと波打って仕方ない。

貴方にそんな事を言わせるつもりは、なかったのに。

そして、そう気付いてしまったら、もう。

——ああ、だめだ。

これ以上、意固地な仮面を維持する事が、彼には不可能だった。

なにせ彼もまた、宇宙一のお人好しが好きで好きで堪らない、次元を越えた甘ったれなのだから。

「……………はははは」

それを自覚した時、張り詰めていた風船から、空気の抜けるような音と共に、笑い声とため息が漏れた。

隣の気配が何か変わった事を悟ったのか、キリヤマは再度、口を開く。

「……もう一度だけ聞くぞ、ソガ。私が部隊に呼んだ男と、お前はまったくの別人だ。ならば……」

今度こそ、部下の方を向き直り、そのさっぱりとした顔をじつと見つめて、こう聞いた。

「来たのは、誰だ?」

「……」

交叉する二つの視線。

ただ、ホークのエンジンが奏でる甲高い風切り音だけが二人の間を震わせる。

長い永い、けれどとても短いほんの一瞬が過ぎてから、男は両手を挙げて降参の意を示した。

「……ふうー……参りましたよ、隊長。やっぱり貴方は恐ろしい人だ」

「何を言うか。この頑固者」

「頑固……ですかねえ」

「ああ。ダンと似たり寄つたりだ」

「そりや光榮ですねえ」

ソガは、さつきまで気を張り詰めていた反動か、しばらくふにやふにや笑っていたが、やがて顎に手を当てると、何事かを考えはじめた。

「んでさつきの答えですがね……隊長。質問に質問で返す無礼をお許してください」

「……もういい、この際だ。多少の事は許してやる。何だ？」

「えつと……竹取物語つてご存知ですよね」

突然の問いかけに、キリヤマは返答するまで多少の時間を要した。

「……いきなりなんだ？　かぐや姫の話がどうした？」

「じゃあ、『イシモチノオオジ』……だったかな？　いや、クラナントカ……？　イソガ

ミノ……？」

「待て、まさか五人の貴公子か……？　恐らくだが、お前が言いたいのは庫持皇子くらもちのみこだぞ」

「おおっ! 流石です隊長! ソレです!」

キリヤマも、上級士官として、それなりの教養は身に付けている。

だからこの程度は答えられて当然ではあるが……突然まるで関係無い話を振った割に、引き合いに出した本人の方が知識があやふやなのは、いかがなものか。

「それですね。ご存知の通りこの竹取物語が、日本最古のSF小説でありながら、かつて地球を訪れた月星人とのファーストコンタクトについて公に記された、唯一の文書かつ有力な証拠である事は疑いようも無く明白なわけですが……」

「……………ん? 待て」

またぞろ変な事を言い出したぞ……と、キリヤマは眉を顰め、胡乱げな視線を投げた。それをのたまうソガの口調が、明らかに芝居がかっているため、あくまで『そういう設定の与太話ですよ』とでも言いたいのだろうが……

「これまた突飛な話を」

「いえいえ、突飛だなんて。そもそも月の貴人であるカグヤが、何故地球に来訪したのか

？ それは月文明で何らかの事変が巻き起こり、王族の血筋が万一にも害されないよう、ほとぼりが冷めるまで辺境に亡命させていたに違いありません！」

指を振つて、さも名案だとも言いたげに力説するソガ。

ともあれ隊長としても、彼の主張を受けて、まあそういう解釈があつても悪くはないかと、苦笑する。

「なるほど、『もと光る竹なむ、一筋ありける』というのは、山頂に不時着した緊急脱出艇が、おきな翁には輝く不思議な竹としか認識出来なかつたと」

「昔の人には『宇宙船』という概念がそもそもありませんからね。というより、タケノコと見間違えるくらいですから、凍結保存した受精卵を封入した、大気圏突入カプセルだったのかもしれない。コールドスリープが解除された後は、何らかの成長促進作用が働くように遺伝子制御されていたならば、三ヶ月で成人したというのも領けます」

「……お前が語ると、途端に筋が通っているようにも聞こえてくるから、面白いものだな」

「いえ、面白いのはここからですよ！ カグヤから、五人の貴公子に出されたお題。あれは別に、架空の無理難題をふっかけた訳では無く、実はカグヤが本当に欲していた物を、



藁にも縋る思い……もしくはダメ元で、探して貰ったんです……なにせ、あれらは壊れてしまった、宇宙船の重要なパーツなんですから!」

「ほう! 石の鉢がが?」

……と、少々小馬鹿にした風に混ぜ返せば、言い淀むでもなく、ソガはますますもって自慢気に胸を張り……

「ええ! そこがこの話のミソですよ! 御仏みほとけの石鉢いしぼちと言うのは、実は旧式の重力波工

ンジンの事なんです」

「なに? ……エンジンとききたか」

「でも、宇宙という概念すらない当時の人々に、『宇宙船のエンジンを探してくれ』なんて言っても伝わりっこ無い。だからカグヤは、ギリギリ伝わりそうな言い回しをする必要があったんですね!」

……ふむ。

と、知識人としてのキリヤマは、少しばかり納得してしまった。

別々の文化圏から文化圏へ、固有の何かが伝来した際に、中身がその面影だけを残し

て、現地の人々にとって別の身近なモノに置き換えられてしまう……という事態は、往々にして起こりがちであると知っているからだ。

……と同時に、月星人カグヤの涙ぐましい努力に思いを馳せて、同情してしまうが。

「少なくともその時の天竺には、かつてシャカ星人の乗ってきた、スペーススヴィマナ号のメインエンジンが一つだけ残されているはず……という事まではカグヤも分かっていたんですから、あとは一縷の望みを託した訳です。もちろん、偽物だつてすぐに見抜けますとも。どんなに頑張つても、単なる石鉢には、エンジンの火なんて灯りませんからね」

「ハハハ！ 馬鹿馬鹿しいが、なかなかどうして考えたじゃないか。蓬菜ほうらいの玉の枝は？」

ソガは、渾身の冗談が上官にウケた事へ、ホツと一安心した様子を見せると、我が意を得たりと頷き、続きを愉しげに話し出す。

「蓬菜の枝の絵としてカグヤが見せたのはね、立体集積回路から剥離してしまった、重要部分の配線図だったのです。こちらは素材がたまたま電導率重視の金と銀だったとは言え、よもや地球人の刀鍛冶達が、月文明の加工技術を再現できるレベルの職人芸を

もっているとは、カグヤも思っていなかったわけです。図面通りのパーツをお出しされて、彼女もさぞビックリしたでしょうね」

「……ははあ、だんだん分かってきたぞ。その分だとおおかた、火鼠ひねずみの皮衣かわしろもというのは、セラミック繊維の耐熱布なのだろう? 確かにそれさえあれば、シャツルの外壁や、宇宙服を捨てる事が出来るな」

「お見事! いやあ、隊長も鋭くなってきたではありませんか……ではなぜ、そんなに大事なパーツをカグヤは自ら探しにかなかつたのでしょうか?」

「翁達を放っておけなかつたのではないか?」

「それもあります……実はね、彼女は夜な夜な屋敷を抜け出すと、屋根の上をひらりひらりと飛び回っては、京に蔓延る妖怪変化達と、月明かりの下で死闘を繰り広げつつ、みやこ都都の平穩を守っていたんですよ!」

「なにっ!? やけに急展開だな? つまりカグヤは翁への恩を返すために、京の都を守る使命があるので離れられんと……」

「そうです。パーツが揃えば、彼女は宇宙船を再稼働させて、武装の補給が出来るのです。お察しの通り、この妖怪変化というのもね、地球を狙う侵略者共なんですよ。光学迷彩や光線銃を駆使する宇宙人なんて、当時の地球人にはあやかしの類でしかありませんし、対抗できるのもまた、同じく異星の技術を使うカグヤだけ、というわけです」

「なんだか昔話が、随分と身近な話題となつてしまつたな……」

「そりやあ防衛軍のいない地球の方が、今よりよっぽど手に入れ易かつたはずなのに、当時は全く宇宙人が来なかつたと考えるよりはよっぽど自然でしょう。今こうして、我々人類が我が物顔で暮らしてられるのも、カグヤが彼らの先遣隊を蹴散らしてくれたから……つてのは、どうです？」

「ハハハ。ならば彼女に感謝しなくてはな。……それなりに楽しめたぞ。退役したら、小説家でも目指してみるか？」

「いやいや、私なんてとてもとても……」

たわいも無い褒め言葉に、ひらひらと手を振り謙遜していたソガだが、やおら姿勢を正すと、再び真面目くさつた顔に戻り、またそのよく回る舌を動かし始める。

「さて、ここまでが『日本人なら誰でも知っている竹取物語』であります……隊長、貴方は私に感謝する事になるでしょう」

「ふっ……なぜだ？」

「このパトロールから帰つて、一眠りすると……翌朝、目を覚ましたのは宿舎のベッドではありません。見知らぬ天井は何故か木造で、畳の上に布団を敷いて……横を向けば寢所には御簾みすがかかつて……あら不思議。なんと明日、隊長は起きたらクラモチの皇

子になっていたんです」

「……は？」

キリヤマの喉から、一段低い声が漏れる。

「……ソガ。私はな……あれでも真面目に話をしていたんだぞ」

この男は、多少好きに喋らせておくくらいが丁度良いと思って、腹を決めるまでの時間が必要なのかと、待ってやっていたが。

いつたいい何時になったら本題に入るのか。

関係の無い与太話をうだうだと聞かされる方の身にもなって欲しい。

いい加減、我慢にも限界があるろうというものだ。

しかし……

「何をおっしゃいますか隊長。私は、これでも大真面目に話しておりますとも」

「なにつ」

睨んだ先の男が、これまたよく澄んだ……曇り一つない瞳で、こちらを真正面から見返してくるものだから、キリヤマは多少面食らった。

どう考えても、さつきまで喋っていた内容はくだらない馬鹿話なのに、次に彼の口から出た声が、今までにないほど、ひどく真剣味を帯びたものだったからだ。

「……貴方がたとは、腹の割り方というのが、少々違う自覚があります。でも、私にとつては大事な事なんです」

「むう」

「……だからもう少しばかり、オレのくだらない思考実験に付き合っただけませんか。その上でなら、何もかも、お話できましょう」

「……本当だな？」

「ええ」

「では……好きに話せ。幸い、時間はまだある」

ありがとうございます——と前置きして、彼は話しはじめた。

——さて、隊長は博識なので、クラモチの皇子がどう失敗したかもご存知でしょう。彼は職人に代金を払わなかったので、カグヤに見限られてしまいます。

ではどうすればいいか?

簡単です。素直にお金を払えば良い。

とはいえ、中身は隊長ですから別にカグヤと結婚したい訳でもなければ、求婚を取り下げてかまいません。

ただ、先程の話を踏まえて考えて頂くと……

え、カグヤに協力を申し出る……?!

ふふ、流星は隊長。貴方ならそう言うと思っていました。

でもカグヤだつて、いきなり地球人を信用したりはしませんから、「次はこういう形の枝を見つけてください」としか頼まれないでしょうね。

とはいえ、これまた驚いた事に、隊長はその図面に見覚えがあります。アンヌやアマギが相談していた治療ポッドの設計図にそっくりなんですよ。

うん？ カグヤは怪我をしているのかって？

まあ、日夜戦いに明け暮れてるわけですから、さもありなん。

ただでさえ、地球と月では環境も違うアウエーですから、単なる風邪でも、カグヤには未知の風土病みたいなもんです。

それで、他の皇子が持つてくるハズの龍の玉ですがね。なんと駿河の山の麓で、折よく竜が暴れてるといふ噂があるではありませんか。

手勢を引き連れ、向かった現地で聞き込みすれば、なんでもその竜は、湖の中に棲み、牛の頭を持つ白蛇で、雷を自在に操るといふんです。

これまたビックリ、龍というのはエレキングの幼体ではありませんか！

幸いにも成長が遅いのか、まだ身の丈七尺程度の大きさしかありませんが、当時の日本ではまあ……間違いなく化け物ですね。

「……………七尺……………約2メートルか……………」



「あれ? 意外と小さいですね? じゃあ奮発して5メートルにでもしておきましょうか」

「待て、私を殺す気か?」

「それでも隊長なら何とか出来るでしょう? 我々は既にその10倍の同種と戦った事があるんですから」

「……確かに人間の強さは知恵と経験だな……仕方ない」

ソガの煽てに乗った訳では無いが、キリヤマは例え些細な思考実験の類だとしても、化け物退治の専門家として、出された挑戦には応えてやらねばならん、という気概を見せた。

「ではまず、手勢の具足を松脂まつやにと牛の膠にかわでしっかりと塗り固める。そして竹槍の中段に濡れた手拭いを縛り、地面に着くまで垂らしてアースとした物を皆に配るとしよう」

「ほほう!」

キリヤマが即座に、古の日の本でもなんとか行えそうな対抗策を捻り出せば、きらきらと目を輝かせるソガ。

あまりにも純粹に期待の眼差しを向けられたものだから、尻が痒い。

しかしこの程度では、いかに幼体とはいえ、弓や刀であのエレキングを倒すにはまだ足りないだろう。

さらなる策が必要だ。

この調子で頭を回す。

「あとは……村々を巡って煙草のヤニを集めさせても良いかもしれない。エレキングの体には鱗が無かった。恐らく奴は皮膚呼吸であろうから、水溶性の毒性物質を桶一杯に引っかけて……やれ……ば……」

その時……がくん、と。

ホークの高度が下がり、機体が一瞬、ほんの一瞬だけ大きく揺れた。

もちろん、次の瞬間には元の軌道に戻り、振動は小刻みなものに変ったので、墜落してしまふ事は無い。

なんとも珍しい事に、誤って乱気流へ突っ込んでしまったため、気圧の段差で躓いてしまったようだ。

常に無く、非常につまらないミスをしたと言うにも関わらず、キリヤマは口を真一文字に引き結んで、じつと前ばかり見つめたまま動かない。

その瞳は、眼前に広がる眩い夜空を映しながらも、どこか別の場所を見ているような、ともすれば上の空とも取られかねない、奇妙な目だった。

彼の眉間には、いまや溪谷のように深い溝が刻まれ、その間を、一筋の汗が、たらりと静かに垂れていく。

そこへ、場違いに暢気な声が、やけに大きく響いた。

「なるほど! ニカワと煙草のヤニとは! 絶縁体で武器を作り、毒攻めをするという訳ですね!? 流石、隊長は戦上手だ! もしもその場にいたのがオレだったなら、ちよつと考えつかなかったでしょうなあ……やつぱ本職はすげえや」

頭の後ろで腕を組み、シートにもたれ込んだソガは、暫く何かを懐かしむように目を瞑っていたが、やがて耳鳴りのするような沈黙に耐えかねたのか、天井を見上げつつ、上官に尋ねた。

「………続きをお話ししても?」

「………好きにしろ」

許しが出たので、彼はまたポツリとポツリと言葉を紡ぎ始めた。

しかし、今度はどこかその声に、妙に実感のようなものが籠められているような気が、しないでも無かった。

「そんでまあ、こうして考えた策でもって、化け物退治に成功したクラモチは、それからどんどんと功名を立てていくでしょう。なんせ竜退治の英雄ですからね。他にもゴージャを火炙りにしたり、相撲好きのカツパ星人を軍隊式格闘術で制圧したり……」

「……」

「すると、朝廷の上司である帝みかどからも覚えめでたく重用していただけるでしょう」

「帝みかどときたか……」

「この帝がまた、人格者でね。実はカグヤが都を守ってるのを知ってて、影ながら手を貸してるんですわ。彼女が戦い易いよう、安倍晴明あべのせいめいに結界を張らせたり、時には伝家の宝刀を携えて、夜の戦場へ赴いたかと思えば、化け鴉カラスがカグヤの動きを封じた呪いの綱を断ち切って、そのピンチを助けた事もある」

「……ほう、徒人ただひとにしては八面六臂の大活躍だな。指導者として、是非私も見習いたいものだ」

「ええ本当に、すごい人なんですよ……」

少しばかり空気が柔らかなものに変わる……が。

「でも、あくまで帝は帝でしかない。カグヤが人ならざる者である事までは理解していても、彼に宇宙人だ、大気圏だ、等と言ったところで、仕方ないでしょう? だって平安時代ですよ? 別に帝が悪いわけじゃない。ただでさえ彼は、京を治めなくてはいいのに……そんな事はキャパオーバーじゃないですか」

「確かにそれは、無理もないな」

そしてソガは少しばかり自嘲気味に、やけつばちさすらも滲ませて、ふふふと笑った。

「だというのに、帝はこっちの気も知らないで『そちは誰ぞ』と問うて来るんです。まあ、当然ですよね……クラモチがいきなり頭角を現して、カグヤを手助けしようとするわけですから……彼からすれば、朝廷貴族としてそれが誰であろうと掌握しなければならぬ責任があるし、理解は出来る。でも……ねえ?」

「……」

「第一、カグヤが帰ってしまった後の事は、ページのどこにも書いてなくって、誰も知らないんですよ？ でも、ミカドやクラモチは、その後も生きていかねばならない。いきなり梯子を外されるようなもんです。それが何時になるかも覚えてないのに……」

「……だが」

「それに！」

一際大きな声で、遮るように。

「……それに、一番大事なのはね、隊長。……寝所に戻って、布団に潜って、目を閉じて……次に起きた時、そこが宿舎のベッドである可能性が、まったくゼロではないって事なんです。翌朝、ふと目を覚ましたクラモチの体から、さっきまでの意識がすつぽり抜け落ちてないって保障は、もうどこにもないんですよ……！」

「……ッ!?!」

今度は機体が揺れる事は無かった。

むしろ、そうならないようにキリヤマが、ガツチリと操縦桿を握り絞めていたからだ。それでも、汗でじつとりと濡れたレバーが、湿っぽい音を立てた事に気付いた彼は、万

一の事があっては拙いと、自動操縦のボタンをぐつと押し込み、胸の奥から長い息をゆっくりと吐き出す。

そのまま、部下に倣ってシートに深く身を沈めた彼は、旋回する機体から眼下に広がる街を見渡しつつ、そこへ明かりがぼつぼつと灯り始めるのをじつと眺めながら、無言で何事か考えを纏めているようだった。

「……申し訳ありません隊長。長々と無駄話をお聞かせした上で、最後にもう一つだけ、質問させて下さい」

「……まで来たら、今更だ。……何だ?」

振り向いたキリヤマに向かって、ソガは身を乗り出すようにして……それでもまだ何かを迷うように、しばらくコックピットの床を見つめていたが……

ついに腹をくくつたのか、そつとヘルメットを脱いで顔をあげた。

「教えて下さい隊長……クラモチは、帝に……なんと言ったら良かったんです……?」

「……………」

自動操縦の規則正しい飛行音と、二人の息遣いだけが聞こえる。

「そうだな……」

やがてキリヤマは、泣き笑いのような表情を浮かべた男の顔から視線を逸らし、白んでくる地平線を見やった。

——朝だ。

今日もまた、朝が来たのだ。

明日もきつと、来るのだろう。

いやもしかしたら……

それでも——

「——それでも」

「それでも?」

「それでも帝は、話して欲しかっただろう」



「……………」

背後で男が言葉に詰まるのを感じたキリヤマは、彼を責める意図は無いのだと知らしめるために、その続きを口にした。

「クラモチが何を思い、何を感じ…………何を怖いと思っているのか…………例えば、宇宙と言う言葉の意味が分からずとも、何かを恐れ、何かを愛する心は変わるまい。少なくとも彼は…………去ってしまった者を思って、泣く事が出来る男だ」

「…………では、なおさら言うわけにはいかないではありませんか。ただでさえ帝はカグヤを失って傷つく事になるのに、それでは追い打ちだ」

「果たしてそうかな? ……私はそうは思わん」

「え?」

キョトンとした顔の部下に、真顔で振り返ったキリヤマは、件のお伽話に対して、自身が最も納得いかない点を教えてやることにした。

「あの話で最も同情すべきはカグヤだと、私は思う。この話の作者はなぜそんな酷い事

を思い付くのだ、と」

「それはもちろん別れというの……」

「違う。彼女は……最後に『哀しい』という事すら忘れてしまうだろう？ 私……それが一番哀しい事だと考える」

覚えてさえいれば、哀しみ、愛しみ、懐かしむ事が出来る。

もしも月の世界が、物思いの無い世界なのだと言うのなら、それはなんと恐ろしい場所だと——

「……大丈夫ですよ、隊長」

見ればソガが、目に涙を少し潤ませながら、不敵な笑みを浮かべていた。

「天の羽衣に包まれて、カグヤの物思いが消えたというのは……緊急救命具を着せられて、コールドスリープに入ったからです。即座に眠ってしまったら、痛ましいとも愛おしいとも、思わないでしょうか？ 彼女の記憶や感情が消えてしまったわけじゃない……だから……」

「……そうか、ハハハ。なるほどな。……ハハハ！」

それを聞いて、キリヤマはすとん——とようやく腑に落ちた。

この男は……軍人にまるで似つかわしくないこの激情家は、ただ単に自分の見知った誰かが傷付くのが、心の底から我慢ならないだけの……どこにでもいる徒人たどびとなのだ。

例え物語が三文芝居になろうとも、解釈や設定をねじ曲げてでも、大団円にしないと気が済まないのだ！

なんと大それた男だろうか。

であるならば……

「分かった。クラモチは何も言う必要はない。下手な事を言ってしまったては、もとの平安貴族の、ケチな庫持くらもちの皇子みこに戻った時に、彼が困ってしまうからだな。……だろう？」

「え……ええ。そうです！」

「よし、では……これより帰投する！」

言うや否や、自動操縦を切り上げて、操縦桿を引き倒して急旋回。

「我々はパトロールの結果、何も異常を発見する事が出来なかった。私達は何も見なかったし、聞きもしなかった。そうだな？」

「は、はい……ありがとうございます！ し、しかし……良いのですか？」

「良いも何も、大いに実りがあつたとも。問題が存在しないという事を知れた。パトロールに、これ以上の朗報が存在するのか？」

「……いえ！ ありません！ ……そして……申し訳ありません！ 隊長！」

ペアと顔を輝かせ、敬礼するソガ。

そこで頭を下げてしまつては、台無しなのだが……

仕方あるまい、彼はそういう男なのだから。

「だが、あれだけ質問に答えたのだ。私からも最後に一つだけ、聞かせろ」

「……はい、なんでしょう……？」

そうして流し目をくれてやれば、途端に不安げな表情でビクビクと怯え出す部下。本当にココロココロと顔に出やすい奴だ……と思ひながら、キリヤマはそれを聞いた。

「……やはりカグヤは、帰らねばならないのか……？」

するとソガは……しばらくじっと何かを考えていたようだったが、やがてもう一度だけ、あの妙に真面目くさった顔に戻り、ゆっくりと頷いた。

「カグヤは地球の生き物ではありませんから、この星の環境下にいるだけでも体が蝕まれ、やがて消耗していきます。母星に帰って、不死の薬を飲まさねばならないでしょう」  
「そう……か……」

キャノピーに反射した朝日が、二人の渋面を照らす。

だがそれも一瞬の事。

重い空気を払拭するように、キリヤマがペダルを踏み込み、ブースターを焚いた。

「朝になったな……」

「朝が来ましたね……」

だから、この話はもう終わりにしよう。

そう言ったわけではないが、努めて明るい朗らかな声が、どちらともなく重なった。

「……ところで、お前の話は随分と新鮮で面白かったが、本にはしないのか」

「え、本……ですか？」

「もはや竹取物語とは別物だからな。出版するなら題名が必要だろうが……なんと付ける？」

「そうですねえ……」

顎に手を当て、考える事数秒間。

「『転生したはいいが、婚約のハードルが高すぎる！』……とか、どうでしょう？」

帰ってきたのは、盛大な溜息がひとつ。

「……前言撤回だ。キサマに作家は向いておらん」

「えっ!？」

「えっ……ではない。当たり前だろう。なんだその長つたらしい題名は！ 文章じゃないんだぞ！ 良いか、題名というのとは分かり易く、簡潔にだな……！ 本当にお前は。」

題名も長ければ話も長い! もう少し纏める努力をせんか!」

「え、ええ……」

「だいたいキサマは、書類の書き方からしてなつとらんだ! まず字が汚すぎる!

入隊時の署名と、昨日の日報を見比べてみる! まるで別人だぞ! そんな事だから私なんぞに見抜かれるのだツ!!」

「ええ……えつ?」

「パトロール結果の報告は、今日中に仕上げて私に提出しに來い! 初心を思い出すまで書き直しッ!」

「アアアアアアアアア……」

頭を抱えて苦悶の声をあげる部下の姿に、彼からは見えないようにキリヤマはこつそりと小さく、そして穏やかに微笑んだ。

朝日を浴びて輝く銀翼が、愉快そうに体を揺すりながら、武士ふしの山しへ向かって飛んでいく……

## 史上最大の序章

午前三時二十分。

ベッドの中で1人の男が苦悶の表情を浮かべながら、うなされていた。

寝汗でじつとりと濡れたシャツが肌に張り付き、より一層の不快感を煽る。

「ウツ……うう……っ！」

寝苦しさに堪えかねたのか、突然ガバリと身を起こし、荒い息を吐く男。

「ハア……ハア……」

霞む視界に目を細め、壁にかけられた時計盤をなんとか読み取る。

——もうパトロールの時間だ……

ベッドからのそりと這い出し、ブルーグレーの隊服に袖を通すと、途中で何度も意識を飛ばしかけながら、普段の倍以上の時間をかけて、ようやく支度を整えた。

念の為に、アンヌから貸し出された検温計を啜え、血圧計を巻くと……

「……………」

示された数値は脈拍100、血圧140、熱も38℃以下しかない！



——まだ充分に許容範囲だ。

満足げに頷いた男が、隈の目立つ幽鬼の如き顔で自室を出れば、普段は隊員達が忙しくなく行き交う廊下も、深夜帯故に人っ子ひとり居ない。

重たい足を引きずり、ウルトラホーク発着場までの暗く長い道を、ふらふらと寂しく歩を進める。

支度にずいぶんと手間取った事もあり、ボイラー室を通って近道を試みるも、配管を跨いだ際に思った以上に足が上がり、つんのめる男。

危うく転ぶところだったと言うのに、声を上げる事すら億劫なのか、短い溜息を吐き出して、すぐごと引き返していく。

——ああ、結局遅れてしまうじゃないか。

普段ならしないような愚かな判断ミス。自分は、いったいどうしてしまったのだらう。

半ば倒れ込むようにして、扉の開いたエレベーターに突入すると、壁にぐったりもたれかかり、手許も緑に見れないまま勘を頼りに階下のスイッチを押す。

かと思えば、次の瞬間には目的の階に着いていた。

ホークの格納庫は、この広大な極東地下基地の下も下、最下層にある。

故に、エレベーターと言えどそれなりに時間がかかるはずなのだが……

なんという事はない、僅かな間とは言え、彼は確かに立ったまま失神していたのだ。

明らかにパイロットとしての資格を欠いた状態であるにも関わらず、男は自らを省みる事無く歩きだす。

かつん……こつん。

背を丸め、目線が足元に向いたまま、手摺についた腕だけが体を前に引っ張っていく。そんな時だ、彼の進行方向から一人の若い隊員が、口笛でも吹きそうなくらいに軽やかな足取りで、タラップを駆け上がってきたのは。

「AMスリーゼロゼロ現在、大気圏外ポイント728方面パトロール完了。異常ナシ！」

「……交代しよう」

「うん」

狭い段差上で、すれ違いざまに交わされる短い引き継ぎ。

普段通りの、何気ないやり取り。

本来であればそれで終わるはずだったのに。

「……ソガ隊員！」

背後からかけられた声に振り向けば。

「どうしました？ 顔色が冴えないようですけれど」

手摺に体を預け、心配そうにこちらを覗き込むモロボシ・ダンが、そこにいた。

「どっか悪いんじゃないですか？」

「いや……」

気まずそうにソガが目を逸らすも、その声に覇気は無く。

「代わってあげましょうか？」

同僚を案じ、シフトの交代を提案するダン。

あまり褒められた行為ではないが、さりとして特段に強く禁止されている訳でも無い。

ウルトラ警備隊ともなれば、緊急時以外の勤務に関しては、隊員個人にある程度の裁量が認められている。

決められた業務に穴を開けるのはもっての外だが、逆に言えば、それが円滑に廻ってさえいれば、多少の事は大目に見よう。

当人の責任が及ぶ範囲であれば、さらなる任務の遂行に励むのは、むしろ推奨されるぐらいであるし、請け負って貰った側も、それでこれ幸いと遊び呆けるような愚か者はまさかないだろう……という信頼に基づいた、ある種の大らかさ。

もちろん、彼らの厳しい上官から直接見えない場所に限る、と言う但し書きは付くが……それを遵守している限りは、部下達の間でどのような取引があったのか気付きこそ

すれ、鬼の隊長も目を瞑ってくれるのである。

とは言え、普通はスケジュールに余裕のある者が申し出るような事であり、ダンは今し方パトロールから帰ってきたばかり。

これで今からソガの分も交代するとなれば、休憩も挟まずに連続飛行へ飛び立つ事を意味する。

余程、当人達の仲が良いか、さもなければ相当なお人好しかのどちらかでもなければ、自発的に提案できるものでもない。

当然、それに対する返答も決まっている。

ましてや……

「大丈夫だよ。元も子もないしな……」

「元も子も……?」

「気持ちだけ貰つとくよ。んじゃ」

怪訝そうに首を傾げるダンに踵を返し、ホークへ向かおうとする隊員に対し。

「ソガ隊員!」

「ん?」

階下で再び振り向いたソガに向けて、ダンが何かを優しく投げ渡した。

それを慌ててキャッチしてみれば。

「……飴玉？」

「チヨコレートじゃなくて、すみませんね。コレしか無くって。アンヌがくれたんですよ」

「いや……飴玉も好きさ」

紙に包まれた小さな気遣いに、垂れ下がっていたソガの口角が、僅かに微笑む。

「疲れた時は糖分補給！ ……でしたよね？」

「……よく覚えてるじゃないか」

「元氣出してくださいよ！」

二人はニヤリと笑って、まあいい甘さを口に放り込んだ。

「そう、元も子もないんだよ」

——こんなところで、ダンに頼る訳にはいかねえ。

——せっかく順調に来れたんだ。

ソガは、大気圏外を警戒飛行するホーク2号の中で、そう独りごちる。

ウルトラセブンの最終話において、ダンは今までの戦いで受けた負傷のせいで、全

てのエネルギーを使い果たし、エメリウム光線すら撃てない程に弱っていた。

その影響は、人間態時にも顕著に現れており、脈拍360、血圧400、熱が90℃近くある……という衝撃の独白から始まり、あの完璧超人モロボシ・ダンが、バスケットできない鉄棒も出来ない、オマケに居眠りで敵を見過ごした上に、弾は当たらないわ、撃墜されるわで、そりやもう酷い有様だったのだから。

勿論の事、人体からそんな数値が出たらもう、それは即死していなければおかしいレベルなので、彼はメデイカルセンタ―でアンヌの治療も受けられず、最終的に基地からも逃げ出さねばならない羽目に陥っていた……ような気がする。

「……元氣そうで良かった」

そのことを考えれば、先ほど挨拶を交わしたダンは、ニコニコと普段通りの好青年のままであり、原作と比べいかに体力を温存できているか、ようやく目に見える形で確認できたので、ソガは人心地つけたような気すらしていたくらいだ。

最近ずっとそれを気にしていた反動か、張り詰めていた緊張が解け、解放感で窓から見える周囲の星々がクルクルと回っているようにも感じられる程。

そう今、この宇宙空間全てが、彼のこれまでの貢献と尽力による功績を讃え、祝福しているのだ。そうに違いない。

「大きな星が点いたり消えたりしている……アハハ。大きい……彗星かな？ いや、違

うな。彗星はもつとバアツて動くもんな……」

その時、2号の緊急ランプが点灯し、通信が鳴り響く。

『こちらステーションV3、こちらステーションV3!』

スピーカーからは、ステーションV3の指揮官であるクラタ隊長の緊迫した声が聞こえてきた。

『ホーク2号応答せよ!』

『はいこちらホーク2号……』

『ポイント701方面に飛行物体発見! 現在マツハ1、3のスピードで移動中! 進行方向地球! こちらの呼びかけに応答ナシ! 直ちに追跡、撃墜せよ!』

「了解!」

——よし、ここでさっくり撃墜してやるぜ! 第48話、完!

意気揚々とホーク2号のイオンブースターで加速すれば、六角形と台形を組み合わせたような、いかにもなUFOを射程に捉えた。

ゴース星人の円盤だ。

いかに彼らの機体が高性能でも、宇宙空間においてならば、準亜光速すら引き出せる2号を振り切れる相手はそういない。

「くらえ！」

敵の姿をレティクルに捉えたソガが、レーザーの発射ボタンを押し込んで……  
攻撃を外した。

「……は？」

『ホーク2号、何をやってるんだ！ 目は開いているのか！ ボヤボヤするな！』

「は、はい！」

クラタから通信ごしに叱責され、レーザーを乱射するソガ。

しかし、撃つても撃つても当たらない。

ソガから見えるゴースト盤は、ゆらゆらと二重にブレたり、三機に増えたり……

なんとという事だ！ これがゴースト星人の恐るべきカモフラージュテクノロジーなの  
だろうか!?

「くそー！ 幻術か!? 卑怯者め……」

ソガはゴシゴシと目を何度も擦りながら、必死に攻撃を続けるも、レーザーはまるで  
命中せず、そうこうしているうちに大気圏内にまで侵入を許してしまう。

実を言うと、ホーク2号は例え地球の空であつても、最高速度がマツハ5と、3種類  
のウルトラホーク中最速を誇る超高速機体である。

しかし、それは純粋な速度だけ見た話であつて、ブースター頼りのロケット型で



ある事からも分かる通り、空戦における機動性……特に旋回性能については、他の二種と比べれば劣悪を通り越して、ほぼ皆無と言っても差し支えない。

宇宙という、垂直方向に常時かかる重力もなければ、空気力学も意味をなさない特殊空間では、高度なドッグファイトなど、そうそう起こり得る事ではなく、瞬きの如き超高速のヘッドオンが全てを決める。

それに特化して設計された2号では、大気圏内でも自由に三次元機動を行える円盤との相性は最悪だ。

狭い射角を嘲笑うかのように、ジグザグとした動きでアツという間に懐へ潜り込まれ——尤も、今のソガ相手には、そんな動きすら必要無かったかもしれないが——逆に円盤からのビームをモロに食らってしまった。

『バカもん！ 搭乗者は誰だ!? 名前を言え、名前を!』

「はい……私は……ソガ隊員です!」

『ソガ……? そんなはずはない! あの人がこんな無様な射撃をするもんか!』

『臆病ガンマンが弾の撃ち方も忘れては、ただの臆病ではないか! キサマそれでよくウルトラ警備隊の隊員が務まるな! 邪魔だ! どけどけ!』

進路上に、別の戦闘機が割り込んでくる。

V3からわざわざ飛んできた、ステーションホークだ。

『ケツに火がついてるぞ』

『ふん、不時着して昼寝でもするんですね。防衛軍のエリートさん』

『……』

胴体部分から激しく出火する僚機へ、親切にも警告してやるクラタ達。

しかし、応答がない。

『……聞いているのか!? 目の次は耳までイカレたか? おい、このツンボ!』

——誰かが遠くで何か喋ってる……

『隊長! ウルトラホークの軌道が安定しません! このコースでは地面に激突します

!』

『……気絶する前に安定装置も押せんとはな!』

——つるせえなあ……どのボタンか分からなかっただけやんけ……

微かに聞こえてくる擲楯が、自身に向けてのものである事だけはなんとか理解したが、もはやそれに言い返す気力すら起きず、黒煙の充満するコックピットで、一度だけ咳き込むソガ。

『……あばよ』

『ソガ隊員ツ!!』

——死んだわ、これ。

引き延ばされた時間のようになり、地面がゆっくりと迫るなか、うつすらとした視界の端で、まるで太陽のように暖かく真つ赤な掌が、ちらりと見えたような気がして。彼はそこで意識を手放した。

## 史上最大の疲弊

「……ハッ!？」

——ここは……?？」

「ソガ隊員! 起きちやダメよ」

優しい声に振り向けば、白衣を纏ったアンヌが、こちらへ駆け寄ってくる。

「運が良いのね、貴方って。ホーク2号が大爆発を起こしたのよ? セブンの来るのがもう少し遅かったら、助かって無かったかもね」

「セブン……?？」

そういえば、意識を失う瞬間に、窓からこちらを覗く巨人と目が合ったような……

「おいおい、嘘やろ……」

自分のせいで、彼に余計な変身を強いたのだという事実へ思い至り、堪らず奥歯を噛み締める。

そのままベッドから抜け出ようとすれば、ソガの肩をアンヌがそっと押しとどめ、口許に人差し指を添えつつ、まるで幼子をあやすように諭した。

「ダメダメ。少しは私の言う事も聞いて？ 貴方は酷く疲れているんだから……」

「平気だよ……そうだ、円盤は？ どうしたん？」

「クラタ隊長達が撃ち落としてくれたわ。もうカンカンだったのよ？ 『寝ぼけていたんじゃないか！』 って……救助されたのが本当にソガ隊員だつて聞いて、すごく驚いたわ」

「えらい買いかぶるやんけ……だつたら、その期待にくらいは応えなくっちゃな」

「いけないわ。体に自信のある人ほど、体の欠陥を知らないものよ。さ、静かにして」

表面上はアンヌの言葉に大人しく従ったソガであつたが、その内心は全く逆の事を考えていた。

——こんな事では駄目だ……最終回をハッピーエンドで終わらせる為には、俺がもつと頑張らなくては……

とは言え、少し身動きするだけで心配性なアンヌが飛んでくる以上、さしものソガと言えども、頭の中で今後のプランを考える以外に出来ることもなく、医務室のベッドで長めの休息を余儀なくされる。

なによりも、そんな風に決意を固めた本人自体、意気込みとは裏腹に、気付いた時にはすやすやと寝入っていたのだから、世話はない。

結局、厳しい監視の下、医務室で過ごした数日間の殆どを寝て過ごし、逆に静かすぎ

た為か、不安を感じたアンヌが何度も立ち上がったのは、静かに生死確認する程だった。こうして、不健康そのものと言えたソガの肉体は、白衣の天使の治療が効いた事もあつてか、ひとまず危険域を脱したようだ。

だが……

作戦室にて。

「頻々と飛来する宇宙からの飛行物体、そして怪電波、異常なデリンジャー現象、地球がこのところ不穏な空気に包まれていることは、諸君もよく知つての事と思う」

キリヤマ隊長が、集めた部下達の前で、直近の動向を改めて整理していた。

深刻な顔で頷く隊員達。

しかし、そんな中ただ一人だけ、虚ろな瞳で中空を見つめながら、ぼんやりと突っ立っているだけの者がいる。ソガだ。

辛うじて瞼は開いているものの、焦点が定まらず、もはや白眼を？きかけていると言つて良い。

隣のアマギが眉をしかめつつ、こつそり脇腹を突いて起こしてやるも、ハツとした次の瞬間には上体がフラフラとメトロノームのように揺れ始める始末。

その様子を、顔は前に向けたまま、視線だけで心配そうに見つめるダンとアンヌ。

「何者かが大規模な侵略計画を企てているに違いない！ レーダーによる監視を厳しくし、パトロールを強化して、インベーターを一歩たりとも地球に寄せつけないよう、いっそう防衛体制を固めてもらいたい！」

「「ハイ！」」……はい」

隊長が方針を発表すると、一拍遅れる返事が一つ。

「……ソガ！ キサマ、なんだそのザマは!? 聞いていたのかっ!!」

「は、はい隊長！ 確か……不審な宇宙船の侵入が相次いでいるから、パトロールをさらに強化して、史上最大の侵略を阻止しよう！ ……という流れでしたよね？」

「……なんだ、ちゃんと聞いているじゃないか」

上の空かと思われたソガの、しつかり要点は捉えた返答を聞き、叱責したままの険しい表情をやや緩め、怪訝そうに溜息をつくキリヤマ。

「ははん、どうせおめえさんの事だから、何か余所事ばかり考えてたんじゃねえのか？」

「おっ、流石ですな先輩。まさしくその通り！ これだけ長期間に渡って大規模侵入してきているにも関わらず、未だに尻尾が掴めへんとなると、地底か海底にでも前線基地を作って隠れてるんじゃないかと思つとつたところなんですよ！」

「それで眠れなくって、寝不足ってわけか。おめえの寝坊は今に始まった事じゃあねえ

がよ。そんな態度では後輩に示しが付かんぞ、示しが！ 三人を見ろ！ ピンシヤンしてるだろう？ 特にアマギなんかは徹夜で新兵器開発をだな……」

「まあまあフルハシ隊員、そのくらいで。サロメのセブンロボットからこつち、ヒポック星人やフック船団をはじめ、なにかと事件が続きましたから……」

「特にソガ隊員なんか、怪獣にされかけて、まだ数ヶ月しか経ってないのよ？ あともう少しで年明けだって言うのに、しつかり休めてないんだもの」

アマギとアンヌが助け船を出すと、思い出したようにダンが鼻を噉った。

「そういえばこのところ……寒い日が続きますねエー」

「おおかた、腹丸出してグースカ寝てたから、風邪でもひいたんだろう！ 全く、ウルトラ警備隊としての自覚をだなあ……」

「なんですつて!?! その点私は……フツ！ ホツ！ ハアツ！ この通り全然元気ですよっ！」

フルハシから吹きすさぶ猛烈な先輩風にもめげず、ハキハキと体操のように手足を動かしてキメ顔でガッツポーズをとるソガ。

「いいぞいいぞ！ やっぱりおめえは、そんなくらいトボけてねえとな。てつきり、またぞろ宇宙人に洗脳でもくらつちまったかと思つたぜ」

「……相変わらず失礼な人ですね……！ いや待てよ？先輩に先輩らしい事言われたの



は初めてかもしれん。さては、次期副隊長筆頭としての自覚が芽生えてきましたか？」

「バツキヤロウ、おめえの方がよっぽど失礼な奴だよ！ こいつうー！」

「へへへへ」

冗談めかしたフルハシに指先で額を小突かれ、ヘラヘラ笑い合うソガ。

なるほど、話してみればやはり普段通りの碎けたやり取りだ。

いくら狡猾な侵略者でも、手駒にここまで巫山戯た態度を取らせる奴はいるまい。

いつもの調子が戻ってひと安心と、内心で胸を撫で下ろす一同。

しかし、ダンヤアンヌからは、それがあまりにも空元気なように見えて仕方ないのだった……

朝にそんな一幕があった、その日の夜。

車庫からの帰り道、廊下でふらつくソガの姿がある。

ポインターでの巡回は、ホークでの定期パトロールと違い、決まったコースとタイムテーブルが設定されている訳では無い。

つまり、その日の範囲や所要時間も、担当隊員個々人の裁量に任されており、かなり

内容の融通が利く業務なので、気を回したキリヤマが、ソガをホークのシフトから一時的に外す為の方便として割り振ったのだ。

しかし、任されたソガ本人はそんなことなど露知らず、これ幸いと、一日中ポインターを乗り回して帰還したところだった。

彼からしたら、ゴース星人の地下基地が既に出来上がっている以上、さっさと爆薬を満載したマグマライザーを、原作通りに自動操縦で突っ込ませて仕舞いにしたかったからで、事実、それが出来ればこの事件は即座に終了していただろう。

……ところがなんとも困った事に、ソガは肝心なその場所が、いったいどの山だったのかをもうすっかり忘れてしまっていて、全く思い出せなくなっていたのである！

さもありません。彼もそれなりには番組のファンを自負していたものの、劇中台詞で数回言及されただけの地名や数値までしっかりと諳んじているような、筋金入りのマニアという訳でもなければ、むしろそういった詳細なデータにはあまり興味が無いタイプの人間であった。

そんなのは、ネットを探せばそこら中に転がっていて、気になった時は即座に知る事が出来たので、いちいち全部覚えておらずとも、今まで困った事が無かったというのもある。

……ところが、この世界にそんな便利なものはない。

こちらに転生してから、もう数年は経過している。であれば、原作を最後に見た記憶も、それ相応に古く臙気な物となつてしまい、近頃は話の流れを思い出す事すら、ひと苦勞だつた。

それだけでなくたつて、元より記憶力にはあまり自信が無い方で、あらゆる事が忘却の彼方へ消えた中、重要なキーワードだけは未だ忘れずにいられたのが、本人からしても不思議なくらいだというのに。

なので彼は、『極東基地近郊の』『大きく火口の開いた』『活火山』というヒントを頼りに、最近局所地震や発光現象等の異変が無いかを聞き込んで、範囲を絞つていくしか無かつた。

——尤も、熊ヶ岳という地名だけを覚えていたところで、彼の元いた世界とこちらでは、地理的条件が微妙に異なっている……という事実を見落としていたので、上手く行つたどうかは怪しいところだが——閑話休題。

とは言え、通路をゆらゆら歩くソガの表情が優れないのは、果たして調査が芳しくなかつたという理由だけなのか……？

ついに彼は、段差も無いのに躓いて、危うく転んでしまうとところだつた。

そうならなかつたのは、横から腕を支えてくれる人物がいたからだ。

「おつと!? ……サンキュー、悪いなアンヌ……」

「ソガ隊員、いけないわ。すぐ精密検査を受けましょうよ」

「精密検査……？」

「そうよ、体の内部を徹底的に調べてみる必要があるわ！」

「……そんなん意味あらへん」

小さく呟き、スタスタと歩き去ろうとするソガ。

……その実、本人が思うほど足早に出来ていないのが、ますますもって滑稽だ。

「どうしたのソガ隊員？ 何でもないことじゃないの。レントゲン写真と心電図をとるだけなんだから」

アンヌの言葉にも耳を貸さず、どんどん廊下の奥に進み……

「ねっ、私のお願ひも聞いてちょうだい。さっ……行きましょー！」

「そんな事言つたつて、検査の結果が良かったから、オレは退院できた。違うか？」

「そ、それはそうだけど……」

確かに本人の言うとおり、しばらくベッドで安静にしていたソガは、驚くほどの回復力で、みるみる数値が正常化していった。

彼が寝ている間にこっそり測った脈拍や血圧も、100を下回るくらいにすっかり落ちつき、熱も下がって35℃程度しかなかった。

他でもないアンヌが計測した数字であり、計器の故障かと何度も確認したが、彼は健

康体そのものだったのだ。

「でも、もつとよく調べれば……」

「なんべん見たって、おんなじや!」

尚も言い募るアンヌに、ついに声を荒げてしまうソガ。

……と、そこへ。

「二人とも、いったいどうしたんだい?」

「ダン!」

ホークでの哨戒任務から帰ってきたダンが仲裁に入る。

「聞いてよ、ソガ隊員が検査を嫌がって、話を全然聞いてくれないの!」

「嫌がってる訳じゃ無い! 問題も無いのに、そんなんしても意味が無いって言うてるだけやんけ! 自分の体の事は自分が一番分かるとる! ……ほつといてくれ!」

「待ってください! ソガ隊員……」

踵を返すソガの手首を、ダンが掴もうとした。その時。

「……ッ!」

伸ばした指が肌へ触れた途端に、掴まれた方では無く、掴んだ方の顔が驚愕に歪み、直ぐさま手を引つ込めてしまう。

丁度、熱したヤカンでも触ったかのような様子だった。

そうしてダンが捕まえ損ねてしまったせいで、背後で驚く仲間になど、全く気付かぬ様子のまま歩き去ってしまうソガ。

二人はその頼りない背中を、ただ見送るしかない。

やがて、怪訝そうに振り返ったアンヌは、想い人が掌をなんども握ったり開いたりしている事に気付いた。

「……さつきはどうしたの、ダン？ ……まさかソガ隊員、また熱がぶり返していたの!?」

「あ、ああいや……そうじゃないよ」

実際は、その真逆。

握ったソガの手首がとても冷たく感じられ、驚きとダン自身の事情も相まって、咄嗟に指を放してしまったのだ。

「……ソガ隊員が外帰りだったのを、すっかり忘れてたよ。彼の手があんまり冷たいもんだから……」

「手が……?」

アンヌが何気なく、彼の指を優しく包もうとすると、ほんの一瞬だけ、ダンの体がびくりと硬直したように見えた——今まではそんな事無かった——ので、不思議そうに首を傾げると、そのまま何度か掌でにぎにぎと揉み込む。

「わあ……アナタの手はこんな寒い日でも、おひさまみたいにぼかぼか温かいのね……」  
「……そうかい？　そういうキミこそ、暖かいよ」

「まあー」

頬を染めるアンヌの内心を余所に、ダンは一瞬の間、真剣な表情で彼女の掌を引き寄せ、それを両手の指でなんどもさする。

——そうだ、これが人間の……人肌のぬくもりだ。

アンヌの指から伝わる柔らかな温度が、ダンの不安に塗れた心を癒していく。

ただ単純に、彼女の体温が特別高いという事ではない。こうしていると、アンヌ自身が持つ、迸るような生命力から齎された魂のきらめき、ある種の波動のようなものが、掌を通して感じられるのである。

彼女を常に突き動かしている強い信念とバイタリテイの余波は、いつも朝の日差しのように清らかで、それでいて夏空の如く元気に満ち満ちていた。

それがあまりにも心地よくって、ダンには気が付くと、自分でも知らないうちに、ついアンヌの傍へ寄り添ってしまうのだ。

そしてそれは、彼女だけに限った話ではなく、部隊のみんなにも言える事。ウルトラ警備隊は心身共に強靱な精鋭中の精鋭なので、その身から発散されるパワーも人一倍に鮮やかで、強い。

それでいて、皆それぞれに違った鼓動でメロディーを奏でるものだから、彼らが作戦室で集まっていると、本当に眩しくて——美しかった。

時には、目の前で小さな銀河が生まれる瞬間を目撃しているかのような感動すら覚える……みんなと触れ合う度に、その光のあたたかさを受け取っては、自分もその宇宙の一部になったような気がして。

あの光景……ダンは、そんな彼らを見るのが、本当に好きで好きで堪らないのだ！

隊長は、打ち寄せる荒波の如き険しさと、玄武岩にも劣らぬ揺るぎない頼もしさの中に、石英のように煌めく平和への思いが隠されている。

どつしりと、広大な大地のように構えたフルハシは、そこにごろりと寝転がってみれば、新芽の生い茂る、豊かでふかふかとした森の中にいるようで。

アマギの瞳は、湖畔を思わせる静かさを湛え、秋のように深いけれど、その奥底にはいつも、鮮烈なまでに情熱の色が煌々と輝いていた。

そして、ソガ隊員は——

だが、先ほど掴んだ手首には、物質的な温度だけではない、どこかゾツとするような、不気味な冷たさを感じたのだ。

そう、まるで。

「……人形と握手したみたいだった……」



「えっ?」

アンヌに聞き返され、ハツと我に返ったダンは、慌てて頭を振って、無意識のうちに口から溢れた呟きを掻き消した。恐ろしい考えを、頭の中から追い出してしまおうように。

……よりによつて、大好きな親友に対し、なんと不吉な想像をしてしまったのか。ダンは自分がそんな事をちらとでも感じた、それ自体に嫌悪感を覚え、恥じ入るように目を閉じた。

そして、友の消えた方向を見つめながら、嘘偽りない本心を口にする。

「心配だなあ……」

「そうね……注意力低下、抑うつ、イライラ感にめまい……明らかに睡眠不足の症状だわ。でも、そんな筈は無いの!」

「どうして? 今朝もソガ隊員が自分で言っていたし……」

「あの人ったら、この数日間、ほとんどずっと眠り続けていたのよ!? 身動きひとつしないで! 泥のように眠るっていうのは、まさにああいう事を言うんだわ……死人と過ごしてるんじゃないかと思つたくらいよ。それでも寝足りないって言うの?」

「……っ!?!」

アンヌの何気なく口にした評価が、自身の感想とかなり近い形で出て来た事に、ダ

ンは背筋の凍る思いがした。

ならばこそ、無理やり笑顔を作り、穏やかな声に微かな震えすら混じらぬよう注意を払うと、努めて明るく振る舞うダン。

「寝過ぎて逆に疲れたんじゃないかな。ほら、検査の数値は良かったんだろう？」

こうして半ば、自分に言い聞かせる為だけの台詞を吐く。

……そうでもしないと、彼がどこかへ行つてしまふような予感がして。

「そうなの。だから余計に分からないのよ……アタシもこんなのは初めてだわ。確かに睡眠も体力を使うけれど……逆に、なにか恐ろしい病気が隠れてるんじゃないかって……」

ダンはもう一度、友を掴み損ねた自身の掌へ視線をおとす。

アンの熱に、じんわりと包まれた指先ではしかし、髓まで切り裂くような冷たさが、芯の方で未だに強く残っていた。

## 史上最大の忠告

「なんにせよ、本当にソガ隊員が不調なら、周りが助けてあげれば良いのさ。全員で少しずつ、彼の仕事を分担すれば、わけないよ。そうすれば、ソガ隊員も安心して休めるはずだからね」

「そうね、例えばアナタがしているように？」

「……バレたか」

そう言って、照れ臭そうに頭を掻くダン。何を隠そう、彼が終えてきたパトロールは、元々ソガの担当区間だったのだから。

「でも、僕だけじゃない。フルハシ隊員やアマギ隊員だって、口では言わないだけで、そのつもりのようだよ」

「ええ、それを言うなら隊長だってそう。立場上は厳しくしないといけないだけで、キチンと伝えれば分かってくれるはずよ。ソガ隊員も変な意地を張ってないで、ハッキリ言

えばいいのに」

「……そうだね」

とはいえ、新たな敵の姿が見え隠れする今、一人だけ休暇を取ってゆっくりするなど、彼の性格上できつこないだろう……という事も分かつてしまう。

確かに非番のソガ隊員は、誰かが声をかけない限り、昼過ぎになるまで部屋から出て来ないくらい『眠る』という行為が好きだ。なによりも。

しかし、それはあくまで地球が平和な時に限る……というのは、もはや但し書きすら必要ないくらいに、皆の中で共通認識だった。

『やつがああしてグースカ寝てるうちは、俺達もこうして暇してられるってわけだあ。……そうだ、昼飯中に緊急招集で呼び出されちゃかなわねえ。これからひとつ風呂浴びる前に、ソガをベッドへ縛り付けにいこうぜ！』とは、いつだったか道着を担いだフルハシ隊員の談。

どうせ鍵を開けて貰わないと、こっそり入れやしないのに。この人もまったく素直じゃないんだから。

あの時は、フルハシが何度も力任せにノックをし過ぎたせいで、寝起きのソガ隊員に、凄惨な剣幕で怒鳴られて非情に怖かった。

——結局、三人でいつものカレーを食べてる最中も、ずっとぶつくさ言っていたっけ。

電子錠が壊れるから、次からは静かに入って来いと教えて貰ったパスワードが、なんとスリーセブンのゾロ目だったのには、いくらものぐさでも無用心過ぎやしないかと呆れたものだが。

……今の彼がなぜ、あんなにも苦しそうなのに、それを黙っているのか。その理由の一端が手に取るように分かるからこそ、それを打ち明けて貰えない事が、酷く寂しい事のような気がする。

だが、分かるからこそ、何も言えなくなってしまうのかもしれない……きつと自分なら、そうして欲しいと思うだろうから。

そうするには充分すぎる時間を、彼らは共に過ごしてきたのだ。

——だから、今度の事件が解決するまで、ソガ隊員は本当の意味で休む事が出来ないんだ。医務室でいくら寝ても足りないだけさ。そうだ、きつとそうに違いない。

「いけない、アナタも寝なくちゃ！ 引き留めちゃってゴメンナサイね、疲れてるでしょうに」

「いや、いいさ。キミと話せて良かったよ。ソガ隊員の事、もつとちゃんと見ておかないといけないって、分かったからね。アンヌも頼めるかい？」

「もつちろん！ 第一、みんなの健康管理は、元からアタシの役目なんだから！」

ドンと、自身の豊かな胸を叩くアンヌ。

ダンはその艶やかな髪を、無意識のうちに撫でようとしていた事に気付き、慌てて動きを止めた。

——いけない、気を付けなくては。

自制を籠めて、上げかけた手は、代わりに目の前のドアノブへ置き直し、扉を開く。何を隠そう、ここは自室の目の前だったのである。

「それじゃあね。ダン、おやすみなさい」

「……ああ、おやすみ。アンヌ」

無邪気に手を振るアンヌへ、ドアの隙間からニツコリと笑いかけてから、ダンは私室へと引つ込んだ。

……そして。

電気の消えた暗い室内へ、ゆっくりと向き直った時。

彼の顔からは表情がゴツソリと削げ落ち、貼り付けていた柔和な笑みは、影も形も見あたらなかった。

ちらりとフクロウ型の壁掛け時計を見れば、もう23時。

アンヌの言うとおり、明日の早朝に備え就寝しなくてはならない。

そのまま二、三足を進め、ベッドへうつ伏せのままぱったりと倒れこむが、しばらくしてからもぞもぞと腕だけを動かして、枕元の計器類を引つ掴む。

ごろりと仰向けになって、それらで数値を測り、薄らとあけた瞼の隙間から、結果だけを読み取った。

脈拍200、血圧300、熱が60℃近くある……

「…………よし」

——まだ許容範囲だな。

気を緩めた瞬間、ダンの頬や額、いや全身の肌という肌から、玉のような汗がとめどなく溢れてきた。

彼はただ、仲間達に心配をかけないように、念力で自らの体調を無理矢理コントロールして、元気な風を装おっていただけだ。

なによりも、うっかり本来の体温のまま歩き回って、アンヌに腕でも掴まれようものならば、彼女に火傷を負わせてしまいかねない。あの、ビロードのような美しく柔らかな肌に。

それだけは、断じてあってはならない事だから。

……しかし、今はこうして抑え込んでいるが、このままさらに悪化していけば、それも段々と難しくなってくるだろう……

宇宙では時々、このような言説を耳にする事がある。

曰く『光の国の住人は、嘘がつけない』『隠し事が下手』

これは、『彼ら』という存在を知る者達の間で、まことしやかに囁かれ、根強い支持を



受けているものだ。

しかも驚くべき事に、その支持者というのが彼らに対して友好的だろうが、敵対的であろうが、そこにスタンスの差による偏りは全く無く、それどころか『彼ら』自身の中にも、それを自覚している者すらいる程である。

……しかし、実際はどうか。

とんだ見当違いも、いいところではないか！

彼らは嘘がつけないのではない。

ただ単に、人を騙して喜ぶという感性が著しく欠如しているだけに過ぎないのだ！

だからこそ、彼らにとって大切な誰かを守る時や、他者を傷付けない為にさえあれば、彼らはその多才さを遺憾なく発揮して、とことんまで迫真の嘘を貫き通す！

でなければ、これだけ長い間、ずっと正体を隠して地球人の中で生活し続けるなど、出来るものか。

むしろ『彼ら』は自らの中に、詐欺師としてはいかに天賦の才が隠されているという事へ、全くもって無自覚に過ぎるといふべきなのだろう。

彼らはどこまでも純粋で、優しく、強い……だからこそ、それが時として、いかに残酷な仕打ちであるのかという点に気付く事が出来ない……いやむしろ、そう思う自らの心すらも、完全に欺く事ができるのかもしれない。

だが、そんな優しきペテン師すらも、ついに周囲を騙し通すのが難しくなる程に、体調が悪化し始めていたのである。

——この異常な症状が、もしかや……

彼には直接の原因がハッキリと分からなかったが、自身の体で進行している現象そのものについては、薄らと見当がついていた。

……彼の肉体を構成する光の粒子が、あるべき姿に戻ろうとしているのだ。

M78星雲人は、宇宙で度々見られる精神体だけの種族とは違い、はつきりとした独自の肉体を有し、それを行使することで生活している。

だが同時に、そんな彼らの正体は突き詰めれば『光』そのものとも言えるべきエネルギーの塊でもあるのだ。

それを、ディファレーターの光を浴びる以前の記憶や、各々の認識に即して用意した仮初めの肉体……単なる強靱な容れ物の中へ、本体たる光の輝きを押し込める事でい

ゆる受肉をし、この宇宙に存在している種族。

それが彼らだった。

したがって彼らの肉体は、本来は超高速で移動し続ける筈の光をその場に『留める』という不条理によって、凄まじいエネルギーを生み出し、その余剰でもって各種光線や超能力を駆使する事が出来る。その熱量は小型の恒星にすら匹敵する程だ。

だからこそ、かつてこの地球を訪れた哀れな星<sup>ギエロン</sup>の化身<sup>星歌</sup>が、常に凍え、体表面から固まり続けていたように、ウルトラセブンもまた、そこに在るといっただけで、浸透圧よろしく、大気中へ際限なくエネルギーを垂れ流し続けてしまう。

これが、その星の一般的な生物……つまり人間の姿を偽装する事が出来れば、外界との情報量格差を最低限度まで抑える事ができるといっわけだ。

勿論、彼らの本体は『光』であるので、人間に憑依してしまえば、これを簡単にクリアできる。

だが、本来ひとつの命が持つべき時間を、二人で共有するだけでなく、余りにも長期間その状態を保つと、やがて完全に同化してしまう為に、本星の倫理的には決して推奨されず、あくまで目の前に消えゆく輝きがあった時のみ、それを延命する手段としての、緊急避難的な措置でしか許されていない。

もしも、あの時の薩摩次郎が半死半生であったなら、そのような選択があったやもし

れぬが……そうなる前にセブンが救った為、彼は気絶程度ですんだ。

だからセブンは、自身の体に有り余るエメリウム粒子——生命体の肉体構成を司る粒子だ——を用いて、彼の生体情報だけを再現し、地球上で暮らす一人の人間、モロボシ・ダンとなったのである！

だが、それでも完全に消費をゼロと出来るわけでもなく、ましてや、エメリウム粒子の精製能力が落ち、念力も弱まった今、人間態を保つ事すら並大抵ではない。

果たして元の姿と仮の姿、どちらでいる方の消耗がマシかというチキンレースになりつつある。

今はまだ、辛うじて人間態でいる方が楽だろう。だが、もう少しすれば……それを保つ労力の方が、ずっと上回るはず。

だが、例えそうだったとしても、ダンはこの姿でいる事を望んだだろう。

なぜなら地球人の姿には、消費エネルギーを抑えるという利点が無くなっても、もはや替えの効かないもうひとつの意味があるからだ。

モロボシ・ダンとして……ひとりの地球人として、彼らの仲間であり続けるという意味が！

だから、例えどのような犠牲を払ったとしても、この姿を捨てるという選択肢は……ない。

そうか、もしかして……

「貴方も……そうなのですか……？」

ベッドの上で、うわごとのように呟いた。

そんな時だ。気を失うように眠っていた彼の枕元に、何者かの気配がする。

『340号！』

突如として響いた呼びかけに、スイッチの入ったアンドロイドの如き無機質さで唖る上げるダン。

その開ききった瞳孔の中には……真紅の肉体に白銀の面、星々の輝きを宿したような鋭い眼光を持つ、彼のもう一つの姿が、そっくりそのまま写っていた。

『……いや、地球での呼び名にしたがって、ウルトラセブンと呼ぼう。君の体は過去の侵略者たちとの激しい闘いによって、多くのダメージを受けた……』

セブンの脳裏を、これまでの記憶が走馬灯のように駆け巡る。

ブラコ粘菌の栄養体達が駆る遊走船団に包囲されたり、シャドウマン達の親玉を追いかけに行った時、逆に囚われの身となり、危うく連れ去られそうになった自分を、間一髪で助けてくれたみんな。

超弩級の排水量を誇る三式アイアンズロックとの、刻一刻を争うチェインデスマッチに駆け付けてくれたマックス号。馬力と砲火の飛び交う一大海戦。

悪魔の如きアロンの襲来で、基地の存亡をかけた血みどろの死闘を、文字通り背中を預けて戦い、散っていったパイロット達や陸戦隊。

そしてなによりも、ペダン星人の神戸事変！

あれこそまさに、セブンと人類の共闘が勝ちとった尊い勝利だ。  
全てが昨日の事のように思い出される。

どれもこれも、血で血を洗うような激闘だったが、それで深く傷付いてしまっても、セブンは何一つ後悔などしていなかった。むしろ誇らしいとさえも！

『これ以上、地球にとどまることは非常に危険だ。ウルトラセブン、M78星雲に帰る時が来たのだ!』

その通り、これ以上地球に留まれば、やがて人間態の保持どころか、ウルトラセブンとしての姿さえも、保てなくなる時がくるだろう。

「しかし、この美しい星を狙う侵略者たちは、あとを絶たない、僕が帰ったら地球はどうなるんだ……?」

シャドー革命軍の浸透戦術や、キル族のスパイナー掠奪も、マゼラン星雲からの惑星弾道弾だって、セブンがいなければどうなっていたか。

まだまだ人類の力は、この広大な宇宙の中において非常にちっぽけだ。ウルトラ警備隊がいかに知恵と勇氣に優れているとしても、それを容易にひっくり返してしまうような科学や歴史がごまんとある。

『セブン、今は自分のことを考えるべきだ……地球にとどまることは、死を意味する……』

彼の肉体は、『光』だ。辛うじてヒトの姿へと押し込められているに過ぎないそれが、エメリウムの楔から解き放たれてしまえばどうなるか。

彼らは光であるが故に、厳密には『死ぬ』事は無い。

だが、宇宙という漆黒の海原へ散り散りになつてしまった粒子を、再びひとつひとつ掬い上げて、塊に戻すのは非常に困難でもある。

確かに彼らは、厳密に言えば滅びる事はない。しかし一度、個としてのカタチを保てなくなり、宇宙の闇と同化したならば、それは一般的な生命体の感覚に照らし合わせて考えて、『死』と同義であると思倣されるのではないか。

ワイルド星人に魂を盗まれた時や、ガッツ星人の自我崩壊因子で処刑されかけた時、もしも、頼もしき彼らが救い出してくれていなければ……ダンは今、ここでこうして苦しむ時間すら与えられていなかっただろう。

そのことを、片時も忘れた事はない。

「……元の体には戻れないのか？」

傷付き、エメリウム粒子の精製能力が落ちたから、これ以上は肉体を保てないという



のなら、その傷さえ癒えれば、またあの頃のように全力で戦えるという事である。

度重なる激闘の中で技術を磨き、幾多の技と戦士としての覚悟を備えた今、肉体までも再び全盛期へと戻ったならば、今度こそセブンは誰にも負けないだろう。それこそ、アンドロイドゼロセブンあのもう一人の兄弟にだって！

『それには、M78星雲に帰る必要がある。君の体は人間とは違うのだ！』

セブンとて自らの傷が、決して生易しいものでは無い事くらい分かっている。エメリウム粒子の精製器官は、人間の脳や心臓のように繊細だ。

勿論、人類の医学書にそのような臓器に記述などありはせず、例えどれだけアンヌやキタムラ医師が優秀なドクターであろうとも、まったく未知の患部を診る事など出来ず、このまま彼女らの治療を受けたところで、体が良くなる事は無い。

しかも、本星においてだって非常に困難な治療を成功させねばならず、出来るとすれば、銀十字軍の優れた医師である叔母のように、一握りの人材だけだろう……とも。

だが！

「今は帰れない……地球に恐ろしいことが起こりそうなんだ！ ……それに、ソガ隊員

だつて……このまま、放つておくわけにはいかん！」

——今度の戦いは、これまでのどれよりも、辛く激しいものとなるに違いない。

セブンの超能力は弱つていたが、それでも彼の第六感……否、鍛え上げた戦士としての勘が、そう囁いていた。

それに、今更セブンは自分が死んでしまうことなどは、とつくに計算外だった。

命というならば、そんなものはガッツ星人やポール星人から挑戦を受けたあの時に失つてしまつていたはずのモノで、彼らがいなければ、今こうしている事すら出来なかったのだから。

確かに、これまでセブンは何度となく彼らの命を救つてきた。

しかしそれと同時に彼らもまた、紛うこと無く命の恩人なのだ！

そんな人類が、先住民との不幸な歴史を乗り越え、新たな一步を踏み出そうとしていく。

血を吐きながら続ける悲しいマラソンなどではなく、宇宙の何処かに咲く、一輪の美しい平和の華を探す旅の、偉大なる一步を！

それを誰かに邪魔など……させるものか。

決して、この命に替えてだつて！

——地球防衛軍は仲間を見捨てない——

その言葉はもはやセブンにとって、どうしても逃れられぬ呪縛ですらあった。

だが同時に、決して捨て去れぬ美しい絆の証であり、何物にも代え難い絶対の誇りなのだ！

『……ひとつだけ忠告する。闘つてこれ以上エネルギーを消耗してはならん！ M78 星雲に帰ることができなくなってしまう』

それに対しセブンは、ベッド上の肉体を一切身動きさせぬまま、内心でゆつくりと首を振った。

自らの覚悟を宣言し、心へ刻み込むように。

——なにより彼が……僕の大切な友人が、必死に耐えて頑張っているのに、僕だけがひとり音を上げて帰るなんてことは……そんなこと、許されない!!

『……変身してはいかん!』

その拒絶を聞いた時、ダンの瞳の中の生き写しが、初めて激昂したように声を荒げ、強く厳しい口調で命令した。

と同時に、伸ばした真っ赤な指で空を切り、ダンの胸と、部屋の壁を一直線に切り結ぶ。

すると、ポケットのウルトラアイが、弾かれたように飛び出した。

「ハッ!？」

そこで夢から覚め、思わず飛び起きるダン。

そして少しばかり冷静になって、額に浮いた大量の汗を拭う。

——今のはいったい……まさか……? いやそんな筈は無い。

もしや、恒点観測員340号としての無意識が、主人格へ警告する為に見せた幻なの

だろうか……？

不安を解消するためか、抛り所である筈のデバイスを求め、指が勝手に胸ポケットを探る。

……しかし。

「あつ……！」

——ない！ ……ウルトラアイが無い！

慌てて辺りを見渡したダンは、部屋の一点に視線を固定すると、やおら立ち上がった、非常に怪訝な足取りでそちらへ近付いていく。

そこには、フクロウを模した壁掛け時計に、しっかりとウルトラアイが装着されていた。

レンズデバイスの向こう側で、秒針代わりの振り子に合わせ、フクロウの瞳がアツチコツチ、アツチコツチ……

恐る恐るウルトラアイを外すダン。

その頭に響くのは先ほどの言葉。

変身してはいかん……

変身しては……

## 史上最大の侵犯

その夜、ダンには作戦室で当直任務に就いていた。

しかしヘッドセットをつけたまま、こくりこくりと船を漕いでいる……

「緊急事態発生、緊急事態発生！」

突如、作戦室に緊急通信が鳴り響く！

ステーションV3からの警告だ！

「ポイント580方面に、飛行船状の物体をキャッチ。地球に向って移動中！ ただちに攻撃態勢に移れ！」

だが飛び起きたダンは、激しい耳鳴りと眩暈でそれどころではない。

居眠りで念力によるホメオスタシスの統制が緩み、半ばウルトラセブンに戻りかけていた所へ、急に人間態としての意識を取り戻してしまったのだ。

常人の数百倍近い五感を、人間の脳で処理しようなど堪ったものではない。

ヘッドセットから聞こえるクラタの声も、耳元でマシンガンを連射されたようなものだ。

「……………態…生…緊急……………発……………」

あまりの耳鳴りに、つついヘッドセットを放り出してしまうダン。

彼の肉体はとつくに限界で、壊れてしまう寸前だった。

パニックに陥り、自らの頭を拳で何度も叩く。

そうせねば、脳髓の内側から爆発するような頭痛に、耐えられそうになかったのだ。

朦朧とする意識の中、理性が遅れて追いついてきたのか、ゆらゆらと顔を上げるダン。

すると、基地のリーダーも敵機を捉えている事に気付く。

ハッと覚醒し、手当たり次第に基地機能を非常レベルに引き揚げつつ、あわてて緊急

招集をかけた。

即座に作戦室に集まる隊員たち。

「どうした?」

「はっ、未確認飛行物体が地球に侵入しました……………」

「なにっ! ウルトラホーク出動スタンバイ!」

「はい!」

「……………おい、ソガはどうしたっ!」

「えっ?」

見渡せばひとり足りないではないか。



「あんにやろう……こんな時まで！」

眉を吊り上げたフルハシが作戦室から呼びつけに行こうと自動ドアに突進しかけて……

「おつとおつ！」

開いた扉の向こう側にいたソガと、ぶつかると寸前で立ち止まった。

「てめえ！ なにしてたんだ！」

「いやすみませんね、ちよいと準備をしていたもので」

「準備だあ？」

まったく悪びれもせず、自らの胸元をポンと叩いてにこにこしているソガに、フルハシはすっかり毒気を抜かれてしまう。

「さ、なにしてるんです。はやく行きましょう！」

「おめえ、大丈夫なのかよ」

「大丈夫……？ ああ、少々道は遠いですが、ホークに乗れば、マツハ7でひとつ飛びですよ！」

「……やっぱり寝ぼけてるんじゃないか？」

不安げなフルハシをよそに、出動用意のベルが鳴る。

ホーク1号と3号に分乗した警備隊は、成層圏を飛行する敵の姿を捉えた。

「いたぞ、あそこに!」

「相対速度にして、およそ目標2000キロ!」

メンバー達はまず、計器に示される彼我の距離と、実際に対象の出しているスピードが、目視した時におおよそ感じたそれと、かなり激しくズレている事に驚く。

そして、お互いますます近づいていくにつれ、その理由がなんなのか、嫌でも理解せざるを得なかった。

「大きい……これじゃ飛行船どころか、まるで宇宙空母だ!」

「中に怪獣でも入ってんじゃないっすかね!」

「だったら尚更、ここで撃墜しないと!」

「よし、撃て!」

キリヤマの号令により、ホーク両機からありったけのロケット弾が叩きこまれる。

だが、敵は驚くべき堅牢さを誇り、その正面装甲などは、被弾経始がほとんど得られないはずの真正面から直撃を喰らったにも関わらず、文字通り弾き返してしまいう程に分厚かった。

さすがに背面へはあまり被弾したくないのか、後ろをとられまいと多少は軌道を変えながら、その背面にしても、ブースターらしき穴は見受けられない。

四方を完全に装甲で覆い尽くして、反重力飛行だけで飛んでいる。なんとも鈍重なつくりだが、それ故に手出しのしようが無いのだ。

ホーク二機からの連携攻撃をもものともしないで、悠々と飛び続ける巨大宇宙船。

数多の侵略者をことごとく撃墜してきたウルトラ警備隊に、ここまでの余裕を見せつけられるとなれば、それだけで相手の科学力がいかに強大かが、おのずと分かうとうものだ。

ウルトラホークが円盤との純粋な空中戦で遅れをとった相手は、未だにクール星人とガッツ星人のみであるし、しかもその両者ともが、逆にホークの撃墜まで可能としてしまふような、隔絶した実力を誇っていた。

……となれば、搭載している武装もさぞかし強力だろう……と隊員達は警戒するのだが、敵からの反撃らしい反撃が全くない。

「変だなあ……隊長、中には誰も乗ってないんじゃないですか？ 誰かいたら反撃してくるはずですよ」

「油断するな。チャンスをうかがっているのかもしれない……」

「もしくは本当にソガが言うとおり、怪獣を降ろすつもりなのでしょうか」

「分からん……が、このままでは埒があかん」

その後もありつただけの攻撃をお見舞いしてはみたものの、撃墜どころか煙のひとつも

上げない驚異の耐久性を發揮して、まんまと荒地に着陸する敵宇宙船。

ついに残弾数に陰りが見えはじめ、キリヤマは僚機であるホーク3号に陸戦の用意を伝えた。

「ソガ、アマギ。着陸して地上から攻撃だ！」

「了解！」

こうなれば、至近距離から弱点を精密爆破するか、さもなければ移乗しての白兵戦で制圧するしかない。どんな重装甲の兵器でも、乗り込みハッチだけは造りが薄いと相場が決まっているもの。

いかに外側が堅牢であろうとも、乗組員まで不死身とは限らない。装甲化されているにも関わらず攻撃用の武装を搭載していない、つまりこれが揚陸艇や輸送船の類であるなら、むしろその中身こそが重要であるという、なによりの証だ。

「総員、弾薬カセット装着！」

隊長の一声で、皆がウルトラガンの銃口に、サイレンサーのような物体を装着する。だがそのアタッチメントはその実、見た目とはまるで正反対の性能を秘めているのだ。

これこそが今回、ホークの砲爆撃にも耐えうる程の装甲を持つ敵兵器に対し、本来ならばより火力的に劣る筈の、歩兵による肉薄攻撃をわざわざ敢行しようという判断の根拠なのだから。

まずもって彼らの装備するウルトラガンは、アマギ渾身の設計により、拳銃サイズでありながら、レーザー由来の非常識な射程と威力を隊員達へ与えている。

しかし最近、このウルトラガンですら威力不足を痛感せざるを得ない事態が度々起り、問題となっていた。

中でも特に顕著なのは、巨大生物や機動兵器に対するストツピングパワーの無さである。

そもそもウルトラ警備隊の発足理由は、星間戦争の激化にあり、仮想敵も宇宙人、つまり対円盤や対人戦を主眼に置いた装備が開発されていた。

たまたまウルトラガンが優秀過ぎた為に、巨大存在との地上戦にも遜色ない働きが出来ただけで、本来はあくまでも対人兵器でしかなく、現に等身大の敵と戦う際は、まだまだその強さを遺憾なく発揮し続けているものの、対象の大きさが数十倍となるにつれ、その加害能力も数十分の一へと低下していくのは自明の理。

だが、このレーザーと言うのが曲者で、直進性と弾着の速さからくる命中率の高さは魅力的なのだが、どうしても物理的な衝撃力に乏しい。

となると、特別外皮が厚かったり、感覚の鈍い一部の怪獣や、そもそも痛覚の無いU—TOM兵器などは、明確な弱点に当てない限りは、平気の平左で侵攻し続けてしまうのだ。

であるなら出力を上げようとすれば、発振器を大型化するか、特殊な細工をするしかなく、歩兵が携行可能で取り回しの良い大きさからは、どんどんかけ離れていってしまう……怪物を怯ませようと思えば、それこそウルトラホークに機載されているサイズが必要となるわけで。

そこで原点に立ち返り、実弾兵装に活路を見出したのがこのカセットシユートである。

元よりウルトラガンには、アタツチメントバーナーやSMJ弾、麻酔弾などの付け替えによる拡張性がある事に目をつけ、数発打ち切り式のアタツチメント式実体擲弾筒を後付けする事で、歩兵の瞬間火力向上を図るというコンセプト。

いわゆるライフルグレネードの超火力版というべき本武装の完成は、やはりスパイナードやスペリウムといった、少量で激しい爆発力が得られる高性能火薬の開発によるところが大きい。

もしも今後、拳銃サイズの光線銃が再び対獣兵装として採用される事があるとするれば、それはレーザー側にスパイナードのようなブレークスルーを得られた時だろう。それくらい、現状出来る最大限の対応策だった。

とはいえ、このカセットシユートにも欠点はある。

ひとつは実弾兵器の宿命とも言える残弾管理による継戦能力の制限。

そしてもう一つは……有効射程距離の短さ。

ただでさえ怪獣に効くような威力、つまり重量のあるグレネードを、それがより効力を発揮しやすい弱点……胸や顔まで飛ばさねばならないのだから、おのずと射点は目標のすぐ近くに限定されてしまう。

……ようするに、満足の威力と命中率を得る為には、暴れ狂う怪獣の足元へ、それこそ一歩間違えばそのまま踏み潰されかねない距離まで突撃せよという、命懸けの作戦を前提とした非常に危険な武器なのである！

とはいえ、その点に関しても、今回に限って言うなれば全くもって問題はない。

なぜならば……

「みんな、準備はいいな？」

「ハッ！」

「ではこれより、敵宇宙船へ接近、これを制圧する！」

「了解！」

かけ声ひとつでホークの機外へ、サツと飛び出す隊員達は、腕に自慢の猛者ばかりだからだ!!

「ゆくぞっ！」

「ゆくぞーっ！」

隊員たちは起伏に紛れ、宇宙船を半包围しつつ接近していく……。

そんな中、ソガとアマギは、窪地の向こう側にチラリと何者かが身を隠すのを目にした。

「よし、見てくる」

「いや、待ちな……」

アマギが近付こうとするのを制し、ニヤリと笑いつつ、ピンと立てた人さし指を振るソガ。

「チツチツチ……落ち着きなよ、アマギセンセ」

彼はまず、仲間のウルトラガンに装着されたライフルグレネードを指さし、外すように指示して——流星にこの距離でそれを撃ち込めば、諸共吹き飛んでしまう——から、そのまま指をポーチへと突っ込み、何かのカプセルを取り出すと……

「そうれ！」

ソガが低性能爆薬を投げ込んだ先で、小さな爆発音と悲鳴が断続的に響いたかと思うと、紫の髪を振り乱した宇宙人が、慌てふためいた様子で立ち上がる。

その半透明の体は、まるで陽炎の中にいるかのように輪郭がぼやけており、青白い肌や落ち窪んだ眼下といい、これぞまさに昼間の幽霊と言うべきゴース星人の姿であった。



『なにさらしてくれとんじやワレ』

「不意打ちつてのはこうやるんじやボケ」

奇襲をまんまと潰されたゴース星人は、怒り狂って何度も腕を振り上げたかと思うと、手に隠し持っていた何かを二人の方へなげつけた！

「危ないっ！」

しかし、不意打ちでもない真正面からの分かりきった攻撃に、そうやすやすとやられる警備隊ではない。

アマギが咄嗟にソガを押し倒し、その場から退避すれば、先ほどまで二人の立っていた場所に丸いバルーンの如き電磁カプセルが展開され、ふわふわと宙へ舞う。

あれでこちらを捕獲しようという腹積もりだったのか！

『ええいちよこざいな』

「させるかっ！」

「くらえっ！」

星人が次を投げ付ようとした瞬間、二人のウルトラガンが同時に火を噴いた！

『ぎいえええっ』

一条の光に胸を貫かれたゴース星人は、もがき苦しみながらその場にバタリと倒れる。

「ソガ、大丈夫か？」

「ああ助かったよ」

「いや、お前が止めてくれていなければ、おれは今頃まんまと捕まっていたかもしれん。礼を言うのはこつちさ」

「だろうな……お前さんは、とっさのアドリブが効かないからね」

「……けつ、損した気分だ。さっきの礼を返してくれ」

むず痒そうに皮肉を言うソガを、洗面で助け起こしつつ、ビデオシーバーを起動するアマギ。

「隊長！ 隊長！」

「どうしたっ!？」

「宇宙船の乗組員と思われる星人に攻撃を受けました！ 奴ら、風船のようなもので、こちらを捕らえるつもりです！ 注意してください！」

「なにっ!？」

「ちつきしよう、舐めやがってえ！」

キリヤマの隣で、敵がこちらを捕虜にしようと企んでいると聞き、頭に血が昇ったフルハシがエレクトロHガンを乱射する。

捕まえられるもんなら、やってみろという挑発だ。

勿論、宇宙船の周囲に伏兵がまだ潜んでいるかもしれないので、炙り出す為の準備射撃も兼ねてはいるが。

すると今度は、沈黙していた敵船の前方部分が展開していくではないか！

直ぐさまフルハシの射撃目標がそちらへ移り、他の隊員達もグレネードカセットで追撃した。

朦々と立ち籠める爆炎。

だが、その向こう側で何か巨大な存在が蠢いている！

「待てー！」

やけどで真っ赤にびらんしたような表皮と、二つの顔という、生物としてはおおよそ有り得ない特徴を持つ、まさに異形としか呼べぬ、恐ろしい怪獣が姿を現した！

双頭怪獣。パンドンだ！

ついに悪魔の箱は開かれて、最後の災厄が解き放たれたのである！

キャリアの中で縮こまっていた身を伸ばし、その巨軀を思う存分暴れさせる為に怪獣が地上へ出れば、双頭の悪魔を相手に、隊員達の腕が鳴る。

「撃てー！」

タイミングを合わせ、カセットシュートで、狙い撃ち！

『ギャツギャーッ!!』

早速出鼻を挫かれたパンドンは、二つの喉から怒りの雄叫びを上げると、矮小な敵を二組の眼で睨み据えた。

……そう、睨み据えたのだ。

それは即ち、自分にそのような無礼を働いた者の姿を、すぐさま特定したという事である。

この怪獣は、宇宙においてもかなり珍しい出で立ちをしているが、それは単なる虚仮威しではなく、頭が二つあるという事で、明確なメリットがいくつあつた。

そのひとつが目の良さだ。

生物というのは一般的に、立体視をする際に、左右の眼球で見た映像に生じる角度差、いわゆる両眼視差によって対象物との距離感等を測っている。

ただ、両眼で生じる角度差など、目と目が相当離れていなければ、たかがしれている……ところを、この怪獣はなんと、双頭の前方側へ付いている目を両眼として扱う事で、通常の怪獣よりも2倍以上の視差を得る事ができた。

これにより、視界内で動く物体があれば、それが例え人間サイズであっても、かなり明瞭に捉える事ができるのだ！

勿論、斜め前方を向いた顔のそれぞれが、また通常の立体視野も持つため、立体視可能な範囲は脅威の前方180°にも及ぶ。

しかも、立体視の無い純粹な視野だけで言えば、後方側の瞳がそれを担当するため、真後ろ以外は殆ど死角が無いと言っても過言では無い。

肉食獣の如き動体視力を、草食獣並みの広い視野に適用する。それがパンドンの持つ強みのひとつだった。

『ギャツ、ギャツ!』

そして見つけた不届き者達へ……腹の底から沸き上がる、嚇怒の炎をそのまま叩きつける!

「うわあっー!!」

吐き出された灼熱火炎は、キリヤマ達の周囲にさつと燃え広がり、あつという間に紅蓮の檻で彼らを包み込んだ!

「バ、バイザーを下ろせ!」

「回避しろー!」

「だめだ、火の勢いが強すぎる!」

『ギャツ、ギャツ』

ソガ達が右往左往する様を見て、明確に気を良くするパンドン。

彼らが慌てふためいているうちにも、両側の嘴がまるで酸欠に喘ぐ亡者の如くパクパクと開閉し、その度に火炎が吐き出され、手当たり次第に着火していく。

これがパンドンの双頭による利点のもう一つ。

燃焼可能範囲の広さだ。

正面に火炎攻撃をする際は、わざわざ首を正面に向けなくてはならず、なんとも不格好に見えるだろう。

しかし考えるべきは本来、火とは燃え広がるものだという点であり、なにも直撃させる必要などない。

第一、目視可能な対象は、先ほど述べた通りの視力と持ち前の怪力を発揮すれば、いかようにも出来る。

この怪獣にとって腹立たしく、厄介に感じる相手というのは、物陰に隠れてコソコソと動き回る小さな獲物達であり……そしてそれらを蒸し焼きにして炙り出すには、炎がいつとう都合が良かったのだ。

故に、この怪獣が吐く炎は、あくまで歩兵用の範囲対地攻撃であり、始めから単一目標に対しての使用など考えられていないということである。

正面は、ただパンドンが練り歩くだけで無慈悲に踏み潰されていく事が確定しており、むしろその正面にいる敵が、左右に散らばらないように逃げ道を塞ぐ事が目的なのだ。

宇宙においても、火とは、破壊と蹂躪の象徴なのである。

投下地点を、徹底的に灰燼と帰す事だけを目的としてデザインされた、悪意の究極系の如き生物兵器。

それが、このパンドンという怪獣だった。

「助けてくれー!」

灼熱地獄が隊員達を苛む。

このままでは、いかに警備隊のユニフォームが簡易宇宙服として耐火性に優れていたとしても、限界が来る。

「アンヌ、ホーク3号で火を消すんだ。頼む!」

「OK!」

仲間のピンチに、ダンの判断は速かった。

すぐさまホークへ走っていくアンヌ。

彼ら二人だけは、敵船の後方へ回り込むルートをとっていた為に、パンドンの業火に巻かれずにすんだのだ。

だが、アンヌが飛び立つまでも時間がかかる。

キリヤマ達が直面しているのは、なにも焼死の危険性だけでなく、その場から動けない事で、怪獣の進撃から逃れられない事が一番の問題なのだ。

ダンが胸元のウルトラアイを取り出そうとしたその時！

『待て！ 変身してはいかん！』

再び脳裏に響くあの警告。

—— だったら…… いったい僕にどうしろと言うんだ!?

ぶつけようの無い怒りに、ウルトラアイを地面に叩き付けるダン。

—— 頼むアンヌ、早くしてくれ…… でないと僕は……

一縷の望みにかけて、ギリギリまで状況を見極めようとするが……

そんな、人任せで踏ん切りの付かないダンの態度を嘲笑うかの如く、パンドンはついに持ち前の怪力で巨岩を高々と持ち上げた！

これで彼らを物言わぬ肉塊にしてしまおうと言うのだろうか。

どうする…… どうする……!?!

隊長たちは炎に閉じ込められて、身動きが取れない。

パンドンは歓喜の雄叫びを上げながら、一歩ずつ進んでくる。

—— 変身さえすれば、彼らを助けられる。

仲間を庇うフルハシ。



——どうする。変身すれば……

逃げ道を探るアマギ

——だめだ。変身しては……

そして倒れる……ソガ。

——だめだっ！ そんなことは！

「デュワツーツ！」

地面に落ちたウルトラアイに向かって、ついにダンは、その身を投げ捨てる事を選んだのだ!!

『ダァーッ!!』

眩い光がスパークし、迫る炎の向こう側から、太陽の輝きをその身に宿した、光の巨人が立ち上がる。

真紅の勇氣と、白銀に輝く愛の煌めきを身に纏った、星の戦士の姿が、そこにはあった。

宇宙で一番優しい、愚か者の姿が。

## 史上最大の誤算

巨大化したセブンは、体当たりでパンドンを押し倒すと、その隙に、足元で火炎地獄に苦しんでいるはずの仲間達を探した。

本来であれば、透視力ですぐさま発見出来たであろう場面だが、彼の超能力は既に消耗しはじめており、透視どころか通常視界すら薄っすらと霞んでいるため、陽炎の中に揺れる小さな像を見つける事が出来ない！

ぐずぐずしている間にも、背後で起き上がったパンドンが、手にした巨岩を放り投げてきた。

仲間たちの救助に全神経を傾けていたセブンは、もちろんその奇襲に全く気付く事ができず、腰への投石を一切防御することなく食らってしまう。

激しい痛みに思わずのけぞり、動きの止まってしまったセブンの首へ、ここぞとばかりに両腕を回し締め上げるパンドン。

紅蓮の焔の向こう側で、深紅の戦士を苛む赫怒の巨獣。

セブンはやっとの思いで拘束から抜け出すも、ダメージでよろめき、まともに立ち上

がる事すら出来ない。

今の弱った体では、怪獣を相手にしながら隊員達を助ける事など、とても不可能だ。それどころか、このままではこちらがやられてしまいかねない！

セブンの肉体は、それほどまでに傷つき、もはや限界を迎えつつあった。

「セブン、隊長たちの方は、私に任せて!!」

そこへ飛来したアンヌのホーク3号！

何度も旋回しながら消化剤を散布する。

アンヌが消火剤のボタンを押し込む度に、キリヤマ達を取り囲んでいた炎の檻が消えていく……

すっかり鎮火した焼け野原の中で、みんな激しく咽せながらも、ひとまず悪態をつける程度には無事らしい。

こうして後顧の憂いが断たれたセブンは、ようやく全力で怪獣と相対する事が出来るようになった。

『デユワツ!!』

力いっぱい陽電子を握り込んだ右拳で、自身の肉体からエメリウム粒子が十分に抽出できるよう、それをピッタリ腰へつけると、左の掌をピンと伸ばし、胸の前で水平に構える。

狙いの定める為にグツと顎を引けば、手刀を電極板へ見立てつつ、太陽光できらりと輝くプロテクターとの間に、凄まじいまでの電位差を瞬時に生み出すセブン。

そうして強制的に発生させた膨大な光と熱量を、額のエネルギーランプに収束し一気に解き放つ事で、眩いばかりのエメリウム熱線を、敵怪獣の太々しいドテツパラにお見舞いするのだ！

『ギエーッ!!』

着弾箇所を押さえながら、苦悶の叫びを上げる怪獣。

——よし！ 効いているぞ！

しかし、今の一発で勝負がつかなかったのは、セブンとしても苦しいところであった。どうやら熱線に耐性があると見える……流石に手ごわい相手だ。それとも、出力が落ちていたのだろうか。

——ならば！

セブンは今度こそ、眼前の暴れる凶獣を粉碎すべく、額のエネルギーランプに両手の

指を翳す。

右手に高圧電流、左手に超磁力を流し込み、発生した反作用を利用することで、打ち出すエメリウム粒子にライフル弾の如き回転を加え、物理的な破壊力を倍増させるのだ！

そうして彼は、必殺威力の反磁力線を、敵の喉元めがけ照射した！

……はずだった。

『アユツ?!』

それほどの直進力を持つ光線が、空気中で解けて霧散する。

ありえない光景に、戦士は我が目を疑った。

——信じられない。

……まさか、光波電導を維持出来ないほどに、エネルギーが不足しているのか……？  
だが、エメリウム光線を放った本人の手応え自体は、確かにあったのだ。

今の光線は、しっかりと怪獣まで届くように力を込めた実感がある。

なのになぜ……？ あれではまるで、途中から見えない腕に掴まれてむりやり逆の力を加えられたかのような……

しかし今のはまさに痛恨だった。

勝負を決めるために、今の一撃に少なくないエネルギーを消費してしまった。

殆ど全力を籠めた攻撃が不発に終わり、思わず呆然とするセブンへ、チャンス到来とばかりに襲いかかるパンドン。

蹲るセブンのアイスラッガーを引っ掴み、前髪を引っ張る要領で強引に顔を上げさせると、最大限に振りかぶった腕で、こめかみ目掛けて渾身の左フックを叩き込んだ。

『アユアアア……ッ!』

額の割れる激痛に、頭を抱えて地面をのたうち回るセブン。

その痛々しい姿を見て、パンドンは慈悲を見せるどころかより一層、興奮した様子で襲いかかる。

星の戦士を散々に蹴りまわし、引き倒し、太く鋭いボールの如き両腕を、彼の背中へ力いっぱい叩きつける！

まさしく暴虐の限りをつくす、赫赫たる悪魔。

登場怪獣の中で、パンドンは弱い……？

セブンが万全であれば、苦戦する事など無かった……？

……とんでもない!!

いかに彼のエネルギーが底を尽き、おそらく肉体強度も低下していただろうとはいえ、その剛腕はたつたの一撃で銀の額をたたき割り、その生命力は、首を完全に断ち切らない限り、例え四肢を引き裂かれても止めを刺しきれない程に強靱なのだ!!

そもそもからして、数多くの生命体が苦手とする高熱に耐性があるばかりか、あまつさえそれを自発的に操る時点で、生物兵器としては破格であるし、おまけのように武器まで使いこなす知能をも合わせ持つ。

……なによりも、弱った獲物を前に、ますますもって猛り狂うその残虐性!

まさしく、火を吐く大怪獣の名に相応しい、悪鬼のような相手。

それが、双頭怪獣パンドンなのである。

……第一、本当にパンドンが銀河水準から見ても弱い怪獣なのだとしたら、あのゴース星人が用心棒として連れてくる筈が無いのだから。

「……やつぱりそんなこつたろうと思つたぜ！」

「ソガっ！ どこへ行くんだー！」

パンドンに原作通り苦戦するセブンの姿を見て、いよいよ考えていたプランを執行する時が来たと、駆けだすソガ。

「みてやがれよ……」

もちろん流石の彼も、これで決着をつけられるとは思っていない。

だがそんな贅沢は必要ない。ただパンドンにそれなりのダメージを負わせて、セブンがトドメを刺す隙さえ作り出せばそれでいい。

両者の動きを注意深く観察していると、やがてセブンが地面を転がり、パンドンと大きく距離をとつてから頭の上からアイスラッガーを抜き放つ。

今だ！

逸る気持ちを抑えながら、胸元の切り札へと手を伸ばした時だった。

『デュ、ワツ!?!』

その場でピタリと体が固まってしまい、困惑するセブン。

その背後で新たに、何者かの影が急激に伸び上がると、鈍色の両腕を使い、真っ赤な首筋にヘッドロックを仕掛けた！

『とあー!!』



『ア、デユワーツ……!?!』

「……………え? ……は?」

後から締め上げられ、苦悶の声を上げる赤き戦士。

だが、その様子を見たソガの困惑は、この場の誰よりも大きく、下手をすれば技をかけられている最中のセブンよりも酷いものだったかもしれない。

すつかりその場で立ち止まり、茫然自失となつてしまつていた。

もちろん、本来の最終回にはパンドンしか怪獣が登場せず、二体目の敵が出現する事自体、驚くべき事だ。

しかし、これまでの戦いで怪獣の数が原作よりも増えた事はままあつた。むしろ、その程度は覚悟していいと言つても良い。

では、完全に見たことが無い初見の敵が出て来たのか?

それも違う。

実はこれまでも何度か、見たことも聞いた事も無いような宇宙人や怪獣との戦いも、このように原作ではカットされて、お話にならなかつた相手が沢山いたのだな……としみじみ納得していた。

ある意味で想定外は想定内だったのである。

だが今回の相手は……あまりにも予想外の所からいきなり現れたものだから、さしものソガといえど、もう完全に頭がパンクしてしまっていた。

四肢と胸元には、鈍く光る無数のトゲを生やした金属質なプロテクター。

顔面を覆う鉄仮面には、高い鼻筋と、薄い微笑みが常に形取られており、目元だけが赤いバイザー状になっているため、まるで神話に登場する単眼巨人サイクロプスを彷彿とさせる。

尻尾は無く、スラリと背が高い人間の如きシルエットをしたソレの姿は一見、ヒューマノイド型の宇宙人が、ただ防具を着込んでいるだけのようにも見える。

実際、先ほどゴース星人の姿を直接視認したアマギ以外の警備隊メンバーは全員、ついに敵の星人が正体を現したのだとばかり思っていたし、そのアマギについても、戦闘服に着替えた戦士階級が出張ってきたのではと警戒していた。

「う、嘘やろ……う？」

だがソガだけは、記憶の彼方から引っぱり出した相手の名を、正確に言い当てる事が出来たのである。

「ウ、ウリンガ……!?!」

超能力星人ウリンガ。

それが今、弱ったセブンをバンドンと挟み撃ちにしようとしている敵の名前だった。しかし。

「なんでお前がここにおんねん……!」

半ばパニックに陥りかけていたソガは、自分がヘルメットをしている事すら忘れ、がしがしと頭を掻き篋りつつ、あまりの意味不明さに、噛み締めた奥歯の隙間から絞り出すような声で呪詛を吐いた。

なぜなら……

「お前の相手は……レオやろがつつ!!」

——出る番組間違えとんちやうかつ!?

そう……彼の記憶にある限り、このウリングという存在は、『ウルトラセブン』の登場怪獣ではなく、さらに後年のシリーズである『ウルトラマンレオ』における敵だったはず。

それがこんなところで姿を見せるなど、時系列も、下手をすれば世界線すら何もかもを間違えているとしか言いようがなかった。

ソガにしてみれば、必死に、それこそ命懸けで今日まであらゆる事を準備してきたにも関わらず、そこへなんの脈絡もなくこのような敵を追加されては、戦場のど真ん中で狂ったように叫びだしてしまったとしても、もはや仕方ないし、もういつそ何もかも投げ出してしまっても許して欲しい……という心境にすら陥っていた。

そうして彼が事態をなんとか飲み込もうとしているうちに、のっしのっしと歩いてきたパンドンによって、セブンの握っていたアイスラッガーも叩き落される。

このままでは、あの怪力で滅多うちにされてしまうではないか。

死に物狂いでウリンガの拘束から逃れようとするも、その戒めは見た目以上の頑強さを誇り、決してセブンを離そうとはしなかった。

ウリンガは超能力星人の肩書き通りに、腕力だけでなく、非常に強力な念力までも発揮して、二重に彼を抑え込んでいたのである。

おまけに、ウリンガが着込んでいるプロテクターからは常時、身を切るような冷気が発されていて、ただ捕まっているだけで、セブンのなけなしの体力がどんどん削られていってしまう。

「あ、えっと……しまった……」

もしも、これが今までの彼ならば、生来の思い切りの良さ……というかある種の薄情さを発揮して、切り札をノータイムでどちらかの怪獣にブチ込んでいただろう。

だが、彼はもう本人が自覚している以上に、すっかり衰弱しきっていて、正常な判断力や、果断さを全て失ってしまっていたのだ。

だから、つい迷ってしまった。

原作で確実に倒せたパンドンを攻撃し、ここでトドメを刺しきる堅実さをとるか。

明らかに未知の不穏分子であるウリンガを排除し、原作への軌道修正を図るか。

一番の問題は、彼がウリンガの登場回を、実際には見たことが無いという点。だから、パンドンを切ってウリンガを残したとしてセブンは勝てるのか。ウリンガを殺す為はこの手段であっているのか。

……ここぞの場面で、決めきる事が出来なかったのだ。

そうして無駄な逡巡で時間を浪費してしまったのが仇となり、ついにパンドンの剛腕が、セブンの額で点滅するエネルギーランプを直撃！

『ジュアッ、アッ、アッ……!!』

今までの感じた事が無いくらいの激痛に、体を弓なりに仰け反らせ、悲鳴を上げる星の勇者。

「や、やめろーっ！」

今度は両腕を高々と振り上げて、確実に息の根を止めようとするパンドンへ、ソガは一心不乱にウルトラガンを連射するが、アタツチメントも付けていないレーザーなど、パンドンには効きもしない！

二大怪獣に挟まれ、セブンは絶体絶命！

その時！ 赫く焼け爛れたようにザラザラとした怪獣の背中へ、凄まじい量のロケツ

トが降り注いだ。

アンヌのホーク3号である。

ソガに勝るとも劣らないセブン過激派の彼女は、大事な7番目の仲間がリンチにかけられるのを見て、まさに怒髪天といったところ。

キツと唇を噛み締めて、怪獣目掛けて急降下。

先ほどは空対空攻撃に使用出来なかった重量爆弾を、双頭のど真ん中へ向かって思いつきり投げ込んだ！

『ギャッー！ギャッー！』

さしものパンドンも、これは相当に痛かったと見えて、眼前のセブンをほっぼり出すと、ホークの尻を追いかけはじめる。

そしてその背後では。

「撃てー！」

『ふん!?とおあー!?!』

『デユッー!』

地上から、キリヤマとフルハシの援護射撃がウリンガの背中を撫で回し、セブンが脱出する隙を作る。

「ソガ！こんなところで何を突っ立ってるんだ！早くセブンを援護するぞー！」

「あつ……そうだった。ありがとうアマギ……」

追いついてきた仲間に肩を叩かれ、ようやく我に返ったソガだったが、いざ攻撃に参加しようとした時、信じられないものを目にした。

「ウリーー！ ウリーー！」

「……アンヌ!?」

紫色のローブのような服を着たアンヌが、丸腰で武器も持たず、腕を大きく振り上げて、喉も枯れよと泣き叫びながら、ひた走っていくではないか。

それも、怪獣と巨人が揉み合う、この危険な戦場のど真ん中を横切る形でだ！

「なんでこんなところに!? クソツ……!」

「なつ、ソガ！ 待て！ そんなはず……!」

それを見た彼は、思わず素つ頓狂な声をあげ、全速力で駆け出した。

冷静なアマギが待ったをかけるがもう遅い。

仲間の制止が届く前に動き出すという時点で、ソガにはもう、まともな思考力といったものが、これっぽっちも残っていないという時点で、何よりの証拠だった。

一欠片でも普段の慎重さがあれば、アンヌは今、上空を飛び回っている真つ最中なのだという、至極簡単な違和感に気付けたはずだからだ。

「ウリーー！ やめて！ 戦つてはだめ！ お願いよウリーー！ ウリーー！ その人はあな

たの……」

「アンヌ！　いったいこんな所で何してるんだっ！　頭おかしすぎるやろ、冷静に考えて！」

走るアンヌへ追い縋り、その腕を掴んでは戦場から引き剥がそうとするソガ。

「離してください！　わたしはあの子を……」

「どうしたんだアンヌ！　お前ウリンガの事知ってるのか!？」

「わたしアンヌじゃありません……！　離してっ！」

揉み合う二人にアマギが追いつき、ソガの捕まえている女の顔を見た時、流石の彼もまずは自らの目を疑い、いつの間にか、自分もソガの狂気に巻き込まれているんじゃないかという錯覚に陥った。

それくらい、女の顔も、声も、彼らの仲間アンヌ隊員に瓜二つだったのである。

「ソガ、その女はいったい……」

「分からも、ただアンヌは錯乱してるんだ！　お前も手伝ってくれ！」

「だから、わたしアンヌじゃありません！」

その時、アマギの背後で半透明の影がゆらりと立ち上がった事に、ソガはたまたま気付く事ができた。

本当に何故かは分からないが、視線だけが吸い寄せられるような感覚すら覚える程





## 史上最大の暗雲

「こいつッ！」

アマギが振り返り、背後のゴース星人を直ぐさま撃ち抜いた。

今度はトドメを刺し損ねないように、倒れた敵に向かって、何度も何度も執拗に、ほとんど半狂乱になりつつ星人の死体へ残弾を撃ち込んでいく。

その腕を巻き取るようにして、アンヌと似た女が首を振りつつ制止した。

「もう充分です！ 死んでいきます！」

「ハア……ハア……そうだ、ソガは？」

上空を見上げてみるが、ピンク色の電磁カプセルは何処かへ飛んで行ってしまった後。

どうやら一度起動した後は、自動で回収されるようになっていたらしく、発動者を殺したからといって、逆回しで戻ってくるという事はないらしい。

「駄目か！ ……だいたい、キミさえいなければ……おい！」

蹲り、地面に転がるゴース星人の死体に向かって、両手を合わす謎の女を、アマギは

腹立ち紛れに腕を引き立て、少々乱暴な扱いをした。

すると、振り返った顔が、益々アンヌそっくりであったものだから、バツが悪そうに目を逸らす。

「う……キミは、いったい何者なんだ？」

「わたしは……」

その時、隊長達の攻撃に晒されていたウリンガが、ついに我慢の限界といった様子で身を揺すり、プロテクターについたトゲを四方八方へやたらめったら投げ飛ばし始めた！

その流れ弾は、当然こちらにも飛んできて、二人のすぐ近くの岩へ突き刺さり、表面から発する激しい冷気によって、あっという間に氷塊へと変えてしまう。

「キャッ！ ウリー！ お願いだから乱暴はやめてちょうだい！ 聞こえないの!？」

「あの怪物について知っているようだな……ひとまず、ここは危ない！ 着いてくるんだ！」

「ウリー！ ウリー！」

「隊長！ ソガがやられました！」

『なにっ!』

「なお、関係者と思しき民間人一名を保護！ 安全確保の為、離脱します！」

アマギは、もがくアンヌ似の女性を懐抱きにして、戦線を離れていくのだった……

「よし、アマギの退避を援護するぞ！ フルハシ！ スモーク弾用意！」

「了解！」

忽ちウリンガの周囲に、モクモクとおびただしい量の煙幕が展開され、その巨体をあつという間に覆い隠していく。

『はあつ？ ふうーん！ とおあー！』

白煙の切れ目から、鉤爪の生えた厳ついグローブが空を切っているのがチラリと見えるあたり、周囲がいきなり見えなくなつて、パニックを起こしているらしい。

『アユツ！』

これを好機と見たセブンは、地面に転がっていたアイスラッガーに飛び付いて、無様に転がりながらもそれをキャッチ。

そのまま、前転の要領で一気に身を起すと、アンヌのホーク3号を追つて、無防備な背中を晒していたパンドンを素早く切りつけた！

『ギャツ……ギャ……』

分断された左手と右脚が宙を舞い、ドウツと荒れ地に倒れ込む怪獣。

一匹を無力化したのを確認し、残るもう一匹に光線の狙いを定め……

——《お願い！ その子を殺さないで！》——

——なにっ!?

突如、頭の中へ響いた声に、ピタリとその動きを止めた。

いや、止めざるを得なかった。

なぜならその声が、愛しい人と同じ声をしていただけからだ。

だが、今まで限界ギリギリの所で張り詰めていた集中の糸が、それでプツツリと途切れてしまったセブン。

意識を失ったように、どたりとその場へ倒れ伏すと、彼の肉体は、自らの意思に反して光の粒子に置き換わり、最も消費の少ない体……モロボシ・ダンの姿へ戻っていった。

その直後、ウリンガに目隠しをしていた煙幕が、丁度効力を無くし始める。

ようやく視界が開けた彼は、首をしきりに振って、まるで何かを探している風にも見えたが、あいにく周囲には無惨に切り裂かれたパンドンの死体しか見当たらず、落胆したように肩を落としてから、何処かへと姿を消したのであった……

---

基地のメディカルセンター。

その医療用ベッドには、ダンが血と包帯に塗れた痛々しい姿で横たわっている。

現場の状況がひとまず落ち着いた後、荒野でひとり意識を失った状態で発見されたダン。当時は、まるで眉間がかち割れたように大量出血しており、もはや手遅れかとみな顔面蒼白となったが、辛うじて息があつた為に、ここへ急いで搬送されたのだ。

おそらく怪獣とセブンの戦いに至近距離で巻き込まれ、吹き飛んできた石か何かが直撃したのだらうと思われるが、それで姿形を留めていたどころか、命まで取り留めるとは、凄まじい生命力と強運である。

まさにミラクルマンだ。

しかし依然として、一切の予断を許さぬ状況である事は変わらない。

応急措置を終えたキタムラ博士が、緊張の面持ちで汗を拭う。

「助かりますか？」

「……」

キリヤマ隊長の言葉にも無言で返すしかない主治医。

なんとあのキタムラ博士が、である！

かつて未知の技術でサイボーグ化された人間をすら、元へ戻してみせた神の腕を持つキタムラ医師ですら、安請け合いしかねる程の重傷。

博士のその反応だけで、今のダンがどれほど危機的状况なのかを察し、皆の顔が一気に陰る。

そこへ、別の隊服を着た男が入ってきた。

なんとクラタだ。

旧友の顔を見て、思わず詰め寄るキリヤマ隊長。

「クラタ！ V3は何をやっていたんだ！」

「なに……う？」

「そつちからの連絡が早ければ、モンスターは宇宙で始末できたんだ！ ソガは拉致され、ダンは再起不能のキズを負った！ V3の責任だぞ！」

あの宇宙船は非常に重装甲で、ウルトラホークの搭載火器では歯が立たなかった。

ただし、撃破する方法が無かった訳では無い。

……そう、北極基地に駐機されている宇宙爆撃艇。

幸いにも、装甲化を優先した為に反重力飛行しできない敵の速力は非常に低速で、爆撃編隊の絨毯爆撃ならば、完全に消滅させる事も出来ただろう。

ただし、宇宙爆撃艇の重粒子爆弾はあまりにも火力が高すぎて、とてもではないが大気圏内での使用など絶対に不可能だ。

あれを壊すには、ステーションの早期警戒網に引っかかった時点で、北極基地へ緊急スクランブルをかけるしか選択肢は無かったのである。

本来ならばその余裕は充分にあった。

だが、基地のレーダーがその姿を捉えられるまでに接近されてからでは最早間に合わない。

キリヤマからすれば、先に地上で見つけた敵を相手に、今更のこのこ出て来られたところで、V3の怠慢としか言いようがないだろう。

しかし……

「いいがかりはやめろ」

「なに！」

「俺はちゃんと連絡をとった。しかし、そっちからウンともスンとも返事がないんで、気になって降りてきたんだ……」

「……本当か!？」

「キサマア……!？」

青筋を立てて振り返るその顔には、俺の言う事が信じられんのか、と大きく書いてある。

彼の口汚さは有名だったが、クラタ隊長がそのようにつまらない誤魔化しや責任転嫁とは無縁の男であるというのは、誰からも明らかだった。

そもそも、そのように器用な立ち回りができるならば、今更あの悪名高いV3ステーションの突撃隊長など、拝命してはいまい。



「当番が居眠りでもしてたんだろ！」

不当な名誉毀損を受けた苛立ちを籠めて、吐きすてるように言い放つクラタ。

「そんなバカな！」

もちろんキリヤマとて、自身の部下をそのように貶されて黙っていられるはずもない。

「誰だ!? タベの当番はっ!？」

医務室に気まずい沈黙の帳がおちる。

もちろんフルハシ、アマギ、アンヌの三人にはこころ辺りが無いので、返事のしようがないからだ。

だが、やがて皆の視線がひと所に集まりかけ、途中で必死に逸らされた。

そう、その場の全員が昨日の状況をぼんやりと思い出し始めたからである。だがそれはあまりにも……

その時、ベットのダンが、朦朧とした意識の中、微かに目を開いて、怒れるクラタの顔を下から見上げた。

「……ぼ……ぼく……です……」

たったそれだけを絞り出すのもやっとという有様で、途切れ途切れに答えるダン。まさに虫の息。

すると、それを聞いたクラタは一度、信じられんというように目を剥いてから、みるみる顔全体を失望の色に歪めると、ダンが重傷という事すら忘れて掴みかかろうとする。

「今度はお前かつ!」

「クラタさん!」

「一人ならず二人もミスを犯すなんて……それでも地球防衛軍の隊員達か!? 無線機が故障だなんて言わせんぞ! 通信室で何をやっていたつ!? イビキでもかいて寝てたんだらう!」

「う……ぐうつ……」

今のダンにはクラタの叱責すらも、傷を抉るような威力がある。

「自業自得だ! おいきりヤマ。人に文句を言う前にな、自分の部下の教育をするんだ!」

苦しむダンを冷笑し、旧友に正論で喧嘩を売るクラタの機嫌は今、過去最低に悪かった。

ソガにダン。

彼らが奴を支えてくれるからこそ……と見込んでいた若者達が、とんだ軟弱者ばかりだったと判明したからである。

そしてその煽りを食らうのは決して本人達ではない。彼らは死んでしまえばそこで終わりだろう。楽なものだ。

だが、その死の責任と呵責をこれからずつと背負っていくのは、指揮官であるキリヤマなのだ！

そして今、彼の悪友は大切な部下を、一気に二人も失おうとしている。

それが分かるクラタからすれば、二人とも酷い裏切り者に見えて仕方なかった。

いつそお前達が、最初から無能であつてくれればよかつたのに……それ程に、憎い。

なので余計に、ソガの分も合わせて、ダンを詰る態度に力が籠もる。

……だが、ふと顔をあげて見れば、その場の四人が若干の敵意すら滲ませた険しい瞳で、クラタの事をまじまじと睨んでいる事に気がついた。

——そんなツラで俺を見る権利があるのか？

一人一人、じつくりとそれを正面から受けて立ち、最後に、あの悪たれの顔にも同じ色——悲しみや憔悴に勝る程の怒りが燦るのを見て、ようやく口を噤む。

——そうかい

そうしてクラタは、若干バツが悪そうな顔でメデイカルセンターを後にした。

「………そういえば」

キリヤマもキリヤマで、昔馴染みについて内心の機微が分からぬでは無かつたが……

あれ以上続けられていては、これ以上の冷静さを保てていたかどうか。

あそこでクラタが矛を収めてくれてよかったと思いつつ、それ程までにソガの不在と、なによりも目の前にいるダンの姿が、自身へどれほど重い衝撃を与えているのか再認識した。

だからこそ、先ほどのやりとりで微妙な空気となってしまった医務室を換気する意味も兼ねて、もう一つの懸案事項について尋ねる事としたのである。

「保護した民間人については？」

「は、それが……」

いつになく言い淀むアマギ。

常に確定した事実へ基づいて会話を展開し、だからこそ齒に衣着せぬ物言いの彼が……珍しい。

「私が思っていた以上に、複雑な事情のようでした……ひとまず、直接聞いていただきましょう」

アマギがカーテンを開けると、そこには一人の女がベッドへ楚々として腰掛けており、キリヤマ達に気付いたのかやおら立ち上がり、深々と礼をする。

彼女の衣服は紫色の簡素な布だが、腰の部分を赤い帯で巻いており、不思議と高貴な着物のようにも、患者の着る貫頭衣のようにも見えた。

だが、警備隊の全員がハツと息を呑んだ一番の理由は、お辞儀を止め、ゆっくり面を上げた彼女の顔を、正面から見たからだ。

「ア、アンヌ……！」

男性陣は、心底たまげた様子で二人を何度も何度も見比べるが、当のアンヌ隊員本人が受けた衝撃はそれ以上。

口をあんどぐりと開け、掠れるような眩きを、喉の奥から絞り出すのが精一杯だった。

「ワ、タシ……だわ……！」

「違います。私、アンヌじゃありません」

それに対し、寂しそうな表情で首を振る謎の女。

だが、否定をするその仕草も、その声も、益々もつてアンヌそっくりだったので、周囲の困惑はいっそう深まるばかりだ。

「私の姿は……アンヌさん、貴女からただお借りしたものに過ぎません。私は、宇宙人なのです」

「なに、姿を借りた？」

「はい……私はユーリー星人という、精神体だけの種族なのです。我々は、星の外で活動するためには、こうして肉の器を用意する必要があります」

「ひゃあ、するつてえと、まるで幽霊みたいなものかい!? ……で、でもアンヌはいまこ

うして……借りるたって、どこから!？」

フルハシが大量の疑問符を浮かべながら、なんとか話に着いていこうとするが、彼が飲み込んだイメージは、幽霊が人間に憑依するようなものだった。

だから、幽霊星人がアンヌの体を借りたというなら、本人は操られている筈である。しかし、実際には二人とも別人としてここにいるではないか。

「この肉体は……そちらにいるアンヌさん、彼女の遺伝子情報を基に培養した、クローン体なのです」

「何だって! クローン!？」

「はい、ですからアンヌ隊員に似ているのも当たり前。ですが中身は、あなた方地球人は全く違う種族なのです」

「なるほど……」

まだ完全に理解した訳ではないにせよ、ある程度の納得をもって頷く警備隊のメンバー達。

しかし、キリヤマは彼女の話を聞いて、ひとつ引っかけかりを覚えずにはいられなかった。

「待て、アンヌの遺伝子情報……? それは一体どこから?」

「……」

それを聞かれた途端、気まずそうに顔を伏せ、黙りこくる女。

キリヤマが半ば何かを確信したような表情で見つめる中、他の三人はどうした事かと心配げに首を傾げる。

だが、女もついに意を決したのか、キリヤマへ正面から向き直り……

「申し訳ありません。我々ユーリー星人は以前、こちらの地球防衛軍基地に侵入した事があります」

「な、なんだって!?!」

「いつの間に!」

「そんな筈ないわ! 今までの侵略者は私達とセブンでみんなやつつけて来たもの!」

あまりにも衝撃的な告白に狼狽える三人。

しかしそんな中、アマギがふと何かに気付いたように口元を押さえ、頭を回し始めた。

「待てよ……? 精神体……遺伝子情報……侵入……気付かない……そうか! まさか!?!」

「やはり……」

「なあおい、どういうこったよ……俺にも教えてくれよう……」

少ない情報とこれまでの記憶を頼りに、おそらくそうではないかと当たりをつけたアマギと、その様子に自らの懸念がどうやら的中していたらしい事を悟るキリヤマ。

完全に白旗を上げたフルハシが二人に取り縋るが、その必要は無かった。頷いた女が、再び真実を語り出したからだ。

「そうです。我々ユーリー星人は、シャドウマンを使って基地から機密情報を抜き出し、それを囿にウルトラセブンを誘き出す事に成功しました」

「シャドウマン……?」

「分かった、あの動く死体の事件だわ……!」

「なんだと!?」　じゃあ、あんどき盗んだ情報で侵略の準備が整ったから、今頃になって攻撃を開始したってわけか!」

カッときた様子で腕捲りするフルハシを、女が懇願するかにように制止する。

「お待ちください!　我々ユーリー星人の計画は失敗したのです!　今、この地球を狙い、あなた方のお仲間を誘拐したのはゴース星人です!」

「なに、ゴース星人?」

「確かに、我々を攻撃してきた宇宙人の姿は、彼女のように地球人を模したものと違っていました。そしてソガが捕まった際には彼女もぼくらと一緒にいたんです」

「ふむ……」

状況証拠から、女が今回の敵とはどうやら別口らしいと推察するアマギ。しかし、だからといって怪しさが無いという訳でも無い。



「でも……あなたはあの時、後から現れた怪獣に向かって、何かを呼びかけていた……何か知ってるんじゃないやありませんか？」

「はい……それについても、今からおはなし致します」

ユーリーの女は、アマギ達がひとまず冷静に話を聞くつもりであると分かり、ホツとした様子で胸を押さえ、再び口を開く。

「まず最初に出てきた、赤い二つの顔を持つ怪獣……あれはゴース星人の連れてきた、パンドンという怪獣です。そして、後から出て来た方こそ……ウリンガ」

「ウリンガ？」

深く頷く女。

「ウリンガ……宇宙の言葉で『最も強き子』という意味を籠めて名付けられました。彼こそが、ユーリーの科学の粋を集めて作られた、究極の人造兵士なのです」

「なに、人造兵士？」

「はい……正式にはウルトラレイブラッドIIタイプゼロ……ユーリーに古代より受け継がれてきた、恐るべき闇の因子を、考え得る限り最良の肉体サンプルへ埋め込む事で、銀河で最も強い肉の器を造り出す……それが『究極の子供達計画』でした」

「……ま、待つてください、その考え得る限り最良のサンプルと言うのは……」

真つ青になりながら、微かに震えた声のアマギ。

それを見てフルハシは、いったい何をそんなにビビっているんだ……と脇を小突こうとした直前、天啓のように閃きが降りてきた。

「ははあ、わかったぜ！ それで俺達ウルトラ警備隊の遺伝子情報ってわけか！ 確かに俺達を素体にすりゃあ、さぞや良い兵士が出来るだろうなあ！」

暢気に力こぶを作るフルハシに、ゆるゆるとかぶりを振るユーリー星人。

「申しましたでしょう。あの時の我々の目的は、シャドウマンを使って、ウルトラセブンを誘き出す事だったと……」

「じゃ、じゃあまさか……」

「はこ」

続きを察して、顔面蒼白となってしまったアンヌに頷きを返し、驚愕に揺れるそれと、全く同じ瞳を悲しげに伏せた女は、一度深呼吸をしてから、アンヌが聞きたくもないような残酷な事実を口にした。

「そう、あのウリンガこそ……ウルトラセブンの完全なクローン体なのです」

「……ッ!?!」

息を呑む警備隊。しかし。

「待て、計画は失敗したのでは無かったのか？」

「……そうです。あの子は……ウリーは失敗作でした」

「なに、失敗作?」

「ウリーは……破壊の尖兵として操り人形とするには、余りにも純粹に育ち過ぎたのです。私は、元は単なる研究員のひとりに過ぎませんでしたが、彼の調整役……親代わりとして、そこにいるアンヌ隊員の生体情報をセツトされた肉体を与えられました。刷り込みによって、彼を如何様にも操れると上層部は考えたのでしよう。しかし……ウリーの自我は、計画よりも強く発達してしまい、もはやウリー星人の憑依を受け付けなくなってしまったのです」

そう語る彼女の瞳に、確かな誇らしさと、確固たる慈愛の涙が光るのを、アンヌは見た。

そしてその瞬間、全て理解したのだ。この宇宙人は、そのウリーという実験体を、我が子のように愛してしまったのだと。そしてもはや、大切なその子をそのような悍ましい計画の贄に捧げるなど、とても出来はしなかったのだと。

彼女がもしも肉体だけでなく、心や感情までも全てアンヌをコピーしたのであったら、まず間違いなくそうであろうという確信があった。

そして、そんな彼女から無償の愛を与えられて育った存在が、誰かを傷付けるような命令へ素直に従うかと聞かれれば……

「みんながあの子を育てる事に反対しました……ですが私は……」

勿論、アンヌは星人がウリーと呼ぶ、あの怪物の子供時代を見たことは無い。全てが想像だ。だがしかし、それでも……自らと同じ顔を持つ相手だからこそ、その過去にどのような事があつたのか、この場にいる誰よりも深く共感し、納得し、信じる事ができた。

「ところが、そうしてウリーの廃棄処分が決定した時、どこからかあの子の存在を聞きつけたガッツ星人が襲来し、ウリー星はそれどころでは無くなりました……私達はその混乱を利用して、壊滅する研究所がら命からがら逃げ出す事が出来たんです……」

「なに、ガッツ星人……？」

「そうか……奴さん、最強って言葉に目がねえからなあ……自業自得っちゃなんとも皮肉な結末だがよ」

「それで、そんなあなた方親子が、どうして地球へ？ なぜウリングは突然、あの戦いに乱入してきたのですか？」

「……」

ウリーの女は、アマギの問いに、しばし瞑目し、悔しそうに唇を噛んだ。

それから、かつてガッツ星人にダンが捕まり、その行方が分からなくなった時にアンヌが見せたあの表情で、まさしく痛恨の至りといった様子で事実を釈明しはじめた。

「私が……私が愚かだったんです。二人だけで宇宙を彷徨うにも限界がありました……」

だから……彼らを頼ってしまっただんです。ゴース星人を！」

「なぜ、よりによって……」

「我々ユーリー族とゴース星人は、今でこそ大きく異なる進化を遂げましたが、その歴史を辿っていけば、基は祖先を同じくする近縁種なのです。完全に違う場所で興った種族よりは、まだお互いの事が分かるかと……だから、藁をも掴む気持ちで彼らの船団に助けを求め……実際、彼らは快く迎え入れてくれました。ですが！」

「……本当の思惑は別にあつた」

「まさかあの子を、侵略用の生物兵器として使う為だったなんて……！」

顔を押しさえ、泣き崩れる宇宙人の女。

「……のところ、私達は引き離され、一目見る事も出来ない有様でした。恐らく彼らは、私を人質にしてウリーを脅すか、洗脳でもしたに違いありません……」

フルハシとキリヤマは、セブンが姿を消した後、ウリングが何かを探すようにキョロキョロとしていたのを思い出した。

あれはもしや、この女を探していたのか、もしくはセブンの死体でも持つて帰ってくれば母親に会わせてやるとでも言われているのか。

「お願いします。どうかあの子を殺さないで！ 虫が良い頼みである事も承知です！

でも、私にはもうあの子しかいないんです！ ウリーは本当は優しく、あんな事をす

る為に生まれてきたんじゃないんです！　お願いします！　あの子を助けて下さい！」  
そうして頭を下げるユーリー星人に、なんとも対処に困る警備隊。

もちろん、地球人として思うところが無い訳では無く、言いたい事も沢山ある。

しかしながら、なまじ外見がアンヌであるせいもあつてか、冷たく突き放す事がなんとも難しい。

その時、後のベッドから低いうめき声が聞こえてきた。

「うっ……」

「ダン！　起きたのね！」

「あの宇宙人は……つまり……」

弱々しく掠れた声で、ユーリー星人に問いかけるダン。

「セブンの……子……なのか……？」

「……ッ!？」

ハツとする女。

彼女は、それを言おうか言うまいか、しばらく悩んだ様子で押し黙る。

「あの子には……父親が、いません。母親も……結局、私は親代わりでしかないんですか  
ら……実の子、じゃ……ありません。でも……」

その時ユーリー星人は、恥も外聞もかなぐり捨てて、ただ愛する我が子が生き残る為、

一縷の望みを託してその言葉を口にした！

「あの子に血を分けた家族がいると言うのなら……それは……ウルトラセブン。あの子の本当の家族は、彼だけなんです！」

「……」

「……ダン？」

女から視線を外し、天井をじっと見つめるダン。

そして……

「ふんっ……う、ぐあっ！」

ベッドから身を起こそうと試み、全身に走る激痛に悶絶した。

「ダン！」

「無理するな！ ダン！」

「いいからお前はそこで寝てろ、ダン！」

「ダン……」

駆け寄る警備隊の四人が見守る中、その身を苛む地獄の痛みに悶え苦しむダン。

悪魔のような侵略者から、地球を守るために戦ってきたウルトラセブンにも、ついに最期の時が近づいていた。

もう二度と再び立ち上がることはできないのだろうか……

死んではいかん。

地球は、まだ君を必要としているのだ。

がんばれ！ モロボシ・ダン！

ウルトラセブン、生きるんだ！

……つづく



## 史上最大の終章

医務室のベッド上で、一人の男が身悶えている。

それは、ウルトラ警備隊のモロボシ・ダン隊員だ。

いかにも彼の正体こそ、我らがウルトラセブン！

だが彼は、これまでの度重なる戦闘で、激しくエネルギーを消耗しており、その状態でパンドン、ウリンガの二大怪獣と戦わなければならなかった。

辛くもパンドンは退けたものの、代わりに重症を負わされ、今まさに死の淵へ瀕していたのである！

苦しむダンの手を、ぎゅつと握りしめるアンヌ。

「ダンは今、必死に死神と戦っているんだわ……」

「頑張るんだ、ダン！」

「負けるんじゃないぞ！ ダン！」

アマギとフルハシが、彼の枕元に駆け寄り、口々に励ましの言葉をかける。しかし、普段であればそこへもう一つ、ダンを案じる声があるはずだった。

その強い違和感に、キリヤマが半ば無意識のうちに視線を彷徨わせるが……医務室を隅々まで見渡したところで、どこにも目当ての隊員はいない。

当然だ。ソガ隊員はゴース星人によって、連れ去られてしまったのだから。

「……」

「ダンさん……」

不安げな顔で小さくそう呟く隣の女へ、思わず複雑な表情を向けるキリヤマ。

彼の見つめる女の顔は、まるで写真のようにアンヌ隊員と瓜二つ。

だが彼女の言葉を信じるならば、その肉体はアンヌの遺伝子を使ってクローン生成された容れ物に過ぎず、中身はユーリー星人という宇宙人で、しかもなんと二匹目に現れた怪獣ウリンガの母親代わりだという。

——彼女達さえ来なければ……

こうはならなかったのだろうか、という仄暗い考えを、キリヤマは努めて頭の隅へと追いやった。

この親子もまた、出自はどうあれゴース星人の被害者らしい。

ならば、地球防衛軍としては保護すべき対象だ。

しかし……

念入りな下準備を終え、恐らく大規模な攻撃を仕掛けてくるであろうゴース星人。

その彼らに利用され、手駒とされている超人兵士ウリング。敵の手に落ち、生死不明のソガ。

そして、今まさに命の灯火が尽きかけているダン……

積み重なったそれらを思えば、いかなキリヤマといえど、視界の彩度が急激に褪せていくような錯覚にすら陥ってしまう。

——いかん。こんな時こそ、指揮官が毅然とせずしてなんとする。そこまで考えたところで……

「ううっ！ ……ぐう」

「はっ!？」

「ダン!」

ダンの様子が一変する。

皆が見守る前で、急に静かに、動かなくなったのだ。

少し離れた位置に立っていた二人も、慌てて駆け寄り彼の顔を覗き込む。

もしや本当に息が止まってしまったのか……!?

緊張が走るメデイカルセンター。

固唾を飲んで見守る仲間たち……

……だがその中で一人だけ、女神の如き微笑みを浮かべている者がいる。

アンヌだ。

「……大丈夫。峠は越したようだわ」

彼女だけは、ダンの呼吸が安定したものに変わった事に気付いていたのだった。

ホツと胸を撫で下ろす隊員達。

ダンの命が助かったという事実のおかげか、医務室の空気が一気に、弛緩した和やかなものへと変わる。

……否、本当はその場にいる全員が、意図してそのような雰囲気醸し出すよう、努力したに過ぎない。

そうせねば、もう一つの懸案事項で、神経がまいってしまいそうだったから。

……人間だれしも、気が滅入ってばかりはいられないものだ。

ましてや彼らの任務は、常に死と隣り合わせの過酷なもの。

そんな中だからこそ、時には道化のように莫迦をやって、場を盛り上げる者が必要なのである。

……だが、その役を率先して熟してくれていた者は、ここに居ない。

だったら全員で少しづつ、分担していくしかないではないか。

今まさに、この危機的状況だからこそ、あの飄々とした声が、自信満々にニヤリと笑うあの顔が、欲しくて欲しくてたまらないのに……必要な時に限って居ないだなんて。

明るく振舞えば振舞うほど、余計にソガの存在が浮き彫りになって、皆の胸にぼっかりとした喪失感が到来しかけるが……それでも彼らは笑顔で頷き合う。

そうしていれば、どこからかひよっこり帰ってくるかもしれないと、淡い期待を寄せているからだ。

アイツなら、放っておいてもまた、得意の口八丁で敵を騙くらかし、なにがしかの隙を作っては脱出してくるに違いないさ。なにせ、ヤツには前科がごまんとある。

驚くなかれ、ウルトラ警備隊にはミラクルマンが二人もいるのだ。

その片割れが今、こうして死の淵から生還したのだから、その相棒もきつとそうするだろう。

……いや、そうでなくてはならない。

血と包帯に塗れながらも、静かに眠るダンの寝顔は、仲間たちへ確かな希望を与えていた。

「……さて」

気を取り直し、例の女へと向き直るキリヤマ隊長。

「貴方の仰るウリングアという……」

「……」

「……宇宙人の子供についてですが」  
「は、」

怪獣——という言葉を読み込んで、なんとか配慮した表現を用いる事が出来たのは、彼の不屈の精神ゆえだ。

尤も、セブンの息子……などと言う、なんとも度し難い形容詞を選択するよりは、よほど気が楽だったという事もあるが。

「彼を傷付けず解放する為に、我々もなるべく努力はします……がしかし、彼我の戦力に圧倒的な隔たりがある以上、取れる選択肢もまた非常に限られる……という点はご留意頂きたい」

「はい……それは勿論……ただでさえ、ウリーの方が力で上回っているのに、そこからさらに手加減をしろと頼むわけですから……余裕が無いと言われても……仕方ありません。分かつては、います」

「……その為にはまず、我々も彼の事についてもつと知る必要がありますし、貴女からも、こちらへ出来る限りのご協力を願いたいのです」

「ええ……！ 私に出来る事でしたら、何でもいたします！ それがあの子の為になるのなら……！」

キリヤマの言葉へ、僅かな希望を見出し、必死に頷きを返す宇宙人の母親。

地球人側としても、戦力の減ってしまった今は、猫の手も借りたい状況だ。

その上で、協力者の子供が人質になっているというのなら……それを助ける為、上から引き出せる戦力にも幅が出る。

「ではまず……貴方のお名前を伺っていませんでしたね」

「名前……？」

だがいきなり、女性の表情が曇ってしまう。

その顔が、なまじよく見知った者の顔であるので、こちらからは、その内心も取るように分かるというのが、目下唯一の利点だろうか。

「何をそんなに困りなのです？」

「そう言われましたも……私達ユーリー族は、常に精神感応で会話をしていましたから……名前でも互いを区別する必要が無かったんです」

「もしや……あなた達の種族には、個人名という概念が……無い？」

「その通りです。アマギさん」

「名前が無いだって？ そんなんで、どうやって生活するってんだい」

「……例えばこのように」

女が目を瞑った瞬間、アマギやフルハシの脳内に、赤いチャンチャンコのような装束を着た、幼児の顔が思い浮かぶ。

その子が、気が強く悪戯っぽい表情のまま、得意げに鼻の下を擦るさまが、とてもとても愛しくて……彼女が如何にウリーを大切に思っているかが、瞬時に理解できたのだ。

勿論、みんなウリングが人間態を持っているなんて、今の今まで微塵も思っていなかった。

ともすれば、先ほど見かけたあの甲冑姿を、小さく縮めたままの姿をイメージしていたと言っている。

それがあのビジョンを見た瞬間、説明されるまでもなく、その子がウリングなのだとう悟ったし、彼女達が母星でどのような暮らしをしていたか……そして、二人つきりでの放浪の旅がどれほど辛かったか、その全てが手に取るように分かったのである。

とはいえ……

「うっ……ちよ、ちよつと勘弁してくれ……こいつぁ……俺にはちよいとキビシイや」  
「ぼ、僕も……無理ですね……いや、精神感応とやらがどんな物かは……理解しましたけど……」

頭を押さえてその場に蹲る二人。

「す、すみません……地球人には相性が悪かったようですね……」

「んもう、二人とも今のでギブアップなの？ そんなんじや男が廢るわよ」



「ま、待ってくれ……なんでアンヌは平気なんだあ？」

「……さあ？ みんながピンカン過ぎるんじゃないかしら」

「もしかしたら、私の肉体がアンヌさんのものだからかも知れませんね」

「なるほど……しかし、名前も無いのでは、あなたをどう呼べば良いのか……」

「確かに……」

そんな皆の困り顔を見て、腕組みをしていたアンヌは、すぐにパアツと笑顔を咲かせ、立ち尽くすもう一人の自分に抱き付いた。

「分かった！ この際、アナタもアンヌって事にしましょうよ！ それかもう、そのままユーリーにしちやうのはどう？ 今ここにいるユーリー星人はアナタだけなんだし」

「えっ？！」

「私ね、フルネームは『友里<sup>ユリ</sup>アンヌ』っていうの。それでアナタは『ユーリー<sup>ユリ</sup>アンヌ』

……ね？ 顔もお揃いだし、いつそ名前もお揃いにしましょうよ。いいと思わない？」

「おいおい、それだとアンヌ<sup>ソッチ</sup>とアンヌ<sup>コッチ</sup>をどう呼び分けるんでい？」

「うーん……じゃあ、縮めて『ユリアン』とか？」

「そ、そんな大それた名前は頂けません！ 私のような者が名乗るのは、あまりにも不敬です……」

「……そんなに？」

「さあ? ……まあでも、ユリアンは男性名だからね」

略称を大慌てで否定するユーリー＝アンヌ。

大きく手を振り、全力で辞退するその様子に、アンヌとアマギは顔を見合わせ、首を傾げた。

「……分かりました。そういう事でしたら、私の事は単にユーリーとお呼びください。

アンヌさんの仰るように、ここにいるユーリー族は、私だけですから」

「アンヌでいいのに」

「勝手にお姿を盗んだ上に、名前まで借りては申し訳がありません」

「そういうものかしら……」

釈然としない様子アンヌは一先ず脇へと置いて、謎の女改めユーリーへと再び向き直るキリヤマ隊長。

「うむ……ではユーリーさん。敵基地の場所等は分かりますか?」

「……申し訳ありません……ずっと基地内に軟禁されていて、場所までは……あの時は、ウリーが戦う気配を感じて、ただその近くへ行きたい一心でテレポートしただけなので……むしろ、ウリーが外にいたおかげで、ようやく私も脱出する機会が得られたと言った方がよろしいでしょうか」

「ふむ……因みに今はそのテレポート等は?」

「それは……駄目です……今はウリーの気配が辿れなくて……ここからは遠いようですね」

「……そうですか」

少しばかり言い淀んでから、残念そうに首を振るユーリー。

その様子に、キリヤマは僅かに片眉をピクリと動かし、口を開きかけたが……それ以上なにかを追求する事は無かった。

「なるほど、一旦ウリングがああサイズにならないければ、見つからないわけか」

「超能力ってわりには、役に立たねえ能力だなあ……」

「ちよつと、フルハシ隊員！」

アマギの解釈に対し、なんとも直截な感想を述べるフルハシ。

「少しはユーリーさんの……」

同僚の物言いを嗜めようとしたアンヌが、一步踏み出しかけた……その時！

ズドオオン！！

「キヤア！」

「うわっ！」

「な、なんだっ!？」

激しい揺れが医務室を揺らし、薬品棚から放り出されたビン達が、床へ叩きつけられて、けたたましい断末魔を上げる。

その後も、断続的に続く小さな揺れに耳をそばだてれば、地上の方から爆発音らしきものが聞こえてくるのではないか。

「これは……まさか!？」

隊員達のビデオシーバーが一斉に鳴り響く。

「どうしたっ!？」

『大変です！ 我が基地はいま、円盤群より直接攻撃を受けています！』

「なにつ!？」

驚愕に染まる隊員達の顔。

『初撃で、要塞主砲スパイナードガンの排莢口を狙い撃ちにされました!』

『炸薬に誘爆し、被害甚大!』

『現在、その他の要塞砲および隠蔽トーチカで迎撃していますが、敵の数が多すぎます!』

またしても起きる大きな揺れ。

フルハシが咄嗟にベッドへ覆い被さり、倒れてくるサッシを背中で受け止める。

「ダン！ 大丈夫か！」

「うっ！ うぐぐ……っ！」

「ダン……」

それでも、ベッドから直に伝わる衝撃そのものが傷に響くのか、またしても額に大量の脂汗を浮かべ、うめき声を上げるダン。

不規則で弱々しい息吹が、巨漢の広い額へかかった。

あの闊達な青年が、今はゼエゼエと苦悶に喘ぐしかないなんて……大切な仲間の命が、遂に尽きようとしている事を、嫌でも肌全体で感じとってしまう。

……その途端！

湧き上がる悔しさに、これでもかと歪ませた顔を、怒りの絵の具でみるみる真っ赤に染め上げて、フルハシは般若の如き形相で振り返った！

「……こんなところで、ダンを殺させてたまるかっ!!」

赤熱の肉弾戦車が、バツと医務室を飛び出していく。

「待つて！ 僕も、僕も行きますっ！」

「3号を使い！ ……アンヌ、ダンを頼む」

「ハイ！」

慌ててその後を追いかけるアマギの背中へ、短い指示を投げかけたキリヤマ隊長は、

作戦室を目指して部下たちとは逆方向の廊下へ姿を消した。

すると彼らと入れ替わりに、珍しく慌てた様子のキタムラ医師が、息せき切つてメデイカルセンターへ駆け込んでくる。

「どうかねっ!？」

「発作は収まりましたが、今ので……!」

「これでは手術どころではないな! 早くモロボシ隊員を固定してやるんだ! アンヌ隊員、止血帯と毛布の用意を! ……そのキミ! 見てないでキミもこちらを手伝いなさい! これから負傷患者が沢山来るからね!」

「……は、はい!」

呆けた様子で立っていたユーリーへ、即座に白衣を押しつけると、これ幸いと助手に指名してしまうキタムラ博士。

「……ふむ、キミは筋がいい。このまま鎮痛剤の処置も頼みましょう!」  
「分かりました!」

ユーリーが、アンヌの記憶もある程度は引き継いでいた為に、単なる素人以上の働きが出来たのは、埒外の僥倖だったと言える。

ひとまずダンを、緩衝材代わりの毛布でくるみ、ベッドから転がり落ちてしまわないように部屋の隅へバンドで固定してから、なんとか三人で新たな怪我人達の受け入れ準備

備を整える事ができた。

……数分後、軍医のアラキ隊員が重傷者を担いで合流した時、目まぐるしく働く医師達の中、あまりの忙しきでアンヌが遂に分身したのかと仰天する事となるが。

メデイカルセンターは既に鉄火場の様相を呈し始めていた。

だがそれ以上に、蜂の巣を突いたような騒ぎの場所がある。

基地の要、作戦室だ。

「おい、三番砲塔！ どこ狙ってる!! 貴様はサイロを守れ！ 隣と呼吸も合わせられんのかッ！ このスカタン！」

手にした受話器へ向かい、ツバでも飛ばす勢いで捲し立てると、そのままガチャンと叩きつけるクラタ隊長。

メデイカルセンターにいるキリヤマ隊長に代わり、急遽の臨時指揮を執っている彼は、何度も爪先を踏み鳴らし、全身で苛立ちを表現していた。

というのも……

「どうなつとるんだ、この基地は!?! 敵の墜とし方を誰も知らんじゃないか！ さては

長いこと地面に潜りすぎて、みんなめくらになっちまったんじやあるまいな！」

思っていたより随分と練度が低い。……低すぎる。

勿論、低いといってもそれはあくまで富士山よりも遥かにそびえ立つ、クラタの要求値と比べての話であって、防衛軍全体の水準からすれば充分に精鋭と言えるだろう。

現に、夜空へ伸びる火線は多く、完全な奇襲にも関わらず、こうして即応出来ている。それはクラタも分かっていた。分かっていたが……

しかしどうしても……あの男キリヤマが統括する集団にしては、期待はずれと思ってしまうのだ。

だからこそ、もどかしさばかりが募る。

すると。

「……お言葉ですが、クラタ隊長。当基地は先のアロンとの防衛戦により、多数の死傷者を出しました。砲術科に関しては半数以上が補充要員である事をご留意頂きたく」

「なにいつ？」

すぐ隣で、コンソールに向かいながら各セクションとの連絡を中継していた隊員が、ヘッドセットを外して訂正を述べてくるのではないか。

——この期に及んで言い訳とは生意気な！

眉根を寄せて睨みつけかけたが……ふと、その声にどこか聞き覚えがあるような。



はてさて、いつ知り合ったのかと指先で何度かこめかみを叩けば……そうだ、ステーションとの定時連絡を担当している長距離通信士じゃないか。

確か名前は……

「ヨシダ！ 今から俺の声を全ての砲座へまわせ！」

「は、……ハッ！」

ヨシダ通信士が、急いで手許のツマミを幾つか弄るのを横目に、クラタはマイクを手にとった。

「V3のクラタだ。この馬鹿野郎共が！ お前達の撃ち方は全くなつとらん！ 敵を追いかけてやるとするな！ 逆にこちらの弾を追わせるくらいのもりで撃て！ とにかく広く弾をバラ撒くんのだ！ 夜空で塗り絵をするんだよ！ 下手くそが、引き金を引くより先に、いっちよ前に狙いをつけやがる！ ウルトラ警備隊にでもなつたつもりか!? そういふのはな、射撃大会で入賞してからやれ！」

基地内に過激なクラタ節が炸裂し、オペレーター達は目を白黒させるが、モニターに映る映像では、目に見えて火線が分散し、暗闇よりも曳光弾の輝きが画面を占める割合が次第に高まっていく。

すると今度は、編隊を組んだままスルスルと光の束をくぐっていた円盤達が徐々に隊伍を崩していき、銃弾の隙間で制止して、同じ場所へ留まる時間が、先ほどまでよりも

明らかに増えてくるではないか。

これまでは、攻撃が律儀に自分達の方向へ飛んできていた為に、反重力飛行特有の三次元機動を活かし、回避方向を360°。全周から選択できたが、網目のように銃弾を張り巡らされたせいで、迂闊な方向へ逃げるわけにいかず、各々の回避に集中せねばならなくなったからだ。

「そうだ！ 下手な鉄砲も数撃ちや当たる！ モグラはモグラらしく、めくら撃ちしてりやあいなんだ！ ……安心しろ、さつきBブロックの対空銃座へひとり、腕の良いのを送つといた！ キサマらの仕事は、そいつが当て易いように、敵の足を止めさせる事だっ！ いいなっ！ 通信終わり！」

「クラタ隊長……」

「ヒヨッコばかりなら、最初からそう言え」

フンと鼻を鳴らしたクラタは、ひとまずこれで時間が稼げたと、基地内の状況へザツと目を通す。

「おい、48番の隔壁が降りてないぞ。ガスが基地全体へ回っちゃおう」

ヨシダの隣で、忙しなく防火活動を指示している隊員の肩を叩くと、いかにも生真面目そうな顔が困った様子で振り向いた。

「まだ退避が完了してないんです！」

「……ええい、貸せー！」

通信機をひつたくり、通話ボタンを乱暴に押し込むや否や、先ほどと同じく罵声を繰り出すクラタ。

「救護班！ なにをモタモタしてるんだ！ 隣の区画はとつくに火の海だぞ！ キサマらのせいで隔壁が閉じられんだろうが！ 味方を殺す気か!? 歩ける奴だけ連れていけ!! ……なーにをゴホゴホ言ってるやがる。咽せてばかりじゃ聞こえんぞ！」

すると今度は無線の向こう側から、張り上げすぎて半ば裏返ってしまったような叫びが叩きつけられ、思わずクラタは受話器を耳から遠ざけた。

「かけがえのない部下だあ……？ お前！ よくもこの俺に逆らえたもんだなっ!? 所属と名前を言ってみろ！ ……なにい？ 輜重科あ？ なんでそんなところにいるんだ!? さっさと逃げんか、この大間抜けが！ もういい！ 知るか！ お望み通り、墓石には『強情で死んだ』と彫っというやる！ 勝手にしろ！」

そのまま受話器を叩きつけて一言。

「隔壁を下ろせ」

「し、しかし……！ …… まだ彼らが！」

「チツ………どいつもこいつも……！」

舌打ちを隠そうともせず、目の前の隊員を睨みつけるクラタ。

しかし相手が、それを意にも介さず、四角四面な表情でまつすぐこちらを見返し続けるものだから、ますます不機嫌そうに口を曲げていく。

「キサマは誰だ」

「ハツ、ウエノであります……」

「そうか、ウエノ。……よく聞け、7秒だ」

「ハ、7秒……?」

突然の事に思わず怪訝な顔をしてしまうウエノだったが、クラタは彼の困惑なぞ知った事かとしやべり続けた。

「隔壁のスイッチを押す。そのあと7秒! きっかり7秒で、区画の電源を無理矢理落とせ。そしたら真ん中に、ちょうど担架が通るくらいの隙間が空くはずだ」

「な、なんですつて!」

「あんなものはな、上と下さえ堰き止めちまえばいいんだ。そうすりやガスの巡りは遅くできる。……だがな、キサマが1秒でも間違えれば、さっきの鳥頭はお陀仏だ。俺の命令ではなく、お前のミスが、奴らを殺す! ……それでもいいなら、やれ」

「……は、ハイ!」

即座に配電盤へ向き直ったウエノが、呼吸を整えてから、神妙な面持ちでボタンを押し込んだ。

1……………2……………

瞬きもせず、タイマーを見つめる彼の鼻筋を、一筋の汗が流れ落ちる。

……………5……………6……………

「今！」

整備士でもなければ知り得ない、非正規の手段でもって、48番区画の電源供給がシャットアウトされた。

ウエノはかつて、マンダス星人が送り込んできた散歩惑星により、電磁波で狂ってしまった電子機器の臨時整備を手伝った際、頑固な年若い整備員に叱り飛ばされたのを覚えていたのだ。

緊急装置も含めて駄目になるから、その操作だけは絶対にするな、と。だから、これはきつと大目玉を食らう。

しかし、そんな事よりも彼は、今のが成功したのか失敗したのか、それだけが気がかりで仕方なかった。

集中の反動で浅く乱れる呼吸もそのままに、クラタを振り返るウエノ。

「ハッ……………ハッ……………わ、私は……………やれたんでしょっか？」

「知るか。電源が無いんじゃない、確認の取りようがない。安心しろ……………失敗したとして、どっちみち換気能力も死んでるんだ。丸焼きにされる前に眠ったまま逝けるだろうよ」



「遅いぞ、キリヤマ！」

「クラタ！」

「最初の攻撃で、滑走路を掃射されちまった。外に駐機してあったウルトラガードは全滅だ。俺が乗ってきたステーションホークもな」

「そうか……よく保たせてくれた」

「……よし！」

旧友の顔を見るやいなや、自身のヘルメットを引つ掴み、そのまま作戦室を出て行くとするクラタの腕を、キリヤマが掴んで引き留める。

「どこへ行く？」

「ホーク1号はまだある！」

「やめろ。いま二子山をスライドさせたら、基地の中が丸見えになる！」

外敵に対し、幾重にも強固な防備を施した極東基地の、数少ない致命的弱点がこれだった。

ウルトラホーク1号と2号の発進口である4番ゲートは、二子山の分厚い岩盤で蓋をされているため、生半可な攻撃ではビクともしない。

だが発進の際だけは、大きくハッチを開放せねばならず、機体エレベーターの昇降口が地下の格納庫から吹き抜けの如く基地の中心を貫いている為、そこへ爆弾でも投げ込

まれては、ひとたまりも無いのだ。

岩石の蓋は重く、素早い開閉はとうてい不可能であり、敵機に直上を抑えられた状態から発進しようとするれば、かなりの時間、無防備を晒す事となる。

本来はそれを補う為の長距離レーザーであり、即応可能なウルトラガードの迎撃編隊だったのだが、敵は低空飛行で岩肌を縫うように接近し、警戒網の死角を巧妙に突いて奇襲を成功させたのだった。

まるで、基地の構造を最初から全て把握しているかのような……

「くそっ！」

天井を顎でしゃくり、短く否定を述べる司令官の言葉に、突撃隊長はヘルメットを机へ叩きつけて悔しさを露わにする。

彼の本領は、空を縦横無尽に飛んでいてこそ発揮されるものだからだ。翼をもがれ、為す術なくやられ続けるなど、不愉快の極みでしかない。

しかし、そんな戦友の姿を見ても……いやむしろ、彼が内心の腹立たしさを全て代弁してくれたおかげで、より一層、キリヤマは冷静に振る舞う事が出来た。

「……だから3号を出す！」

「なんだと？」

「各砲座に通達！ 奇数番号の者はこれより、Dブロック上空を5秒間隔で斉射せよ！」



敵を滝の正面から追い払え！ 偶数番は私が命じるまで待機、動きを乱した敵の中で、一番高度の低い機体を照準するんだ！」

隊長の放った号令に従い、基地の銃座が一つの生き物のように動きを変えていく。

先ほどまでとはまた違ったパターンの攻撃が、急に襲いかかってきたので、ゴース星人の円盤群は再び対処を迫られ、一瞬ではあるが激しく混乱した。

するとその隙を逃さず、妙に狙いの鋭い対空銃座が、敵を一機、火達磨へと変える。

『バカな やられたのか』

『さて おちついて よくみてみんな』

僚機が撃墜された事で、ますます浮き足立つ円盤達だったが、敵も然る者。中にはこの攻撃の狙いを看破し、滝へ目掛けて急降下をかける機体もあった。

なんといつても、基地の造りは全て分かっているのだから、いきなり密度を増した火線が、一体どこを守っているのか一目瞭然なのだ。

確かに3号の発進口は、基地側面にある滝の裏へカモフラージュされている為、ハッチが開いても外からでは気付かないし、機体が飛び出してくるタイミングも掴みにくい。

しかし、こうも分かりやすく援護射撃をしてみれば、今から味方を空に上げますと言っているようなものだ。

進路確保の射撃ならば、誤射を防ぐためにハッチ周辺だけは、弾幕を薄くせざるを得ないはず。

『そこか』

歴戦の円盤乗りから見れば、滝から空へ、一直線に出撃ルートが描いてあるようにすら思えた。

『いいウデだ だからこそよみやすい』

分かつてしまえば、それは即ち侵入コースと同義でしかない。

銃弾の無い空間をぐり抜け、滝の正面へ辿り着いた時、激しく流れ落ちる水の裏側で、人工物の光がチラリと輝くのが見える。

『とつた！』

『今だ！ 撃て！』

……瞬間！ それまで息を潜め、虎視眈々と狙いを定めていた残りの銃座が、一斉に咆哮を轟かせ、攻撃態勢に入った円盤を全方位から刺し貫いた！

たちまち火球へと変じ、爆発四散するゴース円盤。

『進路クリア！』

『ウルトラホーク3号、発進！』

漆黒のキャンバスで咲いた紅蓮の大輪を目眩まし代わりに、銀の翼が闇を引き裂き、

飛沫の煌めきをまっすぐ曳きながら、戦場の夜空へ飛び出していく！

「ずいぶん好き放題暴れてくれたじゃねえか……！」

「フルハシ隊員！ あれを！」

離陸直後の加速中を狙われないよう、ひとまず敵編隊から大きく距離を取って旋回する3号。

アマギが指差す先で、ゴース星人の円盤が何か大型ミサイルのような物体を、基地へ投げ落とすのが見える。

重力に引かれて、真つ逆さまに落下したソレは、着弾の瞬間、その大きさに見合った大爆発を引き起こすのかと思われたが……予想と反し、綺麗に地面へと突き立った。

ちようど、柄の先で摘まんだ包丁を、砂場へそつと投げ落としたかのような、擬音で言えば『すとん』だとか『さくり』といった小気味よい音が聞こえてきそうな具合に。

「なんだ？ 不発弾かあ？」

「いえ……」

二人が訝しんでいたのも束の間、敵の投下した兵器は突然、錐のような先端を激しく回転させ始める。

そして後部から勢いよくジェットを吹き出せば、なんとそのままモグラのようにズブ

ズブと地中へ沈んでいくではないか！

その光景は、二人に強い既視感を感じさせるものだった。

「アッ!? あれは……」

「まるで小さいマグマライザーだっ!」

数秒後、地中から凄まじい火柱と土砂が噴出し、敵兵器の恐るべき全容を嫌でも理解する事となる。

「な、なんてこった……奴ら、マグマライザーに爆薬を詰め込んで、地底爆弾を作っちゃま  
いやがった……!」

「こんなもの、地下基地の天敵じゃないか!」

そうして大きく開いた破孔へみるみる群がり、次々にビームを照射して、その傷口を  
いつそう大きなものへ開いていく円盤達。

ゴース星人達はこの恐るべきバンカーバスターを、ミサイルサイロや格納庫のハッチ  
といった弱点部分へ精密に投下する事で、地下に建築された極東基地へ甚大な被害を齎  
していたのだ!

「させるか!」

再び投下準備に入った円盤へめがけ急降下。

翼の根元に設置された連装ロケットポッドが次々に火を噴いて、瞬く間に敵を蜂の巣

へと変えていく。

流石に、それほど強力な兵器を腹へ抱えた状態で被弾すれば、一撃爆散は免れないらしく、航空機に上をとられたと分かった敵機は、慌てふためいて逃げ惑う。

「フルハシ隊員！ 一時の方向から来ます！」

そして、まだ切り札を持ったまま動きの鈍い味方を庇うように、三機で編隊を組んで立ちほだかり、ホークへ目掛けて突撃してくる円盤達。

恐らく、既にドリルミサイルを投下済みで身軽なのだろう。

明らかに動きが機敏である。

「こんにやろう……！」

斉射されたビームの濁流を、鋭いバレルロールで掻い潜り、すれ違い様にミサイルとバルカンをありつたけ叩きこむ名パイロット！

しかし、そこは腐ってもゴース星人の円盤だ。一機は炎を纏いながら墜落していくが、残りの二機は黒煙を上げつつもまだ飛行を続けているのではないか。

「なんて往生際の悪い奴らだ！」

「小型艇ですら、あれほどの耐久性があるのか……」

アマギは今朝、あのパンドンなる怪獣を運んできた大型輸送機に、ホークの攻撃がまるで通用しなかった事を思い出し、唇を噛み締めた。

あれは機動性や攻撃力を削ぎ落とし、全てのリソースを防御力のみへ注いだ機体だからだと思っていたが、速力や武装も考えなければならぬ攻撃機までこれほどの難敵であるのなら、そもそも基礎科学力からして地球より何倍も優れているという事である。

先ほどの地底ミサイルだって、例え使っている技術はマグマライザーと同じでも、それを機載可能な小ささに纏め、あまつさえ使い捨ての兵器にしてしまうという辺りに、地力の違いを見せつけられたような思いがした。

ただでさえ、ソガもいなければ、ダンも戦う事が出来ないと言うのに……

——こんな強大な敵に、我々だけで勝てるのだろうか……

アマギの胸中で不安が広がっていく。

……だが、そんな考えを引き飛ばすかの如く、突如爆発するゴース円盤。

動きの鈍ったところを、地上の対空銃座から狙い撃ちにされたのだ。

「へっ、ざまあみやがれ！」

炎を上げながら墜落していく敵の姿を見て、歓声を上げるフルハシ。

——そうだ、僕達は今までずっと、こうして力を合わせて敵を倒してきたじゃないか……

人類の武器は、科学のみにあらず。

その真骨頂は、団結の力にある。

それを思い出したアマギは、サツと頭を振って、弱気を撥ね除けた。

——そうだ、今はダンにもソガにも、頼る事は出来ないんだ。だからこそ……

「……僕らがやるしかない！」

「……？ その通りだぜ！」

瞬く間に味方を墜とされ残った一機は、形勢不利とみてか、煙を噴いたまま撤退を始めた。

「逃がすか！ 丁度いい、このまま敵の本拠地をつきとめてやる！」

ますます勢いづいて、逃げる敵の背を追いかけようとするフルハシだが……

「待つてくださいい！」

「なんだ!？」

「基地はまだ攻撃を受けている最中ですよ！」

「あつ……」

フルハシは眼前の円盤と、背後の戦場を交互に素早く見やり、逡巡した。

手負いの機体を追えば、敵の尻尾をつかめる筈だ。しかし、基地は見捨てていく事になる。

とはいえ、今の攻防で流れは着実にこちらへ向いた。基地からの砲火もどんどん洗練され始めているので、残存部隊相手なら、彼らだけでも充分に凌げるはずだ。

……だが、ここでもう一押し、ホークが上空で敵を牽制し続けてやれば、基地内に格納されているウルトラガードや対空戦車が出撃しやすくなり、防御はより磐石なものとなる。それだけ決着も早くなるに違いない。

そして、そんな事をしていたら、さっきの奴を取り逃がしてしまうなんてのは、もはや言うまでもないだろう。レーダーを掻い潜ってくるような相手だ。肉眼でなければ追跡など不可能。損傷で速力が落ちている今が絶好のチャンス……

「……ハッ!？」

思わず目を瞑ってしまった彼の脳裏に、先ほどの光景が浮かび上がった。

ダンの額から滝の如く流れ落ちる脂汗。ベッドの上でだらりと力無く垂れる四肢。今にも止まってしまいそうな息遣い……

「……ちくしようにっ!!」

操縦桿を倒し急転換。

いったい何を迷っていたのか。



あそこには、死にかけのダンがいるのだ。

俺たちの大切な仲間が！

彼を守る為に、危険を冒してまで飛び出してきたのではなかったか。

「このフルハシ様の目が黒いうちは、基地にや指一本触れさせてやらねえぞっ！」

「敵の発射口をロック！」

「くらえっ！」

それから間もなく、ゴース星人の円盤群を辛くも撃退に成功し、ホーク3号が帰還した。

二人を労うキリヤマ。

「ご苦労、よくやってくれた」

「は……」

敬礼で応えるフルハシ達だが、その表情は優れない。

「どうした？」

「それが、少しでも敵の情報をもとって、昼間に戦った場所へ飛んでみたんですが……」

「セブンが倒したあの怪獣……パンドンの死骸が忽然と消えていたんです」

「なに！ 死体が消えた？」

その報告に顔色を変えるキリヤマと、その背後で訝しげに聞き耳を立てるクラタ。

「ですから、実はあの時トドメを刺しきれず、どこかで生き延びているか、もしくは……」

「ゴース星人が回収したか、か」

「はい」

もしや、先ほどの攻撃はパンドンの回収を隠す為の陽動だったのでは……？

そんな可能性が、皆の頭に浮上する。

あれ程の大規模攻撃がもし、本命では無かったとしたら……俄には信じがたいが、少なくとも敵はまだ諦めていないのかもしれない。

皆が作戦室を見渡せば、そこらじゅうで隊員たちが走り回り、通信士達のもとにはひっきりなしに被害状況の確認報告が舞い込んでくる。

敵は要塞主砲や長距離レーザーといった、基地のメインとなる設備へ火力を集中投入しており、それらを潰されてしまったからには、極東基地の戦闘力は半減したも同然。

ただ不幸中の幸いであつたのは、ミサイル発射口や長距離砲といった、直接的な火力から削る事を優先したらしく、ある意味ではそれら反撃用装備が弾除けとなった結果、動力炉や人員への損失に関してならば、地表部分の悲惨さに反し、比較的軽微で済んだと言えよう。

奇襲で抵抗手段をもぎ取ってから、悠々と基地攻略に乗り出すつもりだったのであるが、ホーク3号が無理矢理飛び出してきた為、後半の攻撃予定が頓挫してしまったのではないか……と参謀達は見ている。

「敵が防衛軍の基地上空から直接攻撃してきたのは、これで二度目だ」

「例のガッツ星人とやら以来というわけか……だったら相手にとつて不足はない。久しぶりに手ごたえのある連中だ」

「大口を叩くな。次にどんな手を打ってくるか、わからんぞ」

逸るクラタを、そう言つてキリヤマは窘めた。

彼はあの時、宇宙のV3ステーションにいたので、あまり実感が湧かないのだろう。

ここまで強固な富士要塞へ対し、もしも正面戦闘を仕掛けてくるような手合いがいた場合、それがどれほど周到に用意を重ねた上で、かつ、戦力に余裕を持たせた結果の選択なのかという事に。

なにせこの極東基地はこれまで、数多の侵略者が様々な破壊工作によつて弱体化を狙い、そしてそれすら叶わず散つていった要衝だ。

それを、小細工無しで粉碎しようと言うのだから、自信の程は推して知るべし。

手酷くやられた鬱屈もあつてか、多少、険悪なムードが漂いかけたところへ、折良くアンヌが戻ってくる。

尤も、彼女の顔色もまた、あまり優れたものとは言えなかったが。

「隊長。ひとまず重傷者の収容が終わりました」

「アンヌは、センチターを離れて良かったのか？」

「ええ、アラキ隊員達が頑張ってくれていますから。本当に奇跡的なタイミングだったと思います」

近頃のソガやダンの不調を心配したアンヌが、無理矢理にでも定期検診を捻じ込んでやろうと画策していたのが、意外な形で功を奏した。

現在の極東基地には、医療担当の隊員がほぼ全員集まってきたのだ。

とはいえ逆に、貫通爆弾が医務室を直撃していたらと思うと、もはや絶望しかない。まさに紙一重だったとも言える。

これに関してはやはり、敵円盤を弾幕で牽制し、外縁部から医務室のある基地直上までは決して侵入させなかった地上班の、面目躍如と言ったところだろう。

「でもメディカルセンチターはもう定員オーバーです。いくつかのセクションを臨時病棟として間借りしている状態なんですもの」

「そんなにか……」

「なあおい、ダンは？　　ダンは大丈夫なのか？」

「大丈夫！　　今は医務室の奥でぐっすりよ。ありがとう二人とも。もしもあのままだつ

たら……」

「良かった……」

ホッと胸を撫で下ろすフルハシとアマギ。

ようやく良いニュースが聞けたという表情だ。

「そうだわ、アマギ隊員。申し訳ないけれど、科学班の仮眠室を貸してもらえないかしら。しばらく手術どころじゃないから、それまでダンを別の場所へ移動させてあげたいの。ほら、彼つてすごく耳がいいでしょう？ ……今の医務室は、ちよつと……」

医師達の怒号と、怪我人の呻き声で満ちた空間は、控え目に言つて地獄の様相である。本格的な治療が可能となるまで、ダンには少しでも安らかな休息をとつて貰いたいというの、アンヌの思いであつた。

容態の安定した患者を他へ移せば、その分、より重篤な者を寝かせる為のベッドが空く、という事情もあるが。

「もちろんだ！ それがダンの為になるなら是非使つてくれ！ その点、あそこは遮音もすっかりしてるし、なんなら医薬品も多少は置いてあるからね。ちよつと準備してくるよ」

「助かるわ！」

そうしてアマギが、本部を退室しようとした……その時！

警報が鳴り響き、作戦室のモニターが耳障りな砂嵐で覆われる。

「電波ジャックです！」

「なに！」

「しかもこれは……ぜ、全世界の、あらゆる帯域に向けて発信されていますっ!?!」  
驚愕するウエノの悲鳴と共に、モニターが像を結んだ。

そこに映っていたのは……

「…………ソガツ!?!」

何らかのカプセルの中、虚ろな目でこちらを見詰めるソガ隊員の顔であった。

ウルトラ警備隊の仲間達が固唾を吞んで見守る中、彼は遂にその口を開くのだ。

「地球防衛軍に告ぐ……」

## 史上最大の宣戦

『地球防衛軍に告ぐ……』

聞き慣れたあの声が、抑揚のない無機質な調子でそう紡ぐのを聞き、仲間達は啞然としました。

騒ぎを聞きつけ、長官や参謀達も集まってくる。

『地球防衛軍は直ちに、我々ゴース星人に降伏せよ。我々ゴース星人に降伏すれば、火星の地底都市に移住を許可し、全人類の生活を保障する。』

——火星の地底都市だつて……!?

——おい、火星調査隊に連絡をとってみろ

『我々は強力な地底ミサイルを持っている。地球人たちは空と海の守りは堅いが、地底はまったくの無防備だ。』

——地底ミサイル？ さっきのアレかつ！

——もしかして、空から投げ落とすだけでなく、地面の下からも撃てるのか……？

『降伏に従わない場合には、不本意ながら、世界各国の主要都市を一斉攻撃し、30億全人類の皆殺し作戦を実行する。』

——なに、世界一斉攻撃だどっ！？

——そんな、皆殺しが目的なの……？

『ハッハッハッハッハ!!』

困惑が支配する作戦室へ、最後に響き渡る高笑い。

ソガの背後には、青い肌の宇宙人達がずらりと勢揃いしているのが見える。

おそらく彼は、メッセンジャーとして敵に洗脳されているのだ。

狂気の嘲笑だけを残し、モニターからソガの姿が掻き消える。

「チキシヨー………30億皆殺し作戦とは、ほざきやがる………人類がやすやす負けてたま



るかー！」

「そうだ！ 火星の地底都市でモグラになるんなら、死んだ方がマシだよ！」

「このままじつと待てというんですか!？」

サツと頭に血が昇ったのか、徹底抗戦の構えをとるクラタや警備隊のメンバー。

常に過激なV3隊長だけでなく、他の隊員もそれに同調しているところをみるに、ソガを使った挑発が思いのほか効いているのか。

しかし、その流れを止めたのは他でもないタケナカ参謀だった。

「待て諸君！ ……これは、30億全人類の運命がかかった、史上最大の侵略だ。軽率に行動してはいかん！」

「は……」

皆も、その言葉で冷静になったのか、目線を下げる。

今後の方針を決定するのは、決して彼らではないと思いだしたのだ。

「奴らの言う通り、地底はまったくの無防備だ。地底ミサイルを撃ち込まれたら防ぎようがない……」

、忸怩たる表情で、そう述べるタケナカ。

海上幕僚長でもある彼は、今まで自身の権限が及ぶ限りを尽くし、懸命に海の守りを固めてきたつもりであったが、よもや宇宙人に地底から襲われるとは思ってもいな

かった。

こうなってしまうては、麾下の戦力も形無しだ。

握る拳に思わず力が入る。

しかし……

「いや、それに関しては……なんとかなるかもしれん」

「えっ!?!」

不意に、隣のマナベ参謀がそう呟き、全員の視線を集める。

「ヤマオカ長官、以前の献策を覚えておられますでしょうか」

「うむ……地中迎撃機構の事だな」

「なんですって? 地中迎撃機構!?!」

訳知り顔の長官とマナベ以外、そんな情報は初耳だ。

アンヌが咄嗟にアマギの方を見やるが、彼もまた、驚きを隠しもせず首を振った。

「ああそうだ……諸君、これを見てくれ」

周囲の困惑をよそに、マナベが一步進み出ると、机の上に世界地図が広げられる。大陸上には無数の点が散在しており、何らかの分布を示しているらしい。

「参謀……これは？」

「うむ。……ところで、キリヤマ君。直近で私の主導していたプロジェクトが何だったか、分かるかね？」

「は……確か……ノンマルトに関するものだったと記憶しておりますが」

隊長の言葉に、頷くマナベ。

「その通り。私は長官直々に、ノンマルトの主張する歴史の裏付け作業を拜命していたんだ。その関係で、MJ計画については、タケナカ参謀に一任することになってしまった。……その節は、すまなかつたね」

「いえ……」

マックスジョーは最終的に海軍所属となった為、サルページからドックでの改修作業まで、ほとんどこちら側で準備を進める事となってしまうのを思い出し、恐縮するタ

ケナカ。

確かにここしばらく、マナベは各地を飛び回っており、極東基地で見かけることは少なかったが……

「そしてその中で、各国基地と連携し、彼らの遺跡を調査、発掘したのだが……」

「……まさか」

「そう、この赤点が実際に掘り起こした地底遺跡。そして青い点が、位置のみ特定完了し、今後調査予定のものだ」

「……こんなにつ!?!」

首脳部が勢ぞろいしている前だというのに、聞いていたフルハシが思わず素っ頓狂な声を上げた。

それほどに、地図へ記されていたマークが多かったのである。

赤点ですら、各大陸に数個はあったし、青点に至っては、連なつて線のようになっている地域すら存在していた。

「驚くのも無理はない。かく言う私もそうだったからな。自分たちが住んでいる地面の下に、これだけ多くの地下遺跡が存在していながら、人類はそれにまったく気付いてい

なかったと言うのだから……ゴース星人の言うことも尤もだ。我々は地底に対し、全くの無防備だったのだよ」

「……なんとということだ」

思わず声を失う警備隊。

「……だが！ この調査によつて、幸運にも私達はその事実へ気付く機会を得た！ 奇しくも、ヤオ代表からは、いずれ地底より強力な怪獣が出現する可能性を示唆されていたこともあつて、地下警戒網の構築を秘密裏に進めていたんだ。……君たちが知らないのも無理はない。これはあくまで内への備えであつて、対外的にはMJ計画こそが主だったからな」

そのマックスジョーも、サロメ星人のアンドロイドゼロセブンの闘いで大破し、現在は地下格納庫で修理中だ。

折られた右足だけはなんとか間に合わせて繋いだものの、艦橋となるペガ円盤との回路が切断したままな為に操縦不能であり、先ほどの戦いでも出撃不可の置物になるしかなかったのである。

故に、手も足も出ないかと思われたところへこの情報を聞かされたタケナカからすれば、まさしく瓢箪から駒が出てきたような気分だった。

「よもや、それがこうして侵略者への対抗手段になり得るとは思いもしなかったが……  
備えあれば憂い無しだ」

「……いえ、流石のご慧眼です。長官」

キリヤマ達の敬礼へ、鷹揚に頷くヤマオカ長官。

フルハシやアンヌがしきりに感心する中、アマギだけはふと、この壮大な構想の発案者というのは、案外自分たちの身近にいたのではないか……というような邪推をしかけて、慌ててそれを思考の端へ追いやった。

あまりにも突飛な、根拠に乏しい思い付きだったので、我ながら馬鹿馬鹿しくなってしまうからだ。

「で、どうだね？ 使えそうか？」

「まだ試験段階で効果は未知数ですが……元はハイドラランジャーに搭載されていたローレライシステムを、グランドソナーへ転用したものです。既にあちらでの成果は出ていますので、後は……やってみるしか、ありませんまい」

「よし……キリヤマ隊長。我々は各国首脳を集めて、対策会議の真似事をやる。出来るだけ、長引かせるから。ウルトラ警備隊はなんとか、敵の基地を見つけてくれ」

「はー」

恐らくこちらの動向を伺っているであろうゴース星人への囮として、『降伏を真剣に検討しているので待ってくれ』というポーズだけは実施し、それを隠れ蓑に使って、各基地と地中迎撃機構に関する連携作業や敵の捜索を行うつもりなのだ。

事ここに至っては、自身の命と肩書すらも敵を欺く武器として使う。

それが、現場で銃を撃たない防衛軍上層部としての、戦い方だった。

しかし……

「アッ!? グランドソナーに感アリ! G地点よりモスクワ基地へ向けて地中を移動する物体を捉えました!」

「パリ本部より入電! P区画より地底潜行物の発射を観測!」

「ワシントン基地、通信リンク最大稼働! これよりニューヨークへ侵入する、地底ミサイルと思しき目標の迎撃に入ります!」

各地点から数発のドリルミサイルがほぼ同時に放たれた。

世界各地の主要都市に向けて猛進するそれらだが、どれもほぼ近郊に防衛軍の支部が存在する。

各国基地への先制攻撃が目的なのは、明らかだった。

「バカな!? もう攻撃してきたのか! 早すぎるっ!」

「……けっ、なにが降伏だ。向こうさんも、はじめからそんなつもりは無いとよ」

幸か不幸か、極東基地へ向けて発射されたミサイルは無いようであったが、それは逆に他基地が壊滅した場合、残った最後の地球防衛軍として、孤立無援で戦わなければならないという事だ。

「もう、迎撃システムに賭けるしかないっ!」

「各基地、マグマライザー緊急発進! 地底魚雷発射!」

地中迎撃機構といっても、中身は単純。

半量産化に成功したマグマライザーには元々、無人戦車の指揮車両として無線操縦機能が備わっていた。

おまけに無補給で2週間は連続稼働が出来るという化け物じみた持久力を持っていることを利用し、マグマ自体を数台単位で無人戦車群としてリンクさせ、休眠状態で地底にあらかじめ待機させておく。そしてそれぞれのグラウンドソナーの測定値を元に、地底移動物体の進路を三次元的に算出するというもの。

あとはその進路上に地底魚雷を一斉に発射、最悪の場合は車体自体を対象に激突させ



る事で迎撃する。

そしてその結果は……

「め、命中！ 命中です！ ニューヨーク、防衛成功！」

「ロンドンも同じく迎撃完了！」

「シドニー、海底魚雷命中せず！ しかしマグマ本体の衝突により対象破壊！」

「パリ本部、ベルリン支部との共同迎撃に無事成功したとのこと！」

「モスクワより入電、ワレ第二次防衛線上海迎撃成功セリ」

各国から次々と無事の知らせが舞い込んできた。

歓喜に沸き立つ作戦室。

「やった……やったぞー！ へへ、見たかゴース星人め！ ご自慢のミサイルも大した

事ねえな！」

「すごい……これなら！」

「やりましたね、長官」

「うむ」

ようやく敵の思惑を崩せたと、晴れやかな顔で頷き合う一同。

……しかし。

「……カイク基地より返答がありません」

「なに?」

「……迎撃したミサイルの地底爆発で、地磁気でも狂ってるんじゃないのか。もしか、地震でも起きて混乱しとるんだらうぜ」

「呼びかけを続けます」

クラタが樂觀的な台詞を口にするが、内容に反してその表情は非常に厳しい。内心では別の事を懸念しているのが明らかだった。

皆も一様に押し黙り、通信士のカイ口基地呼び出しに返事が返ってくるのを固唾を呑んで待つ。

……そして。

「——ッ!? こ、これは……隊長、パリ本部経由で送られてきた情報です。アフリカ方面の各駐屯部隊からの報告であると……」

未だにカイ口と通信を試みる隊員とは、また別の通信員が、電信機から吐き出されたテープをもぎり、手渡してくる。

その声は微かに震えたものだった。

「……カイ口基地……消滅……」

「なに、消滅!? バカな! 何かの間違いではないのか!」

「そうだ、信じられん。例え迎撃に失敗したとして、カイ口基地は砂漠の熱砂にも負けぬ

特殊耐熱バンカー群だぞ。被害がいくら甚大でも、どこかの区画が生き残っているはずだ」

「映像、出ます！」

モニターに荒い映像が映し出される。

おそらくカイロから遠く離れた小都市の駐屯地が、望遠レンズを用いて撮影したのだろう。

だということにも関わらず、画面上にはモニターを覆い尽くす程に巨大なキノコ雲の根元が、ハッキリと映っており、カイロ上空は朦々たる黒煙によって、夜と見紛う暗さとなっていた。

「カイロ基地の周囲半径30キロは壊滅状態。爆風の影響範囲まで含めれば、被害は絶望的との事です」

たった一発。たった一発のミサイルで一つの都市が丸々、地図から姿を消してしまっただのである。

地球の核兵器など、目では無い程の破壊規模。

先ほど、富士要塞へ投げ込まれた爆弾は、これと比べれば花火にも等しいと言えるだろう。

ゴース星人の本命はこちらだったというわけだ。

「なんとという威力だ……」

思わず椅子にへたり込み、沈痛な面持ちで瞑目するヤマオカ長官達。

もしも迎撃機構がなければ、先ほどの攻撃で地球防衛軍は事実上の壊滅状態に陥つていたのは明白だ。

そして敵は、恐らくまだまだ残弾を残しているはず。

ミサイルの波状攻撃を一度でも取りこぼせば、その瞬間には、そこが第二のカイロ基地となる運命なのだった。

「……こうしてはおれん！ さっきの攻撃を逆探知するんだ！ そこに敵のミサイル基地がある！」

「至急、各基地とデータリンクを行います！」

タケナカの指示で先ほどの観測結果が集積され、電算機がその航跡を弾き出す。

そして、各大陸に散在するいくつかの地点を割り出した。

「……ん、待てよ？ これは……まさか！」

ハッと何かに気付いたマナベが、計測値と先ほどの世界地図を照らし合わせてみれば……

「やはり！ 思った通りだ！」

なんと、地下遺跡を示す青点……つまり、まだ手つかずの地底建造物があると目され

る場所と、ぴったり合致するではないか！

「そうかつ！ 奴らめ、既にある地下空間を利用して、急拵えの前哨基地に改築しやがったんだ！ どおりで工事が早いと思っただぜ！」

「各国基地、精鋭による突入部隊を緊急編成し、マグマライザーでの揚陸制圧を試みるそうです！」

「でかした！ そのどれかにソガ達もいるはずだ！」

「頼むぞ……！」

ただでやられてばかりの地球防衛軍ではない。

即座に反撃態勢を整え、敵の攻略に乗り出していく。

やはり初撃を凌げた事は非常に大きかったと言えるだろう。

残念ながら極東基地は、先の空襲によるダメージから回復しきっておらず、地底基地攻略は他国の部隊に任せざるを得なかった。

仲間の為にも、突入部隊の健闘をただ祈るしかない。

そんな時だ。

「……モスクワ基地より入電。……えっ!? 都市部に怪獣飛来っ!」

「なにつ、怪獣といったか! ……よもやパンドンではなかるうな?」

「……いえ、モスクワ基地は過去資料より、ペギラと断定した模様!」

「な、ペギラ!? ペギラだと! そんなバカなっ!」

その声に思わず椅子を跳ね飛ばして、誰よりも速く通信機に飛び付いたのは、なんとクラタだった。

「クラタ。確かペギラは、南極基地建設の際に、我々で倒したのではなかったかっ?」

「そうだ。俺たちの飛行隊で、奴の口にあったけのペギミンHをお見舞いしてやったんだ。他でもないこの俺が倒したんだぞっ! 何かの間違いだっ! 露助の言う事なんぞ信用できるかっ!」

「それがなぜモスクワにいるんだっ!」

「待って下さい!」

思わぬ怪獣の登場に、珍しく動揺する隊長達に待ったをかけたのはアマギだ。

「確か、過去の記録によればペギラは一度、東京に姿を見せた事がありますが、それは南極から北極へ向けて渡りを行う途中だったのではないかと考えられています。今回現れたのはその時の個体で、クラタ隊長達が倒したのは、まだ南極に残っていた個体なのではありませんか?」

「しかし、だとすれば奴はなぜ、北極基地の飛行場を敷設する時に襲ってこなかったんだ。北極は南極と違って、潜って身を隠せるような地面もないんだぞ。今までどこにいたんだ!」

「それは……」

冷静な指摘に言い淀むアマギ。

いかな彼と言えども、怪獣の生態に関しては殆ど未知の分野だ。ある程度の仮説までは立てられたとして、確証のある事ではない。

「これより、即応可能な砲兵隊で飽和攻撃を実施し、直接火力による目標の粉碎を試みる  
そうです」

「噂の戦車大隊か……だが奴相手に地上部隊では分が悪いぞ……」

大口徑砲の集中運用による、火力と物量にあかせた破碎射撃は、ロシア方面軍のお家  
芸だ。

横殴りに吹き荒む鉄の雨が齎す、純粋な質量の暴力は、これまで数多の巨大生物と侵  
略者を屠ってきた実績がある。

だが、それは裏を返せば、彼らの装備の殆どが、旧来の通常兵器群から長らく更新さ  
れていない事を意味していた。

ただでさえ広大な土地へ、満遍なく部隊を配置しなければならぬのに、劣悪な極寒  
環境下において、高価な上、メンテナンス性に難がある超科学兵器たちを維持運用し続  
けるのは、実質不可能に近いと判断されたからだ。

クラタの脳裏に、あの時の光景が蘇る。

特殊弾頭ミサイルを致死量まで投射するために、援護のスノーモービル部隊が怪獣を惹きつける役目を買って出てくれたが、ペギラの引き起こす絶対零度下の無重力現象によつて、出て行く端から木の葉のように吹き散らされていったのを、彼はよくよく覚えていた。

切り札の特効薬があつた時ですら、あれほどの激戦だったのだ。

ましてや急に現れた怪獣に対し、使い処の限定される特殊弾の備蓄など、あろうはずがない。

果たしてどうなるか……クラタが臍をかむ。

「しかし、なんて間の悪い奴だ。よりよつてこんな時に襲つてこなくても……」

「こんな時に、か……」

フルハシの呟きを拾いつつ、険しい顔で意味深に目配せし合うクラタとキリヤマ両隊長。

……嫌な予感が、する。

そしてそれを裏付けるかのように、凶報はこれひとつで留まらなかつたのだ。

「今度はワシントンのボガード参謀から通信です！」

「よし、繋げー！」

モニターに、金髪碧眼の参謀が映る。



会議で頻繁に顔を合わせている上層部はさておき、ウルトラ警備隊の隊員達とは随分久方ぶりの邂逅となるが、それがこのような形になってしまった事を、決して喜ばしいと思っていない事が、彼の表情からありありと見てとれた。

『ヤア、ウルトラ警備隊の諸君。いきなりで悪いが、バッドニュースを伝えなければならぬ』

「モスクワの件は聞き及んでおりますが……」

『そうじゃないんだ。実は……ニューヨークにも巨大なモンスターが出現した』

「なんですって?!」

ざわめく作戦室。

『これより、ワシントン基地はその対処で手一杯となるだろう。極東基地が深刻なダメージを負ったと聞いていたが……残念ながらそちらの救援には行けそうもないんだ。すまなく思う。……君達の方では異常ないか？ 様子だけでも聞いておきたくてね』

「は、お気遣い痛み入りますが……今のところ、何も」

『そうか、それはグッド。モスクワに続きニューヨークにも……となれば、他の基地が不安になってね』

「……やはり」

ボガード参謀もまた、似たような懸念を抱いているようだった。

まだハッキリとそう決まったわけではないが、言い知れぬ不安感が、皆の胸中に広がっていく。

「もしやその怪獣は、パンドンではありませんか？　赤い体表に、二つの頭を持つ悍ましい怪獣です」

『……いや、そのような異形ではないが……見て貰った方がはよいな。コイツだ』

ボガート参謀が共有してくれた映像が、作戦室のモニターに大写しとなる。

そこには、純白の体毛と強烈ないかり肩を持つ、雪男を彷彿とさせる巨大猿人が、エンパイアステートビルによじ登り、所構わず冷凍光線を吐きまくっている姿があった。

「あつー！　あれは……ギガスじゃないか！」

「まさか！　ギガスは日本アルプスで撃破したはずだ！　なぜニューヨークに!?!」

そう、それはかつて日本アルプスに出現した冷凍怪獣ギガスだった。

尤も今映っている個体は、ウルトラ警備隊が倒したものより、二回り以上もでかい。それでもその独特なシルエットは、例えば大きさが変わろうとも、決して見間違える事のないものだ。

あの時は、新型気化爆弾のテストも兼ねた、ホーク二機の絨毯爆撃の前に木っ端微塵となり、セブンの出る幕もなく終わってしまったが、過去に出現した個体と比べて小型だった事から、先の個体の子供か、さもなれば、つがいの雌だったのではないかと目さ

れていた。

恐らく今、摩天楼を我が物顔で暴れ狂っているのが、正真正銘、成体のオスなのだろう。

「ここまで大きくなるのか……」

「前に戦った奴より、ずいぶんデカいぞ！」

『なんだって?! 前に戦っただと!』

するとその声を聞きつけたのか、ボガート参謀の肩越しに、サンングラスの伊達男がカメラを覗き込んできた。

「あつ、貴方はマーヴィン捜査官……!」

『久しぶりだな、クレイジーガイズ。そんな事より、サスカッチと戦った事があるつてのは本当か?! キミらはどうやって倒したんだ? 教えてくれ!』

「サスカッチ……?」

興奮した様子のマーヴィンを訝しむ警備隊に、エージェントの傍らに立つ美女が、豊かな金髪を揺らして情報を補足する。

ワシントン基地の誇る才媛、ドロシー・アンダーソンだ。

『はい。レジストコード、サスカッチ。巨体に似合わぬ俊敏さで、ビルディングの高層を跳び回るため、ニューヨークの部隊は今、とても対処に困っているのです』

『おまけにあのタフネスだ……やつとの思いで攻撃を当てても、一発二発じゃ痛くも痒くもないらしい!』

ビル街が死角となり、戦車隊はうまく仰角がとれず、代わりに上空から、コンクリートの合間を縫って接近に成功した攻撃ヘリが、機銃でピンポイント射撃を試みるも、ギガスは当たった場所をポリポリ搔くばかりで、ちつとも効いた様子がない。

ただでさえ、分厚く引き締まった筋肉が、鋼鉄の如き頑強さを発揮するというのに、ギガスはその毛深さで、自分へ飛んでくる銃弾の勢いを全て減じてしまうのだ!

そればかりか、惚けた顔で周囲をきよろきよろ見渡したかと思えば……

『Oh!?!』

「危ないっ!」

見つけたヘリコプターへ向けて大跳躍!

真っ白な巨体に向かいのビルに着地し、衝撃で割れ砕けた窓ガラスやコンクリートが、粉吹雪のように舞い上がる。

当然、パイロットも咄嗟に離脱を試みたのだが、少しでも射撃の威力を高めようと接近していたのが災いしたのだろう……怪獣の右手にはしっかりと攻撃ヘリのテイルローターが握られていた。

そして、片手が使えない状態だと言うにも関わらず、そのまま両足と左手を器用に使

い、まるでボルダリングでもしているのかと思うほど軽やかに、ビルの壁面を登っていくギガス。

彼は大昔に、寒冷地仕様の運搬用生物として産み出された際、これまた太古の山岳に棲息していた高原竜の、強靱な下半身を参考として設計されていたので、脚部のみでも、凄まじい登坂力を発揮できるのだ。

傾いたビルの屋上へ辿り着いたかと思えば、左手で掴んだ避雷針を軸に回転し、遠心力をのせた円盤投げの要領で、持っていたヘリコプターを投擲！

遠巻きに見守っていたもう一機の武装ヘリすら撃墜してしまうではないか！

『コオオーツホツホツホツホツホオオオオウー！』

愉快そうに上下左右へ肩を揺すり、台車もかくやと言わなければならない自身の胸部を、両の掌で叩きまくっては、歓喜の咆哮を上げるギガス。

彼は今まさに、このコンクリートジャングルへ絶対的な王者として君臨していた。

『——マイガツ……!!』

『だいたい……サスカッチだと言うなら西海岸の奴らの管轄だろう！ それをよりによってロッキージャやなく、アパラチアから降りて来やがるなんて……とんだ観光客だ！』

「俺達の時は、拓けた山岳地帯に出やがったから、新型気化爆弾を山ほど落として、粉々

にしてやったんだがなあ……」

『気化爆弾だつて!! おいおいフルハシ、そんなデンジャーなものを市街地の中心で使えつて言うのか!?! 奴が死ぬ頃にはニューヨークは焼け野原だ!』

「それくらい分かってらあ! ……ちくしょうめ、街中で戦うと、こんなに厄介だったのか……!」

『しかし、このまま手をこまねいていれば、奴を暴れさせたままと、我々が街を破壊するのと、どちらがマシか分かったものではない。こうなったら爆撃も考慮するしか……』

苦渋の決断を迫られるワシントン基地。

「……いや、まだ手はあります!」

『本当か、ミスターアマギ!』

先ほどから、基地のデータベースで何かを検索していたアマギが顔を上げる。

その瞳には、あの頼もしき叡智の閃きが宿っていた。

「気化爆弾は元々、強力乾燥ミサイルの威力を落とし、より広範囲の空間へ長時間効果が及ぼすように改良したものです……でもそれは、現行の材料で本物を完全再現する事が不可能だったが故の、言わば苦肉の策に過ぎない。ですがアンダーソンさん、貴方なら……!」

『ワタシに、あの兵器を復活させろと仰るんですか? そんな……とても出来ません』

突然の指名に、物憂げな瞳を伏せて、尻込みするドロシー。

「大丈夫。本物を100%再現する必要は無いんです。そもそも怪獣一体を丸々凍結させるような威力は過剰すぎる。その半分……いや四分の一以下の出力で充分なんです」

『それであのビッグフットが倒せるのか?』

「ああそうだマーヴィン。いくら大きくなろうとも、奴の躰の造りが霊長類のソレに近しいと仮定するなら、うなじの部分には重要な神経や血管が集中しているはずだ。そこへ正確に撃ち込む事が出来れば……!」

『奴はダウンして真つ逆さま、か!』

『確かにそれならば……ワタシにも、出来るかもしれない』

「今からデータを送ります。……ああそれから、ゴロン星人との戦闘記録と、超猿人の脳波パターンも入れておきましょう。何かの役に立つかも知れない」

『頑張ります!』

『サンクス、アマギ隊員。これであのモンスターにひと泡吹かせてやれるだろう。我々だけでもやってみせるさ』

『こつちが終わったら、すぐに応援に行くからな! ……おい、例のサムライボーイズを呼び出せ! 奴らの腕が必要になるかも知れないぞ! ビッグフットにはドラゴンだ!』

ワシントン基地との通信が切れる。

「ドロシー達、うまくいくかしら……」

「成功するに決まってるさ！　なんてつたつて、一緒にキングジョーを倒した仲間なんだからよ！」

「ええ、あとは時間の問題でしょう……ですが……」

「ですが？　ですが、なんだってんだ？」

言い淀むアマギ。

フルハシが見渡すと、首脳陣の表情も皆一様に優れない。

「諸君、どう思うね」

「……余りにもタイミングが良すぎるかと」

「私もそのように思います。これで終わるとは、とても……」

「そうだな……」

そしてその懸念は、残念ながら的中してしまふ事となる。

「パリ本部より通達！　市街地に突如としてネロンガ出現！　現在、警戒の為に展開し

ていた部隊で応戦中！」

「やはりか！」

「ついに本部を狙って来やがったな！」



「映像、出ますー！」

画面には、炎と煙の燻るシャンゼリゼ通り。

凱旋門の向こう側では、稲妻を纏った巨大な影が、美しい街並みを破壊しているのが見えた。

……パリが燃えている！

既にネロンガは体を透明にしているのか、遠目では全体像が把握できず、着弾により舞い上がった土埃と硝煙がその輪郭を縁取る事で、辛うじてそこに『何か』が存在しているのだと確認出来る。

そして怪獣がいると思しき空間を、本部直属のメーサー車部隊が薙ぎ払うが、パラボラから発された大出力の殺獣光線は、一点に差し掛かるやたちまち屈折して、それぞれあらゆる方向へ飛んでいってしまうのではないか。

決して出力不足な訳では無い。都市防衛の要を担う虎の子である光学兵装は、本来であれば怪獣の耳など一撃で消し飛ばす威力を持つ。

しかし、10万ボルトの熱量でニュートリノを生成し、敵の細胞へ叩きつける事で対象を焼き切ってしまう秘密兵器も、ネロンガ相手となれば形無しだ。

この怪獣は、触角から放つ電撃で強力な磁場を発生させる上、表皮組織の光波偏向による透明化を持つ為、メーザーやレーザーでの攻撃に滅法強いのである。

だが人類側も負けてばかりではない。流星は防衛軍本部のお膝元。効きが悪いと悟ったのか、パリ防衛隊は一旦メーサー部隊を下がらせ、実弾兵器を中心とした攻撃に切り替えるようだ。

救国の英雄の名を冠したド・ゴール広場に、長距離砲やロケットランチャー部隊を布陣させ、一斉攻撃の準備を速やかに整えた。

その中には、弾頭を特殊噴霧装置に換装したミサイルもあり、ネロンガの透明化を無効化してやろうという腹積もりらしい。

パリジャンは、ロレーヌ十字の名の基に、侵略者への反骨心で満ち満ちている！  
殺意に溢れた陣容を見て、満足そうに鼻を鳴らすのはクラタだ。

「ふん、メーサー部隊を擁するパリ本部に透明怪獣をぶつけたまでは褒めてやるが、ちと詰めが甘かったようだな」

「それ見た事か！　パリ本部にはどんな兵器も一揃いあるんだぜ！　今だ、やつちまえ！」

「……ん？　いや待て！」

画面内の僅かな違和感に、キリヤマが気付いた時には遅かった。

地面に亀裂が走ったかと思つた瞬間、集結した部隊の足元から、何か巨大なシャベルの如き鋭角の物体が、石畳をがち割って、広場の中心に堂々と突き立ったのである！

その茶色い大きな三角形は、パティシエがケーキでも切り分けるような容易さで、凱旋門の根元に大穴を穿ち抜くと、地中からずりりとその巨体を引き抜き、起き上がる勢いそのまま直上にある勝利のシンボルを、頭突きでいとも簡単に突き崩してしまう！

地獄門をぶち破り、地上へ姿を現した土気色の悪魔は、節くれ立った爬虫類が、後ろ足で直立したような姿をしていた。

スコップを彷彿とさせるほど薄く鋭い口吻を持つ、その怪獣の正体こそ……

「テレスドンだ！」

「二体目の怪獣だ?!」

テレスドンは、いかにも目付きの悪い邪悪な顔で、眼下の地上部隊を睨みつけたかと思えば、ぎざぎざの歯がずらりと並んだ口から、マグマと同等の熱量を持つデプス火炎を噴射して、彼らを全て火の海に沈めてしまった！

飴細工のように蕩けていく地上部隊。

灼熱に歪んだ空気の中、真っ黒に焼け爛れた鉄の荒野を、蜥蜴の怪物がのっしのっしと歩き回る様は、まさに地獄の蓋が開いたよう。

近くの戦車隊が急いで回頭し、テレスドンの侵攻を阻止しようとするも、怪獣の表皮には傷一つ付かない！

地中深くマントルの圧力に鍛えられた外皮は、ダイヤモンドや鋼鉄すら軽く凌駕する

のだ。

地底怪獣が自慢の尻尾を一振りすれば、破壊されたアーチの残骸が、今度こそ完膚なきまでに粉碎され、大量の石礫となってレジスタンスを襲う。

それに巻き込まれ撮影者がやられたのか、モニターが暗転したのを見ると、クラタが歯を噛み締めて、苛立ち紛れにパチンと指を鳴らした。

「これで決まったな……どいつもこいつもゴース星人の手先に違いない！ ……見ろ！  
その証拠に縄張り争いどころか、互いに見向きもしなかった！」

「それどころか、連携しようとしていたようにすら見える……ビームの効かないネロンガ、砲撃に耐えるテレスドン……」

「パリ本部は、一連の怪獣出現をゴース星人の地上破壊工作と判断したようです！」

「これにより、鹵獲要塞『シヤール・ド・ディノゾール』の投入を決定！ 無人戦車群の援護のもと、玉砕覚悟で二体怪獣の撃滅を図る模様！」

「激しい戦いになるぞ……」

そして極めつけとばかりにロンドンへ、岩石怪獣ゴルゴスが、攻撃円盤の編隊を伴って現れた事で、いよいよそれが敵の第二次攻撃なのであると確信したウルトラ警備隊。

ゴース星人は、地底ミサイルが思ったように戦果を上げなかった時の為に、奥の手として怪獣達による同時侵攻すら準備していたのだ！

「またしても海底からか！ 地中迎撃機構は作動していなかったのか？」

「いえ、それが海からの侵攻だそうです。直前まで流水に擬態していたようで……」

「なに、海から!？」

「ロンドン支部の海軍相手に真っ向から喧嘩を売ったのか。とんだ自信家だな」

「警戒に集まった艦隊の中心で、突如生命活動を開始したらしく……怪獣に応戦しよう  
と回頭したところへ円盤が急速接近、そのまま乱戦にもつれ込んだ模様」

「ゴルゴスの発する強力な磁性に引き寄せられ、航行不能に陥る艦が続出しているよう  
です……」

ロイヤルネイビーも決して油断していたのではなく、むしろこのタイミングで現れた  
謎の巨大氷山を怪しんで、いつでも攻撃できるように取り囲んだのが仇となった。

動きが鈍く、大質量の体当たり以外はこれといった武器を持たない代わり、耐久力に  
優れるゴルゴスを被害担当艦とし、攻撃力は円盤の空爆によって賄う事により、精強な  
イギリス海軍に痛打を与える事に成功したのである。

「これまで怪獣だけで攻めてきてきていたのは、これを狙ったのか……なんて巧妙な……」

「ゴルゴス、以前に出現したものより巨大になっているとのこと。海底の沈没船や氷を  
取り込み、耐久性を増しているものと考えられます！」

「その再生力で防衛艦隊の包囲網を正面突破し、テムズ川より遡上中！」

そうしている間にも、各地から届けられる苦戦の知らせ。

さしものヤマオカ長官と云えど、この状況には焦りを隠せないのか、皺の刻まれた顔を、冷や汗が滴り落ちる。

「まさか、これほどまでの戦力を用意しておったとは……この怪獣総進撃は、明らかに迎撃機構の関連施設破壊を狙ったものだろう。システムに綻びが出た途端、ミサイルの第二波を撃ち込んでくると見て、間違いない……今の我々は、ザイルにナイフを添えられているようなものだ」

「しかし長官、敵に王手をかけているのは、こちらと同じです！ 地底基地を突入部隊が制圧するのが先か、各国基地が陥落するのが先かの根比べ。奴らも切り札の怪獣を全て繰り出して、最後の悪足掻きをしようとしているに違いありません！」

！  
タケナカがそう励ますと同時に、全員が待ち望んでいた福音が、ようやくもたらされた

「マグマライザー全車、各ミサイル基地に到達！ 制圧部隊、突入を開始しました！」  
「よっしゃあああーっ！ やったぜーっ！ そのままやっちゃまえ！」

先ほどまでの暗く沈んだ顔を一変させ、晴れやかな笑顔で頷き合う隊員達。  
参謀達も、思わず握り拳に力を込め、ようやく額の汗を拭う事が出来た。

——あともう一押しだ。

誰もがそう思った時、再び作戦室のランプが点滅し、モニターに砂嵐が巻き起こる。ゴース星人の電波ジャック！

またしても画面に浮かび上がったソガの顔。

「へっ、なんだ？ 今にも負けそうだってんで、慌てて詫びでも入れにきやがったか？ 降参するから許してくれなんて、虫のいい話がいまさら通るかよ！」

普段の威勢を取り戻したフルハシが、モニターに対して啖呵を切る。

次の瞬間には、ソガのいる画面内へ突入部隊が雪崩れ込み、敵を叩きのめして彼を助ける場面が映り込むだろうと信じて疑わなかった。

だが……

『……………』

「……………？ おい、なんだあ？ もしかして電波が途切れて止まっちゃったのか？」

一言も発する事無く、不気味な無表情のまま、微動だにしないソガ。

わざわざ向こうから繋げて来たにもかかわらず、無言を貫く意図が分からない。

放送事故かと訝しんだフルハシが、モニターに手刀を叩き込むべきか悩んだ時だ。

「……………！ マグマライザー全車、及び突入隊員の反応ロスト！」

「なにっ!？」

「同時刻に、各地点から小規模な振動を観測したと……」

「全て地底基地が……突入部隊諸共、一斉に自爆した模様です……！」

「そんなバカなっ!？」

「現に映像はまだ……続けているじゃないか……！」

アマギが震える声で指し示す先、ソガの口角がにやりと吊り上がり、底意地の悪い嘲笑を浮かべた。



## 史上最大の葛藤

モニターの中、不敵に笑うソガが、ようやく口を開いた。

『地球防衛軍の諸君……まずは謝罪させてくれ。よもや地球人が、地底に対しても、あのような備えをしているとは驚いた。無防備だなんて、とんでもない。先ほどの言葉は訂正するよ。』

「……けつ、嫌味にも程がありやがる」

『お詫びにささやかながら、怪獣軍団のプレゼントを贈っておいたが、喜んで頂けたかな？ なあに、遠慮する事は無いのだ。地底ミサイルの方もたんと用意してあるから、後でそちらも味わうといい』

すると画面が切り替わり、地底基地内と思わしき空間にドリルミサイルがずらりと並んで、発射の時を待っているのが映し出される。

その恐ろしさに、思わずハツと息を呑むアンヌ。

たった一発であれほどの威力があったのに、これを一齐に撃ち込まれたら……

『そうそう、地底ミサイルと言えば。先ほど、使い捨ての発射基地を纏めて処分したのだ

が、諸君らのお仲間がいると気付かず、一緒に爆破してしまった。あそこには元々、数発のミサイルしか置いて無かったから、我々には用済みのゴミ同然だったのだ。残念な事をした。……それとも、口減らしの口実だったのかな？ 安心したまえ。奴隷は何人いても良いものだ。ゴース星人は、降伏する全ての人類を受け容れよう。これ以上、無駄に殺す必要なんてないのだよ。……ハッ、ハッ、ハッ』

散っていった仲間たちを、無駄死にだと揶揄する冒瀆的行為に、怒りで拳を握りしめたフルハシは、今にもモニターを叩き割る寸前だ。

その前へ、横から静かに腕が差し込まれ、彼の激発を制する者がいる。フルハシがそちらを振り向けば、キリヤマ隊長がじつと前を向いたまま、まんじりともせずモニターを睨みつけていた。

彼の顔付きは普段通りの厳めしいものであったが、歪んだ口元から、小さく何か擦り合う音が漏れるのを聞いて、恥じ入ったように腕を降ろすフルハシ。

彼が画面へ向き直るとはほぼ同時に、肩を揺するのをやめたソガの顔面から、作り物めいた笑顔が、すつ……と抜け落ち、再び無感動な能面が現れた。

口調も、なんの感情もない平淡で事務的なものに戻り、もはや一方的な通告を伝えるだけのスピーカーへ変わるソガ。

『返事はまだか。カイ口基地は見せしめだ。今か、ら2時間後に、なんの回答も得られな

い場合、は、総攻撃を開始、する。それが人類最後の時とな……るだろう。……イエスカノーか、半分か。その答えが欲しい』

「2時間……か」

「ソガ隊員……」

おそらく宇宙人の洗脳催眠が、ソガの体に負担をかけているのだろう。どんどん途切れ途切れになりつつある降伏勧告。

無表情な彼の顔にも薄らと汗が滲みはじめ、どことなく辛そうにも見える。

腹話術の人形の如く、意識の無い状態で無理矢理、通訳として喋らされているのだから当然だ。

『降伏か、さもななくば、死あるのみ。諸君らに残された未来はその二つだけだ。それ、とも、全ての怪物を打ち倒した後に……尚、我々、と、全面戦争、をする余力があると言うなら、よかろう。我々は……火星、の、地下基地、から、いくら、でも、援軍を、呼べる、のだ。君たちの戦力が尽き果てるその時まで、付き合っただけでやるぞ。』

そこまで言っただけで、一度がつくりと項垂れるソガ。

余裕綽々といった内容に反し、ゴース星人の精神汚染で彼の肉体は限界に近いのだろう。

しかし、再びマリオネットじみた動きで、がばりと素早く身を起こした彼は、カッと

目を見開き、口角を弓なりに吊り上げて、そこに浮かんでいたのは、まさに狂気の笑み！

『……ハッハッハッ！ 愚かで間抜けな地球人共よ。悔しかったら、部屋の机を引つくり返して、その下にも明日が転がっていないか、よくよく捜してみることだ！ まあ所詮、とんまな先輩には、到底不可能でしょうがね！ ははは！ はっはっはっはっ！』

見事な高笑いでそう言い切ると同時、両の瞳を裏返して失神するソガ。彼のその姿を最後に画面は暗転し、通信は打ち切られてしまった。

ドンッ！

誰もが無言の作戦室に、鈍い音が響き渡る。

音の主は、両拳を指揮テーブルへ叩き付けたまま動かない。

「フルハシ隊員……」

アマギには、彼の気持ち痛みほどよく分かった。

決して、星人の挑発に耐えられなかったのではない。

この後輩思いの隊員は、眼前で傀儡となっていた、戦友であり、悪友でもある仲間の

無念を思い、そしてそれを、ただ見ているしか出来ない自らの無力さに怒っているのだ。ソガがこれまでどれほど、部隊の為に、地球の為に、その知恵と勇気と命を振り絞って戦ってきたか。彼が地球防衛に掛ける熱意と思いの強さは、ウルトラ警備隊のみんなが知っている。

アマギとて、彼の機転で命を救われた事が一度や二度ではない。

……その彼の口から、寄りにも寄って『愚かな人類』などと！

——さぞ悔しかったろう。哀しかったろう。

せめて洗脳下では記憶が完全に失われていて欲しいと祈るばかりだ。

まして、今なおその広い背中を微かに震わせる巨漢は、見た目に似合わず涙脆いところがある。

怒りで自らを誤魔化し続けなければ、きつと悔しさを零してしまふに違いない。

「……しかし、2時間となると、対策会議どころではありません……」

「降伏も視野に入れるしか……」

「二次攻撃で、既に迎撃システムにダメージを受けた支部もあります。奴らの言うとおりに、これ以上のミサイルはとても……」

「それでも、出来うる限りの事をするんだ！ 最後まで諦めてはならん！ キリヤマ隊長、ウルトラ警備隊は全力を尽くして、敵の本拠地を探り当ててくれ。人類が生き残る

には、それより他ない」

「かしこまりました」

そうだ。

決して諦めず、最後の最後まで足掻き続ける。

例え姿の見えない敵であろうとも、己を信じ、捜す事を止めてはいけない。

立ち止まらずに、歩み続ける事。

それこそが、人類の明日に繋がる唯一の――

……その時。

「……まさかー！」

背後の会話も他所に、机で蹲っていたフルハシが突如、ハツとした顔で立ち上がり、椅子を跳ね飛ばした。

「どうした、フルハシ？ ……おい、待て。どこへ行く!？」

隊長の制止も聞かず、一目散に作戦室を飛び出していくフルハシ。

彼の耳には、もう誰の声も入っては来ない。

ただ、先ほど聞いた言葉が、何度も何度も頭を巡る。

――とんな先輩には、到底不可能でしょうがね!――

「まさか……まさか、まさか、まさか!」

全身の筋肉が躍動し、人生最高速度で基地の廊下を走り抜けた。角を曲がった先には、目的地のドア！

『認証コードを入力してください』

素早く幸運の数字を三連打。セブンセブンセブン

ロックの解けた扉を、蹴破る勢いで開け放ち、ベッド脇の机に突進する。

フルハシは、あの宣告を聞いた時、激しい怒りの中に、それだけでなく僅かな、本当に僅かな違和感も抱いた。

最初、それが何かは分からなかったが、野性のカンとも言えるべきか、小さな閃きのようなものが、絶対にあれを聞き逃してはならないと囁いたのだ。

そして、そんな事は有り得ないと思いつつも、自らの勘を信じ、一縷の望みにかけてみようと思った時には、体が既に動いていたのである。

フルハシ・シゲルは、そういう男だ。

そして――

——大事な賭けほど、負けた試しがない。

「……あつた！ 明日があつた！ ああ……神様！」

全ての引き出しを弄り、最後に開け放つた最下段。

そこには、空っぽの救急箱の中で、何処かの地点を示し続ける受信機のようなものと、ノートの切れ端らしき紙切れが三枚。

どれも指で乱暴に破つたのか、切り口は不揃いで、半ば千切れかけているものもあつた。おまけに字が猛烈に汚い！

だが、この汚さには見覚えがある……間違いない。ソガの筆跡だ！

彼のあげてくる報告書は、解説が必要な程に読み辛く、わざわざ本人を呼びつけて朗読させ、手間をかけさせるなど叱つた事すらある。

それを何度も繰り返し返すうちに、ソガを呼びつける頻度は減つたが、それは決して彼の字が上達したのではなく、フルハシの目が先に慣れてきてしまい、その文字のクセを自然と補正しながら読めるようになったのだと気付いた時は、なんとも言えない顔をするしかなかったものだが……



「へへへ……確かにこいつあ、俺にしか読めねえ、とびつきりの暗号だぜ。あんの天の邪鬼め」

彼がよくよく目を凝らせば……

『ウルトラ警備隊、西へ』

『魔の山へ飛べ!』

『地底GO!GO! QOO!』

「……なんだ、こりゃ?」

もうこれ以上、暗号化する必要はないんじゃないか?

ポカンとした表情で、首を捻るフルハシ。

「まあいいさ」

ハツキリ言つて、彼は頭があまりよろしくない。その自覚もある。なので、これが一体どういう意味かは、さっぱり分からなかった。

ただ一つ分かるのは、彼の自慢の後輩が、やっぱり骨の髄まで、愛<sup>正義</sup>すべき大馬鹿<sup>味</sup>野郎<sup>方</sup>だったという事だ!

そしてフルハシには、それだけでもう充分だった。

……なぜなら、自分の頼れる後輩は、なにもたった一人しかいないわけではない……  
とも知っているのだから。

「隊長おー！ 見つけました！ 見つけましたよ敵の基地をつー！」

「なにつ」

「でかしたー！」

作戦室のドアが開き、アマギとフルハシが息せき切つて駆け込んで来た。

中でも、その先頭をきるフルハシが、得意げに高々と掲げた右手には、地図らしきものが握りしめられている。

それがさも、宝の地図だとしても言いたげな表情のまま、両隊長の眼前で一度見せびらかした後、テーブルに広げられていた白地図の上へ、勢いよく叩き付けた。

「これを見てくださいー！」

「この座標は？」

「は、フルハシ隊員がソガの部屋で受信機を見つけたそうで、この極東基地から西方に、熊が岳という火山がありますが、その地下およそ千メートルの場所より、信号が発信

「されているんです」

「そしてなんと……ホラ！ 例の地下遺跡の予想場所とも、ピッタリ一致するんですよ！」

ふむふむと頷くキリヤマの隣で、クラタが訝しげに首を傾げる。

「……なぜそんな場所から、ご丁寧な信号が出ていているんだ？」

「よくぞ聞いてくれました！ それはですね……」

「ソガの奴は以前から、爆弾だの発信機だの、果ては小石だのと、使えるか分かりもしないガラクタを、どこかで拾っては後生大事に懐へ忍ばせておく癖がありますね。始末の悪い事に、それを本人も忘れてしまうものですから、今回も偶然、発信機を持ったまま敵に捕まったんでしょう。それを咄嗟に思い出すとは、流石フルハシ隊員です」

「え？」

「ほおう……冬眠前のリスみたいな奴だな。寝坊助の阿呆が役に立つとは、塞翁が馬だ。お手柄だぞ、フルハシ」

両隊長が持ち込まれた資料へ目を通している間、フルハシはもの言いたげな視線を隣のアマギへ寄越したが、彼は小さく首を横に振る。

釈然としない様子のフルハシだったが、すぐに気持ちを切り替え、再び晴れやかな顔に戻って、二人が顔を上げるのを待った。

——これでソガを助けに行けますね！

彼がそう発言しようとした時……

「よし、これで敵に先制攻撃が出来る」

「今すぐマグマライザーに爆薬と時限装置をセットしろ！」

「……えっ」

ぽかんと口を開けたまま、虚を突かれた顔で固まる二人。

「ま、待って下さい！ マグマライザーに爆薬とは？」

「ああ、奴らの真似をするんだ。マグマを簡易のドリルミサイルにしてやるのさ。自動操縦で敵の基地に突っ込ませ……ドカンとな」

「それでは……敵の基地にはソガが捕まっているんですよ!? 奴はどうするんですか

!?!」

「何を言うんだ！ この際、人間ひとりの命にかまっている場合ではない！」

「……非常に残念だが」

「そんなっ……！」

目を伏せるキリヤマの腕に、思わず手を伸ばすアマギ。

「私が助けに行きます！ いや、行かせてください！」

「バカ！ ……お前がノコノコ入っていったら、元も子もなくなるんだ！」

「しかしー！」

「あきらめろ！……君が、ソガを思う気持ちはよくわかる。……だが彼だってウルトラ警備隊だ。自分の命よりも人類すべてのことを大事に思うだろう……」

緋の隊員の肩に、そう言つてクラタが横から手を置いた。

確かにそれはその通りである。顔を伏せるアマギ。

もしも、あそこで捕まっていたのが自分だったならば……それで仲間達が、そしてこの地球に暮らす人々が危機に陥ると言うのなら、そちらの方がずっと耐えがたい。

もしも意識があつて、言葉を伝えられるのならば、いつそ自分ごと撃つてくれと……そう叫んだのではないか？

それでも……それでも死ぬのは……恐ろしくて堪らないはずだ。

握り締めた拳が音を立てる。

彼は、戦友を助けたいという思いを、強靱な理性と信念でなんとか抑え込もうとした。アマギには、クラタ隊長のあえて言わなかつた背景や、道理がよく分かつた。だからそれは、成功するはずだつたのだ。

後ろでフルハシが口を開きさえしなければ。

「……い、いや！ 待つて下さい！ ソガは……ソガはただの人間じゃないんです！ 奴を助ける事には……その……大きな意味があります！」

「意味？ 意味だと……っ!？」

「そ、そうです！ つまり、その……なんといえますか……そう、予言！ 予知夢です！  
ずっと秘密にしている申し訳ありませんでした隊長……みんなは知らないでしょう  
が、実は奴は超能力者なんです！ いつかのヤスイさんのような能力を、アイツも持つ  
ているんですよ！ 最近、寝不足気味だったのは、きっとこの予知夢を見る為だったん  
だ！ だからソガを助け出す事さえできれば……」

「はん……超能力だあ？ フルハシ、とうとうお前まで、頭がイカれっちまいやがったか  
！ 褒めたと思えばすぐこれだ。おい、キリヤマ。ウルトラ警備隊はどうなつとるんだ  
？ ええ？」

それを鼻で笑って取り合わないクラタ。

当たり前だ。そんなオカルトじみた話を信じるどころか、あまつさえ作戦に組み込も  
うなどと。まさに嘖飯ものである。

これはタイムミングも悪ければ、フルハシの伝え方も拙かった。

藁にも縋る気持ちで、咄嗟に考えついた理由をそのまま口にしたものだから、いかに  
も、『ソガを助きたいあまりに、無い知恵を振り絞って出鱈目を言っている』ようにしか  
見えなかつたし、半分以上はその通りでしかない。

むしろそうであるから、クラタも激昂せずに、笑い飛ばして終いにしてやろうとした

のだ。これが、フルハシの本心からそう言っているのだと分かれば、鉄拳すら飛んで来  
かねない。

それくらいのと太話を述べているのだ、という自覚はあった。

だからこそ、にべも無い彼の態度を見ると、フルハシは口を引き結んで顎を引き、忙  
しなく目線を彷徨わせ、非常に弱った顔を見せる他無かった。

なんとか頭を捻って、彼らを説得出来るような言葉を探そうとするのだが……なにひ  
とつとして出て来る気配がない。

それこそ、俺の口はどうしてアイツのように上手く回ってくれないんだ……と、自ら  
の不器用を呪いさえた。

だが……どうにも諦めきれない。

「……隊長！ 隊長なら、私の言いたい事がお分かりになるでしょう？ そうでなければ  
ば、敵の狙いや弱点が、あんなにぼんぼん分かったりするもんですか！ とにかくソガ  
は……アイツは凄いや奴なんです！ 俺なんかよりも、ずっと……！ こんなところで死  
んでいいような奴じゃない！ そうだ、俺が代わりに捕まってるべきだったんだ……俺  
が……そうすれば……」

「やめないかっ!!」

ついに心の堰が決壊し、大きなどんぐり眼から、ぼたりぼたりと感情の雫を滴らせる

フルハシを、クラタが大声で一喝した。

「キサマ！ さつきから黙って聞いていれば……キリヤマが一体どんな思いで……っ  
！」

「よせ、クラタ」

鬼の形相で、巨漢の襟元に掴みかかるクラタを、短い言葉で制する隊長。

「フルハシ……お前は先ほど、ソガを救出する事には意味がある、そう言ったな？ 奴の身代わりに自分が捕まるべきだった……とも」

「ハッ、その通りです」

「だったら聞こう。仮にそうだったとして……我々がお前を助ける必要はないと、フルハシ隊員の命に価値など無い、お前がここに在る意味など無いと、そう言いたいのか？」  
「えっ？ そ、それは……」

「お前でなくて、アマギだったら？ アンヌやダン、私でも長官でもいい。他の基地の隊員だったなら？ それこそ名も知らぬ一般市民が捕まっていたとして！ 誰なら助ける意味があるんだっ!? どこから何処までを救い、何処までなら見捨てても許されるっ！ 言ってみろっ！」

「……」

「我々地球防衛軍が、無辜の人々の盾となり、体を張って戦うのは、我々の命が、人々の



それより軽いものだからなのか!? それとも、戦いの中で、なんの役にも立てぬ者に生きる意味など無いのか?!? では我々は、なぜ人々の為に戦うんだ? フルハシ隊員は、誰かひとりの身代わりとなって死ぬ為に、今までずっと生きてきたのか! ……お前が言ったのは、そういう事だ。人間の命に、価値の優劣など無い。人の生きる意味を、他人がどうこう言うことは、本来あってはならぬのだっ!」

隊長の剣幕に狼狽えるフルハシ。

と同時、自分がいかに浅はかな事を口走ったのかを悟り、目を瞑る。

「……そして私は、あそこに捕まっていたのが、フルハシでも、アマギでも、例えダンやアンヌであつたとしても……同じ命令を下していただろう。それは決して、お前達の命が、他の誰かよりも価値が低いからではない! ウルトラ警備隊は誰ひとりとして、地球防衛に欠かす事の出来ない存在だ! だが! お前達は! ウルトラ警備隊員だからこそ! 地球の、より大勢の為になら、その命を捧げ、任務を全うせねばならん! それが我々に課せられた義務であり、信条であり……なんびとたりとも侵す事の出来ない、絶対の……誇りなのだっ!」

キリヤマが吼え、作戦室には痛い程の沈黙が到来した。

ただ彼らの背後では、オペレーター達によって、着々と攻撃の準備が整っていく。

「そしてソガは……彼もまた……それを理解していた筈だ。ウルトラ警備隊として戦う

以上、いつかはこうなるかもしれないと……」

——果たして本当に？

キリヤマの胸中を疑問がよぎる。

フルハシに言われずとも、彼の特異性などつくづく知っていた。

しかしそれでも……いや、だからこそ。

誰かひとりを、特別扱いなど、出来ない。

部下を死地に送り、その命を、平和の灯火の中へ薪にくべろなどと言う、あまりにも業深き指令を下すのが、彼の選んだ職分である。

そうである以上、その内容だけは、全ての部下に対し公平で、真摯でなければならぬ。

……それが、これまでキリヤマが己に課してきた誓いだった。

これが、地球の為に志願した者達相手であれば、良心の呵責を、内なる冷たいクレバスへ投げ捨てて、その独り善がりな傲慢をいくらでも押し付けられよう。

だが……彼は違うのではないか？

むしろ、自分達地球防衛軍が本来護るべき、武器持たぬ人々に近い存在だったのではないか？

彼の口から、はつきりとそう聞いたわけではない。

結局彼は、得意の弁舌を展開して、核心部分については終ぞ口を割らなかつた。それでも、自分達軍人とは、感性が違ふ。

価値観が違ふ。戦う理由が違ふ。

そしてなにより……生き方が違ふ。

そんな事は、わざわざ聞かずとも、とつくに分かつていた事だ。

ではなぜ……？

なぜなんだ。

このように危険で過酷な組織に身を置くべきでは無かつた。

それに、未来が分かっていると言うならば、なぜ敵に捕まつたのか？

実は、それすらも思惑の内なのだろうか？

では勝算があるのか？ 我々が助けに来るだろうと信じているのか？ それとも

……

キリヤマは、こちらを窺う二人の部下の顔を見た。

その顔が、モニターの向こうに映るのを一瞬だけ想像し、一層顔を険しくする。

彼の知る未来は、いったいどのようなものだったのか。

これが避け得ぬ本来の運命だったのか。

それとも、彼の足掻いた末に改変されたものなのか。

キリヤマの手許には、辿るべき筋書きなどない。

……それが普通だ。人生とはそうあるべきだ。

……だがあの男は、そうさせてすら貰えなかつたのでは……？

もしもこれが奴の描いた筋書き通りなら、ここで自分達がどう動くと予想したのか。余計な行動でその思惑を台無しにしてしまう可能性すらある。

それとも、ただ無様にしくじった末の事であれば、やはり彼の事は居ないものとして扱う他ない。だがそれならば、どうして予言など残したのか。

……分からない。

なまじ、臆気な背景を知ってしまったているばかりに、余計な思考がキリヤマの頭をぐるりぐるりと浮かんでは消え、浮かんでは消え……彼の決断を鈍らせる。

こんな事ならば……

——知らなければ良かった。

そうであれば、どれほどマシだっただろう。

「どうして……」

ハッキリ言ってくれなかったんだ……

机に両手をつき、項垂れるキリヤマ。

そう思いつつも、彼にはその理由がとつくに理解できている。

簡単だ。

言ってしまうえば最後、キリヤマの人生にト書きが入り込んでしまうから。

だから彼は何も言わなかった。

だからキリヤマには分からない。

それこそ、ソガが普通で無いとは分かっている、それをどう表現すればいいものかすら、判然としていない。

全てが分からず、手探りだ。キリヤマは徒人のまま。

——お前も……こうだったのか……？

分からない。その苦しみさえ。

ただ一つ分かるのは……

「奴は……立派にウルトラ警備隊の一員だった!」

「ッ!?!」

「地球を愛し、その為に命を捧げる決意をしていた!! それを誇らしいとさえ! ……  
それだけは紛れもない事実だ。であればなおさら……ソガ一人の為に、全人類の命を天  
秤にかける事は……奴が今までやってきた事全てを、無駄にしまっただつ……!  
奴の決意と誇りを、土足で踏み躪る事になる……! 奴が見つけた戦う意味を……」

絞り出すような叫び声だった。

「そんな事が……おれに出来ると思うのか……?」

顔を上げたキリヤマの瞳が、きらりと電灯を反射するのを見て、フルハシはもう、それ以上何かを言う事が出来なくなってしまった。

「……だいたい、助けに行くと言っても、どうするつもりだ。さっきの突入部隊を忘れたか。その信号が罨では無いと、なぜ言い切れる。地下基地を破壊して終わりではないのだぞ。我々は、怪獣軍団や火星からくる応援の円盤群とも戦わなければならぬ」

「さっきので、防衛軍は殆どのマグマを失いました……残っているのは迎撃システムとリンクしているものばかりで、自由に使えるのはもう、この極東基地にある2号機だけなんですよ、フルハシ隊員……」

「……分かったよ……」

どう計算しても、敵基地まで30分はかかる。

そこからソガを救出し、戻ってくるのは到底間に合わない。

ゴース星人の定めたタイムリミットまでに、地底ミサイルだけでも破壊しなくては。片道切符の救出作戦など、成り立ちはしないのだから。

「では、帰り道さえ用意できれば問題ない。そういう事ですね!」

「なにっ」

聞き慣れない声が、作戦室に響き渡った。

皆が訝しげにしている中でただ一人、声の主が分かったアマギは、信じられないと言った顔で、入り口を振り返る。

すると、そこには予想通りの人物が、アンヌやユーリーを引き連れて堂々と立っており、爽やかに微笑んでいるではないか。

驚くべき事に、その青年は隊服を纏っておらず、仕立ての良いジャケットを羽織っているだけだったので、防衛軍の関係者ではないと分かる。

単なる一般人に過ぎない者が、なぜこのような場所に……

アマギ以外が疑問符を浮かべる中、名プランナーは、親友でもある、その年若い青年を困惑と共に呼んだ。

「イチノミヤ……なぜ君がこんなところに……」

「アマギ隊員、どうやら間に合ったようですね。良かった……」

「間に合ったって？ なにが」

「僕の電送機の修復がですよ」

「なんだって!？」

イチノミヤがこの場へ現れた事以上の驚愕が、アマギの声帯を裏返らせた。

「イワムラ博士やヘンミ先生の協力で、つい先日完成したんです。勿論、一方通行がせいぜいで、以前のように大気圏外まで飛べるような出力はありませんが……うん、この距離なら大丈夫だ。今、アライソ君達に頼んで、マグマライザーへの搭載を手配してある」

「おい、アマギ。どういうこった？」

「……つまりマグマライザーを、この基地へ繋がるワープトンネルの入口に出来ます」

「……つてことは……マグマを爆破する前に、ソガを連れて帰れる！ なあおい、あんた！ 誰か知らんがとにかく天才だ！ ありがとう！ 本当にありがとう！」

感極まったフルハシが、イチノミヤの白い指を、ごつごつした両手で思いつきり握りしめ、大袈裟なくらいに上下に振る。

力強すぎる握手をされた青年が、なんとも言えない顔をしている事にも気付かず、泣き笑いのようになりながらフルハシが背後を振り返れば、彼の上官はというと、憤慨し



たユーリーに詰め寄られていた。

「隊長さん！ あなたがたの激発した感情が、わたしのところにも飛んできました！  
ウリーを助けるのに協力すると、約束してくださいませんか！ あれは嘘  
だったのですか？」

「そうか、テレパシーで聞いておられたのか……」

それに対しキリヤマは、痛ましげに眉を下げはしたが、固い表情を頑として崩さず、巖のような態度のまま、静かに首を振るだけ。

「……ユーリーさん、確かに私は最善を尽くすと約束した。だが、その時にこうも言った筈だ。『決して優先する事は出来ない。理解して欲しい』とも」

「そ、それは……」

「おい、誰だこの女は……？ アンヌ隊員、キミの妹か？」

「こちらは我々に協力して下さい下さっているユーリーさんです。息子さんが、ゴース星人に捕まって、利用されているんです」

「……なにい？」

よもやそんな者がいるとは思ひもしなかつたのか、ギョツと目を剥き、そわそわと気まずそうに口をすぼめるクラタ。

流石の彼も人の子だったらしく、部外者は出ていけと叱りつけるつもりが、すっかり

萎えてしまったようだ。非常にやりにくい事この上ない。

今回ばかりは、憎まれ役を素直に悪友へ押しつけると、指で頬を搔きつつそつぽを向いてしまう。

「ユーリーさん。我々の状況は、依然として切迫したままで、何一つとして好転していません」

「そんな筈はありません！ そちらの方の装置を使えば、皆さんのお仲間や、ウリーを助け出しても脱出ができるのでしょうか？ その装置は、私のテレポートと同じ事が出来る」と……」

「いえ、手段があつても、救出に割く人員の余裕が無い。我々ウルトラ警備隊は、ゴース星人の援軍に備えなければならず、この基地で待機する必要がある」

口を真一文字に引き結んだキリヤマは、いつそ冷酷なまでに静かな声で、毅然とした対応のまま、哀れな母親の目を真正面から覗き込む。

その背後には、無情と懺悔の念が激しく渦巻いているのが、ユーリーには見えた。

「ウリー君は、あなたにとつてかけがえのない存在でしょう。しかし、全人類の命と引き換えにする事は……出来ないのです。決して、彼が異星人だからではありません。私の心を、テレパシーでお読みになつても構わない。だが我々は……より多くを助けるように義務づけられている」

「そんな……隊長、どうしても駄目だというのですか？」

「アンヌ、これは……命令で決まった事なんだ。なぜ長官達が居ないか、分かるか？」

言われてようやく彼女は、この場から長官や参謀達が姿を消している事に気付いた。

さつきまでは、確かに居たのに……

「政府首脳部へ、なんとか降伏を延期するよう、交渉に向かわれた」

「政府……」

「タイムリミットが2時間といつても、その全てが使える訳では無い。むしろ、奴らのあの短気さを見ただろう？　いつ前言を翻して、総攻撃に打って出るか分からない。政府

も市民も、その恐怖でいっぱいだ。一刻も早く降伏すべきだという意見を、我々が無視

する事は出来ない……ギリギリまで粘っても、30分前までに事態を解決できなければ

……」

「だから、敵基地を発見でき次第、即座に攻撃へ移るように決定してから、長官達は出て行ったんだ。命令が覆らん限り、俺達はそれに従わなきゃならん！」

「ああ……ああっ！　そんなこと……！」

その場に泣き崩れるユーリー。

男達は、その小さな背中を、ただ虚しそうに見つめる事しか出来ない……

「アツハツハツハツハハハ……!」

そこへ突如、大きな笑い声が響きわたった。

「少し見ないうちに、どうやらウルトラ警備隊は、とんだ腰抜け集団になったようですね!!」

「何い……?」

「ちよつと失礼……」

アマギとフルハシが青筋を立てて振り向けば、作戦室の入り口で高笑いしていた隊員が、挑戦的な笑みを浮かべて近寄ってくる。

睨むフルハシを気にも留めず、颯爽たる様子でツカツカとブーツを鳴らしながら、彼らの真横に並んだ無礼者は、ビツと揃えた指でクラタ隊長に向かって短く敬礼すると、首に巻いた真つ白なスカーフを緩めつつ、ヘルメットのバイザーを跳ね上げた。

「アツ! お、お前は……ツ!」

「ただ今戻りました、クラタ隊長。お任せ頂いたBブロック、全て問題なし。ご期待通

り、無傷で防衛して差し上げましたよ」

「おう、そうか」

そうしてクラタが鷹揚に頷くのを満足げに見届けてから、この若輩隊員は、隣で目を見開いて固まったままのフルハシに、さも『たった今気付きました』と言わんばかりの態度でわざとらしく向き直ると、友好的な笑顔を貼り付けて手を差し出す。

「いやあ、これはこれは、暫くぶりですねフルハシ隊員。覚えておられますか？ アオキです。先ほどはどうも。てつきりホークであのまま敵を追いかけて、さつさと自分だけ手柄を立てて行くのかと思つてしまいました。我々を見捨てずに戻つて下さったので助かりましたよ。しかし、途中から参戦したつて言うのに、私より二機も多く敵を撃墜するなんて、流星は防衛軍の誇るエースパイロットだ。いやはや、お見それしました。ただし、こちらは身動きの取れない対空銃座だったというのを忘れ無く。次は負けませんからね」

「あ、ああ……？？」

それはクラタの右腕として、ステーションホークの副操縦席に座り、一緒に地球へ降りて来ていたアオキ隊員だった。

間髪入れずに捲し立てられた言葉へ、フルハシが目を白黒させるのを尻目に、再びクラタへ向き直ると、直ぐさま喋りはじめるアオキ。

「さて、斯様なエースパイロットを、この対円盤戦を控えた大事な時に、つまらない白兵戦などで失つては、部隊の損失甚だしいという両隊長の判断は、まさしくご慧眼。異論を差し挟む余地もありますまい。つきましては、私が皆様の代わりに敵基地へ行き、直ぐさまあそこを制圧してご覧に入れましょう！」

「はあ!？」

「キサマ……聞いてなかったのか？ 命令がなければ俺達が動く事など無い！」

自信満々に言い切る彼へ、一気に鼻白んだクラタが、呆れたように吐き捨てる。

しかし、それでも人を食つたような余裕の態度を崩さず、ニヤリと笑うアオキ。

「それはどうでしょうか……?」

部下の態度へ、遂に我慢の限界を迎えたのか、クラタがあらん限りの罵詈雑言を吐き出そうと腹に力を込めた時、素早く横へ身をずらしたアオキの背後から、彼の苦手なあのカーキ色がスツ……と現れ、その視界を遮つた為に、慌てて口を噤んでむせ返る。

「なにやら、ここへ用事があるとの事だったので、僭越ながらご案内致しました」

悪戯の成功したような顔で、ニンマリ口の端を吊り上げるアオキの後ろには、それは正反対な仏頂面を引っ提げた男が、糊のきいた背広の胸元に、階級章をきらりと光らせて立っていた。

「……アンタは」

「ヒロタ隊員……………」

目深に被った軍帽の影で、より一層浅黒く見える顔が、ギロリと眼光鋭く二人の隊員を睨みつける。

「上官に向かつてなんだその態度は…………？ それに私は単なる隊員ではない。憲兵参謀補佐、だ。発言を訂正して貰おう」

「ハツ、失礼しました。ヒロタ憲兵参謀補佐」

「……………宜しい」

フン、と鼻を鳴らしたヒロタは、自身がこんな場所にいるのが甚だ不本意だ、という表情を隠そうともせず、形式ばった敬礼をキリヤマとクラタだけに行つた。

さしもの隊長も、ヒロタがわざわざ作戦室に現れた理由が思い至らず、少しばかり困惑の混じつた声を返す。

「ヒロタ参謀補佐……………キミが、なぜここへ？」

「ああ、それについてだが……………ウルトラ警備隊に憲兵参謀局より通達がある。心して聞くように」

「……………拝聴しよう」

一度咳払いし、胸元から書簡を取り出したヒロタは、広げたそれを突きつけながら、よく通る声でその驚愕すべき内容を高々と述べたてた。

「現在、貴隊に所属するソガ隊員に關し、地球防衛軍へ対する謀叛、及び、敵性外星人との内通嫌疑がかかっている。即刻、この身柄を拘束、出頭させ、ソガ容疑者の潔白が証明されるまでは謹慎に処す！」

「なんだと!?!」

「バカなっ!」

「有り得ないわ!」

「ど、どういう事なんです……?」

「ゴース星人の攻撃は、明らかに防衛軍の内情を知った上で成されている。ソガ隊員の口から、機密が漏れたとしか考えられない。また、その内容があまりにも詳細につき、彼が無抵抗、ないしは自発的に喋った可能性もある。なにせソガ隊員は過去、宇宙人に対し無条件に降伏したり、その侵略に手を貸した前科があるからな」

「それは、敵を騙すためだったり、洗脳されていたからで……!」

その内容に警備隊のメンバーや、ついでにイチノミヤが騒然とする中、一人だけ堰を切ったように大笑する者がいた。

愉快そうに腹を抱えているのは、クラタである。

「フッフッフ……ハッハッハッハ!! 命乞いにお荷物、今度は内通か……本当なら、ウルトラ警備隊の恥っさらしだよ、アイツは……」



「違います！ ソガはそんな奴じゃ……」

「無いと言うのかね!？」

思わず反論するアマギだが、言葉を遮られ、悔しげに拳を握りしめる。そして、絞り出すように思いの丈を吐き出した。

「あなたがたは……彼を知らないんだ……っ！」

「ほう?」

しかし、背後から余りにもドスの効いた低い声が這い上がってきたので、予想外の反応に驚き振り返る。

アマギの言葉を聞き咎め、ギラギラと瞳を燃やしていたのは、あのヒロタ参謀補佐だったのだ。

「……知らない? ……俺が? ……奴を? たかだかこの数年、たったそればかり一緒にいただけの君が、随分と上段から物を云う。いったい君が、奴の何を知っていると  
いうんだ、アマギ隊員? ええ? 教えてくれないか?」

「うぐっ……」

「乱暴はやめて!」

「やめろ！ やめてくれヒロタ参謀補佐！ いくら参謀局のエリートだからって限度がある！ 権力でなんでも出来ると思ったら大間違いだぞ！」

そのまま詰め寄ろうとするヒロタを、慌てて後ろから止めるフルハシ。

「……俺は知っている。知っているんだ！ 奴はすっかり変わってしまった……あれがソガだと？ 笑わせる！ 奴は別人だ。宇宙人の洗脳で、可笑しくなってしまったに違いない！」

そうして吼えるヒロタの迫力にたじろぎながらも、青い顔に汗を浮かべてアマギが言い返す。

「……そんな訳がないでしょう！」

「いいや、あるね！ だからこそ！ 俺が！ 奴を引っ捕らえて、その真偽を確かめてやるんだっ!!」

「……えっ」

呆気に取られたのは、何もアマギだけではない。

フルハシや、アンヌもイチノミヤも、おまけに置いてけぼりを食らっていたユーリーすら、彼が言った事の意味を理解するのに、一瞬の時を要した。

それくらい、素早い切り替えだったので、フルハシはヒロタの軍服を掴んだままな事をすっかり忘れて、彼の顔を横から窺っては、目を瞬せる。

その指を鬱陶しそうに引き剥がし、皺になってしまった部分を何度か払ってから、ヒロタは再び四角四面な声色で、自身がこの場に来た意味を告げたのだ。

「憲兵局は、謀叛人の捜査、逮捕に関して、独自の権限を許されている。キリヤマ隊長、クラタ隊長。確かに参謀補佐は、貴方がた部隊長と同格権限と見做されるが、この場においては……私が最先任だ」

「……」

静かにヒロタを見返すキリヤマと、心底馬鹿馬鹿しいと言いたげにアオキを一瞥するクラタ。

彼には、この生意気な部下の思惑が、途中ですっかり透けて見えてしまっていたからだ。

「さて、容疑者の確保に必要な装備、人員を徴発させて貰うぞ。マグライザーはこれより参謀局の指揮下とする。そして、突入隊員は……」

「私にやらせて下さい！ 侵略者が誰であろうと、必ず成功させてみせます！ ……この命に代えても！」

「……アオキ」

名乗り出る彼に、クラタが何かを言いかけようとした。

だがその瞬間、アオキは今までの余裕と自信に満ちた態度をかなぐり捨てて、作戦室

の床に両手をつき頭を擦り付け、尊敬する上司に最大級の下剋上を懇願した。

「どうか止めないで下さい、クラタ隊長！ 貴方には感謝しています。私を拾い上げて下さって……しかし！ これだけは！ 私がやらなければならないんです！ 今の私があるのは……この栄光は……あの人に捧げると決めたんです！ そうでなくては、私は……彼に一生勝てないままだっ！ このままあの人を見捨ててしまつたら……真の栄光など……決して掴めはしない!!」

普段の彼の振る舞いからは、想像もできないくらいの必死さで、腹の底から声を絞り出すアオキ。

「だから……どうか……っ！」

「……………勝手にしろ」

「……ありがとうございます!!」

興味を失くしたように部下から背を向け、そう吐き捨てる友の横顔を、ただ一人だけ見たキリヤマは、何事かを小さく呟き、ヒロタ参謀補佐と正面から見つめ合う。

「ヒロタ参謀補佐。残念ながら、ウルトラ警備隊からは人員の供出は出来かねる。これは貴官より上位の長官命令での決定事項だ。また、現場指揮官としては、いかにV3のアオキ隊員が優秀とはいえ、たった一名による突入作戦など、成功難易度の観点から承服しかねる。どうするおつもりか。これ以上の介入は、越権行為として参謀局へ問い合

わせなければなるまい」

「ああ、その点は心配御無用。もう一人は、私が行く」

「憲兵参謀補佐がかな？ 担当地区外から出撃するには、現地部隊長でない限り、参謀以上の許可が必要となるが、許可はあるのかね」

「無い。参謀局に問い合わせれば分かる事だが、先の指令の発布も含め、全て私の独断である。不審人物の逮捕には、緊急特例措置が認められるが、憲兵参謀の許可無く指令を発効する事は、事後承諾であつても懲罰が下され、降格は免れない。よつて！」

ヒロタは胸元の階級章を力強くむしり取ると、それを作戦室の机に叩き付けた！

「現時刻をもつて！ 私は憲兵参謀補佐の権限により、ヒロタ憲兵参謀補佐の任を解き、これを降格！ 以降はウルトラ警備隊の指揮下とする！ 尚、降格以前に発令された指示は失効しない！」

「よろしいー！」

堂々とそう言い切ったヒロタに対し、深く頷き、彼の擲ったモノの上に、そつと指を重ねるキリヤマ。

「……これは、私が預かっておく」

そう言つて階級章を手許に引き寄せると、胸元から、銀色の鍵を取り出し、ヒロタへ向かつて差し出した。

マグマライザーが準備中の、地下格納庫の鍵である。

「ソガを、頼む」

それを恭しく受け取り、ただ無言のまま最敬礼で応えるヒロタ。

「……ヒロタ参謀補佐……」

「分かったか、フルハシ隊員。これが、権力の使い方だ。覚えておくといい」

眼前の遣り取りを隣で呆然と見ていた男へ、そうして皮肉げに鼻を鳴らすヒロタだったが、少ししてからやや恥ずかしそうに目を逸らすと、小さく訂正を付け加えた。

「……あと……今はただのヒロタ隊員ですよ」

「ソガの奴あ……いい同期を持って幸せ者だな」

しみじみと目を細めるフルハシの後ろから、恐縮したアマギが、その長身を縮こめながら顔を出す。

「ヒロタ隊員……先ほどは申し訳ありませんでした」

「いや、私こそすまなかつた……だが、あれは本心でもある。アイツはこの俺に、あれだけの生き恥を晒させたんだ。何処にしようと思わず、同じだけの屈辱を味わわせてやらねば気がすまん！」

「……では貴方に、是非これを使って欲しい」

ヒロタの瞳に、再びギラついた闘志が燃えるのを見たアマギは、大事そうに抱えてい

たアタツシユケースを開き、中に納められていた部品を素早く組み立てる。

それは、まるでウルトラガンを一回り程大きくして、銃身を細く細く引き延ばしてから、後ろにスコープを取り付けたような形をした、独特のシルエツトを持つ銀色のライフルだった。

「これは……？　新型のパライザーというわけでもなさそうだが？」

「……マルス177。僕の人生最高傑作です」

「ふむ……」

受け取ったヒロタが、手に馴染ませるように、何度も構えをとりつつ重心を確認するのを見守りながら、アマギは説明する。

「ゴース星人の死体を検分したところ、彼らの体組織は、太陽光の下だと徐々に崩壊し、少しずつですが蒸発していつてしまう事が分かりました。恐らくそれが、夜間に活動し、地下基地を建設した理由なのでしょうが……その弱点は、短期的に見ると、ある強みにもなつてしまう」

「強み？　体が崩れるのにか？」

「ええ、そもそも光の透過率が異様に高いだけでなく……それこそ蜃気楼のように、光線を歪めてしまうんです。だからレーザーで撃つても、蒸発した組織が、ある種の不動膜のように働いて、威力を半減させてしまう事が分かりました。だから半透明に見えたん

です……いや、むしろ太陽光から皮膚を守るために、わざとそう進化したのかも……」  
「細かい事はいい。つまりウルトラガンでは殺し損なうかもしれないが、コイツの威力なら一発で仕留められる……そういう事だな？」

「はい、間違いなく」

力強く言い切るアマギ。

しかし、その表情を直ぐに曇らせてしまう。

「ですが……ヒロタ隊員なら、もうお分かりかもしれませんね」

「重心バランスが狂っていて、狙いがつけられない。おまけに閉所での取り回しに難がある。だろう？」

「はい……」

ヒロタの指摘に渋面を作るアマギ。

「ライフルの形をしちやいるが……銃としては落第もいいところだな……これはもう、専用の銃架にでも載せて撃つべきじゃないか？　そうすれば一級品だぞ」

「残念ながら、そこだけはどうしようもありませんでした。携行武器としては実戦投入レベルに達しなかつたので、パンドンが現れた時には持つていかなかつたんです……でも、あの時これがあれば……ソガは捕まらずに済んだかもしれない……」

無念そうに語るアマギの肩を、励ますように叩くヒロタ。



「だから、今これを持っていく。違うか？ ……俺を誰だと思ってる？」

「はい。貴方になら…それを安心して託せます。だからアイツを…お願いします！」

「当たり前だ。奴には勝負を預けてある。勝ち逃げなどさせるものか」

そう嘯くヒロタの袖を、後ろから弱々しく引つ張るものがある。

その手を振り払い、腹立たしげに振り返るヒロタ。

「ええい、なんださつきから！ ……ア、アン又隊員か？ ……どうしたんだ、その顔は」

すると真つ赤に泣き腫らした目で、こちらを見上げる女とぼつちり目が合い、流石に狼狽える元幹部。

「……わたし、アン又じゃありません……」

「あ？」

「ゴース星人の基地へ行くのですよね？ でしたら、わたしも連れて行つて下さい……！ 少しでも道案内が出来るかもしれません！ あの子の為なら、どんな事だつてします！ お願いします。どうか連れて行って下さい……！」

「おい、やめろ。泣くな。畜生、なんなんだいったい……」

ユーリーに縋り付かれて困惑するヒロタや、マグマの操縦を教えようと張り切るフルハシを露骨に煙たがっているアオキなんかも尻目に、アマギはある疑問を解消すべく、

友人のもとへ足を進めた。

彼は、作戦室の電算機を借りて、なにかのプログラムを組み直している最中である。

アマギがその隣に腰を降ろし、彼の作業を手伝いはじめてしばらく、先に口を開いたのはイチノミヤだった。

「……ひとまずソガを助けられそうで良かったよ。あの隊長さんがとても頑固だったのは、肝が冷えましたけどね」

「……なあ、イチノミヤ。君が転送装置を持ち込んだのは、本当に素晴らしいタイミングだった。……だが、なぜそもそもソガが窮地にあると分かったんだい？ あの降伏勧告の映像を見てから来たわけではないだろう。それでは……遅すぎる」

アマギは、それが頭にずっと引っかかって仕方が無かった。

どう逆算しても、イチノミヤが基地を訪れた事自体、奇跡的としか言いようが無いのだ。

一般人である彼が、ソガの置かれた状況を知るには、あの全世界へ向けたゴース星人の放送を聞くしかない。だがそれから出発したのでは、絶対に間に合わない。

そして、それ以上にアマギが奇跡的だと思うのは、イチノミヤが、この基地を襲ったゴース星人の空爆に巻き込まれていない事だった。

早すぎても、遅すぎてもならず、イチノミヤの到着は、空襲を撃退した後にあった、僅

かな時間の間でなければならぬのである。

そんな事が有り得るのか……？

アマギはそこに、何らかの作為めいたものを感じずにいられた。まさか誰かの手のひらの上で踊らされているのでは……？

それはソガの迷惑か、はたまた敵の罠なのか……。

「……実はね、僕に教えてくれた人がいたんだ。『今行かなければ、貴方は無二の親友を失う事になる。きつと一生後悔しますよ』ってね」

「教えてくれた……？」

「ああ……不思議な老人だったよ。いきなり押しかけてきて、いったい何を非科学的的なと思ったさ。でもね……あまりに必死なものだから……何故だろうね。信じてみようという気になったんだ。そして、結果的にそれは正解だった。……あの人には感謝してもしたくないくらいだよ。もしも信じていなかったら、サエコ君になんと顔向けすれば良かったのか……」

《——もしも、もしもですよ？　これが当たらなかったなら、後でいくらでも罵って頂いて結構！　ああいつそ、殺されたって、構いやしないんだ！》

「そして何の因果か、ここへ来る為の鍵を、既に僕は持っていたのさ……ソガのくれた、このカードキー。大事に仕舞っておいて、本当に良かった」

首から提げた仮発行の入構許可証を指で弾いてみせるイチノミヤ。

《——でもね。これはアンタにしか出来ない事なんです。後生ですから、あたしの恩人を、どうか助けてやってくださいよう！——》

「僕はそれなりの無神論者を自負してはいるが……ここまでくると、なんとも数奇な巡り合わせがあったものだな……」と思えてきたよ。僕のような若輩者が、人類に絶望するには、まだ早かったらしい」

何かを思い出すように瞑目するイチノミヤへ、アマギが戸惑ったような、そしてどこか達観したような顔つきで、ぼそりと呟いた

「案外、ロマンチストなんだな」

「ああ……なにせ、初めての友人が、とびきりのルサンチマンだったものでね。きつとそのせいだろう。……そして僕は、そんな大切な人を、二度と失うわけにはいかない……と考えている」

先ほど、青い衣を着たあの老人が、最後にふにやりと笑いながら、妙に自信で満ち溢

れた瞳のまま言い切ったのを思い出す。

《——あたしやあ、嘘はつきませんよ！——》

「だから、僕がいつたい誰を信じるべきなのか……」

そして目を開いたイチノミヤは真剣な表情のまま、先ほど撃墜したという円盤から抜き出した情報と、自身の持ち得る知識とを脳内で擦り合わせ、ある確信を持って、一つのプログラムを完成させた。

「今度こそ、間違えたりはしない」